

I S 〈イノウエ シンカイ〉

七思

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ORCA旅団No. 5、真改。最初の五人の一人。

多くの人々を犠牲にして人類の未来を拓く計画、クローズ・プランを先導する革命家、マクシミリアン・テルミドールの護衛として最後の戦いに挑んだ彼は、多くの未練を残したまま散った。

その未練故か、彼は異世界に生まれ変わり、今度こそ悔いなく生き抜く為に、再び戦うことを決意する。

——世界最強の兵器、インフィニット・ストラトスのパイロット、「井上真改」という名の少女として。

目次

第0話	終始	1
第1話	再誕	10
第2話	朝日の下で	17
第3話	試験	25
第4話	初日	42
第5話	再会	61
第6話	旧交	70
第7話	星光	88
第8話	翌日	109
第9話	朧月	124
第10話	一夏	134
第11話	代表	151
第12話	鈴音	163
第13話	月光	181
外伝1	ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター	204
第14話	平穩	213
第15話	不穩	232
第16話	事情と感情	250
第17話	黒兎	269
第18話	憎悪	287
第19話	役目 (開戦編)	312
第20話	役目 (激戦編)	328
第21話	役目 (決着編)	347
第22話	役目 (場外乱闘編)	368

外伝2	自動人形は誰が為に踊る	389
第23話	準備	412
第24話	臨海	436
第25話	天才	460
第26話	福音(初陣編)	480
第27話	福音(剣鬼編)	505
第28話	福音(報復編)	532
第29話	福音(覚醒編)	554
第30話	福音(守護編)	572
外伝3	桜色の微笑み	597
第31話	布仏本音の憂鬱	624
第32話	社会科学見学in如月重工	637
第33話	アミダハザード	652
第34話	たとえ刃が毀れても	668
第35話	銘無き刀	683
第36話	双月(対峙編)	698
第37話	双月(克己編)	709
第38話	双月(命銘編)	727
外伝4	オルレアンの騎士 第1話 出会い	746
オルレアンの騎士	第2話 帰る家	755
オルレアンの騎士	第3話 娘として、姉として	771
オルレアンの騎士	第4話 新たなる剣	785
オルレアンの騎士	第5話 騎士の誓い	800
オルレアンの騎士	第6話 クール・ドウ・リヨン	818
オルレアンの騎士	第7話 鴉殺し	833

オルレアンの騎士 最終話 剣の在処

設定資料

第39話 帰還

第40話 微笑

第41話 事件

第42話 OPERATION OMIAI BREAK (ブリ

フィング編)

第43話 OPERATION OMIAI

ジ編) BREAK (エンゲ | 913

第44話 OPERATION OMIAI BREAK (ヘッドオ | 925

ン編) | 942

第45話 OPERATION OMIAI BREAK (デブリ |

フィング編)

第46話 原罪 (喪失編)

第47話 原罪 (慚愧編)

第48話 原罪 (懺悔編)

第49話 原罪 (献花編)

第50話 騒がしくも安らかな時間

外伝5 気になるアイツはマーセナリー

第51話 前兆

第52話 会長

第53話 舞闘

第54話 師弟

第55話 同居

第56話 特訓

1162114711321118110310881068105210281012 995 978 959 | 942 925 | 913 898 883 869 864 848

第57話 前夜

第58話 学祭(冥土編)

第59話 学祭(来客編)

第60話 暴虐(半身編)

第61話 暴虐(一刀編)

第62話 酸被り姫(アミデレラ)

第63話 夏の雪が白く輝き、赤く染まる

第64話 雪解け水

第65話 神に挑む者

外伝6 鋼の雷霆

第66話 兆し

第67話 宣戦

第68話 飛翔

第69話 逢引

第70話 輝星

第71話 鋼の翼

第72話 最速の魔剣

第73話 空

第74話 貴き者の務め

第75話 我が名に懸けて

第76話 影

閑話 テロリストにも休日くらいありますよ、ブラック企業じゃある

まいし

第77話 這い寄る影

第78話 苦悩

第79話	姉と妹とその他一名	1540
第80話	「遊び」の基本	1554
第81話	一步	1569
第82話	友達	1583
第83話	願望	1598
第84話	法師	1615
第85話	それぞれの	1629
第86話	戦闘開始	1644
第87話	人形劇	1660
第88話	許されざる者	1673
第89話	今度こそ	1692
第90話	紅の剣姫	1705
第91話	銀の剣鬼	1720
第92話	シュトゥルム・ウント・ドランク	1733
第93話	黒い歌声	1747
第94話	PP	1762
設定資料2		1781
第95話	眠れない夜	1786
第96話	休息	1799
第97話	襲撃	1811
第98話	迎撃	1825
第99話	殺陣	1836
第100話	IS学園の守護者	1843
第101話	救援	1852
第102話	巨兵	1862

第103話 鉄風雷火

第104話 電脳ダイブ

第105話 影に追われる夢

189118821872

第0話 終始

「お前たち、やはり、腐っては生きられぬか」

通信機越しに聞こえる声。

傍らに立つ、巨大な機械仕掛けの鎧を身に纏った男の声。

人類の未来を守るため、現在の人間に犠牲を強いる道を選んだ男の声。

——己が、守ると誓った男の声。

静かな、しかし様々な想いの込められたその声を聞き、真改は一步、踏み出した。

——ここは、アルテリア・クラニウム。

汚染された世界から逃れるため人類が移り住んだ、空に浮かぶ揺り籠にエネルギーを供給するための、巨大施設。

その実態は、世界を緩やかに破滅させる猛毒を垂れ流す、人類の罪の具現。

クラニウムに着いたのは、自分達が先だった。人類の黄金の時代のため、ここを制圧しようとした矢先に、来客が二人、訪れたのだ。

——邪魔が入った、とは思わない。何故ならばその二人は、彼らにとって——組織ではなく、彼ら個人にとって、クラニウム以上に重要な標的だからだ。

もつとも、真改と相棒は、目的としている相手が違う。彼の相手は、ブラス・メイデン真鍮の乙女。かつては友人であり、今では決定的に道を違えた彼女とは、自らの手で決着を付ける。そう言っていた。

ならば彼の邪魔をさせぬことが、彼の剣たる己の役目であり。

ブラス・メイデン真鍮の乙女の戦友であるカラードのリンクスとの戦いは、真改の望むことでもあった。

——かくして。四機の最強にして最悪の兵器による、人類の未来を賭けた戦いが幕を開けた。

アサルトライフルから撃ち出された弾丸を、クイックブーストで避ける。

避けた先に回り込むように放たれたミサイルを、マシンガンで撃ち落とす。

——強い。

黒いネクスト、ストレイドとの戦いを始めてから数分。真改は、追い込まれていた。

ストレイドは、中量級二脚機にアサルトライフルとミサイルを装備した、バランスの良い機体だ。

機動力に優れ、装甲もある程度の攻撃には耐えられる。武装は命中率を重視し、火力不足はアサルトアーマーで補う。

あらゆる戦況、あらゆる相手に対応できる、良く言えば万能、悪く言えば器用貧乏なその機体を、カラードのリンクスは完璧に使いこなしていた。

対する真改の操るネクスト、スプリットムーンは、完全な接近戦特化型の機体だ。

ストレイドと同じ中量級二脚機だが、継続的な機動力よりも短距離、短時間の瞬発力に優れている。装甲はプライマルアーマーに特化し、散発的なダメージはほぼ無効化出来るが連続攻撃や大威力の一撃には弱い。武装は牽制用のマシンガン、攪乱用の閃光弾、そして一撃必殺の威力を持つレーザーブレード。

この機体を見て接近戦を挑んで来る者はまずいない。いるとすればそれはただの阿呆か、スプリットムーンと同じ接近戦特化型の機体を操る者である。

そのどちらでもないカラードのリンクスは、距離をとっての射撃戦に徹していた。真改にとっては圧倒的に相性の悪い相手。それでも彼は、勝てると思っていた。

己の実力を過信していた訳ではない。彼は自分の非才を十分に理解している。だからこそ、近付いて斬る、ただそれだけを磨き上げ、他の一切を切り捨てて来たのだ。

その真改にとって、アルテリア・クラニウムという戦場は己に地の

利があった。

空のない、限定された空間。さらに、施設内の様々な大型装置が、自由な機動を邪魔する障害物となる。

それらに気を取られ、僅かでも動きに迷いが生じれば、その隙に一息に間合いを詰め、一刀の下に斬り伏せる――

それを為すだけの能力が、己とスプリットムーンにはあると、歴戦の猛者である真改は知っている。

――だが。

「……っ！」

ミサイルの爆炎を目眩ましに飛来したアサルトライフルの弾丸が、スプリットムーンの装甲を抉る。その衝撃と激痛に耐えながら即座にクイックブーストを発動、反撃を仕掛けるが、ストレイドは既に剣の届かぬ距離まで後退していた。

膨大なエネルギーを刃に変えての一撃を空振り、スプリットムーンの動きが一瞬止まる。そこに叩き込まれる、アサルトライフルの連射。

――先程から、この繰り返しだ。

初めこそこちらの間合いを見切るためか、ストレイドは必要以上に距離をとり、命中弾も多くはなかった。しかしほんの数度の攻防で、間合いどころか機動や攻撃のタイミング、クセまで見切られ、以降は防戦一方だ。

絶え間ない被弾により、スプリットムーンの強みであるプライマルアーマーも一向に回復しない。無様に逃げ回るだけの真改とは対照的に、ストレイドは狭い戦場を障害物などまるで無いかのように縦横無尽に飛び回っている。

(……よもや、これほどとは……！)

数多のリンクスを打ち倒して来た敵を、侮っていたわけではない。ただこの男の強さが、ヒトの想像出来る領域を遥かに超えていただけのことである。

(……神話において、神とは力である、か……)

この穢れきった大地においては、力こそが全て。

人々が「神」と崇めるモノは、「力」そのものであり。

絶大な「力」こそが、「神」と呼ばれるのだ。

ならば人間の限界、その遥か彼方に在る、この男は――

(……………だが……………)

相手が誰であろうと、それこそ神であろうと、真改に退く気は微塵もなかった。

何故ならば。

何故ならばこの男は、彼の仲間を、彼の仇敵を、葬ってきた男なのだから。

――ただひたすらに、戦場を求め続けた、古い兵士がいた。

彼は最後に意味のある戦いに赴けることを感謝しながら、勇ましく先陣を切った。

――ほんの一瞬、ただ一度の好機を、黙して待ち続けた獵師がいた。

遂にその好機が訪れずに敗れた彼は、それでも最期まで、自らの非力を嘆くことはなかった。

――ありふれた夢の為に全てを裏切った、時間限定の天才がいた。

短い時間の中で自らの才を燃やし尽くす、操る機体の色に相応しい、炎のような生き様の少年だった。

――たった一つの小さな命のために、その身を捧げた変人がいた。

卑怯とも言える、正々堂々とは程遠い戦術を使うが、その根底にある祈りを知る者は、決して彼を嗤うことはなかった。

――死に瀕して、ようやく願いを見付けることが出来た傭兵がいた。

彼ほどの男が、その死に場所として自分たちの元を選んでくれたことを誇りに思ったのは、真改だけではなかった。

――暴力ではなく、知力でもって戦った、若き謀略家がいた。

自分の命すら駒の一つと見ていた彼は、勝てぬと分かっていたしながら、自ら死地に赴いた。

——理想でも信念でもなく、友に殉じた大男がいた。

どんな時でも騒がしかった彼は、自らが捨て駒であると分かっているながら、最期まで楽しそうに笑っていた。

——誰からの理解も求めず、狂気の思想を掲げた異端者がいた。

無意味な虐殺を行おうとした裏切り者だが、何ら言い訳をせず、自分の思想の為に生きて彼のことが、真改は嫌いではなかった。

——かつて宝石と呼ばれ、天才的な実力と気高い魂を持った女傑がいた。

戦いの中に生まれ、戦いに生き、戦って死んだ彼女が、その先に何を求めていたのか、結局訊くことは出来なかった。

——若者に未来を託し、ただ一人で戦場に散った老人がいた。

彼は腐り果てて行く世界を決して見捨てることなく、年老いて猛毒に蝕まれた体で、自分達を導いてくれた。

——そして。

目的もなく、ただ与えられた仕事をこなすだけの毎日を過ごしていたところ。

真改はまだ、非才を補う経験もない未熟者だった。

弱かった。

あまりにも弱かった。

——強大な敵との戦いに挑む「彼女」を、ただ見送るしか出来ないほどに。

数日後、「彼女」の武装の一部と、「彼女」の最後の戦いの記録が戻って来た。

遺体はない。優れたリンクスだった「彼女」の体は、死してなお冒涇としか言いようのない研究に使われた。「彼女」と戦い方が似ていた真改に武装が引き継がれ、参考資料として戦闘記録の閲覧を許可されたに過ぎない。

——ディスプレイ以外に明かりの無い暗い部屋の中、「彼女」の最期を見る。

かつては伝説的なレイヴンだったというアナトリアの傭兵と、「鴉殺し」と呼ばれた「彼女」の戦いは熾烈を極めた。

お互いの機体は動くことが奇跡と言えるほどに大破しており、AM
Sから逆流してくる痛みは常人ならば発狂するほどのものだろう。
それでも彼らは、眼前の敵を滅ぼすべく戦い続ける。

——そして、決着。

振るわれた刃は、届くことなく。

放たれた弾丸は、無慈悲にコアを貫いた。

「彼女」の機体が、動きを止める。ネクストの機能停止だけでなく、
搭乗者も致命傷を受けたのだろう。

一瞬の静寂。

そして、痛みを堪えるような、漏れ出しそうになった悲鳴を噛み殺
すような、小さな息遣いのあと。

——「彼女」の、最期の言葉が紡がれた。

——ガシユン、と、マシンガンと閃光弾をパージする。残弾も少な
く、なにより目の前の相手にこんなものは役に立たない。

ならば少しでも機体を軽くするために、邪魔な荷物は捨てるべき
だ。

——同時に、オーバードブーストを起動。

瀕死の真改とは対照的に、ストレイドはほとんど無傷と言ってい
い。

——独特のチャージ音が、クラニアムの一角に響く。

たとえ奇跡が起こりレーザーブレードを直撃させたとしても、逆転
は不可能だろう。

——背部のブーストユニットに、光が収束する。

もはや、彼の敗北は決定していた。もとより、彼に勝てる相手では
なかったのだ。

——オーバードブーストが発動する瞬間に合わせ、クイックブー
ストを発動させる。

だが、それでも。

——総身を砕くほどの凶悪なGの中、歯を食いしばり、「彼女」の剣を起動する。

最期まで、足掻くのだ。

——我が身を顧みないその加速に、相手は一瞬、反応が遅れ。

(……せめて、一太刀……！)

——紫色の極光の刃が、黒い装甲を斬り裂いた。

動かなくなつた機体の中、霞む視界に、カメラアイから直接映像が送られて来る。真鍮の乙女との決着が付いたのだろう、相棒がカラードのリンクスと戦っている。

「彼女」の剣はストレイドに大きな損傷を与えたが、やはり倒すまでには至らなかつた。無茶な加速の反動で動きが止まったところに反撃を受け、既にボロボロだつた機体は大破。もはやピクリとも動かない。

だが最後の一撃により、相棒も少しは楽になるだろう。

(……ここまで、か……)

意識が薄れて行く。AMSによりネクストと繋がっているリンクスは、ネクストの機能停止と共に死ぬ。

今、カメラアイから送られて来る映像も消えた。真改の命の灯火も、間もなく消えるだろう。

『誇ってくれ。それが手向けだ』

(……アンジェ……)

死の間際に思い浮かんだのは、「彼女」が最期に遺した言葉。

(……そうか。己は……)

人類の黄金の時代のため。

志半ばで倒れていった仲間達のため。

それらも、決して間違いではない。

だがそれらは、ORCAの戦士として戦ってきた理由だ。カラードのリンクスに執着していた理由は、一つだけ。

——己は、証明したかったのか。

「彼女」を倒したアナトリアの傭兵。そしてそれを討ち倒した、カロードのリンクス。

彼に勝てば、証明出来ると思ったのだ。

剣に固執した「彼女」を、不可能に挑み無様に死んだ愚か者だと嗤う者達に。

銃に頼らず、只管に剣を振るい続けた「彼女」の思いが、間違いなどではなかったのだと。

傭兵ではなく、騎士として在りたいと語った「彼女」の願いが、美しいものであったと。

力こそが全てのこの世界で、自らの信念を貫き通したその生き様が、尊いものであったと。

その「彼女」に憧れて戦い続けた己が、「彼女」から受け継いだ剣で人類の未来を切り開くことが出来れば——

——犬死にはなかったと。

証明出来ると、思ったのだ。

だが、それは叶わなかった。

この大事な局面で自らの我が儘のために戦い、しかし満足のいく結果は得られなかった。

挙げ句その尻拭いを、守ると誓った筈の相棒に押し付けることとなり、その結末すら見届けることが出来ない。

——なんとという、無様。

(……何も為せず、何も得られず、何も遺せず、何も守れず……)

このままでは、死にきれない。「彼女」のように、潔く逝けそうもない。

あんなにも憧れていたのに、あの背中を追い掛けて、ここまで来たのに。

「彼女」のそれにはまるで及ばない、惨めな終わり。

その未練が、寡黙な彼に最期の言葉を紡がせた。

「……無念……」

——こうして。

とある世界の、とある戦場で。

一振りの刀が、折れて砕けた。

その刃金は朽ち果てて大地に還り、いずれ世界に忘れ去られて行くだろう。

——しかし。

その刀の芯金の、一欠片は。

それを守る鞘を失い、覆う鋼を失い、振るう主を失い。

それでもなお。決して、錆びることはなく。

新たな刃の、礎となる。

——そして、とある世界の、とある刀に。

とある銘が、切られた。

——これは、一振りの刀の物語——

第1話 再誕

——ふと、目が覚めた。

身体を起こして周りを見渡すと、そこは見慣れた、己おれの部屋。暗く冷たいコクピットではない。

枕元の時計を見ると、時間は午前五時の数分前。いつもは五時に起きるので、目覚ましがなくとも習慣で起きる己にとっては誤差の範囲である。

(……懐かしい、夢を見たな……)

己がまだ「井上真改」という少女でなく、「真改」という男であった頃の夢。主観的な時間では、もう十五年も前のことだ。

あの時の痛み、そして芯まで凍り付くような寒さを思い出し、身体が震える。ベッドから降り（布団の方が好みなのだが、ここにはベッドしかない）、隣のベッドで眠る最も付き合いの長い妹の髪を、起こさないようそつと梳いた。寝癖が付いていながらも柔らかな感触が己の心を落ち着かせ、震えを止めてくれた。

「……………」

今日のちよつとした早起きは、昔の夢を見たことが原因かもしれない。そんなことを考えつつ、念のために設定してある目覚まし時計を解除した。

まずは今日の体調を確認する。夢の中の己の体は、爆発的な加速に耐えられるよう極限まで鍛え抜かれていたが、少女となった今の体はなんとも華奢で頼りない。しかし今日までに風邪の一つもひいたことがないことを考えると、見掛けによらず頑丈ではあるようだ。

身体各部に神経を集中させ、筋肉の動きを確認する。意識と身体の間には微塵のズレもない。どうやら、今日も体調になんら異常はなさそうである。

箆筒を開けてジャージを取り出し、寝間着から着替える。己の服はほとんど妹達を選んでいるのだが、白地に黒のラインが入ったジャージはともかく、薄桃色のパジャマは正直勘弁して欲しい。己にお洒落とか言われても困る。

「……………」

いつまでも考えていたって埒が開かない、もう慣れた（諦めた）ことだ、と無駄な思考を停止する。とにかく、日課を始めよう。箆笥に立てかけてある竹刀袋に入ったままの木刀を手に取り外に出ると、入念な準備運動をしてから駆け出した。

「よう、シン。おはよう」

「……………」

竹刀袋に入れた木刀を背負って走り込みをしていると、同じように木刀を背負った少年に話し掛けられた。

——織斑一夏。己とは十年來の付き合いになる、所謂幼なじみである。

「相変わらず無口だなあ。挨拶くらいはした方がいいぜ」
「……………」

返事をしない己に構わず話し続ける一夏を無視し、再び走り出す。いつもと変わらぬ己の様子に苦笑を浮かべ、一夏も己に続いて走り出した。

こいつはいつからか、こうやって己の鍛錬に勝手に付いて来るようになった。

……やめて欲しい。別に一夏が嫌いなわけではない。むしろこの少年の、真つ直ぐで今時珍しいくらいに男らしいところは好感が持てる。

問題は、こいつの体質（？）にある。

——モテるのだ。異常なほどに。

こいつの魔の手（無自覚）に掛かった少女は、己たちの通う学校だけでなく、周辺の他校にも多数存在する。そのことに、本人だけが気付いていない。己と一夏の共通の友人である五反田弾などは、一夏のことを朴念神などと呼んでいたが、言い得て妙である。

そんな一夏と行動を共にし、「シン」と渾名で呼ばれる己には、周囲

の女子からの強烈な視線が突き刺さるのだ。話すのが苦手な己が彼女たちに上手い説明など出来る筈がなく、そもそもどう説明したところで聞きはしないだろう。

数ヶ月前に祖国に戻ったもう一人の幼なじみは上手く立ち回っていたが、己にはそんな真似は出来ない。

結果己は、一夏に好意を寄せる少女たちから理不尽な対応をされ、そんな己を一夏が庇い、少女たちの視線がさらに凶悪になる、という悪循環が出来上がっている。そして当然、こいつは自分が元凶であることに気付いていないのだ。

今こうして二人で走っているところを一夏を知る少女に目撃されようものなら、確実に厄介なことになるだろう。その危険を少しでも減らすべく、最近では走り込みの開始時間をさらに早めることを、かなり真剣に考えている。

「俺たちももう受験だな。俺は藍越^{あいえつ}学園を受けるつもりなんだけど、シンはどうするんだ？」

「……IS学園……」

走りながらの一夏からの質問に、素直に答えた。無視してもこいつは繰り返し尋ねて来るだろう。学校で聞かれることだけは避けなくてはならないので、周りに誰もいないこの時に聞かれたことはむしろ幸いと言える。

「IS学園？すごいな、シンは。剣もめっちゃ強いし、シンならきっと受かるよ」

「……」

根拠のイマイチわからない信頼を寄せてくる幼なじみに呆れを含んだ視線を送るが、気付いた様子は皆無である。

感心したようにしきりに頷きながら、なおも話し続けた。

「人気あるもんな、IS学園。女の子はみんなあそこを目指すもんなのか？」

「……」

まるで己が世間の流行に乗って進路を決めたかのような言い方がある。確かにIS学園には世界中から多くの受験者が集まり、倍率は

凄まじいことになっている。それこそ、他では聞いたこともないほどに。

ISは、元々は宇宙開発を目的に開発された。その戦闘力の高さから軍事転用され、しかしあまりに強大過ぎるが故に、今ではスポーツとしての側面が強くなっている。核兵器と同じ、ある種の抑止力になっているのだ。

また、女性しか乗れないという特殊性、ISの世界大会である「モンド・グロツソ」の出場者達のほとんどが、実力だけでなく容姿にも優れていたことなどから、ISをファクションのように、IS操縦者をアイドルのように視る風潮は、次第に強くなっている。それがIS学園の受験者の増加、ひいてはIS学園の生徒達の能力を更に高めることに繋がっているのも事実ではある。

だが己がIS学園入学を目指す理由は、そんなミーハーなモノではない。

己がIS学園を受験する理由は、主に二つ。

一つは、IS学園で優秀な成績を収めれば、将来がほとんど約束されること。幼い頃に両親を失い、孤児院に引き取られて生活している己は、孤児院に恩返しをしたいと常々考えていた。アルバイトをするのと申し出たこともあったが――

『子供はそんなことを考えなくていい。今は今しか出来ないことをしなさい。その手助けをするのが、私たち大人の仕事なのだからね』

——と一蹴された。論戦で己に勝ち目などあろう筈もなく、己の歳では保護者の承諾なしにはアルバイトはできないので、早々に諦めることにした。

そこで考えた次の策が、ISの操縦者となることである。世界の軍事バランスそのものと言えるISの操縦者には、一般人には到底得られないほどの富と名誉が与えられる。ISの世界大会、モンド・グロツソで優勝でもすれば、あらゆるものが手に入るだろう。

当然、そこに至るまでの道は極めて険しいものだ。捕らぬ狸の皮算用と笑われても仕方がないが、戦うしか能がない己には、これくらいしか思い付かなかったのだ。

もう一つは、単純に力を求めてのことだ。

なにかしらの問題があったとして、暴力でもってその対処にあたるのは愚の骨頂である。暴力は問題の根本的な解決は出来ず、それどころかさらなる問題を生み出す要因となる可能性が極めて高いからだ。

——だが、暴力に対抗できるのは、暴力だけだ。力無き者がいくら声を上げようと意味はない。暴力でもって我欲を満たそうとする者から大切なものを守るためには、相手を超える暴力が必要となる。

そしてこの世界における最大の暴力は、言うまでもなくISである。かつて自身の無力により大切なものを失った己が、それでも尚無力でいるなど許されない。ISという「力」は、必ず手に入れなければならないのだ。

——だがここで一つ、大きな問題がある。

並走する一夏に気付かれないよう、そつと視線を落とす。走るリズムに合わせて揺れる、ジャージの左袖。

——その中には、本来あるべきものがない。

(……こんな体で、どこまでやれるものか……)

一夏はこの話題になると、途端に元気をなくすのだ。これは己が勝手にやったことの結果であり、一夏が気に病むことではないと、繰り返し言っではいるが——

——そんな言葉に頷くような輩ならば、初めから罪悪感に苛まれない。

(……これも、己の無力が招いた結果か……)

例えば、剣道を学んでいる一夏が稽古に一層熱を入れ始めたのも、己が左腕を失った頃だ。まるで自らを罰するかのように稽古に打ち込む姿には鬼気迫るものがあり、剣の腕も異常な速度で上達している。

普段は普通に行っているが、見えないところでどれだけ無茶な鍛錬をしているか、分かったものではない。

——その証明とも言える言葉を、己は一夏から聞いている。

『俺、強くなるから。シンのことも、千冬姉のことも、みんなのことも守れるくらいに、強くなるから』

病院のベッドに臥せる己の隣で、懺悔するように紡がれた、誓いの言葉。一夏が己の鍛錬に付いて来るのは、己を守るには己よりも強くなるなくてはいけないと思っっているからなのかもしれない。

純粹で優しい、この少年らしい思いではあるが、己には一つ、懸念がある。

——お前の言う「みんな」とは、どれだけの人々を指しているのか。

全てを守るなど出来はしない。

己を倒した男も、あれほどの圧倒的な力を持っていながら、「現在」を守るために「未来」を生贄に捧げた。

どれほどの力があるろうと、全てを守ることは不可能だ。だが一夏は、それを本気で目指しているように見える。

そして、不可能を追い続けた者の末路を、己は——

『——誇ってくれ——』

「——ン？おい、シン!!」

「っ……!?!」

焦ったような声で、意識を現実に取り戻される。目の前には、心配そうな幼なじみの顔。

「大丈夫か？どうしたんだよ、突然ぼーっとして。なんか顔色も悪いし、今日はもう切り上げたほうが——」

「……無用……」

——不覚。

一夏に呆けた顔を見られた、ことではない。

己は今、「彼女」のことを——

「……っ!!」

頭を振り、先程の考えを掻き消す。

……己の「彼女」に対する想いは、今もなお微塵も色褪せてはいない。あの頃と変わらず、己は「彼女」の背中を追い続けている。

銃弾やミサイル、レーザーが飛び交う戦場を、剣でもって切り抜け

てきた「彼女」。

時代遅れの戦い方にこだわり続け、傭兵でありながら決して企業に媚びることなく、自らの魂にのみ従った「彼女」の人生に憧れ、己は剣を振り続けている。

しかし五体満足でも「彼女」の足下にも及ばない己が、片腕で「彼女」に追い付くことができるのか——そんな不安が、「彼女」を侮辱するような考えを呼び起こした。

(……ふざけるな……)

左腕のことは後悔していないなどと言いながら、こんなにも未練があるではないか。

そんなものは何の役にも立たない。悩む暇があるのなら、失った左腕を補うだけの鍛錬をしなければならぬというのに。

(……何を、弱気になっっている……)

かつて自分達が駆ったものとは似て非なる未知の兵器に片腕で挑むことが、そんなにも恐ろしいか。嵐の様な銃撃にも臆することなく切り込んだ己が、なんたる体たらく。屈強な肉体を失った今、精神すらも錆び付けば、己に何が残ると言うのだ。

無様な最期を迎えた昔の夢を見たせいか、どうにも思考が悪い方に流れてしまう。

———こういう時は、全力で走るに限る。

「……競争……」

「へっ？て、おいちよつと待て、卑怯だぞシン——!!」

目的地は、毎朝素振りをするのに使っている公園。自らを叱咤するべく、いまだに心配そうな顔をしている一夏を置き去りにして、全力疾走を開始した。

第2話 朝日の下で

——ピピピピ。ピピピピ。ピピピピ。ピピピピ——
「……む……」

ベッドの上、布団の中から手だけを伸ばした体勢で、もぞりと体を動かす。聞き慣れた電子音を発する目覚まし時計を手探りで見付け、その頭にあるボタンを軽く押した。

——ピピピピ。ピピピピ。ピピカチツ。

「……………朝か」

独り言を呟いて、ベッドから這い出る。まだ寝ぼけている脳を目覚めさせるために、大きく伸びをした。

「くうくううう……………ふあ」

涙の滲む目でカーテンの方を見ると、隙間から差し込む光はなかなかの明るさだった。今朝の天気は晴れのようなのだ。

「……………さて」

手早くジャージに着替えると一階に降りて、コーヒーに注いだミネラルウォーターを一気に飲み干す。眠っている間に消費した水分を補給すると、玄関脇に置いてある竹刀袋を持ち上げた。ズシリとかなりの重さを感じるが、それも最近では気にならない。

——よし。いい感じだ。

何気ない仕草に、違和感がない。いつも通りのことをいつも通りにできて、いつも通りに感じる。それはつまり、体調は万全ってことだ。

「……………うし、行くかつ」

準備体操を済ませると、竹刀袋を背負うように引っ掛けて、走り出す。始めはゆっくりと、次第にペースを上げて。

全身で感じる、朝の空気が心地良い。速くなっていく呼吸と鼓動を一定に保つように、歩調に合わせて息を吸い、吐き出す。

——そうしてしばらく走っていると、長い黒髪を靡かせながら走る、白いジャージの少女を見付けた。その細い背中に追い付いて、声を掛ける。

「よう、シン。おはよう」

「……………」

俺の挨拶に一瞥をくれただけで返事もせずに走り続けるこの少女の名は、井上真改。

重要文化財に指定されるほどの大業物を鍛え上げた、江戸時代の刀工と同じ名前である。彼女の親が一体何を考えて娘にそんな名前を付けたのかはわからないが、この寡黙で質実剛健を地で行く少女には似合っているように思うし、本人も気に入っているらしい。

「相変わらず無口だなあ、挨拶くらいはしたほうがいいと思うぜ」
「……………」

初めて出会ってからの十年間、何度も言い続けて来たことだが、いまだにこいつから「おはよう」と言われたことはない。

変わらない幼なじみの様子に苦笑を浮かべて、結構なペースで走り続ける少女の隣に並ぶ。

真改は、俺こと織斑一夏の幼なじみであり、俺は彼女のことを「シン」と呼んでいる。

背は最近ようやく追い抜いたが、俺との差はまだほんの少しだ。同年代の少女の中では高めである。

体つきは華奢だが、猫科の猛獣のような瞬発力を秘めている。ダツシュやジャンプなんかは、男のアスリートにだって負けはしない。

朝日を受けて輝く、腰まで直つ直ぐに伸びた綺麗な黒髪を本人は邪魔に思っているが、彼女の妹達により、いまだに切られることなく手入れされている。シン本人は髪については何もしないので、面倒を見るのが大変だと、楽しそうにボヤかれたことが何回かある。

整った顔立ちに、刃のような鋭い眼差しが印象的で、十分美少女と言える容姿なのだが、その寡黙に過ぎる性格からか浮いた話は全く聞かない。

そんな、どこか浮き世離れたような雰囲気、不思議な女の子。
「俺達ももう受験だな。俺は藍越^{あいえつ}学園を受けるつもりなんだけど、シンはどうするんだ？」

「……………IS学園……………」

正直答えが返ってくるとは思ってなかったが、答えの内容そのもの

はそれほど意外なものではない。IS学園は女子に非常に人気があり、剣士として並外れた技量を持つシンが、それを活かすためにIS操縦者を目指すのは自然な流れだろう。

「IS学園？すごいな、シンは。剣もめっちゃくちや強いし、シンならきつと受かるよ」

「……………」

——そう、シンは強い。

俺は小学生の時に学んでいた剣術を一旦は辞めたものの、中学生になつてから改めて剣道部に入った。俺と千冬姉にはシンとはまた違った事情で両親がいないが、第一回モンド・グロツソ優勝者である千冬姉のおかげで、経済的にはかなり恵まれている。

いずれ自分の力で金を稼げるようになるために卒業後の就職率が高い藍越学園を受験するが、今は自分の目的のために、千冬姉に甘えさせて貰つて、竹刀や防具代なんかを出してもらっている。

人一倍鍛錬に打ち込んで来た自負はあるが、才能にも恵まれていたのだろう。去年と今年、剣道の全国大会で二連覇を果たし、高校生相手でもそうそう負けはしない。

それでも、シンにはまるでかなわない。毎日のように打ち合いをしているが、まだ一度も勝っていない。

けど、いつか絶対に負かしてやる。シンは千冬姉と並ぶ、俺の目標の一つなのだ。

「人気あるもんな、IS学園。やっぱり女の子は、みんなあそこを目指すもんなのか？」

「……………」

やっぱり返事をしないシンに一方的に話し掛けながら、陸上選手もびっくりなスピードで走り続けるシンに付いて行く。その顔にはうつすらと汗をかいているが、息は少しも乱れていない。まったく、こんな細っこい体のどこにそんなスタミナがあるんだか。いつものことながら、呆れてしまう。

(しかし……………IS学園、か……………)

俺の目標であり、憧れでもあるシンが、世界最強の兵器であるIS

を学ぶため、IS学園を受験する。

嬉しくないわけではない。シンが自分の望みを話してくれることなど、滅多にないのだから。

——だが。

(どんどん遠くに行っちまうなあ)

ISは、どういうわけか女性にしか反応しない。男である俺には、どう足掻いたところで動かせはしない。

世界を変えるほどの最強の力、それを俺は、決して手に出来ないのだ。

(シンを守るって大口叩いて、情けねえなあ……)

追い続けた目標が、絶対に手の届かないモノとなった。目標は高い方が良いとは言うが、何事にも限度つてもものがある。

だがそれでも、諦めるつもりはない。シンがIS学園を目指すのは、予想していなかったわけではないし、なによりも——

——その程度で折れるほど、柔な決意をしたつもりもない。

(……どつちにしろ、まずは剣で追い付かなきゃ話にならない。ISがどうか悩んでたら、足元がお留守になっちまう)

俺は俺にやれることをやるだけだ、その内希望も見えてくるさ、と、自分でも楽天的と思うことを考えていたら、ふと、シンがどこか上の空なことに気付いた。心なし、表情もいつもより険しい。

1ミリ未満の、本当に僅かな変化なんだが、十年も付き合いがあればそれくらいは分かるようになる。

「シン？おい、シン!!」

「……っ！」

心配になって顔を覗き込むと、珍しく驚いたようなするシン。

——ちよつと可愛い、と思ったのは秘密だ。基本大人しいんだが、あんまり弄り過ぎると静かにキレるからな、こいつは。そして本気で怒ると、千冬姉よりもコワイのだ。

まあそんなことは置いといて。シンが鍛錬に集中してないなんて珍しい。もしかしたら、どこか体の調子が悪いのかもしれない。

「大丈夫か？どうしたんだよ、突然ぼーつとして。なんか顔色も悪い

し、今日はもう切り上げて——」

「……無用……」

心配はいらない、ということだろうか。シンはほとんど喋らないし、喋ってもかなり短いが、それだけで大体の意味は通じる言葉を口にする。

一言で足りる場面でしか話さないとも言うが。

とにかく、ふるふると頭を振ってから顔を上げると、すうつ、とシンの意識が走ることに向けられた。いつもの様子に戻ったシンは、

「……競争……」

と呟くと、突然ダツシュを開始する。

「……へ？」

一瞬呆ける俺。そして今の言葉を、三秒ほど経ってようやく頭が理解した。

「……て、おいちよつと待て、卑怯だぞシン——!!」

とんでもない加速で一氣にトップスピードに達したシンは、減速せず角を曲がって行った。目的地はおそらく、いつもの公園だろう。そこで素振りをしてから再び走って帰る、というのが、いつもの朝の流れである。

若干フライング気味に走りだしたシンを慌てて追い掛けながら、俺の顔は自然と笑っていた。

—— 剣の技量では足下にも及ばないが、純粋な体力勝負で女の子に負けるなど、男の意地プライドが許さない。

(絶対に、勝つ!!)

いいぜ、面白い。受けて立ってやる。体も大分温まって来た、ここはひとつ、全力勝負といこうじゃないか——!

(498、499、500、501、502、……)

シンとの競争のゴール、名前も知らない小さな公園に着いた俺達は、それぞれが背負っていた竹刀袋から木刀を取り出し、素振りを始

めた。

先ほどの競争は、僅差でシンが勝った。シンはフライングしたからな、同時に走り出してれば俺が勝ってた、と男らしくない言い訳はない。しないっいたらしない。

(……562……イカンイカン、余計なことを考えるな。集中だ、集中)

切れかけた集中を繋ぎ留め、手の中の木の感触に意識を向ける。

俺が使っている素振り用の木刀は特注品で、長いうえに芯に鉛が仕込んであり、かなり重い。これを使い始めたころはふらついていたが、慣れた今は普通に振れるようになった。

……部活の仲間が俺を化け物でも見るような目で見るようになった。

(622、623、624、625、626、……)

黙々と素振りを続けながら、ちらりとシンを見る。

シンが使っているのは普通の木刀だが、女の子の細腕、それも片腕で振るには十分重いはずだ。だがその切っ先には微塵もブレはなく、見事な剣閃を描いている。

対して俺の木刀は、ほんの少しではあるが、切っ先が揺れている。相手を「倒す」ことが目的じゃない剣道の試合では、これでもどうにか通用するだろう。

だが真剣を扱った時、この僅かな切っ先の揺れが、切れ味を大きく鈍らせる。木刀であっても、相手の身体の芯まで衝撃を通すには、刀身に込めた力を真っ直ぐに打ち込まなければならぬのだ。それが、俺には出来ていない。

素振り一つとってみても、技量の違いがこれほどはつきり出る。シンに追い付くのは、まだ遙か先のことになるだろう。

(704、705、706、707、708、……)

木刀を握る掌に汗をかき、柄を滑らせる。

だが、問題ない。正しく握り正しく振れば、手に握る力を入れるのは一瞬だけでいい。むしろこの汗のおかげで、正しい握りと振り、そして力を入れるべき一瞬が分かりやすくなった。

——失敗してれば、木刀はどうにすっぽ抜けてる。そうやってな
いってことは、今のところ上手くいってるってことだ。後はこの感覚
を身体に刻み付けるために、ただひたすら繰り返し返すだけだ。

(……800、801、802、803、804、……)

一振りごとに鋭く息を吐き出し、必殺の意思を込める。

素振りをする際には剣の軌跡や足運びだけでなく、一振りに込める
気迫こそが重要だ。どんなに上手いフェイントも、そこに殺気がなけ
れば達人相手には容易く見切られる。

命を懸けた遣り取りでは、お互いの体力、技術、そして精神が勝敗
を分けるのだ——というのが、シンからの受け売りである。

(908、909、910、911、912、……)

両腕はもうパンパンで、握力も限界に近い。歯を食いしばりながら
素振りをする俺とは対照的に、シンは相変わらずの無表情だ。

——いや。良く見ると、その口元が、ほんの少しだけ緩んでいる。
十年の付き合いがある俺でも、どうにか分かる程度の表情の変化。
これがシンの笑顔であり、彼女が笑うのは剣の稽古をする時と、彼女
が育てている花壇の世話をする時くらいだ。

無口・無表情・無愛想の三拍子が揃っているのが、井上真改という
少女なのである。

「……1000！ぶはあっ！どうだ、ようやくこいつを千回振ったぞ
!!」

「……次は二千……」

「ドスパルタSですね真改さん!？」

この特注品の木刀を千回振ることは、シンからの課題である。数ヶ
月前にこの木刀を作ったとき、シンは感触を確かめるように一回振る
と、ぼそりと、

「……千回振れ……」

と言ったのである。

正気かコイツとも最初は思ったが、いざ始めてみると振れる回数が
みるみるうちに増えていって、同時に腕も引き締まって行った。

そして今日、念願の課題達成と相成ったわけだが、真改先生は褒め

るどころかさらなる課題を出して来やがった。

(この調子で、一万回振れとか言い出さねえだろうな……)

シンなら言いかねない。彼女は割と精神論者なのである。

「さてと、もういい時間だし、そろそろ戻ろうぜ」

「……応……」

俺はこれから帰ってシャワーを浴び、朝食を作って食べ、学校に行く準備をしなくちゃならない。

シンは料理はしないし出来ないが、毎朝花壇の手入れをしている。彼女が住む孤児院の花壇はそれなりの広さがあって見事な花が咲いており、近所では評判になっている。

当然、手入れにはそれなりに時間が掛かるので、あまり帰るのが遅くなると学校に間に合わなくなるのだ。

「よい、しよつと」

疲労からかいつも以上に重く感じる木刀を竹刀袋にしまうと、背中に背負って走り出す。息は多少荒いが、来たときよりも速いくらいのペースでしばらく走り、いつもの場所でくるとシンの方を向き、

「じゃあ、また学校でな」

「……………」

いつもの別れの挨拶をして、それぞれの家に帰って行った。

——さあて。今日も一日、頑張りますか——

第3話 試験

「……すげえ大ききさだな」

「……………」

己と一夏が並んで見ているのは、本日それぞれが受験するIS学園と藍越学園、その他多くの学校の入学試験が行われる多目的ホールである。IS学園の受験には実技、つまりISによる戦闘が内容に含まれているためこんなにも巨大な場所が必要となる。しかしそれを他の受験会場と一緒にしたにする必要があったのかは不明である。

……それにしても、本当に大きい。この中に複数の受験会場があるので迷いそう。まず目的の受験会場に辿り着くことが第一の試験だとしても言うのか。

「うし、じゃあ行くか。お互い、頑張ろうぜ」

「……………」

試験前最後の一ヶ月間は朝の鍛錬をせず、お互いの勉強に集中していた。もともと己は実技試験があるので、その訓練は続けていたが。そして一夏も、一ヶ月も鍛錬を削って作った時間を無駄にすることなく、猛勉強を続けていた。

「……一夏……」

「んあ?」

流石に緊張しているのか、どこかそわそわしている様子の一夏に声を掛ける。

己に名前を呼ばれたことがそんなに意外だったのか、間拔けな声を出す一夏に向けて、拳を突き出した。

「……勝ってこい……」

「……ああ!!」

ガツン、と互いの拳をぶつけ合い、それぞれの会場へ歩いて行った。

（……………か……………）

手元の受験案内と目の前の扉のプレートを見比べる。

己が今日受けるのは実技試験。

筆記試験は先日済ませており、手応えは十分。後の答え合わせの結果を考えれば、必要な点数には十分に達しているだろう。

生まれた時から精神的に成熟し、コツコツと勉強を続けていた己からすれば当然の結果ではある。ネクストのパイロット、リンクスにも、ISのそれに匹敵する知識が求められるのも理由の一つだ。

——つまり、後はこの実技試験の結果だけ、ということだ。

(…………ぬ…………)

扉のノブに伸ばした掌にうつすらと汗が滲んでいるのを見て、自分が柄にもなく緊張していることを知る。まるでこれから戦場に赴くかのような精神状態だ。

……強ち、間違っではないが。

(…………一夏のこととは言えんな…………)

深呼吸を一つしてから、扉を軽く叩く。

「…………入ります…………」

面接試験ならば絶対に悪印象になる声で断りを入れ、ガチャリ、とノブを回して扉を開けた。

「あ、受験生の子？それじゃあ、向こうで準備して。すぐに試験が始まるから、急いでね」

「……………」

受付と思われる女性に言われるまま、準備を始める。「向こう」とぞんざいに指差された先には、広い部屋を簡単に区切るカーテンがあった。その布を潜り、学校の制服であるセーラー服を脱いで、鞆から取り出したISスーツを身に着ける。

——そして、何の変哲もないこの部屋の中で、異様なほどの存在感を放つモノへと向き直った。

それは例えるのなら、合戦に臨む鎧武者。

そんな百年以上前に使われていたような代物とは比べるべくもない未来的な形状でありながら、どことなくそう感じさせる、機械の甲冑。

——起動準備状態のIS、「うちがね打鉄」。

打鉄は、日本のIS開発業者、倉持技研が開発した第二世代型量産機だ。防御を重視したバランスの良い性能に、様々な距離と状況に対応出来る充実した武装。それらに過不足なく適応した各種システム。クセがなく扱い易いので、ISパイロットの育成を主な目的として世界中で使われている、デユノア社製のラファール・リヴァイヴと並ぶ名機である。己も何度か乗る機会に恵まれてはいるものの、本格的に動かすのは今回が初めてだ。そしてその時に乗ったのは、非武装の機体。武装の使い勝手など確かめようがない。

——だが、それがどうした。戦場においては、手に馴染んだ得物が折れるなど良くあることだ。その時は、落ちている武器を拾って戦うまで。慣れた武器でなくては戦えないと言うのなら、そもそも戦場などに出るべきではない。

——故に、今は。

「……力を……」

この打鉄こそが、己の刀だ。

「……借りる……」

打鉄に乗り込み、機体に背中を預ける。かしゅ、という空気の抜けるような軽い音と共に、装甲が体に密着した。

パワードスーツであるISは、パイロットの体に連動して動く。左腕が二の腕までしかない己は、打鉄の左腕を装着することはどうか出来るが、動かすことはできない。それがどれほどの枷となるか、それすらも未知数だ。

——実技試験の内容は、IS学園の教官と戦うこと。力を得る為に、自らの資質を示すということ。

それは、まるで——

『なるほど、適性はあるようだな。』

——認めよう、君の力を。

今この瞬間から、君は——』

かつて、異世界における最強の兵器、ネクストを操っていた己の。生まれ変わってから最初の戦いが、始まる。

「始まる、な」

IS学園の実技試験会場を一望できる採点者席から、これから始まる戦いの様子を眺める。

対戦カードは、私の後輩にして元日本代表候補生、山田真耶。そして私の弟、織斑一夏の幼馴染みである、井上真改。

山田君の実力は良く知っているが、真改については未知数だ。剣術の腕がそのままISの技量になるわけではないし、真改にISでの戦闘経験はないのだから。

(しかし……考えてみれば、あの頃の私と同じくらいの歳か。……大きく変わったものだ)

井上に初めて会ったのは十年前。親のいない私達姉弟は孤児院経営者の唐沢さんに招待され、私はそれを受けた。

一人で一夏を育てる決意をした私は、一夏を親のいない子供達と触れ合わせて一種の情操教育をすると同時に、一夏を育てていくためのアドバイスをしてもらおうと考えたのだ。唐沢さんは街で評判の人物であり、その評価が何度か耳に入ったのがきっかけだった。

唐沢さんは、世間を知らない小娘の身の程知らずな決意を笑うことなく、むしろその思いに真摯に応え、将来に向けた様々な助言をくれた。余裕を無くし、触れたもの全てを切り裂く抜き身の刀のようになっていた当時の私にとって、その数時間の会話はまさに救いだっ

た。

「今日はありがとうございました」
「こちらこそ、また来てくれると嬉しいな。若い子の話はすごく参考になるし、楽しいからね」

孤児院の玄関を開けると、夕暮れの中、元気にはしゃいでいる子供達の姿があった。両親を失い、居場所を見失って心に深い傷を負った幼い子供達が、あんなにも楽しそうに笑っている。

それはもう、奇跡と言って良い偉業だろう。心の傷を癒やすことが

どれだけ難しいか、私は身を持って知っている。あの子達の傷も完全に癒えたわけではないだろうが、ああして笑えるというだけで、その成果は素晴らしいものだ。

「……良い所ですね」

「そうかな？みんな、一生懸命頑張ってるだけだよ」

「それが、何より良いことだと思います」

そんな私の言葉に、唐沢さんは嬉しそうに笑った。優しく細められた目で、玄関前の広場をゆっくりと見渡して行く。

私がそれに倣っていると、広場の一角にある花壇で土いじりをしている、黒髪の少女を見つけた。歳は一夏と同じくらいだろうか、その身体はとても小さく、なのに不思議と、弱いという印象は受けなかった。

……その時、自分でも、その子に何を感じたのかはわからない。だが、なんとなく気になったのだ。

「……あの子は？」

「ん？……ああ、あの子は井上真改。先月、交通事故でご両親を亡くしてね。うちで引き取ったんだ」

広い花壇を、時折肥料を混ぜながら、小さな手に持った熊手で一心に耕しているその少女。惹き付けられるように、その背中に近付いて行った。

「……む……む……」

手を伸ばせば届くくらいに近付いてから、思い出した。

……私は、小さな子供の相手なんて、ほとんど経験がないということに。

(……むう……)

率直に言えば、どうすれば良いのか分からず、身動きが取れなくなってしまうのだ。しかしこのまま何もせずに戻るといいうのも間抜け過ぎる。なので覚悟を決めて、声を掛けた。

「……くんばんは」

「……」

……返事がない。無視されているわけではなく、少女は一旦手を止

めてこちらを見た。それに対して私が何も反応出来ずにいると、視線を戻してまた土いじりを始めたのだ。

「……ええっと……私は、織斑千冬という。君の名前は？」

「……井上真改……」

「そ、そうか。よろしく、真改」

「……………」

「……………」

……会話が終わってしまった。次の言葉を待っても、真改は土いじりを続けるばかりで、何も言おうとはしない。

その様子に、私は不安になった。この子は、交通事故で両親を失ったという。それもつい先月に。その事故のショックで、心を閉ざしてしまっているのではないか——？

「……唐沢さん。この子は、もしかして……」

「いやあ、君が考えてることは、多分違うと思うよ。真改は色々手伝いをしてくれるし、たまにだけど、ちゃんと話すから」

唐沢さんの言う「たまに」というのは、本当に稀なことなんだろう。下手をすれば、一日に一度も言葉を発さないことすらあるかもしれない。

「良い子だよ、とても。その花壇だって、真改が一から作ったんだ」

「この、花壇を……？」

花壇は結構な大きさだ。四畳ほどはあるだろう。土は素人目に見ても柔らかそうで、良く耕されていることが窺える。これを子供が作るだなんて、大変な作業の筈だ。

だが、花には人の心を癒やす効果がある。その為に花壇を作っているのだとしたら、確かにそれは、優しい子だ。

「……どんな花を植えるんですか？」

「うくん。何度か訊いたんだけど、教えてくれなくてね」

「お楽しみ、ということでしょうか」

「どうだろう。私は、真改自身、花の名前とかを知らないんじゃないかって思ってるよ。うちには花に詳しい子は居ないし、昨日、花の本と睨めっこしてたからね」

そう言つて、唐沢さんは楽しそうに笑つた。釣られて私も、小さく笑う。

そんなことをしていると、子供達と遊んでいた一夏がとことこ走つて来た。

「千冬姉、もう帰るのか？」

「え、ああ、そうだな、そろそろ暗くなるし、もう帰るか……」

「そっか。……あれ、コイツは？」

「ああ、この子は……」

私が答えるより早く、一夏は真改の横にしゃがみこんでいた。そして無遠慮に、その顔を覗き込む。

「おい、いち——」

「まあまあ、子供同士の会話は大事だよ。ちよつと見ていよう」

見る者を安心させる、ほんわかとした笑顔を浮かべながらそんなことを言う唐沢さん。その言葉に従い、しばらく見守ることにする。

一夏は真改がなんの反応も示さないことに業を煮やしたのか——

「なあ、お前、なにしてるんだ？」

——まずは自己紹介から始めんか!!

あまりにもあんまりな第一声に怒りと呆れが湧いてくるが、ここは我慢だ。ちなみに唐沢さんは、隣ではっはっはっ、と笑っている。

「なんだこれ、花壇か？ なにか植えるのか？」

「……………」

「向こうでみんなと遊ばないのか？ 一人じゃつままないだろ？」

「……………」

「なんか言えよな。返事はちゃんとしなさいって、千冬姉が言つてたぞ」

「……………」

話し続ける一夏に対し、無言を貫く真改。無口にもほどがあるだろう。

「…………あ。そういえば、初めて会う人にはまず自己紹介しなさいって、千冬姉に言われてたっけ」

「……………」

不意に思い出したように、一夏が言った。

「俺は、織斑一夏」

真つ直ぐに少女を見て、一夏が名乗りを上げる。

「お前は、なんて名前なんだ？」

続く問いに、少女は作業を止め、一夏を真つ直ぐに見返して、自らの名を口にした。

「井上、真改」

——それが、私達織斑姉弟と、井上真改との出会いである。

(ここまで付き合いが続くとはな)

あの頃から、容姿以外はまるで変わらない。極めて無口な性格からは想像もつかないほどに熱い魂を秘める真改が、「力」を求めていたことは知っている。その為に、ずっと走り続けていることも。

その理由を語ろうとはしないが、想像することは容易い。生身での戦闘技術においてはすでに私と並ぶほどであり、私が真改に勝っているのは、以前は体格差、今では真改が片腕だからでしかない。

(だが、ISと生身はまったく違うぞ)

眼下には、動作を確かめるように、機体各部を動かしている真改の姿。右手にはやはり、接近戦用のブレードを持っている。

(……見せてもらうぞ、お前の力を)

そして、試験開始のアナウンスが響き渡った。

今日、何回目かの試験。そして私が、心のどこかで楽しみにしていた試験。

使い慣れた機体、ラファール・リヴァイヴの調子を確認。……うん、

大丈夫。短い時間でも、しっかりと補給と整備をしてきている。

『それでは、試験を開始してください』

試験開始のアナウンスが響くが、すぐには攻撃しない。今回の受験生は千冬先輩の弟さんの幼なじみで、千冬先輩とも付き合いが長い。剣の腕前はあの千冬先輩が褒めるほどらしいが、ISでの戦闘は今回が初めてと聞く。

けれどISでの戦闘経験がある受験生なんてどこかの国家代表候補生くらいのもので、ISに触ったこともないという受験生の方が多いくらいだ。

なので、まずは様子見。受験生が多少は操作に慣れてきたころを見計らって、小突くような攻撃から始めるのが私の試験である。

目の前の少女は、最初に私を一瞥しただけで、今はこちらを見もせずに機体の調子を確かめている。展開したブレードを振ったり、軽くスラスターを噴かせてみたり。どうやら私がまだ動かないことを悟ったらしい。すごい落ち着きようだ。

そしてそんな様子を見ていて、一つ気付いたことがある。

(本当に、左腕がないんだ……)

打鉄の左腕部分は付いているが、それは肩から二の腕までの僅かな部分に引つかかっているだけだ。装甲の隙間から覗く中身は空っぽで、決して動くことはないだろう。

……どんな気持ちなんだろう。そんなに強いのに、片腕を失ってしまふというのは。

ふと、彼女がこちらを見て、ブレードを構えて突撃して来た。いきなりの急加速、思い切りの良い飛び出し。

しかしブレードを展開している以上接近戦を挑んでくることは予想済みなので、後退しながらアサルトライフルを撃つ。数は少ないが、狙いは正確に。

これは受験生の対応を見るための攻撃だ。さて、この子はいったいどうするのか。

銃弾を避けるか、装甲まかせな突撃か、それとも判断が間に合わずに、棒立ちになるか。

大抵は、そのいずれかだった。だが目の前の、刃のような鋭い瞳で私を見る少女は、全く予想外の行動をとった。

——あろうことか、ブレードで銃弾を切り落としたのである。

「え、ええ!?!」

確かに、ISのハイパーセンサーは動体視力や反射神経も補助する機能がある。けれどそれでも、音速の数倍の速さがある銃弾を見切り、しかもそれを切り落とすほど速く正確に動くなんて、高等技術なんてもものじゃない。

そしてどうやら、まぐれなんかじゃないみたいだ。当たらない弾は完全に無視、当たる弾だけを切り捨てながら、一層速度を上げて突っ込んでくる。いまだかつて見たことのないトンデモない対応にびつくりして動きを止めてしまった私は、あつという間に間合いを詰められ——

——ブレードの一撃が、ラファール・リヴァイブの装甲に叩き込まれた。

(……浅い……)

銃弾を切り落とすという、動作の精密さの確認を兼ねた行動で試験官の驚愕を誘い、その隙に接近、一撃を見舞う。そこまでは良かったが——

(……やはり、貫けぬか……)

ISのパワーアシストを片腕分しか受けられない己では、どうしても攻撃が軽くなる。既存の兵器の中でも飛び抜けた防御力を誇るISの皮膚装甲スキンバリアーを破るには、片腕の斬撃では足りないようだ。試験官の機体には、大した損傷はないようだ。

……そして先ほどの奇策は、二度は通用しない。

(……元より、策を練るほどの頭もない……)

——ならば、実力で近付いてみせよう。

驚愕から立ち直り、油断のない眼で己を見る試験官。己には様子見

など無用と判断したのだろう、向けられる銃口は二つに増え、そこに込められているのは、紛れもない戦意である。

試験、か。そう、これは——これは、己を試す戦い。

(……………からだ……………)

己が何を為せるのか。

己が何を得られるのか。

己が何を遺せるのか。

己が何を守れるのか。

己の剣は——果たして、「彼女」に届くのか。

全ての答えは、この道の先にあるかもしれない。この一戦は、始まりに立つ為のものでしかない。

(……………必ず、勝つ……………)

放たれる弾丸は、苛烈にして精密。スラスターを噴かせて回り込みながら、己は二度目の突撃を開始した。

(さっきのは驚いたけど……………)

ブレードの直撃を受けたにもかかわらず、シールドエネルギーはそれほど減ってはいない。やっぱり片腕では、攻撃力に限界がある。

(銃が得意だったなら、また違ったんだろうけど……………)

手に持てる銃器は一つだけだけど、その一つを大型のものにしたリ、他にも肩に装着するタイプのものもある。いずれにせよ、剣一本よりはやりようがあったはずだ。

——あるいは。

(片腕のハンデを補うくらい強力な武器があれば、もしかしたら……………)

思い出すのは、私が尊敬し憧れる、先輩の姿。彼女の振るう剣は、触れただけで相手に致命的なダメージを与える、絶対的な威力があった。あれに類する武器をこの少女が手に入れたら、きつと凄まじい使い手になるだろう。

とにかく、この少女を相手に油断は禁物だ。試験だからと気を抜い

ていると、負けるのは私のほうだ。

受験生は試験官に負けても合格できるが（と言うより、勝つ子はほとんどのいない）、この試験は先輩も見ているのだ。無様なところは見せられない。

左右の手に持ったアサルトライフルを連射する。井上さんは蛇が地を這うような機動で銃弾を回避し、時にブレードで弾丸を切り捨て、あるいは弾きながら接近してくる。私は退がりながら撃ち続けるが、足止めにもならない。そして前進と後退ではどちらが速いかなんて、言うまでもない。

——接近、剣の間合い。

「くう………！」

「……………」

一撃でダメなら連撃、そう言わんばかりの猛攻。私も咄嗟に展開した接近戦用ブレードで応戦するが、剣の技量では相手にならない。どうにか凌いでいるのは、彼女が片腕だからに過ぎない。

（なんとか、距離を取らないと………！）

普通に退がったんじゃ追い付かれる。苦肉の策としてグレネードを展開し、ピンを抜いて足元に落とした。

爆風と破片でダメージを受けるが、それは井上さんも同じだ。爆風に押される形で間合いが離れ、その勢いを利用して距離を取った。この隙に、武装をマシンガンとショットガンに変更。正確さよりも弾幕で接近を阻む戦術だ。

（今度はそう簡単には——っ!?）

その武器を見た、井上さんの判断は一瞬だった。避け切れないとみるや、多少の被弾を気にせず、最低限の回避と防御で一気に突っ込んで来たのである。

（そんな、なんて強引な………！）

だが、理には適っている。近付かなければならない以上、どこかでダメージを受ける覚悟が必要だ。ならばそれは、少しでも消耗が少ない、早い方がいい。

だから井上さんの選択は、決して間違っていない。間違っていない

が――

(それにしたって、弾幕に飛び込むことを少しも躊躇わないなんて……)

人は傷付くことに対し、本能的な恐怖を持っている。いくら装甲に守られているからといって、銃火器という十分過ぎる殺傷力を持つ兵器に対し身を晒す恐怖は、私でも拭いきれない。

――それを、この少女はやったのけた。

死や痛みを恐れない狂人でも、根拠もなく自分は大丈夫と考えている愚か者でもない。死ぬことの恐ろしさも、傷付く痛みも良く理解した上で、それでも勝つために、必要な危険を犯す――

――彼女は、「戦士」だ。

(だけど、私だって！)

確かにその剣技や判断力は凄まじいが、ISの扱い自体はまだ未熟だ。近付くにつれて、被弾率が上がっている。着弾の衝撃に機動を阻害され、前進も回避も鈍くなっている。

マシンガンとショットガンの集中砲火を受け、井上さんの機体にダメージが蓄積していく。グレネードの爆発によるものと合わせれば、そろそろ限界に近いはずだ。

それでも、井上さんはかなり距離を詰めてきている。もう一度だけ彼女の猛攻を凌がなければ、私の負けだ。

グレネードをいつでも展開出来るように準備する。さつきと同じ方法が通用するとは思えないが、正攻法で凌げるものでもない。

防御を固めつつ、僅かな隙にグレネードをねじ込む。危険ではあるけれど――賭けもなしに、勝てる相手じゃない。

(さあ、最後の……!?)

井上さんは、連撃を仕掛けて来る。片腕しか使えず、十分なパワーアシストを受けられない以上、一撃ではISの防御力を突破できないからだ。

――その認識は、余りにも甘かった。

銃弾を受けながらも突撃して来た井上さんは、間合いに入る直前、背中と両足のスラスタを使い、前進しながら高速で回転し始める。

機体の重量、突進の勢い、回転の遠心力、スラスタの推進力。それらが、左腕を補って余りある威力をブレードに与え。

「疾っ……！」

ブレードよりもなお鋭い、呼気と共に。

私の首目掛けて、刃が振り抜かれた――

己の最後の一撃は、試験官が刃の軌道上に咄嗟に滑り込ませた銃身に威力を減殺され、仕留めるには至らなかった。無茶な機動の反動で硬直している隙に、真つ二つになり使い物にならなくなった銃を捨てて展開した二丁のアサルトライフルの連射を浴び、シールドエネルギーが底をついた。

(……昔、似たような負け方をした気が……)

あと一步まで追い詰めたが、結局は負けた。己は、始まりに立つことすら出来なかったのだ。

――無様なものだ。いつまで経っても、どこまで行っても。

「お疲れ様でした！ 井上真改さん、でよかったですよ？ すごく強いですね！」

「……………」

試験官が晴れやかな笑顔で話し掛けて来るが、己にはもう関係ない。さてこれからどうするか、と考えていたら、

「左腕のことがあるので心配でしたけど、これならきつと合格ですよ！」

――試験官のその言葉で思考が停止した。

「あ、あれ、どうしたんですか？ そんなに驚いた顔して……」

「……負けた……」

己の返答に、試験官はキョトンとして、

「試合の勝敗で合格不合格が決まるわけじゃないですよ？ まあ当然、勝ったほうがいいですけど」

なん……………だと……………？

「ISを学ぶためのIS学園の入学条件が、IS学園の教官に勝つことじゃ本末転倒じゃないですか」

「……………」

……言われてみれば、確かに。ということはないんだ、己は勝つ必要のない勝負に、あんなに必死になっていたのか？ 初撃に小賢しい奇襲まで使って？

「け、けど、井上さんは腕のこともありますし、評価は他の受験生より厳しくなりますから、あれくらいの試合内容のほうが……………」

「……………」

己の様子から心境を正確に読み取ったのだろう、試験官が慌てたように慰めの言葉を掛ける。なるほど確かに、片腕というハンデがある以上、足しになるモノは多いに越したことはない。

……そうだ、決して無駄ではなかった。少々必死に過ぎたが、この試験はそれだけ己にとって大事だったということ。

そうやって、落ち込みかけた心を励ましどうにか気を取り直した己に、試験官が笑顔で告げる。

「試験はこれで全て終了です。お疲れ様でした、合格発表は後日になります。今日は帰って、ゆっくり休んでください。途中、事故などに気を付けてくださいね、家に帰るまでが試験ですから」

「……………」

お決まりの台詞を口にする試験官に頭を下げ、試験場を後にする。やれることは全てやった、後は結果を待つだけだ。

妙な達成感のある疲労を感じながら、己は帰り支度を始めた。

「すごいですね、彼女。さすが、織斑先生が誉めるだけはある」

「私も、まさかこれほどとは思っていませんでした」

隣で先ほどの真改の戦いぶりに驚いている同僚に、頷きを返す。私も驚いているが——その内容は、同僚のそれとはまるで違うだろう。

真改の剣の腕は知っていたが、あの動きや戦術は鍛錬や才能だけで

は到底説明が付かない。ISが生身かは別にして、銃火器で武装した敵との戦闘経験が、豊富にあることは確実だ。

——平和な孤児院暮らしの少女が、いったいいつ、どこで、そんな業を身に付けたのか。

(……お前は、何者なんだ)

弟と仲のいい少女。元世界最強という私のことを考えれば、一夏の利用価値は計り知れない。自然、一夏の交友関係には気を配っている。そんな一夏の幼なじみであり、普通の人生を送ってきた筈の少女が、初の戦闘で歴戦の戦士を追い詰めるほどの戦いを見せた。

何かしらの目的があつて一夏の側に居るのだとしたら、こんな不用意に自分が怪しまれるような真似はしないだろうと、もっともらしい理屈でこの悪寒を押さえ込むことは出来るかもしれない。

だが、それでも——疑うなというほうが、無理がある。

心情では、私は真改を信じたいと思っている。

思い出すのは、数年前。第二回モンド・グロツソ決勝戦直前で、一夏が誘拐されたという報せを受け、一夏が捕らわれているという廃工場に向かったとき。

辿り着いたその場所には、一夏と一緒にモンド・グロツソの観戦に来ていた、井上真改の姿があつた。

周囲には銃で武装した男達が倒れていた。一夏誘拐の犯人達だろう。そして、気絶している一夏を背に庇い、彼女が立っていたのだ。

左腕を失い、激痛と大量の出血で一時的に視力をほとんど失っていたのだろう、その瞳は焦点が定まっておらず、突然現れ、IS「暮桜」を展開していた私を敵だと思つたようだった。

そしてそんな、今にも死んでしまいそうな体で。

いまだ幼く、なんの武器も持っていない身で。

世界最強の兵器の前に、立ち塞がったのだ。

真改が、その生涯のほとんどを剣に捧げてきたことを、私は知っている。そんな彼女が左腕を失うことで受けた痛みは想像を絶する。

それでも彼女は、今も一夏の良き友人でいてくれている。

——そんな彼女を、私は疑つてしまっている。

第4話 初日

長年の積み重ねの末、ようやく辿り着いたIS学園、その教室。己は感慨に耽ることもなく、妙な脱力感に襲われていた。

(……これほどとはな……)

前の席に座る、幼なじみの背中を見る。教室中から集まる視線のせいか、かなり居心地が悪そうだ。

かくいう己も、一夏の背中に視線を送っている一人である。視線に込める想いは、他とは大分違うだろうが。

(……阿呆が……)

——さて。女性にしか動かせない兵器であるIS、主にその操縦を学ぶ為のIS学園に、何故男である一夏がいるのか。

二ヶ月ほど前、己と一夏は互いの合格を約束し合い、高校の入学試験に臨んだ。二人とも合格だったので、一応、約束は果たしたと言えるが——

(……まさか、会場を間違えるとは……)

一夏はあの巨大な試験会場で散々迷った挙げ句、入る部屋を間違えた。そこに在った待機状態のISに、興味本位で触れたところ——動いてしまったのだ。

女にしか動かせないISを動かした男。今のところ、世界でただ一人の例外。そんな希少種に対し世界が取る行動など、一つしかない。

しかし、まさかISを動かせる男がいるなどと真面目に考える者はこの世界にはいまい。故に不用意にISに触れたことに関する落ち度は、一夏にはない。

……問題は、それより遥かに単純な一点。馬鹿だと知ってはいたが、認識を改める必要がある。

——こいつは、大馬鹿だ。

「皆さーん、席に着いてますかー？最初のS H Rを始めますよー」

ショートホームルーム

壇上に立つ、眼鏡を掛けた副担任が明るい声で話している。己の入学試験の試験官だった女性だ。あの時は歳不相応に幼い外見からは想像も付かないほどの覇気を発していたが、今はそれもなく、己たち

と同年代と言われれば信じるだろう。胸だけは不釣り合いに大きい
が。

名前は、山田真耶と言ったか。

「それでは皆さん、今日から一年間、よろしくお願いしますね」
はにかみながらの、元気な挨拶。それには好感がもてるが、返事は
ない。

残念なことに、現在この教室内の興味は、己の前の大馬鹿者が独占
していた。

「……あ、あの〜……皆さ〜ん……？」

「……………」

「……ええつと……あの、それでは自己紹介をお願いしますっ！出席
番号順で！」

本日教え子になったばかりの生徒達から完全に無視されるという
惨劇もめげず、なんとか流れを作り出そうとする山田先生。流石に今
回は無視されず、生徒達は自己紹介を始めていった。

「あ」から順番にいけば、「いのうえ」の番はすぐに来る。妙な雰囲気
気に冷や汗を流す山田先生に促された己は覚悟を決めて立ち上がり、
教室をぐるりと見回してから言った。

「……井上真改……」

着席。

うむ、どうやら最初の関門は突破したか。

「……………」

「……………」

「……え……ええつと、じゃ、じゃあ、次の人お願いしますっ!!」

全方位から突き刺さる「なんだそれは」という視線をもともせず
沈黙し続ける己に恐れを成したのか、山田先生は次の生徒を指名し
た。

そして一夏の番になったが、なにやら考え事をしているのか、反応
がない。

……ほう、教師からの指示を無視か。己ですら名前(だけ)を名乗っ
たというのに、随分と良い度胸だな。

「うひい!？」

思わず漏れ出た殺気にあてられ、一夏が悲鳴を上げる。その奇行に、教室のあちこちからくすくすという笑い声が聞こえた。

「お、織斑君?ど、どうしたんですか?あつ、も、もしかして、具合が悪いとか……?大変、それじゃあ保健室に!保健委員さん……て、ああつ!まだ決めてませんっ!？」

「いや、あの……えっと、山田先生?大丈夫ですから、体調は悪くないですから、落ち着いてください」

「ほ、本当ですか?大丈夫ですか?無理して我慢してるんじゃないですか?」

山田先生はオロオロしながら、一夏の額に手を伸ばした。その手が前髪に触れる直前に、一夏は慌ててのけぞった。

「うおっ!？」

「……………」

ゴキユツ!

「ぐえっ!？」

その勢いが強過ぎて、後ろの席に座る己の目の前まで後頭部が来た。童顔とはいえ大人の女性に触れられそうになれば、この反応はそれほどおかしいことではない……と思う。少なくとも予想は出来る範囲だ。

なので素早く反応しその頭を支えてやったが、逆効果だったらしい。首から少々嫌な音が鳴った。

……まあ大丈夫だろう、頑丈な奴だからな。

「ぐぬうおおお……………」

「ああつ、織斑君!?!だ、大丈夫ですか!？」

「ぐ…………ええ、ええ、大丈夫です……………」

「けど、首が……………」

「大丈夫ですから!平気ですから!」

山田先生が今度は首に手を伸ばして来たので、同じ轍を踏まないようにか手を振って拒否した。その剣幕に圧され、山田先生はようやく手を引っ込める。

「で、でしたら……あの、自己紹介をお願いします。男の子は織斑君だけですが、あまり緊張しなくていいですよ?」

「……………はい」

……そんなことを言われたら、余計に気にするだけだと思うが。

とにかく一夏は立ち上がり、その場で振り向いた。教室の中央最前列の席に座る一夏は、後ろを向けば教室内の生徒全員を見渡せる。それはつまり、自分に集まる視線を真っ向から受け止めるということであり、その数に僅かに息を飲むのが見て取れた。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる一夏に、続きを期待する視線の十字砲火が浴びせられる。物理的な圧力すら感じさせる視線に気圧されて口を開いた一夏に、皆の期待が一瞬高まった。

——彼女達は知らない。この織斑一夏という男は、己の眼力を持つてしても計りきれない、大馬鹿者であるということ。

「——以上です」

がたたつ、とずっこける音がする。それに、教室の入口を開ける音が混じっていることに気付いた。

見れば、クラスメイトの反応が意外なのか不本意なのか微妙な顔をしている一夏の後ろに、出席簿を振り上げた見慣れた長身の美女の姿が。

——ドグオツ!!

一夏の頭から、凄まじい音がした。その衝撃に覚えがあるのだろう、驚愕と困惑が入り混じった顔でゆっくり振り向いた一夏は——

「りよ、りよ、りよ、呂布だア——ツ!!」

「誰が飛将か、馬鹿者」

ドパアアアアンツツ!!

さつきにも増して凄まじい轟音が響き、一夏が悶絶する。よく割れなかったな。

「まったく、こんなことだろうと思ってはいたが。……山田先生、あなた一人に任せてしまい、すみませんでした」

「あ、いえ、そんな……」

そんな一夏に構わず山田先生と言葉を交わし、壇上に移動したスーツ姿の美女——一夏の姉、織斑千冬は、項の後ろで結んだ長い黒髪を翻し、切れ長の眼に力を込め、威風堂々と話し始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。お前たち新人をこれから三年で使い物になる操縦者に育てる為の基礎を、徹底的に叩き込むのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。分からないことがあれば遠慮なく質問しろ、分からないのに黙っていれば力づくで聞き出す。」

私の役目は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、それ相応の理由と実力、そして覚悟が要ることを理解しておけ。いいな」

まるで暴君のようなその言葉に対する返事は——

「キヤアアアアツ!!千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずっと前からファンなんですっ!」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです!北九州から!」

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて幸せです!」

「お姉様のためなら死ねます!むしろお姉様のために死にたいっ!」

——というわけか、黄色い悲鳴だった。

……千冬さんの人気は知っていたつもりだが、これほどとはな。一夏の真後ろ、つまり教室中央二列目に座る己の背中に、津波のように声が押し寄せる。千冬さんのうんざりした顔も無理からぬと言える。

「……どいつもこいつも。何故私のクラスには馬鹿者ばかりが集まるんだ。ようやく解放されたと思えば、またこれか」

本心から言っているのだろう、千冬さんの顔はかなり嫌そうだった。しかしこれだけ眉間に皺を寄せていながらそれが刻まれることはないというのは、もしかしたら凄いことなのではないか?

「きやあああああつ!お姉様、もっと叱って!罵って!」

「でも時には優しくして!」

「そしてつけあがらないように躡をして〜!」

「……………」

……耳が痛い。

千冬さん相手に怯みもせず盛り上がり続けるクラスメイトに戦慄していると、千冬さんは一夏に視線を向けた。

……うむ、怖い。

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

……己の自己紹介の時に居なくて良かった。一夏よりも酷かったからな。

「いや、千冬姉、俺は——」

ズドオ！

ただの出席簿によるものとは思えぬ一撃。流石千冬さん、腕は衰えていないようだ。

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

「……はい、織斑先生」

その遣り取りで、二人の関係に気付いたのだろう。教室がにわかになざわついた。

「え……？織斑君つてもしかして、千冬様の弟……？」

「まさか世界で唯一男でISを使えるっていうのも、それが関係してるの……？」

「羨ましいなあ、代わってほしいなあっ」

そうか、己は遠慮したい。何せ千冬さんの私生活を知っているからな。

と、そこでチャイムが鳴り響いた。一時間目の授業が始まる直前、己は一夏を見る、もう一人の幼なじみの様子に気付いた。

——随分と、固い気配を放っている。

(……素直になればいいものを……)

どうやら訓練以外にも、やらねばならんことは山積みのようなのである。

「……ちよつといいか」

一時間目の授業が終わり、休み時間になった。私は去年、剣道の全

国大会で約五年半ぶりに再会した幼なじみに、声を掛けた。

「……箒？」

「……………」

呆けた顔で私の名前を呼ぶ幼なじみ——一夏に、自分でもよく分からない苛立ちを感じて睨みつける。

「……出るぞ。人が多い」

その苛立ちを振り払うように歩き出すが、一夏はまだ席で呆けたままだ。

——ふと、一夏のすぐ後ろの席に座る、もう一人の幼なじみと目が合った。

「……………」

「……っ」

彼女は六年前と同じ無表情で、私を促すように、こくりと頷く。

その様子は、私の知る彼女と、まるで変わらないのに。

——たった、一つだけ。

私の記憶と、違ふところが——

「……早くしろっ」

「お、おう」

もう一度一夏に声を掛け、再び歩き出す。私の前にいた女子たちがざあつと左右に分かれる様子にちよつと怯むが、今更後には退けない。唇を噛んで気合いを入れ、再び歩き出す。

しかし連れ出したはいいものの、どうにも切り出せない。訊きたいことがあるのに、言葉にする勇気が出ない。

そうして私が逡巡していると、一夏の方から話し掛けて来た。

「全国大会ぶりだな。元気してたか？箒」

「……ああ、まあな」

去年の全国大会、私と一夏は五年以上の空白を経て再会した。だがその時、私は一夏とまともに向き合うことが出来なかった。

決勝に勝った興奮が冷め始めたころ、私は気付いてしまったのだ。

剣を振るっている間に私が感じていた高揚は、剣士として強敵と戦える喜びでも、部活動に励む少女として仲間の声援に応えたいという

願いでもなく――

――ただ、暴力に酔っていたのだと。

愕然とした。なんて、浅ましい。

それは人として、最も恥ずべき行為だと思っていたのに。

自分のあまりにも醜い本性に気付き呆然としていた時、男子の部の決勝開始のアナウンスが聞こえ、決勝に進出した二人の内の一方が、懐かしい名前であることに気付いた。

白熱する声援に誘われるように、ふらふらと決勝戦の試合場が見える観客席に行く。

五年以上会っていないなくても、面を着けていても分かった。

――あそこにいるのは、一夏だ。

昔と変わらず、強く在り続けていてくれたことを嬉しく思った。しかしそれも束の間、一夏の戦いぶりを見て、すぐに気付いてしまった。

――一夏の剣は、綺麗だ。

技術の問題ではない。真っ直ぐで、とても強い信念を感じさせる、私が理想とする剣士の姿が、そこには在った。私の剣など、一夏の剣とは比べるべくもない。

一夏は見事勝利を収め、対戦相手と健闘を称え合う握手を交わし、表彰台に立った。そんな一夏と並んで立つことに強い罪悪感を感じ、私は一夏をまともに見ることが出来なかった。表彰式が終わるまでじっと立っていることさえ、その時の私には拷問のような苦痛だった。

結局、ろくな会話もせずに一夏と別れた。

あの日のことは、私の心に、深い傷として残った。

あれから半年、とある理由から政府によりIS学園に強制的に入学させられ、再び一夏と出会ったことは、まるで自分の罪を突き付けられているような気持ちを私に与えた。

本当なら、こうして向かい合っていることも辛いくらいなのだ。それでも一夏を連れ出したのは、どうしても訊きたいことがあったから。

深呼吸を一つ。意を決して、その問いを口にする。

「……真改の、ことなんだが——」

——キーンコーンカーンコーン——

休み時間終了のチャイム。ようやく訊けたのに、という思いよりも、安堵のほうが強かった。

——なぜならば。

私の言葉を聞いた一夏が、ひどく、辛そうな顔をしたから——

休み時間が終わり、二人の幼なじみが帰ってきた。どちらも、なにやら顔色が優れない。

(……ふむ……?)

廊下でどんな会話があったのかは分からないが、あまり良い内容ではなかったようだ。

(……ままならん、な……)

どうやら行く道は前途多難なようだが、あの二人に関して己の出来ることなど高が知れている。己は、己にやれることをやるだけだ。

今とはとにかく、二時間目である。予習は綿密に行っているが、己の頭はあまりよろしくない。授業を聞き逃すわけには行かないのだ。

前を見れば、一夏も必死に授業内容をノートに取っている。ISについての基礎理論を記した、膨大な量の参考書。その内容をIS学園入学が決まってからたったの一週間で理解するのは流石に無理だったようだが、それでも食らいついている一夏の様子に感心する。

この調子ならば、大丈夫だろう。

「織斑君、何か分からないところがありますか?」

そんな一夏のやる気を見て取ったのか、山田先生からの質問。

「あ、えっと……」

それを受け、書き込んだばかりのノートを見直す一夏。頭の中を整理するためだろう。

数秒して、

「……大丈夫、です、多分。分からなくなったら、後で改めて訊きます」

「……分かりました、その時は遠慮なく訊いてくださいね！私は先生ですからっ!!」

嬉しそうに胸を張る山田先生。一夏の予想以上に真面目な様子に、感心しつつ喜んでいようである。

「それでは、次は——」

——そして、休み時間。ノートのまとめと復習に一生懸命な一夏の席に、鮮やかな金髪縦ロールの少女が近付いていく。

「……あなた。ちよつとよろしくて?」

「……うん?」

突然声を掛けられて呆けた声と顔の一夏に対し、金髪縦ロールは高飛車に話し続ける。

「聞いてます?お返事は?」

「聞いてるけど……何か用か?」

「まあ!?なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

「……………」

啞然とする一夏。己も呆然としている。

ISが開発されてから、その絶大な性能と女性にしか動かせないという特殊性から、女性の立場は異常なほど急激に向上した。

IS操縦者が世界の軍事バランスの要であることは確かだが、だからと言ってすべての女性が偉いわけではない。ないのだが、そういう考えが今の世では常識になっており、女というだけで男を奴隷のように扱う者も多い。

その歪みを一夏は嫌っており、まさにその典型とも言える態度の少女に対し、良い感情を持たないのは当然と言える。

……しかしどうも、この少女の様子は、それとは少々違っているようにも感じる。気のせいかもしれないが。

「そんなこと言われてもな。俺、君のこと知らないし」

「まあ！わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試主席の、このわたくしを！」

「おう、知らん。あんまり他人に構う余裕がなくってな」

代表候補生とは、国家を代表するIS操縦者、その候補として選出される、所謂エリートである。だが所詮は候補であり、実際に国家代表になれるかはまた別の話だ。そんな候補生、しかも他国の者の名前までいちいち覚えるというのは、些か無理がある。

それに一夏自身も言った通り、先の集中は余裕の無さの現れでもある。他人を知るよりも、自らを高めることに必死なのだ。

……しかし、それにしても――

(……国家、か……)

——その国家の悉くを解体し尽くした二十六人の一人である「彼女」が聞いたなら、なんと言うだろうか。

鼻で笑う――ことは、しないだろう。むしろ心から喜びそうだ。それに見合う実力があれば、の話ではあるが。

「ふん、IS開発者の国だから期待していましたが……それはただの例外、他は所詮、極東の島国ですわね。このわたくしのことさえ知らないだなんて。本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのです。その現実を、少しは理解していただけませんか？」

「へえ、それはミラクル……ラッキーだな」

「……馬鹿にしていますの？」

一夏はまともに相手をする気はほとんどないようだ。セシリアという少女も、言いたい事だけ言っている。

平行線と言うか噛み合わないと言うか、互いに会話をしようという気がないのだ。

「ISのことで分からないことがあれば、まあ……礼を尽くすのでしたら、教えて差し上げててもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒した、エリート中のエリートなのですから」

……ほう、倒したのか。相手が山田先生、若しくはそれと同等の遣い手だとしたら、この少女も相当な実力者だということになる。国家

代表候補生の名は伊達ではない、か。

「入試って、あれか？ I Sを動かして戦う？」

「それ以外にありませんか？ まあ確かに、ペーパーテストもそれを作った者との戦いと言えるでしょうが」

「……ん？ 唯一？ おかしいな、俺も倒したぞ、教官」

「……は？」

セシリアと己の驚きの声が重なる。幸い、己の声は誰にも聞こえた様子はないが……しかしこいつ、勝ったのか。

……むう……

「か、勝ったと言うの？ あなたが？」

「少なくとも、最後に立ってたのは俺の方だった」

「そんな……確かに、わたくしだけと聞いていたのに……！」

「まあ、俺は正式に試験受けたわけじゃないし、カウントされてなかったんじゃないか？」

「くううう……!!」

「……何をそんなに睨んでるんだよ」

少女の奥歯を噛み締める音がここまで聞こえて来る。自分が唯一の勝者でないことがよほど悔しいらしい。

「えーと、落ち着けよ。な？」

「な、なんなんですか、その余裕の態度——」キーンコーンコーン「くうっ……」

三時間目開始の鐘が鳴り響いた。三時間目は千冬さんの授業だ、彼女が入って来た時に席に着いていなかったらどうなるか、火を見るより明らかである。たとえ納得出来ていなくとも、今は引き下がるしかないまい。

「あなたっ！ 覚えてらっしゃい、後で詳しく聞かせていただきますからね！」

セシリアはまるで三下が逃げる時のような台詞を残して席に戻って行った。しかしその動作や歩き方は優雅なもので、なんともちぐはぐだ。

そしてセシリアの着席から数秒して、千冬さんが教室に入ってきて来

た。

「全員、席に着いているな。それではこの時間は、実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

いきなり授業に入る千冬さん。山田先生はノートを持ち、メモを取る態勢だ。豊富な知識と経験がありながら勉強を怠らないその姿勢は素晴らしい。

「だがその前に、クラス代表者を決めなければならん。立候補する者、あるいは推薦する者は挙手しろ」

クラス代表者とは、分かり易く言えばクラス長である。生徒会の会議や委員会への出席などが主な仕事だ。

それと、来月行われるクラス対抗戦。これは各クラス代表者たちがISで戦うというものだが、己たちはまだ初心者だ。大したレベルの試合は出来まい。

そもそも優劣を付ける為のものではなく、今後の指標とするため新入生の才能や資質を計る為のものだ。実戦経験は積めるだろうが、それ以外に得るものはあるまい。そして己が会議に参加するのは無理があるので、他の者に押し付けるとしよう。

そんなことを思っていると、

「はい、織斑くんを推薦しますー!」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか? 自薦他薦は問わないぞ」

「……へ?」

一瞬呆けた声を出し、それから数秒して、一夏が立ち上がった。

「お、俺?! え、なんで?!」

「織斑。席に着け、邪魔だ。……さて、他にはいないのか? いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った! なんなんだ、一体何がどうなってるんだ!?!」

「お前は推薦された。それは期待されているということだ。期待には応える義務がある、よつてお前に拒否権はない。選ばれた以上は覚悟

をしろ」

「それってかなり無茶苦茶じゃないか……ですよね!？」

「ああそうだ。期待するということは、相手にその重みを背負わせるということだ。期待する側にもそれ相応の責任があるということ、当然理解したうえでのおすすめだろう」

「……………え?」

「当然、理解、している、だろう?」

「は、はいっ!!」

なるほど、これから先も男だからというだけで面白がつて、色々押し付けさせない為か。一夏の為にも、他のクラスメイトの為にもならないからな。

千冬さんは教室を見渡し、もう気軽に他者を推薦する者がいないことを確認した。

「……………さて、どうやらこれ以上手が挙がることはなさそうだな。では——」

「待つてください!納得がいきませんわ!」

バンツ!と机を叩く音。振り向くと、そこにはセシリア・オルコツトの姿が。

「そのような選出は認められません!一人だけの男だからというただの興味本位で、こんな素人がクラス代表ですって!?!そんなことが許される筈はありません!クラス代表とはクラスで最も優れた者が成るべきですっ!!」

自己顕示欲の強そうなこの娘が今まで黙っていたのを、少なからず疑問に思っていたが。口振りからすると、自薦によりクラス代表者に成るのではなく、他薦により認められた結果としてのクラス代表者に成りたかつたらしい。

しかしセシリアが思っていた以上に、世界で唯一ISを動かせる男というのは興味を惹くようだ。

「わたくしはイギリスの国家代表候補生。クラス代表になるのは当然ですわ!エリートだけが入学を許されるこのIS学園において、ただの物珍しさだけでクラス代表が選ばれるだなんてあつてはなりません」

ん！能力から考えれば、クラス代表はこのセシリア・オルコットを置いて他にありませんわ！」

それなりに筋の通った理屈ではあるが、それにしても随分と自信がある。エリートであることは確かだろうが、まだ誰も、セシリアの実力を目にしてはいないのだ。些か説得力に欠けると言わざるを得まい。

「わたくしはISの技術を磨くために、こんな極東の島国まで来たのです！あなた方のように遊ぶためではありません！」

そして自信とは、それに見合う実力がなければマイナスにしかならない。それは実力を知らぬ者から見た場合の印象も同じだ。

分かりやすい例としては、己の目の前で肩を震わせている少年か。「男がクラス代表など、それではサーカスと同じですわ！見せ掛けだけの代表になんの価値があると言うのです!?!何より、そんなハリボテに劣ると思われるだなんて辱めを——」

「——能書きばっかだな、さつきから。実は大したことないんじゃないのか？」

「なっ……!?!」
そしていよいよ、我慢の限界を超えたらしい。存外柔な忍耐だったな。

「百聞は一見に如かず。そんなに自信があるなら、実際に見せるのが手っ取り早いだろ」

「……何が言いたいのですか？」

「クラス代表つてのには興味ないけどさ。知らない奴にそうやってデカイ顔されるのは、なんか癩だ」

「癩？癩ですって？それはわたくしのセリフですわ、まさかこのわたしに向かって、「顔が大きい」だなんてっ!!」

「……」

教室が沈黙する。このクラスの心は早くも一つになった。

即ち、「そこかよ」と。

「……まあとにかく、俺が言いたいのは、さ。口でいくら言っただけからないんだから、お前の実力つてのを見せてみるよ。そうすりゃ全

員納得するだろ」

「ええ、良いでしょうとも。あなた如きに見せるのは、少々もつたいないですが——上下関係はハッキリさせておいた方が、後々のためですからね」

つまりは二人とも、戦う理由は同じというわけだ。

——気に入らない。なんとも子供じみた理由ではあるが、だからこそ純粹だと言える。

ああ、そうだ。何も命の取り合いをしようと言うのではない。「喧嘩」の理由など、くだらないくらいが丁度良い。

「ではこうしよう。織斑とオルコットで勝負をし、勝った方をこの一年一組の代表とする。時間は来週の月曜の放課後、場所は第三アリーナだ。各々、準備しておけよ」

千冬さんのまとめに、二人は同時に頷いた。既に戦意は十分らしい。

「それで、イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットに無謀にも挑む無知な極東のお猿さんには、どれくらいのハンデを差上げればいいのかしら？」

「そんなもんいるか。お互い全力でやってこそ、勝つてことは意味があるんだ」

嘲笑を浮かべるセシリアを、一夏は真っ直ぐに睨み付ける。そんな二人の様子を眺めていた千冬さんは、ふと何かを考えるような仕草を見せた。

「ふむ、ならば丁度良いかもしれんな。井上」

「……？」

突然名前を呼ばれた。今の話の流れに、己の名が出てくるような所はなかったように思うが。

「先ほど連絡があつたんだが、お前の入試を見た如月重工の社長が、お前に興味を持ったそうだ」

「え？如月重工って、あの如月重工ですか!？」

「お前の言う如月重工がどの如月重工かは知らんが、おそらくその如月重工だ」

「……………」

驚愕の表情で問を発した生徒に、顔をしかめながら答える千冬さん。

如月重工とは、元技術者の人物が社長を務める、日本では倉持技研と双壁をなすIS開発企業だ。極めて高い技術力を誇り、如月重工製のパーツはどれも高い性能を誇るが、クセが強すぎてまともに扱えないようなイロモノが多い。

勤務する技術者は、社長を筆頭にマッドと頭に付く連中ばかりで、所謂変態企業として世界にその（悪）名を轟かせている。

……なにやら少々、嫌な予感がする。

「現在如月重工で開発中の第三世代型ISを、データ収集のためにお前に使って欲しいそうさ。つまりはテストパイロットだな」

「……………」

——テストパイロット、か。妙な縁だ。

「そこで、お前用に機体を調整するために、お前の戦闘データが要る。打鉄で構わないから、一度戦って欲しい、というのが先方からの要求だ。テストパイロットを引き受けてくれるのならば、交換条件として、その間その新型ISをお前の専用機として使っていいと言っている。どうする？」

「……………」

正直、それは願ってもない条件だ。専用機と量産機では性能がまるで違うし、機体を量子化することで常に身に付け、いつでも起動できる。無論法律や規則による制約はあるが、有事の際に即応できるのは極めて大きい。先方が如月重工ということに多少の不安がないでもないが、それでも己は躊躇うことなく領いた。

「決まりだな。先方には私から伝えておく。データ収集のための戦闘は三日後の木曜、時間と場所はさつきと同じだ。相手は……オルコツト、それもついでにお前がやれ」

「ええ!?しかし織斑先生、わたくしは——」

「……………」

「出来ないか?相手はISの操縦は初心者だぞ。インテバルも三日

間ある。それくらいのことでもこなせないで、国家代表を名乗るつもりか？」

「う……分かりましたわ」

「……………」

「ふん！ならそのお猿さんとの決闘の前哨戦ですわね。せいぜい逃げないで——」

「……………」

「ええと……あなた、聞いてます？」

「……………」

こくりと頷いて、右手を出す。

「…………井上真改…………」

己の名前くらいは知っているだろうが、改めて名乗った。こちらの事情に付き合ってもらうのだ、礼は尽くさねばなるまい。

「…………感謝する…………」

「ふ、ふん！そんなことをしても、当日は容赦しませんわよ！」

「……………」

なにやらそっぽを向いて言うセシリアに、黙って右手を差し出し続ける。

「……………」

「う……せ、セシリア・オルコットですわ」

「……………」

根負けしたのか、己の右手をとり、握手をするセシリア。その手は小さく指は細く、少女らしい柔らかさがある。

……不思議なものだな、身のこなしには確かに、戦う者特有の鋭さがあるというのに。

「……………」

「や、やりづらいですわね…………」

かくして、一夏の前に己がセシリアと戦うことになった。いきなり波乱の幕開けだが、この好機を物にしない手はない。

セシリアの実力と機体がどれほどのものかは分からないが、己はただ、寄って斬るだけだ。

精々一週間後の一夏の初戦のため、参考くらいにはなれるような戦いをしなくてはな。

第5話 再会

昼休みになると、一夏が気楽な声を掛けて来た。

「なあシン、飯行こうぜ」

「……………」

——ざわ。ざわざわ——

教室中の視線が、今度は己に集まった。なんだこの圧力は、冷や汗が出てきたぞ。

「井上さんって、織斑君と知り合いなの…………？」

「今織斑君、井上さんのこと渾名で呼んだよね…………？」

「それに井上さん、如月重工の社長にスカウトされたって…………」

「入試で興味持ったって言ってたよね…………？」

「どんなことしたんだろう…………？」

「私も欲しいなあ、専用機…………！」

…………まずい、このままでは己の平穏な学園生活がっ。

「箒も一緒に…………て、あれ？ いない？」

「……………」

箒なら昼休みになって早々に出て行ったぞ。お前が己に話し掛けている内にな。

「しようがない、二人で行くか」

「……………」

促され、席を立つ。どうせ飯は食いに行かなければならないのだ、腹をくくろう。

数分歩き、食堂に移る。己たちの後ろから付いて来た少女たちは努めて無視。

カウンターに行き、先ほど買った食券を係の女性に手渡した。一夏は和食セット、己は日替わり定食である。

「いただきます」

「…………いただきます…………」

「もぐもぐ…………おお、美味しい。流石にデカイだけあるなあ」

「……………」

確かに中々の味だが、それをじっくり味わう余裕はない。己には今、八方から好奇の視線が浴びせられているからだ。

それらに込められている想いは、誰に問わずともわかる。「あの子織斑君とどういう関係？」だ。

分からなくもない。IS学園は本来女子校であり、IS学園に入学するのはIS関連の授業を科目として取り入れている女子校の出身者が多いので、ほとんど関わったことのない男という生き物に興味があるのだろう。そして、その男と一緒に食事している少女にも。

「しかし、セシリア・オルコットか。代表候補生ってあれだろ、モンド・グロツソの出場権を競ってるエリートだろ？ 強いんだろうなあ、やっぱ」

「……………」

己を生贄に捧げることで視線の猛攻から逃れることに成功した一夏は、平常心を取り戻していた。

己にそんな話をするのは、初の戦闘の相手が強敵である不安からか、それともその強敵と戦うことになった己を心配しているのか。この少年のことだ、おそらく後者だろう。

「けどやっぱ、シンはすごいな。入学早々専用機貰えるなんてさ。如月重工ってのは知らないけど。お前、入試で何したんだよ」

「……………」

何もしていない。己よりもお前の方がやらかしているだろう、入試の試験会場を間違えるという大馬鹿を。

「(ちそうさまでした」

「……………」

「うし、じゃあ戻るか。午後の授業の予習しないとな……………」

「……………」

己と一夏が席を立つと、それに合わせて周囲も一斉に立ち上がった。そして再び始まる行進。

この異様な光景はいつまで続くのか。早くもうんざりしてきたんだが。

(……………やれやれ……………)

そして放課後。忘れないうちに復習とノートまとめをしよう
一夏を残し、教室を出る。はて、寮の己の部屋は何号室だったかと考
えていると、深刻そうな表情で己を見詰める幼なじみが立っていた。

「……真改」

「……………」

——篠ノ之箒。六年前まで己と一夏が通っていた剣術道場兼神社
の娘で、ISの開発者である篠ノ之束の実妹である。

その姿は、己の記憶の中にあるそれよりも背が伸びたくらいで、ほ
とんど変わらない。気の強そうなつり目も、下ろせば腰まであるだろ
う黒髪も、その髪を後頭部で纏めるリボンも。

だが、その身に纏う雰囲気は——以前よりも、さらに固くなってい
る。

「……訊きたいことが、ある」

「……………」

何を訊かれるか、予想はついていた。

特に反応もせずにいる己に、躊躇いがちに、箒は言葉を紡ぐ。

「お前の——左腕の、ことなんだが」

「……………」

やはり、か。

己が左腕を失ったのは、三年前のことだ。箒と最後に会ったのはそ
の数年前のことであるから、そのことを箒が知る筈はない。去年箒と
会った一夏が軽々しく話すとも思えない。

「初めは一夏に訊こうとした。だが訊けなかった。お前の名前を出し
た途端、一夏が辛そうな顔をしたからだ」

「……………」

「左腕をなくした」と、一夏は関係しているのか？」

箒が詰め寄ってくるが、理由は話せない。このことには己だけでな

く、一夏も、千冬さんも関係している。己と箒、二人だけのこの状況で話す訳にはいかない。

——だから、心情だけを口にした。

「……悔いてはいない……」

己の言葉を聞いた箒は、俯いた。

その肩が、声が、震えているのがわかる。

「……なぜだ」

「……」

「なぜお前は、そんなことを言えるんだ」

「……」

箒が顔を上げ、睨むように己を見る。

けれどその眼には、涙が溜まっていて。

「だって、お前は……!」

叫ぶように。

血を吐くように。

絞り出すように、箒は言う。

「お前は、あんなに……!」

堪えきれなくなった涙が、頬を伝い。

「どうして……そんなに簡単に、諦められるんだっ!!」

「……」

——それは、慟哭だった。悲鳴のような、声だった。

昔、己たち三人が、共に剣術を学んでいた時。箒は、己の剣を「綺

麗だ」と言ってくれた。

その己が左腕を失ったことは、箒にとつても辛いのだろう。そこまで己のことを想ってくれていることが嬉しくもあり、同時に心苦しくもあつた。

「……済まない……」

「何で、お前が謝るんだっ……!」

「……」

涙を流し続ける箒に、己はどうすればいいのか。

「う、く……ぐす……」

「……………」

箒を見詰めて、かつて一夏に語ったものと、同じ言葉を紡ぐ。

一夏も箒も、今はこの場にいないもう一人も。

己の大事な、幼なじみだ。

己の想いだけは、知っておいて欲しい。

「……一夏は、一人……」

「……う？」

未練はある。己の目指す境地、そこに至るまでの道がより長く険しくなったことは、否定出来ない。

「……腕は、二本……」

「……っ！」

だが、後悔はない。道は歩けば前に進めるが、失ったものは、二度と戻っては来ないのだから。

だから――

「……惜しくはない……」

――それは、紛れもない本心だ。

「……う、ううう、うええ……うあああああ……!!」

ついに箒は、泣き出してしまった。そっと近付き、震える肩に、出来るだけ優しく手を置いた。

これでも、孤児院の年長者だ。泣き止まない子供の世話は、慣れている。

だから己は、ただ黙って、泣き続ける箒のことを抱き締めた。

「しん、かわいいいつ……!!」

「……済まない……」

幼子のようにしゃくりあげる箒と、それを慰める己との抱擁は――

「……何してんだよ？」

「うわあああああああ……!!」

――教室から出てきた一夏が、空気を読まずに声を掛けてくるまで続いた。

所変わって、IS学園学生寮。

一夏は帰っていった。女子校であるIS学園は学生寮も当然女子寮であり、一夏はしばらく自宅から学園に通うことになっている。色々と不便なのでいずれは部屋の都合をつけるだろうが、今日明日のことではないだろう。

(……だが、何故か嫌な予感がする……)

多分気のせいだ。そうに違いない。

「その……さつきはすまなかつたな、取り乱して……ショックだったんだ。お前の剣は、私の、憧れだから」

「……………」

少し恥ずかしそうに言う箒。己の剣などまだまだ「彼女」には遠く及ばないが、それでも「彼女」を目指して鍛錬を積み重ね、昔より強くなった。

誰かに憧れ、その背中に追い付きたいという想いは、人を大きく成長させる。ならば前を往く者の務めとは謙遜することではなく、高く分厚い壁として在り続けるために、精進を欠かさぬことだろう。

「……箒……」

「うん？」

僅かだが、箒が目を見開いた。何故己から自発的に話すと皆驚いたような顔をするのだ。いずれ問い質す必要があるな。

「……誇りに思う……」

「そ、そうか。そう言ってもらえると、私も嬉しい」

感謝の言葉と分かったようで、照れたように笑う箒。随分長い間会っていなかったが、どうやら絆はいまだ健在のようである。よりである。

「……ここがお前の部屋か？」

「……………」

己に振り分けられた寮の部屋に着いた。寮は二人部屋なので、己にもルームメイトがいるわけだが、そいつには同情する。己のような無口な者と生活しては楽しくないだろう。

箒のように気心の知れた相手ならば、また違ったかもしれないが。「私の部屋は1025号室だ。お前さえよければ、いつでも訪ねて来てくれ。……じゃあ、また明日」

「……………」
思い切り泣いてすっきりしたのか、箒の心も少しは晴れたようである。小さな笑みを浮かべてから立ち去る箒を見送り、己は今日から住むことになった自室の扉を開けた。

「……………」
——広い。テレビでしか見たことはないが、それなりに高級なホテルの部屋がこれくらいだったような気がする。流石はIS学園、世界中からエリートを集めているだけあって、こんな所にも金がかかっている。

「……………」
己のルームメイトはまだ来ていないようだ。さっさと挨拶を済ませたかったが、仕方ない。先に荷物を整理してしまおう。

己は部屋の隅にある、予め送っておいだ「井上真改」と書かれたダンボール箱を開け、中の荷物を取り出す。

量は少ない。服はジャージと部屋着の他、外出用の私服が数着。妹たちは己にやたらと色々な服を着せたがるので、気付かれる前に準備した。その後かなりふてくされていたが。

その他細々とした生活用品に、木刀二振りと大きな鉢植えが一つ。鉢植えは嚴重に梱包したおかげか土がこぼれた様子はなく、花——真つ白なパンジーも無事だ。

花壇は弟妹たちに任せてきた。普段からよく一緒に世話をしているので、己が居なくとも大丈夫だろう。

荷物をしまつて鉢植えをベランダの日当たりが良さそうな所に置き、さてダンボール箱を畳むか、というところで扉が開いた。

入って来たのは、寸法、特に袖の長さが合っていないぶかぶかの制服を着た少女。赤みがかつた茶髪を背中まで伸ばし、頭の両横で一房ずつ、何かのキャラクターのような髪留めで纏めている。確かツィサイドアップという髪型だったか。

少女は眠たそうな半開きの眼で、キョロキョロ——と言うには些か
緩慢に過ぎる仕草で部屋内を見回すと、

「おう、広い。ホテルみたいだね」

「……………」

「あ、ルームメイトのひとつ？わたしはね、布のほとけほんね仏本音つていうんだ
。よろしく」

…………やけに間延びした話し方をする娘だ。なんというか、彼女だけ
時間の流れが違う気がする。

「…………井上真改…………」

「知ってるよ、すごいよね。いのちのことは、もう有名になっ
てるよ。学園中が知ってるんじゃないかな、如月重工にスカウト
されたって」

「……………」

己は戦慄した。

一つ。もうそこまで知れ渡っているのか、いくらなんでも早すぎる
だろう。

二つ。この娘、己の左腕をまったく気にしていない。視線や意識
が、そちらに向いていないのだ。

そして三つ。「いのち」って何だ。

「すごいなあ、もう専用機貰えるなんて。いのちって、なにか
やってるの？」

「…………剣術…………」

「おお、かっくいなく。うんうん、確かにいのちって、そんな感
じだね」

「……………」

初めて会う人種に戸惑う。そのせいで、いつの間にか己の呼び名が
いのちで定着することに突っ込めなかった。

「なんていうか、侍とか、武士とか？そんな感じ」

「……………」

に入ら。

「いのちと同じ部屋だなんて、ラッキーだなく、わたし。ね、ね、

いのっち、入試でなにをしたの〜？」

「……戦った……」

「う〜ん、もつと具体的に〜」

「……斬った……」

「もつと詳しく〜」

「……寄って、斬った……」

「もつと微に入り細を穿って〜」

「……避けて、寄って、斬った……」

左腕がなく、極めて無口な己に話し掛けてくる者など中学校にはほとんどいなかったが、本音は馴れ馴れしいくらいに気安く話し続ける。

不思議なのは、それに付き合うことが不快ではないことだ。

己が要領の得ない答えを返すたび、本音は楽しそうに笑い、すぐに次の質問をしてくる。どれも他愛のない、正しく雑談である内容。己とそんな会話をするのは、幼なじみくらいのものだったが。

（……不思議な娘だ……）

己との会話の何がそんなに面白いのかは分からないが、はしやぐ本音の姿は見ていて飽きない。

（……幸運だったのは、己もか……）

まあ、本音が何を考えているのかは分からないが。

とりあえず、仲良くやっていけそうだ。

「……布仏……」

「んん？なにになに、いのっち？わたしのことは〜、本音でいいよ〜？」

「……本音……」

「……これから、よろしく……」

第6話 旧交

朝。普段と変わらぬ時間に起き、鍛錬のためにグラウンドに出ると、そこには先客が二人居た。

内一人はいい。己の幼なじみであり昨年の剣道大会で全国優勝した、篠ノ之箒。彼女は努力家だ、全国大会優勝という成績が才能に頼ったものなどではなく、たゆまぬ鍛錬によりそこに辿り着いたことは間違いない。たとえ入学の翌日からでも、こうして早朝の鍛錬を欠かすことはないだろう。

問題は、もう一人。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

見て分かるほどに特大のタンコブを頭のこさえた少年、織斑一夏である。

「……………おはよう、シン」

「……………」

「……………そんな目で見るなよ……………」

「……………」

——さて。こんな時間からこうしてここに居る。まさか自宅から来たわけではあるまい。ならばこのIS学園の寮に泊まったということだ。

この、IS学園の寮の、いずれかの部屋に。

「……………おはよう、真改」

「……………」

「そ、そんな目で見るなっ、確かに一夏を殴ったのは私だが、それには相応の理由がある!」

「……………」

己の記憶では、寮には現在、使える空き部屋はない。年々増えつつある生徒数に対応するため、寮の増築や新しい寮の建設をしているそ

うだが、それらが完成するのはもうしばらく先の予定だ。

今の部屋数に余裕はない。一夏のために部屋を割くことは厳しいだろう。

別に倉庫の隅にでも押し込めておけば良いとは思うが、一夏は世界に一人だけの、ISを動かせる男だ。その希少価値からすれば、あまりぞんざいな扱いはしたくない……かもしれない。

「……………」

「だ、だからそんな目で見るなって！ 俺だって昨日いきなり言われたんだ、好きで箒と同部屋になったんじゃない！」

「な、なにい!? 一夏、それはどういう意味だっ!？」

「うおおおっ!?! ちょ、やめろ、木刀を振り回すなよ危ないだろっ!?!」

「……………」

学園、そして世界中のIS研究機関からすれば、一夏を失うことはなんとしても避けなければならない。自宅から学園に通わせるなど危険なだけで、利点は少ない。ならば無理矢理にでも、寮に入れてしまった方が良く。

……と、己なりに経緯を想像してはみたが。たとえこれが正解だとしても——

「だ、大体お前は！ 男女が同じ部屋で生活するというのは、デリカシーがなさ過ぎるのだっ!?!」

「同じ部屋って……昔は道場の合宿とかで、似たようなこととしてたどろ」

「いつの話をしているんだっ!？」

「……………」

百歩譲って一人部屋が用意出来なかったのだとしても、選りに選って箒と同部屋か。部屋の都合が付くまで、一夏の命があればいいがな。

「そんなことよりも、早く始めようぜ。時間がもったいな——」

「そそそ、そんなこととはなんだア—っ!?!」

「ああもう、何をそんなに怒ってるんだよっ!?! わけわかんねえぞ！」

「う、うるさいうるさいうるさあ—いっ!?!」

「……………はあ……………」

なおも言い合いを続ける二人に、思わず溜め息が漏れた。まったく、朝早くから元気なことだ。

なんとか無事に鍛錬を終え、己は食堂で朝食を取っていた。一夏、箒とも合流し、それぞれの朝食を載せた盆を手に、席に着く。

「これうまいな」

「……………」

「……………」

たくあんをポリポリと噛み飲み込んでから、一夏が呟く。このたくあんが旨いというその言葉には全面的に賛成だが、十五歳の少年としてその嗜好はどうなんだ。他に旨いモノはいくらでもあるだろう、このIS学園には。

「すごいな。スーパーには置いてないぞ、こんなたくあん。これ一切れだけでご飯三杯はイケる」

「……………」

「……………」

そんな年齢不相応なことをしみじみと言うのは構わんが、己としてはたくあんの感想よりも頭のタンコブについての説明が聞きたいところだ。大体想像はつくがな。

……大方、予想外の事態でも起きたのだろう。箒の裸体を拝むことになったとか、箒の下着を手にするようになったとか、箒に対し失礼な言動が言動があったとか。そんな馬鹿なと思うなかれ、この少年ならば有り得ることなのだ。

そんな風に、昨夜何があったのかを考察していると――

「お、織斑くん、隣いいかなっ?」

「へ?」

突然、三人の女子が声を掛けてきた。

「ああ……別にいいけど」

少々呆気にとられながらも肯定の返事をする一夏。箒が更に不機嫌な顔になった。無論一夏は気付かないが。

「織斑くんって、篠ノ之さんと井上さんと仲がいいの？」

「篠ノ之さんと同じ部屋だつて聞いたけど……」

「井上さんとは、昨日も一緒にご飯食べてたよね」

「ああ、まあ、二人とも幼なじみだし」

一夏が言った瞬間、周囲から驚きの声が聞こえた。

……かなり遠くからも聞こえたぞ。どれだけ聞き耳を立てているんだ。

「幼なじみ？ それって——」

「何をちんたらやっている！ 無駄な時間をかけるな、HRに遅刻した者はグラウンドを十周させるぞ!!」

IS学園のグラウンドは一周五キロ、十周で五十キロ。走れないわけではないが、走っている内に二時間目の授業が終わってしまう。それは避けたいところだ。

……仕方ない、日替わり定食をもう少しじっくり味わいたかったが、そうも言っていられないようだ。明日からは時間配分を考えることにしよう。

「皆さんもご存知だと思いますが、ISは宇宙での作業を想定して作られています。宇宙空間には空気がありませんから、宇宙服だとほんのちよつとの穴が開いただけでも致命的です。なのにISは見ての通り、装甲で全身を覆っているわけではありません。そうすると動きにくくなってしまうからです。

そこでISは、操縦者の全身を装甲ではなく特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。これが皮膚スキン装甲バリアーです。操縦者の動きを制限することなく、宇宙デゴミが当たってもシールドエネルギーがある限り決して穴が開くことのない、理想的な宇宙服ですね」

宇宙ゴミとは、空気のない、理想的な宇宙で無限に加速した金属片など

のことで、人類の宇宙進出において大きな障害だ。巨大な宇宙船が、宇宙ゴミとなったネジ一つで破壊されることすらあるのだ。そして爆散した宇宙船がさらに大量の宇宙ゴミとなり、その宇宙ゴミがさらに宇宙ゴミを増やし——あつと言う間に、地球の周辺は埋め尽くされるだろう。

……これもまた、人類の負の遺産、か。

ともかく、その宇宙ゴミをものともせず宇宙ゴミを増やすこともないISは、宇宙服としてまさに理想的といえる。そして同時に、戦闘服としても。

「先生、その皮膜装甲なんですけど、本当に大丈夫なんですか？ 入試でISに乗った時は、そんなのがある感じはなかったんですけど……」

「ああなるほど。確かに、頑丈な服だと知ってはいても、「そこにある」という実感が無いと不安になりますよね。うくん……そうですね。例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。良いブラジャーほど、身に着けている感覚は小さいものです。つまり身に着けている感覚がない皮膜装甲は、最高級のブラジャーをさらに上回るものだということで——」

そこで、山田先生と一夏の目があった。途端に赤くなる山田先生。「え、えつと、いや、その、織斑君はしていますよね。わ、わからないですね、この例え。」

あは、あははは……」

「そ、そうですね。ちよつと分かりにくいかな、あは、あははは……」
「……………」

ちなみに己もわからん。サラシ派だからな。片腕だけで巻くのは初めは大変だったが、慣れてしまえばどうということはない。

クラスに唯一の男子生徒を意識してか、女子たちが微妙な雰囲気を出し始める。

「んんっ！ 山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！ すいません！」

このままでは授業が進まないと察してか、千冬さんが咳払いで再開

を促す。次いでギロリと教室を見回すと、生徒たちは先のことを忘れて授業へと意識を向けた。

「そ、それともう一つ大事なことは、I S、正確にはそのコアには、意識のようなものがあります。操縦者がそのI Sのことを理解しているにつれ、I Sも操縦者のクセや考え方、気持ちなどを理解してくれるんです」

——ほう。

「どんな競技でも、チームワークはとても重要です。そしてチームワークで重要なのは、チーム全体が分かり合い、一つになることです。そしてI Sもそのチームの一員であり、皆さんのパートナーなんです」

——それは、ネクストにはなかった特性だ。

リンクスはA M Sによってネクストと繋がり、自分の体のように操る。ネクストからもリンクスに情報が送られてくるが、それは機体損傷や周囲の状況などであり、ネクスト自体の意志はその中に含まれていない。そもそもそんなものなどないからだ。

ネクストは絶大な破壊をもたらす兵器であり、同時に、どこまで行っても兵器でしかないのだ。

——キーンコーンカーンコーン——

授業終了の鐘。山田先生の説明により己はかつての愛機のことを思い出していたが、他のクラスメイトたちはそうではなかった。「お互いを理解し合うなんて恋人みたい」というズレた発想が生まれ、それについて話が盛り上がった結果一夏にその矛先が向いたのだ。

「織斑君織斑君！」

「ちよつと訊きたいことがあるんだけどさっ！」

「織斑君ってさ、彼女いる？いないよね？やー実は私もいなくなっ！」
なんだこの活力は、一体どこから湧いてくるんだ。

己の目の前の席に座る一夏に押し寄せる女子たちは、続けざまに質問を投げ掛けている。一夏がそれに答える間もなく質問が変わるので、いたずらに時間が過ぎていくだけだ。

が、そこでとある少女が、千冬さんの家での様子について質問をし

た。その質問に、あれほどやかましかった少女たちが一瞬静かになり。

その隙に、それに答えようとした一夏の頭に、出席簿が振り下ろされる。

パアンツ！

「授業の時間だ、席に着け」

「……はい……」

ドスの効いた声に、自分の席に逃げ帰るクラスメイトたち。それを見てから、凄まじい眼力で一夏を見下ろした。

——ヨケイナコトワイウナヨ。

——モチロンデゴザイマス、オネエサマ。

……そんな遣り取りが聞こえた気がしたが、気がしただけだろう。

「ところで織斑。お前の専用機だが、少し待て」

「へ?」

「特別製を用意しているのだが、少々特別にし過ぎたようだ。調整に時間が掛かっている」

「と、特別製? どういう——」

「せ、専用機!? 国家代表候補生でもないのに!」

「やっぱり、世界唯一の男のIS操縦者だから……」

「政府からの支援があるってこと? それにしても、いいなあ、専用機」

自分に、専用機が与えられる。その意味に気付いた、一夏の気配が、変わる。

刃のように、鋭く。

「ふん……とりあえずは、分かっているようだな。ISの中心であるコア、467機しかないそれを与えられるということの意味が。ISコアは、製作者である篠ノ之束以外には造れず、その篠ノ之束も今はコアを造っていない。つまりコアは、これ以上は増えないということだ。世界人口約70億、単純に考えれば女性は35億人。それに対して、僅かに467機。その内の一機を、お前に与える」

「……はっ」

「だがこれは、主にデータ収集を目的としたものだ。世界で唯一、ISを動かせる男。ある意味IS自体よりも希少なこの存在が、他の男とどう違うのか。またその男に対し、ISはどんな反応を示すのか。政府はそれが知りたいだけだ。井上と違い、実力を認められたわけではない。自惚れるなよ」

「……はい、分かっています」

現実の厳しさと汚さを突きつけられた一夏は、それでもまったく怯まなかった。

一夏は大切なものを守るために、強大な「力」を欲している。その「力」が、手に入る。

だが一夏の声にあるのは、喜びではなかった。

——決意だ。与えられた「力」に頼るのではなく、それを振るうに値する強者に成ると、そう新たに誓いを立てた声だ。

今の一夏がどんな顔をしているのか、己の席からは見えない。一夏の横に座る女子の顔が赤いので大体想像が付くが。

「……あの、先生。ISの製作者の篠ノ之束博士って……もしかして、篠ノ之箒さんの関係者ですか？」

「そうだ、篠ノ之箒は篠ノ之束の妹だ」

ちらりと箒を見ると、見るからに不機嫌そうな顔。だがそれに気付かず、教室は途端に騒然となった。

「ええええっ!! 篠ノ之束博士の妹って……それってすごいっ!!」

「ねえねえ篠ノ之さん、篠ノ之博士ってどんな人なの!？」

「篠ノ之さん、篠ノ之博士から何か特別なこととか教えられてるのっ!?! 今度私にも教えてよっ!」

クラスメイトたちが興奮した様子で箒に殺到する。

箒の我慢は、早くも限界を迎えた。

「あの人は関係ないっ!!」

突然の大声。それがまるで悲鳴のように聞こえたのは、己だけだろうか。

「……大声を出してすまない。だが、私とあの人は違う人間だ。ISを造ることなんか出来ないし、ISの秘密を知っているわけでもない」

い」

「「「「「……………」」」」」」

そう言つて、箒は窓の外に顔を向ける。その背中からは、明らかな拒絶の意志が見て取れる。

流石にそれ以上箒に詰め寄る者はおらず、皆自分の席に戻つた。

「落ち着いたようだな。では、授業を始めるか。山田先生、号令を」

「は、はいっ—」

そうして授業が開始されるが、一夏はいまいち身が入っていない様子だ。先ほどの箒の様子が気になっているのか。

(……………ふむ……………)

……………大して役に立てるとも思えんが、また、話を聞いてみるか。

「ふふふ……………安心しましたわ、あなたに専用機が与えられて。負けを、機体の性能差のせいにされてはかないませんから」

昼休みになるや、セシリアが一夏に話し掛けてきた。まったくもつてどうでも良いのだが、話し始める前にまず前髪をかきあげ、その後腰に手を当てる姿勢を取るはこの少女の癖なのかなんなのか。

「訓練機だろうが専用機だろうが、使いこなせなきゃ意味ないだろ。性能以前の問題だろうが」

「あら、よく分かつてらっしゃいますわね。そう、ISで大事なものは、ISとのシンクロ。イギリスの代表候補生であるわたくしは、わたくしの専用機と完璧にシンクロしています。IS初心者の方には、方に一つも勝ち目はありませんのよ?」

自信に満ち満ちた、セシリアの声と表情。

自分が負けるなど、有り得ない。それを心から信じ切っているのが良く分かる。

そんな挑発を、おそらくは無自覚の内に行つたセシリアに対し、一

夏は——

「関係ねえよ。俺は強くならなきゃならないんだ。勝つても負けても

経験は積める。強くなれる」

セシリアを睨み付ける。

そこに敵意は欠片も無く、悪意は微塵も無く、殺意など有ろう筈もなく。

「悪いが、俺の糧になつてもらうぜ——セシリア・オルコット」

ただ純粹な、「戦意」だけがあった。

「くっ……い！ あ、あなた——」

「おーい、箒い。飯食いに行こうぜ」

その戦意を霧散させ、がらりと態度を入れ替えた一夏。呼ばれた箒は無視を決め込んでいるが、セシリアは先ほどの授業でのことを思い出したのか、今度は箒に話し掛けた。

「そういうえはあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

……その話題を振るとは、こいつには学習能力がないのか？

「妹というだけだ」

案の定、箒はセシリアを射殺さんばかりに睨み付けている。その眼力に気圧されたのか、セシリアは小さく呻いて一步退いた。

「……ま……まあ。どちらにしても、このクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」
ぱさつと髪を払い、立ち去っていくセシリア。どう見ても箒に怯んで逃げたようにしか見えない。

一夏はその姿をなにやら呆れたような顔で見送ってから、再び箒に声を掛けた。

「箒、飯食いに行こうぜ」

「……………」

「早くしないと、席が埋まっちゃうぞ」

「……………」

箒は頑なに沈黙を続ける。一夏の顔を見ようともしない。

そんな箒を心配してか、一夏は周りを見回して、

「おーい。誰か一緒に行かないか？」

「はい、行きますっ！」

「ほーい、行くよ。ちよつと待って〜」

「私も！」

己も立ち上がり、二人の下へ歩いて行った。だが箒は、やはり頷こうとはしない。

「……私はいい」

「まあそう言うなつて。ほら、立て立て。行くぞ」

「私はいいと言っている！」

「けど飯は食いに行くんだろ？　ならみんなで食った方が美味しいし楽しいだろ」

「二人の方が落ち着いて食べられるっ」

どうしても立とうとしない箒に、一夏もしびれを切らした。箒の手を取り、引っ張って強引に立たせた。

「な、何をする！　離せっ！」

「食堂に着いたらな」

「い、今離せ！　ええいっ——」

「おっ？」

箒が空いている手で一夏の手を取り、素早く捻る。相手が捻られた手を反射的に返そうとする力を利用しての投げを仕掛けたのだ。

「——おっと」

しかし一夏は、箒の力に逆らおうとせず、むしろ逆に利用してぐるりと回り、箒の手を外した。

曲芸じみたその動きに、教室は一瞬静かになり。次の瞬間、わっと歓声上がる。

「す、すごいすごいっ！」

「何今の、どうやったの!?!」

「思ったより軽く跳べたな。腕上げたなあ、箒」

「う、うるさい！　嫌みのつもりか!?!」

「なんでそうなるんだよ。……ほら、行こうぜ」

「くっ……何度言えば——」

「手首、ちよつと痛いんだけど」

「……うっ」

「な。一緒に行こうぜ、箒」

「……………分かった、行く。だから、もう手を離せ」

「よし、決まりだな。んじや、行こうぜ」

なんとも強引な。それで貸しをチャラにするとでも言うつもりか知らんが、お前が無理矢理誘わなければ、こんなことにはならなかつたろうに。

「さあさあ、ご・は・んー！」

「お待たせ、準備おつけ」

「ふ、ふふ……………ついに、織斑君とご飯に……………！」

「……………」

さて、学食に行くか。盛り上がりつつあるクラスメイトたちに、もみくちやにされん内にな。

六人でぞろぞろと学食に来たはいいが、かなり混雑している。これはしばらく待たねばらんかと思つたが、奇跡的に空いていた四人掛けのテーブルを二つ発見し、それらをくつつけて席に着いた。

「「いただきます」」

「いただきます」

「……………いただきます」

「……………いただきます……………」

食事を始めてすぐに、己たちについて来た少女の一人——己のルームメイトである本音が話し掛けてきた。

「む、やつといのつちとご飯食べられるよ。朝いのつち、すぐいなくなつちやうんだもん」

「……………」

鍛錬から部屋に戻りシャワーを浴び終わっても、本音は寝ていた。一応揺り起こしてから出てきたのだが、本音は不満だったらしい。

「いのつちって、おりむーと仲いいんだね。学校が同じだったの？」

「……………幼なじみ……………」

「おお、やっぱいのっちはすごいね」

何がだ。それと状況から判断したがおりむーとは一夏のことではないのか。そしてその手が完全に隠れている袖でどうして箸が持てる。

「じゃあさ、小さいころのおりむーって、どんな感じだったの？」
「……変わらない……」

鯖の塩焼きを口に運びつつ答える。

本音の友人と思われる二人も一夏の昔に興味があるようだが、己と話すのは気が引けるのか。質問はほとんど本音任せだ。

本音は食事の間を上手く突いて質問してくるので、答え易い。話し上手や聞き上手とはどこか違う、話しやすい独特の雰囲気を持っている。

そんな本音との会話を、ほんの少しだけ楽しく思いながら食事を進めていると――

「ねえ。君が織斑一夏君でしょ？」

突如現れた少女が一夏に話し掛けて来た。リボンの色から判断するに、三年生だ。優しい笑顔を浮かべて一夏にISの教示を買って出ているようだが、下心が透けて見える。

だがそういったことに疎い（というか鈍い）一夏は気付かず、その申し出を受けようとしていた。

そんな一夏の様子に、箒の眉がピクリと跳ね上がる。誘われた時はああして嫌がって見せたが、あの時は束さんの話があった直後だったので、ただ恥ずかしがっていただけだろう。本心では、一緒に食事をしたかった筈。

しかしそんな箒の心の機微を、一夏に悟れと言うのは無理がある。仕方ない、追いつかぬか、と考えて、三年生に向ける視線に力を込めようとしたら――

「――結構です。一夏には私が教えますから。先輩の手を煩わせるまでもありません」

（……ほう……）

不機嫌そうではありながら、箒が名乗りを上げた。本音と二人の少女も、突如始まった修羅場（？）に興味津々である。

「教えるって……あなた、一年でしょ？自分の勉強で手一杯なんじゃない？」

「……私は、篠ノ之箒と言います」

「……え？」

「この名が何を意味するか、当然分かりますよね？」

自分からそれを言うとは。勢いに流されたとは言え、成長したな、箒。

「そ、そうなんだ。それなら、私より適任よね……」

さらに付け足された箒の睨みにより、すごすごと引き下がって行く三年生。そしてそれを残念そうに見送る一夏。お前は本当に馬鹿だな。

「……というわけで。一夏、ISについて教えてやろう」

「……あの、箒さん？ちよっと話について行けないんだけど」

「私が、お前に、ISについて、教えてやると、言っている」

「……あのー」

「不満か？」

「いや、そんなことはないけど」

「……ふん。なら、少しは嬉しそうにしたらどうだ」

……あとは、その態度さえ直ればな。根は優しい少女なのだが。

「放課後、空けておけ」

「え？」

「剣道場に来い。お前の腕が鈍っていないか、見てやる」

「へ？ISのことを教えてくれるんじゃない——」

「見てやる」

「……お、おう」

さて、これで己の放課後の予定は決まったな。箒が六年前からどれだけ上達しているか興味もある。

だが今は、午後の授業に備えて昼食をとることに専念するとしよう。

「なんか、面白そうなことになったね、いのっち」

「私も見に行こうかなー」

「そだねー」

「……………」

そして、彼女たちの予定も決まったようである。

「ハアアツー！」

「ゼエイツー！」

裂帛の気合い。

竹刀がぶつかり合う音。

四本の足は時に食らい付くようにしつかりと床を踏みしめ、時に滑るように軽やかに床を蹴る。

二人の剣舞が始まってから、十分。

試合は白熱していた。

初めは興味本位で集まって来た観客たちも、今では予想を遥かに上回るその内容に見入っている。

「……………二人とも、すごい……………」

「さすが、全国大会優勝者なだけはあるわね……………」

剣道場を貸してくれた剣道部員は、二人を知っているようだ。箒は有望な新入部員候補として目を付けていたのだろうが、男子である一夏のことも知っているのは、一夏が中学二年生の時と合わせて二連覇の偉業を果たしているからだろう。

「せえっ！はあっ！」

「おおおっ!!」

二十分が経過し、流石に二人とも疲れてきた。当然だ、いくら体力があろうと、人間が全力で動き続けられる時間は長くない。

バツと、二人が小さく距離を取る。両の竹刀の先端が僅かに触れ合う、一足一刀の間合い。

広い剣道場に、二人の荒い息遣いだけが響く。

その音が、同時に消え。

二人が、同時に動き出す。

——決着は、一瞬。

「小手エエエツ!!」

箒が鋭く小手を放つ。一夏はそれを、腕を竹刀ごと振り上げてかわした。

——上段、面打ちの構え。

「フツ！」

「っ！」

箒の反応は速かった。

空振りした竹刀の切っ先をくるりと回し、頭の上に翳す。振り下ろされる竹刀と面との間に、防御を滑り込ませる。

素晴らしい反応だが、しかしそれこそが一夏の狙いだった。

一夏が膝を畳み、腰を低く落とす。振り上げた竹刀を、両手を巧みに使い梃子の原理で引き寄せて。

——振り下ろすように、横に薙いだ。

「胴オオオオツ！」

——パァンツ!!

……勝負有り、だな。

「……見事……」

「きやああーっ！織斑君カッコいい！」

「篠ノ之さんもすごいねー！」

「おおく、おりむー強い。何やってるのか全然見えなかったよ」
「……………」

観客たちが爆発し、口々に両者を称える。

剣道もいいものだな。人殺しの業である己の剣では、こうは人の心を掴めまい。

「つくは！ゼエツ、ゼエツ、……ふう……強いな、箒」

「はあ、はあ、一夏こそ、はあ、更に腕を上げたようだな。……私の、負けだ」

面をとった二人の顔は晴れやかだ。言葉に出来ずとも剣で語る、そんな在り方が、不器用な幼なじみたちには似合っていた。

「全国大会のあとも、稽古は続けていたようだな」

「ああ、剣道部は引退しちまったけどな。シンと一緒に、よくやってたぜ」

——そこで己の名を出すな馬鹿者がっ!!

「何イツ!？」

クワツ!と箒が己を見る。その目は裏切り者を見る目だった。

「真改、お前もかっ……!!」

「……!？」

待て、落ち着け箒。お前が考えているようなことは何もなかった。ある筈がないだろう。

「ふ……ふふふ……そうかそうか。よし真改、私にも一つ稽古をつけてくれ」

しかし箒に己の思いは届かない。一夏が持っていた竹刀を引ったくり、己に向けて突き出した。

「さあ、剣を取れ真改っ!」

「……はあ……」

思わず溜め息が漏れるのも仕方ない。こうなつた箒は人の話を聞かないのだ。無闇に煽る観客たちもいるしな。

「では防具は——つと、そうだな、私が着けてやるから、更衣室の——」

「……無用……」

防具を着ければ動きが鈍る。片腕しかなく、非力な己にはその足枷はなかなか重い。

どうせ竹刀だ、当たつたところで死にはしない、そういう判断による言葉だつたのだが——

「ほう……私如きが相手では、防具など必要ない?」

「……!？」

——しくじつた。箒は更に怒気を強め、そろそろ気炎が目に見える領域である。

これ以上は余計なことを言わない方が良いな。気は進まんが、さつさと済ませるとしよう。

「いのっちゃう、がんばる」

「……」

気の抜ける声援を超越す本音に軽く手を振って応え、箒の前に立つ。渡された竹刀の感触を確かめつつ、全身に意識を巡らせる。そして、試合開始の掛け声が響いた。

結果から言うと、理不尽な怒りに任せて荒い攻撃を繰り出してくる箒に圧勝し、勢い余って一夏も叩きのめした。八つ当たりだった。

一夏と激闘を演じた箒は剣道部員から称賛され、観戦していたクラスメイトたちにも少しは馴染めたようである。

問題はその後で、翌日から己のファンを名乗る者が現れ出したのだ。箒を倒した姿が格好良かったとかなんとか。別に何をするといいわけではないのだが、やたらと熱い視線を己に浴びせてくる。

——何故だ。こういった役割は、一夏のものではなかったのか。

「……………不可解……………」

第7話 星光

己とセシリアの試合当日、その放課後。

一体どういうわけか観客席の八割近くが埋まっている第三アリーナのAピットに行くと、そこには一夏、箒、本音、山田先生、千冬さん、そしてスーツ姿の見知らぬ男が一人、集まっていた。

「やあやあはじめまして、僕が如月重工の社長、如月だ。君が井上君だね？ 今日にはよろしく頼むよ」

「……………」

やたらと馴れ馴れしい態度で話し掛けてくるスーツの男——如月社長に無言を返す。どうにも苦手な人種だ。

格好は、何処にでも居そうなサラリーマンなのだが。背は高いが身体は細く、鍛えたことなどないのだろう。顔立ちはそれなりに整ってはいるが、その顔に浮かべる笑みがなんとも不吉だ。

……流石は如月重工。姿だけで己に冷や汗をかかせるとは、数々の噂、伊達ではなかったか。

「ふむ。相手をしてくれるのはイギリス代表候補生、セシリア・オルコット君か。申し分ないね」

「……………」

「今回のデータ収集は君のテストも兼ねているからね。もし入試での戦いぶりがまぐれなようだったら、この話はご破算だ。頑張ってくれたまえよ」

初耳であるその言葉を聞き、千冬さんが口を挟む。顔には焦りというよりも、僅かではあるが怒りが滲んでいる。

「待って下さい、社長。そんな話は聞いていませんが？」

「うん？ 言ってなかったかな？ まあ、今言ったからいいだろう」

睨み付ける千冬さんの眼力をものともしない。この男、なよなよし外見に似合わず相当な胆力だ。

「なにせ僕らは技術者、戦闘に関しては素人だ。井上君の実力は見ただけじゃ分からないからねえ。だから僕らにも分かるように、ちゃんとしたデータがいるんだよ」

なるほど、話は分かった。そのちゃんとしたデータとやらの内容が如月重工の眼鏡にかなわなかったのなら、確かにこの話はなかったことにするべきだ。仮のテストパイロットというただでさえ不安定な立場に、さらに余計な事情まで付け足されては、お互い満足な働きなど出来はしないからな。

「さて、続けるよ。今回井上君には、IS学園の訓練機、打鉄を使ってオルコット君と戦ってもらおう。データ収集のためのプログラムを入れてる以外は普通の打鉄だから、安心してくれていいよ」

「どこが普通だよ。左腕が付いてないじゃねえか」

一夏が不機嫌そうな顔で言う。言葉通り、己のために用意された打鉄は、左腕部分の装甲が取り外されていた。

「え？ だって要らないでしょ？」

「——てめえ」

まあ確かに要らんが。己では動かせないうえ中身が入ってないクセに弾が当たるとシールドエネルギーが減りそれでいて重量だけはしつかりあるから、むしろ邪魔なくらいだ。

だが一夏はその発言が気に入らないようで、如月社長を睨み付けている。千冬さんに気付かれ叱られているが、そうでなければ殴りかかっていたかも知れないほどの怒りようだ。

——まだ、引き摺っているのか。

「武装は君が好きに選んでくれていいよ。僕らからの要求は、君が全力で戦うことだけだからね」

「……………」

「別に勝てとは言わないよ。たとえ負けたとしても、内容次第では採用させてもらう。まあ、僕はあまり、心配していかないけどねえ」

負けてもいいと言われれば多少は気が楽になるのが人情である。だがデータ収集のためとはいえ、これは試合だ。ならば当然、勝ちに行く。

「さて、そろそろだねえ。井上君、準備を始めてくれたまえ」

「……………承知……………」

言われて、IS学園の白い制服を脱ぐ。ISスーツは予め制服の下

に着ているのだが——しかしこの、所謂スクール水着のようなデザインはどうかならんのか。機能性は申し分ないが、それを完全に打ち消しかねないほどの要素だ。

……顔に出ないと言うだけで、己にも羞恥心くらいはあるのだがな。

「……………」

「……………」

袖が無いせいで、普段は夏でも長袖の服を着ることで隠している左腕が顕わになる。二の腕の中間から下がなく、失われた部分の上から鎖骨と脇までを醜い疵痕に覆われたその左腕を見て、箒と本音、山田先生が息を飲んだ。

如月社長は全く気にした様子はなく、千冬さんは顔を僅かにしかめただけに留め。

——そして、一夏は。

「……………」

「……………」

自らが犯した罪を見せ付けられたような顔で、しかし決して目を逸らそうとはしない。

たとえどれだけ重くとも、その罪を背負うと決めているのだ、この少年は。

(…………馬鹿者が…………)

打鉄を起動し、武装を選ぶ。運び込まれたコンテナの中には打鉄用の武装が各種取り揃えられているが、これは己の戦闘データを得るための試合。ならば徹底的に、己らしく戦わせてもらう。

ISの武装や弾薬を格納している拡張領域バス・スロットから銃火器を全て引っぱり出し、コンテナの中に立て掛ける。そしてずらりと並べられた、大量のブレードに手を伸ばした。

長く、間合いの広いモノ。

短く、取り回しに優れたモノ。

重く、威力の高いモノ。

軽く、素早く振れるモノ。

厚く、頑丈なモノ。

薄く、切れ味鋭いモノ。

広く、盾代わりになるモノ。

細く、先の尖ったモノ。

そして打鉄の標準装備である、日本刀に似た形のモノ。

それらの得物を、空いた拡張領域に次々納めて行く。

「うふふ……君も大概だねえ、井上君。これは期待出来そうだな」

「……………」

如月社長が何か言っているが無視する。打鉄の調子確かめ、不備がないことを確認。流石はIS学園の整備班、優秀だ。

確認を終えて、歩き出す。

——一夏の下へ。

「…………シン…………」

「……………」

——そんな顔をするな。

泣きそうな顔で己を見る一夏の前に跪く。ISを装着している今では、それで目線の高さが合った。

鋼よりなお硬い金属に覆われた右の拳を、その眼前に突き付ける。

「俺…………」

「…………良く、見ておけ…………」

何かを言おうとする一夏を遮り、告げる。

生身であろうとISであろうと変わらない、己の寄る辺、己の在り方。

そして——

「…………己の、剣を…………」

「…………ああ。見ててやるから、負けんじゃねえぞ、シン」

「…………ほざけ…………」

ゴツン、と。いつかもやったように、拳を打ち合わせる。そんなに勢い良く打てば痛かろうに、一夏は不敵な笑みを浮かべていた。

その顔を見て、ようやく意識が戦いに切り替わる。これから戦うのは己だと言うのに、お前が心配させてどうするのだ。

——全く。手の掛かる幼なじみを持つと、苦勞する。
思わず口元に浮かんでしまった笑みを、誰にも見られなかったのは、幸いだつた。

「……はあ。このわたくしを相手に訓練機で挑もうなんて、馬鹿にしていますの?」

「……………」

不満は察するが、これしかないんだ、仕方なからう。

ピットを出て飛び上がった己を待っていたセシリアが、優雅な仕草で腰に手を当てる。ISという鎧を纏っているながら、この少女の輝きは微塵も陰ることはない。生まれつきの貴族、民衆を照らし導く者の光だ。

「まあ、そんな機体で逃げずに来たことは褒めてさしあげますわ。それが蛮勇でなければ良いのですけど」

「……………」

「あなたの都合に快く付き合っただけあげるわたくしの優しさに少しでも感謝しているのなら、わたくしの引き立て役になるくらいには頑張つて下さいな」

「……………」

自信の現れなのか、自分の存在に誇りを持っているのか。セシリアの語り口は、いつも熱を持っている。

大半の者にとって、その態度は傲慢と映るだろう。そしてその多くは、彼女を快くは思わない。

だがその在り様は、かつての己の仲間と、どこか似ていた。

「……あなた、本当に無口ですわね……」

「……………話すのは、苦手だ……」

どうにも憎めない少女に、返事をする。己自身どうかと思うほどの無口ぶりを「苦手」の一言で済ませたことに、セシリアは一つ溜め息を吐いた。

そして気を取り直して大仰な仕草でぐるりと観客席を見渡す。

「ふふ、わたくしの勇姿を一目見ようと、こんなにも人が集まりました。あなたはそんな剣一本で、わたくしにどんな芸を見せてくれるのかしら?」

セシリアの問に、彼女に剣の切っ先を向け、力を込めた視線と共に、答える。

「……寄って、斬る……」

——そうだ。相手が誰であろうと、それこそ神であろうと。

己には、井上真改には、もとより——

「……他に、能がない……」

「——いいでしょう。なら、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットと、ブルー・ティアーズの奏でる円舞曲ワルツでっ!」

——いいだろう、貴族ノブブルレディのお嬢さん。

華のない、無骨な剣舞でよろしければ、一曲お相手仕る——!

セシリアの持つ、全長二メートルを超える長大なレーザーライフル「スターライトmkⅢ」の銃口から閃光が放たれる。

片足を半歩引き、体を開いて回避。狙いを外れたレーザーが、アリーナを覆う遮断シールドに当たる。観客席から悲鳴が聞こえたが、今はそちらに割く意識の持ち合わせはない。

「あら、わたくしの初撃をかわすだなんて、なかなかの反応ですわね」
「……………」

セシリアは己に銃口を向けたまま余裕に満ちた口調で言うが、そこに油断はない。

セシリアの専用機はブルー・ティアーズ。中距離以上での射撃戦に特化しているらしいその機体を操る彼女は、自分で言った通り、射撃には自信があるのだろう。その自分の銃撃を初見で完全に回避した己を、油断ならない相手と判断しようだ。

「ですがそれも、いつまで続くかしら?」

「……………」

射撃、射撃、射撃。雲霞の如く押し寄せる、閃光の槍衾。

スラストターを噴かし、まずは回避に専念する。

セシリアの武装、スターライトmkⅢは、その巨大さに見合った威力を誇る。山田先生との戦いでやったような装甲任せの突撃ではこちらが保たない。

加えて、弾速も驚異的だ。打鉄は防衛力重視のバランス型であり、機動力はそれほど高くはない。近づくには被弾を覚悟せねばなるまいが、その被弾を少しでも減らすためにはセシリアの「クセ」を掴む必要がある。

上下左右に小刻みに動き、セシリアにせわしなく狙いを付けさせる。その際の銃口の動き、目の動き、姿勢などを詳細に観察する。クセを掴むことが出来れば、射撃に先んじて反応することも不可能ではない。

「ええい、ちょこまかとっ……………」

「っ……………」

一向に当たらないことに流石に焦りが出てきたのか、セシリアの射撃に乱れが生じる。

——好機。スラストターを全開にし、突撃を仕掛ける。

「っ、この……………」

上下左右だけだった機動に前後の動きが加わり、照準の修正が出来ていない。

最短距離を真っ直ぐ進んでいるだけだが、当たらない。

それを見てセシリアが後退しようとするが、もう遅い。間合いまであと一息だ、このまま踏み込み、まずは銃を破壊する。

だが、ブレードを握る右手に力を込めた瞬間——

「——ふふっ」

「っ——!?!」

——セシリアの顔に浮かぶ、笑みに気付いた。

「お行きなさいっ！ ブルー・ティアーズ！」

(……………なに……………!?!)

瞬間、四方から浴びせられる閃光。打鉄のシールドエネルギーが大きく削られる。

状況も分からないまま突撃を続けるのはまずい、一旦距離を取らねば。

「ふふ……驚きましたか？　これがブルー・ティアーズの真の武装、これこそが本来、ブルー・ティアーズと呼ばれるもの。この機体は、ブルー・ティアーズを搭載した実験機として同じ名前を与えられているにすぎませんの」

（……自立機動兵器……！）

セシリアの周囲に浮かぶ、四機の砲台。フィン状のパーツに直接レーザーの銃口が開いたそれらが、狩人に従う忠実な猟犬のように己を狙っている。先の閃光は、己を取り囲んだあれらが一斉に撃ち出したものだろう。

……成る程、己はまんまと罠にかかった獲物、というわけか。

「先ほどの動きには驚きましたが、このブルー・ティアーズを起動した以上、同じようには行きませんかよ？」

「……………」

流星にスターライトmkⅢと同等の威力はないだろうが、銃口の数は五倍になった。そしてあれだけの射撃技術だ、大抵の相手は容易く仕留められるだろう。

「ここからが本当の始まりですわ。全方位からの波状攻撃を、どれだけ凌ぎ続けられるでしょうね。せいぜい、わたくしを楽しませてくださいな」

「……………」

オーケストラの指揮者のように、セシリアが高々と銃を掲げる。

それを受け、ブルー・ティアーズが多角的な直線機動で己に近付いて来た。

囲まれるのはまずい。包囲を逃れるべく、己はスラスターを噴かした。

「シン……！」

シンが操る打鉄を囲もうと、四機のビットが動く。シンもアリーナ内を縦横無尽に動き回りビットに囲まれるのを防いでいるが、それでも五対一だ。

ビットのうち何機かはシンの背後や頭上、足下といった、ハイパーセンサーで見えていても反応が遅れる「死角」に入っている。

今もまた、死角から放たれたレーザーが装甲を掠めて行った。

——このままじゃ、ジリ貧だ。

「くそ、あいつ、強い……！」

シンも何度かブレードを投げつけて反撃しているが、当たらない。FCSの恩恵を受けられない投擲では、高速で動き回るISは捉えられない。

そして投擲の隙を突いて、セシリアが持つ巨大な銃からレーザーが放たれる。その一撃はすんでのところかわせたが、無理な回避で体勢が崩れた。

——そして、ついに。

「やばい、囲まれた……！」

「真改っ……！」

いよいよ激しさを増す、閃光の雨。シンは絶えずスラスターを噴かし続けているが、巧みな射撃でどうしても包囲を抜けられずにいる。「畜生、まるでなぶり殺しじゃねえかよ……！」

——セシリアは、強い。あのシンが、こうも一方的にやられている。なら俺は、そのシンに十年経ってもまるでかなわない俺は、本当に強くなれるのか——？

「くそっ……！」

追い掛け続けた親友が、まるで歯が立たずに傷付いていく姿を見ていられず、思わず俯いてしまう。

——パアッ！

「何をしている、馬鹿者」

「ち、千冬姉……？」

思わずそう呼んでしまい、しまった、と思うがしかし、頭に二度目の衝撃は来なかった。

「アイツはお前になんと言った？」

「……それ、は……」

『……よく、見ておけ……』

『……己の、剣を……』

「そうだ、ならば目を逸らすな。アイツの、真改の戦う姿を、一瞬たりとも逃さず目に焼き付けろ。」

……それが、今のお前の役目だ、一夏」

「千冬姉……」

そう言う千冬姉も、シンから目を離さない。箒も山田先生も、決してシンから目を離そうとしない。

「それに、いのつちが負けるって、決まったわけじゃないよ？」

「え……？」

間延びした声は、シンのルームメイトである布仏本音——のほほんさんのものだった。

彼女は袖に隠れた手で、苛烈な猛攻を避け続けているシンを指差した。

「ほら。いのつち、さっきから一回も当たってないよ？」

「……！」

——そういえば。

危ない場面は何度もあったし、掠ることも多かったが、最初の一斉射撃以外、直撃は一度もない。

「きつといのつちは今、チャンスを待ってるんだよ。一発逆転の、チャンスを」

「のほほんさん……」

「だから。おりむーも、いのつちのこと信じてあげよ？」

「っ!!」

……なんてこった。俺だけが、シンのことを信じてなかったっての
か？

「ようやく気付いたか、大馬鹿者め。お前は一体、十年間も、アイツの
何を見てきたんだ？」

そうだ、シンはいつだって、黙って道を切り開いてきた。

俺を守って左腕を失くした時も、一切泣き言を言わず、片腕で剣を
扱う鍛錬を始めた。そんなシンだから、俺が憧れ、千冬姉も認めたん
だ。

そのシンが、この程度のピンチを乗り越えられない筈がない。

——そうだ、心配することなんか何もない。俺はただ、シンの勝利
を信じればいい。

「ははっ」

思わず笑いが漏れる。まったく、自分が情けない。親友のことを、
信じていなかっただなんて。

ばちんと、両手で頬を張って気合いを入れる。体を反らして限界
まで息を吸い、腹筋に力を込めて。

親友が、必死に戦っている。ただ見ていることが耐えられないな
ら、やることは一つだけだ。

轟音が鳴り響くアリーナに、届くとは思えない。それでも、言わな
いと。

——だって、それが応援つてもものなんだから。

「いっけええええっ!!シィィィィンっ!!」

(……馬鹿者が……)

ハイパーセンサーが拾った幼なじみの声援に、思わず苦笑しそうに
なる。それほどまでに、今の己は窮地に見えるのか。

確かに一方的に攻められてはいるが、よく見ればわかる。焦ってい
るのは、己よりむしろセシリアのほうだ。

「そんな、どうして……!?!」

——当たらないのか。

理由は簡単だ。イギリスの代表候補生であるセシリアは戦闘経験も豊富だろうが、その相手は自分と同じISだ。

つまりは、一対一なのである。

そしてその相手も当然一対一の戦いを多く経験しており、だからこそブルー・ティアーズによる死角からの攻撃は効果的だった。唯一の敵が目の前にいる以上、死角から撃たれることなどないのだから。

だが己は違う。リンクスとして戦場を駆けていた頃は、一対一の戦闘などほとんどなかった。それこそ、前から撃たれる方が稀なほどだ。

だから、見える。たとえ死角に回り込もうと、その動きを察知し、攻撃に対応できる。

機動力の問題でビットを追い切ることは出来ず、反撃も出来ていないが、その問題も今、解決する。

「……………」

ビットが一機、己の背後を取った。今度こそと、セシリアがビットに指示を出す。

——ロックオン。

銃口からレーザーを放たんとするその瞬間に、己は後ろ手にブレイドを投げた。回転しながら飛翔する刃がビットを貫き、爆散させる。「なあっ!？」

驚愕するセシリア。投げただけのブレイドが当たるわけがないと、心のどこかで思っていたのだろう。

それも仕方ない。そう思わせるために、外れると分かっているながら、今までブレイドを投げ続けていたのだから。

確かにFCSによるロックオンが出来ない投擲攻撃では、高速かつ変幻自在な機動力を持つISは捉え切れない。だが逆に言えば、止まってさえいれば当てることも出来るということだ。

——例えば。射撃体勢に入り、発射する直前のビットとか。

セシリアがビットを操作するには、多大な意識を割く必要があることには気付いていた。四機もの自立機動兵器を同時に操るのだ、並大

抵の集中で出来ることではない。

だから命中率を上げるため、発射の瞬間、ビットの動きを止めて安定させることにも気付いた。

そこでその、煌びやかな外見とは裏腹な堅実さを利用させてもらった。攻撃を回避し続けることでセシリアの焦りを呼び、故意に隙を作ることでビットを背後に誘い込んだ。セシリアは自ら罠に飛び込んだとも知らず、必中を期してビットを空中に固定する。

セシリアはISの死角を熟知している。どこから撃てば最も反応が遅れるか、身体が覚えている。そしてその狭い範囲に正確にビットを送り込む高い技術が仇となり、己にビットがどこに来るのかを教えることになった。

——あとはそこに目掛けてブレードを投げれば、ビットは射竦められたように動きを止め、貫かれる。

(……借りは、返した……)

では、反撃開始と行こう。

「……っ！」

「な、くっ、ブルー・ティアーズ！」

突撃してくる己を迎え撃つべくビットに指示を出すのが、驚愕により集中が切れたのか、ビットの動きは明らかに精彩を欠いていた。

これならば、問題なく追える。ブレードを振るい、あるいは投げ、全てのビットを切り捨てた。

「そ、そんな……！」

スラスターを全開にし、セシリアに向け一直線に加速する。セシリアも距離を取るべく後退するが、先に加速していた己の方が速い。

一足一刀の間合いに踏み込む直前、セシリアが動く。

「お生憎様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

——それがどうした。同じような手が二度通じるとでも思ったか。セシリアのスカート状のアーマーから突起が外れ二機のビットとなり、それらから放たれたミサイルが己を目掛けて飛んで来る。

己は脚部のスラスターを上へ、背部のスラスターを下へそれぞれ噴かす。前方宙返りをするように大きく回転し、直近で放たれたミサイ

ルを回避した。

「な——」

驚愕の連続でか、セシリアはその動きを止めた。

致命的な隙。ようやく訪れた好機を最大限に活かすべく、前宙で頭が頂点に来た瞬間、ブレードを長く重い大太刀へと持ち替える。回転の勢いを余さず刀身に載せ、セシリアの頭を目掛け、振り下ろした。

——が。

「う……ああああっ!!」

「っ……!?!」

——防がれた。渾身の唐竹割りは、セシリアが掲げたスターライトmkⅢの銃床を切断しただけだった。

衝撃までは防げず、アリーナの地表へと落ちて行くが、ダメージはあるまい。スターライトmkⅢも、射撃精度は落ちるかもしれないが、撃つこと自体には影響はないだろう。むしろ中途半端に離れたこの距離では、取り回しが良くなったただけだ。

……まさか、狙ってやったわけではあるまい。そんな冷静さは、セシリアに残されていなかった。

では何故、こんなことになった？ ただの偶然、己の不運か？

——それこそ、まさかだ。この結果は、己が招いたモノではなく、セシリアが引き寄せたモノ。

追い詰められ、最後の一手もかわされて。

それでもなお、諦めず。見栄も体裁も捨て去って、持っていた武器を振り上げた。

その執念、飾った敗北よりも泥臭い勝利を望む心が、己の一撃を防いだのだ。

「……………」

自然と、唇が吊り上がる。

機体の性能で劣り、技術でも劣る。そんな己が勝つには、精神の弱さを突くしかないと思っていた。

——なんという浅慮。セシリアに、そんなモノは無い。

若いながらも。未熟ながらも。この少女は既に、戦士の心を持って

いる。

ならば精神の弱さを突こうなどという、腑抜けた考えでいた己が後れを取るの当たり前だ。

勝つ方法は、心の弱さを突くのではなく。

強い心を、さらに上回り。

真っ向から、叩き潰す——！

「……………！」

大太刀を逆手に持ち、全推力を下に向ける。狙いは、仰向けに横たわりながらも己へと銃口を向ける、強敵。

「隙だらけ、ですわ……………！」

持ち上げられたレーザーライフルの照準は、完全に己を捉えている。

構わない。己にも打鉄にも、もう余力は残っていないのだ。この機を逃せば、どちらにせよ後はない。

そしてそれは、セシリアも同じ。ここで退くなど、一体どうして出ようか——！

「……………一撃だけでいい……………」

銃口に光が集まる。

警告、危険。

（……………耐えて見せろ、打鉄……………！）

「ハアアアアッ!!」

「オオオオオオッ!!」

そして己は、閃光に飲み込まれ。

「……………終止……………」

セシリアの胸に、大太刀を突き立てた。

『試合終了。勝者、井上真改』

アナウンスを聞き、茫然としました。

——負けた？このわたくしが？

井上さんの最後の一撃、打鉄の全重量にスラスターの推力と重力を加えたその一撃は、確かにわたくしのブルー・ティアーズの絶対防御を発動させ、シールドエネルギーを枯渇させるだけの威力はあったでしょう。

ですがそれは、あの落下の勢いを維持出来たらの話です。

最後の瞬間、わたくしは確かに、井上さんにスターライトmkⅢの銃口を向けました。この銃の威力は、井上さんも見ています。ボロボロの打鉄で受けきれぬかは、賭けだったはず。

なら回避するか、そうでなくとも多少は怯んで、スラスターの勢いを弱めるだろうと思っていたのに。

——なのに、彼女はほんの僅かも怯まなかった。光を放つ銃口から、顔を背けることさえしなかったのです。

(……強い、ですわね)

ISが機能を停止し、解除されていきます。背中に土の冷たさを感じ、わたくしは自分の敗北を実感しました。

(……負けて……しまいましたのね)

負けるわけには、いかなかったのに。

たとえどんな勝負でも、それがISによるものなら——わたくしは、負けるわけにはいかなかったのに。

オルコットの名を、家を守るために。わたくしは、勝ち続けなければ、ならなかったのに——

そのために、努力をしました。勉強も訓練も必死にこなして、祖国の代表候補生となり、IS学園に首席で入学しました。

——けれど。訓練機に乗った、片腕という大きなハンデを持つ、ISについては素人と大差がない少女に、負けてしまいました。

この報せをうけたら、イギリス政府はどう思うでしょう。見込み違いだったと、わたくしから代表候補生の立場を剥奪するでしょうか？もし、そうになったら。

わたくしはどうやって、「オルコット」を守ればいいのか——

？

(……無様、ですわね……)

アリーナを包む歓声が、ひどく遠く聞こえます。代表候補生を破った一年生の女の子を称える歓声が、わたくしが受けなければならなかった歓声が、とても、とても遠く感じます。

(このアリーナが、こんなに、広がったなんて……)

わたくしを守るISが消えて、自分がともちっぽけな存在になってしまったかのように錯覚しました。あるいはそれは、錯覚ではなかったのかもしれませんが。

(……あ、れ……?)

ふと、わたくしは自分が涙を流していることに気付きました。

負けた悔しき、ではありません。

なにか大事なものを失くしてしまったかのような、そんな悲しみを感じたからです。

(失くした、だなんて……自分では何も持っていない、与えられた物で着飾っていただけなのに)

……もういいです。今日はもう、疲れました。

明日からどうなるのか、そんなわたくしの未来ですらも、今はどうでもいいんです。

だから今は、眠らせて下さい。

——なのに。

ざりつと、わたくしのすぐ近くから、土を踏む音が聞こえました。

今このアリーナの中に居るのは、わたくしを除けば一人だけ。敗者のせめてもの礼儀として、わたくしに勝った女の子の顔を見ようと、鉛のように重い瞼を開けます。

「……井上さん」

「……………」

そこにいたのはやはり、わたくしを倒した少女。とても無口で、片腕の無い女の子。

ISを解除した井上さんが、倒れているわたくしを見下ろすよう

に、そこに立っていました。

「……わたくしを、笑いに来たのですか？ あれだけのことを言っておいて負けた、このわたくしを……」

「……真逆……」

小さく首を振り、井上さんがわたくしの言葉を否定します。

では、いったいなにを……？

「……セシリア・オルコット……」

わたくしを真つ直ぐに見詰めて。話すのが苦手な井上さんが、しかしこれだけは伝えなくてはならないと、その眼で語って。

「……お前に、勝てたことを——」

「——誇りに思う」

——衝撃、でした。

あれだけ強かった井上さんが、与えられただけのわたくしと違い、全てを自分の力で手に入れて来たであろう彼女が。

わたくしに勝ったことを、誇ってくれているのです。

——わたくしに勝つこと、それ自体に価値があったと、そう言ってくれたのです。

嘘を言っているのではないと、嘘を言えるような人ではないと、簡単に分かります。

無口だから、ではありません。

井上さんは、こんなにも真つ直ぐに。

わたくしを、イギリスの代表候補生でも、オルコットの当主でもない、セシリアという一人の人間を、見てくれているのですから。

「……」

無言のままに差し出された手を、思わず取ります。

ごつごつと固く、冷たく、大きな、岩のような手。女の子らしい柔らかさも、暖かさも、繊細さも、全て失ってしまった手。

けれどもその手は、わたくしが知るどんな手よりも、綺麗で貴く見ええました。

露出の多いISスーツを着ているせいで顕わになった、左腕の惨い傷跡も、きつととても大切なものを守ったための結果だと、なんの根拠もなく確信しました。

わたくしの手をしっかりと掴んだ井上さんが、その細腕からは想像も付かないほど力強く、わたくしを引き起こします。

「あ……」

「……………」

疲労で足に力が入らずふらついたわたくしを、井上さんは優しく抱き留めてくれました。

眼から、ポロポロと涙が零れます。先ほどの、悲しさから流れたものではありません。嬉しくて、わたくしをわたくしとして見てくれることが嬉しくて、その上でわたくしを認めてくれることが嬉しくて、溢れてしまった涙です。

「井上さん、かっこいい——！」

「オルコットさんもすごかった！ 感動したよ！」

「ああもう、なんで二人とも一組なのよっ!? どっちかよこせー！」

さつきまであんなに遠かった歓声が、今はこんなにも近い。

そしてその中には、敗者であるわたくしを称えてくれる声も多くあることに気付きました。

(……わたくしが気付かなかっただけなのね。オルコットを守るためと、プライドや虚勢、そんなもので自分を覆って、なんにも見えなくなっていた……)

それを、この人は気付かせてくれた。

言葉ではなく、行動で。口で語らずとも、その眼で。

そして——たった一言に込めた、その、想いで。

「……………」

わたくしが笑みを浮かべながら涙を流していることを不思議に思ったのか、井上さんがキョトンとした顔をしました。

(そんな可愛い顔も出来るんですね)

思わずくすりと笑いが漏れて、自分がどんな顔をしているのか気付いたのか、井上さんはまた無表情に戻ってしまいます。

それがまた可愛らしくて、けれどちよつと残念で。

「……ありがとうございます、井上さん」

「……………」

突然わたくしに感謝されて、井上さんが怪訝そうな顔をします。きつとこの人は、今日わたくしを救ってくれたことに、ずつと気付かないのでしょうか。

それならそれで構いません。知られてしまうのも、なんだか恥ずかしい気がしますし。

ですがわたくしも、これだけは、貴女に伝えないと。

「……わたくしも」

「……………」

「……わたくしも。貴女と戦えたこと、誇りに思います——真改さん」

「……………」

それは、そうであつて欲しいという心が見せた、錯覚かもしれませんが。

真改さんが、ほんの少しだけ。

嬉しそうに笑つたような——そんな気がしました。

「いやあ、お見事お見事！ 文句無しに合格だよ井上君っ!!」

「……………」

セシリアとの試合を終え、一夏たちの待つAピットに戻つた己を出迎えたのは、如月社長のものすごく嬉しそうな声だった。

「うんうん、実に良いデータが取れたよ！ いやあ楽しみだなあ、どんな機体が出来るのかなあっ!!」

「……………」

なんだろう、如月社長のやる気に比例するように、凄まじく嫌な予感がするんだが。

「こうしちゃいられない、僕は早速社に戻るよ！ みんな喜ぶぞお、今日は徹夜だ!!」

夏休みに突入した小学生のようにはしやぎながら、嵐のように去っていく如月社長。不安が加速度的に強くなっていく。

「よう、シン。お疲れさん」

「流石だな、真改。素晴らしい試合だった」

「いのちかっこ良かったよ。どうしたらそんなに強くなれるの？」

友人たちが口々に労ってくれる。帰りを迎えに来てくれる仲間がいるというのは、良いものだ。

「おめでとうございます、井上さん！ やっぱり強いですねっ、私、感動しました！」

「とりあえず、おめでとうと言っておこう。今日はもう部屋に戻って休め。明日も授業は通常通りだ、寝過ぎして遅刻するなよ」

「……………」

流石に疲れたので、お言葉に甘えさせてもらい、今日はもう部屋に戻ろう。己が踵を返すと、本音がトコトコとついて来た。

「帰り道で倒れたりすんなよ？」

「……………」

そこまで軟弱な鍛え方はしていない。

余計なことを言う一夏を睨みつけ、仕返しをしてやることにした。

「…………お前の声…………」

「へ？」

「…………届いたぞ…………」

「…………んなっ!？」

羞恥からか、顔を真っ赤にする一夏。それを見た箒が急にうるさくなったが、今はそれに付き合う余裕はない。

とにかく、戻って寝よう。明日からまた、覚えなければならぬことが山ほどあるのだから。

第8話 翌日

セシリアに勝利した翌日。五時ちょうどに目が覚めた。

「……………」
いつも通り、まずは体調の確認。特に今日は、ISで初めて本格的な戦闘をした翌日だ。少々長めに時間を掛けて、念入りに確認する。

「……………」
疲労が残っているのか、若干体が怠い。しかし気にするほどではない、それにISに体が慣れば、あの程度で疲労が溜まることもなくなるだろう。

隣のベッドで眠る本音を聞こさないように（起こしたところで起きないだろうが）、箆笥からジャージを取り出し、着替える。箆笥に立かけてある竹刀袋を手に取り、外へ。

今日もまた、いつもと変わらぬ一日が始まった。

と、思った己が甘かった。

「お、おはようございます、井上さん！」

「今日もいい天気になりそうですね！」

「お弁当作って来たんです！ よかったら、朝ご飯に食べてください！」

「……………」

——なんだ、これは。

「おはよ——て、なんだこれ？ なんでこんなに居るんだ？」

……………己に訊くな。

「誰だ彼女たちは？ 真改の友人か？」

そんなもの、己にいるわけなからう。

一分ほど遅れて来た一夏と箒が話し掛けてくる。

「この状況については知らん。己が訊きたい。」

「あの、えっと。私たち、昨日の試合を見て……」

「感動しました!」

「それで、井上さん、いつもこの時間に走ったりしてると聞いて……」

「……」

それは、つまり……どういふことだ?

「真改のファンということか?」

「……何故……」

「何故って……考えてもみろ。お前は専用機持ちの国家代表候補生に、訓練機で勝ったんだぞ。あれほどの勇姿、魅せられるのも無理はないだろう」

「……」

「大人気だなあ、シン」

他人事だと思つて気楽に言う一夏を睨んでから、少女たちの方を向く。

「……」

「あの、ご一緒してもいいですか?」

「邪魔はしませんから!」

「お願いしますっ!」

「……」

……どうしよう。全く予想していなかつた事態に、思考が追い付かない。

「あの……ダメ、ですか?」

「……構わない……」

「やったあ!」

「ありがとうございますー!」

なにやらすごい喜ばれようだ。己のような剣術馬鹿のどきがいいのか。

「なにやら妙なことになったが……」

「うし、じゃあ今日はよろしくな」

「はいー!」

「織斑さんと篠ノ之さんもよろしくお願いします!」

「私、お二人の剣道場での試合も見てました!」

「……………」

急に騒がしくなった朝の鍛錬風景。

まあ、走り始めれば彼女たちも考えを改めるだろう。己の朝の走り込みは、陸上部員にもきついと言われるほどのペースだ。軽い気持ちで来ているようなら、すぐに音を上げる。

と、思った己は大甘だった。

彼女たちは三人とも、疲労困憊になりながらもついて来たのである。良く考えてみればここはIS学園、誰しも体を鍛えているのは、当然と言えば当然である。

「はっ、はっ、はあっ……………す、すごいなあ……………」

「こ、こんなペースで、はあっ、走ったの、初めて……………」

「ダメだなあ、ふうっ、もっと、走り込まないと……………」

「……………すげえ、シンのペースについて来たよ」

「お、お前たち……………いつもこんなペースで走っているのか?」

「あんまり長時間走るよりも、中距離を速く走るようにしてるんだよ。そっちの方が体のキレが良くなるからな。後はダッシュを何本も繰り返して、回復力つけたりな」

「そ、そうか……………」

「……………」

箒も僅かに息が乱れているが、他の三人に比べれば遥かに余裕がある。流石に柔な鍛え方はしていないようだ。

さて、当初の目論見は外れたものの、彼女たちは本当に邪魔はしなかった。己たちが木刀を取り出し素振りを始めると、休憩すると言っ

て素振りの様子を大人しく眺めているだけだった。どうやら木刀までは用意出来なかったようだ。

……だがその熱っぽい視線は止めて欲しい。どうにも落ち着かないんだが。

「わあ、速い……!」

「キレイだなあ、ただ木刀振ってるだけなのに……」

「なんだろう、踊ってるみたい……」

「……………」

横から聞こえて来る声は全力で無視。少々鬱陶しくはあるが、これはこれで精神統一の鍛錬になるかもしれん。

そうして素振りも終え、さて帰るか、という段階になると、

「お疲れさまでした!」

「タオルとスポーツドリンク持ってきましたよ!」

「はい、織斑さんと篠ノ之さんの分です」

「お、おお……ありがとうございます」

「……や、やりにくい……」

「……………」

まるで運動部のマネージャーのような手際だ。一夏も箒も、少し引いている。

「あ、あの、井上さん。これ、お弁当です」

「……………」

……朝からか。五時の鍛錬に間に合うように作ったとなると、この娘は一体何時に起きたんだ?

「……ありがとうございます……」

「は、はい!」

「……明日からは、いらない……」

「え……」

途端にしゅんとなる少女。どうしろと言うのだ、この口。

「シンは、朝飯作るのは大変だろうからいい、て言ってるんだよ」

「え?」

「それに明日からは、てことは、また来てもいいってことだ。だろ?」

シン」

「……………」

一夏の振りに答えず、帰り支度を続ける。特に否定もしなかったが。

「まあ、真改はこんなやつだからな。分かりにくいことも多いだろうが、めげずに仲良くしてやってくれと、私も嬉しい」

続いて箒。お前たちは己の保護者かなにかか。

「はい！頑張ります！」

「じゃあ、戻るか。タオルとドリンク、ありがとな」

一夏の仕切りで解散し、寮へ戻る。

……明日はさらに増えていないだろうな。

「お、いのっちお帰り」

「……………」

……なんと。

本音が起きている。IS学園に来てから一週間と経っていないが、初めてのことだ。今日は朝から驚きの連続である。

「むく、わたしだって早起きくらい出来るよ」

「……………」

念のために言っておくが、今起きても別に早起きと言えるほどではない。

「とにかく、シャワー浴びといで」

「……………」

己の呆れ顔に気付いた本音が、動物の着ぐるみのようなパジャマに隠れた手を振って促す。

……むう。何故本音が起きているのかは分からないが、とりあえず汗を流そう。

シャワーを浴びていると、扉の向こうから本音が尋ねてきた。

「あれ？いのっち、このお弁当どうしたの？」

「……貰った……」

「ふうん。昨日のいのっち、かつこよかったもんね。ファンがいっぱいできるかも」

「……………」

勘弁してくれ、騒がれるのは苦手なんだ。特にこの学園の生徒たちの盛り上がりは凄まじく、己ではとてもついて行けん。

シャワーを終え、体を拭き、下着を身に付ける。

サラシを巻き、ISスーツを着たところで、本音が包帯のような布を持って来た。

「じゃあいのっち、そこに座って」

「……………」

言われるままに本音のベッドに座ると、本音は己の左腕に持ってきた布を巻き始めた。

——己の疵痕を、隠すように。

「いのっちも女の子なんだから、ちよつとは気にしないで」

「……勲章……」

「うくん……そういうところも、いのちらしいけどさ」

そこで本音は一度、言葉を止めて。

「いのっちの疵痕見たとき……おりむー、泣きそうだったよ」

「……………」

以前から思っていたが、本音はぼうつとしていているようで、周りを良く見ている。そして大事なことを無意識に見抜き、気負うことなく言葉に出来る。

きつとこの少女は、そうやって多くの人の心を癒やしてきたのだろう。本人が気付いているとは思えないが。

(……………似ているな……………)

己が暮らしていた孤児院の経営者、唐沢さんも、そういうところがあつた。もつともあの人は天然の本音と違い、孤児たちと暮らしているうえで必要だから身に付けたわけだが。

「ほい、出来上がり。じゃあ次は、髪梳くよ」

「……………」

今度は袖の中から上質そうな櫛を取り出し、己の髪を梳き始める。髪の手入れは、IS学園に来る前は妹たちがしていたことだ。

「ちよつと傷んでるね、こんなに長くて綺麗なのに。いのっち、誰かにやってもらってた？」

「……妹……」

「へく！ いのっち、妹さんいたんだあ！」

「……孤兒院暮らし……」

「あ……」

本音の手が止まる。こんな足りない言葉から、聡い本音は、己の身の上を理解したのだろう。

「……ごめんね、いのっち」

「……」

静かに首を振る。それに合わせ、腰まである黒髪も揺れる。

「……大家族……」

「……うん。ありがとう、いのっち」

再び、髪を梳く本音。

その手付きは、妹たちのそれに劣らず優しいものだった。

「おはようございます、真改さん」

「……」

次はこいつか。まだ朝のSHRも始まっていないというのに、早くも疲れてきたぞ。

ちなみに、貰った弁当は旨かった。

「昨日はお疲れさまでした。実に素晴らしい試合でしたわね」

「……」

昨日までとは180度違う態度のセシリアに、ここ数日で学習した己は悟った。

——懐かれた。

「真改さんの視界の広さ、反応の速さ、剣技の鋭さ、心の強さは十分に

見せていただきましたわ。ですがISの扱いはまだまだ荒削り、動きに無駄があります」

「……………」

言われなくとも分かっている。生身ともネクストとも勝手が違うISの操縦に、己はまだ習熟していない。

所謂天才と呼ばれる者たちのように、感覚やカンで機体を操るような真似は、己には出来ない。時間を掛け回数を重ね、骨と肉と神経に、業を刻み込むしかないのだ。

「ですがわたくしも、あなたのおかげで自分の弱点の重大さに気付きました。そこで、わたくしと真改さんで訓練をすれば、お互いの足りないものが鍛えられると考えましたの」

「……………」

別にお互いでやる必要はない気がするが、まあ、野暮なことは言うまい。

「ですから、真改さんの専用機が完成しましたら、二人で訓練をいたしませんか?」

「…………構わない…………」

セシリアにとつてはあまり利のあることとは思えないが、己にとつては有益だ。セシリアの技術や知識は、己より遙かに上。訓練に付き合ってくれるのなら、断る理由はない。

「……………。そ、そうですね、さすがは真改さん、よく分かっていますわね! それでは、専用機の完成を楽しみにしていますわよ!」

スキップでもしそうな足取りで自分の席にもどるセシリア。浮かれているというより、本当に浮いているのではと錯覚しそうなほど軽い足取りである。

…………PICでも使っているのではあるまいな。

「……………なんだったんだ?あれ」

「……………」

己に訊くな、一夏。

昼休み。いつもの三人で食堂に行くと、いつにも増して視線が多い。

……飯抜きでもいいから帰りたくなつた。

「なんかすげえ見られてる気がする……」

「そうだな……」

「……………」

昨日までは主に一夏に向いていた視線が、今日は己と一夏で半々といったところか。試合一つでここまで注目を集めることになるとは思わなかった。これは来週の一夏の試合に期待するしかあるまい。

「ほら、あの子が昨日の……」

「代表候補生に勝つたって子？ 部活サボって、私も見に行けばよかったなあ……」

「あ、私映像持ってるよ。千円でどう？」

おい、誰に断って商売している。

「あ、買う買う」

「昨日見たけど、買おうかな」

「私も、部屋でもつかい見よーっと」

「まいどー♪」

……千冬さんに言いつけるぞ。

「シン、早く食わないと冷めちゃうぞ」

「……………いただきます……………」

周囲の雑音を気にしていると身が持たない。とにかく飯を食おう。

「しかし強かったなあ、アイツ。俺、勝てるのか？」

「弱音を吐くな。男らしくないぞ、一夏」

「分かってるよ。だからISの使用申請書出したんだろ。練習しないと話にならねえからな」

「そういうえば、一夏の専用機はいつ来るんだ？」

「分からない。早いところ来てくれないと、このままじゃぶっつけ本番になりそうだよな」

一夏とセシリアの試合は三日後。それまでの訓練機の使用許可は

出ているが、一夏が本番で使うのは専用機だ。

格上の相手と不慣れな機体で戦うのは、不安があるだろう。

「まあなんにしたって、俺は俺にやれることをやるだけさ」

「う、うむ、そうだな、どうしようもないことで悩んでも仕方がない」
「……………」

気負わず、しかし頼もしい表情で言う一夏に、箒の顔が僅かに赤くなる。

しかし一夏はそんなことには気付かない。うまいうまいと言いな
がら、和食セットを次々胃に放り込んでいる。

「ごちそうさまでした」

「……………」

食事を終え、席を立つ。連動するように視線が付いて来るが、やはり無視。

そう、一夏の言う通り、己たちはやれることをやるだけだ。さしあ
たっては勉強である。

さて、午後の授業はなんだったか……

一日の授業の締めくくり、SHR。教壇に立つ千冬さんから、驚愕
の事実が前置き無しに告げられた。

「井上の専用機が完成した」

「……………」

「データ取ったの昨日ですよね!？」

!!!?!!?

「いくらなんでも早すぎませんか!？」

「如月重工が一晩でやってくれましたっ!」

「流石変態企業！ 私たちに想像もつかないことを平然とやってのけるッ！」

「そこに痺れる！ 憧れるウ!!」

大混乱に陥る教室。かく言う己も驚いている。

……まさか一日で出来上がるとは。

「やかましい」

バアアン!!

千冬さんが教卓を叩く。途端に静まる教室。

「落ち着け、馬鹿者共」

千冬さんは険しい顔で言う。頭痛でもするのか、こめかみを揉みながら話を続けた。

「機体は昼過ぎに完成し、各種チェックを済ませ、今学園に向けて搬送中だ。あと三十分ほどで到着するらしい」

「……………」

「先方はすぐに起動させたいと言っている。場所は第三アリーナ。井上、準備しておけ」

「……………はい……………」

予想外ではあったが、早くて困ることはない。如月重工の仕事振りに感謝するでしょう。

と、思った己は胸焼けするほど甘過ぎた。

「やあやあ一日振りだねえ井上君！ また会えて嬉しいよ！」

「……………」

如月社長はかなり興奮していた。昨日の別れ際に言っていた通り完徹したのでろう、その目は血走っている。

その様子に、己について来たクラスメイトたちが一步引く。己も一步下がりがりたかったが、肩をガツチリ掴まれて下がれない。

「…………随分と早かったですね」

「もともと七割方出来てたからねえ」

千冬さんの問いに即答する如月社長。しかしそれだと、単純計算でIS一機を四日で開発出来ることになるのだが。

「じゃあ最終調整を始める前に、うちの開発主任を紹介しとこうか。彼は僕が学生だったころから一緒に色々やってきた、網田君だ」

如月社長に促され、白衣を着た男が前に出る。

背はかなり高いが、体つきは細いどころではない。ちよつとしたことで折れそうだ。

黒い髪は伸び放題で、前も横も全部纏めてうなじの後ろで束ねている。

気味の悪い笑みを浮かべる顔には丸い眼鏡が掛けられており、レンズが光を反射して、その下の目を見ることは出来ない。

「……………なんだ、この、得体の知れない威圧感は。」

「はじめまして、井上さん。如月重工開発主任の網田です」

網田主任の声は妙に甲高く、聴いていて落ち着かない。しかしそんな己の心中を察する気は皆無なのだろう、網田主任は無遠慮に己をじろじろと見る。

「いやはや、昨日の映像を見たときから思っていました、実物はさらにお美しい。特にその左腕！まるでミロのヴィーナスのようだ！」
「……………」

何故だろう、褒められている筈なのに、全く嬉しくない。己の後ろにいる一夏が殺気じみた怒りを発しているからか？

「さあ、紹介も終わったことだし、早速始めよう！　すぐ始めよう！」

網田君、やってくれたまえ！」

子供のように目を輝かせながら、如月社長が指示を出す。

眼鏡のレンズをギリリと光らせながら、網田主任がそれに応じた。

「では御披露目といきましょう！　これが我々如月重工IS開発部が総力を結集して作り上げた、第三世代型IS——」

第三アリーナのピットに搬入されたコンテナが、重々しい音をたて、ゆっくりと開く。

そこに在ったのは、淡い銀の輝きを放つ機体。

己の、専用機。

「――朧月おぼろつきですっ！」

集まっていたクラスメイトたちが、一斉に息を飲む。

コンテナから現れた銀色のIS、朧月。その姿は、どのような方向性を与えられたのか、一目で分かるモノだった。

通常のISより細く、内部機関が一部剥き出しになった脚部。

頭部の装甲は、額から頭頂部までを覆う流線形。

腕は肩や肘が広く張り出し、動きを阻害せずにパワーアシストを確保している。

――この機体は、速い。

「では早速、武装の説明をさせてもらいます。……うふふ、どれもこれも、自慢の逸品ですよ」

そう言って網田主任が指したのは、その左腕。

――否、それはとても腕とは呼べない。それは長く分厚い、片刃の大剣だ。

「まずはこれ、左腕のない井上さんに合わせて、腕の代わりに取り付けた大出力特殊スラスタ、その名も月輪がちりん。左右の推力バランスをあえて崩すことで、複雑かつ変則的な機動を可能にします」

いきなりイカレた装備。流石如月、という声がそこかしこから聞こえる。しかもこの見た目でスラスタとなれば、ただの推進装置ではあるまい。

「それだけではありません！この月輪はこれ自体を刃として使える、スラスタを兼ねた武器でもあるのです！」

クラスメイトたちが、うわあ、と呻く。

それをまったく気にせず、網田主任は説明を続けた。次に指したのは、ISにはかなり珍しい、非固定浮遊部位アンロック・ユニットではないスラスタ。推力のロスを少しでも減らす為か背中に直接取り付けられたそれは大型の双発式で、間には砲口のような何かがある。

「続きまして、背部の大型スラスタ、水月すいげつ。これはエネルギー噴射に

よる推進だけでなく、二つの噴射口の間にあるユニットに特殊な炸薬が装填されており、瞬間的、爆発的な加速を生み出します」

操縦者に与える反動をまるで考えていないかのような、正気の沙汰とは思えない代物である。もはや言葉を失うクラスメイトたち。

「次は、左肩のガトリングガン、月影^{つきかげ}。射角が広く、精密な射撃よりも弾幕を張るのに向いています」

ようやくまともなものが出てきた、とクラスメイトたちが一息つくが、

「牽制を目的としていますので、弾頭は散弾を採用しました」
それは罠だった。

いずれ劣らぬ変態装備の数々に皆が戦慄している中、己は機体の右腕に取り付けられた武器に、全ての意識を奪われていた。

朧月を見たその瞬間から、「それ」以外は視界に入っていなかった。「それ」は細長い、菱形の板のような形をしており、一見しただけでは武器とは思えない。

——だが、己にだけは分かった。なんの説明も受けず、ただ見ただけで、まるで最初から知っていたかのように、「それ」がどのようなものであるかを理解していた。

「……………これ、は……………」

「ううん？…さすが井上さん、目の付け所が違いますねえ。そう、今まで説明してきた朧月の武装は、それを最大限活かすための、言わば引き立て役でしかありません」

そんなことは分かっている。

ここにいる誰でもなく。如月社長でも、網田主任でもなく。

この己こそが、「それ」のことを最も深く理解している。

「これこそが、朧月が持つ最大にして最強の武器、膨大なエネルギーを極狭い範囲に収束させることで絶大な破壊力を生み出す、光の剣——」

——だって、「それ」は。

あまりにも——

「——月光ですっ!!」

——「彼女」の剣に、似ているから。

第9話 朧月

「というわけで、最終調整のために早速模擬戦をしよう!!」

全くテンションを落とすことなく、それどころか天井知らずに上げながら叫ぶ如月社長。クラスメイトのうち数名が怯えだした。

「さあ、頼むよオルコット君!!」

「ええっ!?!」

突然振られてうろたえるセシリア。

「いえ、ですがわたくしの——」

「早くしてくれたまえ、もう待てそうもないんだ! さあ! さあさ

あ!! さあさあさあ!!」

「ひい……!?!」

如月社長の余りの剣幕に涙目になるセシリア。無理もない、あれは恐すぎる。目が完全に狂人のそれだ。

仕方がない。今の如月社長と関わるのはかなり嫌だが……本当に嫌だが、助け船を出そう。

「……社長……」

「なんだね、井上君? 僕の我慢もそろそろ限界なんだ、早く朧月の勇姿を魅せてくれ!!」

「……」

如月社長の注意を引きつけながら、セシリアに目で合図を送る。幾分余裕を取り戻した彼女は頷き、申し訳なさそうに言った。

「如月社長。残念ですが、わたくしのブルー・ティアーズは、昨日のダメージからまだ回復しきっていませんの」

「え、そうなの? 使えないなあ」

セシリアのこめかみにビシリと血管が浮かび上がるが、如月社長は全く気にしていない。

「うーん、じゃあ訓練機は?」

「事前に使用申請書を提出していた生徒たちに、全て貸し出しています」

「教師権限でどうにかならない?」

「授業中や緊急時ならともかく、今はただの放課後です。申請が通るまで時間と手間がかかりますから、無理矢理取り上げると生徒から不満が出るでしょう」

如月社長の問いに淀みなく答える千冬さん。実に頼もし——

「……しようがない、生身相手に我慢するかなあ……」

——待て、今なんて言った。

とても正気とは思えない独り言が聞こえたところで、すつ、と誰かが手を挙げる。

「……あの」

その誰かは、一夏だった。

「俺、今日——訓練機の使用許可、貰ってます」

「いやさすがはブリュンヒルデの弟君だ、用意がいいね！ では頼むよ織斑君！」

アリーナ内に響く、如月社長の興奮しきった声。一夏の顔が一瞬嫌そうなものになるが、すぐに気を取り直して己に向き合った。

「……別にこのために使用申請したんじゃないんだけどな。まあ訓練にもなるだろうし、丁度良かったのは確かか。最終調整とかいうのも、ついでにやっちゃおう」

「ついでじゃ困るんだよ、織斑君。僕らにとってはそちらが本題なんだ、君の訓練なんてどうでもいいんだよ」

「……………」

——社長。頼むから、空気を読んでくれ。

怒りを鎮めるように一度深呼吸した一夏が、己に話し掛ける。

「ISでシンと戦うのは初めてだな。……手え抜くなよ、俺も本気でこぐぜ」

「……無論……」

悪いが、生身だろうがISだろうが、一夏にはまだ負ける訳にはいかない。

己の今の役目は、一夏の目標で在り続けることだ。千冬さんでも良いのだろうか、彼女は少々特別過ぎる。負けても仕方ないと、心のどこかで思ってしまうだろう。

だから、己のような若い年の者——所謂ライバルと呼べる者の方が、一夏の相手には適任だ。

そして己自身、更なる高みを目指す身だ。すぐ後ろを追い掛けて来る者がいれば、走りがいがある。

「こちらの準備は整いました。それでは、始めてください！」

網田主任の声を合図に、一夏が近接ブレードを展開し、青眼に構えた。剣道でも剣術でも使われる、基本にして正道の構えだ。

対して己は、右足を一步引いて左半身になり、月光が取り付けられた右腕を目線の横まで持ち上げ、切っ先を一夏に向ける。

己なりの改変は加えてあるが、古流剣術に使われる、霞の構え。

「——行くぜ」

「……来い……」

一夏がスラスターを噴かし、一気に突撃してくる。瞬く間に接近、くん、とブレードを振り上げ、まずは唐竹の一撃。

「しっ——」

鋭い呼気に見合った見事な一撃を、月光で受ける。

月光はかなり頑丈に作られており、これ自体を盾のように使うことも可能だと、網田主任は言っていた。その言葉に偽りはなく、ブレードの強烈な一撃を真っ向から受けても傷一つない。

「はあっ——」

「……っ」

初撃を受けられた一夏は、突撃の勢いを殺さずに刃を翻し、駆け抜けるようにして胴を薙いだ。それも月光で受けるが、装甲で吸収しきれなかった僅かな衝撃が骨に響いた。

淀みない、流れるような、力有る二連撃に幼なじみの成長を実感する。

——だが、まだ足りない。

(……まずは……)

己の背後に回った一夏を追うべく、月輪を起動。片方だけから噴射するエネルギーが、朧月を高速で回転させる。

再びブレードを振り上げ三撃目を打ち込もうとしていた一夏が、そのあまりの速さに目を剥いた。

ガギイ!

「く……!?!」

刃と刃の噛み合う音。打鉄の近接ブレードと朧月の月輪が火花を散らす。

このタイミングで反応し、かつ反射的に振り下ろしたブレードで初撃に劣らぬ太刀筋を描いて見せた一夏に感嘆する間もなく、驚愕した。

——出力が強過ぎる。

打鉄ごとブレードを弾き返した月輪は、そのまま朧月を三回転させようやく止まった。なるほど、光を放ちつつ回転するその様は、確かに真円の満月の如くだろう。その中心にいる己はたまったものではないが。

「……すっげえ衝撃。冗談だろ、推力だけでこれかよ……」
「……………」

二人して戦慄する。

この月輪、性能は申し分ないが、じゃじゃ馬過ぎる。扱い難いどころではない、下手に使えば、すぐに敵を見失うだろう。

加えてブレードとしては、肘や手首といった関節が使えない分、攻撃がどうしても大雑把になってしまう。少々工夫が必要そうだ。

「せいっ!」

再び一夏の突撃、今度は突きを放つ。月光でいなし、そのまま立ち止まっつての打ち合いへ。

「おおおおおっ!」

「……………」

雄叫びを挙げ、一夏が連撃を繰り出す。スラスターを併用し、推進力を上乘せした剣戟は重く、己の右腕を痺れさせる。

「ぜえい!」

(……む……)

片腕では抑えきれず、右腕を弾かれた。その隙を逃さず一步踏み込む一夏に、起動した月影の銃口を向ける。

「……………」

三連装の砲身が回転し、散弾の雨を吐き出した。想像を超える反動に照準が大きくブレたが、この距離と散弾の攻撃範囲なら関係ない。

関係ないが——

「うおおおおつ!?!」

堪らず退がる一夏。その顔は涙目だ。

「ぞっけんななんだそれ恐すぎるぞ!!」

「……………すまん……………」

思わず謝ってしまった。

ただでさえ強力な散弾を、毎秒三十発という驚異的な速度で連射するのだ。轟音と共に降り注ぐ散弾に打ち据えられ、打鉄の全身から火花があがる様は、撃ったこちらも驚くほどだった。

「それもう近くで撃つなよ!絶対に撃つなよ!?!」

「……………」

相手に恐怖心を植え付けることが出来る、という点では破格の性能である。

だが弾が少ない。体積の大きい散弾を使っているので仕方がないが、要所を見極めなくては瞬く間に弾切れだ。

……………牽制用なのに無駄弾が撃てないのか。本末転倒だな。

「……………」

月影を警戒してか、一夏が距離を取る。どうやら間合いを計っているようだ。

その見切りはなかなか的確で、朧月の通常のスラスターでは一足の間合いとは言い難い。攻められても幾分か余裕を持って対応出来るだろう。

——通常のスラスターでは、だが。

(……………ならば……………)

ガコン、という音を立て、水月に特殊カートリッジが装填される。

撃針が信管を叩き、自身を弾丸として撃ち出す狂気の機構が、その力を見せ付けた。

「がっ……!?!」

その瞬間、肩甲骨に鈍器で殴られたような衝撃が走る。一瞬で一夏に接近するが、己は加速の衝撃で体勢が崩れ、一夏はあまりの速さに反応出来ていない。

——結果。

「うおわあっ!?!」

「……っ!」

衝突。二人もつれ合って、地面に落ちる。

「ぐ……おい、大丈夫か、シン!?!」

「……ぐう……」

体を動かそうとすると、肩に激痛が走った。折れてはいないようだが、少し傷めたようだ。

「おい、中止だ! 早くシンの手当てを!」

悲鳴のように一夏が叫ぶ。それを受けて、治療班が慌てて駆けつけ、ISを解除した己を運び出していく。

「シン、大丈夫か?」

「……無用……」

ついて来た一夏が心配そうに声を掛けてくる。今は己の怪我を気にかけているが、それが収まれば、次はその顔を怒りに歪めるだろう。

……如月社長に、殴りかからなければいいが。

「なるほど、水月の威力が強すぎる、と。それくらいならすぐに調整出来るかな」

「ええ、肩甲骨周辺の保護機能を改良しましょう。社に戻れば、一時間もあれば出来るかと」

「それじゃ、早速データをまとめておいてくれ」

診察の結果、怪我は大したものではなかった。だが二、三日は出来

るだけ肩を動かさないように、とのことである。

そうして一夏と共にピットに戻ると、如月社長と網田主任が先の会話をしていたのだ。

「おや、井上君。もう少し待ってくれたまえ、今データの解析中だから」

「……てめえ」

全身から怒りを発し、一夏が一步前が出る。

放っておけば何をするかは明白だ。なので、一夏の手を掴んで止めたが――

「離せよ。あの野郎、一発ぶん殴ってやる」

「……」

全く止まる様子もなく歩き続けようとする。自然と右手を引かれる形になり、肩が痛んだ。

「……っ」

「ご、ごめん。大丈夫か？」

途端に怒りを霧散させて、己の方を向く一夏。

……少し、卑怯だったか。

「どういうつもりですか、如月社長」

「うん？ なにが？」

今度は千冬さんが怒った様子で、如月社長に話し掛ける。

「自らの機能で操縦者に怪我をさせるようなISを作ったことについてです」

「だから今そこを調整しているんじゃないか」

「そういうことでは――!?!」

「……」

このままでは千冬さんの怒りが加速していくだけだと思ったので、視線で止める。

そうして己のために怒ってくれるのはありがたいが――これは、己の問題なのだ。

「ふむ。朧月はどうだったかね？ 井上君」

「……気に入った……」

「なっ!? ちょっと、おいシン!？」

「そうだろうとも! いやあ、君ならそう言ってくれると思っただよ!」
確かに隴月はとんでもない代物だったが、だからと言ってまっとうな機体など己には合わん。水月は流石に調整してもらおうが、あとは己が隴月を使いこなせるようになればいい。

「……いいのか、井上」

「……………」

心配そうに尋ねてくる千冬さんに、頷いて答える。

そんな己に呆れの溜め息を吐いて、その怒りをようやく納めた。

「……本人がそう言うなら、私からは何も言わん」

「……………」

「話はまとまったかな? なら今日から、この隴月は君の専用機だ! 要望があつたらすぐに、遠慮なく言っしてほしい。二十四時間、365日受け付けるからねっ!!」

「……………」

周囲からの目を全く気にせず、上機嫌な如月社長。この人相手に気を使う必要があるとは思えないので、遠慮なく頼らせてもらおう。

「さすがに今日はこれ以上は無理かな? まあ、怪我が良くなつた頃にまた来るよ。その時はもう一度頼むよ、井上君」

「……承知……………」

隴月のデータ解析をしていた網田主任に声を掛けて、帰り支度を始める如月社長。

その姿を、一夏は最後まで睨み付けていた。

「いのっち、肩痛くない?」

「……平気……………」

今己は、お互いに打鉄を装着して打ち合っている一夏と箒を眺めている。
箒が使っている分の打鉄は本来己に対して許可が出ていたものだ

が、流石に今日はもう使えないので、山田先生に頼んで箒が使えるようにしてもらった。

「はあっ！」

「せいっ！」

剣の腕はほぼ互角の二人だが、ISの腕も同程度のようだ。

どちらも最初はぎこちない動きをしていたが、少しずつ良くなつて来ている。

「……あの機体で、ほんとにいいの？」

「……………」

心配そうに尋ねてくる本音に頷いて返す。確かに色々と問題のある機体だが、流石は如月重工の技術力といったところか、性能自体は高い。

基本的に接近戦しか出来ない己には、あれくらい突き抜けた機体の方が都合がいい。

——ただ、月光の威力を試せなかったのは少々残念だ。

「無理だけはしないでね、いのっち」

「……………」

それは出来ない相談である。必要なら、己はいくらでもこの身を危険に晒すだろう。

——己にはもう、この命くらいしか、懸けるものがないのだから。

「こういう時は、嘘でも「うん」って言っとくんだよ」

「……………」

呆れたように言う本音に、申し訳なく思う。だがそれ以上に、この少女とは、守れない約束はしたくなかった。

「じゃあさ、せめて怪我した時は、すぐに、正直に言うんだよ？」

「……承知……」

どうせ本音のことだ、己が隠したところですぐにバレるだろう。なら始めから正直に言ってしまった方が、かける心配は小さく済む筈だ。

己の返答に満足そうに笑って、本音は二人の訓練に視線を移す。一夏の攻めに、箒の守りにいちいち感嘆の声をあげてはしゃいでいる少

女の背中に、聞こえないように声をかけた。

「……ありがとう……」

「えく？ なにか言ったく？ いのちちく」

「……………」

不思議そうな顔をする本音に、無言を返す。首を傾げてから前に向き直り、再びはしやぎ始める本音の背中を見ながら、想う。

——お前がルームメイトで、良かった。

第10話 一夏

いよいよ今日は一夏とセシリアによる、クラス代表決定戦が行われる。その準備のため、今、己たちは第三アリーナ・Aピットにいるのだが――

「……来ないな、IS」

「……そうだな」

「……………」

そう、政府から支給されるという、一夏の専用機がまだ来ていない。「……急に決まったことだからな。準備に時間がかかっているんだらう」

「けどシンのISは一日で出来たぞ」

「あれは如月重工がおかしいんだ。普通はISの開発にはかなりの時間がかかる」

「……あんな変態どもでも、腕は確かかってわけか」
「……………」

如月重工の話になった途端に不機嫌になる一夏。よほど嫌いなようだ。

「どうすんだよ。これじゃ練習どころか、ファースト・シフト一次移行も出来ないぞ」
「わ、私に言うなっ!」

IS、特に専用機には、コアに残っている以前の操縦者の情報を消去する初期化、新しい操縦者に合わせてコアを調整する最適化フィッティングという機能が備わっており、それらを合わせてファースト・シフト一次移行という。

この一次移行を済ませて、初めてそのISは操縦者の専用機となるのだ。己の朧月も、既に一次移行だけは済ませてある。

しかしセシリアとの試合はもう間も無く始まる。一次移行をする時間は、もうないだろう。

「お、お、織斑くーん!」

まだかまだかと待っていると、聞こえて来たのは山田先生の声。息を乱し足をもつれさせながら、必死にこちらへ走って来る。

「まあまあ先生、まずは落ち着いて。深呼吸です、ほら、ヒツヒツプー、

「ヒツヒツフー」

「ヒツヒツフー……て、これは違いますよう！」

「教師をからかうな、馬鹿者」

一夏の頭に出席簿が振り下ろされる。呆れ顔の千冬さんの登場である。

「千冬姉……ぎやつ!？」

再び振り下ろされる出席簿。

「貴様は何度言えば分かるんだ？ 私のことは織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生……」

「そ、そんなことより！ 来ました、来ましたよ！ 織斑君のISがっ!!」

「……！」

——漸く、か。

「早く準備しろ。本来こんな試合など無用なんだ、アリーナは特別に貸し出されているに過ぎん。調整の時間など与えられると思うな」

「……ぶっつけ本番ってわけか」

「一夏、武術を志す者、常在戦場が基本だ。この程度は言い訳にならんぞ」

「……りよーかい」

「……」

千冬さんも箒も、口では厳しいことを言っているが、心配しているのが透けて見える。素直じゃないのだ、この二人は。

一夏には、そんなことに気付く余裕も無いようだが。

「……俺の……」

「……」

返事こそするものの、その意識はまったく別の方へ向いている。ピットの搬入口から目を離そうとしない。

——聴こえる。

その重厚な防壁扉の中から、重々しい駆動音が響いている。

——それはまるで、忠誠を誓った主のもとへ馳せ参ずる、甲冑を身に纏った騎士の足音のようで。

——そして、一切の飾り気のない、純白の機体はその姿を顕した。
「……これが……」

「はい……これが織斑君の専用機——白式びやくしきですっ!!」
心此処にあらざとといった様子の一夏が、白式に近づいて行く。

親を探す幼子のように伸ばされた手が、白式に触れた。

——その瞬間、ピット中が、光で満ちる。

「う……お……」

一夏の表情は、驚きか感動か。そのまま白式に乗り込み、装甲に手足を入れる。

白式に体を任せると、空気の抜ける軽い音と共に、装甲が閉じる。冷たい金属の塊だった白式に、説明の出来ない何かが巡って行くのを感じた。

「システム、オールグリーン。……気分はどうだ、一夏?」

千冬さんの声が、僅かに震えていることに、一夏も気付いたのだろう。その口元を僅かに緩ませて、安心させるように、言葉を紡いだ。

「良いよ。……ははっ、なんて言うのかな。全国大会の時より気合い入ってる」

「……そうか」

ほっとしたような声。

そんな姉弟の遣り取りを、なんと言葉を掛けていいか迷っている様子で、箒が見詰めている。

——その不安げに震える肩に、そっと手を置いた。

「……真改……」

「……」

黙って頷く。

己が言うことではないだろうが、言葉にしなければ伝わらないこともある。

だから、言わないと。

「……ありがとう」

「……」

己に小さく微笑みを浮かべてから、箒が一夏を見る。

その瞳を、真っ直ぐに。

「……勝つてこい、一夏」

「ああ」

力強く答える一夏に、箒も安心したようだった。

——まったく。どいつもこいつも、素直じゃない。

「……シン」

「……………」

ピット・ゲートの前まで移動し、今まさに飛び立とうというところで、一夏が己に声を掛けて来た。

首だけ振り向いて、その顔に、不敵な笑みを浮かべて——

「俺の剣、良く見とけよ」

「……ぬかせ……」

——いいだろう。見せてみる、この己に。

お前が、どれほど成長したのかを。

「——行くぜっ!!」

そうして、一夏は飛び立った。

——敵が待つ、戦場へ。

「ようやく来ましたのね。待ちくたびれましたわ」

「そりゃ悪かったな。けど遅刻したのは白式こいつだぜ、俺のせいじゃない」

腰に手を当てるポーズをしながら言うセシリアに、軽口で答える。

余裕があるわけじゃない。緊張を紛らわせようとしているだけだ。

「……試合を始める前に、訊きたいことがあります」

「なんだよ」

「あなたは、真改さんの幼なじみだと聞きましたが?」

その言葉で、訊きたいこととやらの察しがついた。シンに関わったやつは、大抵そのことが気になるからだ。

「……あの方の左腕のこと、どこまでご存知で?」

——やつぱり、な。

正直、辛い。

シンの左腕は、俺の罪だ。それを突き付けられて、気分が良いはずがない。

だけど、俺は「力」を手に入れた。まだまだ扱いきれるとは思えないが、それでも俺の目標に向けた足掛かりとしては、この上ない「力」を。

だから——いい加減、覚悟を決めないと。

「……全部知ってる。俺が、もぎ取ったようなもんだからな」

「——な」

セシリアの顔が驚愕に歪む。

次いで、怒りに。

「……あなたが、真改さんの腕を……？」

「ああ、俺のせいだ。無知で無力で無謀な俺を庇って、あいつは左腕を失くしたんだ」

セシリアの怒りは凄まじい。俺を睨み殺そうとしているかのよう
に、その眼に殺気を載せている。

——その瞳を、真っ向から見返した。

「だから、俺は強くならなきゃいけないんだ」

「……は？」

突然話が飛躍して、付いて来れないのだろう。セシリアがポカんとした顔をする。

構うもんか、これは俺の「決意」だ。まずは、言葉にしないと始まらない。

「シンは、初めて会った時から強かった。腕を失くす直前じゃあ、あの千冬姉と、生身でなら互角に戦えるくらいにな。……信じられるか？

まだ小さな女の子がだぜ？」

当時のことを思い、苦笑が浮かぶ。あれには度肝を抜かれたもんだ。

「腕を失くしてからも、強かったよ。強かったけど、それでもどうしても弱くなった。千冬姉には、勝てなくなった」

当たり前だ。実力が拮抗している二人のうち、片方だけが大きなハ

ンデを負えば、その勝負は目に見えている。

「シンがIS学園を受験するって聞いた時、思った。やっぱシンはすげえなって。シンなら、たとえ右腕しかなくても、もしかしたら千冬姉と同じ、「ブリュンヒルデ」になれるんじゃないかって」

左腕がないなら、右腕だけで剣を振ればいい。

そんな当たり前で、だけど無謀とも言えることを、シンは黙ってやって見せた。

「けどさあ、そうならどうなる？ シンの左腕は？ 無知で無力で無謀な、なんの役にも立たない男のクソガキを庇って失くして——そんな馬鹿なことのために大事な左腕を捨てたなんていう、汚点になっちゃうんじゃないか？」

片腕だけでも最強なら、両腕が揃っていたならばどれほどだったろう。世間の関心はそこに向くに決まっている。

そして、事実を知って思うのだ。

——なんて勿体無いことをしたんだ、と。

「——認めねえ。認められるか、そんなこと……！」

総身を怒りが満ちた。今日の前に鏡があつたら、そこに写る愚か者の顔を、俺は即座に叩き割るだろう。

「ずっと憧れてた。今だってそうだ。そのシンが、俺のせいで、あんな目にあつた」

生涯忘れることはないだろう。

病院のベッドの上で、生命維持装置に繋がれ、眠り続ける少女の姿を。

——包帯で覆われた、欠けてしまった左腕の、その様を。

「シンは気にするなって言う。自分は平気だからって。」

……そんなわけあるか。あいつは剣士で、女の子だ。それが腕一本失くして、あんな傷つけられて、平気なわけがねえだろうが」

だから誓った。次は俺が守ると。そのために強くなると。

けれどシンはそんなこと求めてなくて、俺の助けなんか必要なくて、だから、どうすればいいのか分からなくなった。

「俺がISを動かせるって分かった時、決めた」

シンを守る。シンだけじゃなく、俺の大切なものは、全部守る。その誓いは今も変わらない。

そしてそこに、もうひとつ、新たな誓いを立てた。

「俺が証明する。強くなって、シンにも、千冬姉にも負けなくらい強くなって、証明するんだ。」

——織斑一夏は、井上真改が左腕を捨ててまで守るほどに、価値のある存在だってな」

だから、そのために。

「俺の糧になつてもらおうぜ——セシリア・オルコット」

アリーナ中に響き渡った、一夏の決意。

それを全観客に聞かれたという羞恥も忘れて、己は呆然としていた。

——だって、一夏のその決意は。

(……同じ……?)

かつて「彼女」の生き様を世界に肯定させるために戦った、己とても良く似たものだったから。

「……一夏……」

達成感に似た喜びが、心を満たす。

一夏が「彼女」を知る筈はないが、それでも、一夏は「彼女」を認めてくれる、そう確信した。

己のかつての夢を、叶えてくれたのだ。

(……それが、お前の「答」か……)

お前の友であることを、誇りに思う。ならば己も、その決意に見合う強者となろう。

——お前の目標として、胸を張れるように。

俺の宣言を聴き終えて、セシリアが表情を引き締める。

手に持ったレーザーライフル、スターライトmkⅢを俺に向け、四機のブルー・ティアーズを展開する。

セシリアの必殺の布陣。どうやら彼女は、俺を「敵」として認めたようだ。

それを受け、俺も武装を展開する。白式に装備されてるのは……近接格闘用ブレード一振り、のみ。

ハッキリ言ってこの装備を考えた人間の正気を疑うが、俺にはかえって好都合だ。武器がそれしかないのなら、迷う必要もない。ただ近付いて、思い切りぶった切ればいい。

「……いいでしょう。ならその決意、まずはわたくしに証明してみなさいっ!!」

「言われるまでもねえ。行くぜ、セシリア・オルコットっ!!」

一斉に放たれる光の雨を、大きく回避。ビットによる包围を防ぎつつ、接近を図る。

あのビットに囲まれるのはまずい。俺にシンのような避け方が出来るとは思えない、囲まれれば一気に押し潰される。

しかし白式の機動力はかなり高いようで、俺の下手くそな回避でもどうにか避けられる。この速さがあれば、チャンスを見極められれば反撃だって出来るだろう。

——だから、今は耐えろ。

ブルー・ティアーズの攻略法はシンが見せてくれた。白式はあの時シンが使っていた打鉄よりもずっと性能が良い。

なら、後は俺次第だ——!

「うおおおおおっ!」

「この……!」

何発かはかわせず被弾する。だがそんな程度では、白式に大したダメージは与えられない。防御力もかなりのものだ、基本性能はずば抜けて高いだろう。

俺にはもったいないくらいだが、ありがたく使わせてもらおうぜ。

「ブルー・ティアーズ!」

「ちいっ！」

だがセシリアの技術は、性能だけでは打ち破れない。機体の制御に手一杯な俺では、四機のビットを巧みに操るセシリアに近付けない。やっぱりまずは、ビットの数を減らさないと。

(落ち着け……！) ビットは必ず死角から撃つて来る。動きを先読み出来るはずだ……！)

ビットの動きは速いが、白式ならどうにか追いつける。上手く回り込めば、攻撃を受ける前に斬れる。

だから、見極める。次に来るのはどこだ。背後か、頭上か、足下か

「……………こっだっ！」

ビットが一機、俺の真上に滑り込んで来たのを見計らい急上昇、精密射撃のために一瞬停止しているビットを――

「なっ!?!」

――止まって、ない。スライドするように動きながら、レーザーを発射して来た。

それは狙いが甘く、当たることはなかったが、外れたことの安堵を押し潰すような悪寒が背筋に走った。

……………こいつ、まさか……………!?!

「ふふ……………ただ良く狙って、正確に当てるだけが射撃じゃない。わたくしも、あの戦いから学んでいますのよ?」

「くっ……………!」

セシリアの長所は、射撃精度の高さだ。だが今はあえてそれを捨て、ビットからの射撃は精度ではなく、四機全てを同時に動かしながら撃っている。当然その命中率は落ちるが、しかしまったく当たらないわけではないし、レーザーの数自体は増えている。

その何が厄介かと言うと、射撃が正確じゃないと、その狙いを読むことは逆に難しくなる。何せ撃っているセシリア自身にも、どこにレーザーが飛ぶかがはっきりとは分からないからだ。野球のナックルボールを想像すると分かりやすいかもしれない。

だから俺は、どこに来るか、当たるかどうか分からないレーザー

を避けるために、さらに大きく避けなくてはならず。

「はっ！」

「ぐあっ！」

——そうして出来た隙に撃ち込まれる、スターライトmkⅢの攻撃だけは、恐ろしく正確なのだ。

「……そりゃ当然だよな、自分で撃ってるんだもん……！」

シンと戦った時にはあった弱点が一つ、早くも解消されている。高飛車なお嬢様かと思ったら、随分謙虚なところがあるもんだ。

これで俺の勝率はさらに下がっただろう。だがそのくらいで、諦めるつもりはねえんだよ——！

（こうなったら、ビットからの攻撃は気にするな！　ライフルだけ避ける！）

幸い、ビットの攻撃力は大したことはない。数発なら直撃しても大丈夫だ。

だがこの作戦変更がバレれば、セシリアもすぐにビットの攻撃も当てる作戦に変えてくるだろう。そうなったら、さすがに保たない。

つまり、勝機は一度つきりだ。

「う……お、おおおおおっ!!」

「な……!?!」

スラスターを全開にし、セシリアに向かって一直線に加速する。ライフルから放たれたレーザーをなんとかかわすが、ビットのレーザーが幾条も装甲を貫く。

——だが、白式おまえなら耐えられるだろ。強引な突撃で悪いが、付き合ってもらうぜ——！

「く、固い……!?!　なら、これはどうかしら!?!」

セシリアのスカート状のアーマーが外れ、二機のビットが起動する。そこから放たれたのは、レーザーではなく、ミサイル。

これを食らえば体勢が崩れ、一気に畳みかけられるだろう。

だが、これは——

「もう、見てんだよっ！」

こうくるだろうことは分かっていた。挟み込むように迫る二発の

ミサイルを、バレルロールに似た動きで回避する。

——その、瞬間。

「——かかりましたわ」

ミサイルが、ビットから放たれたレーザーに撃ち抜かれ、俺の目の前で爆発する。爆風に煽られ、大きく体勢を崩された。

(くそ、ここまでか……!?)

起死回生を狙った突撃は読まれていた。発射直後のミサイルを射抜く技術も想像以上だ。

これじゃあもう、打つ手が——

「……? これ、は……」

負けた。そう思った瞬間だった。

白式が光り出し、少しずつ、その形を変えていく。

純白の装甲はさらに洗練され、騎士が身に着ける甲冑のよう。

手にしたブレードは、この目に焼き付いた名刀に、とても良く似た

「……へ、そうかよ。お前はまだ、やる気なんだな——」

——雪片式型。かつて千冬姉が振るった雪片かたなの名を継いだ、最強の

刃。

「なら俺が、諦めるわけには、いかねえよなあっ!!」

知識では分かっている。これは一次移行、ファースト・シフト 初期化と最適化をフォーマット 終了ファイティング ただけに過ぎない。

けれど俺には、まるで白式が、俺を叱咤しているように思えたのだ。

——自分はまだ戦える。お前も付いて来い、と。

「行くぜ、相棒っ!!」

セシリアは突然の事態に驚き、隙を晒している。この最後のチャンスを逃すわけにはいかない。

「うおおおおおおおっ!!」

身体が軽い。今まで感じたことのない大きな力が、全身に満ちている。

そして手にした雪片式型が、目が眩むほどの輝きを発し始めた。

——知っている。これは、零落白夜。自身のシールドエネルギーを

引き替えに、ISのバリアーを含むあらゆるエネルギーを喰らい尽くす、諸刃にして必殺の剣。

「チエエエストオオオアアアッ！」

大上段に構えたそれを、渾身の力を込めて振り下ろす。

この一撃で決める。こいつが当たれば、今までの劣勢を全部ひっくり返しても釣りが来る——！

「はあああああッ！」

だがセシリアも、ただでやられるほど甘くはなかった。二機のミサイル型ブルー・ティアーズ、手にしたスターライトmkⅢを盾にすることで、紙一重で回避したのだ。

かわしきれなかった切っ先が僅か数ミリ掠めただけで、シールドエネルギーの大半を奪い去って行くが、それでもセシリアは、決して怯まない。

「お行きなさい——」

得物を失ったことで空いた両手を、左右に大きく広げる。自らの子供たちを自慢する、母親のように。

「——ブルー・ティアーズッ!!」

背後から襲いかかる、四条の閃光。ビットの一斉射撃だ。

背中を撃ち抜かれる衝撃に歯を食いしばり、零落白夜をもう一度振り上げる。

残るシールドエネルギーは、ごく僅か。発動中常にシールドエネルギーを消費する零落白夜が使えるのはこれが最後。外せばその時点で俺の負けだ。

しかしセシリアも、スターライトmkⅢとミサイルビットを失っている。レーザービットも、次の射撃を行うまでには一瞬の間がある。

本当に紙一重の差だが、俺の方が速い——！

「インター——」

静かな、祈るような声。それは目の前の、反撃の手段全てを失ったはずの少女から聴こえた。

「——セプターアアアッ!!」

その声が、雄叫びに変わった瞬間。

少女の手に、強力にはとても見えない、小さな短剣が現れて。その刃が、真っ直ぐに、俺の胸に突き立てられた――

「……すまねえ、白式。お前は頑張ってくれたのに、上手く、使ってやれなかったな……」

『――試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

「あれだけの啖呵を切っておいてこの様か、大馬鹿者」

「はい、すみません」

千冬さんのお叱りを受けてうなだれる一夏。

己も一夏の暴露話を観客たちに聞かれたことを思い出し、今更ながら恥ずかしくなってきたので、一夏を責めるように睨み付ける。

「動きに無駄がありすぎる。決められる確信もなく、後顧の憂いを残したまま突撃するなど愚の骨頂だ。それしか手がなかつたなどとは言うなよ、そんな状況に追い込まれること自体が未熟なんだ」

「はい、その通りです」

容赦ない指摘にますますへこむ一夏。いい気味だ。

「と、とにかく、お疲れ様でした。それですね、織斑君のISは今待機状態になっていますが、織斑君が呼び出せばいつでも展開出来ます。けれどISの扱いにはいっぱい規則がありますから、ちゃんと覚えてくださいね。とりあえず、これの内容は全部覚えてください」

どさつ、と音を立てて置かれたその「IS起動におけるルールブック」なる本の分厚さに、一夏が辟易したような顔になる。

「訓練と勉強、どちらが欠けることも許さん。今日は帰って休み、明日からしつかり励め」

そう言つて、山田先生を引き連れ立ち去る千冬さん。その背中からは、心中は読み取れない。

「……帰るぞ」

そして箒よ、もう少し優しい言葉を掛けてやれ。今一夏は落ち込ん

でいる、好感度を上げる好機だぞ。

「……………」

「……な、なんだよ」

寮への帰り道、一夏を睨み付ける筈。尋ねられ、むすつとした顔で返す。

「負け犬」

「ぐはあっ!？」

一夏が胸を押さえてへたり込んだ。致命的なダメージを受けたようだ。

「……一夏」

「……なんだよ」

「その……負けて、悔しいか？」

「……悔しいさ。悔しいに決まってる」

「……そうか」

機体の性能では勝っていた。それでも、勝負には負けた。それはつまり、一夏の力不足に他ならない。

一夏の心情を感じ取ったのだろう、筈もそれ以上一夏を責めることはなかった。

「すげえなあ……あんな強いヤツに、シンは訓練機で勝ったのか」

「……そうだな」

「……………」

沈んで行く夕日を眺めながら、三人で歩く。その静けさが、己には心地良かった。

「……もつと、強くないとなあ……」

「……そうだな。そのためには、あ、あれだな、訓練に付き合う者がいなくてはな」

「? まあ、そうだな」

「う、うむ。まああれだ、お前の専用機は接近戦特化のようだし、その……わ、私が、ISでの接近戦を、教えてやっても、いいぞ?」

耳まで赤くしながら、一生懸命に言葉を紡ぐ筈。微笑ましい。

「そりゃありがたい。よろしく頼むぜ、筈」

「う、うむ！ 幼なじみの頼みを断るわけにはいかんな！ よし、私が教えて——」

「シンも教えてくれるだろう？」

「……!？」

お前はあれか、わざとやっているのか？ 見ろ、箒が継るような目で己を睨んでいるぞ。

「……不可……」

「ええ、なんでだよ？」

「……手一杯……」

まあ嘘ではない。己は己で、朧月の扱いを身に付けなければならぬいからな。

「……」

箒に頷いてやると、ぱあつと嬉しそうな顔になる。

……その顔を、己ではなく一夏に見せてやればいいものを。

「うむ、真改にも都合があるだろう。仕方がない、私が、ふ、二人きりで教えてやる！」

「あ、ああ。ありがとう……？」

何故疑問形。

イマイチ進まない幼なじみたちの関係に溜め息をつきながら、己たちは寮へ帰っていった。

（……それにしても……）

先の試合、セシリアの最後の一撃。

本来ISは、武装を展開する際、イメージによってそれを行う。武器の名を呼ぶのは、イメージが上手く出来ない者が武装を展開するための、つまり初心者用の方法だ。

あのプライドの高い少女が、それを良しとする筈がない。だということに、大勢が観戦する試合の中で、躊躇うことなく実行した。

——勝利のために。

（……良い戦士だ……）

ああ、まったく。

この学園は、退屈な日常とは無縁らしい。

熱いシャワーを浴びながら、先ほどの試合を思い返します。

——初めは、「彼」を問い詰めようと思っていました。

強く、気高く、美しい「彼女」が、どうして左腕を失ったのか。「彼女」に訊いても答えが返ってくるとは思えないので、卑怯だとは思いましたが、「彼女」の幼なじみだという「彼」に訊くことにしたのです。

——次に、「彼」に対して強い怒りを覚えました。

「彼女」の腕を奪ったのは自分だと、自分のせいで「彼女」は腕を失ったのだと、堂々と言い放つ「彼」に、殺意すら抱きました。

——そして、「彼」の決意がどれほどのものか、見たくなりました。失われた「彼女」の左腕に相応しい存在になるのだと、そのために強くなるのだと、そう語った言葉が果たして本物なのか、知りたくなったのです。

——最後に、「彼」に勝った時にこの胸を満たしたのは、大きな喜びでした。

どれだけ傷付いても力強さを失わない瞳。どれだけ追い詰められ、それでも決して折れない心。拙い技でなお挑み、最後まで足掻き続けた、その姿……。

それが、「彼女」に重なって。

勝ちたい、と。純粹に、強く、そう思いました。

だからわたくしも、最後まで諦めず、戦うことが出来たのです。だからこそ、そうして得た勝利が、こんなにも嬉しいのです。

(これが……勝利を誇る、ということ……)

わたくしを解き放ってくれた、「彼女」の言葉。その意味を、わたくしも知ることが出来た。

「彼」——織斑一夏という、男の子によって。

わたくしの父親、いつも母の顔をうかがっていて、情けない姿ばかりが記憶にあるあの人とは真逆の、とても男らしい男の子。

——「彼」のことを、もっと知りたい。そして「彼女」のように、強

くなりたい。

織斑一夏と、井上真改。

あの二人のことを思うと、トクン、と、胸が高鳴りました。

第11話 代表

クラス代表決定戦が終わった翌朝。

己と箒は剣道場に居た。一夏は昨日の試合の疲れからか、まだ寝ているようだ。

「肩の調子はどうだ？」

「……十全……」

本来なら剣道部が朝練に使うここに、元々剣道部員である箒はともかく、部外者の己が居るのには訳がある。

肩の怪我は昨日医者 of 許しを貰い、ではひとつ手合わせでもしようか、となったのだが、どうせなら剣道場でやろうと箒が言い出した。邪魔になるのではないかと思っただのだが、

「剣道部の先輩たちから、お前を連れて来てくれと言われている。もう一度、お前の剣を見たいそうだ」

とのことなので、お言葉に甘えることにした。

しかし己の邪剣のどこがいいのか。少なくとも、剣道家には参考にならないと思うのだが。

ともかく、そういった経緯で今、己は箒と対峙している。

剣道着を着込み、防具を身に着けた箒に対し、己はジャージ姿のままだ。

少なからず失礼かとも思ったが――

「井上くんの動きやすい格好でいいよ？ そのほうが参考になるしね？」

という剣道部部长の言葉に甘えることにした。

……どうでもいいが、あの部長は何故疑問系で話していたのか。

「前回は頭に血が上って、ろくに戦えなかったからな。今日こそ、お前の剣を見せてもらおうぞ」

「……………」

今の箒には、前回のような隙はない。面具の下から、油断なく己を見据えている。

「それでは――始め？」

間近で見たいと、審判役を買って出た剣道部部長の声。それを受け、青眼に構えた箒がじりじりと間合いを詰める。

「己は竹刀を肩に担ぎ、箒の接近を待つ。」

箒が一足一刀の間合いに入った瞬間、前に倒れ込むようにして、体重を乗せた袈裟切りを放った。

「っ！」

箒はそれを防ぐが、無論一撃で終わる筈がない。前傾姿勢になることで関節にバネのように力を溜め、一気に解放。体を跳ね起こしつつ、竹刀を叩きつける。

箒は素早く反応して防ぎ、即座に反撃してきた。

だがそこには既に己は居ない。二撃目を防がれた瞬間、後ろに跳んで距離を取っている。

己は基本的に、受け太刀をしない。体重を乗せた一撃は、片腕では受けきれないからだ。

——故に、避ける。

「はああっ！」

「……………」

再び間合いを詰めて来た箒の繰り出す連撃を、間合いからは逃げず、体捌きのみで避け続ける。唐竹は半身になり、袈裟切りは上体を逸らし、横薙は身を屈めて、動くたびに靡く髪にさえ触れさせない。

「せいっ！」

鋭く踏み込んでくる箒。その足を払った。

「うわっ!?!」

踏み出した足が床を踏みしめる瞬間に払われたことで勢いのまま倒れる箒に、竹刀を振り下ろす。

「くっ！」

ぎりぎりのところで追い打ちを防ぎ、転がって間合いを取る箒。立ち上がった、己を睨む。

「足払いとは卑怯だぞ——と言いたるところだが、これだけ見事に決められると、むしろ感心してしまうな」

「……………」

己は一夏や箒のような正道の剣士ではない。剣に対するこだわりはあるが、戦う時は蹴りも投げも使う。

当然、隙あらば足払いをしかけ、倒れた相手に追撃をかけることに躊躇はない。

……もつとも、こういった奇策が通じるのは精々一度だ。その一度で確実に仕留められなければ、邪剣など大した役には立たん。殺し合いならばともかく、こういった試合で使うべきではないのだが。

「まるで戦場の技だな……お前らしいと言えば、お前らしいが」
「……………」

呆れ半分、感心半分といった様子で言う箒。だから言っただろう、剣道家には役に立たんと。

……しかし箒もこの学園に籍を置く以上、いずれ火の粉が降りかかるかもしれない。たとえ僅かでも、「殺し合い」の汚さを体験しておいてもらいたい。

「仕切り直しだ、行くぞー」

言つて、今度は一気に間合いを詰めてくる。

「胴オオオッ！」

素速い足運びから繰り出される胴打ちを、身を屈めてくぐり抜ける。箒とすれ違い、振り向き様に一撃。

それは防がれたが、そのまま駆け抜けて距離を取る。

体捌きは鈍っていないことは確認出来た。次は足腰を診るとしよう。

反転した箒に向き直る。距離、約三間。

一步で最大速度に達し、二歩目で地を這うかのように低く身を沈める。己の動きを追って、箒が視線を下げた。

——瞬間、跳ぶ。箒の頭上を越えるほどに、高く。

「なあっ!？」

その高さに驚き反応が遅れる箒の頭を目掛け、全体重を乗せて竹刀を振り抜く。

「くうっ！」

箒は半身になることであらうじてその一撃を避けたが、体勢を崩し

た。そこに、空振りしたことで流れた体の勢いを利用して蹴りを放つ。

「くあっ！」

側頭部に命中。加減はしたが、衝撃にふらつく箒。

着地し、そのまま連撃へ。

「ちいっ！」

「……………」

剣道のそれとは違う、体重の乗った剣。特に己は、片腕というハンデを補うために全身の筋力を使って剣を振る。

体当たりじみた、剣を体ごと叩きつけるようなそれは、生身であればこそ出来る芸当だ。足の形や宙に浮いている関係から、ISで再現するのは難しいだろう。一夏はスラスタ―を使って似たようなことをしていたが。

「むう……………」

「……………」

箒は良く凌いでいるが、その身に馴染んだ剣道のそれとは別物の攻撃に対し戸惑っている様子だ。

しかしこの技は、体力の消耗が激しい。一撃ごとに全身運動をするのだから当然のことであり、つまり長期戦に向いていない。今のよう
に相手に粘られると、厳しい戦いになる。

——まあ、まだまだ余裕はあるが。

「せえっ！」

現状を打開すべく、箒が鋭く竹刀を振り上げ、面打ちを放つ。

己の連撃の隙を見切り、そこを突いた一撃。今己は右腕を振り抜いた直後であり、体が大きく開いている。箒の面打ちを防ぐことは出来ない。

——故に、防御でも回避でもなく、攻撃を仕掛ける。

腰を低く沈め、一步、大きく踏み込んだ。振り上げた竹刀の下に潜り込み、箒の胸に左肩を叩きつける。

左腕がなくとも、こういう使い方ならば問題ない。

「ぐ……………」

当て身を受け、よろめく筈。竹刀を振り下ろし損ね、がら空きになったその胴に、横薙の一閃を打ち込んだ。

「……胴有り……」

「ふう……流石だな、真改」

「……………」

改めて認識したが、一夏だけでなく筈の才能も凄まじい。己が数年掛けて体得した剣技に、この年で既に追い付きつつある。非才の身には羨ましい限りだ。

もつとも、まだまだ負けてやるつもりはないが。

「お疲れ様？ いやいや、二人とも流石と言ったところかな？」

審判役を務めていた部長が話し掛けてくる。

「技もそうだけど、凄いジャンプ力だね？ 一体どんな鍛え方をしているのかな？」

「……………」

そんなことを言われても、ただ日々の鍛錬としか答えようがない。

「まあ、君さえ良ければ、これからもちよくちよく遊びに来てね？ みんなも喜ぶだろうし、勉強にもなるしね？」

「……………」

気が向いたら来ることもあるかもしれないが、先ほども述べた通り、己の剣は邪剣だ。未来ある若き剣道家たちが見るべきものではない。

……今は己のほうが年下だが。

「まあ本当に、気が向いたらでいいからね？ 気長に待ってるよ？」

「……………」

どうにも何を考えているのか分からない笑みを浮かべる部長に一礼し、剣道場を後にする。

その内また来てみるのもいいかと、考えながら。

そんなことがあつた朝のSHR。壇上には山田先生の姿。

「というわけで、一年一組のクラス代表は——織斑一夏君に決定ですっ!!」

「「わあああああつ!!」」

「……………え？」

教室中から歓声が上がリ、それに混じつて一夏の疑問の声が聞こえた。

「…………山田先生、質問です」

「はい、なんですか？」

「なんで俺がクラス代表になつてるのか分からないのは、俺が馬鹿だからじゃないですよね？」

「はい、織斑君はお馬鹿さんじゃないですよ？」

「……………」

「……………」

「……………」

…………なんだ、この沈黙は。

「…………で、なんで俺がクラス代表なんですか？」

「ああ、えーつと、それはですねー」

「なぜならば！ わたくしが辞退したからですわっ!!」

張りがあり良く響く声が聞こえたと思つたらセシリアだった。相変わらず元気なヤツである。

「確かにわたくしは一夏さんに勝ちました。ですがそれも紙一重の勝利、最後までどうなるか分からない勝負でした」

目を閉じ胸に手を当てて、試合を思い返すように語るセシリア。

…………ところで今、「一夏さん」と言つたか？

「国家代表候補生であるこのわたくし、セシリア・オルコットに、初めて乗った専用機であれば食い下がつた……その資質、この先の成長を考えれば、一夏さんの方がクラス代表になるべきですわ」

うむ、間違いない。「一夏さん」と言つたな。

…………やれやれ。

「今はまだ、初心者の域を出ませんが——クラス代表となり実戦経験を積めば、実力もそれに追い付くでしょう。なにせこの、セシリア・オルコットを追い詰めたのですから!」

要所にポーズを挿みながらのセシリアのセリフ。演劇でも見ているような気分になってきた。

「そして専用機持ちである一夏さんの訓練には、同じく専用機持ちが務めるのが合理的ですわ。具体的にはブルー・ティアーズを持つわたくしと、朧月を持つ真改さんとで教えれば、すぐにクラス代表に相応しい実力が身に付きますわ」

……己を巻き込まないでくれないか。セシリアとの訓練は承諾したが、そこに一夏も加わるとなれば、確実に厄介なことになるんだが。「ふん、専用機がなんだと言うのだ。一夏はまだ基礎を固める段階だ、汎用型の訓練機で十分だ。お前の出番はない」

思ったとおり、箒がセシリアを牽制する。しかし以前はその眼力に怯んでいたセシリアだが、今はしっかりと箒と目を合わせている。

「あら、わたくしは基礎もしっかりしていますのよ? ISランクAのわたくしが才能に頼って、基礎を疎かにしているとお思いですか?」

ISランクCの篠ノ之さん」

「ふ、ふん! ランクAには分かるまい、出来ぬ者の苦労がな! そんな者は教えるのに不向きだ!」

ちなみに己もISランクCだ。つくづく才能に恵まれない。

「え、箒ってランクCなのか……?」

「だ、だからなんだ! ランクなど気合いで覆す物だ!」

「……ええー……」

一夏は確かランクBだった筈。束博士の妹である箒が自分よりランクが低いことが意外だったのかもしれない。

バシンバシン!

「座れ、馬鹿ども」

連続する打撃音と共に、千冬さんが現れた。箒とセシリアは頭を押さえて悶絶している。

「ランクなどただの適性だ。いくらISを思い通りに動かせようが、

その「思い通り」のレベルが話にならん段階で偉そうにさえざるな。せめて殻を破れる程度の技術と経験を身に付けてからにしろ、未熟者ども」

流石は元世界最強、言うことが違う。

「生身で出来んことはISでも出来ん。出来ると思っている内は、まだまだ機械に頼っているだけだ。それをお前たちの骨身に刻み込むのが私の役目だということをまずは理解しろ。成長したいのなら、私の言うことには従っておけ」

……ううむ、含蓄のある言葉だ。生身で出来んことはISでも出来ん、か。骨身に刻ませてもらおう。

「……さて、静かになったところで、改めて確認する。

一年一組代表は、織斑一夏。この決定に異議のある者はいるか」

手は、挙がらなかった。

挙げての意味はなかったらうが。

「おう、これが朧月の待機状態ですか」

「……………」

夕食後の自由時間、食堂にて。己は本音と一緒に、先ほど如月重工から届けられた品を眺めていた。

「綺麗だね」

「……………」

その品とは、調整を終えた己の専用機、朧月だ。問題だった特殊スラストー、「水月」を使っても傷を負わないように、保護機能を改良したらしい。出力を抑えるという発想が初めから存在しなかったのは流石の如月重工である。

その朧月であるが、2メートルを超える装甲がここにあるわけではない。専用機はその機体ごとに異なるアクセサリとなって身に着けることが出来、この状態を待機状態という。セシリアのブルー・ティアーズの待機状態は、左耳に着けられた青いイヤークラス。そし

て一夏の白式は右腕の白いガントレットだ。……ガントレットはアクセサリーではなく防具だが、そこは問うまい。一夏自身が既に規格外な存在だからな。

そして朧月の待機状態は、銀色の細い鎖と、それを中に通した銀色の指輪だ。これについて如月社長は、

『朧月は井上君の専用機、つまりはパートナーだ。これはいわゆる、エンゲージ・リング結婚指輪ってヤツだねえ。うふふ、なかなか洒落がきいてるだろう？』

と言っていた。それを聞いた一夏が怒りを露わにしたことは言うまでもない。

しかし己はそれを嵌める気はなく、実際問題として嵌めることが出来ないで、このように鎖を通して首から提げる形をとっている。身に着け方として正しいかどうかは別として、アクセサリーには変わりあるまい。

「うんうん、いのちは飾り気がないからね。ちゃんとアクセサリーにも気を使わないと」

「……………」

その指輪を掲げて眺めていた本音がしみじみと眩くが、まったくもって余計なお世話である。

「…………… あ、ほら、準備できたみたいだよ」

「……………」

にわか騒がしくなったのを感じて、本音が食堂の中央に視線を移す。己も本音に倣うと、クラスメイトの一人が炭酸飲料の注がれたグラスを高々と掲げ、満面の笑顔で宣言するところであった。

「というわけでっ!!これより、「織斑一夏クラス代表就任おめでとうパーティー」を開催しますっ!!」

「「「かんぱーい!!」」」

……………ついに始まってしまったか。食堂を貸し切って(というよりも占拠して)の、馬鹿騒ぎが。

「かんぱーい。おーいえー」

「……………かんぱーい」

「……………」

一夏は即席のパーティー会場の中心で、クラスメイトたちから口々に祝いの言葉を贈られていた。全くめでたくない顔の一夏だが、女子に囲まれているその姿が、箒には気に入らないようだ。先ほどから不機嫌そうに茶を飲んでいる。

そんな幼なじみたちの様子を茶を飲みながら眺めていると、一際賑やかな気配が近付いて来た。そちらに目を向けると、フレームの無い眼鏡をかけ赤みがかった髪をポニーテールにした二年生が居た。

「はいはい、新聞部です。色々話題の織斑一夏君がクラス代表に就任したそうで！早速インタビューに参りましたー！」

「「おおおっ!!」」

「いよー！ 待つてましたーっ!!」

途端に盛り上がる一同。要は騒ぎたいだけなのだろう。

「あ、私は二年の黛まゆずみかおるこ薫子。よろしくね。整備科所属で新聞部の副部長やってます。はいこれ名刺」

「あ、どうもご丁寧に」

「それじゃー本題いつてみよー！ 織斑君、クラス代表になった感想を、どうぞっ!!」

「……………えーと……………」

一夏にそんなことを期待するだけ無駄だ。

「せいっばいがんばります」

「そんななんの面白みもないコメントは要りません！」

「……………そんなこと言われても」

「ほら、あるでしょ？ 俺の背後に立つんじゃねえ！ とか！」

「いや、俺スナイパーじゃないんで。ていうか銃とか一個も持ってないんで」

「銃はなくてもボキャブラリーはある！ さあ、頭をひねって！」

もう一度言おう。一夏にそんなことを期待するだけ無駄だ。

「……………えーと……………」

「仕方ないなあ、適当にカッコいいこと書いてくか。……………ええと、「織斑一夏氏はただ一言、「言葉を飾ることに意味はない」と答え、行動で

実力を証明する意気を見せた」と

「ちよ、なんですかそれ!？」

「そんなじゃ次ー。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットちゃんお願いしますー!」

「ふふ、このわたくしからコメントを求めるだなんて、高くつきますわよー!」

「じゃあいいや。勝手に書いてくから」

「え!?! な、ちよ」

「あとは……あ、噂の井上真改ちゃん!」

まずい、見つかった。セシリアめ、もう少し引き付けていてくれれば逃げられたのに。

「こないだのセシリアちゃんとの試合で一気に有名人になったわけだけど、それについてコメントお願いしまーす!」

ひゅばっ! と口の前に移動する黛先輩。凄まじい歩法である。

「……………」

「なにかコメントちょうだい!」

「……………」

「えーと、コメントを……」

「……………」

「えっと、その……」

「……………」

「ごめんなさい」

勝った。しかしそれは虚しい勝利だった。

黛先輩は気を取り直してカメラを構える。

「三人ともコメントがダメダメだから、写真くらいは良いの撮らせてね!」

「……………やっぱり撮るんですか」

「そりやもう、三人とも注目の専用機持ちだからねー。ほら、並んで。織斑君が真ん中、真改ちゃんとセシリアちゃんを挟んで、両手に花つ

て感じに!」

「ええっ!?! それはさすがに——」

「ま、まあまあ一夏さん！ いいではありませんか、せっかくのおめでたい席ですしっ!!」

「いや意味分かんないから！」

「……………」

抱き付くような勢いで一夏に接近するセシリア。腕組みでもしよ
うというのか手を伸ばすが、一夏はそれを必死に捌く。

……箒の目がかなり危険になっている。巻き込まれないよう細心の注意を払わねば。

「ほらほら、早く早く。いいよもう並ぶだけで」

「むう……仕方ないですわね」

「それじゃあ撮るよー。はい、チー——」

瞬間、風が吹いた。

「——ズ！」

パシャツとデジタルカメラのシャッターが切られる。その直前、フレームに収まるべく滑り込んでくるクラスメイトたち。風の発生源はこいつらか。

「うお、いつの間？」

箒を含めた一組の全員が、一瞬で集まっていた。雀蜂をも凌駕するチームワークである。

「な、な、な、なんとということを!! せっかくのスリーショットを——」

「まーまーいーじゃんこれくらい」

「そーそー、青春の思い出だよ」

「わーい、いのつちと写真」

「先輩！ その写真、あとで絶対くださいね！」

再び騒ぎ始めるクラスメイトたち。そのエネルギーが一体どこから供給されているのか、「織斑一夏代表就任おめでとうパーティー」は、夜の十時まで続いた。

第12話 鈴音

「ふう、ようやく着いた……」

一年ぶりに帰ってきた日本だけど、のんびりしている暇なんて全然なかった。中国から飛行機で入国して、手続きが終わったらそのまま車に乗せられて、ここ——IS学園まで来た。ちよつとした強行軍だったけど、それでもすつかり夜になってしまっている。

……結構疲れた。代表候補生の扱いからか、飛行機はファーストクラスだったし車はリムジンだったけど、それでも長時間押し込められてるとあたしには窮屈だった。ISで飛んでくれば楽だったと思うけど、そうするわけにもいかなかったし。

(……えーつと、どこに行けばいいんだっけ?)

上着のポケットからメモ紙を取り出す。そこには「本校舎一階総合事務受付」と書かれていた。

「……名前だけ書いてどーすんのよ。それがどこにあるのか分かんないんじや意味ないじゃん」

まったく、あのお爺さんも肝心なところが気が利かない。けど紙に文句を言ったって返事があるはずもなく、あたしはイライラと一緒にメモ紙を上着のポケットにねじ込んで歩き出した。

(まああれよね。本校舎つてくらいだから、一番大きな建物でしょ。適当に歩いてれば見つかるか)

と、初めは思ったものの、このIS学園、バカみたいに広い。そしてどの建物も大きく、一目で「この建物が一番大きい」と判断するのは難しい。誰かに道を聞こうにも、時間も八時を過ぎてるから、外を出歩いている人影もない。

(つたくもー、そりやISの訓練やらには広さがあるけどさ。金かかってるわねー)

もういつそのこと空から探したいが、それは止めておく。あたしはまだ転入の手続きが終わってないので、今はまだ正式なIS学園の生徒じゃないのだ。そんなあたしが学園内でISを起動させたら、外交問題まで発展しかねない。

そうなる、猛勉強・猛特訓の末に手に入れた国家代表候補生の椅子を取り上げられるかもしれない。さすがにそんなリスクと天秤にかけるほど面倒くさくはないので、イライラを抱えたまま歩いて探すことにする。

(そうよ。あの苦労のおかげで、ここに來れた……また「アイツ」に会えるんだから、我慢しないとね)

第一目的のことを考えて、イライラを押さえつける。すると、少しだけ足が軽くなった。お気に入りのポストンバックを担ぎ直して、本校舎探しを――

「だから……でだな……」

聞こえた声に振り向くと、ISの訓練施設っぽい建物から人が出てくるのを見つけた。こんな時間まで訓練なんて、なかなか真面目そう
だ。

(ちようどいいや。場所訊こつと)

小走りで近づいて行くと、今度は懐かしい、とてもよく知っている
声が聞こえてきた。

「だからさ、そう言われても分からないんだって」

「……あ」

――一夏だ。

(居た……！ ホントに居た！ しかもこんな早く会えるなんて、な
んて言うか幸先良い！ 日頃の行いが良いからねっ！)

難しい顔をして歩く少年は、間違いなくあたしの幼なじみ、織斑一
夏だ。この距離からでも分かる、だってアイツ全然変わってないんだ
もん。

(まあそうよね、一年しか経ってないんだし。……ふふ、けどアイツ、
ビックリするだろうなあ、あたしが突然やって来たらさ！)

「いち――」

というわけで、さっそく声をかけようとしたところで、一夏が二人
の女の子と一緒にいることに気づいた。

その二人の内、一人は問題ない。その子のことも、あたしはよく
知っているからだ。

170センチくらいある長身は、スラリと長い脚にピンと伸びた背筋のおかげでさらに高く見えた。

腰まで真っ直ぐに下ろした髪は黒曜石を糸にしたみたいで、夜の暗さの中でもよく映える。

刃のように鋭い眼は瞳が深い黒色で、見詰めていると吸い込まれそう。

滅多なことじゃ小揺るぎもしない無表情だけど、顔立ちはとても綺麗。

日本刀みたいな美人と言われている、あたしのもう一人の幼なじみ、井上真改だ。

シンが一夏と一緒に居るのはいい。同じ中学校にいたときは弾を含めた四人でよくつるんでたし、シンのことだからIS学園を受けることは不思議じゃない。片腕で合格したことは、むしろシンならそれくらいできて当然だと思う。

——けど、もうひとりとは。

(……誰?)

「いいか、ISの操縦に大事なのはイメージだ。イメージさえしつかり出来れば、機体を制御出来る」

「そうは言っても、イメージなんてそんな簡単なことじゃないだろ。空飛んだ経験なんてないんだから、いくら考えても分かりやしない」

「……考えるな、感じる」

「お前はどこの拳法家だ——ておい、待てよ箒！」

「……はあ……」

ふいっとそっぽを向いて不機嫌そうに早足で去っていく女の子を、一夏が追いかけていく。それを眺めていたシンは呆れたように溜め息をついてから、二人について行った。

——誰あの子？ こんな時間まで一緒に訓練してたの？ っていうかお互い名前呼び？

——あーそう、そーいうこと、よくわかったわ一夏。あたしという幼なじみがいながら、女の子ばつかのIS学園で、早速ウハウハしちゃってるワケね？

「——上等。その根性、叩き直してあげるわよ——!!」

「——へ？ 転入生？ こんな時期に？」

「そーそー、まだ一ヶ月も経ってないのに。なんか転校っていうより、都合があつて入学が遅れたつて感じだよね」

一年二組に転入生が来る。その情報は、一夏が席に着くなりクラスメイトから知らされた。

「ふーん。けど都合つて言つたつて、IS学園じゃそれもないんじゃないか？」

一夏の言うことはもつともだ。このIS学園は、所謂親の仕事の都合などで転入出来るほど、条件は甘くない。難しい試験を突破する知識と実力に加え、国の推薦が必要になる。つまり——

「それがね、その転入生、なんでも国家代表候補生らしいんだよ」

「へえ、どこの？」

「えつと、中国だったかな？」

「ふうん。中国、ねえ……」

「……………」

……中国、か。

「いのつちも、転入生が気になる〜？」

「……………」

とことこ近付いて来た本音からの質問。己は代表候補生というより、中国という言葉に反応しただけだ。

「……中国に……」

「ん〜？」

「……友人がいる……」

「おう、グローバルだね〜」

「……………」

日本にIS学園が出来てからというもの、日本国内の外国人の数は爆発的に増えた。外国人の友人がいるくらい、珍しくはないと思う

が。

「お前にそんなことを気にする余裕はないだろう。分かっているのか？ 来月にはクラス対抗戦だぞ」

「そうですねよ、一夏さん！ あなたにはなんとしても勝っていただかなくては。なにせこのわたくし、イギリス代表候補生セシリア・オルコットがクラス代表を譲ったのですから！ 簡単に負けるなんて許されせんわ！」

「いや、そりゃ負けるつもりはないよ」

それなりに負けず嫌いな一夏のことだ、勝負事に気を抜くことはあるまい。実力が気合いに追い付くかというところだが。

「織斑君、責任重大だよ？」

「なんとってフリーパスがかかっているんだからね！」

「期待してるよ、おりむー」

「……………」

フリーパスというのは、クラス対抗戦の優勝賞品である、学食デザートの半年タダ券のことだ。己には必要ないが、これを求める女子たちの気迫にはただならぬモノがある。

「……………ん、待てよ？ 国家代表候補生が二組に転入して来るんだよね？ もしかして、二組のクラス代表がそいつになったりは——」

「——へえ、一夏にしては鋭いじゃない」

教室の入り口から、聞き覚えのある声が聞こえた。ちやうど先ほど考えていた、中国に帰ってしまった友人の声。

そちらを向くと、長い茶髪をツインテールにした少女が。

「その通り、二組のクラス代表は中国からの転入生が奪いゲフンゲフン譲り受けたわ。ご存知みただけで中国の国家代表候補生で、専用機持ちのね」

「……………え？ お、お前……………」

「久しぶりね、一夏、シン。初めましてな人たちに自己紹介しておくよ、あたしは凰鈴音^{ファンリンシン}。今日から隣のクラスだから、よろしくね」

友好的な言葉と共に浮かべた笑顔は、とても友好的と呼べるモノではなかった。笑みとは元来威嚇の為のモノであるとする説を体現す

るかのような、寧猛な笑顔。

小さな体に溢れんばかりの活力を漲らせた、幼なじみの姿がそこにあった。

「一夏！　なんだあの小さいヤツは！　随分親しげだったが!？」

「一夏さん！　なんですかあの小さな方は！　大分親しいようでしたか!？」

「……そんな小さい小さい言うなよ。人の身体的特徴を馬鹿にするのは良くな——」

「そんなことはどうだっていいっ!!」

「そんなことはどうでもいいですわっ!!」

「……そーですか」

「……………」

昼休み。最近クラスメイトたちもついてくるようになり、十人近い人数でそろそろと学食に行き席に着くと、さっそく箒とセシリアによる詰問が始まった。しかしお前たち、言っていることがまったく同じだ。どちらか一人にしろ、うるさい。

「アイツは鈴って言って、俺の幼なじみだよ。ちようど箒と入れ替わるようにして転入して来たんだ。んで、一年前に国に帰って行ったんだけど……」

「見ての通り、こうして戻って来たわけ」

「っ!？」

突然聞こえた声に、箒とセシリアが振り返る。そこに立っていたのは、ラーメン（大盛）をお盆に載せた鈴であった。

……そして二人とも、とりあえずその反射的に持ったナイフを置け。それは食事用であって戦闘用ではない。

「お、一人分空いてるわね。おじやまー」

「な、何を勝手に座っている!？」

「え？　だって食堂はみんなの物でしょ？　あたしがどこに座るのも

「勝手じゃない」

「それでも、先に座っている者に一言断るべきでしょうっ！」

「一夏、ここいい？」

「え？ 別にいいけど」

「シンは？」

「……構わない……」

「えーつと、そのなんだかトロそうなあなたは？」

「もーまんたい〜」

「三対二。多数決で決まりね」

「むつきいいいい!!」

というわけで、六人掛けのテーブルで己と一夏が向き合い、己の隣が本音と鈴、一夏は箒とセシリアという形になった。そのテーブルに別のテーブルがくつつけられ、そこについて来た女子たちが次々着席していく。

「あーつと……久しぶり、鈴。元気してたか？」

「ふ、ふん。見りや分かるでしょ、そんなの」

「いやそうだけどさ。とりあえず訊くもんだろ、こういうことは」

「……………」

鈴なりの照れ隠しに、一夏は気付かない。不憫な。

「いや、驚いたぜ。帰って来るだけでもそうだけど、代表候補生なんてなあ。お前ISの勉強とかしてたっけ？」

「あたしからすれば、アンタがIS動かしたことが驚きなんだけどね……。ニュース見た時は危うくラーメン吹き出しそうになったわよ」

「ラーメン以外食わないのかお前は」

確かに、鈴は別れるまでISのことにはまったくの無知だった筈。そこから僅か一年で代表候補生になるなど、一体どれほどの努力があったのか。鈴がどんな生活をしてたのか気になるのは仕方ない。

しかし訊きたいことが色々あるのは分かるが、今はやめておけ。何故ならば――

「一夏あ！ いい加減説明しろ!!」

「そうですね！　一夏さん、こちらの方とはどういった関係ですの!?!」
この二人が我慢の限界だからだ。

「さつきも言ったら、鈴はただの幼なじみだよ」

「……………ただの……………」

……………本当に不憫な。

「では、こいつとは何もないんだな!?!」

「何もってなんだよ?」

「え!?!　いや、その、それはほら、そのだな……………」

「まあとにかく、箒ほどじゃないけど、久しぶりの再会ってやつだな。
まさか国家代表候補生になつてるとは思わなかったけど」

箒が墓穴(?)を掘ったおかげで少し場が落ち着き、一夏も余裕が出てきようだ。面識のない者たちを紹介し始めた。

「こいつが篠ノ之箒。前に話したことあつたよな?　俺が通つてた剣

術道場の娘でさ、小学校も同じクラスだったんだよ」

「へえ、アンタが。……………よろしくね、篠ノ之箒さん」

「ああ、よろしく。鳳鈴音さん」

——ゴゴゴゴゴゴゴ——

……………なんだろう、にこやかに握手をしている二人から、地鳴りのような音が聞こえる。

「そしてこのわたくしが、真改さん、一夏さん兩名と激戦を繰り広げた
「そういうえば一夏、クラス代表なんでしょ?　ふふん、来月が楽しみ」

ちよつ!?!　は、話を聞きなさい!　わたくしはイギリスの代表候補

生、セシリア・オル「いや別に興味ないから」こ、このおチビさんはつ

……………!!」

怒りのあまり顔を赤くし、プルプルと震えるセシリア。この娘は本当に
当に見ていて飽きないな。

「ふ、ふふふ……………そう言つていられるのも今のうちですわ。すぐにわ
たくしの実力を思い知らせてさしあげます!」

「あつそ。けどやめておいた方がいいわよ、どうせあたしが勝つんだ
から」

「な、なんですつて……………!?!」

「悪いけど、あたし強いわよ。少なくともアンタよりはね」

「…………ふ、ふふふ…………」

「ふっふっふっ…………」

「…………ふふふふふふふふ…………」

「……………」

——ゴゴゴゴゴゴ——

……………またしても地鳴りが。この学園、地盤に不安があるのではないか？

数秒睨み合って、鈴は己に向き直った。その顔には、不敵な笑みが。「当然アンタにもね、シン。生身じゃ相手にならないけど、ISならあたしの方が強いんだから」

「……………」

ふむ、それは楽しみだ。鈴のことだ、口先だけではないだろう。自信に見合う実力は備えている筈だ。

しかしその言葉に、またしてもセシリアが食ってかかった。

「お待ちなさい！ 真改さんに挑むのなら、まずこのわたくし、セシリア・オルコットに勝ってからにしないさい！」

「だからあたしが勝って言うてるじゃん……………ていうかアンタ、なんでそんなに反応するの？」

「えっ!? いえ、それは、その…………」

……によごによと口を濁し、先ほどとは違う理由で赤くなる。……………やめてくれ、周囲の視線が痛い。

「まあ、シンは昔から、女の子に人気あったもんねえ…………」

ニヤニヤ笑いを浮かべながら言う鈴。……………本当にやめてくれ、一緒に食事に来たクラスメイトだけでなく、周囲の席に座る連中まで聞き耳を立て始めただろうが。

「ねえねえ、その話、もつと詳しく!」

「中学生のときの井上さんってどんな感じだったの?」

「なんか面白いエピソードとかない?」

「そうね、色々あるわよ。例えば……………」

「……………」

——ベキヤアツ!!

む？ どうしたことだ、己の箸が勝手に折れたぞ。どうした、鈴？ そんなに怯えたような顔をして。

「と、ところで一夏！ アンタ、ISの腕前はどのようなの？」

「お、おう。いまいちだな、なかなかコツが掴めない」

何故か鈴が突然話題を変えた。聞き耳を立てていた女子たちも食事に専念している。

己も備え付けの割り箸を取って、食事を再開した。

「ふ、ふうん。それならさ、あ、あたしがISの操縦、教えてあげてもいいけど？」

一夏をちらちらと見ながら、しかし顔は横に向けながらの言葉。この娘も相当に分かり易いが、それが報われたことはない。不憫過ぎる。

「お前の助力などいらん。一夏に教えるのは私の役目と決まってる」

「そんなことは決まっていますせんわ！ 凰さん、あなたは二組でしょう!? 敵に塩を送るだなんて、随分と余裕ですわねっ！」

……うむ、この鯖の塩焼き、美味しいな。塩加減、焼き加減、どちらも申し分ない。

「だって一夏は素人でしょ？ フェアじゃないわよ、せめて試合になるくらいには強くなってもらわないと」

「だから、その為に私が稽古をつけている！」

「このわたくしの教えのおかげで、一夏さんは見る見る上達していますわ！ わたくしのおかげでっ!!」

ほう、味噌汁もなかなかだな。味噌もダシも並ではない。

「けどコツが掴めないって言ってたじゃん。言うほど役に立ってないんじゃないの？ アンタたち」

「い、一夏は大器晩成なのだ！ 私は後々のことを考えてだな、基本を——」

「とにかくっ！ あなたの助けなどいりません！ 一夏さんはわたく

「私たち一組のクラス代表なのですからっ！」

「だからさ、クラスがどうのじゃなくって。あたしは来月の——」

む、この浅漬け、市販のものではないな。こんなところにまでこだわるとは、流石IS学園、侮れんな——

そして放課後。己たちは第三アリーナに集まっていた。最近の日課である一夏の訓練だ。

「箒、やっと申請が通ったのか」

「ああ。今日は私も訓練に参加するぞ」

「くっ……このままではわたくしのアドバンテージが……」
「……………」

以前から出し続けていたISの使用申請がようやく通り、箒に打鉄が貸し出された。IS学園には訓練用その他に大量のISが配備されているが、生徒の数を考えれば全く足りていない。故に申請が通るまで時間がかかるのだ。

「では一夏、さっそく始めるぞ。刀を抜け」

「お、おう」

前置き無しに、箒が戦闘態勢に入る。ようやく一夏と訓練出来るということで張り切っているのだろう。

——だが。

「では——参るっ!!」

「お待ちなさい！一夏さんの訓練相手を務めるのはこのわたくし、セシリア・オルコットですよ！」

「ふん……お前はもうお役御免だ。帰っていいぞ」

「な、な、な、なんですってえええ……!?!」

……予想通りの展開だな。だから一夏を交えての訓練はしたくなかったのだ。己の時間まで削られる。

「訓練機を貸し出されたくらいで調子に乗られても滑稽なだけですわ——」

「なにい!? おのれ、ならば力づくでお帰りいただこうかつ!」
「訓練機ごときに遅れを取るほど、優しくはなかつてよ!」

そうして始まる女の戦い。放置される己と一夏。

……何をしに来たんだ、お前たちは。

「はあああああつ!」

「甘いですわ!」

バキューンバキューンガキンチュインドカーン。

二人の戦いは白熱しており、しばらくは終わりそうもない。かといつて己が一夏と訓練を始めれば事態はさらに混迷を極めることだろう。

……なんだろう、腹が立って来た。

「さあ、踊りなさい!」

「おおおおおつ!!」

「ふ、見戯ですわね箒さん! まるでよちよち歩きですわつ!」

「まだだ、まだ耐えられるっ!」

——ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ!!

「きゃあああああつ!」

「うわあああああつ!」

起動した月影の銃口から吐き出された散弾の嵐。このままでは埒が開かないという判断に基づいての行動である。

「い、い、い、いきなり何をする!?!」

「そ、そうですわ! 危ないじゃ——」

——ギユイイイイイイン……

「ごめんなさい!」

「……………」

月影の砲身を回転させると途端に謝る二人。一夏もなにやら青い顔をしている。

……この月影、よほど怖いようだ。

「……時間の無駄……」

アリーナを使える時間は長くない。無駄には出来ないのだ。

「…………二対二…………」

そう言って、セシリアの横に並ぶ。

己とセシリア対一夏と箒。実力に多少の偏りがあるが、この組み合わせが一番揉めないだろう。

「そ、そうですね。せっかく四人いるんですもの、チーム戦の訓練をするのも悪くありませんわ」

「う、うむ。一夏はまだまだ未熟だからな、私がしっかりとリードしてやろう」

「お、おお。よろしく頼むぜ」

「……はあ……」

「ごたごたはあったが、どうにか訓練を始められそうだ。」

「……これからも同じようなことが続くのだろうか。なんとかさせねば。」

一夏と箒は、流石にまだ己とセシリアを相手に出来るほどではなかったようで、数十分防戦で粘った末、撃沈した。個人の實力差もあったが、連携が上手く出来ていなかったことが大きいだろう。

対して己とセシリアは、白兵戦と射撃戦にそれぞれ特化した機体であり、セシリアの得意とする戦闘距離が己のかつての相棒に近いこともあって、なかなかの連携が取れていた。

「ふふ……わたくしと真改さんは、なかなか相性が良いようですね」
「……………」

ピットに戻り、帰り仕度をしている時にセシリアが嬉しそうに言う。

「わたくしの射撃と真改さんの剣技が合わされば、怖いものなしですわ」

「……否……」

「……………」

しかし上機嫌なところに水を差すようで悪いが、その言葉には頷けない。世の中には、数の差や相性の良し悪しをものともしない、人の

域を超越する力を持つ者が、確かに存在しているのだ。

「……実戦は……」

だから、言っておく必要がある。イギリス代表候補生であるセシリアは、いずれは戦場に駆り出される可能性があるのだから。

「……甘くない……」

「……真改さん……」

今は包帯で隠されている、己の左腕に視線を向ける。セシリアは己の左腕を見ているので、この包帯の下がどうなっているのかは知っている筈だ。

「……あなたは、本当の戦いを知っているのですね……」

「…………」

彼女の言う戦いと己の知る戦いは別物だろうが、命を懸けたモノであることに違いはない。

現に己は左腕を失い、瀕死の重傷を負った。生き残れたのは、幸運を通り越し奇跡と言う他ない。

「一夏さんも言っていました——わたくしも、真改さんを守ります。あなたが戦う時は、わたくしもあなたの隣で戦います」

「…………」

「ですから、わたくしを頼ってください。今はまだ、不足かもしれませんが……このセシリア・オルコット、いつかきつと、真改さんが背中を預けるに足る者になってみせますわ」

「…………」

つくづく、己は——才能には恵まれないが、人には恵まれるらしい。ならばこの少女が、かつての己の仲間たちのように、戦場に散ることがないように。

己も、もつと強くならねばなるまい。

——夜。月の光の下、自室のベランダで本音と共に花の世話をしていた。と言つても、本音は袖の余ったパジャマ姿であり、己の作業を

眺めているだけだ。花の世話をする己を見ているのが好き、と訳の分からぬことを言っていたな、そう言えば。

「るるるるるる♪らららら♪」

「……………」

本音はかなり楽しそうだった。おそらく本来よりも大分テンポが遅いであろう鼻歌なんぞを歌っている。こんな地味な作業、見ていて何が面白いのやら。

「……………んんん？」

「……………」

ふと、慌ただしい足音が聞こえたので振り返ると、扉を蹴破るような勢いで人影が部屋に入ってきて来た。

その人物は――

「……………鈴……………」

「おく、りんりんんん？」

「……………う……………」

……………本音がつけた妙な渾名は置いておくとして、部屋に入ってきたのは鈴だった。

そして、驚いた。その眼から、大粒の涙を流していたからだ。

「う、ううう、ううううううう……………!!」

歯を食いしばって必死にこらえているようだが、涙が止まる様子はない。むしろその勢いはどんどん強くなっていて、水滴が次々と床に零れていく。

「シンんんうううつ……………!」

「……………」

手にしたポストンバックを握り締め、絞り出すように己の名を呼ぶ幼なじみ。その姿に、常の快活さはない。

「……………どうした……………」

とにかく話を聞こう。土に汚れた手を拭き、鈴に近付く。

「い、い、いちか……………」

「……………」

泣きじゃくる鈴の前で立ち止まる。

「いちか、おぼえてなかった……」

「……………」

頭に手を置いて、出来るだけ優しく、撫でた。

「やくそく……………おぼえて、なかったよう……………!」

「……………」

約束とやらがどんなものかは知らないが——とても、大事な約束だったのだろう。

鈴は己に抱き付いて来て、そのまま泣き続けた。

鈴が泣き止むまで、己はじつと立ち続け。

本音は、その背中を優しく撫でていた。

「なるほど、それはおりむーが悪いね」

「でしょお!? まったく、信じらんない! 女の子との約束忘れるなんて!」

「……………」

十分ほどして泣き止んだ鈴は己に一夏への不満をぶちまけ始めたので、聞き役を本音に押し付けて撤退した。するとあつという間に二人は仲良くなり、本音が上手く聞き出すせいで鈴の愚痴は加速し既に己では手が付けられなくなってしまった。

なので、今は花の手入れに戻っている。もうすぐ消灯時間だ、早く終わらせねば。

「ひどいよね。女の子が勇気出して、プロポーズしたのに」

「ぶふううううっ!!?」

本音の直球に鈴が飲んでいたウーロン茶を吹き出した。染みになる前に自分で拭けよ。

——鈴の話 요약するとこうだ。

鈴は一夏に、「あたしが料理が上手になったら、毎日酔豚を作ってあげる」と言った。しかし一夏が覚えていたのは、「鈴が料理が上手になったら、毎日酔豚をおごってくれる」というものだった。

……確かにプロポーズの言葉だな。酢豚が味噌汁であれば完璧だった。そして一夏、後でシメる。

「そそそそそそそんなじゃないわよっ!!」

「ええ〜? 違うの〜?」

「違う! 違うったら違うのっ!!」

ムキになって否定する鈴を、本音は楽しげに見ている。その様子に気付いた鈴が咳払いをひとつ、話題の変更を図ってきた。

「シン、相変わらず花育ててるのね」

「……………」

「やっぱりいのっち、前からやってたんだ〜」

「…………いのっち?」

話しながら、二人が己の近くまで歩いて来て、鉢植えの前にしゃがみこんだ。

「綺麗に咲いてるわねー。やっぱり育て方がいいのかな?」

「うんうん〜、いのっち、お花のお世話、一生懸命だからね〜」

「……………」

「どうでもいいが、少し離れる。手元が見づらい。」

「アンタ、ほんとに花が好きなのね」

「……………」

好きなのかどうか、己にもわからない。だがなぜ花を育てようと思ったのかは覚えている。

生物は、死ねば土に還る。その土に草が生え木が育ち、花が咲く。

だが、そんな当たり前前の、自然の循環さえも——あの世界は、途絶えていた。

命が失われた肉は、ただ腐り、風化し、朽ち果てるだけ。命を受け入れ、次の命とするだけの力が、大地から完全に失われていた。

だが、この世界は違う。土が生きている。大地に活力が満ちている。草の緑が地平線の彼方を埋め尽くし、木々は空を覆うほど高く生い茂り、色とりどりの花が咲き誇っている。

だから、育てようと思った。

たとえ、名も知らぬ花であっても。

——きつと、弔いになるだろうから。

「正直アンタのイメージには合わないと思うけど、あたしは好きよ。シンの育てた花。どれも綺麗だし、一生懸命咲いてる感じがするし」「おう。りんりん、わかってるね〜」

「……………」

そう言ってもらえると有り難い。剣以外のことなど、まるで経験がなかったからな。

「……………ありがとう、シン。それと本音も。……………ちよつと、すつきりした」「……………そうか……………」

「泣きたくなったら、またおいで〜。いのっちはいつでも貸し出すよ〜」

「あはは、ありがとう。……………それじゃ、あたし部屋に戻るね。また明日、シン、本音」

そう言っただち上がった鈴は、いつもの鈴に戻っていた。そのうち機会を見つけて、一夏を叩きのめすことだろう。

「……………鈴……………」

「? なに? シン」

「……………また会えて、嬉しい……………」

鈴はキョトンとして、次いでニカツと笑って言った。

「あたしも嬉しいわよ——シン」

第13話 月光

鈴が己たちの部屋を訪れた翌日、校舎玄関前廊下に「クラス対抗戦日程表」が張り出された。一夏の一回戦の相手は二組——つまり、鈴である。

「……なんか、波乱の予感がするな……」

「……………」

頬に赤い手形をつけた（昨日鈴に叩かれたのだろう）一夏が不安そうに言う。

「昨日、怒らせちゃったしなあ……」

「……………」

鈴を怒らせたことは分かっているようだが、しかし怒らせた理由には思い至らない。それが織斑一夏という男なのだ。

「……あ、鈴だ」

「……………」

噂をすれば影。一夏がぼやきながら廊下を歩いていると、曲がり角の先から鈴が現れた。

「お……おはよう、鈴」

「……………」

一夏の挨拶を完全に無視して通り過ぎる鈴。どうやらかなりご立腹の様子だ。

「……はあ、わっかんねえな。何をあんなに怒ってるんだよ……」

「……………」

鈴が怒っている理由など一夏が鈴との約束を覚えていないから以外になく、鈴の怒りを鎮めるには約束の内容を正確に思い出すのが最も確実だ。

だがその解決は、おそらく最も有り得ないだろう。

「直接聞いたほうが早いかな？」

「……馬鹿が……」

「なにい!?! シンまでそんなことを言うのか!?!」

他に何を言えと言うのだ。

「決めた。鈴が理由を教えてくださいるまで、謝らない」
「……………」

一体どのような思考回路をもってすればそんな解答を導き出せるのか、是非ともご教示願いたいものだ。

「だってそうだろ。理由も分からずに頭を下げられるか」

一夏の美徳のひとつ、世の男たちから失われて久しい〔男の意地〕が、今回は悪い方に働いたようだ。

「とにかく、俺は謝らない。鈴が理由を言うまではな」
「……………」

そして一夏は、かなり頑固なところがあるのだった。

そして、クラス対抗戦当日。

「調子はどうだ？ 一夏」

「バッチリだよ、俺も白式こいつも」

雪片式型で素振りしながら、箒の質問に答える一夏。その顔は落ち着いていながら、闘志に満ちている。

「う、うむ。私との特訓の成果を、思い切りぶつけてこい」

「特訓、て……お前はセシリアとケンカしてばっかだったじゃないか」
「う……………」

「……………」

一夏の言う通り、訓練時間の実に四分の一が箒とセシリアの喧嘩により失われた。いくら月影で脅しても、翌日にはまた同じようなことで喧嘩になるのだ。

……………良く耐えたと自分を褒めてやりたい。

「では、一夏さん。わたくしが調べてきた凰さんの情報をお伝えしますわ」

「ああ、頼む」

言って、セシリアは小型の端末を起動し、鈴のデータを呼び出した。
「中国製第三世代型、〔甲龍シエンロン〕。スペックデータから大まかに分類する

と、近距離格闘戦に優れたパワータイプということになりますが——
もちろん、それだけの機体ではありませんわ」

「……第三世代型兵器か」

第三世代型兵器とは、文字通り第三世代型のISに搭載されている専用兵装のことだ。というより、この第三世代型兵器を搭載したISのことを第三世代型ISと呼ぶと言っても過言ではない。セシリアのブルー・ティアーズはその典型だ。

「さすがにその詳細までは分かりませんでしたわ。一応アラスカ条約では、ISについての技術は全て公開することとなっていますが……」

「ほとんど形骸化しているからな、その条文は。「まだ未完成だ」の一言でいくらでも逃げられる。そしてIS学園内で開発された物については、所有者が卒業するまでは公開の義務がない」

「よく使う手ではありますわね。ほとんど出来上がった物を、IS学園で完成させるというのは。どこの国も同じようなことをしていますから、強く言えませんし」

「まあ、そんな大人の事情はどうでもいいよ。鈴の第三世代型兵器が分からなくても、近距離パワータイプって分かっただけでも大きい。……懐に飛び込んでも、油断するなってことだよな」

「……………」
それだけ分かっているのなら十分だ。元々格上の相手、最後まで気を抜くことなく、全力を出し切ってこい。

「…………お喋りはそれくらいにしろ。織斑、時間だ」

「はいっ！」

三人の遣り取りを黙って見ていた千冬さんが、手を打ち鳴らして時間をしらせる。

——いよいよ、だな。

「……………ところで、真改先生は例の如く、アドバイスはなしですか？」

「……………はっ。」

「……………」

突然気の抜けることを言い出した一夏に、箒、セシリア、山田先生

がポカンとする。

……なんだ、意味が分かったのは、己と千冬さんだけか？

「……無い……」

「了解。……ありがとな、シン」

「「??」」

一夏なりに、緊張しているのだろう。

一年ぶりに会った幼なじみが、どれほど強くなったのか。自分との間に、とれほどの差があるのか。相手が親しき者だからこそ、これは単なる試合ではないのだ。

——空白の一年間。二人がそれぞれ歩んで来た道を、ぶつけ合う。

「……井上、あまり甘やかすな」

「……………」

「「??」」

やはり千冬さんは、分かっているようだ。

……そう。己が一夏に教えることなど、何も無い。たとえあつたとしても、それを語れるほど滑らかに動く舌を持ち合わせていない。

だからこそ、その身に叩き込んで来た。皮膚に、筋肉に、骨に、神経に、刻み込んで来た。

そんな己のやり方を、一夏は見て来たのだ。

——存分に、語り合ってこい。その拳で、その剣で。

「うし、それじゃあ——行くぜっ!!」

重々しい駆動音を響かせて開いたカタパルトから。

気合いと共に、純白の機体が飛び立った。

いよいよ始まった、クラス対抗戦。場所は第一アリーナ。客席は超満員で、通路まで立ち見の生徒に埋め尽くされ、会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

——まあ今の俺には、そんなことを気にしている余裕はないが。

『両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに従い、俺と鈴は空中で向かい合う。距離は五メートル。ISにとつてはあつてないような距離だ。

「覚悟はできたかしら？ 一夏」

開放回線オープン・チャネルで鈴が話しかけてくる。その鈴の専用機、「甲龍」は、肩の横に浮いた非固定浮遊部位アンロック・ユニットと、赤と黒を主としたカラーリングが特徴的な機体だ。

……なるほど、確かに見た目の印象からして、力は強そうだ。

「ああ、決めてきたぜ——お前を叩きのめす、覚悟をな」

たったの一年で国家代表候補生になった鈴は、優れた才能があり、血の滲むような努力をしてきたんだろう。間違いなく、俺よりも強い。

だからと言って、負けるつもりなんか微塵もない。全力でぶつかつて——勝ってみせる。

「……ふふん、言うじゃない。やっぱり変わってないわね、アンタ」

ニヤリと不敵に笑う鈴。お前こそ、全然変わってないじゃねえか。

「……胸とか「なんか言った？」イエナニモ」

……かなり小さい声だったはずなんだが、バツチリ聞こえたみたいだ。さすがISのハイパーセンサー、感度抜群である。

思わず漏れたセリフにより鈴が殺人鬼みたいな目つきになつたので、慌てて口を噤む。

「……ふ……ふふ、ふっふっふ。いいわ、やってやろうじゃない。そこまで言うなら、お望み通りぶちのめしてあげるわよ——徹底的にねっ!!」

「へっ、何を今さら。俺は元から、そのつもりだつての!」

雪片式型を構え、その切っ先を鈴に向ける。

——これから始まるのは、戦いだ。ならまずは、宣戦布告をしないと。

「戦場で、敵同士が、甲冑着込んで武器持つて向き合ってるんだ。ならやることは、一つだけだろうがっ!!」

手加減無用、情け無用、問答無用。それだけが、「戦の礼儀」だ。

「全力で行くぜ、鈴! お前も、手加減なんかするんじねえぞ——!」

「上等よ！ 泣いて謝ったって、絶対に許さないから——！」
そして。

開戦の狼煙が上がる。

『それでは、試合を開始してください』

「おおおおおおっ!!」

「はあああああっ!!」

ガギインツ!!

雪片式型と、鈴が持つ巨大な青竜刀がぶつかり合う。明らかに質量で負けているその重厚な刃を相手に、白式も雪片式型も一歩も退かない。

(頼もしいぜ、相棒っ！)

スラスターを全開に噴かしギチギチと鏝迫り合いをしながら、お互いに犬歯を剥き出して笑う。

「へえ。甲龍のパワーと双天牙月を正面から受けきるなんて、やるじゃないっ!!」

「はっ！ 機体は互角って訳だ、なら負けたら操縦者のせいだよなあっ!!」

闘争心に火がつき、心が高ぶる。

一合で分かった。鈴は強い。少なくとも接近戦は互角以上、そしてまだ、第三世代型兵器を使っていない。

「なら、これでどう?」

鈴は雪片式型を大きく弾き飛ばし、次の瞬間、柄の両端に巨大な刃が付いた青竜刀を、バトンのように振り回してきた。ただでさえ重い得物に遠心力が加わり、手数も増えた。縦横斜めから襲ってくる刃を一度でも捌き損ねれば、そのまま押し潰されるだろう。

「ぐうっ、器用なことしやがって……!」

尚も回転を上げ続ける青竜刀を必死に受けながら、勝機を探る。一眼二足三胆四力。全てを見切る眼こそがもつとも大事だと、昔の人も

言っているんだ。

(見極めろ……!)

完璧な技など存在しない。鈴の連撃にも、どこかに付け入る隙があるはずだ。

厄介なのはあの回転。あれを崩さなきゃ、最後の一步が踏み込めない。

(力づくじゃだめだ)

重さに加え、今や速度でもこちらを上回っている。今真つ正面からぶつかったところで、あつさり弾かれるだけだ。

——なら。

(押して、ダメなら——!)

「引いてみる、てなあ!」

「うわっ!」

回転の勢いが乗った袈裟切りに合わせ、逆袈裟を放つ。狙いは青竜刀の背の部分。

——打ち落とし。

崩せないなら、自分で崩れてもらう。ただでさえ大きな力が加わり続けているところに新たな力が加わったことで、鈴が前につんのめるようによろめいた。

(取った!)

逆袈裟からの切り上げ。雪片式の刃が、隙だらけの鈴に迫り——

——鈴が、笑っていることに気付いた。

「残念でした♪」

見れば、甲龍の肩アーマーが開き、中心の球体が光っている。……まずい。何かは分からないが、これはまずい。

慌てて回避しようとするが、しかし間に合わず、見えない拳に殴り飛ばされた。

「ぐあっ!」

骨の軋む音が聞こえた。シールドバリアーを貫くほどの衝撃。弾き飛ばされ、せつかく詰めた距離が開く。

「ほら、もう一発行くわよ!」

「くっ！」

再び肩の球体から「何か」が放たれるが、何も見えない。デタラメに動き回って、なんとか避ける。

(白式・なんだこれは!?)

——解析。武装の正体は「衝撃砲」と判明しました。空間に圧力をかけ砲身を形成し、余剰で生じる圧力自体を砲弾として撃ち出す、第三世代型兵器です——

「よくかわしたわね。「龍咆」はISのハイパーセンサーにもひっつかからないのに」

……これは厄介だ。

砲弾が見えないのはまだいい。だが砲身が見えなければ、鈴がどこを狙っているのか、いつ撃つてくるのかが分からない。

「けど、いつまでそれが続くかしらね？」

「ちいっ！」

再び放たれた衝撃砲を避ける。勿論見えているわけではなく、言わば当てずっぽうの回避行動。

そんなもので避けきれはせず、数発の直撃を受ける。

「ぐうっ……いっ！」

避けにくさもそうだが、威力も相当なものだ。このまま直撃を受け続ければ、数分と保たず敗北する。

(どうする? 砲弾は見えない、砲身も見えない、そんな物をどうやってかわす?)

ひたすらランダムな三次元機動を繰り返す。攻撃をかわすためはなく、狙いを付けさせないための機動。

それなりに効果はあり、直撃を受けることはなくなったが、体力とスラストエネルギーの消耗がかなり激しい。このままでは次第に動きが鈍くなり、いずれは捉えられる。

(……集中しろ。砲弾が見えないのなら、砲身が見えないのなら、それ以外を全部視ろ)

鈴は衝撃砲を撃ち続けている。あれだけの性能を持っていながら、燃費まで優れているらしい。エネルギー切れになる様子はない。

（鈴の視線は？ 甲龍の姿勢は？ 球体の光は？ 周りの空間は？

——見切るんだ。一つ残らず、一つも余さず、見極めろ）

少しずつ慣れてきて、無駄な動きをしなくても被弾しなくなってきた。

けどまだ足りない。このままではまだ、近付けない。

もっと正確に、的確に見極めないと。

（タイミングだ。狙いは大分見えるようになって来た。あとは、いつ撃つて来るかだ）

鈴の余裕は崩れない。俺があと一步を踏み込めないことに気付いているんだろう。

近接武器しか持たない俺が近付けないということは、つまりは絶対に勝てないということだ。

（視ろ、視ろ、視ろ。目を逸らすな顔を背けるな、まだなにか、在るはずだ——）

何十度目かの砲撃。鈴の眼が俺を捉え、肩の球体が光る。

あの光は衝撃砲のチャージ状況の現れで、発射タイミングと直接関係はない。鈴の意志で好きな威力で撃ち出せるし、チャージ速度も調整できる。

（——意志？）

……そうか。こんなに簡単な答えだったのか。

砲弾が見えないのなら。

砲身が見えないのなら。

——見えないものを、視ればいい。

「——視えた」

「なっ……!?!」

ただ半身になるだけで、衝撃砲をかわす。無駄な動きが一切ない、理想的な回避。

鈴が攻撃の瞬間に放った気配——「殺気」を感じとったからできた反応。

（実戦以上の訓練はないってか。確かにこの感覚は、練習じゃ味わえないな）

状況は依然俺の不利。なにせたった一発避けただけだ。だがそれだけで、俺に不敵な笑みを浮かべさせるには十分だった。

そして、それを見た鈴の表情が変わる。

「ふ、ふん！ まぐれで一回かわしたくらいで、いい気にならないよね！」

「ああ、今のはただのまぐれさ。けどな、どれだけ馴染んだ技も、最初の成功はまぐれなもんだろ？」

今はまぐれでも、その内そうじゃなくなる。それが分かっているのだろう、鈴の顔に焦りが浮かんだ。

「感謝するぜ、鈴。お前のおかげで、俺は一步、目標に近付けた」

「……このあたしを踏み台呼ばわり？ 上等じゃない。今のセリフ、すぐに後悔させてあげる！」

「やってみるよ。俺も、とっておきを見せてやるぜ！」

ここ数日練習していた技能、

イグニッション・ブースト
瞬時加速

ISが持つ慣性を無効化する機能、

パッシブ・イナーシャル・キャンセラー
P I C

を最大限に

使って一瞬で最大速度に到達するこれは、使い方次第で代表候補生とも戦える技だ。

事実千冬姉は、この瞬時加速と零落白夜を極めて世界一の座についていた。

（仕掛けるなら、今しかない！）

瞬時加速の発動タイミングを図る俺に、鈴が衝撃砲を向ける。

意識を集中。もう一度見切ってかわし、瞬時加速で接近、今度こそ

反撃する。

（……来るっ！）

鈴の衝撃砲が不可視の砲弾を放ち、俺が雪片式型を振り上げつつ回避しようとした、その瞬間。

眼を焼くほどの閃光が、俺たちの戦いに割って入った。

ズドオオオオッ！！

「ぎゃああああっ!？」

「な、なんだ!？」

突然の出来事に混乱する。そんな俺に、鈴からの怒号が飛んでき

た。

「二夏、試合は中止よ！ それと気をつけなさい、アイツ、アンタを狙ってる！」

——ステージ中央に熱源を感知しました。所属不明のISと断定。……警告。ロックされています——

白式からの警告。どうやら鈴の言葉は事実らしい。

「マジかよ……！」

IS学園に殴り込みをかけてくるなんて、度胸があるどころの話じゃない。

しかもコイツは、アリーナを覆う遮断シールドをぶち抜いてきやがった——！

「とんでもないわね……！ 遮断シールドはISのシールドバリア以上の強度があるのに、一体どんな威力よ!?!」

「目的はなんだ?! なんだってこんな——」

「そんなもん、あたしが知るわけないでしょうが!!」

混乱する俺に鈴が怒鳴り返す。状況は全くの不明だが、一つだけ分かることがある。

このままじゃ、観客席のみんなが危ない——！

「みんな逃げろ！ 遮断シールドじゃコイツの攻撃は防げないぞつ!!」

相手の正体も目的も分からないが、いきなり乱入してくるようなヤツだ。友好的な相手とは考えにくい。

俺の声を聞いて、観客のみんなが避難を始める。

「二夏、こんなことになった以上、学園の先生たちが応援に来るわ。それまであたしが時間を稼ぐから、アンタは逃げなさい」

……逃げろ？ 今逃げろって言ったか？ 選りに選って、この俺に？

「ふざけろ、大事な幼なじみを置いて逃げられるか。そんなことしたら、たとえ命が助かって、俺の魂はそこで死ぬ。」

——逃げるくらいなら、腹切ったほうが万倍マシだ」

「……アンタなら、そう言うと思ってたわよ、バカ二夏」

ニヤリとお互いに不敵な笑みを浮かべる。万全とはとても言えないが、戦意は微塵も衰えていない。

「っ！ 来るぞ！」

最初の攻撃で巻き上げられた煙の中から、熱線が放たれる。左右に散開して回避。

「ビーム兵器かよ……しかも威力が半端じゃない」

「そりや遮断シールドを紙みたいに破るくらいだからね。直撃したら、絶対防御があってもタダじゃ済まないわよ。最悪——」

——死ぬ。

「なら尚更、逃げる訳には行かねえな」

死ぬのは怖い。それは人間として当然の感情であり、恥ずべきことじゃない。

だが大事な幼なじみに死なれるのはもっと怖いと思うところが、感情の難しいところだ。

「また来た！」

煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる。それをどうにかかわすと、その射手たるISがふわりと浮かび上がった。

「……なんなんだ、コイツ……」

姿からして異形だった。

つま先よりも下まで伸びている、異常に長く、ビーム砲口が左右二門ずつある腕。

首のない、肩と一体化したような、センサーレンズが不規則に並んだ頭。

そして全身を隙間なく覆う、灰色の装甲。

「フル・スキン全身装甲……随分珍しいわね」

「誰だお前。何が目的だ」

「……………」

返事はない。こちらの問い掛けに応えるつもりはないらしい。まあ予想通りだけどな。

『織斑君！ 鳳さん！ 聞こえていますか!? 今すぐアリーナから脱出してください！ すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

山田先生からの通信。いつもと違って先生らしい威厳のある声だが、その言葉には領けない。

「それまで俺たちで食い止めます。こいつを放っておいたら、観客席に被害がでるかもしれない」

『織斑君!?! だ、ダメですよ! 生徒さんにもしものことがあったら——』

「だからそのもしもが、観客席のみんなにもあるかもしれないでしょうが!」

『そ、それは……けど、だからって——』

それ以上を聞いている余裕はなかった。正体不明のISが、体を傾けて突進して来たからだ。

「おっと!」

避け様に雪片式型を振る。完璧なタイミングの筈だったカウンターだが、敵はスラスターを噴かして避けた。

「ちよっ……なんだよ今の動き!?!」

「スラスターの出力までとんでもないわね……」

攻撃力、機動力、どちらも尋常じゃない。あの全身装甲だ、おそろく防御力も相当なものだろう。

——それでも、負ける訳にはいかない。

「剣だけじゃ追い付けないでしょ!?! あたしが援護するわ、突っ込みなさい、一夏!」

「了解だ! 俺に当てんじやねえぞ、鈴!」

「はん! 誰に言ってるのよ!」

覇気に満ちた鈴の言葉。恐ろしい強敵も、味方になればこんなに頼もしいことはない。

俺は万の援軍を得たような気持ちで、突撃を仕掛けた。

「くっ……!」

零落白夜の斬撃が空を切る。必殺の間合いから放たれた一撃は、し

かし敵に届かなかった。

「離れて！」

鈴の警告に反応し、即座に離脱。

その瞬間、敵がコマのように回転しながらビーム砲撃をしてくる。桁違いの威力を持つ熱線が、俺を捉えようとしていた。

「やらせないわよ！」

鈴が衝撃砲を放つ。敵は回転を止め、その長い腕で不可視の砲撃を叩き落とした。

「ふう……助かったぜ」

「貸しにしとくわ。……それより、どうするの？　これじゃ埒が開かないわよ」

「ああ、しかも観客席のみんなが避難できてない。先生たちも、もうとつくに来てたつていいはずだ」

「……扉がロックされてる？　これもアイツの仕業ってわけ？」

「さあな。だけどそうだとしたら、俺たちだけでやらなきゃならない。

……鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「180つてとこね。一夏は？」

「60切ったよ」

文句を言うわけじゃないが、さっきまでの鈴との試合が響いている。零落白夜を使えるのは、よくてあと一回だろう。

——だが。

「ふうん。そんだけあれば——」

「ああ、十分だ」

零落白夜の威力は絶大だ。一撃あればこと足りる。だからあとは、当てるだけだ。

「もつとも、その一撃が当たらないんだけどね。まさか龍咆があんなに簡単に防がれるなんて、結構ショックだわ」

「それなんだけどさ……アイツの動き、なんか違和感があると思わないか？」

「違和感？　……て、どんな？」

「なんて言うのかな。……まるで、人間じゃないみたいだ」

人間じゃない。その言葉に、鈴が目を丸くする。

「どういうことよっ。」

「攻撃しても、対応が毎回同じだ。それに死角からの攻撃にもかなり正確に反応してくる。なのに向こうから仕掛けて来る時は工夫がない。あれじゃまるで、決められたことしか出来ない——」

——機械みたいだ。

「……確かに、言われてみればそうね。けどISは人が乗らないと絶対に動かないのよ。無人機なんて聞いたこともないわ」

それは俺も教科書で読んだ。「ISは女性にしか動かせない」。それは文字通り、機械にすらも動かせないことを示している。だが千冬姉はこうも言っていた。

「ISは未完成の兵器だ」と。

「つまり、どこかの誰かが極秘裏に無人機の開発に成功してても、不思議じゃないってこと？」

「まあ、そういうことだな。俺みたいなのもいるくらいだし、有り得ない話じゃないだろ」

「……仮に、あれが無人機だとして。だからどうなるってのよ？」

「決まってるだろ。やり過ぎる心配はないってことさ」

零落白夜は相手のバリアーを無効化し、強制的に絶対防御を発動させるものだ。その威力は全IS中トップクラスで、操縦者にまで致命傷を与えかねないほど。

しかし相手が無人機なら、遠慮する必要は全くない。

「思いつきり振り抜いてやるぜ。シン流に言うなら、寄って斬る、だ。あの機動力でも避けられないくらい、深く踏み込んでやる」

「……面白いじゃない。疲れを知らない、プレッシャーも感じない、動きはまさに精密機械でミスもしない——そんな無敵の無人機様に、人間の発想力ってヤツを教えてやろうじゃない。それで、有りつ丈の授業料をぼったくってやるわ」

そう言って浮かべる笑みが頼もしい。これから挑むのは分の悪い賭けだが、賭ける価値は十分だ。

「そこで、だ。鈴、衝撃砲を最大までチャージして、いつでも撃てるよ

うにしといてくれ」

「いいけど、どこを狙うのよっ」

「もちろん、アイツさ。それで、俺の合図で——」

「一夏あつー」

「……えっ？」

突然の大声。アリーナのスピーカーから響いた、ハウリングが尾を引くほどのその声は——

「な、なにしてるんだよ……箒っ！」

中継室を見る。審判もナレーターも避難したそこで、箒は肩で息をしながら、不安げに揺れる目線で俺を見ている。

怒っているような、焦っているような、そんな不思議な表情で、もう一度、叫ぶように声をあげた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするっ!!」

——それは、箒なりの、箒に出来る、精一杯の応援だった。

セシリアと戦うシンに、俺が送ったように。

「っ！ 一夏!!」

鈴の声で視線を戻す。敵 I S が、今の館内放送の発信者である箒に興味を持ったように、じっと箒を見つめている。

「逃げ——」

——ダメだ、間に合わない。

敵 I S はすでに、腕のビーム砲口を箒に向けていた。あれを生身で受ければ、一瞬で蒸発するのは目に見えている。

「やめろおおおっ!!」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。しかし当然、そんなものに意味はない。

「ほ——」

熱線が放たれる。それが、ひどくゆっくりに見えた。

——ふざけるな。

守るって、誓ったのに。

俺は、また——

「——箒いいいいっ!!」

箒は茫然と、自分に迫る「死」を見ている。

逃げて中間に合わない。たとえ今この瞬間に敵を倒したところで、それはもう意味がない。

そして禍々しい閃光が、為す術なく立ち尽くす箒を飲み込む——

——その、直前に。

箒を守るように。

三年前、攫われた俺を、助けたように。

銀色の装甲と、紫色の極光が。

箒の前に立ちふさがった。

……箒がない。

ピットからリアルタイムモニターで敵と戦う一夏と鈴を見ていた己がそれに気付いたのは、正体不明のISが二人の試合に乱入し戦闘を始めてから、数分が経ってからだった。

(……………へ……………?)

……なにか、ひどく嫌な予感がする。

鈴と戦う一夏の姿を不安げに見ていた箒が、試合ではなく、本物の戦いに巻き込まれた一夏に何を思ったのか。

——決まっている。自分にも何か出来ないかと、そう思ったに違いない。

「……………」

駆け出す。箒のことだ、居ても立ってもいられず、きつと無茶なことをするだろう。そしてその行動は、最悪の事態を招く恐れがある。

あのISは、恐らく無人機だ。ただプログラムに従って動くだけの特徴的な行動パターンは、昔良く見たものに酷似していた。

そしてあのISには、高度なAIが搭載されている可能性が高い。ただ戦うだけでなく、一夏と鈴の遣り取りを邪魔することなく見てい

たことから、それが伺える。

だがA Iは所詮A Iだ。人間とは考え方が違う。プログラム外の事態に対しどういった行動に出るか、分かったものではない。

「一夏あつー！」

「……………」

箒の声。アリーナ全体に響き渡るそれは――

(……………中継室か……………！)

幸運にも、そこならば近い。すぐそこだ。

全力で、駆ける。最悪の想像はいよいよ己の思考を埋め尽くしていた。

「男なら……………男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするっ!!」

叫ぶようなその声は、箒から一夏への声援だった。彼女らしい、叱責のような言葉だが、その声に込められた想いは一夏の身を案じるものだ。

そして中継室に飛び込んだ己の目に映ったのは、肩で息をする箒の姿と、今まさに箒に向け熱線を放たんとする、異形のI Sの砲口だった。

――首から提げられた指輪を掴む。

この瞬間、己の心を満たしていたのは、幼なじみの命を害そうとする敵への怒り――では、なかった。

――己の意志に応じ、己の専用機、朧月が展開される。

大切な幼なじみを、目の前で失ってしまうかも知れないという恐怖――でも、なかった。

――右腕を振り上げ、そこに取り付けられた月光を起動。

不謹慎なことに。この瞬間、己の心を満たしていたのは――歓喜

だった。

——拡張領域パススロットの八割を食い潰している二つの装置、膨大なエネルギーを貯め込むコンデンサー、神無月かななづきと、そのエネルギーを一気に送り込む供給ライン、神在月かみありづきが、月光に有りつ丈のエネルギーを叩き込む。

ただ奪い、壊し、殺すことしかしてこなかった、この己が。

——溢れ出る、紫色の光の粒子。それが一瞬で、ニメートルを超える極光の剣と成る。

おびただしい量の血に濡れ、おぞましいほどの業にまみれた、この腕で。

——箒の前に躍り出る。眼前に迫った「死」を切り払うべく、渾身の力を込めて、月光を振り下ろした。

誰かを、守れるなどと。

願ったことすら、なかったのだから。

「オオオオオオオオアアアアアアアアッ!!!」

朧月を装着したシンが、普段の彼女からは想像も付かないような咆哮をあげて、熱線と真つ向からぶつかり合う。

あの紫色の光の剣はおそらく、朧月の初期装備プリセット、月光だろう。あれだけの熱量を持つビームを切り裂くその威力は凄まじく、俺の零落白夜と比べても遜色ない。

だが数秒も続いた砲撃は、朧月に大きなダメージを与えた。ビーム

が止むと同時にISが解除され、力尽きたように、シンが崩れ落ちる。
「——ぶっ潰す」

殺意を剥き出しにした俺の声に、鈴の絶対零度の声が重なる。もはや言葉を変えすまでもなく、二人の思いは一つになった。

「鈴、撃てえ!!」

衝撃砲を構える鈴の前に躍り出る。俺の意図を一瞬で読み取った鈴が、獰猛な笑みを浮かべて吼えた。

「あたしの分まで、痛めつけてきなさいっ!!」

「言われるまでもねえ!!」

背中に巨大なエネルギーの塊——最大威力の衝撃砲の砲弾を受ける。

その直前に、千冬姉から教え込まれた技術——イグニッション・ブースト 瞬時加速を発動した。

「う、お、おおおおおおおっ!!!」

その加速は今までの機動とは比べ物にならず、一気に景色が吹っ飛んで行く。

……思った通りだ。これなら——!

「なるほど……やっぱリアンタ、大バカだわっ!」

衝撃砲の砲弾は、圧縮された空間そのものだ。その空気の密度はもはや個体と呼べるだろう。

そんな物を叩き付けられれば、そりゃ効く。なにせ本物の砲弾と変わりないんだから。

……そう、本物の砲弾と変わらない。まともに食らえば大ダメージだが、瞬時加速した直後の背中から撃たれれば、相対的な速度で考えれば。

なんとか、乗れる——!

「二行つけええええええええええっ!!!」

よくも箒を狙いやがったな。

よくもシンを傷つけやがったな。

お前が無人機であることを心から願うぜ。

でない、本当にやり過ぎちまいそうだ——!

——エネルギー変換率、100%。零落白夜、発動——

敵ISが眼前に迫る。眩い光を放つ剣を、大上段から振り下ろした。

「おおおおらあああああつ!!」

正中線を狙った一撃は、反応した敵ISが振り上げた右腕を切り落とした。即座に刃を翻し二撃目を叩き込もうとしたが、敵のほうが一瞬速い。左拳に殴られ、さらに接触面から熱源反応。

零距离からのビーム砲撃。

零落白夜を使ったことで、白式のシールドエネルギーはほとんど空だ。これを受ければ、まず間違いない死ぬだろう。

——撃てれば、の話だが。

「真改さんは——」

よく通る声。同時に、零落白夜によって破壊された遮断シールドの隙間から、六機のビットが飛び出してくる。

「あなた如きが傷つけていい方では、なくってよ!!」

ブルー・ティアーズ全機による、レーザーとミサイルの一斉射撃。零落白夜でシールドエネルギーを失ったところにそれを受け、敵ISはひとたまりもなく墜落していく。

だが、まだだ。

——敵ISの再起動を確認。警告。ロックされています——

「悪いがさつきのは、鈴に頼まれた分だ」

白式の警告通り、片方だけ残った左腕を最大出力形態バースト・モードに変形させたISが、地上から俺を狙っていた。

「そして、これが」

今までと比べても圧倒的な熱量を持つビームが迫る。

俺はその光の中に、ためらいなく飛び込んで——

「俺の、分だあああああつ!!」

——今度こそ。

敵ISを、真つ二つに切り裂いた。

「よう。目、覚めたか？」

「……………」

幼なじみの声。顔を横に向ければ、三人の幼なじみと、セシリア、本音の姿があった。

「なかなか起きないから心配したわよ、シン」

「具合はいかがですか？ 真改さん」

「お疲れさま、いのちち」

口々にかげられる、労りの言葉。己は、どうにか生き残ったらしい。

「……真改」

「……………」

俯いた箒の声。それを聞き、安堵と喜びに心を満たされる。

——守れた。

「……済まなかった。私のせいで、お前は、危うく……」

「……怪我は……？」

「え……？」

箒は一度、キョトンとして。

「あ、ああ。真改のおかげで、怪我はない」

「……なら、いい……」

「……ありがとう」

箒の声が震えている。

……また、泣かせてしまったか。

「ありがとう、真改っ……！」

再び俯き、泣き始めた箒の顔に手を伸ばし、その眼から流れる涙を拭う。

「……無事で、良かった……」

「それは、私の台詞だ……！」

箒は己の手を取って、さらに泣き出してしまった。震える箒の肩を、慰めるように一夏が優しく叩く。

「それで、大丈夫か？ どこか痛むところないか？」

「……………」

朧月が守ってくれたのだろう。疲労はあるが、体に怪我はない。

……ああ。そういえば、一つだけ。

「……喉……」

「」「は？」「」

「……喉が痛い……」

「」「……」「」

一瞬の静寂。

「……ぷ、あははははー！」

「た、確かに、あははっ、すごい声出してたもんねえアンタ！ あははははー！」

「し、真改さん、ふふふ、ここは、笑いをとる場面ではありませんわ！」

「ふふ、真改、お前というやつは、くふふふ……！」

「あははく、いのっち、普段喋らないからだよく」

「……」

……納得がいかない。痛む所はないかと訊かれたから、正直に答えたとこのに。

……だが、まあ。

重くなった雰囲気も和らぎ、なにより箒も笑っているので、善しとしよう——

外伝Ⅰ ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター

世界最強にして女性にしか扱えない兵器、ISの操縦を学ぶためのIS学園の入試会場に、どういうわけか、二人の男子がいた。

一人は日本人らしい黒髪黒眼、中肉中背で中々に整った顔立ちの少年。手に持った紙と睨めっこしながら、あーでもないこーでもないと、ぶつくさぼやいている。

そしてもう一人は、少年と呼ぶのが憚られる、250センチはあろうかという長身を、岩の塊のように鍛え上げた巨人である。

「迷っちゃまったなあ、イイチカアアアアツ!!」

「うるせえよ!? こんなところでそんなことを大声で言うな、この単純馬鹿!!」

「ハッハー!!」

日本人の少年は織斑一夏。そして大柄（どこの話ではない）な少年（?）はヴァオー。

藍越学園アイエツを受験するつもりでIS学園アイエスの試験会場に迷い込んだ、馬鹿二人である。

「オレの名前はヴァオーだ! よろしく頼むぜえ、みんなあああ!!」

「やかましい! お前は普通の声量で喋れんのか!」

「そいつは無理ってモンだけ、千冬さああああん!」

「織斑先生と呼べ!」

「ハッハー!!」

振り下ろされる出席簿。普通にやっても届かないのでジャンプする姿がちよつとラブリー。

「わたくしを知らないですって? このイギリス代表候補生にして入試首席、セシリア・オルコットを!」

「悪いなあ、オレあ人の名前覚えるのが苦手なんだ!」

「んなこと胸張って言うんじゃねえよ!」

少女たちとの出会い。

「こ、のっ……!! 決闘ですわ!!」

「上等だあ!! 分かり易いのは、嫌いじゃあないぜえ!」

そして（何故か）戦い。

「これがヴァオー君の専用機、「グレディツツィア」ですっ!」

それは異形だった。

操縦者の少年（？）に合わせたのか、高さ四メートルはあろうかという巨躯。

隙間なく施された白い全身装甲フル・スキンは見るからに分厚い。

武装は右腕に巨大なバズーカ、左腕に二門、両肩に三門ずつ、計八門もの六連装大型ガトリングガン。

この怪物を見た誰もが思った。

これはISではない、要塞だ。

「あら、逃げずに——つてなんなんですよその機体!」

「見りやあわかんだろうが! オレの専用機だぜえ!」

「そんな巨大なIS、見たことも聞いたこともありませんわ!」

「ハッハー! 細けえこと気にしているとハゲるぜえ!」

「ハゲ……!?! レ、レディになんてことをおっしゃいますのっ!?!」

少年にはデリカシーなどない。

「くっ、なんとという弾幕……! ですが、この程度で墜ちるわたくしと

ブルー・ティアーズではありませんわ!!」

「ハッハー! 望外だあ! 悪くないぜ、セシリアアアアアアッ!!」

あるのはただ、無尽蔵の弾薬と、無限の闘争心のみ。

「久しぶりだなあ、リイイイン! 相つ変わらず小せえなあ!」

「うっさいわね! アンタがデカ過ぎんのよ、この単純馬鹿!!」

幼なじみとの再会。

突如乱入した敵。苦戦する親友。閉じ込められ、手も足も出ない自分。

だが、そんなことは関係ない。愚かな自分はただ信じ、行動するのみ。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

「そうだぜ、イチカアアツ！ オレのダチなら、きっちり決めるおおお!!」

「馬鹿野郎が……んなこと言われたら、是が非でも気合い入っちゃうじゃねえか!!」

弾丸が届かぬのなら、せめてこの声を。

「私は認めない。貴様があの人弟であるなど、認めるものか」

「ハツハー！ 嫌われたモンだなあ、イチカアアアア!!」

「うるせえ、ぶん殴るぞてめえ！ 今明らかにそういう雰囲気じゃねえだろ!?!」

「な、なんだ貴様!?!」

軍人すらビビらせる威圧感。

「織斑君のグループに入れて〜!」

「デュノア君、よろしく!」

「私は織斑君と!」

「デュノア君で!」

「織斑君!」

「デュノア君!」

「織斑君!」

「デュノア君!」

「オレもいるぜええええ!?!」

「「「「「いや、生身でISより大きい人はちよつと……」」」」」

「そりゃあないぜイイイチカアアアアツ!!」

「俺に言うなつ!」

大は小を兼ねないこともある。

「じゃあ、射撃武器の練習を試してみようか」

「なんならオレのを貸すぜえ、イチカアアア!」

「そんなデカイので練習になるか!」

「あはは、二人は仲いいんだね」

もう一度言おう、大は小を兼ねないこともある。

「ねえねえ、第三アリーナで専用機同士が模擬戦してるよ!」

「ほんと!? 誰と誰?」

「片方はわからないけど、もう片方はすごく大きかったから、多分ヴァーサー君だよ」

「……え?」

三人は同時に思った。

何だろう、嫌な予感がする。

「このシュヴァルツエア・レーゲンの停止結界の前では、実弾兵器など無力だ」

「ハッハー! なら止めてみせろお!! 弾ならまだまだ、腐るほどあるぜええええ!」

「え、ちよつ、おま、いくらなんでも多すぎ——」

毎秒百発の大口徑ガトリングガンが八門、合計毎秒八百発。

故人曰わく、数は力なり。

「あいつ、ふぎけやがって! ぶっ飛ばしてやる!」

「落ち着けえ、イチカアアア!!」

「……お前に言われると、なんか落ち着いたな」

「そりやおレを馬鹿にしてんのか? ……とにかく、白式はもうエネルギー切れだ。このまま行っても死ぬただけだぜえ?」

「じゃあどうすんだよ。あの偽物野郎が先生たちに制圧されんのを、黙って見てろってのか? ……冗談じゃねえ。あいつは、俺がぶっ飛ばさねえと気が済まねえ」

「んなこたあ分かつてるぜえ、イチカ。エネルギーがねえなら、オレのを分けてやる。グレディッツィアはこのガタイだ、白式のエネルギーくらいなんともないぜえ!!」

姉を真似る黒いISに、生身で挑もうとする親友を支える。その身体は、伊達に大きい訳ではない。

「白式は展開出来た。……そっちは大丈夫か？ ヴァオー」

「ハッハー！ 当つつつたり前だあ!! 誰に口聞いてやがんだよお!!」

——まだまだ行けるぜ、イイイイチカアアアアアツ!!」

「……つたく、頼もし過ぎるんだよ、お前は——!」

その巨軀は、仲間を守る城壁であり、災厄を打ち砕く鉄槌である。

自らの信じる「強さ」が敗れ、少女は少年に問うた。「強さ」とは、なんであるかを。

少年は答えた。「強さ」とは、自らの心の在り方だと。

その答えを聞き、少女は、もう一人の少年にも問うた。「強さ」とは、なんであるかを。

少年は答えた。考える素振りもなく、初めから、答えは決まってると思うように。

——胸を張って、少年は、答えた。

『「強さ」だあ？ んなモン、オレが知る訳ねえだろうが』

『オレは戦うしか能がねえんだよ。他のこたあ、なーんも、出来ねえんだ』

『だからせめて——なんのために戦うのか、誰のために戦うのかくれえは、自分で決めてえんだよ』

『まあそれも、言うなりや自分のためだけだなあ、ハッハー!』

『だからオレは戦ってる。「強さ」だとかなんだとか、そんなモンはどうでもいいんだよ』

『人間なんざあ、いつ死んじまうかわかんねえからなあ。だからいつ死んでも悔いが残らねえように、オレあオレに出来ることを、いつだって全力でやってるだけさ』

『だからオレは戦ってるのさ。なにせオレあ、戦うくらいしか能がねえ、単純馬鹿だからなあ!! ハッハー!!!』

一切の迷いが無いその答えを聞き、少女は思う。これもまた、ひとつの「強さ」の形なのだろうと。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「……嫁？ 婿じゃなくて？」

「おいおいラウラアアアアッ！ オレにはチューはねえのかよ おおおっ!!？」

「え、だって届かないし……」

けどやっぱり大は小を兼ねないこともある。

臨海学校。

黄金の太陽、青い海、白い砂浜、色とりどりの水着に身を包んだ年頃の少女たち、そして戦艦と見紛うほどの巨躯。

「うううううみいいいだああああつ!!！」

「うるせえええええ!! 海なのに山彦が返ってきそうだぞ?！」

「ハッハー！ 上手いこと言ったつもりか、イイイイチカアアアア!!？」

「だからいちいち叫ぶんじゃねえよつ!!！」

「……お前ら。旅館では静かにしろよ、頼むから」
教師はなにかを諦めた。

「この料理旨えなああ!!！」

「だからいちいち叫ぶなつ！ 騒ぐと千冬姉が——」

「私は言ったぞ、旅館では静かにしろ、と。そうか口で言っても分からんかそれなら仕方ない。今から砂浜をランニングしてこい。50キロほど。砂浜は良いぞ、足腰が鍛えられるからな」

「そうだなあ、ちよつくら行ってくるか、イイチカアアア！」

「走るのかよ!? ていうか俺を巻き込むなあ!!！」

単純馬鹿には冗談も脅しも通じない。いろんな意味で。

「久しぶりだなあ、東さああああん!!」

「久しぶりだねえ、ヴァーくうううん!!」

「……なんだこれ」

感染しました。

そして事件は起きる。

洋上を高速で移動する敵機を討ち取るべく、少年と新たな「力」を手に入れた少女が飛び立つ。

「きなくせえなあ。なんかある気がするぜ」

「どうしたヴァオー。やけに静かだな」

「……ホウキ」

「うん? なんだ?」

「帰ってこいよ」

「? 妙なことを言うヤツだな。心配せずとも、私と一夏なら問題ない。紅椿もあるしな」

少女は気づかない。巨躯の少年が、何を案じているのか。

そして、その不安は現実となった。

「白式と紅椿、第四世代型IS二機を相手にして、難なく勝利、か……」

どこぞの首輪付きを思い出すなあ、メルツエル」

「ヴァオー? 何を言ってるの……?」

「なんでもねえよ、シャル。……さあ行こうぜえ! イチカの吊い合戦だあ!!」

「一夏は死んでいない!」

「縁起でもないこと言ってるんじゃないわよ!」

「ハッハー!」

そして巨躯の少年と少女たちは戦いに赴く。

傷付き倒れた仲間のために。

「くそ、これほどとはっ……!」

一度は追い詰めた。

しかし敵は真の力を顕し、反撃の牙を剥く。その圧倒的な力に、次々と倒れていく少女たち。

「ダメだ、このままじゃ……！」

戦うと誓った。しかし絶対的な力の差に、心が折れそうになる。

されど忘るるなかれ、戦っているのは少女たちのみに非ず。

巨躯の少年もまた、己の存在意義を賭け、戦っているのだ。

かつて守れなかった戦友たちに、報いるためにも。

「どこ見てやがる!! てめえの相手は、このオレだああああ!!」

「ヴァオー!？」

戦うと決めた。

こんな自分を必要だと言ってくれた友を、守れなかったから。

こんな自分に付き合ってくれた友を、守れなかったから。

——こんな自分と共に笑ってくれた友を、守りたいから。

それだけが、戦うことしか出来ない自分の、たったひとつの、願いだから。

たとえ腕がもげようと。

たとえ足が千切れようと。

たとえ眼を灼かれようと。

たとえ心臓を抉られようと。

他でもない、自分のために。悔いなど無いと、笑いながら逝くために。

この命、尽きるまで。

——戦い抜くと、決めたのだ。

「ヴァオー、無理だ! 退がれっ!!」

だから、それは聞けぬ。自分は少女たちを守るために、ここに居るのだから。

「退がれだあ? 相手見てモノ言えよ。オレにそんな頭のいいこと、出来る訳がねえだろうがああああ!!」

だから、安心して欲しい。

これが、これこそが、巨躯の少年の望みなのだから。

「ハッハー！ まだまだ行けるぜ、ホウキイイイイイ！！」

少年が目を覚まし、新たな力を手に戦場へ駆けつけた時。

ただ一機、白い装甲が、不破の城壁の如く堅牢さでもって、敵の前に立ちふさがっていた。

「わりの、遅れたな」

「ハッハー！ もうちよい遅けりや、オレが見せ場を独り占めしちまっつたぜえ!？」

「そいつは良かった。ならまだ、俺の分も残ってるってことだよな」

「くれてやるぜえ、イチカ。後ろは気にすんな、流れ弾は全部吹っ飛ばしてやるからよお!!」

「はっ、マジで頼もしいぜ、ヴァオー!!」

巨軀の少年は、自らの全身を覆う装甲に感謝した。

負けられぬ戦いに赴く親友に、深く貫かれた胸を、見られずに済んだのだから。

(……目が霞んできやがった……へっ、ここまでか。だがまあ、どうか守れたみてえだし)

残された力を振り絞り、少年と少女たちの顔を、その瞳に焼き付ける。

——ああ。これはなかなか良い、冥土の土産だ。

「悔いはねえ。……楽しかったぜ、イチカ」

そう、悔いはない。

何故ならばこんなにも、安らかな気持ちで逝けるのだから。

——こうして。

かつて友のために戦い、友と散った男は、今度こそ友を守り切った誇りを胸に、二度目の生を終えたのであった。

第14話 平穩

IS学園の地下深くには、教官たちの中でも限られたごく一部の者以外、存在すら知らない極秘エリアがある。そのエリアを、一人の女性が進んでいた。

金属製の硬い床を規則正しく叩く靴の音が、やがて一つの扉、それに備えられたコンソールの前で止まる。

「二年一組担任、織斑千冬。IDは——」

所属、氏名、学園から与えられたIDを述べる。その声紋を解析したコンソールの蓋が開くと、そこに複製不可能な特殊キーを差し込んでパスワードを打ち込み、続いて掌紋、網膜、DNAをスキャンさせる。いくつもの高精度かつ厳重なセキュリティを経て、ようやく分厚い扉が開いた。

「すまない、山田先生。遅くなってしまった」

「あ、いえ、私も今来たところですから」

扉の先、無数のコンピューターが並んだ部屋には、千冬の後輩である山田真耶がいた。千冬は真耶が操作するモニターを覗き込み、眉間に皺を寄せる。

「やはり、未登録か」

「……はい。損傷が激しくて、データはほとんど壊れていましたが……僅かに修復できたデータは、どのコアとも一致しませんでした」

世界に存在する467のISコアは、全てがアラスカ条約によって登録されている。コアを調べれば、それがどの国の物かが分かるのだ。

だが、今真耶が解析しているコア——一夏が破壊した、クラス対抗戦に乱入して来た無人機のコアは、どの国のコアでもない。

そしてISのコアは、これ以上増えることはない。コアの開発は、その製造者以外には不可能だからだ。故に、どの国にも属さないコアは有り得ない。

存在しない筈のコア。それが目の前に在るといふ事実。

それが意味することは——

「……破壊されていて、むしろ幸いだった。「生きている」コアなど、戦争の火種になりかねん」

「そうですね……コアの分配を決める時も、かなり揉めましたし。今ではその話は半ばタブーみたいになってしまいくらいでしたから」

「ふん……進歩がないな。核がI Sに変わっただけか」

愚痴のこぼし合いのような会話をしながら、千冬の視線は、零落白夜により両断されたコアを射抜いていた。

その胸中にあるのは、祈りにも似た願望と——それを押し潰すかのような、絶望的な疑念。

(……お前なのか……?)

後に、千冬は知る。

これは、始まりなどではなかったことを。

——疾うの昔に、始まっていたことを。

六月頭の日曜日。一夏が久しぶりに家に帰ると言うので、今日の訓練はない。

最近ずっと訓練続きだったから、たまには休みも必要だろう。折角なので己も家に帰ることにした。

「あ、おかえりー、シン姉ちゃん！」

「姉さん帰ってきたの？」

「やあ姉さん、お帰りなさい。久しぶりだね」

「姉ちゃん、たまには電話くらいしろよなー」

「……………」

ドタバタと弟妹たちが迎えてくれる。

うむ、やはり帰る家があるというのは素晴らしい。

「お帰り、真改。元気そうで何よりだよ」

「……………」

柔らかい笑みを浮かべる五十歳くらいの男性、この孤児院の経営者である唐沢さん。

この人は己の無表情から体調や気持ちを見抜くことが出来る、数少ない人物の一人である。

「IS学園での調子はどうだい？」

「……順調……」

「それは良かった。友達はできたかい？」

「……数人……」

「うんうん、学園生活を楽しんでるみたいだね」

心から嬉しそうに頷く姿は、正しく父親のそれだ。多くの孤児たちから信頼され、心の傷を癒やしてきた実績は伊達ではない。

「君の花壇は梓と楓が一生懸命世話していたよ。お姉ちゃんに褒めてもらうんだーって」

「……」

梓と楓は、この孤児院で暮らす双子の姉妹である。花壇の世話は皆と一緒にやっているが、この二人は特に率先して手伝ってくれるのだ。

「いつまでも玄関で話すのもなんだね。ほら、早く上がりなよ。少し早いけど、お昼にしよう」

「……」

促され、靴を脱いで中に入る。

——帰って来た、な。

「……ただいま……」

「うん。お帰り、真改」

「おう、シン姉、帰って来たのか」

「……」

己の姿を見て、居間でテレビを見ていた少年——ひとつ下の弟、宗太が声を掛けて来た。

「メシは？ もう食ったか？」

「……否……」

「んじゃ、ちよい早いけど作るとしますかね」

「……………」

言つて、立ち上がる宗太。コイツは料理が上手く、孤児院での食事担当だ。宗太の手伝いを他の者が日替わりで行うのが、当孤児院の料理事情である。

「なんにするよ？ 肉も野菜も魚もあるけど」

「……任せる……」

「そーいのがいつとう困るつての。……あー、じゃあ無難に、チャーハンでも作っか」

頭を掻きながらエプロンを身に着け、厨房に向かう宗太。

宗太は粗暴な言動とは裏腹に繊細な味付けをする。将来は自分の店を持つことが夢らしく、その料理の腕前は五反田食堂の店主である蔵さんも認めるほどだ。

「ちよい待つてろよ。すぐできつから」

「……………」

手際良く肉や野菜を切り、卵を溶く。大火力のコンロに点火し、白米と具を炒め、卵を流し込む。味付けは塩のみというのがこだわりらしい。

「うっし。じゃあみんなを呼んで来てくれ」

「……承知……」

ついでに帰ってきた挨拶もしてこよう。久しぶりの再会だ、顔くらい見せなくてはな。

「ちよつと姉さん！ 私が買った服置いていったでしょ！」

「……………」

妹の一人、小夜さよからの言葉。己を着せ替え人形にしようと企む妹は複数いるが、コイツはその筆頭である。

「いい!? 可愛い女の子は着飾らなくちゃいけないの! それを持つて産まれた者の義務なのよ!!」

「……………」

これは耳にたこが出来るほど聞かされた小夜の持論だ。己の容姿が整っているかどうかは分からないが、コイツに言わせると「すごいらしい。」

成る程、分かん。

「まあいいわ。姉さんの部屋に宅配で送るから」

「…………無駄…………」

送られて来た荷物を受け取り拒否すればいいだけだからな。

「一夏さん経由で届けてもらうことになってるわ」

「…………!?」

おのれ一夏! 裏切ったな!

「と・に・か・く!! ちゃんとお洒落に気を使いなさい! 姉さんの服には私のお小遣いも使ってるんだからね!」

「……………」

知るか。お前が勝手にやっていることだろう。

「あ、シンお姉ちゃんおかえりー!」

「おかえりー! 見て見て、桔梗ききょうがきれいに咲いたよー!」

「…………美事…………」

花壇に行き、仲良く土いじりをしている同じ顔の少女たち、梓と楓に声を掛ける。

花壇には、青紫色の美しい花が咲いている。己がIS学園に入学する前、二人と一緒に植えた桔梗である。

「ちゃんと毎日お世話したよ!」

「お姉ちゃんにお願いされたからね!」

「…………ありがとう…………」

「えへへー」

咲き誇る桔梗にも負けない、花のような笑顔で胸を張る二人の頭を撫で、礼を言う。

「……飯……」

「あれ、もう?」

「すぐ行きまーす」

手早く片付けをし、とことこと歩いて行く二人。

「……手洗い……」

「はーい」

うむ、素直でよろしい。

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

「……いただきます……」

「たっぷり食えよ。おかわりあるからな」

己を含めると、今この孤児院には十二人の子供たちが生活している。それだけの人数分の食事をまとめて作りながら、味はかなりのものだ。宗太の将来が楽しみである。

「そーいやシン姉、イチ兄から聞いたけど、専用機もらったんだって?」

「……………」

昔からよく孤児院に遊びに来る一夏は皆から兄のように慕われているが、しかしいつ連絡したんだ。

「シン姉に電話しても聞かれたことしか答えねーからよ、いつもイチ兄に聞いてんのさ」

「……………」

適切な判断ではある。だが一夏よ、なんでもかんでも、余計なことまで話してはいただろうな。

「たまには声だけでも聞かせなさいよねー。姉さん、しよっちゅう無茶するんだから」

「…………善処する…………」

どうやら心配していてくれたようだ。電話は苦手だが、たまには連絡するようにせねば。

「ねえ宗太お兄ちゃん、専用機ってなに？」

「あーっと、そうだな、シン姉だけのISのことなんだけど……つまりシン姉は、偉い人から頼まれて手伝いをしてるんだよ」

「へー！ すごーい！」

「さすがシンお姉ちゃん！」

「……………」

「けど如月重工が作ったんだってね？ ……大丈夫かい？」

「……………問題ない……………」

どうやら一夏はかなり詳しく話しているらしい。己がIS学園を受験すると言い出してからISについて調べている唐沢さんが、心配そうに聞いてくる。

この様子だと、怪我したことも知られているかもしれない。

「そうか。けど、無理だけはしないように。君になにかあったら、私ももちろん、ここににいるみんなが悲しむからね」

「……………」

暖かい言葉。

聞く者に安らぎを与える声色。

この人を心配させていることを思うと、心が痛む。

「……………食事中にする話じゃなかったね。うん、今は宗太の作ってくれたチャーハンに集中しよう。いつもより美味しいね。久々に真改が帰って来たからかな？」

「んな!? なななにを言ってるんだよ!？」

「あれ〜? 宗太、顔赤いよ〜?」

「あ、赤くねえよっ!!」

「や〜い、真っ赤〜」

「宗太お兄ちゃん、顔真っ赤〜」

「だから赤くねえよっ!!」

「はっはっは、若いつていいなあ」

「うるせえ！ てめえら全員、晩飯抜きだあ!!」

「「「「「あはははは!!」」」」」」

「……………」

……騒がしいのは苦手だ。

苦手だが——決して、嫌いではない。

昼食を食べ終えしばらく休むと、孤児院を出る支度を始めた。久しぶりの帰宅だというのに早くも出掛けようとする己に、弟妹たちが不満そうにする。

「姉ちゃん、もう行っちゃうのか?」

「もう少しゆっくりしてきやいいのに」

「……………用事……………」

訓練は休みだが、朧月の調整がある。如月重工に頼んで、新しい装備を送ってもらうことになっているのだ。

「……………また、帰ってくる……………」

「うん。ここは君の家なんだから、遠慮はいらないよ。ただ小夜も言ってたけど、たまには連絡が欲しいな」

「……………承知……………」

「行ってらっしゃーい」

孤児院の皆に見送られ、外に出る。

己の家はここだけだ。年長者として、皆の姉として、この家を守れるよう、まだまだ精進せねばな。

「やあやあ井上君、久しぶりだねえ! 折角の休日を僕らのために使ってくれてありがとう!」

「……………」

……………いつも思うのだが、なぜわざわざ社長が出張って来るのだろうか。

「うちの技術者たちはみんなコミュニケーション能力に難があつてねえ。それ以外の職員たちは技術的な理解が足りない。僕が出向くのが一番確実なのさ」

「……………」

己が言うことではないが、社長はもつと別の種類の難があると思う。

「それでは早速装備の説明に入らせてもらおうよ。今回井上君のご要望の通り、対IS用の閃光弾を作ってみた」

展開された朧月の右肩に、右腕の動きを阻害しない形の小型の発射装置が取り付けられている。FCSに繋げてみると、己の意思を受け軽快に照準が動いた。

「名前は月蝕^{げつしよく}。ただ光るだけじゃ面白くないからね、特殊なパルスを出してISのハイパーセンサーに干渉、全方位から強烈な光を浴びてるように認識させるんだ」

「……………」

……今何か、凄まじく高度な機能をさらりと言わなかったか？ しかもそんな機能を備えさせた理由が「面白くないから」だったような気がする。

……恐るべし、如月重工。

「だけど効果は短いよ。もって数秒、それも弾から離れば離れるほど、時間はさらに短くなる」

数秒あれば十分だ。朧月の機動力と月光の威力ならば、仕留めるのは容易い。

「ようし、じゃあ早速、月蝕の威力をご覧にいれよう！」

「……………」

スチャツと懐から取り出したサングラスをかける社長。そして小さな箱を床に置き、手に持ったスイッチを——おい待て、まさか！

「ポチツとな」

カツ——！

「……………つ!!?」

瞬間、ハイパーセンサーから送り込まれてくる光の奔流。社長の言

う通り全方位から襲いかかってくるそれは、瞼を閉じてもなお己の目を灼いた。

「どうだい、すごいだろう！ 発射された弾頭は好きなタイミングで起爆できるから、直接当てる必要もないよ!!」

「……………」

ISの保護機能により、視界は二秒で回復した。ハイパーセンサーから送られてくるのはあくまで「情報」なのだろう、目にもなんら異常はない。

だが何故己で試した。

「こういうのは井上君本人が威力を知っておかないと。おかげで月蝕のことが良くわかっただろう?」

確かにそれには一理ある。月蝕の光量は凄まじく、視界どころか身動きごと封じられた。あれだけの隙を作り出せるのなら、有用性はかなりのものだ。

しかし、それはそれとして。

「…………先言ってほしい…………」

「まあまあ、後遺症は残らないから」

「……………」

そういう問題ではない。いずれ治るからと言って、怪我をすることに何も感じない者はそうそういない。

「あとは朧月のハイパーセンサーを調整して、月蝕に反応しないようにすれば完成だ。ああ心配しなくても、この対月蝕用の処理は僕らだからできるんだ。他のとこじゃ、そう簡単にはいかないよ」

「……………」

そこは流石の如月重工、技術力では他の追隨を許さない、といったところか。

「今回はこの月蝕だけだね。…………うくん、やっぱりつまらないなあ。井上君、他になにかないのかい?」

「…………ない…………」

今回頼んだ閃光弾は、敵に切り込む際により確実に仕留められるよう、隙を作るための手段として欲したものだ。

基本的に己は剣以外に取り柄がなく、あまり妙な物を寄越されても扱えない。今のところ朧月に不満はないので、しばらくは追加装備を頼むことはないだろう。

「仕方ないなあ、それじゃ僕はもう戻るよ。ところで、学年別個人トーナメントは今月だったよね？ その時こそ、朧月の勇姿を見せてくれたまえよ」

「……承知……」

学年別個人トーナメントとは、IS学園の全学生強制参加で行われる一大イベントである。一週間かけて行われ、特に三年生にとってはIS関連の企業、あるいは政府や軍に自分をアピールする最大の見せ場であり、かなり大規模なものになる。

正式ではないとは言え、如月重工のテストパイロットである己が結果を残さない訳にはいかない。

「じゃあトーナメントの時に、また。けどなにか要望があったらすぐに言ってくれたまえよ、うちの連中は、みんな朧月をいじりたくて仕方ないんだから。もちろん、僕もね」

「……」

うふふ、と笑いながら言う社長からは、何やら不気味な気配が漂っている。

今回の月蝕は良い意味で予想を裏切ってくれたが、如月重工に頼っているといずれとんでもない代物を掴ませられる気がする。それどころか、朧月だけでなく己自身をも改造しに来るやもしれん。それくらいのことには平気でやりそうだ。

……要求する品は、よく考える必要があるな。

「あ。おかえり、いのっち」

「……」

自室に戻ると、本音がベッドの上で寝転んでいた。消灯時間までまだ大分あるが、服装はすでにサイズの合っていないパジャマである。

というかコイツは制服以外はいつもパジャマだ。

「それじゃあ、ご飯行こっか」

「……………」

むくりと起き上がったと言う本音に頷き、手洗い、うがいをしてから部屋を出る。

…………と、目の前に、一夏と鈴がいた。

「おう、おりむーだ」

「うわ!? ええと…………のほほんさん?」

一夏に子犬のように引つ付く本音、突然のことに少し困惑する一夏。

そして一気に表情が険しくなる鈴。

「ちよつと本音! 離れなさいよ!」

「わく、りんりんもいる」

「その呼び方やめなさいっての!!」

すぐさま鈴が引き剥がしにかかるが、マイペースの究極形である本音を相手に苦戦している。

ちなみに鈴は小学校の時、その名前と中国人ということで男子にからかわれたことがあった。確か、

『おい、パンダのリンリン。お前は弁当なんかいらねいだろ?』

『そーそー、笹食べられるんだもんな。いいよなー、楽でさー』

『お前んちって、客にも笹食べさせてんじやないだろうなー?』

…………こんな感じだったと思う。

それを聞いた一夏が激昂し、四人を相手に大立ち回りを始めようとしたのを飛び膝蹴り(シャイニングウイザードと言うらしい)で鎮めたのはいい思い出である。

「二人も飯か?ちようどいいや、一緒に行こうぜ」

そしてこいつも大概マイペースである。本音と良い勝負なのではないか?

「な!? ちよつと、一夏!」

「わく、おりむーとご飯」

「…………馬鹿…………」

己の眩きが聞こえた様子はない。どちらにしても本音が既にその気になっているので、結局は一緒に飯を食うことになるだろう。

ギリギリと歯噛みしている鈴に近付き、他に聞こえないように耳元で言う。

「……すまん……」

「はあ……別にいいわよ、シンのせいじゃないし。本音のことも嫌いじゃないしね」

「……………」

諦めたように溜め息をつき、一緒に食事をすることを了承してくれた。

……本当にすまん。今度、甘味でも奢ろう。

休みも明けて朝の食堂に行くと、なにやら騒がしかった。

……いや、いつも騒がしいのだが、今日は騒がしさの質が違った。教室のあちらこちらから、声を潜めての会話が聞こえるのだ。つまりまったく潜まっていけないということなのだが。

「あのさ、例の話なんだけど、あれって本当なの？」

「それがさ、どうも本当らしいのよね」

「ええ!? そんな、根も葉もない噂だと思ってたのに……!」

「根も葉もないって言えばさ、根掘り葉掘りって言葉があるじゃない? あれって根掘りっていうのはすごく良く分かるんだけど葉掘りって「いや今そんな話してないから」「……………」」

……どうでもよさそうな話と判断した。

さて、今日の己のメニューはいつも通り日替わりランチである。栄養バランスが考えられているだけでなく味も素晴らしいが、個人的には宗太の料理のほうが好みだ。慣れ親しんだ味だからというのもあるかもしれない。

「鈴、お前またラーメンかよ。他にも旨い物いっぱいあるんだからさ、

もつと色々頼んでみるよ」

「う、うっさいわねっ！ アンタこそ、いつも焼き魚定食とか漬け物とか、年寄りみたいなメニューばっかじゃない！」

「……………」

そしてこちららも騒がしい。いつも通りと言えばいつも通りの、一夏と鈴の言い合いだ。一夏は呆れたような顔をしながら焼き鮭を口に運んでおり、鈴はムキになって、一夏に箸を向けている。

喧嘩するほど仲が良いとも言おう。別にこの言い合い自体を止めるつもりはないが、しかし――

「……鈴……」

「なに？」

「……行儀が悪い……」

箸で人を指すのはいただけない。

食事とは命を食べることであり、その命に感謝を込めて、食事の礼儀は守らなくてはならない。己も「いただきます」と「ごちそうさま」は必ず言っている。

「う……き、気を付けます」

「鈴ってさあ、シンの言うことはわりかし素直に聞くよな」

「う、うっさいわね。そんなのあたしの勝手でしょ」

「そりやまあ、そうだけど」

言って、ずずつと味噌汁をすする一夏。

……その仕草は、確かに年寄りじみていた。

「いのつちはみんなのお姉ちゃんみたいだね」

「え？ ああ、まあシンは――」

一旦言葉を切り、一夏がちらりと己を見る。

――大丈夫だ。本音には話してある。

「孤児院じゃ今一番年上だからな。弟と妹が十人以上いりや、そりやあお姉さんになるさ」

「ほほ、いのつちに妹さんがいるのは知ってたけど、そんなにいっぱいいたんだ」

「あれ、隆さんは？ もう卒業したの？」

「ああ、去年の四月に就職したよ。やっと恩返しが出来るって張り切ってたぜ」

隆さんというのは、孤児院の以前の年長者、国重隆という人物のことだ。彼は唐沢さんを心から尊敬し、子供たちの世話を一生懸命にこなしていた。就職が決まり、孤児院を卒業する時には盛大な見送りパーティーが催され、一夏と千冬さんも招かれた。

ちなみに藍越学園出身である。

「ふむふむ、色々なことがあるんだね」

「……………」

うんうん頷いている本音だが、こいつは自分から己のことをあまり訊こうとはしない。己に興味が無いのではなく、己の身の上に気を使っているのだろう。

……………本当に、聡い娘だ。

「そういえば今日、弾の家に行ったんだけどさ」

「へー、そういえばアイツとはまだ会ってなかったわね。元気だった？」

「うるさいくらい元気だったよ。でき、蘭が来年、IS学園を受けるらしいんだよ」

「……………へー」

鈴の表情が曇る。

中学時代によく四人でつるんでいた五反田弾の妹、五反田蘭は、鈴とは一夏を取り合う仲であった。

……………一夏のことさえなければ、普通に仲がいいのだがな。

「蘭、IS適性Aだつてさ。すげえよな、確か頭もかなり良かったし、スポーツも得意だし。才能つてのは、持つてるやつは持つてるもんだよな」

「ソウネー」

「ISについて面倒見るなんて引き受けちゃったけど、俺が面倒みてもらう側になりそうだ」

「……………はあ!?え、ちよつ、ナニソレどーいうことよ!?!」

バンツとテーブルを叩いて立ち上がる鈴。

「……行儀が悪い……」

「う……」

着席。

「面倒見るって何よ!? またそんな軽く約束してきたの!？」

「おう、りんりんすごい迫力」

……本音はもしかしたらかなりの大物なのかもしれない。

「か、軽くって……友達の妹に頼まれたんだから、無下にはできないだろ。弾の親御さんには世話になってるし」

「そもそもアンタだって全然素人でしょうが！ それが面倒見ようなんて、ちゃんちゃらおかしいってのよ！」

「そりゃ確かにそうだけどさ。来年には少しはまともになってるかもしれないだろ。それにもう約束しちゃったし、破るわけには——」

「あたしとの約束は忘れてたクセにつ!!」

「ぐっ!？」

「……………」

どうやら一夏の形勢が不利か。元々言い合いの得意な人間ではないし、仕方あるまいが……。

……む？ あれは……箒か。

「……………」

「……よ、よう、箒」

「う、うむ」

「……………」

返事だけして、箒は去ってしまった。先日ようやく部屋の用意が出来たので、一夏と箒は別の部屋となったのだが……それ以来、あまり二人が話しているところを見かけていない。

一夏の様子に変わりはない。箒の方が、妙に一夏を避けているようだ。

「……何アイツ。なんか調子狂うわね、前ならこの状況に割り込んで来たでしように」

「なんかなー……体調悪いとか元気ないとかじゃないみたいなんだけどな」

「……まさかとは思うけど。アンタ、箒となんかあったの？」

「なんかってなんだよ」

「あーもういいわ、その返事だけで何もなかったって分かったから」
「……………」

鈴の言う通り、一夏は腹芸が出来ん。何かあれば分かりやすく態度に出る。

それがなかったのだから、何もなかったのか——何かはあったが、一夏がそれに気づいていないだけか。

……ふむ。と、なれば。

「……まあ、そのうち二元に戻るだろ。考えてたって仕方ない。みんな食い終わつたし、そろそろ行こうぜ」

「行こうぜ」

「そうね。んじゃ、ごちそうさまでした」

「…………ごちそうさまでした…………」

「さて、と。宿題片付けないと」

「アンタね、宿題残して今日一日休んだの？ そんなんじゃあつと
いう間に置いてかれるわよ、ただでさえ遅れてるんだから」
「う…………」

そんな学生らしい会話をしながら食堂を出て行く二人。

それについて行こうとする本音の背中に、声をかけた。

「…………本音…………」

「んん〜？」

「…………先に戻れ…………」

「…………りようか〜い。もうう、いのつちは優しいな〜」

「……………」

まったく——本当に、聡い娘だ。

皆と別れた後、己は食堂から出てきた箒を人気のない所に連れ出した。

「話とはなんだ？」

「……一夏と、何があつた……？」

今の箒の一夏に対する態度は、箒自身に原因があると見るのが妥当だ。人間関係で己が力になれることなど殆どあるまいが、僅かでも足しになれば御の字だ。

「え!? ……えーつと……その、だな……」

「……………」

顔を真っ赤にしてごによごによと言葉を濁す箒。続く言葉はなか出てこないが、返答を拒否されている気配ではない。じつと待つことにする。

そして、意を決したように。

「い、一夏に……ご、ご、ご、交際を、申し込んだのだ」

「……………」

——ほう。ほうほうほう。それは、それはそれは。

「……おめでどう……」

思わず箒の頭を撫でる。箒にしては、随分頑張ったものだ。

……むう。長年見守って来たが、いよいよ、か。

「いや、へ、返事はまだなんだ。学年別トーナメントに優勝したら、という約束で……」

「……………」

顔を真っ赤にし、視線をあちらこちらにさ迷わせ、両手の人差し指をつんつんとつき合わせる姿は、その整った容姿と合わせれば世の男たちには効果覲面だろう。普段険しい表情が多い分、威力はさらに増すはず。

「……手伝わせてもらう……」

「え？」

「……訓練……」

そう、学年別トーナメントは過酷だ。一年には己を除いても専用機持ちが四人いる。約束のためには、箒は訓練機で彼女らと戦い、勝たなければならぬのだ。

——ならば、相応の実力を身に付けねば。

「……申請は……？」

「もう済ませてある。今から行っても間に合わないだろうから、事前にな」

ふむ、抜かりはないということか。学年別トーナメント直前では皆訓練機の使用申請を出すので、通るかどうかは運次第になってしまうからな。

「……早速……」

「今日から付き合ってくれるのか？」

「……無論……」

学年別トーナメントまでもうあまり日がない。今日はISの訓練はしない予定だったが、こうなったら一日たりとも無駄には出来ん。

「……ありがとう、真改」

「……無用……」

大事な幼なじみの、六年越しの想いがついに成就するかもしれないのだ。その大願の前には己の事情など些細なものである。

それに剣に関してならば、複雑な人間関係よりもよほど得意だ。己にとっても都合が良いと言える、気合も入るといふもの。

「では行くか。よろしく頼む、真改！」

「……応……！」

一度部屋に戻り、準備をしてからアリーナへ向かう。部屋で寝転がっていた本音が少し驚いた顔をしていたので、もしかしたら喜びが顔に出ていたかもしれない。

……そんなにも浮かれていたものだから、この時己は失念していた。

そして後に、そのことを大いに後悔する。

——箒がどんな言葉で一夏に交際を申し込んだのか、訊いていなかったことを。

第15話 不穩

学年別個人トーナメントを目前に控えたある日。この日は朝から大事件が起きた。

なんと一年一組に、転入生が来たのである。それも二人同時。

これには己も少なからず驚いた。事前に全く噂になっていなかったというのもあるが、転入生が同時に二人、しかも同じ組になど、通常ならば考えられない。

しかし冷静になってみれば、通常とは言えない要素が二つある。

一つは、ここがただの高校ではなく、世界各国の思惑が入り乱れる I S 学園であるということ。

そしてもうひとつは、言わずもがな、己の前の席に座る幼なじみ、世界で唯一人 I S を動かせる男、織斑一夏が存在である。

「……………」

一夏の利用価値は計り知れない。どの国も、こいつはなんとしても手に入れたいことだろう。

——まだ幼ささえ残る少女を使って、籠絡せしめんとするほどには。

(…………反吐が出る…………)

というわけで、盛り上がるクラスメイトたちを余所に己は朝から機嫌が悪かった。

「それじゃあ、入って下さい」

「失礼します」

「……………」

教室の扉を開けて、転入生が入ってくる。

一人は白に近い銀髪を腰まで伸ばし、左目に眼帯をした少女。その身体は華奢で背も低いが、しかし身のこなしは洗練されていて、徹底的に無駄がない。間違いない、相当な手練れだ。だが武術家の動きとはどこか違う……軍人のそれに近い。

この年の少女が軍人であるなど、昨今ではそれほど珍しくはない。I S の影響で、幼い頃からある種の英才教育を受ける少女は多く、そ

の中でも優秀な者が軍に招かれるということがままあるのだ。

故に、己の興味はその眼帯の少女には向かなかつた。それよりも遙かに。異質な存在が隣に居たからだ。

「皆さん、はじめまして。シャルル・デュノアです。よろしく願います」

もう一人の転入生、シャルル・デュノアがにこやかに挨拶し、お辞儀をする。その背中で、三つ編みに纏められた金髪がさらりと揺れる。

その姿を見て、クラスメイトの誰かが呟いた。

「お……男……?」

「はい。騒ぎになるからとフランス政府に保護されていたんですが、ここには僕の他にもISを使える男性の方がいるので――」

思わず漏れたのだろう呟きにも丁寧な答えようとしたシャルルだが、それは最後まで言えなかつた。

何故ならばここは、IS学園の一年一組だからだ。

「「「「きや……」」」」

「はい?」

「「「「きやあああああつ!!」」」」

「うわあつ!」

「……………」

……耳が痛い。衝撃波じみた黄色い叫び声は、己の鼓膜に大きなダメージを与えた。

「まさかの！ まさかの二人目!!」

「しかもかなり美形!!」

「織斑君と違うタイプの美形!!」

「かっこかわいいー!!」

「え……あの、ええと……」

「……………」

すかさず追撃が入る。二段構えとは侮れんな、耳だけでなく頭まで痛くなってきた。

「やかましい、小娘ども。男が一匹増えたくらいでいちいち騒ぐな」

もの凄く面倒くさそうにたしなめる千冬さん。言葉使いが厳格というよりただ乱暴になっっているあたり、相当機嫌が悪いようだ。

「ほ、ほら！ デュノア君だけじゃないですから！ もう一人いますから！」

必死な山田先生の様子にどうにか静まるクラスメイト。

そう、転校生はもう一人いる。さきほどから身じろぎもせず口を閉ざし続けている、銀髪眼帯の少女である。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんに呼ばれた途端に態度を急変させ、敬礼でもって返事をする少女。

ラウラと呼ばれた少女は、やはり軍人のようだ。それに千冬さんを「教官」と呼んだことから、恐らくドイツ軍人だろう。千冬さんは以前、一年ほどドイツで軍隊教官をしていた時期があるからだ。

「……私はもう教官ではない。そしてお前も、ここではただの生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

敬礼こそ止めたものの、姿勢は相変わらず、見事なまでの「気を付け」である。

それを見た千冬さんがまた面倒くさそうな顔をしたことに気づいた様子もなく、ラウラはクラスメイトたちに向き直った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「……………」

「……………」

……なんだろう、既視感というやつか？ 以前にも一度、似たようなことがあった気がする。

「……ええつと……」

「以上だ」

「あ、はい……」

いや、気のせいではない。確かにこれと同じような場面を、己は経

験している。しかしいつ、どこで？

——ああ、己の自己紹介の時か。山田先生の泣きそうな顔を見て思い出した。

そんな事を考えていると、突然不穏な気配を感じた。そのの元を探すと、一夏を睨み付けるラウラの姿が。

「……貴様が」

肩を怒らせ、大股で歩いてくるラウラ。一夏の前で立ち止まると同時に、右手を振り上げ——

——そこに、殺気を感じた。

「……ッ！」

ガタン！

咄嗟に、前に座る一夏の襟を掴み、後ろに引く。勢いが付き過ぎて、一夏が己の机に頭をぶつけた。

「いってえ!」

「……貴様」

「……」

己の行動によって平手打ちを空振りしたラウラが、怒りに目を細めてこちらを睨む。その瞳に宿る殺気はさらに増していた。

「おいシン、いきなり何すんだよ!」

「……」

一夏が何かを言っているが、今は耳に入らない。睨んで来るラウラを、こちらも睨み返す。

この娘は、一夏を殴ろうとした時、確かに殺気を放っていた。徒手空拳ではあったが、そんなモノは己を安心させる要素足り得ない。

IS学園に転入できる者が国家代表候補生にほぼ限られている以上、ラウラも代表候補生であり、専用機持ちである可能性がある。つまりは平手が当たる直前にISを部分展開すれば、一夏の首から上が吹き飛ぶというわけだ。

当然、己が一夏とラウラの間で割って入ったところで盾にもなるまい。だから、一夏を後ろに引くことで回避させたのである。

「……なんのつもりだ?」

「……………」

「お前こそ、なんのつもりだよ」

己の様子に何かを感じ取ったのか、一夏もラウラを睨み付けている。

「……私は認めない。貴様如きがあの人の子であるなど、認めるものか」

「——てめえ」

「ふん」

その言葉に一夏も殺気立つが、ラウラはひとつ鼻を鳴らすと殺気を霧散させ、教室の前へと戻って行った。

その背中を油断なく見ていたが、もう先ほどのようなことをする気配はなかった。

「……………」

「……転入早々、問題を起こすな」

「はっ。申し訳ありません」

「ふん。……では、HRはこれで終わりだ。一時間目は二組と合同で、ISの模擬戦闘訓練を行う。各人着替えて第二グラウンドに集合しろ。遅れるなよ」

千冬さんがラウラを嗜め、次いで必要事項だけ伝えて教室を出ていった。

一夏は怒り心頭といった様子だが、しかし着替えとなればのんびりしてはいられない。なにせここはIS学園、一夏が着替えを行うような空間など限られており、それは少なくとも教室ではない。

とうるか教室は一夏の着替え場所としては最悪の選択である。なにせクラスメイト——つまりは女子たちと一緒に着替えを行うことになるからだ。

「あ、君が織斑君だね。はじめまして、これから——」

「ああ、挨拶は後にしてくれ。今はともかく、ここを出よう」

「へ？ うわ、ちよっ——」

そんな事情を察していないシャルルが一夏に話し掛けているが、一夏はそれを遮ってシャルルの手を取り、教室を出て行った。

その姿を、ラウラは不穏な眼で見続けており。
己は、これから何をするべきかに、意識を向けていた。

「さて、そろそろお前たちも実技を身に付けねばならん。座学も重要だが、これも劣らず重要だ。しっかり学べ」

「はい！」

二組と合同ということで、今日は返事に気合いが入っている。

まあ二組の連中は、一夏となかなか接点を持ってないからな。今日からはシャルルもいることだし。

「真改さん」

「……」

ふと、隣に立つセシリアが声を掛けてくる。視線だけ向け、続きを促した。

「さっきのことですが……あの人は、一夏さんと何かあったのですか？」

「……」

知っているわけではないが、ラウラの言動から大体の想像はつく。

しかしそれは己が語ることはない。沈黙する己からそれを感じたのだろう、セシリアは何かを決意した表情で言った。

「必要があれば言ってくださいな。このセシリア・オルコット、必ずや真改さんのお役に立って見せますわ」

「……すまん……」

必要なら、頼らせてもらおう。出来ればそんな事態にはなって欲しくないが。

「ではまず、手本——になるかは分らんが、一通り実演してもらおうか。凰！ オルコット！」

「はい！」

「戦闘準備をしろ」

「はい！」

二人、前に出る。鈴はともかく、セシリアは妙に気合いが入っていた。

「ふふふ……ついにこの時が来ましたか。これだけギャラリーが居れば、言い訳のしようもありませんしね」

「それはごつちのセリフよ。今日こそケリを付けてやるわよ」

「だれがお前たち同士で戦えと言った？ ガキ共の喧嘩などなんの役にも立たたん、相手は別に用意してある」

「へ？」

——キイイイイイン——

……なにやら空気を裂く音がする。

音の方向に目を向けると、一夏に真っ直ぐ向かってくる影が。

「ひゃあああああ〜っ!? あ、あぶ、危ないですう〜!!」

「え？ ……うおおおっ!?」

ドカアアアアン!!!

かなり際どいタイミングで白式を展開した一夏に、飛んで来た影——山田先生が操るラファール・リヴァイヴが激突した。

勢いのままにゴロゴロと転がって行く二人。

「あ、危なかった……死ぬかとおも——ん？」

「ひえ……あの、あの、お、織む——ひゃん！」

妙に艶のある悲鳴。体を起こそうとした一夏が、過失だろうが、山田先生の胸を鷲掴んだことによるものである。

ブワリと殺気が放たれた。発信源は言うまでもない。

「ああ、そんな……こ、こんなところで、こんな明るい内から……ああ、いえ、嫌というわけではなくてですね、ただ私は先生ですから、生徒さんには正しい男女のあり方というものを……ああ、で、でもこれはこれで——」

……あなたはなにを言っているんだ。そして一夏、お前は何をしているんだ。早く離れろ。死ぬぞ。

「——ハッ!？」

いよいよ臨界点を越えた殺気が現実具現したかのようになり、セシリアが展開したスターライトmkⅢからレーザーが放たれた。

日頃の訓練の賜物か、どうにか避ける一夏。

「あら？ おかしいですわね、この国の殿方は、恥を晒してしまった時は自らのお腹を潔く切る、と聞いていたのですが……おかしいですわねえ？ ホホホホホ……」

そのレーザーはライフルからでなく目から出たのではないかというくらいに凄まじい目つきで笑うセシリア。

……落ち着け、皆怯えているぞ。

「仕方ないわね、手伝ってあげるわ♪」

ガシーン！

続いて鈴。二振りの巨大な青竜刀、双天牙月を連結し、振りかぶる。

この武器は双剣としても連結して双頭の剣としても使える便利な代物であり、今の連結状態だと内蔵された軌道制御装置が起動し、投擲武器としても使えるのである。

ゴオウツ！！

「うおおおおおっ!!?」

首目掛けて飛んできた双天牙月をのけぞって避ける。しかし体勢を崩したのは拙いな、双天牙月は投げればブーメランのように返ってくるぞ。

案の定、一夏は避けきれないと察したのか、絶望的な顔をしていた。

「はっー」

ドンドンツ！

突然の鋭い掛け声と、間断のない二発の銃声。その発信源は山田先生と、彼女が展開した五十一口径アサルトライフル、『レッドバレット』だった。倒れたまま上体だけを起こした不安定な姿勢で、しかも狙える時間はほんの一瞬だったというのに、見事双天牙月に弾丸を命中させ、その軌道を逸らしたのである。

今の山田先生の雰囲気は普段のそれではなく、入試の際に己と戦った時のものだった。しかし己以外はそんな山田先生の様子を初めて見るのか、皆啞然としている。

「お前たちは知らんだろうが、山田先生はかつて、私と日本代表の座を争った。この程度は実力のほんの一部でしかない」

「あ、争ったなんて、そんな……ほとんど予備人員でしたよ」

それはつまり、千冬さんの予備が務まるほどの実力ということだ。あの試験では、やはりかなり手加減されていたのかもしれない。

「さて、これで人数は揃ったな。では、始めろ」

「……え？ ああ、二対一で……？」

「なんだ、二人だけでは不安か？ ふん、どうやら自分の実力は弁えているようだな」

「……む」

……けしかけるのが上手いな、二人のプライドを見事に逆撫でした。先程までの困惑した様子はどこへやら、今はその瞳に闘志を滾らせている。

「いえ、二人で——というより、一人で十分ですわ！」

「ええ、まったくね！」

「そうか。では、始め！」

そして始まる戦闘。その内容は、開始早々から激しい撃ち合い——と見せて、かなり一方的なものだった。

「ちよつと！ さつきから全然当たってないわよ！」

「鈴さんこそ！ わたくしの射線に入らないでくださる!？」

「なによ、あたしが悪いっての!？」

「そう言ったのがわかりませんの!？」

「……」

ギヤーギヤー言い合いながら戦う二人は全く連携が取れていない。むしろ互いに足を引っ張り合っている。

絶え間なく撃ち続けているにもかかわらず命中弾は皆無であり、逆に山田先生の攻撃は吸い込まれるように二人を捉えていた。

「きやあつ!？」

回避先を誘導され、ついには二人が衝突する。すかさず山田先生がグレネードを投擲、二人をまとめて撃墜した。

「……無様……」

思わず呟いた己を一体誰が責められようか。

否、誰も責めはしないだろう、もし責めるとすれば当の本人たちく

らいだろうが、セシリアと鈴は負けた責任をなすりつけ合うことに忙しく、聞こえていない。

「二分……まあ、こんなものか」

つまらなそうに言う千冬さん。山田先生の実力もあったが、それ以上に問題だったのは鈴とセシリアだ。有能な敵より無能な味方の方が厄介だということを、ここまで分かりやすく実演してくれるとは……。

「さて、では実習に移る。まずは基礎、歩行からだ。訓練機の数に限られているので、専用気持ちをリーダーとしてグループに分かれる。では、始め！」

千冬さんが言い終わるや否や、予想通り一夏とシャルルに人が殺到した。

……と思つたら何人かこつちに来た。

「い、井上さん！ よろしくお願いします！」

「……………」

クラスメイトである己に敬語で話し掛けるこの娘は、己たちの朝の鍛錬に付いてくる、「井上真改ファンクラブ」なる組織の会員である。

……いつの間にそんなものが出来たのか、己は知らない。

このままでは大変気疲れする実習になってしまうと思つたが、千冬さんから救いの声が。どうやら女子が一夏とシャルルに集中し過ぎてグループ分けが進まないようだ。

「馬鹿共が、グループ分けの意味が分かっているのか？ 各グループ均等に入れ！ 出席番号順だ、早くしろ！」

瞬間、まるで一つの生き物のように動き始める女子たち。グループ分けに掛かった時間、僅か二分。

そして己は絶望した。己のグループになった者たちの半数以上が、「井上真改ファンクラブ」の会員だったからだ。

「お、お願いします！」

「やったあ！ 神様ありがとう！」

「……………」

別に彼女たちが嫌いなわけではない。ただそのテンションについ

て行けないだけだ。

「それでは、訓練機を取りに来てください。一斑に一機ずつですよー。〔打鉄〕と〔リヴアイヴ〕が三機ずつありますので、好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

己の班は打鉄に決まった。己にはリヴアイヴより打鉄の方が似合うらしい。

……いや、己が乗る訳ではないのだが。

「それじゃあお願いしまーす！」

「……………」

とりあえず一人目はファンクラブの会員ではなかったので、普通に実習が進んだ。

打鉄を起動、装着し、歩行する。

「よっ、ほっ……………」と。…………むむ、案外難しい……………」

「……………慎重に……………」

ISは通常浮いているものなので足は少々バランスが悪く、歩くというのはそれなりに難しい。特にこの機体は操縦者に最適化されていないので尚更である。

だからこそ練習になるとも言えるが。

「……………ここまで……………」

「ふう。ありがとう、井上さん」

一人目が終わり、いよいよファンクラブ会員の番になる。

とそこで、一人目と二人目の間でアイコンタクトが交わされた。なんだと思う暇もなく、一人目がISから降りる。…………ISを立たせたまま。

「ああー、ついうっかりー」

「……………」

なんと白々しい。なんだ、何が狙いだ。

「山田センサー。次の人が乗れなくなっちゃいましたー。きやーたいへーん」

「あー、訓練機は専用機みたいに量子化できないですからね。立たせたまま降りてしまうと、コックピットが高い位置で固定されてしまっ

て乗るのが大変になるんですよ。次からは気をつけてくださいね」
「それで、どーすればいいーでしょーかー」

「そのまま乗るのは、ちょっと危ないですから……仕方ないので、井上さんが乗せてあげてください」

「……………」

「ふっ、計画通り」

聞こえているぞ。そうか、それが狙いか。

どうやら彼女らはなにかしらの取引をしていたようだった。

「えっと、じゃあ、あの、その、井上さん、よろしくお願いしますっ」

「……………はあ……………」

相変わらずのチームワークを發揮する少女たちに溜め息が漏れる。
仕方ない、実習は進めなければならぬからな。

「……………」

朧月を起動し、ファンクラブ会員第一号——かつて朝の鍛錬で己に弁当を作ってきた少女、菊池日向の前に跪く。

「……………掴まれ……………」

「は、はい！ お願いします！」

日向の腕がしっかりと己の首に回されたことを確認してから、日向の膝の裏に右腕を通し、抱え上げる。

……………所謂「お姫様抱っこ」というやつである。

「わわ！ ……わあ……………」

「……………」

顔を真っ赤にした日向を極力気にしないように、しかし決して落とさないように注意しながら、打鉄まで運ぶ。コックピットに乗りやすいよう、「メートルほどの高さまで浮かび上がった。

「……………注意……………」

「は、はいー」

どうにか装着は出来たが、フラついている。危なっかしいので、右手を差し出した。

「……………支える……………」

「あ、ありがとうございますー！」

感動したような面持ちで己の手を取る日向。転倒しないように、ゆつくりと導く。

「……慎重に……」

「うん、しょ……よい、しょ……」

「……………」

……自転車に初めて乗った子供の練習に付き合っているような気持ちになってきた。

どうにか歩行を終え、降りる段階になった時、日向子が三人目とアイコンタクト。振り向けば餌を待つ雛鳥のような顔でこちらを見ているファンクラブ会員たちの姿。

——結局、それ以降の全員を抱えてISに乗せることになった。

——実習が終わり、昼休み。

一夏が食事に誘って来たが断った。今日は箒が朝早くから弁当を作っていることを知っていたからだ。

(……頑張れよ……)

箒には箒の戦いがある。相手が一夏では苦戦は必至だろうが、健闘を祈っているぞ。

というわけで己は本音と学食へ向かう。今日は噂の転校生——IS学園創設以来二人目となる男子生徒、シャルル・デュノアを一目見ようと、いつも以上に混雑していた。

「お、今日は混んでるね」

「……………」

ふむ、これほどの混雑になると午後の授業にはギリギリになるが、逆に都合だ。普段弁当を持って来ている者や購買で買って済ませる者も学食に来ているということだから、今日は屋上には殆ど、上手くすれば誰もいないだろう。

一夏と箒の二人きりの昼食。凶らずもその状況を作り出してくれたシャルルには感謝せねば。

大分並んで食券を買い、日替わり定食を受け取って学食に入る。さて、どこかに空いている席は――

「デュノア君いないね」

「ちえー、せつかく学食来たのに」

「どこ行っただらろ？」

「……………」

――なに？ シャルルが居ない？ どういうことだ？

学食を見回す。確かにシャルルが居ない。一体どこに――いや待て。シャルルだけではない、良く見ればセシリアと鈴も居ない。

「……………」

普段仲の悪い二人が、揃って同じ行動を取る。こういう時は大抵――というかほぼ間違いなく一夏絡みだ。

「……………」

さて、考えてみよう。

箒は一夏のために早起きして弁当を作り、一緒に食べようと屋上に連れ出した。これは箒にとって、ちよつとしたデートの誘いと言って過言ではあるまい。

「……………」

だが一夏はそうと考えるだろうか？

否、一夏に限ってそれはない。有り得ない。

「……………」

そしてシャルルも居ないという。転校してきたばかりで学園に不慣れな人間、しかも注目度の極めて高い男子生徒が、他に気付かれずに行動するには協力者が必要だろう。

ではその協力者とは誰か？ ――言うまでもない。

「……………」

右も左もわからないシャルルを気遣って昼食に誘ったであろう一夏。

学食に居ないセシリアと鈴。

ここまで来れば、あとは己の頭でも答えがわかる。

……………いい加減にしろよ、一夏。

というわけで、朝から続き午後も己は不機嫌だった。

放課後。

己は急用が出来たと言って、一夏たちとの訓練への参加を断ってきた。昨日も訓練を休んだばかりだからか、シャルルの引越しの手伝いを後回しにしてまで訓練に駆け付けた一夏が不満そうにしていたが、しかし本当に急用が出来たのだ。

——緊急の、用事が。

「……………」

1025号室。先週末までは一夏と箒の部屋であり、今日からはシャルルと一夏の部屋となったその前に、己は居た。

周りに人気がないことを確認し、扉をノックする。

「はい、今開けます」

少し間を置いて、ジャージを着たシャルルが扉を開けて出て来た。引越して来たばかりで荷物の整理をしていたのだろう、量はかなり少ないが、部屋の中には開いたままの鞆がある。

「えーと……井上さん、だよね？ 一夏から聞いてるよ、幼なじみだつて」

「……………」

荷物整理をしている所に突然訪れ、それでいて口を閉ざしたままにいる己に対し、シャルルはにこやかに話し続ける。

「なにか用かな？ あ、一夏なら留守だよ。訓練に行くつて」

「……………」

その一夏との訓練を断つてここに来たのだ。ならば己が用があるのは、一人しかない。

「じゃあ、僕に用かな？ なら入つて。まだおもてなしはできないけど」

「……………」

柔らかく笑って、己を部屋の中に案内するシャルル。

己も続いて部屋に入り、扉を閉め——鍵を、掛けた。

「——え？」

ガチャリという音に、シャルルが振り向く。己は素早くシャルルに近付き襟を掴むと、大外刈りをかけた。

「うわっ……!?!」

なす術なく倒れたシャルルに馬乗りになる。突然のことに混乱している隙にジャージのファスナーを下ろし——その下に着けられていたコルセットを見て、己の考えが正しいことを確信した。

「……やはり、か……」

「な、なんで——」

シャルルの疑問も当然ではある。なにせ転校してきてまだ一日も経っていないのだ。シャルルは中性的な顔立ちで、コルセットのおかげで体つきにも少女らしいふくらみはない。致命的な失敗があつたならともかく、上手く振る舞っていたうえ、殆ど接していなかった己にバレるとは考えられないだろう。

「なんで、分かったの……?」

「……一目……」

己は決して、頭は良くない。

だが長い間、法律が通用どころか存在すらしないような、企業が支配する世界の中で、傭兵として生きて来た。

自然、権謀術数には鼻が利くようになり、その己が相手にしてきた間者たちに比べれば、シャルルの男装など粗末なものだ。

「……目的は……?」

「……訊いて、どうするの?」

時間と共に落ち着いたシャルルが、見下ろす己に問う。

その眼は敵意よりも諦観の色が濃いのが、油断はしない。いくら鼻が利いても決して賢くはない己は、気を抜けば容易く欺かれるのだから。

「……次第によっては……」

一夏を守る。

戦わねば生きられず、戦い続けた果てに全てを失った己たちと、あ

いつは違うのだから。

箒も、鈴も、セシリアも、本音も守る。

力こそが神であり、奪わねば何も手に入らないあの世界と、ここは違うのだから。

人の欲望がどれほど醜く、そして恐ろしいものであるか、己は良く知っている。だから、己の友人を欲望を満たすための道具と見ているようならば、許しはしない。

「……学園に、報告する……」

無論、今はまだ、ただの脅しのつもりだが。

シャルルが自らの意思でやったことなのか、止むに止まれぬ事情があつてのことなのか、それすらも分からないからな。それも含めて、「次第によつては」だ。

「……殺す、くらいは言いそうな雰囲気だつたのに」
「……………」

それは最終手段だ。ここで殺人など犯せば、瞬く間に捕まるのは目に見えている。それでも、いざともなれば躊躇いはしないが。

「……わかつた、話すよ。バレちゃつたなら、仕方がない」
「……………」

諦めたように溜め息をつき、自嘲するように笑い、話しだすシャルル。

「けど、その前に降りてくれる？　このままだと——」

ガチャリ。

鍵の開く音が聞こえ、すぐに誰かが入つて来た。

否、誰かなどと言う必要はない。鍵を外から開けた以上、それはこの部屋に住む者であり、その二人のうち一人は今己の下にいるのだから、残りはもう一人の住人しかいない。

つまり入つて来たのは一夏だつた。

「シャルル？　なんで鍵かけ……て……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

——さて、考えてみよう。

一夏はシャルルを男だと思っている。

そして己はシャルルを押し倒して馬乗りになり、ジャージのファスナーを下ろしている。

一夏からは、ジャージの下のコルセットまでは見えまい。というか見えてもそれを気にする余裕はあるまい。

この状況を見て、一夏はどう考えるか。

——いや、どう考えても己がシャルルを襲っているようにしか見えな
ないだろう。

……なんたることか。こういうのは一夏の役割のはずだ、なぜ己
が。

おい一夏、いつまで呆けているつもりだ？ さっさと扉を閉めろ、
誰かに見られたらどうする。

シャルル、なにを黙っている？ なにか言え、なんでもいいから。

己は話すのは苦手なんだ、別に混乱のあまり言葉が出ないわけではな
い。

——どうしてこうなった。

(……………厄日……………)

無言のまま胸中に疑問を浮かべつつ、己はこれからすることになる
だろう釈明に想いを馳せた。

——この状況、いかにすれば切り抜けられるのやら。

第16話 事情と感情

一日の授業が終わり、さーてアリーナ行くかーと張り切っていたら、シンがくるりと背中を向けた。

「あれ、シン。今日は訓練しないのか？」

「……急用……」

そう言っつて、すたすたと去って行くシン。なんだよ、せっかくシャルルの引っ越しの手伝いを断つてまで予定を空けたのに。

「箒、シンの用つて知ってるか？」

「いや、私はなにも聞いてないな」

「鈴は？」

「あたしも知らないわよ。……ていうか、シンにだつて用事くらいあるでしょ」

「まあ、それはそうなんだけど」

「確かに気になりますが、今は訓練に集中しましょう。……もうあんな無様は晒しませんわ」

さすがに午前のあれは応えたらしい。まあ専用機持ち二人掛かりで訓練機に瞬殺されたら、そりゃ代表候補生としてのプライドが傷付くだろう。

「まったくよ。あたしまで巻き込まないでよね」

「……なにやらかわたくしのせいで負けたかのような言い草ですわね？」

「その通りでしょうが」

「……ふ、ふふふ……どうやら鈴さんには、どちらが上か体に教えてさしあげる必要があるようですわね」

「じゃあお言葉に甘えて、教えてもらおうかしら——あたしの方が強いって」

バチバチと火花を散らし始める二人。なんでこうも仲が悪いんだ？

「しばらく終わりそうもないな。……し、仕方ない。二人で訓練するぞ、一夏」

「え？ あ、ああ、そうだな、アリーナをさせる時間は限られてるしな」
セシリアと鈴は模擬戦を始めてしまったので、箒の提案に乗ることにした。

……ん？ 箒の顔が少し赤いな。

「風邪か？ 体調が悪いなら無理しない方がいいぞ？」

「い、いや、体は大丈夫だ。なにも問題はない」

「そうか？ じゃあ、始めるか」

「うむ。では、参る！」

「行くぜ！」

「ちよおおおと待ったあああつ!!」

俺と箒が打ち合いを始める寸前、さっきまで激戦を繰り広げていた二人が同時にすつ飛んで来た。

どうした、もう勝負が付いたのか？ 引き分けか？

「一夏っ！ アンタなにやってんのよ！」

「え？ いや、二人とも模擬戦始めたから、俺は箒とやろうと——」

「箒さん！ 抜け駆けは許しませんわよ！」

「な、お前たちが勝手に戦い始めたんだろう！」

「問答無用っ!!」

「ええい、面倒だ！ 二人まとめて斬るっ！」

箒が参戦し、一人取り残される俺。

……え？ なに、この状況？

「一夏あつ！ 何を呆けているっ！ 手を貸せ！」

「ええっ!？」

「何言ってるのよ！ 一夏、手伝いなさい！」

「抜け駆けは許さないと言いましたわ！ 一夏さん、わたくしに力をっ！」

「どうしろってんだよ!？」

誰かに味方したら、その瞬間他の二人にボコボコにされる予感があった。事態は混迷を極めていて、解決の糸口すら掴めない。

なんでこうなるんだよ、まったく、ああ、こういう時——

「シンがいればなあ……」

——ギシリ。

急に動きを止める三人。

しかし戦いは終わったと言うのに、闘志だけはどんどん膨れ上がっている。

「……真改は私を応援してくれているというのに……」

「……バカ一夏、シンの気も知らずに……」

「……いくら真改さんでも、これだけは……」

な、なんだ？ 何を言ってるんだ？ 声が小さくてよく聞こえないぞ？

「おのれ、一夏あああつ!!」

「ああもう、あつたま来た!」

「わたくしだつてえええつ!」

「うおおおつ!!? な、なんだいきなり!」

「二うるさあああいつ!!」

「ぎやああああ!」

そして始まる猛攻。三人掛かりとかふぎけんな、勝負どころか訓練にもならんわ!

しかしそんな思いは届かない。

結局、俺は数分と保たずに檻樓雑巾にされ、今日の訓練は終わった。

「うう、疲れた……」

実際に俺が訓練したのは普段の十分の一にも満たない時間だったと言うのに、体にのしかかる疲労は数倍である。

ちなみに俺をボコボコにした三人は、そのまま俺を放って帰ってしまった。

……友情って、何だろう？

「……ようやく着いた」

廊下が凄まじく長く感じたが、どうにか部屋に着いた。今日はもうダメだ、シャワー浴びて飯食って、さっさと寝よう。

そう考えながらノブを回すが――

「あれ？ 鍵かかっている」

シャルルが部屋で荷物整理しているはずなんだが。なんだ、飯にでも行ったか？ いや、もしかしたら転入について先生から呼び出されたのかも。IS学園はやたら手続きが多いからなあ。

鍵を取り出して開け、再びノブを回す。すると扉の隙間から、かすかに声が聞こえて来た。

なんだ、シャルルいるじゃん。

「シャルル？ なんで鍵かけ……て……」

――部屋に入ると、床に仰向けになっているルームメイトと、それに馬乗りになっている幼なじみの姿が。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……………え？

なにこの状況？ どうした？ なにがあつた？

部屋の扉を確認する。1025号室。うん、間違いない、俺の部屋だ。

シャルルがいるのは問題ない。ここはシャルルの部屋でもあるからな。

けどなんでシンがいるんだ？ 急用があるんじゃないのか？

――ハッ!? ま、まさか!?

「シンってそういう趣味だったのか……?」

「……………否……………」

シンにとっても驚きの事態だったのか、無表情のまま硬直していたが、俺が疑問の声をあげるとどうにか動き出した。

シンは溜め息をつき、疲れたように首を振って立ち上がる。

……………なんか呆れてないか？

「……………なんだこれ？ どういう状況だよ？ 何があつたんだ？」

「……………」

とりあえずこのままだと非常にまずいことになる気がしたので、部屋に入って扉を閉める。

するとシンは無言のまま、まだ床の上で固まっているシャルルのジャージ（なぜかフアスナーが下ろされている）の襟を掴み、強引に引っ張って立ち上がらせた。

「きゃあー！」

「おいシン!? なにす……きゃあ?」

なんか今女の子の悲鳴が聞こえたぞ。

誰だ?

シン……は、有り得ないな、うん。

けどあと俺とシャルルしかここにいないし——
と、そこで。

大きく開いたシャルルのジャージの下に、胸を覆うようになにかが着けられていることに気付いた。

「……なにそれ」

「え? ……ええつと……」

「……………」

するとシンは鋭い目をさらに鋭くしてシャルルを睨む。

「……話すと言った……」

「え? け、けど、一夏には——」

「……………」

「う……わかった、話すよ……」

二人の間になにかあったのかはわからないが、とりあえずシャルルはシンの眼力に負けたようだった。

「あ、あのね、一夏」

「な、なんだ?」

意を決したように、けどどこかためらいがちに、もじもじしながらシャルルが話し出す。

……う、なんか可愛い。シャルルは中性的な顔だからな、男とわかっていても——

「実は僕……女、なんだ」

「へえ」

「……………」

「……………」

「……………へえあ!? え!? 今なんつった!?!」

あまりに予想外過ぎる言葉に反応が遅れ、しかも変な声が出た。

お、女? 誰が? え? シャルルが?

「え? マジで? 本当に?」

「うん……………本当だよ」

「……………」

混乱から立ち直れない。だつて突然すぎる。

今日転校してきたクラスメイトが世界で二人目の男のIS操縦者で、ようやくできたIS学園での同性の仲間、けど本当は女の子で

「……………なんで、男のフリを?」

——そう、それだ。まずは、それを訊かないと。

「……………実家の方から、そうしろつて言われたんだ」

「実家……………ていうと、デュノア社か?」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

「……………」

命令。

その言葉が出た瞬間、シンの気配が鋭くなった。顔は相変わらずの無表情だが、明らかに怒っている。

「命令つて……………親だろう? なんでそんな——」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

愛人の、子。

フランス最大の企業の社長、その愛人の子。それが何を意味するのか、いくら俺でもわかる。

「二年前に、お母さんが亡くなって。これからどうすればいいんだろうって途方にくれてたら、父がやって来て。……………そのまま、引き取られたんだ」

お母さん。

父親を呼ぶ時とはまるで違う、愛情と、尊敬に満ちた声。それを向ける相手が死んでしまった時、どれほどの悲しみがあつたのだろう。

「何がなんだか全然わからないうちに、IS適性の検査をされて。適性が高いことがわかると、あつという間にデュノア社のテストパイロットってことにされてたんだ。非公式の、だけどね」

この時点ですでおかしい。

検査？ 母親を失ったばかりの、実の娘に？ それで適性があつたから、自分の会社のテストパイロットにしたって？

「父に会ったのは二回くらいかな。最初に引き取られた時と、一度だけ本邸に呼ばれた時。あ、普段は別邸で生活してるんだ」

二回？ 二年間で？ 仕事が忙しいからとかじゃなく、普段は違う家に住んでるからだって？

「それでその時、本妻の人に殴られちゃってさ。「泥棒猫の娘が！」ってね。びっくりしたよ。お母さんは僕に父親のことなにも教えてくれてなかったから、もうなにがなにやら」

あはは、と愛想笑いをするシャルル。

——やめてくれ。頼むから、そんな顔をしないでくれ。

「それからしばらくは、訓練とか勉強とかをしてただけだ。……ちよつと、状況が変わっちゃって」

「……デュノア社は、第三世代型ISの開発が上手くいってないんだっけか」

「あれ、よく知ってるね？」

「……勉強、してるからな」

敵を知り、己を知れば、百戦危うからず。知識は力なり、だ。

「前から苦しくはあつただけど、それがいよいよ致命的になってきたんだ。フランス政府も、これ以上開発が遅れるようなら援助は出来ないって言い出して、デュノア社は追い詰められた。なんとしてでも、第三世代型を造らなくちゃならなくなった」

「けど、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。世界でただ一人のISを動かせる男と接触するには、同

じ男の方が都合がいいからさ」

「……それって、つまり——」

「そう。一夏と、一夏の専用機のデータを盗んでくること。」

——それが、あの人が僕に命令したことだよ」

つまりはこういうことか。」

会社の経営が上手くいかないから、たまたまIS適性が高かった愛人との子に犯罪行為をさせて、起死回生の一手にしよう、と。

——親である以前に、人として腐ってやがる。」

「とまあ、こんなところかな。どうする？ 井上さん。学園に報告するの？」

「な……おいシン、どういうことだよ!？」

「……………」

さつきから微動だにしないシンを問い質す。

学園に報告？ なんてだよ、シャルルはなにも悪くないだろうが！

「井上さんは、一夏を心配してたんだよ。なにせ一夏には世界中が注目してるからね。男装してまでルームメイトになった僕が、良くないことを企んでるんじゃないかって」

「……………」

肯定はしないが、否定もしない。シンはいつものように、ただ黙ってそこにいた。

「それにどっちにしたって、こんな無茶がバレるのは時間の問題だよ。それまでにデータを盗んで、もっともらしい理由をでっちあげて学園を去る……という計画だったんだけど」

「……………」

「まあ結局は、完全に失敗。こうなったら、フランス政府も黙ってないだろうね。デユノア社は潰れるか、良くて他企業の傘下に入るか。僕は……牢屋かな」

まだ十五歳の女の子が、そんな風に人生を諦めていることが、俺には我慢ならなかった。

だから、腹の底から湧き出てくる言葉を飲み込むつもりなんて、有りはしない。

「——ふぎけるな」

「……え？」

「ふぎけんじゃねえ。何納得してるみたいな顔してるんだよ、シャルル」

「い、一夏……？」

俺は今、本気で怒っている。

シャルルの父親に対してはもちろん、今はその父親に抗おうとしないシャルルにも、腹が立っていた。

「親に道具扱いされて、無茶なこと命令されて、挙げ句バレたから牢屋行きだ？ そんな馬鹿な話があったたまるか。納得なんか出来るかよ。出来るわけねえだろうが」

「……納得出来る出来ないじゃないよ。僕には選ぶ権利がないんだ。……仕方がないよ」

「ふぎけんなっ!!」

思わず声を荒げてしまう。俺の怒りは、もはや完全に臨界点を超えていた。

「仕方がない？ 仕方がないだって？ そんなわけあるか、お前はまだ、何もしてないだろうが！」

「な……」

「嫌だったんだろ？ 男のフリするのも、犯罪紛いのことするのも、父親に従うのも！ なら抗えよ！ 抵抗しろよ！ 悪足掻きしろよ！ なにもしないでただ言われるままにして、それで仕方がないなんて口にするなっ!!」

感情の爆発に任せて言葉を吐き出す。俺の剣幕に気圧されて、シャルルが怯えていた。

けれど、止まらない。止まるつもりもない。

「だ、だって……僕には、どうすることも……」

「出来なかったって？ それ、本当に何も出来なかったのかよ。やらなかっただけじゃないのか？」

「……っ！」

震えながら言葉を紡ぐシャルルに、容赦なく辛辣な言葉を浴びせ

る。

「なにも出来ないのと、なにもしないのは違うだろ。力の有る無しとか、相手がどうかは関係ない。やる前から諦めるのは、心が弱いからだ」

シャルルは俯いてしまった。責められるのが怖いのか、それとも苦しいのか、俺と目を合わせようとしない。

——それじゃあ、ダメなんだよ。

「シャルルが言ってることは、全部言い訳だ。お前は、最初から最後まで、諦めてるだけじゃないか」

戦うのは怖い。相手が強大なら尚更だ。それは俺だって変わらないし、きつとシンもそうだろう。

傷付くのが嫌なら、逃げてしまうのも構わないのかも知れない。

「世の中には出来ることと出来ないことがあるなんて知ったようなことを言うヤツは、どいつもこいつも負け犬だ。そんな連中より、不可能だって周りから馬鹿にされながらも、最期まで信じて挑み続けて死んだ人のほうが、よっぽど格好いいぜ」

だけど、逃げてもなにも解決しない。得られる平穩は仮初めで、自分の心には消えることのない後悔が残る。

お前はそんなものを背負い続けて、この先生きてくつもりかよ、シャルル。

「抗えよ、抵抗しろよ、悪足掻きしろよ。なにも変わらないかも知れない。けどこのまま行っても、最悪の結末しかないんだろ。だったら、自分の最期くらい自分で決めろ」

何も変わらないかも知れない。

けど、何かが変わえられるかも知れない。

なら、どうせなら、何かやってみた方がいい。

勝てるとは限らない。けれど、負けると決まっているわけでもない。

戦わなくちゃ、そのチャンスすら手に入らない。

前を向かない者に、勝利などないのだから。

「……のや……」

そして、シャルルの震えが変わった。
怯えから、怒りに。

「なにが分かるのさ」

俯いていた顔を上げ、キツと俺を睨みつける。

「一夏になにが分かるのさ!! なにも知らないクセに、好き勝手言わないでよ!! お母さんが死んじやって、他に親戚もいなくて、顔も名前も知らない父親に引き取られて!! 抗えとか簡単に言うけど、父は大会社の社長なんだよ!? 僕みたいな小娘一人に、勝てる相手じゃないんだっ!!」

喉が張り裂けんばかりの大声で怒鳴るシャルル。

俺にはそれが、悲鳴に聞こえた。

「なにもしなかったただけだっって? そうだよ、その通りだよ、僕はただ諦めただけだよっ!! 怖いから逆らわなかった、嫌な命令にも従った! 戦って負けて、もっとひどい目にあうよりも、初めから戦わないことを選んだんだ!!」

だって、僕は——僕は一夏みたいに、「強く」ないんだっ!!」

言い終えて、肩で息をするシャルル。

……やっとな、本音を言ったな。

「……だったら、助けを呼べばいい」

「……え?」

「弱いから戦えないっていうなら、一人じやなにも出来ないっていうなら、誰かに助けを求めればいい。これは受け売りだけどな、「言葉は人類最高の発明」なんだよ」

チラリと、それを俺に言った幼なじみを見る。

まったく、どの口でそんなことを言うんだか。

「言葉にすればなんでも伝わるわけじゃない。けど、言葉にするだけで伝わることもいっぱいある。だからさ、自分じやどうしようもないなら、「助けて」って言えばいいんだよ」

俺の言葉をポカンと聞いていたシャルルだが、またすぐに俯いてしまった。

「……けど、僕の言葉を聞いてくれる人なんて……」

「いるだろ。少なくとも、目の前に二人」
「え？」

「……………」

またポカンとするシャルルに、ニヤリと笑って見せる。できるだけ、頼もしく見えるように。

「俺は、シャルルの言葉を聞くよ。シンもな。そりゃあ、全部に応えられるわけじゃないけどさ」

「……………はあ……………」

「む。なんだよシン、溜め息なんかついて」
「……………」

また黙った。お前がそんなだと、俺の言葉に説得力が出ないじゃないか。

「僕の言葉を……………聞いて、くれるの……………？」

不安げに俺に尋ねるシャルル。

一体どれほど拒絶されて来たのか、彼女は他人を頼ることを恐れるようになってしまったんだろう。その心の傷の痛みは、俺なんかにはわからない。

「ああ、ちゃんと聞くよ。俺は頭悪いから、理解できないこともあるかもしれないけど」

「一夏……………」

「だからさ、言ってみろよ、シャルル。お前はどうしたいんだ？ 諦めちゃっていいのか？ このまま終わっちゃってもいいのか？」

一人で出来ないのなら、誰かが助けてやればいい。

誰かを頼ることも知らないで苦しんでいる人の、声なき叫びが聞こえたのなら、こちらから手を差し伸べればいい。

——言葉にしなくても伝わることも、確かにあるのだから。

「……………嫌だ」

「……………」

「……………嫌だよ……………」

「……………」

「諦めたく、ないよ」

「……………」

「まだやりたいこと、いっぱいあるよ。やってないこと、いっぱいあるよ。なのにこんな風に終わるだなんて、そんなの嫌だよ……!!」

「……………」

「……助けて」

「ああ」

「……助けてよ、一夏あ……!!」

「任せろ。……絶対に、助けてやる」

「……うん……!!」

ついに泣き出してしまったシャルルを、そっと抱きしめる。

女の子を抱きしめるのはかなり緊張するが、シンが子供たちを慰めるときよくやってたので真似してみた。

「良く言えたな。……誰かに助けを求めらるのだから、立派な抵抗だと思っぜ」

「……うん。……ありがとう、一夏」

そうして俺は、シャルルが泣き止むまで、彼女を抱きしめていた。

「けど、実際どうするの?」

「それなんだけどな。実は明確にどうすればいいか、アテがあるわけじゃないんだ」

「うん、まあ、それはそうだろうね」

「……………」

なにやら呆れたような顔をするシャルル。失敬な、別になにも考えてなかったわけじゃないぞ。

「けど、ここにいればしばらくは大丈夫なはずだ」

「え?」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「……つまり、卒業するまでは、僕のことは学園が守ってくれるってこと？」

「そーいうこと。……啖呵切つといて他人任せってのも、情けない話だけどな」

「そんなことないよ。自分じゃどうしようもないなら誰かに助けを求めればいい、それだつて立派な抵抗だつて、一夏が言ってくれたんじゃないか」

柔らかに笑いながら言うシャルル。

……なんか、あれだな、男の割に妙に可愛いと思つてたけど、女の子つてわかるとさらに可愛く見えるな。

「けど良く覚えてたね？ 特記事項なんて、五十五個もあるのに」

「言つたら、勉強してらつて」

知識は力なり。その言葉の正しさを、改めて実感した。

「あと三年弱は、デュノア社もフランス政府も、シャルルには手を出せない。それだけ有れば、なにかいい方法が見付かるさ」

「樂觀的だね、一夏」

「悲觀的になつてなにもしないよりはマシだろ」

「……うん。そうだね」

後ろ向きになつて、逃げるのは構わない。

だが前を向かない者に、勝利などない。

——今のシャルルは、ちゃんと前を向いている。

「仕方なくなんかない。仕方なら、いくらでもある。ただ見つからないかつたり、目を背けていたりしてるだけさ」

「……うん。一緒に、探してくれる？」

「ああ。手伝うよ」

「……ありがとう、一夏」

話をついた。三年という時間が十分なのか不足なのかはわからないが、とにかくタイムリミットが決まったわけだ。いつ時間切れになるかわからないような状況より何十倍もマシだ。

——それまでに、シャルルを助ける方法を見つけ出す。そしてそのための人手は、多い方がいい。

「シン」

「……………」

ただ黙ってシャルルの話を聞いていた親友。

相変わずなにを考えているのかわからない無表情だが、俺はコイツが結構義に厚いやツだと知っている。シャルルの境遇については、それなり以上に怒りを感じているはずだ。

「俺はシャルルを助きたい。手を貸してくれ、シン」

「……………」

「お願いします、井上さん」

「……………」

俺とシャルル、両方を見てから、シンは真っ直ぐにシャルルの眼を見て、右手を差し出した。

「…………井上真改…………」

その女の子らしさが全く残っていない、鉄のような右手を、シャルルは感動したような面持ちで、しっかりと握った。

「シャルロット」

シンの眼を真っ直ぐに見返す。

その瞳には、さっきまでの諦観や絶望はない。代わりにあるのは、自分の未来を勝ち取るために戦うという、強い意志だった。

「シャルロット・デュノア。それが、お母さんがくれた、僕の本当の名前」

そう言って浮かべた笑顔は、まるで天使のようだった。

「改めてよろしくな、シャルロット」

「こちらこそよろしく、一夏。けど僕のごことはシャルルのままでいいよ。まだ他のみんなには、僕のごことはバレてないんだから」

「あー、確かに、うっかりシャルロットって呼んだらまずいよな…………。けどせつかく本当の名前を教えてもらったのに、偽名を呼ぶのもなあ」

さて、どうしたもんか…………。

「シン、なにかいいアイデアは——」

——マテ、いまなんかビビっと来たぞ。

「そうだ、真改をシンって呼ぶなら、シャルロットは――」

「……シャル」

「え?」

「シャルって呼ぶのはどうだ? これなら不自然じゃないし、俺も呼びやすいし」

「……うん、いいね! それで行こう!」

なにやら凄く嬉しそうにする、シャルロット改めシャル。

「なんだ? 名前を略して渾名にするくらい日本じゃ普通だけど、フランスじゃそういうことしないのか?」

「……愚鈍……」

「うおおい!? なんかすげえセリフ聞こえたぞ今!」

「……」

「く、たまに口開いたと思えばグサリとくることばつか言いやがって……」

「……ぷ、ふふふ、あははは!」

突然シャルが腹を抱えて笑いだした。なんだどうした、俺の心が傷付く様はそんなに面白いか。

「二人とも、ほんとに仲がいいんだね」

「うん? まあ、付き合い長いしな」

「……」

「幼なじみなんだよね? どれくらい経つ?」

「あー、もう十年くらいか。考えてみると、本当に長い付き合いだな」

「……」

「へえ。それなら、仲の良さも納得だね」

うん、とひとつ頷いて、シャルはシンの方を向いた。

「ねえ、井上さん。僕も井上さんのこと、シンって呼んでもいいかな?」

「……」

「おお? 突然どうした。」

「井上さんがいなかったら、僕はまだ一夏を騙し続けていたと思う。もしかしたら、取り返しのつかないところまで行ってたかも知れない」

い」

「……………」

「けど井上さんのおかげで、僕はちゃんと、助けてって言った」

「……………」

「一夏も井上さんも僕の恩人だけど、それだけじゃ嫌なんだ。僕は、二人と友達になりたい」

「……………」

「だから、僕も一夏みたいに、シンって呼びたいんだ。……ダメかな？」

「……………」

うくん、あんなに遠慮がちだったシャルが、随分と攻めるな。男子三日会わざれば刮目して見よと言うが、女子は三日どころじゃないな。

「…………好きに呼べ…………」

「…………！　ありがとう、シン！」

「……………」

よかった、二人とも仲良くなれて。最初シンがマウントポジションなんかとってたから、上手くないんじゃないかとか心配してたけど、これなら大丈夫そうだな。

「……………そういやなんであんなことになってたんだ？」

「？　あんなことって？」

「いや、俺が部屋入ったとき、シャルにシンが馬乗りになってたじゃん」

「ああ、あれは…………」

言いかけて、途端に赤くなるシャル。

…………え？　なに？　マジでなにがあつたの？

「し、シンって、意外と強引なんだね…………」

「…………!？」

おおう、なんだ？　今度はシンが狼狽えだしたぞ？

「思いだしたら、恥ずかしくなってきたよ……………」

「……………」

確かに、シャルが本当は女の子だったことを考えると、あのジャージの前が半分以上開いていた格好は、いくらコルセット着けてたと
言っても恥ずかしいだろう。

「……シン、なにしたんだよ」

「……確認……」

「いや、それじゃわかんねえって。もっと具体的に」

「……………」

「……シャル？」

「シンったら、部屋に入って来るなりいきなり僕のこと押し倒して、馬
乗りになって、ジャージのフアスナー開けたんだよ」

「……え」

そ、それは……なんて大胆な……

「なんでそんなことを」

「……確実……」

「いや、そりやそうだろうけどさ」

「僕が本当に男の子だったらどうしてたの？」

「……………」

「……考えてなかったの？」

「……確信……」

「だったら確認する必要ないじゃん」

「……念のため……」

「つまりちよつとくらいは、間違ってるかもしれないって思ってたん
だよね？」

「……………」

俺とシャルの波状攻撃により追い詰められていくシン。

俺にはわかる。その無表情の下では、かなり焦っているだろう。

……ヤバイ、なんか面白い。

「……話は終わった……」

「いや、終わってないから」

「せっかくだからさ、もっと色々聞かせてよ」

「……………」

かなり強引に話を切り上げて逃げようとするシンを捕まえる。

いつもやられてばかりだからな、たまにはこっちがからかってやらなくちゃ、釣り合いがとれないってもんだ。

——そうして、俺とシャルによるシンいじりは、無言のままキレたシンが俺に飛び膝蹴り（シャイニングウイザード）を叩き込むまで続いた。

……なぜ俺だけ。まあ、シャルが楽しそうだったから、いいけどさ。

第17話 黒兎

「おはよう、シン」

……ざわ……

教室が静かに震撼した。シャルの身の上話を聞き、協力を約束した翌朝のことである。

「い、い、今、デュノア君……」

「井上さんのこと……シンって呼んだよね……？」

「どういふことなの……」

「……………」

——迂闊。この事態は、予測して然るべきであった。

シャルが転校して来たのは昨日のこと。その翌日に渾名で呼ばれるなど、何かあったと思われるのは当然だ。

「? どうしたの? シン」

「……………」

「ま、またシンって呼んだ……!」

「聞き間違いじゃないよね……」

「何があったの……!?!」

ぐぬう、このままでは……! おい一夏、助けてくれ、昨日蹴ったことは謝るから、どうか誤魔化してくれ。

「おはよう、シン。早速シャルと仲良くやってるな」

「……………」

よし分かった、お前は己の敵だ。次があればこの真改、容赦せん。

「さ、さっそく……う?」

「やってる……!?!」

ざわ……ざわざわ……

待て、今発音がおかしい奴が一人いたぞ。

「えーっと……」

教室内の様子がおかしいことにシャルも気付いたようだ。爽やかな笑みをそのままに、素早く思考を巡らせている。

「き、昨日はありがとう、相談に乗ってくれて。やっぱり知らない土地

は不安だったから、友達になつてくれて嬉しいよ」

「……………」

「な、なあんだ、そんなことか……………」

「ああ、私も行けばよかったかなあ……………」

ふう、どうにか切り抜けたか。気が利くな、シャルは。一夏とは大
違いだ、一夏とは。

「な、なんだよ」

「……………」

非難の目を向ける己に怯んだのか、一夏が一步退がる。

ふん、まあいい。だが覚えておけよ。

「ちよつと、デユノアさん？」

「はい？」

……………しまった、まだセシリアがいた。

「どういうことですか？ 真改さんと、随分親しいようですが」

「え？ だから、昨日相談に……………」

「ええ、それはわかっていますわ。わたくしが言っているのは、真改さ
んの呼び方についてです」

……………そういえばセシリアは、鈴のことは鈴と呼ぶが、己のことは真
改と呼ぶな。

「ええつと、一夏がシンって呼んでるのを聞いて、僕も友達になりたい
からシンって呼んでもいいかって聞いたたら、好きに呼べて……………」

「な……………」

なにやらショックを受けているセシリア。意味が分からん。

「そ、そんな……………幼なじみだけに許されているのではありませんの
……………」

「……………」

誰もそんなことは言っていない。

「し、真改さんっ！」

「……………」

「わ、わたくしも……………そう呼んで、よろしくて？」

「……………」

別に許可のいることではないと思うのだが。一夏など初めて会った次の日にはシンと呼んでいたしな。

「……好きに呼べ……」

「……！　そ、それでは……」

コホンとひとつ咳払いをするセシリア。

……なぜそこまで緊張しているのか。

「……シ……」

「…………」

「……シン」

ガラガラ

「席に着け。SHRを始めるぞ」

「…………」

絶妙なタイミングで千冬さんが教室に入ってくる。中断されたセシリアは口を開けた状態で固まっていた。

「オルコット。さっさと席に着け」

「……はい……」

とぼとぼと席に戻っていく。千冬さんはその様子を訝しげに眺めてから、いつも通りの様子で話し始めた。

「欠席者はいないな。ではまず、今日の連絡事項だが――」

まあ、今回は邪魔が入ったが、次の機会はすぐに来るだろう。所詮はただの渾名だ、そう気負うものでもあるまい。

そうして、また一日が始まるのであった。

そして四日後。

結局、今もまだセシリアは己を真改と呼んでいる。何故だ。一度機を逸して恥ずかしくなったのか？

「うーん……なるほど、なんとなくわかったよ」

「え？　もうっ？」

今日は土曜日であり、午前は授業があるが、午後は自由時間になっ

ている。

しかし午後は全てのアリーナが開放されるため、ほとんどの生徒が実習に使う。

かく言う己たちも訓練に来ており、今はシャルとの模擬戦を終えた一夏が問題点の指摘を受けている。

「一夏はさ、射撃武器の特性を理解できてないよね。まあ、白式が接近戦しかできないから仕方ないのかもしれないけど」

「射撃武器の特性……？ 確かに俺は使えないけど、その分勉強してるつもりなだけだな」

「知識として知っているのと、経験して理解しているのとは違うよ。銃弾は狙ったところにまっすぐ飛んで行く……それは誰でも知っていることだけど、それだけじゃ当てられないでしょ？」

「ああ……なんとなく分かる気がする」

「どんな姿勢で撃つのが安定するのか。どんな動きが狙いやすいのか。一見、銃がない一夏には必要ないように見えるかも知れないけど、これがわかってれば逆のこともわかるんだよ」

「……射撃が安定しない姿勢、狙いが付けにくい動き、つてことか」

「そういうこと。一夏はまず近付けなくちゃ話にならないからね。そのためには、「避ける」だけじゃなくて「外させる」ことも必要だよ」「……なるほど」

シャルの説明に頷く一夏。ようやく教え上手な訓練相手を得て、いつも以上にやる気を見せている。

ちなみに、箒、鈴、セシリアの説明は――

『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ』『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。……はあ？なんでわかんないのよバカ』

『防衛の時は右半身を斜め上前方五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

ひどいものである。ちなみに己は言葉による説明はしていない。ただ只管に打ち合うのみだ。

「けどシンもほとんど射撃武器使わないのに、やたらと上手く避ける

よな」

「確かにそうだよな。月影も、狙うつていうより数撃てば当たるつて感じの武器だし、かなり近付かないと撃たないし」

まあ昔はマシンガンを使っていたが。

しかしその頃から、射撃は決して上手くなかった。回避技術に関しては特性を把握しているというより、「撃たれた」経験からくるもの大きい。

そしてネクストとISの相違点の中で、己にとって特に重要な要素がひとつある。

「……筋肉……」

「は？」

「……体より、先に動く……」

「……えーつと、つまり……」

「筋肉の動きから、動きを先読みしてるってこと……?」

「……」

そう、パイロットが分厚い物理装甲に包まれているネクストと違い、ISの防御力は殆どが皮膜装甲スキンバリアーによるものだ。全身装甲フル・スキンと呼ばれるタイプもあるが数は少なく、大部分のISは胴や頭部が露わになっている。

そしてパワードスーツであるISの動きは操縦者のそれと連動しているのです、筋肉の動きや視線から大体の狙いは分かるというわけだ。

ちなみにこの技術は、昔は護衛を務めることも多かったことから身に付いたものである。ISと違い、ネクストは緊急時に咄嗟に展開するような真似はできない。故に、リンクスを殺すのならば生身の時を狙え、というのが常識だったのだ。自然、生身での技術も磨かれる。

「……やっぱとんでもねえな、シンは」

「うん……。僕もそれはどうかと思うよ」

「……」

失敬な。こんなものは人間が本来持っている機能を最大限使い切っているだけだ。

それよりも、一の鍛錬で十を身に付ける一夏のような「天才」の方が、己からすればとんでもない。

「……ま、まあ、とにかく続けようか。さっきの説明で予想はついてると思うけど、何事も実際にやってみるのが一番だからね。はい、これ」
そう言つてシャルは一夏に、デュノア社製アサルトライフル〔ヴェント〕を渡す。

「一夏にも使えるように使用許諾アンロックしたから、試しに撃つてみて」
「おう。……こうか？」

「えつと……脇を締めて、それともう少し——」
初めて持つ銃器に四苦八苦している一夏に、シャルが丁寧に教えている。

その様子を眺めている己に、セシリアが話し掛けて来た。

「シ、シン……カイ、さん」

「……………」

だから何故そんなに恥ずかしがっている。

「デュノアさんと、仲がよろしいですね」

「……………」

確かに仲は良いだろう。シャルは自分の正体を知っているからか一夏と己には心を許しているようだし、己もシャルには好感を持っている。

シャルの身の上話を聞いた時も、彼女が自分で考え選択することを放棄している「人形」であれば別にどうとも思わなかったが、彼女は確かに意志を持ち、そして「助けて」と口にした。

一夏の言う通り、それは抵抗の第一歩だ。決して「人形」のすることではない。

「そうそう、アンタもう噂になってるわよ、シン。転校生のシャルル・デュノアは、あの井上真改にご執心だつて」
「……………」

「あの」とはなんだ。そこまで話題になるようなことをしたつもりはないぞ。

「デュノアは相談を聞いてもらったと言つていたな。……本当か？」

正直、私にはお前が聞き上手とは思えないんだが」

確かに己は聞き上手ではない。ただ黙っているだけで、上手く相槌を打ったり先を促したりが出来ないからな。

「……やはり、それだけではなかったんだな？」

「まあ、シンは嘘は吐かないけど、ほんとのことを言わないことはあるもんね」

「真改さん……なにがありましたの？」

「……………」

いくら聞かれても話すつもりはない。それを態度で示すべく黙秘を続ける己を見て、鈴がニヤリと笑った。

……なんだ、その不吉な笑みは。

「シンってさあ、デユノアみたいなヤツが好みなの？」

「……………」

案の定というか、予想通りというか。

とにかく鈴の台詞は想定内のものだったので、無言と無表情を貫く。

「な!? なななななあ——」

しかしセシリアが狼狽えた。成る程、鈴の狙いはこちらか。

「なんていうの? 可愛い系? しつかり者の弟みたいなの? シン、弟いっぱいいるもんねえ。やっぱ母性本能くすぐる子が好きなの?」

「なななな何をおっしゃってますの鈴さん!？」

「そうよねえ、シンも女の子だもんねえ。好きな男の子のタイプくらいあるわよねえ」

「しししし真改さん!? どうなんですの!？」

「……………」

己への直接攻撃は効果が無いとわかっていたのだろう。鈴はセシリアを中継に使い、間接攻撃を行って来た。

あ的那、小癩な。

「もしかしてデユノアさんも真改さんのことを……!?! ああ、わたくしはどうすれば……!?!」

「……何もしなくていいんじゃないか?」

箒的的確な助言も耳に入っている様子はない。セシリアの混乱はまだまだ続きそうだった。

——の、だが。

「!? ね、ねえ、アレってもしかして……」

「まさか、ドイツの第三世代型……!?」

「完成していたというの……!?」

アリーナの入り口。

そこにいたのは、黒い装甲に身を包んだ銀髪の少女。

——彼女のことは如月重工に調べてもらった。

ドイツが所持する十機のISの内、三機を配備された、ドイツ軍最強の特殊部隊シュヴァルツエア・ハーゼ、通称「黒兎隊」隊長。ドイツ軍が開発した、第三世代型IS、「シュヴァルツエア・レーゲン」の所有者。

——ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐。

「おい」

ラウラが冷え切った声を出す。その対象は、言うまでもなく一夏だった。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちとは、都合が良い。私と戦え」

前置きのないラウラの言葉に、一夏が呆れたような顔をする。

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても、私にはある」

ラウラの言う理由とは、恐らくは一夏が誘拐された時のことだろう。

第二回モンド・グロッソ決勝戦当日に起きたその事件のせいで、優勝確実とまで言われていた千冬さんは決勝を放棄、一夏の救出に向かった。

彼女の不戦敗は世界を大きく揺るがせたが、しかし誘拐事件のことは伏せられたため、原因不明の決勝辞退ということになっている。

だが、モンド・グロッソ開催国であったドイツは全てを知っている。

なにしろ一夏誘拐の折、一夏が捕らわれている場所の情報を掴み、千冬さんに伝えたのがドイツ軍なのだから。

その借りを返すためか、千冬さんはドイツ軍で一年ほど教官をしていた。ラウラとはその頃に知り合ったのだろう。

そしてラウラは千冬さんに憧れ、尊敬し、その経歴に傷が付いた要因である一夏を憎むようになった――

――概ね、こんなところだろう。

「私は、貴様の存在を認めん。貴様がいなければ、教官が決勝を棄権することもなかった」

しかし、ラウラは気付いていない。あの事件により一夏を憎んでいる者は、ラウラだけではない。

――誰より一夏自身が、一夏のことを憎んでいる。

「貴様さえいなければ、教官が大会二連覇の偉業をなしただろうことは容易に想像できる」

「……………」

負けん気の強い一夏が言い返すこともせず黙っていることを一体どう勘違いしているのか、ラウラは言葉を続ける。

「貴様さえいなければ、教官は現役を引退することもなく、今も世界最強の座に在り続けていただろう」

「……………」

一夏はラウラと目を合わせず、ガリガリと頭を掻いている。苛立ちをどうにか抑えようとしているようだが、そろそろ限界だろう。

「貴様さえいなければ、教官は――」

「――黙れ」

その声に。

箒が、鈴が、セシリアが、シャルが、そしてラウラまでもが、震え上がった。

声を発した一夏は、彼に似合わぬ無表情で、しかしその眼に底無しの憤怒と憎悪を宿らせて、ラウラを睨み付けている。

「外野が知ったようなことほざいてんじゃねえよ。お前に言われるまでもない。あの時、俺は被害者じゃなく、加害者だった」

一夏は結局、ほぼ無傷で助けられた。誘拐なぞされれば心に傷を負いそうなものだが、それは誘拐されたこと自体によるものではなかった。

一夏自身は、何も失わなかった。

「分かってる。分かってるんだよ。だからどこかに消えてくれ。今は、お前に付き合う余裕はないんだ」

「……………」

今の一夏は危険だ。今ラウラと戦えば、どちらかが死ぬまで止まらないだろう。

それを、一夏本人も自覚している。

「話は終わりだ。俺はお前とは戦わない」

「……………ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

「っ!？」

ラウラが漆黒のIS「シュヴァルツエア・レーゲン」を戦闘状態に移行させる。ほぼ同時に、左肩に装着された大型のカノン砲が火を噴いた。

「……………」

ヴオンツ!

一夏の前に躍り出て、起動した月光の刃で砲弾を斬り捨てる。超高熱に焼かれ、音速を遥かに超えていた弾丸はしかし、己に届く前に蒸発した。

「……………」

「貴様……………」

今の一夏を戦わせるのは本当にまずい。我を失い、己や千冬さんの声すら届かなくなる可能性がある。

「……………シン」

「……………鎮まれ……………」

「……………」

一夏は大きく深呼吸し、右手で顔を覆うように撫でた。

そして、数秒。

「……………ああ。悪い、心配かけた。もう大丈夫だよ」

そうして再び現れた一夏の顔は、まだ多少固くはあったが、いつも通りと言えるものだった。

「……また貴様か。ふん、そんな変態どもの造った玩具で、私の前に立ちふさがるとはな」

「……………」

すまんが、挑発合戦をしようというのなら辞退させてもらう。結果はお前の不戦勝で構わん。

しかしそこで、ラウラは己の左腕を見た。

「……そうか、貴様が……」

「……………」

そう呟いたラウラの眼には、羨望や嫉妬など、様々な感情が複雑に入り乱れている。

一応己もあの事件の関係者であるから、ラウラが己を知っているも不思議ではないが、それだけにしては随分と感情が込められた眼だ。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

しばらく睨み合いを続けていたが、騒ぎを聞きつけてやってきたのか、アリーナのスピーカーから担当の教師の声が響く。

「……ふん。今日は引こう」

「……………」

己に対し一体何を思ったのか、ラウラはあっさりと言闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。正直、助かった。今の己では、ラウラを相手に勝てるかは分からない。

「い……いち、か……？」

「うん？」

先ほどの一夏の様子を思い浮かべているのか、怯えたように箒が声をかける。

「だ、大丈夫か……？」

「……ああ、大丈夫だよ」

そんな箒の様子に、一夏も自分が殺気を撒き散らしていたことを思い出したようで、声に罪悪感を滲ませながら返事をする。

「……今日はもうあがるか。アリーナももう閉まる時間だし」

「……そうだな」

「シャル、銃サンキュ。色々と参考になった」

「あ、うん……」

シャルもいつもと違い、返事に快活さが無い。セシリアも、一夏を見る眼に怯えが混じっている。

鈴だけは、事件後暫くの間の一夏の様子を知っているからか、それほど動揺してはいなかった。

「あー……じゃあ俺、先にあがるわ。みんな、付き合ってくれてありがとうとな」

皆の様子の原因が自分であることが分かっているのだろう、一夏は出来るだけ平静を装いながら、アリーナから去っていった。

そして。

「……シン？」

「どういうことですか？」

「一夏の様子、ただ事ではなかったぞ」

「……」

気になるのは当然だ。あの状態の一夏は、普段とはあまりにかけ離れ過ぎている。

「……あたしが説明するわ」

「……鈴……」

「アンタが自分だけが関係していることじゃないからって、話しながらないのは分かっているわよ。けどそれじゃみんな納得しないわ」

「……」

確かに、鈴の言うことももつともだ。ならば口下手な己よりも、鈴が話したほうがよからう。

「……すまん……」

「いいわよ別に。……友達、でしょ」

「……」

そう言ってもらえると、助かる。

「凰さんは知ってるの？」

「まあね。何度か見たことあるし」

「被害者ではなく加害者だった……一夏さんは、そうおっしやってみしたわね？」

「……どうということなんだ？」

「順を追って説明するわね。第二回モンド・グロツソの決勝当日のことなんだけど、一夏、誘拐されたの」

「な……!?!」

「誘拐!?!」

「そしてそれを、決勝を放り出して駆け付けた千冬さんが助け出した」

「……あの決勝辞退の裏に、そんな事情があったんだね」

「けれど確かにそれなら、詳細が明かされないのも納得ですわ」

「ああ。モンド・グロツソ決勝進出者の身内が誘拐され、そのせいで決勝を棄権したなどと知られれば、開催国であるドイツは世界中から責められる」

「……」

そう、あの事件のことは一般には公開されていない。ただ千冬さんが決勝を棄権したという事実だけが知られている。

そして、当然——その時、己がその場に居たことも、知られてはいない。

「けど実は、千冬さんよりも先に、一夏を助けに行った人がいたの」

「……まさか、それって……?」

「そう、そのまさかよ。一夏と一緒にモンド・グロツソの観戦に行つたシンが事件に気付いて、すぐに一夏を助けに行った。……そして、誘拐犯たちと戦つて、左腕を失つた」

「「……」」

己の左腕は、事故で失つたことになっている。真相を知っているのはドイツ軍関係者を除けば、織斑姉弟、鈴と弾、そして孤児院の者たちだけだ。

「……一夏がシンに左腕に対してどう思ってるか、知ってるでしょ?」

「「……」」

クラス代表決定戦の折、堂々と語られた一夏の決意。あの時のこと

は学園内では有名であり、後に転入して来た鈴やシャルもすぐを知る
こととなった。

「今ではあんなんだけど、最初はひどかったのよ。……シンのこと「腕な
し女」って言ったヤツに、大怪我させるとこだったんだから」

その時は、己が相手を庇う形で割って入りどうにか止めた。

……さもなくば、大怪我どころでは済まなかっただろう。

「それからよ、一夏が強くなることにこだわり出したのは。……ポー
デヴィツヒが一夏に色々言ってたけど、あんなのは一夏にとって、言
われるまでもないことなのよ」

「「……………」」

最愛の姉の経歴に傷を付け、幼なじみに取り返しをつかない怪我を
負わせた。そんな自分に対する憎悪こそが、一夏の原動力となっている。
る。

そしてラウラは、千冬さんの決勝辞退についてしか触れなかった。
それが、一夏には己の左腕を蔑ろにされたように感じられたのだら
う。

鈴が言ったように、一夏は己が左腕を失ってから暫くの間、己に悪
口を言った者に対して何度か暴力事件を起こしかけ、そのたびに己や
鈴、弾に止められていた。最近ではそれも収まり、安心していただけ
が、どうやらまだ続いていたようだ。

一夏はまだ子供だ。それがこれほどまでに強く自らを憎んでいて
は、心に大きな歪みを抱えることになってしまいうだろう。

そのことが、永らく不安だった。しかし――

「だけどもあ、心配しなくても大丈夫でしょ。一夏は頑張って立ち直
ろうとしてるし、その成果も出てるし。以前だったら、シンが止める
間もなく殴りかかってたわよ。それに、誰にだって触れて欲しくない
ことくらいあるでしょ？ それをああも遠慮なくつつかれたら、誰
だってキレルわよ。別におかしなことじゃないわ。

……だから、心配しなくても大丈夫よ。一夏は、バカで鈍感で唐変
木で朴念仁な、みんなが知ってるようなヤツだからさ」

「べ、別に心配などしていない！」

「そ、そうですね！ わたくしは一夏さんのことを信じていますもの！」

「うん。さっきの一夏は、ちょっと怖かったけど……誰かのためにあんなに怒れるってことは、優しいって証拠だよな」

「……………」

もう、心配はいるまい。一夏はこんなにも、仲間にも恵まれているのだから。

「ま、あたしが知ってるのはこんなところよ。もっと詳しいことが知りたければ、シンか、それか千冬さんにでも訊くことね」

「……いや、十分だ。お前にとってもいい思い出ではないだろうに、話してくれてありがとう、鈴」

「ありがとうございます、鈴さん。……一夏さんの決意には、そのような事情があつたのですね」

「そっか……。だから一夏は、あんなに「強い」んだね……」

『痛みが人を強くする。傷が人を成長させる。大人の役目は、子供が傷付かないように守ることじゃない。』

傷付いた子供が、もう一度立ち上がれるように。真っ直ぐに歩けるように。痛みを、「強さ」と「優しさ」に換えられるように。

そつと、支えてあげることだよ』

唐沢さんが、千冬さんに語った言葉。罪を背負い、自らを罰するよ
うに過酷な鍛錬を続ける一夏を見ていられず、姉として一夏にしてや
れることを見失ってしまった彼女の、導しんとなつた言葉。

そして傷付いた子供を支えるのは、同じ子供でもいい筈だ。

——子供たちが、支え合うのも、いい筈だ。

「じゃあ、あたしたちもあがりますか」

「そうだな。早く汗を流したい」

「それでは、デユノアさん。わたくしたちはこれで失礼しますわ」

「あ、うん。じゃあね、オルコットさん。お疲れ様」

「……………」

そうして、己たちも解散する。男のフリをしているシャルだけ男子

更衣室に向かい、他は女子更衣室へ。

シャルの背中から、少々寂しそうな雰囲気を感じる。

……いつか、彼女が正体を隠す必要がなくなることを願う。彼女もまた、一夏や己の、仲間なのだから。

『強さとは、戦闘力のことではない。いくら戦闘力が高くとも、それだけでは真に強いとは言えん』

——なぜですか。いかなる敵をも打ち倒す力。それこそが強さではないのですか。

『そんなものは強さの一つにすぎん。本当の強さとはそんなものではないし、答えが一つということもない』

——では、教官は？ ブリュンヒルデである貴女こそが、世界最強なのではないのですか？

『戦闘力では、そうかもしれん。だが、私よりも強い者はいくらでもない』

——理解できません。

『認めたくないだけだろう。……そうだな、一つ話をしてやろう。私よりも強い人間の話をな』

——本当に、そのような者が……？

『そいつは年端も行かない少女だった。……ふむ、考えてみれば、お前とも同い年だな』

——そんな子供が、教官よりも強いと？

『ああ。以前から強いとは思っていたが、想像を超えていた。……そいつはその時、瀕死の重傷を負っていた。左腕を失っていて、ISどころか武器もなく、血を流し過ぎて目もまともに見えてなかっただろう』

——そんな状態の者が、強いと？

『ああ、強かった。もつとも、戦闘力という点では話にならん。その時私は暮桜を展開していたし、そもそもそいつは放っておけば確実に死

ぬ状態だった』

——ではなぜ、その者が強いと？

『簡単だ。気圧されたのさ、私が。こいつには絶対に勝てないと、理屈なんぞ完全に無視して、魂に思い知らされた』

——そんな、教官が……？

『そうだ。無論、そんなものは錯覚だ。事実あいつは、私が敵ではないと分かった途端に意識を失ったしな』

——理解できません。それではやはり、教官こそが最強ではありませんか。

『わからないか？ 勝負にならなかったんだよ。私が怖じ気づいているうちに、時間切れになっただけ——引き分けた。戦闘力では比較にもならない状態で、引き分けに持ち込んだ。なら、戦闘力以外の「強さ」が、あいつにはあったということだ』

——……理解……できません。

『そのうち分かるようになる。その時は、お前も「強く」なっているかもしれない』

——一つだけ、教えてください。

『なんだ？』

——その、教官よりも強いという者は何者なのですか？

『弟の幼なじみでな。度を超して無口な、変わったヤツだが、私は気に入っている。』

名前は——』

「井上、真改」

敬愛する教官が、ドイツ軍を去る直前の夢。

夢を見るなどあまりにも久しぶりだったので、目が覚めた瞬間、その時に聞いた名を、呟いた。

「……あの女が」

教官の経歴に傷を付けた男、織斑一夏のことばかりに意識がいつ

て、忘れていた。

あの女は確かに教官から聞いた名であり、左腕がなかった。間違はなく、教官の言う、教官よりも強い者なのだろう。

「……………」

しかし、どうしても理解できない。あの女の戦闘記録を見たが、見るべきものは接近戦の技術くらいで、とても教官よりも強いとは思えない。私でも勝てるだろう。

——なのに。

「……………何故だ」

あの女のことを話す時、教官が浮かべていた顔。弟の話をする時に似た顔。

——私は、教官にそんな顔を向けられたことはない。

「……………何故、貴様が……………」

織斑一夏を排除する。しかしその前に、あの女が立ちふさがるだろう。

——むしろ、好都合だ。

「……………認めん」

教官は、あの女が自分より強いと言った。

そんな筈はない。教官は世界最強であり、絶対の力を持つ、完全な存在なのだから。

「私は……………認めんぞ」

だから、貴様の「強さ」とやら、この私に示して見せろ。

もしその「強さ」が、教官を誑かす偽物であるのなら、その時は――

「井上、真改——！」

織斑一夏共々、貴様を排除する――

第18話 憎悪

それは、ある月曜日の朝のことだった。

「なっ……!?!? そ、そんなことが……!?!?」

「ほ、本当なの、その話?!」

「本当だってば! 知らないの? この噂、学園中で持ちきりなんだよ? 学年別トーナメントで優勝したら、織斑君と交際できるんだって!!」

「……………ごくり」

鈴とセシリアが息を飲む。

そう、己も今日初めて知ったのだが、現在IS学園内には、まったくの意味不明な噂が流れている。

曰わく、『学年別トーナメント優勝者は、織斑一夏と交際できる』

「……………」

思わず箒を覗む。

先日、一夏に交際を申し込んだと言っていたが、確かその時、学年別トーナメントに優勝したら返事をしてもらおうと言わなかったか?

「……………何故……………」

「……………いや、その……………そういえば、ちょっと声が大きすぎたような……………」

何を他人事のように言っている。完全にお前の失敗だろう。

……………しかしそうなると、今になってひとつの不安が首をもたげてきた。

「……………文言……………」

「え?」

「……………なんと言った……………?」

「あ、ああ。ええと……………『来月の学年別トーナメントに私が優勝したら……………』」

「……………」

「……………付き合ってもらおう……………」

.....。

.....。

.....。

.....。

.....真剣に、目眩がした。

「.....恐らく.....」

「え?」

「.....通じていない.....」

「.....はあっ!」

ガタツと箒が立ち上がる。

「ど、どういうことだ!」

「.....落ち着け.....」

「.....あ」

教室中の視線が箒に向く。

一夏と交際できるかもしれないという話があがっているところで
大声など出せば、注目を集めるのは当然と言える。

——特に。

「.....箒?」

「.....箒さん?」

「ハッ!? いや、いや、なんでもないぞ!」

この二人は食いつくだろう。もはや箒の弁明などなんの意味もな
い。

二人は獲物を狙う猛禽のような気配を発しながら(おかげで他の女
子たちは怯えて近付いて来なかったが)箒に詰め寄った。

「どういうことか——」

「——説明してくださいさる?」

「あ、いや、その、えっと、.....し、しんか——つていない!」

む? 呆れのあまり、無意識の内に着席していたらしい。

まあ問題あるまい、鈴とセシリアなら分かるだろう。というか何故
箒が分からなかったのかが分からないくらいだ。

「さーあ、教えてもらおうかしらあ?」

「この噂の、真実を——」

「ひい……!?!」

——数分後。

「ふうん、そういうこと……」

「ふ、ふふふ……箒さん？ 抜け駆けとは、いい度胸ですわね？」

「……………」

洗いざらい吐かされた箒が燃え尽きている。こんな時ばかり凄まじい連携を発揮する鈴とセシリアであった。

「けど、それじゃあダメなんじゃないかなあ……」

「…………え？」

「そうですわね。なにせ相手は一夏さんですし……」

「…………ど、どういうことだ？」

まだ分からないのか。さては箒、告白に意識が向きすぎて、一夏の朴念神ぶりを忘れているのか？

「だって、一夏よ？」

『付き合え』と言われても……せいぜいデートくらいにしか思わないのでは？

「…………あ」

ようやく気付いたか。

そう、二人の言う通り、一夏に「付き合え」と言ったところで、それが男女の交際を求めるものとは考えまい。

……正直、逢い引きと思うかも怪しいものだ。そして仮に逢い引きと認識したとしても、そこから交際まで繋げるのは不可能に近い。

「けれど、つまりは——」

「学年別トーナメントで優勝すれば、一夏さんとデートできる、ということですよわね？」

「うう……何故こんなことに……」

「…………迂闊…………」

そしてこの会話は瞬く間に学園中に広がり、噂を書き換えた。

曰わく、『学年別トーナメント優勝者は、織斑一夏とデートできる』と。

己が筈の訓練を手伝う理由が消えた瞬間であった。

「いい加減、男子トイレを用意してくれないかな……」

IS学園は広い。そりやもう広い。なのに男子トイレは学園内に三カ所しかない。

理由は簡単、IS学園は女子校だからである。教師陣まで女性で固めてあるのだ。ここに居る男は、俺を除けば用務員のおじさんたちくらい。

だから俺がトイレに行くときは、行きも帰りも全力疾走しなければ休み時間中に教室に戻れないのだ。

しかし俺はまだいい方だ。シャルなんて本当は女の子なのに、男子トイレに駆け込まなければならぬのだから。

(……連れション行こうぜとか言わなくて本当に良かった……)

自らの自制心を誉め称えながら、尚も走る。

「先生は……いないな」

先日、ある先生から「廊下を走るな!」とお叱りを受けたので、見つかからないように周囲を警戒しながら走る。気分は忍者、もしくはスネー——

「なぜですか、教官!」

「……やれやれ」

ふと、曲がり角の先から声が聞こえた。

足を止めてこっさり近づき、耳を澄ませる。その声がこうも気になった理由はただ一つ。

聞こえてきたのが、ラウラと千冬姉の声だったからだ。

「なぜ、だど? 決まっている、私はここの教師だ。生徒の成長を支え、見届けるのが教師の仕事だ」

「ここの者たちのどこに、そんな価値があると言うのですか?!? 力の象徴、世界のパワーバランスそのものであるISを、まるでファッションかなにかのように……そんな程度の低い者たちのために、あな

たの時間を使うなど……！」

……驚いた。あのラウラが、こうまで声を荒げている。

そしてそれは、ラウラが心から千冬姉に憧れていることを意味していた。

ラウラが、千冬姉が俺を助けるために第二回モンド・グロツソ決勝を辞退したことについてあんなに怒っていたのは、千冬姉への想いがそれだけ強いからだ。

(くそっ……俺のせいだよ)

そう、これは、ラウラの怒りは、俺の責任だ。

あの時、俺さえいなければ。

誰も、何も失うことはなかった。

シンだけじゃない。千冬姉も、俺のために多くのものを犠牲にしてきた。

(……怒って、当然だよな)

そして、俺には言い訳のしようもない。ラウラが俺を断罪しようというのなら、甘んじて受け入れただろう。

——以前なら。

(……けど、お前には悪いが、譲れないんだよ)

目標が出来たのだ。

俺の生涯を掛けてでも、叶えたい夢が。

『助けられた命は、失われたもののために使うべきじゃない。遺ったもののために生きるべきだ』

そう言ってくれた人がいたのだ。

だから、もう逃げない。

「そしてあの、井上真改という女……やはり、私には理解できません。あのような者が、教官よりも強いなどと」

(……千冬姉より強い？ シンが?)

どういうことだ？ ラウラが千冬姉以外の誰かを認めるとは思えないし、ラウラにそんなことを言う人がいるとも思えないし……だとすると、千冬姉が、そう言ったのか？

千冬姉がシンの実力を認めていることは知っていたが、まさか自分

よりも強いとまで言っていたとは。確かまだ、シンが千冬姉に勝ったことはなかったと思うが。

「ほう？ あいつと戦ったのか？」

「いえ、対峙しただけです。しかしあの女には、教官ほどの威圧感はありませんでした」

ラウラの言葉を聞き、千冬姉がくつくつと笑う。

「それはお前があしらわれたただけだ。あいつはあれで孤児院の年長者だからな。ガキの扱いには慣れている」

「な……!？」

千冬姉の言葉にラウラが絶句する。

「ああ、一応言っておくが、年齢のことではないぞ。今のお前の様は、まるきりガキのヒステリーだと言ってるんだ」

「……っ！」

嘲笑うように言う千冬姉。

千冬姉とシンは仲が良い。二人とも黒髪黒眼で鋭い目つきに長身と容姿の共通点も多く、それこそ姉妹のようと言われたほどだ。

そのシンに対するラウラの物言いに、怒りを覚えたのかもしれない。

「私は……認めません」

「好きにしろ。さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……」

ぱつと声色をいつもの調子に戻した千冬姉に急かされて、ラウラが早足に去って行く。

……と思つたら、なんだかジロリと睨まれたような気配が。

「盗み聞きとは、また特殊な性癖を持っているな」

「ちよ!? よりによつてそりやないだろ千冬ね——」

ばしーん!

「織斑先生だ」

「……はい……」

これはひどい。弟の頭を叩くだなんて、姉のやることか。妹分のことは叩かないクセに。

ばしんばしんばしーん！

「ふむ、弟の頭は実に叩きやすいな。お前もそう思うだろう？ 織斑」

「……………はい」

「……………井上には黙っておけよ」

それは多分、千冬姉がシンを自分よりも強いと言った（らしい）ことだろう。

元世界最強の意地か？

「いや。……………姉貴分の意地さ」

「……………」

愛されてるなあ、シン。

「さて、早く行け。もう授業が始まるぞ」

「わかってるって……………」

「遅刻するなよ」

ニヤリと笑いながら言う。その声は「織斑先生」のものではなく、

「千冬姉」の時の声だった。

「じゃあ、教室に戻ります」

「おう、急げよ。せいぜいバレないように走れ」

「了解」

そうしてまた、教室に向かってダッシュする。

——その、後ろで。

「……………姉貴分、か。よくもまあ、抜け抜けと」

千冬姉の、苦々しい声が、聞こえた気がした。

「あ」

「あ」

「……………」

放課後、もう箒と訓練する必要もなくなったのでセシリアとアリーナに来たところ、鈴と出くわした。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓

するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

「……………」

バチバチと火花を散らす二人。

繰り広げられる女の戦い。

争いとはいついかなる時も醜いものである。

「ちようどいい機会だし、どっちが上かはつきりさせとくつてのも悪くないわね。こないだは決着つかなかったし」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではつきりさせようではありませんか」

「ふ、ふふふふ」

「ふふふ、ふふ、ふふふふふ」

「うふふふふふふふふふふふふふふ」

「……………」

不気味な笑い声をあげながら対峙する二人。

鈴が双天牙月を、セシリアがスターライトmkⅢを展開し、構える。

……強さはともかく、優雅さについては最下位決定戦になりそうである。

——と、そこへ。

「……………」

ヴオンツッ!

「シンっ!」

「真改さんっ!」

突如飛来した超音速の砲弾を斬り捨てる。

弾道を辿ると——否、そんなことをするまでもなく、そこにいるのが誰であるかは分かっている。

漆黒の装甲、ドイツ製第三世代型IS〔シユヴァルツエア・レーゲン〕、登録操縦者——

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……………」

怒りの滲んだ、セシリアの声。そして己を庇うように、鈴が前に出る。

「……………どういうつもり？ いきなりぶつ放すなんて」

とん、と連結した双天牙月を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へ移行させる。その顔は、獰猛に歪んでいた。

「それも、あたしの友達に向かってなんて。……………八つ裂きにされても、文句はないわよね？」

「ちよつと鈴さん、なにをおっしゃってますの？ それはわたくしの役目ですわよ？」

「中国の〔甲龍〕にイギリスの〔ブルー・ティアーズ〕か。……………ふん、今は貴様たちに用はない」

「二なんですって……………？」

「井上真改」

いきり立つ二人を無視し、ラウラは己を睨みつけた。

「私と戦え」

「……………」

敵意、憎悪、嫉妬……………その眼差しには、様々な負の感情が込められている。

……………こんな眼は、久しく向けられていなかったな。

「貴様の力とやら、私に示してみせろ」

「……………」

さて。何があつたのかは見当もつかんが、ラウラはかなり機嫌が悪いようだ。幼いながらも整った顔立ちが、いつも以上の冷気を放っている。

「さあ、私と戦え、井上真改……………」

「……………断る……………」

しかしラウラには悪いが、己はラウラと戦うつもりはない。

「……………何故だ」

「……………無益……………」

怒りに任せた今のラウラと戦ったところで、得るものは何もない。なにより、それは己の役目ではない。

「貴様……………」

「そんなに戦いたいなら、あたしが相手してあげるわよ？」

「真改さんの手を煩わせるまでもありませんわ」
「……………」

尚も闘志を滾らせるラウラの前に、鈴とセシリアが立ちふさがる。
……気持ちはありがたいのだが。

「……退け……………」

「……シン……………」

「真改さん……………」

「……無用……………」

今は退いてくれ。それは、お前たちの役目でもないんだ。

「どういうつもりだ。戦う気になったか？」

「……否……………」

「……ふん。専用機を与えられたと聞いていたからどれほどの実力者かと思えば、とんだ臆病者だな」

「……………」

「そんな様で、その機体、どうやって手に入れた？ 体でも使ったか？」

……ああ、その左腕は、如月の変態どもが好みそうだな」

「……それ以上は、本当に——」

「——ブチ殺すわよ？」

二人から濃密な殺気が放たれる。しかしラウラはまるで気にした様子はない。嘲りの笑みを浮かべ、尚も言葉を続ける。

「よかったな？ 傷物に欲情する物好きがいて。専用機が手に入り、体も慰められる。一石二鳥だな？」

「……ああ、もういいわ、アンタ」

「そんな汚らわしい言葉を吐き出す口は、引き千切ってさしあげましょう」

「……………」

完全に戦闘態勢に入った二人の前に出て、右腕と月輪で押しとどめる。

「……退け……………」

「……っ！ ちよつと、シン!?!」

「あそこまで言われて、黙っていろと!?!」

「退け」

力を込めて、強く言う。

己の言葉に、二人が俯く。その肩は怒りに震えており、歯を噛み締める音が、大きく響いた。

「……ああ、もう……！ アンタって子はっ……!!」

「真改さん、わたくしはっ……!!」

己の様子に、納得行かないながらも退がってくれた。

——その目尻に浮かんだ涙が、不謹慎にも、嬉しかった。

「……すまん……」

「謝るなっ！ ぶん殴るわよ!?!」

「……ありがとう……」

「そんな言葉が欲しいわけではありませんわ……!!」

「……」

「ふん……とんだ茶番だな。そうやっていれば誤魔化せるとでも思っているのか？ 卑怯者が」

ラウラがそう言うと、シュヴァルツエア・レーゲンのレールカノンが己を狙った。

——警告。ロックオンを確認。

「なら、そのまま消えろ」

「……」

至近距離からの発砲。並のISならば一撃で墜とすほどの砲弾を、再び月光で切り払う。

「ふん、剣だけは達者だな。ならば——」

三度装填される砲弾。己は月光を構え——ようとして、身体が動かないことに気付いた。

「……!?!」

「所詮は近接戦闘特化機。教官ほどの実力があるならばともかく、このシュヴァルツエア・レーゲンの敵ではない」

——解析完了。第三世代型兵器、アクティブ・イナードシヤル・キャンセラ A I C と判明。対象

の慣性を停止させ、動きを封じる特殊兵装——

見れば、ラウラは己に向けて右手を突き出している。これにより、

A I Cとやらが発動しているのだろう。

「貴様など、この停止結界の前には無力だ」

ガコン、と、レールカノンの装填音が響く。

——その音に、水月の装填音が重なっていることに、ラウラは気付いていないようだった。

「消えろ」

「……………」

ゴウンツ!!

重々しい炸裂音。水月の特殊カートリッジが火を噴き、朧月に馬鹿げた運動エネルギーを与えた音だ。

「なにっ……………!?!」

A I C——ラウラ曰わく停止結界は、確かに強力な兵器だが、何事にも限界はある。I S自体を弾丸並に加速させる水月を抑え切れるほどの出力はないようだった。もつとも、己の身体にもかなり負担が掛かるので、無駄というわけでもないが。

停止結界の束縛を引き千切り、発射された砲弾を姿勢を下げた回避、ラウラに肉迫する。

「おのれっ!」

シユヴァルツェア・レーゲンの両腕に取り付けられた袖のようなパーツから、高熱のプラズマ刃が伸びる。

接近戦用の武装。それを、ジャブのように鋭く突き出して来た。

「……………」

月輪を起動し、素早く横に回避。するとプラズマ刃の間合いから逃れた己に向け、鋭い刃が付いたワイヤーが射出された。

その数、六。

「逃がさんっ!」

「……………」

複雑な機動を描いて己を囲うそれを、月輪により高速回転しつつ月光で切り払った。

「貴様あつ……………!」

勢いそのまま距離をとり対峙した己を、射殺すかのように睨み付ける

ラウラ。

朧月の主武装が月光であることは誰が見てもわかる。その月光が届かぬ距離まで自ら離れた己の意図を、正確に読み取ったようだった。

「どうあっても戦わないつもりかっ！」

「……応……」

己の返事に表情を怒りに歪ませ、殺意を剥き出しにし、ラウラが突撃してくる。

「消えろ……消えろ、消えろおおっ!!」

何がそこまでラウラを駆り立てるのか。

それが分からないままに、己はラウラの猛攻を凌ぎ続けた。

「一夏、今日も放課後は訓練だよな?」

「ああ、もちろんだ。……ええつと、今日開いてるのは——」

「第三アリーナだ」

「うわあっ!?!」

廊下をシャルと並んで歩いてるところにいきなり予想外の声が飛び込んできて、俺たちは揃って声を上げた。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

声の発信元は、いつの間にか横に並んでいた筈だった。声色通り不機嫌そうな顔で、俺たちを睨んでいる。

「お、おう、すまん」

「ご、ごめんなさい。居るって気づかなくて……」

「あ、いや、別に責めているわけではないのだが……」

折り目正しくペコりと頭を下げるシャルに、さすがの筈も氣勢を削がれてしまったようだ。咳払いを一つして、表情を少しだけ和らげた。

「ごほん。ともかく、だ。第三アリーナへ行くぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている、空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう」

おお、それはいいことを聞いた。やっぱり模擬戦は実戦に近い経験値が得られるからな。

……けどなんだ？　なんかさつきから廊下が慌ただしくないか？　駆け足してる子も多い。

それも、アリーナに近づくにつれて騒がしさが増している気がする。

「なんなんだ？　いったい」

「アリーナで何かあったのかな？　先に様子を見ていく？　観客席ならすぐに行けるけど」

「……そうだな、入っていきなり揉め事に巻き込まれでもしたらかわないし」

「ふむ。この音、どうやら誰かが模擬戦をしているようだな。しかしそれだけにしては随分——」

ヴオンツ！

「あの光は……！」

「月光!？」

「真改か！」

そう、アリーナで戦っていたのはシンだった。そして、その相手は

「何故だ、何故貴様が——！」

「ラウラ!？」

あの漆黒の装甲、長い銀髪、左目を覆う眼帯……見間違えようがない、俺とシンを敵視している転校生、ラウラ・ボーディヴィツヒだ。

しかし様子がおかしい。いつもの氷のような鉄面皮からは想像もつかないほどに、怒りを顕わにしている。

「認めん、認めんぞ、井上真改っ！」

「……っ！」

対するシンは、よく見れば戦っていない。ただ只管、ラウラの攻撃を避け続けている。

「はあああっ！」

ラウラが操るIS、シュヴァルツエア・レーゲンから、ワイヤー状

のブレードが射出される。

複雑に動き回りながら迫るそれを、月輪による変則的な機動で回避。

大型のレールカノンのシリンドーが回転し、砲弾が連射される。

最短距離を正確に、超音速で飛来するそれを、月光から伸びる紫色の光の剣で切り捨てる。

ラウラが右手をシンに向ける。

それが何を意味するのかわからないが、シンは水月と月輪を使い、何かを避けるように高速機動を行った。

「すごい……！」

鈴やセシリアと較べても凄まじい猛攻を、シンは全て避け切っていた。機動力に長けているが扱い難い朧月を縦横無尽に操って、アリーナの中を逃げ続けている。

日頃の訓練の成果を遺憾なく発揮しつつ、しかし決して攻撃を仕掛けようとしない。その素振りすら見せない。

「何故だ！ 何故戦わないっ!!」

そんなシンの様子にラウラは益々怒りを強め、攻撃も激しさを増していく。

「……無益……！」

「益はなくとも意味はあるっ!!」

「……不詳……！」

「貴様が知る必要はないっ!!」

しかし一向にシンを捉えられないことに業を煮やしたのか、ラウラの攻撃が次第に荒くなっていく。精度が落ち、シンの回避にも余裕が出てきた。

よし、これなら——!?

「危ないっ！」

「きゃあっ！」

「……っ！」

狙いを外したレールカノンの砲弾が、まだアリーナ内に残っていた女子に迫る。シンは水月を起動、ギリギリその女子の前に立ちふさ

がって、砲弾を切り捨てた。

アリーナ内にはISを装着している者しかいないが、それでもあのレールカノンの威力は危険だ。一撃で撃墜される可能性もあるし、それでラウラが戦闘を止める保障はない。他人が巻き込まれるのを好まないシンにとっては、当然の判断だろう。

——それを見て、ラウラがニヤリと笑った。

「これで——！」

「ええっ!? わああっ!?!」

不運にもラウラの近くにいた女子にワイヤーを伸ばし、絡める。そしてそれを、振り子のように勢いを付け——

「——どうだっ!」

「うわああああっ!」

「……!」

シン目掛けて、投げ飛ばした。

さらにはその女子にレールカノンに向け、躊躇うことなく発射。シンは投げられた女子を抱えるようにして受け止めつつ、砲弾を月光で切り払う。

そして。

「——捉えた」

「……っ!!」

ラウラが右手をかざすと、シンの動きが止まる。

何が起きたのかは分からない。分かったのは、ラウラがシンに何かをしたということ。

そして——

——抱えられた女子ごと、シンを撃ち抜こうとしているということだけだった。

「——おおおっ!!」

俺の中で、ナニカが切れた。

白式を展開、同時に零落白夜と瞬時加速を発動、アリーナを覆う遮断シールドを切り開き、中に飛び込む。

未だかつてない速さで行われた一連の動き。
だが間に合わない。

レールカノンの砲弾が装填され、しかしまだシンは動くことが出来ず、ラウラが口元を歪ませ――

――世界が停止した。

無論、そんなものは錯覚だ。止まったのは世界ではなく、俺とラウラだった。

では何故、俺とラウラは止まったのか？

簡単だ。さつきまで逃げ続けていたシンから、一瞬、心臓がその鼓動を停止するほどに、凶悪な殺気が放たれたからだ――

「――あ――」

「そこまでっ!!」

アリーナ内に、聞き慣れた声が響く。千冬姉だ。

同時にシンの殺気が初めからなかったかのように霧散し、俺とラウラの硬直が解けた。

「ガキの喧嘩と思って黙って見ていたが、第三者を巻き込んだうえ、遮断シールドまで破られては放ってはおけん。決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

呆れているというより、苛立っているような表情の千冬姉の言葉。余波にあてられただけの俺と違い、シンの殺気を直接向けられたラウラはまだ茫然としていたが、千冬姉の言葉で正気に戻った。

「はっ……教官が、そう仰るのなら」

しかしそれもまだ完全ではないようだった。ISを解除したラウラに千冬姉が近づき、見下ろすように尋ねる。

「で？ 理解できたか？」

「……っ！」

いつもなら千冬姉には即答するラウラが、返事を躊躇う。

……なんだ？ なんのことを言ってるんだ？

「ふん。その様子ならば、分かったようだな」

「わ、私は……」

俯くラウラに構わず、千冬姉がアリーナ中に聞こえるように大声で言った。

「そう何度もこんなことをされてはたまらん。学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。分かったな？　では、解散!!」

パンツ！　と千冬姉は強く手を叩き、去っていった。ラウラも、心ここに在らずといった様子で去っていく。

「……そうだ、シン！　大丈夫か!?　その子は!?!」

「……無事……」

ISを解除したシンが、こちらにもISを解除した女の子を下ろしながら答える。

……うん、本当に怪我はないようだ。

「どういうことだよ？　なにがあつたんだ?」

「……」

シンは黙つたままだ。こいつはこうなると、まず何も話さない。

と、そこへ、近付いてくる二人の姿を見つけた。

「アイツ、いきなりケンカふっかけてきたのよ」

「鈴……」

なにやらもの凄く怒ってる鈴とセシリアだ。

「いきなりって……いきなりか？　何も言わずに?」

「色々言っていましたわ。口にするのもおぞましいようなことを」

……気にはなるが、訊かない方が良さそうな気がする。それくらい二人は殺気立っていた。

「真改！　怪我はないか?」

「シン、大丈夫!?!」

「……無事……」

箒とシャルも駆けつけ、シンの無事を確認し、胸をなで下ろした。

「はあく、ありがと、いのっち。助かったよ」

あれ？　なんか聞き慣れた声が?

「って、のほほんさん!?!」

「いや、びつくりしたよ」

「……」

どうやら投げ飛ばされた女子はのほほんさんだったらしい。
……道理で、あの状況でまだあんなどこにいて思ったら。

「むむむく？ おりむー、失礼なこと考えてないく？」

「はっはっは、そんなまさか」

相変わらず見かけや行動のスローっぷりに反して鋭い。油断なら
ない人物なのである。

そんなやり取りをしていると、シンののほほんさんに頭を下げた。

「……すまん……」

「んく？ なにがく？」

いきなりのシンの行動に、さすがののほほんさんも少し戸惑ってい
るようだった。

「……巻き込んだ……」

「……いのつちのせいじゃないよ」

「……………」

「うくん……じゃあ、ケーキセットで許してあげるよ」

「……承知……」

「てひひ、やったあ！ ゴチになりまくす！」

おお、シンの扱いを極めている。マジで油断ならんな、のほほんさ
ん。

「……とにかく、もうあがりましょう。真改さんもお疲れでしょうし」

「そうね。このまま訓練しても荒れそうだわ、あたし」

そして据わった目で言う二人がかなり怖い。

……本当になにがあつたんだ？

アリーナでの騒動から一時間が経った。

訓練もお開きになってしまい、他にやることもなかったので、
ちよつと早い飯にしようということになった。

今はシャルと一緒に食堂に向かっているとところである。

「なんだったんだろうな、さっきの」

「うん……凰さんもオルコットさんも、凄く怒ってたよね」

「……怖くて訊けなかった」

「あれは仕方ないと思うよ……」

あの後、鈴もセシリアも一言も話さずに帰っていった。二ト口並みに危険な状態だったので、誰も声をかけられなかったのだ。

「ラウラかあ……シンとなにがあつたんだかなあ」

「なにかあつたっていうより、ボーデヴィツヒさんが一方的に突っかかっている感じだったけど」

そう、シャルの言う通り、シンはなぜラウラがあんなに怒っているのか分かっていなかった。

多分ラウラは、千冬姉を通してシンを知っていたのだろう。それは休み時間での二人の会話からも伺える。

「……荒れそうだな、学年別トーナメント」

「大荒れになるだろうね。シンもボーデヴィツヒさんも、間違いなく優勝候補だし」

「まあ、俺だつて負ける気はないけど」

そんなことを話しながら歩いていると、なにやら地鳴りが聞こえてきた。

……いや、比喻なんだけど、本当に地鳴りみたいな音だ。

ドドドドドドドドドドツ……!!

「な、なんだ？ なんの音だこれ!？」

「い、一夏っ！ あれ……!？」

シャルが指差す方を見ると、そこにはヌーの大移動みたいな迫力がある女子の大群が。

「な、な、な、なんだなんだ!？」

一瞬で飲み込まれる、もとい取り囲まれる俺とシャル。

そして全方位から一斉に、

「織斑君!」

「デュノア君!」

「は、はい!？」

「私と組んで!」

「……………は？」

いきなりな言葉と状況にビビりまくっている俺たちに、女子一同（百人くらいはいそうだ）が学内の緊急告知文が書かれた申込書を突き出してきた。

「な、なにになに……………」

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは――』

「ああ、そこまででいいから！ と・に・か・くっ！」

ぎざっ！ と一斉に手が伸びてくる。

怖い。マジで怖い。さっきの鈴とセシリアくらい怖い。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デユノア君！」

どうしていきなり学年別トーナメントの仕様変更があったかは分からないが、今こうして取り囲まれている理由はわかった。学園で二人しかいない男子とペアを組むべく、先手必勝とばかりに突撃してきたのだろう。

「え、えっと……………」

しかし、シャルは本当は女の子なのだ。誰かと組めば当然その人と訓練する時間が増えるだろうし、いつどこで正体がバレてしまうとも限らない。

「……………」

ちらりとシャルを見る。彼女は困ったような顔で集まっている女子たちを見回して、そこで俺と目があつた。

「あ……………」

一瞬目を逸らして、けどすぐになにかを決意したような顔をして、それから深呼吸をひとつ。

『……………一夏』

『なんだ？』

シャルからのプライベート・チャンネル。声を出さなくていいので、

内緒話にはぴったりだ。

『また、助けてもらって……いいかな?』

『遠慮すんなよ。……仲間だろ』

『うん。……ありがとう、一夏』

シャルは嬉しそうな笑顔を浮かべてから、みんなに聞こえるように大きな声で言った。

「ごめんなさい。誘ってくれたのは嬉しいです。でも僕は一夏と組むことにするよ」

しーん……。

いきなりの沈黙。シャルがすこし後ずさる。が、

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵にならゲブンゲブン」

とりあえず納得してくれたようだ。……なんか一人眼が怖かったが。

女子たちは各々が仕方ないかと口にしながら去っていく。それからまた改めてペア探しが始まったようで、ばたばたとした喧騒が聞こえてきた。

「ふう……」

「なんとかなったね……」

「よく言えたな、シャル」

「……うん。一夏のおかげだよ」

そう言うてはにかむシャルがとても可愛かったので、俺はつい目を逸らしてしまう。

「? どうしたの?」

「い、いや、なんでもないぞ。ただ、シャルが可愛かったから……」

「……え、ええ!?! か、可愛い? 僕が……? ほ、本当に? ウソついでない?」

「ついてないって。……ていうか、なんでそんなに自信なさげなんだよ」

「え? だ、だって……僕って男口調だし、自分のこと『僕』って言う

し……」

「別にそれは大したことじゃないんじゃないか？ シンや箒も男口調だし、シンに至っては自分のこと『おれ』って言うし」

「え、そうなの？」

「そうなんだよ。滅多に言わないから、あんまり知られてないけどな」
「へえ……けどなんか、シンらしいね」

「だろ？ だからシャルも、口調とかそんなに気にしなくていいんじゃないか？」

「うん……そうだね」

シャルも大分前向きになってきた。それを嬉しく思いながら、再び食堂へと歩き出す。

……けど考えてみれば俺、みんなからは男って思われてるシャルに可愛いとか言ったよな、今。

……廊下に誰もいなくて良かった。

さて、そんなこんなで六月の最後の週。今日から一週間かけて、学年別トーナメントが行われる。

その慌ただしさは俺の予想を遥かに超えていて、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場整理、来賓の誘導を行っていた。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室で着替えながら、モニターに映る観客席の様子を見る。そこには各国政府関係者やら研究所員やら企業エージェントやらが大勢集まっていて、パンフレット片手にあれこれと話をしている。

「三年生にはスカウト、二年生には一年間の成果の確認、それに一年生は、将来有望な人材のチェック。優秀なIS操縦者はどこも喉から手が出るくらい欲しいだろうからね、学年別トーナメントは毎年このくらいの人が見に来るよ」

「ご苦労なこったな」

あんまり興味なかったから話半分で聞いていたので、返事もおざなりだ。観客席に見覚えのある変態が居たので不機嫌になったのも、理由の一つかもしれない。

「……ボーデヴィッツヒさんとの対戦が気になる？」

「まあ、な。ラウラはシンのこと襲いやがったし、俺のことも狙ってるみたいだし」

この先もあんな調子で狙われ続けたら堪ったもんじゃない。早いとこケリをつけたい。

「彼女はおそらく、一年生の中では最強だと思う。必ず勝ち上がってくるよ」

「……シンはどうなんだよ。この間は、一発も食らってなかったろ」

「あれは逃げに徹してたからだよ。あの猛攻を掻い潜って接近するのは、いくらシンでも難しいと思うよ」

冷静なシャルの分析。俺はすぐに熱くなってしまいうタイプなので、相方が優秀なストッパーなのは実に頼もしい。

「……さて、こっちは準備できたぞ」

「僕も大丈夫だよ」

お互いにISスーツへの着替えは済んでいて、ISの最終チェックを終えたところだ。

ちなみにシャルのISスーツは男装用の特別製で、ボディラインの肉付きを男のそれに見せる仕組みらしい。

「……そろそろ、対戦表が決まるころかな」

原因は不明だが、突然のタッグ戦への変更により、今まで使っていた対戦表作成システムが正しく機能しなかったらしい。なので今朝から生徒たちが手作りによる抽選クジで対戦表を作っていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？ どうして？」

「せっかく気合入ってるんだ。この熱が冷めないうちに勝負したいだろ」

「あはは、一夏らしいね」

ペアが決まってから今日まで二人で何度も特訓を重ねてきたこと

で、お互いの性格や考え方はかなり把握出来ている。シャルも、俺の猪武者的などころは分かってくれているようだ。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表に切り替わった。俺とシャルは、そこに表示された対戦相手を確認し――

「……………うそ……………だろ……………?」

「……………そ……………そん、な……………」

――揃って絶句した。

発表されたトーナメント表。

一年の部、Aブロック一回戦一組目。

織斑一夏と、シャルル・デュノアの対戦相手は。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。そして――

――井上真改

第19話 役目（開戦編）

井上真改に戦いを挑んだ日の夜。

私は食堂で夕飯をとっていた。

「……………」
正確には既に食事は終わっている。今はなにも残っていないトレイを、呆と眺めているだけだ。

「……………」
私がここ、I S学園に転入する際には、学園そのものに対する興味は微塵もなかった。

意識が甘く、世界最強の兵器であるI Sをファッションかなにかと勘違いしているような程度の低い者たちに交じって、とうの昔に学び終えた理論を聴く。

それは誇りあるドイツ軍人である私にとって、屈辱でしかない。

「……………」
それでも私がここに来たのは、国からの命令であるからというのは当然だが、もう一つ、私が尊敬する教官が、ここで教師をしているからだ。

「……………」
私はかつては優秀な遺伝子強化試験体であり、しかしある時を境に最底辺まで転げ落ちた末、出来損ないの烙印を押された。

周囲の蔑みの眼。否定された存在意義。このままでは、「処分」される可能性すらある——絶望に捕らわれ、深く暗い闇の底へと沈んで行くだけだった私に、ある日突然、救いの手が差し伸べられた。

それが教官——織斑千冬だった。

「……………」
ずっと闇の中に居続けた私に、初めて光が射した。

彼女の言葉に従うだけで、私は再び部隊最強となった。

もしも神のお告げなんものが実在するとしたら、教官の言葉こそがまさしくそれだった。

「……………」

彼女に憧れた。

その強さに、その姿に、その在り方に憧れた。

彼女のようになりたいと、心から思った。

それが、何もなかった私が、初めて持った望みだった。

「……………」

だから、時間を見つけては話をしに行った。

いや、話など出来なくてもいい。ただ教官の側に居られるだけで、

私には十分だった。

強く、凛々しく、自信に満ちたその姿を見ているだけで、満たされて

いた。

「……………」

世界最強。

あまりにも分かり易く、そして絶対の称号。この世で最も価値のあるもの。

それそのものである教官は、いかなる宝石も、いかなる芸術も、いかなる絶景も及びもつかない、美しい存在だった。

——なのに。

「……………真改……………」

教官が語った、教官よりも強い者。

それは私にとってあまりに荒唐無稽な存在であり、教官の言葉だというのに、信じられなかった。

そんな御伽噺よりも、教官の輝かしい経歴に傷を付け、それでいて教官の優しい笑みを受ける、教官の弟の方が許せなかった。

——なのに。

「……………井上、真改……………」

教官が身を竦ませるほどに恐れたという、その女。

かつて教官から聞いた話をふいに思い出して、その女を実際にこの目で見て、苛立ちが募った。隻腕という障害を負い、ただ黙ってそこに居るだけの、そんな女が、教官よりも強いなどと。

そんなことは有り得ない、有り得る筈がないと、それを証明するために、奴に戦いを挑んだ。しかし奴は戦おうとせず、ただ逃げ回るば

かりで、仮にも教官に認められた者のその無様な姿に、言いようのない怒りを覚えた。

だからあの女を追い詰めた時、暗い愉悅が私の心を満たした。ああ、やはり、教官よりも強い者などいないのだと。

——なのに。

「……井上、真改」

身が竦んだ、どころの話ではない。

心が、魂が凍り付いた。

ただ発射を思考するだけで勝てたというのに、それすらも出来なかった。

どんな兵器よりも強力に、あの女は、私の心臓を撃ち抜いた。

紙切れ一枚も貫けぬ筈の、視線で。

それに乗せた、殺気で。

「井上、真改」

教官は言った。自分が怖じ気づいているうちに時間切れになっただけの、引き分けだったと。

なら、私はどうだ？ もしあの女が、初めから戦いに応じていたら？

決まっている、何もせずに呆けている私を、一刀のもとに斬り伏せていただろう。

——戦いにすら、ならなかっただろう。

「……何故だ……何故、貴様が」

まるで弟の話をしている時のような、教官の顔。ただ一人、教官が認める存在。

何故、貴様なんだ。

何故——私ではなく、貴様なんだ。

何故——！

「井上、真改——！」

「……何用……」

「!？」

突然の声に驚く。

いつの間にかほとんど人がいなくなった食堂の、私が座る席の前、そこに井上真改がいた。

「な、なんだ!？」

「……………」

特に気配を消しているということはないが、全く気づかなかった。私はよほど深く考えに耽っていたらしい。

「な……………何の用だ」

「……………」

今まさに井上のことを考えていたので対応が挙動不審気味になってしまったが、しかし井上は気にした様子もない。

「……………何の用だと訊いている」

「……………」

再度問う私に対し、井上は手に持っていた書類ケースをテーブルに置き、中から一枚の書類を差し出して来た。

「……………なんだ、これは」

「……………通知……………」

言われて、書類を読む。内容を一言で言えば、学年別トーナメントがタツグ戦になったということだ。

だが、そんなことは関係ない。私の専用機、「シユヴァルツエア・レーゲン」は多数を相手取ることを想定して製作されている。相手が二人になったところで、問題はない。

「これがどうした? 何故わざわざ持つてくる?」

「……………」

学年別トーナメントのペアは、締め切りまでに決めなければ抽選になると書いてある。つまり、放っておいてもトーナメントに出場できなくなるようなことはない、ということだ。

わざわざ、それも井上が持つてくるようなものではない。

疑念の込められた私の視線を受け、井上は書類ケースからもう一枚、書類を取り出す。

「……………次はなんだ」

「……………」

井上は答えず、目線を書類に向けるだけだった。仕方なく、その書類の文面を読む。

そこにはこう書いてあった。

『学年別トーナメント参加ペア登録申請書』

「……………」

井上を見る。

「……………」

無言。

もう一度、書類を見る。

その一番下、二人分の署名欄があり、その内の片方が埋まっている。そこに書かれている名前は、当然というべきか、目の前の女のものだった。

「……………どういうつもりだ」

「……………署名……………」

「どういうつもりだと訊いている」

この状況で井上が私に何をしろと言っているのか、分からない者はいまい。

しかし逆に、井上が何故それを求めているのかが分かる者はいないだろう。

「私は貴様を認めない。教官が貴様をなんと言おうと、私は認めん」

「……………」

「教官は私闘を禁ずると言ったが……………要は、戦いでなければいいのだろう。私は貴様を排除する。たとえば、どんな手を使ってでも」

「……………」

それは脅しの言葉。

井上を睨み付け、視線に有りつ丈の殺意を込め、低い声で言う。

しかしその言葉は、井上を前にしては、ひどく軽く響いた。

「私と組むだと？ 正気か貴様？ 訓練中、どんな「事故」が起きるか分からんぞ？」

「……………」

唇の端を吊り上げて言う私に、しかし井上はなんの反応も示さな

い。それどころか、もう一度、こんな言葉を吐いた。

「…………署名…………」

その言葉に、私の堪忍袋の緒が切れた。

「ふぎ…………けるなあっ!!」

バアンツ!

両手で机を叩き、立ち上がる。その音に、食堂に残っていた数少ない生徒たちが驚くが、そんなことはどうでもいい。

「貴様は…………… 貴様はどれだけ、私を侮辱すれば気が済むのだっ!!」

「……………」

そう、これは侮辱だ。

私が何をしようかどうかともなる、私の力では何も出来ない、私如きは取るに足りない存在だと、そう言っているのだ、この女は!!

「力こそが私の全てだ!! 教官の教えを受け、それに従い、そうして手に入れた、この力こそがっ!! 強者たること、それだけが私の存在意義だ!! それを、貴様はっ…………!!」

「……………」

闇の中、ようやく見つけた、一条の光。

絶望の底で差し伸べられた、暖かな手。

何もなかった私が、初めて手に入れた、たったひとつの願い。

——それを、この女は踏みにじった。

「何故だっ!! 何故貴様が教官に認められる!! 何故私ではない!? 貴様の何が、私より優れていると言うのだっ!!」

「……………」

「私と戦え、井上真改!! 証明してやる、貴様の力など、教官の足下にも及ばないと!! 教官こそが最強だどっ!!」

「……………」

そうだ、教官は、私よりも遙かに強い。ならば私が井上を倒せば、教官より強いものなどいなくなる。

——教官こそが世界最強だと、証明できる。

「逃げるなど許さん、貴様の力、私に示してみろ!! その全てを叩き潰してやるっ!!」

——さあ！ 私と戦え、井上、真改——!!」

「……………」

未だかつて感じたことのないほどの激情。
魂の底から湧き上がる怒りを、そのまま音にして吐き出した、純粹な言葉。

それを受け、井上は——

「…………断る…………」

——やはり。戦おうとは、しなかった。

「…………き…………さ、まああつ…………！」

憎しみの限りを込めたつもりだったのに、その声は、まるで泣いているかのようで。

私自信が驚いたその声を聞き、井上はようやく話し出す。

「…………それは…………」

——私と、戦うべきは。

「…………己の役目では、ない…………」

——井上真改ではない、と。

「…………なに…………？」

「……………」

役目？ 役目だと？ そんなものがあるものか。私と、戦う役目など。

「…………一夏…………」

「……………」

「…………あれは、強い…………」

——織斑一夏。私の、最初の標的。

それが、強いだと？ あの、ただ男でISを動かせるというだけで騒がれているだけの者が？

「織斑一夏が強いだと？ ……本気で言っているのか？」

「…………応…………」

そんな世迷い言、信じられる筈がない。だがしかし、続く井上の言葉は、無視出来ないものだった。

「…………己よりも、な…………」

——ドクン。

心臓が、ひとつ大きく鼓動した。

井上は、自分よりも織斑一夏のほうが強いと言った。

そんな言葉は到底信じられない。

信じられないが——

「私と戦う役目が、織斑一夏にあると言うのなら。私が奴に勝てば、貴様は、私と戦うか？」

「……勝てば、な……」

その言葉に、ニヤリと笑う。

言質をとった。ならば後は、織斑一夏を倒すだけだ。

そうすれば、井上は私と戦う。そうすれば、私は証明出来る。

——教官の、力を。

「……その言葉、忘れるな」

「……………」

井上が頷く。

……いいだろう。ならば、私は織斑一夏を排除する。

元々それが目的だったのだ、紆余曲折あったが、結局は最初に戻ったわけだ。

私のやることに、変わりはない。

——しかし。

「何故、私と組む？」

そう、それは私が織斑一夏と戦う理由であって、井上が私と組む理由にはならない。

私と組むということは、井上も織斑一夏と戦うということだ。織斑一夏を守ろうとしていた井上が土壇場で裏切る可能性は、否定できない。

「……己の、役目は……」

井上が、私と組む理由。

井上が、織斑一夏と戦う理由。

それは——

「……一夏が越えるべき、壁だ……」

——織斑一夏の成長の、礎となるためだった。

「……そんなことのために？」

「……………」

私の問いに、頷きもしない。もはや話すことはない、その態度が示していた。

「織斑一夏には、私と戦う役目がある。貴様には、織斑一夏と戦う役目がある。」

しかし織斑一夏と戦う前に私と貴様が戦えば、どちらかの役目が果たされなくなる。だから、私と貴様が組む。

……そういうことか？」

「……………」

肯定はしないが、否定もしない。多少の間違いはあれど、概ね正しい。そんなところだろう。

「……貴様が織斑一夏を倒し、私が倒したのではないから約束は無効だ、などとは言わんだろうな」

「……反故にはせん……」

いいだろう、井上の思惑についてはまだ分からないことはあるが、私のやるべきことは決まった。

織斑一夏を倒す。その後、井上真改を倒す。

そして、教官の最強を証明する。

それだけだ。他のことなど、私には、どうでもいい——

ラウラが書類に署名し、食堂を去って行ったのを確認してから、驚かせてしまった生徒たちに頭を下げ、己も食堂を出る。

と、そこで、聞き慣れた声を掛けられた。

「損な性格をしているな、お前も」

「……………」

壁に寄りかかりながら腕を組んで、呆れたような顔をしている千冬さんだ。

「とりあえず、礼を言う。ラウラがああなってしまったのは、私の責任でもあるからな」

「……無用……」

千冬さんから礼を言われるなど、いつ以来か。妙にくすぐったい。

「私からも、一つ訊きたいのだが」

「……………」

「何故そこまで、あいつに肩入れする？」

「……………」

さて、あいつとはどちらのことか。

ラウラか、それとも一夏か。

「両方だ。そうだな、まずはラウラの方から聞こうか」

「……力だけでは……何も、得られん……」

ラウラは力に取り憑かれている。そしてより大きな力を求めるあまり、他が何も見えなくなっている。

彼女は言った。『強者たることだけが、私の存在意義だ』と。

そんな筈はない。そんな存在を、千冬さんがこれほど気にかける筈がないのだから。

「流石は孤児院の年長者と言ったところか。道に迷っている子供は、放っておけんか」

「……………」

それは買いかぶり過ぎだ。己は見知らぬ他人など、必要ならいくらでも切り捨てる。

……ただラウラの在り方が、昔の自分に重なっただけだ。

「では織斑は？ お前のことだ、まさかあれに惚れているなんてことはないだろう？」

「……………」

ニヤニヤと笑いながら、からかうような口調で言う。

まあ確かに、己が一夏に惚れることなど有り得んだろうが。

「……弟のように、思っている……」

「……………」

千冬さんが、少し驚いたような顔をする。意外だな、とうに気付い

ていると思っていたが。

「……役目を、奪うつもりはない……」

「……当然だ。あれの姉は案外疲れる。私以外に務まるものか」
嬉しそうな、照れくさそうな、千冬さんの声。

この人がいる限り、一夏が道を外れることはあるまい。己は精々、千冬さんの立場上、手の届かない所を補うくらいだ。

「……信じていいんだな」

「……………」

何を、とは問わない。

千冬さんからすれば、己のような訳の分からない者を一夏の側に置いておくのは不安だろう。

一年一組に国家代表候補生が集中していることや、シャルが男装してまで一夏のルームメイトになったことから分かるが、一夏の利用価値は計り知れないのだから。

——だと、言うのに。

「……信じるぞ、井上。何時までもうだうだと悩むのは性に合わん。私はもう、お前を信じることにした」

「……………」

そんなことを言えるこの人は、やはり一夏の姉なのだと思った。

「……ありがとう……」

「礼などいらん。むしろ私が言う側だ。」

……そして、すまない。お前のことは幼い頃から知っていたと言うのに、私はお前を疑っていた」

「……………」

「だが、それももうやめだ。お前は昔から何も変わらん、愚直なままだ。疑う方が馬鹿を見る」

呆れたように言う言葉には、しかし確かに暖かさがあつた。

……それだけで、十分に過ぎる。

「これからも、宜しく頼む。織斑にはお前が必要だ。私にもな」
「……………」

「では、今日はもう休め。放課後の一件で疲れたろう。お前の頑丈さ

は知っているが、無理はするなよ」

「……承知……」

そうして寮に向け歩いて行く。

その、背中に。

「お前が、一夏を弟と思っているように。」

……私もお前のことは、妹のように思っているよ——真改」

「……………」

優しさの中にも、からかいが含まれた声色。本心から言ってくれているのは分かるが、同時に己の反応も楽しもうというのだろう。

……残念だが、そうはいかん。

顔だけ振り向いて、やはりニヤニヤと笑っている千冬さんに言ってやった。

「……おやすみ……千冬姉……」

「……な」

途端、かあつと赤くなる千冬さん。

それを見届けてから、再び歩き出す。

……口元に浮かんでしまった笑みを、見られないうちに。

「一戦目で当たるとはな。これでは井上と組んだ意味がない」

「……………」

「……抽選で決まった、ってわけじゃあ、ないんだな」

「シン……どういうつもりなの？」

アリーナ中央で対峙する四人。

織斑一夏——白式。

シャルル・デュノア——ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ。

ラウラ・ボーデヴィツヒ——シュヴァルツエア・レーゲン。

井上真改——朧月。

全員が専用機持ちということ、この試合の注目度は群を抜いている。

さらに学園の生徒にとっては、学園で二人だけの男子のチーム、そして一夏と真改、有名な幼なじみ同士の対決ということもあり、ほとんどの生徒がこの試合の観戦に駆けつけていた。

かくいう私も、山田君と一緒に観察席からモニターで試合の様子を見ている。

「まさか幼なじみが相手では戦えない、とは言わないだろうな」

「言わねえよ。そりゃショックだけどさ、シンのことだ、何か理由があるんだろ」

「……………」

「僕もシンを信じるよ。友達だからね。……だから、手は抜かない」

開放回線で行われる、四人の会話。

まだ一月も経っていないというのに、デュノアにここまで信頼されるとは、本当に不思議なやつだ。

「どうなりますかね、この試合。ボーデヴィツヒさんと井上さんのペアは、かなりの実力があると思うんですが……」

「ああ、一年では間違いなく最強の二人だ。デュノアがどこまで食い下がるかな」

山田君の言葉に答える。

軍人として極めて高い能力を持ち、ISの操縦にも精通しているラウラ。そして生身では一年どころか学園全体でも最強クラスの戦闘力を持つ真改。

この二人は、他のどのペアと比べても圧倒的だ。

「けど井上さんの月光は、織斑君の零落白夜とは相性が悪いですよね？ 織斑君たちが勝てる可能性もあるんじゃない？……？」

「山田君は、井上を剣士だと思っっているようだな。それは間違いではないが、しかし井上はただの剣士ではない。剣が折れた程度では、あいつの力は微塵も衰えんさ」

「はー……。織斑先生は、随分井上さんのこと評価してるんですね」

「む……まあ、私と互角に戦えるのはあいつくらいだからな」

しまった、話し過ぎた。山田君は最近妙に私をからかってくるので、あまりネタを与えるわけにはいかないというのに。

「んんっ！ とにかく、単純な実力では話にならん。織斑とデユノアがどれだけ連携をとれるかが、勝敗を分けるだろうな」

ラウラの狙いは一夏を倒すことだけだ。真改と協力するつもりは、おそろくないだろう。

「織斑一夏。貴様を排除する。貴様だけは、私の手で倒す」

「悪いが、負けるつもりはないぜ。力じゃかなわないかもしれない。けど足りない力はチームワークで補ってみせる。一人で戦うつもりのお前には負けねえよ。

行くぜ、シン、ラウラ。勝つのは、俺と、シャルだ」

「伝えたいことがあるなら言葉にすればいいって、一夏が教えてくれた。言葉にしなくても伝わることもあるって、シンが教えてくれた。だから僕は、言葉と、行動で伝えるよ。

——絶対に、勝つ」

「……推して参る……」

そして、今。

開戦の狼煙があがる。

試合開始のブザーと同時に、まず動いたのは、織斑一夏と井上真改。互いに瞬時加速を発動、一瞬で間合いを詰める。

「おおおおっ！」

「……っ！」

初撃は互いに居合いの形。左腰にあてた右腕を、横薙に振り抜く。

零落白夜と月光、必殺の威力を持つ二つの刃が噛み合い——その瞬間、月光が消滅する。

（いける！ 月光じゃあ、零落白夜とは打ち合えない！）

零落白夜はあらゆるエネルギーを消滅、無効化する武装である。膨大なエネルギーを刃とする月光にとっては、考え得る最悪の相性といえる。

なにせ近接武器でありながら、敵の刃に触れただけで消えてしまう

のだから。

「はあっ！」

一夏は勢いのままに零落白夜を振り上げ、二撃目を放とうとする。真改の月光は沈黙したまま。零落白夜により刃を失った月光は、再起動までに数秒の時間を要する。

その時間こそが、一夏にとって唯一のアドバンテージである。

——しかしその程度、真改が考えていない筈がない。

ガンツ！

「がはっ……!?!」

「……………」

一夏が剣を振り上げた瞬間、真改はさらに間合いを詰めた。

そのまま一夏にタックルし、腰に右腕を回してしっかりと抱え込む。

そして水月を起動、抱えた一夏ごと、一気に加速する。

ゴウンツ！

「うおおおおっ!?!」

「……………」

爆発的な加速を受け、一夏の体勢が崩れる。真改はさらに月輪を噴かし、その光で螺旋を描きながら尚も加速、アリーナの遮断シールドに向け、錐揉みしながら一夏を投げつける。

「なん……のおお！」

しかし一夏の反応は速かった。投げられた瞬間に瞬時加速を発動、遮断シールドに激突する直前で停止する。

「いきなり伊綱落としかよ……!」

ISの保護機能により、ブラックアウトはどうか防いだ。体勢を立て直そうとする一夏に、真改の追撃が迫る。

再起動した月光を振り上げ、上段からの一撃。

翳した零落白夜で打ち払い、続けて胴を薙ぐ。

真改は素早く後退してそれをかわし月影を起動、散弾の雨を降らせ

——ようとして、突然回避行動をとった。

「させないよー！」

背後から放たれた、シャルロットの六一口径アサルトカノン〔ガラム〕の爆破弾を避ける。

一夏への攻撃を中断し、真改は武装をアサルトライフルに持ち替えたシャルロットと対峙した。

「貴様は私の獲物だ!」

「いいぜ、相手になってやる!」

ラウラはシャルロットを相手にするつもりはないようで、一夏に突撃していく。

一夏の援護に向かったシャルロットと、それを止めようともせずに一夏に執着するラウラ。両チームの連携の差が、すでに大きく現れていた。

「僕が相手になるよ、シン!」

「……来い……!」

友人であり、恩人でもある真改を前に、シャルロットの眼には闘志が漲っている。

その眼を見て、真改もまた、戦いの高揚を感じていた。

(負けないよ、シン! 僕は、戦うって決めたんだから!)

月輪による変則機動を繰り返しながら迫る真改に、アサルトライフルを連射。高い機動力をもつ朧月を牽制しながら、月光の間合いに入れないように下がり続ける。

こうして、試合は早くも、対一の状況が二つ出来上がった。

——それこそが一夏とシャルロットの策であると、誰も気づかぬままに。

第20話 役目（激戦編）

「はあああっー！」

両手に持った六二口径連装ショットガン「レイン・オブ・サタデイ」を連射する。

僕とシンの距離は、この銃の間合いにはまだ遠い。けれど威力が落ちるかわりに、攻撃範囲は広くなる。

機動力と攻撃力を合わせ持つ朧月を近づけるのはまずい。水月と月光で一瞬でやられてしまうかもしれない。だから余裕のある距離から、少しずつシールドエネルギーを削る作戦だ。

——だけど、シンはそれを避け切った。

「ほんと、デタラメだね……！」

「……ッ！」

ショットガンの弾が切れた。一体どうやって見切ったのかはわからないけれど、シンは弾切れと

同時に突撃してきた。

理想的なタイミング。けれどそれは、僕と「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」には通用しない。

「——いらっしやい！」

「……！」

弾が切れた次の瞬間には、僕の両手に握られている武器はマシンガンに替わっている。

ラビット・スイッチ
高速切替。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡの大容量拡張領域を

活かす、僕の得意な技術だ。実弾兵器主体の機体が持つ弱点、ロードの隙は、僕には存在しない。

ガガガガガガッ！

至近距離からのフルオート射撃。いくら機動力があっても、これを避け切ることはできない。

だからシンは、起動した月光の光を盾のように構えて、すべての弾丸を焼き尽くした。

「そんな……!?!」

「……ッ!」

ガコン、と、水月の装填音が聞こえた。

この距離じゃ逃げ切れない。後ろに退がっても、上下左右に避けても、きつとシンは食らい付いてくる。

……なら!

「はあああッ!」

「……!?!」

逃げられないなら、前に出る!

スラスターを全開にして前進しながら、居合いの構えで突っ込んできたシンの右腕に向けて、右足を突き出す。

ガンッ!

「うあ……!」

「ぐっ……!」

ギリギリのタイミングで間に合った。水月の加速を受け止めたことで膝が悲鳴を上げたけど、今はそんなことを気にしてられない。

シンの右腕を抱えこんで拘束し、左手に持ったマシンガンでシンのこめかみに突きつける。

(これなら……!?!)

——外さない。

引き金を絞り、銃弾を撃ち込む。

けれど撃てたのは数発だけで、僕はすぐに吹き飛ばされた。僕に抱えられたまま、シンが月輪を起動したからだ。

「くう!?!」

腕一本が丸ごとスラスターになってる月輪の推進力は凄まじく、遠

心力によって僕は拘束を緩めてしまった。

するとシンは僕のお腹に右肘を叩き込んで引き剥がし、回転の勢いのまま月輪で斬りつけて来た。

ガギインッ！

「つつう……い！」

咄嗟に展開した近接ブレードで月輪を防ぐ。

両手でブレードを構えたけど、その両手を痺れさせて僕を弾き飛ばした水月の威力に驚いた。

(なんて推進力……！ こんなものを制御してたの!?)

再び距離が離れた僕目掛けて、シンが突撃してくる。マシンガンと再装填したショットガンを連射するけど、衝撃の抜けきってない両手ではシンを追い切れない。瞬く間に距離を詰めてくる。

(なんとか、あの機動を封じないと……!)

隼月の機動力は桁外れだ。

直線の水月と、曲線の月輪。この二つを使って、複雑で高速な三次元機動を行う。

(空中じゃダメだ！ 危険だけど、一旦降りる!)

剣士であるシンの技量は、両足をしっかりと踏ん張れる地上でこそ発揮される。僕の個人的な感覚だけど、地上では空中での倍は剣技が鋭くなる。

けど、隼月の機動力は制限できるはずだ。懐に入れさえしなければ、抑え切れる。

そう考えて、射線を上にズラしてシンの上昇を封じる。合わせて僕も高度を下げ、シンを地上に誘い込んだ。

(さあ、真っ向勝負だ……!)

地上に降りたシンは案の定、時々地面を蹴ることでさらに速さを増してきた。

けど僕が目論見通り、上下の動きはなくなった。

——けど。

(大丈夫、追える！ これなら……!?)

失敗に気付いた時には遅すぎた。やっぱり、いくら狙い難くても空

中戦を続けるべきだったんだ。

シンはある程度近付いてくると、突然月光の刃を地面に突き立てた。

何を、と思う間もなく、シンはそのまま月光を振り上げる。

「な……………」

月光の超高熱により一瞬で蒸発した土が爆発的に体積を増し、周りの土ごと巻き上げて僕に迫る。

視界いっぱい、土砂の壁。本来ならそんなものは、ISの防御力があれば何も怖くない。

——その影に。必殺の剣を構えた侍さえ、隠れていなければ。

(これは、まずいつ……………！)

どう考えても危険過ぎるそれから逃げるために、全速力で後退する。

けどシンより先に、握り拳くらいの大きさの弾頭が土砂の壁を貫いてきた。

カツ——！

「……………っ!!?」

凄まじい閃光に、思わず目をつむってしまう。けどこの光はハイパーセンサーに干渉しているのか、視覚を直接光で埋め尽くしてくる。

本能的に体が硬直した。時間にすればほんの数秒。

そしてそれは、シンが相手では永遠と同義だ。

——ヴォンツッ！

月光の音。

それが、真っ直ぐに僕に近付いて来て——

「おおおおおっ！」

「はあああぁっ！」

俺の雪片式型と、ラウラのプラズマ手刀が激突する。

軍隊仕込みの格闘術が容赦なく俺に襲いかかるが、俺だつてずっと
剣の鍛錬を続けていたんだ。接近戦だけなら、遅れを取るつもりはな
い。

「ふん、剣一本でよく粘る！」

「優秀な師匠が三人もいるもんでね！」

剣を振るう心は、千冬姉が教えてくれた。

剣を振るう技は、箒が魅せてくれた。

剣を振るう体は、シンが鍛えてくれた。

俺の剣は、俺だけの剣じゃない。

しかしその言葉はラウラの逆鱗に触れたようだった。ついさつき
まで酷薄な笑みを浮かべていたというのに、今では憎悪に歪んでい
る。

「貴様まで、教官の教えを受けたと言うのかっ！」

「当たり前だ！ 千冬姉は、俺の姉さんだ！」

「認めんぞ……！ 貴様如きが、教官の弟だなど！」

「そうかい！ まあ確かに、俺には勿体ないくらいの姉さんだけだな
！」

「貴様ああ……!!」

俺の言葉に激昂するラウラ。

シユヴァルツエア・レーゲンから六本のワイヤーブレードが射出さ
れた。俺を囲い込むように複雑に動くそれと、プラズマ手刀で全方位
から同時攻撃を仕掛けてくる。

「消えろおおっ！」

「おおおお！」

プラズマ手刀だけならどうにかなるが、さすがにこれは厳しい。ワ
イヤーブレードは数が多いだけでなく、なにより軌道が読み難い。

——だが、これを見るのは初めてじゃないんだ。対策くらい考えて
ある。

「おらあっ！」

「なにつ!？」

瞬時加速を発動、突き出されたプラズマ手刀を雪片式型を縦に構え

て捌き、ラウラの右側に抜ける。

この近距離だ、いくらラウラでも反応しきれない。俺もラウラ自身に攻撃を仕掛けるほどの余裕はないが、それが目的ではないので問題ない。

——俺の狙いは、ワイヤーブレードだ。

縦に構えたままの雪片式型が、右腰から伸びる二本のワイヤーブレードを根元から切断する。

そう、先端の動きが読めないのなら、根元を狙えばいい。ワイヤーブレードは強靱な造りをしているが、対IS用近接ブレードの斬撃に耐えられるほどじゃない。

ましてや衝撃を逃がすことの出来ない根元ならなおさらだ。振らずとも、加速と重量に任せて押し当てるだけで十分に斬れる。

「これで腕は残り六本！ 足と合わせて八本だ、烏賊から蛸になっちまったな！」

「おのれ……おのれええええっ!!」

ラウラが俺に向けて両手を突き出す。これの正体は鈴とセシリアから聞いた。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラ1

A I C。対象の動きを止める第三世代型兵器。

俺のような近接戦闘主体の者には天敵といえる兵器だが、今は瞬時加速により距離が離れている。避けるだけならなんとかなる。

「ちいつ、ちよこまかと……!」

俺の動きを制限しようと、残った四本のワイヤーブレードが伸びてくる。さらには肩の大型レールカノンの連射。

中距離はラウラの独壇場だ、一旦ワイヤーブレードが届かない距離まで離れるか、もう一度近付かないと。

だが俺は近接ブレードしか武器がない。近づかなければ攻撃出来ない。

そしてラウラの攻撃を掻い潜って近付くにはダメージを覚悟しなければならず、距離が離れれば離れるほど、接近の際に払う代償は大きくなる。

そう判断し、俺は前傾姿勢を取り、一気に加速した。

——後ろへ。

「なに……！ 逃げるか、臆病者め！」

「言ってる！」

そうだ、ラウラの罵倒なんて気にする必要はない。

——なにせパートナーがピンチなのだ、俺のプライドなんて、秤にかけるまでもない。

「シィインッ!!」

「……っ！」

地上戦に移り、硬直しているシャル目掛けて振り上げられていた月光に、零落白夜を叩きつける。そのまま落下の勢いを乗せた蹴りを放つが、それはあっさりかわされた。

俺は攻撃の手を緩めることなく零落白夜を振り上げようとするが、シンはさらに零距离まで間合いを詰めて、理解の範疇を超えた動きで俺の右腕を絡めとった。

「ぐあっ……！」

肘と肩から骨の軋む音が鳴り、同時に激痛が走る。

関節技。そして動けなくなった俺に、月影が向けられた。

この距離で月影の連射を浴びれば、一瞬でシールドエネルギーが空になる。

さらに言えばシンの関節技は完璧で、右腕だけで完全に俺の動きを封じていた。まさに万事休すだ。

戦っているのが、俺一人なら、だけどな。

「ようやく、動きが止まったね」

「……！」

ドガンッ!

三連装の砲身が回転を始め、発射寸前だった月影が爆散する。

理由は言うまでもない、硬直から立ち直ったシャルによる攻撃だ。そう、関節技で俺の動きを止めている間、シンも動きを止めている。俺一人なら、このまま為す術なく倒れていただろう。だが俺は一人じゃない。

足りない力はチームワークで補う——そう言ったはずだが、シン。

これこそが俺たちの作戦。

ラウラとシンを同時に相手するのは危険過ぎる。

対多数に優れるシユヴァルツェア・レーゲンと、一騎打ちに特化した朧月。

相手の動きを止めるAICと、一撃必殺の月光。

この二人は、タッグとしてあまりにも相性が良いのだ。

ならまずは一対一の状況を二つ作り、機を見て合流、対多数に向いていない朧月を、奇襲でもって先に沈める――！

ドンドンドンドンッ!!

アサルトカノンの連射。

シンはすぐに離脱しようとしたが、今度は俺がシンの右腕を掴んでそれを阻止する。

「逃がすかよっ!」

「ぬう……!」

しかしシンはやはりとんでもなかった。俺に右腕を掴まれたまま、僅かな動きだけで弾丸の直撃を防いだのだ。

「なら……!」

シャルがアサルトカノンを撃ちながら近接ブレードを展開し、突っ込んでくる。

いくらなんでもこれはかわせまい。そう思ったが、シンはどこまでも俺の想像を超えていた。

シンは水月を起動、その加速力でもって、俺に強烈な頭突きを叩き込んできた。

「ぐおっ……!」

「……ッ!」

ISの防御を貫通したのだろう、シンの額から血が吹き出るが、そんなことを気にするやつではない。

続いて月輪を起動、俺を斬りつけて弾き飛ばしつつ右腕を引き抜き、目前まで迫っていたシャルを目掛け、光の刃を振り抜いた。

「ぐああああつ!」

「うわあああつ!」

シャルは直前で急ブレーキをかけて直撃だけは防いだが、右腕の装甲と近接ブレードを吹き飛ばされた。

俺は重い斬撃を受け、零落白夜の連発もあつてか既にエネルギーが三割を切っている。

(くそっ、このままじゃ……！)

見れば、ラウラがすぐそこまで来ている。

今シンを倒せなければ、俺たちの負けだ。

この作戦は二度も通じない。ラウラはそれでも俺に執着するかもしれないが、シンの方が合わせるだろう。

そうなればもう、打つ手がない。

だから、今、シンを倒さなくちゃいけないのに――

――強い。

僕たちの作戦はほとんど成功していた。一対一で戦いながらもお互いの状況を確認、タイミングを図って一夏がボーデヴィツヒさんを振り切り僕を援護、そのままシンを挟撃して、一気に決める――

挟撃までは上手くいった。月影も破壊できた。朧月は機動力重視で、装甲はそれほど厚くない。

だから動きさえ止められれば、集中攻撃で倒せると思ったのに。

――本当に、強い。

技術だけじゃない。技術ならむしろ、僕やボーデヴィツヒさんの方がシンより上だ。射撃武器である月影を機動中に撃つてこないのがその証拠。機動と射撃を両立できないんだ。

シンの技はあくまで剣士としてのものであつて、ISの操縦技術そのものは一般生徒と大差ない。

――なのに、こんなにも強い。

シンの強さは、心の強さ――精神面での強さだ。

どんなに有利な状況でも決して油断せず、どれほど不利な状況でも絶対に諦めない。

どんな時も勝利への道を模索し、必要なら自分の身を危険に晒すことも、それによって傷付くことも厭わない。

シンには、どんな技もあつという間に身につけるような才能はなかった。

シンには、大きさと重さで相手を圧倒できるような恵まれた体はなかった。

だからシンは、どんな逆境にも耐えられて、どんな強敵にも怯まない、不屈の心を手に入れた。

(……勝ちたい)

シンの戦い方は一生懸命で、がむしゃらで、泥臭くて、だからこそ、とても綺麗で。

(シンに、勝ちたい)

シンは普段の様子からは想像もつかないほどに、熱い魂を持っていることがよくわかる。戦いに対してとても真摯で、その姿は見る人の心をうつ。

(僕は、シンに勝ちたい！)

今もシンはピンチを撥ね除けて、一夏と僕を吹き飛ばした。そしてそのまま月輪を振り上げ、僕目掛けて突っ込んでくる。

(勝ちたい……ううん！)

これが、最後のチャンスだ。

ボーデヴィツヒさんはもう、すぐそこまで来ている。合流されれば、消耗したりヴァイヴと白式じゃ、あつという間に押し切られる。

ここでシンを倒せなければ、僕たちの負けだ。

けれど、ここでシンを倒せば――！

(絶対に、勝つ!!)

スラストー全開、吹き飛ばされそうになるのを全力でこらえる。上体を捻り、有りつ丈の力を左腕に込めた。

バシユン、と、左腕に取り付けられていたシールドがはじけ飛び、中から巨大な杭打ち機が姿を現す。

「行くよっ!!」

「……ッ!!」

これは、第二世代型最強の威力を持つ兵器。

六九口径。パイルバンカー〔灰色の鱗殻〕、通称〔盾殺し〕

——僕の、切り札。

「あああああっ!!」

左拳を握り締め、渾身の力を込めて叩きつける。

シンが振り下ろした、月輪へと。

ズガンツ!!

「くあああっ!!」

「があっ……!!」

大量の炸薬により撃ち出された鉄杭が月輪に突き刺さり、粉碎する。頑丈な月輪の外郭がひしゃげ、損傷したエネルギーバイパスが圧力に耐えきれず、月輪を爆散させた。

まだだ。これくらいじゃあ、シンは倒れない——!

「おおおおっ!!」

「……ッ!!」

シンは爆発に体勢を崩されながらも、月光を振り上げた。

僕も振り抜いた左腕を引き戻して二撃目を放とうとするけど、間に合わない。

シンの方が一拍速い。今度こそ紫色の極光が僕を捉え、ラフアール・リヴァイヴ・カスタムⅡを機能停止に追い込むだろう。

(それでもっ!・最後まで、諦めて、たまるもんか——!)

諦めない。最後まで、絶対に。

だって僕には、一緒に戦ってくれる、仲間がいるんだから——!

ほんの少しでも絶望した自分が恥ずかしい。相棒が必死に頑張ってるってのに、ほんの一瞬とはいえ、俺は諦めかけた。

……ふざけるな。それは、それだけは、俺がしちやあならねえだろ

うが——!

「逃がすものか、織斑一夏あっ!!」

追い付いて来たラウラがワイヤーブレードを伸ばす。
構うもんか、今はもつと、優先することがある。

「おおおらあああつ!!」

瞬時加速を発動、シンに最後の突撃をかける。

ワイヤーブレードが、無防備になった白式の装甲を切り刻んだ。

知ったことか、その程度はくれてやる。だからラウラ、俺はお前の相棒を貰う——!

零落白夜を振るう。この距離からじゃシンには僅かに届かないが、俺の狙いはシン自身じゃない。

俺が狙うのは、シンの右腕から伸びる光の剣。

力を込める必要なんてない。ただこの切っ先が、ほんの僅かでも触れさえすればいい——!

「行っけえ、シヤアアルウウウツ!!」

「おおおらあああつ!!」

月影、月輪、月光。すべての武器を失って、それでもシンは足掻き続けた。右拳を握り締め、一時的にただの金属の塊と化した月光で、シヤルを殴りつける。

しかしそれくらいじゃあシヤルを止められないことは、シンも分かっている筈だ。なのに何故、そうまでして足掻くのか。

簡単だ。たとえばほんの少しでもシールドエネルギーを削れば、残されたラウラがそれだけ有利になるからだ。

(つたく。お前ってやつは)

その真面目っぷりに思わず苦笑が浮かぶ。そんな俺に、シンは一瞬だけ振り向いた。

その口元が、ほんの少しだけ笑っている。

それが、子供の成長を喜ぶ母親の笑みのように、俺には見えた。

「あああああつ!!」

ズガンツズガンツズガンツ!!

パイルバンカーの三連撃。

月輪の爆発により既に大きなダメージを受けていた朧月は沈黙、シンは片膝を着いて動かなくなった。

その様子を見ている暇もなく、ラウラが襲いかかって来る。

「私と戦え、織斑一夏あつ!!」

「てめえはっ……!! 相方やられて、言うことはそれだけか! ラウラ、ボーデヴィッツヒイイツ!!」

プラズマ手刀とワイヤーブレードの波状攻撃を必死に捌きながら、ラウラへ突撃する。

こいつは俺以外は眼中にない。シンの戦いすらも、こいつにはどうでもいい。

いい度胸だ。その傲慢、身を持って後悔させてやる!

「何故だ、何故貴様なんぞが、教官の弟なのだっ!」

「知るかそんなもん! 大事なのは生まれじゃねえ、生き方だっ!」

「貴様が……!! 選りに選って貴様が、教官の栄光を汚した貴様が、それを言うのかっ!!」

ラウラの言うことはもつともではある。だがそれは、言い方は悪いが過去の話だ。

過去を変えることは出来ない。なにをどうしたところで、失ったものは戻らない。

千冬姉の栄光も、シンの左腕も。

「君は過去のことばかりだ、ちつとも前を向いてない! いつまで同じ所で足踏みしてるつもりなの!?!」

「部外者が、口を出すなあ!」

「部外者じゃねえ! 俺の仲間だ!!」

合流したシャルの、銃弾と言葉による援護。

知らなかった。一人じゃないってことが、こんなにも心強いとは!

「行くぜラウラ! 俺たちは、お前には負けない!」

「君はシンの戦いを侮辱した! 絶対に、謝ってもらおうから!」

「いいだろう、二人纏めて叩き潰してやるっ!」

状況は完全な二対一になったが、それでもラウラとシュヴァルツェア・レーゲンの能力は脅威的だ。

加えて俺もシャルもかなり消耗している。決して楽な戦いじゃない。

「さつきから聞いてりや教官、教官と！ 千冬姉はもう教官じやねえ！」

「黙れ！ あの人はいつまでも、私の教官だ!!」

「それが過去のことばかりって言ってるんだ！ 君は織斑先生に縋ってばかりで、あの人の教えをちつとも理解していかない!!」

「黙れ……黙れえええっ!!」

プラズマ手刀で俺と戦いながら、ワイヤーブレードとレールカノンでシャルを牽制する。その狙いはどちらも正確で、ラウラの尋常ならざる技量を物語っている。

「貴様に何が分かる！ 私にはあの人しかない！ あの年から与えられた力しか、私にはない!!」

「ぎげんな！ 千冬姉から力しか与えられなかっただど!? そりやあ千冬姉に対する侮辱と見ていいんだなっ!!」

プラズマ手刀が顔面に迫り、急ブレイキで避けたところにワイヤーブレードが繰り出される。

ラウラの猛攻に、俺もシャルも攻め切れない。

拮抗状態。この状況は、消耗した俺とシャルに不利だ。いずれ押し切られるのは目に見えている。

だから、強引に攻める！

『行くぞ、シャル!』

『合わせるよ、一夏!』

「はあああっ!」

二人で同時に突撃をかける。

その捨て身に近い攻撃で俺もシャルもダメージを受けたが、ラウラとの距離は詰められた。

シャルが武装をショットガンに変更、ワイヤーブレードに貫かれながら、装填された弾丸を一気に撃ち尽くす。

「があああっ!」

それを受け、ラウラのレールカノンが爆散、シユヴァアルツェア・レーゲンにも大きなダメージを与える。

「これで五分ってところかっ!」

「このまま一気に行くよっ！」

「ぐうぐう……！」

ラウラが悔しそうに呻く。しかしその眼に宿る憎悪は増すばかりで、攻撃はさらに激しくなった。

「排除してやる、織斑一夏……！　貴様さえ、貴様さえいなければ、教官はっ……！！」

「その手の言葉はなあ、とつくの昔に、言い飽きてんだよおおおっ！！」

俺さえいなければ。

そんな言葉は、何万、何億と繰り返して来た。

けれどそれがなんになる？　もしも、たら、れば、そんな言葉にどんな価値がある？

過去がなければ今はない。けれど過去に縛られていては、未来に向かえない。

失われたもののために出来ることは、それをいつまでも引き摺ることじゃない。

「教官の栄光を奪っておいて、何故貴様はのうのうと生きている！」

「俺だけじゃねえ、みんな同じなんだよ！　世界は犠牲の上に成り立ってる！　俺たちが歩いている道は、大勢の屍で出来てる！」

歴史を見れば分かる。人類がその発展のために、どれほど多くのものを犠牲にしてきたのか。

それが必要なものだったと割り切れるほど、俺は大人じゃない。もつと上手くやれたんじゃないかって、終わったことに対してどうしようもないことを考えることはしよっちゆうだ。

——だけど。

「犠牲があつたら全部台無しになるのか!?　誰かの屍の上にある幸せは全部嘘っぱちなか!?　そんなわけがねえ、犠牲が出たのなら、誰かが踏み台になったのなら、その人たちの分まで前に進むのが、俺たちの役目だろうが!!」

「いつまでも同じところで足踏みしてるってことは、いつまでも同じ人を踏みつけてるってことだよ！　それじゃあ犠牲が無駄になつて

しまう、犬死になっちゃってしまおう！ それだけは、許さない!!」
千冬姉は世界最強の称号を放り出して、俺を助けてくれた。
シンは左腕を捨ててまで、俺を守ってくれた。
その事実は重い十字架となって、俺にのしかかっている。
けれど、だからこそ、誓ったんだ。

あの犠牲は、あの喪失は、決して無駄ではなかったのだと。
俺が、証明するんだ。

「だから俺は、お前には負けない！ 負けられない！」

なにより、負けたくねえんだよ、ラァァアウウラァァアアツ!!」
「駄々をこねるのはもう終わりだ！ 織斑先生の教え子なんですよ、
君にも、前を向いてもらおうよっ!!」

「消えろ……消えろ、消えろ、消えろ消えろ消えろ消えろおおおっ
!!」

俺たちの言葉を拒絶するかのように、ラウラはワイヤーブレードを
振り回した。

鋭利な刃が嵐のように吹き荒れ、俺とシャルを吹き飛ばす。

「ちいっ！」

「まだこんな力が……！」

だが、いくらなんでももう限界のはずだ。

そしてそれは、俺たちも同じ。

次で、勝負が決まる。

「おおおおー！」

雪片式型を構え、スラストを噴かす。

フェイントをかける余裕はない、一直線に突っ込む！

「無駄だっ！」

ラウラが右手を俺に向ける。

停止結界。今の俺には、これを避ける手段はない。

だから、前に伸ばした左腕で、それを受けた。

「馬鹿め！ そんなことをしても、この距離では剣は届かん！」

「そいつは、どうかなあっ！」

そう、この距離からでも剣は届く。

ISに精通している者にこそ盲点となる攻撃手段が、俺にはまだ残っている。

思い出すのは、シンとセシリアの最初の試合。あの時、シンが実演してみせたこと。

高速で動きまわるISには、投擲攻撃は当たらない。

だが、相手が止まっていれば話は別だ。

そして停止結界を発動したラウラは今、その動きを止めている――

！

「行っつっつけええええっ!!」

「な……にい!？」

ラウラ目掛けて、渾身の力を込めて雪片式型を投げつける。回転しながら自分に迫る刃に驚きながらもラウラは停止結界を解除、緊急回避を行った。

雪片式型は、シュヴァルツエア・レーゲンには当たらなかった。しかしその左腰から伸びるワイヤーブレードを二本、切り落とす。

残り二本。これなら――！

「おおおおおっ!!」

俺とシャルの咆哮が重なる。

シャルが構えるのは、第二世代型最強の威力を持つパイルバンカー、灰色の鱗殻。

俺は無手だが、掴みかかってでもラウラの動きを止める！

「おのれ……いー おのれええええっ!!」

ラウラは無理な回避で体勢を崩していて、ワイヤーブレードも二本だけでは俺たちを抑え切れない。

瞬く間に距離を詰め、シャルが左腕を振りかぶり――

「……見事……」

バラバラだった己たちとは対照的に、一夏とシャルは最後まで二人で戦った。その連携は素晴らしく、未熟な己では抑え切れなかった。

月輪は完全に壊れており、朧月も大破、エネルギーは僅かに残っているが、スラストターと月光を併用出来るほどではない。

(……強くなったものだ……)

一夏も、シヤルも。力や技ではなく、心が。

互いを信頼し合い、決して諦めない心を二人は持っている。一人で戦った己の敗北は、当然の結果と言える。

(……だが……まだ、詰めが甘い……)

では、最後の悪足掻きといこう。

——コード認証。水月、外装をパージ——

受け取れ。これは、己からの教訓だ。

——カートリッジ、残弾十二。……装填完了——

手負いの獣は、恐ろしいぞ？

——〔つきわたり月渡〕、起動。……全弾、一斉起爆——

それに、ラウラは己の相棒だ。己はまだ動けるといふのに、敵を二人も任せられん。

一人くらいは、道連れにさせてもらおう——

耳をつんざく轟音が聞こえたのは、紫色の光の剣が僕を切り裂いた後のことだった。

「な……!?!」

それがなにかなんて、考えるまでもない。シンと、朧月の月光だ。

一体なにをしたのか、さつきまで地上に居たはずのシンが一気に飛び上がり、すれ違い様に僕に一撃を叩きこんでいった。

最後のエネルギーだったのだろう、シンは減速も出来ずにアリーナの天井に激突して、そのままバウンドするように落ちていく。

(……まったく、無茶するなあ……)

けれど、シンらしい。きつとラウラの相棒として、役目を果たしたかったんだろう。

(ほんとに、生真面目なんだから)

どうやら隼月はまだ展開できているようだ。このまま落ちても大丈夫だろう、シンのごときは心配いらぬ。

(なら僕も、役目を果たすよ!)

ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは、今の一撃でシールドエネルギーが底をついた。地面に落ちるまでは保つだろうけど、FCSは機能を停止していて、もう攻撃はできない。一夏も白式の唯一の武器である雪片式型を投げてしまった。

あとほんの少しなのに、ボーデヴィツヒさんにダメージを与える手段が残っていない。

——ボーデヴィツヒさんは、そう思っただろう。

「一夏あああつ!!」

最後の力を振り絞って一丁の銃を展開、一夏に投げ渡す。

五五口径アサルトライフル、「ヴェント」。

以前一夏と訓練した時に、一夏と白式に使用許諾を出した銃。

一夏が、唯一使える銃。

「これで、終わりだあああああつ!」

銃を受け取った一夏が、マガジン内に込められた十六発の銃弾を発射する。

一夏の射撃は上手くないけど、この距離なら問題ない。

放たれた弾丸は、既に限界だったシユヴァルツェア・レーゲンに致命傷を与え。

勝った。僕がそう思った、その瞬間。

——異変が、起きた。

第21話 役目（決着編）

（活動限界だと……!? どうした、まだやれるだろう、シユヴァルツェア・レーゲン!）

だが、機体は応えない。シールドエネルギーはほとんど残っておらず、レールカノンと四本のワイヤーブレードを失った。

（もう少し……! あと一息で仕留められるのだ! なのに、ここまですて……!）

目の前には、憎き男の姿。骨董品の銃を構え、下手くそな射撃で私を狙っている。

そう、織斑一夏の射撃技術はひどいものだ。これでよく銃を使う気になるものだと、普段の私なら思うだろう。

だが今の私には、その程度の射撃をかわすことも、耐えることも出来ない。

——機体、損傷甚大——

（何故だっ! 何故私が負ける!? 私が、貴様より劣っていると言うのか!?!）

シユヴァルツェア・レーゲンはもう、限界だった。たった数発の弾丸が致命傷となるほどに。

その証拠に、機体表面に紫電が走り、強制解除の兆候を見せ始めていた。

（負けるというのか、この私が……? こんな男に、負かされるというのか……!）

それは、嫌だ。

私は、負けるわけにはいかない。

教官の栄光を奪っておきながら教官の優しい笑みを受けるこの男を、私は認めない。

だから、叩き潰す。

そう決めた、はずなのに——

——精神状態、設定値に到達——

(……力が、欲しい)

そう、力だ。

力があれば、織斑一夏を倒せる。

力があれば、織斑一夏に勝てる。

力さえ——教官ほどの力さえあれば、私は、織斑一夏を排除出来る。だから。

力さえくれるのならば、相手が誰であろうと、構わない。

力さえ手に入るのならば、何を対価に捧げることになろうと、構わない。

どうせ、私には。

力以外は、何も無いのだから——

——承認、受領。……〔VTシステム〕、起動——

「……醜悪っ……!!」

思わず呻くように呟いた己を、一体誰が責められようか。

それほどまでに、それはおぞましい光景だった。

「あああああっ!!!」

始まりは絶叫。ラウラからそれが発せられると同時に、シユヴアルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれる。

「な、なにが……!!」

「これは……!?!」

そしてラウラが身に纏うISが泥のように溶け、黒い、深く濁った闇が、ラウラの全身を飲み込んでいった。

「それ」はその表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りていく。

そして地面にたどり着くと、急激に形を成していった。
現れたのは、ラウラの体型を模した『何か』。

腕と脚には最小限の装甲を、頭部には首から上全てを覆う装甲を身につけ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしている。

だが、姿形などこの際どうでもいい。

問題は「それ」が、その手に持つ武器。

そして、構え。

「雪片……！」

思わず漏れたのだろう一夏の呟きに反応した、わけではないだろうが、刀を居合いに見立てて構えていた「それ」が、一夏へ向け、必中の間合いから必殺の一閃を放つ。

その一撃は、手にした刀や、構えと同じく。

紛れもなく、千冬さんの太刀筋を模したものだだった。

「ぐうっ！」

その一撃を、シャルから借り受けたアサルトライフルで受ける一夏。しかしアサルトライフルは真つ二つに断たれ、そしてそのまま上段の構えへと移る。

「！」

唐竹の一撃。

得物を失った一夏に、それを受ける術はない。

だから一夏は、素早く後ろへ退がることで避けた。

——その反応は、まるで相手の動きを予め知っていたかのようで。

(…………やはり、あれは…………！)

だ流石にあの間合いから完全に避けることは出来なかったようで、左腕から僅かに血が流れていた。白式も限界だったのだろう、光とともに解除されていく。

「……………が、どうした…………！」

俯いた一夏の呟き。

……………まずい、この声色は……………！

「それが、どうしたあつ!!」

烈火の如き怒り。

最愛の姉を真似る者に対し、一夏は我を忘れていた。

無理もない。己には、一夏の気持ち痛みほど良くわかる。

およそ、有り得ないことだが。

もし、あれが模しているのが千冬さんではなく、「彼女」であったなら。

己も、正気を保っていた自信はない。

「うおおおおっ!!」

武器を失い、ISを失い、ただの無力な生身の拳を振り上げて、一夏は「それ」に向かっていった。

理屈など関係ない。そんなもの、濁流のような感情の前にはなんの意味もない。

そう言わんばかりの、一夏の激情。

「おおおおあああああっ!!」

一夏に最初に剣を教えたのは千冬さんだ。一夏は己の剣に憧れたと言うが、その根本にあるのは彼女の教えだ。

それを汚され、黙っているなど出来はしないだろう。

だが今の一夏にはなんの武器もなく、なんの防具もない。ISと戦えば、その先にあるのは、「死」だけだ。

だというのに、己には何も出来ない。朧月は辛うじて展開出来るが、シールドエネルギーはもう空だ。スラスターを噴かすほども残っていない。

ここからでは、間に合わない。

だがそれでも、己にあるのは絶望ではない。一夏には、共に戦い支えてくれる、仲間がいるのだから。

だから己は、己の役目を果たすでしょう。

「一夏、落ち着いて!」

「離せ! あいつ、ふざけやがって! ぶっ飛ばしてやる!!」

黒いISに向け振り上げた拳は、しかし敵には届かなかった。活動限界となりISが解除されたシャルが、タツクルで俺を止めたからだ。

「だけどそれでも、俺の怒りは鎮まらなかった。」

「鎮まるわけがない。だってアイツは、千冬姉の真似をした。」

「それも形だけの、中身の伴わない、空虚な模倣。」

「剣とはなにか、それを振るう者はどう在るべきか、厳しくも優しく、千冬姉は俺に教えてくれた。」

「俺の剣の始まり、俺の剣の原点、俺が剣を取った理由。」

「箒との出逢いも、シンへの憧れも、全ては千冬姉から始まったんだ。」

「それを、アイツは——！」

「どけ、シャルっ!!」

「うわっ！」

「俺にしがみつくとシャルを引き剥がし、もう一度黒いISに踊りかかった。」

「途中、地面に突き刺さっていた近接ブレード、シャルがシンに吹き飛ばされた「ブレード・スライサー」を引き抜く。」

「その瞬間、今までこちらを見ようともしていなかった黒いISが俺に反応し、雪片もどきを構えて俺に切りかかってきた。」

「今の俺は生身だ。武器だけIS用のものを持っていても、ISと打ち合えるはずがないが、そんなことはどうでもいい。」

「今はただ、コイツをぶちのめすことしか、俺の頭にはない——！」

「おおおおあああつ!!」

「——！」

「ガギインッ！」

「だが、ISは想いだけでどうにかなるような兵器ではない。俺は一撃でブレード・スライサーを弾き飛ばされ、続く二撃目が振り上げられる。」

「やはりそれは、俺が良く知る、この眼に焼き付いた太刀筋で。だけど、俺にはもう、これを凌ぐ手段が残されていない。」

「畜生……ちくしよおおおつ!!」

そして、忌々しい紛い物の刃が、俺の頭に振り下ろされ――

――しやらん、と。

どこまでも澄み切った、鋼の音が響いた。

「……………え？」

「……………」

そこに在ったのは、ボロボロの銀の装甲に身を包んだ、俺が憧れる少女の背中。

「……………シン？」

それは、俺が投げた雪片式型を持ち、黒いISの斬撃を受け流したシンの後ろ姿だった。

「……………ッ！」

ガギャンッ！

シンは返す刃で黒いISを吹き飛ばす。

先ほどの斬撃を受け流した柔の剣とは真逆の、片腕でどうしてそんな威力が出せるのか不思議なくらいの剛の剣。

しかしそれは、人知を超えた神業でも、人の理を無視した魔技でもない。

地面を踏みしめる両足から得た力を全身でもって増幅しながら、余すことなく切っ先に伝えることで生み出される、ただ只管に鍛錬を積み重ねることで身に着けた、どこまでも無骨な「人の技」だ。

千冬姉に劣らない、俺の心に焼き付いた剣閃だ。

「……………」

シンが黒いISを睨み付ける。距離が離れたからか、ヤツはこちらへの興味を失ったかのようにその場から動かない。

「二夏、大丈夫!？」

「……………ああ……………」

「……………」

心配そうな顔をしたシャルが駆け寄って来る。

シンのおかげで冷静になって、思い出した。俺の身を案じてくれたシャルを、俺は突き飛ばしてしまった。

「……ごめん、シャル。俺……」

「……いいよ。けど、説明はしてくれる？」

溜め息ひとつで、シャルは俺を許してくれた。その姿に、また罪悪感が湧き上がる。

「……あれは、千冬姉の剣だ。千冬姉だけの剣だ。それを、あんな風に真似しやがって……!」

「……空虚……」

そう、何より許せないのは、千冬姉の剣を真似されたことそのものじゃない。

ただ動きだけ再現すれば千冬姉の剣になるという、侮辱以外の何物でもないその考えだ。

「許せねえよ。千冬姉の剣は、ただの暴力じゃない。あんな形を真似ただけの偽物、絶対に許さねえ……!」

「……けど、どうするの？ 白式はもうエネルギー切れだよ。ひどいことを言うけど、一夏には何も出来ないよ」

「分かってる! 分かってるんだよ、そんなことは……!」
「……………」

今ここにいる中で、ISを展開できているのはシンだけだ。しかし朧月ももうシールドエネルギーは残っていないはず。雪片式型も朧月の装備ではないから、その性能を發揮できない。

そして、なにより――

『非常事態発令! トーナメントの全試合は中止! 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む! 来賓、生徒は教師の指示に従い速やかに避難すること! 繰り返し――』

「一夏、ここは先生たちに任せよう。悔しいのはわかるけど、このまま戦っても……死んじゃう、ただだよ」

そう、俺がなにもしなくても、問題は解決される。

むしろ俺は邪魔なだけだ。今すぐここから逃げ出すのが最も正しい選択だろう。

——だけど。

「……分かってねえ。分かってねえよ、シャル。俺がやらなきゃならないんじゃない。俺が、やりたいんだ。」

……アイツは俺がぶちのめす。先生たちに、くれてなんか、やるもんか」

「でも、どうするの？ 一夏にはもう、戦う力は残ってないんだよ？」
「くっ……」

問題はそこだ。

ISはない。武器はあるが、ISがなければ意味はない。

黒いISにもさほどエネルギーは残っていないはずだが、攻撃手段がなければ倒せない。

「……一夏、ここは先生たちに任せよう。シンだつてボロボロなのに、一夏を助けてくれたんだよ。……これ以上、心配かけちゃいけないよ」

「……シン」

「……」

その言葉に、誘拐された時のことを思い出す。

俺を庇って、左腕を失ったシン。なんの力もないくせに、俺の無謀な行動で彼女を傷つけた。

あの時と、何も変わらない。

強くなってなんかいない。俺はまだ無力なままで、そんなことにも気付かないほどに無知で、身勝手に無謀なガキのままだ。

「俺は……」

「……」

シンが俺に近づいてくる。

またいつものように、言葉少なに俺を諭すのだろうか。

このままじゃ俺だけでなく、シンとシャルも危険に晒すことはわかってる。

それでも心が納得できない。

けれど俺のせいで、誰かが傷つくのにも耐えられない——
そんな葛藤を続ける俺に、シンは。

「……………までが……………」

手にした雪片式型を、ゆるりと持ち上げ。

「……………口の、役目……………」

その柄を、俺に差し出し。

「……………ここからは……………」

いつものように、俺の眼を真っ直ぐに見つめて。

「……………お前の、役目……………」

戦え、と。

俺の背中を、押してくれた。

「なっ、シン……………!? 本気なの!?」

「……………」

「一夏はもう戦えない！ 白式はもうエネルギーが残ってないんだよ!?」

シャルの言葉に微動だにせず、シンは雪片式型を差し出し続けている。俺はまだそれを取ることができず、硬直したままだ。

心では、戦いたいと思ってる。

だけどその選択のリスクが、俺を躊躇わせていた。

と、そこに。

『エネルギーがあればいいんだね?』

「うわあ!?!」

朧月の開放回線から突然聞こえてきた声。

覚えがある、この、人の神経を逆撫でする声は――

「き、如月社長っ?」

「如月って、隼月の……?」

『うふふ、久しぶりだねえ、織斑君。今日はありがとう、おかげでいいデータが取れたよ』

「……………」

どうやら隼月を通じて俺たちの様子を見ていたようだ。外から回線を繋げるのも、こいつからすれば朝飯前なんだろう。

「……なんでまだいるんだよ。避難しなかったのか?」

『当たり前じゃないか。これほど面白い事態を、僕が見もせずに逃げると思うかい?』

相変わらずふざけた野郎だが、こらえる。

なぜならこいつはさつき、気になることを言ったからだ。

「エネルギーがあればって言ったな。……あるのか?」

『あるよ。隼月に』

「そんな……もうスラスタも使えないはずなのに……」

『正確に言えば、確かに隼月にはエネルギーは残ってないよ。隼月にはね。けど隼月には別のエネルギー源がある。IS本体のエネルギーだけじゃ、月光の出力は支えられないからね』

確かに言われてみれば、あんな大出力の兵器を使うにはISのエネルギーだけじゃ足りないだろう。隼月の図抜けた機動力だけでも、かなりのエネルギーが要るはずなんだから。

『隼月の第三世代型兵器は、月光じゃないんだよ。強力な兵器ではあるけど、使われている技術は実験段階を終えたものだからね』

「じゃあ、隼月の第三世代型兵器って……?」

『神無月と神在月さ。量子状態のまままでエネルギーの貯蓄、供給ができるこの二つの装置こそが、隼月の実験兵装なんだよ。見たところ神無月にはまだ少しだけ、エネルギーが残ってる。そして神在月なら、それを白式に供給できる』

「なら、それを使えば……!」

いけ好かない男だが、その技術力は本当に凄い。

あれだけ月光を連発して、まだエネルギーが残ってるとは。

『けど、そんなに余裕があるわけじゃない。展開する装甲を限界まで絞っても、君の零落白夜が使えるのは一回だけだろうね』

「……そんだけあれば、十分だ」

『ならやりたまえ。データのお礼だよ、僕も協力しよう。井上君、コア・バイパスを白式に繋いでくれたまえ』

「……………」

シンは雪片式型を地面に突き立てると、隴月からケーブルを伸ばし、待機状態の白式に繋げる。

そこから流れ込む、エネルギーの奔流。

力強く。どこまでも、どこまでも真つ直ぐに。

俺を、支えてくれる――

『これで全部だ。シールドエネルギーも渡したから、もう本当に空っぽだよ』

「……ああ。受け取ったぜ」

シンの体から、隴月が光の粒子となって消える。

それに合わせて、白式は再度俺の体に一極限定モードで再構成を始めた。

『ふむ、右腕だけか。当たれば即死だけど、まあ当たらなければ問題ないよ』

「充分だ」

俺は雪片式型の柄に右手を伸ばす。

しっかりと掴み、引き抜こうとしたら、そこにシャルの手が重ねられた。

「……約束して、一夏。……必ず、帰ってくるって」

「心配すんな。あんなやつには負けねえよ」

シャルが安心するように笑いかけると、シャルは少し顔を赤くしながら手をどけた。

「……勝ってこい……」

「任せろ」

シンがくれたエネルギーだ、無駄にはしないさ。

さて、行くか。

……と、その前に。

「おい、社長」

『なんだね?』

俺の相当失礼な物言いにも、こいつは全く気にした様子はない。そんなものに興味はないのだろう。

「一つ訊きたいんだけどよ」

『なんでも訊いてくれたまえ』

「その機能使って、シンのプライベートまで覗いてねえだろうな」

『では僕もそろそろ避難させてもらうよ。井上君が戦わないのなら、見てる意味もないしね』

「おい待て! 覗いてるのか!? 覗いてるんだなてめえ!!」

返事はない。あの野郎、マジで逃げやがった!!

「……………次に会ったら絶対ぶっ飛ばす」

「シン……………今度から、トイレとかお風呂とか着替えのときは、朧月は外そうね」

「……………応……………」

さすがのシンもかなり嫌そうな顔をしている。今度学園に言っただけで如月重工に注意してもらおう。

「……………じゃあ、行ってくる」

気を取り直して、黒いISに向き合う。

敵を前にして、俺の心は不思議なほどに凧いでいた。

「行くぜ、偽者野郎」

雪片式型に力を込める。

イメージするのは、一振りの日本刀。

華奢な刀身に硬さと鋭さを秘めた、折れず曲がらず良く切れる、そんな刃。

俺の意志に呼応して、極限まで研ぎ澄まされた刀を模した、光の刃が形成される。

「……………行くこうぜ、相棒」

零落白夜を腰に添え、居合いの構えで走り出す。

ただ真っ直ぐに、敵の下へ。

『いいか、刀はその重さを利用して振り抜くのだ。手にするのではなく、自らの一部と思って扱え。無駄なく、隙なく、油断なく、それを振るえ』

『ええい、どうしてわからんのだ！やってみせるからちやんと見ていろ！』

『……一心、一刀……』

俺の剣を支えてくれる三人。

彼女たちの教えは、たとえ記憶から忘れてしまったとしても、俺の魂に刻み込まれている。

だから俺は、この体の動くままに。

ただ、目の前の敵に集中すればいい。

「……………」

俺に反応したのか、黒いISが刀を振り下ろす。

それは千冬姉と同じ、速く鋭い袈裟斬りだが、形だけで中身のない真似事だ。

千冬姉が教えてくれた、刀を振るう心が、そこにはない。

だからその一撃は、あまりにも――

「軽いんだよ」

ギンツ！

腰から抜き放って横一閃、相手の刀を弾く。

そしてすぐさま上段に構え、唐竹の二閃目で断ち斬る。

千冬姉が教えてくれた心。

箒が魅せてくれた技。

シンが鍛えてくれた体。

俺が負ける道理は、存在しない。

「ぎ、ぎ……ガ……」

紫電が走り、黒いISが真つ二つに割れる。

そして、気を失うまでの一瞬に、俺とラウラの目が合った。

眼帯が外れ、あらわになった金色の左目と。

その目は弱り切っていて、まるで捨てられた子犬のように、俺には見えた。

「……自分には力しかないなんて、言うなよ」

ラウラが力なく倒れる直前、その小さな体を、できるだけ優しく抱き止める。

「お前のために、シンはあんなに、頑張ってくれたんだからさ」

それでもまだ、力しかないと思うのなら。自分が空っぽだと思おうのなら。

これから、手に入れていけばいいさ。

きつとみんな、色々なものを与えてくれる。

なにせこの学園には、お人好しが大勢いるんだから。

力とは、なにか。

強さとは、なにか。

私が求めているものは——一体、なんなのか。

『さあな。それが分かれば、苦労はないよ。力が欲しいやつ、強くなりたいやつは、みんなそれを探してるんじゃないのか？』

……そう、なのか？

『まあ、それを探し続けているうちに強くなるって、誰かさんは言うってたけどな』

……探す……。

『若いうちの苦労は買ってでもしろって言うだろう？ そうやって、一つ一つ乗り越えてくたび、強くなれるんじゃないか？』

……乗り、越える……。

『嫌なこととか辛いこととか、苦しいこととか……色々あるけどさ。全部逃げてたら、きつといつまでも、強くはなれない。まずは、ぶつかってみないと』

……ぶつかる……。

『ぶつかって、失敗して、挫けて……ちよつと休んだら、またぶつかって。そして、いつか乗り越える。そうやって、少しずつ、前に進むんだ』

……何故だ……？ 何故お前は、そうまでして強く在ろうとする？
『弱いからだよ。弱いのが、嫌だからだ』

……弱い？ お前が……？

『ああ、弱い。俺はまだ、無知で、無力で、無謀な——ただのクソガキ
さ。俺が求める強さには、まだまだ全然足りない』

……お前が求める、強さ……？

『俺はまだまだ、強くならなきゃならない。強くなって、どうしても負
かしたいやつがいるからな』

……負かしたいやつ……？ 誰だ、それは……？

『教えてやらねえよ。俺にだって、意地くらいある』

……意地……？

『そう、意地さ。男が意地をなくしたら、そりやもう男じゃねえよ』

……男じゃ、ない……？

『今じゃ男は弱いつて言われてるけどさ。昔はそうじゃなかった。男
は、強かったんだ。だから俺も、強くなりたいのさ』

……強く、になりたい……？

『ああ、強くなりたい。強くなりたいよ。強くなって、どうしても——
守りたいヤツがいるんだ』

……守りたい……？ 負かしたいのでは、ないのか……？

『同じさ。俺の方が強ければ、そいつを守れるだろ？』

……守る……？

『俺のせいで誰かが傷つくなんて嫌だ。俺のせいで、誰かが犠牲にな
るなんて耐えられない。だから、俺が守りたい』

……守りたい……？

『守りたい。もう二度と、失いたくない。だから、俺の全てを使って、
戦うんだ』

……戦う……？

『暴力じゃ何も解決できない。けれど暴力に対抗できるのは、暴力
だけだ。だから、俺が暴力を担う。みんなが、暴力を背負う必要がな
いように』

……だから、戦うのか……？

『そうさ。剣は所詮暴力だ。人を傷つけ、殺す術が、剣術だ』
……殺す、術……。

『それが真実だよ。……だから、俺が証明するのさ。暴力でも、何かを
為せるって。……剣術は、人を傷つけ殺すだけの術じゃないって』
……証明……。

『あの人たちが持つている力。それが素晴らしいものだって、証明す
る。……守りたいんだよ。命だけじゃなく、あの人たちの、誇りを』
……誇り……。

『お前は、自分には力しかないって言ったよな。ならその力を、誇りに
想えるように——一緒に、強くなろうぜ』

……強く、なる……。

『それでももし、お前が、自分には力しかないって言うのなら。お前の
力を、俺が証明してやる。お前のことも、守ってみせるよ——ラウラ』
言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

そうか、これが……。

これが、この男の、「強さ」か。

なるほど、こいつの前では、私はただの、無力な少女だ。

……強く、なりたい。

こいつのように、織斑一夏のように。

私も、誰かを守るほどに。

強く、なりたい。

強くなって——こいつに、認めてもらいたい。

私には、まだ、分からないけれど。

この気持ちは、きつと——「恋」というやつなのかも、知れないな。

「う、あ……」

天井から降りてくる光を感じて、私は目を覚ました。

白い部屋。ここは……保健室か……？

「気がついたか」

聞き覚えのある声。

いつどこで聞こうと、それが誰の声か、私は一瞬で判断できる。

私が敬愛してやまない教官——織斑千冬の声。

「私……は……？」

「全身の筋肉にかなりの負荷がかかっている。骨にもな。しばらくは大人しくしている」

教官はそれとなくはぐらかしたつもりなのだろうが、私には分かる。

私は、ずっと教官を追い続けていたのだから。

「何が……起きたのですか……？」

体を起こそうとしたが、全身に痛みが走り動けなかった。

それでも、瞳だけは真つ直ぐに教官に向ける。

眼帯が外れあらわになった、この忌々しい左目——〔越界の瞳〕
を。

「……ふう。まったく、これは本来、話していいことではないのだがな」

私はその程度で引き下がる相手ではないことを、教官は知っている。

だから教官は、他言無用であることを沈黙で伝えてから、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「VTシステムは知っているな？」

……知っている。正式名称、「ヴァルキリー・トレース・システム」。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きを模倣するシステム。

だがそれは、アラスカ条約によりどの国家・組織・企業においても、研究・開発・使用すべてが禁止されている。

……それが、シユヴァルツェア・レーゲンに積まれていたということとか。

「巧妙に隠されてはいたがな。条件が揃った時にのみ、起動するようになっていたようだ」

「……条件……？」

「深刻な機体ダメージ。操縦者の精神状態。……そして、願望。お前

自身が願うこと、それが最後の起動キーになっていた」

……願望。

それには、心当たりがある。

「私が……望んだから……」

あなたに、なることを。

ずっと憧れていた、教官のような、最強の存在になることを。

その言葉は、口にしなかった。

けれど、教官には伝わった。

「……ふん」

「……」

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

突然名前を呼ばれ、驚きと習慣で顔を上げる。

私の目に入った教官の顔。

初めて見る、筈なのに。

私は、これと良く似た顔を。

いつだったか——

「お前は……「誰」だ？」

「……わ、私は……私……は……」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

それが、私の名前。

そして私にとって、名前など……ただの、記号だ。

ならば、私は誰だ？

私は一体、誰なんだ——？

「……答えられんか。まあ、誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。ラウラ・ボーデヴィツヒの道を探し、見つけ、歩むがいい。

……この学園に在籍している限り、国も軍も手は出せん。ここならば、きつと——他の誰でもない、お前だけの道があるだろう」

「……あ……」

もしかして……励まして、くれたのか？

教官が、私を？

突然のことに混乱して、何を言えばいいのかわからない。

そして教官は、そんな私を置いて去っていかうとする。

「ああ、それから」

そして教官は、ドアに手をかけたところで、振り向くことなく、再度言葉を投げかけてきた。

「井上には感謝しておけよ。あいつは最後まで、お前のために戦った。お前は試合開始と同時にあいつのことを忘れたようだが、あいつは、最後まで——お前の、相棒だった」

——井上、真改。

私が、倒そうとしていた女。

あいつはただ、織斑一夏と戦うために、私と組んだのではなかったのか……？

「生真面目なやつだからな、井上は。お前と組んだ以上、お前の相棒として、役目を果たしたかったんだろう。」

……いや。そんなことは関係ないか」

ふっ、と。

教官は、ひとつ笑って。

「放っておけなかったんだろうさ、あいつは。」

……お前は、まるきり、ガキだったからな」

それだけ言って、今度こそ教官は去っていった。

「ふ、ふふ……ははっ」

教官が去って数分後、私は急におかしくなって、笑い出してしまった。

まったく、なんてズルい姉弟だろう。二人揃って、言いたいことだけ言って逃げた。

「ははは……ふふ、ふふふ……」

笑いが漏れるたびに全身が引きつるように痛かったが、それさえも嬉しいと感じた。

そうしてさらに数分、笑っていると。

「……失礼……」

急に、井上が部屋に入ってきた。

私の笑い声を聞かれたか、と思ったが、しかし井上相手には関係あるまいと思い直した。

「……何の用だ？」

「……………」

井上は黙ったまま、ベッドの横に座る。

沈黙。

それがどういうわけか、心地良くて。

「……敗北……」

「……ああ、負けたな」

そう。

……私の、負けだ。

「……否……」

「……………」

しかし井上は否定した。

それはきつと、井上にできる、精一杯の即答だったのだろう。

「……己たちの、敗北……」

「……お前、は……」

まだ、私を。

相棒と、言ってくれるのか。

「……不足……」

「……そうだな。私の——」

……いや。私の、ではない。

「——私たちの、力不足だ」

「……………」

私の言葉に、井上は満足そうに目を閉じた。

そしてまた数分が経ち、井上が口を開く。

「……次は、勝つ……」

「……ああ。次こそは、私たちが勝つ。……あいつを、負かしてやる」

「……………」

そして目を開き、真っ直ぐに私を見て、言った。

思えば、井上は。

いつだって、私のことを——私自身のことを、見つめていた。

「……まだ……己に、挑むか……？」

思わず笑いそうになった。

……いや、私は実際に笑っていただろう。

「まさか。……相棒と戦う理由など、私にはない」

「……………」

そして、井上も。

ほんの少しだけ、笑っていたような、気がした。

第22話 役目（場外乱闘編）

学年別トーナメントの第一戦——つまりは一夏&シャルロットペア対ラウラ&真改ペアの試合が終わり、その直後に発生した問題も一応解決し、さらには医務室での談話を終えてからしばらくして。

ベッドの上で体を休めながら、ラウラは悶々としていた。

（むう……これが恋というやつか……？）

そう、ラウラは恋をしていた。そしてそれを自覚していた。

相手は自らを負かした男、名を織斑一夏。ラウラが敬愛して止まない教官、織斑千冬の弟であり、世界で唯一ISを動かせる男である。

ちなみにほんの数時間前までは感情の全てを憎しみに染め上げて排除しにかかっていた相手でもあるのだが、それはもう過去の話であつた。

（だが、どうすればいい？ 生まれてこのかた、軍事訓練ばかりに明け暮れていたからな……。見当もつかん）

軍用の遺伝子強化試験体であるラウラは、世間一般の少女たちとはまったく違う人生を送ってきた。

両親などいなく、友人と言える存在もない。学校に通ったこともなく、必要な知識は全て訓練の一環として教えられてきた。

……当然、恋愛経験など皆無なわけで。「恋心」という初めての敵、「恋愛」という初めての戦場に、必勝の戦略を見いだせないでいた。

（むう……そうだな、ここは……）

だが今回の敗戦を経て、ラウラは学んだ。

一人で出来ることには限界がある。ならば力を借りればいい。

というわけで、ラウラは自らの専用機、シユヴァルツェア・レーゲンを使い、緊急暗号通信（実際はただのプライベート・チャネルなのだ）、その秘匿性の高さは軍用としても十分以上である）を開いた。

通信相手はラウラが隊長を務める特殊部隊、名実ともにドイツ軍最強の部隊である「シユヴァルツェ・ハーゼ」の副隊長、クラリツサ・ハルフオーフ大尉であつた。

『受諾。クラリツサ・ハルフオーフ大尉です』

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ」

ラウラが名乗った瞬間、クラリツサの気配が冷たくなった。自分と千冬以外の全てを見下しているかのような態度のラウラは、部隊内でも好かれてはいないのである。

『ああ……隊長。どうしました？ 本日はIS学園の学年別トーナメントが開催されていると記憶していますが』

「ああ、その通りだ。先ほど、私の一回戦が終わった」

『そうですか。それで、二回戦の相手は？ 損耗は問題のないレベルですか？』

しかしいくら嫌われていようと、ラウラの実力は部隊内の誰もが認めている。素人同然の一般生徒や所詮は軍人ではない他国の代表候補生に負けるなど、微塵も考えてはいなかった。

故に、続くラウラの言葉はクラリツサに衝撃を与えた。

「いや、私は負けた。二回戦は、私にはない」

『な……!? 負けたのですか!? 隊長が!?』

ラウラが決勝、若しくは準決勝などで負けたのなら、クラリツサは散々嫌味を言ってやるつもりだった。しかしそれさえも確率は天文学的なものだと思っていたのに、まさかの初戦敗退。

あまりの驚きに、クラリツサはラウラへの嫌悪も忘れて問いただした。

『なにがあつたのですか!? 相手は……いや、今年のトーナメントはタッグになったのでしたね、ではまさか、味方の裏切りが……!?』

「違うっ!!」

『……!!?』

クラリツサの言葉に、ラウラは思わず声を荒げた。その声にクラリツサが、そして声をあげたラウラ自身が驚いた。

『……隊長?』

「……すまない」

『……いえ。ですが、どうしたのですか？ 裏切り、に反応したようですが……?』

裏切り。

ラウラはその言葉を反芻する。

最初から最後までラウラの相棒として、機能停止寸前まで追い詰められても戦い抜いた、井上真改。

そしてその真改を意識の外に追いやって、一切連携をとろうとしなかったラウラ・ボーデヴィツヒ。

裏切りとは違うかも知れないが、足を引っ張ったのはどちらか、考えるまでもない。

「井上は良く戦ってくれた。負けたのは私の責任だ」

『……ふむ』

クラリツサはそんな風に頷きながら、しかし内心はまだ驚いていた。

（あの隊長が、織斑教官以外の人間を認めるとは）

その驚愕を隠しながら、クラリツサは質問を続ける。

『失礼しました。それでは、隊長の敗因は？ それほどまでに、相手は強かったのですか？』

「ああ……そうだな。強かった」

『……そうですか』

負けたというのに、どういうわけか嬉しそうなラウラの声色に何かを感じたクラリツサは、それ以上訊くのをやめた。

『……分かりました。ところで隊長、何故通信を？ 試合結果については報告書を提出することになっていたはずでは？』

「いや、報告ではないのだ。クラリツサ、実はお前に、個人的な相談があつてな」

『……ほう』

なんだろう、すごく、ものすごく興味がある。

人格はともかくとして、容姿は自分の好みどストライクなラウラからの相談。

今までにそんなことは一度もなかったこともあつて、クラリツサは大変興味を持った。

『相談、ですか？ どういった内容で？』

「うむ、それなんだが、その、な……」

ごによごによと言うラウラ。

怪訝に思うクラリツサ。

そして数分。

「……………好きな男が、できた……………」

『……………は？』

「き……………気を引く、には……………ど、どうしたら、いいんだ……………」

『……………ふむ』

クラリツサはひとつ頷いて、ポケットから取り出したハンカチで鼻を拭く。

しかしその鼻から流れる血が止まる様子はない。

『ごちそうさまでした』

「は？」

『いえ、こちらの話です。……………ふむ、男の気を引くにはどうすればいいか、ですか……………』

そしてクラリツサの頭がフル回転を始める。

その脳内では彼女が今までに視聴してきた作品のセリフ、演出が参考資料として吹き荒れていた!!

『隊長、日本では伝統として、気に入った相手を自分の嫁にする風習があります』

「嫁……………」

『そう、嫁です。そして相手の気を引く一番の方法は、自分の存在を刻みつけることです!』

「き、刻みつけるだと……………」

ラウラは混乱した。

刻みつけると言われてラウラが想像できるのは、物騒なことばかりだったからだ。

『相手の印象に、隊長の存在を強烈に残すのです。そして、そのための手段は——』

「手段は……………」

『——隊長の、ファーストキスを捧げるのですっ!!』

ちゅどーん!!

クラリツサの後ろで何かが発火した、ような気がした。
いや多分錯覚だと思うが。

「わ、私の……ファーストキスだと……!?!」

『そうですっ！ 多少強引でも構いません、相手の唇を奪うのです、隊長っ!!』

「なんと……!」

『そうすれば、相手は必ず隊長のことを意識します！ そしてもし、相手もファーストキスであったなら、その効果はさらに高まりますっ!!』

「そ、そんな手が……!」

ラウラは驚愕した。

そして感動した。

まさかこんなにも身近に、これほど頼りになる者がいたとは……!

「感謝する、クラリツサ！ お前の助言、決して無駄にはしない!」

『礼には及びません、隊長。私はあなたの部下です、あなたの力になることは、私の義務ですから』

そしてクラリツサも感動していた。

まさかあの隊長に、こんなにも可愛らしい一面があったとは……!

「うむ、ではクラリツサ、もうひとつ質問があるのだが!」

『なんなりと！ お答えします、隊長っ!!』

感動のあまりテンションがおかしいことになっていますがご容赦ください。

「もう一人、気になる相手がいるのだが」

『む……二股ですか？ それはあまり感心できませんね』

「いや、この相手は男ではなくてな……」

『………ほほう』

クラリツサはポケットからハンカチを取り出して以下略。

『……百合の花とは、美しいものですね』

「お前はなにを言っているんだ?」

『隊長、気になる相手と言いましたね？ 好きというわけではないのですか?』

ラウラの疑問も無視して質問をし始めるクラリツサ。

今彼女は、過去22年の人生の中で最も充実していた。

「好き、というのとは違うと思う。……むう、これは、なんと云えばいいのか……」

『では隊長、その方が気になるようになった経緯からお聞かせください』

「分かった。……そいつは井上真改という名でな、学年別トーナメントで、私の相棒だったのだが」

『相棒、ですか』

その言葉に親愛が込められているのを感じたクラリツサは、すぐさま自分の脳内に検索をかけた。

それと並行してラウラからさらなる情報を聞き出す。

『ふむ……先ほど隊長は、「井上は良く戦ってくれた」と言いましたね』
「ああ。……私は井上と組んでいながら、一人で戦っていた。だが井上は、そんな私のために最後まで戦い、試合のあと私のことを相棒と呼んでくれた」

『なるほど。つまり隊長は、その井上真改に、自分も相棒として応えたい、』と』

「そ、そうだ！　まさしくその通りだ、クラリツサ」

「ここまで聞いたクラリツサは検索を完了、ヒットした言葉にニヤリと笑う。

『隊長、相棒として信頼関係を築きたいのでしたら、ひとついい案があります』

「む……？　それは、どんな……？」

『呼び名です。気に入った相手を嫁と呼ぶように、日本には、特に信頼を寄せる相棒に対する呼び方があります』

「おお……是非教えてくれ！」

『それでは隊長、今度からその井上真改を、こう呼んでください——』

——こうしてクラリツサは、後に真改から敵として認識されることになるのだった。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上——』

「……………なん……………ですって……………?」

食堂で夕食を食べながらテレビでその連絡事項を聞いた鈴とセシリアは愕然とした。

「トーナメントが……………」

「……………中止?」

「それなら……………」

「……………一夏との、デートは……………?」

もちろんなし。というか元々そんなものはなかった。

だが一回戦の準備をやる気満々で進めているところに試合中止のアナウンスを聞き、なんだよいきなり出鼻を挫きやがってと思いがら避難してきたらこのニュースである。二人の受けた衝撃は相当なものだった。

……………ちなみに一夏に恋心を抱くもう一人の少女、篠ノ之箒は——

「…………………………」

……………返事がない。ただの屍のようだ。

「…………………………」

「…………………………」

「…………………………」

「…………………………」

三人が立ち直る気配はない。学内ニュースの終わったテレビを魂の抜けた顔で眺めている。

「……………デート……………」

「……………一夏さんの……………」

「……………デートが……………」

ちなみにこの三人、当然というか、トーナメント参加のためのペア

にまず一夏を誘った。しかし返ってきたのは「悪い、俺、シャルと組むから」という無情な言葉。

しばらく粘ってみたが「けどもう申請しちまったし」とのことで、まあ男と組むならいいかと渋々納得した。

……シャルロットの真実を知ればどれほど怒り狂うか、それは想像にお任せする。

そして一夏にペアを断られた三人は、揃って同じ行動を取った。つまり、「一夏がダメなら真改と組もう」と考えたのである。

その時の遣り取りを掻い摘んで説明すると――

「シン！ 学年別トーナメント、あたしと組もう！」

「わたくしと組んでください、真改さん！ 必ずやお役に立ちますわ！」

「真改、私と共に戦ってくれ！ お前となら、優勝も狙える……！」

「……不可……」

「「な……なんで……!?!」」

「……先約……」

「「だ、誰と……?」」

「……」

答えるつもりはない、ということを理解した三人は、真改の頑固さも知っているので諦めることにした。

……しかし真改のペアについて真実を知れば以下略。

「それではわたくしは……一体誰と組めば……」

「ティナと組もうかな……いや、本音とつていうのも……けどあの子って強い……?」

「……どうしよう……」

「……」

こうして三人はペア探しを始めた。

結論から言うと、戦闘スタイルの相性からセシリアと箒が組み（相手が思いつかずにいた箒にセシリアが声をかけた。ついでに真改のことを色々聞き出そうと企んでいたようだ）、鈴はルームメイトのティナ・ハミルトンが既にペアを決めていたので本音と組んだ。

トーナメントまでの間訓練に明け暮れ、セシリアと箒は優勝した後の一夏とのデート権を巡って度々殴り合い、鈴はマイペース過ぎる本音と組んだことをちよつとだけ後悔した。

そうして準備万端、ようし殺るぞ！ と意気込んでいたら、前述の通りトーナメントが中止になったのである。

「ふ……ふふふ……」

「うふふ……ふ、ふふふ……」

「ふふふ……ふ……」

「「あははははははは……」」

渴ききつた虚ろな笑い声をあげる三人の姿は周囲の生徒たちを怯えさせ、自分たち以外誰もいなくなった食堂で、三人はしばらくの間笑い続けていた。

学年別トーナメント一回戦の翌日。

一夏に頭突きをかました際に切れた額に包帯を巻いた己が教室に入ると、いきなりセシリアと箒が詰め寄ってきた。

「真改さん！ どういうことですよっ!?!」

「どういうことだ、真改!」

「……?」

お前たちがどういうことだ。説明しろ、意味がわからん。

「聞きましたわよ！ 学年別トーナメント、ボーデヴィツヒさんと組んだそうですわね!」

「……応……」

「何故だ!?! 私とのペアを断ってまで……!」

……ああ、それか。

「……お前のことだ、何かしら理由はあるのだろうか、その理由を教えてください」

「是非とも、ええ、是非とも教えていただきたいですわね」

「……黙秘……」

「な……!?!」

いきなり驚く二人。なんだ、意味分からんぞ。

「どうあつても話すつもりはないようだな……」

「ええ、まさかわざわざ言葉にするだなんて……」

「……………」

そこか。お前たちは己をなんだと思っているんだ。

さてこの尋問はいつまで続くのか、と思っていると、山田先生が教室に入ってきた。

「……みなさくん……おはようございませう……」

山田先生は朝から目が死んでいた。一体なにがあつたと言うのか。

「ええとですね……今日は……転校生? を紹介します。……ええと……いろいろいたいこともあると思いますが……とにかく、お願いします」

……なるほど。道理で先ほど、聞き覚えのある足音が教室の前で止まったわけだ。

「じゃあ、入ってください」

「はい」

その声は、想像通りのもので。

扉を開け、教室に入ってきたのは。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

その姿は、想像通りスカートを履いた、少女としてのシャルであった。

「……ええと、デュノア君はデュノアさんでした、ということですよ。

はああ……最近イベントてんこもりで、目が回りそうです……」

そんな風に肩を落とす山田先生を余所に、シャルは己と目を合わす。

そして小さく微笑んで、

『これからもよろしくね。……シン』

『……応……』

プライベート・チャンネル。

これで、ようやく——素になれるな、シャル。

しかしそんな感動の場面は一瞬で終わった。

「え？ デュノア君って女……？」

「そ、そんな……せつかくの美少年が……」

「……むしろこっちの方が良い」

「つて、織斑君、同室なんだからまさか知らないってことは——」

「まさか、あんなことやこんなことが……!？」

ザワザワザワツ！

騒がしくなる教室。

いつもそれを鎮める千冬さんはまだ来ない。昨日の事後処理で忙しいのかもしれない。

バシーン！ と、突然教室の扉が凄まじい勢いで開く。

……良く壊れなかったものだ、中々に根性のある扉だ。

「一夏あつ!!」

鈴が殴り込んできた。その全身からオーラが見えそうなくらいの殺意を溢れさせている。

「死ねっ!!」

そして実際に溢れ出した殺意が衝撃砲の弾丸となり、一夏に迫る。流星にこれはまずいと思ったが、朧月は昨日の損傷が激しくまだ展開できない。

しかたない、危険な賭けとなるが、部分展開した月光でなんとか凌ごうと判断、一夏の前に出たが、その己のさらに前に黒いISが立ちふさがった。

その操縦者は——

「ら、ラウラ……？」

一夏の呆然とした声。

その言葉通り、そこにいたのはドイツ代表候補生、学年別トーナメントにおける己の相棒、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

おそらく、AICで衝撃砲を止めたのだろう。

「サンキュ、助かったぜ。……っていかお前のIS、もう直ったのか

? かなりボロボロだったのに」

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備のパーツで組み直した」

「へえ。そうなん——むぐっ!」

一夏の言葉を遮るように。

いきなり、ラウラが一夏の唇を奪った。

!?…!?…!?…流石にこれには面食らった。

「?!?!」

目を白黒させる一夏。

あんぐりする一年一組一同十鈴。

この瞬間、たしかにこの教室内の時間は止まっていた。

「お、お前は私の嫁にする! 決定事項だ! 異論は認めん!」

「……嫁? 婿じゃなくて?」

「日本では気に入った相手を嫁にするというのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

「いやそんな習わし聞いたことないから」

わけのわからないことを言うラウラに、妙な突っ込みを入れる一夏。

……誰だ、こいつにこんなことを吹き込んだ阿呆は。

「あっ、あっ、あっ……!」

怒りのあまり声が出ない様子の鈴。しかしラウラはそんなものは目もくれず、今度は己に向き合った。

「井上真改、学年別トーナメントではすまなかつた。謝罪させてくれそう言つてペコリと頭を下げるラウラ。

……驚いた、随分素直だな。

「死ねええええつ!!」

「わあああつ!! バカ、やめろ!! 死ぬ! マジで死ぬからつ!!」

「だからっ! 死ねつて!! 言つてんでしようがああああつ!!!」

「お前は私の相棒としての役目を果たしてくれた。私はお前に、あれだけのことをしたと言うのに」

沈痛な声で言うラウラ。かつてのことを悔いているのだろう。

「一夏さん？ どういうことか、話していただけませんか？ 今すぐ、じつくり、根掘り葉掘り、ね……？」

「ひ、ひいいい……!!？」

「過去のことは変えられん。だから私は、これからの行動で、お前に償いたい。」

——今度こそは、私も、お前の相棒になりたい」

顔を上げたラウラは、真っ直ぐに己を見て言った。

だから己も、ラウラを真っ直ぐに見返し、話を聞いた。

「一夏、腹を切れ。介錯してやる」

「ざけんなっ!! なんて俺が腹切らなきゃならねえんだっ!!」

「男だろう、潔く死ね」

「意味わかんねえよっ!!」

「私もまだまだ未熟だと痛感した。だから私は、強くなる。お前の相棒として、恥ずかしくないように」

決意の眼差し。

誓いの言葉。

なるほど、やはりこいつは——千冬さんの、教え子だ。

「まったく一夏ったら、悪い子だなあ。人前で女の子とキスしちゃうなんて」

「いや、俺がしたんじゃない！ されたんだ!!」

「言い訳までするなんて、これはお仕置きが必要だね。……抉らせてもらうよ、一夏♪」

「ぎゃあああああっ!!？」

「力を貸してくれないか——井上、真改」

差し出された右手。

それを取ろうと、己も手を伸ばす。

互いの手が触れ合う瞬間、ラウラは己の手を取り、同時にその場で
跪き——

——己の手の甲に、口付けをした。

「……………は……………??」

再び教室内の時間が止まる。己の思考も止まる。

「……………誓いをここに。これより私は、お前の相棒として、お前と共に戦う。お前の剣となり、盾となる。……………これから、よろしく頼む——マスター」

「…………………………」

「……………はあああああああああつっつ」

!!??!?!?!??

……………誰だ、こいつに、こんなことを、吹き込んだ、阿呆は。出て来い、斬って捨ててやる。

さて、大変な事態になったが、今日はまだまだ終わらない。中断されていた学年別トーナメントの一回戦が行われるのである。

戦場は第三アリーナ、対戦カードはセシリア・オルコット&篠ノ之箒ペア対凰鈴音&布仏本音ペア。

試合はまだ始まっていないというのに、目に見えそうなほどの殺気が渦巻いている。

「……………うふふふふふふ……………」

「お、みんなやる気満々だね」

その殺気を直近で浴びている本音はまったく動じていない。そんな本音を観客席から見ていた真改は感嘆半分、呆れ半分といった顔をしている。

「アンタたちには恨みは……………ちよつとあるけど、でもこれはそんなじゃない。ただの、八つ当たりよ」

「奇遇だな。私もちよつと、憂さ晴らしがしたいと思っていたところだ」

「わたくしも同じですわ。やっぱりストレス解消には、思い切り暴れるのが一番ですから」

「うくん、みんな苦勞してるんだね〜」

にへら、と笑う本音の姿に、観客席に集まったギャラリーたちは一様に思った。

——この娘、ただ者じゃねえ。

「じゃあ、始めますか」

「ああ、始めるか」

「ええ、始めましょう」

「よ〜い、スタート〜」

そして試合開始のブザーが鳴る。

「はあああああつ!!」

気合いと共に、箒の打鉄と鈴の甲龍が一気に前進、手にした得物をぶつけ合う。

軍配は甲龍に上がった。やはり訓練機では専用機、それもパワータイプと打ち合うのは厳しいものがある。

「貧弱！ 貧弱ウツ！」

「ぬう………！」

弾き飛ばされる箒。しかしその直後、鈴を五条の閃光が撃ち抜いた。

「わたくしを忘れてもらっては困りますわ！」

「セシリア………！」

セシリアのブルー・ティアーズ、その同名の特殊兵器と大型レーザーライフル、スターライトmkⅢによる一斉射撃である。

「やっつけてくれるじゃない………！」

「行くぞ、鈴！」

「お行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

鈴は双天牙月で箒の近接ブレードを捌きながら、衝撃砲でセシリアを狙う。

しかし箒の打鉄は性能で鈴の甲龍に劣っているが、箒自身の剣腕は片手間で抑え切れるものではない。

ならばなぜ、鈴が二人同時に相手出来ているかというところ――

「えい！」

ドンドンドンドンッ!

鈴は一人で戦っているのではない、ラファール・リヴアイヴを装着した本音による、援護射撃があるからだ。

「くっ……い！」

「ナイス、本音！」

本音の射撃技術はそれほど高くはない。優れた戦術や戦略眼があるわけでもない。

だがなんというか、鈴が欲しいと思った時と場所に弾が来る、言うなれば「痒いところに手が届く」援護だった。

『ああもうアンタは、トロくてマイペースなくせに、なんでこうまで合わせてくんのよ！』

『わくん、りんりんがいじめる〜』

『頼もしいって言うてんの!!』

本音の戦闘力は低い。単機ではすぐに落とされるだろう。

だが誰かと組んだ時、本音の気遣いと観察力は大きな力となる。

「なら先に本音さんを……い！」

「うわあ！」

セシリアは狙いを本音に定めた。

だがその瞬間、援護の薄くなった筈に、鈴の猛攻が襲い掛かる。

「もらったあつ！」

「ぐあつ！」

双天牙月と衝撃砲の波状攻撃。ブレード一本と打鉄の性能で凌ぎきれぬものではない。

鈴は筈を吹き飛ばし、その隙にセシリアへ向け衝撃砲を放つ。

「本音はやらせないわよっ！」

「わく、りんりんかっこいい〜」

「緊張感無いわねアンタ!？」

セシリアは衝撃砲をかわすと、レーザーライフルで鈴を迎撃しつつ、ビットで本音を追い立てる。

「く、腕上げたわね……！」

「日々の訓練の賜物ですわ！」

多大な集中が必要なビツトを操りながらの正確な射撃は、かつてのセシリアには出来なかったことだ。

今ではそれを、回避行動まで交えながら行える。

「真改さんとの訓練で得た力、とくと味わいなさいっ！」

「上等おおおっ!!」

セシリアに踊りかかる鈴の背中を、箒が睨み付ける。

中距離射撃特化のブルー・ティアーズが甲龍に接近されては戦いにならない。

故にセシリアを援護すべく突撃をかけようとし——その背中に、銃弾を受けた。

「なに?」

「失礼しまゝす」

本音の攻撃だ。

箒の意図を見抜き、ビツトの攻撃を受けつつも鈴の援護に回ったその判断に、箒は幼なじみの姿を重ねた。

「いいだろう、ならばお前から斬るっ！」

セシリアが鈴の攻撃に耐えている間に、一刻も早く本音を墜とす。そして二人で、鈴を倒す。

本音の援護の厄介さを理解した上での、迅速な判断であった。

『すぐに行くぞ! それまで耐えろ、セシリア!』

『この程度で心配されるなんて……侮られたものですわね。わたくしも、ブルー・ティアーズも』

その言葉にニヤリと笑い、箒は本音に向き合う。

その鋭い眼光に、本音は銃弾で応えた。

「……負けないよ……」

間延びした言葉。

それに、精一杯の力を込めて。

「私は、いのつちの戦いを、ずっと見てたんだから……！」
最後まで、絶対に諦めない。

たどえそれが、明らかに格上の相手でも。

「そうよねえ、負けらんないわよねえっ!!」

「ええ、負けられせんわ!!」

「ああ、負けられん!!」

負けられない。

負けたくない。

たどえ何を得られなくとも、力の限りを尽くして得た勝利そのものに価値がある。

「「勝つのは……」」

だから、最後まで、全力を尽くす。そして相棒と、勝利の喜びを分かち合うのだ。

「わたくしたちですわっ!」

「あたしたちよっ!」

「私たちだっ!」

「私たちだよっ!」

猛々しい笑みを浮かべ、四人の少女は闘志を燃やす。

手にした得物を握り締め、一斉に突撃を開始した。

箒は焦っていた。

すぐにでも本音を倒しセシリアの援護に向かわなければならぬというのに、本音が実によく粘っているからだ。

「くっ、しぶとい……!」

「はあ、はあ、まだまだ、はあ、行けるよっ」

本音の戦い方は消極的だった。箒が突撃してくれば背中を見せてでも距離をとり、箒がセシリアの援護に向かおうとした時だけ攻撃する。

徹底的に箒の邪魔をし、しかし倒そうとはしていない。

完全に、「負けないたための戦い方」だった。

(見掛けによらず、強かなやつだ)

卑怯とは微塵も思わない。

自分の役目、自分に出来ることを正確に見極め、自覚し、全身全霊でそれを為す――

そんな本音を卑怯と呼ぶなど、箒には口が裂けても不可能だった。

(ならば、私が為すべきことは……！)

ビットの攻撃により本音のラファール・リヴァイヴはかなり消耗しているが、それでも今すぐに倒せるほどではない。

だがセシリアは、もう限界だろう。

(私の、役目はっ!!)

箒は本音に背中を向ける。すかさず銃撃を受けるが、まだ打鉄のシールドエネルギーには余裕がある。今は無視だ。

「はあああっ！」

近接ブレードを腰溜めに構え、セシリアと戦う鈴に突撃する。セシリアは既にボロボロだったが、それでも必死に食い下がっていた。

『待たせたな！』

『あら、もう少しで勝てるどころでしたわよ？』

その軽口に苦笑を浮かべ、そしてその防戦に報いるべく。

「食らええええっ!!」

「きやああっ!!」

ズガアアッ!

鈴の背中から、ブレードを突き立てる。そのまま鈴を羽交い締めにし、セシリアに言った。

「今だっ!! 私ごと撃て、セシリアアアアッ!!」

「な、アンタ……!?!」

「遠慮はしませんわよ、箒さん!!」

箒の覚悟に応え、セシリアはレーザーライフルを構える。一瞬も躊躇わずに発射し――外した。

「な……!?!」

「りんりんっ！」

本音の射撃により、僅かに照準をズラされたことが原因だった。

『ごめん、りんりん！ 逃がしちゃった!!』

『今アンタに文句言ったらバチが当たるわよっ!!』

セシリアはすぐさま照準を修正、同時に今度こそ仕留めるべく、ミサイル型のビットを起動。

しかしその、本音が稼いだ一瞬の時間に、鈴の衝撃砲、「龍咆」が最大威力までチャージされる。

「りんりんっ!!」

「来るなあっ!!」

慌てて駆けつけようとする本音を、裂帛の気合いで押し留める。

そう、これはタッグ戦。どちらか片方でも残れば、勝ちだ。

『りんりん……』

『勝つわよ、本音。あたしと、アンタで』

『……うん……!』

だから、勝利のために鈴を見捨てることも。

本音の「優しさ」であり、「強さ」である。

「「おおおおおっ!!」「」

決して放すまいと、渾身の力で拘束を続ける筈。

逃げられないと悟り、ならばと道連れにすべく衝撃砲を放つ鈴。

その砲弾に怯むことなく、一斉射撃を行うセシリア。

三人の咆哮が重なった。

ドガアアアアアッ!!

「……天晴れだ、鈴」

「誉めてもなにも出ないわよ?」

「悔しいですわね、負けるのは……」

『打鉄、ブルー・ティアーズ、甲龍、シールドエネルギーゼロ。……勝者、凰鈴音、布仏本音ペア』

アリーナに響き渡ったアナウンス。

それを聞きもせず、落ちていく鈴に一直線に飛ぶ本音。

「りんりんっ!」

「やったわね、本音。……ほら、あたしは大丈夫だから。アイツに手え振ってあげなさいよ」

「え？」

鈴が指差した方を見ると、観客席に座る親友の姿があった。

「アイツ、アンタが戦う姿を、ずーっと心配そうに見てたわよ」

「……いのっち……」

歓声に包まれるアリーナで、真改は静かに口を開いた。

ハイパーセンサーのズーム機能で、その唇の動きを読む。

『おめでとう。良く戦ったな』

「……うん！　ありがとう、いのっち！」

花咲くような笑顔で、疲れた腕を元氣一杯に振る本音。

そんな少女に、真改も静かに、手を振り返した。

外伝2 自動人形は誰が為に踊る

「織斑一夏は学園に入学、クラスメイトには篠ノ之博士の妹にイギリス代表候補生。中国、フランス、ドイツも、候補生を転入させる準備をしてる……。」

やりすぎね、メルツェル」

「良く言う。誰が手間を掛けさせたのか」

「あら、なんのことかしら？」

「まあいい。なんにしても、これで準備は整ったわけだ」

「ええ。さあ、始めましょう？ 亡霊どもを誘き出して、一網打尽にしましょう」

「……亡霊、か」

「？ どうしたの？」

「いや、なんでもない。……では、ファントム・ハント亡霊狩りを始めよう」

(……胃に穴が開きそうだ……)

今俺は、世界最強にして女性にしか使えない兵器、インフィニット・ストラトス I S の操縦を学ぶための施設、I S 学園の入学式に出席している。

……ちなみに、俺は男だ。身も心も男だ。断じて女ではない。

なのに何故ここにいるのか。

答えは実に簡単、俺が男なのに I S を動かしたからだ。

その圧倒的な性能と女性にしか扱えないという特殊性から、世界を極端な女尊男卑に変えた I S、それを世界で初めて、そして唯一動かした男、それが俺だ。

俺が I S を動かしたニユースが流れた時、世界は揺れた。そりやもう揺れた。本物の宇宙人が捕まった時と同じくらい揺れた。まだ捕まってないけど。

(……胃に穴が……もう開いてるかも)

そんな俺は保護、監視、研究その他諸々の事情により強制的に I S

学園に入学させられたわけだが。当然周りは全員女、そんな中に一人だけ男、その扱いは丸きりUMAであった。

(早く……早く、終わってくれ……)

神聖な式典の最中であるにもかかわらず、周囲から俺に突き刺さる視線。

もはや物理的な圧力があるんじゃないか、これ？　なんか体が小さくなった気がするんだが。

「それでは最後に、本日は生徒会長が用事によりお休みのため、代わりに副会長から挨拶をお願いします」

(最後……やっと終わりか……)

ようやくこの視線地獄から解放される……。

そう思ったら、呼ばれて壇上上がった人物に驚いた。

「――生徒会副会長、メルツエルだ」

「……は……？」

その人は、俺の良く知る人物で。

「IS学園へようこそ。諸君の入学を歓迎する」

「メ……メル姉……？」

昔から世話になってる近所の二つ上のお姉さん、メル姉ことメルツエルだった。

「久しぶりだな、一夏。最後に会ったのは半年前か」

「ああ、それくらいかな」

放課後、突然教室までやって来たメル姉に誘われて、俺は食堂に来ていた。食事も終わり、今は食後のティータイムだ。

「また少し背が伸びたか？　顔立ちも、幾分精悍になったようだ」

「メル姉はあんま変わらないな」

「ふ……」

そう笑ってティーカップに口を付ける様は妙に様になっていた。

メル姉は色素の薄い金髪にシャープなシルバーフレームの眼鏡、理

知的な顔立ちの美人である。

小柄だがキチツとした服装と姿勢、切れ長の眼からは「出来る女」のオーラが放たれている。

「まさかISを動かすとはな。昔からなにかとやらかす奴だったが、流石に今回は驚かされた」

「メル姉こそ、生徒会の副会長やつてるなんて聞いてなかったぞ」

「言っていないかったか？」

「雑用係って言ってただろ」

「同じようなものだ」

「いや違うだろ、全然。」

「女ばかりの環境で大変だろうが、まあ頑張れ。私でよければ相談に乗ろう」

「……サンキュ、メル姉」

知り合い、それも付き合いの長い人がいてくれて助かった。孤立無援で生活するには、ここは厳し過ぎるぜ。

「時間を取らせて悪かった。もう部屋に戻って、荷物の整理をするといい」

「え？ いや、俺はしばらく家から通うんだけど」

「いや、お前は急遽寮に入ることになった。これが鍵だ」

そう言って鍵を渡される。どうやらこれはそのための呼び出しでもあったらしい。

「では、またな」

「ああ。会えて嬉しかったぜ、メル姉」

「私もだ、一夏」

そう言って颯爽と去って行くメル姉。その後ろ姿は実にカッコいい。

さて、じゃあ俺も部屋に行くか。……周囲の目も痛くなってきたし。

「どうだった？　一夏くんは」

「変わらん。悪事を働けるようには思えん」

「ふくん。じゃあそれはやっぱり、私たちの役目かな」

「お前がやる必要はない。それは私が引き受けよう」

「なに？　この更識楯無が、友達に汚れ役を押し付けると思うの？」

「お前は学園最強の生徒会長でありロシア代表、比べて私は一介の生徒にすぎん」

「副会長じゃない」

「会長とは天地の差だ。私なら、万一ことが公になっても私ごと切り捨てれば良い。だがお前では大きな混乱が起きるだろう。そんな隙を晒すわけにはいかない」

「……そんなこと、言わないでよ」

「お前は更識の当主だろう。前線で戦う雑兵に、目的のために死ねと命ずるのも、指揮官の仕事だ」

「……メルツエル」

「これは戦争だ。犠牲なくしては収められん」

「……………」

「亡国機業は強大だ。そしてそれだけの力がありながら、その姿を完全に隠している。まるで——」

「……メルツエル？」

「……いや。気にするな、ただの独り言だ。……ともかく、奴らは一筋縄で行く相手ではない。いざという時に切れる尻尾は多い方がいい」

「……私はこの学園の生徒会長よ。生徒を守る義務があるわ」

「だから、私を切れと言っている」

「……あなたも、この学園の生徒なのよ？」

「私のことはただの人形と思え。目的のために動くだけの、心のない自動人形と」

「……………」

「さて、お互いやることがあるだろう。今日はこちらでお開きとしよう」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットか。相手にとって不足はあるまい、一夏」

「不足どころか余りがでるよ」

売り言葉に買い言葉で決まった決闘に、メル姉は駆け付けてくれた。しかしどうも俺、過大評価されてる気がする。

「弱音とは男らしくないぞ、一夏」

「分かってるよ。やるからには勝ちに行くさ、全力でな」

幼なじみである箒の言葉に返事をする。

そう、千冬姉の弟として、無様な戦いは出来ない。相手が格上だからと言って、負けるつもりはない。

「メル姉、なんかアドバイスとかないか？」

「ない」

「……即答かよ」

「私の領分は戦術ではなく戦略だ。格上相手と正面から一対一になった時点で、私にとっては負けだ」

なるほど、「勝敗は戦う前に決まっている」ってやつか。メル姉らしい、含蓄のある言葉だ。

「だが勝敗は関係あるまい。お前はまだ素人、実戦経験を得ることが最重要だ」

「関係あるさ、男の意地がかかってるんだ」

それは俺にとっては当然のことだ。しかしその俺の言葉に、メル姉は眉根を寄せて辛そうに答える。

「意地、か。……私にはわからんな。お前の、言うことが」

「……メル姉……」

以前メル姉は言っていた。

——私には、ヒトの心がない、と。

「……じゃあしつかり見てなよ。メル姉の分まで、俺が戦ってくるぜ」
「では頼む。私はどうにも戦うのは苦手だな。悪巧みならば、得意なのだが」

そう言うメル姉は、いつものメル姉に戻っていた。まあ確かに、悪

巧みをさせたらメル姉の右に出る者は早々いない。

「勝つてこい、一夏」

「ああ、行ってくるぜ、箒」

さて、行くか。

——負けられない理由が、一つ増えちまったしな。

「雪片式型……それに零落白夜、か」

「織斑先生と同じね。姉弟だから……じゃあ説明つかないわよねえ」

「だろうな。二次移行前に単一能力が発動するのも、前代未聞だ」

「うくん……どうということかしら？」

「さあな。それについては門外漢だ」

「良く言うわよ、私のISを組んだクセに」

「半分はお前が組んだろうに。……白式の武装の謎はこの際どうでもいい。重要なのは、対IS戦において一夏は切り札足り得る、ということだ」

「……幼なじみの男の子まで、道具扱い？」

「目的のためには全てが駒だ。一夏も、箒も、鈴も、お前も——この私も」

「……いつかあなたにも、好きな人が出来たらいいわね」

「……どういう意味だ？」

「さあ。それは自分で考えてね」

「……ふむ、考えておこう。……さて、戦力のあては出来た。あとはどれだけ、代表候補生たちを引き入れられるか」

「うくん、少なくとも、セシリアちゃんはまだ大丈夫だと思うわよ」

「そうだな。一夏はそういう面でも役に立つ。亡国機業のことを考えれば、一夏自身はいつでも味方に出来るだろう」

「問題はタイミングね。一夏くんがある程度女の子を落としてからじゃないと、向こうから協力を申し出た、っていう形が作り難くなるもの」

「一夏自身も鍛える必要がある。いくら機体の性能が良くても、今のままでは使えん」

「それについては私がやるわ。折を見て、コーチを買って出る」
「急ぎ過ぎるなよ。あれだけの才能だ、潰すには惜しい」

「……ねえ、メルツエル」

「なんだ」

「あなたが一夏くんを気にかけるのは、彼が戦力になるから？」

「そうだが」

「……そう」

「……なんだ」

「なんでもないわ。ただあなたも、少しずつ、変わっていつてるんだな、って」

「久しぶりだな、鈴」

「メ、メルツエルさん!? わあ、お久しぶりです!」

転入初日、夜に学園に到着したあたしを、見知った顔が出迎えてくれた。

「相変わらず、元気そうでなによりだ」

「メルツエルさんも、お変わりないようで」

「ああ……変わらんよ、私は」

……なんだろう? 少し、気になる言い方だ。

「代表候補生になったそうだな。たった一年で、大した才能だ」

「いえ、そんなこと……」

飾らない賞賛の言葉に嬉しくなる。

メルツエルさんは所謂「大人の女性」といった感じの人で、昔から憧れていた。

同じく大人の女性な千冬さんは少し……いやかなり苦手だが、メルツエルさんには良くしてもらったこともあつて気軽に接することが出来る。

「時間も時間だからな、盛大な出迎えは出来ないが、許してくれ」
「いえ、そんな！ メルツエルさんだけで十分ですよ！」

「そうか。では寮に案内しよう」

そう言っただけで歩き出すメルツエルさん。

この人は運動はあまり得意じゃないけど、背筋をピンと伸ばして歩
く姿はカッコいい。その理知的な容姿と合わせて、スーツを着たら
きつとすごく似合うだろう。

「けどなんでメルツエルさんが？ それもこんな時間に」

「私では不足か？」

「いえ、そういうことではなくて！」

「生徒会の副会長だからな。これも仕事だ」

「……仕事、ですか……」

メルツエルさんが副会長と言うのには、驚く前に納得してしまっ
た。サポートや裏方は、メルツエルさんの能力を大いに発揮できるポ
ジションだ。

それよりも、あたしを出迎えたのを仕事と言われたことが少し
ショックだった。

「だが、役得とも言えるな。また会えて嬉しい、鈴」

「あ……あたしも嬉しいです、メルツエルさん」

「IS学園によろこそ、鈴。歓迎しよう」

……うん、メルツエルさんはやっぱりメルツエルさんだ。この頼り
になるお姉さんっぷりは、昔から変わっていない。

「これからよろしくお願いします、メルツエルさん！」

「随分懐かれてるわね、メルツエル」

「まあな」

「人の心は分からないんじゃないの？」

「分からんよ。だから、良く観察している」

「まるきり悪人のセリフよ、それ」

「善人に謀略家は務まらないからな」

「……せめて策士とか言いなさいよ」

「呼び名などどうでもいい。とにかく、今回は幸運にも私の知り合いだったが、次も上手くいくとは限らん。そして鈴も、まだ味方になつたわけではない」

「ことは慎重に運ばないと、ね」

「お前にも手伝ってもらおうぞ」

「なんなりと申し付けてくださいな、軍師殿」

「ではまず、妹との関係を改善しておけ」

「うわー……いきなりヘビーね……」

「我々には余裕がない。使えるものは、なんでも使わせてもらおう」

「……あんまり、簪ちゃんを巻き込みたくないんだけど」

「安心しろ、戦ってもらうだけだ。……裏のことは、私がやる」

「はああああ……」

学園に三つしかない男子トイレの個室の中で、深く溜め息をつく。

僕の心は、沈みきっていた。

「……いつまで、こんなことを続けなければいいんだろう」

男子のフリをして、僕はIS学園に転入した。父の命令で、世界で唯一の男のIS操縦者、織斑一夏に接触するためだ。

学園で二人だけの男子ということでもルームメイトになりもう四日目、それなりの信頼関係を築けていると思う。

——そしてそれこそが、僕の悩みの種でもあった。

「いつまで……一夏を騙し続けなければいいんだろう」

一夏は優しい。僕になにかと気を使ってくれて、友達として接してくれる。僕は最近では友達がいなかったもので、とても嬉しかった。

そんな一夏を、僕は騙している。

父の命令で、一夏と一夏の専用機のデータを、盗むために。

「僕……最低だ。一夏は僕のこと、信じてくれてるのに」

友達を裏切ることが、こんなに辛いだなんて思わなかった。いつそ全部打ち明けて、楽になりたい。その結果牢屋に入ることになったほうが、よっぽどマシだと思う。

「……はあ……」

けど、踏ん切りがつかない。

……いや、僕はただ、怖いだけだ。本当のことを知った一夏に、罵られるのが。

「……考えてても、仕方ないよね」

そうして、僕はトイレを出る。

一夏を、僕の友達を、騙し続けるために。

「……む、君は……」

「あ……」

トイレを出たところで、三年生の先輩に会った。

前に一度だけ会ったことがある。この人は……

「……副会長？」

「メルツエルと呼んでくれていい。副会長など、大した肩書きでもないからな」

そう言っつて、生徒会副会長のメルツエルさんは僕と目を合わせる。

「シャルル・デュノア、だったか。学園にはもう慣れたか」

「え、あ、はい」

「そうか」

メルツエルさんは僕が転入してくる際に出迎えてくれた人で、一夏からは「頼りになるお姉さん」と聞いている。

「女ばかりの環境で生活するのは大変だろうが、一夏と協力して頑張ってくれ。あれは中々頼りになる」

「は、はい」

「困り事があれば私にも相談してくれていい。出来ることに限りはあるが、協力しよう」

「はい、ありがとうございます」

他の人たちは僕が二人目の男子生徒ということで騒ぐばかりだけど、メルツエルさんは僕のことを気遣ってくれている。その落ち着い

た雰囲気と相まって、なるほど確かに、一夏の言うとおり「頼りになるお姉さん」という感じだ。

「では、失礼する。……ああ、それと。まだ正式に決定されたわけではないが、今年の学年別トーナメントはタッグ戦になるようだ。騒がれる前に組む相手を決めてしまうといい」

「わかりました、ありがとうございます」

……うん、いいことを聞いた。今のうちにペアを決めてしまえば、押し掛けられずに済むかもしれない。

けれど、僕の心は沈んだままだ。

メルツェルさんのことも、僕は騙しているんだから。

「思った通り、デュノア社の社長に息子はいないわ。記録はあるけど、明らかに最近捏造したものよ」

「だろうな。シャルル・デュノアに会ったが、匂いや骨格が男のものではなかった」

「追い詰められたデュノア社が、一夏くんに近づくために男装させて送り込んだってところかしら」

「本人は乗り気ではないようだ。真面目で、善人なのだろう」

「このこと、フランス政府が知ってると思う？」

「知っているだろう。隠し切れるものではない。黙認しているのか、協力しているのかは分かんが」

「知らないフリしながらそれとなく協力しているってところじゃない？」

「上手くいけば良し。失敗するか、ことが公になれば、デュノア社諸共切り捨てる。そんなところか」

「やることがえぐいわねえ、いたいけな女の子を利用するだなんて」

「好都合だ。一夏はシャルル・デュノアの境遇に義憤を抱くだろう。そうなれば、シャルル・デュノアも引き入れ易くなる」

「……あなたも大概、えぐいわねえ」

「誉め言葉と受け取っておこう。……さて、大分、揃ってきたな」
「ええ。あとは、向こうがどう仕掛けてくるか……」

「そして、こちらがどう応じるか。……私は引き続き、戦力を集める。
お前は奴らの動向に注意している」

「りよーかい。……ねえ、メルツエル。あなたはなんで戦うの？ あ
なたなら、もっと別のことで力を発揮できると思うけど」

「突然どうした」

「いえ……ただ、そういえば訊いたことなかったなと思って」

「……ISは本来、宇宙開発のために作られたものだ。今では軍事に
使われているが、その必要性を少しでも薄めれば、本来の役目にも使
われ始めるだろう」

「そのために、武装組織である亡国機業を潰すってこと？」

「そういうことだ」

「……じゃああなたは、なんで宇宙開発のために戦うの？ 特にそっ
ち系の道を目指してるようには見えないけれど」

「私が目指す必要はない。私は、そのための地盤を築ければいい」

「……どうして、そこまでするの？ あなたは何を望んでいるの？」

「決まっている。」

——人類に、黄金の時代を」

「ふむ、メイド喫茶か」

夏休みも終わり、そろそろ学園祭が近付いてきた。俺たちのクラス
の出し物はメイド喫茶。発案者はなんとラウラである。

「お前は どうするんだ？ 執事服か」

「そうなんだよ。……参るよなあ、絶対すごい騒ぎになるぜ」

「だろうな。しかももう慣れたものだろう」

「んなわけないだろ……」

今俺は、学園祭に向けてアドバイスをもらおうべくメル姉に相談に来

たのだが、メル姉は面白がるばかりで特に役に立ちそうな話はしてくれない。

……困ったことがあれば相談に乗るって言ってたクセに。

「学園祭は言うまでもなく学校行事だ。当然私にも仕事がある。お前にはばかりかまけているわけにはいかん」

「そうだろうけどさ、そこをなんとか。アドバイスだけでいいんだよ」
「そう言われてもな。私も、喫茶店の経営など経験がない」

……言われてみれば、メル姉はバイトの経験さえなかった。

頭がいいからなんでも知ってるように思ってしまうが、メル姉にだって分からないことくらいあるのは当たり前だ。

「素人考えでよければ、言わせてもらうが」

「お？ 是非頼むよ」

「特に凝ったことをする必要はあるまい。お前のクラスには目玉となる者が多い。お前を含めて」

「あー……やっぱり？」

つまりは顔で勝負ってことか。ぶつちやけて言えば。

「メイド喫茶というだけで十分だろう。これ以上手を加えても、それに見合う成果は上がらんと思うが」

「うーん……そんなことするくらいなら、接客の練習した方がいいってことか……」

「飽くまで、素人の考えだがな」

「いや、助かったよ。サンキュ、メル姉」

やっぱりメル姉は頼りになる、おかげで方向性が決まった。早速明日から、練習を始めよう。

「ところでメル姉は学園祭、何やるんだ？」

「秘密だ」

「えー……そう言わずにさ」

「学園祭には分かる。楽しみにしておくといい」

「せめてヒントだけでも」

「何故そうまで食い下がる」

「え？ いや、それは……」

いや、だって気になるじゃん。メル姉がメイド喫茶とかやるんなら行くぞ、俺。

「そうだな。ヒントと言えるかは分かんが、一つだけ」

「お？ なになに？」

そしてメル姉は一拍置き、ひどく真剣な表情で、こう言った。

「――二世一代の、大勝負だ」

「……来ると思う？」

「来るだろうさ。外部の人間がIS学園に侵入する、最大の好機だ。無駄にするほど、愚かな連中ではあるまい」

「どんな手で来るかしらね、亡国機業は」

「我々が戦力を集めているように、奴らもISを集めているだろう。現在、世界で強奪されているISの数は多くない。亡国機業の規模を考えれば、全く足りていないはずだ」

「つまり、ISを狙ってくる？」

「この学園ほど多くのISが集中している場所はない。他に狙うものはなからう。問題は、数か、質か」

「大量に配備されている訓練機か、代表候補生たちの専用機か。亡国機業がどれだけの技術力があるかによるわね」

「今まで狙われてきた機体は新型ばかりだ。おそらく、今回も狙ってくるのは専用機、それも――」

「一夏くんの白式か、箒ちゃんの紅椿ね。性能で言えばダントツだもの」

「性能なら紅椿が上だが、白式には世界で唯一の男のIS操縦者である一夏のことがある。……注目度は五分というところか」

「両方守るしかないわね。それで、分担はどうするの？」

「箒がお前、一夏が私だ」

「あなたが？ 勝てるわけないでしょう。いくら亡国機業でも大勢は送り込めない、来るのはきつと、精鋭よっ」

「まあ、そうだろうな。……その時は、私が死ぬだけの話だ」

「——そこまでにしてもらおうか」

突如現れた謎の女。

亡国機業のオータムと名乗るソイツは、第二回モンド・グロツソの決勝で俺を誘拐したのは自分たちだと言い、俺の白式まで奪った。

……許せねえ。許せねえが、しかしISを失った俺は、「アラクネ」というISを装着したオータムを相手に手も足もでない。

どうすればいい——そう歯噛みしているところに、聞き慣れた声が聞こえた。

「メ、メル姉……?」

「遅くなったな、一夏。まあ、どうにか間に合ったか」

メル姉は黒い装甲のISを身に纏っていた。

分厚い装甲に、左右の手には大型のライフル、肩にはそれぞれ馬鹿でかいミサイルとグレネードランチャーを装備している。

「ああん? 誰だ、てめえ?」

「生徒会副会長、メルツエルだ。IS学園にようこそ。歓迎しよう、盛大にな!」

そう言って、ライフルを連射するメル姉。

——助けに来てくれた。

「メル姉っ!」

「下がっている。巻き込まれるぞ」

戦闘中だと言うのに、ひどく落ち着いた声。その冷静さは実に頼りになるが、しかしメル姉の操縦技術はお世辞にも優れているとは言えなかった。

「はっ! 大したことねえなあ、副会長さんよ!」

「生憎、頭脳労働担当でな」

メル姉の戦い方は基本的に忠実で、それ故に読みやすい。

逆にオータムのアラクネは通常の手足の他に、八本の装甲脚を持つ

異形の I S だ。その変則的な戦術は、確実にメル姉を追い詰めていく。

(畜生っ！ 見てるしかできねえのかよ!?)

「教科書通りの戦い方だなあ！ 次になにすんのか、手に取るようにわかるぜ！」

「何事も、重要なのは定跡オーフニングだからな」

「何事もやり過ぎはよくないって知らねえのか!？」

「過ぎたるは及ばざるが如し、か。なるほど、覚えておこう」

メル姉の重装甲が見る見るうちに削りとられていく。

どう考えても勝ち目のない相手に、ボロボロになりながら、それでもメル姉は戦い続ける。

——俺を、庇って。

「メル姉、もういいっ！ 逃げてくれっ!!」

「そうはいかん。これは、私の戦いでもあるからな」

力強い瞳で、メル姉はオータムを睨みつける。

その眼差しに、その言葉に、どんな意味があるのか。

それは、俺には分からなかったけれど。

『亡国機業のメンバーを、どうにかして捕らえなければな』
『そうね。追いつき返すだけじゃ、準備してきた意味がないもの』
『学園側にも手を回す必要があるな。ただ尋問しても、効果はないだろうからな』

『なにかいい情報、持ってると思う?』

『さあな。だが来るのは間違いなく、I S を持つ者だ。恐らくは幹部、若しくは精鋭部隊の者だろう。期待は出来る』

『もしそうだとしたら、あなたでも情報を聞き出すのは難しいんじゃない?』

『侮らないでもらおうか。私の業は、お前の比ではない』

『……何者なのかしらね、あなたは。いくら調べても、普通の人生を

送ってきた、普通の女の子のはずなのに』

『普通、か。そんな上等なものではないよ、私は』

『……いつかあなたと、もっと色々なことを話したいわね』

『意味があるとは思えないが』

『あるわよ。すごく、大きな意味が』

『……………』

『いつかきつと、分かる時がくる。だからそれまで——生きて、メルツエル』

(お前との約束……守れんかもしれん、楯無)

亡国機業が送り込んだエージェント、オータムのISは第二世代型のようなのだが、私如きに抑え切れることは出来ないようだ。

元々戦闘は私の領分ではないから仕方ないが、しかし私自身の力不足は痛いところだ。

(一応増援は呼んであるから、時間稼ぎだけでいいのだが……果たして、あとどれだけ保つものか)

私の専用機、「オープニング」は重装甲だが、敵IS「アラクネ」の攻撃力は高い。多少の装甲などものともせずダメージを与えてくる。

(あと一手、欲しいところだな)

せめて逃げ場を塞ぐくらいはしておかなければ、今までのことが無駄になりかねん。それだけは避けたいところだ。

「そらそら、どうしたあ！ もうあとが無いぜえ!？」

「ふむ……どうしたものか」

「余裕こいてんじゃねえぞ!」

「性分だ、余裕があるわけではない」

「ムカつく野郎だな、てめえ……!!」

さて、本当に余裕がなくなってきた。

この女の様子を見る限り、私のISが解除されればそのまま殺され

るだろう。

……まだ死ぬわけにはいかんのだがな。

「そろそろ終わらせるかあ！」

「む……」

八本の装甲脚が一斉に襲いかかってくる。捌ききれず、五本にI Sを貫かれた。

すぐにライフルをオータムに向けたが、残った脚が翻ってきてライフルを弾き飛ばし、続いて両肩のミサイルとグレーネードも破壊された。

「メル姉ええっ!!」

「ふむ……万事休す、か」

「てめえ……ここまで来ても、余裕かよ」

「言つたろう、性分だと。生憎、人並みの感情の持ち合わせがなくてな」

「はん……マジでムカつく野郎だぜ」

……潮時、か。

幸運にも二度目の生に恵まれたが、そこで私の運も尽きたらしい。宿願まで叶えることは、出来ないようだ。

(……いや、宿願などという、上等なものではないか。……ただの、妄執だ)

感情の欠けた私にある、唯一の目的。

人類に、黄金の時代を。

死して尚、私はそれだけに執着した。

(馬鹿は死んでも治らない、か。ヴァオーのことは言えんな)

まあ、悪党らしい死に様だ。

目的を達することなく、志半ばで果てる。ただもう一度、同じ事を繰り返すだけ。

(すまん、テルミドール。私はまた、届かないようだ)

(畜生、畜生っ！ ふざけるな、ふざけるなよ！ 俺は、メル姉を守りたいのに——)

メル姉は俺が小さい頃から、ずっと世話をしてくれた。千冬姉が家を空けるようになってから、一人で家にいる俺を良く訪ねて来てくれた。

二人で下手くそな料理を作ったり、千冬姉が散らかした部屋を片付けたり。

色々相談に乗ってくれたし、勉強も見てくれた。

そんなメル姉が、俺を庇って戦っている。なのに、俺にはただ見るだけしか出来ない。

(……力が、欲しい……)

ふざけるな。

俺は、守るって決めたんだ。

俺の大事な人たちは、みんな。

(……力が要るんだよ……)

力を奪われ、無力な俺を守ってメル姉が戦っている。

それは、俺がやらなきゃならないのに。

(……いつまで、そんなところにいるつもりだ……)

有りつ丈の力を視線に乗せて、オータムを睨み付ける。

その手の中の、俺の相棒を。

(……さっさと戻って来い……！)

願う。

ただ強く、ただ一心に。

——みんなを守るための、力を。

(お前は俺の相棒だろうが！ なら、俺と一緒に戦え!!)

だから、まずは。

目の前で戦っている、俺の、もう一人の姉さんを。

(メル姉を、守るためにつ!!)

力を、貸してくれ——相棒。

「来い……白式いいいいっ!!」

ふと、目が覚めた。

白い壁、白い天井、白いカーテン——清潔なその空間には、覚えがあった。

「……地獄……では、ないようだな」

どうやら私は死に損なったらしい。あの状況で生き残ったとなると——

「お前か、一夏」

「……良かった。目え覚めたんだな、メル姉」

ベッドに横たわる私のすぐ横に、弟分の姿があった。私の声に、心底嬉しそうな笑顔を向けてくる。

「ごめん、メル姉。俺のせいで、無茶させて……」

「私の目的のためにやったことだ。お前が気に病むことはない」

「あのねえ、一夏くんはあなたを助けて、眠ってるあなたをずっと看たのよ？ 感謝くらいしてもいいんじゃないの、メルツエル？」

友人の声。

そちらに顔を向けると、呆れ顔の楯無がそこにいた。

「首尾はどうだ、会長」

「起きてさっそくそれ？ 仕事熱心ね、副会長」

楯無はひとつ溜め息をついて、話し始めた。

「ごめんなさい、逃げられたわ」

「……ふむ」

一夏を見るが、特に反応を示さない。

「……楯無さんから聞いたよ。メル姉、あいつらを倒すために、俺や箒たちを利用してしようとしてたって」

「ああ、その通りだ」

「……話しておいた方がいいと思って」

「だろうな。いつまでも隠しおおせるとは、私も考えていない」

とは言ったものの、予定よりも大分早まったな。

さて、この先どうするか……。

「……言ってくれよ、メル姉」
「なに？」

「隠す必要なんてなかった。言ってくれば、喜んで手伝ったのに」
……驚いた。私のやり方は、一夏の好むものではないと思っていたが。

「怒らないのだな。私はお前と接する時、仮面を被っていたというのに」

「関係ねえよ。メル姉はずっと、俺のことを守ってくれてた。何か思惑があつたんだとしても、その事実は変わらない。メル姉がいてくれたから、今の俺があるんだ」

私の目を真っ直ぐに見て、一夏は語る。

「手伝わせてくれ、メル姉。あいつらは俺を攫って、千冬姉のモンド・グロツソ優勝を潰した。今回も学園まで殴り込んで来て、メル姉を傷つけた」

「狙われたのはお前だろう」

「……とにかく。俺は、メル姉の力になりたいんだ」

「お前の知る私は、本当の私ではない」

「だからさ、そんなことは関係ねえんだよ。メル姉は、メル姉なんだから」

「……相変わらず、分からんな。お前の、言うことは」

人は理屈だけでなく、感情で動く。

その感情が欠けている私は、他人の言動を理解出来ないことが多い。だからこそ、人を観察することでそれを埋めていたのだが。

「メル姉、前に言ってたよな。私には、ヒトの心がないって」

「ああ。今も、お前がなにを思っているのか、私には分からない」

「ねえ、メルツエル。あなたは自分が人形だって言うけど、そんなことないわ」

「……なに？」

「だってあなた、一夏くんの言葉が分からないって言う時……辛そうな顔、してるもの」

……そんな、ことは。

「気づいてなかったのかよ、メル姉。心がないだなんて嘘だ。メル姉はちよつと感情が弱いだけで、ちゃんと心はあるよ」

「……そんなものはない」

「あなた、言ったわよね。前線で戦う雑兵に、目的のために死ねって命ずるのも、指揮官の仕事だつて。……そんなの、真つ当な神経なら相当キツイわよ。命令する相手が、大事な人たちなら尚更ね。」

「ただどあなたの目的のためには、そんな感情は邪魔になる。だからあなたは、誰かをリーダーとして持ち上げて、自分は参謀として汚れ役に徹している。……自分の心を、押し殺して」

「……………」

かつての仲間たちを思い出す。

クローズ・プランのため、私は多くの仲間を死に追いやった。その中には、長年共に戦い続けた友人もいた。

彼らが私の策に従い、死んだ時……私は本当に、なにも感じていなかったか？

「人類の黄金の時代のため。そんなことを本気で目指すような人が、優しくないわけじゃないじゃない」

「メル姉、知ってるか？　メル姉を慕ってる人はたくさんいる。本当に心がなければ、こんなに大勢の人に好かれるもんか」

「……………」

かつての私の、最後の戦い。

あの時私に付いて来たあの男は、死の間際、一体なんと言っていた？

『悔いはねえ。……楽しかったぜ、メルツエル』

あの、どこまでも真つ直ぐな男は。

自分が捨て駒であると、分かっていたいながら。

……私のために。戦ってくれたのでは、なかったか——？

「あなたは、人形なんかじゃない。ひねくれ者で、腹黒くて、抜け目なくて……そのくせ自分のことには気づかない、ただの人間よ。」

……そして、私の友達よ、メルツエル」

「ついでに言えば、俺にとってはもう一人の姉さんだ。……だからさ、

メル姉。自分には心がないとか、自分は人形だとか、そんなこと言うなよ。

「……メル姉は、人間だ。ちゃんと心のある、人間だよ」
「……そうか。そうかも、知れんな」

相変わらず、こいつの言うことは、分からないが。
いずれ、分かる時が来るのかも知れない。

その時が来れば、私は――

「……人間らしく、なれるかも、知れんな」

第23話 準備

午前五時。

七月になり、日の出も大分早くなった。もう十分な明るさとなったIS学園のグラウンドで、己はラウラと対峙している。

「はあっ！」

「……っ！」

日課である早朝の鍛錬。今日はラウラも参加していた。

己の得物は普通の木刀、対するラウラは両手に短い木剣を、ナイフのように持っている。

「シッ！」

ラウラが左の木剣を振るう。それを木刀で受けると、右の木剣が己の心臓を目掛けて走る。

「………」

「ぐ……！」

ラウラの右肩に前蹴りを叩き込み、それを防いだ。

身長150センチ足らずのラウラと170センチを越える己では間合いが違う。加えて腕と足だ、木剣の長さを考慮に入れてもまるで足りない。

「……っ！」

そのまま足を振り上げ、踵落とし。ラウラは退がってかわしたが、己は足を振り下ろした勢いのままに刺突を繰り返す。

ラウラは身を屈めてそれを回避、同時に地を蹴って一気に間合いを詰めた。

そのまま連撃へ。

「おおおおー！」

「……っ！」

間合いが広いというのは、裏を返せば小回りが利かないということだ。ここまで深く懐に踏み込まれれば、一転してラウラが有利になる。

加えてラウラの得物は二本、己は腕からして一本しかない。回転の

速い連撃を捌き続けるのは容易ではない。

——まあ、不可能というわけでもないが。

「ぬう……！」

「……………」

自分に有利な距離である筈なのに攻めきれず、ラウラの顔に焦りが生まれる。

……顔に出すな、相手に焦りを悟らせるなど、罨でもなければ自分が不利になるだけだ。

「……………」

というわけで、己から罨をかけることにした。

ラウラの木剣を受けた瞬間、木刀の握りを甘くし、弾き飛ばさせる。飽くまでも自然にやったが、冷静ならば気付く程度。

だが焦るラウラの目には、好機と写ったようだ。

「もらったー！」

「……………」

木剣を突き出すラウラ。その動きは大振りで、ラウラの心境を物語っている。

ところで己は、最大の武器は自らの肉体だと思っている。そこに幾ばくかの精神論が混じっていることは否定しないが、確たる理由も当然存在する。人体の破壊に最も適しているのは、同じく人体だからだ。

「……………」

「が……!?!」

間合いというのは武器の射程距離だ。剣ならば長さが決まっているし、銃ならば直線に真っ直ぐ伸びる。

間合いを見切ることが戦闘における基礎中の基礎だ。ラウラもそれを重々承知しているだろう。

そこで先程の人体の話に戻る。人間の体は急激に大きさを変えることは出来ないが、しかし手足には関節がある。手だけでも拳と手刀では僅かに間合いが変わるし、肘や膝を使えば拳打や蹴りよりも小回りが利く。そして拳の握り方を始めとする、関節の使い方次第で、種

類の違う打撃が繰り出せるのだ。

つまり己がしたのは、近い間合いを更に詰め、ラウラの鳩尾に膝を叩き込んだのである。

「ぐ、ふう……いー」

「……………」

肺の中の空気が強制的に吐き出され、ラウラの動きが鈍る。

しかし尚も接近する己に対し、何もしないわけにはいかない。ラウラは再び木剣を振るうが、明らかに切れが悪い。

己は回し打ちでラウラの顎を打ち貫き、振り抜きながら腕を折り畳んで側頭部に肘を叩き込んだ。

「ぐ……あ？」

ほぼ同時に頭部に二連撃を受け、ラウラの脳が盛大に揺さぶられる。

脳から体へ送られる信号が一時的に遮断され、カクンとラウラの膝が落ちた。己は悠々と木刀を拾い上げ、ラウラの首に添える。

「……王手……」

ラウラは一瞬悔しそうに表情を歪めたが、すぐにふ、と笑い、自らの負けを認めた。

「完敗だ。やはり生身では相手にならんか。……流石だ、マスター」
……………その呼び方は止める。

「来週は臨海学校ですわね」

「シン、アンタどうすんの？」

「……………」

夕方、食堂でセシリアと鈴に合った。

仲が悪いクセにどういうわけか一緒に行動していることが多いのは、本当は仲がいいからだろう。

……何をされるか分からないので、決して口にはしないが。

「水着よ、水着。アンタどうせ、学校指定の水着しかないんでしょ」

「それではいけませんわ。せっかくの海なので、真改さんの魅力を発揮できる水着を着ませんと」

「……………」

セシリアはどうやら己を真改と呼ぶことにしたらしい。あれから渾名呼びに挑戦してこなくなった。

……………まあそれは置いておくとして、正気か、コイツら？ 己に水着など、小夜ですら着せようとしないと言うのに。

「……………左腕……………」

「ええ、わかつていますわ。当然考えてあります」

「安心しなさい。あたしにいい考えがあるわ」

……………何故かは分かんが、その言い方には大いに不安を掻き立てられるんだが。何故かは分かんが。

「というわけで、次の日曜、買い物に行くわよ」

「予定を空けておいてくださいね」

「……………」

己の意見は無視か。まあどうせ予定などないから、構わんが。

「私も同行しよう」

「な……………!？」

「ラ、ラウラ・ボーデヴィツヒ!？」

突然の乱入者。それはラウラ・ボーデヴィツヒ。学年別トーナメントで己の相棒だった少女である。

「なんでアンタが来んのよ……………」

「お呼びではありませんわよ」

「なに、相棒が買い物に行くと聞こえたのでな。先月の詫びに、代金くらいは私が持とう」

「……………」

己はお前の相棒なのかマスターなのか、そこるところをハッキリさせてくれないか。

「……………それくらいで済むと思ってんの?」

「真改さんへの侮辱の数々、忘れたわけではありませんわよ?」

「……………それについては謝罪する。すまなかつた」

そう言つて深々と頭を下げるラウラ。素直に謝るとは思つていなかったのだろう、二人は毒気を抜かれたようだ。

「償いはする。必ず。……そのための、チャンスをくれ」

「……ま、まあ、そこまで言うのでしたら……」

「そ、そうね。シンはあんまり気にしてないみたいだし、あたしたちだけ騒ぐのも、ねえ……?」

「……………」

……根はいいやつらなのだが、素直じゃない。

「……私の同行を、許してもらえるか?」

「……構わない……」

「そ、そうか! うむ、流石はマスターだ!」

「……………」

……もう突つ込むまい。人間、諦めが肝心だ。

「次の日曜だったな。私も予定を空けておく。……楽しみにしているぞ、マスター」

言うことだけ言つてラウラは去つていった。

……以前の周囲全てを拒絶するような雰囲気になつたのはいいことなのだろうが。

「……なんであんなに懐かれてんのよ」

「……何をしたんですの? 真改さん」

「……………」

いや……そう大したことはしていない筈だが。

「まあいいわ。それじゃ日曜、忘れないでね、シン」

「わたくしも楽しみにしていますわ、真改さん」

そう言つて、二人も去っていく。

……さて、どうするか。せつかくだ、本音も誘うか。

というわけで、日曜日。あたしたちは駅前で待ち合わせをしているんだけど……。

「……遅いな、マスター」

「あなたが来るのが早過ぎなんですわよ」

「アンタもね」

「あなたもでしよう、鈴さん」

「う……」

かれこれ二十分、シンを待っていた。

せっかく出かけるんだから学園の外で待ち合わせよう、と提案したのは間違いだったかも知れない。

別に待つのは構わない。約束の時間より三十分も早く来たあたしたちが悪いのだから。

あたしが嫌なのは――

「ねえねえ君たち、暇そうだね」

「俺らもちょうどヒマしててさ、一緒に遊ばない？」

「すごい綺麗だねえ、モデルさんかなにか？」

「おい見ろよ、この子人形みたいだぜ！ かゝわいいく!!」

こういう、見るからに頭の足りてない男どもが寄ってくることだ。

「……見ればわかるでしょ。待ち合わせしてんのよ」

「え？ 相手だれ？ 男？ 女の子？」

「男だったらサイテーだな、こんなカワイイ子たちを待たせるなんてさ」

「女の子ならちようどいいじゃん！ 俺ら四人だし」

「どちらにしてもお断りします。わたくしはあなた方のような殿方に見合うほど、安くはありませんので」

「そんなこと言わずにさあ」

「俺ら、けっこうイイよ？ こころへんの遊び場は知り尽くしてるし」

「女の子のことも知り尽くしてるし。楽しめると思うけどな？」

「……下種が」

女尊男卑の世の中になってから男の立場は急激に低くなったけど、逆にそれでいい思いをしている男たちがいる。見た目が良くて女から可愛がられる、いわゆるホストやアイドルのような連中だ。そういうヤツらは女にちやほやされているうちに、自分は女に愛される存在

だと勘違いするのだ。

今あたしたちに言い寄っているバカ男たちも、確かにルックスだけはいいい。けどあたしたちは、中身のない綺麗なだけのガラクタなんて興味ない。

「……ねえ、どっか行つてくんない？ うつとうしいんだけど」

「そう言わずにさあ、ね？ 絶対退屈させないからさあ」

……面倒くさい。もうぶっ飛ばそうかな……。

そんな危ないことを割と本気で考え出したところで――

「お、りんりんたちもう来てる」

「……………」

間延びした声が聞こえたのでそっちを向くと、本音とシンがこっちに歩いてきていた。

「え、なにになに？ あの子たちが待ち合わせ相手？」

「ヒュ〜♪カワイイじゃん！」

「すげえ、あの背え高いコ、めちやくちやキレ…………イ…………？」

シンを見たバカ男たちの表情が固まる。

シンは黒いズボンに白い長袖のブラウスという、シンらしい飾り気のない格好をしているけど、整った容姿は人目を惹く。そしてまずは顔を見て、次に全体を見て気付くのだ。

——空っぽの、左袖に。

「う…………腕が…………」

「やつほ、お待たせ」

ほわほわした笑顔でどこそこ近づいて来る本音に手を振り、出迎える。

「気にしないでいいわよ。あたしたちが早過ぎたんだし」

「あれ〜？ りんりんナンパされてたの〜？」

「…………まあね」

「……………」

シンがバカ男たちを見ると、連中は急に挙動不審になった。

…………気に食わない。

「お、おい…………行こうぜ…………」

「あ、ああ……」

「あら？ わたくしたちを遊びに連れて行ってくださるのではないのですか？」

「一言とは、男らしくないな」

そんな様子の子のバカ男たちに、ただでさえ不機嫌になっていたセシリアとラウラの機嫌がさらに悪くなった。ちなみにあたしも相当不機嫌だ。

「え!? いや、やっぱ邪魔しちや悪いかな、って」

「そ、そうそう！ あ、そういや俺用事あるんだった！」

「やっべ、俺もだ！ いやあ、忘れてたぜ！」

「じゃ、じゃあそーゆうことで！」

逃げるように——いや、実際逃げていくバカ男たちの背中を睨み付けてから、シンに向き合う。

「……不愉快ですわ」

「まったく。外見だけの者は、外見しか見ないのだな」

「……ごめん、シン。やな思いさせた」

「……無用……」

確かにシンはこういうことは慣れっこだし気にしないだろうけど、あたしが気にするのだ。シンの内面に触れればシンの良さがわかるのに、大抵の人は左腕がないというだけでシンを避ける。

……それが、あたしは気に食わない。

「まくまく、せっかくみんなでお出かけなんだし、楽しく行く？」

「……そうですわね。あんな方たちのことなんて、気にすることはありませんわね」

「ああ、下等生物を相手にする必要はないな。では行くか、マスター」
にへら、と笑う本音のおかげで、場の雰囲気祥和だ。この子は本当にすごいとつくづく思う瞬間である。

「……よし！ じゃあ気を取り直して、行くわよ！」

「お〜！ しゅっぱ〜っ！」

「……………」

そうしてあたしたちは、駅前のショッピングモール「レゾナンテ」に

向けて歩き出した。

「ほう……随分大きなショッピングモールだな」

「ここに無ければ市内のどこにも無いって言われてるくらいだからね。交通の中心でもあるし、ここより大きいモールはなかなかないわよ」

「けれどどこ、どう見ても駅とくつついてますわよね？ 駅前という表現は正しいのですか？」

「……そこは突っ込んだじゃないところよ、セシリア」

レゾナンスに到着すると、ラウラがキヨロキヨロと周りを見始めた。幼いころから軍で育てられたっていうし、こういう場所に来るのは初めてなのかもしれない。

「水着売り場は二階だったわね。じゃ、行くわよ」

五人でゾロゾロと歩き出す。

中学の時はあたしと一夏、シン、それと弾の四人でよく遊びに来ていたので、どこにどんなお店があるのかは大体把握している。多少は入れ替わりがあったみたいだけど、ほとんどは前のままだ。

「おう、あそこのケーキおいしそう。あ！ あそこのシュークリームも食べたいな」

「……さっきから食べ物のことばかりだな」

「ほら、本音さん。ちゃんと前を向いてませんか、迷子になりますわよ？」

「平気だもくん。私には、いのっちナビがあるもんね」

「……………」

シンにひつついてはしゃいでいる本音だが、よく見るとこの子はシンの左腕を周りからさりげなく隠している。シンは自分がじろじろ見られたり露骨に避けられたりするのはいままで気にしないクセに、それにあたしたちが巻き込まれるのは嫌がっていた。

それを本音が知っているととは思えないけど……天然ってヤツかし

ら？

とにかく本音のおかげで、あたしたちは人目を気にすることなく目的地に着けた。……いや、ほんとすごいわね、この子。

「いらつしやいませ。水着をお探しですか？」

お店に入ると、さつそく品の良さそうな店員が話し掛けて来た。ラウラやセシリアは見るからに外国人なので、このお店に不慣れと考えて案内しに来たんだろう。

「そ。この子のね」

「え？ ええと……こちらの方ですか？」

あたしがシンを指差すと、店員が困惑する。さすがに真つ正面に立たれば腕のことに気付くので、それが原因だろう。

「そうだけど？」

「なにか問題があるか？」

「ここはお客を選ぶようなお店ですね」

「ケンカなら言い値で買うぜ」

「え、あ、いえ、そのようなことは……」

本音がカタツムリにもよけられそうなシャドーボクシングを始めて、店員はいよいよ困り果てたようだった。それを見たシンが本音の頭に拳骨を落としたあたりで、あたしは店員に助け舟を出した。

「大丈夫、あたしこのお店慣れてるから。適当に探すわ」

「あ、はい、かしこまりました。それでは、ごゆっくり」

あからさまにほっとしたような顔をして、仕事に戻る店員。

チラリと後ろを見ると、シンがほんの少しだけ顔をしかめていた。

「……ほら、なに突っ立ってんのよ。なんか着たい水着とかないの？」
いつも通りの口調を心がけて、シンを促す。あたしたちが連れ出したのに嫌な思いをさせたままだなんて、あたしのプライドに関わるのだ。シンには、無理矢理でも楽しんでもらわないと。

そんな思いが伝わったのか、シンもいつも通りの無表情に戻り、短く答えた。

「……地味……」

「「「却下」」」

「……………」

やっぱりシンにはこういうことは任せられない。ていうか話にならない。

というわけで、急遽会議が開かれた。

「やっぱりシンには白が似合うと思うのよ」

「なにをおっしゃるかと思えば。青に決まっているでしょう」

「そりやアンタの趣味でしょうが」

「黒だな。マスターは肌が白い。黒は髪と同じく、良く映えるだろう」

「…………むう、一理あるわね…………」

「ねえねえ、これなんかどおく？」

「「却下」」

「ええ〜!？」

本音がどこからか（本当にどこから持ってきたんだか）ピ〇チュウの着ぐるみみたいな水着を持ってきたので、三人で即座に切り捨てた。泣きべそをかきながら水着を戻しに行く本音を無視し、会議を進める。

「黒か。…………うくん、確かに似合うわね」

近くにあった黒いビキニをシンの体にあててみる。

…………うん、ラウラの言う通り、白い肌とのコントラストが良く映える。

「…………うん、じゃあ黒いのを中心に、いくつか試してみましょ」

「では青い水着を見繕って来ますわ」

「話を聞いていたのか？」

「ねえねえ、これはどおく？」

「「却下」」

「ええ〜!？」

今度はヨ〇シーの着ぐるみみたいな以下略。

「じゃあこれとこれと、あとこれね」

「……………」

「あ、真改さん、こちらも」

「むう…………選ぶ基準がわからん…………」

「ねえねえ〜」

「「却下」」

「ええ〜!?」

……というわけで、己は試着室に押し込められた。

足下に置かれた籠の中には十着近い水着が入っている。黒を中心に、青と白が少々。見立てたのは鈴とセシリアで、ラウラはどうすればいいのかわからずにオロオロしており、本音は次々と水着を持って来てはいたが全て却下されていた。

(……やれやれ……)

籠の中身をいくつか取り出して見比べてみるが、己にはどれも同じに見える。つまりはどれでもいい。

だが彼女らはそれでは納得しないだろう。一つくらいは実際に着て見せなければなるまい。

「……………」

適当に一つ選んで広げてみる。比較的(飽くまでも比較的、だが)布の面積が広いそれを着てみることにした。

「……………」

流石と言うべきか、彼女らは片腕でも楽に着られる水着を選んできてくれたようだ。

とりあえず、服を脱ぐ。まずは下の水着を履き、次いでサラシを解いた。元々大して大きくもない胸だが、それでもサラシを巻けば外見はさらに小さくなる。

しかしこの水着は己の体に合っていた。恐らく鈴が選んだのだろう、あいつは己のスリーサイズを知っているからな。

(……………ふむ……………)

試着室に備え付けられた鏡を見る。

欠けた左腕とそれを覆う包帯以外は、特におかしなところは見当たらない。まあ鈴もセシリアもモデルとして雑誌に載ったことがある

のだから（国家代表候補生には良くあることだ）、水着の見立てくらいはお手の物なのだろう。

……しかしこの水着、手触りの良い生地といい質素ながら品の良いフリルといい、かなり高価そうな代物なんだが。

……代金がラウラ持ちだからと調子に乗ったな、鈴。

「……はあ……」

さて、着終えたことだし、御披露目といくか。

……気は乗らないが。

そうして試着室のカーテンを開けると、そこには――

「……シン？」

「………」

――どういうわけか、一夏が居た。

「えーっと、水着売り場はここだな」

来週の臨海学校に向けて、俺はシャルと駅前のショッピングモール「レゾナンテ」に来ていた。

ここに来れば一度で買い物を済ませられるからな。実に便利だ。

「はあああ……」

しかしどういうわけか、シャルは随分落ち込んでいる。ついになにやら機嫌も悪そうだった。

「大丈夫か？ 具合が悪いなら、今日は止めとくか？」

「……ううん、具合は大丈夫だよ。他の理由だから」

「他の理由？」

「自分の胸に聞いてみなよ」

「??」

なんだ？ 俺はただ、シャルに「付き合ってくれ」って言って誘っただけなんだが……？

「ところでシャルも水着を買うのか？」

「そ、そうだね……あの、一夏はさ、その……僕の水着姿、見たい？」
なんだ？ 不思議なことを聞くやつだな。泳ぎたいから水着を買いに来たんじゃないのか？

「そうだなあ。せっかくだし泳ごうぜ。俺も海は久しぶりだから、結構楽しみなんだよ」

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、せっかくだし新しいの買おうかなっ」
急に元気になるシャル。やっぱり海が楽しみなのだろう。海、スイカ、花火は、日本人の夏には欠かせないからな。シャルはフランス人だけだ。

「じゃあ、俺は向こうで自分の探して来るよ」

「うん、じゃあまた後で」

……さて、とは言ったものの、俺の買い物なんてあつと言う間だ。なにせ買うのは男の水着、悩むことなどない。

手頃な値段の物を適当に手に取り、お会計。所要時間五分。はい終了。

「さて、シャルは……あれ？ もう来てる？」

「あ、うん。せ、せっかくだから、一夏に選んでもらおうと思って……」

「うん？ ああ、いいぜ。俺が役に立つとは思えないけど」

そうは言ったものの、本音を言うところとちよつと気が引ける。

だって女物の水着売り場だぜ？ 男が入るのは厳しいものがあるだろ。

だが友達、そうでなくても女の子の頼みには出来る限り応えたい。これくらいは我慢だ。

「じゃ、じゃあ、これなんかどうかな？」

「いいんじゃないか？ 良く似合うと思うぞ」

「そ、そう？ じゃあ、着てみようかなっ」

そう言つてすぐ近くの試着室に入つていくシャル。

その楽しそうな姿はシャルらしい魅力に溢れており、いつも以上に可愛く見えた。

(むう……しかしやっぱり、ここは落ち着かない……)

男物とは数も質もまるで違う、色とりどりの水着。……目のやり場

に困る。

そんなことを考えていると――

「そのあなた」

「ん？」

キヨロキヨロと周りを見るが、近くには俺しかいない。となると、この声は俺に向けられていることになるのか？

「男のあなたに言ってるのよ。その水着、片付けておいて」

「……………」

話し掛けて来たのは名前も知らない女の人だった。

……そう、まったく知らない相手だ。

ISが普及してからの十年で世界はあつと言う間に女尊男卑になり、今ではこうして見ず知らずの男に命令する女、そしてそれに従う男はどこでも見かけるようになった。

けれど、俺は――

「自分でやれよ。五体満足なんだ、それくらい出来るだろう」

……そういうのが大嫌いだ。

世の中には障害があるのに他人のことまで気にかける人がいるのに、簡単なことをただ面倒だからという理由で他人を使おうとするなど、そういう人たちに対する侮辱に他ならない。

「…………ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

そうやって女性は警備員を呼ぼうとする。俺には少なくとも警備員のお世話になるような非はないが、今の世の中は女尊男卑、無実の罪で咎められる可能性はそれなりにある。

…………ふざけた世の中だ。

「どうしました？」

「あいつよ、あの男よ！ さつさと捕まえて！」

「いや、何もしていない人を捕まえるわけには…………」

「ああもう、使えないわね！ これだから男はっ」

「…………ちっ…………」

そんな遣り取りを眺めながら、俺の機嫌は急速に悪化していった。

……男女以前の問題だ。こういう人間は、どうあつても尊敬できない。

そんな苛立ちを抱えていると。

しやつ、と、試着室のカーテンが開いた。

シヤルか？　と思つて音がした方を見ると、そこに居たのは――

「……シン？」

「……………」

見るからに高そうな黒い水着を着た、幼なじみだった。

「な……なにしてんだよ」

「……買い物……」

そりやそうか。

……いや、そういうことではなくて。

「水着……買いに着たのか？」

「……応……」

シンが着ている水着は、そういうことに疎い俺がみても良い品と分かるものだった。

失礼とは分かっているが、つい全身をまじまじと見てしまう。

シンは長身のわりには胸が小さい。というか全体的に細い。

しかし良く鍛えられた体は引き締まっており、健康的な魅力がある。

……シンが水着を着るなんて、左腕を失つてからは初めてだ。

それが、妙に嬉しくて。

「……うん。似合ってるよ、シン」

「……………」

さつきまで不機嫌だったのに、一瞬で俺の心は喜びに満たされた。

しかしそれも一転、再び不機嫌になる。何故ならば――

「ちよつとあなた！　なにして……る……」

さつき俺に命令してきた女性が、シンの姿を見てあからさまに顔色を変えたからだ。

「……あ……あなた……」

「なんだよ、文句あんのかよ？」

不機嫌なままに睨み付けると、女性は男への反発心からか、急に強気な態度に戻った。

「ふん！ 男がこれなら、飼ってる女も女ね！」
そして。

「こんな、片腕女」

言っってはならないことを、言った。

「……………あ？」

視界が真っ赤に染まる。

思考が真っ黒に染まる。

今、なんて言った？

今こいつは、この女は、シンのことを――

「一夏！」

「……………っ!!」

シンの一喝。

それで、急速に頭が冷えていく。

今ここで、暴れるのはまずい。

シンにもシャルにも、店にも迷惑がかかる。

それは、ダメだ。

「……………悪い。いや、ありがとう、シン」

「……………」

どうにか怒りも収まった。いや、収まっただけではないが、大分落ち着いた。

またなにか言われない限りは、大丈夫だと思う。

「ふ……………ふん！ 躰がなつてないわね！」

俺がキレたことにさすがにまずいことを言ったと思ったのか、そう言っただけは去っていった。捨て台詞は忘れずに置いていったが。

その後ろ姿を見送っていると、連れられて来た警備員さんがぺこりとお辞儀をしてから言った。

「……………それでは、なにもないようでしたら、私はこれで戻ります」

「あ……………すみません、お騒がせして」

わけもわからず呼ばれたこの人にとってはいい迷惑だったろう。

それでも、嫌な顔一つせずに持ち場に戻って行く。

——その、前に。

「その水着、とても良く似合っていますよ、お客様」

「……………」

笑顔を浮かべて、心からの言葉を贈ってくれた。

……そうさ、まだまだ男も、捨てたもんじゃない。

「一夏？ どうしたの？」

騒ぎが聞こえたのか、シャルが試着室から顔を出す。

そして周りを見回し、シンを見つけて、

「し、シン!? わあ、すごく似合ってるよー!」

「……………」

言われたシンはそのまま試着室に引っ込んで行ってしまった。

……もしかして、照れてる？

「……………」

「……………」

「……ふふっ」

シャルもそれに気付いたようで、同時に笑い出してしまった。

まったく、素直じゃないなあ、シンも。

「……で……………出遅れた……………」

あたしたちは、ハンガーの影からその様子を見ていた。

次の水着を選んでいる間に起きた事件。一夏が絡まれているところに颯爽と現れてあの嫌な女を撃退、一夏に借りを作ると言うシナリオを考えていたのに、シンが収めて（？）しまった。

「どうする？ 出にくくなっただぞ」

「今来たところを装えばいいのでは？」

「けどそれだと間抜けよね……………」

「いのつちを助けられると思ったのに……」

本音はシンにも飛び火したあたりで出ようとしていたが、トロいの

で出損ねた。変なところで失敗するわね、この子。

「つていうか、アレ……」

「……シャルロットさん、ですわね」

「デートだねえ〜」

「おのれ一夏、私という者がありながら……」

「……ぐぬぬ……」

本音を除く三人で呻く。シャルロットは恥ずかしそうに、けどそれ以上に嬉しそうに、試着した水着を一夏に見せている。

そんなシャルロットを見て、一夏は――

「おりむー、鼻の下伸びてるね〜」

「……」

「……よし。」

「殺そう」

「やめんか、馬鹿者」

「「うひゃあああい!!」」

殺意を込めてISを部分展開しようとしたら、すぐ後ろから声をかけられた。

聞き慣れた声に心底驚きながら振り向くと、やはりそこにいたのは

「お、織斑先生……?」

「嵐。決められた場所以外での許可のないISの展開は、校則どころか法律にも違反している。……当然、知っているな?」

「は、はい……」

「知っている上でやろうとしたのか。良い度胸だな」

「ひい……」

千冬さんはとても怖い顔であたしを見下ろして――ふつ、と、突然雰囲気のを和らげた。

「……まあ、今は私も職務時間外だ。今回だけは見逃してやる」

「へ? あ、ありがとうございます……」

「どういうこと? あの千冬さんが、違反を見逃すなんて……」

「それはですね、織斑先生は嬉しいんですよ」

「や、山田先生？」

「いらしてたんのですの？」

「……ひどいです」

「え!? あ、いえ、今のはですね！」

しゅんとなる山田先生、慌てるセシリア。

しかしそんな山田先生の様子をまるで気にしない、千冬さん大好きっ娘が一人いた。

「嬉しい、とは？」

「え、ああ、それはですね……」

「……山田先生。余計なことを言わないで下さい」

「ああ、すみません！」

……気になる。

それは他の三人も同じようで、じーつと千冬さんを見詰めている。そんなあたしたちの様子に、千冬さんはあ、と溜め息をついて、言った。

「随分、久しぶりだったからな」

「「「え?」」」

「……あいつが、水着を着るのは」

優しい顔で試着室を見る千冬さん。その中には今、彼女の妹分がいる。

……なるほど、そういうことか。

「あいつが自分から来るとは思えん。お前たちが連れ出したんだろう?」

「「「……………」」」

「一応、感謝しておく。……精々、着飾らせてやってくれ」

「は、はい! 任せて下さい!」

俄然気合いが入ってきた。うん、さつきチラツと見たただけだけど、水着は結構似合っていた。

後は――

「さて、じゃあ次、探すわよ」

「ええ、アレですわね」

「……アレ？」

「ふふふ……さすがに水着だけで真改さんを海に連れ出すのは、ね」

「……いのっちは、気にしないと思うけどね」

「周りは気にするだろうな。マスターにはその方が辛いだろう」

「そ、だからもう一つ用意するのよ。……大丈夫、我に秘策有り、よ
いや、本当は秘策ってほど大したもんじゃないんだけどね。」

「さて、シンの買い物も終わったし」

「わたくしたちの買い物はしますか」

というわけで、鈴、セシリア、ラウラ、本音も自分たちの水着を
買うことにしたわけだが。

「しかし水着なんて必要なのか？」

「はあ？ なに言ってるんの、アンタ？」

「必要に決まってるでしょう。なんのために真改さんの水着を探し
に来たと思ってるんですか？」

「私は単にマスターの買い物に付いて来ただけだが」

ラウラの言葉に呆れ顔の二人。ちなみに一夏、シャルロットは既に
立ち去り、本音は真改を連れて着ぐるみのような水着の並ぶコーナー
に突撃している。

「じゃああたしは自分の水着探してくるわ」

「では、わたくしも失礼します。あなたは精々、一人だけ学校指定の水
着で臨海学校に行ってくださいな」

「む……」

ラウラはセシリアの言い方が気になった。まるで学校指定の水着
で海に行くことが恥であるかのような言い方だったからだ。

（むう……一応、訊いてみるか……）

そう決めてラウラは、ISのプライベート・チャンネルを開く。

相手はラウラが隊長を務めるドイツ軍特殊部隊「シュヴァルツエ・
ハーゼ」の副隊長にしてラウラの頼れるアドバイザー、クラリツサ・

ハルフオーフである。

『……受諾。クラリツサ・ハルフオーフ大尉です』

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ」

『おお、隊長。どうしました？』

「うむ。すまないが、また訊きたいことがあるのだが」

『はっ、なんなりと』

「助かる。それで訊きたいことなんだが、海において水着はそんなに大事なのか？」

『海？ ああ、そういえば来週は臨海学校でしたね。……ふむ。隊長、いかなる作戦においても重要なのは、事前の準備というのは当然御存知ですね？』

当然、そんな基礎中の基礎はラウラも重々承知している。

『海においてもそれは同じです。実際に海に行つてからの振る舞いではなく、その前に時間をかけて運動その他によりスタイルを整え、綿密な段取りにより無駄な空き時間が出来るのを防ぎ、自分の容姿や意中の相手の好みに合う水着を用意する。これこそが、海という戦場に臨むための事前準備です』

「なるほど……つまり水着は、装備というわけだな？」

『その通りです。流石は隊長、ご理解が早い。そう、戦場や敵、部隊構成に合わせた最適の装備を整える必要があるように、隊長もご自分に合う水着をご用意しなければなりません。水着は女性の魅力を引き立てる効果的な装備、隊長が意中の相手を落とすには、今回の臨海学校、利用しない手はありません』

「ふむ……」

そこでラウラは考えた。

海では当然水着を着る。そして水着は女性の魅力を引き立てる装備だと言う。

ならばやはり、一夏の気を引くには水着の選択も良く考えねばなるまい。

「しかしクラリツサ、どんな水着を着ていけば良いのだ？」

『ふむ。隊長は今、どんな水着を所有しているのですか？』

「学校指定の水着一着だ」

『……………話になりませんね』

「な、なに…………？」

ラウラは驚愕した。

まさかここまでハッキリとダメ出しされるとは思っていなかったからだ。

しかし通信機越しでは流石にラウラも気付かなかった。話にならないとか言いながらラウラのスクール水着姿を妄想したクラリツサが、盛大に鼻血を吹き出していることに。

『いいですか、隊長。確かにスクール水着は素晴らしい。隊長にはとても良く似合うことでしょう。しかしそれでは、どうしても——』

「ど、どうしても…………？」

『——色物の域を出ないっ!!』

「な…………!？」

『スクール水着の魅力は通常の水着のそれとは別の物です。そして今回隊長に必要なのは、スクール水着の魅力ではありません!』

「そ、そうだったのか…………危ないところだった…………」

自らの愚行を未然に防げたことに、冷や汗と共に安堵するラウラ。そして実感する。やはりクラリツサは頼りになる、と。

…………その信頼を、クラリツサが半分は自らの趣味のために利用していることに、ラウラは気付かない。

「で、では、どうすればいいのだ…………？」

『失礼ながら申し上げますが、隊長は決して恵まれた体とは言えません。豊満なボディで相手を悩殺、という手は使えないでしょう』

「ぬう…………」

それはラウラも自覚していた。ラウラの敬愛する教官、織斑千冬のような見事なスタイルは、ラウラにはない。

そして一夏はどうやら千冬のような女性が好みのタイプらしいことも、なんとなく分かっていた。

「ど、どうしたらいい? 私は、どうしたら…………」

『ご安心を。日本には、こんな格言が存在します。曰わく——』

半ば絶望したような顔で狼狽するラウラに、クラリツサが諭すように語りかける。

そして、その口から紡がれた言葉は――

『貧乳はステータス』

色々と終わっていた。

「な……なんと……!!」

しかしラウラはその言葉に雷に撃たれたような衝撃を受けた。絶望のどん底で一条の光を見つけたような気がした。

『そう、隊長にはナイスバディの女たちにはない魅力があります！

ならば選ぶ水着は、その隊長だけの魅力を引き出すものですっ!!』

「まったく、お前というヤツは……!! クラリツサ！ 私はお前の隊長であることを誇りに思うぞ！」

『私も、あなたの部下であることを誇りに思います、隊長！』

そろそろ本格的に洗脳されてきていることに、ラウラはやはり気付かない。

『では隊長、私の言う通りの水着をお探し下さい――』

そしてクラリツサの目が、キュピーンと光った。

第24話 臨海

「真改、起きろ」

「……………」

肩を揺すられ、目を覚ます。

全身に残る疲労のせいか、いまいち意識がはっきりしない。それでも、己を起こした人物が誰かは分かる。

……………否。この己が、「彼女」を間違えるなど有り得ない。

「また訓練中に眠ったのか？ 前から思っていたんだが、それは寝てるのではなく気絶してるんじゃないのか？」

「……………」

昨日はシミュレーターを使つての訓練をしていたのだが、対ネクスト戦を三十回ほど繰り返し返したあたりからの記憶がない。そのシミュレーターの記録を確認した「彼女」が呆れ顔になる。

「……………馬鹿かお前は。こんな無茶を続ければ、近い内に倒れるぞ」

「……………」

「テストパイロットとはいえ、お前もレイレナードのリンクスだ。出動がかからないとは限らない。いざという時疲れて動けない、なんてことがないように、たまには休め」

「……………無用……………」

己には休んでいる暇などない。ほんの僅かな時間も惜しんで前に進まなければ、追い付くことなど出来はしない。

……………己には、「彼女」のような才能はないのだから。

「……………そんな暇はない、という顔だな？ 才能がない分、努力で埋められないと」

「……………」

どうやら己の思考など、「彼女」はお見通しらしい。今に始まったことではないが。

「お前にも才能はあるさ。「努力」という才能がな」

「……………」

……………何を言うかと思えば。

そんな安い慰めなど、「彼女」からは聞きたくなかった。

「……なんだ？ 納得いかないという顔だな？」

「……………」

納得など出来るものか。

己と「彼女」の間には、あまりにも大きな差がある。この差はそのまま己たちの才能の差であり、それを埋めるためにこうして訓練に明け暮れているのだ。

それでも「彼女」の背中が遠くなるほど先にあるというのに、「努力という才能」などと言われても、納得など出来る筈がない。

「……そうだな。私は才能とは、他人に真似出来ないことが出来る能力だと思っている」

「……………」

それについては同意する。「彼女」の剣は、「彼女」以外の誰にも真似など出来ない。

「そして私は、お前以上に努力している人間を知らない。私自身、お前以上に努力出来るとは思えない。……そら、やはりお前の努力は、才能と呼べるものだ」

「……詭弁……………」

たとえ努力が己の才能だとしても、それが何になる。

努力は、実らなければ意味がないのだから。

「……ふうん。相当深刻なようだな、お前の悩みは」

「……………」

溜め息について、「彼女」はジト目で己を睨む。うだうだと悩み続ける己の姿は、よほど無様なものなのだろう。

誇り高い「彼女」は、自分の同僚がそんな様でいることが気に食わないのかも知れない。

しかし「彼女」は、唐突にニヤリと笑みを浮かべた。その顔はまるで、悪戯を思い付いた子供のようで。

「……ふふん。それでは真面目に努力している少年に、お姉さんからご褒美をやろう」

「……………」

言って「彼女」は身を翻し、隣のシミュレーターに乗り込んだ。コンソールを操作して己のシミュレーターとリンクさせ、ロケーションを設定していく。

「一対一だ。「鴉殺し」の忌み名の所以、身をもって教えてやる」

「……！」

——まさか。まさか、まさか……！

「良く見ておけよ？ 真改。」

——私の、剣を」

「……応……！」

我ながら現金なものだ。さっきまでの悩みが一瞬で吹き飛んだ。もはや疲労すら感じていない。

代わりにこの身を満たしているのは、途方もない活力。

——「彼女」の剣が、見られる。それも、最も近い場所で。

ならば疲労など、感じている暇すらない——！！

「往くぞ、真改。私の剣を見せるのだ、お前の剣も、魅せてもらうぞ——！」

「真改、起きろ」

「……！」

肩を揺すられ、目を覚ます。

目の前には、長い黒髪を白いリボンで纏めた、幼なじみの姿。

「そろそろ着く——ど、どうした、真改？」

「……？」

どうした、とは？

今は海へ向かうバスの中、居眠りくらいおかしなことではないと思うが。

「……泣いて……いたのか？」

「……な、に……？」

目元を拭くと、確かに濡れている。

……泣いていたのか？ 己が？

「……夢を見ていたのか？」

「……夢……」

……夢。

確かに見ていた。遠い昔の夢。

己がまだ、今よりもとても弱くて。

「彼女」がまだ、確たる形を持って、己の前に在った頃の夢。

——この己が、焦りながらも、確かに幸福を感じていた頃の夢。

「………！」

「し、真改!! どうしたんだ、一体……？」

はらはらと、涙が零れる。

……なんだ？ 何故、己は泣いている？ 夢とはいえ、「彼女」に逢

えたというのに——

「……悲しい夢を、見たのだな」

「……かな……しい……？」

……悲しいのか？ 己は。

失ったモノを。

もう二度と、この手に戻らないモノを。

また、目の前にしてしまったから。

「……真改」

「………」

ふわり、と。

箒に優しく抱き締められた。

いつだったか、己が箒にしたように。

「すまない。私たちは、お前に頼ってばかりだ。お前にも、辛いことや

悲しいことがあるだろうにな」

「………」

「まだまだ私たちは未熟だ。だがそれでも、お前の力になりたい。

……たまには、頼ってくれないか」

「………」

……違う。違うんだ、箒。

これは己の問題、それも、もう終わってしまった問題なんだ。
お前たちには……関係ないんだ。

「……落ち着いたか？」

「……………」

「なにかあれば、なんでも言ってくれ。私たちはいつだって、お前の味方だ」

「……………」

それはもう、ずっと前から知っている。箒は己に頼ってばかりと言うが、己の方こそ、今までずっと救われていた。

もう十分過ぎるくらいに、己の力になってくれている。

「……さあ、もう海に着くぞ。準備を——」

「え、ちよ、ほほほ箒さん!? なにしてますの!?!」

「はっ!?!」

セシリアの狼狽しきった声が聞こえた。

ちなみに己はまだ箒に抱き締められており、しかもその高校一年らしからぬ胸に顔をうずめる形だ。

「……これは……まずい……」

「い、いや、これはだな……!?!」

「く、真改さんの隣の席になるだけでは飽きたらず、その寝顔を独占し、あまつさえ抱き締めるなどと……!?!」

「いのうちの寝顔なんて、私も見たことないのにく」

「それはお前の起きるのが遅いからだろう」

「けど珍しいな、シンが昼間に寝るなんて」

「僕も見たかったなあ、シンの寝顔」

「なにになに? 井上さん寝てたの?」

「誰か! 写真撮った人いないの!?!」

「く、海なんかに現を抜かしてる場合じゃなかったわ……!?!」

「なんて迂闊、こんなベストショットを見逃すだなんて……!?!」

「……………」

急激に騒がしくなる車内。

いや、正確には先ほどから騒がしかったのだが、己が騒ぎの中心に

なった。

……勘弁してくれ。騒がしいのは、苦手なんだ。

「箒さんっ！ いつまでそうしているつもりですの!？」

「次は私が抱きつきまゝす」

「何を言う、私が先だ」

「あ、じゃあ次僕で」

「そんなサービスはありませんっ!! 箒さん、早く離れて下さい!」

「わ、分かった! 離れる! 離れるから落ち着け!」

「ではでは、その隙に、いえ〜!」

「本音さんっ!!」

「じゃあ僕も、いえ〜!」

「い、いえ〜……」

「」「」「いえ〜!!」「」「」

「……なんだこれ?」

本音を皮切りに、次々に突撃してくる一年一組の面々。

もみくちゃにされる己、巻き込まれる箒、虚しく響くセシリアの怒声、激怒した千冬さんによる超高速の連撃、阿鼻叫喚の地獄絵図……。

車内はあつという間に大混乱になった。

いつも通りと言えども通りな光景。それを前にして、いつの間にか、涙は止まっていた。

……騒がしいのは、苦手なんだが。

だがまあ、決して、嫌いというわけではない。

臨海学校の間お世話になる旅館に挨拶を済ませ、割り振られた部屋に荷物を置き、早速とばかりに本音に連れられ更衣室に行つて着替え、外に出ると――

「臨っ!」

「海っ!!」

「学っ!!!」

「校っ!!!」

「「海だあああつ!!」」

「……………」

凄まじい盛り上がりぶりを見せるIS学園一年一同がそこに居た。砂塵を巻き上げながら砂浜を爆走する少女たちにはまったくついて行けないので、己は肩に担いだビーチパラソルを砂に突き立て、その影に座り込む。

「いのつち、泳がないの〜?」

「……………」

片腕でも泳げるが、特に泳ぐことに魅力を感じない。それよりも、こうして生きている自然を眺めている方がいい。

「じゃあ、私は泳いでくるね〜」

「……………」

そう言って手を振る本音に頷きを返し、見送る。……本音よ、そんな狐かなにかのような着ぐるみを着ていて泳げるのか? いや、着ぐるみの有無にかかわらず、泳げるのかお前は?

しかし、それは己の心配することではあるまい。これだけ人がいるんだ、なんとかなるだろう。本音だしな。

さて、ではのんびりするか、と本格的に腰を落ち着け始めたところ
で――

「うん、やっぱり似合ってるね、シン」

「……………」

鮮やかな黄色の水着を着たシャルと……なにか良く分からない物体がそこに居た。

「……………」

「……………」

それは複数のバスタオルで全身を覆っており、その下にいるであろう人物を完全に隠していた。

……隠してはいたが、バスタオルで膨らんでもなお小柄なそれの中身は、恐らくラウラだろう。

……なにをしているのやら。

「シンは泳がないの？」

「……………」

「あんまり、泳ぐの好きじゃないの？」

「……………」

「うくん…………じゃあ、泳ぎたくなったら呼んでよ。一緒に泳ぐ？」

「…………承知…………」

「うん、じゃあまた後でね。…………あ、一夏だ。ほら、行くよ」

「ま、待て、引っ張るな。まだ心の準備が…………」

声を聞いた限りでは、ラウラ（仮）の中身はやはりラウラのようにだ。前が見えないのだろう、シャルに手を引かれながらよろよろと歩いて行く。

シャルが性別を明かしてから同部屋になった二人は随分と仲良くなったようで、世間知らずなラウラをシャルが良く面倒を見ている。今回も、まあそんなところだろう。

さて、二人も行ったし、今度こそ――

「はあああ…………」

「……………」

なにやら重々しい溜め息をつきながらセシリアがやって来た。

そのまま己の隣に座り――

「はあああ…………」

「……………」

…………なんだ、何があった。鬱陶しいぞ。

「…………一夏さんに、サンオイルを塗っていたかどうかとしましたんですが…………鈴さんに邪魔されましたわ…………」

「……………」

それを己に報告してどうするんだ。再挑戦するにせよ鈴に報復するにせよ、己は協力せんぞ。

「せっかくの海、一夏さんにアピールするチャンスですので…………真改さん、なにかいい手はありませんか？」

「…………ない…………」

あつても教えん。

その方面における己の基本方針は箒を応援することだからな。最初に応援し始めたのが彼女である以上、裏切るわけにはいかん。

「……落ち込んでいても仕方ないですわね。気を取り直して、もう一度行ってきますわー!」

「……………」

胸の前で両拳をググツと握り締めて気合いを入れ、セシリアが立ち上がる。

そのまま、いつの間にやらビーチバレーを始めていた一夏の下へ歩いて行った。

では、今度こそそのんびり――

「ふむ。なかなか似合ってるじゃないか、真改」

「……………」

……やれやれ。己に静かな時間は訪れないのか？

山田先生との仕事の話を終え、東の間の自由時間を満喫するべく海に出る。

私の水着は一夏が選んでくれたものだ。少し気恥ずかしくはあるが、顔には出さない。また山田先生にからかわれかねないからな。

「やして……………むっ。」

海岸をぐるりと見回すと、ビーチパラソルの影で膝を抱えて座る黒髪の少女を見つけた。

あの一件以来、水着どころか半袖の服さえ着なくなった、真改だ。その真改が以前試着室から水着を着て出てくるのを見かけた時は、随分と嬉しかったものだ。

ふ、と小さく笑みを浮かべ、真改のところへ歩いて行く。真改は泳ぐつもりはないようだったが、鋭くも優しい眼差しで、美しく澄んだ海を眺めていた。

「ふむ。なかなか似合ってるじゃないか、真改」

「……………」

私の声に、ゆっくりと視線を向けてくる。

真改は黒い生地に華美にならない程度のレースが施された、質素ながらも洒落たデザインのビキニを着ており、その上から丈の短い白いパーカーを羽織っていた。

薄手のそれは真改の左腕を隠しつつも細く整ったボディラインはしっかりと分かる造りをしており、丈の下からは臍が、軽く空いた胸元からは黒い水着がチラリと見える。

そしてスラリと長い引き締まった脚は、モデル顔負けの脚線美を描いていた。

「嵐の言っていた秘策とやらはそれか。言われてみれば簡単なことだが、確かにお前には良く似合う」

「……………」
真改の隣に腰を下ろして、海を眺める。

こいつとこうして海に来るなど、何年ぶりだろうか。

「…………バスの中で、泣いていたな」
「……………」

「お前の涙など、初めて見たが……………」
「……………」

真改が泣く理由など、私にはそれくらいしか思いつかない。

真改の両親——井上国貞と、井上和泉。

真改の名は、自分たちの名前に関係するものを付けたのだろう。

真改が孤児院に来てから知り合った私は当然彼らのことを知らないが、真改の部屋に飾ってある写真、無表情の幼子を挟んで幸せそうに笑っているそれを見れば、真改がいかに両親から愛されていたかが分かる。

その頃を、若しくは両親を失った事故のことを夢に見たのではないか、と考えたのだが。

…………なにせ、泣いていたのがバスの中だったから。
「…………杏…………」

どうやら、違うらしい。

ならば何故、とは思うが、しかしこれ以上詮索するのも気が引けた。左腕を失った時ですら気丈に振る舞い続けた真改が泣いていたの

だ、よほどのことなのだろう。私の好奇心で思い出させるのは憚られる。

「……まあ、また泣きたくなったら、誰かの胸でも借りるといい。一夏でもいいし、私でも構わんぞ」

「……………」

真改は無言のまま、首を振ることもしない。

相変わらず何を考えているのか分からない無表情で、ただ静かに、海を眺め続けていた。

青く澄み渡った美しい海を存分に堪能したあと、大広間を三つ繋げた大宴会場の夕食となった。

目の前には膳が置かれ、その上には宝石のような輝きを放つ刺身が並んでいる。

「……見事……」

「うむ、美味しい。刺身だけでなく、鍋も和え物も味噌汁も実に美味しい。まさに職人技だな」

「うまうま♪」

両隣に座る本音と箒も絶賛している。

昼食も美味かったし、臨海学校でこれほどの物が味わえるとは、I S学園は本当に贅沢である。

「……しかし一夏のやつ、鼻の下を伸ばしおって……」

「……………」

「うまうま♪」

離れた席でちようど向かい合う形で座る一夏の両隣には、セシリアとシャルの姿があった。

この旅館は何故か夕食時には浴衣着用なので二人も当然浴衣なのだが、鮮やかな金髪でありながらどういいうわけか似合っている。

……美人は何を着ても似合うというヤツか？

とにかく、箒は一夏の隣に座れなかったことが悔しいようであり、

さきほどからずつと一夏を睨み付けている。

「うぬぬ……」

「……………」

「うまうま♪」

しかめっ面をしながらも箸は止まらず、一夏を睨んだまま手元を見もせずに料理を口に運んでいる。

……何気にすごいな。

「むっー!」

「……………」

「うまうま♪」

箸の目がくわつと見開かれた。一夏が隣に座るセシリアに、「俺が食べさせてやろうか?」と言ったからだ。

一夏の隣に座るために無理して正座を続けるセシリアが(当然その思いに気付く一夏ではない)、先ほどから何度も刺身を取り損ねているのを見かねての発言である。

「おのれセシリア、なんと狡猾な……!」

「……………」

「うまうま♪」

パクパクと食べる速度を上げながら呻く箸。

……セシリアがそこまで考えているとは思えないが。

しかしそこで問題が起きた。セシリアの口に一夏が刺身を運んでいるところを、他の女子に見られたのである。というか見つかって当然だった。

「あー! セシリアずるい!」

「織斑君の隣の席でただけでずるいのに!」

「ず、ずるくありませんわ!」

「問答無用っ!」

「ていつ!」

「ひゃあああああっ!!?」

セシリアの足を数人掛かりでつつき始めた。顔色が青くなるくらい痺れているところにその攻撃は酷過ぎる。素っ頓狂な悲鳴を上げ

て倒れるセシリア。

「わあ!?! 何してんだよ!」

「この隙につ!」

「織斑君、私にも食べさせて!」

「あーん!」

帰って来た親鳥に餌をせがむ雛鳥と化した数人の女子がぴーぴーと鳴き始める。

食事中のマナーには厳しいと言われる己だが、しかし黙って見ているだけに留めた。何故ならば――

「お前たち、食事中くらい静かに出来んのか」

「ひいつ!? お、織斑先生!?!」

――己よりも遙かに厳しい人が、この場にいるからだ。

「随分体力が有り余っているようだ。それでは夜も寝付けまい。よし、私がお前たちの安眠に協力してやろう。」

……涙を走ってこい。倒れるまで」

ドドドドドド、と効果音が付きそうなオーラを発する千冬さんに睨まれ、蜘蛛の子を散らすように席に戻っていく女子一同。これもいつもの光景である。

「……織斑、騒ぎを起こすな。いちいち鎮めるのが面倒だ」

「……はい」

千冬さんの言葉に大人しく従う一夏。無理もない、あんな鬼神の如き御仁に睨まれば誰だってそうする。己もそうする。

「というわけで、ごめん、セシリア。なんとか自分で食べてくれ」

「……ええ、ええ、わかってますわ。一夏さんは、お姉さんが大事なんですものね」

膨れっ面をしながら言うセシリアに、一夏も罪悪感を覚えたらしい。セシリアに耳打ちをした。

「悪かったって。代わりと言ったらなんだけど……ごによごによ」

「……えい!? そ、それは……!」

一体なにを言われたのか、セシリアが急に真っ赤になる。

そして足の痺れなどもはや感じていないかのような素早い動きで、

一夏の手を両手で包み込んだ。

「はい！ か、必ず！ 必ずや……!! ですから、少々お待ちになってください！」

「お、おう……？」

満面に幸せそうな笑みを浮かべながら食事を再開するセシリア。

……なんだ、なにを言われた。

「……なんだ？ 一体」

「……………」

「うまうま♪」

……さあな。だが一つだけ、確実なことがある。

——就寝時間までに、もう一騒動ありそうだ。

夕食後。

いきなり千冬さんが話し掛けてきた。

「真改。風呂に入ってこい」

「……………」

本当にいきなりだった。言われずとも、風呂くらい入るが。

「部屋の風呂ではない。大浴場の方だ。今は男子、つまりは織斑の入浴時間だが、あいつはもう上がったからな。今は誰も使っていない。気兼ねなく、温泉に浸かれるぞ」

「……………」

……ふむ、魅力的な提案だ。

元々己は風呂好きなのだが、流石に皆と一緒に大浴場に入るのは気が引ける。だから学園では、部屋の風呂で我慢していたのだが——

「せっかくの温泉だ。堪能してこい」

「……………」

感謝を込めて一礼し、入浴道具を取りに部屋に戻る。

これほどの旅館だ、風呂もさぞ豪華なことだろう。楽しみだ。

というわけで部屋に戻り準備をしていると、己に話し掛けて来る者

が。

「あれ〜？ いのつち、どこ行くの〜？」

「む、温泉か？ しかし今は一夏が入っている時間だろう」

同部屋の本音と箒である。どうせ己が大浴場に入ることはないと思つて聞き流していたが、他の皆はしつかりと説明を聞いていたようだ。

……なんだろう、自分がダメな子になった気がする。

「……上がった……」

「む？ ……ああなるほど、そういうことか」

「じゃあ私も行く〜」

「……そうだな、私も邪魔させてもらうか」

「……………」

そして三人で温泉へ。更衣室の暖簾を潜ると、やはり中には誰もいない。

「貸し切りだな。ふふ、存外いい思い付きだったかもしれん」

「わあ、お風呂広〜い！ きれ〜い！」

「……………」

浴衣を脱ぐ前に風呂を覗きに行った本音が歓声を上げる。ふむ、さらに楽しみになって来たぞ。

「ほら、早く準備しろ、本音。置いて行くぞ」

「ああ〜、しののん待つて〜」

「……………」

「いのつちも待つて〜」

がらりと更衣室の扉を開け、風呂場に出る。するとそこには、様々な温度、浴槽の風呂の数々が。

「……………おお……………」

「……………素晴らしい。これほどとは……………」

「いっちばくん！」

「あ、馬鹿者！ まずは体を洗え！」

女三人寄れば姦しいと言うが、成る程、確かに姦しい。……いや待て、己は数に入れていいのか？ 色々な意味で。

「いのつち、背中流してあげる」

「……無用……」

「では私は髪を洗ってやろう」

「……聞け……」

己の言葉を完全に無視して湯を掛けてくる二人。……己は子供か。

「……ふむ、思ったよりちゃんと手入れしているんだな」

「私がやってるんだよ」

「ほう、それは……。大変だろうに、これだけ長いと」

「いやいや、いのつちは身だしなみに無頓着だからね。私が面倒

見てあげないと」

「うむ、これからも真改を頼むぞ、本音」

「おまかせあれ」

「……」

……完全に子供扱いか。納得いかん。

「むむっ！」

「ど、どうした？」

「……しののん、おっきい」

「……なっ!？」

「……おっきい……」

「ま、まじまじと見るなっ！」

「……おっきい……」

「だから見るなど……」

胸の大きさについて盛り上がり始めた二人だが、突然箒の動きが止まった。

……どうでもいいが、洗い終わったのなら早く流してくれないか。

さっきから跳ねた泡が目に入って痛いのだが。

「……そういうお前も、随分……」

「ほえ？」

「……」

「……」

「……この話題は、止めよう……」

「……そうだね〜……」

一転して、黙々と己の体を流し始める二人。……そつとしておこ
う。

そして体を洗い終え、温泉へ。

「……………ふう〜〜……………」

「気持ちいい〜……」

「生き返るな……」

「……………溶ける……」

やはり風呂はいい。こうして湯船に浸かっていると、体だけでなく
心まで癒えていく気がする。

「温泉っていいね〜……」

「日本の宝だな……」

「……………同意……」

三人でゆつくりと風呂に浸かる。

……魂が抜けそうだ……。

「ねえ……………いのっち……」

「……………」

「私も……………いのっちの力に、なれてるかな……………」

「……………」

……意外に本音が大人しくしているので、不思議に思っていたが。
どうやら本音なりに、気にしていたらしい。

「私も……………いのっちのために、何か出来ないかな……………」

「……………」

「だって、いのっち、泣いてたもん……」

「……………」

「友達の涙なんて、見たくないよ……」

「本音……」

「……………」

……そうしてまた、しばしの沈黙。

ゆつくりと流れる時間が、今は妙に物悲しい。

「……………ごめんね〜、変なこと言っちゃって……………」

「……………」

「……私、もうあがるねっ」

立ち上がり、ペたペたと歩いて行く。

その背中に、なんの言葉も掛けられなかった。

「……言っただろう？ みんな、いつだって、お前の味方だと」

「……………」

……そうだな。

ならば己も……仲間のために、なにか出来ないだろうか。

「彼女」には、何もしてやれなかったから。

風呂から上がり、部屋でくつろいでいた時のことだった。

「……シン、箒。織斑先生が呼んでるわよ」

「なに？」

「……………」

……はて、何の用だろう。

本音がどこかに行ってしまったので、己は素振りでもしようと思っ
ていたんだが。

「織斑先生が？ なんの用だ？」

「あたしが訊きたいわよ。ああそれと、シンには「例の物を持って来
い」って言ってたわよ」

「……………」

む……この土産を持って行くには、まだ時間が早いと思っていた
が。だがまあ持つて来いと言うのなら、持つて行こう。

立ち上がり、鞆から臨海学校へのバスに乗り込む直前に如月重工か
ら送られてきた包みを取り出す。

「……なんだ、それは？」

「……………」

「ま、なんでもいいわ。行きましょ」

部屋を出て、千冬さんたち教員用の部屋に行く。そこにはシャルと

ラウラもいた。

「お前たちも呼ばれたのか？」

「う、うん……そうなんだけど……」

「……………」

なにやら二人とも顔が赤い。というか首まで赤い。

一体なにが、と思っていると――

『あ、んん……一夏さんって、上手ですね……』

『千冬姉に良くしてたからな』

『ふふ……あつ……もう少し優しく……』

『おっと。……こうか？』

『んんう……気持ちいいですわ……』

『そりや良かった。じゃあもつと気持ち良くしてやらないとな』

『ああつ！……す、すごい……』

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……この声は、一夏とセシリアか？

妙に艶のある声を聞き、集まった一同が揃って俯き真っ赤になる。

初々しいのは何よりだが、お前たちの想像しているようなことは多

分……否、絶対にない。

というわけで、己は遠慮なく部屋の扉に手をかける。

「……………」

「……………」

皆が何か言ったが無視する。そのまま扉を開けると、そこには――

「おう、来たか」

「ふえ……………」

「ふう、じゃあここまでだな」

ニヤニヤと笑う千冬さんと、とろけた顔でうつ伏せに寝転ぶセシリ

ア、そしてそれにマッサージをする一夏の姿があった。

「さて、何を想像してたのやら、このマセガキどもは」

「……」

マッサージにより汗をかいた一夏を風呂に行かせ、千冬はニヤニヤ笑いながら集まった一同を見渡す。

真改を除き、その顔は真っ赤だ。

「真改、持って来たか？」

「……」

無言で手に持った包みを差し出す真改。千冬はニヤリと笑って受け取り、包みを開ける。

その中身は――

「ほう、これが……」

「お……お酒？」

「高そう……」

華やかな絵のラベルが張られた、とてつもなく高そうな日本酒だった。

「感謝するぞ。これほどの酒、そうは味わえん」

「……」

この酒は真改が如月重工に頼んだものだった。学園内では流石に見つかるので、臨海学校に合わせて持って来てもらったのである。

……本当はもつと安い酒を頼んだのだが、如月社長が勝手に奮発したのである。ポケットマネーで。

「さて、お前たちには私が奢ってやろう」

上機嫌な様子で旅館備え付けの冷蔵庫を開け、中から飲み物を取り出し、五人に配る。

「そら、飲め」

「……え？」

困惑する五人。渡された飲み物を見る。

……どう考えても、口止め料だった。

「……えーつと……」

「飲め」

「……はい」

圧力に負けて飲み物に口を付ける。極めて強引な買収であった。

「……飲んだな？」

ニヤリと笑う千冬。その顔が悪魔のそれに見えたのも無理からぬことであった。

「さて、真改」

「……」

千冬は盃を二つ持って来て、胡座をかく。片方の盃を真改に渡し、日本酒の栓を抜き、トクトクと注いだ。

「では」

「……」

互いに盃を軽く掲げ、中身を呷る。

口に含んだ酒を存分に楽しんでから飲み込むと、千冬は大変満足した顔で頷いた。

「……美味しい」

「……美味……」

「あのー……織斑先生？」

シャルロットが勇氣(?)を出して、千冬に尋ねる。

「なんだ？」

「え、いや、お酒……」

「別に構わんだろう、私だって酒くらい飲むさ」

「いや、そっちじゃなくて！ シンは未成年ですよ!？」

「こいつは相当な酒豪だぞ」

「……え……!？」

驚きの表情を浮かべる五人。

規則や規律にうるさい千冬が仕事中に酒を飲んだことも驚きだが、基本的に品行方正な真改が飲酒の常習者であったことも驚きだった。

「……」

「……………」

自分に向けられる視線もなんのその、無表情のまま酒を注ぎ、飲み続ける真改。

……妙に様になっている。

その様子を唾然としながら見ていた五人に、千冬が声を掛ける。

「さて、前座はこれくらいにして……」

とか言いながら、また酒を呷る千冬。そしてまた満足げに頷き、次の言葉を放つ。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ、というのは言うまでもなく一夏のことだ。

びくりと反応し、挙動不審になる五人。真改はまるつきり無反応に、酒を飲み続けている。

「わ、私は別に……ただの、幼なじみですから」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしただけです」

順に箒、鈴、セシリアのコメント。

落ち着かない様子でそんなことを言っても、本心からの言葉でないことは明白だった。というかそれで誤魔化してるつもりなのかと小一時間。

「ふむ、そうか。では一夏にもそう伝えておこう」

「言わなくていいです！」

その反応を心底楽しそうに笑ってから、また酒を呷る千冬。

「で、お前は？」

「へ？ あ、僕——いえ、私は……優しいところ、です……」

千冬の問いに、小さな声でシャルロットが答える。恥ずかしそうな、しかし真面目な顔からは、本心からの言葉であることが伺える。

「しかしあいつは誰にでも優しいぞ。昔から」

「そ、そうですね。そこがちよつと悔しいかなあ、あはは……」

前の三人と違い、ハッキリと言葉にしたシャルロットに嫉妬の視線が向けられる。

……そんな目をするくらいなら素直になればいいのに、と真改は

思った。

「では、ラウラ」

「……っ、強いところでしょうか……」

「いや弱いだろ、どう考えても。なあ、真改？」

「……未熟……」

ダブルでバツサリだった。

しかしその言葉に、珍しくラウラが食って掛かる。

「っ、強いですっ。少なくとも、私よりも」

「そうかねえ……」

くびつと酒を一口。

素っ気ない態度とは裏腹に弟を誉められたことが嬉しいのだろう
ことが、真改だけは気付いた。

「……で、真改」

「……っ？」

「お前、好きな男とかいないのか？」

「……」

千冬の言葉に、そんなことかと真改はまた酒に口を付ける。しかし
それでは済まさない者が約六名。

「あ、それ僕も気になる」

「どんな男が好みなんだ？」

「アンタ全然浮いた話聞かないもんねえ」

「真改さんに見合う殿方なんて、早々いないでしょうからね」

「マスターに見合う男、か……」

「で？ どうなんだ、真改」

「……」

さてどう逃げるか、とまともに答える気皆無の真改。しかし包囲網
は既に完成していた。

「否定しなかったな。誰かいるんじゃないのか？」

「アンタ、嘘は吐かないもんね」

「誰なんだ？ 真改」

「聞きたいなあ。すごく聞きたいなあ」

「教えてくださいいな」

「私も気になるぞ」

「……………」

答えるべきか、真改は迷った。

このまま黙っていても、きっと彼女たちは逃がしてくれないだろうことは容易に想像出来た。むしろ追求の手はどんどん執拗になっていくだろう。

しかし正直に言うのも問題があった。

好きな者はいらぬ。今も尚、真改は「彼女」を想い続けている。それを簡単な嘘で誤魔化すなど、真改にはどうあっても不可能だった。だが逆に、この楽しいな雰囲気もぶち壊すこともしたくなかった。

「彼女」は既に故人であり、今はもういないのだ。過去と現在、重きを置くべきはどちらか、真改は良く分かってる。過去と現在、重きを置くべきはどちらか、真改は良く分かってる。

「彼女」のように、前を向いて生きてなかった。

「……………」

酒を一口含み、飲み込む。

何故「彼女」の夢を見たのか、その意味を考えて――

「……………故人……………」

「……………あ……………」

……………やはり、「彼女」への想いは、いまだ強く真改を縛り付けていた。……………すまない」

何も言えなくなった五人に代わり、千冬が沈痛な顔で謝る。

真改はそのまま立ち上がり、部屋を出た。

静まり返った部屋を背に、自室へ戻って行く。

「……………懦弱……………」

ギシリ、と奥歯が砕けんばかりに噛み締めて。

自身の弱さを、心底から憎みながら。

第25話 天才

「アナトリアの傭兵。お前も知ってるだろう？」

「……………」

当然知っている。彼を知らないリンクスなどいない。

現在世界規模で行われている戦争——リンクス戦争。

アナトリアの傭兵はこの戦争で多くのリンクスを打ち倒し、伝説的な活躍をしているリンクスである。

……………だが、突然どうした。

「彼が元レイヴンであるのは有名な話だが、最近分かったことがあつてな」

「……………」

「彼はどうやら、国家解体戦争の時、私が仕留め損ねたレイヴンのようなんだ」

「……………」

アナトリアの傭兵がレイヴン時代にいくつもの伝説を生み出していたことは知っていたが、その伝説は伊達ではないらしい。

……………よもや、ノーマルで「彼女」と戦い、生き残るとは。

「彼はレイヴンからリンクスになったわけだが、AMS適性は低いと聞いている。お前よりもな」

「……………」

「だが彼は、現実としていくつもの戦功を立てている。アナトリアがただのコロニーでありながらこの戦争に参加出来ているのは、彼が居るからだ」

「……………」

「劣悪なAMS適性で、何故そこまで戦えるのか？ それこそが、お前の求める答えではないか？」

「……………」

伸び悩む己を、「彼女」なりに気にかけてくれているのだろう。急に話し掛けてきた「彼女」の意図は分かったが、しかし己の求める答えには繋がらない。

——アナトリアの傭兵は、レイヴンとしての「才能」があった。その戦いの才能が、AMS適性を補うほどの彼の力なのだろう。

「……後ろ向きなヤツだな。女々しいぞ、真改」

「……………」

据わった目で己を睨む「彼女」。何も言っていないのに、どうして己の考えていることが分かるのだろうか。

「……なぜ私は、彼だけは倒せなかったのか。あの時は分からなかったが、今なら分かる」

「……………」

聴く者を惹き付ける凜とした声色で、諭すように、語り始める。

「……彼には強い「信念」があった。この私を、分厚い装甲越しに怯ませるほどの、「信念」が」

「……………信念……………」

「それが私の踏み込みを甘くさせた。装甲は切り裂けたが、その奥にいる彼には、僅かに届かなかった。……つまりは、気圧されたんだ」

「……………」

気圧されただと？

まさか、「彼女」が、戦場で？

それも、高がノーマルに——高が、レイヴンに。

「彼の戦いぶりを見て、ようやく分かった。……守りたいものが、あるのだろうか」

「……………」

「才能などではない。揺るぎない「信念」こそが、彼を強者たらしめている」

「……………」

「……お前はどうか、真改。お前には「信念」はあるか？」

「……………」

ある。

己の心に、常に在り続けているもの。

己が、追い求めているもの。

「……言っておくが、私に追い付くことが信念だ、などとは言わないよ」

「……！」

「……凶星か。まったく……」

はあ、と溜め息を吐く「彼女」。

……心底呆れているようだった。

「お前が目標としてくれてるのは光栄だがな。信念とは自身の中に秘めるモノだ。私に求めるな」

「……」

だが、それでは己には信念などないということになる。「彼女」に追いつく、それだけしか己にはない。

……そんな様だから、己の剣は、こんなにも軽いのか。

「お前はまだまだ強くなる。どんな試練も、お前なら乗り越えられる」

「……」

「今はまだ、私でいい。だがいつか、お前は私を超えるだろう」

「……」

そんなことは有り得ないと、思ってしまう。「彼女」を追い掛けているながら、しかし決して追い付けはしないと、心のどこかで諦めている。

——なんたる、懦弱さか。

「お前が私よりも強くなり、共に背中を預けて戦える日が来たら、その時は——」

「……」

こんな己を、何故「彼女」は気にかけてくれるのか。

己などに、一体何を期待しているのか。

……それが己には、どうしても、分からない。

「聴かせてくれ。お前を強くした、お前の「信念」を。」

——その先に在る、お前の「答え」を」

—————

「むにいく……あ」

「……」

目が覚めたら、腹の上に馬乗りになった本音が、己の頬を左右に引っ張っていた。

……………なんだ、この状況。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………お、おはよう、いのっち」

「……………」

とりあえず、ぐわしと本音の顔を鷲掴んで放り投げる。きやく、と気の抜けた悲鳴を上げて飛んでいく本音。

……………なんなんだ、一体。

「いや、いのっちの寝顔がかわいかったから、つい」

「……………」

本音が何か言ってるが無視。

起き上がり、寝間着代わりの浴衣を脱いで着替える。今日は初日とは真逆の、一日かけてのISの各種装備試験運用だ。集合時間に遅れればなにをされるか分かったものではない。

「ほらほらいのっち、座って」

「……………」

本音に促され、正座する。朝の恒例となった、左腕の傷を隠す包帯である。

「……………なるほど、真改の包帯は、お前が巻いていたのか」

「いのっち、こういうの無頓着だからね。女の子なのに」

「……………勲章……………」

「……………はあ……………」

己の言葉に深い溜め息を吐く二人。

……………そんなに呆れられることを言ったか、己は。

「完成」

「ほう、上手いものだな」

「毎朝やってるからね」

「……………」

「なるほど。じゃあ、朝食に行くか。……遅刻したらどんな目にあわされるか分からん」

「ぐはんぐ。楽しみ〜」

「……………」

確かに、昨日の食事は大変美味だった。朝食に期待してしまうのも無理からぬことである。

「じゃ〜、しゅっぱ〜っ!」

「……寝癖くらいは直していけ」

「おお〜?」

「……………」

というわけで、食堂となる広間に向かう。臨海学校の二日目は、こうして始まった。

広間では周囲が今日行われる試験運用や食事の美味さについて話しているなか、己はまるで別のことを考えていた。

……何故、二日も続いて、「彼女」の夢を見たのか。

それが一体、なにを意味しているのか。

……ただの偶然、己の思い過ぎしなら、それに越したことはないのだが。

そして場面はIS試験用のビーチに移る。周囲が切り立った崖に囲まれたここから海に出るには一旦潜り、海中のトンネルから出る必要があるという念の入りようである。

……いや、天然の構造であって、決して誰かが作ったというわけではないのだが。

「班分けと班毎のテストの内容は把握しているな? 専用機持ちにはそれぞれの専用装備が送られて来ているはずだ、確認しろ。……では、準備しろ。限られた時間を有効に使えよ」

「はいー!」

千冬さんの号令に従い、各自散開。班ごとの持ち場につき、準備を始める。

「篠ノ之、お前はちよつとこっちに来い」

「？ はい」

己が如月重工から送られて来た装備の点検をしていると、箒が千冬さんに呼び止められた。

「突然だが、お前には今日から——」

「ち~~~~ちや~~~~~~~~んっ!!」

.....頭痛がした。

声のした方を見ると、砂塵を派手に巻き上げながら突撃して来る人影が。

青と白のワンピース、頭には機会仕掛けの兔の耳。常人の理解の範疇を超えた格好をした人影。

己の頭痛の原因はただ一つ。その人影の正体が——

「.....束」

——ISの開発者、ただ一人で世界を変えた天才、己が最も苦手とする人物、篠ノ之束だということだ。

関係者以外立ち入り禁止なのだが、そんなことはお構い無しに、この人は堂々と臨海学校に乱入してきた。

「おっひさー！ んもう、会いたかったよちーちゃん！ さあ、再会を祝して熱いハグをしゅあ!？」

千冬さんのアイアンクローが炸裂、束さんの顔に指が食い込むほどの剛力で締め上げる。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ.....相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

しかし束さんは万力の如きその握力からするりと抜け出し、何事もなかったかのように箒の方を向く。

「やあー」

「.....どうも」

極めて友好的な束さんとは真逆に、箒はすごく嫌そうな顔をしていた。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつき
くなつたね、箒ちゃん。特におっp」がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ ひ
どい！ こぶができちやうよー！」

箒が日本刀を持ち歩いていることには誰一人突っ込むことはなく、
ただポカンと二人の遣り取りを眺めていた。

そんな皆を代表して、山田先生が東さんに声を掛ける。

「え、えつと。すいません、この合宿は関係者以外——」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一
番はこの私をおいて他にいないよ」

「えつ、あつ、はいつ。そ、そうですね……」

秒殺だった。相変わらず人の話を聞かない御仁である。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私、面倒は嫌いなんだよね」

「そうか。では私が二度と面倒なことをしなくていいようにしてやろ
うか。物理的に」

「私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

……己が言うことではないが、ひどい自己紹介であった。

しかしその名前を知らない者などここにはいない。周囲がにわか
に騒がしくなった。

「し、篠ノ之……」

「束……？ それって……」

「まさか、篠ノ之束博士？」

「あの人が……？」

「……やっぱり天才って、変人なのね……」

その意見には同意だが、しかし彼女は天才でも変人でもない。

……超天才であり、超変人なのだ。

「はあ……。もう少しまともに出来んのか、お前は。そら一年、手が止
まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつだなんて、ひどいなあ。らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい黙れ」

飽くまでも調子を崩さない束さんと、心底うんざりしたような様子の千冬さん。

世界で最も有名な二人が旧知の間柄であるということに驚いている面々を置いて、箒がおずおずと束さんに話し掛ける。

「……それで、なんで姉さんがここに？」

箒に話しかけられたことだ妹大好きな束さんの目がキラーンと光り（本当に光った。人間か？）、芝居がかった動きで大空を指差す。

「うつつつつ。今日は箒ちゃんのために、プレゼントを用意したのだよ！ さあ、大空をご覧あれっ!!」

大声で告げられたその言葉に、集まった全員が空を見る。すると――

ズドーンツ!!

「のわあ!？」

砂浜が揺れるほどの勢いで、金属の塊――巨大な機械のニンジンが落下してきた。間を置かずにそれが開き、その中身を皆に見せ付ける。

そこにあつたものは――

「こ、これは……!？」

「じゃじゃじゃ、じゃーん！ これが、これがっ、これが!! 箒ちゃんの専用機だよ!!」

「……私、の……専用機……?？」

「そう！ その名も「紅椿あかつばき」！ 全スペックが現行ISを上回る、束さんお手製のISだよ!!」

陽光を受けて輝く、真紅の装甲。

両腰に佩いた、日本刀型の近接ブレード。

全スペックが現行機を上回る――事実上、最強のIS。

「さあ！ 箒ちゃん、さっそく一次移行を始めようか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「ちよ、ちよつと待つてください！ いきなり専用機と言われても……」

「んん？ 箒ちゃん、欲しくないの？ 専用機だよ？ それも、とびつきりでぶつちぎりの。紅椿なら、どんな相手にも負けないよ？」

「……いっくんと、一緒に戦えるよ？」

「な……!？」

「ほらほら、遠慮なんか必要ナシ！ ババーンと乗って、ガガンとやっちやおう！ ね！」

「う……」

強引に、半ば押し付けるように紅椿を箒に勧める東さん。しかし、それは効果的だった。

無人機の件、そして学年別トーナメントの敗北により、箒は「力」を求めている。

その「力」が、意図していなかった形とはいえ、手に入る。一夏と特に深く関わる者たちの中で唯一専用機を待たないこともあって、惹かれることだろう。

「……そ、それでは……お願いします」

「堅いよ、箒ちゃん。実の姉妹なんだし、「お姉ちゃん♪」とか、そんな感じに——」

「……………」

東さんの言葉に、箒は反応らしい反応を示さない。ただ心奪われたように、紅椿を見上げ続けている。

そんな箒を東さんはあまり気にした様子もなく、紅椿の一次移行を始める。空中投影型のディスプレイを六枚呼び出し、膨大なデータをなんでもないように処理していく。

瞬く間にフィッティングが終わり、箒の体に合わせて紅椿のサイズの微調整が行われる。予めある程度のデータが入力されていたのだろう、白式のような大きな形態変化はなかった。

一次移行が終わるまでの間、その様子を眺めていると——

「専用機、って……篠ノ之さんに？ 身内ってだけで？」

「特に優秀ってわけでもないのに……なんか、ずるいよね」

己と同じように眺めていた者からの、嫉妬を含んだ言葉。

それを拾い、意外にも東さんが鋭く反応する。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？ 有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

「……………」

その通り。世界は、いつだって不平等だ。

例えば、運。

例えば、生まれ。

例えば——才能。

「……………のつち」

「……………？」

突然、本音が俺の手を包み込む。

そしていつの間にか握り締めていた拳を、優しくほぐしていった。

見れば己の手の平には、爪が食い込んだのだろう、うつすらと血が滲んでいた。

……………それほどまでに、強く握り締めていたのか。

「……………」

「……………」

本音は何も言わず、悲しそうな目で己の手を見詰めている。

「……………いのつち、どうしたの？ 昨日から、なにかおかしいよ……………？」

「……………」

本当に、昨日からどうもおかしい。昨夜の酒の席然り、こんな些細な言葉にも、異常なほどに反応してしまう。

本当に、おかしい。

「彼女」の、夢を見てから。

「よし、あとはほっといても自動ですぐに終わるよ。……………あ、いっくん。白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

どうやら紅椿の方は終わったらしい。

束さんに促された一夏が白式を展開し、束さんはすぐさま機体のデータを確認し始める。

「ん？ これはこれは。ほほうほうほう。見たことないフラグメン

トマップだねえ。どういうことだろ？　いつくんが男の子なことと関係あるのかな？」

ちなみにフラグメントマップというのは、ISのコアが操縦者に合わせて独自に発展していく、その道筋のことである。人間で言う遺伝子にあたるものだ。

「東さん、そのことなんだけど。どうして男の俺がISを使えるんですか？」

「ん？　ん〜……どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

「……いい訳ないでしょ……」

「にやはは、そう言うと思ったよん。んー、まあ、わかんないならわかんないでいいんだけどねー。そもそもISって自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

……ふむ、東さんなら何か知っていると思っていたが、あてが外れたか。

しかしISの製作者である東さんにも分からないとは、一夏はどれだけイレギュラーな存在なのか。

「……ちなみに、白式、後付装備が出来ないんですけど、なんでですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええっ!?!　白式って東さんが作ったんですか!?!」

「うん、そーだよ。って言っても欠陥機としてポイされてたのをもらって動くようにいじっただけだけどねー。そしたら、なんと！　第一形態から単一仕様能力が使えるようになったのさ！　でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？　日本が開発してたのは」

「馬鹿者。機密事項をべらべら喋るな」

手加減抜きで、千冬さんが東さんの頭を叩く。

……しかし、白式には東さんが手を加えていたのか。道理で、随分尖った性能だと思ったが。

「あいたたた……もう、ちーちゃんったら、そんなに恥ずかしがなくなってもいいのになー。……さてと、他には……あー！　しーちゃん！」

「……………」

……まずい、見つかった。

「もー、相変わらず無口だなあ、しーちゃんは。声くらい掛けてくれたっていいじゃないのさー」

「……………」

「ねーねー、しーちゃんのISも見せてよ。どんなの乗ってるのか、東さん興味あるなー」

「……………」

見せない。絶対見せない。碌な事にならないのは目に見えている。断固拒否させてもらう。

「いーじゃん、見せてよー」

「……………」

「しーちゃん?」

「……………」

「……しーちゃん?」

「……………」

「……良いではないか、良いではないか」

「……………」

謎の歩方で接近を図ってくる東さんを間合いに入れないう、距離を取る。

周りから見れば特におかしなところのない、ただ普通に後退っているだけに見えるだろうが、かなり本気の見切りで間合いを図っていた。

……この人は近付けるととても厄介なので、決して間合いに入れないことが己の唯一の対処法なのだ。

しかし今日の東さんはやけにしつこい。早く諦めてもらいたいのだが———とと思っていると、鮮やかな金髪が東さんに近付いて行く。

「あ、あのっ! わたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコツトと申します! 篠ノ之束博士のご高名はかねがね承っております。もしよければ、わたくしのISを見ていただけないでしょうか!?!」

キラキラと目を輝かせたセシリアだった。有名人である束さんを前にして興奮しているようだった。

だが――

「はあ？ 誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は箒ちゃんとかーちゃんといつくんとしーちゃんとかと数年ぶりの再会なんだよ。空気読んでよ」

「え、あの……」

「うるさいなあ。あっち行きなよ」

「う……」

声、口調、表情、目線、態度……いずれも絶対零度の反応を受けて、セシリアがたじろぐ。

そう、束さんは人格に多大な問題があり、その内の一つがこれだ。彼女は箒、一夏、千冬さん、そして己以外の人間は、心底どうでもいいのだ。

本人を含めた五人以外の全人類が滅びたところで、何も感じないのではないか――そう思わせるほどに。

それを受け、セシリアは見るからに落ち込んだ様子で引き下がる。

……涙目であった。

「……こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるんじゃないかな。ほらできたー！」

箒が訊ねると、セシリアに対するものとはまるで違う態度で答える束さん。

「んじや、試運転といこうか！ まずは飛んでみて、箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ……それでは試してみます」

紅椿に連結されたケーブル類が外れていく。

箒は瞼を閉じて意識を集中させると、次の瞬間に紅椿は凄まじい速度で飛翔した。

「うわっ……!?!」

「……速い……!」

加速の余波で衝撃波が発生し、爆発的に砂が巻き上がる。

よろめく本音を支えながら空を見上げると、二百メートルもの上空まで一瞬で飛び上がっていた。

「どうだろう？ すっごく速いでしょ？ 加速もそうだけど、最高速もぶっちぎりだよ！」

「は、はい……」

朧月がオープン・チャネルでの会話を拾った。どうやら東さんもISを装備しているらしい。

……だとすると、東さんのISはいったいどれほどの代物なのだろうか。

「次は刀使ってよー！ 右のが〔あまつぎ雨月〕で、左のが〔からわれ空裂〕ね。それじゃ、武器特性のデータ送るよん」

武器データを受け、箒はしゅらんと二本同時に刀を抜き取る。二刀流は見た目よりも遥かに難易度の高い技術なのだが、そこは流石と言うべきか。

「はいはい、東センサーの説明タイム♪ どっちの刀も、もちろんただの刀じゃありません！ 雨月は集中攻撃用の武器で、打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、あつという間に敵を蜂の巣に！ する武器だよ。射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性ならモウマンタイ！」

その解説を受け、箒は右腕を左肩まで持ち上げ、構えた。

篠ノ之剣術流二刀型・じゅうじん盾刃の構え。刀を受ける力で肩の軸を動かし反撃に転じるという、守りの型である。

そこから刺突を放つと同時、紅椿の周囲に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、順番に光の弾丸となって空を駆け、漂っていた雲を穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは範囲攻撃に優れた武器だよん。斬撃に合作せて带状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ撃ち落としてみてね、ほーいっ」と

言うなり、紅椿が入っていた巨大ニンジンから十六連装ミサイル

ポッドが飛び出し、一斉射撃を行った。

「れつつごー、箒ちやーん！」

「やれる……！……この紅椿ならっ！」

箒は一回転しながら、空裂を横薙に振るう。すると赤色のレーザーが帯状に広がり、全てのミサイルを一瞬で撃墜した。

「……！」

圧倒的と言う他ない、凄まじい性能。

全スペックが現行機を上回る——その言葉に偽りはないようだった。

その光景に、砂浜に集まっている生徒たち全員が魅了され、言葉を失う。真紅の装甲を身に纏った箒は威風堂々と空に佇み、収まっていた爆煙を見ていた。

「やれる……やれるぞ、これなら……！」

高揚した面持ちで、刀の柄を握り締める箒。

——その顔には、覚えがあった。

『正規リンクスへの昇格、まずはおめでどうとっておこう。……そしてこれが、今日から君のものになるネクスト——』

「……っ」

「……！」

知らず、また右手を握り締めていた。しかし今度は、爪が手の平に食い込むことはなかった。

己が右手を握り締めるより速く、本音が己の右手を、指を絡めるように握っていたからだ。

ぎしり、と骨の軋むような音がしたが、本音は呻き声すら漏らさなかった。相当痛かった筈だが、いつもと変わらぬ眠そうな顔で、己にへら、と笑い掛ける。

「……てひひ、いのつちの手、冷たくて気持ちいい」

「……すまん……」

「んん。なんのことかね？」

「……………」

……本当に、昨日から、己はおかしい。
手をほどこき、首から提がる指輪を握る。
今はこれが、朧月が己の機体だ。

あの機体は——「彼女」のパーツを受け継いだネクストは、もう、存在しない。

「たっ、た、大変です！ お、おお織斑先生っ!!」

山田先生の慌てた声。彼女が慌てているのはいつものことだが、しかし今回はいつも以上の慌てようだった。

「……山田先生、どうしました?」

「こ、こっつ、これをつー!」

山田先生が千冬さんに小型端末にを渡すと、その画面を見た千冬さんの表情が曇る。

「……特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

「そ、それが、その……」

「……ここでは生徒たちに聞こえるな。詳細は後で」

「は、はい」

「専用機持ちは?」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

小さな声でそこまで話し、それから軍用の暗号手話で遣り取りを始めた。周囲の生徒に内容を知られないようにだろう。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。……全員、注目っ!!」

山田先生が走り去ると、千冬さんはパンパンと手を叩いて注意を引き付ける。

「現時刻より、IS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、機材を片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ!」

「え……?」

「ちゅ、中止? なんで? 特殊任務行動つて……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

不測の事態に、周囲がにわか騒がしくなる。それを千冬さんが一喝して鎮めた。

「とつとと戻れ！ 以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！ いいな!!」

「は、はいっ!!」

怒号と言えるほどのその声に、怯えた様子で片付けを始めた。

……空気が変わった。かつて慣れ親しんだ、戦場の空気に。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、井上、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、凰！ ……それと、篠ノ之も来い」

「はー」

箒が気合いに満ちた返事をする。緊急事態に相応しい、緊張感のある表情だったが、どことなく浮ついた気配が隠し切れていなかった。

「……………」

箒は専用機持ちになった。

ここ数ヶ月の間に学園で起きた、二つの事件。一夏が命を危険に晒してどうにか収めたその事件において、箒は無力だった。

だが、今回は違う。今の箒には、紅椿という力がある。もう、無力ではない。

——一夏の、力になれる。

(……………なにも、なければいいが……………)

嫌な予感がする。

漠然とした不安を抱えながら、己は千冬さんの下に歩いて行き——

「……………いのつち」

——本音に、声を掛けられた。

「……………」

常のものではない、不安の滲んだ声と表情。

「……………大丈夫？」

「……………」

……………分からない。

箒の様子も気になるが、己自身も通常の状態とは言い難い。

何かが起きる——そんな、なんの根拠もない確信が、己の心を覆い

尽くしていた。

「……いのち……」

待機を命じられて、本音は他の生徒たち同様、自分に割り振られた部屋で大人しくしていた。

皆は突然の事態に対して様々な憶測を飛ばし合っていたが、いつもならそれに混ざるはずの本音は沈んだ顔で部屋の隅に座っていた。

「……大丈夫……だよね……?」

本音がこうまで沈み込んでいる理由はただ一つ。ルームメイトである親友、井上真改のことである。

「……」

昨日のバスの中で、真改は泣いていた。一体どんな夢を見ていたのか本音には分からないし、真改に訊くことも出来なかった。

そして真改の強さを知っている本音には、真改が涙を流す理由など見当もつかなかった。

ただ、想像を絶するような悲しみがあつたのだろう——それだけが、本音に考えられる唯一の理由だった。

「……いのち……」

そして、今朝。

本音が真改よりも先に起きた——そんな明らかな異常事態にも、真改は気付かなかつた。それほどまでに、真改の様子は普通ではなかった。

「……私……」

本音が珍しく早く起きた理由。

真改が珍しく寝過ごした理由。

——うなされていたのだ。あの、井上真改が。

苦しそうな、悲しそうな顔で、真改は眠っていた。呻き声こそ上げていなかったが、普段は身じろぎすらせず眠る真改の気配を感じて本音が目を覚まし、真改を起こしたのだ。

……真改の寝顔が可愛かったからなど、大嘘だった。

「……私……いのつちに、なにもしてあげられないのかな……」

本当に大変なのは親友の方なのに、今にも泣き出してしまいそうで、そんな自分が心底情けなくて、本音は抱えた膝に顔をうずめた。

「……無理、しないでね……」

ひどく、嫌な予感がする。

みんなは、無事に帰って来るだろうか。

真改は、無茶なことをしないでだろうか。

そんな心配は勿論ある。だが、何よりも――

――次に会った時。真改は、自分の知る真改でなくなっているような、気がして――

「……そんなこと、ないよね……」

様子のおかしかった真改。

本音が知らない、真改の悲しみ。

今日の真改は、怖かった。

まるでなにかに……いや、自分自身に怒っているようで。抑えようとしてはいたようだが、本音には隠しきれていなかった。

それだけの強い怒りは、真改を変えてしまうのではないか。

「……………」

思い出すのは、先月のこと。

ラウラがまだ真改を敵視し、戦いを挑んだ時のこと。

ラウラに投げ飛ばされた本音を庇い、しかしその本音ごとラウラが真改を撃とうとした時のこと。

――真改が、あのラウラの動きを止めるほどの殺気を放った時のこと。

あの時、本音は真改に抱えられていたのだ。当然、真改の顔を見ていた。

ほんの一瞬だったけれど。

その、殺意一色に染め上げられた顔を。

「……………」

あれが真改の本性だとは思わない。不器用だけど優しく、素っ気

ないけどお世話焼きで、鈍ちんだけどお節介。それが本音の知る、本音が信じる井上真改だった。

けれどあの、殺気の塊のような姿も、真改の一面であることも確かだった。

「……帰って、来てね……」

無事に、帰って来て欲しい。

命だけでなく、心も無事なままで。

またあの、無表情の下に優しさを隠した顔を見たかった。

「……帰って、来るよね……う……」

友達の涙も、怒った顔も、悲しそうな顔も、傷付いた姿も、見たくはなかった。

だから、どうか無事に帰って来て欲しい。

膝を抱えて、浴衣の裾を強く握り締めて、気を抜けば零れてしまいそうな涙を必死にこらえて、ただそれだけを祈り続ける。

——そうしていないと、正体の分からない不安に押し潰されてしまいそうだった。

「……いのち……!」

継るような、弱々しいその声を。

聴く者は、誰もいなかった。

第26話 福音（初陣編）

「私の次の出撃が決まった。相手は、アナトリアの傭兵だ」
「……………」

……………ついに来たか、この時が。
リンクス戦争においてレイレナードは多くの戦力を失い、劣勢に傾きつつある。いや、戦力ではまだ上回っているが、勢いはあちらにある。このままでは、敗色濃厚だ。

だがその勢いを支えているのは、間違いなくアナトリアの傭兵だ。奴さえ倒せば、レイレナードは再び優勢を取り戻すだろう。

——その大事な一戦に選ばれるのは「彼女」だと、己は確信していた。

「二対一だ。以前は機体の性能差があったが、今回は違う。正真正銘、真剣勝負だ」

「……………」
「腕がなるな。アナトリアの傭兵、最後のレイヴンか……。リンクスとしては、一体どれほどの使い手か」

「……………」

アナトリアの傭兵は様々な企業のリンクスと戦い、その全てに勝利している。その中にはオリジナル——かつて世界中の国家を解体し尽くした二十六人も多く含まれている。

「彼女」もオリジナルの一人であり、ナンバーは3。ブレードによる接近戦主体でこのナンバーは驚異的な数字であり、「彼女」の卓越した戦闘力を物語っている。

「ふふ、「鴉殺し」の汚名挽回、と言ったところかな」
「……………」

上手いことでも言ったつもりなのか、くつくつと笑う。
自ら忌み名と言う割には、「彼女」は「鴉殺し」という二つ名を気に入っている。

レイヴンという、ネクストが現れる以前の強者、歴戦の傭兵たち。弱者を殺戮するのではなく、飽くまでも強者との戦いを求める「彼女」

にとつて、「鴉殺し」とはその生き様を表す名だからだ。

「雪辱戦だな。私にとつても、彼にとつても」

「……………」

「しかし、よくここまで来てくれた。あれほどの激戦を生き延びるとは、やはり彼は、本物のようだ」

「……………」

昂りを抑え切れないのか、「彼女」は先ほどからずっと楽しげだ。

……………それほどまでに、彼と戦うのが楽しみなのだろうか。

「彼ほどの強者、そうはいない。強い者との戦いは、戦士にとつて喜びだ」

「……………」

「特に私は、戦うくらいしか能がないからな。自分の唯一の長所を活かせる。これほど嬉しいことはあるまい」

「……………」

自分には戦うことしか出来ないし「彼女」は言うが、そんなことはない。

「彼女」はずっと、己を導いてくれている。

「……………弱者をいたぶるなど、私の趣味ではない。やはり戦いとは、対等の者が相手でなくてはな」

「……………」

「今まで随分と、レイレナードにはこき使われてきた。だがようやく、私は私の望む戦いができる」

「……………」

ネクストの性能は圧倒的だ。それこそ、ネクストに勝てるのはネクストだけと言われるほどに。

故に「彼女」は今まで多くの戦場を切り抜けてきたが、対等な戦いなどほとんど出来なかった。ネクストの装甲に傷一つ付けられない者たちの殲滅を、「彼女」は決して「戦い」とは呼ばない。殺戮という、唾棄すべき浅ましい行いだと思っている。

それでも、企業がリンクスという絶大な戦力を遊ばせておくなど有り得ない。「彼女」は幾度となく、その意に反する命令を下されてき

た。

——それに従うことが、「彼女」にとってどれほどの屈辱だったか。「さて、こうなったらのんびりとはしていられんな。行くぞ、真改」

「……？」
「……シミュレーターだ。決戦に向けて調整する。付き合え」
「……応……！」

「彼女」が待ち望んだ戦い。その為の調整の相手に己を選んでくれたことが嬉しくて、自分でもどうかと思うくらいに舞い上がってしまった。

総身を気合いで満たし、シミュレーターに乗り込んだ。

そうして何度か試合をしたが、全て秒殺だった。笑いながらまだまだだなと言う彼女を見上げ、悔しさと共に安堵する。

「彼女」ならば心配ない。必ずやアナトリアの傭兵を討ち果たし、この戦争を収めることだろう。

「彼女」が英雄になると思うと、まるで自分のことのように喜びが込み上げてくる。

そうだ、「彼女」が負けるなど、有り得ない。

——たとえば、相手が誰であろうと。

「……………」

眠っていたわけではない。唐突に、昔のことを思い出した。フラツシュバック、というやつだろうか。

「真改さん？ 説明が始まりますわよ？」

「……………」

呆としていた己に、セシリアが声を掛けくる。

「……お体の具合が優れないようでしたら……」

「……無用……」

……情けない。己はどれだけ心配を掛ければ気が済むのか。

「……わかりました。ですが、決してご無理はなさらないように」
「……………」

頷きすら返せなかった。心配してくれたセシリアを無視する形で、作戦会議室代わりの大座敷の中心に立つ千冬さんに視線を移す。

「まず初めに言っておく。これから話す内容は、全てが最重要軍事機密だ。けて口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも二年の監視がつけられる。聞く覚悟のない者は今すぐに退室しろ」

その言葉に、誰一人動こうとはしなかった。それを見届け、千冬さんが頷く。

「……全員、覚悟は出来ていとみなす。では、現状を説明する」

照明を落とした薄暗い室内に、大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。その横に立つ千冬さんは、常にも増して険しい顔で話し始めた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働中だったISが突如暴走し、監視空域を離脱したとの連絡があった。機体はアメリカ、イスラエル共同開発の第三代型軍用IS、「銀の福音」シルパリオ・ゴスベル。広域殲滅用の武装を持ち、これが市街地で暴れでもすれば、被害は想像を絶するものになるだろう」

……軍用IS。

己たちに与えられているような、競技用に調整デチューンされた物ではない、本物の兵器——本物の、殺し合いのための道具。

それが暴走した。なるほど確かに、尋常ならざる事態だ。

「その後、衛星による追跡の結果、福音は約五十分後、ここからニキロ先の空域を通過することが分かった。二国と自衛隊も急ぎ追跡部隊を準備しているが、おそらく間に合わん。故に、我々がこの事態に対処しなければならん」

ISに勝てるのはISだけ。通常兵器では相手にならない。

極秘の稼動試験とはいえ万一に備えていなかったのは迂闊と言う他ないが、それを言っても仕方がない。今は、これからどうすべきかを考えなくては。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

暴走したのは第三世代型、それも軍用だ。今ここにある、ろくな装備もない訓練機で抑えられるものではない。専用機持ちが駆り出されるのは当然と言える。

生徒であろうと、目的のためにより確実である者を使う。感情や倫理ではない、現実的な判断だ。

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように」「はい」

すぐさまセシリアが手を挙げる。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。時間がないからな、一度で把握しろ」

そうして開示されたデータに、素早く目を通す。

「広域殲滅用の武装……これですわね。範囲だけでなく、威力と速射性も備えているようですわね……」

「機体自体の機動力も相当みたいね。……厄介だわ。最悪、反撃も出せずに潰される……」

「ちようど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど……どれだけ持ち堪えられるかな……」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。暴走状態ではどんな戦術を使って来るのかも分からん。偵察は行えないのですか?」

「無理だな。目標は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速2450キロを超えるとある。アプローチ出来るのは一度だけだろう」

「2450……!?! それじゃあ、すれ違う時くらいしか攻撃できないじゃない……」

「一回きりのチャンス……:ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員が一夏と己を見る。

「一夏の零落白夜、それにシンの月光かしら?」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「一夏をどうやってそこまで運ぶか、だね。シンはともかく、一夏はエネルギーを全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「……それは確か、送られてきた装備の中にあつたぞ」
「……………」

それは一夏も分かっていたのだろう。緊張した面持ちで、しかし決して臆することなく応えた。

「……織斑、これは訓練ではない。実戦だ。……覚悟は出来ているか？」

実戦。

その言葉を噛み締めるように目を閉じ、一度頷いてから、決然と言った。

「……やります。俺に出来ることがあるなら、やらせて下さい」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが——」

『井上君の隴月だねえ』

「「「「うわあっ!!」」」」」

突然響いた声。

それは己の首から提がる指輪——隴月から発せられた。

「き……如月社長？」

『やあやあ久しぶりだねえ、皆さん。お元気そうでなにより』

流石の千冬さんもこれには驚いたようで、若干動揺気味の声で尋ねた。

「……正気ですか。今ここには最重要軍事機密のデータが開示されている。あなたがこの情報を持つていることを知られたら——」

『ああ、そこらへんは心配いらないよ。僕が持つてる情報は軍事機密だけじゃない。イスラエルと日本のお偉いさんは、僕に弱みを握られているのさ。もちろん、この二国だけじゃないけどね。それにアメリ

カの大統領とは友達でねえ、彼は話が分かる、なにも問題はないよ」
「……………」

あまりにもとんでもなさ過ぎる発言に啞然とする一同。

『要は僕が黙っていればいいだけだろう？ 僕の口の硬さは有名でねえ、これくらいじゃあ無茶なことはしてこないさ』

「あ……………あなたという人は……………」

呆れるしかない。如月社長は、国家に喧嘩を売っているのだから。

『じゃあ時間もないようだし説明すると、今回の臨海学校には朧月用の高機動パッケージ、「月船」^{つくぶね}を送つてある。それを使えばいいよ』
「待つて下さい。まだあなたの参加を認めただけでは——」

『もう遅いと思うけどねえ』

「……………くつ……………」

知つてはならないことはもう知つてしまった。ならば、今から追いつ出したところで意味はない。

千冬さんは諦めたように一度溜め息を吐き、如月社長の作戦会議への参加を黙認した。

「……………しかし、井上は超音速下での訓練はしているのですか？」

『してないんじゃない？ けどまあ大丈夫でしょ、水月の加速にも反応しきるくらいだから』

「……………いいでしょう。ではパッケージの——」

「待つた、待つた。その作戦はちよつと待つたなんだよ！」

千冬さんの言葉を遮り、いきなり天井から声が聞こえた。見上げると、そこには束さんの首が生えていた。

「……………ふんっ」

「あいたあ!? いたたたたつ!!」

千冬さんはその顔にアイアンクローを叩き込み、天井から引っこ抜く。ぐちゃり、と床に落ちる束さん。

「……………で？ 何か他にいい作戦がある？」

何事もなかったかのように尋ねる千冬さん。束さんも当然立ち入り禁止なのだが、如月社長がすでに参加してしまっているので諦めたのだろう。

そうでなくとも、この人にそんなことを言っても無駄だろうが。

「モチのロンだよ！　ここは箒ちゃんの紅椿に、お・ま・か・せ〜♪」
「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！　パッケージなんかなくても、超高速機動ができるんだよ！」

その言葉に応えるように、数枚のディスプレイが千冬さんを囲むように現れる。

そこに映し出される情報の中に、見慣れない単語があった。

「展開装甲……？」

「お？　さっすが、よく気づいたね、いっくん！　展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」
「……な、えっ!?!」

「第……四!?!」

その言葉に、この場にいる全員が驚愕する。

それも当然、現在世界各国は、第三世代型ISの開発に心血を注いでいる段階だ。

第四世代型など夢のまた夢、机上の空論にすらなっていないというのに、この人は……!?!

「ちなみに白式の雪片式型が、最初の展開装甲搭載装備です」

「な……雪片式型に、展開装甲が？」

「では、白式も……第四世代型IS……」

鈴とセシリアの、動揺した声。ただでさえ実験体の色が強い一夏だが、これでは完全にその扱いが固まってしまう。

見ればシャルとラウラ、そして箒も、不安と驚きを露わにしている。

「そしてそして、箒ちゃんの紅椿には、なあんとはっ！　この展開装甲が、全身のアーマーに使われてまっ！　わーおー！」

「な、ぜ、全身に……!?!」

「そんな、それって……!?!」

「そう！　まさに強靱っ！　無敵っ!!　最強っ!!!」

そう。それは、最強と言うより、他はない。

それこそ、あの男のように――

「……………」

右手で顔を覆い、目を閉ざして深呼吸をする。

……落ち着け。今心を乱すわけにはいかない。これ以上、皆に心配をかけるわけにはいかないのだから。

「紅椿なら、簡単に追いつけちゃうよ！ 楽勝だねっ！ 私がやれば、七分もあれば余裕で調整できちゃうしねっ！」

もはや出撃は一夏と筈で決定——束さんはそう思っただろうが、そこに待ったをかける声が。

『それを言うなら、井上君の朧月はもう調整終わってるよ』

「は……………」

『今話してるうちに終わらせたよ。時間は大事にしないとねえ』

飄々と言つてのける如月社長だが、ここにいない人物がどうやって機体を調整したのか。

誰もがそう思っている——

『月船は朧月とデータをリンクさせるだけで使えるのさ。ただ両肩を空ける必要があるから、月影と月蝕は外しておいてね』

「リンクするだけ？ そんなパッケージが……………」

セシリアが愕然とした様子で呟く。束さんは言うに及ばず、如月社長も大概であった。

「……………誰だよ君は」

自分の妹、そして専用機の活躍の機会を邪魔されたからか、束さんが不機嫌な様子で如月社長に話し掛ける。

『お初にお目に……………は、かかってないか。通信で失礼しますねえ、篠ノ之博士。僕は如月重工の社長をしている者です』

「そんなことはどうでもいいんだよ。どういうつもりなんだよ。君の作った物が、紅椿よりも優れてると思ってるの？」

『うふふ、別にそう言ったつもりはないんだけどねえ。僕はただ、二人よりも三人のほうが、作戦成功の確率が高くなると思っただけさ』

「……………」

正論だった。流石に束さんも、これには言い返せなかった。

『確か篠ノ之博士の妹さんと織斑君は、井上君の幼なじみだったよね』

？ 連携プレーにも問題ないんじゃないかな？』

「まあ、箒やシンとは、よく一緒に訓練してるし……」

『なら決まりだ。三人で頑張ってくれたまえ』

「けどさあ、ホントについてこれるの？ 君の作った機体は。紅椿と白式に」

『……うふ。うふふ。ふ。んふふふふふふ』

不気味な笑い声をあげる如月社長。

東さんを除く全員が、一歩引いた。

『僕はねえ、篠ノ之博士。技術者として、あなたを心から尊敬してる。ISという圧倒的な兵器、そしてその中でも飛び抜けた性能を誇る紅椿……。これらを一人で開発したただなんて、まるで神様みたいだよ』

「……だから？」

如月社長の意図が掴めないのか、東さんが訝しげな顔をしている。他人に興味を持たない彼女が、嫌悪に近いとしても感情を持って如月社長に接していることは驚嘆に値する。

『けど人間としては、まったく尊敬できない。そもそも僕は無神論者だしねえ』

「なっ……!?!」

喧嘩を売っているとしか思えないその発言に、一夏と箒が驚きの声をあげた。

『ISは強力な兵器だけど、動かすのはあくまで人間だ。なのにあなたは、人間というものをまるで理解していない。最強のISは作れても、最適のISは、あなたには作れないんじゃないかな？』

「……ふーん。言うね、君」

『いやいや、それほどでも』

…… 険悪、どころではない空気が満ちる。

目を細めて、己の首から提がる指輪を睨み付ける東さんからは、殺気に近い気配が漂い――

「では本作戦では織斑、井上、篠ノ之の三名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ」

「え?! ち、ちーちゃん!?!」

「お前に作戦の決定権はない。紅椿についてはあくまで作戦立案の参考にさせてもらうだけだ」

「でも……！」

「さっさと調整とやらを済ませろ。時間内に終わらなかった場合、篠ノ之を作戦から外す」

「……!?!」

珍しく狼狽した様子を見せる束さん。よほど箒に活躍させたかったのだろう。

「……紅椿の性能は凄まじい。だが篠ノ之がそれについて行けるかは別問題だ。……如月社長の言う通りだな。お前は人間を理解していない。自分の妹のことすらも」

「……！」

大好きな親友から、最愛の妹についてそこまで言われ、流石の束さんもたじろいだ。

そのまま、極めて珍しいことに落ち込んだ様子で、紅椿の調整に移った。

『それじゃあ井上君、月船の説明をしておくよ。分からないことがあればなんでも質問してくれたまえ』

「……………」

そうして己も、作戦に向けて準備を始めた。

時刻は午前十一時半。

七月の空はこれでもかとはばかりに晴れ渡り、容赦のない陽光が降り注いでいる。

俺たちは砂浜に並び、それぞれの専用機を起動した。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「……朧月……」

ISが装着され、特有の感覚に全身が包まれる。

見慣れた俺の白式、真紅の装甲が眩い等の紅椿、そして銀の装甲が陽光を照り返す、シンの朧月。

「……なんか変わってるところあるか？」

「いや……特に見当たらないな」

「……………」

朧月には高機動用パッケージ、月船が取り付けられているはずだが、しかし特に普段と変わったところはないように見える。

『うふふ。ここからだよ』

「は？」

如月社長のセリフに疑問符を浮かべていると――

キイイイイン……

「……なんだ？ この音」

「い、一夏っ！ あれをつー！」

「な……なんだありやあ!? 鳥か!? 飛行機か!？」

「いや、あれは……………」

『――あれが、月船さ』

飛んで来たのは、小型の飛行機。それは例えるなら、日本が誇る名作アニメ、〇の〇の〇〇シカの主人公が使っている飛行装置を二回りくらいゴツくしたようなものだった。

とんでもない速度でかつ飛んで来るそれ――月船は、シンのすぐ後ろまで近付くと素早く形を変え、ガキインツ！ という音を立てて朧月に合体した。

左右の肩、腰、膝に二対ずつ、合計六対十二翼の大型スラスタ―となり、朧月を元の三倍近い大きさに見せている。

「か……………」

いつもの無表情で佇んでいるシンの背中には、見るからに出力の高そうな、巨大な機械の翼。

いや、先ほどの様子を見る限り、実際にかかなりの速度が出るだろう。

だが、俺の意識を惹きつけているのはそんなことではない。

「カッコいい……………!!」

「はあ!? そんなことを言っている場合か!」

「馬つ鹿、箒っ!! 変形だぞ!? 合体だぞ!? これで心躍らなかつたら男じゃねえよ!!」

『ふははははは!! そうだろうそうだろう! 君なら分かってくれると思つてたよ織斑君!!』

「くそつ、おい、どうしてくれんだよ社長! アンタを嫌いになれなくなつちまうじゃねえかつ!!」

『いやいや、僕のことはいくらでも嫌つてくれて構わないよ! 僕で作つた物さえ嫌わなければねっ!!』

「男らしいっ!!」

『ふはははははっ!!』

「ええい、うるさいうるさいっ! 集中しろ、一夏っ!!」

「さあ、行くぜ」

「切り替えが早い!」

そんな馬鹿な遣り取りをしてから、俺は箒の背中に乗つかった。白式はエネルギーを攻撃に回すために、移動の全てを箒に任せなければいけないのだ。

……かなり情けないけどな。

「悪いな、箒。よろしく頼む」

「仕方あるまい、白式の燃費ではな。だが、今回限りだぞ」

そんな不機嫌そうなことを言いながら、しかし声には喜色が滲んでいるように感じた。

(……大丈夫か?)

なにせ紅椿は、さつき箒の専用機になつたばかりだ。同じような状況でセシリアと戦つたことのある俺には、その危険性がよく分かる。

しかし、それ以上に気になるのは――

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私たちが力を合わせればできないことなどない。そうだろう?」

「……あのな、箒。これは訓練じゃないんだ、実戦なんだよ。何が起きるか分からない。十分注意して――」

「無論、そんなことは分かっているぞ。……ふふ、どうした? 怖いのか?」

「……そうじゃねえって。あのな、箒」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「……………」

……これだ。

見るからに浮かれている。こういう時は失敗をやらかす——俺は我が身をもって、それを知っていた。

『織斑、井上、篠ノ之、聞こえるか?』

「はい」

「……………」

『さっきも説明したが、今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』

「了解」

『織斑先生、私は状況に応じて一夏と真改のサポートをすればよろしいですか?』

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその機体では訓練すらしていない。性能を十分に把握していないだろう、不測の事態が起きれば対応出来ん』

『分かりました。出来る範囲で支援をします』

「……………」

千冬姉に対する答えもどことなく浮ついていて、不安になる。

……本当に、大丈夫なのか…………?」

『織斑』

「……………」

突然、プライベート・チャンネルで千冬姉の声が届く。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態ではなにかを仕損じるかもしれない。いざというときはサポートしてやれ』

『分かりました。ちゃんと意識しておきます』

『井上君のことも頼むよ』

『如月社長? ……え? シンも…………?』

『…………どうやら、大分参ってるみたいだからねえ』

『な……』

言われて、シンを見る。その姿は、いつもと変わらないように見えるが――

『……本当かよ?』

『みたいだねえ。まあ、気付いたのは僕じゃないけど』

『は?』

『篠ノ之博士にはああ言ったけど、僕も人間を理解してるとは言えなくてねえ。……気付いたのは、朧月さ』

『朧月が? ……あるのかよ、そんなこと』

『授業で習わなかったかい? ISのコアには知性があるんだ。……井上君のこと、相当気に入ってるみたいだよ。普段は無口な子なんだけど、必死に訴えてきたんだ。……さっきの通信は、実はそれが理由でねえ。井上君を助けてくれたって』

『……そう……だったのか……』

……気付かなかった。シンが、そんなに苦しんでいるだなんて。

『井上君は、戦うってことに特別な思い入れがあるみたいだからねえ。戦わざるを得ない状況を作れば、そっちに集中して他のことを忘れられるかと思っただけだねえ』

『……ダメだったってわけか』

『そういうこと。というわけで、うちのテストパイロットをよろしく頼むよ、織斑君。僕は技術者だから、心理学とかは専門外なんだ』

『……了解』

そして如月社長からの通信も終わり、いよいよ作戦開始。

俺は海の彼方にいる敵を睨み付け、漠然とした不安を抱えながら、戦場に飛び立っていった。

「そろそろだな」

「……………」

筈の声に、意識を前に向ける。

遙か先の海上に、本作戦の標的、「銀の福音」の姿が在る。

朧月の淡いものとは違う、磨き上げたように輝く銀の装甲。そして頭部から生えた、一対の巨大な翼。

資料によると、大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだという。同じスラスターでも、ただの斬撃武器を兼ねた月輪とは兵器としてのレベルが違う。

「……接敵……!」

「目標まであと十秒! 加速するぞっ!!」

「了解!」

箒は展開装甲の、己は月船の出力を上げる。

凄まじい速度で飛翔する福音を追い、距離を詰めていく。

箒の背に乗る一夏は手にした雪片式型を強く握り締め、福音を睨み付ける。零落白夜を発動、八双に構えた。その刃に触れないように、月光を起動する準備をする。

——そして。

「うおおおおっ!」

「疾っ……!」

零落白夜と月光、一撃必殺の威力を持つ二つの刃で、福音を挟み込むように斬りつける。

しかし福音はその同時攻撃を、あろうことか最高速度から一気に後退して回避した。

「速いっ!」

「気を付けろ! 来るぞっ!」

「……!」

福音はそのまま攻撃体勢になり、己たちを視界に収める。

初撃は失敗に終わった、急ぎ次の対応を考える。退くべきか攻めるべきか、二つに一つ。

ならば、決まっている。己はただ、寄って斬るのみ——!

『敵機確認。迎撃モードへ移行。〔銀の鐘、稼働開始〕』

「……!」

オープン・チャンネルから、抑揚のない機械音声が聞こえる。

その声に感情はない。だというのに、明確な敵意だけは感じ取れた。

「はああっ！」

一夏が反転、再び福音に斬りかかるが、福音はミリ単位の精度でそれを回避する。

「くっ、あの翼、月輪より厄介だぞ！」

単純なスラスターとしても、精度の点で月輪を大きく上回っている。出力ならば負けてはいないが、福音は一对、こちらは片翼だ。どちらにしても、勝てる要素はない。

「箒！ シン！」

「任せろ！」

「……応……！」

朧月の背中に取り付けられた月船が姿を変える。

肩と腰のスラスターが外れ、膝のそれへと折り畳まれるようにして一体化し、そこで膝からも外れ——独立飛行モードへと変形した。

これが朧月の高機動用パッケージ、「月船」の機能。

月船には神無月と神在月を応用した装置が搭載されており、高速、長時間の飛行を可能とする。さらに可変機構により、通常の追加スラスターモードから単独飛行モードへ移行することができ、その際には月船は一種の自立機動兵器となる。

飛ぶ以外のことは出来ないが、強度は折り紙付きだ。故に、こうして——

「……！」

ガンッ！

——空中での足場として使い、急激な方向変換が出来るのだ。

同時に水月を発動、福音に二度目の突撃をかける！

「……っ！」

一夏の連撃をかわし続ける福音を、背後から強襲。

月光の刃が福音を捉える、その瞬間がばり、と。

福音の翼が、文字通りに、開いた。

「……ちいつ……!」

何故、失念していたのか。

事前に資料で知っていた筈だ。この翼はスラスターであると同時に、広域射撃武器であると――!

「シンー!」

「真改っ!」

「……っ!」

放たれたのは、羽のような形をした高密度のエネルギー。

月光で切り払うが、視界を埋め尽くすほどの光弾全てを防ぐことは流石に不可能だった。何割かが朧月の装甲に突き刺さり、次の瞬間に爆発する。

「……づう……!」

その破壊力に、体勢が崩れた。しかもその光弾は一度の斉射では終わらず、まるで洪水のように次々と押し寄せて来る。

「シン、一旦退がれっ!」

「挟撃するっ! 一夏は右をつ!!」

絨毯爆撃のような光弾の雨を突っ切って、月船が飛んで来た。

それに掴まり一先ずは福音の射程距離から離れ、月船を追加スラスタモードへ移行、再び突撃する。

一夏は零落白夜で連撃を繰り返し、箒は二刀の斬撃と刺突、それにより放たれる二種類のレーザー、さらには腕部展開装甲から射出されるエネルギー刃による波状攻撃を行っているが、それだけの猛攻をも福音は避け、あるいは防ぎ、反撃までしている。

(……手強い……!)

だが、今は福音も一夏と箒に意識を割いている。

もう一度、今度は月船と水月を同時に使用し、さらなる加速でもって攻める!

『La——♪』

唐突に響く、甲高い機械音声。

それと同時に、福音のウイングスラスターが三十六の全砲門を開き、全方位に向けての一斉射撃を行った。

「ぐあっ!？」

「くう……!？」

「疾っ……!？」

一夏と箒を容易く吹き飛ばすほどの猛攻。その光弾の雨の中を、一気に駆け抜ける。月船の圧倒的な推力で加速しつつ月光を構え、ウィングスラスタ―目掛けて振り抜いた。

「……っ!？」

『――!』

福音は素早い、しかし最小限の動きでそれを避け――その僅かな隙を突いて、箒が斬り込んだ。

「食らえっ!!」

『――!』

己は月船の速度ですれ違ったので、既に福音からは一足の間合いとは言えない距離まで離れている。

月船を分離し、小回りの効く標準状態に戻り反転、一夏と箒を援護すべく三度目の突撃をかける。

「おおおっ!!」

「はあああっ!!」

「疾っ……!!」

上から、一夏の零落白夜が振り下ろされる。

左右から挟み込むように、箒が雨月と空裂を繰り出す。

己は逃げ場を塞ぐべく、月輪で背後に回り込み月光で薙払う。

その、同時攻撃を――

「……っ!？」

雨月と空裂を、両腕の装甲で受け止め。

零落白夜を、ウィングスラスタ―で受け流し。

それを月光の刃に当て、消滅させた。

「な……!？」

「なんてヤツだ……!？」

……馬鹿な、これで暴走状態だと？ まるで達人だぞ……!？」

『L a ——♪』

「くっ……!?!」

「離れろ!!」

そして零距离で放たれる、光弾の嵐。シールドエネルギーの大半が瞬く間に消し飛び、衝撃に全身の骨が軋む。

「ぐう……くそ、まずいぞ、このままじゃ……!」

装甲の薄い朧月と零落白夜でシールドエネルギーを消費する白式は、既に限界に近い。

仕留められるか……!?!

「一夏、エネルギーは!?!」

「零落白夜三、四回分つてどこか……!」

「……っ」

余裕は皆無ということか。これは、退却も視野に入れねば――

「ならば一夏はサポートに回れ! 私が倒す!」

「なっ!?! 箒、何言つて――」

「はあああっ!!」

「くそ、シン、箒を援護するぞ!」

「……応……!」

福音に斬りかかって行く箒を追い、己たちも加速する。

焦ったか、箒……!?!

「箒、落ち着け! これ以上は無茶だ!」

「大丈夫だ、まだ行けるっ!!」

一夏のエネルギー不足を補うためか、箒は一層激しく攻める。

……いや、激しいと言うよりも、荒い。福音も幾分回避に余裕があり、反撃も的確だ。

しかし箒は、それに気づいていない。

「箒っ!!」

「やれる……やれるんだ、紅椿なら……!?!」

「くそっ、どうしちゃったんだよ……!」

「……っ!」

そして厄介なことに、福音の攻撃は範囲が広い。箒を相手にしながら、流れ弾だけでもかなりの脅威だ。

『L a ——♪』

「おおおお!!」

「ほう、ぐあっ!!」

「……………」

……駄目だ、捌ききれん。己はともかく、一夏はもう——

「!? エネルギーが……………」

「……………」

……エネルギー切れか。

これ以上は無理だ。作戦は失敗、僅かなりとも余力のあるうちに撤退せねば。

「……………」

「こいつを逃がすわけにはいかない! なんとしてもここで——!」

ヴウン…………と。小さな、そして不吉な音と共に、箒の持つ二刀が輝きを失い——光の粒子となって、消えた。

(…………具現維持限界…………!)

それが意味することは、紅椿のエネルギー切れ。

選りにも選って、今とはな…………!

「ば、馬鹿な…………!」

「退がれっ!」

呼びかけるも、反応が鈍い。戦意を失ったか…………!?

「……………」

見れば、福音は再び攻撃体勢に入っている。白式、紅椿は既にエネルギーがなく、福音の光弾を受ければひとたまりもない。

——ドクン。

だが、己一人で二人を守ることは出来ない。
ならば、どうする?

——ドクン。

どうする？ どうすればいい？
一夏と箒、二人ともは守れない。

——ドクン。

守れない。

守れない。

己には、誰も、守れない。

——ドクン。

守れない。

ならば。

守れないのなら。

——ドクン。

……
■せ。

——ドクン。

やられる前に、
■せ。

——ドクン。

何を恐れる必要がある？

何を躊躇う必要がある？

何度も何度も、幾度も幾度も、繰り返してきたことだろう。

——ドクン。

さあ、■せ。

……もとより。お前が身につけたのは、その為の業だろう——真改。

「……………ツツ!!」

ドス黒い思考を振り払い、反転、一直線に箒の下へ向かう。

いまだ呆然としている箒を抱き締めるように庇い、我が身を盾とした。

……これでいい。一夏は福音から、多少とは言え距離がある。どうか凌げる可能性は高い。

だが先ほどまで福音に切りかかっていた箒は、福音の目の前にいる。加えて今は呆然自失、防御も回避も望めない。

どちらかしか守れないのなら、今守るべきは箒だ。一夏には自力でどうにかしてもらおうしかない。

……そうだ、これでいい。この判断は間違っていない。
これで良かった、箒なのに。

何故お前は、そんなところにいるんだ——一夏。

「ぐあああつ!!」

己たちのすぐ前、福音の射線を遮る形で、一夏が仁王立ちをしている。

雨のように降り注ぐ光弾に撃ち抜かれ、爆発に装甲を抉られ、それでも一夏は両腕を大きく広げ、一步も退かずにそこにいた。

——己と箒を、守るために。

「いち……………か?」

やがて光弾の雨も止み、一夏は白式を失って、海へと落ちていく。
それを見て、箒が呆然としたまま声を絞り出し——

「一夏あああつ!!」

次の瞬間、弾かれたように一夏の下へ飛んで行った。

意識のない一夏を海面ギリギリで抱き止めて、涙を流しながら呼び掛ける。

「一夏、一夏つ!! しっかりしろ、おい、一夏あつ!!」

「……………」

箒が泣いている。

己が、一夏を守れなかったから。

『作戦は失敗だ! 井上! 織斑と篠ノ之を連れて、急いで戻れ!』

福音はまだ、お前たちを狙っているぞつ!!』

「…………ツ!」

千冬さんからの通信で、我に返る。その言葉通りに再び砲門を開く福音から逃れるべく、月船を呼び戻した。

一夏を抱えて泣きじやくる箒を掴み、そのまま一気に戦場から離脱する。

「一夏、すまない…………目を開けてくれ、一夏あ…………」

「……………」

箒はまだ、泣き止まない。

一夏はまだ、目を覚まさない。

己は、また——誰も、守れなかった。

「……………………ツ!!」

ギシリと奥歯を噛み締める。

千冬さんが待つ旅館へと急ぎながら、己は随分と久しぶりに、思い出していた。

かつて駆け抜けた、戦場を。

あらゆる命が死に絶え、枯れ果てた大地を。

滅び行く運命を決定付けられた、世界を。

そこで行ってきた、革命という名の、殺戮を。

「……………」

そうだ。思い出せ、自分が何者であるのかを。
己は——
おまえ

第27話 福音（剣鬼編）

「聞いたか？ 「鴉殺し」が負けたらしいぞ」

「ふん、剣なんぞにこだわるからだ。あんな時代遅れの武器で今まで生き残れたことが奇跡なんだ」

「まったく。AMS適性のおかげで戦えていただけだというのに、調子に乗りおって」

「剣で銃に勝てるわけがない。そんなことも分からんとは、馬鹿な女だ」

「まあ、自分で「戦うしか能がない」と言うくらいだからな。仕方ないだろう」

「なんにせよ、これであの女のためにパーツを作る必要はなくなったわけだ」

「たった一人しか使わないようなパーツのために、我々がどれだけ苦労させられてきたことか」

「だがまあその分は、これから役に立つてもらおうさ」

「どうということだ？」

「あの女の死体が回収された。損傷は激しいが、脳は無事らしい」

「ほう、それは……」

「あれほどのAMS適性、そうはない。その性能だけでも引き出させてもらおうとしよう」

……「彼女」が、帰ってこない。

「……………」

「彼女」が出撃したのは昨日のことだ。いい加減戻って来てもよさそうな頃だが。

「……………」

レイレナードはいまだ劣勢だ。ナンバー1のベルリオーズを始めとする主力部隊がまだ残ってはいるものの、戦力が多いに越したことはない。

生真面目な「彼女」ならば、すぐに次の出撃の準備をするだろうに。

「……………」

そして己も、今ではレイレナードの正規リンクスだ、この戦争に参戦する可能性は高い。そのための実力を身に付けなければならぬので、「彼女」の力を借りたいのだが。

「……………」

……否。本音を言えば、レイレナードもリンクス戦争も、己にはどうでもいい。

だが、「彼女」との約束がある。いつか「彼女」の隣に並び立ち、共に戦うという、約束が。

「……………」

そしてそれは、己自身の夢でもあった。「彼女」と同じ戦場に立ち、「彼女」の背中を守ることは。

「……………」

そう、それが己の夢だった。

「彼女」と出会い、その剣舞を目にした時から、それだけをずっと夢見ていた。

「……………」

だから己はこの身を鍛え、技を磨き続けて来た。

「彼女」に追い付くために。

「彼女」に、認めてもらうために。

「……………」

そのために「彼女」に教えを乞うと言うのも情けない話であるが、しかし弟子が師に出来る最大の恩返しは、師を超えることだと聞く。

「彼女」の剣が学べ、「彼女」に恩返しも出来るのなら一石二鳥だ。

……遥かに先のことになるだろうが。

「……………」

そう、「彼女」はいつも、己の目指す先にいる。

「彼女」はずっと、己を支えてきてくれた。

「彼女」はずっと、己を奮い立たせてきてくれた。

「彼女」はずっと、己を教え導いてきてくれた。

「彼女」はずっと、己の目標で在り続けてきてくれた。

「彼女」はずっと、己の憧れで在り続けてきてくれた。
「彼女」はずっと、己の夢そのものだった。
「彼女」は――

――もう、いない。

「ぐっ……!!? う、ぶ……お、えええええ……!!」
吐いた。

今朝食べたものを、全て吐いた。
それでは止まらず、胃液を全て吐いた。
それでも止まらず、ついには血の固まりを吐き出して、ようやく止まった。

「ぐ、がふっ……!」
嘔吐は収まったが、今度は涙が溢れてきた。
体中の水分を全て消費するような勢いで、滝のように流れ続ける。
「ぐ……」

……何故だ。
何故、「彼女」が死んだ。
何故、己が生き残っている。
己が……己こそが、死ぬべきだったのに。
「ぐ、ううううう……!!」

何故、「彼女」を守れなかった。
決まっている、己が弱いからだ。
「彼女」と共に戦う資格がなく、ただ見上げ続けるしか出来ないほどに、弱いからだ。

「……………ッ!!」

力が欲しい。

強大な力が。

圧倒的な力が。

絶対的な力が。

……だが、そんなものを手に入れてどうする？ 今更そんなものを手に入れてなんになる？

「彼女」はもういない。

「彼女」はもう、どこにも、いないのに。

「貴方が真改か」

「……………」

唐突に、声を掛けられた。

俯いていた顔を上げそちらを見れば、そこには若い、少年と呼べるほどに若い男がいた。

「貴方の力を、借りたいのだが」

「……………」

その言葉になんの反応も示さずに黙り続ける己に、しかし男は構わずに話し続けた。

「レイレナードはもう終わりだ。主力部隊でも、アナトリアの傭兵を抑えることは出来まい」

「……………」

「だがレイレナードが滅びたとしても、クローズ・プランを潰すわけにはいかない」

「……………」

……クローズ・プラン？ なんの話だ？

「この世界はいずれ死に絶える。人類の、身勝手な行いによって」

「……………」

「これを回避する手段はただ一つ。人類の罪を清算し、閉ざされた未来を——宇宙への道を開く」

「……………」

感情の薄い、淡々と話す男の言葉に、己は一切の興味を持たなかつ

た。

「……どうでもいい。世界が死に絶えようが人類が絶滅しようが、己には関係ない。」

「人類に、黄金の時代を。私達はそのための準備をしているが、戦力が不足している。故に、貴方の力を借りたい」

「……失せろ……」

興味がない。

関係がない。

勝手にやっている、お前たちの目的など、己の知ったことではない。己はもう、何もかもが、どうでもいい。

——だが。

「……回収されたのは、「鴉殺し」の遺体だけではない」
「……！」

その言葉は、そしてそれに続く話は、無視できないものだった。

「「鴉殺し」のネクスト、「オルレア」のパーツも一部が回収され、まだ使える物は他のリンクスに引き継がれることになった。そのパーツの中には、「鴉殺し」の愛剣、「ムーンライト」も含まれている」
「……な……に……？」

「彼女」の剣が引き継がれるだと？

一体、誰に……？

「……貴方だ、真改」

「……！！」

「貴方が、「鴉殺し」の後継に選ばれた」

「……馬鹿な……」

己が？ 己如きが、「彼女」の剣を？

「オルレアの最後の記録に残っていた。貴方しかない、と。……遺言、だったのだろうか」

「……」

己しかない。

「彼女」が……そう、言ったのか？

「もう一度言おう。力を借りたい。貴方の力を。」

……人類の未来のため、人類の、黄金の時代のために」

「……………」

「彼女」を失い、己にはもう、何も残っていないと思っていた。

……まだだ。己にはまだ、この命がある。「彼女」が遺してくれた剣がある。

ならば、己は――

「……………協力してもらえるか？」

「……………応……………」

世界がどうなろうと、どうでもいい。だがここは、「彼女」が生きた世界だ。

……ならば、刻み込んでやる。

「彼女」の生き様を、「彼女」が生きた証を。

この己が、「彼女」の剣で。

この穢れ切った、「彼女」が「彼女」らしく生きることが許さなかった世界に。

そのためならば、己は――

「……………真改……………」

「メルツエルだ。歓迎しよう、真改。」

――貴方が、五人目だ」

いくらでも奪ってやる。

いくらでも壊してやる。

いくらでも殺してやる。

その果てに何が残るのか、見せてもらおう。

「覚悟はいいか？ 我々の敵は、世界そのものだぞ」

「……………不足なし……………」

「ふむ、頼もしい限りだな」

興味がない。

関係がない。

どうでもいい。

知ったことではない。

たとえば相手が誰であろうと、それが世界そのものでであろうと。己はただ、寄って、斬るのみ。

(……良く、見ておけ……)

もう、失うものは何もない。

己の命に大した価値などないのだ、寄越せと言うならくれてやる。だが、その前に。

(……己の、剣を……)

足掻いてやる。

己の命が尽きるその瞬間まで、足掻き抜いてやる。そして、思い知らせてやる。

お前たちが馬鹿にした時代遅れの戦術で、たった一振りの剣で、一体何が出来たのかを。

だから、見ていてくれ――

――アンジエ。

「……………」

忘れていた。己が、何者なのか。

この心地良い世界に、長く居すぎたせいだろうか。

「……………」

誰かを守るなど、己には過ぎた望みだ。願うことさえ許されない。だというのに、身の程を弁えないから――この、様だ。

「……………」

旅館の一室。

ベッドに横たわる一夏を見る。体中に重度の火傷を負い、肉は所々が抉れ、骨が何ヶ所も砕けている。

生きていることが奇跡と言えるほどの重傷。たとえば意識を取り戻

したとしても——もう二度と、立ち上がることは、出来ないかもしれない。

「……………」

「……………」

傷が痛むのか、ふと、一夏が呻き声を上げた。

その苦しみを少しでも和らげてやりたくて、髪を撫でようと手を伸ばし——止めた。

……………こんな血みどろの手で触れれば、汚れてしまう。

「……………」

己が一夏にしてやれることなどない。

己に出来るのは、戦うことだけだ。

「……………」

……………否。「戦い」と呼べるほど、己のそれは上等なものではない。

己が死ぬよりも先に、相手を殺す。骨を断たせて首を刈る。

ただ、それだけだ。

「……………寝ている……………」

ここに居ても、意味はない。

ここに居ても、何も出来ない。

なら、往くか。

「……………目覚める頃には……………」

敵の下へ。

敵と戦いに。

敵を、殺しに。

あの頃のように。

あの頃と、同じように。

「……………全て、終わらせておく……………」

……………そう、ここに居るのは、井上真改ではない。

この美しく優しい世界に己を産んでくれた両親と同じ姓を名乗る資格など、己にはない。

ここに居るのは——

「……シルバリオ・ゴスペル銀の福音……」

「レイレナードの亡霊、

最悪の反動勢力、

ORCAの、第五。

「……素っ首、貰い受ける……」

——ただの、真改。

(まったく、自分が情けないですわ……)

作戦から帰還した三人の姿に、セシリア・オルコットは無力感を覚えた。

初めて、好きになった人。

初めて、憧れた人。

初めて、ライバルと認めた人。

全員が、ボロボロだった。

(わたくしに、もっと力があれば……)

未知の力を持つ敵に立ち向かう三人を、見送ることしか出来なかった。

ただ成功を祈って待ち続け、しかしその祈りは届かなかった。

(本当に、情けない……)

分かっていた筈だ。真改の様子が、普通ではなかったことは。

分かっていた筈だ。専用機とは、訓練もせずいきなり実戦で扱えるようなものではないことは。

分かっていた筈だ。あの二人に何かがあれば、一夏がどういう行動に出るのかは。

(なのに、何も出来なかった……)

無力。

セシリア・オルコットには、何も出来ない。

(……本当に?)

無力なのか。

セシリア・オルコットには、何も出来ないのか。

(……本当に、そう?)

否。

断じて、否。

(わたくしにはまだ、出来ることがある——)

敵はまだ残っている。一夏を傷つけた敵が。

ならば真改は、立ち上がるだろう。

ならば——セシリア・オルコットに、出来ることは。

『一夏さんも言っていました。わたくしも、真改さんを守ります。貴

女が戦う時は、わたくしも貴女の隣で戦います』

(……あの時の誓い、今こそ果たさせていただけますわ)

真改が戦うのなら、自分も戦う。

今度こそ、自分が真改の背中を守る。

それこそが——セシリア・オルコットの、為すべきことだ。

「さあ、行きましょう、ブルー・ティアーズ——わたくしと共に」

(……そっか。そうだったんだ)

瀕死の重傷を負った一夏、それを我が身のことのように見る真改、

そして泣きじやくる筈。

その光景に、風鈴音は既視感を覚えた。

(同じなんだ……あの時と)

三年前、モンド・グロツソ観戦から帰って来た二人。

一夏と真改の立場は逆だが、あの時とまったく同じ。

そして、箒は――

(……あたしだ)

鈴も箒と同じように、泣きじやくっていた。体に深い傷を負った真改と、心に深い傷を負った一夏。それを前に、何も出来ずにただ泣いていた自分。同じだ。あの時と。

(いや……同じじゃない)

あの時は、何も出来なかった。

今回も、何も出来なかった。

けれど――

(今のあたしには、力がある)

終わったことはもう、変えられない。

けれどこれは、まだ、終わっていない。

――否。

(こんなんで、終わらせるもんか)

この楽しい毎日を、ずっと続けていく。

そのためには、こんなことで終わらせるなんて出来ない。

だから。

(あたしは、あたしにやれることをやる)

親友が傷つくのを、黙って見ていられない。

なら、戦う。

自分の力は、そのために手に入れたものなのだから。

「それじゃ、行きますか。もちろん、アンタも付き合ってくれるわよね

――甲龍」

(一夏……シン……箒……)

一夏、真改、箒の変わり果てた姿を見て、シャルロット・デユノアは強い痛みを覚えた。

母親を失った時と、とても良く似た痛みだった。

(なんで……こんなことに、なったのかな……)

痛みも、苦しみも、悲しみも、もうたくさんだった。

一夏の無自覚な言動にドキドキして、真改の強さに憧れ追いかけ、箒と一夏を取り合って……。

そんな騒がしくて楽しい毎日を、ずっと、続けていたかったのに。

(そんなことも、許されないだなんて……)

ようやく取り戻した、幸せな日々。

それが、また奪われようとしている。

(……そんなこと、させない)

なら、自分が守る。

誰かが奪おうとしているのなら、絶対に守ってみせる。

みんなで笑い続けていられる、素晴らしい毎日を。

(許してくれなくてもいい。僕は、戦って勝ち取る)

戦え。

そう言って、背中を押してくれた。

抗え。

そう言って、心を支えてくれた。

一人で出来ないのなら、誰かに助けを求めればいい。

そう、教えてくれた。

(……うん。みんなで、戦って、勝ち取るんだ)

今の自分には、大勢の友達がいる。

一人でうずくまり、震えて、ただ黙って耐えていた、あの頃とは違う。

(みんなで力を合わせて、この毎日を、守る)

今こそ、立ち上がる時。

今こそ、戦う時だ。

一夏と真改に、恩を返すために。

箒と一緒に、また、笑い合うために。

「行くよ、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ——今度は、僕たちが助ける番だ」

(強さとは、戦闘力のことではない、か。……まったく、その通りだな) 初めて出来た、心から信頼できる仲間たちの敗北を知り、ラウラ・ボーデヴィツヒは怒りを覚えた。

軍人たる自分が何もせず、ただの学生に過ぎない者たちを戦わせたことに。

(この痛みから、一夏は立ち直ったのか。……道理で、あれほど強いわけだ)

かつてのラウラであれば、何も感じることはなかっただろう。

だが今は、こんなにも心が揺れている。

(……以前の私ならば、弱くなったと思うのだろうか)

だが、今は違う。この思いが大きな力になることを、ラウラは知っている。

(状況に変化あるまで現状待機、か)

それが、千冬からの命令だった。

軍人であるラウラにとって、命令は絶対だ。命令の前には自分の感情など、邪魔なだけでしかない。

——だが。

(私は、ラウラ・ボーデヴィツヒ。……それ以外の、何者でもない)

何者でもないのなら、ラウラ・ボーデヴィツヒになれ。

千冬の言葉。ラウラにとって、それはどんな命令よりも優先すべき言葉だった。

(教官……いや、織斑先生。私はあなたの命令ではなく、あなたの教えに従う)

軍人ではなく、魂を持った、一人の人間として。

ラウラ・ボーデヴィツヒとして、自らの心に従う。

(……よくも、私の仲間たちを)

罪を償うと誓った。

ならば今立たずして、いつ立ち上がるというのか。

ここで立たねば、ラウラ・ボーデヴィツヒではない。

(命令に背くこと、申し訳ありません、織斑先生。……ですが、やらぬわけにはいかないのです)

この怒りを。

この痛みを。

この、想いを。

呑み込むわけには、いかないのだ。

(軍人としてではなく、私は私として戦う。私らしく、在るために)だから、この心の赴くままに。

——いざ、戦場へ。

「行くぞ、シユヴァルツェア・レーゲン——私の、もう一人の相棒よ」

それは、私が小学校二年生の時のことだ。放課後、夕暮れ時の教室で、私は帰り仕度をしていた。

すると、そこへ。

「おい、男女ー。今日は木刀持ってねーのかよー」

いつも私をからかってくる三人組が、いつものように絡んできたのだ。

「……竹刀だ」

「おんなじだろ、そんなの。へっへっ、お前みたいな男女にはきー、武器がお似合いだよな」

「……………」

「しゃべり方も変だしよ」

女一人を男三人で囲むなど、臆病者以前の下種どもだ。

相手にする必要すらないのだが、その頃から負けん気の強かった私は無視して帰るのを良しとせず、相手を睨み付けた。

「やーいやーい、男女」

「男女」

「……………」

しかし子供の眼力などたかが知れている。大した効果もなく、から

かいは続いた。

そんな中、他のクラスメイトがサボって帰ってしまったのに一人真面目に掃除をしていた少年が、私を囲む連中に言い放った。

「うっせーなあ。てめーら暇なら帰れよ、邪魔だから。それか手伝えよ。ああ?」

その少年は、名を、織斑一夏といった。

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」

「へへ、お前この男女が好きなのか?」

そんな子供らしい、無邪気な悪意に満ちた言葉に、一夏は心底不快そうに顔をしかめる。

「てめーら邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どっか行けよ、うぜえ」

「へっ、真面目に掃除なんかしてよー、バツカじゃねーの——おわっ!?!」

……馬鹿? 今馬鹿と言ったか?

どちらが馬鹿か。真面目に役目を果たす者と、役目を放棄し遊び呆ける者。

一夏が掃除をしなければ誰も掃除をしない、そうなればこいつらも先生に怒られるというのに、そんなことも分らんのか。

……だからその言葉は、黙って聞き流すことは出来なかった。

「真面目にすることの何がバカだ? お前らのような輩よりははるかにマシだろう」

「な、なんだよ……なにムキになってんだよ。離せっ、離せよっ」

胸倉を掴み、締め上げる。

しかし仲間がやられているというのに、残りの二人はそれを笑って見ているだけ。

……つくづく、気に入らない連中だ。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」

「織斑ー、お前井上と夫婦なんじゃねえのかよー。そういうの、浮気つて言うんだぜー」

一夏が私の家の道場に通い始めてからというもの、こういうからか

い方をされたのは一度や二度ではない。

いい加減、私も飽き飽きしていた。

「そっか、それでこの間リボンなんかしてたのかよー。織斑を井上に取られちゃ大変だもんなー。男女のくせによー、笑っちま——うわっ!?!」

女の子らしく、という望みは私にもあった。だからリボンをしていたのに、それを馬鹿にされればさすがに……少し、傷つく。

だがその痛みに耐える私に代わってか、今度は一夏が怒りをあらわにした。

幼いながらも鍛えられた腕で相手を締め上げ、睨み付ける。

「なんか笑うようなところあったかよ。ああん？ 篠ノ之がリボンしてたらなんかおかしいのかよ。すげえ似合ってたろうがよ」

「な、お、おいっ、離せよっ」

「その前に謝れよ。ごめんなさいって。それくらい言えるだろ、いくらバカでも」

「こ、このっ!」

「っ!」

そこで、一人が一夏に殴りかかった。

両手で胸倉を掴み上げている一夏はそれをかわせず、拳が一夏に迫り——その前に、少女が一人、割り込んだ。

「……………」

「な、シンっ!」

ガツンと、拳が少女の——井上真改の頬を打つ。

真改はそれがまるで効いていない様子だったが、友人、しかも女の子の顔を殴られた一夏は激怒した。

掴み上げていた少年を放り投げ、真改を殴った少年を睨み付ける。

「てめえっ!!」

「うわっ!?! ちよ、わぎとじや——」

「うるせえ!!」

言い訳を聞こうともせずに一夏は拳を握り締めて殴りかかったが、真改に手を掴まれて止められた。

「おい、シンっ！」

「……………」

怒りと悲しみと困惑が入り混じった顔で真改に向き直る一夏に、真改は静かに首を振るだけで応える。

「……ああ、もう！ わかったよっ！」

「……………」

「へ……へっへっ、やっぱお前ら夫婦なんだ！」

「三角関係ってやつか？ どっちがアイジンなんだ？ 織斑く」

それを見て、再び調子に乗り始めた三人。だが今度は、真改がそれに反応した。

ただでさえ鋭い目をさらに鋭くし、三人を射抜くように睨み付ける。

「……帰れ……」

「う……」

「……………」

真改は顔を横に向け、殴られた頬を見せ付ける。

女の子の顔を、拳で殴ったのだ。その事実を持ち出されて、さすがに三人がたじろいだ。

「……帰れ……」

「……いい、行こうぜ」

「じゃ、じゃあなっ」

もう一度言われ、逃げるように去っていく。一夏はそれを睨み付けて見送ってから、真改に向き直った。

「大丈夫か？」

「……平気……」

「……井上、診せろ」

「……………」

殴られた頬を確認すると、大したことはなさそうだった。これなら跡が残ることもないだろう。

「……バカ者、顔に傷でも残ったらどうする」

「……勲章……」

「……はあく……」

一夏と一緒に道場に通り始めた真改がこういうヤツだと知っていたが、やはり呆れてしまう。傷が勲章だなどと、小学生の女の子の考え方ではない。

「……すまない」

「……？」

「なんで不思議そうな顔をするんだ。……お前が殴られたのは、私のせいだろう」

「篠ノ之のせいじゃないだろ。悪いのはあいつらだ、一人を複数で囲んでよ、やり方は陰険だしよ、男のクズだ」

「……」

「あんなやつらの言うことなんか気にすんなよな。前にしてたりボン、似合ってたぜ。またしろよ」

「ふ、ふん。私は誰の指図も受けない」

照れ隠しにそう言ってそっぽを向く私に、一夏は呆れたように溜め息をつく。

「じゃ、お前ももう帰りなよ。俺はまだ、掃除残ってるから」

そして一夏は、教室の机を運ぶ。前の掃除が終わったので、次は後ろを掃除するんだろう。

真改もそれに続き、机を運び始めた。

「……私も手伝う」

「あん？　なんだよ、お前掃除当番じゃないだろ」

「……さっきの礼だ」

「そんなの気にすんなよ。俺があいつら気にくわなくてやったことだし」

「お、お前にじゃない。井上への礼だ」

「あつそ。……じゃあ、手伝ってくれてありがとな、篠ノ之」

「……だ」

「うん？」

「私の名前は箒だ。いい加減覚えろ。大体うちの道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。いい

な」

「わかった。俺は割と、身近なやつ指図は受ける。……じゃあ、一夏な」

「な、なに？」

「だから、名前だよ。織斑は二人いるから、俺のことも一夏って呼べよな」

「う……む」

「わかったか、箒」

「わ、わかってる！ い、い、一夏！ これでいいのだろう!?!」

「おう、それでいいぜ。……指図じゃなくて頼みなら、ちゃんと聞いてくれるんだな」

「ふ、ふん！」

照れくさくなつて、強がり鼻を鳴らして机を運ぶ。

そうして一つ運び、二つ目に取り掛かるとしたら、そこに真改が立っていた。

「な、なんだ」

「……真改……」

「は？」

「……己の名……」

「そ……そうか」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……し、真改」

「……応……」

それだけ言つて、真改は道を空けた。その遣り取りを、一夏は面白そうに眺めていた。

その時私は、変なやつだ、とか、自分のことを「おれ」と言うのか、などと考えていたが。

——今、思えば。

あれは真改なりの、精一杯の言葉だったのだろう。

私に、友達になろうと言ってくれたのだろう。

とても、分かりづらかったけれど。

これ以上ないくらい、真摯に。

真改は、私のことを、友達だと、言ってくれたのだった。

「……………」

昔のことを、思い出した。

一夏と真改、二人の幼なじみと仲良くなる、きつかけとなった出来事。

「……………一夏……………」

あの頃から、一夏は変わらず真っ直ぐだった。私をからかう者たちから、私を庇ってくれた。

そして、今回も——

「……………！」

……………一夏は、重傷だ。かなり高い確率で、後遺症が残るほどの。もう剣を振るところか、立つことさえ出来ないかもしれない。

「私の……………私の、せいだ……………」

私が、弱いから。

私の、心が弱いから。

手に入れた力に容易く酔い、溺れ……………その結果が、これだ。

「一夏……………いちかあ……………」

待機を命じられた部屋の隅、膝を抱えて、一夏の名を呼ぶ。

——目を覚まさない、想い人の名を。

「すまない……………一夏……………」

こうならないように、剣術を学んでいたのに。

わき上がる暴力への衝動を、抑えられるように。

自分の心を、制御できるように。

なのにどうだ。力を与えられた途端、自分自身が強くなったのだと

思い上がり、根拠もないのに勝利を疑いもせず、無謀な戦い方をして。全て、無駄だったのだ。私が今まで、やってきたことは。

「……もう……力なんて、いらぬ……」

私が力を求めたから、こんなことになった。なら、力なんていらぬ。

私が無力でも、一夏は困らぬ。一夏には、支え助けてくれる人が、大勢いるのだから。

だから、もう――

「あーあー、わかりやすいわねえ」

突然部屋の扉が開き、鈴の声があった。

しかし私には、顔を上げる気力すらない。

「あのさあ。一夏がああなったのって、アンタのせいなんですよ？」

「……………」

今一夏は、ISの保護機能を受けている。

絶対防御の致命領域対応、全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの機能。

これは操縦者がISの補助を深く受けた状態になり、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は昏睡状態になってしまうのだ。

「それで、アンタなにしてんの？ そうやってうずくまって泣きべそかいてれば、どうにかなると思ってるの？」

「……………」

しかし、私はなんの反応も出来なかつた。

だって私には、何も、出来ないのだから。

「……立って」

「……………」

「立ってって言うてるのよ」

鈴が私の胸倉を掴み、強引に立ち上がらせる。

その小さい体のどこにそんな力があるのか、私の足が床から離れるほどの高さまで持ち上げられる。

――俯いている私と、目が合うように。

「……………いつまでそうしてるつもり？ そうやってうじうじしてれば、

「一夏が目を覚ますの?」

「……………い……………ち、か……………」

「黙れ。今のアンタの口からは、あいつの名前を聴きたくないわ」
「……………」

……………鈴の言うとおりだ。私には一夏の名を呼ぶ資格も、隣に立つ資格もない。

「もう一度訊くわ。いつまでそうしてるつもり? 一夏を傷つけたヤツを放って」

「……………福……………音……………」

「そう、そいつよ。……………ぶちのめしに行くわよ」

「……………そんな……………」

「あ?」

「……………そんなことをして……………なんになる……………」

「……………」

一夏は、重傷だ。

もう、治らないかもしれないほどの。

「……………一夏は……………」

「……………」

「一夏は、もう……………立てないかも、しれないんだぞ……………」

「……………」

一夏が、立てない。

もう、一夏は剣を振れない。

あんなに頑張っていたのに、あんなに、強かったのに――

「……………だから?」

「……………な……………に……………?」

「立つわよ、一夏は。立たないわけがないでしょうが」

「……………」

「立てないかもしれない? バツカじゃないの。たとえば1パーセントしか可能性がなくても、あいつならやるわよ。

……………絶対に、やり遂げる」

「……………一夏……………」

鈴の言葉には、強い力と、一夏を信じる心が込められていた。
なのに、私は……。

「あたしたちが信じなくてどうすんの。アンタが信じなくてどうすんのよ。一夏は立つ。必ず元通りになる。」

……あいつはそういうヤツだって、アンタも知ってるでしょうが」

「……いち……か……」

……一夏。

一夏、一夏、一夏……！

「だから、あたしたちで福音をぶちのめす。目を覚ました一夏が、また無茶をしないように」

「……………」

「さあ、行くわよ——敵が、待ってる」

「……だが、私には……その、資格が……」

「いい加減にしろっ!!」

激昂した鈴が、私の頬を殴りつける。

手加減抜きの、本気の拳。その威力に吹き飛ばされ、受け身も取れずに倒れる。

「資格!? 資格ってなに!? そんなものが必要なの!?!」

「な……」

「一夏はなに?! 神様かなんかなの?! そんなんじゃないでしょうが、あいつはただの男の子でしょうが!!」

「……………」

「資格なんか必要ない! 必要なのは想いよ! あいつのことが本気で好きなら、それだけで十分でしょうがっ!!」

……ガツンと、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

……資格なんか、必要ない。一夏が好きなら、その感情に何も恥じる場所がないのなら。

——それだけで、十分だ。

「戦わないって言うなら、それでもいいわ。その代わりに、二度と一夏に近づかないで」

「……………ふざけるな……」

「私は、一夏が好きだ。」

剣を続けていたのも、自分を律するためだけでなく、一夏への想いがあったからだ。

「誰が、戦わないと言った」

私の剣は、なんのために。

「私は、一夏が好きだ」

私の想いは、なんのために。

「誰にも、否定させない」

そんなもの、決まっている。

「一夏は、私が守る。私が一夏を支える」

私の剣は。

私の想いは。

「そのためなら、戦う」

ただ、一夏の隣に立つために。

「いくらでも戦ってやる！ 何度でも立ち上がってやる！ 今度こそ

——」

これからも、一夏と一緒にいるために。

「——私が、一夏を守るっ!!」

もはや先ほどまでの絶望や無力感など、欠片も残っていない。

あるのはただ、溢れんばかりの闘志だけ。

もう、迷わない。

「……なに言ってるの？ それはあたしの役目よ」

「ふん。くれてなどやるものか。欲しければ、力づくで奪ってみせろ」

「……上等」

お互い、ニヤリと笑う。

……鈴には、感謝しなくては。この頬のことは、それでチャラにしてやる。

「じゃあ、行くわよ」

「だが、どこへ？ 福音の居場所は——」

「特定した」

突然割り込んできた声。

そちらに目を向けると、ラウラ、シャルロット、セシリアの姿があった。

「……みんな」

「ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見した」

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……お前の方はどうなんだ。準備できているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「とつくに終わっていますわ」

「僕も、いつでも行けるよ」

全員が、その眼に闘志を滾らせている。

……いじけていたのは、私だけか。

「なら、残りの問題は……」

「ああ。……マスターだけだ」

「……真改？ 真改がどうかしたのか？」

「……来ればわかると思うよ」

「……？」

そうしてみんなに連れられ、砂浜に出た。

そこには――

オオオオオオ

……世界が、悲鳴を上げていた。

そこに立つ人物から逃げるように、空気がこちらに押し寄せてくる。

……当然、そんなものは錯覚だ。だがそれを、ここに居る全員に感じさせるほどに、圧倒的な気配を放っている。

「……誰だ、あれは」

「見りやわかるでしょ。……シンよ」

そう、そこにいるのは間違いなく真改だ。その姿を見間違える筈はない。

筈は、ないのに。

「あれが……真改、だと……？」

「帰って来てからというもの、あの様子です」

「一夏のこと……相当、気に病んでるみたい」

「マスターにとつて、それだけ大事な存在なのだろう。……左腕を、捨てるほどにはな」

私たちの会話が聞こえたのか、真改がゆっくりとこちらを向く。そして目が合い――

――ずるり、と。私の首が、滑り落ちた。

「……つつつ?!?!」

「落ち着いてっ。……錯覚だよ」

「く……!?! ……はあっ」

シャルロットに支えられて、どうにか倒れ込むことは防いだ。そのまま慌てて首に触る。

……大丈夫、首はちゃんと繋がっている。しかし、なんという殺気か。目が合っただけで、本当に自分が「死んだ」と錯覚した。

だがそれ以上に驚いたのは、あの真改が、誰彼構わずに殺気を撒き散らしている――

「……何処……」

地獄の底から溢れ出てきたような声。

それを受け、ラウラが手にしたブック端末を見せる。

「……ここから三十キロ離れた沖合上空だ。今から作戦会議を――」

「……………」

そこまで聞くと、真改は突然ISを展開、月船を呼び装着し、そのまま一気に飛んで行ってしまった。

「ば、ちよ、待ちなさいっ!!」

「しまった、場所を知ればこうなることは目に見えていただろうに……!」

「シン、一体どうしちゃったのさ……!」

「そんなことより、追いますわよっ!」

「待って、作戦は——」

「そんなことを言っている場合かっ!! どちらにせよ、マスターがあの調子では作戦など無意味だっ!!」

「真改っ……!!」

全員がISを展開し、急いで真改を追う。しかし月船の出力は凄まじく、見る見るうちに離されていく。

あつと言う間に水平線の彼方へと消えて行った背中を必死に追いながら、私は両の拳を固く握り締めた。

——今度こそ。

(真改っ! お前を一人で戦わせはしない! 必ず……必ずみんなで、一夏の下へ無事に帰るっ!!)

そうだ、一夏だけではない。

真改もまた、私の大事な幼なじみであり、私の憧れなのだ。

(頼ってくれと言っただろう! そんなに……そんなに、私たちは頼りないか!?) お前の力にはなれないのか!?)

守る。

必ず、守る。

これ以上、お前を傷つけさせはしない——!

(頼む……出来ない主で申し訳ないが、私にはお前が必要なんだ……! だから頼む、私の友達を、守るために——)

「一緒に行こう! 私に、力を貸してくれ——紅椿っ!!」

第28話 福音（報復編）

殺せ

殺せ

殺せ

殺せ

男を殺せ

女を殺せ

子供を殺せ

大人を殺せ

赤子を殺せ

老人を殺せ

愚者を殺せ

賢者を殺せ

罪人を殺せ

聖人を殺せ

軍隊を殺せ

企業を殺せ

人間を殺せ

世界を殺せ

殺せ

殺せ

殺せ

敵を、殺せ

己を、殺せ

海上200メートル。

シルパリオ・ゴスペル

銀の福音は胎児のように体を丸めて膝を抱え、頭部から伸びる巨大な翼で体を守るようにして、そこに居た。

』？』
ふと、福音が顔を上げる。

福音の各種センサーは、まだ何も感知していない。
だが、何か——とても危険な何かが、近付いて来ている。

』
非科学的な、第六感による警鐘。

だがそれは、他のどのデータよりも信用に値する——否、信用しなければ自らを滅ぼすだろうと、福音に確信させた。

——そして。

』
凄まじい速度で一直線に、あまりにも明確な殺意を撒き散らしながら、敵が迫ってくるのを確認した。

』La——♪』

福音はマシンボイスを発しながら、頭部の大型スラスターを開く。
そこに備え付けられた三十六の砲門を前に向け、敵に狙いを定める。

銀シルバー・ベルの鐘の最大火力による、一点集中の一斉射撃。

過剰とも言えるその攻撃力をもってしても、福音は心中の不安を拭いきれずにいた。

……まるで足りない。この程度では、「アレ」は墜とせない——！

』！！』

——見えた。

輝くような自分のそれとは印象の違う、淡く静かな銀色の装甲が、弾丸すら置き去りにするような勢いで突っ込んでくる。

射程距離に入る直前、攻撃開始。

「アレ」を近付けてはいけない。エネルギーのロスは多くなるが、最大射程から削り切る——！

降り注ぐ、光弾の雨。分厚い弾幕に加え、一発一発の威力も申し分ない、嵐のような攻撃。海上に轟音が響き渡り、衝撃波が海面を震わせる。

その、中で。

「――不足」

静かに眩かれた、その声が。
やけにはつきりと、聴こえた。

『――↓』

爆風を切り裂いて、銀色の装甲――月船を装着した朧月が、福音に迫る。

その操縦者、真改は、血と臓物で出来た底無し沼のようにどす黒く濁り切った瞳で、福音を射抜いた。

「……素っ首……」

圧倒的な危険を感じ、福音は全速力で後退しながら銀の鐘の照準をさらに絞る。だが密度を増したその攻撃も、足止めにはならぬ。

爆発に装甲を抉られ、白い肌と黒い髪を焼かれながら、それらを一切意に介さず直進してくる。

「……貫い受ける……」

交錯は一瞬――の、筈だった。

前回の交戦で、福音は朧月の機動力と月光の間合いを見切っていた。故に、針に糸を通すかのような精度で真改の攻撃を避けることが出来るのだが、正体不明の危険信号に従い大きく避けた。

スラストを全開に噴かし、海面へ向け急降下する。剣術は下からの攻撃に弱いという定石に則った、反撃を視野に入れた適切な判断だった。それに、朧月では追いつけない筈だった。

故に、福音の落ち度はただ一つ。

真改の反射速度が、音速を遥かに凌駕するということを知らなかったことである。

ガンツ!

『!?!』

分離した月船を踏みつけ軌道を変え、月輪によって半回転、瞬時加速で急停止し、水月で再加速——その一連の動きを、コンマ一秒にも満たない刹那の内に実行する。

福音からすれば超音速から一切減速せずに、ほぼ直角に曲がったように見えるほどの超絶の機動。当然、いくらPICによる保護があっても、そんな動きに人体は耐えられない。骨格や筋肉、内臓に莫大な負荷が掛かり、派手に吐血した。

——だが。

「……………」

それでも真改は、眉一つ動かさない。

自ら吐き出した血を顔に浴び、凄絶な化粧として、なおも無表情に福音に斬り掛かる。

『!!』

その姿に。

機械である筈の福音は、確かに恐怖を感じた。

ヴオンツ!!

紫色の極光。ISの防御力をもってしても、一撃で両断されかねないほどの圧倒的な熱量。その斬撃を、福音は紙一重で回避する。

真改の剣を見切ったのではない。全速力で避けた結果、本当にギリギリのタイミングで月光の間合いから逃れることが出来ただけだ。

だがどちらがより無茶な機動をしたかと言えば、明らかに真改の方だ。その証拠に、初撃を外した真改の動きは止まっている。

その奇跡を無駄にせず、福音が即座に反撃に出る。

再びの一斉射撃。目の前の敵に出し惜しみなどすれば一瞬で敗れると、たった一度の攻防で悟った。

一对の翼を大きく広げ、真改を挟み込むように光弾を撃ち出す。たとえ殺すことになったとしても、この好機になんとしても仕留める——そんな決意の籠もった攻撃は、しかし。

ゴウンツ!

重々しい炸裂音と共に、かわされた。

「!?」

「……温い……」

真改が水月を起動、体勢を崩したまま、無理矢理加速したのである。それだけではない。真改は次いで月輪を噴かし独楽のように回転、ジャイロ効果により機体を安定させ、さらに二度連続で水月を起動した。

正三角形を描くような軌道で、一瞬の内に福音の背後に回り、斬り掛かる。

「!」

福音は驚嘆に値する反応速度でもって、死角からの一撃を全速力で前に出ること回避、そのまま距離を取りつつ反撃のため振り返り――

「!?!」

その目の前に、真改がいた。

福音に攻撃をかわされた瞬間、瞬時加速と水月の同時使用により、ぴったりと背後について行ったのである。

「……………」

「ヴォンツ!!」

再び、光の剣が振るわれる。

その刃は迷うことなく、真っ直ぐに、福音の首に迫る。当たれば、死。

福音が、ではない。

福音の、守るべき主が、死ぬのだ。

「!!」

そんなことは、許せない。

だから福音は、なんとしてもその一撃をかわさねばならない。たとえ、自身の象徴とも言える翼を失うことになるうと。

首を体ごと傾け、月光の軌跡から逃がす。その際、ウイングスラスターの片方が逃げ遅れ、根元近くから斬り飛ばされた。

「!!!」

声無き悲鳴をあげながら、それでも福音は攻撃の手を緩めない。
残ったスラスターを開き、その砲門を真改に向ける。

『La——♪』

半減した火力で、しかし全力での攻撃。

これほどの近距離でそれを浴びればひとたまりもない。

だから、真改は。

「……………っ！」

福音との距離を、さらに詰め。

『!!?』

開いたスラスターの中に、右腕を、突き入れた。

「……………!!!」

『!!!』

月光と銀の鐘が、同時に起動する。

ぶつかり合う、膨大なエネルギー。

それが内側で炸裂したことで、福音のウイングスラスターが完膚無
きまでに破壊された。

そしてその爆発を全方位から浴びた真改の右腕も、ただでは済ま
ず。

装甲が吹き飛び、肌が弾け、肉が千切れ、骨がひしゃげ——しかし
埒外の頑強さを持つ月光だけは、大きく破損しながらも機能は失わ
ず。

それだけあれば、真改には十分過ぎた。

ヴォーンツ!!

月光を起動。ボロボロの、もはや形だけしか残っていない右腕を、
得体の知れないナニカで動かす。

両の翼を失い、膨大なエネルギーの爆発を間近で受けた福音には、
既に防御力は残されていない。

月光で斬られれば、確実に、死ぬ。

福音が、ではない。

福音の、守るべき、主が死ぬのだ。

……そんなこと。

そんな、こと。

許せる、筈がない——

「シ——」

だが、福音にはもう、打つ手がない。

自身の攻撃力と機動力を支える翼は、両方ともが失われている。試験稼働中であつた福音には通常の武装は搭載されておらず、あるのは

——あつたのは、たつた今失われた銀の鐘シルバー・ベルのみ。

だから、今の福音にはなにも出来ない。福音の力では、どうにもならない。

「——ネ」

だから、どうにかなるとすれば。

「——ダメだあああああつ!!」

福音以外の者による、介入があつた場合だけである。

「……見えましたわっ!!」

「くそ、やはりもう、始まつてる……!」

専用機持ち達の中で、強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」を装備したブルー・ティアーズ、そして展開装甲の調整により機動力特化機となった紅椿——すなわちセシリア・オルコットと篠ノ之箒が、他の三人に先行して真改を追った。

そして、真改と福音の姿をハイパーセンサーが捉えられる距離まで近付いて——真改の、我が身を省みない戦いを、見た。

「真改さんっ……!」

セシリアが、泣きそうな声で真改の名を叫ぶ。

真改は月輪と水月、ただでさえ体に負担のかかる二種類のスラストーを連続して、時には同時に発動し、福音に食らいついでいる。

明らかに、無茶をしていた。朧月の装甲も所々にダメージが見受けられるが、操縦者にまで届くほどではない。だというのに、真改の顔は血まみれだった。そして今も、口から大量の血を吐きながら、その

血を顔に浴びながら、それをまるで気にもせずに攻撃を続けている。

「もうやめてください、真改さん……！」

圧倒的な機動力で逃げ続ける福音に、真改が追いつがる。

本来、そんなことは出来ない筈だった。

軍用 I S である銀シルバリオ・ゴスベルの福音は、性能面で競技用 I S である朧月を上回っている。

操縦者の技量でいっても、ミリ単位の精度で機体を操る福音に真改は遠く及ばない。真改の技は飽くまで剣士としてのもの、つまりは見切りや読み、そして剣技であり、I S の操縦とは関係ない。

動きに無駄があり、その無駄が体に余計な負荷を掛けると同時に機動を阻害し、それを補うために更なる無茶をする——その悪循環が真改の体を破壊していくのが、この距離からでも見て取れた。

「真改……！ お前の剣は、そんなものじゃないだろうっ!!」

性能で劣り、技術でも劣る。

そんな相手と互角以上に戦っている。

そこに、無茶がない筈がない。

それが、箒には我慢ならなかった。

「お前の剣は……！」

箒が憧れた、真改の剣。

真っ直ぐだった。

いつだって、相手の目を真っ向から受け止め、見返していた。

気高かった。

いつだって、勝利のために全力を尽くし、その勝利を誇っていた。

そして、優しかった。

決して過剰な暴力は振るわず、余計な怪我をしないように気を使っていた。

なのに、今は——

「させない……！ お前に、そんなことを、させるものか——!!」

月光が、福音の翼を片方、斬り飛ばす。

次いで捨て身の一撃で、もう片方の翼も破壊した。

……それで十分だ。福音はもう、戦う力を失った。

もう、十分だろう。
だから。

「——ダメだああああっ!!」
その刃を。

振り下ろさせては、いけない。

月光を振り下ろす直前、横から衝撃を受け、止められた。

(…………?)

見れば、真紅の装甲——箒が、抱き付くようにして、己の右腕を止めている。

「もういいっ！ もう十分だ、真改っ!!」

「……………」

痛みを堪えるような顔で、箒が叫ぶ。

……………なんだ？ 何故泣いているんだ、箒。

「もういいんだ、真改！ それ以上やれば、殺してしまうっ!!」

また何か、嫌なことでもあったのか？

それでまた、黙って耐えたのか？

……………偉いな、箒。己とは大違いだ。

「それはダメだ。お前の剣は、そんなものじゃないだろう、真改っ……………!!」

「……………」

お前はまた、そうやって、己を助けてくれるのか。

いつも心配ばかり掛けてすまない。

いつも支えてくれて、ありがとう。

「お前がそんなことをする必要はないっ！ そんなことを、お前にさせるものか……………!!」

「……………」

……………ありがとう。そして、すまなかった、箒。
だが、もう、大丈夫だ。

「もういい。もういいんだ、真改。お前が、そこまでやる必要はないんだ」

「……………」

大丈夫だ。

もう、大丈夫。

己は、今度こそ——

「——邪魔」

——確実に、止めを刺すから。

ざわり、と。

不意に、寒気を感じた。

真改が、凄絶な血化粧を施した無表情で、私を——私の後ろを、睨み付けている。

「箒さんっ!!」

焦ったような、セシリアの声。

後ろを向くと。

失った筈の翼を、

光り輝くエネルギーで再生した、

銀シルバリオ・ゴスペルの福音が、そこにいた。

「——邪魔」

真改が私を突き飛ばし、福音に躍り掛かる。

新たな翼を大きく広げて迎え撃つ福音。

真改は月光を起動、ボロボロの右腕を動かして構え、

(ダメだ……やめろ……)

紫色の光の剣を、福音の胸を目掛け、真つ直ぐに――

「真改ああああいつ!!」

「……っ!」

ほんの、僅か。

真改の一撃が、逸れた。

福音はその隙を見逃さずに攻撃をかわし、真改の右腕を抱える。

そして動きの止まった真改を翼で包み込み、零距离、全方位からの一斉射撃を浴びせた。

「――あ」

全身をズタズタにされ、真改が落ちて行く。

――まただ。

「あああああぁっ!!」

また、私のせいで――!!

『『『違っ!!』』』』

「……!!?」

不意に、プライベート・チャンネルから、みんなの声が届いた。

『お前のせいじゃないっ! お前のおかげだっ!!』

『箒のおかげで、シンは殺さずに済んだんだよ!』

福音は軍用 I S、操縦者も当然軍人だ。

いかなる理由があろうと、殺してしまえば確実に厄介なことになる。

……いや、たとえなんのお咎めもなかったとしても、真改の心はさらに傷付いただろう。

真改を、守ると誓った。

ならば今すべきは、後悔ではない。

――そうだ。私はもう、迷わない。

『大丈夫、真改さんは無事です! 右腕も、きつと良くなりますわっ!!』

海面に激突する寸前、セシリアが真改を抱き止めた。

朧月はまだ展開されている、最低限の保護は、まだ残っているだろう

う。

するとどこからか月船が飛んできて、セシリアの前で停止した。

『……真改さんを、おまかせします』

その上に、真改をそつと横たえるセシリア。

物言わぬ機械である月船は、真改を気遣うようにゆつくりと、戦場を離れていった。

(お前も、真改を守りたいのだな……隴月)

真改が意識を失っている以上、月船を動かしているのは、月船とリンクしている隴月ということになる。

主思いなのだろう、もしかしたら先の一撃は、隴月が外させたのかもしれない。

真改の心を、守るために。

直後に受けるだろう苛烈な反撃に、耐えきる覚悟と共に。

「お前も、私たちの仲間というわけか。……安心しろ、福音は私たちが倒す。お前は、真改を守ってくれ」

返事などある筈もないが、それでも言わずにはいられなかった。

隴月には、この言葉はきつと届くだろうと、思うから。

「……貴様を倒す理由が一つ増えたな、福音」

「さあ、始めますわよ。存分に、踊ってくださいな」

『あたしたちもすぐに着くわ！ 出番を残しときなさいよっ!?!』

「保証はできませんわっ!!」

「精々急ぐんだなっ!!」

『L a ———♪』

二刀を構え、一気に突撃。その私を後ろから掠めるように、しかし決して当たることなく、強力なレーザーが追い抜いていく。セシリアによるストライク・ガンナー用の大型レーザーライフル、「スターダスト・シューター」の連射だ。

ブルー・ティアーズの強襲用高機動パッケージ、ストライク・ガンナーは、六機のビットをスラストとして使っている。その分低下する火力を補うため、スターダスト・シューターは普段装備しているスターライトmkⅢを大きく上回る威力を持つ。

その閃光を避けながら、福音は私目掛けて突撃してくる。翼が光のエネルギーとなり（おそらく、セカンド・シフト二次移行だろう）威力と数を増した光弾の雨を雨月と空裂のレーザーで迎撃しながら、剣の間合いに踏み込んだ。

「ぜえいッー」

繰り返した一撃を避ける福音。相変わらず凄まじい機動力だが、しかしそれにも慣れてきた。返す刃で福音を追う。

『L a ———♪』

反撃に降り注ぐ光弾を距離をとり回避、再び突撃をかける私を、セシリアが援護する。

「はあっー」

閃光が福音を撃ち抜いた。僅かに福音の体勢が崩れ、その隙に斬り込む。

紅椿の機動力ならば、福音を追える。体勢が崩れていても、全身の展開装甲から噴き出すエネルギーにより斬撃に十分な加速を与えられる。

前回はこれに振り回されていた。今も扱いきれいているわけではないが、その隙はセシリアが埋めてくれる。

「はあああっ!!」

少々の間など気にせず攻撃する私に、福音が押され始める。

それにより、福音は一旦大きく距離をとり、先ずは援護射撃を潰そうとセシリアに躍り掛かった。

「くっー」

「セシリアっ!!」

スターダスト・シューターは二メートルを優に越える巨大な銃だ。取り回しに難があり、近づかれれば為す術はない。

——だが。

『——!?!』

『遅くなったな!』

一キロ先からの砲撃が、福音を阻む。

砲戦パッケージ、「パンツァー・カノーニア」を装備したラウラによ

る狙撃である。

『よくも、マスターを……』

ラウラは両肩に装備した八十口径レールカノン、「ブリッツ」による砲撃を続けながら、福音を睨み付け、吼える。

『よくも、一夏をつ!!』

ブリッツは反動が大きいために機動と両立することは出来ないが、攻撃力と射程距離に優れている。

これだけ離れた距離からでも脅威的な威力と命中率を維持しており、後方からの火力支援としては理想的だ。

『この装備では接近されれば対処できん! ここから援護するつ!!』

「了解した!」

「頼みますわよ!」

ラウラの砲撃で福音の動きが止まった隙に、セシリアが距離をとる。

だがセシリアが再び攻撃を仕掛けようとしたところで、福音が動く。両の手足、合計四ヶ所から発動する瞬時加速。

ストライク・ガンナーの高速機動に易々と追い付き、光弾を放つ。

「くう……!」

『ちいつ、速すぎて狙えん……!』

セシリアは必死に逃げているが、福音は執拗に食らいついてくる。引き離すことが出来ず、ついに両の翼に囲まれた。

『セシリアっ!!』

「きゃああああっ!!」

セシリアが光弾の洪水に飲み込まれ、爆煙でその姿が隠される。敵を一機撃墜し、福音は次の獲物としてラウラに狙いを定め――

「……おまたせ」

『!?!』

背後から、ショットガンの連射を浴びた。

「助かりましたわ――シャルロットさん」

「二度目は勘弁ね。シールドをほとんど持ってかれたよ」

煙が晴れ、中から実体シールドとエネルギーシールドを二枚ずつ装

備したシャルロットが現れる。

リヴァイヴ専用防壁パツケージ、「ガーデン・カーテン」により、福音の攻撃を防いだのだろう。

「はあああつ!!」

セシリアとシャルロット、レーザーと実弾による連射から逃れるべく、福音が再び瞬時加速を発動して距離を取る。

囲まれつつある状況から脱するため、包囲の薄い箇所を見定め、そこを目掛けて一気に加速し――

「――いらつしやーい」

紅蓮の炎の雨により、その逃げ道を塞がれた。

「随分派手にやってくれたじゃない……」

攻撃特化の機能増幅パツケージ、「崩山」により衝撃砲を四門に増設した、鈴の甲龍による攻撃だ。

「倍返し程度で済むだなんて、思っていないでしょうねえっ!？」

普段は不可視の筈の砲弾が、崩山により赤い炎を纏っている。その連射を受け、さすがの福音もたまらずに後退した。

――私たちの、包囲の中心に。

「全員、揃ったな」

「もう好きにはさせませんわよ」

「油断するな。攻撃力も機動力も桁外れだ」

「身を持って味わったよ。それでも、負ける気はないけどね」

「関係ないわ。ボコボコにして、海に沈めてやる」

『――』

全員から溢れる闘志。

必ず、倒す。

絶対に、勝つ。

これ以上、真改を傷付けさせないために。

私たちが大好きな、一夏を守るために――!

「行くぞ、銀の福音。シルバリオ・ゴスベルお前には、ここで果ててもらおう――!!」

ざあああん……ざあああん……。

「……………」

遠くから聞こえる波の音。果てしなく続く、真つ白な砂浜。

いつの間にか、俺はそこを一人歩いていた。

じりじりと照りつける太陽の日差しを感じ、今が夏だと分かった。

「……………」

……ふと、歌声が聞こえた。

とてもきれいで、とても元気な、その歌声。

なぜだか無性に気になって、その歌声の主を一目見ようと、声のする方に歩き出す。

「ラ、ラ〜♪ラララ♪」

少女は、そこにいた。

波打ち際、わずかに爪先を濡らしながら、その子は歌うように踊り、躍るように謡う。

眩い輝きを放つ、純白の髪を揺らしながら。

髪と同じ白色のワンピースを、風の吹くままに舞わせながら。

真白な砂浜で、真白な少女が、踊っていた。

（ふむ……）

どういうわけか、声をかける気にはならなかった。

俺は何をするでもなくぼーっと突っ立ったまま、その少女の歌を聴き、踊りを眺め続ける。

打ち寄せる波の音。それはまるで、少女の歌と合わせて、音楽のよう
うで。

時折吹く優しい風。それはまるで、少女と一緒に、踊っているよう
で。

それらが、とても心地よくて。

俺はただただぼんやりと、目の前の光景を眺めていた。

「おおおおおっ！」

箒が二刀を振り上げ、斬り掛かる。福音は高く上昇してそれを避け、光弾の雨を降らす。

「させないっ！」

シャルロットが箒の前に割り込み、光弾を防いだ。箒の紅椿はエネルギーの消耗を抑えるために展開装甲のエネルギーを機動力に割り振っているため、防御力が低下しているのだ。福音の攻撃を受ければ危険であり、シャルロットによる援護は不可欠だ。

しかしガーデン・カーテンのシールドは既に大きく消耗しており、長い時間は耐えられない。

だが、一瞬あれば十分だった。

「食らえっ！」

「釣りはいらんぞっ！」

鈴とラウラによる十字砲火。広範囲を埋め尽くす衝撃砲と、弾速と精度の高い砲弾が福音に襲い掛かる。

『L a ———♪』

福音は更に上昇しながら、一層激しく光弾を放つ。包囲を抜けることを最優先とした動きだった。

しかしそこへ——

「どちらへ行かれるのですか?！」

素早く回り込んだセシリアが、精密射撃の連射を浴びせた。上昇を邪魔され、福音は包囲を抜けることができない。

「今日はここが、貴方の寝室ですわよ?！」

次々と放たれる閃光。左右からは砲撃の嵐、そして下からは、箒とシャルロットが福音を追って来ていた。

「ここで仕留めるっ！」

「一気に行くよっ！」

箒はレーザーを連射し、シャルロットはアサルトカノンを乱れ撃つ。

五人の猛攻を受け、福音はエネルギーの翼で身を守るように全身を包み込んだ。

「くっ、硬い……!」

「それならっ!」

福音の防御を破るため、シャルロットが接近する。

左腕に力を込め、盾の下に隠したパイルバンカー、第二世代型最強の破壊力を持つ「灰色の鱗殻」^{グレイスケール}を準備する。

「これで……!?!」

「!?! シャルロット、退がれっ!」

間合いに入る直前、突如福音が翼を広げた。

翼の下から現れた装甲は所々がひび割れ、そこから小さな翼が伸びている。

そして全ての翼から、全方位に一斉に光弾が放たれた。

「うわああああっ!!」

目の前まで接近していたシャルロットが、光弾の直撃を受ける。咄嗟に構えた四枚のシールドを紙のように貫かれ、海へと落ちて行った。

「シャルロットさん!」

「セシリア、後ろだ!」

「!?!」

爆煙で視界が遮られた隙に、福音がセシリアの背後に回っていた。既に翼を広げ、攻撃態勢に入っている。

「包囲が……!」

「馬鹿、逃げろ!」

セシリアは福音に銃を向けるが、遅い。

銃身を掴まれ、光弾の斉射を受けた。

一瞬で、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが枯渇する。

「おのれっ!」

「よくもっ!」

鈴とラウラが砲撃の密度をさらに上げる。

しかし福音は、主翼からの高速連射で衝撃砲の弾雨を、小型の翼からの精密射撃でレールカノンの砲弾を撃ち落とす。

「そんなっ!?!」

「なんと……！」

驚愕の隙を突き、福音が鈴に迫る。

咄嗟に双天牙月を展開して迎撃しようとするが、主翼によって薙払われ、機体ごと吹き飛ばされる。

体勢が崩れたところで光弾の雨を受け、撃墜された。

「おおおおっ！」

雄叫びを上げ、箒が突撃を掛ける。雨月と空裂を振るい、降り注ぐ光弾を切り払いながら福音に迫る。

しかし福音の手数には圧倒的で、二刀では捌ききれない。それを見たラウラは瞬時加速で距離を詰めてから、再び砲撃を開始した。

「援護する！ 行けえっ!!」

「おおおおあああっ!!」

ラウラは有りつ丈の砲弾を撃ち込み、それにより出来た隙に箒が紅椿を滑り込ませる。

そして、ついに――

「はあああああっ!!」

『――↓』

――剣の間合い。

二刀と全身の展開装甲から伸びるエネルギー刃を振るい、猛攻を仕掛けた。

福音も同じように、全身の翼から光弾を放ちつつ間合いからの離脱を図る。

「ぜええああああっ!!」

無茶な機動、無理な体勢からの攻撃により、全身の骨が軋む。その激痛を気合いで抑え込みながら、機体を更に加速させた。

「ああああああっ!!」

捨て身の踏み込みで、ついに福音の懐深くに入り込んだ。

両腕を大きく広げ、左右から挟み込むように二刀の斬撃を繰り出す。

紅椿の全推進力を乗せた、渾身の一撃。

必殺の意志を込めたそれは、しかし。

無数の小型翼に腕ごと絡め取られ、止められた。

「な……にいい!？」

拘束を振り解こうともがくが、びくともしない。

ならば蹴りで、と脚部の展開装甲からエネルギー刃を伸ばそうとするが、いつの間にかその脚も絡め取られていた。

「箒っ!! くっ、射線に……!」

「構うな! 撃てえっ!!」

だが、撃てない。

紅椿を盾にされては、福音まで砲弾は届かない。箒を傷付け、それで終わりだ。

「く……そおおおお!!」

福音は翼をラウラに向け、光弾を放った。

パンツァー・カノーニアにより機動力の低下しているラウラにはかわしきれず、直撃。黒煙を上げて撃墜される。

「うあっ……!」

「ラウラ……!」

——全滅。

ただ一人残っている箒も、身動きがとれない。

そして福音の両腕が、ゆっくりと箒の首を掴み、締め上げる。

「ぐ……か、は……」

光輝く翼が、箒を包み込んでいく。

薄れ行く意識の中で、それでも箒は反撃の一手を模索していた。

(決めたんだ! 必ずみんな、一夏の下へ帰るとっ! 諦めない、絶対、諦めてたまるかあっ!!)

……その想いも虚しく。

福音の翼が、少しずつ、その輝きを増していった――

「……………」

目が覚めると、そこは既に戦場ではなかった。

「……………」
「どうやら己は、月船の上で眠っていたらしい。出力を絞った月船が、ゆっくりと海上を飛んでいる。」

「……………」
視線を巡らせると、遙か彼方に光が見えた。
爆発とマズルフラッシュ、エネルギーの煌めき。

——戦の、光。

「……………」
ならば、行かなくては。

戦うのは、己の役目なのだから。

己には、それしか出来ないのだから。

「……………」
月船に指示を出すのが、どういうわけか従わない。戦場に戻ろうとせず、ただ真つ直ぐ飛び続ける。

「……………」
隼月の損傷は激しい。月船とのリンクに何かしらの不具合が生じたのかもしれない。

……仕方ない、置いて行くか。

「……………」
月船を降り、隼月のスラスタで飛行する。
しかし、戦場に向かう己の前に——

「……………」
——月船が、立ちふさがった。

「……………」
スラスタの一部を下に向け、己の前でホバリングしている。
……どうやら本格的に、故障しているらしい。

「……………」
月船を押しつけて再びスラスタを噴かそうとするが、またも月船が己の前に出た。

「……………」

……邪魔だな。斬り捨てるか。
そう考え月光を起動すると、月船は逃げるように飛び去って行っ
た。

「……………」

……なんだったんだ、一体。

まあいい、とにかく邪魔はいなくなった。

「……………」

では、行くか。

敵の下へ。

敵と戦いに。

敵を、殺しに。

あの頃のように。

あの頃と、同じように。

「……………」

なぜなら、己は。

ただの、真改なのだから。

第29話 福音（覚醒編）

『ほら、見て？ この目、あなたにそっくり』

『鼻は君にそっくりだ。将来はきつと美人になるよ』

『ふふ、まだ産まれたばかりなのよ？ 気が早いんじゃない？』

『そんなことないさ。あつという間に大きくなる。これから毎日、大変なんだから』

『そうね。ふふ、今から楽しみだわ』

『うん。元気に、真っ直ぐに育ってほしいな』

『大丈夫よ。あなたと、私の子だもの』

『……やったね。よく頑張ってくれた』

『うん。すごく頑張った。すごく痛かったわ』

『代われるなら、代わってあげたかったよ』

『嫌よ。出産の痛みは、喜びと等価だもの。母親の特権よ』

『だから代わってあげたかったのさ』

『あら、ひどい人。ふふっ』

『あははは』

『ふふ、ふふふっ。……ねえ、名前は決まったの？』

『うん。実はね、ずっと前から決めてたんだ』

『そうなの？』

『君と僕の子だからね。僕たちの名前を、付けたいんだ』

『私たちの名前？』

『そう、僕たちの名前だ』

『……？』

『江戸時代に、井上和泉守国貞っていう名前の刀工がいたんだ。大阪正宗って呼ばれるくらいの腕前で、彼の鍛えた業物は重要文化財に指定されてるんだ』

『和泉守国貞……。私と、あなたの名前ね』

『すごい偶然だろう？ 知った時には驚いたよ』

『じゃあ、この子の名前は、^{まもる}守？』

『いや、和泉守は彼が受領したもので、国貞っていうのは父親から継い

だ名前なんだ。だけど彼は、後に自分だけの名前をもらって、その名前を刀に彫っている。つまりは銘だね』

『じゃあ、その名前をこの子に?』

『うん。せっかくだから、あやかろうと思って』

『ふふ、単純な人。……それで、なんていう名前なの?』

『……シンカイ。真を改めると書いて、真改』

『真改……。男の子みたいだな名前ね』

『けど、綺麗な響きだろう?』

『うん。素敵だな名前だと思う』

『よし、なら決まりだね。今日から君は、井上真改だ——』

ざあああん……。

ざあああん……。

どれほど、呆つとしていただろう。

波の音と、少女の歌を聴きながら。

水平線と、少女の踊りを眺めながら。

歌も踊りも、決してうまいわけじゃない。

だけどそれらは、とても綺麗で。

なんだから、懐かしい感じがする。

「……ん?」

けれどいつの間にか、歌も踊りも終わってしまった。

白い少女は波打ち際で、じい、空を見つめている。

「……?」

不思議に思って、少女の隣まで歩いていく。

足を濡らす波の冷たさが、心地良かった。

「どうかしたのか?」

声をかけるが、少女は空を見つめたまま動かない。

そんな少女に倣い、俺も空を見上げた。

照りつける太陽以外に、何も無い空。こんなにも青い空は、見るの

は多分初めてだ。

しばらくそうしていると、不意に少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、いつの間にか少女はいなくなっていた。

きよろきよろと辺りを見回すが、あるのは白い砂浜と、青い海だけ。

少女の姿はない。歌も、聞こえない。

ただ波の音だけが、静かに響いていた。

「うーん……」

もう一度見回してみても、やっぱりどこにもいない。

一体どうなっているのか、うんうん唸りながら考えていると——背

中に、声を投げかけられた。

「力を欲しますか……？」

「え……」

慌てて振り向くと、波の中、膝下までを海に沈めて、一人の女性が立っていた。

白く輝く甲冑を身に纏った、純白の騎士。

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか……？」 何のために……？」

「ん？ んー……。何のために、ね……」

その質問の答えは、もう知っている。

俺がずっと追いかけてきた、たった一つの答え。

「守るために。友達や家族、そういう、俺の大切な人たちを」

「大切な人たち……」

「ほら、世の中つてき、結構色々戦わないといけないだろ？ 人によつ

て違うだろうけど、みんながみんな、戦ってる」

夢を追いかけて走り続ける人。

平和な毎日を謳歌する人。

それだって、立派な戦いだと思う。

みんな、戦っているんだと思う。

「けどさ、不条理っていうか、道理のない暴力って、あるだろ？ それに巻き込まれると、自分の戦いが出来なくなっちゃう。……そういうのから、守りたいんだ」

「そう……」

女性は、静かに答えて頷いた。

優しい微笑みを浮かべるその姿を見ると、またしても後ろから声をかけられた。

「たとえば我が身を犠牲にしても、か？」

「うん？」

振り返ると、波打ち際のギリギリ濡れないところに、女性が立っていた。

肩の高さに切り揃えられた金髪。

深い青色の服。

どことなく見覚えがある鋭い目で、射抜くように俺を見ている。

「守るためならば、自らが傷付くことをも厭わないか」

「んー……」

凜とした、鋭い声。

ひどく真摯なその声は、不思議と心地よく響いた。

「そうだな。ちよつと前まで、そう思ってた」

「ならば、今は違うと？」

「ああ……ようやく分かったよ。誰かを守るなら、大前提として、自分のことを守れなきゃいけないんだ」

「……………」

自然と、気負うことなく言葉を紡ぐ。

これが俺の本心なんだと、この人に伝えたくて。

「自分を犠牲にして、他人を守る。言葉にすれば立派でかっこいいことかもしれないけど、それじゃあダメなんだ」

「駄目、とは？」

「それじゃあ守れないんだよ。命は助けられても、心は守れない。自分が負った傷が、そのまま守った人の心の傷になる。……それじゃあ、ダメなんだよ」

「……………」

女性は俺の言葉を一言も聞き逃さないように、真っ直ぐに俺を見つめている。

だから俺も、俺の言葉がすべて届くように、真っ直ぐに女性を見返した。

「……そんなこと、とつくに知ってたのにな。知ってるだけで、分かっちゃいなかった」

「……………」

「けど、ようやく分かった。俺はみんなを守りたい。命や体だけじゃない、その心も。そのためには、まずは自分を守るくらいには強くならなきゃな」

「……………」

「だって、俺には——俺のために泣いてくれる人が、いるんだから」

「……………」

女性は俺の言葉を噛み締めるように一度目を閉じる。

そして目を開け、また真っ直ぐに俺を見て、問うた。

「そのために、力を欲するのか」

「ああ。大切な人たちの涙なんて、見たくない。俺のせいで涙を流させるなんて耐えられない」

「……………」

「みんな、俺を守ってくれてる。だから俺も、みんなを守りたい。そうやってみんなで力を合わせて、助け合って守り合って……そういうのは、きつと素晴らしいことだと、思うから」

「……そうか」

女性は満足そうに頷いた。

鋭い目にどことなく優しげな雰囲気滲ませて、小さく微笑みを浮かべて。

「……お前になら、任せられる」

静かに、そう呟いた。

「え……？」

気付けば、もう女性はいなくなっていた。

そしてまた、白い騎士からの声。

「……守りたい。そのための力が、欲しいのですね……？」

「ああ。……いや、ちよつと違うな」

「……？」

「守りたい、じゃない。守るんだ。絶対に、守る。守り抜いてみせる」

「……なら、行かないきゃね」

今度は白い少女の声。

俺の隣に立ち、小さな手を俺に伸ばしている。

「……ああ」

俺は迷わずに、その手を取った。

途端に、世界が眩い白い閃光に包まれる。

視界が光に飲み込まれる直前に、白い少女と騎士の女性が並んで立っているのが見えた。

そうして、ふと気付いた。

俺はあの、白い騎士に、なんとなく見覚えがあるような気がする――

「か、ふ――」

福音は箒の首を締め上げながら、翼にエネルギーを送り込む。

零距离、全方位から銀シルバー・ベルの鐘を浴びせ、一息に止めを刺すつもりだった。

(まだだつ、まだ、なにか――)

酸欠により薄れて行く意識で、箒は必死に考える。

この状況を脱する一手を。

福音を倒す手段を。

だが。

(――ま、――だ――)

視界が暗くなり、思考が閉ざされる。

限界が近づいていた。そして福音の翼は、今にも光弾を放とうとしている。

『La——♪』

勝利を謳うように、福音がマシンボイスを発する。

為す術のない箒に、一斉に光弾の雨を浴びせようとして。

ズガンツ!!

『!?!』

背中から、強烈な鉄杭の一撃を受けた。

「箒を……」

ガーデン・カーテンの四枚のシールドを犠牲にして致命傷を避けていたシャルロット、その左腕のパイルバンカー「灰色の鱗殻」グレー・スケールによる攻撃である。

「放せえええっ!!」

ズガンズガンズガンツ!!

灰色の鱗殻のシリンダーが回転し、立て続けに鉄杭を撃ち込む。その猛攻に福音は箒を放し、エネルギー翼をシャルロットに向けた。

「セシリア、箒を!」

「わかっていますわ!」

意識を失った箒を、シャルロットから分けられたシールドエネルギーでIISを再起動したセシリアが抱き止めた。

箒の頬を数回張り、呼び掛ける。

「箒さん! 起きてくださいっ!」

「……………セ、シ……………リア? 無事、だったのか……………?」

「ええ。……………ブルー・ティアーズが守ってくれましたわ」

自らを包む装甲を誇らしげに撫でる。

それに応えるように、陽光を浴びた青い装甲が、一瞬だけきらりと光った。

「……………戦えますか?」

「……………当然だ。いくらでも戦ってやる。何度でも立ち上がってやる」

「その意気ですわ。悔しいですが、わたくしにはほとんどエネルギー」

がありません。機動と攻撃を両立できません」

「……だから？」

まるで悔しくなさそうな顔で言うセシリアに、箒も唇の端を釣り上げて聞いた。

そしてセシリアはニヤリと笑い、

「ですから、ここから援護射撃をさせていただきます。まあ、わたくしが狙われた時は、わたくしが墜とされるだけの話ですし」

「安心しろ。お前がやられている隙に、福音の背中を切り刻んでやる」
お互いに不敵な笑みを浮かべて、二人はそれぞれの役目に着いた。

箒は二刀を構え、福音の猛攻を必死に凌ぎ続けるシャルロットの援護に向かう。

「シャルロット、策はあるかつ!？」

「翼だ！ どうにかあれを切り落とさないといつ!!」

「分かった、私は右を狙う！ 左は——」

「あたしがもらったあああつ!!」

猛々しく吼えながら、鈴が双天牙月を投擲する。

巨大な刃が高速で回転しながら飛翔し、福音の翼を片方切り落とすた。

「鈴っ!!」

「甲龍の燃費を舐めんじやないわよ!! これだけあれば、アンタをぶちのめすには十分なんだからっ!!」

投げられた双天牙月がブーメランのように戻ってくる。

鈴はそれを前進しながらキャッチし、そのまま福音に躍り掛かった。

だが福音は切られた翼を瞬く間に再生し、再び光弾を放つ。

消耗している箒たちには苛烈に過ぎる攻撃。全力で防御し、どうか凌いだものの、いよいよ後がない。

「ぐうっ、翼を再生するとは……!」

「ホントにとんでもないね……!」

「次食らったらさすがにヤバいわよ!」

「一か八かだ、一気に……!?!」

まだ食らいついてくる箒たちを振り払うべく、福音は翼を大きく広げ、その場で回転を始めた。翼に打ち据えられ、弾かれる。

そして体勢の崩れた箒たちに翼を向け――

「悪いが、それはもう見た」

『――!?!』

ステルスモードで至近距離まで近づいていたラウラによる、レールカノンの連射で吹き飛ばされた。

「ふん、ようやく隙を晒したか」

「ラウラ、よく無事だったな」

「パンツァー・カノーニアは砲戦用パッケージだぞ？　遠距離攻撃に対する防御くらい、あつて当然だろう」

その言葉通り、パンツァー・カノーニアには狙撃対策として、左右と正面を守る分厚いシールドが取り付けられている。それにより、すんでのところで撃墜を免れたのだ。

「もつとも、二度目は保たんだろうからな。機を待たせてもらった」

「ラウラ、僕たちを囮にしたの?」

「ああ。なんだ、文句でもあるか?」

「いや、むしろ礼を言いたいくらいだ」

「僕たちなら耐えられるって、信じてくれたんだね」

「……ふん」

「なに照れてんのよ。素直になりなさい、後でナデナデしてあげるから」

「お前は私をなんだと思ってるんだ」

そんな遣り取りをしながら、全員が油断なく福音を睨み付ける。

「さっさと止めを刺さなかったこと、後悔させてやる」

余裕のある者は誰一人としていない。光弾に当たれば即撃墜となりかねない。

「出し惜しみは一切なし。全弾撃ちきるつもりで行くからね」

そしてこれは訓練ではない。撃墜とは、すなわち死を意味している。

「援護はお任せになって。わたくしの底力、見せて差し上げますわ」

だが、誰一人として怯まない。
死を恐れていないのではない。
死ぬのは怖い。とても怖い。

「もう許さない。その自慢のキレイな羽を、全部むしり取ってやるわ」
それでも。

みんなで戦うと、決めたのだ。
全員で帰ると、誓ったのだ。

「遠距離から撃つてもどうせ当たらん。今度は私も前に出る」

それには、全員の力が必要だ。誰が欠けても勝てない。それを全員
が理解していた。

だから、決して怯まない。

この戦いには、必ず勝たなければならないのだから。

「……………」

見えてきた。

福音と、箒たちの戦いが。

「……………」

やはり月船がなければ長距離飛行には時間がかかる。朧月の損傷
も深刻なので、消耗は抑えたかったのだが。

「……………」

まあ、無い物ねだりをしてもし仕方あるまい。いざともなれば、己の
命を薪代わりにくべればいい。

「……………」

右腕の調子を確認。

……問題ない。まだ動く。

続いて月光。

こちらも問題ない。流星は如月製、頑丈だ。

「……………」

ここから見た限りでは、福音が優勢。箒たちも必死の反撃を繰り返

しているが、決定打がない。

「……………」

先ほど剣を交えて分かったが、福音はただ暴走しているわけではないようだった。何か明確な意志がアレの戦闘力を支えている。そう感じた。

「……………」

関係ない。

己はただ、寄って斬るのみ。

意志も、想いも、願いも、祈りも、信念も、諸共に斬り捨てるのみ。

「……………」

忘れるな。

己が何者なのか。

間違えるな。

己の為すべきことを。

自惚れるな。

己に、誰かを守る資格などない。

「……………」

だから、殺せ。

火の粉が降りかかる前に、殺し尽くせ。

彼らと同じ道を歩めると想うな。

安らかに笑うことなど願うな。

人らしく生きたいと祈るな。

「……………」

やるべきことはただ一つ。

敵という敵を道連れに、地獄へと墜ちて逝け――

――

「おおおっ!!」

雄叫びと共に斬り掛かる。

紅椿のエネルギーは残り少ないが、みんなはそれ以上に余裕がな

い。私一人残っても仕方がないのだ、ならばここで使い切る覚悟で挑まなければならぬ。

「せいっ！」

私の斬撃を、福音は後ろに退がってかわした。レーザーによる追撃も光弾に撃ち落とされる。

「はあっ！」

鈴が福音に背後から斬り掛かる。衝撃砲を撃つ余裕がないのか、双天牙月による攻撃だ。

「ちいつ、やっぱ速いつ！」

「無理はするなっ！」

回避行動をとる福音を、ラウラの砲撃が追い立てる。正確かつ強力な連射を受け、福音の機動が一層激しくなった。

「これならどうっ!?!」

「こちらも差し上げますわっ！」

シャルロットがマシンガンにより弾丸の雨を降らす。単発の威力の低下を、セシリアの狙撃が補う。

少なくとも弾丸が命中するが、それでも福音は止まらない。

「いくらなんでもタフ過ぎるよー！」

「軍用とはいえ、異常ですわ……！」

装甲の強固さだけでなく、再生する翼、圧倒的な機動力と火力、それらを支えるほどの膨大なエネルギー。確かに異常と言う他ない性能だ。

こちらはまだ学生とは言え全員が専用機、私を除く四人が代表候補生であり、ラウラに至っては現役の軍人だ。更に言えば福音は連戦だというのに、まだ余力がある。

だが、それでも。

「負ける……ものかあっ!!」

雨月と空裂のレーザーを連射しながら突撃する。

逃げ場を塞ぐように攻撃を放ち、機動を制限された福音をラウラが狙い撃つ。

反撃に放たれる光弾を撃ち落とし、落とし切れなかったものを歯を

食いしばって耐える。

「ぐ、う、おおおあああっ!!」

狙うのは、福音の頭部から伸びる翼。

全身から生えている小型の翼も恐るべき攻撃力を持っているが、機動力を支えているのは主翼だ。それさえ奪えば、動きを封じられる。

「チエエエストオオオオオッ!!」

『!!』

両の刀を振り上げて、渾身の力を込めて振り下ろす。だがその一撃は、翼を重ね合わせることで防がれた。

「あああああっ!!」

しかし私は刀を退かず、スラスターを全開に噴かして力づくで押し込める。

福音の翼と二刀のエネルギーがぶつかり合い、派手な火花を散らした。

『L a ———♪』

二刀を受け止めながら、福音が光弾発射の準備をする。

この距離だ、食らえばひとたまりもないだろう。だがここで退いてもジリ貧になるだけだ、このまま押し切るしかない。

私一人では不可能だろう。

だが私は、一人ではない。

「これで——!」

「——どうよっ!」

頭上から、人影が二つ。

シャルロットと、鈴。

二人は一気に降下しつつ、シャルロットは左の、鈴は右の拳を握り締めている。

そして、すれ違い様に。

シャルロットは灰色の鱗殻の鉄杭を、雨月の峰に。

鈴は全衝撃砲の最大威力を拳に乗せて、空裂の峰に。

それぞれ、叩き込んで行った。

「二行つつつつけえええええっ!!」

二人の力を受け取った刃が、福音の翼を断ち切った。光の奔流と共に翼が消滅し、福音が声なき悲鳴をあげる。

『——!!』

「はあああっ!!」

私は二刀を振り抜いた勢いのままに一回転し、紅椿の爪先から伸ばしたエネルギー刃を踵落としのように叩き込む。

その一撃は、福音の装甲を切り裂いたが——

「ちいつ、浅い……!」

『La——♪』

即座に反撃に出る福音。

全身から生える小型エネルギー翼の数をさらに増やし、その全てが眩い輝きを放つ。

だが、主翼はいまだに再生されていない。今が最後の好機、ここを逃せばもう後はない。

——だから、今しかないのに。

「な、エネルギー切れ……!?!? くそっ、ここまで来て……!!」

紅椿の装甲が輝きを失う。

雨月と空裂もただの刀に成り下がり、悪足掻きに振るった一撃は容易く弾かれた。

目の前には、一層輝きを強める福音の姿。

次の瞬間に放たれる光弾の嵐は、私を跡形もなく消し飛ばすだろう。

ここまで、来て。

あと一手、届かない——

そう、私の心が折れかけた、その時。

福音が、急に視線を上げた。

あまりに急だったので、私もついその視線を追ってしまう。すると、そこには——

「真……改……!?!」

傷だらけの体で、それでもなお衰えぬ殺意を纏った真改が、一直線にこちらへ向かって来ていた。

『キアアアアアア——!!』

福音が獣のような声を上げる。

翼の輝きが一気に増し、迷わず真改に狙いを付ける。

そして、一斉射撃。

「……………!!」

『!!』

真改と福音の視線が交錯する。そこには、お互いを殺すという意志だけが込められていた。

「真改っ！」

朧月はもう限界だ。光弾の連射に耐えられる筈がない。

だというのに、真改はただ真っ直ぐに、弾幕の中に飛び込んで行く。

「なんとという無茶を……………!!」

水月を連射し、弾丸よりもなお速く。

月光の光が尾を引きながら飛翔するその様は、さながら彗星のようだった。

そして、ついに間合いに踏み込む。

真改は振り上げた月光を、福音を両断するべく振り下ろす。

福音は光弾では真改を止められないと考えたのか、全身から生えた翼を殻のようにして身を守る。

光の剣と、光の盾。

その激突は——盾が勝利した。

紙一重のタイミングで主翼を再生した福音は、小型の翼と主翼で二重の盾を作り、その間で炸裂させた光弾のエネルギーで月光を相殺したのである。

「そんな、月光が……………」

それは言うなれば、捨て身の防御。自ら大きなダメージを受け入れることで致命傷を回避する、苦肉の策であった。

だがそれは、現状における最高の一手だと言える。

なぜなら真改は、今の一撃で全ての力を出し切ったからだ。

「……っ！」

「真改っ！」

月光が輝きを失う。

スラストーも水月のカートリッジも使い果たしたのか、朧月はもう浮いているだけで精一杯の様子だ。

『L a——♪』

そこに、福音が翼を向ける。

三度立ち向かって来た敵を、今度こそ仕留めるために。

「真改あああいつ!!」

「……！」

なけなしのエネルギーを使い切り、真改の下へ向かう。

抱きかかえるようにして、福音の射線から隠した。

(お前は、こんな……！　こんな細い体で、ずつと……！)

真改は私を振り解こうともがくが、碌に体力も残っていないのだから、抑えるのは容易かった。

「すまない、真改……だが、お前だけでも……！」

「……放せ……！」

放さない。

これ以上、傷ついて欲しくない。

だから、絶対に、放さない。

『L a——♪』

そして、光の洪水が――

閃光、轟音。

海上に紅蓮の花が咲き、海面が打ち震える。

その中心にいる真改と箒、二人の命が絶望的であると全員が確信したが、誰一人として認められない。

戦闘の最中でありながら、ただ呆然と、爆煙を眺めている。
事実を受け入れられず、なんの反応もすることが出来ず、ただ、呆
然と。

——その時。

「……………雪……………」

それは、その場にいる全員の眩きだった。

雪が、降っていた。

七月の上旬に。

しんしんと、優しく。

輝くような、白雪が。

爆煙が晴れる。

その中心に、それは在った。

「…………間一髪。どうにか間に合ったな」

傷一つない、純白の装甲。

「もう大丈夫だ。これ以上は、やらせねえ」

その装甲の周りを漂う、真白の結晶。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ」

手にしているのは、最強の名を継ぐ、一振りの刀。

「だから、さ」

幼なじみの少女たちを、その背に庇い。

「安心して、よく見とけよ」

新たな決意の象徴、白式第二形態〔雪花^{せっか}〕を身に纏った。

「俺の、剣を」

織斑一夏が、そこにいた。

第30話 福音（守護編）

『ただいま〜』

『…………お帰り…………』

『うん？ ダメじゃないか、真改。もう寝る時間だぞ』

『……………』

『お父さんは遅くなるから先に寝てなさいって言ったんだけど、聞かなくて』

『やー、嬉しいなあ、僕を待っててくれたんだね』

『…………おやすみ…………』

『えー、もっと親子のスキンシップを楽しもうよー』

『こらこら、寝る時間って言ったのはあなたでしょ』

『……………』

『んー、じゃあさ、今度の日曜日、三人で遊びに行こうよ』

『え？ 仕事は大丈夫なの？』

『うん、一段落付きそうだよ。頑張ったかいがあったなあ』

『それで最近遅くまで残ってたの？』

『ふっふっふ、企業戦士は人知れず戦ってるものなのさ』

『ご飯はどうする？ 先にお風呂に入る？』

『あれ、スルー？』

『……………』

『そうだなあ、先に風呂に入ってくるよ。汗臭いままできると、真改に嫌われちゃうからね』

『…………気にしない…………』

『あれ〜？ そんなこと言いながら何気に距離取られてる気が…………』

『じゃあ、ご飯温めておくから』

『え？ フォローなし？』

『……………』

『ほらほら、早く入ってこないと、真改が寝ないでしょ』

『りよーかい。じゃあ真改、次の日曜、遊びに行くよっ！』

『どこに行くの？』

『ほら、こないだテレビでやってた遊園地があるでしょ？ あそこのチケットが手に入ったんだ』

『……………』

『あそこ？ 結構遠くなかった？ 疲れてるのに、大丈夫？』

『バスが出てるんだ、それに乗って行こう。僕は道中、寝かせてもらうから』

『……………それだと、意味が半減するようない……………』

『……………』

『その分はしゃいじやうもんね〜』

『ふふっ、子供ね』

『楽しみだなあ。あそこのジェットコースター、すごいって評判なんだよね。真改の怖がる顔が見れるかな〜』

『……………』

『確かに、それはちよつと見てみたいけど……………身長制限に引っかかるんじゃない？』

『……………あ』

『……………』

『……………』

『……………チャイルドシートでどうにかならない？』

『なるわけないでしょ……………』

『……………く……………』

『あつ！ 今笑った！ 真改が笑ったよっ！』

『ほんとだ。ねえ真改、もう一回笑って？』

『……………おやすみ……………』

『あつ、逃げるのか、真改っ！』

『ごらごら、いい加減寝かせてあげないと。きつと日曜日に、いっぱい笑ってくれるわよ』

『……………』

『うくん、余計に楽しみになってきたなあ』

『なら早くお風呂入って、ご飯食べないと。真改も、もう寝なさい』

『……………承知……………』

『うん、じゃあ入ってくるよ。……それじゃあ』

『『おやすみ、真改』』

なんだ。

何が起きている。

敵はまだ生きている。故に己は、殺さねばならんのだ。

己を拘束する箒を引き剥がし、奴の喉笛を食い千切らねばならんのだ。

なのに。

なんだ、この光は。

見覚えのある、この——光の、幕は。

「……………い、ち……………か……………?」

呆然と、箒が眩く。

そう、そこにいるのは織斑一夏だ。

己の弟分。

この美しく優しい世界で出会った少年。

かつて己が、■ると誓った——

「一夏……………? 本当に、一夏なのか……………?」

「それ以外の誰に見えるんだよ」

そんなことを言う一夏は、いつもとまったく変わらぬ様子だ。

……………そんな馬鹿な。

あれほどの重傷を負って、なぜ——

「ど、どうして……………お前は、あんなに酷い怪我を——」

「ん? ああ……………なんか、起きたら治ってた」

「はあ……!？」

……そんな、馬鹿な。

そんな、ことが——

「ば、馬鹿な……」

「まあいいじゃん、治って悪いことはないだろ」

「それはそうだが……そ、そうだ、どうやってここが分かったんだ!？」

「ああ。あいつが連れて来てくれたんだよ」

一夏が指差した方を見ると、そこには——

「月船……?？」

大きく旋回しながらこちらに飛んで来る、月船の姿があった。

「驚いたぜ。海岸に出たら、いきなり飛んで来たんだからな。それで、

乗って来た」

「月船は朧月の装備だぞ? お前に扱える筈が——」

「いや、使ってない。月船が勝手に動いて、ここまで連れて来てくれた

んだ」

「……そう、か……」

「……………」

月船が、勝手に……?？」

ならば、一夏をここに連れて来たのは——

「お前は、本当に主思いだな——朧月」

「……………」

……何故だ。

何故、こんなことをする。

戦うのは己の役目だ、これ以上、一夏たちを——

「……なあ、シン」

「……………」

一夏が、哀しげな顔で己を見る。

何故、お前がそんな顔をする。

やめろ。やめてくれ。

それではまるで、己が——

「どうしたんだよ、一体。俺が暴れそうになった時、いつも止めてくれ

てたのは、お前じゃないかよ」

「……………」

それは。

お前が、己の腕のことを、引き摺っているから。

お前に、余計なモノを、背負って欲しくないから。

それが、今回、一夏を傷付けることになったから。

だから、二度とこんなことにならないよう。

こんなことに、なる前に。

己が、すべて――

一夏の回復を目の当たりにし、真改は困惑していた。

怪我が治ったこと自体は当然喜ばしい。通常の状態であれば、思わず笑みを浮かべていたであろうほどに。

だが今の真改は、とても普段通りとは言えなかった。

自分には一夏の無事を喜ぶ資格がないと、根拠のない思い込みに捕らわれ、どうすればいいか分からなくなっていた。

「…………遠くからだけど、見てたぜ。なんだよ、あれ」

責めるように言っただけ、一夏は真改から視線を切り、福音を睨み付ける。

手にした雪片式型を右肩に担ぎ、どっしりと腰を落として構えた。

セカンド・シフト 二次移行により増設され、背部と両肩、合計四基となったスラス

ターに光が集まる。

全身の装甲から真白の結晶が溢れ、白式の周囲を漂う。

その結晶のひとつに、箒が手を伸ばした。

「雪…………う。いや、これは…………」

「…………ナノマシン…………」

朧月からの解析結果を、呆然と真改が呟く。

白式を守るように周囲を漂う、無数の結晶。雪に酷似したその結晶の正体は、白式内で生成された大量のナノマシン。

その名は、「雪花」^{せつか}」

「箒、シンを頼む。ほつとくと、また無茶をやらかしそうだ」

「……お前がそれを言うか」

箒の言葉に小さく笑みを浮かべ、それから表情を引き締める。

そして福音から目を逸らさずに、言った。

「お前が教えてくれたんだ。お前が守ってくれたんだ。

お前がいたから、俺は今まで立っていられた。ここまで歩いてこれ
たんだ」

真改に背を向けたまま、静かに語る。

永い時を共に過ごした、幼なじみに。

目指す先に在り続ける、憧れに。

道を外れそうになった時、叱りつけて止めてくれた、姉貴分に。

もうずっと、一緒にいることが当たり前のようになっていた、親友
に。

井上真改という、少女に。

自分の決意を、伝えたくて。

「お前、言ってたよな。剣を振る時は、ただ無心に、ただ一心につて。

今のお前は無心にも一心にも見えねえよ。余計なことごちやごちや
考えてよ、そんなんだから、剣が鈍っちゃまったんじゃないのか？」

「……………」

一夏の言葉に、真改はなんの反応も示さない。

それでも構わずに、一夏は言葉が続けた。

「そんなんじゃないやねえだろ、お前の剣は。全然似合わねーよ。お前は剣
を振る時、いつも楽しそうにしてたじゃないかよ」

「……………」

だから、我慢ならない。

今の真改は、とても辛そうに剣を振るっている。

それが、一夏には耐えられなかった。

「お前の剣はこんなもんじゃねえ。あんなヤツに負けたりしねえ。

……それを、証明してやる。

お前を追い掛けてきた、俺の剣で」

「おおおっ！」

スラストアーを噴かし、福音に斬り掛かる。

真つ直ぐに突っ込んでくる俺に向け、福音が光弾を放ってきた。俺は回避をせず、それどころか防御もせず、雪片式型を右肩に担いだまま直進する。

端から見れば捨て身の突撃に映るだろうが、違う。俺には——白式・雪花には、その必要がないだけだ。

『!?!』

光弾が当たる寸前、白式を包み込むように、球状の光の幕が現れる。それにより威力を減殺された光弾は、白式にダメージを与えることなく消えていった。

「驚いたろ？ その程度の攻撃、雪花には効かねえんだよっ！」

第二形態に成った白式の新機能、「雪花」。

これは白式の周囲に同名のナノマシンを撒き、漂わせる。無数の雪花は攻撃に反応し、力場を発生させてダメージを軽減する。一つ一つの効果は微々たるものだが、何万何億と集まれば強固な守りになる。

攻撃を完全に無効化できるわけではないが、全方位を自動で防御するというのは極めて大きい。

「盾」ではなく、「鎧」としての能力だ。

「ぜえあああっ！」

福音に向け、渾身の袈裟切りを繰り返す。それを左にかわしながら、再び光弾を撃ち出す福音。

たった一回の攻撃で雪花の防御力を見極めた福音は、俺が直進してきても逃げ切れるよう全開でスラストアーを噴かしている。

福音の機動力は白式より上だ。スラストアーが増設されたとはいえ、僅かに及ばない。本気で逃げに徹せられれば追い切れない。

筈、だった。

「甘いっ！」

『!?!』

福音に食らいつき、再び間合いに踏み込む。

白式と福音の間にある機動力の差、それを埋めたのは、雪花のもう一つの能力。

——空気抵抗の軽減。

進行方向の空気を逆方向に移動させることで気圧差を生み出し、機動を補助するのだ。空気抵抗が小さくなることで機体と俺にかかる負荷も減り、四基の大型スラスターによる二段階瞬時加速を使っても体が軋むことはない。

俺がみんなを守るために、白式が、雪花たちが俺を守ってくれる。

だから俺は、全身全霊をかけ。

ただ、寄って斬るのみ——！

「おおおらあああああっ!!」

大上段からの一撃。

発動した零落白夜が福音の翼を切り落とす。返す刃でもう片方の翼を狙うが、福音は両手足から発動した瞬時加速で逃げる。

さすがにこれには追い付けず、間合いが離れた。

「ちい……い……」

福音に向き直ると、既に切り落とされた翼を再生していた。そして再びの一斉射撃。

「ぐうっ！」

雪花によりほとんどの光弾は相殺したが、それでも多少はダメージを受ける。

なにより雪花自体にもエネルギーと耐久力があるのだ。力場を無限に発生させていられるわけではないし、壊れもする。

壊れた雪花は他の雪花によって修理されるが、それには少し時間がかかる。立て続けに攻撃を受ければ、力場は弱まっていくのだ。

「だが……退かねえっ！」

雪花の回復時間を稼ぐため、回避を挟みながら福音に接近。

白式が損傷、消耗した雪花を回収し、エネルギーを補充してから再

び吐き出す。

「早いところケリつけないとマズいな……!」

光弾の爆発は雪花に大きなダメージを与える。連射も凄まじく、雪花の修復は間に合っていない。

二次移行しても、白式の短期決戦仕様は相変わらずだ。

「はあああつ!」

福音は俺の斬撃を完全にはかわそうとしていない。俺に零落白夜を発動させ、再生可能な翼を片方犠牲にし、その分俺を引き付けて的確に反撃を加えてくる。

——白式の弱点を、見抜かれている。

リミッター無しの軍用ISがどれほどのエネルギーを持っているのか想像も付かない。だが白式よりは保つのだろう、俺の自滅を狙っているのは明確だった。

「うおおおつ!」

何度目かの突撃。

やはり福音は右の翼を切られている内に左の翼で光弾を浴びせ、そのまま俺から距離を取る。

両方の翼を一気に斬らなければ、何度でもこの繰り返しになるだろう。今の状況は、まさしく福音の思う壺ということだ。

「くそ、どうする……!?!」

俺一人では仕留めきれない。

みんなの援護が欲しいところだが、福音の全方位攻撃により近付けないでいる。

——一手、足りない。

(情けねえ……大口叩いておいて、この様かよ……!)

振るった零落白夜を、紙一重でかわされる。

踏み込みが足りない。

もっと強く。

もっと鋭く。

もっと深く。

思い出せ、俺が憧れた剣を。

我が身を省みない、捨て身のモノではない。
敵を斬るのではなく、己の道を切り開くかのような。
どこまでも真っ直ぐな、あの剣を——！

「化け物め……！」

傍らに立つ筈の、苦々しい声。

その言葉通り、福音の性能は常軌を逸している。何度翼を切り落とされようと瞬く間に再生し、強力なエネルギー弾を無尽蔵に撃ち出す。

——まさに、化け物だ。

「……………」

……何故だ。

何故一夏が、そんな相手と戦っている。

これは実戦だ、負ければ死ぬ。

一夏が、死ぬ。

そしてその後は、筈たちが。

あの頃のように、己に深く関わった者は、皆——

「……………」

……嫌だ。

友人が死ぬのは、嫌だ。

そんなことは、許せない。

そんなことをさせないために、力を求めたのに——

「……………」

月光を起動する。

だがエネルギーが枯渇しているため、刃を形成することが出来ない。
い。

力が、足りない。

「おおおっ！」

一夏が振るった刃は福音の翼を切り落としたが、福音本体には届か

ない。反撃に浴びせられた光弾は白式の力場に阻まれているが、あれほどの防御力、いつまでも維持出来る筈がない。

そうでなくとも白式は燃費が悪いのだ、いずれエネルギーが尽き――

「……………」

嫌だ。

それは、嫌だ。

もう二度と、あの痛みを味わいたくない。

「……………」

……力が、欲しい。

強大な力、ではない。

圧倒的な力、ではない。

絶対的な力、ではない。

ただ、皆を■れるだけの、力が――

「……………」

……ある。

力なら、ある。

今、ここに。

「……………月船……………」

呼べば、先ほどまで指示を受け付けなかったことが嘘のように飛んで来た。

己の隣に並び、ホバリングする。

如月社長は言っていた。月船の動力には、神無月と神在月を応用した装置が使われている、と。

神無月と、神在月。

先月の学年別トーナメントの折、白式にエネルギーを供給した、二基一組の装置。

ならば。

朧月から白式への供給が、出来たのなら。

月船から隴月への供給も、出来る筈だ――

「……………」
月船に手を伸ばすと、月船は己の手の届かぬ距離まで退がってしまつた。

隴月が、己に月船を使わせまいとしている。

「……………」

……隴月は、恐れている。

己が、人を殺すことを。

もう、後戻り出来なくなることを。

「……………」

相棒の信用を失つてしまつた。それも当然か、己自身、己を信用出来ずにいるのだから。

「……………」

ならば、まずは。

己が、信じなくてはなるまい。

この、機械のクセに、お節介な相棒を。

「……加減は……」

己は、己を信用出来ない。全力で振るつた己の剣は、福音に届かなかつたのだから。

剣以外に寄る辺はないというのにこの様では、自分を信じるなど出来る筈がない。

「…………お前に、任す……」

だから。

己に、殺させたくないと言うのなら。

「…………往くぞ……」

お前が、止めてみせろ――己の剣よ。

「――隴月」

そうして。

月船が、ゆつくりと近付き。

己の指に、触れた。

——エネルギー残量二十％。予測稼働時間、三分——

「いよいよ後がねえな……！」

突撃の回数はずっと十を超え、しかし一撃たりとも福音には届かない。

「はあっ！」

斬撃をかわされ、反撃を受ける。

雪花に供給するエネルギーもバカにならない。それでも使うエネルギーがシールドエネルギーでない分、直接攻撃を受けるよりは遥かにマシだが。

『L a ——♪』

「くっ！」

エネルギーの消耗を抑えるための回避が増えてきた。それが余計に、福音への距離を遠のさせる。

剣が、届かない。

近接戦闘特化型の最大の弱点が、じりじりと俺を焦らせる。

(集中しろ！ 間合いの差なんて関係ない、剣が届かないのなら、届く場所まで進むだけだ！)

零落白夜が使えるのは、あと一回。

なんととしても、次で決めなきゃならない。

(都合だ。二ノ太刀を考えなくて済むからな——！)

踏み込め。

攻撃を踏み分ける。

弱気を踏みしだけ。

距離を踏み潰せ。

恐れるな。

前を向かぬ者に、勝利などない——！

「行くぜ……白式——！」

最後の突撃をかける俺に、福音の一斉射撃が降り注ぐ。爆風の衝撃が襲いかかってくるが、雪花が俺の前進を助けてくれる。

スラスターを全開にし、全力で一步を踏み出す。

——まだだ。まだ足りない。

もつと強く。

もつと鋭く。

もつと深く。

もつと——！

「おおおおおおおおおっ！！！」

右肩に担いだ雪片式型に、渾身の力を込める。

零落白夜を発動、白式内にある雪花を全て放出し、防御に回す。

二段階瞬時加速を発動し、光弾の豪雨を貫きながら、福音との距離を一気に詰める——！

「ぜらあああっ！！！」

袈裟切りで右の翼を切り落とす。

全身の筋と関節が悲鳴を上げるのも構わずに刃を返し、左の翼を狙う。

だが、それも。

ほんの僅か、届かない——

——エネルギー残量二%。零落白夜、発動不能——

(畜生、……ここまで来て……！！！)

『L a ——♪』

雪片式型が零落白夜の輝きを失ったのを見て、福音が集中砲火を放つべく、左の翼を輝かせる。

そしてすぐに、その輝きが臨界に達し——

——根元から、巨大な金属の塊に吹き飛ばされた。

「月船……!?!」

それは、独立飛行モードの月船による体当たりだった。なんの武装もないとはいえ、あの大きさの物が超音速でぶつかれば、当然その衝撃は凄まじい。

大きさ、重さ、速さ。最も単純で、それ故に揺るぎない攻撃力の公式が、そこにはある。

そして。

月船が、来たということとは。

——ヴオンツ!

福音の真後ろ。

紫色の極光が、一直線に向かってくる。

「……………っ!」

ただ無心に、ただ一心に。

俺など及びもつかないほどに、強く、鋭く、深い踏み込み。

そして、満月の如き真円の剣閃が。

俺が憧れた、あの剣が。

福音の装甲を、断ち切った。

ISが解除され、意識を失った福音の操縦者が海へと落ちていく。その体を、予め待機していたらしい箒が抱き止めた。

「ったく……。シンを頼むって言ったろ」

「ふん、お前も真改に真っ直ぐ見詰められて頼まれてみる。断りきれんぞ」

「あー、なんとなく分かるかも……」

件のシンは今度こそエネルギーを完全に使い切ったのか、ISが解除されていた。その傷だらけの細い体を、月船が広げた翼で包み込む

ように受け止めている。

「……まだまだ、あいつには届かないってことか……」
せつかく駆けつけたのに仕留めきれず、一番いいところを持って行かれた。

そんな風にボヤいていると、月船がゆっくりと近づいて来る。

「……シン」
「…………」

月船に乗るシンの表情は、いつも以上に険しい。
疲れや痛みによるものではないだろう、まだ完全に、いつも通りに戻れていない。

「……すまなかった、シン、箒」

「一夏……？」

突然謝った俺に、箒が訝しげな顔をする。

「俺さ、シンが左腕を失くした時、すげえ痛かった。腕どころか、全身を引き裂かれたように痛かったんだ」

「…………」

「だから、同じ痛みを二度と味わいたくなくて、みんなを守れるように強くなるって決めた。」

「……なのに、俺はあの痛みを知ってるのに、シンと箒に、それを味わわせちゃった」

「…………」

「この身に代えてでも守るって、思ったた。けれどそれは、俺の独り善がりでしかなかったんだな」

「一夏……」

「…………」

あの時、気を失う直前、シンと箒の顔が見えた。

一瞬だったし、視界も大分暗くなっていたが、それでも二人がひどく傷付いていたのは分かった。

「だから、俺、強くなるよ。今度こそ、守れるように」
「…………」

もう二度と、あんな思いをさせない。

それが、俺の新しい決意。
けれど、それを聞いても、シンは。
変わらずに、険しい顔のままだった。

旅館に戻ると千冬の説教が待っていたが、真改だけは早急な治療が必要のため別室に連れて行かれた。

無理矢理な機動を繰り返したために全身の至る所にダメージがあり、特に福音のスラスタに突っ込んだ右腕の状態は酷いものであった。

幸いにも後遺症が残る可能性は低いようだが、肘の上の辺りまで、醜い傷痕が残ることは確実だった。

「……………」

旅館の一室で布団に横たわりながら、真改はずっと考えていた。
今回の事件における、自身の行動について。

(…………道化…………)

「彼女」の夢を見て、それだけで不安定になった。

一夏が傷付く様を見て容易く動揺し、自身の弱さを見せ付けられた。
た。

そして、その「弱さ」を、捨てようとした。

(…………懦弱…………)

誰かのために。

自分一人では成り立たないそれは、敵の付け入る隙となるモノだ。
他者を守りながら戦うことは極めて難しい。己に、そんなものを背負い込む余裕はない。

だから、捨てようとした。

失うモノが無ければ、存分に自らの命を燃やし尽くせる。それを、
真改は知っていたから。

(…………否…………)

違う。

真改はただ、失うことが怖かったただけだ。
恐ろしくてたまらなかったただけだ。

もう一度、あの痛みを味わうことが。

(……不信……)

結局、誰よりも弱かったのは真改だった。

仲間だ友人だと言っておきながら、まるで信じていなかった。

信じていなかったから、一人で戦おうとした。

それでいて——たった一人で戦うことも、怖かったのだ。

(……無様……)

捨てようとしても、捨てきれなかった。

ただ「彼女」を追い続けていた時には気付かなかった、自らの思い。

優しい世界で生き、様々な人と触れ合うことで、ようやく気付いた

思い。

その、昔の自分にはなかった想いを、捨てきれなかったのだ。

(……半端……)

その結果が、これだ。

人を捨てきれず、鬼にも成りきれず、殺すことしか考えていなかった

たクセに、最後の最後で踏み切れなかった。

どこまでも中途半端で、あまりにも無様で。

「……己は……何を、している……？」

自分が、分からない。

何をしているのか。

何がしたいのか。

自分は、井上真改なのか。

それとも、ただの真改なのか。

自分は、何も出来ないままなのか。

それとも、何か出来るのか。

仮に、何か出来るとして。

一体、何が出来る……？

「……己は……」

だって、殺すことしかして来なかった。

かつての仲間と共に戦っていた頃は、誰に剣を向けるべきかが明白だった。

自分はただ、剣を振り抜くだけでよかった。ただ、仲間を守るだけで――

「……………」

――何が、守るだ。

守れなかったクセに。

誰一人として、守れなかったクセに――

「…………く、くくく……………」

逸る気持ちを抑え切れなかった、古兵も。

自分より寡黙だった、獵師も。

宇宙を夢見て身中の虫となった、天才も。

「…………く、は、はは……………」

しぶとさを信条としていた、変人も。

死に場所を求めている、傭兵も。

自らの戦場を戦い抜いた、謀略家も。

「…………はは、ははは……………」

馬鹿で単純で真っ直ぐだった、大男も。

決して己を曲げなかった、思想家も。

宝石の如き輝きを放っていた、女傑も。

「はは、は、はははは……！」

未来のために命を捧げた、老人も。

人類のために人間を殺した、革命家も。

初めて守りたいと想った、「彼女」も。

「は……は、は……はは……！」

誰一人。

守れなかった、クセに――

「……はは……くくく……！」

守れるものか。

お前などに。

「……く、くく……！」

そうして真改は、しばらくの間、嗤い続けた。

部屋の外に、一人の少女がいることにも気付かずに。

その少女が、こらえ続けていた涙がついに溢れてしまったことにも、気付けずに。

夜。

満月に照らされた海岸に、水着姿の一夏と箒がいた。

「……………」

「あ……あまりじろじろ見るな……」

「あ、いや、悪い……」

恥ずかしそうに身をよじらせる箒から、一夏は慌てて目を逸らす。箒は普通なら絶対に着なさそうな白いビキニを着ており、その姿に一夏はどぎまぎしてしまった。普段の凛とした彼女のイメージからかけ離れた姿に、鮮烈な衝撃を受けたのだった。

「その水着、似合ってるよ。……うん、いいんじゃないか？」

「……………」

一夏の言葉に、箒はかーつと赤くなる。顔どころか、首や耳まで赤かった。

「こ、こ、これは、その……い、勢いで買ってしまって……い、いざ着ようとする、恥ずかしくて……だな……」

「そ、そうか。それで昨日の自由時間にいなかったのか……」

「……………ああ……」

話しているうちにどんどん恥ずかしくなっていく、いつしか二人とも背中を向け合う形になっていた。

一夏は気を落ち着かせるように一つ息をついて、砂浜に座り込む。釣られて、箒もその場に座った。

「……………それで、用とはなんだ？ 突然呼び出したりして……」

「ん、ああ、それなただけど……」

背を向けたまま、一夏は手に持っていた小さな箱を背中越しに箒に手渡した。

不思議に思いながら、やはり背中越しに箱を受け取る箒。

「……………ハッピーバースデー、箒」

「……………覚えてて、くれたのか……？」

「当たり前だろ。忘れるもんかよ」

箒は嬉しさに心を満たされて、壊れ物を扱うように、その箱を受け

取った。

「あ……開けてもいいか……？」

「当たり前だろ」

洒落たデザインの小箱をそつと開けて、その中身を取り出す。

それは、真つ白な――

「……リボン？」

「ありきたりで悪いんだけど……他に、思いつかなくつてさ」

箒がいつも使っているリボンは、もう大分古くなっている。大切に
使っていたためまだまだ綺麗なままではあるが、リボンの他にアクセ
サリーを身に付けない箒へのプレゼントを思いつかなかつたのだっ
た。

「……いや、ありがとう。……その……すごく、嬉しい……」

「……そっか。喜んでもらえて良かったよ」

「その……してみても、いいか……？」

「なんでいちいち断るんだよ。お前へのプレゼントなんだから、お前
の好きにすればいい」

「う、うむ。では、さつそく……」

しゅるり、とリボンを解いて、一夏からもらったリボンをする。

飾り気のない純白のリボンは手触りが良く、高価なものだと分かっ
た。

「……うん、いい品だな。……高かったろうに」

「六年ぶりだからな。ちよつと頑張ってみた」

「……ありがとう」

もう一度言つて、喜びを噛み締める。

六年ぶりの、一夏からの誕生日プレゼント。一生大事にしようと、
心に決めた。

「……………」

「……………」

「ざあああん……」

「ざあああん……」

打ち寄せる波の音を聞きながら、黙つて月を見上げる。

二人とも、同じことを考えていた。

「……守れなかったなあ……」

「……ああ……」

考えていたのは、井上真改のこと。

二人の大事な、幼なじみのことを。

「……守りてえなあ……」

「……ああ。……あいつに、あんな剣は、似合わない。あいつにあんな剣を振るわせた、自分の弱さが、許せない」

「……今度こそ守るって、誓ったのになあ……」

「……守られてばかりだな、私たちは」

「……ああ」

幼いころから、ずっと守られてきた。

真改はずっと、一夏を守り続けてきた。

だから、いつか自分たちが。

そう、思っていたのに。

「……強くなりてえなあ……」

「……いや。強くなる。必ず、強くなる。そして、今度こそ、真改を守る」

「……ああ。守ろうぜ、みんなで。あいつ、あれで結構、馬鹿などこあるからさ。きつと、馬鹿みたいなことで落ち込んでる」

「だろいな。……だから、思い知らせてやる。あの大馬鹿者に、自分の価値を」

美しい、真円の満月の下。

少年と少女は、またひとつ、誓いを立てた。

臨海学校最終日。

持ち込んだ装備の片付けを終え、帰りのクラス別のバスに乗り込む
IS学園一同。

その中の一組のバス、出発数分前に、一人の女性が乗り込んで来た。

「ねえ、織斑一夏君っているかしら？」

年齢は二十歳くらい。鮮やかな金髪にカジュアルなブルーのサマースーツを着たその女性は、妙に様になる仕草でバスの中を見渡しながら質問した。

「あ、はい。俺ですけど」

一夏の返事を聞き、その姿を認めると、女性は手に持っていたサングラスを開いた胸元の谷間に預けて歩み寄る。

一夏のそばまで行き、腰を折ってその顔を覗き込んだ。

「君がそうなんだ。へえ」

「あ、あの。あなたは……？」

「私はナターシャ・ファイルス。……〔銀の福音〕シルバリオ・ゴスベルの操縦者よ」

「え——」

他の生徒たちに聞こえないよう小声で呟かれた言葉に、一夏が硬直する。そんな一夏の顔を面白そうに眺めて、ナターシャは小さく笑った。

「ふふ……戦ってる時はあんなに凛々しかったのに。やっぱり、まだ男の子なのね」

「は……？ え、あの……」

「一言、お礼を言いに来たの。……ありがとう、白いナイトさん」

友人たちや千冬、真耶とも違う「大人の女性」。その雰囲気にあてられ、一夏はしばし呆然とする。

「じゃあ、またね」

その隙に離脱を図るナターシャ。

ひらひらと手を振りながら立ち去ろうとして——

——一人の少女と、目が合った。

「……あなたは……」

「……………」

生気のない、死んだ魚のような眼。

昨日見た眼と、似ているようでまるで違う眼。

その数時間前に見た眼と、あまりにも違いすぎる眼。

「……………めんなさい」

「……………」

「私に、こんなことを言う資格はないけれど。……無理をしてはダメよ」

「……………」

心からの謝罪と、心からの言葉。

それに対し、少女——真改は、なんの反応も示さなかった。

……お、来た来た。

ふむ、学年別トーナメントの時に白式と繋いだ回線は、役に立って
るみたいだね。

……ほうほう、これはこれは。やっぱり、そうだったか。

まあ、名前からしてそうだろうとは思ってたけどねえ、「白騎士^{しろきし}」と
「白式^{しろしき}」だし。

なるほどなるほど、さすがは篠ノ之博士、悪巧みまで超一流みたい
だねえ。まあ、どうでもいいけど。

……ふむん、白式第二形態、「雪花」か。隼月が井上君の記憶からダ
ウンロードして、白式に教えたいだけ……。

こんなの、いつ、どこで見たんだろうねえ、井上君は。隼月も井上
君の記憶は見せてくれないし。井上君のプライベートも見せてくれ
ないし。

本当に主思いというか、堅物なんだから。

まあ、それもどうでもいいか。

……さてさて、井上君はまだ、本調子じゃないみたいだねえ。困っ
たな、このままじゃいいデータが取れなさそうだ。どうしたものか。

ん？ ……うふふ、なるほど、これは面白い。目の付けどころが良
いねえ、隼月。

ようし、それじゃあ、彼女にちよっと手伝ってもらおうかな——

外伝3 桜色の微笑み

ピピピピッピピピッピピッ——

「……………んあ……………あと五分……………」

毎朝律儀に己の役目を果たす目覚まし時計に、無意味かつお約束なお願いをする。

けど仕方ないと思う。昨日も遅くまで受験勉強をしていたのだから、休みの日にちよつと寝過ぎすくらいは許して欲しい。

というわけで、枕元の目覚まし時計に手を伸ばしアラームを解除。いざ行かん、安らかなる夢の世界へ!!

「さっさと起きろ、馬鹿野郎」

ズドムツ!!

「ぐぶおうつ!!?」

覚醒仕掛けた意識をもう一度手放そうとした俺の鳩尾に、容赦の欠片もない鉄拳が落とされる。

ぐはっ、息が……………! もう一度どこるか永遠の眠りにつきそうなくらいのダメージがっ!

「いい御身分だな、受験生。よほど余裕があると見える」

「ぐおおお……………この的確かつ強烈な一撃、スミカか……………」

鳩尾を押さええながら顔を上げると、そこには仁王のように俺を見下ろす、燃えるような赤いショートヘアの見慣れた少女がいた。

「帰って来てたのか……………」

「今朝な。出迎えても何も無いから一言文句を言ってやろうと思って来てみれば、まだ寝ていたとは」

「ぎげんな、まだ六時だぞ……………」

「そうだな、さあ朝飯を作れ。長旅で腹が減っている」

「暴君め……………」

無遠慮の極みなコイツは、霞スミカ。

俺とは随分長い付き合いの所謂幼なじみなのだが、スミカは日本にいないことが多いので、こうして会うのは三ヶ月ぶりくらいだ。

「仕事はもういいのか?」

「金と権力にしか興味の無い爺どもの相手はうんざりだからな。さつさと終わらせてきた」

仕事というのは、世界最強の兵器、ISの実験や研究だ。スミカはイタリアでISのパイロットをしているのだ。

「そうか。お疲れさん」

「その通り、私は疲れている。分かったら飯を作れ、手早くな」

「へいへい。……くああ……」

あくびをしながら起き上がり、厨房に向かう。冷蔵庫を開けると中身を確認。

……卵がある。スクランブルエッグでも作るか。ベーコンもある。焼くか。あ、レタスだ。サラダにしよう。あれ、パンとチーズが残ってる。トーストだな。グレープフルーツか。絞ってジュースに――

「ふむ、美味かった」

「……食いやがった。作りすぎたと思ってたのに」

これだけ食ってなんで太らないんだ、こいつは。

「さて、それでは私は寝させてもらおうぞ」

「はあ？ 朝だぞ？ 俺を起こしといて自分は寝るのかよ」

「時差を考えろ。私はさつきまでイタリアにいたんだ。向こうは今真夜中だぞ」

「ああ、そうか。そーいやそうだな」

「というわけで、昼まで休ませてもらうぞ」

「ああ、お休み」

「襲うなよ？」

「……そこまで命知らずじゃねえよ……」

中学二年の時、スミカにしつこく交際を迫った先輩がいたのだが、彼は語るのもおぞましいほどに悲惨な目に遭ったのである。

それからというもの、スミカに声を掛ける男は激減した。俺の通う中学では知らぬ者のいない話である。

「ふん、意気地なしめ」

そう言って、何故か俺の部屋のベッドに寝に行くスミカ。

……寝るなら千冬姉のベッドで寝ろよ。匂いが移ったら俺が寝ら

れなくなるだろ。

「まあ、起きたら勉強くらいは見てやろう」

「頼むぜ。いくらやつても不安でさ」

スミカは勉強もスポーツも常にトップというトンドンデモ人間なのだ。性格がキツ過ぎるのと家事がまるでダメなのが玉に瑕だが。

……こいつがいると千冬姉が二人いるみたいを感じるのは俺だけでないはず。

「私が起きるまで起こすなよ。起こしたら、お仕置きだ」

「分かってるよ、お姫様」

そうして、スミカはベッドに入った。

静かな寝息が聞こえる部屋で机に向かい、俺は高校受験の勉強を始めたのだった。

「……まさか会場を間違えるとはな。なんのための受験勉強だ、馬鹿馬鹿しい」

「……返す言葉もありません……」

結論から言うと、俺は高校には入学できた。それも目指していた藍越学園よりも遥かにレベルの高い、IS学園に。

なら何も問題ないじゃん、むしろ良かったじゃん、と思うのは早計に過ぎる。

なぜならば、IS学園とは文字通りISについて学ぶ学園であり、ISとは世界最強にして女性にしか扱えない兵器なのだ。

……つまりこの学園の生徒は俺以外全員女。俺はどういうわけかISを起動出来てしまい、世界で唯一男でISが使える存在として、半ば以上無理矢理ここに入学させられたのである。

当然、入試の成績などどうとも思われていない。俺は学生というよりも、ただの研究対象でしかないのだから。俺の勉強に付き合ってくれたスミカが怒るのも無理はない。

「……なあ、スミカ」

「なんだ、馬鹿。どうかしたか、馬鹿者。何か言いたいことでもあるのか、馬鹿野郎」

「……そろそろ心が折れそうなんだが……」

「へし折ってやろうか？」

「遠慮させていただきます」

マジでやりかねん、こいつなら……。

そんな遣り取りをしていると、なにやら鮮やかな金色が目に入った。

「ちよつと、よろしいかしら？」

「ん？」

見ると、金髪を縦ロールにした見るからにお嬢様って感じの女の子がいた。

「ちよつと、聞いてますの？ お返事は？」

「へ？ ああ、聞いてるよ。なんか用か？」

「まあ！ なんですの？ そのお返事は！ このわたくしに話しかけられたのですから、相応の態度というものがあるのではなくて？」

うへえ……。苦手だ、こういう子。

ISが世に出てからというもの、世界は急速に女尊男卑になった。

ISは既存の兵器がガラクタに見えるほどの性能により世界のパワーバランスそのものとなっており、そのISを動かせるのが女性だけだからだ。

つまりISを動かせる女こそが強く、男は精々女の小間使いくらいに考える人が増えてきているのだ。

しかし俺はそんな考えが嫌いである。

だって、考えてもみてほしい。いくらISを動かせるのが女性だけだと言っても、全ての女性がISを動かせるわけではないし、そもそもISは世界に467機しかないのだ。男の体力はまだまだ必要はない。

引越しのバイトとかキツイぞ？ ISでダンボール箱運ぶのか？

「……おい一夏、友人は選べよ」

「なっ!? なんですよ、あなた! 失礼ではありませんこと? わたくし、この方とは知り合いですらありませんわ!」

「……そこかよ」

ツツコミどころが違う。

「……気分を害したってんなら、謝るよ。けど俺、君が誰だか知らないし」

「まあ! わたくしを知らない? このイギリス代表候補生にして入試次席の、セシリア・オルコットを?」

「……ん? 代表候補生? なんか聞き覚えが……」

「スミカもそうじゃなかったっけ?」

「去年まではな」

「あら、成績不振で解任されたのかしら?」

「ほう? それが入試主席に対する口の聞き方か?」

「な、主席……!?! それではあなたが、わたくしの他に唯一、教官に勝ったという……?」

スミカの言葉になにやら打ちのめされた様子のオルコット嬢。

ていうか入試主席か。相変わらずトンデモねえな。

「流石は代表候補生、次席でそこまで天狗になれるとはな、恐れ入る」
「な、な、な……!」

「ああ、そうか。だから次席止まりなのか。気付かなくてすまなかったな、入試次席のセシリア・オルコット」

「う、うううう……!」

「……そこらへんで許してやれよ、泣きそうだぞ」

入学早々やりすぎだ。そんなんじや友達できないぞ。

「俺に用があつたんじやなかったのか?」

「そ、そう! そうですわ! あなた、ISに関しては初心者なんですよ? わたくしがISについて教えて差し上げてもよくつてよ?」

「随分と優しいんだな、入試次席は。だが安心しろ、こいつには私が教える。次席の手を煩わせるまでもない」

「ああ、もう! さつきから次席次席とつ! わかりました、わたくし

が悪かったのですわっ！」

「それでいい。これからも身の程を弁えろよ、オルコット」

「く……！・ 覚えてらっしゃい、いつか必ず、見返して差し上げますわ……！」

お嬢様言葉で三下みたいなセリフを吐きながら去って行くセシリア。

……スミカに喧嘩を売ったのが悪いんだ、端っから勝ち目なんてないんだから。

「相変わらず、トラブルには事欠かないヤツだな」

「そのトラブルを加速させるヤツに言われたかねえよ……」

スミカは気に食わなければ誰に対しても喧嘩を売るし、誰からの喧嘩でも買う。

それは俺の姉にして元世界最強である千冬姉が相手でも変わらない。何度我が家が戦場になったことか。

つまりはスミカとやり合うには、千冬姉くらいの実力と精神力が必要なのだ。

……世界最強と互角って、どんだけだよ。

「納得行きませんわっ！」

バーンッ！ と机を叩いて立ち上がったのは、何を隠そうセシリア・オルコット。

彼女が何について憤っているのかと言うと、現在クラス代表なるものを決めるための話し合いが行われているのだが、物珍しさから俺が推薦されたのである。

プライドと自信に満ち溢れたセシリアは自分がクラス代表に相応しいと信じて疑わないようで、そのセシリアを差し置いて俺が推薦されたことが気に食わないのだ。

「クラス代表は、その名の通りクラスで最も優秀な者が務めるべきです！ そしてそれは、このイギリス代表候補生、セシリア・オルコット

トを置いて他にありませんわ！」

……熱の籠もった演説ご苦労様だが、やめといた方がいいと思うな……。

「学ばないな、入試次席」

ゆらり、と立ち上がる女子が一名。誰かは言うまでもない。

「せっかくだ、私も代表に立候補させてもらう」

「な……!?!」

「クラス代表はクラスで最も優秀な者になるべきなんだろう？　ここはIS学園、能力の優劣もISで決まる。ひとつ勝負といこうじゃないか」

「く……!!　いいでしょう、受けて立ちます！　決闘ですわ！」

「よし、決まりだ。場所は——」

「待て、馬鹿者。勝手に話を進めるな」

どンドンヒートアップしていく二人に、千冬姉が待ったをかける。その顔は呆れと怒りに満ちていた。

「霞、お前にはクラス代表は任せられん」

「……ほう？　どういうことだ？」

「クラス代表は他のクラス代表や生徒会との会議にも出席する。お前のような狂犬には務まらん」

「……言ってくれるじゃないか」

二人の間で、バチバチと火花が散る。

……また喧嘩か。いい加減にしてくれ、もう何年目だよ。巻き込まれる方の身にもなってみてくれよ。

見ろ、教室中の女の子が怯えているじゃないか。俺と違って慣れないんだから。

「……いいだろう。なら私は、決闘の代理を立てるとしよう」
「なに？」

スミカの言葉に千冬姉が怪訝そうな顔をする。

そしてスミカの首がぐりんと回り、バツチリ俺と目が合った。

「一夏、殺れ」

「おい!?　なんか今発音がえらい物騒だったぞ!?!」

「構わん、殺れ」

「構うよ！ 構うに決まってるだろっ！」

「ちっ、意気地なしめ……」

「意気地とかそういう問題じゃねえし！」

「どういうことですか!? そんな素人がわたくしの決闘の相手ですって!?」

「私の弟子みたいなものだ。そこそこ戦えるだろうさ」

「いや、ISのこととか全然教わってないし！」

「あれほど稽古をつけてやっただろう」

「あれはただの虐待だっ!!」

そこまで言うのと、スミカの肩がギュインと跳ね上がった。

「ほう……? □答えか？」

「ひい……!?!」

睨みつけ+ドスの利いた声に震え上がる。

ま、まずい、俺の身に染み付いた恐怖が……!」

「決まりだな。私の代理として、織斑一夏がセシリア・オルコットと決闘する」

「……その場合、仮に織斑が勝ったとしてもお前はクラス代表にはなれんぞ」

「構わないさ。その女の鼻をへし折ってやりたいだけだからな」

「……うわあ……」

理不尽極まるその動機に、クラスメイト総どん引き。加えて千冬姉に対する物言いから、スミカに逆らってはいけないと思っただけは明白だった。

……スミカに友達、できるかなあ……。

……無理そうだなあ……。

結論から言おう。

負けました。

「……………よくまあ、恥をかかせてくれたな」

「自業自得だろうがっ!!」

理不尽だ。理不尽すぎる。

「あの程度の相手に勝てないとは。見込み違いだったか」

「俺は今回初めてのバトルだぞ?! 代表候補生に勝てるわけないだろうが!」

「そんな弱気だから勝てないんだ」

「精神論でなんでも解決すると思うなよ……………」

「ていうかお前精神論者じゃねえだろ。こんな時だけ都合良く持ち出すんじゃないよ。」

「とにかく、特訓だな。これから毎日鍛えてやる」

「ま、待て、スミカ。一夏は接近戦主体だ。コーチには私の方が適している」

そこでもう一人の幼なじみ、篠ノ之箒の援護射撃。

頑張れ箒、お前の特訓も厳しいが、スミカのよりは遥かにマシだ

……………!

「そういうことは私に勝ってから言え」

「お、お前は専用機持ちだろう! 私は訓練機だぞ!」

「生身でも構わんぞ」

「ぐっ?! ……ぐぬぬ……………」

撃沈。秒殺。嗚呼、無念。

「…………まあ、お前にも手伝ってもらおうか」

「そ、そうだろう! 教え役は多い方がいいからな!」

ダメだ、完全にスミカの手の上だ。

きつと面倒くさいことばっか押し付ける気なんだ……………!

「一夏」

「な…………なんだよ」

「まずい、考えを悟られたか……………」

「強くなれ。お前の答えを、成就するために」

「……………」

「…………さて、流石に今日は疲れたろう。特訓は明日からだ」

……珍しい、スミカならスパルタ根性で今日から特訓だろうと思っ
てたのに。

そうして、スミカは去って行く。

アリーナのピットを出る直前、

「……お前は、歪むなよ」

何か、言っていたように聞こえた。

なんて言ったのかは、分からなかったけれど。

「その情報、古いよ」

それはクラス対抗戦の話題で盛り上がっていた時のこと。

突然の来訪者は俺の三人目の幼なじみ、凰鈴音だった。

ちなみに鈴が古いと言った情報とは、クラス対抗戦に出場する専用
機持ちが俺以外には一人しかいないというものである。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったから。そう簡単には優勝で
きないわよ」

そう言って、不敵に笑う鈴。と思ったら、その顔がさーっと青く
なった。

……背後に気配、いや、威圧を感じるな。

「久し振りだな、鈴」

「げえ、スミカ！」

「再会をそこまで喜んでもらえるとはな。私も嬉しい」

「お前にはあれが喜んでるように見えるのか」

病院行け。眼科でも耳鼻科でもない、精神科だ。

「迂闊、そーいやアンタ、イタリアの代表候補生だったわね……！」

「今は違うがな」

「え？ そうなの？ 一体どうしたのよ」

「それはまた今度話してやろう。今は後ろを向くといい」

「はあ？ 何言って——」

鈴が振り向くと、そこには出席簿を振り上げた千冬姉の姿が。

Bannon!

「もうSHRの始まる時間だ。自分の教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ」

千冬姉にギロリと睨まれて、鈴は逃げて行った。

……かわいそうに、まさに前門の虎、後門の狼だった。狼が逃がしてくれたけど。

「面白くなってきたな。幼なじみ対決か」

「お前も早く席に着け。それに、まだ織斑と凰が戦うと決まったわけではない」

「お互い勝ち残れば戦うことになる」

……期待が重い。なにが重いつて、期待を裏切った時のお仕置きが恐すぎる。

……訓練、頑張るか。

結論から言おう。

クラス対抗戦は邪魔が入り、鈴との決着は着かなかった。

邪魔した無人機と思われるISはどうか撃破したものの、俺は全身が打撲やら筋肉痛やらで今はベッドの上だ。痛え。超痛え。だというのに。

「いい様だな」

「この上心まで抉ろうというのか……」

思わず声に出るくらいのだSっぷり。流石である。

「他にやりようがあったらどう」

「うっせえ、他に思いつかなかつたんだよ……」

「お前の武装は剣だけだ。まずは間合いに入らなければ話にならない。剣の稽古よりも、まずは機動を身に付けろ」

「ああ、身に染みて分かったぜ……」

相手に近づくことから出来てなかったからな。剣技云々以前の間

題だ。

「……いい様だな」

「まだ言うか。勘弁してくれよ……」

「……ふん。だがまあ、最後の一撃は、格好良かったぞ。少しだけ、見直してやるか」

「……………」

……参ったなあ。飴と鞭じゃないが、たまにこういうこと言われちまうと、キツイ特訓も頑張れちまうんだよなあ……。

「じゃあ、もう寝ろ。ちゃんと体を休めろよ。治り次第、また特訓だ」

「りよーかい。……また頼むぜ、師匠」

「これからはもつと厳しく行くぞ」

「……ほどほどに頼むぜ、師匠」

……いや、ホントにほどほどに頼む。頼むから。

「……貴様は」

「久し振りだな、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「……知り合いか？ スミカ」

「まあな」

ある日、転校生がやって来た。

しかも二人同時。

しかも片方は男。

当然クラスは二人目の男子生徒に視線が釘付けなんだが、スミカだけはもう一人の転校生、小柄で左目に眼帯をした銀髪の女の子を見ていた。

しかもその銀髪の子もスミカを知っているようだった。

「……スミカ？ 偽名か？」

「お前が知っている方の名が偽名だ」

「偽名？ スミカ、向こうじゃ偽名使ってたのか？」

「実名を出すと、日本に戻って来た時に色々面倒になりそうだからな」

「……そんな理由かよ」

しかも本気っぽい。

偽名名乗る方が面倒になりそうだけどなあ……。

「……ふん。ちようどいい、お前への借りを返させてもらう」

「お前に何かを貸した覚えはないんだが」

「ぬかせ。教官への侮辱、忘れたとは言わせんぞ」

「教官？ 誰のことだ？ それに私は、誰かを侮辱したことなどないぞ」

「嘘吐け」

「……一夏、あとでお仕置きだ」

バカな、絶対に聴こえないように言ったのに!!

「……貴様もだ」

「へ？ 俺？」

「私は認めない。貴様如きが教官の弟であるなどと、認めるものか」

「また何かやらかしたのか。私を巻き込むなよ」

「そのセリフ、そっくりそのまま返させてもらうぜ」

俺より先にお前がなんか言われてたろうが。

それは、俺がみんなと放課後の訓練をしている時のことだった。

「!? ね、ねえ、アレってもしかして……」

「まさか、ドイツの第三世代型……!?!」

「完成していたというの……!?!」

周囲の囁きが聴こえたのでアリーナの入口を見ると、黒いISを展開した、例の銀髪眼帯の転校生がいた。

「さて、私は帰らせてもらう」

「逃げんな」

面倒を押し付ける気満々なスマカを捕まえる。

ものすごい目で睨まれたが、以外なことに転校生——ラウラ・ボーデヴィツヒからの援護射撃があった。

「セレン・ヘイズ。私と戦え」

「……………」

……セレン・ヘイズ？　それがスミカの偽名か？

……あれ？　その名前、なんか聞いたことある気が……。

「セ、セレン・ヘイズ!?　あの、世界最年少国家代表の!?!」

「……………」

もう一人の転校生、世界で二人目の男のIS操縦者、シャルル・デュノアの言葉。

……え？　国家代表？　代表候補生じゃなくて？

「…………あー!!　どっかで聞いたことあると思えば、ニュースでやってた！　十四歳で国家代表になったやつがいるって!」

それがスミカだったってことか。

……冗談だろ。とんでもないヤツだと知ってはいたが、これほどとは。

「なぜ私が戦わなくてはならん」

「言ったはずだ。貴様は教官を侮辱した、絶対に許さんと」

「教官で、千冬姉のことだよな?」

「そうらしいな」

「……………いつものことじゃん」

「いつものことなんだが、それがアレには気に食わないらしい」

スミカと千冬姉の喧嘩なんていつものことだし、その際二人ともすごい悪口を言い合うが、どちらも本気で言ってるわけではない。

俺はじゃれ合いみたいなものだと思ってるんだが。確実に酷い目に遭わされるので、絶対に言わないけど。

「何度も負かしてやったろう。まだ負け足りないのか?」

「ふん、私がいつまでも弱いままだと思うなよ」

「それでも、私に勝てるほどとは思えんな」

「……………ならば、試して——!?!」

ラウラが先手必勝と言わんばかりに、肩に装着されたレールカノンをスミカに向けた瞬間。

ラウラの額に、スミカの持つレールガンが突き付けられていた。

「は、速い……！」

「やれやれ、口ほどにもないな。まるで成長していない」

「くっ……！」

心底馬鹿にしたような口調で言うスミカに、ラウラが悔しげに歯噛みする。

二人の間にある力の差は歴然だった。

「今日は勘弁してやる。次は初撃をかわせるくらいにはなってから来い」

「貴様あ……！」

ラウラから銃口を逸らし、スミカはこれで終わりとしても言うようにくるりと背を向ける。

それは油断などではなく、背中から撃たれてもどうとでもなるという、絶対的な自信の顕れだった。

「まったく。あの馬鹿のせいで、私の正体が知られてしまった」

「……そうか、それで去年までは候補生だったって言ったのか」

「去年からは代表になったからな」

衝撃の新事実みんなが啞然としている中、スミカはセシリアに目を向ける。

「良かったな、セシリア。あの時あのまま戦っていたら、恥をかいていたぞ」

「……もう十分かかされましたわ……」

がつくりとうなだれるセシリア。

それはそうだろう、国家代表ということとは、既にISの世界大会、モンド・グロツソに出場できるだけの実力を有しているということなのだから。あくまでその候補の一人に過ぎないセシリアとは、天と地ほどの実力差があるだろう。

「……まったく、面倒なことになりそうだ」

しかしスミカはそんなことはまるで気にした様子はなく、ただこれから起きるだろう波乱に面倒そうな顔をしていた。

結論から言おう。

面倒なことになった。

昨日のアーリーナにいた生徒がラウラの言葉を聞いており、そこからスミカの正体があつという間に学園中に広まったのである。

「ええっ!? 霞さんが、セレン・ヘイズ!？」

「た、確かに、セレン・ヘイズを日本語にすると、霞スミカになるよね……」

「世界最年少国家代表……こんな大物がすぐそばにいたなんて……!」

「サインもらいに行こうっ!」

「あ、私も行く!」

「抜け駆けは許さないわよっ!」

「……あの子兔、やはり先手を打ってぶち殺しておくべきだったな……」

「そういうことは思っても口に出すんじゃないよ」

千冬姉に対するのと同じようなテンションで躍り掛かってきた女子たちを千切っては投げ千切っては投げ、スミカはようやく一息ついた。

今では誰も近づけないように、全身から怒りのオーラを放っている。

「……しかし、この私が国家代表とはな。皮肉なものだ」

「? なんのことだ?」

「独り言だ、気にするな」

そうは言うが、そんなことなく寂しそうな顔をされれば気になるのは仕方ないと思う。

スミカのそんな顔は、初めて見たから。

「……まあ、バレてしまったのなら仕方ない。面倒だが、売られた喧嘩は買ってやる」

「あの子らは別に喧嘩売ってるわけじゃないと思うけどな……」

ていうかスミカに喧嘩売るような勇者は、この学園にはもうほとんど残っていない。上級生の中にさえも。

「奴には学年別トーナメントで灸を据えてやるとするか」

「……ほどほどにな。これ以上十代女子にトラウマを植え付けるなよ」

「ふん、精神が軟弱なんだ」

「お前の鋼鉄製精神と比べるな」

いつも通りの軽口。

どうせまた、凶暴な言葉が返ってくるだろうと、思っていたのに。

スミカの様子に気になって、いつものスミカに戻って欲しくて、わざとそう言ったのに。

「……たとえそうだとしても。その鋼鉄には、亀裂が入っているだろうさ」

「……スミカ……？」

泣きそうな顔で、痛みを堪えるような声で。

スミカは、そう答えた。

そうして、学年別トーナメント。
今年はどういうわけかタッグ戦になり、俺のパートナーはスミカである。

……このペアが決まるまでに何度か惨劇があったのだが、あまりにも惨たらしいモノだったので割愛する。

「……今日こそ、貴様を倒す。貴様など教官の足下にも及ばないことを、この私が証明してやる」

「懲りない奴だな、ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前では私には勝てんと、いい加減分かりそうなものだが」

対戦相手はラウラと箒ペア。ラウラはスミカしか視界に入れていないので、俺は箒と戦うことになるだろう。

……ぶつちやけスミカなら二対一でも余裕っぽいけど、そこはアレ

だ、俺にも意地つてもんがある。

「あつちはあつちで盛り上がり上がつてるみたいだし、お前の相手は俺だぜ、箒」

「望むところだ。全力で行くぞ、一夏」

こっちは接近戦特化型の専用機の白式、箒は訓練機の打鉄だ。かなり大きなハンデだが、箒はそれで手を抜けるほど甘い相手ではないし、それで喜ぶような温い根性をしていない。

——やるからには、全力だ。

「貴様のその機体。それも、完膚無きまでに破壊してやる」

「なんだ、物にあたるのか？ お子様だな」

ラウラの殺気の籠もった視線もまるで効いた様子もなく、馬鹿にしたような口調で話すスミカ。

それを受け、ますますラウラの殺気が強まっていく。

「気に入らん。その名前も、その色も。教官を侮辱しておきながら、教官を模倣するその根性が」

「——ほう」

スミカの気配が変わる。

さつきまでの面倒そうな気配は完全に消え、代わりに凄まじい怒気を放っていた。

「模倣だと？ この私が？」

「模倣だろう、どう見ても。」

……偽物め。貴様はこのラウラ・ボーデヴィツヒと、「シユヴァルツエア・レーゲン」が倒す」

「……いいだろう、相手をしてやる。かかって来いよ、子鬼。この私を偽物と言ったこと、後悔させてやろう。」

——この霞スミカと、「シリエジオ」がな」

スミカが身に纏う、桜色の装甲。

千冬姉がかつて使っていたIS、「暮桜」と同じ色と名前の機体。

だがそれは、決して千冬姉を真似してのモノではない。スミカほど自我の強い奴が、自分の専用機で誰かの真似などする筈がない。

俺は知らないけれど、そこには何か、譲れないモノがあるのだろう。

それを模倣と言われれば、スミカが黙っている筈がない。
両手に持つレールガンを真つ直ぐにラウラに向け、烈火の如き戦意を滾らせて、スミカは宣戦布告をした。

……当たらない。

当たらない、当たらない、当たらない——！

「口ほどにもないな、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「おのれっ……い！」

レールカノンも、ワイヤーブレードも、不可視の筈の停止結界も、何一つ当たらない。

セレン・ヘイズはあえてワイヤーブレードの届く距離で戦っているというのに、どうしても当たらない。

この女は自らの力を見せ付けるように、今も私の猛攻を、涼しい顔で避けている——！

「そら、私はただ避けるだけの的ではないぞ」

「ぐあっ……い！」

反撃に一発。

セレン・ヘイズのレールガンが電磁の煌めきを放ち、超高速の弾丸が私の額を撃ち抜く。

ロックオンの警告と同時の攻撃。まるで速撃クイック・ドローちのように、銃を構える前に、既に照準を終えている。

「この程度もかわせんか。それで良く私を倒すなどと言えたものだ」
「ぐううう……い！」

散発的に攻撃が繰り返される。レールガンの出力を絞っているのか、ダメージは大したことはない。

だが一発たりとも外すことなく、全ての弾丸が正確に私の額を小突いてくる。

この女は、こう言っているのだ。

お前など、その気になれば次の瞬間には倒せると——！

「おおおおおっ!!」

「おっと、危ない」

言葉とは裏腹に私の一斉攻撃をひらりとかわし、また一発、銃弾が撃ち込まれた。

……完全に、遊ばれている。

「ぬうう……!」

怒りと悔しさと不甲斐なさが溢れる。

私はセレン・ヘイズを、教官を侮辱したこの女を倒すために、力を求めたのに――!

「やはり成長していないな、ラウラ・ボーデヴィツヒ。少しは期待していたのだが。……終わらせるか」

レールガンの煌めきが増す。両手から交互に発砲され、私の額を連続して撃ち抜く。着弾の衝撃に上体が大きく仰け反り、攻撃もままならない。

見る見るうちにシールドエネルギーが減っていき、瞬く間に危険域に入った。

(力が……力が、欲しい……!!)

この女を倒す。

そのためだけに、一層訓練に明け暮れて来た。

その全てが無駄だったなど、認めるものか。

(……力を……)

必ず、倒す。

そのためならば、何であろうとくれてやる。

だから。

この女を、倒すために。

(力を……寄越せ――!)

「……う……あ……」

「目が覚めたか、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

全身の痛みと共に目覚めると、枕元にあの女がいた。

「……何をしに来た」

「お前の無様を笑いに」

「……………」

……本当に、気に入らない女だ。

「自分が何故そんな状態になっているか、分かるか？」

「……………」

「ヴァルキリー・トレース・システム。名前くらい知っているだろう？」

それがお前の機体に組み込まれていた」

ヴァルキリー・トレース・システム。

文字通り、歴代のモンド・グロツソ部門優勝者たちの動きを模倣す

るシステムで、研究・開発の一切が禁止されている代物だ。

「一目見て分かったぞ。あれは千冬の動きだった」

「……………」

「私を模倣だの偽物だのと言っていたクセに、お前自身がそうだとはな。これを無様と言わずになんと言おう」

「……………」

……悔しいが、この女の言うとおりだ。

私は、教官のようになりたかった。

そして、嫉妬した。

教官のように、強く在り続けるこの女に。

「……………何故だ」

「うん？」

「何故、お前は強い」

「……………ふん」

思わず漏れた私の問いを、馬鹿にしたように鼻で笑う。

その眼が言っていた。

——お前は何を言っているんだ、と。

「お前は何を言っているんだ」

「……………」

……口でも言いやがった……。

「私は強くなごない。ただお前が弱いだけだ」

「なに……？」

強くないだと？ この女が？

「強くなごない。強ければ、あんなことにはならなかつた。……私も、アイツも」

「アイツ……？」

「絶対的に強い人間などいない。人は皆、それぞれの弱さを抱えている。問題は、それとどう向き合うかだ」

「……弱さ……」

では、私の弱さとはなんだ？

「そんなモノは自分で考えろ。自分の答えを他人に求めるな」

「……確かに、な」

私の弱さを誰かに教えられたとしても、それでは意味がない。

私が自分で、見つけなければ。

「では、お前の弱さとは？ お前はどうかやって、それと向き合っている？」

「……向き合つてなどいないさ」

「……なに？」

「自分の弱さと向き合うことこそが、強さへの第一歩だ。言つただろう、私は強くなごないと」

「……」

「私は私の弱さを知っている。その点では、お前よりも強い。だが私は、私の弱さからずっと逃げ続けている。その点では——お前と、比べるまでもないほどに、救いようがない」

「……」

そう話すセレン・ヘイズの顔は、ひどく辛そうで、苦しそうで、悲しそうで。

その声は、今にも泣き出してしまういそうなほどに、震えていた。

「……ずっと、逃げ続けている。アイツから、自分の罪から、ずっと」

「……」

「……強くなごない。私はただ、私を知っているだけだ」

その姿は、この上なく弱かった。

あんなに強かった、セレン・ヘイズが。

「……だがまあ、弱さを知る者として、一つ助言をくれてやる」

「……なんだ」

「他人の模倣など出来はしない。人は誰しもがオリジナルだ。お前も、お前の「答」を見つけるといい」

「私のように、なる前にな」

「ふう……」

学年別トーナメントで起きた事件も終わり、その夜、俺は寮のラウンジで一息ついていた。

体は疲れているのに、どうにも眠れないのだ。

消灯時間は過ぎているので、ラウンジには俺以外誰もいない。自販機で買ったジュースをちびちび煽りつつ、何をするでもなくぼーっとしていた。

「まだ起きていたのか」

「……スミカ」

そんな時、俺の幼なじみ兼師匠がやってきた。

自販機で水を買って、俺の隣に座る。

「どうにも眠れなくてさ。スミカこそ、なんでまだ起きてるんだ？」

「少々嫌なことを思い出した。このまま眠ると、夢に見そうなんだな」
そう言うスミカは、嫌なというよりは悲しそうな顔をしていた。

気になって、質問してみる。

「嫌なこと？ イタリアでなんかあったのか？」

スミカはイタリアでのことはあまり話さない。

だから俺は、スミカと出会ってから半分以上の時間、彼女がなにを
していたのかを知らない。

「……気にかけていたヤツがいてな」

「……………」

……過去形、か。

「素直で、純朴で、才能があった。……天才、だったよ。それでいて努力を怠らなかつたから、あつという間に強くなった」

「アイツを鍛えるのは楽しかった。私に付いて来る姿が可愛かった。私を超えた時は……この上なく、嬉しかった」

「アイツが目標を持ち始め、それに向かって走り出し、私もそれに付き合った。

……アイツの目標が、私の目標になった。アイツが私の夢になった」

「だがアイツは、いつの間にか、歪んでしまった。いつ歪んでしまったのか、私はまったく気付かなかつた」

「なんで歪んでしまったのか、今も分からない。……あれほど、アイツのことを見ていたのに」

「アイツを止めようとした。アイツが狂っていく姿を見ていられなかつた。だから、我が身に代えても……殺してでも、止めようとした」

「……だが、止められなかつた」

「今でもアイツは、きつと歪んだままなんだろう。狂い続けているんだろう」

「今でも私は、逃げ続けている。アイツを止められなかつたことから。アイツから」

「向き合おうとしたよ。何度も、何度も」

「だが、出来なかった。アイツのことを考えるだけで、怖くて堪らなくなって、何も出来なくなってしまおう」

「……さつきも、アイツのことを考えていた。そうしたら、眠れなくなってしまった」

「何故だろうな。アイツとはもう、会うこともないというのに。もう二度と、会えないというのに」

「手遅れになってから、気付いてしまった」

「たとえ歪んでしまったとしても。狂ってしまったとしても。私の知るアイツでなくなってしまったとしても」

「私は……アイツと一緒に起きたかった。アイツと一緒に、生きたかった」

「……もう……手遅れなのになあ……」

スミカは座った椅子の背もたれに寄りかかり、天井を見上げる。

それはまるで、溢れる涙を、俺に見られまいとしているかのようで。

「……なんでだろうなあ……あの子兔が千冬を慕う姿が、初めて会った頃のアイツに、重なってしまった」

……正直、スミカの話は漠然としていて、断片的過ぎて、なんのことかは分からない。

だが、「アイツ」という人物が、スミカにとってとても大事な人だということとは分かった。

「……一夏」

「……なんだ」

「お前は……歪むなよ」

「……歪まねーよ。そんな暇もないくらいに、スパルタな師匠に鍛えられてるからな」

「……そうか」

安心したように、スミカが微笑む。

——思えば。スミカのこんな静かな笑顔なんて、初めて見た気がする。

「お前は私のものだ。……そうだろうか?」

「ああ。しっかり鍛えてくれよ、師匠。俺もいつか、お前を超えてみせる。お前が知ってる、俺のままで」

「当然だ。私が見込み、私が鍛えるのだからな」

不敵な口調で、スミカが応える。

俺の知る、霞スミカの口調で。

「私も、強くならねばな。お前を、二人目の〔道^{スト}を外れた者^{イド}〕にしないように」

「これ以上強くなる気か。追い掛ける方の身にもなってくれよ」

「目標は高い方がいいだろう」

「……そうだな。じゃ、もう寝るか。明日からまた、厳しい訓練が待ってるんだろ?」

「当然だ。今まで以上に厳しい訓練だ。目を回すなよ」

……恐ろしい。何が恐ろしいって、スミカが完全にいつもの調子に戻っている。

……俺、死ぬかも。

「では、私もそろそろ寝るとしよう」

「大丈夫か?」

「ダメだな。魔^{マジ}されそうだ」

「……おいおい」

「……だがまあ、そうも言ってもらえん。もういい加減、向き合わなければならん」

スミカはもう一度、天井を見上げる。

そして、静かに言葉を紡いだ。

それは、きつと。

「アイツ」に向けた、言葉なのだろう

「……受け入れるさ。」

——私の、答えを」

第31話 布仏本音の憂鬱

『……ひどい事故だったな』

『バスとトラックが正面衝突……トラックが飛び出してきた犬を避けようとして、ハンドル操作を誤ったらしい』

『救助活動に加わったが……悲惨だったよ。一生夢に見そうだ』

『乗客、バスの運転手、バスガイド、トラックの運転手……五十人も死にしまった。悪人なんざ、一人もいなかったのに』

『それが事故のいやな所だ。被害者ばかりで裁く相手がない。誰に憎しみをぶつけりゃいいんだ』

『可哀想にな、あの子も。これから何を糧に生きてくんだよ』

『……ああ、あの一人だけ無事だった子か』

『両親は死にしまった。親戚もいないらしい。……天涯孤独さ』

『まだ、あんなに小さいのにな……』

『だが、あれだけの事故を生き残ったんだ。不幸中の幸い、まさに奇跡だよ。……あの子は幸運の女神に見捨てられてなんかいない。これからきつと、良いことがあるって信じよう』

『……奇跡なんかじゃねえよ』

『なに?』

『あの子の両親が、あの子を守ったんだ。二人とも、あの子を抱えて死んでたよ。二人の体はグシャグシャに潰れていたのに、あの子には……傷ひとつなかったよ』

『……マジかよ。一瞬のことだったって話だぜ。そんな時間はなかった筈だ』

『……すげえな……親の愛ってやつか』

『ああ。……奇跡なんかじゃねえ。あの子が生き残ったのは、当然の結果だったんだ』

『……なら、なおのこと、あの子には幸せになってもらわなきゃな』

『死んだ両親の分まで、てか。……月並みだがよ』

『信じよう。きつと、幸せになるってな』

『それしか出来ねえってのが、歯痒いところだな』

『それだけじゃないだろ。俺たちは、この事故を絶対に忘れちゃいけない。こんな事故を、ひとつでも減らすぞ』

『ああ。……さて、そうとなりやあまた切符でも切ってくるか。税金泥棒とか言われねえようにな』

『まったくだな。よし、休憩時間は終わりだ。行こうぜ、公僕ども』

『あの子が安心して車に乗れる世の中にするのが、俺たちの仕事だからな』

「……はああ〜〜……」

「最近……元気、ないね……」

私こと更識簪は今、私の幼なじみであり私の専属メイドであり私の数少ない友人である布仏本音と昼食をとっている。

今日は休日なので、食堂にはあまり人がいない。いつもは本音も学園の外へ遊びに行くんだけど、臨海学校から帰ってきてからというものの珍しく落ち込んでいて、寮内をフラフラしていたのだ。

本音が落ち込むなんて本当に珍しいので、気になって食事に誘ったのである。

「何か……あつたの……?」

「ん〜……ちよつとね〜……」

「全然……ちよつとに見えないよ……」

「……はああああ〜〜……」

「……」

……どうしよう、想像以上に落ち込んで……!

「……井上さんのこと……?」

「!」

……当たり前だ。

本音のルームメイトである、井上真改さん。

江戸時代の刀工、それも重要文化財に指定されるほどの大業物を鍛

えた名工と同じ名前ということで、アニメとかが好きな私はちよつと気になっていた。

しかも彼女は有名人だ。

すごく無口で、すごく美人で、すごく強い。

彼女は何度か試合をしていて、その全てで見事な活躍をしている。その活躍によりファンクラブまであるくらいで、彼女を知らない人はこの学園にはほとんどいないだろう。

だから、井上さんの様子がおかしいということも、あつという間に学園中に広まった。

その井上さんととても仲が良い本音は、井上さんの様子に心を痛めているのだろう。

「……鋭いね、かんちゃん……」

「誰でも分かると思う……あとその呼び方やめて……」

本音は普段よりも二割増遅い動きでジューズに手を伸ばす。

ストローをくわえ、ズロロロロ、と行儀悪くジューズをすすり、ベちやりとテーブルに突っ伏す。

……重傷だ、すぐに治療しないと……！

「……いのっち、どうしちやったのかな……」

「……………」

「包帯も巻かせてくれないし、髪も梳かせてくれないし……」

「……そんなことしてんだ……」

「まだ怪我治ってないのに、夜遅くまで走ってるし……」

「……………」

それからしばらく、本音は井上さんの最近の行動を話し続けた。

まとめるところだ。

井上さんは朝早く起きて鍛錬に向かう。右腕はまだ上手く動かないらしく剣の練習はしていないが、その分走り込みや体術の練習をしているとのこと。

昼は普通に授業を受けて、放課後になるとまた訓練。ISの訓練は怪我が治るまで禁止されているので、朝と同じメニューをひたすら繰り返す。

そうして消灯時間ギリギリに部屋に戻りシャワーを浴びると、泥のように眠るのだそうだ。

そんなわけで、本音はここ数日、井上さんとほとんど話していないらしい。話し好き、井上さん大好きな本音には苦痛だろう。

「……いのっち……何があつたのかな……」

「訊いてみれば……いいんじゃない……?」

「訊けないよ……いのっち、辛そうだもん……」

「……………」

「……はあああああああああ……」

肺活量の限界に挑むかのような深い溜め息をつく。

心なしか、着ぐるみみたいなパジャマの耳もしなだれている気がする。

(何か……してあげたいな……)

本音は友達だし、何度もお世話になっている。その本音がこんなに落ち込んでいるのは、私も辛い。

……力になってあげたい。

だから、ちよつとだけ勇気を出してみることにした。

「……ここだよね……」

昼食後、本音と別れた私は寮の裏に来ていた。最近の井上さんはここで鍛錬をしていると聞いたので、少し話を聞いてみようと思ったのだ。

(……いた……)

長い黒髪が靡くのが見え、目的の少女を見つけた。

白いジャージを着た井上さんは体術の訓練をしているようで、何度も蹴りを放っている。

(す……)

長い脚が鞭のようになり、空気の破裂する音がここまで聴こえてくる。

膝から下は全く見えず、一回蹴ったと思えば次の瞬間には二撃目、三撃目の蹴りが放たれていて。

……あんなのが当たったら、一発KOされそうだ。

(姉さんと……どっちが強いかな……)

ふと、そんなことを考えてしまった。ブンブンと頭を振って思考を追い出す。

いけないいけない、万一私がこんな事を考えていただなんて姉さんに知られたら、姉さんは井上さんに勝負を挑むかもしれない。それでは井上さんに迷惑がかかってしまう。

(………よし)

十分くらいかけて覚悟を決め、井上さんに近づいていく。

……大丈夫、井上さんは物静かな人だし、優しいらしいし、きっと大丈夫……。

そんな風に自分を勇気づけて、声をかけた。

「あ……あの……」

「……」

井上さんが動きを止め、ゆっくりと私に振り返る。

そして、目が合った。

(………ひ……！)

黒く、暗い眼。

死んだ魚みみたいな眼。

奈落の底のような眼。

それに真つ直ぐ見据えられて、私は一瞬で呑み込まれてしまった。悲鳴をあげなかったのは、そんな余裕すらなかったただけだ。

(き……聞いてたのと……全然違う……！)

怖い。

足が竦む。

体が硬直する。

呼吸が、心臓が止まりそう。

逆だ、呼吸も鼓動もかなり荒い。

ただ私の脳が、それを認識する能力を失っている――

「ぐ……ぐ……めんなさい……なんでも、ないです……」
「……………」

どうにかそれだけ言って、その場から逃げる。

——惨敗、だった。

(無理だよ……帰って、アニメでもみよう……)

本音には申し訳ないけど、あれは無理だ。会話以前に、目を合わせていられない。

(確か昨日は……「企業戦士アクアビットマン」がやってた筈……録画してあるから、あれを視よう……)

やっぱり、私には無理だったんだ。

今日はアニメを視て心を落ち着けてから、ISの調整に行こう。

「……はあぁ……」

深い溜め息をつきながら、本音はトボトボと寮内をさ迷っていた。

今日は休日だが、外に遊びに行く気分ではない。かといって部屋にいと余計に寂しくなってしまう。

そんなわけで、ここ数日、本音は幽霊のような足取りで寮の中をうろついていたのだった。

「……………いのっち……………」

本音の親友は、様子がおかしい。まるで何かから目を逸らすかのよう
に自らを苛めており、まだ怪我が治っていないのにそんなことを続
けていれば、いつか倒れてしまう。

これ以上真改が傷付く姿を見たくない本音としては、早急になにか
しらの手を講じる必要があるのだが——

(……………どうすればいいんだろ……)

そこが問題である。

真改がどうしてこうなったのか、機密事項も多いのでかなり大ざつ
ばな部分だけだが、一夏たちから聞いていた。

——守れなかったから。

それが、真改のトラウマを刺激したようだった。

(……いのつちは……守りたかったんだね……)

守る。

真改の行動の根幹には、いつもそれがあった。

本音は今まで、それが真改の優しさや思い遣りから来ているものと思っていたが。

(……いのつち……怖かったんだね……)

真改の守るという意志を支えていたのは、恐怖だった。

自らの死など比べようもないほどに、親しい者が傷付くことを恐れていた。

だからいつも、我が身を省みないような行動を、平然と選択してきたのだ。

友達が傷付くくらいなら、自分が死んだ方が、遥かにマシだから。

(……私……いのつちのこと、なーんにも、わかってなかったんだね……)

真改の弱さに、つい最近まで気付かなかった。彼女は強いのだと、ずっと思っていた。

真改の抱える痛みにも、ずっと気付かなかった。

「……友達……なのにな……」

気付けなかった自分が不甲斐ない。

打ち明けてもらえなかったのが辛い。

自分は、真改に、頼りにされていないのだろうか。

「……友達じゃ……ないのかな……」

そう思っているのは、自分だけなのか。ただルームメイトだから、一緒にいる時間が長いだけなのか。

そんな不安が、毒のように本音の心を蝕んでいく。

「……はあ……」

どうすればいいんだろう。

そんなことを考えながら、しかし答えは見つからず、本音はフラフラと歩き続けた。

——すると。

『二年一組、布仏本音さん。お客様がいらしています、総合受付までお願いします。繰り返します。一年一組、布仏本音さん——』

「……………ほえ？」

「第一回井上真改ファンクラブ!! チキチキ、落ち込んでいる井上君を励まそう大会〜!」

「「「「……………」」」」

「……………あれ? ノリが悪いねえ、みんな」

「……………なんでてめえがここにいるんだよ」

IS学園、第二アリーナAピット。

のほほんさんの他にもぞろぞろと集まったいつもの面子。

一体どこから持ち込んだのか高価そうなティーセット一式。
ここから持ち込んだのか高価そうなティーセット一式。

ムカつくくらい優雅な仕草で紅茶に口をつけながらアホなことを大声でほざきやがったのは、言わなくても分かると思うが如月社長である。

「ちゃんと正式な手続きをしてるんだけどねえ」

「そういうことを言ってるじゃねえんだよ」

いつもの調子（と言えるくらいに付き合っていることもムカつく）を崩さない如月社長は、紅茶を飲みながらのほほんさんに目を向ける。

「今日は布仏君に用があってねえ」

「……………私〜?」

「てめえ……………今度はのほほんさんになんかするつもりかよ」

「おや、まるで僕に前科があるかのような言い方だねえ」

「ないとは言わせねえぞ」

ギロリと全員（のほほんさんは除く）が如月社長を睨み付けた。

隴月の稼働試験の時、シンが水月により肩を怪我したことはここに
いる全員が知っている。様々な保護機能により守られているはずの
IS操作者が自らのISの機能によりダメージを受けるといふ、本来
なら有り得ない事態を引き起こしたこの社長は、第一印象最悪なの
だ。

……月船は格好良かったけど。

「いやあ、ちよつと布仏君に手伝ってほしいことがあってねえ」

「手伝ってほしいこと？」

「うん。隴月のデータを見たけど、隴月の調整やら整備やは、布仏君
がやってくれてるみたいだね」

「そうだよ」

「評判いいよ。ウチの社員にも、隴月にも」

「……てひひ」

嬉しそうにはにかむのほほんさん。どうやら如月重工の社員より
も、隴月からの評判がいいことに喜んでるようだった。

ていうか隴月、如月社長と普通に話してるのか。白式は俺に話し掛
けてきたことないぞ。

「それで、本音さんに用事とは？」

セシリアからの質問。ちなみになんで俺たちも集まっているのかと
言うと、俺たちもシンについて相談しようと思っていたのである。

ある意味シンと最も近いのほほんさんにも当然声を掛けようとし
たのだが、ちよつどその時のほほんさんが呼び出され。

はてなんだろう、気になりますわね、見に行こうよ、と言うわけで
総合受付まで行ったところ、この変態が居たのである。

「実は布仏君にお願いがあってねえ」

「お願い〜？」

「ウチが開発した新製品の、テストをして欲しいんだ」

「「「「「……………」」」」」」」

「うん？　なんだね、そんな顔して」

「自分の胸に訊いてみるよ」

こいつ、のほほんさんに何するつもりだ。

「如月重工の新製品なんて、怪しげな匂いがするね……」

「まったくだ。過去のラインナップを見たか？　いずれ劣らぬゲテモノ揃いだぞ」

「ていうかなんでわざわざ社長が来るの？　暇なの？」

「一応、理由はあるらしいが……」

小声でボソボソと話す一同。その悪口が社長に聴こえた様子はない。聴こえても気にしないだろうが。

「……で、どんな製品なのよ？」

「ISの機能を応用した、IS整備用のユニットだよ。隼月と一緒に使えば、整備する側とされる側、両方のデータが取れる。けど整備のためにいちいち井上君を呼び出すのも、ウチの技術者を学園に送るのも非効率的だ。だから布仏君に使ってもらおうと思って」

「……まあ……理屈は通ってる……のか……？」

頭を捻りながら、箒がボヤク。

まあ確かに、隼月の整備はいつものほほんさんがしてるから、のほほんさんに任せるのが一番だと思うが……。

……ん？　待てよ、ということとは……。

「それって、つまり……」

「本音を、マスター専属の整備士として公認する、ということか？」

俺の疑問の声をラウラが引き継ぐ。

それを聞き、社長がニヤリと唇の端を吊り上げた。

「まあ、井上君は仮のテストパイロットだから、正式に、というわけではないけどねえ」

言うまでもなく、それは肯定の言葉だった。

全員が唾然としながら社長を見るが、社長はまるで気にした様子もなく紅茶を飲んでいる。

カップを置き、のほほんさんを見て。

「やってくれるかね？　布仏君」

「……やります。やらせて下さいー!」

「のほほんさん!?! いいのかよ?!」

ほとんど即答だったのほほんさん。

ISの機能を応用しているということは、使用者とシンクロする機能があるかもしれない。

しかしそのユニットはISではないのだから、そのシンクロ機能にどんな不備があるか分からない。

そしてそれは、如月重工製の、未完成の代物なのだ。

ハッキリ言つて、危なすぎる。

俺でもそこまで考えられたんだから、みんなも、当然のほほんさんにも、それは分かっているはず。

せめてどんなモノなのか、もつと詳しく訊いてから返事をした方がいいんじゃないか。

そんな意味を込めて問い掛けたのだが。

「うん。……私はね、おりむー。いのちの力になりたいんだ」

「え……」

「私は、いのちの隣には立てないからね。みんなみたいには、戦えないからね」

「……本音……」

……そんな風に、思つてたのか。

そんな痛みを、抱えてたのか。

ずっと、シンと一緒に戦いたいと、想つてたのか。

「いのちが苦しんでる時、私、なにもできなかった……いのちが戦つてる時、私……見てることも、できなかつたんだよ……」

「私はね、いのちと一緒に戦いたいんだ。けど、みんなみたいに、いのちの隣には、立てないから」

「だから……だからせめて、いのちを守ってくれるように……って、朧月にお願ひしてたんだ」

「そのお願いが、少しでも届くなら」

「私……やるよ」

眠そうな顔で。

間延びした声で。

なのに、溢れんばかりの力が満ちていて。

のほほんさんは如月社長に向けて、深々と頭を下げた。

「お願いします。私に、やらせて下さい」

普段ののほほんさんとは違う様子に、全員が感心したようになっていた。如月社長も満足そうに頷いて、

「ごちうこそ、よろしく頼むよ、布仏君。井上君を支えてあげてほしい」

「頑張りまうす」

マイペース同士通じるモノがあるのか、とりあえず相性は良さそうではある。

しかしそこは如月社長、不安は尽きないので、釘を刺しておかねば。

「のほほんさんになんかあったら、承知しねえぞ」

「約束は出来ないねえ。実験や研究に、事故は付き物なんだから」

「……………」

本当にムカつく野郎だが、しかしこれが、この男なりの誠意なんだろう。

約束は出来ないが、全力は尽くす。

そう言っているのが、薄ら笑いとは不釣り合いな真剣な眼から伝わってきた。

「それでは、準備して待っているよ。次の休日に迎えを寄越すから、我が社に来てくれたまえ」

「わかりました」

「じゃあ話もまとまったし、今日はこれで失礼させてもらうよ」

立ち上がり、ピットから去っていく社長。

……おい、このテーブルとティーセットも持って帰れよ。ていうか

どうやって持って来たんだよ。

「大丈夫か？ 本音」

「大丈夫だよ」

「なんか身の危険を感じたら、すぐに連絡しなさいよ」

「りよ〜か〜い」

「……やっぱり、わたくしも付いていったほうが……」

「せつしーは心配性だなく。大丈夫だよ、多分」

「……不安だなあ……」

みんなが口々にのほほんさんを心配して声をかける。

のほほんさんも大事な仲間だ。

もし彼女になにかあれば、絶対に許さねえからな、社長——

第32話 社会科見学 in 如月重工

『ようこそ。今日からここが、君の家だよ』

『うん？ 父さん、新しい子か？』

『うん。名前は井上真改。今日から私たちの家族になる』

『そっか。俺は国重隆。お兄ちゃんて呼んでいいぞ』

『……井上真改……』

『おう、はじめまして、真改。仲良くしようぜ』

『……応……』

『……なんか暗いなあ。そんなんじゃ、幸せが逃げちまうぞ』

『こら、隆。真改はまだ——』

『わかってるよ。けどいつかやらなきゃならないんだから、今やってもいいだろ』

『……分かった。隆に任せるよ』

『…………』

『いいか、うちのルールは、働かざる者食うべからずだ。まだちっちゃいからって甘えんなよ』

『……応……』

『うん、いい返事だ。よし、じゃあ真改、掃除できるか？』

『……応……』

『洗濯は？』

『……出来る……』

『料理は？』

『……出来ない……』

『あー、さすがにまだ無理か。あ、俺は料理できるぞ。チャーハンとかフレンチトーストとかな』

『…………』

『すごいだろう。練習したんだぜ』

『…………』

『……すごいだろう？』

『……凄い……』

『そうだろう！ 料理は難しいんだぞ。火加減とか塩加減とかな。ちよつと間違っただけで不味くなるんだぞ』

『……………』

『じゃあ真改、お前は掃除係だな。料理もやってもらおうぞ。みんな交代しながらやってるからな』

『……………』

『よし、じゃあ中を案内するぞ。父さん、真改の部屋は？』

『小夜と同じ部屋にしよう。歳も近いし、すぐに仲良くなれるんじゃないかな』

『わかった。じゃあ行くぞ、真改。小夜はお前より年下だけど、ここじゃセンパイだからな、ちゃんとケイイをはらえよ』

『隆、ちゃんと意味分かって言ってる？』

『あ、当たり前だろ！ ちゃんとわかってるよ！』

『じゃあ、漢字で書ける？』

『か、漢字は関係ないだろ！ 正しく使えればいいんだよ！』

『あはは、そうだね。まあ、間違っただけから大丈夫だよ』

『だろ？ 大丈夫だろ？』

『うん、大丈夫大丈夫』

『な、なんだよ、その顔。ニヤニヤすんなよ』

『ニヤニヤなんかしてないよ。ニコニコしてるだけ』

『なんでニコニコしてるんだよ』

『いや、隆はかわいいなあ、て』

『こ、子供扱いすんな！』

『あっはっは』

『ふ、ふん！ ほら、行くぞ、真改！』

『……………』

『イジメちゃダメだよ』

『イジメねえよ！』

『あっはっは』

『むううう……………』

『ほらほら、早く案内してあげなよ。日が暮れちゃうよ』

『わかってるよ。じゃあ真改、ついて来い』

『……応……』

『よし。……ああそうだ。真改、もうひとつ大事なルールがあったんだ』

『一人はみんなのために、みんなは一人のために。泣きたい時は泣け、それで、誰かが泣いてたら、みんなで支えるんだぞ』

七月も終わりに近付いた、ある日曜日。私は如月重工の社員さんが運転するリムジンに乗って、如月重工の本社に来た。

「おお、大きい〜」

何階建てなのか、ものすごく大きいビル。見上げていると首が痛くなってきた。

高いだけでなく、横にも広い。一体何人の社員さんが勤めているんだろう。

「布仏様、こちらです」

「あ、は〜い」

社員さんに案内されて、正面玄関から中に入る。

ちなみに私は今制服を着ている。如月重工からの正式な要請に私服で行くわけにも行かず、学生のフォーマルな服装と言えぱり制服だからである。

受付さんに挨拶し、一階の奥にあるエレベーターに乗る。エレベーターの中もやっぱり広く、十五人くらいは簡単に乗れそうだ。

社員さんが階数指定のテンキーを叩くと、そのテンキーの下のパネルがパカリと開いて、もう一つテンキーが出てきた。地下に行くための専用のテンキーみたいだ。

……隠してあるんだ。地下でなにやってるんだろう……。

「……………」

「……………」

ほとんど音も振動もなく、エレベーターが地下に降りて行く。

社員さんは無言で微動だにせず立っていて、失礼だけどころことなく不気味だった。

「……………あの……………」

「なにか？」

声を掛けると、すぐさま返事がきた。

気になっていたことを訊いてみる。

「今回テストするユニットって、どんなのなんですか？」

「私は聞かされておりません」

「そうですか？」

「……………」

「……………」

会話終了。

……………空気が重い……………なんかいのつちの沈黙とも感じが違うし……………

そのまましばらく、大分深いところまで降りて行って、ようやくエレベーターは止まった。

扉が開き、社員さんに案内される。

「こちらです」

「は……」

音もなく歩いて行く社員さんに、とことこついて行く。廊下は広くて長くて分かれ道も多く、はぐれたら迷子になりそう。

そんな廊下をしばらく歩いて、とある部屋の前に止まり、ノック。

「社長、布仏様をお連れしました」

「開いてるよ。入ってくれたまえ」

ガチャリとドアを開けて中に入ると、そこには如月社長と網田主任、他にも何人かの研究者らしい人たちがいた。

「遅かったじゃないか……………」

「申し訳ありません。道中混んでいたもので」

「そっか。じゃあ君はもう仕事に戻ってくれたまえ」

「分かりました」

一礼して、社員さんが戻っていく。

社長は立ち上がって、両手を大きく広げて嬉しそうに私を出迎えた。

「やあやあ布仏君！ よく来てくれたねえ。遠い所までわざわざありがとう！」

「どういたしまして〜」

なんかさつき一瞬だけすごく渋い声を出した気がしたけど、気のせいだったのかもしれない。社長はいつも通りだった。

「呼んでおいて申し訳ないんだけど、実はまだ準備が出来てないんだ。もう少しで終わるから、それまでこの開発エリアを案内しよう」

「え〜？ いいんですか〜？ 極秘プロジェクトとかあるんじゃないんですか〜？」

なにせこんな地下深くにあるエリアだ。ない方がおかしい。

「あるけど、気にしなくていいよ。僕と布仏君の仲じゃないか」

「いや〜、照れるな〜」

「うふふ」

「てひひ」

………なんの仲だろう。共犯者じゃないよね……。

「じゃあ、ついて来てくれたまえ」

「社長が案内してくれるんですか〜？」

「うん。彼らはほら、アレだから」

社長がチラツと視線をやったので、そっちを見る。

そこでは網田主任が中心になって、研究者の人たちが端末片手になにやら話し込んでいた。

「エネルギーの供給率がイマイチですねえ。どうにかありませんか」

「それは二班の担当だろう。二班、ちゃんと援護しろよ」

「手こずっているようだな、手を貸そう」

「む、これは、例の装置か。面白い素材と聞いている」

「早速シミュレートだ。刺激的に行こう」

「ほう、こうなるか。新しい、惹かれるな……」

「いい感じですねえ、これを使いましょう。さあ、面白くなって来ましたよ……」

……そつとしておこう。あの中に入って行く勇氣は、さすがにない。

というわけで、如月社長に連れられて極秘開発エリアを歩く。

入り組んだ広い通路を、白衣を着た研究者の人たちが不気味な笑みを浮かべながら行き交っていた。

……ホラー映画に迷い込んだ気分。

「ここは実弾兵装の開発がメインだよ。最近は火力に凝ってるみたいだねえ」

ドアを開けると、分厚い強化ガラスの向こうに巨大な鉄の塊があった。

それはとんでもなく大きな大砲で、信じられないくらい大きな機関部、やたら大きなショックアブソーバー、すごく大きな砲身の三つを折りたたんだ形になっている。

「使用時にはあれを展開するんだ」

「うわあ、おつきいですね」

「大きいねえ」

「あれIS用の装備ですか？」

「そうだねえ」

「バランス悪くないですか？」

「バランス悪いねえ」

「それでいいんですか？」

「火力以外考えてないからねえ」

「そんなので何を撃つんですか？」

「そりゃあISだよ。IS用の装備なんだから」

「……大丈夫なんですか？」

「まあ、撃ち負けはしないんじゃない？ 当たるのであれば」

むしろ当たった時のことを心配してるんだけどな。ISを操縦者ごと粉微塵にしそうだし。

「試しに撃つて見せようか？」

「遠慮しておきまゝす」

この三メートルくらい厚さのありそうな強化ガラス越しでも、衝撃で吹き飛ばされそうな不安がある。

ていうかこんな地下の密閉空間で撃つたらビルごと崩壊しないかな。

「残念だねえ、僕も見なかったんだけどねえ」

「あれ〜？ 社長は見たことないんですか〜？」

「一回見たんだけど、一キロ離れてたのに気絶しちゃって覚えてないんだよねえ」

「わあ〜、すごい威力ですね〜」

「そうだろう？ やっぱり大艦巨砲は男のロマンだよねえ！」

女だからわかりません、とは言えない。大艦巨砲の素晴らしさを一日中語られそうだ。

「じゃあ、次行こうか」

「は〜い」

「次はここだよ。化学兵器を開発してる部署だね」
「へ〜」

……どうしよう。すぐく入りたくない。

しかし実弾兵器と化学兵器を同じエリアで開発してるんだ。

大丈夫なんだろうか、色々と。

「入るよ」

「おじやましまゝす」

中にはやっぱり分厚い強化ガラスの向こうに巨大な鉄の塊が鎮座していた。今度は大きな輪っかを真ん中で二つに分けたような形だ。

「あれはなんですか〜？」

「ある特殊な物質を圧縮・加速して撃ち出す兵器さ」

「特殊な物質〜？」

「うん。特殊な物質」

「……………」

「……………」

「てひひ」

「うふふ」

詳細は秘密、ということだろうか。まあいいや、私も聞きたくない。

「あれもISの装備ですか?」

「そうだよ」

「じゃあ狙うのも、やっぱり」

「ISだねえ」

「当たるとどうなるんですか?」

「装甲が溶けるよ」

「わあ、すごいですね」

「すごいだらう?」

「操縦者の人はどうなるんですか?」

「溶けるね」

「わあ、すごいですね」

「すごいだらう?」

……それはさすがにまずいんじゃないかな、色々と。

「試しに撃つて見せようか?」

「遠慮しておきます」

絶対にやめてください。

「次はここだよ。燃料関係の開発部署だね」

なんだか社長の話し方がおかしい気がする。まあ元からおかしい人だし、いつか。

「入るよ」

「入りまゝ」

中に入るとそこには以下略。

「あれはなんですか？」

「火炎放射器だねえ」

「火炎放射器？」

「火を吹くんだよ」

それは知ってます。

「あれもISの装備ですか？」

「使うのも狙うのもISだねえ」

「効くんですか？」

「効くよ。それだけの出力を持たせてるからね」

ISに効く火炎放射器……恐ろしい……。

「燃料の開発部署なんですよね」

「そうだよ」

「特殊な燃料なんですか？」

「特殊だよ」

「ISに効く高温が出せるくらいに？」

「出るよ」

「ISを狙うんだから、結構遠くまで届くんですよ」

「届くよ」

「そんな遠くまで温度を維持できるんですか？」

「できるよ」

「すごいですね」

「すごいよ」

「……………」

「……………」

「……………」

「じゃ、次行こうか」

「はい」

「次はここ」

「ここは何の部署なんですか？」

「近接攻撃用兵器の開発部署だよ」

「朧月用ですか？」

「朧月用ではないね」

「如月重工って、朧月の他にもIS持つてるんですか？」

「ないよ」

「……なんで作ったんですか？」

「なんとなく？」

「……………」

「……………」

「……………」

「入るよ」

「おじやまします」

中にry

「パイルバンカーですね」

「男のロマンだね」

パイルバンカーと言っても随分大きい。でゅっちーの「灰色の鱗殻」みたいに盾の下に隠すのはまず無理そう。

そして気になるのは――

「杭が二本ありますね」

「二本あるよ」

「二本あれば、威力も二倍ですね」

「ちよつと違うね」

「と、言うところ？」

「一本目でスキンバリアーを貫通して、二本目で装甲と操縦者を攻撃するんだよ」

「へへ、すごいですね」

「すごいだらう？」

すごいすぎる。確実に操縦者を殺す気だ……！

「けど大きすぎませんか？」

「威力のためだよ」

「当てるの難しくなりませんか?」

「難しくなるね」

「ロマンですか?」

「ロマンだね。一撃必殺つてやつさ」

「なるほど」

如月重工の原動力がロマンであることがとてもよくわかりました。

「試しに撃つて見せようか?」

「あ、お願いします」

まあこれなら大丈夫だろう。パイルバンカーだし、相変わらず分厚い強化ガラス越しだから、こっちまで衝撃が来ることはないと思う。

「じゃ、破砕力テストやるよ。準備して」

社長の指示により、パイルバンカーの前に戦車くらいありそうな巨大な鉄の塊が用意される。

パイルバンカーに弾薬がセットされて、私にヘッドフォンタイプの耳栓が渡された。社長も耳栓を着けて、準備完了。

「では、発射」

「布仏君、大丈夫かね?」

「……おおく?」

気が付くと、社長の顔が目の前にあった。どうやらちよつとの間、気絶していたみたいだ。

「いやあ、すごい威力だねえ。僕に内緒でまた調整したかな」

見れば、あんなに分厚かった強化ガラスには盛大に罅が入っていて、あの巨大な鉄塊は粉々になっていた。明らかに過剰火力だった。

「けどこれなら、どんな重装甲のISも一発だねえ」

「操縦者ごと粉々ですわ」

「そうだねえ、うふふ」

「てひひ」

この人はどこを目指してるんだろう……。

「ああ、社長、こちらにいましたか」

「おお、網田君。準備は出来たかね？」

「ええ、あと必要なパーツは布仏さんだけです」

「うん。ではお願いするよ、布仏君」

「はい」

私をパーツ扱ったことについては完全スルー。まあこんな人たちだということは、もう十分わかってるから気にしない。

「この部屋です」

案内されたのは、一際嚴重なセキュリティが施された扉。

二つのコンソールに如月社長と網田主任が別々にパスワードを入力し、指紋、声紋、網膜スキャンをして、最後に首から提げていた鍵を差し込んで回した。

重々しい音を立てて扉が開く。

その扉の奥。

広く、頑丈そうな部屋の中心。

コンソールパネルと、ガラスケースに覆われた台座。

そして、その中にあるのは――

「あれが今回、布仏君にテストしてもらおうIS整備用ユニット――」

綺麗な、目を、心を奪われてしまうほどに綺麗な。

「朧月が、是非君に使って欲しいと頼んだ、朧月と井上君のための、布仏君の力――」

淡く静かな、まるで夜空を照らす月のような、銀色の輝きを放つ。

「――[十六夜]だ」

一対の、ブレスレット。

ふははははははっ!!

布仏君、すっかり十六夜に釘付けだねえ！それが僕の策略だとも知らずにっ！

……いや、一度言ってみたかったんだよねえ、こういうの。

まあ気に入ってもらえたようであり、女の子の感性なんて、僕には分からないからねえ。

しかしこれで、お膳立ては出来た。あとは井上君に連絡してつと……。

……これでよし。うふふ、楽しみだなあ。

僕の計画は、ズバリ「井上君に布仏君を、布仏君に井上君を守らせる」ということ。

実はこの後、この如月重工本社ビルにて事故が起きます。大事故です。

具体的に言うと防御システムの暴走その他諸々です。

その間社員は一部を除いて社内のシェルターに避難。核ミサイルの直撃だつてへつちやらの高性能だから、社員に被害は出ない。

ぶつちやけ事故なんてウチじゃあ良くあることだから、避難は迅速に行えるし誰も気にしない。明日ニュースが流れても、「また如月か」で終わるだろうねえ。

うふふ、楽しみだなあ。ウチの防御システムはISでもそう簡単には突破出来ないし、網田君も新兵器のテストがしたいって言ってたしねえ。僕にも内緒にするような秘密兵器だし、きつとすごいんだろねえ。今の井上君じゃあかなり苦戦するだろうねえ。

しかもここはかなり地下深くにある。井上君が布仏君のところに到着するころには、井上君も朧月もボロボロだろうねえ。

……オボロヅキがボロボロ……うふふ。

まあとにかく、騎士が捕らわれの姫君を助け出すために馳せ参じ、そして疲労困憊の騎士の傷を姫君が癒やす。騎士は姫君を守り、姫君は騎士を支える、という筋書きなのだ。

実に美しいじゃないかっ!!

織斑君を守れなかった井上君は布仏君を救い出すことで自信を取り戻し、今まで無力であることを嘆き続けていた布仏君は井上君を支える力を手に入れる。

そして僕は社の防御システムの確認、新兵器の実戦テスト、そして十六夜の稼働試験に朧月との連動データも手に入る。

みんなが幸せになれるっ!!

え？ 本社ビルがボロボロになる？

そんなことはどうでもいいんだよっ！ ビルなんかいくらでも建て直せるんだからっ！

お金？

そんなものはいくらでも手に入るんだよっ！ いざともなれば国のお偉いさんを脅せばゲフンゲフンッ!!

え？ 僕はどこから見てるのかだつて？

そりゃあ勿論特等席っ！ つまりはここさっ！

うん？ 危なくないかって？

僕の遺伝子データと記憶情報は常に最新のモノをアップデートしているからねえ。たとえこの僕が力尽きたとしても、すぐに第二、第三の僕がっ！

あ、布仏君は社長として責任を持って保護しますよ。約束は出来なわけどね。

網田君？

自力でどうにかするでしょ、彼なら。

さて、とりあえず布仏君に怪しまれないよう、十六夜の起動試験を済ませてしまおう。

「どうやら十六夜の待機状態は、気に入ってもらえたようだねえ」

「……え？ あ、はい……すぐく、綺麗です……」

「いやあ、気に入ってもらえたようで嬉しいよ！」

まだぽやくつとしてるねえ。よほど気に入ったみたいだねえ、うふふ。

「じゃあ、ちよつと動かしてみようか。あつちに打鉄があるから、それで試してみよう」

「あれ〜？ ISは朧月以外ないんじゃないんですか〜？」

「ウチのISじゃないよ。自衛隊から無断でゲフンゲフンこつそり借りてきたモノさ」

「言い直した意味がないですよ〜」

「おやおや、これはうっかり」

「てひひ」

「うふふ」

さて、じゃあ打鉄の準備を――

『緊急事態発生！ 社員は全ての業務を中止し、最寄りのシエルターに避難せよ！ 緊急事態発生――』

キタアーーー（。▽。）ーーーッ!!!

ちよつと予定より早いけどまあいいや！ さあ僕の こと作品たちよ

！ 思う存分暴れたまえっ！ そしてこの如月城の防衛能力を井上君と、ついでに全世界に見せ付けるのだっ!!

まずは地下一階のタレットが――

『侵入者有り！ 社内にて所属不明 I S 二機の起動を確認！ 繰り返し

す！ 侵入者は二名、両名とも I S を所持！』

.....あれ？

第33話 アミダハザード

『やああああっ!』

『だああああっ!』

『……………』

『うわあっ!』

『あだっ!? ……うぐぐ』

『むう、二人掛かりでも勝てんとは…………』

『ああ、くそっ! なんでもそんなに強いんだよ!』

『……………さあ……………』

『ぐぐぐ……………涼しい顔しやがって……………』

『しかし、本当に強いな。まるで勝てる気がしない』

『……………弱気……………』

『む……………確かに、気持ちで負けていては、格上相手に勝てるはずもないか……………』

『俺は気持ちで負けてねえぞ! なんにんで勝てねえんだよっ!』

『馬鹿かお前は。気持ちだけで勝てるなら、剣術などいらんだろう』

『ぐぐぐ……………!』

『……………』

『……………よし! シン、もう一回勝負だ!』

『おい一夏、真改は私たち二人を相手してるんだぞ。少しは休ませて——』

『だああああっ!』

『って、話を聞けっ!』

『……………』

『いだあっ!』

『……………瞬殺か。情けない』

『うっせえ! 箒だって同じようなもんだろ!』

『い、一夏よりは強いぞ!』

『なにおう!』 よし、じゃあお前から倒してやるっ!』

『ふん、いいだろう、かかって来い!』

『行くぜ！ だああああつ！』

『やああああつ！』

『……………』

『おらあつ！』

『せえいっ！』

『……………』

『うおおおおっ！』

『はああああつ！』

『……………』

『……………ま、負けた……………』

『ふ、まだまだだな』

『ちくしょう、悔しい……………！』

『動きが荒すぎる。次の手が簡単に読めるぞ』

『むむむ……………』

『真改を見習え。まったく無駄がない。だから相手に余計な情報を与えないんだ』

『……………』

『動きの無駄か……………。例えば、どんなだよ？』

『踏み込みとか、体捌きとか、剣の振り方とかだな』

『戦いながらそんなにいっぱい考えていられるかよ』

『考えなくてもできるようにするための鍛錬だ』

『……………無心……………』

『この間は少しは考えて戦えとか言ってただろ』

『剣術とは相手との読み合いだ。考え無しの剣など、すぐに手詰まりになる』

『考えるとか考えろとか、どっちなんだよ』

『必要なことだけ考えて、余計なことは考えるな』

『……………一心……………』

『……………難しいな』

『ああ、難しい。だからこそ、剣の道には極める価値がある』
『極める価値、か……………。じゃあ、シンは剣を極めてるのか？』

『……まさか……』

『ええ？　こんなに強いのに？』

『真改は私たちと同じ年だぞ。いくらなんでも、まだその境地には届かないだろう』

『………』

『うくん、こんなに強いのかなあ』

『だがまあ、真改が強いのは確かだな。私たちよりも、ずっと』

『ああ。それに、なんていうか……シンの剣は、すごくキレイだ』

『そうだな、私もそう思う。無駄のない、無骨な剣のはずなのに、つい目を奪われてしまう。舞に通じるものがあるな』

『剣舞ってヤツか』

『剣舞か。うん、まさしくそうだな。真改の剣は、剣舞と呼ぶべきものだ』

『……誉め過ぎ……』

『そんなことねえよ。シンの剣はすごくキレイだ。俺の目標だよ』

『む……まあ確かに、真改の剣はキレイだ。私も、その……目標にしている』

『………』

『……よし！　シン、もう一回だ！』

『まだやるのか。もういい加減に——』

『まだまだやるぞ！　俺は強くなりたいんだ、そのためにはもっと鍛錬しないと』

『なんでそんなに強さにこだわるんだ』

『だって情けねえだろ。男の俺が一番弱いだなんて』

『む………』

『カツコ悪いじゃないか。女の子の方が強くて、男が弱いなんて。だから、強くならなきゃ』

『強くなるぞ！　強くなって、いつか必ず、お前に勝つからな——シン！』

「侵入者の映像、出ます」

如月重工本社の最深处、極秘開発エリア。

その第五シエルターに避難した本音、如月社長、網田主任、その他数名の研究員たち。

社内の監視カメラを確認していた研究員の一人が、侵入してきた二人の姿を認めて報告した。全員が監視カメラの映像を映し出すモニターを覗き込む。

「どれどれ……ふむ、さすがはIS操縦者、なかなか若くて美人じゃないか」

「いいですねえ、解剖したいですねえ」

「こちら網田君、そんなことを言うもんじゃないよ」

「おっと、私としたことが。解剖したら一回で終わりですからねえ」
「そうそう、解剖は最後だよ。せっかくのお客様なんだから、たっぷり楽しませてゲフンゲフン楽しんでもらわないと」

「ではすぐに、おもてなしの準備をしなくてはなりませんねえ」

「うふふふふふふふふ」

こんな二人には慣れっこなのか、研究員たちは誰も気にしない。本音ももう慣れたので気にしない。気にしないったら気にしない。

「侵入者は今どこに？」

「地下二階です。防衛システムと交戦しながら、さらに下を目指しています」

「まだ二階？ 随分のんびりだねえ」

「エレベーターは完全に塞ぎました。侵入者は階段を使って降りています」

「え？ 階段使ってるの？ バカだなあ、一階ごとにエリアの反対側にある階段なんて、怪しいと思わないのかねえ」

「ですがまあ、その怪しい階段を使わざるを得ないように、エレベーターを徹底的に塞いだわけですからねえ」

「うふふ、目論見通りってヤツだねえ」

「侵入者はエレベーターを破って地下に侵入、防衛システムによりエレベーターが塞がれたため地下一階に出てそこを探索、階段を発見し地下二階に降り、現在は一階と同じように探索中で……あ、階段を発見したようです」

「ふむ、三階か。三階には何が仕掛けてあったっけ？」

「ダミーの階段です。トラップ付きの」

そんなことを話している内に、侵入者がダミーの階段に飛び込んだ。その瞬間、階段の左右の壁が爆発的に動き、二人の侵入者をサンドイツチし。

「Ye a h h h h h h h h!!」

歓声、ガッツポーズ、そしてハイタッチ。大いに盛り上がる社長と主任。ものすごいテンションだった。

「見たかね網田君っ！ あの驚いた顔っ!!」

「勿論ですともっ！ 録画もバッチリですよっ!! スーパースローカメラで撮影したので細かな表情変化も完璧ですよっ!!」

「今のシーン切り抜いておいてくれたまえっ！ 来週のハプニング映像百連発に投稿するからっ!!」

「もう切り抜きましたよっ!」

「さすがだ網田君！ 仕事が速いねえ！ ……お？」

画面の中で、階段の壁が粉々に砕け散る。その中から、顔を真っ赤にして激怒する侵入者たちが現れた。

「そこなくっちゃ！ さあ、頑張ってくれたまえよ侵入者君！

もっど僕を楽しませてくれ！」

「面白いシーンを編集してまとめておきましょう！ 大作が出来上がりますよっ!」

「ふははははははっ!!」

心から楽しんでいる様子 of 二人。

その指示を受け、黙々と編集作業を始める研究員。

異様な光景だった。

「社長」

「うん？ なんだね布仏君」

「あの人たちって、何が目的なんですか？」

本音の質問はある意味当然のものだった。気になるに決まっている。

実際に質問するあたりが本音のすごいところではあるが。

「さあ？ 知らないよ、そんなこと」

「心当たりとかないんですか？」

「ありすぎて絞り込めないねえ。ウチは色んなところから恨み買ってるし、違法な研ぎゆゲフンゲフン自慢の技術力のおかげで他にはない兵器やら装置やらがあるからねえ。狙われる理由ならいくらでもあるよ」

「おお、でんじゃらすですね」

「危険な男というのは、魅力的だろう？」

狙われている危険というよりも社長本人が危険過ぎるのはどうなんでしょうと本音は思ったが、それを言っても社長が喜ぶだけだと思っただけで言わなかった。

「けどまあ、なんで狙われているのかはわからないけど、誰に狙われているのかはわかったよ」

「へ〜？ 誰なんですか？」

「……うふ。うふふ、ふふふ」

不気味な囁い声。

研究員たちが、僅かに身を竦ませる。

網田主任も、声をあげずに囁く。

これと同じモノを一度見たことのある本音は、気付いた。

——如月社長と網田主任は、怒っている。

社長は、ニイイツと口元を歪ませ、殺意すら滲んだ声色で呟いた。

「……ここは生者の世界だからねえ。亡霊には、お引き取り願おうか」

「ああああっ!! ムカつくぜっ!! なんなんだよ、ここはよおっ!!」

如月重工本社ビル、地下十階。

侵入者の二人、八本の装甲脚が伸びるISを身に着けた二十代半ばくらいの女と、同じくISを身に着け六機のビットを引き連れた、十代半ばくらいの少女。

そのうちの女の方が、苛立ちを隠すことなく声をあげながら、壁からせり出して来た六連装ガトリングタレットを粉砕する。

「一体どんだけ罨仕掛けてあんだ?! 軍事基地だってこんな防衛システムは備えてねえぞ!!」

「うるさい、黙って進め」

少女が女の声に不機嫌そうに答えながら、天井から生えてきたプラズマタレットを吹き飛ばす。

地下の通路はかなり広く、IS二機が並んでもまだ少し余裕がある。侵入者たちは互いの攻撃しにくい範囲をカバーし合いながら、次々出てくるオートタレットを破壊しつつ進んでいた。

「余力を残しておけ。この調子だと、何階まであるか分からない」

「言われなくたって分かってんだよ、そんなことは!」

見つけた階段を慎重に確認しつつ降りる。

二人は最初はエレベーターをぶち抜いて一気に最下層まで降りようと考えていたのだが、エレベーターの底を破った瞬間エレベータートンネルの壁が動き出し、トンネルを塞いでしまったのだ。

なんとか地下一階に飛び込んでペしゃんこになることは防いだが、エレベータートンネルは通れなくなった。仕方なく階段で一階一階降りていたのだが、そこに待ち受けていたのがおびただしい数の防衛システムだったのだ。

最新技術を惜しげもなく使った、なのに時に妙に古臭い（例：パイランカー吊り天井）罨を突破しながら進んでいる二人は、弾薬を節約するために今は格闘攻撃メインだ。エネルギーはともかくとして体力が保つか心配である。

「ちいつ、キリがねえな……!」

「ガードが固くて、地下エリアの情報はほとんど手に入らなかったらしい。あとどれだけあるのやら」

「一般の会社を襲うなんざ、楽な仕事だと思ったのによお……!」

だが会社どころか、要塞顔負けの防衛システムが待ち受けていた。しかもセオリーとか使い勝手とか無視した愉快型兵器も多々あり、歴戦の猛者である二人が何度も不意を突かれていた。

次が読めない状況に、精神的な消耗も激しかった。

「！ 階段だつー！」

「次は二十階か」

階段を降り、廊下に出る。

素早く意識を巡らし、どんな罠が待ち構えているか確認する。だがどういうわけか、この階には罠は無かった。

否、無いのではない。有るに決まっている。

有るが、機能していない。誤作動とは考え難いので、如月重工が停止しているのだろう。

「……何考えてやがる」

「気を付けろ……」

凄まじい緊張感が神経を焦がす。

二人の額から一滴の汗が流れ落ちる。

今まであれほどの罠が仕掛けられていたのだ、なにもない、などということがある筈がない。

慎重に、しかし迅速に、静まり返った廊下を進む。

「なんだ……何を考えてやがる……」

「……不気味だな……」

そうして、神経を尖らせながらある程度進んだ時。

不意に、廊下のスピーカーから声がした。

『本日ハ晴天ナリイイイイイイイツ!!』

「……………」

『あー、あー、マイクテストマイクテスト』

『社長く。順番が逆ですよ』

『あれ？ そうだったかね？』

緊張感の欠片もなかった。

「……なんだよ、このバカは」

「……知るか」

『やあやあ侵入者のお二人さん！ はじめまして、僕がこちらの社長だよー』

「ああ……道理で」

二人は色々と納得した。

『君たちは「亡国機業」フアントム・タスクのエージェント、でいいのかな？』
「なっ……？」

「てめえ……なんで知ってる？」

それは如月社長の言葉を肯定しているのと同義の反応だった。

しかし如月社長が確信を持って質問して来ていることは確かであり、隠しても意味はないだろう。

『君らのことは知らないよ。僕が知ってるのはその機体さ』
「機体だと……？」

『アメリカの第二世代型IS「アラクネ」。それに、イギリスの第三世代型試験機「サイレント・ゼファイルス」。どちらも強奪されたISだねえ』

「……………」

『そして、強奪した組織は——亡国機業』

「……よく知ってるじゃねえか」

『うふふ。極秘って聞くと、どうにも知りたくなっちゃうんだよねえ』
『女の子の秘密もですか？』

『それは別にどうでもいいや』

『おりむーから聞きましたよ。朧月使って、いのっちのプライベート覗き見してたっ〜』

『ああ、そんなこともあったね。けど大丈夫、未遂に終わったから』
『なるほど、それなら大丈夫ですね〜』

『そうだろう？ うふふ』

『そうですね。てひひ』

『うふふ』

『てひひ』

「話を進めろよ」

「放っておけ。話よりも歩みを進めるぞ」

「そーだな。てめえと同意見てのは癩だが、アレと話してると頭がおかしくなりそうだぜ」

心底呆れた顔で二人が言い、次の階に降りるための階段を探し始める。

そこでまた社長の声。

『まあ君らが何を目的にしているのかはわからないけど、僕の作品を渡す気はないよ』

「けっ、なにが僕の作品だよ。盛大に使い捨ててやがったくせによ」

『わかかってないねえ。道具というのは目的があつて産み出される。その目的を果たしたのなら、それが道具の幸福だ。だから僕たちは、作つたものは必ず使い切る。使いもせずに死蔵するだなんて、僕たちに言わせれば命に対する冒瀆と同義だよ』

「だから私たちが使うと言っている」

『言つただろう、道具には目的があるつて。その目的は僕たちが決めたんだ。だから、僕たちが認めた人にしか託さない』

「……ふん。交渉決裂、だな」

「まあ最初っから力づくでもらつてくつもりだったし、やることは変わんねえよ」

『ま、そうだろうねえ。うん、それじゃあ頑張つてくれたまえ。……けど、一つ忠告しておくよ』

忠告？ と、侵入者たちが足を止める。

社長の声に、道具云々のくだりとはまた違った真摯さがあつたからだ。

そして、低く、力のある声で。

『ここは僕たちの城だ。たったの二機で攻め落とせると思うなよ、小娘ども』

宣戦布告をした。

『どうだい今の？ なかなかキマってなかった？』

『ぼっちりでしたよ』

『そうだろう！ いやあ、今のハツタリで逃げ帰ってくれないかなあ。そうすると僕としても助かるんだけどなあ』

『どうでしょうかねえ。亡国機業のエージェントなら優秀でしょうしねえ。難しいんじゃないですかねえ』

『うくん、やっぱりそうかなあ……』

『あ、社長』

『うん？ なんだね？』

『マイクのスイッチ入ったままですよ』

『あ』

「……………」

台無しだった。

「けど実際どうしようか。彼女たち、かなり腕が立つよ。格闘戦ばかりなのに、ほとんど被弾してない」

「タレットや他の罫だけでは抑えきれないでしょうねえ」

「となると、ここは……」

「私の出番ですねえ」

網田主任がニヤリと笑う。

かなり不吉な笑みだった。

「君の新兵器、存分に活躍させてやってくれたまえ」

「……うふふ。では、御披露目と行きましようか。私の自慢の子供たちをつっ！」

それは、侵入者たちが地下三十階に到達した時のことだった。ここも罠が機能しておらず、二人は一層慎重に階段を探していた。

その様子を見た如月社長が「孔明の罠」とか言って面白がってたのは侵入者たちの預かり知らぬことであった。

「止まれっ」

「……なんだ、この音は？」

——カサカサカサカサ——

通路の壁の向こうから、何か音がする。

それも、かなり数が多い。両側の壁からひっきりなしに聴こえて来る。

「気を付けろ。今度はただの罠ではないようだ」

「ちっ……なんだ、こりゃあ。気味悪いぜ……」

——カサカサカサカサ——

音はまだ続いており、段々と移動している。

二人は最大限の警戒をしながら、少しずつ進んで行く。

そして。

——バアンツ！

十メートルくらい先にある左右のドアが、同時に勢い良く開く。

その奥。

部屋の、中から。

「……………い……………」

カサカサと。

青い体表の。

二メートルくらいありそうな、巨大な。

大量の——広い廊下をあつと言う間に埋め尽くすほどに、大量の。

「いやああああああああああああっっっ!!!」

——ダニに良く似た生き物が、現れた。

前後を挟まれ狂乱状態に陥る二人。その隙を突かれる形で、生体兵器の接近を許してしまった。

ビョーン。ビョーン。ビョインビョインアミダア。 ピと。

「ぎゃあああああああああつっつ せ、背中にいいいいいいいいいいいっつっつ!!?!?!」

「うひひひひひひひひひひ!!」

「とつて!! とつてええええええええええええええええええええええ!!」

「来るなああああああつち行けえええええええええええええええええええええ!!」

ええええええええええええええええ!!」
スラスターを噴かせば一発なのだが、そんなことに気づけるような冷静さは当然失われている。

絶叫しながらくるくる回るが、ニメートルのダニ(つぽいナニカ)のハグ力は尋常ではなく、引き剥がせない。

そんなことをしているうちに前の生体兵器たちもだんだん近づいて来ており、もはや進むも地獄、退くも地獄な状況。

ならば、どうするか――

「と、突破だつ! 強行突破だつ!!」

「異議なし!!!」

思考によるものではなく、身に染み付いた習慣による判断であった。弾薬やエネルギーの温存など完全に忘れ、武装を乱射しながら生体兵器の群れに突っ込む二人。

撤退せずに前に出るあたり、仕事に対する真面目さがうかがえなくもない。

「うわあああああああつ!!!」

雄叫び(悲鳴)をあげながら、スラスターを全開に噴かす。

吐き出された無数の弾丸が生物兵器を蹴散らし、出来た隙間に機体を滑り込ませる。

――だが。

カサカサ。カサカサ。ドンドンドン。ばきゅーんばきゅーん。キイキイ。キュイキュイ。ちゅどーん。

「爆発したあああああつ!!!」

廊下が紅蓮の閃光に埋め尽くされる。

爆音に混じり侵入者たちの悲鳴が聴こえたが、社長と主任の歓声に塗り潰された。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス……」

「手足切り落として目ん玉くり抜いて鼻削ぎ落として耳引き千切って心臓抉ってそれから……」

何事かをブツブツ呟きながら、幽鬼のような足取り（実際は浮いてるが）で廊下を進む侵入者二人。

タレットもしよっちゆう出て来ては攻撃してくるが、殺意の波動に目覚めた二人の敵ではなかった。起動した瞬間にバラバラにされ、足止めにもならない。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス……」

「両断して八つ裂きにしてバラバラにして粉微塵にしてすり潰して焼き尽くしてそれから……」

不穏なことを呟きながら、間髪入れず飛び出してくるタレットを一つ残らず粉碎しながら、凄まじい殺気と共に破壊を撒き散らして進む。

次の階段を探して、ゆらゆら、ゆらゆらと。

しかしその二人の頭上。

突然、なんの前触れもなく。

天井が、ガバリと開いた。

「……………」

そこには。

あの、青色の体表が。

視界を覆い尽くすほどに、大量に――

「いやあああああああああああああああつ
!!!!
」

第34話 たとえ刃が毀れても

『おいリンリン、パンダならパンダらしくしろよな』

『笹食えよ。それかなんか芸するとかさ』

『はあ？ バツカじゃないの。あたしの名前はリンインよ。そんなことも覚えられないの？』

『だから、リンリンだろ？』

『こつちの方が言いやすいよな』

『ああ、中国人の名前って変だよな。すげー言いにくいぜ』

『何言ってるの？ 日本人の名前だって、他の国から見たら相当珍しいし言いにくいわよ』

『ここは日本だからいいんだよ』

『そうだよ。日本に来るんなら、言いやすい名前にしてこいよ』

『わけわかんないこと言ってるんじゃないわよ。なんであたしがアンタたちのために名前変えなきゃなんないのよ』

『お前パンダだろ。パンダが人間に逆らうなよ』

『そーそー。毎日笹もらってるんだから、ちゃんと言うこと聞けよな』
『……うざい』

『はあ？』

『うざいって言ってるのよ。あたしはアンタたちみたいなバカに付き合ってるほど優しくくないの。さっさと消えてくれる？』

『な、なんだとてめえっ！』

『パンダのクセに生意気だぞ！』

『人間とパンダの区別もつかないの？ だとしたら、バカ以前の問題ね。病院行ったら？ 精神病院』

『なっ……！ てめえ！』

『調子乗んなよっ！ パンダのクセにつ！』

『なによ、女の子に手を上げる気？ サイテーね』

『うるせえっ！ 関係あるか！』

『きやあっ!? なにすんのよっ！』

『ムカつくんだよ、ぶん殴ってや——』

『……下種……』
『な、い、井上……!?!』
『……失せろ……』
『な、なんだよ……お前には関係ないだろ!』
『……友人……』
『ぐ……』
『お、覚えとけよ!』
『……』
『なにあれ……まるつきりチンピラのセリフね』
『……三下……』
『そう、それ! わかってるじゃない!』
『……』
『……ん。あの……助けてくれて、ありがとう……』
『……無用……』
『……ねえ、井上』
『……?』
『アンタも、あたしの名前、変だと思う……?』
『……鈴音……?』
『そう、それ。……ねえ、変だと思う?』
『……否……』
『ほ、ホントに?』
『……良い名……』
『え……』
『……鈴の音……』
『……うん。おんなじ字』
『……美しいと思う……』
『……あ……あり、がとう……』
『……誇るといい……』
『……うん。そうする』
『……』
『……アンタの名前は、真改よね』

『……応……』

『……アンタの名前も、綺麗だと思っわよ』

『……気に入ってる……』

『うん、素敵な名前』

『……ありがとう……』

『……ねえ、お願いがあるんだけどさ』

『……?』

『アンタのこと、シンって呼んでもいい?』

『……』

『代わりって言ったらなんだけど、あたしのこと、鈴って呼んでいいからさ』

『……構わない……』

『……うん! ならあたしたち、親友よね!』

『……そうだな……』

『よしっ! それじゃあ——』

『これからもよろしくね、シン!』

ドカアアアアアアッ!!

如月本社ビル地下五十階。

生体兵器の群れから逃げながら、侵入者たちが巨大で分厚いシャツターをぶち破ると、ドーム状の広大な空間が広がっていた。

「こ、ここにもいやがるっ……!」

「なんて数だ……!」

カサカサ。カサカサ。ビョーン。キイキイ。キュイキュイ。ビョーン。ビュウツ。

「ひひひひひっ!!」

大量の生体兵器が吐き出した酸を、急上昇して避ける。

天井近くまで移動して下を見ると、ドームの床を青い体表が埋め尽

くしていた。

「うつ……」

生理的に受け付けない光景だが、目を逸らすわけにもいかない。そもそもハイパーセンサーのせいでもどこを向いても見えるのだから、目を逸らしても意味がない。

カサカサ。カサカサ。ビユウツ。ビユウツ。ビユウウウウツ。キイイイツ。

「……ああん？」

「これは……もしかして……」

生体兵器たちは酸を吐きまくっているが、侵入者たちには届かない。大分下で失速し、吐いた酸が生体兵器たち自身に降り注いで自滅していた。

「行ける……！ 行けるぞっ!!」

「よしっ！ この高度を維持しながら出口まで——」

——ヴウウウウウウン——

ようやく得た精神的平穩に水を差す不気味な音に、ビクウツ！ と身を竦ませる二人。

見たくない。

見たくないが、そういうわけにもいかない。

底を尽きかけた勇気を振り絞って、そろり、と後ろを向く。

そこには。

今度は、緑色の体表が。

広大な空間を埋め尽くすほどに、大量に。

羽を生やして——

「飛んでるうふうふうふうふうふうふうふうふうつっつ??!!」

「ブラアアアアヴオオオウツ!!」

監視カメラの映像の中でパニックに陥る侵入者たちの姿に歓声を上げる如月社長と網田主任。

映像を切り抜き、編集する研究員。

画面から目を逸らしている、若干顔色が悪い本音。

最深部はまだ平和だった。

「素晴らしいっ！　素晴らしいよ網田君っ！！　こんな素敵なものを作るだなんて、さすがとしか言いようがないよっ！」

「そうですねっ！　なになにこの私が、寝食を共にして育てたのですからっ！！」

アレと一緒に食事して一緒に寝る様を思い浮かべて、本音は本格的に気分が悪くなった。

しかし如月重工は真改が世話になっている会社、出来る限り詳細は把握しておきたい。なので勇気を振り絞って訊いてみた。

「主任〜」

「なんですか？」

「主任はIS開発部の主任なんですよ〜」

「そうですね？」

「なんで生体兵器を作ってるんですか〜？」

「ISは人間の女性にしか動かさせませんよね。そこで私は、なぜISが人間の女性にしか反応しないのかを研究していたんです」

「よくあるテーマですね〜」

「ええ。しかし織斑一夏さんがISを動かしたというニュースを聞いて、途端に熱が冷めてしまいました」

「早過ぎですね〜」

「そこで私は考えたのです。人間以外にもISを動かせる生物はいないものかと」

「飛躍し過ぎですね〜」

「しかし既存の生物の中に、ISが反応する生物はいませんでした」

「ま〜、そうですね〜」

「そこで当然と言いますが、私はこう考えたのです。——ないのなら、作ればいい、と」

「それを当然と言うあたり、終わってますね〜」

「しかしどれほど実験を重ねても、ISを動かせる生物は生み出せませんでした。そうして幾百、幾千と実験を重ねているうちに——」
「うちに〜?」

「——生体兵器が出来ちゃいました。てへ♪」

てへ♪ じゃねーよ。

もう少しソフトだったが、要約するとそのような内容のことを本音は思った。

「しかし、参りましたねえ。もう大分、近くまで来ていますよ。やはりISを倒せるのはISだけなんですかねえ」

「悔しいけれど、そうなのかもねえ。このままじゃ、彼女たちがここま
で来るのも時間の問題だねえ」

「……抑えきれないんですか?」

「無理だろうねえ。なんだかんだで、精神以外はあまり消耗させられてないみたいだし」

「ええ。半狂乱状態になり判断力を大きく失いながらも、戦闘自体は極めて正確で無駄がない。想像以上の手練れのようにすねえ」

如月社長も網田主任も、ただ楽しんでるだけでなく冷静かつ正確な分析をしていた。

自分たちの非力を認め、相手の強大さを認め、勝てないという事実を認める。

研究・開発以外に興味のない彼らだからこそ可能な、簡単なよう
で難しい、プライドの放棄であった。

「布仏君」

「?」

突然声を掛けられて、本音が不思議そうな顔をする。

如月社長は、今までに見たことがないほどに真面目な顔をしてい
た。

「君は逃げたまえ」

「……………え?」

「シエルターの奥に、緊急脱出用の通路がある。それを使えば外に出

られるよ」

「しゃ……社長……？」

あまりに予想外な申し出に、本音が呆然とする。

そんな本音を真つ直ぐに見ながら、如月社長は尚も続けた。

「お客様に何かあれば、如月重工の社長としての面目が立たないからねえ。君は逃げたまえ。今なら連中に悟られずに逃げられるよ」

「じゃ……じゃあ……みんなも一緒に……！」

「僕らはここに残るよ」

「え……!？」

本音は何かに縋るように一緒に避難して来た研究員たちを見るが、誰一人動じていない。

社長の言葉を当たり前のように受け止めていた。

「の……残るんですか？　なんで……？」

「ここは僕らの会社、僕らの城だ。残るよ、最後まで」

「死んじやうかもしれないんですよ!!？」

侵入者たちは怒り狂っている。目的の物を手に入れたとして、果たしてそのまま大人しく引き下がるだろうか？

シエルターまで押し入って、皆殺しにしていくことさえ考えられる。

それは、如月社長たちも分かっている筈だ。

「緊急用の通路はあまり広くなくてねえ。通れない物もいっぱいあるんだ。だから、僕らは行けないよ」

「なんで!?!　ここにあるのは、全部みんなが作った物なんですよね!!?　持って行かれちゃつても、また作ればいいじゃないですか!!？」

「……そんなの、決まってるじゃないか」

気付けば、如月社長だけでなく、この場に居る全員が本音に向き合っていた。

社長の言葉が如月重工の総意であると、全員の眼が語っていた。

「言っただろう？　ここに在るのは、みんな僕らの作品……僕らの子供だ。」

子供を見捨てて、自分だけ逃げる親はいないさ」

「……！」

だから、会社と命運を共にする。

だから、子供たちを助けられないのなら、共に死ぬ。

自分たちが作ったモノは、必ず最後まで使い切る——それだけが、彼らの持つ、ただ一つの誇りだから。

「けどまあ、これは飽くまでも僕らの在り方だから。布仏君を巻き込むわけには行かないよ。……だから、君は逃げたまえ」

「……………」

止めても無駄だ。

彼らは、本音がいくら説得したところで応じはしない。

それが、聡明な本音にはわかってしまった。

「……………わかりました」

「よかった。君は結構頑固そうだからねえ、ごねられるんじゃないかと思ってたよ」

「……………止めても、無駄なんですよね……………」

「無駄だねえ」

「なら、仕方ないですよ……………」

「……………申し訳ない。君に、余計な荷物を背負わせてしまうね」

「……………」

「緊急脱出用の通路は向こうだ。君なら簡単に操作できるよ。……………」

あ、行きたまえ。井上君によろしくね」

「……………」

社長に促され、トボトボと歩いて行く。

それを見送って、社長も研究員たちも、モニターの監視と罠の操作に戻った。

(私……………また、何もできないのかな……………)

真改が傷だらけになった時と、同じように。

自分には、何も出来ないのだろうか。

そんな想いが、本音の心に重くのしかかる。

無力であること。

それを受け入れることが、本音にはどうしても出来なかった。

(……そんなの……やだよ……)

せつかく、力が手に入ると思ったのに。

ようやく、守り支えることが出来るようになってしまったのに。

これでは、何も——変わらない。

(嫌だよ、そんなの……!)

溢れそうな涙を必死にこらえながら、本音は緊急脱出用通路に向かう。

そして。

ふと、気付いた。

本音たちがこのシエルターに避難して来る際に、一緒に運び込まれて来た、いくつかの物。

その中に、在ったのだ。

今回本音がテストする筈だった、「十六夜」と。

いつでも動かせるよう、万全の整備が為された、待機状態の——

「……ごめんね、いのち……」

涙を拭い、両手で頬を張って気合いを入れ、本音は決然とした表情で歩き出す。

自らの主君を待つ武士のように、静かに佇む。

——「打鉄」へと。

「私……ちよつと、無茶するよ……!」

「ぜえ……ぜえ……いい、いるか……？」

「はあ……はあ……いや……大丈夫だ」

侵入者たちは、生体兵器から逃げ回りながらも階段を見つけては下の階に降り続けていた。

そして、ついに――

「……階段がねえな」

「ああ……スキャンにも引つ掛からない。隠し階段の類もないようだ」

「つてことは、つまり――」

「ああ――ここが、最下層だ」

ニヤリと笑い、二人は探索を始めた。

手近なドアを次々と破り、中を確認していく。

「こつちにやねえぞ」

「こちらも外れだ」

研究・開発が行われていたのは残された設備からも明らかなのだが、肝心の作られた物がどこにもない。侵入者たちが階段で一階ずつ降りている間に、全てシエルターの中に運び込んだようだった。

「……あれほどの罠が、全て時間稼ぎだったってわけかよ」

「強かな連中だ。……どうする？ シエルターを破って確認するか？」

「それしかねえな。時間はかかるが、仕方ねえ」

シエルターの防護扉は極めて頑丈だ。ISの攻撃力を以てしても、すぐには破れない。

だがこの階は全て探索した。あと調べていないのはシエルターの中だけだ。ここまで来て引き返すという選択肢は、二人には有り得なかった。

「間に合うか？ 救援部隊も向かって来ているだろう」

「ならなおさら、急がねえとな」

そうして二人は、まずは手近な、第五シエルターに向かい――

「……！ レーダーに反応っ！」

「IS……!?!」

背後から襲い掛かって来た一機のIS――本音が操る「打鉄」へと、銃口を向けた。

『布仏君！ 何をしている、戻るんだっ!!』

「嫌です！」

『間違っても君のかなう相手じゃないっ！ 今第四シエルターの扉を開けるから、そこに――』

「絶対に、嫌ですっ!!」

『っ……！ ああ、もう！ みんな、どこかのシエルターに無人攻撃兵器が有るはずだ、連絡を取って全機起動してくれ！ 大至急だっ!!』
『『はいっ!!』』

通信機から如月社長の声が聴こえる。私を心配してくれているのがよくわかる、とても焦った声。

……ごめんなさい。けれど、逃げたくないんです。

だって、社長は言っていた。

自分たちの作品は、どれも大事な子供だって。

だから、自分たちが認めた人にしか託さないって。

それはつまり、社長たちは認めてくれたっていうことだ。

――私が、大事な子供を託すのにふさわしい人間だって。

そんな人たちを見捨てて自分だけ逃げるなんて、絶対に嫌だ。

――だから。

「お願い……力を貸して、打鉄……！」

私の願いに呼応するように、打鉄が戦闘体勢に移行する。

本当ならラファールの方が慣れてるけど、贅沢は言えない。すぐに起動できる状態で置いてあったことだけでもラッキーなんだから。

「やああああっ!!」

ドンドンドンドントツ!!

通路の曲がり角を盾にしながら、アサルトライフルを連射する。

あの二人を倒せるだなんて思ってない。救援部隊が到着するまでの時間が稼げればいい。

消極的な戦いなら、得意だ。

「たったの一機か。しかも打鉄とはな」

「ハッ！ 舐めてんじゃねえぞっ！」

「きやあっ！」

ガガガガガガツ!!

反撃に苛烈な一斉射撃を受ける。

私は慌てて壁の後ろに隠れて、展開したグレネードのピンを抜いて通路に放り投げた。

「見え見えなんだよっ！」

「!?」

ガキユンツ！ と音がして、投げたグレネードが戻って来た。

投げた瞬間に実弾で撃ち返されたのだ、と気づいた時には、もうグレネードは私の目の前にあって――

ドカアアアツ!!

「うわああっ!?!」

爆風と破片を至近距離から浴びて、打鉄のシールドエネルギーが大きく削られる。

しかもこの隙を突いて、侵入者たちは一気に距離を詰めて来ていた。

「くうっ……!」

「遅い」

「逃がすかよっ！」

急いで次の曲がり角に逃げ込もうとしたけど、向こうの方が一步速い。

私はなんの遮蔽物もない通路で身を晒すことになり、無数の弾丸とレーザーに全身を撃ち抜かれた。

「ああああっ！」

たまらず吹き飛ばされて、通路に倒れ込む。

シールドエネルギーはあつという間になくなって、もうギリギリ展開するくらいしか残っていない。

——秒殺。ほんの一分さえも、私は戦えなかった。

「……………あ……………」

「あつけねえなあ、雑魚にもほどがあるぜ」

「拍子抜けだな。ただの蛮勇か」

打鉄はところどころの装甲が吹き飛んでいて、機能のほとんどを失っている。必死に立ち上がろうとしているのに、ピクリとも動いてくれなかった。

「さて、邪魔者は片付けたことだし」

「シエルターへ行くぞ。もうあまり時間が——」

「……………」

「……………あん？」

「動いて……………動いてよ……………！ 動いてっ！ 動いてえええええっ！！」

「……………」

通路に倒れ臥しながら無様にもがく私を、侵入者たちの冷たい視線が射抜く。

それでも私は、ただただ必死に、打鉄に願っていた。

「……………見苦しい。まだ立ち上がるつもりか」

「ハッ、てめえなんざ百人いたって楽勝なんだよ。立ち上がったところで、どうにもならねえぞ」

「動いて……………！ お願い、動いて、動いてっ！ 動いてよう……………！」

いくら願っても、打鉄は応えない。

次第に涙が溢れてきて、いつしか私は泣きじゃくりながら、ただ同じ言葉を繰り返すだけになっていた。

「……………うるせえな。だがまあ、根性だけは買ってやるよ」

「せめてもの情けだ。——苦しまないよう、殺してやる」

……………嫌だ。

死にたくない。

死ぬのは怖い。

だって、死んでしまつたら。

——みんなに、会えなくなる。

(……いのっち……)

ジャキン、という音。

八本の脚に取り付けられた銃口と、巨大なレーザーライフルが私に向けられる。

きつと次の瞬間には、私は打鉄ごとバラバラにされてしまうのだろう。

(……会いたいよ……)

私の大切なルームメイト。

私の大好きな友達。

傷だらけの彼女を助けたくて、また以前の彼女に戻って欲しくて、ここに来たのに。

(……ごめんね……いのっち……)

結局、私は。

何も、できなかった。

「……………なんだ？」

最初に気づいたのは、女の人。

通路の壁の向こうから、かすかに音が聴こえる。

初めはあの生体兵器かと思つたけれど、それとは違う音。聴き覚えのある音。

——聴き慣れた音。

そして。

「!? 壁が……!?」

「なんだあ!?!」

かなり頑丈なはずの壁に、突然、一筋の赤い光が走る。

その光は段々と太く、強くなっていって。

壁が、溶けている——そうわかった、次の瞬間。

「……………」

壁の向こうから、飛び出して来たのは。

「あ、あ……………」

淡く静かな、銀色の装甲と。

「あああ……………」

眩く煌めく、紫色の極光と。

「来てくれた……………」

長くて綺麗な、黒髪。

「来て、くれたんだ……………」

その人は、私の大切なルームメイトで、私の大好きな友達。

「——いのっち!!」

井上、真改。

第35話 銘無き刀

種を植えた。名も知らぬ、花の種を。

芽を育てた。物言わぬ、小さな命を。

葉が茂り、蕾が生り、そして咲いた。

——それは、真白ましろの花だった。

「いのっちー！」

「……退がれ……！」

私に背中を向けたまま、いのっちは侵入者たちを睨みつける。このままここにいたら邪魔になることはわかってるけれど、打鉄はもう動かない。ISを解除して逃げるっていう手もあるけれど、それだと流れ弾一発で確実に即死だ。

いくらいのっちでも、二対一では全ての弾丸は防ぎきれない。

（ど、どうしよう……!?!）

今は侵入者たちはいのっちと睨み合っているけど、すぐにも攻撃してくるだろう。そしてこの二人は、私を庇いながら戦えるような相手じゃない。

（どうすれば……!?!）

必死に考えていると、侵入者たちの後ろから何かが飛んで来た。

それは小型の月船みたいな見た目で、機銃やらミサイルやらが沢山取り付けられている。

『行っけえええええっ!!』

「ああっ!?! 無人機か!?!」

「こんなモノまであるとはな……!?!」

女の子が無人機に向き直って反撃し、女の人はいのっちに銃口を向

けて牽制している。だけどその意識は、ほんの僅かだけれど無人機にも割かれていた。

これなら、なんとかか……!」

『今だ、布仏君! I Sを解除して逃げるんだ!』

「はい!」

通信機から聴こえる如月社長の声に従って打鉄を解除し、社長が開けてくれた第五シェルターに一目散に逃げる。その間に何発か撃たれたけど、全てのいのつちが切り払ってくれた。

背後でシャッターが閉まり、どうにか一息つく。

「はあっ、はあっ、……ふうく……」

「まったく。とんでもない無茶をするねえ」

「……ごめんなさい」

「……まあいいや。君に貸しが出来たしねえ、うふふ」

「……てひひ」

そんなことを言いながらも、きつとあまり変なことはいしないだろう。なんだかんだでいい人たちだということとは、今回のことで良くわかった。だからきつと、私にひどいことをしたりはいしない。

………しいよね?

「っ! いのつちは!」

「井上君も階段で降りて来たみたいだねえ。まあ罨は粗方壊されたあとだから、それほど苦労しなかつただろうけど。地下には月光で床でも斬って来たのかな?」

「じゃあいのつちは、そんなに疲れてないんですね?」

「それでも二対一だ、かなり厳しいだろうねえ。それに、井上君自身も――」

話しながら、監視モニターの前に移動する。研究員さんが椅子を引いてくれたので座り、一番大きな、メインモニターを見る。

そこに映るいのつちは――

「……いのつち……」

――無表情。

優しいところや照れ屋なところを隠している、いつもの無表情とは

全然違う。

痛いのを、苦しいのを、誰にも知られないように、ただ静かに、黙って耐えているかのような無表情だ。

「朧月からのデータ、来たよ。……精神が安定していない。本調子にはほど遠いねえ」

「……そうだよね。あんなに苦しそうにしてたんだもん。すぐに元通りになんか、ならないよね……」

それなのに、いのちは来てくれた。

私や社長たちを、助けるために。

「私……守られて、ばっかりだね……」

また、無理をさせてしまう。

また、怪我をさせてしまう。

そうして、きつと——また、抱え込んでしまうんだろう。

私が——無力だから。

「それでもないさ」

「……え？」

すっかりマイナス思考に陥っていた私に、社長がいつも通りの声を掛ける。

そして気障っぽくウインクなんかしながら、人差し指を立てて、私に訊ねた。

「君はなんのためにここに来たのか。……もう、忘れてしまったかい？」

「……………あー！」

「そうだ。きつと井上君は、布仏君以上の無茶をするよ。そうやって傷ついた井上君を癒やし、支える力——それを手に入れるために、君は今、ここに居るのだろうか？」

椅子から立ち上がり、振り返る。

その視線の先には、ジュラルミンケースが置いてあって。

その中にあるのは、とても綺麗な、銀色の——

「ウチの子はどういうわけか、じゃじゃ馬ばかりでねえ。あの子だって例外じゃない。……君に、扱いきれるかな？」

「……当たり前じゃないですか。だって、私は——」

如月社長に。

網田主任に。

如月重工の社員さんと、研究員さんに。

「——みんなに認められて、ここに居るんですから」

「……そうだったねえ。いやまったく、若いっていいなあ、羨ましいなあ。そんなに熱い気持ちは、僕はどうの昔に失くしてしまったよ」

「またまた、嘘ばかり」

「うふふ、君にそう言われるということは、僕もまだまだ捨てたもんじゃないかな」

「そうですよ、てひひ」

「うふふ。……では布仏君、改めて、御披露目ということう」

如月社長はケースを持って来て、私の前に置いた。

ケースを開けて、その中から銀色の、一對のブレスレットを取り出す。

私はいつも余らせている制服の袖をまくって、両腕を社長に差し出した。

「仲良くしてやってくれ。如月家の可愛い末っ子、大事な大事な、僕たちの愛娘だ」

社長は愛おしそうに持っていたブレスレットを私の腕に嵌めると、名残惜しそうに手を離れた。

作った物に対する愛情が伝わってきて、それを託してくれることがとても嬉しくて。

「はい。これからよろしくね——「十六夜」」

だから私も、この子に相応しい人間になろうと、心に決めた。

「ところで十六夜って、女の子なんですか？」

「さあ？ ただの気分で言っただけだよ」

「随分派手に登場しやがって。何者だ、てめえ」
「……………」

如月社長の連絡を受け本音の救出のために駆けつけた真改は、八本の装甲脚が伸びる異形のI S、「アラクネ」を装備した女——
フアントム・タスク
「亡国機業」のエージェント、オータムと対峙していた。

恩のある如月重工を襲撃し、さらには本音を傷付けたオータムに対し怒りを滾らせる真改であったが、しかしオータムには斬り込む隙がなかった。

彼女がかなりの手練れであることを一目で見抜く。さらにはオータムの後ろで無人機を撃墜している手際から、もう一人の侵入者である少女——エムもまた、凄まじい使い手であると悟った。

「ハン、お姫様を守る騎士ってどこか？ いいねえ——グチャグチャにしてやりたくなるぜ」
「……………」

嗜虐に歪んだ笑みを浮かべるオータムに、真改は警戒レベルを一段階上げる。

能力ではなく、性質の問題だ。

——この女は、決して躊躇わない。

だがふと、真改とオータムは、ほぼ同時に気付いた。

「…………あ？ てめえ——」

「……………っ！」

そして真改は驚愕に目を見開き、対してオータムは——

「——は、ははっ。ハハハハハハハッ!!」

——狂喜した。

「まさかっ！ まさか、まさかまさか、まさかなあつ!! もう一度、てめえに逢えるとは思ってなかったぜえっ!!! ハハハハハハハッ!!」
「……………っ」

笑い続けるオータムを、真改は険しい目で睨み付ける。その視線の鋭さに、オータムは更に笑みを深めた。

「今回はあの時とはちげえ、お互いIS同士だっ!! さあ、あの時の続きだ、思う存分楽しもうぜっ!! 今度こそ——」

八本の装甲脚を大きく広げ、狂笑をあげながらオータムは真改に突撃する。

真改もまた月光を構え、犬歯を剥き出して迎え撃つ。

「今度こそ、八つ裂きにしてやるからよおおおおおっ!!!」

「オオオオオラアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「……ッ!!」

八本の装甲脚から繰り出される斬撃と銃撃を、月光で捌く。

高速機動と月光の攻撃力による一撃離脱を主戦術とする朧月にとって、地下エリアの通路は狭すぎる。真改は月輪の変則機動を使わず、片腕分しかないパワーアシストによる打ち合いを強いられていた。

「ハハッ！ すげえすげえ、やっぱすげえなあ、お前っ!! 全っ然当たらねえぞっ!!」

「……ッ!」

ISの性能を十分に発揮出来ない状況で、自らの剣技と体捌きだけで八本脚の猛攻を凌ぎ続ける真改。オータムの言う通りいまだ一撃たりともダメージを受けてはいないが、反撃も全く出来ていない。そこまで手が回らないのだ。月船で本社ビルまで来たために、月影と月蝕も装備していない。

それでも防御に徹していればこのまま攻撃を凌ぎきる自信はあったが、しかし敵はオータム一人ではない。雲霞の如く押し寄せる無人機の掃討を終えれば、エムもまた、攻撃に加わるだろう。

——その前に、片を付けねば。

その焦りが真改の眼を曇らせ、ほんの僅かな隙を何度か見落とさせ

ていた。

「オラオラオラアアアアアツ!!」

「……ちいつ……!」

時間が足りない。

せめて弾薬が底を尽きるまで粘れば、反撃の芽もあるというのに。

空間が足りない。

せめて月輪が使えるだけの広さがあれば、非力を埋めることが出来るのに。

そして何より、集中が足りていない。

自身をただ一振りの刀と成せれば、諸々の不利ごと、眼前の敵を斬り捨てる事が出来るのに――

『――そんなんじゃないやねえだろ、お前の剣は。全然似合わねーよ――』

(……黙れ……!)

幼なじみの少年の言葉が、真改を縛る。

言われなくとも、分かっていた。あんな剣は、自分が目指し憧れた「彼女」の剣と、あまりにもかけ離れていることは。

――だが、それでも。

『――お前は剣を振る時、いつも楽しそうにしてたじゃないかよ――』

(……邪魔を、するな……!)

それでは、守れないのだ。

真改には、「彼女」のような力はない。「彼女」のように誇り高い剣では、真改は戦えない。

だから、誇りも矜持も捨て去って、邪剣をこの身に刻んだというのに――

『お前の剣はこんなもんじゃねえ。それを、証明してやる。お前を追い掛けてきた、俺の剣で——』

(……お前に、なにが……！)

何故、自分などを目標にするのか。

——己はこんなにも、血に濡れているというのに。
何故、自分などに憧れるのか。

——己はこんなにも、業にまみれているというのに。
何故自分如きの剣を、あんなにも眩しそうに見るのか。

——己の剣は、殺すことしか出来ない、誇り無き殺人剣だというのに——

『——シンの剣は、すごくキレイだ——』

(なにが、分かると言うんだ——!!)

「オオオオオオオツ!!」

「ハハッ！ いいねえ、ノって来たじゃねえかつ!!」

さらに激しきを増していく剣戟に、真改の右腕が軋みをあげる。

昨日ようやく包帯がとれたばかりだ。まだ完治しているとは到底言えず、そんな状態でのいきなりの全力戦闘など本来なら厳禁なのだ。

月光を起動しても、長い装甲脚に阻まれて届かない。

最後の一步が、踏み込めない。

そして——

「……終わったぞ」

「……ッ！」

——タイムリミット。

「てめえ……！ 邪魔すんなっ!!」

「時間がないんだ。遊んでいる場合じゃない、さっさと片付けるぞ」

「ちいつ……！ ……仕方ねえ、まだまだ食い足りねえが、切り上げるか」

「……ッ！」

八本の装甲脚、六機のビット、巨大なレーザーライフル。計十五の銃口が真改に向けられる。

そしてそれらが、一斉に――

「……これだけの銃撃に、よくもまあ粘るものだ」

「さすがだよ、お前。……出来れば最後まで、タイマンで楽しみたかったけどな」

「……ぐっ……！」

――シールドエネルギー残量五%。機体各部、損傷甚大。……警告。これ以上の戦闘行動は危険――

(……脆弱……！)

激しい銃撃により荒れ果てた通路に膝をつき、真改はギシリと奥歯を噛む。

遮蔽物がなく回避行動もろくにとれないような狭い空間で、絶え間なく続く猛火に身を晒してなお数十分もの時間を凌いで見せたが、それももう限界だった。

正確な射撃は容易くかわされ、あるいは月光に焼き尽くされるけどと僅か数秒で悟った侵入者たちは、通路全体に散らすように弾丸をばら撒き、朧月の装甲をじわじわと削り取った。

シエルターに立てこもっているとはいえ事実上人質を取られている真改は一時撤退も出来ず、真っ向からそれを受けるしかなかったのである。

「壁を斬って来たのは失敗だったな。その剣の威力を知って、近付く

馬鹿はいない」

「お姫様を助けるために大急ぎだったもんな。シエルターに引きこもってる変態どもといい、足手まといばっかで大変だなあ？」

「……………」

親友たちを貶すオータムの言葉に真改は怒りを現すが、怒りに任せて飛びかかることはどうにかこらえた。

もはや勝ち目がなくなつた以上、時間を稼ぐしかない。こちらから攻めるなど論外だった。

しかし防御に徹しても、果たしてあとどれだけ耐えられるか。臙月は大破寸前、体力もかなり消耗しており、右腕に至つては随分前から感覚がない。これではオータム一人を相手にすることさえ困難だ。

「……………」

この状況を打開する策を、懸命に考える。だが策士でもない真改に妙案など浮かぶ筈もなく、止めを刺すべく向けられた銃口を睨み付けることしか出来ない。

正に絶対絶命。しかしそこに、プライベートチャンネルとはまた別の秘匿回線から通信が入る。

『井上君、聴こえるかね？』

『……………社長……………？』

『一旦仕切り直そう。僕が隙を作るから、君はシエルターに駆け込みたまえ』

『……………無茶……………』

『それでもないんだなあ、これが。いや、布仏君がすごくてねえ。想像以上だよ』

『……………本音が……………？』

『詳しい話は後にしよう。さあ、行くよ——』

「!? 隔壁が開いた……………!?」

「なんか来るぞっ!!」

固く閉ざされていたシエルターが突如として開き、通路に巨獣の咆哮の如きエグゾーストが轟く。

その爆音の発信源は、分厚い複合装甲で形作られた巨大な鉄塊だった。

「やれやれまったく、こういうのは僕のキャラじゃあないんだけどねえ!!」

圧倒的な排気量を誇るエンジンが大量のガソリンを一気に飲み干し燃焼させ、十六のタイヤを猛烈に回転させる。見るからに重そうな鉄塊が弾丸のように飛び出し、一直線に侵入者たちへと向かって行く。

「な、な、なんだありやあつ!!?」

「知るかつ!! とにかく撃てっ!!」

弾丸と熱線の豪雨を浴びせられ、バリアーのない鉄塊の装甲が見る見るうちに削り取られていく。だが装甲があまりにも分厚過ぎて、いくら削っても操縦席まで届く様子がない。

むしろ装甲が剥がれ落ちるたび軽くなり、さらに速度を増して突っ込んで来る鉄塊の様子に、侵入者たちが僅かに焦る。

「ちいつ、こんなモノまで作っていたとはな……!」

「いやいや、ついさつき作ったのさ!!」

一体誰に想像出来るだろう。

現在社長が乗り込み操縦している、戦車を遙かに凌駕する頑強さを持つ鉄塊が、ほんの数分前まではただの物資運搬用のフォークリフトだったなどと。

(ホントに、久々に驚かせてもらったよ、布仏君!)

十六夜を起動した本音は、操作の練習も兼ねて手始めに六台の大型フォークリフトを解体した。そしてそのエンジンを全て組み直し一基の巨大なエンジンに改造、さらには他の機械も解体しては様々な部品を転用、もしくは装甲板として取り付け、瞬く間にこの鉄塊を組み上げたのである。

そしてこの鉄塊には、フォークリフトのアームを改造したとは思えないほどに精密なクレーンアームが取り付けられていた。そのク

レーンアームが素早く動き、鉄塊に装備された唯一の兵器を取り出す。

それは、あの。

厚さ三メートルの強化ガラス越しに、本音を気絶させた。

——巨大な、デュアルパイルバンカー。

「どおおおおすこおおおおおおいっ!!」

間合いに入った如月社長は、渾身の気合いを込めてパイルバンカーを突き出す。

馬鹿げた量の炸薬に点火し、凶悪な二本の鉄杭が轟音とともに撃ち出され——

——外した。

「やつつぱりかあああああ!!」

しかし爆発の余波だけでも、侵入者たちの体勢を崩すには十分だった。

そして何より、あまりにも凄まじい威力は二人を怯ませるには十二分だった。

ドゴオオオオオンツ!!

「うおおおおおおっ!」

「アホかああああっ!」

床には巨大なクレーターが出来上がり、当たってもいない天井が崩れそうなほどに通路が揺れ、壁に至っては実際に崩れた。

その様を目の当たりにして二人がビビっている内にクレーンアームで真改を回収した社長は、一目散にシエルターへと引き返す。

「に、逃がすかあっ!!」

「調子に乗んなよっ!!」

「うわあつたつたつたつ!!」

逃げる社長の背中に弾丸の雨が浴びせられる。

社長が乗っている鉄塊は正面に装甲を集中させているため、背面の装甲は薄い。そこまで固めるほど素材に余裕がなかったのだ。

そしていくら高い防御力を持っていようと、鉄塊はISではない。

絶対防御など備わっている筈もなく、一発でも操縦席まで弾丸が通ればそれで終わりだ。

——さらに言えば、背面の装甲は既に限界だった。

(保つかな、シエルターまで……！)

「焼き尽くしてやる……！」

「今までの恨みだ、砕け散れっ!!」

「あ、やば」

一斉射撃が来る。

それは分かったが、社長にはそれを凌ぐ手段がない。

(仕方ないなあ、井上君だけでもシエルターに放り込むか)

そう考えて、クレーンアームを操作しようとしたら——

「……あれ？」

真改がいない。

慌てて振り向くと、クレーンアームから抜け出した真改が社長の背後を守るべく立ちはだかり、全身の装甲と月光の光で猛攻を受け止めていた。

「……ぐうっ……!!」

「井上君っ!!」

衝撃にシエルターの中まで吹き飛ばされ、絶対防御が発動する。だが真改が稼いだ僅かな時間に、なんとかシエルターまで辿り着いた。

「網田君っ！」

「はいっ！」

シエルターの隔壁がその重厚さからは想像もつかない速度で閉まる。

侵入者たちの追撃から際どいタイミングで逃れ、社長は真改の様子を確認しようとして——

「いのっちー！いのちいいいっ!!」

取り乱した本音に先を越された。

「いのっち、大丈夫!? いのっちー！」

「布仏君、落ち着いて」

「だ、だっていのっちが……！」

「気絶してるだけだよ。心配しなくていい」

「でも……!」

「そおいつ!!」

ズビシイッ!!

「あいたあつ!?!」

社長が本音の頭にチョップを叩き込む。意外に鋭い一撃に目を白黒させる本音。

社長は一つ溜め息をついて、本音に語りかけた。

「落ち着いて。そんな調子じゃ、十六夜は使えないよ」

「十六夜……?」

「十六夜なら、エネルギーの供給も装甲の修復もできる。君が、朧月を治すんだ」

「そんな……まだいのつちに戦わせるんですか?!」

「他に手がない。隔壁を破られれば、どちらにせよ僕らは皆殺しだ。」

井上君に、戦ってもらうしかない」

「そんな……」

「それに、井上君が目を覚ませば、また戦うよ。ボロボロの機体で」

「……!」

「だから、君が井上君を支えるんだ。井上君が、全力で戦えるように」

「……いのつち……」

真改が戦うということは、本音にも分かる。真改には、社長を見捨てることなど出来ないだろう。

——ここに、残るに決まっている。

「……なら……」
ならば。

「……それなら、私は……」

それならば、本音は。

「……私は、いのつちに……」

本音は、真改のために。

「……何を、してあげられるんだろう……」

一体何が、出来るだろう。

(……そんなこと……)

そんなことは。

(……決まってるよね)

そんなことは、決まってる。

(私……戦うよ)

真改が戦うのなら、自分も戦う。

(いのちちみたいには、無理だけど)

たとえ、真改のようには戦えなくとも。

(いのちとは、違うやり方で)

前に出て守ることは、出来なくても。

(私も……戦うからっ!!)

後ろから、支えることは出来る。

「だから……お願い」

そのために。

「私に……力を貸して——」

力を。

大切なルームメイトを。

大好きな友達を。

「——〔十六夜〕!!」

真改を。

支えることの出来る、力を。

——本音は、手に入れた。

第36話 双月（対峙編）

——操縦者の精神に損傷を確認。……………修復失敗——

——損傷箇所を検索。……………発見。深層領域に甚大な損傷を確認——

——操縦者の自己否定を確認。……………深層領域に潜行開始……………到達——

——読込開始。……………完了。人格の複製開始……………完了——

——懦弱。なんたる体たらくか。こんな様では、任せておけんな——

気絶している真改の横に跪き、本音は十六夜を起動した。展開されたバイザーを装着すると、凄まじい量の情報が、本音の脳に直接流れ込む。

その中には、真改の体——右腕の状況も含まれていた。

「ひどい……」

傷が治っていない状態での戦闘により、骨には無数の罅が入り、筋肉も所々が傷つき肌を青黒く変色させていた。

「……………いのち……」

こんな状態の真改を戦わせるなど、本音には許せない。だが真改が戦わなければこの場にいる全員の命が危ういことも、そんな状況であれば真改が本音の望みを見捨てるだろうことも理解している。

ならばどんなに嫌であろうと、真改に戦わせる他に手段はなく。

少しでも真改の負担を減らすことが、本音の役目であった。

「……………」

泣きそうになるのを唇を固く引き結んでこらえ、本音は制服の両袖をまくる。

白く細い腕に嵌められた一对の銀色のブレスレットが姿を現し、本音は幼子を迎え入れるように両腕を広げ、祈るように呟いた。

「——おいで」

ブレスレット——待機状態の十六夜が光を放ち、形を失っていく。それと同時に、本音の周囲に光の粒子が漂い始める。光の粒子は次第に増え、いくつかの塊に収束していき。

最終的に、銀色に輝く直径三十センチほどの十個の球体となって、本音を中心に周り始める。

数こそ多いものの、その一つ一つは——

(……まるで、月みたい……)

展開された十六夜の輝きに心を奪われそうになるが、今はそんな場合ではない。数回頭を振ってから、本音は再び真改に集中する。

「……始めるよ」

本音が十本の指を動かすと、それに合わせて十六夜が形を変える。球体が開いて内部から様々な工具が現れ、朧月の修理とエネルギーの供給を始めた。

「装甲は……普通のじゃダメだね」

破損した装甲の修復は、通常の工具では不可能だ。そこで本音は、十六夜に備わる機能、「暁」と「黄昏」を起動した。

すると五機の十六夜から細い針が伸びその先端で装甲の破損箇所をなぞり、残りの五機は装甲の破片や、シエルター内の僅かなIS用予備パーツを内部に取り込んでいく。

途端に、本音の脳に送られてくる情報量が爆発的に増加する。十六夜内で解析された素材の分子構成と朧月の装甲のそれを比較、照合し、使える物を精査しているのだ。

(これとこれと……あと、これ)

黄昏により素材を取り込んだ十六夜が、朧月を解析している十六夜

に素材を転送する。そして分解された素材を再構築して、暁で朧月の装甲に繋げていった。

「……凄いですねえ、布仏さん。もう十六夜を使いこなしてますよ」
「十六夜の補助があると言っても、処理しなきゃならない情報は馬鹿げた量なんだけどねえ。しかもそれと装甲の修復も同時にやってる。器用なものだねえ」

十六夜は、それぞれが十本の指に対応している。脳から指に送られる微弱な電気信号に反応して動いているのだ。

つまり本音は、指ごとに別々の作業を並行して行っていることになる。十六夜から補助を受けてはいるが、十六夜のテストをした如月重工の研究員たちには精々四機までが限界だった。しかもそれは、解析と修復を別々に行つてのものである。

その倍以上の作業をほぼぶつつけ本番でこなして見せた本音は社長たちの予想を遥かに超えており、飄々とした態度でありながらも内心ではかなり驚いていた。

「隔壁はどれくらい保つ？」

「十分前後かと。この調子なら、どうにか間に合いますかねえ」

「そうだねえ。……布仏君が、このペースを維持出来ればね」

十六夜を最大稼働させている本音の脳には、常人の限界を超えた量の情報が送られて来ている。それを処理しながら同時に精密極まる作業も行うなど、無謀としか言いようがない。

事実社長たちも、解析と修復は別々に行うことを前提に設計していたのだ。十機も作ったのはただ調子に乗って作り過ぎただけであり、完成してから反省したほどであった。

「作つた物は必ず使い切る。僕らの誇りを、こんな小さな女の子が守ってくれるだなんてねえ」

本音はあまりの情報量に頭が破裂するのではないかと思うほどの頭痛に耐えながら、必死に朧月を直している。精神力がいつまで保つのか心配ではあったが、そこは本音を信じるしかない。

「では私たちも、私たちにやれることをやりましょう」

「そうだねえ。子供だけ働かせて大人が休んでるだなんて、格好がつ

かないからねえ」

そう言つて、網田主任はまだ使える防衛システムがないかを、如月社長は携帯用デバイスで隼月のデータを確認する。

——だが。

「さて、と。……ん？ ……これは……」

社長は困惑した。

隼月のデータを映し出す携帯用デバイスのディスプレイに、予想外の単語が表示されたからであつた。

(……自閉モードだつて？ こんな時に?)

外部からの入力を一切受け付けず、外部への出力も一切行わない。

装甲やエネルギーバイパス等には物理的に干渉できるが、ISの文字通りの核である、コアには触れることさえ出来ない。

完全なる、アクセス拒絶であつた。

(ワガママを言うような子じゃあないんだけどねえ。一体何を考えて……いや)

「一体、何をしているんだい——隼月」

鉄の匂いが混じつた、乾ききつた風。

草木の一本すら存在しない、死に絶えた大地。

廃墟となつて久しい建築物が、墓標のように並び立つ。

——終わってしまった世界。

そうとしか言いようのない光景が、己の前に広がっていた。

「……ここは、まさか……」

見覚えがある。

ここはかつて、己が——己たちが、駆け抜けた戦場。

「懐かしいか」

「っ!? 何者!?!」

声は背後から聞こえた。

いくら呆然としていてもまるで気配を感じられなかったことに驚愕しつつ、振り返る。

そこには、一人の男が立っていた。

顔は逆光になってよく見えないが、鍛え抜かれた長身と隙のない立ち姿から、相当な手練れだろうことは分かる。

かつての己ならばともかく、今の非力な少女の身では、恐らく勝てないだろう。

「懐かしいか。今は亡き仲間たちと生きた世界、数多の命を斬り捨てた戦場が」

「何故知っている……!?!」

男の言葉に返してから、ふと気付く。

声に出したつもりはなかったのに、するりと言葉が出た。話すことが極端に苦手な己には考えられないことである。

「当然。ここはお前の記憶から形作られた、お前の中の世界。わざわざ意識せずとも、お前の心は声になる」

「……己の中の世界だと？ 現実ではないというのか」

問うと、男はあからさまに呆れたような気配を漏らした。

「現実。お前にとってのそれはなんだ。かつての戦火の絶えることのない、穢れきった世界か。今の平和で平穏な、優しく美しい世界か」
「なに……?」

「疑念があったはずだ。何故自分がここにいるのか。この世界に生きる資格が自分にあるのか。ただ殺し続け、その果てに何も為すことの出来なかった自分に」

「何を……」

「自分はただ、叶わなかったモノを夢見ているだけなのではないか——そう思ったことが、ただの一度も無いと、お前は言い切れるか」
「……言い切れるものか。」

一度どころではない、何度も何度も、数えるのも馬鹿らしいほどに、そんなことは考えてきた。

この幸福な時間は、全て己の妄想、己の夢なのではないかと。

ある時突然、目覚めるのではないかと。

——死の間際の、あの冷たいコクピットの中で。

「夢か現実か。それを判断するのはお前だ。所詮そんなものは、自分がどう認識するかでしかないのだから」

「己の認識だど？」

「そうだ。平和な世界。お前たちが目指した人類の黄金の時代、それとはまた別の、お前たちが求めたモノ。」

……否、汚染され尽くした世界で生きていたお前たちには、想像すらできなかった楽園。そこで二度目の生を受けたことが、幸運な現実なのか、幸福な夢なのか。

——それを決めるのは、お前だ」

「己が……決めるだど？」

「人間の認識など、所詮は脳内の電気信号に過ぎない。覚めない夢があるのなら、それが本人にとっての現実だ」

「……こう言いたいのか？ 己が第二の生だと思っていたモノは、ただの夢に過ぎないと」

己の問いに、男は鼻を鳴らして答えた。

「それはお前が決めることだと言った。……問題は夢か現実かではない。そんなものは、いくら問うたところで答えなど出はしない。問題は——」

「——お前が、何者なのかということだ」

ぞわり、と。

言いようのない、悪寒を感じた。

「二度目の生。言葉にすればそれだけだが、実際はそう単純なモノではない。」

……お前は何者だ。井上真改という少女か、真改という殺戮者か」
「……なに、を……」

「井上真改として生まれたにもかかわらず、お前は未だに過去の記憶に囚われている。真改の記憶に。だがお前は真改ではなく、しかし真

改としての記憶を持つが故に、井上真改にも成りきれん。

……では、お前は何者だ」

「己、は……」

「——亡霊」

「!!」

男の言葉が己を抉る。

身動きが取れなくなるほどに、その言葉は己の心に深く突き刺さった。

「お前は亡霊だ。死してなお戦い続ける、血に飢えた亡霊」

「違う、己は……」

「戦うことしか出来ないから、か？」

「っ……!」

男の言葉には容赦がない。己が考えないようにしてきたことを、己以上に正確に見抜いている。

「確かにお前の才は戦いでこそ発揮される。だが戦う時、お前は、楽しんでいなかったか——」

「——殺すことを」

「っ!!」

己がORCAとなった時。

何もかもがどうでもよくなり、世界に復讐するために戦い始めた時。

無数の銃弾を掻き分け、分厚い装甲ごと敵を切り捨てた時。

確かに、悦びを感じていた。

それは、「彼女」の剣で敵を討ったことに対するものだったか？

殺すこと自体を、愉しんではいなかったと。

復讐に酔ってはいなかったと。

本当に、言い切れるか——？

「……「彼女」は、戦いを楽しんでいたな」

「っ！ 貴様……!」

この男、何故「彼女」のことを……いや、今はそんなことはいい。

もし「彼女」のことまで貶めようと言うのなら、その声が音になる前に、貴様の喉笛を――

「だが、「彼女」は純粹だった。強敵と戦い勝利することを誇り、弱者を殺すことを心底から嫌っていた。……剣だけではない。在り方において、お前は「彼女」に遠く及ばない」

「……そんなことは、分かっている」

「分かっているだけだ。お前は自分には出来ないと、容易く諦めた。「彼女」の生き様ではなく、強さだけを追い掛けた。……それならば追いつけるとでも思ったか？」

「彼女」のように、生きたかった。

だが己は、「彼女」のようにには戦えなかった。

だから己は、邪剣を身に付けた。

「彼女」の剣ではなく、「彼女」の力だけを追い掛けた。

それは「彼女」に対する、侮辱でしかないというのに――

「半端。お前は何もかもが中途半端だ。全てを懸けて目指した筈の目標で妥協し、殺戮者でありながら平和な世界に縋りつく。そんな様で、一体何を為せるというのだ」

……何も言い返せなかった。

「彼女」のことだけではない。福音と戦った時、あれほど殺しておきながら、今更になつて躊躇った。

――平穏な日常を、切り捨てられなかった。

「かつての世界と今の世界はあまりに違う。平和を知らず、力を神と崇めていた世界に生まれ育ったお前が、まともな生き方など出来る筈がない。

――なのに、なぜそうまで縋りつく。その姿が無様とは思わないのか」

「それは……」

守ると、誓ったから。

この世界で出来た、初めての友人を。

あの、心優しい少年を。

「……一夏を、皆を守るために。あいつらは、己なんぞを慕ってくれ

た。己を親友と呼んでくれた。……守りたいんだ、彼らを」

「そのために、無様であろうと継りつくか」

それが、今の己の、生きる意味。

——だが。

「守れはしない。お前には」

男はそれを否定し。

己自身も、そう思ってしまったている。

「邪剣を身に付けておきながら、未だ正道の剣に未練がある。一度諦め捨て去ったモノを、今になって求めている。……そんな半端な覚悟で、何を守れるというのだ」

男の言うとおりで。守るということは容易いことではない。強大な力、折れない決意、揺るぎなき覚悟があつてなお守れぬことも多い。ましてや、それらを一つも持たない己には。

「何が守るだ。守れなかっただろう、お前は。正道を諦め切れず、邪道も捨て切れない。その迷いが何をもたらしたか、忘れてはいまい」

「……己のせいで、一夏が傷ついた。己の迷いが、一夏を傷つけた」
「そうだ。邪道であろうと正道であろうと、どちらかに全てを懸けていれば、あんなことにはならなかったろう。」

……どちらかを選べ。「彼女」が振るった正道の剣か、お前が身に付けた邪道の剣か」

男の言葉に、再び迷う。

一度は諦めた、「彼女」の剣。

この平和な世界で、もう一度、目指そうと思った。

だが再び戦いに身を投じた時、「彼女」の剣では勝てないと感じた時、また、「彼女」の剣を捨てようとして——

——今度は、捨てられなかった。

完成には程遠い、「彼女」の剣の真似事を。

「綺麗だ」と、言われてしまったから。

「……懦弱。この期に及んで、まだ選べんか。……やはりお前には、任せとおけん」

「……何を言っている?..」

「まだ気付かんとはな。やはり滅多に話さぬから、己の声など覚えてはいないか」

——ふと気付くと、日が沈んでいた。

太陽に代わり、空には満月が浮かんでいる。

そして、月明かりに照らし出された男の顔には。

見覚えが、あった。

「……馬鹿な……お前は……」

「なにを驚いている。言った筈だ、ここはお前の記憶から作られたと。

——ならば己がいることに、なんの不思議がある？」

今まで逆光により見えなかった、男の顔。

それは——

「……己、だと……？」

「否。お前のような亡霊ではない。己は確たる意志を持って、此処にいる」

「意志だと……？ 一体、なんの——」

「知れたこと。お前では、また繰り返し返す。何も為せず、何も得られず、何も遺せず、何も守れず、二度目の生を終えるだろう。」

——己は、それを認めない」

男——かつて真改と呼ばれた者と同じ姿をした男の周囲に、光の粒子が溢れ出る。

その様は、IS展開時のモノと全く同じだった。

「お前では守れん。故に、己がお前に成り代わる。「彼女」の剣ではなく、お前の剣で、敵を斬り捨てる」

そうして、男はISを展開した。

——否。それは、ISではない。

「守るなど、土台無理なことだった。故に守るのではなく、その必要が生じる前に、全て斬り捨てる」

全身を覆う白い装甲。

細く鋭いそのカタチは、一振りの刀を思わせる。

「お前には、それすらも出来ん。人にも鬼にも成れぬ、お前には」
背には爆発的な加速を生み出す補助ブースター。

肩には敵の目を眩ませ隙を作る、閃光弾の発射装置。

左手には牽制、迎撃用のマシンガン。

そして右手には——「彼女」の剣。

「お前の役目は己が果たす。守るための剣ではなく、殺すための剣となる。——元より剣とは、そのための道具に過ぎない」

それは世界を相手に僅か二十六機で完勝した、最強の兵器。

絶対的な力と引き換えに致命的な汚染を齎す、最悪の凶器。

「故に。お前は消えろ、亡霊」

それは。

かつて数多の戦場を、共に斬り抜けた。

——己の、愛刀。

「……「スプリットムーン」……!!」

第37話 双月（克己編）

悔いは無い。最後に、存分に戦えた。

だが、もし誰か、これを聴く者がいたら。

一つだけ、私の願いを叶えて欲しい。

……あいつに、伝えてくれ。

私の剣を託せる者は。託したいと、思う者は。

お前しかいない。

強くなれ。私よりも、誰よりも。

……お前に、美しいと言われたこと。

今でも、誇りに思っている。

「消え去れ、亡霊——！」

「ちいっ!!」

スプリットムーン——IS程度の大きさに縮小されているが——を纏った男が「彼女」の剣を起動し、一気に斬り掛かって来た。己も朧月を起動し、月光の刃で男を迎撃する。

二振りの紫色の光の刃が噛み合い、圧倒的な熱量に空気が爆発、己たちを弾き飛ばした。

「互角。……忌まわしい。まずはその偽物を、右腕ごと斬り落としてくれる！」

「ぬう……！」

再び振るわれる、「彼女」の剣と月光。今度は踏ん張り、爆発に弾き飛ばされることはなかった。

月光を振り抜いた勢いのままに月輪を起動、遠心力と推進力を載せて斬りつける。物理ブレードとして最高クラスの威力を持つ月輪の一撃が男に迫り――

ガギイツ!!

「!?」

――「彼女」の剣に、防がれた。

「笑止。これが最強の兵器とは。所詮は遊戯に使われる玩具か」

月輪を右腕一本で受けきり、男は膝蹴りを繰り返す。膝に取り付けられたブレードが、己の喉を目掛けて疾る。

頭を傾けてそれをかわすと、再び「彼女」の剣が振るわれた。

「くっー！」

身を屈めて避け、下から突き上げるように月光を繰り返すが、男は己の肩に蹴りを叩き込んでそれを止めた。

「温い。そんな剣では、己には届かん」

上段から「彼女」の剣が振り下ろされる。体を捻りつつ全速力で後退するが、切っ先に装甲を抉られる。

「ぐう……！」

地の筋力によるものか機体のパワーアシストによるものかは分からないが、力に差が有り過ぎる。手足の届く距離では不利だ。

退がった勢いのままに距離を取り、何故か展開できた月影を起動するが――

「遅い」

「っ!!」

轟音と共に発動したクイックブーストで、一瞬で間合いを詰められた。

「かっつての愛刀、その加速すら忘れたか」

……そう、スプリットムーンは加速力に特化している。総合的な機動力はむしろ低い部類に入るが、前進、それも瞬間的な前進――踏み

込みにおいては最速に近い。

「彼女」から受け継いだ専用のブースターと、それでも不足した力量を補うための追加ブースターにより、爆発的な加速を得ているからだ。

「疾っ！」

紫色の極光が迫る。

退がっても逃げ切れないことは明白だ。故に水月を起動し、「彼女」の剣を潜りすれ違うように男の横を抜ける。

そのまま再び距離を取り、今度は月輪を駆使しての三次元機動を行うが、男は曲線の機動の先にクイツクブーストで一瞬で回り込んで来た。

「無様。剣士が逃げに回るとは。そんな様で、銃を相手に戦えるものかっ!!」

「またも振るわれる、「彼女」の剣。

——どう足掻いても、逃げられない。

ならば。

「剣で戦え。それだけが、己たちの寄る辺だろう——！」

「お……お、オオオオオッ!!」

「この剣に、賭けるしかない——！」

「オオオオオオッ!!」

「そうだ、それでいい。それでこそ、お前を倒す意味があるっ!!」

二振りの光の剣が、幾度となく交わる。

その度に膨大な熱量により剣が弾け飛び、すぐさま再起動した剣で斬り結ぶ。熱により膨張した空気が大地を抉り、戦闘の傷を刻んでいく。

「オオオオオアアッ!!」

「温いっ!! その程度の剣で、「彼女」に追い付けるものかっ!!」

——届かない。

己の剣はいくら振るっても、男には届かない。逆に男の剣は、浅くではあるが幾度も己の装甲を削っていた。

(なんだ、何が足りない!?)

「軟弱っ!! 踏み込みに迷いが見えるぞ! そんな様で、一体何を為すつもりだ!!」

——迷い。

ずっと、抱えてきた。

この世界に生まれ変わり、あまりにも平和な様に打ちのめされ、感動し。

ここならば。ここならば、もう邪剣に頼らずとも。

そう思っつて、もう一度、「彼女」の剣を指した。

「ぐうあっ……!!」

「その程度かっ!! その程度の剣で、誰を倒せる!! 何を為せる——!!」

だが、守れなかった。

「彼女」の剣の真似事は、敵に届かなかった。

そして再び邪剣を振るい、しかしそれさえも届かなかった。

……「彼女」の剣を、捨て切れなかったから。

本当に、綺麗なモノを見るように。

眩しそうに、目を細めて。

かつて「彼女」を見ていた、己のように。

——あいつが、己の剣を、見ていたから。

「才など元よりなく、鍛え抜いた身体も失った! そのお前の、精神さえも錆び付けば、一体何が残ると言うのだ!!」

……残らない。何も。

迷うことなく、怯むことなく斬り掛かる。

それだけが、己に唯一、出来ることなのだから。

ならば、剣に迷いが生まれれば。

己にはもう、何も——

「守れるものか、お前などに!」

……否! お前には、その資格すらも、有りはしない——!!」

……それでも、守りたかった。

この世界で出会った、優しい人たち。

彼らの側は、とても心地良かったから。

ずっとここに居たいと、思ったから。

だから——守りたかったのだ。

「お前を縛るモノはなんだ！」「彼女」の剣への未練か！ならば捨てる、元より一度諦めたモノ、届きはしないと分かっているモノ！それを捨てるのは、容易いことだろう——！」

そうだ。捨てるのは容易い。またあの頃の、世界に挑んでいた己に戻るだけ。

己も、そう思っていた。

なのに捨て切れなくて、何故捨てられなかったのか分からなくて。そして、捨てようとする己を悲しそうに見る一夏の姿に、気付いてしまった。

己が守りたかったのは、命だけではないと。

己が何より守りたかったのは、彼らの笑顔だったのだと。

だから、皆が綺麗だと言ってくれた「彼女」の剣を、捨てられなかった。

それでは勝てないと、分かっていたも。

己は——「彼女」の剣を、振るいたかったのだ。

「まだ縫りつくかっ!!」ならばその未練、地獄の底まで抱いて逝け——!!」

男の猛攻を凌ぎ続けるのも限界となり、そうしてついに、「彼女」の剣が月輪を斬り飛ばす。

返す刃に装甲を深々と抉られ吹き飛ばされ、荒れ果てた大地に倒れ込んだ。

「ぐっ……—」

起き上がろうとしたところで、男に右腕を踏みつけられる。身動きが取れなくなったところで男は再び剣を振るい、月影と月蝕を破壊した。

「王手。……話にならん。結局お前は、まともに剣を振るうことも出

来んか」

「が……は……」

己を見下ろすカメラアイが、ひどく冷たい輝きを放つ。

逃れようと必死にもがくが、男の脚はびくともしない。

「非力。この程度の危難すら跳ね除けられんとは。お前に振るうには、「彼女」の剣は勿体無かったか」

「ぐう……いー」

男は構えていた「彼女」の剣を下ろし、代わりに左手に持っているマシンガンを持ち上げた。

それをゆつくりと、己の胸——心臓へと突きつける。

そして——

「終止。……消えろ、亡霊」

躊躇うことなく。引き金が、引かれた。

「はあっ、はあっ、はあっ……!」

「……そろそろ、限界かな」

あれから、五分がたった。ほんの僅かな時間だが、本音の精神を削り切るには十分すぎる時間だった。

しかし如月社長からすれば、十六夜を五分間全力稼働させるなど、想像の域を超えた偉業であった。

「まったく、僕も人を見る目ががないなあ。布仏君のことは、見たままの緩い子だと思ってたんだけどねえ」

それは、心からの賞賛の言葉だった。

本音は今日初めて十六夜を扱った。それは本音が十六夜に慣れていないというだけでなく、十六夜もまた、本音には慣れていないということだ。

十六夜には学習機能がある。使用者のクセや思考パターンを学習し、細かな補正を行うのだ。

十六夜が使用者のことを熟知し、最適なサポートを行えるように

なって初めて十全の機能を発揮出来るようになるのである。

つまり、まだ十六夜は本音の「専用機」になっていない。にも拘わらず、本音は既に十六夜の機能を想像以上に引き出している。

本音が十六夜を、十六夜が本音を真に理解した時、一体どれほどのスペックを魅せてくれるのか――

それが今から楽しみで仕方なかった。

「ぐ、う……あ、ああああっ!!」

「おっと」

ついに限界に達したのか、悲鳴を上げて本音が倒れる。

硬い床に頭を打ち付ける直前で、社長が本音の体を支えた。

「……これ以上は無理そうだねえ。朧月もどうか戦闘に耐えられるくらいには直ったし、もう――」

「あ、う……うううう……」

もうほとんど意識も無いのだろう、社長の声に対する返答は、意味を成さない呻き声だった。

どうやら社長が思っていた以上に無理をしていたらしく、本音の容態は危険域寸前だった。

「これはまずい。誰か、医療ユニットを――」

「い……のっ、ち……」

「……まさか」

社長は目を見開き、驚愕を露わにした。

――十六夜が、まだ動いている。

ゆらゆらと頼りなく、しかしこの上なく正確に。

朧月の修復を、続けていた。

「……布仏君。これ以上は危険だ。最悪――死ぬよ?」

「が……ん、ばっ……て……い、の………が、ん……」

「……」

うわごとのように眩きながら、朦朧とする意識で、本音は必死に十六夜を操り続ける。

自らに課した戦いを、最後まで戦い抜く。

その覚悟を、細く小さな体で背負う少女の姿に、如月社長は呆れた

ように溜め息を漏らした。

「……まったく。君に何かあれば、責任を取るのは僕んだけどねえ。そこんとこわかってるのかねえ、この子は」

そうボヤいて見せたものの、当然本音には届いていない。体の制御すら手放して、全ての意識を十六夜に集中させているのだから。

その姿に、如月社長は昔のことを思い出した。彼がまだ、一介の技術者だった頃のことを。

より大規模な研究、開発を、自分の好きなように行うために如月重工を立ち上げたものの、社長という立場は存外窮屈なものだった。

他の会社経営者たちに比べれば相当好き勝手にやってはいるが、それでも昔の如月社長を知る者からすれば、皆が皆、口を揃えて「随分大人しくなった」と言うだろう。

勿論、現状に不満は微塵もない。会社という「力」のおかげで、個人では不可能なレベルの活動が出来るし、なにより自分と同じような志を持つ仲間たちとの仕事は想像以上に楽しいと感じている。

だがそれでも、時にふと、思ってしまうのだ。

——あの頃のように。何もかも忘れて、己の全てを懸けて、開発に打ち込みたい、と。

「い……の………が、ん……」

「……………」

その如月社長の目には、今まさに己の全てを懸けて戦っている本音の姿は、ひどく眩しく映った。

「社長」という責任ある立場からすれば、今すぐに本音を止めるべきだ。

だが「如月」という個人は、本音を応援したいと思っている。

故に、「如月社長」は——

「……ま、今更体裁なんてどうでもいいか。これ以上悪くなるほど、評判が良いわけでもないしねえ」

——もう一度、好き勝手にやろうと決めた。

「……ここで止めるのも、野暮ってものだしねえ。……死ぬ気でやりたまえ、布仏君。君の覚悟、この場にいる全員で、見届けさせてもらおうよ」

「いやあ、それにしても、女の子を抱きしめるだなんて何年振りかなあ。柔らかいし温かいし、抱き枕にしたいなあ」

「ぐっふっ……！」

「賞賛。頑強さだけは認めよう。……だがそれも、もう限界か」

弾切れになったマシンガン捨て、男はもう一度、「彼女」の剣を構えた。

己はシールドエネルギーの大半を消耗し、己自身も肋骨が数本砕けたのか、呼吸の度に凄まじい激痛が走る。

「何か言い遺すことはあるか。内容によっては、叶えよう」

「は……が、はあ……」

何かを言おうとしたが、痛みで言葉にならなかった。

……否。何を言おうとしたのか、自分でも分かっていないだけだ。

「慰めにもならぬだろうが……安心しろ。お前の生は、己が引き継ぐ。お前の仲間たちは、己の剣で守って見せよう」

「……ま……も……」

……それで、良いのかも知れない。

この男ならば、迷うことはないだろう。

きつと、皆を。

一夏たちを、守り抜く筈だ――

『俺は、織斑一夏。お前は、なんて名前なんだ？』

「……………」

己では守れない。

剣に迷い、生き方に迷う、己では。

ならば、この男に任せた方が確実だ。

『お前の剣は、私の、憧れだから』

「……………っ、……………」

己は既に一度死んだ身だ。

大人しく退場すべきだ。

己がいなくとも。

この男が、きつと——

『よし！ それじゃあ、これからもよろしくね、シン！』

「……………お……………」

守る。

きつと、守るだろう。

なら、それでいい。

それが、己の——

——願い、だったか？

『わたくしも……………貴女と戦えたこと、誇りに思います』

「……………お……………」

守れさえすれば、それでいいのか。

己はそんな聖人だったか。

……………否。己が求めたモノは、己が、望んだモノは——

『シャルロット・デュノア。それが、お母さんがくれた、僕の本当の名
前』

「……………お……………お、おとおお……………！」

思い出せ。あの温もりを。

思い出せ。あの笑顔を。

思い出せ。彼らと過ごした時間、それが、いかに幸福だったかを。

『まさか。……相棒と戦う理由など、私にはない』

「……ぐ、う、おおおお……!」

守ることが出来れば、それで満足なのか。

その果てに消えても、納得出来るのか。

……何を、馬鹿なことを。

『私はね、布仏本音って言うんだ』

「……ぐうう、ああああ……!」

出来るものか。

出来る筈がない。

そんなに容易く、納得出来るのなら。

初めから、生まれ変わりはしない——!

「オオオオオオオオアアアアアアアアアアアツ!!!」

「なにっ……!?!」

渾身の力で体を起こす。踏みつけられている右腕がミシミシと不穏な音を立てるが、そんなことはどうでもいい。

今はただ、この男を、この男の言葉を、真っ正面から跳ね除ける——!!

「まだ足掻くか。お前では何も為せんと、まだ分からんか」

「分からん……! 何度言われようと、何度突き付けられようと!!」

死んでも分からん阿呆だから、己は今、ここにいるっ!!」

己が死んだ時。

未練があった。

死に切れなかった。

何も為せず、何も得られず、何も遺せず、何も守れず。

そんな死に様が、許せなかった。

——だが。

「お前では守れん。なのに何故、縋り付く」

「知れたこと。……そもそも、初めから間違えていたからだ」

「……なに?」

そう、ずっと、間違えていた。

死ぬ前から。

死んだ後も、ずっと。

「守るなどと、何を偉そうに。自分の身も守れぬ未熟者だから、死んだのだろうが。そんな様で守るだど？ ……何様のつもりだ、戯けが—
—!!」

ああ、まったく。そんな簡単な、当たり前なことさえ気付かなかつたとは。

自分の間抜け振りに、心底から腹が立つ。殴り飛ばしてやりたい。 ……丁度良い。己と同じ姿の男なら、今、目の前に居る—!

——コード認証。〔月渡〕、起動——

「ガアアアアアアアツ!!」

「っ!」

水月のカートリッジが全弾起爆。轟音が響き渡り、巨大なクレ—ターが生まれる。

その対価に手に入れた膨大な運動エネルギーが男を跳ね飛ばし、大きく体勢を崩させた。

がら空き、隙だらけ。

己は右拳を、有りつ丈の力で握り締め——

「喰……らあ、えええええっ!!」

「ぐあっ!!」

男の顔面に、叩き付けた。

「無様っ!! 己如きの拳もかわせんかつ!!」

「ちいつ、ただの拳打だどっ!? 侮るか……!!」

「否。今の一撃は開戦の銅鑼、ただの合図だ。 ……己を殺し、己に成り代わるのだろう。ならばこれは——「決闘」だ」

「貴様……—」

……そう、「決闘」だ。

互いの全てを懸けて、どちらかの意を通す。

古より続く、最も単純で、最も愚かな決定法。

——「彼女」が最もこだわった、「戦の流儀」。

「貴様……亡霊風情が、戦士を気取るか……！」

「……亡霊ではない。己は……己の名は」

「井上、真改」

「……「彼女」の剣を選ぶか。汗を流し血を流し、無数の死闘の果てに身に付けた、お前の剣ではなく」

「応」

「何故だ。何故、今更になって、自らの剣を捨てる」

「それが、己の夢だからだ」

「彼女」の剣に憧れた。

「彼女」の剣を目指した。

そして、一度は諦めた。

「何故だ。何故目指す。届かぬと分かっている筈だ。叶わぬと分かっている筈だ。なのに、何故」

「それがどうした。届かぬと分かっている。叶わぬと分かっている。諦め切れないから、目指さずにはいられないから、「夢」と言うのだろうか——!!」

月光を起動。

一直線に、男を目掛けて斬り掛かる。

「愚劣。お前の振るう「彼女」の剣が、お前の剣を振るう己に届くものかっ！」

男も「彼女」の剣を起動し、応じる。

交わった刃が炸裂し、熱風が己の頬を撫でた。

「届かぬのなら」

「な——」

刃を振り抜いた体勢のまま。

すぐさま振り振り下ろされる二撃目の、内側へ。

さらに、一步。

「届くまで、踏み込むのみ」

「——に!？」

腕を引き力を溜め、真っ直ぐに突き出す。男は咄嗟に上体を捻ってかわしたが、胸の装甲を浅く抉った。

「……馬鹿な」

「この世界に生まれ十五年。流石に赤子の時分には無理だったが、小枝を持てるようになってからは、鍛錬を欠かしたことはない。

……お前よりは、「彼女」の剣に近付いていると自負している」
ずつと憧れ目指し続けた、「彼女」の剣。

今も、この目に焼き付いている。手本とすべきものは、一つも余さず記憶している。

故に、どれほど遅い歩みであろうと。

——己はもう、迷わない。

「……ただ開き直ったわけではないようだな」

「生憎。言っただろう、守るなどというのは間違いだったと」

もう一度、月光を起動する。

月影も月蝕も、月輪も水月も既になく、後はこの剣だけだ。

加えて己自身も満身創痍、声を発するだけで全身がひどく痛む。

……だと、いうのに。

(不思議なものだ。負ける気がせん)

何十、何百と刃が振るわれ、その度に巻き起こる爆風が、己の体を痛めつける。

その痛みさえも、今の己には気にならない。

「守らぬというのか、お前の仲間を!」

「応、守らん。あいつらには、己の守護など必要ない」

「守りたかったというのは偽りか!」

「否。勘違いをしていただけだ」

「勘違いだと……!?!」

「守りたかったのではない。己はただ、あいつらの隣で、あいつらと共に、歩みたかっただけだ!」

一夏たちだけではない。己もまた、未熟者なのだ。ならば彼らと共に歩むことに、なんの矛盾がある。

己はただ、「井上真改」という少女として。

もう一度、「彼女」の剣を指すだけだ。

「守るのではなく、支え合いたい。己はあいつらの守護者ではなく、友人でありたいだけだ」

「友人だど？ 殺戮者であるお前が、なにをほざく!!」

「……そう、己は殺戮者だ。多くの命を奪って来た。言い訳はせん、裁くのならば好きにしろ。」

……だが、その果てに目指したモノは、誰にも否定させん——!」
人類に、黄金の時代を。復讐のために始めた戦いが、いつしか皆と

同じ思いを持っていた。

だからこそ。平和なこの世界を、愛していると。

今ならば、胸を張って、言い切れる。

「独善……! お前は自分のために生きようと言うのか! あれほどのことをして来たお前がっ!!」

「そうだ、その何が悪い! 自らの夢を追い掛ける、ただそれだけのことだ! 頼まれもしない慈善より、よほど純粹だろうっ!!」

「罪を償いもせず、のうのうと生きるつもりかっ!!」

「否っ!! 未熟な己の剣を、綺麗だと言ってくれた人がいた! これしか能のない己にも、為せることがあると教えてくれた!! ならば己は、それを信じて進むのみ! 立ちふさがる障害があれば——」

忘れはしない。

ただ無心に、ただ一心に、戦って。

そんな己に、賞賛の声を掛けてくれたことを。

こんな己でも、認めてくれる人がいるということ。

だから。

「ただ、寄って、斬るのみ——!!」

己も、己を認めよう。

「オオオオオオオッ!!」

そうして。

月光の刃と、「彼女」の剣が。
同時に、互いの胸を貫いた。

「……成る程。絶対防御、か」

最後の一撃を受けきり、朧月は機能を停止した。絶対防御が発動したにも拘わらず己の意識が残っているのは、ここが己の精神の中だからか。

「遊戯のための玩具も、存外捨てたものではあるまい？」

「……そうだな。殺さずに終えられる戦い。それをこそ、お前は求めていたのか」

「……それは、己にも分からん。だが、少なくとも……「彼女」は、そうだったろうな」

男もスプリットムーンが解除されたのか、今は己の姿をしている。胸を貫かれたというのに平然としているのも、元々仮想の存在だからか。そう考えると、先程の己たちの戦いこそ、遊びと呼べるモノだったろう。

「……目指すのだな。もう一度」
「応」

「生涯を掛けても、届くかどうか分からんぞ」

「ならば生涯を掛けて、試して見るしかあるまい」

「……大馬鹿者め」

「先刻承知」

言葉を交わすたび、呆れの色を濃くしていく男。

「……こいつにも、随分心配させてしまったようだ。」

「己はもう、行かなくては。親友が待っている」

「もう、守らないのではなかったか？」

「守るのではない。共に、危険を切り抜けるだけだ」

「屁理屈だな」

「……そうだな」

屁理屈でもいい。己は、己のやりたいようにやる。

最新まで剣にこだわった、「彼女」のように。

「……お前にも、世話を掛けたな」

「……気付いていたか」

「当然。己の過去を知る者は、お前しかいない」

「出過ぎた真似だったか？」

「まさか。感謝している」

「……そうか」

男——朧月が己の記憶から作り出した過去の己は、空に浮かぶ満月を見上げ、己に訊ねた。

「……不足はないか。これほどの業物と比べられると、流石に自信がない」

「十全。お前には、不足も不満もない。真改の愛刀はスプリットムー
ンだが、己の愛刀はお前だ」

「……そうか。ならば己も、お前が振るうに相応しい業物となろう」

そうして、朧月は右手を差し出して来た。

己は迷うことなく、その手を取る。

「共に歩もう。共に強くなろう。己の自己満足に過ぎぬ、果ての見えない道だが——どうか、付き合って欲しい」

「無論。この芯鉄が砕けるその時まで、己はお前の刀だ。……存分に振るえ、我が主」

「……ありがとう」

ようやく、相棒の信頼を取り戻すことが出来た。

ようやく、己は朧月の主に成れた。

お互い未熟者同士、苦労も多いだろうが。

こいつとならば、切り抜けられる。

「さあ、往くぞ。己の目指す者は、かつて国家を斬り伏せ、世界をも圧倒した剣聖だ。覚悟は出来ているか？」

己の問に、朧月は不敵に笑って、問を返した。

「お前こそ。この己を振るうからには、世界最強になつてもらう。そ

の覚悟は良いか？」

その言葉に、己も不敵な笑みを返す。

そして、二人同時に――

「不足なしっ!!」

――猛々しく、吼えた。

第38話 双月（命銘編）

戦うことしか出来ないのなら。

それしか能が無いのなら。

何の為に戦うのか。

それだけは、自らの意志で決める。

「おや、お目覚めかね？ おそよう、井上君」

目が覚めて早々に、如月社長の薄ら笑いに出迎えられる。

……正直、あまり気分のいいモノではない。そして「おそよう」というのはなんだ。嫌味のつもりか。

「……ふむ。一体なにがあったのやら。ほんの十分前までと、随分目つきが違うねえ。……君らしい目になっているよ」

今は社長の問いに付き合っている時間はない。先程まで戦っていた二人がシエルターの外に居る筈。隔壁の向こうから、絶え間ない破壊の音が聞こえる。

——迎え撃つ。

そのために体を起こそうとして、社長の隣に横たわる、親友の姿を認めた。

「……本音……！」

自分でも驚くほどに慌てた声を出しながら、本音に駆け寄る。本音は息が荒く、全身にひどく冷たい汗をかいていた。

「……何が……!?!」

「朧月をずっと修理してたのさ。大分無理したみたいだけど、まあ命

に別状はないよ。後遺症とかも、多分残らないだろう」

「……馬鹿な……！」

「おっと、怒らないでやってくれ。布仏君は自分の意志を貫いただけだ。そのおかげで、朧月も相当いい感じだと思うけど」

「……………」

……確かに、朧月はかなり回復している。エネルギーはほぼ全快、装甲も八割方修復されていた。

「……………」

時間を確認すると、あれから十分弱しか経っていない。そんな短時間で大破したISをここまで直してみせるなど、常識外れにもほどがある。

……本当に、どれほど無茶をしたのやら。

「……馬鹿者……」

意識のない本音を抱き起こす。届くことはないだろうが、それでも一言、感謝の言葉を言いたかった。

しかし、そこで。

本音が、うつすらと目を開けた。

「……………あ……………」

「……………」

焦点のほとんど合っていない瞳で、しかし己の顔をしっかりと見る。

そのまま暫く、呆然とし。

「…………おかえり…………いのち……………」

そんなことを、言った。

「……………」

頭痛でもするのか、苦しそうに眉根を寄せて、しかしそれでも、にへら、と笑ってみせる。

そんな本音の姿に、己は一瞬、なんと応えればいいのか分からなくなつた。

……それでも、何か、言わなければ。

「……世話をかけた……」

「んん〜……？ ……なんのことかな〜……？」

「……………」

辛そうなのに、嬉しそう。

そんな様子で、本音は己の顔を見上げ続ける。

……まったく、こいつは。

人のことは言えんが、相当な阿呆だ。

だが——だからこそ、共に歩みたいと思う。

「……行つてくる……」

「……だいじよぶ〜……？」

己の言葉に、途端に不安そうな顔になる。

無理もない。あれほどの無様を晒した直後だ、そんな己を戦場に送り出すなど、不安があつて当然だ。

だから、本音が安心出来るように、微笑んで見せた。

上手く出来たという、自信はないが。

それでも本音は、満面の笑みを返してくれた。

「……今度こそ……」

「んん〜……？」

「……すぐに、戻る……」

「……うん。待つてるよ〜……行つてら〜……しゃい、いの……つち……………」

……そうして、また本音は意識を失った。

その寝顔が先程のものに比べて随分安らかに見えるのは、己の気のせいではないと思いたい。

「行けるかね、井上君？」

「……無論……」

朧月の傷は本音が癒やしてくれた。

そのための時間は社長たちが稼いでくれた。

ここから先は、己の役目だ。

「うんうん、ようやく調子が戻つて来たみたいだねえ。これなら安心

だ。……けどまあ、一応僕らからも、少し援護をさせてもらうよ」

「……？」

「網田君、準備はどうだい？」

「完璧です。いつでもやれますよ」

「よし、それじゃあ出撃と行こうか。……頼んだよ、井上君」

「……承知……」

シエルターの隔壁に向き直り、その先に居る侵入者たちを迎撃すべく、己は相棒へ語り掛ける。

「……往くぞ……」

返答は、眩い光の奔流だった。

己を、朧月を包み込むように、溢れた光が球状の形を成す。

「これは……！」

「おお……！」

社長たちが感嘆の声を漏らす。

それが、言いようのないほどに誇らしい。

彼らもまた、己を認めてくれた人たちだ。

その期待に——今から、応えて見せよう。

「まさか……まさか、目の前で見られるとはねえ……！」

「……」

光の中で、朧月が徐々に形を変えて行く。

朧月曰わく、己に相応しい業物へと。

「……お前の主と成れたこと……」

ならば、己も。

お前に相応しい、使い手となる。

どれほどかかるか分からないが、いつか必ず、「彼女」の剣を完成させ

せ——

——そして、超える。

（……心から、誇りに思う……）

目指すは、世界最強。

その道のりは果てしなく遠く、そして険しい。

故に。

この程度の小石に、躓いている暇などない。

(……共に、往(こう)……)

そうして、光が収まると。

そこには、新たな力を得た朧月の姿があった。

それは、ISに備わる自己進化機能、操縦者とのシンクロ機能の、最も代表的な発現。

己の決意を、認めてくれた証。

己が、朧月の主と成れた、その証。

「二次移行……!」
セカンド・シフト

「ああ、まったく、なんだよこの隔壁！ 頑丈過ぎんだろっ!」

「だが手応えからして、そろそろ破れる筈だ」

侵入者たちが隔壁に攻撃を加え始めて、十分が経とうとしていた。IS二機の猛攻に十分間も耐えるなど規格外もいとところだが、しかしそんなことに感心している暇はない。もういい加減、救援部隊が到着してもおかしくないのだ。

このシエルターが「アタリ」だという保証はないが、少なくとも如月社長と真改、本音がいる。人質にでもして脅せば目的の物が手に入るかもしれないという望みに、二人は賭けているのだった。

「せめてあの変態だけはぶっ殺す……!!」

「そうだな。奴だけは、絶対に生かしておけん……!!」

……訂正。二人は既に当初の目的など忘れていた。今の二人を突き動かしているのは如月社長に対する憎悪だけだった。

「絶対に許さねえ……! 追い詰めて追い詰めて、肥溜めにブチ込んでやるっ……!!」

「挟らせてもらうぞ、変態ども……!!」

「クククククククク……!!」

不気味な笑みを浮かべながら物言わぬ隔壁に八つ当たり気味の攻

撃を仕掛ける様はエージェントというよりサイコパスだったが、二人にとってそんなことはどうでもいい。

任務より私怨を優先するくらいには、二人が精神に受けたダメージは大きかった。

女の子(?)の心に深い傷を付けた罪は極めて重く、死をもって贖われなくてはならない——普段は仲の悪い二人の思いが一つになった瞬間である。

——そんな時のことだった。

——カサカサカサカサ——

「ひひひひひひひひひひ!!?」

耳にこびり付いて離れない、あの音が聞こえた。

コマ送りのような速さで振り向き、全ての武器を音がした方へ向ける二人。長い通路の先にある曲がり角を睨み付け、気を抜くとカチカチと鳴りそうな歯を食いしばる。

「なんでまだ来るんだよおおお……!!?」

「嫌だ……もう嫌だあああ……!!」

折れる寸前の心を奮い立たせ、迎撃体勢へ移行。姿を見せた瞬間に粉々に吹き飛ばす準備を整える。

……しかし、いくら待っても生体兵器は来なかった。音は相変わらず聞こえて来ているが、移動している様子はない。ただ壁の向こう側で、凄まじい数が集まりつつある。

気味の悪い状況に、しかし侵入者たちはさらに眼差しを鋭くさせ、いかなる出来事にも対応出来るよう意識を集中させる。

「なんだよ、なんなんだよ、なにかんがえてんだよおおお……!!」

「く、くそう……!　くるならこい、みなごろしにしてやる……!!」

だが涙目だった。

『お耳を拝借うううううううううう!!』

「ひゃああああああああ!!?」

『あー、あー、マイクテ「ぎっけんなてめえぶつ殺すぞっ!!」おっと、

これは失礼』

そんな時にいきなり大声を掛けられてびつくりしたオータムがキレる。エムは胸を押さえて呼吸を整えていた。

『侵入者諸君。よくぞここまで辿り着いた。誉めて遣わす』

「なんだよそのキャラ……」

「とうにか着くだけならとつくに着いていたんだが」

『と、に、か、くっ!! その健闘に敬意を表して、我々は諸君にチャンスを与えることにした』

「チャンスだと……?」

「てめえ……自分らの立場が分かって『これから僕が出す課題をクリア出来たら、諸君の要求に応えよう』聞けよっ! ……って、今なんつった!？」

『僕の出す課題をクリア出来たら、要求に応えるって言ったのさ』

それは、侵入者たちにとっても渡りに船な申し出だった。

課題とやらがどんなモノかは分からないが、それをクリアすれば目当ての物が手に入る。社長が約束を守るといふ保証はないが、このまま隔壁を破つてもやはり手に入る保証はない。

ならば隔壁への攻撃を続けつつ、社長の話だけでも聞いてみるのもいいかも知れない。

「……で、なんだよ、課題ってのは」

『……決闘さ』

「何い?」

『これから君たちには決闘をしてもらう。相手はさつき君たちが倒した女の子。勝てば課題はクリアだ。……ああモチロン、そちらは二人掛かりで構わないよ』

「……私たちが舐めているのか?」

『まさか。僕はいつだって大真面目さ』

「……へっ。何を考えてんのか知らねえが、いいだろう。受けて立つぜ。……アレの相手するよりや遥かにマシだし」

『よし。それじゃあ——決闘場を用意しよう』

「?」

突然、通路に轟音が響き渡る。壁の向こうに犇めいていた生体兵器の群が、一斉に自爆したのだった。

「なんだ!? なんのつもりだっ!？」

「まさか、壁を……!？」

……壁を、崩している。

無数の生体兵器の命が炸裂し、地下通路の壁を盛大に破壊して、一つの空間を作っている。

決して広過ぎず、しかし狭くはない。

それは――

「……僕らに出来るのはここまでだ。後は頼んだよ、井上君」

「……ごや……」

――真改と朧月が、最も得意とする間合いである。

隔壁が開く。

その先には、壁が崩れ落ち、もはや広間と呼ぶべき空間に成った通路があった。

網田主任が、自らの子どもたちを使い切って作り出した、己のための決闘場。

(……無駄にはせん……)

――必ず、勝つ。

その意志を全身に漲らせ、踏み出す。

前へ。敵の居る、前へ。

「てめえ……」

「その機体は……!」

背後で隔壁が閉まる。IS二機による猛攻を一身に受けた隔壁は崩壊寸前だったが、それでも最後まで持ちこたえ、そしてまだ動く。

その様に気高ささえ感じた己は、少々気が高ぶり過ぎているのかもしれない。

「……直ってやがる。あんな短時間で直したってのか?」

「しかも、二次移行だと？ 一体なにが……」

「……………」

侵入者たちの驚きの表情。実に気分が良い。

その顔は、己の親友が成し得た偉業の証明に他ならないのだから。

「……………」

……さあ、決闘を始めよう。

己の意志を貫くために。

相手の意志を斬り伏せる。

そのために、まずは。

「……井上真改……そして……」

名乗りを上げよう。

己の名と、真に己の相棒となった者の名を。

「……朧月・双重……」

さあ、初陣だ。

刻み付けてやろう、己たちの名を。

目の前の敵に。

そして、世界に。

「——ぐわい」

刻み付けてやろう、己たちの道を。

己の技で、お前の刃で。

……そして、認めさせてやる。

「推して参る——!!」

剣を振るうしか能のない己にも。

そんな己に付き合う酔狂な刀にも。

為せることが、あるのだと——！

「正面からだど？ 愚かな。二次移行して調子に乗ったか？」

スラスターを起動した己に、侵入者たちが銃を向ける。見下したような言葉とは裏腹に、そこに油断や慢心はない。

——ならば、真つ正面から突き崩す。

水月を起動。双発式に成ったユニットに、カートリッジが装填される。

そしてさらに、第二形態に成つて追加された機能が、その力を発揮する。

——エネルギー充填。〔月灯〕、発動——

ゴヒユウンツ!!

「なん——!?!」

——月灯。つきあかりカートリッジを起爆させる際に月光に匹敵するエネルギーを用いることで炸薬をプラズマ化させ、爆発力を飛躍的に向上させる機能。

想像を絶する加速に侵入者たちは反応が遅れ、己の接近を許した。慌てて後退する侵入者たちに向け、大型化して出力を増した月輪を振るう。そしてこちらも、追加された新機能を発動した。

——〔月華〕、発動——

月輪の刀身から、眩い蒼色の光が溢れ出る。その光が刀身を覆い、物理とエネルギーのハイブリッドブレードとも呼ぶべき刃と成る。

それを横薙に振り抜き、二人まとめて吹き飛ばした。

「ぐうづ……!」

「図に……乗るなあっ!」

即座に繰り出された苛烈な反撃を距離を取って避ける。通路が広くなったおかげで存分な機動が出来、朧月本来の変則的な動きで翻弄する。

月輪による高速旋回。

水月による直線加速。

そして床を蹴り天井を蹴り、一瞬たりとも同じ場所に留まることはない。

「なんて動きだ……!」

「忍者かこいつは……!」

「……っ!」

一瞬の隙を突き、水月で接近。アラクネを装着した女に突撃する。

月光と月輪・月華を振り上げ、十字を描くように斬りつけたが——
「そう何度も喰らうかよっ！」

「……………」

素早く後退して攻撃を避けた女は、八本の装甲脚で己を囲い込むように重火器を構えた。

その銃口が火を噴くよりも一瞬早く、己は二刀を振り抜いた勢いで身を沈めて脚に力を溜め、一気に跳び上がる。

そして膝に追加された物理ブレードを、女の顔目掛けて叩き込んだ。
だ。

「があっ!？」

両膝の二連撃。そのまま顔を膝で挟み込み、月輪で回転、首をねじ切る勢いで投げようとしたが——

「させんっ！」

「……………」

サイレント・ゼファイルスによる銃撃に妨害された。

強力なレーザーに装甲を焼かれ、吹き飛ばされる。それなりのダメージを受けたものの、戦闘には支障ない。

体勢を立て直し、再び侵入者たちを睨み付ける。

「無事か？」

「あー、いってえ……………こりやしばらくムチウチだな……………」

「……………」

「この機動、二次移行によるものだけではないな。成る程、この程度の広さでこそ、その機体の性能を十分に発揮できるというわけか」

「……………はっ。それだけじゃねえよ」

「なに?」

「さっきコイツとやった時、何かが足りねえ感じがした。どうにも物足りねえ感じがした。……………思い出したぜ」

女は唇の端を吊り上げ、ニタリと嗤う。

そして、己を——己の眼を指差して、言った。

「……………その眼だ。さっきの死んだ魚みてえな眼じゃねえ、その何もかも呑み込みまいそんな深い眼が、足りなかった」

「……………」

「ハハッ。いいねえ、その眼。すげえ綺麗だよ。」

……抉り取って、部屋に飾ってやる」

酷薄な笑みを浮かべて言う女に対し、警戒をさらに強める。

こいつは、こいつだけは、絶対にこの先へ行かせてはいけない。

——故に。

「ハハッ、ハハハハハッ!! さあ、楽しくなってきたぜ!!」

己の眼を、寄越せと言うのなら。

「なあ、お前も楽しめよ! 井上、真改——!!」

己は、お前の首を貫う——

そして再び、通路に破壊の嵐が吹き荒れる。

オータムとエムは一層激しい銃撃を繰り出し、真改は凄まじい機動でそれをかわしながら、一瞬の隙を見極めて斬り掛かる。

銃弾とレーザーが朧月の装甲を抉り、月光と月華がアラクネとサイレント・ゼフィールの装甲を灼く。

「ちい、大分「視えて」来たが……………」

「ハハハハッ!! 楽しいなあつ、真改いいいい!!」

「……………」

既に三者共に満身創痍、いつ誰が戦闘不能になってもおかしくない状態だった。

真改は手練れ二人を相手に始めは互角以上に戦っていたものの、二人が朧月の機動に慣れて来るに連れ被弾するようになり、今では苦戦を強いられている。

対する侵入者のエムは直撃こそどうにか防いでいるものの、反撃はほとんど当たっていないかった。

サイレント・ゼフィールは中距離以上での射撃戦に強い機体だ。精度を重視したFCSでは小回りが効かず、至近距離での真改の機動について行けないのだ。

かと言つて下手に距離を取ろうとすれば、壁際に追い詰められて膾切りにされるのは目に見えている。結局、広間の中央で四方八方から襲い来る斬撃を捌き続けるしかなかった。

……問題は、もう一人の侵入者——オータムだった。

「ハッ、ハハハッ、アハハハハッ、ハハッ、アハハハハハハッ!!!」
(……これはっ……!)

真改の猛攻を、致命傷にならないギリギリのところまで避けている。

異常としか言いようのない反射神経による見切りに加え、光の刃が鼻先を掠め装甲を切り裂いてもまるで意に介さない。

——アドレナリンの過剰分泌。

それがオータムの潜在能力を引き出し、驚異的な戦闘力を発揮させているのだ。

……そしてその在り様に、真改は覚えがあった。

(……まるで、あいつの……!)

かつての仲間の一人。

誰からの理解も求めず、ただただ孤高を貫き、自らの思想を掲げ続けた異端者。

決して戦闘者としての才能に恵まれていたわけではなかった彼が、それでも仲間の中で随一の強者であったのは、彼が常に今のオータムと同じ状態にあったからだ。

故に狂人でもあったのだが、こと戦闘においてはそれはプラスにもなる要素であり、自らの命にすら一切の価値を見いだしていなかったからこそ凄まじい戦いが可能だったのだ。

(……お前もまた、亡霊ということか……!)

心が、魂が死に絶えて、それでも尚戦い続ける亡霊。

それと再び相見えたのは、因縁か運命か。

(……否。こいつは、あの男とは違う……)

オータムはまだ、あの狂人の域にまでは達していない。いや、このまま行っても、あそこまで狂うことは恐らくないだろう。オータムの狂気と彼の狂気は質が違うと、真改は感じていた。

オータムが楽しんでいるのは、飽くまでも戦いだ。

その先にある「死」を楽しんでいたあの男とは、似てはいるがまるで違う。

——ならば。

(……恐れるに、足らず……！)

この刃は、十分に届く。

「疾っ……!!」

真改は水月を起動、勢いを増した加速で、オータムの懐に一気に踏み込む。

途端に降り注ぐ、迎撃の銃弾。それに装甲を削り取られながら、月輪を起動する。

「さあ、来やがれ——!!」

全方位から浴びせられる銃火の嵐を弾き飛ばすように、朧月が回転する。

同時に溢れ出すのは、紫と蒼の極光。

月光と月華による、連続斬撃。

「オオオオオオオオツ!!」

「ハアアアアアアツ!!」

八本の装甲脚から繰り出される猛撃を、二振りの刀で斬り抜ける。

その様は神話の怪物に挑む戦士そのものであり、そのただ中に居る真改は、言い知れぬ高揚を感じていた。

(……そうだ、これが……！)

全てを手に入れるか、全てを失うか。

己の全てを賭けて臨む、極めて愚かでありながら、人の心を惹きつけて止まないモノ。

——決闘。

(……これこそが、己の……！)

血湧き肉踊る。

魂が歓喜の雄叫びをあげる。

体が傷付く痛みさえも心地良い。

——これが、真改の。

(己の望んだ、闘い——!!)

「オオオオオオオオアアアアアアアアッ!!!」

蒼色の光が、八本の装甲脚をまとめて弾き飛ばす。

その勢いのままに、一回転。

そして、紫色の光が——

「——やっばすげえな。お前」

——オータムを、捉えた。

「ちいつ、これ以上は無理か……!」

「……………」

絶対防御が発動し、アラクネを装着した女は気を失った。

残るはサイレント・ゼフィルスの少女だけだが、その少女はアラクネの女を抱きかかえ、ビットを己に向け牽制している。

「……任務失敗、か。存外、悔しいものだな」

「……………」

「だが、命有つての物种だ。ここは退かせてもらう」

「……不可……」

逃げようとする少女に一步踏み出す。すると少女は、唇の端を吊り上げて言い放った。

「アラクネには自爆機能がある」

「……………」

「分かるか？ 私はいざともなればこいつを置いて逃げる。その際にお前が自爆に巻き込まれてくれれば、まあ、その機体の損傷から考え、お前も戦闘不能になるだろう。そうなれば、私はすぐさま引き返してあのシエルターに籠もっている連中を皆殺しにする」

「……」
「無論、こんな一か八かの賭けはしたくない。だからこのまま見逃してくれるのなら、大人しく引き下がろう」

「……」
「……さて、どうするか。ハツタリの可能性も否定出来んし、そうでもなかったとしても己が自爆に巻き込まなければいいだけの話だ。」

「だが隴月も己も既に限界であり、なにより賭け金が大き過ぎる。しかしここまで来て逃がすというのも——」

『行かせてやりたまえ』

「……」

「……いいのか、社長。この二人は、貴方の子供を狙って来たのだが。『君は病み上がりだ、無理はさせられないよ。それに収穫もあったんだ、ここはそれで良しとしようじゃないか』」

「……」

「……社長がそういうのなら、構わない。また襲いに来るようなことがあれば、また退けるだけだ。」

「己が構えを解くと、サイレント・ゼフィルスの少女は何も言わずに振り返り、一目散に逃げて行った。帰りの道のりを考えればのんびりしている時間は皆無であろうから、仕方のないことか。」

『ふう……どうにか、凌いだねえ』

「……」

「今回は本当に危なかった。」

「如月社長たち、本音、そして隴月。」

「誰か一人でも欠けていれば、持ちこたえられなかっただろう。」

「……」

「……本当に、己は未熟者だ。多くの人に支えられ、ようやく立っている。」

「そして、そんなことに気付くのもの——随分、時間が掛かってしまった。」

『さて。それじゃあ、一旦さっきのシエルターに戻って来てくれたまえ。』

……お姫様が目覚めた時には、やっぱり騎士が側に居ないと、格好がつかないからねえ』

「……承知……」

……騎士、か。

己にそんな呼び名が似合うとは、思えないが。

——存外、悪くない。

酷使し過ぎて、熱くなった頭。

その額を、冷たい何かに撫でられて、私は目を覚ました。

「……」

重い瞼を持ち上げると、黒真珠みたいに綺麗な眼が見えた。

その眼が、ほんの少しだけ、安心したように緩む。

「……戻った……」

「……うん。おかえり、いのつち」

頭はまだ痛い。すごく痛い。泣きたいくらい痛い。

その頭を撫でてくれている手は硬くて、ゴツゴツしてて、大きくて、傷だらけで。

けれど冷たくて、気持ちいい。

……何かで聞いたことがある。

手が冷たい人は、心が温かいって。

「……また、怪我してる」

「……済まない……」

「反省してる？」

「……否……」

「まったく。悪い子だなく、いのつちは」

一生懸命怒った顔を作ろうとしてるのに、自然に頬が緩んでしま
う。

……おかしいな、お姉ちゃんは怒るとあんなに怖いのに。

「悪い子には、罰が必要だよね」

「……………」

「だから、怪我が治るまで、無茶するの禁止」

「……約束……」

「……うん。破っちやダメだよ？ ……てひび」

本当は、指切りしたかったんだけど。

そうすると、いのちの手が離れてしまうので、やっぱりやめた。

「……帰るぞ……」

「うん。帰ろっか」

IS学園に。

私たちの部屋に。

明日から、また、授業があるんだから。

今日は早く寝て、明日また、いっぱいお話しよう。

……うん。今日は久しぶりに、良い夢が見れそうだ――

「布仏君にはああ言ったけど、本当は彼女たちの狙い、わかってるんだよねえ」

「まあ、アレしかないでしょうねえ」

「どう？ 調子は」

「あまり良くないですねえ。エネルギーの消費が激し過ぎます。実戦では、とても使える状態ではないですねえ」

「うくん、どうするかなあ……。神無月と神在月でもダメだしなあ」
「神在月でも供給が追い付きません。仮に追い付いたとしても、それでは神無月の容量がまるで足りません」

「燃費を改善しつつ、神無月と神在月も改良しないと。……あく、やる
ことがいっぱいあって大変だなあ、楽しくて仕方ないなあ」

「うふふ、ああ、早く見たいですねえ。アレを使って戦う、井上さんの
姿を」

「けどこの調子じゃあ、それはまだ大分先のことになりそうだねえ。」

「……まったく、こんな未完成な物を奪ってどうするつもりだったのかねえ」

「完成させる技術がある……というわけでは、ないでしょうねえ。新型のISばかり狙う連中ですから、技術力はそれほどではないかと」
「なら、アレの情報は手に入れたけど、未完成であることまではわからなかった、とか？ ……いや、それだと間抜け過ぎるよねえ」

「ふうむ。あと考えられるとすれば、神無月と神在月を超えるエネルギー供給ユニットを持っているか……」

「……完成させないことが、目的だったか」

「まあアレが完成して朧月に搭載されれば、井上さんは正に無敵になりますからねえ。以前亡国機業と相対したことがあるみたいですし、危険視したのかもしれないですねえ」

「……まあ、考えていても仕方ないか。今は情報が少な過ぎる。亡国機業のことは置いておいて、僕らは開発に専念しようか——〔月詠つくよみ〕の」

「そうですねえ。まあ、また襲ってきてても、井上さんがなんとかしてくれるでしょう。防衛システムも強化しましょう」

「そうだねえ。……さて、では僕らは、目先のことから片付けなくちやねえ」

「ええ。……急ぎませう。もうあまり、時間がありません。今日は色々なことがありましたからねえ、やらなくてはならないことが山積みです」

「早く……早くしないと……!」

「早く今日の映像を編集して投稿しないと、来週の放送に間に合わなくなる……!!」

外伝4 オルレアンの騎士 第1話 出会い

「はっ、はっ、はっ、……っ、はあっ……!!」

フランスのとある街。

田舎と言うほど静かではなく、都会と言うほど騒がしくない。そんな街。

「はあっ、はあっ、……んくっ、はあっ、はあっ……!!」

その街の裏路地を、一人の少女が走っている。

十歳前後の、鮮やかな金髪の少女。

名を、シャルロット・デユノアという。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……!!」

時折後ろを振り返りながら、必死に走る。

とうの昔に息はあがり、心臓が張り裂けそうなほどに激しく収縮を繰り返す。

何度も足をもつれさせ、誰が見ても限界と分かる状態になりながら、それでもシャルロットは走り続ける。

「はあっ! はあっ! はあっ! はあっ! はあっ……!!」

何故そこまで走るのか。

——追われているからだ。

「はあっ! はあっ! ぜえっ! はあっ! ……ま、まだ……!?!」

シャルロットは知らないことだが、彼女を追っているのは、人身売買を生業の一つとする犯罪組織の構成員たちである。彼らは街中で高く売れそうな者を物色していたのだが、まだ幼いにもかかわらず既に人目を惹きつける容姿を持ったシャルロットを見掛け、目を付けていたのだった。

シャルロットと一緒にいた母親とはぐれたのを見計らって動き出し、追跡を開始。聡いシャルロットはすぐに身の危険を感じて逃げ出したが、子どもと大人では体力に差が有り過ぎる。

加えてシャルロットは今日初めてこの街に来たので、地形など当然分からない。ただ闇雲に走っているだけだ。対する男たちはこの街を狩場とするならず者だ。地図にも載っていないような細い路地も

全て把握している。

故に、シャルロットがいくら必死に逃げようと――

「いらつしやい、お嬢ちゃん」

「っ!!」

回り込み待ち伏せるなど、造作もない。

「よくもまあ、手間掛けさせてくれやがったな、ガキ」

「あ、あつ……!」

「けどまあ、それもここまでだ」

「そう怯えんなよ、別に取って食いはしねえよ」

「そうそう、それに将来ベツピンになんのが約束されてるような顔じゃねえか」

「結構可愛がつてもらえるかも知れねえぜ? ……まあ、お前を買うのが変態親父じゃねえことを祈んな」

「い、いや……!」

男たちはシャルロットを取り囲み、ポケットからスタンガンを取り出した。獲物を極力傷付けず、尚且つ確実にその意識を奪うための、実に効率的な道具。

シャルロットは必死に逃げ道を探すが、そんなものはどこにもない。そして逃げ回るうちにかなり奥まで誘導されたため、叫び声をあげても誰にも届きはしない。

全てが計算ずく。男たちが動き出した時点で、シャルロットが逃げられないことは決定していた。

「やだ……いやだ……」

恐怖に涙を流すシャルロットに、バチバチと音を立てながら、スタンガンが近づいて行く。

シャルロットがいくら懇願しても意味はない。そんなものに動かされる心を失くす程度には、男たちは人攫いに慣れていた。

「だれか……!」

逃げることも出来ず、男たちには良心など欠片もない。

故に、シャルロットが助かるとしたら。

「――下種が。畜生にも劣るぞ、貴様ら」

その場にいない筈の、第三者の介入しか、有り得ない。

今日はずつと前から楽しみにしていた、お母さんと一緒に出掛ける日。久しぶりだからちよつと遠くに行こうということで、家のある田舎町を離れて、大きな街まで出てきた。

見たこともないくらい大きな建物やお店がいっぱいあって驚いていると、お母さんは世界にはもつと大きな街がいっぱいあると言つて、それを聞いてもつと驚いた。

楽しくつて、はしやぎ回つて……気が付いたら、お母さんとはぐれてしまつていた。

その、すぐ後だった。

知らない男の人たちが、僕を追い掛けて来たのは。

「やだ……いやだ……」

すごく嫌な感じがして、すぐに逃げた。けれど知らない街の中だからすぐに迷つてしまつて、あつという間に捕まつてしまった。

男の人たちはすごく冷たい目で僕を見下ろしながらなにか喋っているけど、僕は怖くてなにもわからなくなっている。

ただ、もうお母さんに会えないということだけは、なんとなくわかつてしまった。

「だれか……」

……そんなのは、嫌だ。絶対に嫌だ。

だから、誰も来ないつて分かっているのに、助けを求めた。

……そう、誰も助けに来ない。

そんな白馬の王子様みたいなのは、物語の中だけのことだって、僕はもう知っている。

——だから、本当にびつくりした。

「下種が。畜生にも劣るぞ、貴様ら」

だって、こんなのは。

本当に、物語の中みたいだったから。

「誰だっ!？」

突然聞こえてきた声に、男の人たちが慌てて振り返る。

僕もそつちを見ると、そこに居たのは――

「……ガキ……?」

僕と同じくらいの歳の、女の子だった。

肩口で切り揃えた金髪に、青い瞳。

男の子が着るようなデザインの、深い青色の服を着た、目つきの鋭い女の子。

……そう、女の子だ。

「に、逃げてっ!!」

このままじゃ、この女の子も捕まってしまう。そう思ったら、ついそう叫んでいた。

すると女の子はキョトンとして、ちよつとしてから呆れたような、それでいて嬉しそうな顔をした。

「優しいな、君は。それに勇敢だ。こんな状況なら、普通は助けを求めるところが」

「え……?」

「心配してくれてありがとう。だが、私は大丈夫だ」

頼りがいのありそうな笑顔で、そんなことを言う。

なんだかすごく大人びた雰囲気だけど、相手は本当の大人だ。しかも四人。すぐに逃げないと、逃げられなくなる。

なのに。

この子なら大丈夫だと、根拠もないのに、思ってしまった。

「なんだ？ このガキ」

「知るかよ。……ちつ。見られちまったんじや仕方ねえ、こいつも攫ってくか」

「あいよ。……お？ なんだよ、こいつもかなり素質ありそうじゃん。へへっ、ラツキー！ 今日は大漁だな！」

「さあて、そんじや、仕事だ」

僕が逃げないようにか、一人を残して男の人たちが女の子に近づいていく。手にはスタンガンを持って、嫌な笑い声をあげながら。

「大人しくしろよ、お嬢ちゃん。あまり手間掛けさせんな」

「そうか。なら——手早く終わらせるとしよう」

「逃げ……!?!」

手を伸ばせば届くくらいの距離になっても、女の子はまったく動こうとしない。

だからもう一度、荒い息を押さえつけて、叫んだんだけど——

「……この程度か。人攫いなどするくらいだから、多少は腕に覚えがあるかと思っただが」

……一瞬、だった。

正直に言っつて、何が起きたのかまったく見えなかった。気が付いたら男の人たちが全員倒れていて、女の子はつまらなそうな顔をして立っていたのだ。

「つまらん。こんな連中、何百人倒したところでなんの誇りにもならん」

「な……な、な、何をしやがった!?!」

僕を見張っていた男の人が、慌てて女の子に向き直る。スタンガンを構えて女の子を睨みつけるけど、腰が引けていて、女の子を恐れていることが僕にもわかった。

「何をしたって訊いてんだ!!」

問いかけに答えず、鋭い目で睨みながら、男の人に近づいて行く女の子。

すぐに手の届く距離になって、男の人がスタンガン突き出す。

「……このや——!?!」

……今度は、見えた。それは多分、女の子が手加減したからだと思うけど。

女の子は突き出されたスタンガンを避けると、男の人の手を取って軽く引つ張った。

すると男の人はバランスを崩して前につんのめり、その顎にパンチを繰り出す。

それだけだ。それだけで、男の人は気を失って倒れてしまった。

「ふん。最近はこんな輩ばかりだな」

見下ろしながらそんなことを言う女の子。

その目はすごく冷たかったけど、僕の方を振り返って、それとは全然違う優しい目で話しかけて来た。

「大丈夫か？」

「え？ あ、うん、大丈夫……」

「……まだ呆然としているな。あんな目に遭っては、仕方ないか」

いや、僕が呆然としているのは君のせいなんだけど。

「さて、どうやら君はこの街の人間ではないようだが、まさか一人で来たわけではないだろう？」

「え？ あ、うん。お母さんと一緒に来たんだけど……はぐれちゃって……」

「分かった。ではとりあえず、表通りまで行こう。お母さんも君を探している筈だ、警察に行けばすぐに見つけてくれるだろう」

そう言って、女の子は歩き出した。僕もその後について行く。

しばらくすると、段々人の話し声とかが聞こえて来て、表通りに近づいて来ているのがわかった。

——すると。

「……ットー！ シャルロット！ どこにいるの!? シャルロット!!」

「お母さん!!」

たまらず、走り出す。さつきあんなに走ったのに、全然疲れを感じない。

僕の声に気づいたお母さんが振り返り、僕を見付けて駆け寄って来る。

「シャルロット!!」

「お母さん!!」

「もう、どこに行ってたの!? 心配したのよ、攫われてしまったんじゃないかって……!」

「うん、実は……」

そしてお母さんに、男の人たちに追いかけられたこと、逃げたけど逃げられなくて、捕まりそうになったことを話した。

「そんな、大丈夫なの!? 怪我してない!」

「うん、僕は平気だよ、お母さん。あの子が助けてくれたんだ」

後ろを振り向いて、優しい顔で微笑んでいる女の子を指差す。お母さんはすごく驚いた顔をしてから、女の子に近づいて深々と頭を下げた。

「娘を助けてくれてありがとうございます。……あなたも大丈夫?

怪我はしてない?」

「大丈夫です。娘さんが無事で良かった。……この街はあまり治安が良くない。気をつけて」

「ええ、ごめんなさい。……本当に、ありがとうございます。娘が危ないところを、助けてくれて」

「いえ、気に食わない連中をのしただけですので。……それでは、私はこれで」

「あ……ま、待って!」

言うことだけ言って立ち去ろうとする女の子を引き止める。このまま行かせるなんてとんでもない。何かお礼をしないと。

「助けてくれてありがとう。何かお礼できないかな」

「そんな目的で助けたわけではないんだが」

「それじゃあ私たちの気が収まらないわ」

「そうだよ。……そうだ! ねえお母さん、うちに招待しようよ。一緒に晩御飯食べよう!」

「それはいいわね。……ねえ、どうかしら?」

「……それでは、お邪魔させていただきます」

「やったあ!!」

「じゃあ、家は遠いから、ご両親に許可をもらわないと」

「その必要はありません。私に親はいませんので」

「あ……」

なんでもないことのように言われた、その言葉。

思わず固まってしまった僕たちを見て、女の子が「しまった」という顔をする。

「……ごめんなさい」

「いえ、気にしないでください。顔も覚えていない親です。私にとっては、いなくて当たり前ですから」

「……………」

そんなことを言われてしまうと、ますますどうすればいいかわからなくなってしまう。

それに気づいたのか、女の子はさらに困った顔になった。

「……ええと……」

「……ごめんなさい。悪いことを言ってしまったて」

「いえ、気にしないで……むう、続けても悪循環になるだけか……」

「……………」

「……では、詫びを兼ねてということ、私を招待してください」

「……そうね。変に気を使うのも、かえって悪いわよね」

「それじゃあ——」

「ああ。邪魔させてもらうよ」

「ふふ、良かったわね、シャルロット。新しいお友達ができて」

「うんっ！ ……あ、そうだ」

大事なことを忘れていた。

僕はまだ、自己紹介をしていない。

お母さんが何回も呼んでるからこの子は僕の名前を知っているだろうけど、僕はまだこの子の名前を知らない。

それに僕の名前も、ちゃんと自分で伝えたい。

「僕はシャルロット。シャルロット・デュノア」

そう名乗ると、女の子は背筋を伸ばして、威風堂々と名乗り返した。

「アンジェ。アンジェ・オルレアンだ」

……僕は最初、この女の子を見たとき、白馬の王子様みたいだと思っただけ。

少し違った。この子は——アンジェは、王子様じゃない。

「シャルロット。優しく勇敢な君の友人となれたこと、誇りに思う」

例えるなら。

鎧を身に纏い、剣を帯びた。

——誇り高き、騎士。

オルレアンの騎士 第2話 帰る家

「ここが僕の家だよー」

シャルロットに案内された先は、田舎町の片隅にある家だった。フランスの一般的な造りで、家族一組が生活するには十分な大きさ。しかし決して大き過ぎず、人を雇わずとも自分たちで日々の手入れが出来る家。

見たところそれなりに年期が入っているようだが、しかし汚れている印象は全く受けない。まめに掃除をしていることが伺える。

「良い家だな。温かい気配がする」

「えへへ……ありがとう」

「さ、入りましょう。……オルレアンさん」

「アンジエと。貴女にはそう呼んでもらいたい、ソフィーさん」

「じゃあ、アンジエ。我が家によろこそ。歓迎するわ」

温かい笑顔。

ついさつき会ったばかりの私を出迎えてくれるその笑顔が、とても眩しい。

「はい。……お邪魔します、ソフィーさん、シャルロット」

「うん！ いらつしやい、アンジエ！」

花咲くような笑顔に促され、玄関の扉をくぐる。

途端に、生活の匂いを感じた。この親子らしい、優しい匂いだった。

(なるほど、これが「家」か。……私には、とんと縁がなかったな)

自分の部屋はあったが、家に住んだことはなかった。それはかつても今も同じだ。親は物心ついた時にはいなかったし、引き取られた先でもどうにも浮いてしまい、上手く馴染めずにいた。

故にこういう暖かみのある家庭には、入った経験すらなかったのだが……。

「……いいものだな」

「え？」

「いや、なんでもない。……さて、ソフィーさん、何か手伝えることはありませんか？」

「あなたはお客様なのよ、アンジェ。手伝わせるわけにはいかないわ
「ですが……」

「もう、頑固ね。シャルロット、家を案内してあげて」

「はい。行こう、アンジェ。僕の部屋を見せてあげるよ」

「……すみません。お言葉に甘えさせていただきます」

「大丈夫だよ。お母さんの料理はすっごく美味しいんだから！」

「そうか。それは楽しみだな」

シャルロットに手を引かれ、家の中を案内される。しかし正直そこまで広い家ではないので、案内はすぐに終わった。その後はシャルロットの部屋に行き、他愛のない話をして時間を潰す。

「ねえ、アンジェはなんでそんなに強いのか？」

「そう大したものではないよ。連中は私を子供と完全に侮っていたからな、隙を突くのは容易かった」

「へえ、すごいねー！」

「いや、だから大したものではないと……」

「ねえ、僕にも教えてよ」

「む？ いや、それは構わないが……」

「やったあ！ よし、それじゃあ早速——」

「待て、今からか？ ソフィーさんが夕食を作っているのだろうか？」

「あ、そっか……それじゃあ、ご飯の後で！」

「ふふ。横腹が痛くなっても知らんぞ」

私の言葉に一喜一憂するシャルロットを見ると、自然に笑みがこぼれる。妹でも出来たような気分だ。

「二人とも。出来たわよく」

「はくい。行こう、アンジェ」

シャルロットに促され、居間へ向かう。

……すっごく良い匂いがする。食欲を刺激されるな……。

「遠慮しないで、たくさん食べてね」

「はい。いただきます」

「いただきます」

食卓に並ぶ料理は、どれもフランスの一般的な家庭料理だった。し

かしどの料理もひと手間加えられていて、非常に美味しい。

……これが家庭の味というやつか。

「ところで、アンジェ。あなたはご両親がいないって言ってたけど、保護者の方はいないの？」

「二応親戚の家に引き取られたのですが、どうにも馬が合わなくて。それで、半年ほど前に飛び出したのですが……」

「……それは、良くないわ。きつと心配しているわよ」

ソフィーさんの言うことももつともなのだが、それはない。

私は思ったことをすぐに口に出してしまうためか、随分と疎まれていた。飛び出した、とは言ったが、半分は追い出されたようなものだ。「まさか。かなり嫌われていましたからね、心配などしてはいないでしょう。事実、私を探している様子もありませんでした」

「……そう……。それじゃあ、今はどうやって生活を？」

「廃品回収などを手伝わせてもらっています。見返りにももらえるのは小遣い程度の額ですが、子ども一人が食べていくにはなんとかありません」

「……それは、言葉は悪いのだけれど、ホームレスということ？」

「……まあ、そうなりますね」

「……………」

「……………」

……まずい。ソフィーさんが眉根を寄せている。

物凄く困った顔だ。私の境遇に対して心を痛めているのが分かる。見ればシャルロットも泣きそうな顔だ。この親子は揃って優しいらしい。

「……シャルロット」

「？」

ソフィーさんがシャルロットを呼ぶ。そのまま親子会議へ。

「ヒソヒソヒソ……」

「ボソボソボソ……」

「ゴニヨゴニヨゴニヨ……」

「カクカクシカジカ……」

「……………」

……一体何を話し込んでいるのやら、ちよつとした長話になりつつある。そしてなにやら段々と楽しそうな嬉しそうな幸せそうな顔になっていつてるのは何故だ。

「…………どう？ 良い考えだと思わない？」

「…………うん！ さすがお母さん！」

「？」

なんだ？ なんのことを言っているんだ？

ソフィーさん、なんですかその子どもみたいな輝きに満ちた笑顔は？そしてシャルロット、その笑顔は止めてくれ。眩しすぎて直視できません。

…………本当にそつくりだな、この親子。

「ねえ、アンジェ」

「はい」

「私たちと、一緒に暮らさない？」

「……………はい？」

あまりにも突然過ぎる申し出に思考が停止した。

…………は？ 今なんと言った？

「もちろん、あなたさえよければ、だけど」

「……………」

…………どうやら、私の聞き間違いでもソフィーさんの言い間違いでもないらしい。

つまりは本当に、私に共に暮らさないかと訊いたのか。

「ねえ、どうかな、アンジェ？」

「……………」

…………いや、どう、と言われても。

「…………本気ですか」

「本気よ」

「……何故ですか」

「何故って……あなたと仲良くなりたいたいから」

「それならば、共に暮らさずともいいでしょう」

「そうかもしれないけど、一緒の時間が長いほうが仲良くなれるじゃない」

「……今日会ったばかりの私を、何故そうまで信用するのですか」

「あなたは今日会ったばかりのシャルロットを助けてくれたわ。それだけで十分だと思わない?」

「……………」

……なんという。

これほどまでに真っ直ぐな信用を向けられたのは、あいつ以来か。

「……………」

「……アンジエ、僕たちと暮らすの、嫌なの?」

「ぐ……………」

な、なんだ……!?!? その捨てられた小犬みたいな眼は……!?!? 抗えんだと!?!? この私が……!?!?

「……………」
「……いいのか。私は相当な変わり者だぞ。共に暮らすとなれば、苦労も多いと思うが」

「へっちゃらだよ。アンジエは良い人だもん」

「……………」

……良い人、か。そんなものでは断じてないのだがな、私は。

本来なら、この親子の温もりに触れることが出来ただけでも信じがたい僥倖だ。これ以上は望むべくもないのだが……。

「……………」

この温もりは、想像以上に心地良くて。

ほんの僅かな時間だったのに、すっかり名残惜しくなってしまうて。

「もちろん。僕たちからお願いしてるんだよ?」

その側に、居られるのなら。

それは、きつと――

「……私は、戦う以外に能がありません。シャルロットを助けたのも、ただ私の才を活かせる場面だったからに過ぎません」

ずっと孤独だった。

ただ一人、あいつだけは私を慕ってくれたが、その想いにすら私は応えられなかった。

「……正直に言うると、私は現代社会に馴染めない、一種の異常者です。色々と、迷惑を掛けてしまうでしょう」

戦うことしか出来ず、戦わなければ生きられない。

そんな私が、この平和な世界に適応出来る筈がない。

だが、それでも――

「……それでも、こんな私でも、受け入れてもらえるのなら」

この温もりは。

この心地良さは。

――手放してしまうには、少々魅力的に過ぎる。

「……こちらから、お願いしたい。……貴女たちと、共に生きること
を」

他人を容易く信じるなど自殺行為だ。

頼れるのは己が力のみ。でなければ、人の欲望に容易く呑み込まれる。

それを、嫌というほど学んできた。

だからこそ、私は私のやりたいように、私の魂の赴くままに振る舞って来た。

誰かの為ではなく、私の為に。私自身の為に。

……そんな私が、共に居たいと、感じたのだ。

ならばなにを躊躇うことがある？　なにを恐れることがある？

「……ソフィーさん、シャルロット」

私は、もう一度。

私のやりたいように、やるだけだ。

「これからも、よろしく」

アンジェが妙に時代がかったセリフで私たちと暮らすことを了承してくれてから、早いものでもう半年が経った。

話を聞いてみると、アンジェはなんとシャルロットと同年（全然そんな風に見えない）らしく、今は一緒の学校に通っている。

本来なら、こんなに簡単にアンジェを引き取って、学校に通わせるなんて出来なかつた筈なんだけど――

（……まあ、たまのお願いなら聞いてくれる、てことかしらね、あの人も）

正直、あの人を頼るのは嫌だ。私は一人でシャルロットを育てると決めたし、あの人のことはシャルロットに知られないように振る舞っている。

アンジェは早々にシャルロットに父親がいないことに気付いたみたいだけど、そのことについてはまったく話を振ってこない。父親の写真すら家に置いていないことから、何かあると悟って、気を利かせてくれているんだろう。

……騙しているみたいで少し心苦しいけれど、ありがたいのも事実だ。今はアンジェの好意に甘えさせてもらっている。

（……大人びているというか、なんとというか。本当に、シャルロットと同年なのかしら？）

アンジェには子供らしいところがほとんどない。少しの間路上生活をしていたと言っていたし、子供らしくいられなかったのかもしれない。

我が儘を言わず、自分で出来ることは自分でやる。自分で出来ないことは、誰かの力を借りつつ自分で出来るようになる努力をする。

大人でも実行出来ない人が多いことを、平然とやっているのだ。手が掛からないと言えばそうなんだけど、もう少し甘えて欲しいと思ってしまう。

（せっかく、家族になれたのに……）

初めてアンジェに会った時。

いつの間にか居なくなっていたシャルロットを探して、街を走り回った。子供や若い女性の失踪事件が多発しているという噂を聞いて、不安で押し潰されそうになって、そんな時に聞こえたシャルロットの声に、安心して膝から崩れそうになって。

シャルロットを抱きしめて無事を確かめる私は、シャルロットを助けてくれたという人を見てびっくりした。シャルロットとそう歳の変わらない女の子だったからだ。

そして、その子が浮かべる笑顔が、気になった。

眩しいものを見るような、どことなく、寂しそうな——そんな、笑顔が。

(やっぱり、「家族」に憧れていたのかしらね……)

アンジェの身の上話は、あまり幸福とは言えないものだった。

アンジェと同じような、あるいはもつと過酷な境遇の人が大勢いることは勿論知っている。でも、実際に会ったことはなかった。だから色々と先入観があったのだけれど、アンジェはそれを見事に裏切ってくれた。

……あんなに真っ直ぐな眼は、見たことがない。だから余計に、アンジェがあんな顔をしていたことが許せなかった。

それで、アンジェに笑って欲しくて、「一緒に暮らそう」と言ったのだけと……。

(……我ながら、強引な誘いだったわね……)

……まあ、結果オーライではあったわけで。

私たちが暮らしている間、アンジェはあの時のような寂しげな笑顔を見せていない。家の手伝いをしてくれる時も、シャルロットと遊んだり護身術を教えてくれていた時も、心からの笑顔を浮かべてくれると思う。

(それが一番の収穫よね)

アンジェはとても真っ直ぐで、真面目な子だ。

騎士道精神と言うのか、曲がったことが嫌いで融通が効かないところがある。それは美德だと思うのだけれど、やっぱり他人と衝突することも多いみたいで、それがアンジェが家を飛び出した理由かもしれない。

ない。

そんなアンジェが、私たちという時には笑ってくれている。それはきつと、誇っていいことだと思う。

(まだ小さいのに、不思議な子……)

いつの間にか、私はアンジェを本当の娘のように思っていた。シャルロットも、お姉さんが出来たみたいと思っているだろう。

だからアンジェにも、私たちのことを家族と思っていてくれるといいのだけれど。

(……大丈夫)

自惚れかも知れないけれど。

それについては、心配いらなと思っています。

「ただいま、お母さん！」

「ただいま、ソフィーさん」

「お帰りなさい、シャルロット、アンジェ」

学校から帰ってきた二人を出迎える。

満面の笑顔のシャルロットと、そんなシャルロットを見ながら静かな笑みを浮かべるアンジェ。

その様は、本当の姉妹のようで。

「ほら、手を洗ってうがいをして。晩御飯ができる前に、宿題を終わらせてしまいなさい」

「はーい」

「さて、シャルロット。今日は全部自分で出来るか？」

「大丈夫だよ。昨日アンジェに教えてもらったからね」

「ふふ、そうか。それでは、答え合わせを楽しみにしていよう」

そんな遣り取りをしながら部屋に行く二人を見送る。

……まだアンジェは私を名前で呼ぶし、敬語で話すけれど。それでも最初の頃よりは、随分遠慮がなくなってきた。

(もう少し、時間がかかるだろうけど)

少しずつ——私たちは、「家族」になっている。

とりあえず、当面の私の目標は。

「いつかあなたに、「お母さん」って呼んでもらうからね、アンジェ」

三人で過ごした、幸福な時間。時はあっという間に過ぎ去った。

私はかつての体格に近付き調子が出てきたし、シャルロットは段々とソフィーさんに似てきた。

学校にも慣れ、少ないながらも友人が出来た時には感動した。なにやら私を講師とする護身術教室みたいなものが出来つつあるのには驚いているが、それも日々を潤す要素の一つだ。

(……平和、か。想像以上に、いいものだな……)

私には縁がないと思っていた。

だが今は、この日常を満喫している。

人は変わるものだ、身を持って知った。

(良い変化、なのだろうな)

かつての私からは考えられないほどの変わりようだが、悪いものはあるまい。シャルロットは私を姉のように慕ってくれているし、ソフィーさんも本当の娘のように接してくれている。

……「お母さん」とは、気恥ずかしくて、まだ呼べていないが。

(……だというのに、困ったものだ)

こんな素晴らしい日々には、一体なんの不満があるのやら。自分でも分からないが、私はいつからか、少々退屈に感じていた。

(……性分、か。死んでも変わらぬとは、本当に——困ったものだ)

それを自覚したのは、とある大会がテレビで放送されているのを見てからだ。

——第二回モンド・グロッソ。

ISという兵器を用いて行われるスポーツの、三年に一度開催される世界大会である。

(在り方はまるで違うが……やはり、似ている)

ISとは、数年前に篠ノ之束という人物が開発したマルチフォーム・スーツである。本来は宇宙開発用に開発されたのだが、現行のあらゆる兵器を凌駕する性能、そしてその性能を全世界に知らしめるこ

ととなった「白騎士事件」により軍事利用されるようになり、瞬く間に世界のパワーバランスそのものとなった代物だ。

しかし強大過ぎる兵器は、世界を滅ぼしかねない危険を孕む。軽々には使えない。

逆にまったく使わないというわけにもいかない。兵器には抑止力——つまりは力を示すことで敵を抑えつける役目もあるからだ。

そこで、スポーツとしてのISが発展したわけだ。全ての兵器を凌駕するISの性能、そしてそのパイロットの能力が、即ち軍事力の目安となる。大規模な試合や大会も、軍事演習に比べれば金もかからない。むしろ客を呼べる分、莫大な利益を得られるほどだ。

(……………)

そんなISが世界に認知されることになった「白騎士事件」とやらに若干の既視感を覚えたものだが、それについては考えても仕方ない。既に終わったことであり、今更何が出来るわけでもないのだから。

……さて、そのISだが、もう一つ、忘れてはならない奇怪な特性がある。

それは、「女性にしか動かせない」というものだ。

(…………兵器として、致命的だと思っただがな…………)

それは最早「欠陥」と呼ぶべき特性だが、とにかくその特性のせいで、ISは世界に大きな変化を齎した。

——極端な女尊男卑。

ISとは世界最強の兵器であり、ISに比べれば他の兵器はガラクタ同然。ISとはまさに武力の象徴であり、そのISを動かせるのが女性だけであるということは、世界の武力を担うのは女性であるということだ。

世界各国の軍隊はすぐさまISを配備し、それまで使われていた兵器は維持費がかかるために大幅に削減。当然、その兵器を使っていた軍人——戦車乗りやパイロットたちはリストラの憂き目に遭った。

軍には女性が増え、国を守るのは男性ではなく女性になった。次第に「ISを動かせる女性の方が、男性よりも偉い」という思想が浸透

していき、気付けば世界中が女尊男卑の世の中になっていた。

これは、今まで男尊女卑の時代が永く続いたことの反動でもあるのだろうか――

（愚かな。力だけが全てではないと謳っていた者たちが、力を手にした途端に意見を翻すとはな）

つまりは、そういうことだ。

男女平等だのなんだのと騒いでいた連中が、率先して男性を貶めている。そして世間も、そんな連中に便乗して無責任に騒ぎ立てる。

それだけでも既にかなり不快ではあるが、なにより不快なのは――
（……腑抜けが。牙の折れた負け犬でさえ、見苦しくとも吠えるというのに）

そんな馬鹿な女共に刃向かおうとすらしらない、去勢されたかのような男共だ。

そういう連中は自分が男というだけで女を見下していたのだろうが、そう考えるとなんと馬鹿の多いことか。

弱者には強気に出て、強者には尻尾を振る。貫くべき信念も守るべき矜持もなく、ただ楽に生きることしか考えてない。

そんな生き様で、果たして己を誇れるのだろうか。

（誇り……とは、少し違うのだろうか……）

思い出すのは、一人の傭兵。

自分たちの時代が終わったことを身を持って味合わされながらも奮い立ち、才無き身で足掻き続け、ついには最強をも超えるであろう存在となった男。

せめてあの男の万分の一くらいの気概は見せて欲しいものだ。届かぬのなら、届くまで前に進むという、気概を。

（まったく、不快だ）

この平和な世界も、大きな歪みを抱えている。

その歪みの最たる原因は、やはりISだろう。馬鹿な女も、腑抜けの男も、ISが開発されなければここまで増えることはなかったらう。

……いや、ISが悪いのではない。ISは所詮、道具に過ぎないの

だから。

悪いのは、道具に振り回される人の心だ。

……そう、道具は道具だ。人が道具を使うのであり、人が道具に使われるなどあってはならない。生活を楽にする便利な道具は無数にあるが、道具を使う時、どちらに主導権があるのかを常に考えなくてはならない。

——しかし、そこまで分かっているなら。

(……不快だが……)

それでも、私は。

やはり、剣を捨てられないらしい。

(これも、私の弱さの現れか。剣以外に取り得がないとは)

だが、だからこそ純粹だと言ってくれた者がいた。

ならばせめて、このたった一つの取り得を極めるとしよう。

己の全てを懸けて打ち込めるものがあるというのは、幸福なことだ
と思うから。

——と、いうわけで。

「……………か」

私は今、無料で受けられるというIS適性簡易検査の会場に来ていた。

「最強の兵器。いくら歪んでいようと、心躍るものがあるな……」

「検査希望者は、整理券を受け取って順番に並んで下さう」

受付の人に促され、列に並ぶ。見れば、列に並んでいるのはまだ幼さの残る少女ばかりだ。世界に唯一のIS操縦者育成施設であるIS学園が日本の高校にあたる機関であるから、当然と言えば当然なのだが。

「さて……」

私がISに興味を持った理由は、主に二つ。

一つは、先も述べたように私は剣を捨てられず、最強というものにもどうしても惹かれてしまうからだ。つまりは単純にISに乗りたいというものである。

そして、もう一つは――

(……フランス最大のIS開発企業、デュノア社、か。そう珍しい名でもないし、まさかとは思うが……)

「し、社長っ!!」

私が現在開発中の新型ISについて、開発責任者たちと会議を行っている時のことだった。我が社の幹部の一人が、血相を変えて会議室に飛び込んできたのは。

「なんだ、騒々しい。今は会議中だ、出ていけ」

「承知してしますっ! ですが、早急にお知らせすべきことが……!!」
「……なに?」

この会議は、他国のIS開発企業に遅れを取りつつある第三世代型ISの開発についての会議だ。今はまだ、実戦に耐えうるような第三世代型は開発されていない。だが早ければ来年にでも、どこかが第三世代型を完成させるだろう。

だというのに、我が社は試作、実験すら満足に行えていないのだ。急がなくては、ただでさえIS開発において他社に大きく遅れているというのに、その差が致命的なものになる。

つまりは、我が社の未来を左右するほどの重要な会議だということだ。そしてこの男がそれを知らぬ筈はなく、その会議を中断してでも伝えねばならないほどの緊急事態ということか。

「……報告しろ」

「はっ。こちらをご覧ください……!」

男が差し出して来たのは数枚の資料。内容は、今日フランスの片田舎で行われているIS適性簡易検査の結果だった。

私はどこかが第三世代型を完成させでもしたのかと身構えていたため、少々拍子抜けし――

「な……なんだ、この数値は……!?!」

想像を遥かに超えるその内容に、驚愕した。

「どの適性値も、歴代のヴァルキリーたちと比べても遜色ありません。特に近接戦闘の適性値は、あのブリュンヒルデ、織斑千冬にも匹敵します……!」

「なっ、馬鹿な、ブリュンヒルデに……!?!」

「そ、それは本当かね?!」

途端に、会議室が騒がしくなる。なにせあのブリュンヒルデ、織斑千冬にも匹敵するというのだ。

現役時代は他の追隨を許さぬ圧倒的な強さを見せつけ、引退した今もなお最強の名を欲しいままにする、文字通りの世界最強。

それに匹敵する I S 適性値だと? 一体何者だ……!?!

「おい! この少女は今どこにいる!?!」

「け、検査会場です! 検査結果待ちで……」

「社に呼び出せっ!! 大至急だっ!!」

「は、はいっ!!」

「いいか、このことは他言無用だ! 万に一つも、他社に漏らすなっ!!」

「二はいっ!!」

慌ただしく走り去って行く男に一瞥だけくれて、再び資料に目を落とす。そこに記載されている数値は、どれも信じられないほどに高い。

（しかもまだ十二歳だと? 迂闊、これほどの逸材を、今まで見逃していたとは……!）

見れば見るほど、興味を惹かれる。

素晴らしい、この少女を我が社のモノに出来れば、開発は飛躍的に進む……!

（名前もまた素晴らしい。これぞまさしく、神が我が社に遣わした聖女だ……!）

この少女をどう使えば効果的なデータを取れるか、会議室内で様々な意見が飛び交う。

有用なモノが多々含まれるそれも、今は私の耳には入らない。私の意識は、資料に載せられた写真、そこに写る金髪の少女に釘付けになっっていた。

（必ず……！ 必ずや、手に入れなければ！ ……いや——）

「必ず手に入れるぞ……アンジェ・オルレアン——！！」

オルレアンの騎士 第3話 娘として、姉として

「アンジェ・オルレアンさん?」

「はい。そうですか」

IS 適正簡易検査会場で検査の結果を待っていると、スーツ姿の男に声を掛けられた。男は一礼してから名乗りをあげる。

「申し遅れました。私はこの適正検査の責任者です」

私のような小娘相手にも礼儀正しく接する様は流石責任者を任せられるだけはあるが、問題は男が浮かべる笑顔だ。

目が全く笑っていない。相手の警戒を解きつつ隙を狙う——そんな狡猾さが伺える笑顔。

「そのような方が、私にどういったご用件でしょうか」

男に対する警戒を表に出さないように、不思議そうな顔を作る。

私は決して賢いわけではないが、戦闘以外の修羅場もそれなりにくぐっている。腹を探るのは苦手でも、隠す分には問題ない。

「オルレアンさんの適性値なんですが、非常に優秀でした。それで我が社の社長が、是非ともオルレアンさんにお会いしたいと」

……ふむ、スカウトということか。

AMS 適性と IS 適正にはなにかしらの関係があるのか、どうやら私は才能に恵まれているらしい。

「デュノア社の社長が?」

「はい。外に車を用意してあります。よろしければ、本社までお願いしたいのですが」

「……分かりました。それでは、家族に連絡をさせてもらってもよろしいでしょうか」

「もちろんです。ご家族の方を心配させるわけにはいきませんから」
そう断つてから、会場に設置されている電話に向かう。数コールして、ソフィーさんの声が聞こえた。

『はい、デュノアです』

「私です、ソフィーさん」

『あら、アンジェ。どうしたの?』

「今、IS適正簡易検査の会場にいるのですが——」

『……!!』

電話の向こうで、息を呑む気配がした。

……やはり、なにかしらの——それもあまり良くない関係があるようだ。

(……さて。如何にすべきか……)

『今、IS適正簡易検査の会場にいるのですが』

『……!!』

……心臓が止まるかと思った。

電話の向こうでアンジェが告げた言葉は、私にとってそれくらい恐ろしいことだった。

「……ISって、あの……?」

『ええ、そのISです』

思わず分かりきったことを訊いてしまう。そして返答は、やはり分かりきったものだった。

「どうしてそんなところにいるの?」

『ISには前々から興味がありまして。出来れば乗りたい、と思っっています』

「そう……なの……」

特におかしなことじゃない。ISはここ数年、世界中の興味を引きつけているものだ。その証拠に、IS学園の受験倍率は数万倍と言われている。

だから、アンジェがISに乗りたいと言うのは、まったく不思議なことじゃない。

問題は——

「……それで、どうして電話を?」

『……私のIS適正值は、優秀だそうです。それで、デユノア社の社長が会いたいと』

「……………」

……想像通り。そして、当たって欲しくなかった想像だった。

『……やはり、何か関係が有るのですね』

「……………!!」

アンジェの声は真剣で、確信を持ったものだった。

——誤魔化せない。

そう感じて、正直に話すしかないと思った。

……何より、アンジェに嘘は吐きたくなかった。

「……シャルロットの、父親なの」

『……やはり、そうですか』

「知っていたの？」

『いえ。ですがなんとなく、そうなのではないか、と』

シャルロットに父親がおらず、家には写真すらない。

例えばシャルロットが幼い時に、あるいは生まれる前に死んでしまったのだとすれば、私と父親が写っている写真くらいはあつていいはずだ。それすらないということは、私が飾るのを避けているか、初めから写真自体がないということになる。

……そうなれば、その理由になりそうな事情なんて、大して多くない。

「……私ね、デユノア社の社長の、愛人だったの」

『……………』

「シャルロットを身ごもったことを知ったら、あの人は私を捨てたわ。この家と、親子が生活していくのに困らないだけのお金を渡して」

『……………』

「シャルロットには、話してない。私は、一人でシャルロットを育てると決めたから。あの子には、余計なものを背負って欲しくなかったから」

『……申し訳ありません。貴女にとって、辛いことをしてしまった』

アンジェの声は沈んでいた。責任感の強い子だから、自分を責めているのだろう。

「気にしないで。あなたには、隠し事をしたくなかったから」

『……シャルロットには、話すのですか？』

「……まだ、勇気が出ないわ」

『分かりました。では私も、悟られないよう注意します』

アンジェのその言葉はありがたかったけれど、同時に申し訳なくなってしまう。

だって、アンジェには話して、シャルロットには話さないということとは——

「……ごめんなさい」

『……？』

「私、あなたとシャルロットを区別してる。二人とも、私の大事な娘だって、思ってたのに」

私は結局、アンジェのことを部外者と思っているのだろう。

身内だからこそ話せないことを、アンジェには話した。それは、アンジェに対する裏切りなのではないか。

『シャルロットは当事者です。話せないのも、無理はありません』

「……でも」

『それに。不謹慎ではありますが、貴女の沈んだ声から、私を大事に思ってくれていることが良く分かりました。……私には、それだけで十分だよ——母さん』

「……!!」

電話越しでも分かる、照れくさそうな声。

そんな声で言われた言葉が、信じられないくらい嬉しくて。

……どうしよう、涙が出てきそうだ。

『それでは、この話は断ります。これから家に——』

「待つて。アンジェは、ISに乗りたいんでしょう？」

『……ええ。ですが——』

「なら、行ってきて」

『……いいのですか？』

「いいのよ。いっつも真面目一徹の娘が、初めて我が儘を言ってくれたんだもの。応えてあげなきゃ母親じゃないわ」

『……ありがとうございます、ソフ——』

「ただし!!」

『?』

「私のことは、さつきみたいに「母さん」と呼ぶこと。それに、そのかしまった敬語も禁止よ」

『……分かり——いや。分かったよ、母さん』

「……うん。それじゃあ、気をつけて行ってらっしゃい、アンジエ。晩御飯までには帰るのよ」

『分かった。……ありがとう、母さん』

そうして、電話が切れる。

その頃には、最初に感じた恐怖は微塵もなくて、ただただ嬉しくてたまらなかつた。

——ようやく、アンジエに母親と認めてもらった。

その喜びと誇りだけが、私の胸を満たしていた。

母さんの許しを得て、デュノア社の本社に来了。その最上階の社長室に通され、デュノア社長に面会する。

「はじめまして、オルレアン君。私がデュノア社の社長だ。今日はよく来てくれたね」

「はじめまして。アンジエ・オルレアンです」

デュノア社長は優しい笑顔を見せているが、その目に宿る狡猾さは先ほどの男の比ではない。母さんの話と併せて、決して心を許していない相手ではない。

「君の検査結果を見せてもらったよ。素晴らしい才能だ」

「お褒めに預かり、光栄です」

「はは、そんなにかしまらなくても良いのだよ。君はお客様なのだからね」

小娘相手にご機嫌取り、か。

話しているだけで怖気が走る。この男が人間に見えない。腹に底無しの欲望を溜め込んだ、怪物だ。

「それで、私に会いたい、と聞いていますが。お忙しい身でしように、一体どのようなご用件で？」

「うむ。実は君に、我が社のパイロットになってもらいたいのだよ」

予想通りと言うか、他に考えられないと言うか。頭に「テスト」と付かなかつたことが意外ではあるが。

「……私を？ デュノア社ほどの規模を持つ会社であれば、優秀なパイロットはいくらでもいるでしょうに」

「勿論、私は我が社のパイロットたちは他社のそれになんら劣ることはないと思っている。だが君の才能はそれすらも凌駕し、さらにはまだまだいくらかでも伸びるほどに若い。可能性では比べ物にならないだよ」

褒め殺し、か。どうやら、よほど私を手に入れたいらしい。

事前に調べた限りでは、デュノア社はIS開発に乗り遅れている。最近発表されたラファール・リヴァイヴは相当な名機のようなだが、第二世代型のISだ。他の大会社が第三世代型の開発に取り掛かり始めている時期に第二世代型を出している時点で、デュノア社が置かれている状況が危機的なものであることがうかがえる。

本来ならば、パイロットの確保に力を割く余裕は無い筈。それでも私を欲するということは、IS適正というのは、ISの開発にも影響があるのだろうか。

「私の適正ですが、どれほどのもののですか？　そういえば、まだ結果を聞いていませんでした」

「ふむ。オルレアン君、ブリュンヒルデは知っているね？」

「はい。第一回モンド・グロッソ優勝者、織斑千冬。ISのパイロットをを目指す者に、彼女を知らぬ者はいません」

「ああ。第二回モンド・グロッソは何故か決勝を辞退したが、戦っていれば勝ったのは彼女だろうと言われている」

「私もそう思います。他のヴァルキリーたちも凄まじい実力者でしたが、その中でも彼女は格が違った」

本来ならば「ブリュンヒルデ」の称号はモンド・グロッソ総合優勝者に贈られるものだが、しかし現在ブリュンヒルデを名乗ることが許

されているのは、決勝を辞退した織斑千冬だけだ。

それほどまでに彼女は圧倒的で、彼女こそが最強だと世界中が認め
ている証である。

「その後、どういうわけか引退してしまっただが、今でも最強であること
は間違いないだろう」

「それで、そのブリュンヒルデがどうしたのですか？」

「……実はね。君の適正値は、ブリュンヒルデに匹敵するほどだった」
「な、そんな……!?! 私がですか!?!」

……流石に驚いた。

第二回モンド・グロッツのブリュンヒルデの試合を見たが、まるで
装甲の隅々にまで神経が通っているかのように滑らかな動きをして
いた。

あれほどの動きを可能にするだけのI S適正が私にもあるのだと
したら、かつてのそれに劣らぬ戦いが出来るだろう。

「分かるかね? 君はその歳で、世界最強に最も近い場所にいるのだ
よ」

「なんと……」

「私たちは君の名前を聞いた時、運命的なものを感じた。まるで神話
を目撃しているかのような衝撃を受けたよ」

「私の名、ですか」

……フランスの救世主、あるいは愛国心の象徴として世界中に知ら
れている、ジャンヌ・ダルク。

彼女には「聖女」などの二つ名がいくつかあり、その内の一つが――

「……「オルレアンの乙女」。君はまさしく、我らが祖国、フランスの
ために神が遣わしたのではないかと。そう思ってしまうのも、無理
からぬことだろうか?」

正直、僅か十九歳で命を落とした悲劇のヒロイン（活躍を考えると
ヒーローの方が正しいかもしれないが）に例えられても微妙なところ
だ。

だが話題としては、これ以上のものはそうはあるまい。

最強と名高いブリュンヒルデに匹敵するほどの適正を持つ者が突然現れ、しかもそれはオルレアンという名の少女だった――

……出来過ぎだろう。

「君に来てもらえれば、我が国のIS関連の事業は大きく発展する。そして君なら、必ず国家代表になれるだろう」

「……私はまだ、ISに乗ったこともないのですが」

「だが才能は十分過ぎるくらいだ。君ならばすぐにISを自在に操れるようになる。我々も、全力でサポートさせてもらうよ。……君にとつても、悪い話ではないと思うが？」

そしてデュノア社長は、一拍置いて。

「……どうかね？ 我が社に、そしてフランスに、君の力を貸してくれないか――アンジエ・オルレアン君」

「……………」

答えは初めから決まっている。元々そのために来たのだから。

デュノア社長は私を利用するつもりだろうが、それは私も同じだ。相互利用の関係には慣れている。

「……私でよろしければ、手伝わせていただきます」

「おお……………」 ありがとう、オルレアン君！」

私の手を取って喜んでみせるデュノア社長。

その時に、一瞬だけ見えた。

恐らくはこの男の地だろう、欲望の色に染まった、醜い笑顔を。

(それでいい。その方が、気兼ねなく利用できる。……だが、鴉殺しの山猫を、容易く飼えると思うなよ)

こうして、私はデュノア社にパイロットとして招かれることになった。

今日のところは一旦帰り、また後日、親の許可を貰ってから正式に決めるとのこと。

……では、帰るか。

私の、家族の元に――

「お帰り、アンジェ！」

「ああ。ただいま、シャルロット」

うむ。帰る家があるというのは素晴らしい。この温かい笑顔を毎日拝める私は幸せ者だろう。

……だがこの笑顔も、しばらくは見れなくなるのかもしれないな。

「今日はどうしたの？ 随分遅かったね」

「少々野暮用があつてな。待たせてしまったか？」

「ううん、待ってないよ。ただちよつと心配しただけ」

「む、それは心外だな。これでも少しは腕に覚えがあるのだが」

「アンジェが少しどころじゃなく強いことは知ってるけど、それでも女の子なんだから。あんまり遅くならないようにしないと」

「……そうだな。善処する」

シャルロットには悪いが、これからは帰りが遅くなるなんてものではない。

あまり心配させたくはないのだが、こればかりは仕方ない。

「お帰りなさい、アンジェ」

「ただいま、ソ——んんっ。……母さん」

ついついもの癖で名前を呼びそうになったが、その瞬間母さんがなにやら怖い笑顔になったので、慌てて言い直す。

……すると。

「……………え？」

シャルロットの呆然とした声が聞こえた。

が、それを無視して母さんは話を続けた。

「ちようど今、晩御飯ができたところよ。手を洗って、うがいしてきなさい」

「分かった。……ふむ、なんとか言い付けを破らずに済んだか」

「……………あれ？」

夕飯までには帰るようにと言われていたが、思ったより遅くなってしまった。だがまあ、どうにか間に合ったようだ。

「さて、今日のメニューは？」

「それはテーブルに着くまでのお楽しみよ」

「む……まさか、ご馳走か？」

「うん。今日はアンジェの初我が儘記念日だからね、ちよつと頑張っちゃった」

「……………ううん？」

しきりに首を捻るシャルロットを放置して食卓に向かう。

すぐにテーブルが見えて——おお、これは想像以上のご馳走だ。うむ、見るからに美味そう——

「ち、ちよつとちよつと!？」

「む。どうした、シャルロット？」

「どうしたじゃないよ！ 今アンジェ、お母さんのこと母さんって呼んだー！」

「……………なにかおかしいか？」

「おかしいよ！ 朝は名前で呼んでたでしょ!？」

「……………そうだったか？」

「そうだよっ！ お母さんズルいっ！ 僕もアンジェに——ええつと！」

なにやら狼狽えているシャルロット。

「……………僕もアンジェのこと、お姉ちゃんって呼ぶっ！」

「……………それだと逆じゃないか？」

「アンジェにどう呼んでもらうかじゃないの？」

「……………あれ？」

そのまま再び首を捻り始めたシャルロットであった。

「……………シャルロットは？」

「ようやく寝た。何があったのか、よほど気になるらしい」

「ふふっ。あなたと私、どっちに嫉妬してるのかしらね」

くつくつと楽しそうに笑うが、これから話すのは少々重い話だ。そ

れが分かっているのです、母さんもすぐに真剣な顔になる。

「……どうだった？」

「随分と気に入られた。どうも私には、ブリュンヒルデに匹敵するほどのIS適正があるそうだ」

「ええっ？ ブリュンヒルデって、あの？」

シャルロットを起こさないように小声ではあったが、かなり驚いている。

「……まあ、そうだろうな。なにせあのブリュンヒルデだ。第二回モンド・グロツソの放送は家族三人で見たので、彼女の強さは母さんも良く知っている。

「そ、そんなに凄かったの……？」

「ああ。それで、デュノア社のパイロットにならないか、と」

「……そう」

「熱く語られたよ。それほどの才能とオルレアンの名を持つ私は、神が遣わした聖女だそうだ」

途端に母さんの顔が曇る。デュノア社長の言い回しに嫌な思い出でもあるのだろう。

「大仰な例えを持ち出して、相手を酔わせ、誘導する。……そんなところか」

「そうね。……私はそれに、騙されてしまったわ」

「……」

母さんの年齢から逆算すれば、シャルロットを産んだ当時、成人どころか子供とすら呼べるような年齢だった筈だ。そんな若い女性を妊娠させた挙げ句に捨てるなど言語道断だが、今はそれを持ち出す時ではない。

「……アンジエは賢いのね」

「いや、育った環境が特殊だったただけだ」

「……ごめんなさい」

「ごっちこそ。……この話題はよそう。謝罪合戦になりそうだ」

「……ええ、そうね。……それで、どうするの？」

「……受けることにした。ブリュンヒルデの戦いを見てから、私はI

Sに惹かれている。……乗りたいんだ、どうしても」

「……そう」

母さんの表情が、見る見る沈んでいく。私をデュノア社長に預けるのが不安なのだろう。

……無理もない。私が同じ立場——例えばシャルロットがデュノア社長の元へ行くことになったとしたら、私も平静ではいられないだろう。

「……すまない、母さん。我が儘を言って」

「謝らなくていいのよ、アンジェ。言ったでしよう？ あなたが我が儘を言ってくれて、私はむしろ嬉しいくらいなのよ？」

「……ありがとう」

優しい笑顔を浮かべる母さんに、心からの感謝を述べる。

相当な不安が有る筈なのに、今はそれを微塵も表情に出していない。

……なるほど。母は強し、か。

「ありがとう、母さん。貴女の娘になれて、本当に良かった」

「それは私のセリフよ、アンジェ。……あなたとシャルロットは、私の誇りよ」

「なら、私は。母さんの娘として、シャルロットの姉として、恥じることのない活躍をして見せよう」

「そんなことはいいの。ただ、無理だけはしないでね」

そう言って、母さんはそっと私を抱きしめた。

……この温もりよりも戦いを求めるなど、愚かに過ぎる在り方が。

それでも私は、剣を捨てるわけにはいかない。

私が、私であるために。

「いつでも帰ってきなさい。待つてるから。私も、シャルロットも」

「ああ。必ず、帰ってくるよ。……ここが、私の家だから」

「えぐ、ぐすつ……」

「泣くな、シャルロット。今生の別れではない。それどころか、いつでも戻って来れるんだぞ?」

「それにしたって、昨日教えてくれたって良かったじゃないか!」

「こうして泣かれると、分かっていたからな。……言い出せなかった」
「うぐつ、ううううう……!」

泣き止まないシャルロットの頭を撫でる。

こんなことをしたことがなかったので大分乱暴な手付きになってしまったが、シャルロットは私の手を振り払おうとはしなかった。

今日から私はデュノア社で働くことになるのだが、ただパイロットとしてISに乗るだけでなく、様々なデータ取りにも参加しなくてはならない。よって、デュノア社のすぐそばにある寮で生活することになる。学校も辞めて、勉強はISについてのそれと並行してデュノア社に教わる。

……それはつまり、この家を出るということだ。

「ほら、シャルロット。あなたがそんなんじや、アンジエが行けないでしょ」

「うぐ、ひつく……! ……アンジエエエエ……!」

迎えに来たデュノア社の車のことなどまるで意に介さずに、シャルロットは泣きじやくっている。

これほどまでに好かれていることが嬉しくあったが、そんなシャルロットを泣かせてしまっていることが心苦しくもあった。

「すまない、シャルロット。……出来るだけ、まめに家に帰るようにする」

「絶対だからね!! 約束だよっ!」

「ああ、約束だ」

抱きついて来たシャルロットの背中を、あやすようにさする。

……やはり、温かいな。

「いいか、シャルロット。私が留守にする間、お前が母さんと家を守るんだ。護身術を教えてやっただろう?」

「うん……けど、僕はアンジエみたいに強くないよ」

「お前は母さんの娘で、私の妹だ。……お前は強いよ、シャルロット。それは私たちが、一番良く知っている」

「……うん」

そう言うと、シャルロットは私から身を離れた。

ぐしぐしと涙を拭い、泣きはらして真っ赤になった目で、真っ直ぐに私を見る。

「……行ってらっしゃい、アンジェ！ 頑張ってね!!」

「ああ。……では」

ずっと、自分のために戦ってきた。

そしてこれからも、自分のために戦い続けるだろう。

——だが。

「行ってきます。母さん、シャルロット」

今の私は、ただ戦いだけを求めているわけではない。

私の母に、私の妹に。

——胸を張れる、騎士になりたい。

(良く見ておけ、シャルロット)

ここからが、始まりだ。

かつては殺戮の道具に成り下がった私が、本当に求めていた戦いを。

最期に一度だけ味わえた、あの戦いを。

——今度こそ。

(私の、剣をつ!!)

オルレアンの騎士 第4話 新たなる剣

「ハアアアアッ!!」

「オオオオオッ!!」

デュノア社のテスト用アリーナ。

ここで今、我が社のエースパイロットであるクロエ・ルクレールと、期待の新星アンジェ・オルレアンが模擬戦を行っている。

ルクレールは第二回モンド・グロツソの参加者、つまり元フランス代表であり、現在の最有力代表候補生だ。ヴァルキリーでこそないが、いくら才能があろうとI.S.に乗り始めてまだ三ヶ月ほどのオルレアンがかなう相手ではない。この模擬戦は飽くまでもオルレアンに戦闘経験を積ませること、オルレアンが天狗になって才能に胡座をかくことを防ぐことが目的である。

——いや、目的だった、と言ったほうが正確だろう。

「信じられん……クロエ・ルクレールが、こうまで抑えられんとは……！」

凄まじいといしか言いようのない攻防。

状況はオルレアンが不利だが、まだいくらでも逆転できるだろう。むしろルクレールの方が、オルレアンの気迫に押され気味だ。

「ハアッ!!」

ルクレールの専用機、ラファール・リヴァイヴ・カスタムが両手に持つバトルライフルから高威力の弾丸が発射される。

それをオルレアンは、ラファール・リヴァイヴの両手に近接格闘用ブレード、ブレッダスライサーを展開して切り払った。

「どんな反射神経してんのよ……!」

三点バーストを採用することで威力と精度を両立しているバトルライフルだが、オルレアンとは相性が悪い。連射が足りず、かわされるかブレードに全て防がれてしまうのだ。

「せいっ!」

「くうっ……!」

隙を突いて、オルレアンが踏み込む。ルクレールは振るわれたブ

レードをバトルライフルを盾にしつつ退がって回避し、ドラムマガジン式のショットガンを展開して猛連射、オルレアンを突き放す。

「これは、想像以上か……!」

距離が離れた二人だが、そのまま数秒、睨み合っている。お互いに仕掛ける隙を伺っているのだろう。

オルレアンは接近戦でこそその才能を大いに発揮するが、射撃もなかなかのものだ。しかしルクレールが操るラファール・リヴァイヴ・カスタムは重火器を大量に装備した機体。通常のリヴァイヴで撃ち合うには流石に分が悪い。

逆に何故ルクレールが攻撃を仕掛けないかと言うと、当たらないからだ。

中距離以上の銃撃は、そのほとんどがかわされ、あるいは防がれる。数発は当たることもあるが、その数発を当てるために消費される弾丸の量を考えれば、倒す前に弾切れになることは目に見えている。

故にルクレールはショットガンやマシンガンなどの武器で近距離から弾幕を叩き込まなければならず、それは即ちオルレアンの間合いで戦わなくてはならないということであり。

射撃戦ではかなわないオルレアンは、待ち受ける猛火の中に自ら飛び込んで行かなくてはならない、ということだ。

「素晴らしい! これほどの戦いならば、モンド・グロツソでも通用するぞ……!」

精神を焦がすほどの緊張感が伝わってくる。

さらに数秒が経ち、このままでは埒が開かないと思ったのか——動いたのは、やはりと言うか、オルレアンが先だった。

「往くぞー!」

イグニッション・ブースト

瞬時加速を発動し、一気に距離を詰める。

だがそんな見え見えの突撃は、当然ルクレールに読まれている。両手のショットガンを構え、オルレアンに向けて引き金を絞り——

「な……!?!」

「何……!?!」

驚きの声は、私とルクレールの物。

オルレアンは、前進中に急上昇してルクレールの銃撃をかわした。しかもその速度から、ただスラスタを噴かしたのではないことが分かる。瞬時加速を使ったのだ。

それは、つまり――

「に、二段瞬時加速だと……?!?」

二段瞬時加速は、通常の瞬時加速とは比べ物にならないほどに難度の高い技術だ。瞬時加速中の強烈なGを受け流しつつ二度目の瞬時加速を使わなければ、自らの体を傷付けてしまうからだ。

加えて、機動力特化機ではないリヴァイヴでは、スラスタへのエネルギーの充填にも苦勞する筈。確実に成功させるのは、モンド・グロツソのキャノンボール・ファスト部門参加者たちくらいのものである。

（それを、僅か三ヶ月程度の搭乗時間でやってのけるか……!）

……天才だ。疑う余地すらなく。

「オオオオオッ!!」

そのまま縦に一回転し、ルクレールへ向け急降下。両手のブレードを振り上げる。

「な……めるなあっ!!」

ルクレールは素早くショットガンを持ち上げ、オルレアンに照準を合わせる。

それに対しオルレアンは、銃口が散弾を吐き出すより、僅かに早く。

「ハアッ!!」

左手のブレードを、投げた。

「ッ!?!」

まさかの行動に、ルクレールが緊急回避を行う。同時にショットガンも撃って行ったが、回避の際に照準がズレ、満足なダメージは与えられなかった。

仕留め切れなかったことを瞬時に悟り、再びショットガンを構えるルクレール。銃口の先には、奇襲に失敗したオルレアンが――

「ぜえあっ!!」

二撃目の投擲を、放っていた。

「ぐあっ!？」

ブレードがショットガンに突き刺さり、ドラムマガジンに装填された大量の散弾が暴発、衝撃と驚愕にルクレールが体勢を崩す。

……そう、歴戦の猛者であるクロエ・ルクレールが、驚愕している。無理もない。アンジェ・オルレアンは、ISに乗り始めて三ヶ月足らずの少女は、回避行動中のISが持つ銃に、ロックオンの出来ない投擲攻撃を当てたのだから——!

(もはや、天才という言葉すら生温い……!)

「オオオオオオオッ!!」

雄叫びを上げながら、ブレードを失った両手にマシンガンを展開して突撃するオルレアン。ルクレールは体勢を崩しながら、それでも残ったショットガンをオルレアンに向ける。

至近距離での銃撃の応酬。このまま行けば、二機のシールドエネルギーはほぼ同時にゼロになるだろう。

「私にもっ……! ……意地があるのよっ!!」

「ぬうっ……!」

だが、やはり射撃ではルクレールに分がある。

散弾の嵐がマシンガンの片方を弾き飛ばす。火力が半減した隙に空いた手にアサルトカノンを展開し、とどめの一撃を放ち——

「ちいっ!」

——瞬時加速により、かわされた。

(あれほど体勢を崩しておきながら……!)

危ういタイミングで弾幕から逃れたオルレアンは再び瞬時加速を発動、ルクレールに突撃する。

凄まじい速度だったが、ルクレールはギリギリでアサルトカノンを照準。オルレアンも相当接近しているが、間合いに踏み込むにはほんの僅かに時間が足りない。

そして、一発の爆裂弾が発射され——

「ぬうううあっ!!」

——オルレアンが盾として構えた、マシンガンを粉碎した。

「なっ!？」

亜音速で前進していたために相対速度で威力を増してはいたが、それでもどうにか耐え切った。マシンガンを犠牲にすることで僅かなシールドエネルギーを得たが、同時に武装も失った。オルレ안의武装切り替え速度では、次の武装を展開する時間的余裕はないだろう。(さあ、ここからどう攻める……!?)

オルレアンが無意味な時間稼ぎをするとは思えない。なんらかの勝算がある筈だ。

(見せてみる、お前の可能性を!)

ついに手足の届く距離まで辿り着く。ルクレールが現在展開している武装では近過ぎて攻撃出来ず、オルレアンにはそもそも武器がない。

お互い攻撃手段がない——そう、思ったが。

「ぐっ!」

オルレアンはルクレールの首を掴み、そのまま地表へと急降下を始めた。

見る見る内に高度が下がり、ルクレールも必死にもがくが、オルレアンの手を外すことができない。

(叩きつける気か!!)

このまま地表に激突すれば、ルクレールのシールドエネルギーは底をつくだろう。これは武器を失ったオルレアンの、最後の攻撃。

——だが。

「……のおっ!」

「っ!」

ルクレールはハンドガンを展開し、オルレアンの胸に突きつける。間を置かずに引き金を絞り、そのまま連射。

こちらにも、追い詰められているルクレールにとって最後の攻撃だ。

——オルレアンが耐えきるか、ルクレールが攻めきるか。

「オオオオオオオオツ!!!」

そして、地表に激突する、直前で——

『……シールドエネルギーゼロ。勝者、クロエ・ルクレール』

模擬戦後の更衣室で、ルクレールさんに会った。彼女は栗色の髪を拭きながら、気さくに声を掛けて来た。

「お疲れ様、オルレアン」

「お疲れ様でした、ルクレールさん。素晴らしい試合でした。ありがとうございました」

「あなたこそ。噂には聞いてたけど、それ以上ね」

「いえ、そんな。結局負けてしまいましたし」

「当然よ……と、言いたいところだけど。かなり危なかったわ。機体の差が無ければ、負けていたのは私だったでしょうね」

「まさか。二度は通用しないような手ばかりでしたから。それで勝てなかったのですから、次も勝てないでしょう。……地力が違います」
「それでも、あなたは若いんだから。これからどんどん強くなって、私なんかあつという間に追い抜くわ。……悔しいけどね」

そう言うルクレールさんの顔は確かに悔しげだったが、同時に晴れやかでもあった。

「前回のモンド・グロツソじゃ、良い結果を残せなかったからね。それでも国内大会じゃ、私は負け無しだった。……IS開発だけじゃなくて、パイロットの育成も遅れてるのよ、フランスは」
「……………」

「けど、あなたが現れた。あなたなら、きっとモンド・グロツソで優勝できる。あなたなら——二人目のブリュンヒルデになれる」

「……そこまで買っていただけとは」

「けど、決して買いかぶりではないわ。さっきの試合を見た人なら、誰だってそう思うわよ」

そう言つて、ルクレールさんが右手を差し出す。

そして少し寂しそうな、しかし何かを決意したような表情で。

「……フランスをお願いね、オルレアン。私じゃ力不足だろうけど、訓練に付き合わせて」

私はルクレールさんの手を取り、応える。

「……よろしく願います、ルクレールさん」

「クロエって呼んで。あなたとは仕事上の同僚じゃなくて、友達になりたいから」

「分かりました、クロエさん。それでは私のことも、アンジエと」

「うん。これからよろしくね、アンジエ」

……これは、ただ友情を交わしたわけではない。

フランス最強の戦士から、フランスの未来を託されるということだ。

「あなたに認めてもらえたこと、誇りに思います」

「ありがと。それじゃあ私は、世界最強の最初のコーチになったことを誇りにするわ」

「はは、それは流石に気が早過ぎでは？」

「そうかしら？ あとほんの数年よ」

「……期待に応えられるよう、励みます」

……重い。これが、国の期待を背負うということか。欲望の温床でしかなかった企業とは比べ物にならない。

……これを、私は滅ぼしたのか。

(……過去を悔やんでも意味はない。今は、前に進まなければ)

全身全霊を懸けて、この期待に、応えよう。

それが、償いになるかは、分からないが。

それだけが。今の私に、出来ることだから。

「……どうだ？」

「素晴らしいデータが取れました。……ご覧ください」

「……おお……！」

ディスプレイに表示されたデータは、今まで見たこともないようなものだった。オルレアンがIS適性値だけでなく、戦闘そのものの才能も凄まじいことが伺える。

「機体がパイロットに追いついていない。……逆はよくありますが、

こんなことは初めてです」

「素晴らしい。至急、オルレアンの専用機に反映しろ」

「はい。このデータを使えば、他にない機体が組み上がるでしょう」

「……第三代型に出来そうか？」

第三代型ISは、主にイメージ・インターフェイスを用いた兵器の搭載を目標としたものだ。そしてイメージ・インターフェイスは、オルレアンのように才能で機体を操る者と相性が良い。

「勿論です。彼女しか扱えない物になるでしょうが」

「構わん。どれほどじゃじゃ馬であろうと一機でも完成させれば、国を納得させられる」

そうすれば、引き続き国の援助を受けられる。オルレアンの才能を示してやれば惜しみはすまい。いくらでも引き出せるだろう。

二機目以降の開発は、それからでも遅くはない。

「では、我々の好きに作っても？」

「ああ、徹底的に尖らせてやれ。オルレアンが乗るのだ、いくらやっても、やり過ぎということにはならん」

「分かりました。では、そのように」

そして我が社も、オルレアンにはいくらでもつぎ込むつもりだ。オルレアンの専用機が完成し、それを乗りこなすようになれば——もはや、無敵と言っても過言ではあるまい。

(クク……まったく。ようやく私にも、運が向いてきたか)

それも特大の幸運だ。オルレアンの存在だけで、我が社は今までの遅れを取り戻しても釣りが来る。

機体の開発しかり、パイロットの確保しかり。

……だがここまで話が上手く行き過ぎると、一つ気掛かりなことがある。

(……オルレアンの保護者が、まさかあの女とはな)

一年ほど前に子供を引き取りたいなどと言って来たが、まさかそれがオルレアンだったとは。まったく興味がなかったが下手なことを騒がれても面倒なので、ろくに調べもせず手回したが……。

(ふん。だが、考えようによつては、これも都合だな)

いざとなれば、利用できるだろう。要はオルレアンを我が社につなぎ止めておけばいいのだから。

(しかし、オルレアンは知らんのか？ あの女のことだ、話していない、ということも有り得るが……)

問題はそこだ。

オルレアンが私とあの女の関係を知らずに我が社に来たのか、知っていてあえて我が社に来たのか。

それが分からなければ、対処が遅れる可能性もある。

(だが、急いで確認する必要があるまい。下手に藪をつついて蛇が出てはかなわんからな。ゆっくり、時間を掛けて探ればいい)

そう、今はそんなことよりも優先しなければならぬことが山ほどある。まずは目先のことから片付けて行かねば。

「さあ、開発を進めろ。……急げよ、他社もオルレアンの存在を知る頃だ。引き抜かれん内に、オルレアンが気に入る物を作れ」

「お任せを。これほどの素材を得られたことで、皆かつてないほどにやる気を出しています。そう遠くない内に、完成させますよ」

「うむ。期待しているぞ」

オルレアンを他社に取られることだけはあつてはならない。そうなれば、我が社は終わりだ。

だが逆に、オルレアンを確保し続けることが出来れば、我が社の未来は安泰だ。

(ク、ククク……。本当に、良いモノを得た。さあ、頼むぞ、オルレアン。お前の活躍に掛かっているのだ。我が社に、そして私に、栄光を齎してくれ——！)

数ヶ月ぶりに、ようやく我が家に帰って来れた。

妙に緊張してしまって、玄関先で一つ深呼吸。気持ちを落ち着けてから、扉を開ける。

「……ただいま」

「……あー」

私の声を聞きつけたのか、家の奥からシャルロットの声が聞こえた。

次いでパタパタと駆けてくる音。すぐに鮮やかな金髪が見えて、それが真っ直ぐに、私の胸に――

ズドムツ!!

「ゴフウツ!?!」

――鳩尾に突き刺さった。

「ぐはっ、ぐほっ、げほおっ……!!」

凄まじいダメージだった。息が出来ない。パキケフアロサウルスの突進頭突きを受けたような気分だ。いや、アレの頭突き説は間違いだったんだっけ？ 詳しくは知らんが。今度調べてみるか。

「……………」

「ぐふっ…………っ、はあ、はあ、…………ふう…………」

「……………」

「…………た、ただいま、シャルロット」

「…………お帰り、アンジェ」

酸欠による混乱からどうにか抜け出し、ジト目で私を睨む妹に挨拶する。

しかしシャルロットは、パイッとそっぽを向いて私を見てくれない。

…………怒らせてしまったか。

「すまない、シャルロット。遅くなっちゃった」

「…………まめに帰って来るって、言ったのに」

「本当にすまない。仕事が忙しくて、それに私が必要だと言われてしまっただけ。どうしても抜け出せなかったんだ」

「ふーんだ」

「…………参ったな」

シャルロットはいまだかつて見たことがない程にぐ立腹だった。どうすれば許してもらえるのだろうか。

考えていると、家の奥からシャルロットと同じ金髪の女性が現れ

た。

「お帰りなさい、アンジェ」

「ああ。ただいま、母さん」

母さんはシャルロットの様子を見て、苦笑を浮かべる。

「ほら、シャルロット。機嫌直しなさい。アンジェだって忙しいのに、無理して帰って来たんだから」

「ふーんだっ!」

「あらあら」

「はは……」

困った笑いを上げる私に、呆れ顔の母さん。

すると母さんはイタズラを思いついた子供のような顔になり、私と目を合わせる。

そしてアイコンタクト。……面白い、了解した。

「じゃあアンジェが帰って来たし、今日はご馳走でも作りましょうか。

……アンジェ、手伝ってくれる?」

「分かった。ついでに、ここ最近のことでも話すよ。シャルロットは聞いてくれそうもないしな」

「……………え?」

愕然とした声を上げるシャルロット。

背後で母さんが物凄くイイ笑顔をしていることにも気付かない。

「そうね、怒ってるシャルロットは手伝ってくれないかもしれないものね」

「ああ、謝っているのに、相手にしてくれない。これは下手に言い訳をするより、しばらくそつとしておく方が良さそうだ」

「あ、あっ……………」

シャルロットが慌て始める。……もう一押しか。

「残念だな。シャルロットに会うことを楽しみにしていたのだが。土産話もあったのだがなあ」

「それは残念ね。仕方ないわ、シャルロットは聞いてくれないだろうし、私にだけ聞かせて?」

「う、ううう……………」

シャルロットが涙目になってきた。

……どうしよう、滅茶苦茶可愛い。私にいじめっ子の気質があるとは知らなんだ。

「そうだな。では母さん、聞いてくれるか？ 話したいことが沢山ある。二人で話そう。シャルロットは放っておいて」

「そうね。私も話したいこと、聞きたいことがいっぱいあるわ。二人で話しましょ。シャルロットは放っておいて」

「わ、わかった！ わかったよ！」

ついに堪らなくなつたのか、シャルロットがうがーっ！ と吼えた。

そのままの勢いを維持し、頭を下げる。

「ごめんなさい！ アンジエを困らせたくて、怒ったふりをしました！」

「うむ、素直でよろしい」

「もう、なんで僕が謝ってるの!? 約束破つたのはアンジエなのにな！」

「いや、それは……なあ、母さん？」

「ええ、それは……ねえ、アンジエ？」

「ふふふっ」

「あーもう！ 二人ともズルイ!!」

「ふふふふっ」

「笑うなーっ!!」

「あははははっ!!」

うむ、やはり我が家はいいな。ここ最近の疲れが吹き飛ぶようだ。

そうして、笑い止まない母さんと、余計怒つたシャルロットとの三人で、食事の支度をした。久しぶりの家族三人での食事はとても美味しく、何より温かいものだった。

夜。

データをもう一度取りたいとデュノア社から呼び出しがあり、社に戻ることになった。

「……もう行っちゃうの？」

寂しそうに眉根を寄せるシャルロット。その頭を撫で、目を真っ直ぐに見て謝る。

「すまない。……今度こそ、出来るだけ早く帰るよ」

「……本当に？」

「ああ。私のデータはほとんど取り終わっている。長引いても、今回よりは時間はかからないよ」

「……うん」

もう駄々をこねたりはしないが、やはり寂しさは隠せないのだろう。泣きそうな顔をしている。

こうなるだろうと思っていたので、事前に用意しておいた物を懐から取り出す。

「シャルロット、後ろを向け」

「？」

疑問符を浮かべながらも、素直に振り返るシャルロット。

その背中に流れる、黄金の輝きと絹の手触りを併せ持つ髪を手に取り、懐から取り出したシャルロットへのプレゼント——薄紅色のリボンで纏めた。

「あ……」

「詫びのしるしだ。……どうか、これで許してくれ」

「……うん。初めから、怒ってないよ」

「……そうか。それは良かった」

リボンなど結んだことがなかったので少々乱れてしまったが、それでもシャルロットは喜んでくれたようだ。

「では、行ってくる」

「うん。無理しないでね、アンジェ」

「ああ、大丈夫だ。シャルロットと母さんを心配させるようなことはない」

「うん。それじゃあ、行ってらっしゃい、アンジェ」

笑顔を作って見送ってくれる妹に、微笑みを返す。

そして振り返り、迎えの車に乗り込んだ。

「もういいのですか？」

「はい。お待たせしました」

「いえ。それでは、出します」

運転手と僅かに言葉を交わすと、車が動き出す。

車内から家を見ると、シャルロットと母さんが手を振っていた。向こうからは見えないだろうが、私も手を振り返す。

シャルロットはそのまま、見えなくなるまで手を振り続けていた。

それからさらに数ヶ月が経った、ある日のこと。

私はデュノア社のピットに呼び出された。

「オルレアン君。ついに、君の専用機が完成した」

「おお……！ 待っていました」

うむ、待ちわびたぞ。やはり一次移行の出来ない訓練機では、動きに制限があるからな。

「それで、私の機体はどこに？」

「はは、そう急がなくとも、すぐにここに——む、来たか」

噂をすれば影。絶妙なタイミングで、ピットにコンテナが搬入されて来た。

「お待たせしました」

「うむ。……では、オルレアン君。紹介しよう。我が社にとって初の第三代型IS、我々が総力をもって作り上げた、フランスの救世主たる君に贈る機体だ」

ガコンツ、と。

重々しい音を立てて、コンテナが開く。

「機動力、運動性能、反応速度に特化させた機体だ。それ故にとんだじゃじゃ馬になってしまったが、君ならば問題無く扱えるだろう」

そこに在ったのは、深い青色の装甲。

右の肩には、威力に優れたアサルトカノン。

左の肩には、連射と小回りが利くチェーリングガン。

「そして、この機体の名だが。……君はどうやら、騎士というものに憧れというか、こだわりのあるようだからね。それに相応しいものを考えた」

両の腰に二振りの剣を佩き、威風堂々と佇むその姿は、まさに騎士の纏う甲冑そのもの。

これが、私の――

「かの英雄、パラディン聖騎士ローランが、シャルル王より賜った聖剣――」

――私の、新たなる剣。つるぎ

「――『デュランダル』だ」

オルレアンの騎士 第5話 騎士の誓い

「ハアッー」

デュランダルに装備された、機体と同名の二振りの剣を振るう。

その際に剣の柄に取り付けられた引き金を引くと、鏢と一体化しているスラストからエネルギーが噴射され、爆発的な加速を得た刃が金属の塊を両断した。

『ターゲット、撃破確認』

「次っ!!」

ハイパーセンサーから送られてくる情報に従い振り向きアサルトカノンを発射、数十メートル先に現れたターゲットを粉碎する。

するとターゲットの中から多数の小型ターゲットが現れ、動き始める。散開する前に、チェーンガンの連射で纏めて破壊した。

ここはデュノア社の訓練場。今私は、先日私の専用機となったデュランダルの操縦訓練をしている。一次移行は初日に済ませ、後は経験値を積むだけだ。

『ターゲット、攻撃を開始』

無数の飛行ユニットから機銃が発射される。狙いはそこそこ正確、そして次第に数が増えていく。すぐに、四方八方から弾丸の雨が降り注ぐことになった。

「フッ!!」

大出力のメインスラストを噴かし、回避。ターゲットの攻撃範囲から逃れる。

そのまま旋回、ターゲットの群に突撃し、剣を振るう。

「オオオオオオッ!!」

振るう、振るう、振るう。

空間を埋め尽くすほどに大量のターゲットを次々に斬り捨てていく。

(三十……四十……五十……!)

『ターゲット、残り半数』

小型のターゲットは通常の斬撃で、大型のターゲットはブレードスラストを発動して一気に斬り裂く。

戦闘に集中することで意識が加速し、破壊されたターゲットの破片が落ちていく様が、まるで止まっているかのように見える。

(七十……八十……九十……！)
体が軽い。

周囲の状況が手に取るように分かる。

……だが、足りない。

もつとだ、もつと。

もつと、闘いを――！

(お前では、不足だ!!)

「百っ!!」

一際大きなターゲットに、両の剣を突き立てる。よほど頑丈な造りをしているのか、装甲を完全に貫かれても機能停止しない。

(ならばっ！)

引き金を引く。

凄まじい出力のジェット噴射が剣に暴力的な運動エネルギーを与え、ターゲットに食い込んだ刀身を無理矢理に動かしていく。

「オオオオオオッ!!」

ターゲット内部の機器を引きちぎっていく感触。

きつと今、私は凶暴な笑みを浮かべていることだろう。

「これで……終いだあっ!!」

剣を振り抜く。

両断された最後のターゲットが、断末魔の叫びのように火花を散らす。

それが爆散する様を見届けながら、剣を納めた。

『全ターゲットの撃破を確認。……訓練終了。素晴らしい成績です、アンジエ・オルレアン』

「お疲れ様、アンジエ」

訓練終了後。更衣室に戻ると、クロエさんがスポーツドリンクの入ったペットボトルを手渡してくれた。

「ありがとうございます」

それを受け取り、一口。

……うむ。程よい温さの甘味が、疲れた体に心地良い。

「調子がいいみたいね、デュランダル」

私の首から提げられている、蝶を模したペンダント——待機状態のデュランダルを指差して言うクロエさん。

「ええ、素晴らしい性能です。それに動きやすい。訓練機と専用機でこうまで違うとは」

「それはそうよ。訓練機は誰でも使えるように調整されてる。あなたにはそれがかえって窮屈に感じるのよ。逆に専用機はあなたのためだけに調整されてるから、思うように動けるはずよ」

「はい。生身よりも体が軽いくらいでした。おかげでいい訓練結果を残せました」

「……まあ、いくら専用機でもあの結果は異常だけどね」

なにやら微妙な顔をされた。

「……そうですか？」

「自覚無しかよ。どう考えたっておかしいでしょうが。私のハイスコアが、まるで遊んでみたいじゃない」

ジト目だった。

ものすつごい睨まれた。

思わず謝ってしまいそうだ。

「……すみません」

……思わず謝っていた。

そういえば、いつだったか日本からの留学生に読ませてもらった「サラリーマンJOE太郎」とかいう漫画にこんなセリフがあったな。

『いいか、新入リッ！俺たちサラリーマンはな！親や学校の先生に上辺だけ「ごめんなさい」「ごめんなさい」って言って腹の中で舌出

してるようなクソガキどもとはわけが違うんだからな」

『「ごめんなさい」と心の中で思ったならッ!』

『ステに頭を下げちまって、行動は終わっているんだッ!!』

……うむ、含蓄があるな。思わず謝ってしまった私はデュノア社の社員として自覚が出てきたということか。

「気をつけなさいよ。私はあなたが嫌味やなんかで言ってるんじゃないってわかってるけど、たとえばあなたがIS学園に行った時にもそんな調子だと、余計な嫉妬をかうわよ」

「……気をつけます」

「まあ、言っても無駄な気がするけど。あなた天然だし」

「う……」

それはここ最近、クロエさんに何度か言われていることだった。私
が何か普通の人間とはズレた言動をすると、「まあアンジェは天然だ
し」で片付けられるのだ。

……納得いかん。

「ま、とにかく。今日はお疲れ様。明日は久しぶりに休みだし、家に帰
るんでしょ?」

「はい、そのつもりです」

なんだかんだで、やはり家にはあまり帰れていない。精々月に一度
か二度か。

……最近、シャルロットがあまり怒らなくなってきたのが、逆に寂
しい。

「シャルロットによろしくね。いつか実際に会ってみたいわ」

「はは、シャルロットも同じことを言っていました」

「あら、私のこと話したの?」

「はい、社でのことはよく訊かれるので。しかし訓練の話をしてもつ
まらないでしょうし、他の話題となると、やはりクロエさんのことく
らいしか」

「ふうん。どんな風に話してるの?」

「気が置けない友人であり、姉のような人だと」

そう正直に言うと、クロエさんはさらに微妙な顔になった。

「……そう言ってもらえるのは本当に嬉しいんだけど。それ聞いて、シャルロット、不機嫌になったことない？」

「……よく分かりましたね。確かに、少し不機嫌そうになります」

「……やっぱり」

「む？ クロエさんは理由が分かるのですか」

「アンジェは分からないの？」

「お恥ずかしながら、まったく」

「……………はああ」

なにやら深々と溜め息を吐かれた。

「……ま、仕方ないか。アンジェだし」

「む……」

どうやら私は、またズレたことを言ってしまったらしい。

「よければ、教えてほしいのですが」

「嫌よ。自分で考えなさい」

そう言っただけクロエさんは踵を返し、ヒラヒラと手を振りながら去って行った。

……なんだろう、呆れた顔をしていたな。

（むう……シャルロットは何故不機嫌になるのだ？ 本人に訊くのもまずい気がするし……）

そんな疑問を抱きながらシャワーを浴び、着替えを済ませる。

……まあ、考えても分からないことは、やはり考えても分からないのだ。

今日はもう寝て、明日は朝一番で家に帰るとしよう。

……朝一で帰ろうと思っていたのに、急遽訓練が入ってしまった。なんでもフランス政府の重役が私の訓練を見たいとデユノア社を訪れたとのこと。いつも通りにやって見せると大変満足した様子で帰って行ったが、おかげで家に帰れたのは午後になってからだった。「ただいま」

「お帰り、アンジェ」

玄関の扉を開けると、出迎えてくれたのは母さんだった。

「シャルロットは？」

「友達の家に遊びに行ってるわ」

「むう……間が悪かったか……」

折角シャルロットに会えると思っていたのに、残念だ。まあ、夕方になれば帰って来るだろう。

「そうだ。ねえ、アンジェ。ご馳走を作りましょう。それでシャルロットを驚かせるの」

「ほう、それは面白い。……しかし、私が帰って来た時はご馳走ばかりだな。太らなければいいが」

「いやあ……それはないんじゃない？ アンジェに限って」

まあ確かに、ISの訓練でも個人的に行っている剣の稽古でも、相応な運動量だからな。

「ふふ、それじゃあ買い物に行きましょうか。今日は冷蔵庫がほとんど空っぽなの」

「分かった。荷物持ちくらいなら、私にも出来る」

というわけで、帰って来て早々に出掛ける準備。

母さんは一旦部屋に戻り、部屋着を着替えてから玄関に来た。

……そこで、ふと。

「……母さん、少し痩せたか？」

ゆったりとした部屋着の時は気付かなかったが、外出用の服になって分かった。母さんの体のラインが、私が知るそれよりも少々細い気がする。

先も言ったが、私が帰るたびにご馳走を作っているのだから、普段ちゃんと食べていれば太ることはあっても痩せることはない筈。

故に気になって、思わず訊いてしまったが――

「……………え？」

――母さんの反応は、ひどく、不吉なものだった。

「……そ、そう？　ようやくダイエットの効果が出てきたのかしら？」
「ダイエット？　母さんに必要とは思えないが」
「あら、私だってまだ若いんだから。スタイルを気にすることくらいあるわよ」

「まあ確かに。いまだにモデルでも務まるような美しさだからな。さらに磨きをかけたいと思うのも、無理はないか」

「ふふ、あなたにそうまで言ってもらえると自信が出るわね」
そう言って、母さんは嬉しそうに笑う。

その様は、いつも通りの母さんのもので――

（ふむ……気のせいだったか？）

杞憂だったのかもしれない。最近訓練漬けだったから、私も少々疲れしているのかもな。

「それじゃ、行きましようか」

「ああ。……ふむ。母さんと二人で出掛けるのは、考えてみれば久しぶりだな」

「そういえばそうね。いつもシャルロットと三人だったものね」
他愛のない話をしながら、玄関を開ける。

母さんが先に出て、続いて私が。鍵を掛けて、振り返り――

「……ねえ、アンジエ」

「？」

私に背を向けたまま、母さんが、呟くように私の名を呼んだ。

その声色が母さんに似つかわしくないものだったので、私は黙って続きを促す。

すると。

「……なんでもない。ふふ、呼んでみただけ」

日の光のように輝く笑顔で、そんなことを言った。

それが、あまりに眩しい笑顔だったから。

私は、つい先ほど感じた不安を、忘れてしまっ

「？　変な母さんだな」

そんな、間抜けな答えを返した。

——後になって、思えば。

それは、燃え尽きる寸前の蠟燭のような。
儂く、刹那的な輝きだったのだろう。

「ハアッ!!」

「せいっ!!」

そんなことがあつてから、さらに数ヶ月。今日も今日とて朝から訓練。

デュランダルに乗るようになってから、初のクロエさんとの模擬戦である。

「ハッ!」

クロエさんの専用機、ラファール・リヴァイヴ・カスタムが、大量の重火器を展開する。以前戦った時は両手に銃を持っていたが、今はそれに加えて両肩にもスラッグガンとガトリングガンが取り付けられている。

なんでも私対策らしく、その過剰とも言える火力から生み出される分厚い弾幕が私の行く手を阻む。

「ちいつ、懐が遠い……!」

しかしそれら重火器を装備している分、バトルライフルやアサルトカノンには拡張容量を空けるために外してあるので、本来クロエさんが得意としている中距離での射撃戦には向かない機体構成となっている。むしろ相手が真つ当な銃器を装備した機体であれば、一方的に撃たれることすらあり得るだろう。

既に確立している戦闘スタイルを曲げ、間合いと火力のバランスを捨ててまで、私対策を講じて来たということとは——

(私に託す、か……)

それは即ち、私の訓練相手に徹する、ということ。自らのフランス代表を諦めるということだ。

——なればこそ。

(真つ正面から、突破する！)

「オオオオオオッ!!」

瞬時加速を発動、一気に距離を詰める。

暴風の如き銃撃に飛び込む私に、クロエさんはニヤリと笑った。

「そうこなくっちゃ!!」

一層激しさを増した銃撃を、四基のサブスラスターを駆使した小刻みな機動で避けながら前進する。

回避も防御も最小限、急所に当たらぬ弾丸は敢えて受け、被弾の衝撃を受け流しつつそれすらも機動に利用し、前に進む。

ただひたすらに、前へ。

前へ。前へ。前へ——!!

「オオオオオオオオオオオオッ!!!」

間合いに踏み込む。同時に剣を振り上げ、ブレードスラスターを起動。

渾身の力を込めて、大上段から振り下ろす。

「ハアアアッ!」

クロエさんは両手に持った銃を交差して構え、その一撃を受けた。私はまだ左の剣が空いているが、しかしこちらはまだ使いたくない。フランスの未来を、託されるのだ。

ならばそれに相応しい力を、示さねばなるまい——!

「ハアアアアアアアアッ!!!」

鏢迫り合いの状態から、瞬時加速を発動。その勢いを余すことなく刀身に寄せ、銃を切り裂きクロエさんを弾き飛ばす。

「オオオオオオオッ!!」

そのままもう一度、瞬時加速。

クロエさんを追撃し、二振りの剣のブレードスラスターを同時に発動、限界を超えて加速させた刃を、ラファール・リヴァイヴ・カスタムの装甲に叩き込んだ。

『——シールドエネルギーゼロ。試合終了。勝者、アンジエ・オルレアン』

「負、け、たあああああああつ!! 悔しいいいいいいいつ!!」
……更衣室に戻って来たら、クロエさんが頭をかきむしりながら吼えていた。それもものすごい大声だった。
「覚悟はしてたのに……してたのにっ!! なんでこんなに悔しいのよ おおおおおっ!!?」

「……お、お疲れ様でした、クロエさん」

声を掛けたら、ギョバツ!! と睨まれた。

……凄まじい眼力だ。殺気さえ感じる。

「ア、ン、ジエエエエエエ……」

「ひい……!?!」

……なんだ、今の声は。地獄から聞こえて来たのかと思ったぞ。

「いつかは……いつかは負けるとは思ってたけど……!! いくらなんでも早過ぎでしょうがっ!!」

「……そんなことを言われましても……」

「ふ、ふふふ……いいわ、あなたがその気なら、私ももっと強くなってやろうじゃない……!」

おどろおどろしいオーラを纏いながら、クロエさんは先の模擬戦の記録を表示、そのデータを反映するためだろう、機体調整のためのピットに向かって行った。

……しかし、その扉を潜る直前で。

「……おめでどう、アンジエ。これで今日から、あなたがフランス最強よ。少ししたら、正式にフランス代表に任命されると思う」

「……………」

「あなたに託すわ。……フランスを、お願い」

「……………」

これでもう、私は負けられない。私の肩に、フランスの未来が掛かっているのだから。

(……………重い、な……………)

だが、この重さこそ、私が認められた証。
ならば――

(背負ってみせる。そして……応えてみせる)
それが、私の責任だ。

(……さて、私も着替えるか)

今日の訓練はこれで終わり、続きは明日だ。デュランダルの感覚を
忘れない内に剣の鍛錬をしてから寝るとしよう。

そう決めて、ロッカーに向かう。戸を開けると、携帯端末が「着信
あり」の光を放っていた。

(シャルロットからか。……む……?)

思わず、目を見開いてしまった。

シャルロットからの着信があること自体は珍しくない。むしろ良
くあることだ。

問題は、その着信が――

(82件……だと……?)

……なにか、ひどく嫌な予感がする。

冷たい汗が背中を流れ、震える指で返信ボタンを押した。

「……もしもし、シャ『アンジエ!? 今までなにしてたの……?!』……
どうした?」

言い終わる前に、シャルロットの悲痛な声が聞こえた。

それは、まるで叫んでいるかのようで。

……予感が、どんどん大きくなって行く。

「落ち着け。何があった?」

『お、お母さんが……!!』

――ドクン。

待て。

母さんが、どうした――?

『お母さんが、急に、倒れたの……!!』

それは、まるで。

世界が、崩れ落ちて行くかのような。

そんな、衝撃で。

「……………馬鹿、な」

『アンジェ、とにかく病院に来てっ！ 場所は——』

シャルロットが病院の名を告げると、デュランダルがすぐさま最短距離を私に示した。

頭に叩き込んだ筈のIS使用における規則や法律が全て消し飛び、デュランダルを起動。訓練場に出て、そこを覆う遮断シールドを切り裂いて空を翔る。

「馬鹿な……馬鹿な、馬鹿な、馬鹿なっ……!!」

——兆候は、あった。

数ヶ月前に、母さんが見せた、あの反応。

あれは、きつと——

「何故だ……！ 何故、母さんが……!!」

……己の間抜けぶりを呪うのは、後回しだ。
今はただ、一秒でも早く。

母さんの元へ——！

「母さんっ!!」

病院に着くと、受付から聞き出した病室に駆け込む。

そこには、ベッドに横たわる母さんと、その横で俯くシャルロットの姿があった。

「シャルロット、母さんは……!?!」

「……アンジエ」

顔を上げたシャルロットの目が真っ赤だ。きつと、ずっと泣いていたのだろう。

「……寝てる」

「……そう、か……」

母さんの顔を覗き込むと、以前見た時よりもさらに痩せていた。それに顔色もかなり悪い。

……素人目に見ても、相当な重病だった。

「……なんで、こんな、急に」

「……ずっと、前からなんだって。ずっと、黙ってたんだって。ずっと、隠してたんだって。僕たちに心配掛けないように、苦しいのに、辛いの、ずっと我慢して、ずっと、笑ってたんだって……!!」

……馬鹿な。

それに、気付かなかったのか、私は。

「……母さん」

「……」

呼び掛けると、母さんがうつすらと目を開けた。ゆらゆらと揺れる目で、私を見る。

「……アン……ジエ……」

「……ああ。ここにいる」

返事をする、母さんは安心したように頷いた。そして、シャルロットを見る。

「……シャルロット……」

「なに? お母さん」

「少し……アンジェと、二人で話させて……？」
「え……」

母さんの言葉に、シャルロットが愕然とする。

そのまま私を見るが、しかし私も何故母さんがそんなことを言ったのか分らない。

「……お願い……」

「……うん。わかったよ」

涙をこらえながら、シャルロットが席を外す。

その後ろ姿を見送って、母さんに向き直った。

「……なんだ？ 母さん」

「……半年くらい、前にね。あと三ヶ月って、言われたの」

「……！」

……半年。そんなに、前から。

「……言えなかったの。シャルロットは泣くだろうし、アンジェは頑張ってるから、心配掛けたくなくて」

「……馬鹿なことを……！」

「……うん。本当に、馬鹿よねえ。そんなことしたって、結局、同じことなのに」

「……治らないのか」

「うん。延命はできるけど、そうすると入院しなくちゃいけないから……二人と一緒にいたかったし、延命しても精々数ヶ月延びるだけらしいから」

「……」

……それでも。

その数ヶ月を、大事にしてほしかった。

「……何故、私だけと話を……？」

「……うん」

母さんが、手を持ち上げる。

その、骨と皮だけのようになってしまった手を取る。

「……シャルロットを、お願い」

「……！」

「あの子もね。IS適性、高いみたいなの。……あの人が、利用しようとするかもしれない」

「……………」

デュランダルは完成したが、デュノア社ははまだ危険な状況だ。なにせ私のような新参者を頼りにしているのだから。

保険となるモノは、いくらでも欲しいだろう。

「シャルロットは、あの人の娘よ。あなたよりもよっぽど融通が利く。……だから」

「…………言われずとも」

シャルロットは母さんの娘で、私の妹だ。デュノア社長の好きにはさせない。

「…………ごめんね」

「……………」

「ごめんね、アンジエ」

母さんは、泣きながら謝っていた。

その言葉が、何に対するものなのか。

私には、分からなくて。

「ようやく、家族になれたのに。アンジエに母さんって呼んでもらって、すごく嬉しかったのに。」

「…………これから、もっと幸せになれるって、思ってたのに」

「……………」

「シャルロットと、アンジエと…………ずっと、一緒にいたかったのに」

「……………」

「…………悔しいなあ…………悔しいよ、アンジエ…………」

「……………」

…………涙を流す母さんの様子に、ようやく、分かった。

シャルロットには強がつて見せたのだろうか、それももう、限界なのだろう。誰かに、弱さを受け止めて欲しかったのだろうか。

だがシャルロットには、見せられないから。

私に、さらけ出した。

…………母さんは、それを、謝っていたのだろうか。

「……死にたくない。死にたくないよ、アンジエエエエ……!!」
「……っ」

子供のように泣く母さんに、しかし私がしてやれることはない。何も、出来ない。ただ歯を食いしばって、自らの無力を呪うことしか出来ない。

それを、全部、分かっているから。
だから、謝ったのだろう。

——だが。

「ごめん……ごめんね、アンジエ……!!」

「謝らなくていい。それで母さんの痛みが和らぐのなら、いくらでも背負わせて欲しい。……いや。母さんの想いを、私の心に刻みつけてくれ」

「イヤだ……イヤだよう……!! もっと、一緒にいたいよ……!!」

「ああ……私もだ、母さん」

とても軽くなつてしまった母さんの体を、抱き締める。
少し力を入れただけで折れてしまいそうな、細い体を。

「シャルロットが大きくなっていくのを、見守りたかった。アンジエが活躍するのを、応援したかった。

……なのに……こんな、あんまりだよ……!!」

「……」

溢れ出す、母さんの想い。

ずっとやせ我慢をして隠していた、母さんの本音。

……一言一句、余さずに。

この魂に、刻みつける。

「もう、無理なんだって。もう、限界なんだって。もう……シャルロットにも、アンジエにも、会えなくなるんだって……!!」

「……」

「う……ううう……うええええ……!!」

「っ……!!」

泣きじやくる母さんの体を、強く抱き締める。

……もう、折れてしまってもいい。

今はただ、母さんの温もりを、感じていたかった。

「……私はもう、ダメだから。だから、お願い」

「ああ……任せてくれ」

「……うん。アンジエは、お姉ちゃんだから。妹を、守ってあげて」

「……ここに、誓おう」

いまだかつて、これほどまでに悲しかったことがあっただろうか。いまだかつて、これほどまでに苦しかったことがあっただろうか。

いまだかつて、これほどまでに。

心が痛んだことは、あつただろうか――

「我が誇りに賭けて、シャルロットを守る。……守り抜いてみせる」

だが。

この悲しみも。この苦しみも。この、痛みも。

私が、母さんを愛している、証だから。

「私はソフィー・デュノアの娘、アンジエ・オルレアン。我が母の名の下に、ここに誓う。私は、我が妹、シャルロット・デュノアの騎士となる。私の生涯を懸けて、シャルロットを守る。」

……母の安らぎと、妹の幸福こそが。

私の、願いであるが故に」

「……うん。……ありがとう、アンジエ。」

私の大切な、私が愛する、私の娘」

……こうして私は、ただ一人のための騎士となった。

こんなカタチで宿願が叶うとは、私らしいと言うべきか。

こんな様で騎士を名乗るなど、おこがましいにも程があるが。
……構いはしない。私の愛する家族が、私を認めてくれるのだから。

「……もう、大丈夫」

「……分かった。では、シャルロットを呼んでくる」

「うん、お願い。……今は、出来るだけ、三人でいたい」

そうして私は、シャルロットを呼んだ。母さんに心配させまいとしていたのか、シャルロットはもう泣かなかった。

途中、デュノア社から説明を求められたが、事情を伝えるとそれを聞きつけたクロエさんが手を回してくれ、三人の時間を邪魔されることはなかった。

そのまま面会時間が終わるまで、三人で話をした。

母さんが息を引き取ったのは、一週間後のことだった。

ソフィー・デュノア。

享年、二十九歳。

オルレアンの騎士 第6話 クール・ドウ・リヨン

母さんが死んで、私は泣いた。

涙を流すなど、初めてのことだった。

……そしてこれが、最初で最後の涙だ。

もう二度と、泣きはしない。

そう、誓った。

「……だ」

「わあ、結構広いね」

家に一人で残すわけにもいかなかったので、シャルロットを寮の私の部屋に連れて来た。

……母さんが亡くなってから、数日。

シャルロットは、泣かなくなった。

(悲しいだろうに……)

……私が、泣かないからか。私が泣かないのに、自分だけ泣くわけにはいかないと。

……そう、思っているのか。

気遣う必要などない。悲しいのなら、泣いてほしい。

悲しみを溜め込んでしまうと、いつか壊れてしまうから。

「……さて、荷物はそれで全部か？」

「うん。あんまり、持ち出したくなかったから」

「……そうか」

あの家を、できるだけあのままにしておきたい。母さんがいた頃のままに。

「……ねえ、アンジエ」

「なんだ？」

「僕がデュノア社の社長の子っていうのは、本当なの？」

「……ああ、本当だ」

それは、母さんが亡くなってすぐのことだった。

デュノア社の者がシャルロットを迎えに来た。私も同行し、デュノア社長と面会した。その時は、社長も特に何もしなかった。ただ自分とシャルロットの関係を伝え、それで終わりだ。

シャルロットはそれからしばらく呆然としていて、その状態から回復してからもどこか様子がおかしかった。私の様子を窺っていたのかもしれない。

「どうして教えてくれなかったの？」

だが、今日ついに訊ねてきた。今までずっと気になっていたのだろうが、踏ん切りがつかなかったのか。

その話題は避けていたようだが、しかしそれでは前に進めない。

「……母さんは、お前に余計なものを背負わせたくない、と言っていた」

「余計なもの？」

「母さんはデュノア社長の愛人だった。お前を生んだ時は、まだ子供と言えるような年齢だった。……正直、世間に胸を張れることではない」

「だから、黙ってたの？ 僕のために」

「……ああ、そうだ」

だから、前に進むために。

遺された私たちが、いつまでも足踏みしているわけには、いかないから。

自分の心に、一つの区切りをつけたのだろう。

「……お母さん、ずっと僕を、守ってくれてたんだね」

「……ああ」

「なのに僕は、もう、恩返しもできないんだね」

「……そうだな」

「……けど」

辛くない筈がない。

苦しくない筈がない。

悲しくない、筈がない。

——でも、それでも。

「お母さんは……死んじやったけど。もう、恩返しは、できないけど」
「……………」

「僕が挫けちや、ダメなんだよね。お母さんはいなくても、お母さんが今まで生きてたことまで、なくなったりはしないんだから」

「……ああ、その通りだ」

母さんが生んでくれた、命を。

たった一人で、今まで育てて来てくれた、人生を。

無駄にすることだけは、絶対に、嫌だから。

「なんの意味もないことかも、知れないけど。僕、戦うよ、アンジエ」
「なに？」

「一回会っただけだけど、デュノア社長……父は、良い人じゃないと思う。なんだか嫌な感じがした」

「……………」

「だからお母さんも黙ってたんでしょ？ あの人は、僕のことを娘だなんて思っていないから」

「……ああ。あの男にとっては、誰も彼も金儲けのための道具だ。私のことは金の生る木とも思っているのだろうさ」

「……そんなの、許せない」

そう言うシャルロットの眼には、強い怒りが宿っていた。

母さんを失ったことによる、投げ遣りな怒りではなく。

愛する者を侮辱されたことに対する、赤く眩い怒りだ。

「お母さんにしたことも許せない。アンジエをそんな風に利用しようとしてることも許せない」

故に、その眼は一切濁っていない。

ただ真っ直ぐに、未来を見据えている。

「だから、僕も戦う。アンジエみたいに」

「……お前を戦わせたくない。お前には、静かに生きて欲しい」

「嫌だ。アンジエだって、お母さんに我が儘言っつて、デュノア社に来たんでしょ？」

「……まあ、そうなんだが」

「なら、僕も我が儘言うよ。僕は僕の好きなように生きる。……父の娘じゃない、お母さんの娘として——アンジェの、妹として」

……強い、な。

母さんが死んだことも、自分の出生も、何もかもを受け入れて、前に進む。

なかなか、出来ることではあるまい。

「……そうか。そう言われてしまうと——私には、何も言えんよ」

「……ありがとう、アンジェ」

「感謝する必要はない。シャルロットが私に勝っただけだ」

「……えへへ」

照れくさそうな笑顔。

はにかむようなその笑顔を見て、分かった。

遙か昔、騎士と呼ばれ讃えられていた者たちが、何故あれほどまでに強かったのか。

……強いから、騎士になれるのではない。騎士と成った者が、強くなるのだ。

(こんな笑顔を魅せられてはな)

国が主君か、それぞれ違うのだろうか。

心から、守りたいと想うもの。

それがあるから、騎士は強いのだ。

「お前も、私を守ってくれるのだな」

「え?」

「ありがとう、シャルロット。お前がいる限り、私は無敵だ」

「??」

わけが分からないといった顔をしているシャルロットの頭を撫でる。最近ようやく加減が分かってきたので、髪を乱すこともない。

くすぐったそうにしているシャルロットの姿を堪能し、早めに床についた。

——明日から、やることあるのだから。

「……話というのはなにかね？」

場所は社長室。相手は当然、デュノア社長。

私は単身乗り込んだ。

「実は一つ、お願いしたいことがあります」

「ふむ。君の頼みならば、出来る限り応えよう」

「ありがとうございます」

一度頭を下げてから、デュノア社長の眼を見る。

射抜くように、真っ直ぐに。

「シャルロットのことなのですが」

「……ふむ。あの娘か」

途端に、不快そうな顔になるデュノア社長。この男もいい加減私の思惑に感づいており、最近ではあまり仮面を被らなくなってきた。

外面があるからか、あからさまに態度を変えることはなかったが。

「オルレアン君。君は知っていたね？」

「はい。初めから」

「その上で我が社に来たのは何故かね？」

「デュノア社が、フランスで最も力のある企業だったからです。私は単純に、乗りたいからISに乗っている。そのために選ぶ会社としては、デュノア社が最も都合がいい」

「ほう。君は意外に、自らの欲望に忠実なのだな」

「私は自分が戦闘狂であると自覚しています。戦うことしか出来ず、戦わなければ生きられない。だから、私に戦うための力を与えてくれるだろうデュノア社に来ました」

「ふむ……。我が社には優れた才能を持つ者が必要だった。君には自分の才能を活かせる環境が必要だった。お互いの求めるモノを与え合える関係だったわけだ」

今までは、それでよかった。

だがこれからは、それだけでは駄目なのだ。

「それで、先ほどの話に戻りますが」

「あの娘のことだったね。……大方、手を出すな、といったところかね？」

「いえ。シャルロットに、ISを与えて欲しいのです」
「……何？」

私の要求がよほど意外だったのだろう、デュノア社長は目を見開いて驚いている。

「……君はISがどれほど貴重な物か、分かっているのかね？ あんな小娘に与えるなど、出来る筈がないだろう」

冷めた眼でそう言うデュノア社長に、幾つかの資料を差し出す。

その内容は、デュランダルと他のデュノア社製IS、そしてデュノア社が現在開発中のISのデータだ。

「新しいISの開発、上手くいっていないようですね」
「………」

「一つ、噂を耳にしました。デュノア社が開発した第三世代型は、転用の利かない技術ばかりの欠陥機だ、と」

「……ほう」

事実、デュランダルに使われている技術は、他のISの開発には役に立たないモノばかりだ。私の適性に合わせて作ったせいで、通常の適性で動くISとは馴染まないからだ、というのが理由らしい。

「ISは発展途上の兵器。すぐに第三世代型も時代遅れになる。……だというのに、あなた方が開発したデュランダルは、次に繋がらない。言わば一代限りの異端児です。これでは、また遅れを取る」

「……言ってくれるね、オルレアン君」

デュノア社長の眼が鋭くなる。まるで敵を見るように、私を睨み付けて来た。

「これは事実です。デュランダルさえ完成させればなんとか考えると考えていたのですが、実際はそうではなかった。ただの時間稼ぎにしかならず、すぐにまた追い詰められる。そしてその時——果たして、私はデュノア社にいますでしょうか？」

「………」

かなり自惚れた話ではあるが、私は既にそれなりに名が売れてい

る。IS 関連において他国に遅れを取っていたフランスに、救世主が現れた、と。

そして私が実際にモンド・グロツソで活躍すれば、さらに注目を集めるだろう。

そうならば。

もう、デュノア社に拘る必要もない。

フランス軍にでも行けば、喜んで受け入れられるだろう。

「……私を、脅すつもりか」

「いえ、これは取引です。貴方が私の願いを聞いてくれるのなら、私も貴方の期待に応える。それだけのことです。……それにシャルロットにISを与えることは、デュノア社にとっても悪い話ではないと思えますが」

「……ほう？」

「シャルロットの適性は、私と違い汎用性に優れている。マルチロール機であるラファール・リヴァイヴと相性がいい。そしてラファール・リヴァイヴこそが、デュノア社が将来開発する新型機の土台となる機体です」

「……ふむ」

デュノア社長は一つ頷いて、考えを巡らせ始めた。

デュノア社長にデメリットがほとんどないことは分かっているだろう。問題は――

「……なぜ、あの娘を差し出す？」

……そう、そこだ。

ISはアラスカ条約により国ごとに振り分けられ、国から軍や企業に配分される。

つまりデュノア社が持つISも元を辿ればフランス政府のものであり、デュノア社が好きに出来るわけではない。ISを専用機として個人に与えるのなら、その個人はデュノア社の人間でなければならぬのだ。

そしてそれは、シャルロットも私のようにデュノア社のパイロットになるということである。

「シャルロットの有用性は、貴方もすぐに気付いたでしょう。だから、先手を打たれる前にこちらから動いた」

「なるほど。確かに、君から釘を刺されては、私もかなり動き辛くなるだろうからね」

「そしてシャルロット自身、ISを欲しています。その理由は、私には話してはくれませんでした」

これは大嘘である。シャルロットが戦う理由は、私にだけ教えてくれたものだ。なのに私がこの男に知らせるなどというのはシャルロットに対する裏切りに他ならない。

それだけは、絶対にしたくない。

「……いいだろう。あの娘を我が社のテストパイロットとし、ラファール・リヴァイヴの改修機を専用機として与える」

「ありがとうございます」

「ただし。君には今以上に活躍してもらおう。次のモンド・グロッソでヴァルキリーになれば、その時は——」

「それについては、心配には及びません」

プレッシャーでも掛けるつもりだったのだろう、鋭く私を睨みながら条件を提示してきたデュノア社長に、不敵な笑みで応える。

そして強がりでも駆け引きでもない、ただ私が決意したことを口にした。

「私がモンド・グロッソに出るとするのなら。」

——その結果は、ブリュンヒルデ以外は有り得ない」

「……どうだった？」

「おかげさまで、思うように事が運びました」

社長室を出てしばらく歩くと、クロエさんが声を掛けて来た。心配してくれていたのだろう、その顔は少々不安げだ。

「……良かった。上手いかなかったら私の責任なもの」

先のデユノア社長との遣り取りだが、実はほとんどがクロエさんからの入れ知恵だ。私はあそこまで頭は回らない。

そして何故クロエさんがシャルロットのためにそんなことをしてくれたのかと言うと、クロエさんは先日初めてシャルロットと会ったのだが、その時に随分シャルロットを気に入ったようだった。

その時の様子を掻い摘んで説明すると――

『はじめまして、クロエさん。アンジエからよく話を聞いてます。僕はシャルロット。シャルロット・デユノアです』

『……き……』

『?』

『きやあああつ!! かわいいーつ!!』

『うわつ!!』

『やーん、やわらかーい! あったかーい! なんかい匂いがするーつ!!』

『わぷつ!! もぐもぐ……!!』

『ああん、もう、アンジエったらいいなー! 私もこんな妹が欲しいー!!』

『むぐつ! むぐぐー!!』

『髪もキレイな金色だし! あ、このリボンしてくれてるんだ! これね、アンジエがね、妹へのプレゼントはなにがいいかって相談してきたから、私が一緒に選んであげたのよっ!!』

『む……ぐ、う……』

『えへへー、困ったことがあつたらなんでも言っつていいのよ? お姉さんがいつでも相談に乗るからねっ!』

『クロエさん、その辺で。シャルロットが死にそうです』

『……あら?』

『……きゆう……』

――うむ。仲良きことは良いことだ。なんでもクロエさんは一人っ子で妹が欲しいとずっと思っていたそうだ。だが私には可愛げ

がないとかなんとかか。

「これでデユノア社長も、下手なことは出来ないでしょう」

「後はあなたがモンド・グロツソで優勝するだけね」

「ええ。……そのために、もっと訓練をしなければ。またお願い出来ますか？」

「当然よ。シャルロットのためにも、あなたには頑張ってもらわないと」

「シャルロットは私の妹です。……あげませんよ」

「ええく!!? くないのっ!!?」

「……………」

想像を遥かに超える反応が返ってきた。物凄く不安になる反応だった。

……クロエさんも社員寮で生活しているので、その内部屋に潜入してシャルロットのベッドに潜り込んで来るかもしれない。注意しておこう。

「…………けど、本当に大丈夫なの？ シャルロットをテストパイロットにして」

「あの子が望んだことですから。出来るだけ、叶えてやりたいんです」

「ふうん。なんでそこまで、ISに乗りたいたいのかしらね」

「それはシャルロットに直接訊いてください。私は教えるつもりはありませんので」

「む、ズルイ！ そうやってシャルロットを独占するつもりね…………!!」

「そこから離れて下さい…………」

なんだかクロエさんのキャラがおかしい気がする。まあ仕方がない、それだけシャルロットが魅力的なのだから。

「それにしても、リヴァイヴの改修機か。私と同じね」

「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡといったところでしょうか」

「おそろい…………シャルロットとおそろい…………うふふ」

「……………」

ダメだこの人。早くなんとかしないと…………！

「それじゃあ、訓練場に行きましようか」

「はい、お願いします」

「今度は前みたいにはいかないわよ。さらに分厚くなった弾幕をおみまいしてやるわ」

「また装備を増やしたんですか……」

最近のクロエさんの専用機、ラファール・リヴァイヴ・カスタムは、それはもう凄いことになっている。ハリネズミのように武装しており、重くなった機体を動かすためにスラスターを増設、そのせいで燃費が悪くなり、短期決戦で弾薬を使い切るためにかく撃ちまくる。

その弾幕は強力とか分厚いとかそういうレベルではなく、もはや巨大な壁が迫ってくるかのような重圧がある。

それを突破していくうちに、私の機動も磨きが掛かってきたことは感謝している。そして同時に、かつての戦闘スタイルが見る影もなくなってしまうことが申し訳なくて仕方ない。

(……負けられんな。クロエさんのためにも)

そうまでして、私の訓練相手に徹してくれている。

その想いを、無駄にするわけにはいかない。

それからしばらくして、シャルロットに専用機が与えられた。名前はやはりラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ。通常のリヴァイヴの豊富な武装という長所を伸ばしつつ機動力も確保された、素晴らしい仕上りの機体である。

「ほら、撃つときも動きを止めない！ 狙われるわよ！」

「くうっ……！」

そして今は、シャルロットとクロエさんで訓練をしている。クロエさんは教え上手でシャルロットも飲み込みが早く、見ているだけでも有意義な訓練だ。

……念の為に言っておくと、今のクロエさんのラファール・リヴァイヴ・カスタムは対私仕様の装備ではなく、第二回モンド・グロツソ

出場時の、クロエさん本来の装備に戻してある。

「やあつ！」

「避ける時も体の軸はブレないように！ そんなんじやいくら撃つても当たらないわよ！」

「はああつ！」

「マシンガンでそんなに狙ってどうするの！ それはこの距離じゃ牽制用、適当に散らすくらいの気持ちでいなさい！」

「はい！」

（ふむ……）

本当に飲み込みが早い。同じミスは二度せず、一つの指摘から四も五も学ぶ。クロエさんも教え甲斐があるだろう。

（なにより……）

シャルロットのアサルトライフルが弾切れになった隙を突いて、クロエさんが突撃。接近戦用の小回りが利くハンドガンを展開し、撃ち込もうとして――

「ここだつ！」

「！」

――ショットガンの銃口に、出迎えられた。

才能溢れるシャルロットだが、その中でも特に目を引くのがこれだ。

ラビッド・スイッチ
〔高速切替〕。

文字通り、武装の格納・展開を素早く行う技能であり、豊富な重火器を装備しているラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡとは極めて相性の良い技能だ。

事実、突撃を仕掛けた筈のクロエさんが、逆に不意を突かれた形になっっている。

（それに、武装の選択も正しい）

高速切替を活かすには、状況に合わせて最適な武装を瞬時に選ぶ能力が必要だ。シャルロットはそれについても十分なものがあり、今も実に理にかなった武装を選択した。

あとは――

「甘いっ！」

「うわあっ!?!」

——理屈以外のことを学べば、完璧だ。

シャルロットの攻撃は、クロエさんに読まれていた。クロエさんは散弾が撃ち出される直前に瞬時加速を発動して回り込み、ハンドガンの連射を叩き込んだ。

そう、シャルロットは少々セオリーに忠実過ぎる。それ故に読みやすく、クロエさんのような経験豊富な者にとっては付け入る隙となるのだ。

戦いにおいては、正しい選択が最善の選択とは限らない。同じ問題ならば、相手も正解を知っているかもしれないのだから。時には敢えて間違った選択をし、心理的な死角を突く必要もある。

……まあそれは、経験を積みれば自然と覚えていくだろう。

「一回失敗したくらいでなに呆けてるの！　そういう時こそすぐに対応する！」

「は、はい！」

「手が止まってるわよ！　ちよつと攻められたくらいで簡単に防戦にまわらない！」

「はいっ！」

「だからって闇雲に突撃しないの！　相手の動きを良く見なさい、攻撃してるってことはそれだけ防御が疎かになってるんだから、そこを見極めて反撃しなさい！」

「はいっ!!」

一回の模擬戦の間にも、シャルロットのレベルは見る間に上がって行く。砂地に撒かれた水のように、クロエさんの技術を吸収している。

それにクロエさんがどれだけ激しい銃撃をしても、決して眼を逸らさない。しつかりと見て、少しでも多くのことを学ぼうとしている。

……勇敢だな。まるで獅子だ。

(これは、ひよつとすると……)

いずれ、私を超えるかもしれない。

無論、まだまだ負けてやるつもりはないが、しかしその可能性は十分にあるだろう。

(……素晴らしい。いつかお前と、肩を並べて戦えるかもしれないとは。……なにより——)

ああ、まったく。本当に困ったものだ。

これはもはや性質というより、先天性の病気かもしれない。相手は私の、最愛の妹だというのに。

「私は、お前と戦いたい——シャルロット」

「……小娘が。調子に乗りおって」

先日、オルレアンから持ち掛けられた取引に応じ、あの女の娘に専用機を与えた。それにより得られたデータは確かに有用なモノだったが、それでも少々物足りない。しかしこちらがあの娘を実験体として使おうとすると、必ずオルレアンの邪魔が入る。

「少々、甘やかし過ぎたか……」

我が社がどれほどオルレアンを必要としているか、それをオルレアンは良く分かっている。故にオルレアンに求められれば無碍には出れないのだ。

そこに付け込んで、あの娘を本当にただのテストパイロットのように扱わせている。

「時間が無いというのに、手間取らせおって」

取引の際にオルレアンが言った噂だが、厄介なことに、フランス政府の耳にも入っている。それからというものは、二機目の第三世代型を開発しろと催促されているのだ。オルレアンにしか使えない機体など、オルレアンを失えばなんの役にも立たないのだから。

代替の利かぬ個人に頼ったツケと言われればそれまでだが、今はそんなことはどうでもいい。我が社は早く次の機体を作り、もう一度、フランス政府に我が社の開発力を示さなければならぬ。

「そのためには、なんとしても、あの娘に……」

あの娘の適性は流石にオルレアンには劣るが、それでも十分に優秀であり、なにより安定している。開発に大きく貢献することだろう。

——だがそのためには、あの娘でいくつか実験をしなければならぬのだ。オルレアンに邪魔されるくに出来ていない、実験を。

「……ふん。だがそれも、もう終わりだ」

オルレアンは少々私を侮り過ぎた。私が大人しくオルレアンに従い続ける筈がない。

私も、準備を進めているのだ。

オルレアンを、永遠に我が社につなぎ止めておくための、準備を。

「クク……調度良い。あの娘だけでなく、お前にも、我が社に尽くしてもらおうか——アンジェ・オルレアン」

オルレアンの騎士 第7話 鴉殺し

それは、あるいつも通りの一日のことだった。

その日の訓練を終え部屋に戻ると、シャルロットがいなかった。

(……私より先に戻ったはずだが……)

一度戻って来てまた出掛けたのなら、予め言っておくか書き置きか何かがあつていいはずだが、それもない。さらに言えばプライベートチャネルすら繋がらなかった。

……これは……。

(……嫌な予感がするな……)

……。

……、……。

……まさか……。

~~~~~♪

「!?」

携帯電話の着信音。見てみれば、シャルロットからのメールだった。

(……既視感が……)

どうにも不吉な気配を感じながら、メールの本文を開く。

そこに書かれていたのは――

――たすけて――

グシヤリ、と。

私の手の中で、携帯電話が壊れた。どうやら握り潰してしまったらしい。

「……いいだろう」

自分のモノとは思えないほどに低い声が出る。

はて、この部屋はこんなに赤かったか？ ああ、ただの錯覚か。

「そちらが、その気なら」

踵を返し、部屋を出る。

扉を開けようとノブを捻ると何故か壊れてしまったので、蹴破って開けた。

廊下に出て、歩く。

一歩ごとに蟲を踏み潰すかのような不快な感触があるが、まあそれも錯覚だろう。

「私も、それに応じよう」

目指すは社長室。

標的はそこに座する、権力と金の亡者。

あんな汚物を斬るなど、私の剣の穢れとなるが――

「ふん。デュノア社、か」

構うまい。

今はこの、煮えたぎるような憤怒と憎悪をどうにかしなければ。

「随分と、無駄に大きな墓標だ。……奴を埋めるに、不足はあるまい」  
でない。

次に、シャルロットに会った際に。

怖がらせて、しまいそうだ――

「……失礼します」

社長室の扉を開けると――流石に頑丈な造りをしているのか、壊れることはなかった――その奥の机に座る男は、薄ら笑いで私を出迎えた。

シャルロットがメールを送ったのを知っていたのか、それとも私を呼び寄せるためにわざと送らせたのか。どちらにせよ、私があることを予測していたのは間違いないようだ。

「……どうかしたのかね、オルレアン君？ 今日君のアポはなかった筈だが」

「はい。取り急ぎ、お訊きしたいことがあります」

……驚いた。

まだ敬語で話せるとは思わなかった。

「訊きたいこと？ まあいいだろう、丁度今は時間が空いていてね、数分ならば話せるよ」

「ありがとうございます」

一度礼をしてから、顔を上げる。

そして、有りつ丈の力を込めて睨み付け――

「……貴様、シャルロットをどうした」

――流石にもう、敬語で話すことはできなかった。

「シャルロット？ ……ああ、あの娘か。アレは我が社のテストパイロットなのだよ？ オルレアン君。社長である私がどうしようと、私の勝手だろう」

「……ほう」

デュノア社長は私の眼力にも一切怯むことがない。これほどの大会社を率いる胆力は伊達ではない、ということか。

だが今、アレと言ったか？ シャルロットが貴様のモノだと言ったか？

……さて、喉を踏み潰すか顎を粉碎するかそれとも舌を引きちぎるか、迷うところだな。

「それで、シャルロットは？」

「今はIS適性に関する研究を手伝ってもらっている。なに、特に何かしてもらわうわけではない。体だけ貸してもらえれば、後はこちらでやる。……まあ頭は割れるほどに痛むかもしれないが、大したことはあるまい」

「……そうか」

なるほど、良く分かった。

ならば私は、実際に貴様の頭を割ることにしよう。

「シャルロットに手を出さないということは、暗黙の了解だと思っていたのだがな」

「つまりは正式な取り決めではなく、破っても特に問題はない、ということかね？」

会社経営者にあるまじき発言だが、まあよかろう。

この男は、既にそれ以前の問題だ。

「私は交渉は苦手だ。故に、単刀直入に言おう。」

……シャルロットを解放しろ。今、すぐに」

「断る、と言ったら？」

「決まっている。力づくで居場所を聞き出し、助け出す」

「おお、恐ろしい。フランス最強の騎士にそんなことを言われては、恐ろしくて心臓が止まってしまふよ」

いっそ物理的に止めてやろうか。

おどけて言うデュノア社長に不快感が増し、そう思った。

「だが、それは出来ない。社員の我が儘を容易く許しては、社長としての面目が立たないからな」

……もういいか。そろそろ我慢も限界だ。

まあ私も良く耐えたらう。自分で自分を誉めてやりたい。

「そうか。ならば、仕方ないな」

一歩踏み出し、デュランダルを起動する。

光の粒子が私の周りに溢れ――

「!？」

――形を成すことなく、霧散した。

「な……!？」

「ああ、君の専用機だがね」

くつくつとデュノア社長が嗤う。その眼は蔑みと嘲りに満ちていた。

「君は最近、反抗的だからね。少々細工をさせてもらった」

もう一度デュランダルに呼び掛けるが、全く応えない。展開だけでなく、他の機能も一切使えなかった。

完全な、機能停止状態だ。

「貴様、私の剣を……！」

「何か勘違いしているようだな。デュランダルは君のモノではない。我が社が君に貸しているだけだ」

デュノア社長が吐き気がするほど醜い笑みを浮かべながら手を軽く上げると、社長室の奥の扉から黒服の屈強な男が数十人現れた。全員が、手にスタンロッドを持っている。

「悪いがまだ君を失うわけにはいかないのだよ、オルレアン君。そしてあの娘にも、もつと役に立つてもらわなければならない。君が大人しく従ってくれば、全て丸く収まるのだよ」

「ふん。ISさえ奪えばただの無力な小娘だと思ったか？ ……侮るなよ。たとえ生身であろうと、その程度の人数で、この私を抑えられるものか」

「そうだろうな。だから、もう一人用意してある」

私が入って来た扉が、背後で開く。そこから現れたのは――

「クロエさん……!?!」

「……………」

ラファール・リヴァイヴ・カスタムを展開した、クロエ・ルクレールだった。

「何故貴女が……！」

「悪いわね、アンジエ。私もデュノア社の人間なのよ」

「そういうことだ。いくら君でも、生身でISに勝つことは出来まい？」

「くっ……………」

クロエさんは彼女に似合わぬ無表情で銃を展開し、私に向ける。

そして――

「それじゃあ、大人しくしてね。さすがに生身のあなたに勝っても、嬉しくないもの」

それから、一週間が経った。

私はデュランダルを奪われ、どこにも知れぬ部屋に軟禁された。訓練などの時にはデュランダルを返されるが、しかし少しでも怪しい動きをすれば、例の細工とやらで強制的に解除される。

そもそもシャルロットが人質に取られているのだ。居場所も分からないのに下手なことは出来ない。

(迂闊だった。完全に、読みが甘かった。まさかデュノア社がここまでの強硬手段に出るとはな。それほどまでに追い詰められていたか) ……いや。読み違えたのは、デュノア社の状況ではない。

(世界最強。それだけでは満たされんか——貴様の、欲望は)

たとえ私がブリュンヒルデになり。

デュノア社が、その私を擁する企業となっても。

まだまだ、まるで足りないのだ、あの亡者は。

(富、権力、名声……全てを手に入れるつもりか？　そしてフランスの——あるいは世界の王にでもなるつもりか?)  
それでは、全く同じだ。

かつて、とある世界を滅ぼした。

あの、化け物どもと。

(もう一度、墜とすというのか……私を)

私は戦闘狂だ。命を賭した戦いに無上の喜びを感じ、戦いこそが命が最も輝く瞬間だと思っている。

……だがアレは、戦いなどではなかった。

たったの二十六人を相手に、ただの一人も倒せずに、為す術無く、世界は滅ぼされたのだから。

……そして、私は。

その二十六人の、三人目だ。

(……だが、今は違う)

もう私は、企業の尖兵ではない。

私は私の魂にのみ従う。

そして私の魂が主と認めるのは、シャルロットだけだ。

(……成るものか。もう二度と、成ってたまるか)

シャルロットを守ると誓った。

シャルロットと母さんに、胸を張れる騎士になると誓った。

——ならば。

(私を、騎士と認めてくれた。……ならば。騎士ならば、このまま諦めるなど、有り得ない)

故に。

必ず、助け出す。

(考えろ。どうすればシャルロットを助けられる？ どうすれば奴を倒せる？ どうすれば——)

——と、そこで。

不意に、部屋の扉が開いた。

「……呆れた。全然眼が死んでないじゃない。諦める気皆無、て感じね」

「……クロエさん」

「あら、まだそう呼んでくれるの?」

部屋に入って来たクロエさんは、そのまま壁に寄りかかった。言葉通りに呆れ顔で、しかしどこことなく嬉しそうな顔で話し掛けて来る。

「……何をしに来たのですか?」

「つれないわね、せっかく会いに来たのに。……ま、それも当然か。裏切ったんだし」

「……」

信じていた。

クロエさんだけは、味方してくれると。

だか、そうはならなかった。

「何をしに来たのですか」

「いや、こんな何も無い所じゃ退屈かと思って」

「……」

「……そんな怖い眼で睨まないでよ。ちよつとした冗談じゃない」

「今はそんなものに付き合う気分ではありません」

「そりやそうよね。シャルロットを助けて、デュノア社長を倒す算段で忙しいものね」

「……………」

「倒せないわよ、いくら力があっても。殺したらあなたが罪に問われるし、いくら痛めつけてもめげないわよ、あの男は」

「…………シャルロットへの仕打ちを、公表します」

「無駄ね。証拠なんか残さないだろうし、証拠が無ければいくらでも揉み消すわよ、あの男は」

「……………」

…………そう、そこが問題だ。

デュノア社はフランス政府とも繋がりがある。並みのことではビクともしないだろう。

では、どうすれば――

「…………だから、これをあげるわ」

言つて、クロエさんは懐から取り出した何かを、私に放り投げた。反射的に受け取ると、それは小型の端末で、ディスプレイにはどこかの地図が表示されている。

そしてその地図には、赤い光点があった。

「シャルロットは、そこに居る」

「…………!!」

「いやあ、苦労したわよ。社長にも目を付けられ始めてたところだし。けどまあ、なんとか間に合ったわ」

…………馬鹿な。

クロエさんは、デュノア社長に付いたのではなかったのか…………？

「言っただでしょ？ 証拠がなくちゃ揉み消されるって。だから集めたのよ、今まで社長がやってきた、黒いことの証拠。あの時はまだ十分なのが揃ってなかったから、動くわけにはいかなかったのよ」

クロエさんは懐から取り出したディスクをヒラヒラと見せびらかした。その中に、証拠とやらが収められているのだろう。

「…………証拠は残さないのではなかったのですか？」



「そーなのよねー。けど完璧なモノなんて存在しない。ほんの少しだけけど、残ってたわ。……まあかなり念入りに消されてたから、時間は掛かったけどね」

……ならば。

それなら、一体――

「……いつからですか?」

「あなたがデュノア社に来てから。あの社長のことだから、また黒いことするんだろうなーって思ってた」

「……そんな」

……裏切ったのでは、なかった。

味方してくれる、などという話ですらない。

ずつと、味方だったのだ。

「助けに行くんでしょ? なら、これも持って行きなさい」

そう言っただけ渡されたのは、蝶を模したペンダント。

待機状態の、デュランダル。

私の、剣。

「起動障害プログラムは解除してあるわ。あなたもシャルロットも大気だからね、手伝ってくれる人は大勢いたわよ」

「……その人たちにも、感謝を」

「止めときなさい、喜びすぎて卒倒するかもしれないから」

そんな冗談を言っただけ、けらけらと笑う。

……やはりこの人には、こういう表情が良く似合う。

「……ありがとうございます、クロエさん」

「そんなのいいから、早く行ってあげなさい。その代わりに、シャルロットには私の活躍をしっかり伝えておいてね」

「言葉の限りを尽くして、誇張しておきましょう」

「……なんか不安だなあ、アンジエ天然だし、変なこと言いそう」

そう言っただけまた笑いながら、扉を指差した。

クロエさんに促され、扉に向かう。

そして、すれ違う時に――

——血の匂いを、感じた。

「……まさか」

「あら、バレちゃった？」

慌てて振り向くと、クロエさんは壁に寄りかかったまま、ズルズルと倒れた。

そして壁には、赤い跡があり。

クロエさんの背中には、銃創があった。

「……デュランダルを盗む時に、見つかったやつて。ISの展開が間に合わなかったわ」

「そんな……！」

「まあ大丈夫よ。急所は外れてるし、協力してくれた人たちはなんとか逃がしたしね」

……だが、それでも。

傷が残るだろう。女性の、体に。

「……何故」

「？」

「何故、そこまでしてくれるのですか」

クロエさんは、今まで本当に良くしてくれた。だが今回のコレは、今までとは程度が違う。

何故私たちのために、ここまでしてくれるのか。

「……私は、この国が好きよ。フランスを愛してる」

少しずつ悪くなっていく顔色で、クロエさんは語りだした。

己の、戦う理由を。

「祖国のために——なんて言うつもりは、ないけれど。それでも、私が活躍することでフランスも豊かになるのなら、それは凄く素敵なことだなんて、思ってた」

クロエさんの傷に応急手当をしながら、その言葉を聴く。

「けど、私の力は世界に通用しなかった。……悔しかったわ。しばらく、夜も眠れなくなるくらいに」

その時のことを思い出しているのだろう。そう語るクロエさんの顔は、本当に悔しそうで。

「次こそはって、訓練に明け暮れた。けどいくらやっても、あの時戦った人たちに追い付ける気がしなかった。才能の限界を感じて、焦って、焦って、どうしよう、どうすればいいんだろうって悩んで……そんな時、あなたが現れた」

そこでクロエさんは、私と目を合わせた。

真っ直ぐに、力強く、私を見る。

「この子なら。この子なら、必ず世界最強になれる。私が届かなかった所を軽く飛び越えて、想像も付かないほど高い所まで行ける。……根拠なんか何もなかったけど、そう確信したわ」

……だから、クロエさんは。

「それで、決めたの。私はもう、ここまででいいって。後はこの子に任せよう、私の夢をこの子に託そう。……この子がより高く飛べるように、私はこの子の踏み台になろうって」

私のために、血の滲む努力の果てに身に付けた、自らの戦術を捨てた。

私のために、共に戦ってきた相棒を、あんな姿に変えたのだ。

そして、私のために――

「……だから、この子のために出来ることをしようって決めた。こういう回りくどいことは苦手そうだったから、そこを私が補おうって決めた。この子を――私の夢を、守ろうって決めた」

だから、誰にも悟られぬように。

誰の力も借りず、たった一人で。

ずっと、戦っていたのだ。

「……許せない。私の夢が、欲望を満たすための道具にされるだなんて、絶対に許せない。けどそんなことをする外道と、正面切ってぶつかり合うのもなんか嫌じゃない？ だから、背中から刺してやろうって思ってた」

冗談めかして言っているが、その戦いは、決して容易いことではなかった筈だ。

だがそれを、クロエさんはおくびにも出さない。

「……まあ今までののは、実は全部建て前なんだけど。……本当はもっと、単純な理由」

私がよほど深刻な顔でもしていたのか、クロエさんは急に気配を柔らかくした。

訝しむ私に、不敵に笑う。

そして、悪戯好きの子供のような顔で――

「――私ね。あの社長、大っ嫌いなよ」

クロエさんの応急手当を終え、私はシャルロットの下へ向かった。デュランダルを盗み出したことは気付かれたが、証拠を集めていたことはまだ気付かれていない筈。今ならば社長も油断しており、なりふり構わない行動を取る可能性は低い。

故にこの油断を突き、シャルロットを助け出す。そしてそれを見計らって、クロエさんが証拠を公表する。私とシャルロットを失ったところに追い討ちを掛け、デュノア社長を倒すのだ。

(……いくら感謝しても、しきれんな)

クロエさんから渡された地図データを頼りに社内を行くと、地下エリアの入口に辿り着いた。分厚い隔壁を斬り裂いて侵入し、さらに進む。

すると、巨大なドーム状の空間に出た。

『ようこそ、オルレアン君』

スピーカーから、デュノア社長の声。私が来ることを予測していたのだろう。

『ルクレールにも困ったものだ。誰のおかげでフランス代表になれたと思っているのか』

「決まっているだろう。クロエさん自身の力だ」

不快極まる。この男、何様のつもりだ。

『まあ、もはや奴のことなどどうでも良い。それよりも君だ。わざわざ来てもらって悪いのだが、ここまでだ。自分の部屋に戻れ、オルレアン君』

「私の部屋だと？ そんなものはここにはない。私が住处と定めるのは、あの家だけだ」

『ふむ。我が社のために尽くす気はないと？』

「皆無だ」

即答する私に、デュノア社長はわざとらしい溜め息を吐いてみせた。その息遣いさえ不快だった。

『仕方がないな。では力づくで、君を従わせるとしよう』

「やってみせろ。やれるものなら」

『では、遠慮なくやらせてもらおう』

その言葉と同時に、ドームの四方にあるゲート、その内の私が入って来たものを除く三カ所から一機ずつ、IS——ラファール・リヴァイヴが飛んできた。そのパイロットたちの顔は、いずれも見慣れぬモノだった。

『その機体はフランス軍から借りてきたモノでね。つまりは軍用機だ。君の機体のように、リミッターなど有りはしない。そしてその者たちはフランス軍のエースパイロットだ。まあ私が潜り込ませたのだがな。……ルクレールほどではないが、腕は確かだ。いくら世代差があろうと、たった一人では勝てんよ』

確かに、軍用と競技用では大きな差がある。競技用の機体には相手を殺傷する危険性を減らすため、そして搭乗者がテロ行為等を起こしても制圧出来るよう、リミッターが設けられているからだ。

そしてこの三人の腕も相当なものだ。なにより連携訓練を十分に積んでいるのだろう、まるで狼のように統率の取れた動きで、瞬く間に私を包囲した。

……なるほど、社長の言う通りだ。彼女たちを相手に一人で戦うなど、無謀も良いところと言える。

——だが。

「……狗め」

「なに？」

小声で呟いた私の言葉を、ハイパーセンサーで拾ったのだろう、一人が怪訝そうに聞き返した。

「狗と言った。貴様らはあの下種に従うだけの、ただの卑しい走狗だと」

「……小娘が。天才と持て囃されて、調子に乗ったか」

「まさか数の理も分らないとはね。チームとして機能する三人の戦力は、単純に三倍じゃあないのに」

「その高々と伸びた鼻、へし折ってあげましょう」

私のあからさまな挑発に、不快感を隠そうともしない。個人の力量ではクロエさんに及ばずとも、三人での連携にはよほどの自信があるのだろう。

——だが。

そんなモノは、この私には無意味だ。

「貴様らこそ、何も分かっていない。英雄譚でも紐解いて勉強しろ」

「……何を言ってる？」

——かつて、とある世界を滅ぼした戦争があった。

その戦争において、たった一つだけ、私が誇るモノがある。

「人喰いの化け物は、必ず人間に斃される。……人間以外には、斃せない」

「だから、何を——」

弱者の殺戮ではなく、強者との戦いを求めた証。

私の在り様の具現であり、生き様の象徴であり。

「それと同じだ。狗には私は斃せない。この私を——」

それは汚名。

それは二つ名。

それは忌み名。

それは、私の名。

「——「鴉殺し」を、斃せるのは」

それは、あの男が手向けに呼んでくれた名。

それは、あいつが一度だけ呼んでくれた名。

「最強の、鴉だけだ」

それは。

今も尚、私が誇る名。

## オルレアンの騎士 最終話 剣の在処

「……軍用IS三機を相手に大見得を切りますか。まさかここまで愚かだとは……失望しました、アンジェ・オルレアン」

三人の内の一人、一番若い黒髪の女が、呆れたように言う。まあ確かに、私の言ったことは根拠も何もあつたものではない、ただの精神論だ。

——だが。

「仕方ないよ。ほら、天は二物を与えずとか言うじゃん？ 戦う才能がある分、馬鹿なんですよ」

中性的な顔立ちの、赤髪の女の言葉。

その通り、私は馬鹿だ。剣という時代遅れの武器に拘り、そんな愚かさすら誇りにする、救いようのない大馬鹿者だ。

——だが。

「しかしその才能も、まだ磨き抜かれてはいまい。今の段階では原石のままだ。社長からは現実を教えてやれと言われてるしな、軍人と民間人の違いを見せ付けてやろう」

リーダー格の銀髪の女の声からは、自分たちが負けるなどという考えは微塵も感じられない。それも当然か、銃で武装した複数の敵は、剣で相手取るには相性が悪いのだ。一人に近付けば他の者との距離が離れてしまうのだから。それを、この女は良く分かっているのだろう。

——だが。

「やってみせろ。やれるものなら。貴様らの弾丸が、私を貫けると思うのならな」

精神論の何が悪い。

肉体を支えるのは精神だ。心が折れては、鍛えられた体も役には立たない。そして過酷な戦場では、少々強い程度 of 精神など容易く折れる。

剣に拘ることが愚かならば、私は愚か者でいい。

肉体を支えるのが精神なら、私の精神を支えるのは剣への想いだ。



私の在り方が変わらぬ限り、たとえ剣が折れようと、この心は決して折れはしない。

相性の良し悪しがなんだと言うのだ。

そんな小賢しい理屈で曲がるほど、私の生き様は軟弱ではない。現に今まで幾度となく、その理屈ごと敵を斬り捨てて来た。

「性能？ 数？ 相性？ なんだそれは、まるで分からんぞ。それは私が恐れをなす理由になるのか？」

私は剣に頼って来た。

私は剣に縋って来た。

私は剣に拘って来た。

私は、剣に生きて来た。

剣に頼り、剣に縋り、剣に拘り、剣に生き、そして死んだ。

そしてそこまで行つて尚、私は剣を捨てられず、どうしようもないほど剣に惹かれている。

——ならば。

「そんなモノはどうでもいい。たとえ相手が誰であろうと、どれほど大勢だろうと、いくら強かろうと」

何故私は、剣を捨てられないのか。

何故私は、これほどまでに剣に惹かれているのか。

——それは。

「私のやることは、一つだけ」

理屈などではなく。

私の心に、私の魂に。

剣への想いが、刻み込まれているからだ。

故に、私は——

「ただ、寄つて斬るのみ——！」

「まだ吠えるか。ならば二度と逆らう気にならぬよう、徹底的に痛め

つけてやる——！」

三人が一斉に動く。特に示し合わせた様子もなく、それでもほぼ完全に統率の取れた動き。相当な練度であることが伺える。

「私たちを狗と呼んだこと、後悔しなさい！」

素早く意識を巡らせて、展開された武装を確認する。

黒髪の女はリヴァイヴの標準装備である両腕のシールドの内右腕のものを外しており、代わりに左腕のシールドが大型化してある。そして空いた右手には大型のガトリングガンを装備。

赤髪の女はシールドを両方外し機動力を確保、両手にマシンガンを展開した。見ればスラスタターにも手が加えてあるのか、通常よりも出力が高そうだ。

そして銀髪の女は右手に大型のスナイパーライフルを、左肩にアサルトカノンを展開、右肩にはリーダーのような物が取り付けられている。

「謝るなら今の内だよ？ 始まったら、謝る暇なんかあげないからね」  
黒髪がシールドと弾幕で二人を護衛、赤髪が攪乱しつつじわじわ削り、銀髪がそれらを指揮しながら、要所で狙撃と砲撃を加える。……そんなところか。

単純ではあるが、それ故に堅牢な布陣と言える。しかも三人とも機体はリヴァイヴ、豊富な装備があることはまず間違いない。おそらく一人倒したところで、すぐさま武装を切り替えフォーメーションを組み直すだろう。

だが、それすらも私には関係ない。こちらに向かってくるのなら、何度でも討ち倒すだけだ。

「ならば貴様らは、逃げたくなければ逃げてもいいぞ。私には、弱者をいたぶる趣味はないのでな！」

交戦開始。私の戦いは、いつだって私の突撃から始まる。今回も例外ではない。

「往くぞ、デュランダル!!」

——コード認証。最大出力形態へ以降——

二基のメインスラスタターが、両手に持つ機体と同名のブレードに接

続される。スラスターの形が変わっていき、形状だけは標準的な長剣だったブレードが瞬く間に二振りの大剣になる。

ブレードスラスターを起動、しかしエネルギーは放出せずに刀身内部を循環させる。すると刀身が光を放ち、さらに高く澄んだ音を発し始めた。

——これぞデュランダルの真の力。ブレード自身の重量に加え、熱と振動によって飛躍的に威力を高めた刃を、大型スラスターにより加速させ打ち込む。その威力は凄まじく、並みのISならば一撃で倒せるだろう。

「本当に馬鹿だね。その剣は小回りが利かない。それじゃああたしは捉えられないよ！」

赤髪が小刻みな機動をしながらマシンガンを連射してくる。こちらでもチェーンガンで応戦するが、それは巧みにかわされた。

「やっぱり、射撃の腕は剣ほどじゃないね！」

「そうだな。なら、捨てるか」

「!？」

言葉通り、チェーンガンとアサルトカノンをパージする。

……これで、軽くなった。

「ふん！ それくらいで、あたしに追い付けると——!？」

「思っているさ」

一気に肉迫した私に、赤髪が驚いている。

無理もないかもしれん。何故なら——

「お前、一体なにを——!？」

四基のサブスラスター、両手に持ったブレードのスラスター、そして両脚のスラスター。

計八基による、同時瞬時加速。

「う、おおお!!」

間合いに入り、大上段から剣を振り下ろす。その一撃を、赤髪は驚愕しながらもなんとかかわした。

「けど、これで——!？」

赤髪はこう思っただろう。この剣の重量では、二撃目を放つまでに

僅かに時間がかかる、と。その際に距離を取りつつ銃撃を加えよう、と。初見では驚いたが、次はあの瞬時加速にも反応出来る、と。

大間違いだ。逃がしはしない、貴様はこれで倒れる。

「ハアツ!!」

驚愕に目を見開いている赤髪の胴に、剣を叩き込む。機動力の代償に防御力が低下しているのだろう、赤髪のリヴァイヴはそれで機能を停止した。

「……まず一人」

「そん、な……」

いまだに驚愕を顔に貼り付けたまま、赤髪が落ちていく。

そんなに驚くほどのことか？ 私はただ、振り抜いた剣を蹴り上げて、初撃をかわした赤髪へと翻らせただけだというのに。

「な……!?!」

「慌てるな！ 奴の推定能力を修正、フォーメーションを——!?!」

「遅いっ!!」

貴様らには遠慮などしない。一息に片を付ける。

再び瞬時加速を発動し、次は黒髪に躍り掛かる。ガトリングガンを連射して突き放そうとするが、その弾幕はクロエさんのそれと比べればあまりにも薄すぎる。

容易く突き破り接近、そのまま放った斬撃を、黒髪は左腕の大盾で受け止めた。

「くう、重い……!?! けれど、耐えられ——!?!」

「無駄だ」

剣を防がれたまま、さきほどの瞬時加速を発動。凄まじい運動エネルギーが刃に伝わり、大盾ごと黒髪を切り裂いた。

「これで、二人だ」

「こ、こんなつ、こんな……!?! こんな馬鹿な話があるかつ!!」

フォーメーションもなにもなくなり、指揮する味方もいなくなった銀髪が取り乱す。睨み付けてやると、身をすくませて武装を解除した。

「こ、降参する！ さつき言っただろう、逃げるなら逃げてもいいと

！」

「ああ、言った。だから、とつとと失せろ。貴様らには斬る価値もない」

銀髪に背を向けて、ドーム内を見渡して出口を探す。取り出した小型端末の地図と見比べていると――

「……馬鹿が」

――ハイパーセンサーが、背後で銀髪がグレネードランチャーを展開するのを確認した。

「この距離なら外さんっ!!」

間髪入れずに連射。放たれた榴弾は着弾を待たず、一斉に起爆した。

「卑怯などと言うなよ。戦場では、生きている敵に背を向ける方が愚かなのだ」

「まったく、その通りだな」

「!？」

爆炎に向けて勝ち誇ったように語っていた銀髪は、私の声に面白いほど反応した。そして慌てて、後ろに回り込んでいた私に振り向く。

「馬鹿な、なぜ……!？」

「貴様のやることなど大体予想がつく。そもそもISには絶対防御があるというのに、命乞いなど必要ないだろう」

「く……!」

銀髪はグレネードランチャーを捨て、ショットガンとマシンガンを展開。私に向け連射して来た。

「うおおおお!!」

「温い。私を止めたければ、この三倍の弾幕を張るのだな」

広範囲にばら撒かれる散弾も絶え間なく放たれる高速弾も、一発たりとも私を捉えることはない。それどころか、私の接近すらほんの僅かに遅らせる程度の働きしか出来ていない。

「馬鹿な、これがISの動きだと……!？」

見る間に近づいて来る私に、銀髪の顔は恐怖に彩られていった。それでも射撃の精度が落ちないことは流石というべきかもしれないが、し

かしそれも元々意味のないモノだ。

「なら、ならば私たちは、なんだと言うんだ!？」

「……言っただろう」

そして、間合いに入り。

両の剣を、大上段に振り上げ。

ブレードスラスターを、最大出力で起動し。

「貴様らは——卑しい、狗だ」

十字を描くように。

躊躇うことなく、振り下ろした。

「……雑魚が。やはりつまらんな、弱者をいたぶるのは」

「馬鹿な、あの三人が……!」

デュノア社本社ビル最上階、その社長室。

現在アンジエのいる地下とは正反対の、いわば最も安全な場所から戦いの様子をモニターで見っていたデュノア社長は、その結果をすぐには信じる事が出来なかった。

自らの勝利を疑っていなかったというのに、ものの数分で敗北したのだ。無理もないと言えるかもしれない。

「ちいつ、このままではオルレアンを失ってしまう。急いで次の手を

——」  
「その必要はないですよ、社長」

社長室の扉を開け入って来たのは、クロエ・ルクレール。まるで汚いモノでも見るかのような眼で、社長を見下ろしている。

「……ルクレール、貴様。この裏切り者め、よくも私の前に姿を見せられたものだな」

「まあまあ、そう言わないで下さいよ。第一、社長だってアンジエたちを裏切ったじゃないですか」

「ふん。オルレアンには莫大な投資をしたのだ、その見返りを求めて

何が悪い？」

「あーはいはい、もういいですよ。あなたに話を通じない……ていうか話にならないことは、もうとづくに分かってるんで」

心底面倒くさそうな態度のクロエ。だが見る者が見れば分かるだろう、クロエは一切の油断なく、デュノア社長と対峙していた。

(こいつのことだから、引き出しの中に銃とか入っても不思議じゃないもんね)

仕込みは既に終わり、デュノア社長の破滅は避けられないとはいえ、この男と刺し違えるなどそれこそ死んでもごめんだった。

「何をしに来た。貴様は後でゆっくり処分してやるから、今は大人しくしている」

「あら、そんなこと言っているんですか？ 私も「あなたから借りた」専用機を持つてるんですけど？」

「ふん。貴様に人を殺す度胸などあるまい」

「まあ確かに、そんなものないですけどね。必要とも思わないし」

そう言ってくつくつと笑うクロエの姿に、デュノア社長は苛立ちを募らせる。今はクロエに付き合っている暇などないのだ。

「……それで？ 何をしに来た」

「いや、ほら、映画とかでよくあるじゃないですか？ 主人公が戦ったりヒロインを助けてる間に、その仲間が黒幕を追い詰めるシーン。あれって凄くカッコいいと思いませんか？ 私大好きなんですよ、アレ。前から一度やってみたくて」

「……何を言ってる？」

訝しげな顔をするデュノア社長に、クロエは益々笑みを深めた。そして懐から、一枚のディスクを取り出す。

「……まさか、それは……!?!」

「ご明察。この中に、色々入ってますよ。今まであなたがやってきた裏取引とか違法な研究とかその他諸々とかのデータが。そりやもうたください」

「貴様、どうやってそれを!?!」

「まあいいじゃないですか、そんなことは。どうせあなたはもう、終わ

りなんだから」

言葉と同時に、社長室に人がなだれ込んで来る。全員が、警察の制服を着ていた。

「ルクレール、貴様は……!!」

「いやあ、一枚だけ持つて行つてもあなたが警察やらなんやらに潜り込ませた連中に握りつぶされるかと思つて。コピーしまくつて、フランス中の報道社と公的機関にばらまきました。ざつと千枚くらい。今頃、テレビでニュースでもやってるんじゃないですかね？」

「貴様あ……!!」

デュノア社長は憎悪に濁りきつた眼でクロエを睨むが、しかしクロエにそんなモノはまるで効果がない。普段からアンジエと模擬戦をしているのだ、並の気迫では小揺るぎもしない。

「ああ、それと。私がなんでわざわざ、来る必要もないのに、こんな普段は一秒だつて居たくない部屋に来たのかという」と

警察官たちが罪状を述べながら、デュノア社長を取り囲む。案の定机の引き出しに拳銃を隠していたデュノア社長はそれを取り出し、抵抗かそれとも自殺でもしようとしたようだが、すぐさま取り押さえられた。

机に頭を押し付けられ、ひねり上げられた両手に手錠が掛けられる。そして有りつ丈の憎しみと怒りを込めた眼でクロエを睨み付け

「ルクレエエエエル!! 貴様、貴様あ!! 許さんぞ、殺してやる!! 必ず殺してやるぞ!!」

まるきり悪役なセリフを叫びながらもがくデュノア社長を、クロエは楽しそうに眺める。本当に映画のキャラクターになったかのような気分だった。

「その顔が見たかつたんですよ、社長。そのためにここに来たんです。……まあ、アンジエとシャルロットを利用した罰よ。檻の中でじっくり反省しなさい。反省出来るだけの知能があるなら、だけどね」



「シャルロット!!」

さらに地下へと潜っていき、ついに光点のある部屋に辿り着いた。途中何人か黒服がいたが、そんなものは障害にすらならなかった。

扉を蹴破り、中に入る。そこには台に寝かされ、様々な機械から伸びるコードを繋げられたシャルロットがいた。

「シャルロット……!」

「……アンジェ……?」

コードを引き剥がして抱き起こし、呼び掛ける。それにシャルロットは、うつすらと目を開いて応えた。

「……助けに来たぞ」

「……うん。絶対に来てくれるって、わかってた」

嬉しそうな微笑みを浮かべるシャルロットに、私も出来る限りの微笑みを返す。

「痛むところはないか?」

「……頭が、少し。けど大丈夫、しばらくすれば、治まるから……」

「……そうか」

……そんなことが分かるくらいには、この状況に慣れてしまった、ということか。私をもっと早く来ていれば……。

「……遅れてすまない」

「ううん。僕は平気だよ。……もう、大丈夫。アンジェがいるから、僕は大丈夫」

「……そうか」

シャルロットを抱き上げて、出口へと向かう。

もうこんなところに用はない。私たちがいるべきは、こんなところではないのだから。

「……父は?」

「そちらも片が付いた。クロエさんから連絡があつたよ」

「クロエさんが……?」

「ああ。お前の居場所を教えてくれたのも、助け出す手伝いをしてくれたのもクロエさんだ。……全部、あの人がやってくれた」

「……クロエさん……」

「次に会った時、抱き付いてやるといい。きっと卒倒するくらい、喜んでくれる」

「あはは。今度こそ絞め殺されちゃうかも」

そんな話をしている内にも、少しずつ顔色が良くなっていく。この分なら、数日で回復するだろう。

「……さあ、帰るか」

「……うん、帰ろう」

二人、静かに頷きあつて。

「私たちの」

「僕たちの」

二人、優しく微笑みあつて。

「母さんのいた、あの家に」

---

閉じていた目を開けて、振り返る。

そこには、僕の大事なお姉ちゃんがいた。

「……もういいのか？」

「……うん。ちゃんと、お別れしたから」

ここは、お母さんのお墓。これからしばらく帰れなくなるから、挨拶をしに来たのだ。

僕は眼を閉じて黙祷しただけだけど、アンジエはお墓の前に片膝をついて、深々と頭を下げていた。

それは、物語の中の騎士みたいで――

(……ううん。みたい、じゃなくて)

アンジエは、本当に騎士なんだ。

僕の騎士。

お母さんの娘で、僕のお姉ちゃんで、僕を守ってくれる、僕の騎士。だから、僕も。

アンジエに相応しい人にならないと。

「……それじゃあ、行こっか」

「そうだな。あまりクロエさんを待たせるわけにはいかない」

あれからのことは、全部クロエさんがやってくれた。父は逮捕され、父が今までやってきたことは世界に公表され、デュノア社は解体。アンジエと僕はデュノア社の悪事を暴くのに活躍したとして、クロエさんと一緒に表彰された。

……二人はともかく、僕はなにもしてないんだけどなあ。

その後も大変だったけど、それもクロエさんのおかげでどうにか乗り越えられた。元フランス代表というのは色々なところに顔が利くようで、クロエさんが頼むと政府や軍の人たちも僕たちに力を貸してくれた。

……それに、これからのことも。

「……アンジエ、随分楽しそうだね？」

「まあ、な。何せ世界中から国家代表候補生が集まるんだ。強い者が大勢いるだろう」

「それだけじゃないでしょ？ アンジエが楽しみにしてるのは」

「……あそこには、あのブリュンヒルデもいるらしいからな。叶うのなら、一手手合わせ願いたいものだ」

「やっぱり。それもう病気だよ」

「不治の病だな」

そう、僕たちはフランスを離れる。そして、そこで新しい生活を始める。

そのための手続きや口添えも、やってくれたのはクロエさんだ。

……クロエさんには本当に頭が上がらない。いつかちゃんと、恩返ししないと。

「僕はその病気の対象に入っていないの？」

「もう少しだな。期待はしている」

「む。それじゃあ期待に応えられるように頑張らないとね」

いつまでもアンジエに守られてばかりじゃ情けない。僕もアンジエを守るくらいに、強くならないと。

「お待たせしました、クロエさん」

「もういいの？ もうちょっとゆっくりしてくれば良かったのに」

「いえ、僕たちはもう、大丈夫ですから」

「そう。……それじゃあ乗って。送ってくわ」

クロエさんの車に乗り込み、空港へ向かう。

到着すると、予め渡されていたチケットに従い搭乗ゲートへ向かう。

「クロエさん。……本当に、お世話になりました」

「いいのよ。あなたの評判のおかげで、私もなんとか再就職出来たし」

クロエさんは軍に行くことになった。アンジェのコーチをしていたという点が大きく評価されて、IS操縦の教官として招かれたのだ。

「けど、僕は何もしてません」

「そんなの気にしなくていいのに。……けどまあどうしてもって言うなら、私の妹にゲフンゲフンたまに顔見せに来てくれればいいわよ」

……なんだろう、クロエさんが何か言いかけたような気がしたけど……。

「……ちよつとアンジェ！ そんな怖い顔しなくてもいいじゃない！

……」

「……シャルロットはあげないと言った筈ですが……」

「……分かってるわよ！ ちよつと言ってみただけじゃない、もう……」

「？」

二人が小声で何か言い合っている。良く聞こえなくて、内容までは分からないけど。

「んんっ！ それじゃあ、行ってきなさい。元気でね。ちゃんと連絡  
寄越すのよ」

「はい。行ってきます、クロエさん」

「クロエさんも、お元気で」

見送ってくれるクロエさんに手を振って、飛行機の搭乗口に向かう。

その目的地は、日本。

「では、行くか」

「うん、行こう」

これからもきつと、大変なことがいっぱいあるだろう。もしかしたら、今までよりもずっと大変かもしれない。

——それでも。

「I S 学園へ！」

大丈夫。

僕たちなら、絶対に、乗り越えられる。

---

Epilogue

---

『さあ、いよいよ始まります！ 第四回モンド・グロツソ、決・勝・戦  
んんん!!』

『世界中が注目するこのモンド・グロツソですが、その全員がこの一戦  
を心待ちにしていたことでしょうっ!!』

『それではさっそく、対戦カードの発表です！ 青コーナーは皆さん  
ご存知の通り、第三回モンド・グロツソで優勝し、世界が二人目のブ  
リュンヒルデと認めたフランスの救世主！ ジャンヌ・ダルクの再  
来っ!!』

『最強の騎士！ アンジェ・オルレアアアアアンツ!!』

『そして赤コーナー!! こちらが今大会を大いに盛り上げている立役  
者!!』

『今年から始まったタッグマッチ部門においてオルレアン選手のパー  
トナーを務め、その華麗な連携で見事優勝を果たした、もう一人のフ  
ランスの英雄!!』

『その名はっ!! シャルロット・デュノアアアアアツ!!』

『義理の姉妹であり師匠と弟子であり騎士と主であるこの二人が、一  
体どのような戦いを魅せてくれるのか!? もう楽しみでたまりませ

ん!!』

『ああもう、まだ時間あるけどもういいか!! それより早く始めてもらいましようっ!! この永遠に語り継がれるだろう一戦をっ!!』

『さあ、思う存分に戦ってくれ!! そして世界を魅了してくれっ!!』  
『それではっ!! バトル・スタートオオオオッ!!』

会場を埋め尽くす、百万人の観客たち。その怒号のような大歓声も、今は全く気にならない。

今、この耳には、私が仕える主の声しか届かない。

今、この目には、私が愛する妹の姿しか映らない。

「よくぞ……ここまで、来てくれた」

「当たり前でしょ。僕は、アンジェの妹なんだから」

……シャルロットは、強くなった。本当に、強くなった。

「ずっと、この日を待っていた。ずっと、この時を夢見ていた」

「うん。僕も同じだよ、アンジェ」

ああ、誰か。この胸の高鳴りをどうにかしてくれ。

始まる前に、心臓が張り裂けてしまいそうだ。

「手加減しないでよ」

「頼まれたって、するものか。そんなことをすれば負けてしまう。

……全力でも、勝てるか分からないのだから」

「……その言葉が、聴きたかった」

まったく、なんという奇跡だろうか。

仕える主。愛する妹。力の限りを尽くして尚、届くか分からぬ強

敵。

それら全てが、私の目の前にいるなんて。

「……さあ、始めよう。こと此処に至っては、言葉など無粋なだけだ。

……今、この瞬間は——」

「——力こそ全て、でしょ?」

お互いに、ニヤリと笑う。

凜猛なその笑みが、この上なく美しい。

「……この、闘いを」

「……お母さんに、捧げる」

ああ、ようやく。ようやくだ。

ようやく、私の夢が叶う。願いが叶う。

「……さあ、往くぞ」

この日この時、この戦いを。

ずっと、待ちわびていた。ずっと、待ち焦がれていた。

——ずっと、待ち望んでいた。

「私を、超えて魅せろ——」

総身に力が満ちていく。

血湧き肉踊る。

魂が、歓喜の雄叫びをあげる。

——そうだ、これだ。これこそが——

「——シャルロット!!!」

——私が求めた、「決闘」だ——!

## 設定資料

井上真改（いのうえしんかい）

身長：171cm

体重：53kg

バスト：ジナイード級

ウエスト：細い

匹夫：小さい

黒髪黒目

顔立ちは中性的で目つきが鋭く、長身で体の起伏も少ないので男に間違えられかねない容姿。しかし髪を腰まで伸ばすことでそれを防いでいる（妹たちによるものであり、真改本人は長い髪を鬱陶しいと感じている）。剣術等を褒められると無表情で喜ぶが、容姿等を褒められると無表情で照れる。

私服ではズボンを穿くが制服は膝下まであるスカート。アクセサリーは身に着けず、朧月の待機状態である鎖に通した指輪を首から提げるだけ。しかし自宅には真改用のクローゼットがあり、中にはあんな衣装やこんな衣装が一度も着られることなく長いこと封印されている。

一見すると無口でクール、実際はかなりの熱血・激情家。賢くはないが思慮深く、けれど時々うっかりさん。

趣味は剣術、あと自覚はないけど園芸。と言っても凝ったものではなく、単純に花と、花が育っていく様子が好き。

朧月（おぼろづき）

如月重工製の第三代型IS。機動力と攻撃力に優れるが、装甲は薄い。

第二形態は朧月が真改の記憶からスプリットムーンの情報を引き出し転用した、朧月・双重（ふたえ）。

装備

神無月（かんなづき）



朧月の第三世代型兵装。後述の神在月と二基一組。

膨大なエネルギー容量を誇るコンデンサーで、量子状態でも機能する。このエネルギーはスラスタや月光に使われ、これにより朧月は機動力と継戦能力を両立している。

神在月（かみありづき）

朧月の第三世代型兵装。前述の神無月と二基一組。

大量のエネルギーを一気に送り込む供給ラインで、量子状態でも機能する。月光の攻撃力を支える装置。

神無月と神在月で朧月の拡張容量の八割を占めており、残りは水月のカートリッジや月光に使われている。月影の弾が少ないのも月影と月蝕が月船と一緒に使えないのもこれが原因。

月光（げっこう）

言わずと知れた名剣。出力こそ馬鹿げているが構造自体は単純であり、極めて頑丈に作られている。零落白夜を真っ向から受けられるくらい頑丈。

剣の長さはある程度調整出来るが、最大まで伸ばすと2.5メートルくらい。

月輪（がちりん）

左腕の代わりに取り付けられている大型スラスタ兼ブレード。2メートルの片刃の大剣、その峰の部分が全部噴射口になっている。とにかく出力が高く、十分に加速させた一撃は物理ブレードとして最高レベルの威力。

月華（げつか）

二次移行により月輪に追加された機能。刀身から光を発し、月輪の威力をさらに上げる。威力だけでなく見た目の派手さにより相手の目を眩ますことができる。しかしその分光の収束率が低く、月光には劣る。

水月（すいげつ）

朧月のメインスラスタ。海上でもイカレることはない。

通常のエネルギー噴射だけでなく特殊カートリッジが装填されており、それを起爆させて凄まじい加速を得る。瞬時加速も使える。二次移行によりカートリッジが双発式になった。

月灯（つきあかり）

二次移行により水月に追加された機能。月光に匹敵するエネルギーを使ってカートリッジを起爆させることで炸薬をプラズマ化させ、加速力をさらに上昇させる。エネルギーを消耗するので、発動は任意。

月渡（つきわたり）

水月の外装をパージし、残っているカートリッジを全て装填、一斉に起爆する変態奥義。カートリッジが尽きるのもその後の戦闘に大きな支障が出る。これに月灯を併用するとさらにやべえ加速が出来るが、残弾数によっては真改の背骨が碎ける可能性がある。ていうかマックスでぶっ放すと真つ二つになる。

月影（つきかげ）

朧月の左肩に取り付けられている三連装ガトリングガン。散弾が装填されており、威力と面制圧力がおかしいことになってる。その代わり反動が大きく命中率に難あり。が、真改の射撃の腕を考えるとそれくらい弾が散った方がいいもしれない。

強力だが装弾数が少なく、使いどころを間違えるとあつと言う間に弾切れに。

月蝕（げつしよく）

閃光弾。光だけでなく特殊なパルスを放ち影響範囲内のハイパーセンサーに干渉、パイロットの視覚情報を光で埋め尽くす。飽くまで

情報であり実際に網膜に光をあてるわけではないので後遺症が残ることはないが、その光量は本能的に体が硬直するレベル。好きなタイミングで起爆出来るので、直接当てる必要はない。

#### 月船（つくぶね）

朧月の高速機動用パッケージ。肩、腰、膝に二対ずつ、合計十二の大型スラスターとして朧月に装着される追加スラスターモード、ステルス爆撃機みたいな形の独立飛行モードの二つの形態があり、変形、脱着により形態を変える。その際のギミックは一夏が感動するレベル。

朧月とリンクするだけで使用可能であり、朧月自身による操作も出来るので真改の情報処理能力に付加を掛けることはない。

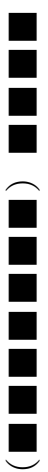
動力に神無月と神在月を応用した装置を使っており、緊急時には朧月へのエネルギー供給が出来る。ロボコップ3のパクリとか思ったやつは表出る。一杯奢ってやる。

#### 月詠（つくよみ）

現在如月重工が開発中の最終兵器らしい。

完成すると真改は無敵になるらしい。

だが今の段階ではとても実戦では使えないらしい。らしいらしいと言うのは別に作者が何も考えてないからではないらしい。



朧月の単一仕様能力。かみんぐすーん。

#### 両膝の小型ブレード

便宜的にブレードと呼んでいるが、厳密には武器ではなく装甲の一部。なので名前はない。

思いつかなかったわけじゃねえからな！ 勘違いすんなよ！

如月社長（へんたい）  
心に一本芯が在る変態。交渉力と統率力に優れる。

網田主任（へんたい）  
揺るぎなき信念を持つ変態。制圧力と発想力に優れる。

社長秘書（りょうしん）  
如月重工が未だに存続しているのは彼のおかげだと言われている。

ムラクモ大学

如月社長と網田主任の出身大学。通称「魔窟」。創始者は叢雲千歳  
さん（年齢不明、性別不明、出身不明、種族不明）。

ケミカルデザイン製薬

しよっちゅうバイオハザードが発生する。

### 第39話 帰還

「無断外出、指定場所以外における無許可でのISの使用、及び戦闘。……相当重いぞ、これは」

「……………」

本音と共にIS学園へと戻ってきた己を出迎えたのは、阿修羅の如き形相をした千冬さんだった。千冬さんは己を教員室に連行し、そのまま説教へ。

「急いでいたのは分かる。学園ではなくお前個人に連絡した如月重工にも責任はある。だがそれでも、一言報告するべきだった。通信くらいは出来た筈だ」

「……………」

千冬さんの言うことは全くの正論だ。己は如月重工の本社ビルへ向かう際に街の上空を月船で突っ切って行ったので、目撃者から通報が入ったのだ。何も知らされていなかった学園が確認と事後処理に費やされた労力は、決して小さくはないだろう。

「よって、学園はお前に処分を下すことを決定した。……覚悟はいいな？」

「……………はい……………」

仕方あるまい。これについては明らかに己の失敗だ、甘んじて受けられない。

そして千冬さんが、常にも増して厳格な顔になり――

「……………一年一組、井上真改を、一学期の間外出禁止とする。……以上だ」

「……………は……………？」

……待て。聞き間違いか？ 外出禁止だと？ しかも一学期の間？ 再来週には終わるだろう、それは。

「……………軽過ぎる……………」

「如月重工から感謝状が届いた。テロリストの襲撃から社を守り、研究のために預けた機体の二次移行セカンド・シフトにも成功させたことに対してな」

「……………」

「お前が学園に在籍している限り、如月重工は学園への協力を惜しまないそうだ。そして如月重工の技術力は、他の企業を大きく上回っている。この旨みは、お前のしでかしたことを補って余りあると判断された」

「……………」

……如月社長め、随分と手回しがいいな。さては全て予測していたか。

「だがお前が規則と法律に触れたことには違いない。何もお咎め無しでは流石に示しがつかん。よって、罰を与える必要があった。たとえそれが、有って無いようなモノでもな」

「……………」

「まあ、遊びたい盛りの十代女子にとって、外出禁止は少々辛いかもしれんが」

己にそんな感性がないことを分かって言っているのだろう、この人は。その証拠に、まるで悪ガキのような顔になっている。

「……以上が、お前の担任としての言葉だ。次に、織斑千冬個人としての言葉を伝える」

「……………」

そこで千冬さんは、フツと表情を和らげた。

それはまるで、妹の無事を喜ぶ姉のような顔で。

「……良く帰って来た、真改。どうやら吹っ切れたようで、何よりだ」  
そんなことを、優しい声で告げた。

「…………世話を掛けた…………」

「気にするな。今回は、私は全くの無力だったからな。教師としても姉貴分としても、恥ずかしい限りだ」

「……………」

全く、この人は。

一体どれだけ、真面目なのか。

「では、もう戻れ。他の皆にも謝っておけよ。随分心配していたからな」

「…………承知…………」

再び教師の顔に戻った千冬さんに促され、教員室を出る。  
するとそこには、己の大事な友人たちが居た。

「シン、どうだった？」

「いのつち、大丈夫？」

「やはり、なにか罰が……？」

「確かにマスターにも非はあるが……」

「けど活躍もしたんでしょ？　ちよつとくらい大目に見てくれてもいいじゃない」

「あまりに重いようでしたら、わたくしが抗議に行きますわ」

「うん、僕らみんなで行けば、学園も少しは——」

「……外出禁止……」

「「「「「……は？」「「「「」」」」」」」

「……夏休みまで……」

「「「「「……」」」」」」

余りに予想外な処罰の内容に、皆目が点になる。

……まあ、そうなるか、普通は。

「……それって」

「何か意味あんの？」

「……ないんじゃないか」

「はは、学園も粋なことするじゃん！」

「ほっ……安心しました」

「良かったな、真改」

「おめでと〜」

「……………」

皆口々に、己の事実上の無罪放免を祝ってくれる。

その温かさが、本当に心地良くて。

この優しい人たちに心配を掛けてしまったことが、心苦しい。

「……すまなかった……」

だから、頭を垂れた。

許して欲しいのではなく、ただ、謝りたかった。

——だが。

「違うよ、いのっち」

「……？」

否定の言葉は、本音から。

それが何を意味するのか、分からぬ己に。

優しく、諭すような声で。

「こういう時は、謝るんじゃないくて」

全てを照らす、太陽のような。

可憐な、一輪の花のような。

そんな笑顔で。

「ありがとうって、言うんだよ」

そう、教えてくれた。

「……」

皆を見ると、本音の言葉を肯定するように頷いている。

……そうか。なら、苦手ではあるが――

「……皆……」

出来る限りの、笑顔で。

謝罪ではなく、感謝をしよう。

「……ありがとう……」

――カシヤ――

「……………??」

……待て、なんだ、今の音は？

発信源を探ると、皆の後ろ、影に隠れるようにして――

「真改ちゃん笑顔、ゲットだぜええええええつ!!!」



「……………」

——IS学園二年生、新聞部副部長である、黛薫子がそこに居た。そしてその手には、見るからに高価かつ高性能そうなデジタルカメラが——

「ついでに呆けた顔もゲート!!」

カシャ。

「……………!?!」

シャッター音。それが意味することはただ一つ。

——撮られた。己の、笑顔を。いつもは誰にも見られぬよう努めている、笑顔を——

——あの、拡声器と掲示板を足して三を掛けたような、黛薫子に——

「……………待てっ……………!!」

全力で駆け出す。しかし黛先輩は相当な健脚の持ち主で、未だに疲労が重く残る体では中々追い付けない。

「……………くっ……………!」

「真改さん、手伝いますわ!」

「私も行こうっ!」

いつになく慌てる己に、セシリアとラウラが助勢してくれる。流石は国家代表候補生、その脚力は黛先輩を大きく上回り、見る見る内に追い付いて行き——

「——私を助けてくれたら、優先的に写真を回してあげるわよ? 勿論、一夏君のもね」

「ごめんなさい、真改さん。やはり年上の方は敬いませんと」

「すまんな、マスター。上級生とは即ち上官、そして上官の命令は絶対だ」

「……………!?!」

……裏切り者どもめ、覚えておけよ。

ただでさえ不利な状況に強敵が二人加わり、己は為す術なく敗北した。大した抵抗も出来ずに取り押さえられ、それを尻目に黛先輩の姿

が遠ざかり、そして角を曲がって行く。

その、直前に。

黛先輩と、セシリアとラウラが、親指を立てた拳を互いに突き出しているのを。

確かに、見た。

……………覚えておけよ。

その翌日。

IS学園は、新聞部（正確には薫子）による「井上真改復活」の報に大いに盛り上がっていた。常に凜とした態度で在り続けていた真改の沈みに沈んだ様子には、学園中の生徒たちが心を痛めていたのだ。

その真改が元の調子を取り戻したことに、誰もが喜んだ。特に井上真改ファンクラブ「真改さんと友情を深める会」、通称「真友会」のメンバーたちの喜びようはそりやもう凄いものだった。

「……………」

しかしそれは、真改にとってあまり喜ばしいことではなかった。というよりも嫌だった。元々騒がれることが苦手であり、しかも騒がれている原因は自らが晒した無様な姿に関わっているのだ。

……………ぶっちゃけ、すっげー恥ずかしかった。

「は〜い、いのち〜」

「……………」

さらに言えば、現在の真改の状態にも大いに問題があった。

現在真改はルームメイトである本音と共に朝食をとりに来ているのだが、その周りを大勢の生徒が囲んでいる。しかし誰一人として、真改たちと同じテーブルに着こうとはしない。お祭り好きのIS学園の生徒たちが、揃いも揃ってただ真改たちを眺めているだけに留めていた。

……………だというのに、その表情は幸せそうに緩みきっていた。

何故か。

「あくん」

「……………」

本音と如月社長たちを助けるために行った戦闘で、真改は右腕を負傷した。正確に言えば、治りかけていた右腕の怪我が悪化した。

大事には至らなかったものの医師は大激怒、完治するまで極力右腕を動かさないようきつく言いつけ、本音をそのお目付役に任命した。そして本音は嬉々としてそれを受けた。

そんなわけで真改は右腕を肩から吊っているのだが、しかし真改には左腕がなく、つまりは両腕を封じられたことになる。流石の真改も、これではほとんど何も出来ない。

そして、それは。

一人では食事のままならないということである。

「ほら、あくん」

「……………」

つまり現在何が行われているのかというと、両腕が使えない真改に、本音が食べやすい大きさに千切ったサンドイッチを差し出しているのだった。

「ちゃんと食べないと、怪我、良くならないよ〜?」

「……………」

真改がそのサンドイッチに口をつけないのは洋食より和食が食べたいとかそういうことではない。そんなものは本音の善意を拒む理由になどなりはしない。

問題は――

「はい、あくん」

「……………」

「二「きゃあああああああつ!!!」二」

「まさかあの井上さんが……………」

「こんなに可愛らしいことをっ!」

「本音ちゃん、グツジョブ!!」

「は、鼻血が出そう……………」

「いのつち、おいしく?」

「……美味しい……」

「てひひ。じゃあ、次をどうぞ」

「そうよ本音ちゃん、その調子っ!」

「ああ、どうせならフランク h 「黙れ、殺すぞ変態」」

「……………」

先ほどからこの調子なのである。完全に見世物だった。

(……勘弁してくれ……)

腕が治るまで、真改の心労は続きそうである。

「井上、右腕は痛まないか?」

「……問題ない……」

さて、怪我はしていても授業には当然参加しなくてはならない。

この時間は IS の自己進化機能について。それを理解しやすいように、第二形態となった己の朧月・ふたえ双重、そして一夏の白式・せっか雪花が展開されている。

「IS がパイロットとの相互理解を行うことは、以前説明したな。それは二次移行にも顕著に表れる」

説明をしているのは千冬さん。己の隣に立ち、先ずは朧月の両膝を指した。

「井上はブレードによる接近戦を得意とするが、そのブレードの間合いよりもさらに内側に踏み込まれた際、距離を取るよりも体術で応戦することが多い。この両膝に追加された小型ブレードは、それを強力にするために朧月が考えたものだろう」

千冬さんの説明に、多くの生徒がうんうんと頷いている。

「他にも、月輪は大型化し出力を増しただけでなく、月華という機能が追加されている。井上、振ってみろ」

「……………」

促され、月華を発動。月輪の刀身から眩い蒼色の光が溢れ出し、右

腕に注意しつつスラスターの勢いを載せて振り抜いた。

「わあ……」

「キレイ……」

「そう、月華の見た目は派手だ。その派手さは威力だけでなく、相手への目眩ましの意味もあるのだろう。これを目の前で振られれば多少なりとも怯ませられるし、単純に視界がかなり遮られる。学年別トーナメントで閃光弾を使っていたから、その影響だろう」

……あまり己の手の内を晒さないでもらいたいのだが。

「このように、パイロットの戦闘スタイルをより強化する進化の典型的な例が朧月だ。次にその逆、弱点を補い、穴を埋める進化の例を説明する。織斑、雪花を散布しろ」

「はい」

千冬さんの指示を受けた一夏が意識を集中する。すると白式の装甲が輝き、周囲に真白の結晶が漂い出した。

「これが雪花だ。散布したナノマシンを機体周囲に滞留させる。雪花は攻撃に対し自動で防御を行い、戦闘をサポートする。……井上、織斑に月影を撃て」

「……………」

三連装の砲身が回転し、次の瞬間に大量の散弾を吐き出した。しかしそれらは白式に当たる直前、白式を覆うように発生した光の幕に遮られ、装甲までは届かない。

「見ての通り、雪花が十分に機能している内は、並の攻撃は通用しない。この防御力の高さだけでも相当なものだが、もう一つ。織斑、雪花が弾丸を防いだ時、反動はあったか？」

「いえ、ありませんでした」

「そういうことだ。あれだけの散弾を受け止めても、その反動は機体まで伝わらない。つまり攻撃を受けても、それにより機動を阻害されることはないということだ」

この説明により、何人かの生徒は感づいたようだった。その能力の凄まじさに戦慄し、息を飲んでいる。

「これは織斑の戦闘スタイルと非常に相性がいい。なにせ一撃必殺の

攻撃力と高い機動力を持つ者が真つ正面から突撃してくるのに、いくら攻撃を叩き込んでもまるで怯まないのだからな」

「「「……………」」」」

ようやく気付いた者たちが、目を見開いて驚いている。

これはつまり、最高速で突っ込んでくる列車に拳銃で立ち向かうようなものだ。

…………想像してみても欲しい。その威圧、その恐怖、その絶望を。

「織斑の機動は世辞にも上手いとは言えん。回避もそうだが、なににより相手との間合いを詰めるのに苦労する。それを埋めるために、白式は操縦者に負担を掛けるほどの絶大な機動力でも、才能が皆無な射撃武器でもなく、最短距離を真つ直ぐに突き進むための防御力こそが最も有効だと判断したのだろう」

「「「なるほど……………」」」」

一夏の試合は、ほぼ全員が見たことがある。その内容を思い出してみれば、千冬さんの言うことにも納得出来るだろう。

「これでISの進化、その方向性と結果について少しは分かっただろう。しかし詳細な原理や仕組みなどについては、まだ多くの謎が残っている。明らかになるのはまだ大分先のことだろうな」

そこまで言って、千冬さんは厳しかった顔をさらに引き締め、重い声で続けた。

「ISは、自身をパイロットに最適なカタチに進化させる。だが勘違いするな、それは長所を伸ばし短所を補うことをIS任せにしているということではない。ISに頼りきり自分で自分を高めようとする者に、ISが応えることなどない」

そう、ISが相棒であるなら、ただ寄りかかるだけの関係など有り得ない。お互いに助け合い支え合い、そして競い合い高め合う。

それでこそ、認めてもらえる。応えてくれるのだ。

「……………」

痛みの残る右手で、隴月の装甲を撫でる。その淡く静かな銀色が、一瞬だけ、輝きを増した気がした。

(……………まだ、足りん……………)

二次移行は出来たが、しかし単一仕様能力ワンオフ・アビリティは発動出来ていない。朧月は己を相棒と認め主と呼んでくれたが、まだお互いを完全には理解し合えていない。

己の目指す境地には、単一仕様能力は必須だ。これが有ると無いとでは戦術の幅がまるで違う。己は多芸ではないので、戦い方が単調になりやすい。次の手を読まれやすいのだ。その欠点を補う要素は是非とも欲しいところである。

まあ、手の内を全て明かされてなお突き崩せぬほどの戦術というものも、悪くはないが――

(……あるいは……)

―― 本当に、そうなるかもしれない。

己の短所を補うのではなく、長所を伸ばす進化を、朧月は選んだ。「彼女」の剣を指すという己の願いを汲んでくれた。

ならば、もしかしたら。

単一仕様能力も――

(……楽しみにしている……)

……本当に、己は人に恵まれている。

この、足りぬ才能も。

皆とならば、埋められるだろう。

……夜。

場所は、寮の屋上。

消灯時間はとうに過ぎており、学園内の灯りは極僅かだ。学園自体が広大な湖の中央にあるので、街の灯りも届かない。

今、己を照らしているのは、雲一つ無い夜空に浮かぶ、星と月だけ。

「……………」

……月。

半月。

半分に、割れた月。

「……世話になったな……」

かつての相棒に、別れを告げる。不出来な主だったが、それでもあいつは、いつだって全力で応えてくれた。

「……すまなかった……」

上手く、使ってやれなかった。そのせいで、無様な最期に付き合わせてしまった。

「……………」

以前なら、こんな感傷に浸ることもなかった。ネクストとはただの兵器であり、兵器以外の何物でもないのだから。

だが隴月との対話を経て、一つ思い出した。日本に伝わる、八百万の神のことを。

——付喪神。永い時を経た器物には、魂が宿るといふ。

「……お前にも、有ったのかもしれない……」

だから、申し訳なくて。

絶大な力を持っていたあいつを、その力を、己は存分に引き出してやれなかったから。

だから、一言謝りたかった。

「……いや……」

……違うな。

あいつは、それでも最期まで付き合ってくれた。

己の望みに、己の我が儘に。

……こんな己に、最期まで。

なら、伝えるべきは。

謝罪の言葉ではなく——

「……ありがとう……」

夜空に浮かぶ半月に、笑顔を向ける。

苦手だが、それでも、精一杯の、笑顔を。

——きつと届くと、信じて。

「……さらばだ、愛刀よ……」

永い時を、共に過ごした。

多くの戦場を、共に斬り抜けた。



今の己が在るのは。

きつと、あいつのおかげだと、想うから。

「……己は、此处で生きる……」

だから、ちゃんと別れを告げたかった。

己の、決意と共に。

あの、物言わぬ相棒に。

「……安心して眠れ……」

せめて、安らかに。

己なら大丈夫。

今も、多くの仲間に囲まれている。

「……お前の後は、こいつが引き継ぐ……」

首から提がる銀色の指輪を、半月に翳す。

……今はいつが、己の愛刀だ。

まだまだ未熟者ではあるが、なに、それは己も同じこと。

上手くやっていけるだろうさ。

「月見とは、随分風流なことをしているな」

「……」

突然、背後から声がした。聞き慣れたそれは、千冬さんのものだ。

「消灯時間は過ぎているぞ……と言うべきなんだろうが、まあ構うまい」

そう言いながら、千冬さんは手に持っていた包みを掲げた。それは臨海学校の際、土産として如月社長から届けられた高級日本酒だった。

「まだ少し残っているんだが、これほどの代物を一人で飲むのは勿体無い。付き合え、真改」

「……」

千冬さんは己の隣に座ると、盃を二つ取り出した。とくとくと酒を注いで、己に差し出す。

「持てるか？」

「……応……」

まあ、これくらいなら問題ない。受け取って、千冬さんの盃と軽く

ぶつけ合う。

「乾杯。……お前の帰還に」

「……乾杯……」

小さく澄んだ音を立てた盃を唇に持つていき、一口飲む。

……ああ、美味い。

「いいものだな、月見酒も。満月でないのが少し惜しいが」

「……否……」

「うん？」

「……これでいい……」

「……そうか」

己の呟きに何を思ったのか、千冬さんは何も訊かずに来てくれた。

そしてしばらく、二人で静かに飲み続け。

「これで最後だ。お前が飲め、真改」

残り僅かとなった酒を、己の盃に注ぐ。

小さく波打つ酒の水面には、半月が写っていて。

「……これは……」

その盃を、高々と掲げる。

月に届けと言わんばかりに、高く、高く。

「……お前に……」

見ているか？

己は、此処にいる。此処で生きている。

そして、これからも——

「……今まで——」

かつて真改と呼ばれた男は、もういない。

此処にいるのは、真改ではない。

己の名は——井上真改。

「——ありがとう」

そうして。

盃に注がれた、最後の酒を。

一息に、飲み干した。

## 第40話 微笑

七月も終わりに近付いた、ある日のこと。

夏真つ盛りのIS学園第二アリーナに、輝くような白雪が降っていた。

「おおおおおっ!!」

「はあああああっ!!」

「疾っ……!」

アリーナ内、あるいはアリーナの観客席にいる者たちはその幻想的な光景に目を奪われ、そして繰り広げられている舞踏に心を奪われる。

主役となるのは三人。

紫と蒼の光を纏った銀色、眩い光に身を包む白色、全身から光の刃を伸ばす紅色。

井上真改、織斑一夏、篠ノ之箒である。

「おらあっ!!」

「ぜえいつ!!」

「……っ!」

高速で飛び回る真改に、一夏と箒が追い続ける。

真改は二人の息の合った波状攻撃を凌ぎつつ、的確に反撃を叩き込む。

数で勝り、性能においても何ら劣るところのない一夏と箒は、しかし誰の目にも明らかに押されていた。

「ああ、つたく、なんでだろうなあ! シンに負けるのはいつものことなのによ、負けたくねえなあ、箒い!!」

「まだだ、まだやれるっ!! そうだろう、一夏っ!!」

「当たたり前だ! まだまだ行けるぜっ!!」

「……その意気や良し……!!」

疲労が重くのしかかるが、それに反比例するかのように戦意が漲っていく。

ずっと昔から憧れていた、幼なじみの剣。

それが今、目の前にあるのだ。疲労など意識から完全に消え去っていた。

「うおおおおおおつ!!」

「せええいりやあああつ!!」

「……………つ!!」

何を求めるわけでもない、強いて言うなら、戦うことそれ自体が目的である戦闘。

その始まりは、約三十分ほど前に遡る。

---

夏休みも目前となった今日、俺は日課であるISの訓練を行うために、箒と一緒に第二アリーナに来たんだが――

「……………あれ? シン?」

「……………」

そこには思わぬ先客がいた。一時期見ていられないほど落ち込んでいる、先日ようやく復活した幼なじみである。

「どうしたんだよ、こんなところで?」

「……………訓練……………」

「む……………腕はもういいのか?」

「……………完治……………」

箒の問に答えたシンは、それを証明するように右腕を持ち上げる。

その腕には痛々しい傷痕が残ってはいたが、しかし確かに怪我そのものは治っているようだった。

「……………」

正直、女の子が傷痕を何でもないことのように見せるのはどうかと思うが、シンにそんなことを言っても今更である。こいつは傷痕なんてどう思われようと気にもとめないのだ。

「そっか、なら今日は軽く流すか。久しぶりだろうし、調子見て――」

「……………否……………」

「……………」

病み上がりのシンを氣遣つての言葉は、しかし本人に否定された。そして俺たちを真っ直ぐに見て――

「……勝負……」

……あー、忘れてた。

シンは普段あんまり静か過ぎるから分かりにくいだが、実は結構戦闘狂なのだ。まだ戦ったことのない俺の白式・雪花と箒の紅椿が揃って目の前にいるのだから、この言葉はある意味当然と言えるかもしれない。

それにシンは落ち込んでいる間はほとんどずっと一人でいたので、心身共に快復した今、体が疼いて仕方ないのだろう。

「……分かったよ。けどお前は病み上がりなんだから、無理は――」

ゴウツ、と。

いきなり、突風に頬を撫でられた。

「……………」

その風の発生源は、俺の目の前にいる少女。彼女はISを展開すると同時に、右腕を二度振ったのである。

その動きは、誇張抜きに言って全く見えなかった。では何故二度振ったことが分かったのかと言うと、シンの足下に風圧により地面が抉られた跡が、十字 を描いていたからだ。

そして、その剣閃の延長線上に居るのは。

俺と、箒。

「…………へ。遠慮は要らねえ、ってことかよ」

「いや、人の心配をしている余裕があるのか？ ということかもしれんぞ」

「……両方……」

「ははっ、上等おっ!!」

白式を展開し、それと同時に戦闘態勢に移行。隣を見れば、箒も俺と全く同じ行動をとっていた。

「どうせ一人ずつじゃ満足出来ないんだろ？ ……いいぜ、こっちは二人掛かりだ、いつかみたいに負かしてみろよ!」

「いつまでもお前に守られているわけにもいかないからな! そろそ

ろ私たちの力も認めてもらおうかつ!!」

「……………いざ……………」

無表情の中に歓喜を宿し、シンが構えをとる。

……………そうだ、それでこそシンだ。見ろ、あの眼を。あれ以上に綺麗な黒色が、この世に存在するものか。

「行くぜ、シン！ 今日こそ、お前に勝つ!!」

「おおおおおつ!!」

一夏が零落白夜を振り上げ、真っ直ぐに真改へと突撃する。

それに対し真改は水月を起動、月灯つきあかりによりさらなる加速を得て、その全運動エネルギーを月輪に載せて振り抜いた。

「おおおらあああつ!!」

「……………つー!」

ガギインツ!!

少し前であれば確実に一夏を吹き飛ばしていたであろうその一撃は、完全に受け止められた。大量の雪花により勢いを大きく殺がれ、十分な威力を保てなかったのである。

(……………これほどか……………!)

まるで水銀の中で剣を振っているかのような、重い手応え。接近戦においても、雪花の防御力は脅威だった。

(……………だが……………!)

真改は月輪のスラスタを全開にして一夏を押しさえ込みながら、月光を起動する。物理ブレードではない月光ならば、威力こそ減じられるが剣速が鈍ることはない。そして減じられても十分なほどの威力があり、雪花にも大きなダメージを与えられるだろう。

「疾っ……………!」

「ぐうっ!?!」

素早く振り抜かれた一撃により、一夏は体勢を崩した。その機を逃さず追撃を掛けようとした真改だが、行く手を無数の光弾に阻まれ

る。

箒の紅椿、その武装である雨月と空裂のエネルギー弾である。

「やらせんっ！」

「助かったぜ、箒！」

強敵に成長した幼なじみたちの姿に喜びを感じながら、真改は考える。さして、どちらから倒すべきか。

一夏は一撃必殺の攻撃力を持ち防御力も高く、パワーも優れている。箒と戦っている時に隙を突かれれば一瞬で倒される危険がある。

箒は機体の総合的なスペックが図抜けており、全身の展開装甲によりどんな体勢からでも精密かつ強力な攻撃をしてくる。それに晒されながらの戦闘はかなり厳しい。

ちなみにどちらも燃費が極めて悪く、朧月の機動力をフルに活かして逃げ続ければ勝手に自滅するだろうが、真改はその選択肢を考慮すら入れていなかった。

それでは、面白くない。

折角、三人揃って戦意に満ち溢れているのだ。

ならばこの戦い、存分に味わわなければ罰が当たる——！

(……愚考……！)

どちらから、倒すべきか。

そんなものは、考えるまでもなく決まっている。

(二人纏めて、叩きのめす——！)

一夏が瞬時加速を発動し、箒は展開装甲を機動特化形態へと変化させ、真改へと突撃する。

対する真改は月光と月華を起動、真っ直ぐに二人へと斬り掛かる。

「そう来るだろうと——」

「——思っていたぞっ！」

零落白夜と雨月、空裂が真改に迫る。真改から見て右手に一夏、左手に箒。

「……往くぞ……！」

真改が月輪を横薙に振る。スラスタ―と月華を最大出力で噴かし、

左から右へ、一文字に。

「ぬ……!?!」

蒼色の光が、まずは箒に襲い掛かる。その光の刃は、間合いの僅か外。箒の鼻先を掠めただけで当たるとはなかったが、しかしその極光は箒の視界から真改の姿を完全に隠した。

その直後、ほんの少し遅れて、一夏に月輪が迫る。肩を入れ大きく踏み込んだ一撃は、箒の時とは違い一夏をしっかりと間合いに捉えていた。

「ぐうっ!」

月華の光は雪花に遮られ、月輪の刃は零落白夜に防がれた。

今度は前回のように鏑迫り合いはさけ、そのまま月輪を振り抜く。勢いを保ったまま一回転、月光で箒に斬り掛かる。

零落白夜にも劣らない、一撃必殺の刃。

退がっても、回避は間に合わない。

光の剣である月光は、雨月と空裂では防御できない。

だから、箒は――

「う、おおおお!!」

「!?!」

前に出て、月光の刃ではなく、月光本体が取り付けられた右腕を。

右肘と右膝で、挟み込んで止めた。

「一夏あっ!!」

「おおおお!!」

動きを止められた真改に、一夏の零落白夜が迫る。箒も空裂のエネルギー刃を放ちながら斬撃を放つ。

絶望的な威力の攻撃に晒され、真改は――

「……っ!!」

「な――」

「――に!?!」

右足を伸ばし、箒の左手に添え。

真っ直ぐに振り下ろされていた、空裂の軌道を逸らし。

その刃を零落白夜の腹に当て、攻撃を外させた。



「疾っ……！」

絶技と言うも生温い芸等を見せ付けられ、一夏と箒が一瞬だけ硬直する。

その隙を突いて右腕を引き抜いた真改は、月輪の推力を載せた左膝を箒の側頭に叩き付けた。

「ぐあっ……！」

そのまま一回転して有りっ丈の遠心力を加え、さらに水月を起動して加速させた月輪を箒に振り下ろす。

「うあああっ!!」

「箒?!」

凄まじい重さの一撃は、膝蹴りにより体勢を崩していた箒を地面まで叩き落とした。その様を見た一夏は箒を案じつつも怯むことなく、零落白夜を翻して真改に斬り掛かった。

真改は箒がしたように、しかしそれよりもさらに大きく前に出ることで零落白夜の間合いの内側に踏み込むと、一夏の腕を絡め取る。

そのまま背負い投げの要領で、一夏を下へと投げ飛ばした。

「この程度で……！」

しかしISにとって、その程度のこととは攻撃にすらならない。すぐさま体勢を立て直し、真改に向き直り――

「な!?!」

投げた直後に急降下し、一夏の後ろに回り込んだ真改に気付いた。

「く……！」

真改は一夏の腰に右腕を回し、ガツチリと抱え込んだ。密着した状態で月影を起動、零距离から散弾の連射を浴びせる。

「ぐああああっ!!」

白式のシールドエネルギーが瞬く間に削られていく。その衝撃に意識を大きく揺さぶられ、一夏は一瞬、気付くのが遅れた。

——真改が、一夏を抱えながら、さらに急降下を始めたことに。

「一夏、逃げる！」

「!?!」

ようやく衝撃から復帰した箒がそれに気付き、一夏に警告を発す

る。それからすぐに真改が自分を目指して落ちて来ていることにも気付いて、その場から逃げようとするが――

「!? ちいつ……!」

箒の周囲に降り注ぐ散弾に、逃げ場を塞がれた。一夏に十分なダメージを与えた真改は月影を箒へ向け、残りの弾丸を一気に吐き出したのである。

月影からの攻撃がなくなったことで一夏は多少の自由を取り戻し、真改を振り解こうとする。それに対し真改は月輪を最大出力で噴出すことで高速で回転し、その遠心力で動きを封じた。

逃げ場を失った箒は雨月と空裂、全身の展開装甲から射出されるエネルギー刃で真改を撃ち落とそうとするが、真改は月華を起動、刀身から溢れる光でそれらを弾き飛ばす。

「う、お、おとおおおっ!!」

真改の拘束から逃れようと、一夏が必死にもがく。

真改を撃ち落とそうと、箒が全てのエネルギーを使い切る勢いで一斉射撃を行う。

しかしそれでも、真改を止めることは出来ず――

ドオオオオオン!!!

――箒の腹に、一夏の頭が突き刺さった。

「……決まり手が伊綱落としとか……」

「……どこの忍者だ、お前は……」

「……」

なにやら二人がぶつくさ言っている。剣で決めなかったことがよほど不満らしい。

「……けどまあ、本当にもう大丈夫みたいだな」

「ああ。……体も、心もな」

「……………」

……どうやら、まだ心配していたらしい。しかしこの二人に認めてもらえたということは、剣にも迷いは出ていなかったようだ。

(……ならば、大丈夫か……)

剣は己を映す鏡だと言う。それに迷いが無いというのなら、己自身でも気付かぬ迷いも無い、ということか。

「しっかし、悔しいなあ。また負けちまった。いつになったら勝てるんだか」

「確かに負けたが、昔のようにまるで歯が立たなかったわけではない。

……勝てるさ。いつか、必ず」

「……………」

戦闘の手応えを思い出しているのか、箒が自信と喜びを込めて拳を握り締める。

……そう、今回己は、一時とはいえ確かに追い詰められた。二人が詰めを誤らなければ、さらに危ない状況へと陥っていただろう。

……本当に、強くなった。昔は容易く退けていたというのに、いつの間にもやら、本気で応じなければ負けてしまいそうなほどになった。

それは果たして、二人の持つ才能なのか。それとも——

『——聴かせてくれ。お前を強くした、お前の——』

「……………」

……そうだな。

今なら、「彼女」の言っていたことが分かる。

この二人の強さは、機体でも、才能でもなく——

「……強くなった……」

思わずしみじみと呟いた。

……呟いて、しまった。

「……………」

まずい、と思った時にはもう遅かった。己の呟きを聞きつけた二人

は目を丸くし、次いで物凄く嬉しそうな顔になって。

「シン、今なんて言った!?!」

「つ、強くなった!?! 私たちが!? そう言ったのか、真改!?!」

「……そ、空耳……」

「嘘だつ!?!」

「……!?!」

「眼が泳ぎまくってるぞ、シン」

「お前は本当に嘘を吐くのが下手だな……」

ば、馬鹿な……己の無表情がこうも容易く見破られるとは……!

「ふ、ふふふ……そうかそうか、強くなってきてるか、私たちは……!?!」

「ようし、俄然やる気が出てきたぜ……!?!」

「……」

……まあ、調子に乗ることはないようだし、やる気も出しているようだし、問題はない……か……??

「よし、補給に行くぞ一夏! 終わり次第、また訓練だ!」

「よっしゃ、やるか! ああシン、今日はありがとうな。疲れたろ?」

怪我治ったばかりなんだから、もう休めよ」

「……」

なにやら二人で盛り上がっており、己は追い出されつつある。

……まあ、いいか。確かに最近あまり動いてなかったところからこれだけの戦闘だ、今は特に何も無いが、興奮が冷めれば何かしらの異常が出るかもしれない。今日のところはもう休んだ方がいいだろう。

「……では、あがらさあ、もたもたするな一夏!」「ああ! じゃ、そういうことで。お疲れ、シン!」……

……部屋に戻るか。

「いのっち、大丈夫そう?」

「……上々……」

アリーナを出ると、更衣室では本音が待っていた。観戦席で己たち

の戦いを見ていたらしい。

「腕、痛くない〜?」

「……平気……」

本音が己の右手を取り、その様子確かめている。特に変色したり腫れたりしている箇所は無いので、まあ大丈夫だと思うが――

「――おいで」

本音が十六夜を起動した。一機だけだが、それが己の右腕を検査し始める。

「……………」

「……………」

「……………」

銀色の球体がスキャナーのようなものを伸ばし、右腕の周りをぐるぐると回る。

……………。

……随分念入りに調べているな。そんなに信用がないか……。

「……………うん、大丈夫だね〜」

「……………重畳……………」

本当に良かった。もし大したモノでなくとも異常があれば、また右腕を動かせないように固定されたかもしれない。

そうなれば、また食堂で見世物にされる。包帯が外れるまでの間に己の精神力がどれほど削られたことか。

……思い出したくもない。

特に食堂と風呂でのことは思い出したくない。

あと黛先輩がバラまいた食堂での写真についても思い出したくない。

それにセシリアとラウラがやたらと幸せそうな顔をしていたことも思い出したくない。

そしてサラシが巻けず、生まれて初めてブラジャーを着けさせられたことも思い出したくない。

……いつそ全部忘れたい。

「それじゃ、シャワー浴びに行こつかく。洗ってあげる〜」  
「……………」

己が右腕を使えない間、本音は風呂にまで付いてきた。その時己が感じた恥ずかしきは筆舌に尽くしがたい。

だがそれももう終わりだ、今はもう一人で大丈夫なのだから。

「……………無用……………」

故に、右手をあげてそれを示す。すると本音は見る間に泣きそうな顔になった。

「……………あ……………」

「……………」

「……………そつか。そうだよね〜。もう、一人で平気だよね〜……………」

「……………」

全身から寂しげなオーラを放つ本音。それを見せ付けられた己の心に、表現の出来ない痛みが走った。

「……………いのっち、腕、治ったんだし〜。私のお手伝いなんか、いらないよね〜……………」

「……………」

……………耐えろ、耐えるんだ、井上真改。これは本音の策略だ。その証拠に見ろ、口元が我慢しきれずにほんの少しだけ震えている。

「……………うん。それじゃあ、シャワー浴びといで〜。私、一人で待ってるから〜」

「……………」

一人で、の部分強調するあたり、完全にわざとやっている。

そうだ、本音は本気で寂しがっているわけではない、ただ己「でもっと遊びたかっただけだ。」

「……………」

「行ってらっしや〜い」

だから、本音に背を向けシャワー室に入る。勿論己一人でだ。  
すると――

「……………ちえ〜」

「……………」

……聞こえているぞ。

「——それでは、一学期最後のホームルームを始める」

教壇に立つのは、サマースーツを着こなした千冬さん。

真夏の暑さを吹き飛ばすかのような覇気を身に纏い、夏休みに向けて早くも浮かれ始めている生徒たちに喝を入れる。

「お前たちも知つての通り、今年の一年生には専用機持ちが多い。これは大部分の者にとつては極めて不利な状況だ。各大会で活躍するのが難しくなるからな」

IS学園では、年間を通して様々な大会が行われる。一部の大会は専用機持ちとそれ以外を分けて行われるが、そうでないものも多い。千冬さんの言う通り、専用機持ちが多ければ、訓練機で戦わなくてはならない一般の生徒たちは不利になるのだ。

「だが逆に、これ以上のチャンスは無いとも言える。並み居る専用機持ちたちを打ち倒して優勝すれば、その者は大きな注目を集めるだろう」

だが、訓練機では専用機に勝てない、などということはない。現に己は、打鉄でセシリアに勝っている。

そしてそれにより、如月重工にも認められたのだ。

「この状況に絶望し諦めるか、奮起して努力するかはお前たち次第だ。……だが、一つだけ言っておく」

千冬さんの覇気が、更に増す。

威風堂々としたその立ち姿は、まさしく世界最強と呼ぶに相応しい。

「自分には才能がない、今回は運が悪かった——そんな小賢しい言い訳で自分を納得させる者が何かを成し遂げたという話を、私は聞いたことがない。何度打ちのめされても立ち上がり、何度挫折しても挑み続け、傷付き倒れてもなお足掻き抜く……そんな愚直な者にこそ、栄光を掴む資格がある」

千冬さんは、確かに天才だ。天賦の才があったからこそ、世界最強の座に着いた。

だが決して、才能だけでそこに辿り着いたわけではない。血の滲むような修練の果てにその境地に至ったのであり、引退した今も尚自らを鍛え続けている。

「明日からは夏休みだ。授業も訓練もないのだから、遊び呆けるのも構わん。」

……だが、心しておけ。その惰弱な発想は、自らの未来みちを閉ざすことになる、と」

浮ついていた教室内の雰囲気が一気に引き締まる。まるでこれから戦地に赴くかのような空気の重さだ。

流石に脅し過ぎたと思っただのか、千冬さんはごほん、と咳払いを一つして、僅かに表情を緩めた。

「……だがまあ、根を詰め過ぎても逆効果だ。各自適度に息抜きをするように。二学期までに、英気を養っておけよ」

「」「はいつ」「」

「それでは、ホームルームを終了する。解散っ!!」

千冬さんの号令で、皆歓声をあげながら散っていく。各々夏休みの計画を立てていたのだろう、その行動は迅速だった。

さて、己はどうするか。夏休みの予定はいくつかあるが、どれも急ぎのものではないし――

「やつほー。シンいる?」

「……………」

教室に入って来たのは鈴だった。己の姿を見つけると笑顔を浮かべ、小さな体に溢れんばかりの活力を漲らせ、歩いてくる。

「今日で外出禁止は終わりですよ? 遊びに行くわよ!」

「ちよつと、鈴さん? 真改さんはわたくしとの先約がありますのよ?」

そんなモノは一切無いのだが、平然と嘘を吐くセシリア。その顔は満面の笑みに彩られている。

「そっか、一学期の間だったもんね。じゃあ僕と出掛けようよ」



「私もお供させてもらおうか」

続いて名乗りをあげたのはシャルとラウラ。シャルは向日葵のように輝く笑顔を、ラウラは百合のように静かな微笑みを浮かべながら。

「真改、少し刀を見に行こうと思っっているんだが、付き合わないか？」

「他に趣味ねえのかよ……」

十代女子としてどうかと思う提案をしてくる箒と、それに呆れた声を出す一夏。やはり二人とも、笑っていて。

「じゃあさく、みんなで行こうよ！」

袖を余らせている両腕を大きく広げて、本音が纏める。

どんな表情をしているかは、もはや言うまでもなく。

「……そうだな……」

これだけ誘われているのに、いつまでも座っているわけには行かない。

立ち上がり、皆に向き直った時。

その瞳に映る己も、僅かに笑みを浮かべていることに気付いた。

「……行くか……」

ああ、まったく。

ここは本当に、温かいな。

微睡みにも似た幸福感に包まれながら、己は皆に連れられて、外出の準備をしに行くのだった。

## 第41話 事件

それは、IS学園が夏休みに入ってから二日目の時のことだった。  
(……金が無い……)

真改の財布は、早くも空っぽになっていた。

ことは前日、夏休み初日に遡る。

皆と街に出掛けた際、真改は心配を掛けた詫びとしてその日の食事を代を持つことにした。

したのだが――

「わあ、このクレープおいしくー!」

「……………」

特製クレープ。1800円。

「むう、これはかなりいい餡を使っているな。生地も素晴らしい……………」  
「……………」

こだわりタイヤキ。1200円。

「杏仁豆腐って、こんなにおいしかったのね」  
「……………」

秘密の杏仁豆腐。2000円。

「ほう、これが餡蜜か……………」  
「……………」

季節の果物たっぷり餡蜜。1780円。

「ああ、これは良い素材を使っていますわね」  
「……………」

女王陛下のチーズケーキ。3400円。

「うまうま〜♪」  
「……………」

ほっぺの落ちるパフェ。2800円。

「げぶ……………食った食った。美味かったぜ……………」  
「……………」

高級料理食べ放題。……………5000円。

「「「「ちそうさまでしたっ!!」「」」」」

「……………」

みんなの笑顔。プライスレス。

(…………豚になれ…………)

そんなわけで、現在の真改は金欠だった。孤児院に帰る際には何かしらの土産を持って行こうと思っていたのに、これでは帰るための電車賃さえ怪しい。

(…………仕方あるまい…………)

と言うわけで真改は、銀行に行つて金を下ろすことにした。仮にはいえ如月重工に所属している真改には、口座にそれなりの金が振り込まれているのだ。

(…………何がいいか…………)

愛する弟妹、愛してくれる義父に何を贈るべきかを考えながら、真改は外出のための私服へ着替える。

すると、真改と同居である本音がそれに気付いた。

「あれ、いのちちどこ行くの?」

「…………銀行…………」

「え?」

「…………金欠…………」

「うつ…………」

「……………」

「……………」

「…………金k 「ごめんなさい」……………」

さすがに悪いと思つてはいたのか、本音は謝った。だが食い物(と金)の怨みは恐ろしい。真改の目は据わったままだった。

「じゃ、じゃあ、私も行く〜!」

「…………奢らない…………」

「わ、わかつてるよ!?!」

「……………」

と言うわけで、真改と本音の外出が決定した。

街へ出ると、一夏にぼったりと出くわした。

「……あれ、シン？」

「……………」

「わくい、おりむーだく」

「のほほんさんも？ 二人でお出掛けか」

「……銀行……………」

「え？」

「……金欠……………」

「うっ……………」

「……………」

「……………」

「……金k「ごめんなさい」……………」

本音とまったく同じ反応だった。

「すまん、悪かった。さすがに調子に乗りすぎた。反省してる」

「……………」

「どうだかな。最後に一番高いモノを食ったのはこいつだ。」

「わ、悪かったって。そんなに睨むなよ」

「……………」

「そ、そうだ。みんなに何か買ってくんだろ？ 荷物持ちくらいはやるよ」

「……………」

「わくい、それじゃあいっぱい買っちゃうよく」

「……ほどほどに頼む」

「そんなわけで、三人で銀行へ向かう。到着すると――」

「動くんじゃねえ!!」

「うわあああ、強盗だあああつ!？」

「だ、誰か警察をつ!」

「動くなって言ってるだろうが！ ぶっ殺すぞ!!」

「……………」

——緊急事態が発生していた。

「おら、全員床に伏せろ！ 伏せるんだよっ!!」

「おいお前！ 金庫に案内しろ！ もたもたすんな!!」

「妙なことすんじゃねえぞ！ したらすぐにぶっ殺すからなっ！」

「……………」

銀行強盗だった。人数は五人、全員が銃で武装し、黒い覆面で顔を隠している。

「おかしな真似すんなよ！ 大人しくしてりやあ何もしねえ！」

「おい、ぐずぐずすんな！ 早くしろっ!!」

「は、はい……………」

一人がスタッフの頭に銃を突き付け、金庫の鍵を開けさせている。残りの四人は店内の客を床に伏せさせ、銃で威嚇していた。

ちなみに銀行に入ったばかりの己たちは——

「……………」

「わあ、強盗だ〜」

「……………」

あまりにもあんまり過ぎる出来事に、呆然としていた。

「あ!? なんだてめえら！ おい、てめえらも床に伏せてろ！ 逃げ

んじゃねえぞ、逃げようとしたら撃つからなっ!!」

「……………」

かなり時間がかかった気がしないでもないが、強盗が己たちに気付いた。やはり銃を向け、他の客たちにするのと同じように床に伏せるよう言ってくる。

「……………」

さて、どうするか。己たちだけならなんの問題も無いのだが、奴らは人質を取っている。下手な動きは出来ない。

「……………シン、どうするっ？」

「……………」

銀行内の様子をもう一度、より詳細に確認する。

人質は、見える範囲に二十人ほど。あとは奥に数人か。

強盗たちの持つ銃は、粗悪な回転式拳銃だった。装弾数は少ないが、流れ弾には注意せねば。

取りあえず、注目されている今は大人しくしておいた方がいい。

「……従う……」

「……分かった」

まずは床に伏せ、強盗の動向を窺うことにした。連中は見るからに素人だ、いずれ隙をさらすだろう。

「まだ開かねえのか!？」

銀行の奥から怒声が聞こえて来る。金庫を開けさせられているスタッフは、恐怖からか手こずっているようだ。

「急げって言ってんだろうがっ!!」

「兄貴、やべえぜ! 外が騒ぎになってる、サツが来ちまうぞ!」

「ちい、おら急げ! サツが来るまでに開かなかったらぶっ殺すからなっ!!」

それから数分して、サイレンが聞こえた。警察が来たらしい。

それとほぼ同時に、強盗のリーダーが奥から出て来た。肩から札束が詰まったバッグを提げている。

「くそっ、もう来やがったか!!」

「やべえよ、このままじゃ捕まっちゃう!」

「ちい……おい、立て!!」

「きやあああ!!」

強盗は女性客の一人を立たせ、その頭に銃を突きつける。女性客は恐怖に泣き叫んでいるが、そんなことに構う連中ではない。

「や、やめてえ! お願い放して!!」

「うるせえ、大人しくしろ! サツから逃げられたら放してやるよ!!」  
「ひいっ……!」

サイレンの音はもう随分近い。間もなく警察が到着する。

だがそれよりも僅かに早く、強盗たちは銀行を出るだろう。

警察に対する牽制として、人質を連れて。

——移動し易いように、一人だけ。

「……仕掛ける……」

「よし、行くぞっ」

銀行の出入口付近に伏せていた己たちの横を通る瞬間を見計らい、一夏と二人、同時に立ち上がる。

初撃は己から。まずは人質を取っている者を狙う。

「あ!?! てめ——」

銃を持つ手をひねり上げ、同時に側頭に蹴りを叩き込む。一撃で意識を失い、崩れ落ちる強盗。

「なにを——」

二人目。蹴りの際に振り上げていた脚で、そのまま踵落とし。脳天に直撃し、意識を刈り取る。

「このガキっ!!」

残った三人が己に銃を向ける。だが、その背後には一夏が回り込んでいた。

「せいっ!!」

「がっ!?!」

「ぐえっ!?!」

両腕で同時に正拳を繰り出す。後頭部に決まり、二人倒れた。

一夏は残りの一人に殴りかかったが——

「うおおおおっ!!」

ドンドンドンドンツ!!

「ちいっ」

拳銃を乱射され、踏み込めなかった。銃弾はどうかかわしたが、その隙に体勢を立て直された。

仕留め損ねた最後の一人は、未だ伏せたままだった本音を引っ張り起こした。そしてこめかみに銃を突き付ける。

「う、動くな! 動けばコイツの命はねえぞっ!!」

「のほほんさん……!」

友人を人質に取られ、一夏が戦慄する。

そして、人質にされた本音は——

「きゃー、こわーい。助けてーいのっちゃう」

「……………」

……放っておいてもいいかもしれん。

「おりむーでもいいやー。たーすーけーてー」

「なんか今すつげえ失礼なこと言われた気がする……」

「私を救出してー、弾除けになつてよー」

「あからさま過ぎるだろっ!」

「てめえら、ふざけてんじや——」

むにゅっ。

「……………」

突然の沈黙。

何が起きたのかと言うと、強盗の手が本音の胸に触れたのである。より正確に言えば驚掴みにしたのである。

故意ではなく、逃げられないようしつかりと抱え直そうとした結果のようだが——

「…………お？　へへ、なんだよお前、ガキのくせに結構いい乳してんじや

——」

ブチイツ!!!

と、何か切れる音が聞こえた。恐らく錯覚ではない。

「——おいで」

「!?!」

強盗からは死角となる場所に、銀色の球体が現れる。

本音が如月重工から託された多機能型整備ユニット、「十六夜」全十機の同時展開だった。その内の一機が、風が逆巻くほどに回転しながら、強盗の頬に挟り込むように突き刺さる。

「ぐはあっ!?!」

戦闘用ではないとはいえ、直径三十センチ——人の頭並みの大きさの金属球だ。ヘビー級の威力があるだろう。

その衝撃で本音の頭から銃口が外れる。そこを狙って十六夜がもう一機動き、拳銃を叩き落とした。

「な、な、なんだこれは!?!」





「ヤッダーバアアアアアアアッ!!!」

「や、やめるんだのほほんさん! 強盗のライフはもう0だっ!!」  
「……ちえく」

一夏のレフエリーストップが入り、ようやくラッシュユが止む。それと同時に、強盗はぐちゃりと崩れ落ちた。

「……うわあ……」

一夏が呻くのも無理はない。覆面を剥がれた強盗の顔は、顔というより肉塊のようになっていた。

「……のほほんさん、恐ろしい子……」

この出来事により、一夏の本音に対する印象が少し変わったことは言うまでもない。

その直後、駆けつけた警察官により強盗犯たちは逮捕された。真改、一夏、本音は事情聴取のために警察署まで行き、終わった頃には日が沈んでいた。

ちなみに何故ここまで長引いたのかと言うと、真改が無口過ぎて中々話が進まなかったこと、本音が若干過剰防衛気味だったことが理由として挙げられる。

「……結局」

「なにもできなかつたねく」

「……」

金を下ろすことも出来なかつたし、買い物も勿論出来なかつた。銀行強盗事件に巻き込まれ、解決したら一日が終わってしまったのだ。

三人は微妙に疲れた溜め息を吐きながら、IS学園への帰り道を歩いて行く。

「……明日……」

「んく?」

「……また……」

「……うん。そうだねく」

「荷物持ちやるって言ったからな。買い物終わるまで、付き合うよ」  
「おう、さすがおりむー、かつこいい〜」

「……………」

目的は、確かに果たせなかったが。

しかし、それで良かったのかも知れない。

友人たちと過ごす時間は、思っていた以上に、心地良くて。

明日も同じ温もりを感じられるのなら。それはきつと、良いことなのだろう。

いつも通りの無表情の下でそんなことを考えながら、真改は友人たちとの会話を楽しむのだった。

「……………てことがあったんだよ」

「あっははははははははは!!」

銀行強盗に巻き込まれた時のことを話したら、腹を抱えて爆笑しだしたのは鈴である。失礼なやつだ。

「笑い事じゃねえよ。大変だったんだからな、こっちは……………」

「いやだって、強盗に巻き込まれてしかも解決するだなんて、B級映画の主人公みたいじゃない!!」

「それは言うな、自覚してるから」

ちなみに、あの事件から一週間ほど経っている。事件の翌日は何事もなく買い物が終わわり、シンは先日大量のお土産を抱えて孤児院へと帰って行った。俺は二次移行した白式のデータ取りやらなんやらで、学園に居残りである。

そして食堂に朝食を食べに来たらまたまたみんなとタイミングが被ったので、一緒のテーブルで食べているのだ。

「けど中々出来ることじゃないよ。正義感が強いんだね、一夏は」

「いや、そーいうわけじゃないんだけどな……………」

シャルはそう言って誉めてくれるが、気恥ずかしくて素直に受けられない。

だって正義感だけ？ そんなこと真顔で言われたら、体が痒くなっちゃう。

「なんていうか、ほら、普段ISの馬鹿でかい銃向けられてるだろ？だから拳銃くらいじゃあまり怖くないんだよな」

「それは良くない傾向だぞ。いくら専用機持ちでも、ISを展開してない時はシールドバリアーも絶対防御も無いのだ。生身の体には、拳銃の威力でも十分な脅威だ」

「む……そ、そうだよな……」

照れ隠しに言った言葉により、ラウラに叱られてしまった。

だが確かにその通り、世界最強の兵器であるISも、展開していなければ意味がない。特に俺はここにいるみんなよりも展開速度が遅いのだから、咄嗟に展開しようとしても間に合わないこともあるだろう。

「まあ一夏さんほどの腕前なら、拳銃相手でもそうそう遅れを取ることはないでしょうが。」

……とところで一夏さん、真改さんの買い物とは？」

「ん？ ああ、あいつ最近家に帰ってなかったろ？ だからみんなに土産持って行くこうって考えたらしくて、それを買に行っただよ」セシリアからの質問に答える。俺は事前にシンから聞いていたが、あいつのことだ、訊かなければ答えないだろう。他のメンバーは知らなかったようだ。

「……あの孤児院か。優しく温かく、それでいて厳しさもある、実に良い所だったな」

「そっか、箒はもう随分長いこと行ってないんだよな。えーと、六年前だから……今箒が知ってて残ってるのは、宗太と小夜くらいか？」

あの二人は今のあそこでは最古参だ。シンがIS学園に居る間は、宗太と小夜が年長者である。他はみんな卒業してしまっただし、あとは箒が引越してから入って来たので、面識があるのは彼らだけだろう。

「いのつちのお家か。一回行ってみたいな」

「頼めば連れてってくれると思うぜ。シンだって友達のこと紹介した

いだろうし」

あそこは結構大きいから、みんなで行っても大丈夫だろう。それにあそこにあるシンの花壇はかなりの力作だ。あれだけでも見に行く価値はある。

「そうだな。折角の長期休暇だ、一度訪ねてみるのもいいな」

「ええ、今度真改さんと相談して、皆さんの都合が合う日に行ってみましょう」

「うん、僕も賛成。……あ、そうだ。ねえ一夏、そこってやっぱり、シンが小さい時の写真とかあるの?」

「ああ、あるぜ。どれも仏頂面で写ってるけどな」

「!!」

突然、セシリアとシャルとラウラとのほほんさんの眼の色が変わった。超怖かった。

「マスターの子供のころの写真か……」

「チビ真改さん……じゅるり」

「わあ、どんなだろうなく。シンって結構背が高いから、ちっちゃいシンはすごく見てみたいなく」

「うんうん、いのっちはかっこいいけど、かわいいいのっちもいいよね」

「……」

ヤバい、みんなシンの写真に興味津々だ。そして唐沢さんなら、頼めば喜んでアルバムを開くだろう。もしかしたら小夜のコレクションまで出てくるかもしれない。

実は割と恥ずかしがり屋なシンはキレるかもしれない。そしてその原因が俺だと知れば、タダじゃ済まないだろう。

「シンの写真だけじゃなくて、一夏のもあるわよ」

「!?!」

「ああ、確かに何度か一夏も一緒に写っていたな。あれがずっと続いていたのなら、結構な数があるんじゃないか?」

「えーっと……どうだろう、百枚くらいか?」

「!!ひゃ、ひゃく!?!」

「一夏の写真がそれだけあるってことは……」

「マスターの写真はそれ以上か……!」

「百枚……一夏さんと真改さんの写真が、百枚……!」

「これは、是非行かねばなりません」

希望だったのが決定に変わるのが分かった。もはやどうしたところで、彼女たちを止めることは出来まい。

「しかしそれほど付き合いですか。その孤児院の方たちとは随分仲が良ろしいんですね、一夏さんは」

「俺だけじゃない、千冬姉もあの人たちには昔から世話になってる。何度も遊びに行ってるしな」

「き、教官も？ まさか、教官の写真もあるのか!？」

「ああ、数はあんま多くないけどな。高校時代のとかがあった筈だぜ」

「おお……!!」

「家族ぐるみの付き合いってやつだね。素敵だなあ」

「家族ぐるみつつーか、家族みたいなものだよ。少なくとも俺はそう思ってる」

「おお、ホントに仲がいいんだね」

「……まあ、ずっと良かったわけじゃあ、ないんだけどな」

「「「「?」」」」

思わず呟いた俺の言葉に、全員が訝しげな顔になる。

この場で唯一事情を知っている鈴だけが、沈痛な面持ちをしていた。

「……じゃあ、今度みんなで行くか。シンに案内頼まなくても俺は場所知ってるし、なんならシンに黙ってサプライズで行くってのも——」

と、そこで。

俺の携帯が鳴った。

「うん？ 誰から——って、宗太か。噂をすれば影ってやつだな」

孤児院の料理担当からの着信だった。

宗太からの電話自体は、シンの様子なんかを訊きにたまにかけてくるので珍しいことじゃない。

だから俺は、特に不思議に思うこともなく、その電話を取った。  
「もしもし、宗太？　なんか『い、イチ兄かつ!?　大変なんだ!!』……  
どうした？　随分慌ててるな」

電話越しの宗太の声は、かなり切羽詰まったものだった。  
あまりに大声だったので、他のみんなにも宗太の声が聞こえたのだ  
ろう。鈴のジエスチャーに従い、みんなにも聞こえやすいように携帯  
をスピーカーモードにする。

『だから、大変なんだよっ!!　シン姉が——』

「——え？」

なに？

シン？　シンが、どうしたって？

突如告げられた名前は、予想外のモノではなかったが。  
それを伝える声からは、何故かひどく不吉な気配がした。

「……シンが、どうしたんだ？」

『シン姉が、シン姉が——』

そして、全員が息を飲みながら。

続く言葉を、待った。

『シン姉が——』

——お見合いすることになったんだよっ!!!』

「「「「「「……………」」」」」」」

「「「「な、なんだってええええええええええつ  
!!!?!?」」」」」

う。  
ちなみにこの絶叫は、広大なIS学園の隅々にまで響き渡ったとい



第42話 OPERATION OMIABR  
EAK（ブリーフィング編）

「ミッションを説明する」

真改の義弟、宗太から驚愕の情報を手に入れた一夏たちは、場所を一夏の部屋に移し作戦会議を行うことにした。

ブリーフィングを行っているのはドイツ軍最強の特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」の隊長を務める、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐である。

「お見合い開始予定時刻は、本日のヒトヒトマルマル。作戦領域はここ、高級料亭「いささぎ」だ」

「この短時間でよくそこまで調べたな。宗太はお見合いがあることしか知らなかったというのに」

「ふん、この私が率いる精鋭部隊、「シュヴァルツェ・ハーゼ」を舐めるなよ。我らの情報収集能力を持ってすれば、この程度は朝飯前だ」「もう朝ご飯終わってるけどね」

「いささぎは完全予約制で、当日申し込んでも間に合わん。だが買収とハッキングにより、我々全員分の予約を確保した。潜入は問題ない」

「流石は特殊部隊、やることが違うわね」

「当然だ。目的達成のために手段を選ぶ余裕があるほど、戦場は甘くない」

突っ込み所が有りすぎる会話を大真面目にしながら、ブリーフィングは尚も続く。

ラウラが手に持っている端末を操作すると、空間投影型ディスプレイに地図が表示された。

「これがいささぎの見取り図、及びいささぎ周辺の地形だ。各人、頭に叩き込んでおけ」

「狙撃に適しているのはこのポイントですわね」

「落ち着け、狙撃は最後の手段だ。先ずは相手を見極めなくてはなら

ん。……敵なのか、味方なのかをな」

「敵に決まっていますわ。先手必勝、サーチ・アンド・デストロイ見敵必殺ですわよ」

「セシリア、気持ちは分かる。皆の想いもお前と同じだ。だが作戦に私情を持ち込むな。それはどんな強敵よりも厄介な障害となる」

「そもそも作戦自体が私情によるものであることを、この場の全員が完全に忘れ去っていた。」

「地形は把握したか？ それでは敵性戦力の説明に移る」

「さつき敵か味方か見極めるとか言ってなかったか？」

「敵の主戦力はこの男、如月皐月だ」

「……え!? 如月!?!」

あまりにも予想外過ぎるその名前に驚愕する一同。ラウラも忌々しげに顔をしかめながら、しかし声色だけは冷静にブリーフィングを続ける。

「ああ。この男はあの如月重工社長の従兄弟だ。歳は離れているが」

「……あ……悪夢だ……」

「まったくだな。だがいくら絶望的な状況だからといって、それを嘆いている暇はない。たとえ僅かでも、希望がある限り我々は前に進まなければならん」

「ラウラ……うん、そうだね。僕たちが諦めちゃダメだよ」

「その通りだ。……それでは、如月皐月の詳細に入る」

ラウラが再び端末を操作すると、ディスプレイに若い男の写真が映し出された。

「……けっこうハンサムじゃない」

「如月皐月、年齢26歳、身長186センチメートル、体重75キログラム。東京大学を首席で卒業し、現在はクレスト・インダストリーに勤務、早くもプロジェクトを一つ任せられ、数日前に成功させた出世頭だ」

「クレスト・インダストリーって、超一流企業だよ……」

「入社するだけでも相当なモノだが、この若さで既に頭角を現しているか……」

「エリート中のエリートですわね……」





その目尻には、全身から溢れる覇気には似合わぬ、涙が。

「本音は私にとっても大切な友人だ。かつての仕打ちを謝罪した時、彼女は笑って私を赦してくれた……！」

「……」

「今でも鮮明に覚えている。あの笑顔の眩い輝きを、その温もりを！

そして本音は私の手をとり、優しく包み込んで、日溜まりのような声でこう言ったのだっ!!」

『これで仲直りだね。じゃあ次は、お友達になろう？』

「分かるかつ、その時私がどれほどの衝撃を受けたか、どれほど救われたかつ!! あの瞬間から、本音は私の親友となったのだ……!!」

「ラウラ……」

ラウラの涙は止まることなく、滝のように流れ続ける。だがそれすら意に介さずに、ラウラは魂からの言葉を続けた。

「その本音が倒れた。見るも無惨な傷を負って。だが眼を逸らすな、彼女の姿から。そして聴け、その言葉をつ!! 本音はこれほどまでに傷付いても、尚マスターを案じている……！」

「あ、おかえり〜いのっち。今日はちよつと遅かったね。え?

剣道部行ってきたの? それじゃあ試合してきたの? なんだ

言ってくれば応援に行つたのに、もう水臭いなく。それじゃあ

シャワー浴びといで。あ、私も一緒に入ろつかなく。え? ダメ?

もう〜遠慮しないでいいのに、ほら背中流してあげるから。え

? 無用? ぶ〜ぶ、ちよつとくらいいいじゃん、もう、いのっち

は恥ずかしがりやさんだなく。あ、それじゃあ私が背中流してもら

おつかなくあはははははははははははははははははははははははは

「本音……」

「そこまで、シンのことを……」

「そうだ、本音にとつてマスターはただのルームメイトではない。互いに心を許し合い、鋼が紙切れに思えるほどに固い絆で結ばれた親友同士なのだ。」

その本音が倒れた。志半ばで、多大なる無念を遺して。なら我々がすべきは、その本音の周りに蠅のように集り、ただやかましく嘆くこ

とか？」

「……いや、違う。そんなんじやねえ、俺たちには、やらなきゃならぬいことがある」

「そうだ、倒れた者を悼み祈りを捧げるのは後だ。それはしつかりとした場を設け、厳粛な儀式の下に行われるべきだ。戦場という穢れた場でやるべきことではない」

ちなみに一夏の部屋はかなりすっきり片付けられており、穢れとは無縁である。

「では今すべきことはなんだ？ 戦場における手向けとはなんだ？」

……決まっている。作戦成功、即ち勝利の報告、ただそれだけだ。倒れた者を敗者にするなど許されない。あいつは勝利の為の礎となったのだと、あいつがいたから私たちは勝てたのだと、いつかそう語り継げるよう、全力を尽くすことだけだ」

「ラウラさん……」

「それでも諸君らがまだ泣き足りないというのなら、それも構わん。赤子のように泣いている。負け犬のように鳴いている。

……だが、私は戦う。たとえ一人でも、戦い抜く。刺し違えてでも、本音の無念を晴らしてみせる。それが本音の友人として、真友会の同志として、私が出来る唯一の手向けだからだ」

「……そうだな、その通りだ。俺たちが間違ってたよ、ラウラ」

「ああ。仲間の墓前に供えるべきは、敗北の涙ではない。勝利の酒だ」  
「……ごめんなさい、本音さん。今はあなたを置いて行きます。です  
が必ず、真改さんを連れ戻してみせますわ……！」

「誓うよ、本音。僕らは最後の一人まで、全身全霊を懸けて戦い抜くつて」

「さあ、ブリーフィングを続けて、ラウラ。情報を制するものが戦を制す、でしょ？」

「うむ。それではいよいよ、作戦の概要に入る。一言一句聞き漏らさな、質問及び意見のある者は拳手しろ。そして全て理解し、全て記憶しろ。それが——勝利への、第一歩だ」

「「「応っ!!」」」」

「それでは先ず、役割分担からだ。目標への接近は、一夏と鈴に任せ  
る」

「へ？ 俺たち？」

「マスターは気配の察知能力に優れている。並の者では近付くことも  
出来ん。だがお前たちはマスターの癖を熟知している。それは大き  
なアドバンテージだ」

「なるほど、確かにシンが周りを警戒する時のパターンなんかは、ある  
程度は知ってるからね」

「待て、それなら私も知っているぞ」

同じ幼なじみなのに自分だけ外されたからか、それとも一夏と鈴の  
ペアを危惧してか、箒が待ったをかける。だがそれを、ラウラは冷静  
に諫めた。

「箒、確かにお前もマスターの幼なじみだが、少々ブランクが空き過ぎ  
ている。お前の力を疑うわけではないが、不安要素は極力排除しなけ  
ればならない」

「……分かった。ここは引き下がろう」

これにはラウラも驚いた。てつきり箒はもつとごねると思ってい  
たからだ。

「ほう？ 随分物分かりがいいな」

「作戦に私情は禁物なんだろう？ 勝利のためだ、仕方ない。……頼  
むぞ、一夏、鈴」

「……任せとけよ」

箒の信頼の眼差しに、一夏は力強く頷いて答えた。箒の頬がちよっ  
と赤くなつたことには気付かなかつたが。

「相手はあのマスターだ。最大限注意し、必要以上には絶対に近付く  
な。息を殺し、足音を殺し、気配を殺し、周囲に溶け込め。背景やオ  
ブジェクトだけではない、他の客たちさえも利用しろ。森の中なら  
ば、木の葉も隠しようがあるだろう」

「わかった、任せなさい」

「ガキの頃にシンとの隠れん坊で鍛えた隠行、見せてやるぜ」

「隠れるのに見せてやるのはこれいかに、とか言わないよね？」

「……………言わねえよ」

シャルの先制攻撃により出鼻を挫かれた一夏はしょんぼりした。

「作戦前に士気を下げるな。……二人はマスターに気取られないギリギリの距離から動向を窺い、会話の内容を逐一報告しろ。相手の人格を見極めるためには最も重要な役割だ、しくじるなよ」

「そういえば、警戒するのはシンだけでいいのか？ 相手の方は？」

「如月皐月は武術を修めてはいない。マスターが気付かない気配に、この男が気付くとは思えん。だが視界には入るなよ、如月皐月本人には怪しまれなくとも、如月皐月の瞳に映った姿からお前たちに気付くくらいのことはやってのけるぞ、マスターは」

「了解、気をつける」

そんな馬鹿なと思うかもしれないが、皆の中での真改はほとんどビツクリ人間という認識であった。

「では次、箒とシャルロットは周囲の警戒を行え」

「周囲？」

「マスターたちからは隠れられても、店内にいる全員の目からは隠れ切れない。客や店員に行動を怪しまれれば、そこからマスターに感づかれるおそれがある。それを防ぐために、一夏と鈴のサポートをしてくれ」

「なるほど、要は見張りだね」

「そういうことだ。細かいことにも気が回るシャルロット、長く剣道を続け勘が鋭い箒、お前たちにしか出来ない任務だ」

「……分かった。全力であたらせてもらう」

そんな遣り取りを眺めながら、ラウラも人を乗せるのが上手くなったなーなんてことをシャルロットは思った。

「最後に、セシリア。私と一緒に来い」

「役割は？」

「私は後方から状況全体を見渡し、全員に適宜指示を出す。そしてお



前は私が指定するポイントに着き、準備しておけ」

「なんの準備ですの？」

「決まっている、狙撃だ。如月皐月が不埒な真似をした場合——構わん、射殺しろ」

とんでもないことをさらりと云つてのけるラウラ。最後の手段は割と早い段階で実行されそうである。

「——お任せを。必ずや、一発で仕留めてご覧に入れますわ」

そしてセシリアは、瞳を潤ませ片手を胸に当てながら、うっとりとした様子でそう答えた。その姿はとても十代とは思えないほどに妖艶だった。

「全員、各々の役割は把握したか？」

「……「応っ!!」「」」

「いいか、この作戦は一人一人が自らの役目をまっとうするだけでなく、全員が全員の役目を理解しお互いの穴を埋め合わなければ、成功は有り得ない。そして我々に、失敗は許されない」

ラウラの言葉に全員が表情を引き締める。その身体から発せられるオーラは、まさしく軍人のそれであった。少佐の階級は伊達ではないと、声に出さずとも全員が感じていた。

「最終確認を行う。ミッションの目的は、我がマスター、井上真改のお見合いの偵察。お見合い相手、如月皐月の人格を検証し、マスターに相応しくない俗物であった場合はお見合いを妨害、それ以前の下衆であった場合は対象を撃滅する。」

……総員、認識に相違はないか？」

「……「サー、イエッサー!!」「」」

特に練習したわけでもないのに、全員ビシッと敬礼が決まった。

ちなみに「サー」という呼称は男性に對し用いるものなのでこの場合は適さないが、そこは雰囲気である。

「……マスターはどう鼻肩目に見ても恋愛経験豊富とは言い難い。だからと言ってクズに騙されるほど愚かでもあるまいが、それでも万一ということがある。我々のサポートが必要だ」

この場にいる全員も恋愛経験などほとんど無いが、それを突っ込む

者も皆無であった。

ボケばかりが集うブリーフィングは、ノーブレーキどころかアクセルを踏み抜いているかのように際限なく加速しながら、明後日の方向に突き進んで行く。

「皆も知っている筈だ。臨海学校の折、我々が無理矢理に聞き出した、マスターが好んでいる者のことを」

その時一夏はその場に居なかったが、後に皆から聞いている。

真改の、好きな者は「故人」という言葉を。

「どのような人物だったのか。どのような関係だったのか。……マスターの言葉からは、詳細までは分からない。だがあの様子から、マスターが今も尚その者を想い続けていることは容易に想像出来る」

「ええ……あの時の真改さんは、とても悲しそうでしたわ」

「いつ知り合ったのかも分からないけど、シンはそいつのことが本気で好きだったんだな」

「私も、そんな話は聞いたことがなかったが……」

「けど、シンは中学では結構モテてたのに一度も付き合おうとはしなかったわよ。何人かはそれなりに仲がいいヤツもいたのに」

「……きつと、すごく一途なんだよ。シンらしいね」

事實は想像の枠を遥かに超越した内容なのだが、それを知る者はいない。

「マスターの想いを穢すことだけはあってはならない。マスターが何故今回のお見合いを受けたのかは不明だが、しかし如月皐月のプロフィールを見る限り、無理矢理お見合いの場に引っ張り出すことも可能だろう。」

「……許せるか？　こんな非道が」

「」「否っ!!」「」

「私も同じだ。許せる筈がない。ならば我々がすべきことはなんだ？　大恩あるマスターのために、我々がしてやれることはなんだ？」

「決まってるだろ。……シンを、守るんだ」

「やらせはせん。たとえ、如月重工と全面戦争になろうともな」

「シンにお見合い話持ち掛けるってのに、このあたしを通さないなん

て良い度胸じゃない」

「真改さんのためならば、わたくしはマクミオン大尉さえ超えられま  
すわ」

「シンは僕を助けてくれたし、色々なことを教えてくれた。いい加減、  
恩返しをしないと」

「そうだ、我々のすべきことはただ一つ、井上真改を守ること。」

……マスターがあの変態の親戚になることだけは、なんとしても防  
がねばならん」

そう、如月皐月が如月社長の従兄弟であるということとは、万一真改  
と結ばれた場合、想像するだけで怖気が走るような事態になるのだ。

全員が全員、それを危惧しているのだった。

「いいかつ！ 我々に退却は許されぬ！ 何故なら我々の後ろに  
は、命に代えても守らねばならぬモノがあるからだっ!!」

今までで一番の大声を出すラウラに、全員が居住まいを正す。キ  
リツとした闘志に満ち溢れる眼で見据えているのは、これより赴く戦  
場、そしてそこに待ち受ける怨敵である。

「退がっても死ぬ！ 進んでも死ぬ！ ならば一步でも多く前に出て  
死ぬ!! 奴らに教えてやれ、我らの命は奪えても、魂まで穢すことは  
かなわぬとなっ!!」

夏の暑さに頭をやられたとしか思えないテンションで、ラウラの演  
説は続く。

「倒れた者は置いて行け！ たとえそれが愛する者であってもだ!!」

その屍を道とし、ただひたすらに前へ進め！ 前へ！ 前へ!! 前  
へっ!!!

そして誰か一人でもいい、敵の懐へ辿り着き、その牙を喉笛に突き  
立ててやれっ!!!」

「!!」「おおおおおおおっ!!!」「!!」

近くの部屋から苦情が来そうなくらいの怒号だったが、みんな怖  
がって部屋に近付こうとさえしなかった。

故に、この狂行を止める者は誰もおらず。

「——往くぞっ!! 総員、出撃っ!!!」

「「「サー!! イエツサー!!!」」」

最後まで方向性を間違えたまま、身勝手な私情による作戦が開始された。

第43話 OPERATION OMIABI  
BRAK (エンゲージ編)

『各員、報告しろ』

『サイファー、配置に着いた』

『ピクシーも同じくよ』

『こちらシヤムロック、準備OKだよ』

『タリズマンだ、いつでも行ける』

『アーチャー、そちらはどうだ』

『問題ありませんわ、ブレイズ』

『よし、全機オンラインを確認。——これより、状況を開始する』

高級料亭に相応しい衣服に身を包んだ面々は「いささぎ」に到着すると散開し、各自の持ち場に着いた。周囲には一切怪しまれず、しかし風のように素早く。その動きは熟練の特殊部隊員でも出来るかどうかというレベルだった。

『ターゲットが到着するのは20分後の予定だ。だが連中は素人、数分の誤差を考慮に入れろ』

『『『『了解』』』』』

『既に戦闘は始まっている。店内、及びその周辺の人物たちを記憶し、行動パターンを把握しておけ』

『『『『了解』』』』』

作戦行動中の会話は周囲に声が漏れるのを防ぐため、各自が所有する専用機のプライベート・チャンネルで行われていた。ちなみに法律に抵触する。

『タリズマン、シヤムロック。店内に不審な人物はいるか?』

『今のところ確認できない。全員素人の動きだ』

『こっちも、特に妙な装備とかは見当たらないよ』

『店外は?』

『仕草、視線、体格、全て確認しましたが、警戒すべき人物は居ません』

わ』

『よし、ここまででは予定通りだな。だが油断するな、上手く隠れているだけかもしれないし、これから増員される可能性もある。各員、このまま偵察を続ける』

『』『』『了解』『』『』

『相手はあの如月だ、何も仕掛けて来ないなどということがある筈がない。警戒を怠るな、どんな些細なことでも報告しろ』

『』『』『了解』『』『』

そんな調子でいささぎの内外を見張ること十数分、いささぎの前に一台の車が停まった。

その中から、若い男が一人降りてくる。

『アーチャーからブレイズへ、ジョーの到着を確認。繰り返します、ジョーの到着を確認』

『ブレイズ了解。アーチャー、ジョーの様子は情報通りか？』

『ここから見る限りでは。容姿もそうですし、武術を修めている動きではありませんわ』

『よし、ジョーの姿を撮影し、全員に送信しろ。終了後、再び監視に戻れ』

『アーチャー了解』

セシリアはISの機能を使って如月臯月を隠し撮り、その画像データを全員に送信した。隊員たちの視覚に直接映し出されたその姿は、スラリとした長身に仕立ての良いスーツを着込み、黒髪を丁寧に撫でつけた美青年である。

『……ムカつくくらいカッコいいな』

『サイファー、容姿に騙されちゃダメよ。コイツも変態に決まってるわ』

『なにせあの如月だからね。いくら警戒しても、し過ぎるってことはないよ』

私情と偏見と先入観に満ち満ちた会話だが、やはり突っ込む者はいなかった。

『！こちらアーチャー、アンの到着を確認！ 繰り返します、アンの』

到着を確認！』

そんなことをしている内に、いささぎの前にもう一台、車が停まる。事前の情報からそれが真改の乗る車であると知っているセシリアは、興奮のあまり真改本人を確認する前に報告した。

実際に車の後部座席から、真改が降りて来たのだが――

『……………』

『アーチャー、どうした。アンは視認出来たか？』

『あ……………』

『アーチャー、報告は正確に行え。アン様子はどうか？』

『……………美しい……………』

『『『『は？』』』』

『……………画像を……………送信しますわ……………』

セシリアは呆然としながらも、なんとか自分の任務を遂行する。写真を撮影、そのデータを全員に送信した。

すると――

『『『『……………美しい……………』』』』

全員セシリアと同じ反応だった。

車から降りて来た真改は、真っ白な着物姿だった。

純白の生地には花の絵柄が派手にならない程度にあしらわれており、それを纏める腰帯は涼やかな青色。

普段は腰まで真っ直ぐに下ろしている黒髪は後頭部で結い上げられ、瑠璃色の簪で飾られている。

口紅さえしたくない顔にはうつすらと化粧が施されており、目つきの鋭さを損なわないままに冷たい美しさを纏っていた。

車から降りた際に下駄がアスファルトと触れ合うことで、カラんと音が鳴る。

その音に振り向いた通行人たちが、揃って息を呑み、硬直した。

――日本刀は、刀剣として優れた威力を持つだけでなく、装飾に依らぬ刃の美しさだけで、美術品としても極めて高い評価を得ている。

――それを体現しているかのよう。井上真改は静かに、控えめに、それでいて揺るぎなき存在感を持って、そこに佇んでいた。





数時間前、日本国内某所にて。

「諸君。僕は井上君が好きだ」

とんでもねえことさりとカミングアウトしやがったのは、誰あるう如月社長である。

「諸君。僕は布仏君も好きだ」

ちなみにこの男の言う好きとは、世間一般で言う親愛の感情ではない。

「諸君。僕は本×真が、大好きだ」

もつとおぞましい、常人には理解出来ないナニカである。

「戦ってるのが好きだ 照れてるのが好きだ 笑ってるのが好きだ

イチャイチャしてるのが好きだ 落ち込んでるのが好きだ 「秘書規

制」が好きだ 怒ってるのが好きだ 困ってるのが好きだ 「秘書規

制」が好きだ」

そして如月社長の前にずらりと整列しているのは、如月重工でも選りすぐりの精鋭たち。

何を基準に選りすぐったのかはご想像にお任せする。

「試験会場で 教室で 自室で 「秘書規制」で アリーナで 海上で

空中で 砂浜で 「秘書規制」で 社内で この地上で行われるあ

りとあらゆる井上君が大好きだ」

日本語がおかしいとかアンタ頭大丈夫かとか言う者は一人もいない。

何故ならば、ここに居る者たちは皆どうかしているからだ。

「IS学園の試験会場で初めて見た井上君が好きだ。

元日本代表候補生の山田真耶を相手に必死に食い下がる姿には心がおどる」

如月社長は自らが率いる社員たちに、堂々と語り掛ける。

「イギリス代表候補生のセシリア・オルコットと戦う井上君が好きだ。

訓練機で専用機に打ち勝った時などは胸がすくような気持ちだった」

如月社長は自らの意志に続く部下たちに、滔々と言葉を紡ぐ。「所属不明ISのビーム砲撃を切り裂いた瞬間が好きだ。」

恐怖で動けない幼なじみの前に城壁の如く立ちふさがる様など感動すら覚える」

如月社長は自らの信頼する仲間たちに、粛々と声を投げる。「学年別トーナメントでの戦いなどはもうたまらない。」

敵を前に自らの無力を嘆き、それでも決して諦めようとはしなかった織斑君に手を差し伸べたのも最高だ」

如月社長は自らと想いを同じくする同志たちに、朗々と謳い上げる。

「井上君と布仏君が「秘書規制」で「秘書規制」を「秘書規制」し「秘書規制」が「秘書規制」時など「秘書規制」すら覚える」

社長秘書は自らに課せられた職務を、今日も黙々と遂行する。「軍用IS「銀の福音」に単身挑む井上君が好きだ。」

ボロボロになりながらも戦い続け、それでも力及ばず倒れる様はともとても悲しいものだ」

如月社長は自らが知る極秘事項を、ぺらぺらと喋り続ける。

「攻め込んで来た「亡国機業」を迎撃する井上君が好きだ。」

本来は我々の役目であることを井上君任せにしなくてはいけないのは屈辱の極みだ」

如月社長は自らの失敗だったことを棚に上げ、面の皮の厚さを見せて付ける。

「諸君。僕は井上君を望んでいる。諸君。僕に付き従う如月重工社員諸君。君たちは一体何を望む？」

あまりにも意味不明な言葉であるが、しかし如月重工社員たちは社長の言っていることを言葉ではなく心で理解した。

「更なる井上君を望むか？ 情け容赦の無い剣鬼のような井上君を望むか？ クールとデレの限りを尽くし、三千世界の鴉を萌殺す、可愛らしい井上君を望むか？」

ガガガガッ!!

社員たちは一斉に靴の踵を揃え、まるで地鳴りのように、社長に呼応する。

「「「いのっち!! いのっち!! いのっち!!」」」

その轟音を全身で受け止め、吸収し、更なる力に変えて。

如月社長は、部下たちの意思をただ一点に纏め上げる。

「——よろしい、ならばいのっちだ。我々は膨大な妄想力を炸薬に今まさに打ち出されんとするパイルバンカーだ。だが半年もの間ただ眺め続けるだけだった我々に、ただの井上君ではもはや足りないっ!!」

眺めるだけどころか様々な手出しを続けて来たのだが、やはりそれに突っ込む者はいない。

「ビッグイベントを!! 一世一代のビッグイベントをっ!!」

我々は僅かに一社、千人に満たぬサラリーマンに過ぎない。だが僕は諸君が万夫不当のド変態であると信仰している。ならば我らは諸君と僕で総兵力二千万の犯罪者予備軍となる」

ちなみにカウントは如月社長と網田主任が五百万ずつである。

「我々を変態と蔑み嘲笑っている連中に目に物を見せてやろう。自分はまだともだと思ひ込んで安心している奴らに思い知らせてやろう。」

連中に変態の意味を思い知らせてやる。連中に我々がただの変態ではないと思ひ知らせてやる。

如月重工には世の常識が通用しないことを思い知らせてやる。一千人の社員の作品で、世界を如月色に染め上げてやる」

如月社長は、一体どこを目指しているのか。

彼はその目で、一体何を見据えているのか。

理解出来る者が居るとしたら、それはきつと——

『如月重工代表取締役社長より、全社員へ』

「OPERATION COUNTER OMI AI BREAK——  
——状況を開始せよ」

「——往くぞ、諸君」

以上が、如月重工の朝礼の様子である。

「はじめまして、井上さん。僕が如月臯月です」

「……………はじめまして……………」

ついに始まった井上真改と如月臯月のお見合い。通常お見合いには世話人という仲介役が立ち会うものだが、お互いの世話人が若い二人に任せようという合意の元、同席を控えている。

そんなわけで一對一のガチンコ勝負となり、先ずは臯月が見掛けの印象を裏切らない丁寧な物腰で、真改に話し掛ける。

「今回はこんなことに付き合わせて申し訳ない。兄さんがどうしてもとしつこくて。十代半ばの女の子が十歳以上年上の男と話してもつまらないだろう、と言ったんだけれど」

「……………そんなことは……………」

「けど、驚いたよ。聞いていたよりもずっと綺麗だ。僕にとっては、嬉しい誤算かな」

「……………どうも……………」

「あはは、緊張してる？ 実は僕もなんだ。女の子と話す経験なんて、あまり無くて。お見合いだって初めてだし」

「……………」

とりあえずは無難な立ち上がり。言葉の通り臯月の表情も若干固く、緊張していることが見て取れる。それが逆に女慣れしていない印象を与え、プラスに働いていた。

「……………まいったな、どんなことを話せばいいのかわからない。いくつか考えて来た筈なのに……………」

「……………」

「うくん……………ああ、そうだ。井上さん、ご趣味は？」

「……………剣を……………」

「剣？ 剣道かな、それとも居合いとか？」

「……剣術……」

「剣術か。あまり詳しくはないのだけれど、実戦向けなのが剣術なんだっけ」

「……概ね……」

「そうか、なるほど。道理で」

「……?」

「いや、井上さんは随分と綺麗な歩き方をするから。なにかスポーツをしてるにしても、あんな風には歩けないだろうしと思ってたんだ。けど剣術なら納得だ。武は舞に通ず、という言葉は本当だったんだね」

「…………」

誉めまくりだった。しかし皐月に気取った様子はなく、思ったことをそのまま口に出しているようだった。

普段友人たちから良く誉められる真改だが、初対面の者にここまで自然に誉められた経験はない。しかも皐月は真改の左腕について意識的に無視しているわけではなく、ただ真改自身に対する感想を述べているのだと真改は感じた。

予想と大きく違う状況に、無表情のまま戸惑う真改。それをどう受け取ったのか、皐月は少し恥ずかしそうに笑いながら、真改に訊ねた。「ごめん、僕ばかり質問してしまって。井上さんも、僕に何か訊きたいことはあるかい?」

「…………」

早めのタイミングでインターバルを与えられ、真改はどうか心を落ち着けた。そして考える。何か無難な質問はないものか――

「……何故、クレストに……?」

とりあえず、気になっていたことを訊いてみることにした。

従兄弟が会社を、それも世界的に有名な大会社（その性質はともかくとして）を経営しているのに、何故わざわざ別の会社に就職したのか。

話を聞いている限りでは仲も良さそうなのに、一体何故。

「確かに兄さんには誘われたんだけど。そうすると、僕は社長の親族

になる。それは多少なりとも、社内での僕の立場に影響する。……なんて言うか、そういうのが嫌でね。兄さんはあんな人だけど、間違い無く天才だ。兄さんに守られていれば楽なんだろうけど……僕だつて男だ。ちつぽけながら、意地がある。自分の力で、社会に挑戦したかったんだ」

やっぱり兄さんにはかなわないけどね、と最後に付け加え、皐月は照れくさそうに笑った。その笑顔には、年齢にそぐわぬ少年のような輝きがあった。

『……すつげえまともだな……』

『ていうか普通に好青年じゃん。なにあれ、あれでまだ彼女いないの？ どんだけ奥手なのよ……』

『あれがああの如月社長の従兄弟だと……？』

『……まあ、考えてみれば当然だな。あんな変態が一族単位で存在したら、世界なぞどうの昔に滅んでいいる。あの社長だけが突然変異体なのだろう』

『優秀さは遺伝みたいだけどね』

『しかしこのままでは、恐れていたことが……』  
そう、如月皐月の話を聞いていた隊員たちは、皆揃ってティンと来た。

礼節と思いい遣りのある態度。

相手と真つ直ぐに向き合う姿勢。

安易に楽な道へと進むことを拒み。

なんの役にも立たないと分かっているながら、男の意地を持ち続け。たとえ勝てないとしても、ただ黙って負けることだけは拒絶し。そしてその在り方を、誰に言われるでもなく自らの意志で貫く。

——あれ？ これって真改の好みじゃね？

『『『……これは……マズイ……』』』』』

ちなみに人物としては確かに真改の好みではあるが、異性としては全くの別問題であるということには誰も気付かない。真改が一夏と性別を越えた友情を結んでいることを考えれば分かりそうなものだが、しかしそんな冷静さはとつくのとうに失われていた。

『クソ、予想外の展開だぜ……ブレイズ、どうする?』

『こちらアーチャー。ポイントを移動、狙撃可能地点に到着しました。ブレイズ、射殺の許可を』

『待て、アーチャー。それは最後の手段だと言ったただらう』

『確かに最善ではありませんが、それでも最悪よりはずっとマシですわ』

『その通りだ。アンがジョーに惹かれる前に殺れば、最小限の傷で済む。——決断しろ、ブレイズ』

『タリズマン、落ち着いて。アンならきつと大丈夫だよ。ジョーも悪い人ってわけじゃないみたいだし、ここは様子を見て——』

『なに温いこと言ってるのよ、シャムロック。戦いは常に先手必勝、攻められる時に攻めなきゃ後手に回ってジリ貧よ』

『ぬう……』

ラウラは迷った。本来ならば司令官が部下に迷いを見せるなどあつてはならないのだが、しかしいくら優秀でもラウラはまだ若過ぎる。自らの感情を完璧に制御するには、圧倒的に経験が足りていなかった。

そして経験不足のラウラにとって、今回の事態は少々荷が重い。敵の戦力は予想を遥かに上回り、部下たちは士気ばかりが高まって冷静な判断力を失いつつある。

それを上手く発散させつつ戦況を好転させる一手を、ラウラは思い付けなかった。

(どうすればいい……どうすれば……!?)

——そして。その迷いが、致命的な隙となった。

「——準備完了。攻撃開始まで十秒」

『なに……!?!』

突然、ラウラは自分が囲まれていることに気付いた。

全方位から突き刺さる、明確な敵意。

完全な隠行による、完璧な不意打ち。

『!? どうしたブレイズ、何があった!?』

『分らん、何者かが接近して……!?』

「9……8……7……ヒヤア がまんできねえ 0だ！」

『ぐああああ!?』

『ブレイズ!? どうした、何があったんだ!?』

『ブレイズ、応答して！ ブレイズ！ ブレイズ!? ブレエエエエイズ!!』

『ブレイズの信号途絶……!? くそ、一体何が……!?』

突然の事態に、隊員たちが色めき立つ。

司令官にして隊で最強の戦闘力を持つラウラが一瞬にして倒れたのだ。しかもその原因が不明と来れば、無理もない。

そんな中、いち早く冷静さを取り戻したのはシャルロットだった。

『みんな、落ち着いて！ 今混乱するのはマズイ!』

『シヤムロック!? だがどうするんだ？ 何が起きているのか全く分からないんだぞ!』

『ブレイズに代わって、僕が指揮を執る！ タリズマン、ブレイズの信号があった場所に行つて偵察を！ アーチャーはタリズマンを援護してっ!』

『俺たちはどうするんだ!』

『このまま任務を続行する。……ブレイズも、きっとそれを望んでるよ』

『シヤムロック……』

ラウラのルームメイトでありその分他の隊員よりも仲が良く、何より優しいシャルロットがラウラを心配していない筈がない。

だがラウラは言っていた。作戦に私情を持ち込むな、と。倒れた者は置いて行け、と。

——そこに、ラウラ本人が含まれていない、筈がないのだ。

『……任務を続行する。そして、必ず成功させる。僕たちに来るの



は、それだけだよ』

『……タリズマン了解。後ろは任せておけ、お前たちは任務にだけ集中しろ』

『頼んだわよ、タリズマン。こうなったらこつちも余裕ないからね』

『ご安心を。わたくしがしつかりと援護いたしますわ』

『無理はするな——とは言わねえよ。……タリズマン、アーチャー。俺たちのために、死んでくれ』

『ええ、見事な死に花を咲かせてご覧に入れましょう』

『骨は拾えよ、サイファー』

仲間を軽んじているのではなく、互いに信頼し合っているからこそ言える言葉。

たとえ自分が倒れても、仲間が必ず無念を晴らしてくれる。

そして仲間が倒れた時は、必ず自分が無念を晴らす。

そう信じ、そう決意しているからこそその言葉。

『行くぞ、アーチャー。何か見つけたら私に言え。お前が撃つよりも早く斬り捨ててやる』

懐から二振りの大型ナイフを取り出しながら、箒が言う。

『やって見せなさいな。銃弾よりも速く動けると言うのなら』

スナイパーライフルを構え移動しつつ、セシリアが言う。

『——上等』

互いにニヤリと笑い、ラウラが最後に居たポイントへと急ぐ。

どちらが先に、仲間の仇を討つのか。

それを競うように、戦意を漲らせながら。

いささぎから百メートルほど離れた場所にある、小さな公園。

ラウラの信号は、この公園の茂みから発せられていた。

『タリズマンからシャムロック。ポイントに到着した』

『シャムロック了解。様子はどうか？ タリズマン』

『何もない。ブレイズも居ない。アーチャー、そこから何か見えるか』

？』

『いえ、特に怪しいものは確認出来ませんわ』

『それじゃあ、タリズマンはブレイズを探して。アーチャーはそのまま、周囲の警戒を』

『了解』

シャルロットの指示を受け、箒が公園内を探索する。人目に付かないよう慎重に、それでいて素早く――

『……こちらタリズマン。アーチャー、聞こえるか』

『アーチャー、聞こえています』

『……何かおかしい』

『あなたもそう思いますか？』

『どういうこと？』

『違和感がある。上手く言えないんだが、何か……』

箒はもう一度、公園内を見渡す。ベンチに座るカップル、犬の散歩をする女性、のんびり読書を楽しんでいる青年、ジョギングをしている男性、他の男性――

どこから見ても、のどかな公園の風景だった。

一体どこに、おかしいことが――

『………………待て』

何かに気付いて、箒は再び公園内を見渡した。

公園内に居るのは、ベンチに座るカップル、犬の散歩をする女性、のんびり読書を楽しんでいる青年、ジョギングをしている男性、他にも数人。

そして――

『………………今日は、平日だ』

『何故、こんなに人が？』

居るのが若い者たち、学生であるならば、おかしいことはない。IS学園が夏休みなのだから、他の学校も夏休みなのは当然だ。

だが、ここに居るのは皆社会人の年齢だ。会社にも夏休みはあるが、学校のそれとは違う。少なくとも、こんなにも大勢が同時に休むことはあるまい。

『こいつらは、何者だ?』

『アーチャーからタリズマンへ。確かに怪しくはありますが、今のところ不審な動きはありません。今はブレイズの探索に集中を。警戒はわたたくしに任せて下さい』

『タリズマン了解。ブレイズの探索に戻る』

箒はひとまず公園内の人たちを無視し、ラウラを探すことにした。茂みを探索し、居なければ他の茂みへ。そうやって何ヶ所か探すと――

「タリズマン……こつちだ……」

「!? ブレイズ……!」

肉声による呼び掛け。それを聞きつけ、箒は近くの茂みに飛び込んだ。

「良かった、無事だったか……!」

「なんとかな。だがISの機能が使えない。なにやらジャミングのようなものを受けているようだ」

「なに? 可能なのか、そんなことが……!?!」

「だが現実として起きている。そしてこんなことが出来る者が居るとすれば――」

「……如月重工か……!!」

箒は戦慄した。情報が漏れていたのだ。それも、最悪の相手に。

『こちらタリズマン! ブレイズを発見した、無事だ!』

『本当か!』

『ああ、だがジャミングを受けていて、通信が使えない。指揮はこのままシャムロックに任すと』

『シャムロック了解。タリズマン、ブレイズを連れて戻って来て』

『タリズマン了解。それと気をつける。如月重工に作戦が漏れている可能性が高い』

『な、如月重工に……!?!』

『ちいつ、やっぱり嗅ぎ付けて来やがったか、変態どもめ……!?!』

『シャムロックから各員へ。最大限警戒を。もしかしたら、店内にも入り込んでるかもしれない』

『『了解』』』

通信を終え、箒はラウラに向き直る。

「行くぞブレイズ。いささぎに戻る。指揮は出来ないだろうが、シャムロックの補佐を頼む」

「いや、それは出来ない。……ここには、敵が居る」

「なに？」

「私を襲撃した奴らだ。まだここに居る」

「どんな奴らだ？」

「分からない。一瞬のことで、凌ぐだけで精一杯だった。……分かっていることは三つ。複数であること。対象のISを無効化する装備を持っていること。」

そして——恐ろしい手練れであること」

「……………」

真剣な表情で語るラウラ。プライドの高い彼女が自らの不覚を隠すことなく話したことに、箒は深刻なものを感じた。

『タリズマンからアーチャー』』

『こちらアーチャー。……付き合いますわ、タリズマン』

『……ありがとう。タリズマンからシャムロック。タリズマン、アーチャー、ブレイズはここに残り、敵を食い止める』

『……シャムロック了解。アンとジョーは僕たちに任せて。……気をつけてね、タリズマン』

『タリズマン了解。アーチャー、公園内の人間を警戒しろ。私たちはここで迎撃する』

『アーチャー了解。……ここから見る限りでは、怪しい動きはありません』

『私たちの現在位置は認識しているか？』

『当然ですわ。その茂みに近づく者がいれば警告しますわ』

『頼むぞ、アーチャー』

ラウラはハンドガンを取り出し、箒はナイフを構えて警戒レベルを最大まで引き上げる。

セシリアも極限の集中力により、スコープの先に映るもの全てを完

全に見極めている。

——そして、数分。

「！ 来るぞっ!!」

ガサリ、と茂みが鳴り、そこから何者かが飛び出して来る。

事前に何も見つけられていなかったにも関わらずセシリアは機敏に反応、次の瞬間にはスナイパーライフルを照準していた。

箒とラウラは互いに背中を預け合い、包囲しようとする敵を迎え撃つ。

『タリズマン！』

『アーチャー！』

「ブレイズ！」

『『『エンゲージ交戦!!』』』

第44話 OPERATION OMIIBR  
EAK（ヘッドオン編）

「なんなんだ、こいつらは……!?!」

茂みの影から現れた敵の姿に、箒が戦慄する。

ヒトガタではあった。

ヒトガタではあったが、どう見てもただの人ではなかった。

真夏の陽光を受けても全く輝かない、鈍色の装甲。

顔は目も鼻も口もない、不気味なのっぺらぼう。

二メートルほどの体軀は、俊敏さと強靱さを感じさせる。

脚には移動用のローラーがあるが、それが回転しても一切音が聞こえない。

ISとはまた別の、ヒトガタの機械。

「パワードスーツだと……!?!」

その正体を、軍人であるラウラは知っていた。驚きに目を見開き、自分たちがどれほど厳しい状況に置かれているかを理解する。

「こんなものまで持ち出すとはな……!?!」

「知っているのか、ブレイズ!?!」

「ああ、如月重工が開発したパワードスーツ、「明星」みょうじょうだ。ISほど凶抜けた性能はないが、大量生産出来る上に当然男にも扱えるので、いくつかの軍隊は極秘で採用している」

『スペックほどの程度ですか?』

「二対一でM1エイブラムスと戦えるほどらしい。だがあれよりも遥かに小型で、機動力もある。編隊を組まれるとかなり手強い」

ちなみにM1エイブラムスとは湾岸戦争などで活躍したアメリカの戦車である。戦車としては最高水準の性能を誇り、当時のイラク軍の主力戦車ではほとんど相手にならなかつたほどだ。

「現在の装備で倒せるのか……?」

「総合的な戦闘力は戦車と互角でも、装甲では流石に及ばない。加えて奴らは銃火器を装備していない。不可能ではない筈だ」

明星は全部で三機。数の上では互角であり、ラウラの言う通り武器の類は持っていないように見える。

現在はラウラと箒の周りをグルグルと回っており、どうやら様子を見ているようだった。

「なるほど、動きは速いな……」

「脚部のローラーで、最大時速300キロほどで移動出来る。旋回性能、走破性能も高い。ISが開発されなければこれが現代の主力になっていたと言われる代物だ」

『さすがは如月重工、技術力はダントツですわね』

戦車と戦えるほどの銃火器を装備出来るのなら、パワーアシストも相当なものだ。素手だからといって油断出来る相手ではない。

「……待て、ブレイズ。こいつら、人の気配を感じんぞ」

「なに？ 無人機か？」

「おそらくは。だがこの動き、AIによるものとは思えない。恐らく遠隔操作だ」

「ではアーチャーに連絡を。操作している者が近くにいないかもしれない」

「了解」

これほど複雑かつ高度な動きを遠隔操作で実現するには、莫大な量の情報の遣り取りが必要になる。ならば、それほど遠くない場所から操作している筈——ラウラはそうあたりを付けた。

『アーチャー、聞こえていたか？』

『ええ。それでは搜索に移ります。その間わたくしからの援護はありませんが、大丈夫ですか？』

『仕方あるまい。それとブレイズが言うには、操作は車両などに機材を載せて行っている可能性が高いが、如月重工の技術力を考えるとそれすら必要ないかもしれん、とのことだ』

『アーチャー了解。周囲を徹底的に搜索します』

こうしてセシリアは明星を操っている者を探し、その間ラウラと箒で明星を足止めする、という分担になった。

——絶望的な戦力差。それでも、諦めはしない。この敵を、仲間たちの下へ行かせるわけにはいかないのだから。

一方そのころ、いささぎにて。

「なるほど、井上さんは小さい頃から剣術をやっているんだね」

「……ええ……」

「ふむ。それは一度見てみたいな、井上さんの試合。……けど難しいかな、IS学園じゃ」

「……」

「兄さんはしょっちゅうIS学園に行ってるみたいだけど、クレストはISとは関係ない会社だからね。なにかよほどの理由がないと」

「……」

「残念だな、とても綺麗だろうに」

「……いずれ……」

「うん？」

「……機会があれば……」

「……うん。その時は是非とも見せて欲しいな」

「……」

真改と皐月の会話は、弾んでいた。

『ちよつとちよつと、ナニコレどういうことよ!? なんかい良い雰囲気』

『ああ……なんでこんなことに……』

『俺に言うなっ! くそっ、どうにかしないと……!』

『ああ……なんでこんなことに……』

そしてその様を見ていた隊員たちは焦っていた。

真改が話すことを苦手としていることに気付いた皐月は、自分から話し掛けるようにしていた。といっても決して真改を無視する形ではなく、真改が趣味と言った剣術について、真改でも答えやすいように質問しているのだった。

それにより、真改との長時間の会話という、一夏ですら滅多に出来



たことのない偉業を果たしていた。

「井上さんは、どこかの道場に通っていたのかな？」

「……篠ノ之道場……」

「篠ノ之？ ……それってもしかして、篠ノ之束博士の？」

「……その妹が、幼なじみ……」

「ああ、そういえば聞いたことがあったよ。篠ノ之箒さん、だっけ？」

篠ノ之博士の妹さんが、IS学園の一年生だっけ」

「……親友……」

「なるほど、篠ノ之さんのご実家が剣術道場をしていて、井上さんもそこに通っていた、と」

「……はい……」

「それじゃあ井上さんの剣術は、篠ノ之流……でいいのかな？ それなんだ」

「……いえ……」

「え？ 違うの？」

「……我流……」

「我流……っていうのは、ええと。自己流、てことかな？」

「……そう……」

「へえ、不思議だね。篠ノ之さんの道場に通っているのに、その剣術を学ばないだなんて」

「……貴方も……」

「え？」

「……如月なのに、クレストへ……」

「……そうだね。あはは、これは一本取られたな」

「……」

真改は驚いていた。

会話が苦にならない。それどころか、楽しいと感じている。

気心の知れた友人たちが相手であればともかく、そうでない者との会話は苦手なのだ。だというのに、会ってまだ一時間ほどの臯月との会話は、友人たちとのそれには劣るものの、確かに楽しんでいる。

それに気付いた真改は、驚きながらも小さく笑みを浮かべた。

それは、本当に小さな笑みで。

家族や、一夏や千冬といった長く深い付き合いのある者くらいしか、気付くことはない筈なのに。

「……驚いた。そんなに綺麗なのに、笑うともっと綺麗になるだなんて」

「……!？」

皐月の言葉に、真改はさらに驚いた。まさか自分の僅かな表情の変化に、この短時間の付き合いで気付くとは。

そして笑みに気付かれたことが恥ずかしくなり、ほんの僅かに頬を染める。

それもやはり、極一部の者にしか気付けないほどに微小なものだったが――

「……面白いなあ。普段は格好良くて、笑うと綺麗で、照れると可愛くなるんだね」

「……っ!!」

優しい笑顔でそんな風に指摘され、真改は俯く。無表情でいても見抜かれそうなので、顔そのものを隠してしまおうと考えたのだった。

しかしその浅はかな策は当然のように裏目に出て、皐月は真改の様子に益々笑みを深める。

——こうして真改は、(自分にとっては)悪循環へと陥っていくのだった。

『シャムロック!! シャムロオオオオツクっ!!! 許可を! あたしに奴を衝撃砲で粉微塵にぶっ飛ばす許可をおおおおっ!!!』  
『待てピクシー! 粉微塵にするなら後でも出来るだろ!? その前に零落白夜で微塵切りに——』

『サイファーもピクシーも落ち着いてよ! 狙撃ならともかく、店内でそんなことは出来ない! 僕たちにはアンを信じるしか——』

『そういう問題じゃねえんだよっ!!』

『あんな表情、あたしは見たことないわよっ!!』

『完全に私怨じゃないかっ!!』

『他に何かあるっ!?!』

『作戦の目的を忘れたの!? ジョーがアンに相応しい人物が見極めること、もし相応しくなかった場合はお見合いを妨害すること!』

『けど今まで見た限りではジョーは良い人だよ! この人なら、きつとアンを——』

『分かってねえ。分かってねえよ、シヤムロック』

『え?』

『考えてみなさい。もしジョーがアンを気に入ったとして、アンもジョーを受け入れたとして! その先に何かあるのか、考えてみなさいっ!!』

『何って、アンが幸せに——』

『『そこじゃないっ!!』』

『え!?!』

『もう忘れちゃったのかよ、シヤムロック!』

『ジョーには人格よりも、もっと重大な欠点があるでしょ!?!』

『え? 欠点……?』

『思い出せ、ジョーの名前を』

『そして考えてみなさい、ジョーと結ばれた時、アンがなんて名前になるのかを——』

——如月真改——

『……………殺そう』

『そうこなくっちゃ!』

『さすがシヤムロック、話が分かるな』

『けどやっぱり、ここで殺るのはまずい。店にも迷惑が掛かるし、アンも立場がなくなる。……殺るなら、後日だ』

『……なるほど。冷静だなシヤムロック、頼りになるぜ』

『アンタが仲間で良かったわ』

『任務はこのまま遂行するよ。まだアンがジョーに惹かれると決まっ

たわけじゃないし、ジョーの趣味とかが分かれば後の予定も立てやすくなる』

『了解』

『一応ここから見た限りでは、店内には怪しい人はいない。……けどあのブレイズが不意を突かれたんだ、僕らには気付けないレベルの手練れかもしれない。気をつけて』

『了解』

『……今外で、みんなが必死に足止めしてる。僕らのために。……失敗は、許されない。必ず成功させるんだ』

『了解』

——こうして。

混乱は、さらに加速していく。

時を同じくして、公園では。

「箒、俺だ!! 結婚してくれっ!!!」

「セシリアたんくんかくんかしたいお!!!」

「ラウラ様踏んで下さい!!!」

「くそ、なんだこのおぞましい気配は……!?!」

「中身空っぽのくせに……!! 遠隔操作でこれほどの威圧とはな、変態どもめっ!!」

『……ごめんなさい。わたくし、今その場に居ないことに心から安堵していますわ』

別働隊は、苦戦していた。

「ほおおおおおおおおおきちやああああんっ!!」

「はあっ!!」

某大泥棒のような声を上げながら飛び込んで来た明星の一撃をかわしながら、すれ違い様にナイフを叩き込む。しかしそれは装甲に弾かれた。

「ちい、やはりこの程度では通らんか……!」

「関節を狙え！　そこは装甲が薄い！」

「了解！　無人機ならば遠慮する必要もないからな、切り落としてやる!!」

箒はすぐさま明星に攻撃を掛けようとしたが、しかしその機動力に生身では追い付けない。距離を取られれば、再び向こうから近づいてくるまでは攻撃出来ない。

「仕方ない、ISで……!」

「ダメだ、よせっ!!」

「ヒヤッハー!!　ISは無効化だー!!」

箒が紅椿を展開しようとした瞬間、その一瞬の隙を突き明星が手榴弾のような物を放り投げた。それが空中で爆発し、眩い光を放つ。

「ぐああああ!?!」

「タリズマンー!」

その光を浴び、箒は全身に電気が流れたような衝撃を受けた。それはすぐに止んだが、直後に異常に気付く。

「っ!?!　ISが反応しない……!?!」

「くそ、お前もか!　これでアーチャーとも分断された……!」

「例のジャミングか!?!　迂闊だった……!」

ラウラのシユヴァルツェア・レーゲンと同じく、箒の紅椿も封じられた。

ISの無効化という、世の常識を覆すような兵器。それを目の当たりにし、二人が戦慄する。

「如月重工め、こんな物まで作っているとは……!」

「これは、想像以上か……!」

最後の手段を潰された。

これで二人は、戦車と同等の戦闘力を持つ敵を三機、生身で相手しなければならなくなったのだ。

「……行けるか、ブレイズ?」

「当然だ。司令官が諦めては、部下は誰も付いては来ない」

だが二人には、絶望は微塵もない。

自分たちを信じ任せてくれた、仲間のために。

退くわけには、いかないのだ。

「離れるなよ。私の背中は、お前に預ける」

「寄りかかるなよ？ 荷物を背負っていては、存分に戦えんからな」

明星たちは再び二人の周囲を回り、隙を窺っている。高い性能に酔わず慎重な戦術を選べる、油断ならない変態だ。

「さあ、往くぞっ!!」

「遅れをとるなよっ!!」

剣士と軍人と変態。

馬鹿と馬鹿と変態。

壮絶な戦いは、尚も続く。

説明しようっ!!

僕らが開発したパワードスーツ、「明星」は、地上制圧を目的とした歩兵用兵装なのだっ!!

ISは数も少ないし、歴史も浅いからねえ。戦術も戦略も、まだ確立されてない。けど明星なら、何十年もの間実戦の中で研みがかれてきた歩兵のそれがそのまま転用出来るからねえ。軍には結構ウケが良いのさ。

そして明星のスペックだけどっ!!

最高速度は大体時速300キロくらい。跳躍力は20メートルとちよつとかな。

装甲はまあ薄めだけど、通常の銃火器は効かないよ。対物ライフルとかロケットランチャーは危ないけどね。

パワーアシストは、そうだな、500キロくらいの物なら片手で持ち上げられるかな。

そして顔だけど、あれは実はただのつぺらぼうじゃないんだ。顔全体が無数のカメラの集合体で、視認能力を高めている。昆虫の複眼をヒントにした、名付けて「クラスターカメラ」だ。……まあ、ハイパーセンサーにはかなわないけどね。

そしてそしてえ、対IS用のジャミング装置、その名も「朔」<sup>ついたち</sup>!!  
これはISの機能、その一切を封じる装置だよ! まあ一時的に、  
だけどね。

ちなみにこれはISに作用しているわけじゃない。流石にIS自  
体の機能をダウンさせることは出来なくて。じゃあどういう仕組み  
なのかというと、これはパイロットに作用しているんだ。

ISはパイロットとの強いリンクによって稼働している。ならパ  
イロットからISへの信号をシャットアウトすれば、ISも動かない  
ということさ。

まあ展開されている間は流石に無理だけどね。けど展開していな  
い時は絶対防御も発動しないからね、そこに目を付けたってわけさ。

……え? なんでそんなことをペらペら喋るのかって?

——ふ。悪役っぽいだろ?

『アーチャーからシャムロックへ。タリズマンの信号途絶』

『ええ!? まさか、やられたの……!?』

『いえ、まだ戦いの気配がしますわ。おそらくは例のジャミング装置  
かと』

『そう、良かった……。それでアーチャー。遠隔操作している人は?』

『まだ見つかりませんわ。……公園内の人たちは、おそらく囿です。  
わたくしたちの目を引き付け、公園に一般の人たちが入るのを防ぐこ  
とが目的でしょう』

『シャムロック了解。狡猾だね……。それじゃあ、引き続き搜索を』

『アーチャー了解』

店外警戒班のため筈の異常にいち早く気付いたセシリアは、二人の  
身を案じながら公園周辺の搜索を続ける。

ヴァイオリンのケースにスナイパーライフルを隠し、観光に来た外  
国人を装いながら、周囲の人や車の中に不審なものはないかを確かめ

ていく。

(見つかりませんわね……。く、急がないといけないのに……！)

内心の焦りを顔に出さず、自然な仕草で周りを見渡しながら街中を歩く。

一応ブルー・ティアーズによる電波探知もしてはみたのだが、近くから発せられているということしか分からなかったのもので、その辺りを隈無く探すくらいしか手段が残されていないのである。

(不審な人物……不審な車………ん?)

そしてセシリアは見つけた。

路肩に停められた、一台の黒いバンを。

(こういうシチュエーションで、如月社長が好みそうな車ですわね……)

そう判断し、セシリアはバンへと近付いて行く。

中はスモークで見えないが、ハイパーセンサーを使って耳を済ませると――

「……………篠ノ……………力化……………した……………」

「……………よし……………通り……………油断……………まで……………」

(……………ここで間違いなさそうですわね)

スカートをそっとたくし上げ、内股に巻いたホルスターから小型の拳銃を取り出す。

車の取っ手に手を掛け軽く引くと、少し引いたところで抵抗を感じた。

(しめた。ロックされていますわね)

それを確認すると、セシリアはバンの扉を一気に引いた。少女の細腕によるものとは思えぬ速度でドアがスライドし、同時に銃を構える。

「動くなっ!」

「!?!」

中に居たのは二人の男。一人は頭に何かの装置を取り付け、もう一人はコンソールを操作している。

服装こそスーツ姿の、ごく普通のサラリーマンではあったが、この



状況でこの二人が何者であるかなどあまりにも明白だ。

「如月重工の方ですわね？」

「はい、そうですよ」

「あー、見つけたか」

「……は？」

意外にあっさりした男たちの態度に、セシリアは拍子抜けする。如月重工の社員なら、ねちっこく粘るだろうと思っていたからだ。

「……それが無人機を操っている機械ですか？」

「ええ、明星のリモート操作用のユニットです」

「まあ色々弱点が増えるから、使い難いんだけどね」

「ではなぜ遠隔操作型を？」

「有人機相手ではあなたの方が戦い難いからと、社長が」

「そういう訳わかんないとこ気い遣うんだよねえ、ウチの社長は」

「……わかりました。では直ちに操作の停止を」

「ええ、分かっていますよ。もう動かしていません」

「見つかったらやめるようにも言われてるんで。それじゃあ、俺らはフケますかね」

「お待ちなさい。その言葉をわたくしが信用するとても？」

「我々はサラリーマンです」

「信頼されることが一番大切な能力なのさ。約束は守るよ」

「………………わかりました。信じましょう」

「おや、こんなにあっさり信じてもらえるとは」

「はは、君も相当お人好しだな」

言つて、二人は本当に撤収準備を始めた。そして運転席と助手席に乗り込み――

「あー、もっと遊びたかったなあ」

「ええ、折角明星を持ち出したのですから、色々な装備を試したかったのに」

「アレとかアレとか、アレとかなく」

「ええ、あとアレとアレとアレも、ね」

「うふふふふふふふふふ」

「……………」

如月重工の社員はみんなこんなか、と思いながら、セシリアは発進する車を見送った。

(……あの二人が動かしていたのは、一機だけでしょうね)

一人が操作、そして一人が情報処理の支援をしているようだった。残りの二機は、彼らとは別の者が操作しているのだろう。

(探すしかありませんわね)

残り、二機。

本来なら生身で相手出来るようなものではない兵器が、二機。

(……止めなくては。一秒でも早くっ!!)

決意を新たに、セシリアは再び歩き出すのだった。

「! 一機止まったぞ!」

「アーチャー、やってくれたか……!」

押されていたところに光明が差し、二人の士気はさらに高まった。疲れた腕に力を込め、得物を握り締める。

「ストーンヘンジがやられたか……」

「だが奴はこの中で一番の小物」

「しかしジェット○ストリームアタックはやりたかったな……」

「ああ、死亡フラグと分かっているもな」

しかし相手も当然余裕があるようで、動揺している様子はない。

「これで勝ち目も見えてきたな」

「ああ。連携なら、私たちが上だ」

互いに睨み合い、機を窺う。

ほんの些細なきっかけがあれば、すぐにでも戦闘が再開されるだろう。

——そして。

「如月重工の技術力は世界一イイイイイツ!!」

「不可能などないイイイイイツ!!」

自らきつかけを作り出すのが、如月重工であった。

「各個撃破だ！」

「了解！」

挟み撃ちの形で飛びかかって来る明星。その一機に狙いを定め、間合いを詰める。

「僕の胸に飛び込んでおいでっ!!」

「断る！」

「というかお前そこに居ないだろ！」

ナイフと銃弾を膝に叩き込むが、装甲の薄い箇所からは僅かに逸れた。動きが速く、捉えきれなかったのだ。

「うふふ……わかってないね。この明星は特別モデル、女の子の柔らかさだけを感じ取れるセンサーが搭載されているのだ!!」

「また無駄に高い技術を……!!」

「面妖な……変態技術者どもめ……!!」

「さあ、それがわかったところで!!」

「抱きしめてあげよう!!」

再び突撃して来る明星。だがやはり軍事的な訓練は受けていないのか、連携は世辞にも優れているとは言えなかった。

「これなら——」

「——いける！」

箒とラウラを捕まえようと伸ばされた手をかいくぐり、関節を狙って一撃。しかしそれも外れた。

「動きを止めねば……!!」

「私が囷になる！ ブレイズ、頼むぞ！」

「任せろ！」

三度、突撃。

今度は箒は避けるのではなく、衝撃を受け流しつつ脚にしがみつく。そして膝裏にナイフを突き立てた。

「今だ！」

ナイフは装甲に浅く食い込むだけで駆動系には届かなかったが、一人の重さが加わったことでほんの僅かに明星の動きが鈍る。

その僅かな遅れにより、ラウラは完全に照準した。

——箒が突き立てたナイフの、柄に。

「っ！」

パシユ、パシユ、パシユ、と。

サイレンサー付きの銃口から発射された弾丸が、狙い通りにナイフの柄に命中する。金鋸で釘を打ち込むように、ナイフが膝裏に突き刺さって行き——

バチンツ!!

「おお!？」

「よしっ！」

「まずは一本！」

明星の一機が片膝をつき、動きを止める。ISとは違って地に脚を着いているので、脚が動かなければ機動力に大きな支障が出るだろう。半減以上に殺がれた機能では、もはや脅威とは呼べない。

「動けるか？ アイガイオン」

「いや、厳しいな」

「そうか。では俺だけでやるしかないか」

「頼む、エクスキャリバー。……俺の分まで、彼女たちを抱き締めてくれ」

残るは一機。だがここまで追い詰められても、戦意は全く萎えていない。

「気をつけろ。あんな奇策、二度は通じんぞ」

「分かっている。気を引き締めろ、ここが決めどころだ」

しかし戦況が箒たちに傾いているのも事実。二対二で一機倒したのだから、二対一になれば残りも倒せる筈。ましてや相手は変態とはいえ民間人、戦術の幅も箒たちには及ばない。

箒とラウラは残りの一機をいかに倒すか、素早く思索を巡らせ——

「なあああんちやってええええ!!」

「こんなこともあろうかとおおおお!!」

——奇襲への反応が、遅れた。

「な、なに!？」

片膝を破壊された明星はその脚をパージすると、その場で逆立ちをした。すると腕からローラーが出てきて、脚による移動と変わらぬ速度で突っ込んで来たのだ。

無人機だからこそできる、荒技だった。

「とおおおおおおう!!」

逆立ちのまま腕でジャンプし、ラウラ目掛けて飛びかかる。ラウラも当然回避しようとしたが、しかしもう一機に回り込まれ逃げ場を塞がれた。

「ブレイズー!」

「くっ……!!」

(くそ、迂闊だった。こいつらは機械、完全に破壊するまで何をしてくるか分からないというのに……!!)

ラウラは己の油断が招いた危機に歯噛みする。

明星は二人のコンビネーションがあつて初めて倒せる相手だ。ラウラが戦闘不能になれば、箒にも勝ち目がなくなる。

(何か……! 何かないか?! 何か——)

危機に瀕したことで集中力が高まり、引き延ばされた時間の中で必死に考える。

だが、思い付かない。少しずつ、敗北が迫って来て——

ガシャアアアアンツ!!

「!?!」

飛びかかった明星が、粉々に砕かれて吹き飛ばされる。

巨大な金属の塊が、亜音速で衝突したことによるものだった。

「お前は……!?!」

「まさか……!?!」

明星をただの一撃で破壊したモノは、急停止してその場に留まる。

——その姿に、箒とラウラは覚えがあった。

「来てくれたか……!?!」

「……ふん。見せ場を持つて行かれたか」

箒は素直に感激し、ラウラは無然とした態度の中にも喜びを滲ませ  
て。

「認めよう。今この瞬間から、お前も同志だ——」

「歓迎する。お前が居てくれれば心強い——」

それは、機械だった。

その身を形作るのは、六対十二の翼。

淡く静かな、銀色の輝き。

明星と同じく遠隔操作だが、操っている主が何者なのか、二人は  
知っている。

——それは。

「——月船っ!!」



縦させそれに乗りここまで飛んで来たというわけだ」

「そ、それは法律に触れるのでは……」

「月船自体はISではない。よって何も問題はない」

「その理屈はかなり無理が有りませんか!？」

「大丈夫だ、問題ない」

援軍だと思っていた月船は、死神を連れて来たのだった。

しかもその死神は長台詞を一息で言い切り普段は絶対にしないような無茶をするくらいには怒り狂っていた。

「……井上のお見合いについては、保護者である唐沢さんから連絡が来ている。井上の将来を心配していたところに如月社長から申し出があり、井上も断らなかつたそうだ。

つまりこのお見合いは双方同意の上で行われている。それを妨害しようなどと、お前たちは何様のつもりだ?」

「ひゃ、いえ、あによ、そによ……」

敬愛する千冬からほぼ全力の殺気を当てられ、ラウラは呂律も回らないほどに狼狽えた。

その様を見てから、千冬が目がギョロリと動いて箒に視線を向ける。

「篠ノ之おおお……」

「は、はひ!？」

「お前もか? お前も束のように、有らん限りの迷惑を、この私に掛けるのか?」

「い、いえ! 決してっ、そんなことは決して……!」

「そうか、掛けるのか……残念だ。教師として生徒には分け隔て無く接するつもりだったが、お前には特別待遇が必要のようだな」

「ひえ!? あの、だからそんなことはないと……!!」

「嗚呼、残念だ。残念だが、教職に就く者として、生徒を甘やかすことは出来ん。

……嗚呼、本当に、残念だ。自分の生徒にこれほどの重荷を背負わせ、それに対して罰を与えねばならんとはな」

「おおおおお織斑先生!?! お願いです、話を聞いて下さい……!!」



必死に懇願するも、千冬は全く聞く耳を持たない。

どこからともなく竹刀を取り出し、パシパシと手の平に打ち付けて調子を見ながら近付いて来る。

その顔は笑っているのに、仁王像より怖かった。

「……さて。宿題は済ませたか？ 本国への報告は？ 病院のベッドで絶対安静で夏休みを過ごす心の準備は出来ているか？」

「いえー！ どれもまだですっ!!」

「そうか、出来ているか。それなら、心置きなく折檻出来るな」

「ダメだ、話を聴く気が皆無だ……!」

「このままでは……!」

追い詰められた二人。戦闘力で千冬にかなう筈もなく、逃げて月船ですぐに追い付かれる。かと言って千冬の説教は、甘んじて受けられるほど生易しいものではあるまい。

下手すれば死ぬ。うっかり手加減に失敗して事故死する。それくらい今の千冬からは怒りのオーラが溢れていた。

「どうする……!?!」

「こうなったら残ってる明星を囮にして——」

「じゃあ俺落ちますね。お疲れでしたー」

キュウン。

「明星が止まった!?!」

「おのれ変態め！ 逃げ足の速い!」

「だがまだ近くに居る筈だ！ 探し出すぞ!」

「分かった！ 私はあちらを探す、お前は向こうを——」

「……茶番はそこまでだ」

「ひいっ……!?!」

逃走失敗。当然と言えば当然だった。

「さあ——お仕置きの時間だ」

「ひ、ぎゃあああああああ!!!」

(早く見つけませんと……！)

二機目の明星を動かしている者がなかなか見つからず、セシリアは焦っていた。

箒とラウラなら明星を倒せるかも知れないが、明星は如月重工製だ。何かしら隠し球があるのは間違いない。早めに数を減らしておかなくてはならない。

(早く……っ!? あれは……!?)

——見つけた。黒いバン。

一台目と同じ車種、同じ塗装。ご丁寧にナンバーも一つ違い。

間違いない。如月重工だ。

(これで二機目ですわね。残りは一機、その程度なら、あの二人が負ける筈ありませんわ)

バンに近付き、取っ手を引く。このバンにも鍵は掛かっていない。おそらく社長から、そういう指示が出ているのだろう。

深呼吸を一度。一息にドアを開け、中に銃を突き付ける。

「動くな！」

「ほう？ それが教師に対する態度か？」

「……………え？」

中には如月重工の社員と。

千冬がいた。

「……………え？ 織斑先生？」

「ああそうだ、オルコット。お前の担任の織斑先生だ」

「……………な、なんでここに？」

「それは篠ノ之とボーデヴィツヒにも説明した。二度もさせるな、私は面倒が嫌いなんだ」

「……………ええと。お二人は……？」

「安心しろ。二人がどうなったかはすぐに分かる。……お前も同じ目に遭うからな」

「……………」

ドドドドドドドドド、という効果音が聞こえてきそうなくらいの威圧感を放ち続ける千冬に、セシリアは蛇に睨まれた蛙状態だった。今

すぐこの場から逃げ出したいのに、身体が恐怖で動かない。

「……お、織斑先生。わたくしは——」

「聞く耳持たん。言い訳なら——閻魔にするんだな」

「ひ、——」

ぬう、と、千冬が手を伸ばす。その手はセシリアの首をがっちり掴み、車内へ引きずり込む。

「ひ、いや、やあ……!」

幼子のように懇願するも、千冬の手から力が抜けることはない。ずるずる、ずるずると、セシリアの姿が車内に消えて行く。

そして、バンの扉が。

無情に、閉じられた。

「ウツヒョー!! 千冬様の生お説教だぜー!!」

「ヒヤツハー!! 今日はお祭り「黙れ」「はい」

『こちらシヤムロック。店内の様子がおかしい』

『おかしい? どういうこと?』

『ちよつと慌ただしい……かな? 予定外のお客さんが来たみたいだ』

『予定外? 完全予約制なんだから、ここ?』

『うん、だから慌て……て……』

『シヤムロック? どうした?』

『こういうことだ』

「!?!」

店内に乗り込んで来た人物、それが誰かは言うまでもない。

「ち、千冬姉……!?!」

「どうしてここに!？」

「私は面倒が嫌いなんだ」

「はっ。」

「とにかく、ここでは店に迷惑が掛かる。……表に出ろ」

「……………はい」

逃げられない。そう確信した。なにせ相手は織斑千冬、世界最強のブリュンヒルデだ。逃げられるわけがない。

「…………デュノア、お前もだ」

「……………ですよねー……………」

全員確保され、連行されて行く。その際当然真改と皐月に見つかり、二人とも目を丸くしていた。

「……………ええと。織斑千冬さん、ですよね?」

「はい。井上の担任をしています、織斑千冬です。井上の保護者とは懇意にさせてもらっていて、今回のお見合いについても聞いていました」

「ええ、井上さんから聞きました。姉のように思っている、と」  
「……………」

そんなことを言われた千冬は驚いて、真改を見る。

しかし真改はそれどころではなく、千冬の後ろに朝食待ちの囚人のように並んでいる織斑一夏御一行様を呆然と見ていた。

「そちらの方たちも、織斑先生の生徒さんたちですか?」

「はい。凰……………このツインテールは違う組ですが」

「なるほど、みんな井上さんのお友達なんですね。二十代半ばの男とお見合いすると知って、心配で見に来た、と」

「……………申し訳ありません。私の監督不行き届きです」

「いえ、そんな。友達思いの良い生徒さんたちじゃないですか」

「……………そう言っていたら、助かります」

皐月は一夏たちを優しくな顔で眺めている。そこにはお見合いの様子を覗き見ていたことに対する怒りや不信などは微塵もなく、ただ真改に友人が大勢いることを喜んでるようだった。

「それでは、これで失礼します。お邪魔しました」

「……待て……」

これ以上お見合いを中断させるわけにもいかないので去ろうとした千冬に、真改が待ったを掛けた。

そして一夏たちを順繰りに見渡し――

「……他は……？」

「……箒とセシリアとラウラ。のほほんさんは、シンがお見合いするって聞いてひどいショックを受けたみたいで、来てない」

「……伝えろ……」

「？」

「……後で、シメる……」

「………………了解」

割とマジな殺気を叩きつけられ、一夏たちは絶望した。千冬のお説教の後には真改のお怒りが待っている。

((……生き残れるかな……))

そうして、一夏たちは千冬に連れられ、いささぎを出て行った。

その様は、絞首台に登る死刑囚のようであった。

「……良い友達が大勢いるんだね、井上さんは」

「…………」

「あの男の子は織斑先生の弟さんかな？ ニューズで見たよ。彼とも幼なじみなのかな」

「……はい……」

「やっぱり。……篠ノ之箒さんも来てたみたいだし、それにセシリアさんとラウラさん、それにのほほんさんって言ってたね。……いつか、会って話を訊いてみたいな。普段の井上さんが、どんな人なのか」

「…………」

「優しい人たちだね。井上さんを心配して、こんなことまでしてくれるだなんて」

「……節介……」

「そうかもしれない。けれどそんな人たちだから、井上さんにとっても大事な友達なんじゃないかな？」

「……皆……」

「うん？」

「……温かい……」

「……なるほど。なんていうか、井上さんらしい言い方だね」

「……………」

神経の太さは従兄弟と同じなのか、あんなことがあっても皐月の様子は変わらない。

そんなわけで、お見合いはそのまま続行となったのだった。

---

「……………さて。何か言い残すことはあるか？」

千冬が運転する十人乗りのワゴン車の中、千冬のお説教をたっぷり受けた一夏たちは生気の無い顔で座っていた。

ちなみに千冬を連れて来た月船は、千冬を降ろすと逃げるように飛び去って行った。この車は真耶が運転して来たもので、その真耶は今助手席に座っている。そして一番後ろの席には、回収された本音が相変わらずの様子で座っていた。

「……俺たちはシンのためを思って——」

「何が井上のためだ。どう見てもお前たちが暴走しただけだろう」

「……………」

「なんだ、そんなに如月の名が気に食わないか。井上が如月社長の親族になるのが」

「……………まあ」

「井上はそんなことを気にしない。アイツには立場や肩書きなどどうでもいいのだからな」

「けど皐月ってやつは、あの如月社長の従兄弟なんだろう？ 同類かもしれないじゃないか」

「それは調べた。如月社長から話を持ち掛けられた唐沢さんから相談を受けて、事前にな。それで問題ないと判断したから唐沢さんもお見合い話を受けた」

「シンはどうなんだよ？ なんて受けたんだ？」

「アイツが如月社長と唐沢さんの顔を潰すようなことをすると思うか？」

「なんだよ、それじゃあ強制じゃねえか！」

「だからこそ事前に調べたんだ。唐沢さんも井上の将来を心配している。アイツは恋愛に関して、奥手どころの話ではないからな」

「人のこと言えるかよ」

「何か言ったか？」

「イエナニモ」

織斑千冬。いまだに男と付き合ったことはない。

「けど千冬姉も知ってるだろ？ シンには好きな人がいるんだぞ!？」

「……だが、いつまでも過去を引き摺っているわけにもいかん。井上はまだ若いんだ、未来のことを考えなくては」

「……まあ、そりやそうかも、しれないけどさ……」

「井上の人格や腕のことを考えれば、受け入れてくれる者はあまり多くないだろう。機会は、なるべく多い方がいい」

「……………」

「唐沢さんは色々なことを考えて、井上にお見合いをさせた。そうと決めてからも、これで良かったのかと最後まで悩みながらな。」

「……お前たちはどうだ。その場の感情に流され、自分たちが嫌だから邪魔しようとしたただけだろうか」

「……………」

「…………ごめん、千冬姉。軽率だった」

千冬が本気で怒っていることが分かった一夏たちは、自らの行いを恥じた。

全員が心から反省していると感じて、千冬はそれ以上責めることをやめた。

「…………ふん。だが間違えるな。謝る相手は、私ではない」

「? そういやこの車、シンの孤児院に向かっているな」

「え? シンの?」

「…………本当だ。外見てなかったから、気付かなかった」

「…………ああ、思い出して来た。確かにこっちの方向だったな」

「むう、ではマスターの孤児院に行くのか？」

「あ、あの、わたくしまだ心の準備が……！」

「なんの準備だ……」

「けどなんで孤児院に？」

「馬鹿かお前は。言っただろう、謝る相手が違うと」

「今回皆さんがしようとしたことは、井上さんのお義父さんにも大変迷惑を掛けることです。ですから担任である私たちと一緒に謝りに行きます」

「あ……」

「……すみません、山田先生。迷惑を掛けてしまつて」

「ですから、謝る相手が違いますよ。謝るなら、井上さんのお義父さんに謝つて下さい」

「……はい」

というわけで、一行を乗せた車は真改の孤児院へと向かつて行つた。

ちなみに如月重工は一緒になつて悪ふざけに参加したので、謝る必要なしと判断されていたのだった。

「……この度は、まことに申し訳ありませんでした」

まだ回復していない本音を除く全員が、深々と頭を下げる。謝罪を受けた唐沢は、笑つてそれを許した。

「謝らなくていいよ。私としては、真改にこんなに沢山友達が出来て安心しているくらいなんだから」

「いえ、そういうわけには——」

「いいんだよ。みんな真改のことを心配してくれたんだろう？ それでこんなことまでしてくれたんだから、その友情は本物ということだ。先方もなんだか喜んでるみたいだし、言うことなしさ」

「……ありがとうございます。唐沢さん」

千冬、一夏、箒、鈴という唐沢を知る面々はなんとなくこうなるだ



ろうな、と予想していたが、他は驚いた。まさかこんなにあっさり許されるとは思っていなかったからだ。

「さあ、この話はこれで終わりだ。ちよつと早いけど、夕飯の準備をしよう。せつかく真改の友達がこんなに来てくれたんだから、豪勢にしよう」

「いえ、ご迷惑をお掛けしたのに、そんなことまでしてもらおうわけには――」

「いいっていいって。千冬ちゃんも久しぶりに来てくれたことだしね」

「……千冬ちゃん？」

「んんっ！……唐沢さん、その呼び方はやめて下さい。私はもう子供ではないので」

「あつはつは、これは失礼」

唐沢の言葉に反応した者たちをギロリと睨み付ける千冬。

その眼が言っていた。誰かに言ったらコロス。

「ただいま……て、なんだこれ。随分靴があるな」

「丁度良い、宗太も帰って来たし」

玄関から聞こえてきた少年の声に、皆が振り向く。

宗太という名前は何度か聞いたことがあった。真改の一つ下の弟で、料理が得意な少年である。

「……やっぱリイチ兄か。また女連れ込んでやがる。しかも見たことねえのが五人もいるし」

「……五人？」

ふと不思議に思つて、一夏はぐるりと見回した。

今ここに来ているのは、千冬、真耶、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、本音。

「……私を覚えているのか？」

呆然と呟いたのは箒である。

確かに箒と宗太は面識があるが、最後に会ったのは六年以上前の話だ。記憶はかなり薄れているだろうし、そもそも容姿が大きく変わっている。実際、箒は事前に知っていなければ、目の前の少年が宗太だ

とは分からなかつただろう。

「はあ？ 当たり前前だろ。そんな目つきの悪いやつがアンタ以外にいるかよ」

「……お前にだけは言われたくない」

「まあ確かに、目つきも態度も口も悪いからな、宗太は」

「うるせえよ。つーかなんだよ、コイツらは。イチ兄のハーレムのやつらか？」

「「「はははははハーレム!!」「」」」

「そんなわけないだろ。ただの友達さ。山田先生は副担任だし」

「「「……………」」」」

「……相つ変わらずだな。そのうちマジで刺されるぞ」  
「？」

宗太の言葉に、心底意味が分からない、という顔をする一夏。この少年の鈍感さは、当然孤児院の皆知っている。

「そういえばお前、やけに落ち着いてるな。朝電話して来た時はあんなに慌ててたのに」

「まあ冷静になってみりやあ、シン姉が男になびくとも思えねえしな」  
「……………もつとも」

「それで親父、シン姉は？」

「ああ、さつき連絡があつたよ。お見合いは終わったからもうすぐ帰って来るって。相手さんも、もしよろしければまた会いたいって」

「「「「なにいい!」「」」」」

ギロリ。

「「「「……………」」」」」

鋭く反応した者たちを、千冬は一睨みで黙らせた。

「ところで宗太。この人たちは真改の友達なんだ。せつかく来てくれたんだし、君の料理でもてなしてあげたいんだけど」

「……まあいいけど。十人分作るのも二十人分作るのも同じだしな」  
「ざらりとすげえことを言いやがるな……」

ああメンドくせえメンドくせえ、とボヤきながらエプロンを身に付け、宗太は厨房へと向かって行った。元々大勢住んでいる孤児院なの

で、食材は十分にある。その中からいくつか選び、手際良く調理し始める。

「……優しいんだね、あの子」

「目つきも態度も口も悪いけどね」

「変わらん、宗太は。私のことも覚えていてくれたしな」

「そういうやつなんだよ、アイツは。優しくて思い遣りがあるやつなのに、そういうのがダサイと思ってるんだ」

「ふふ、可愛いですわね」

「本人には言わないであげてね。きっと真つ赤になって怒るから」

テキパキと料理を続ける背中を眺めながら、皆でニヨニヨし合うのであった。

「……ただいま……」

「おや、帰って来たね」

小さいながらも良く通る声。その声の持ち主を、ここに居る全員が知っている。

「いのつちいいいい!!」

「うおつ、のほほんさん!?!」

先ほどまで虚ろな眼をしていた本音がいきなり立ち上がり、玄関へダッシュ。普段のトロさが信じられないような速さであった。

「いのつち、大丈夫!?! 変なことされてない!?!」

「……されてない……」

「ああもう、心配したんだよ!?! いのつちに何かあったらどうしようって〜!」

「……何も……」

「良かったよう〜! ふえええええ〜!」

「……………」

本音をしがみつかせたまま、着物から私服に着替えた真改が歩いて来る。その様を見て、唐沢は益々嬉しそうに笑った。

「いやあ、その子はなんだか様子がおかしかったから心配してたんだけど。そうか、そんなに真改と仲が良いからか」

「……………」

「おかえり、真改。如月皐月さんはどんな人だった？」

「……………尊敬出来る……………」

「それは良かった。安心したよ、真改は無口だから、ちゃんと話せるか不安だったんだ」

「……………」

そう話す唐沢の表情は、言葉通り安堵と喜びに満ちている。

その笑顔を見て、真改は気付いた。何故初対面である皐月との会話が苦にならなかったのか。

(……………似てる……………)

年齢は倍ほども離れているし顔立ちもまるで違うが、心から信頼する義父と良く似たものを、皐月から感じていたのだった。

「……………」

「……………う……………」

それはそれとして、真改はとりあえず馬鹿をやらかした連中を睨み付けた。その眼光の鋭さに思わずたじろぐ一夏たち。

「……………並べ……………」

「……………はい……………」

ずらりと整列する馬鹿六人。真改はその前に立ち、手刀を振り上げると――

ゴゴゴゴゴゴッ!!

「……………いったあ!?!……………」

目にも留まらぬ六連打。全員の頭頂部に激痛が走る。

「いっつう……………」

「お、織斑先生並みの一撃ですわ……………」

「頭が割れる……………」

「身長が縮むかと思った……………」

皆口々に苦悶の言葉を口にするが、しかし文句は言わない。真改に恥をかかせたことは自覚しているからだ。

「…………ごめん、シン」

「……………」

「…………着物、似合ってたぜ。すごく綺麗だった」

「…………っ!」

ゴンツ!!

「ぐはっ!」

一夏には追加の一撃が与えられた。

「ただいま。お、なんか大勢来てる。あ、この靴は一夏さんね」

「おや、この声は小夜だね。帰って来たみたいだ」

その言葉に、皆が玄関の方を向く。小夜という名前にも聞き覚えがあった。真改の衣装担当(?)である。

「やつほー、一夏さん。おひさー。あ! 千冬さん、お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな、小夜」

「よ、邪魔してるぜ」

「おお!? 鈴さんじゃん。なによ、あんま変わってないわねー。特に胸とか」

「ぶっ殺すわよ?」

「他にもなんかいっぱいいるし。みんな綺麗ねー、やー、目の保養になるわー」

真改を着せかえ人形にすることに無上の喜びを感じる少女は、集まっている面子の容姿に大変満足しているようだった。

頭の中で皆を好き勝手にデコレーションしながら見渡していると、ふと一人と視線が合う。

「…………む?」

「…………?」

「…………むむむ?」

「…………な、なんだ?」

その一人とは――

「……もしかして、箒さん？」

「……宗太といい、お前といい。六年ぶりなのに良く分かるな」

「やっぱり箒さんだ！ わあ、すっこい久しぶり！ なになに、なんかすっこい美人になってるじゃない！」

「ひえ!? ななな何を——」

「うんうん、私好みじゃない！ ねえ箒さん、後で私の部屋に来ない？

可愛い服がいっぱいあるんだけどっ!!」

「い、いや、いい！ 遠慮しておく！」

「まあまあそんなこと言わずに！ きつと似合うから！」

「いいと言っている！」

「こらこら小夜、箒ちゃんはいいつて言ってるんだから。無理矢理着せるのは良くないよ」

「ちえく。しようがないなあ」

「……ふう」

唐沢の援護により難を逃れ、安堵する箒。

だがその後ろでは、シャルロットが羨ましそうに箒を見ていた。彼女は可愛い物に目がないのである。

「ただいま〜」

「わあ、お客さんがいっぱい来てる！」

「おかえり。うん、みんなそろそろ帰って来るかな。ご飯ももうできそうだし、続きは食べながらにしよう。真改の学園での様子なんかを聞きたいな。本人は全然話してくれないから」

「それでは僭越ながら、わたくしが——」

「いや待て、私が話す。私とマスターの馴れ初めをな」

「それって印象最悪だったような……」

「それじゃく、私のとっておきのネタで〜」

「別に誰からでもいいでしょ。シンの学園での話題なんて、いくらでもあるんだから」

「あっはっは！ なるほど、真改は随分と学園生活を楽しんでるみたいだね！ これは楽しみな、面白い話がたくさん聞けそうだ！」

そうして、孤児院でのちよつとしたパーティーが始まった。

真改にとつては家族に学園でのことを、友人たちに家でのことを知られるというあまり喜ばしくない事態ではあったが――

――それでも。その一時の会談は、とても温かいものであった。

「……すっかり遅くなってしまった……」

夜も更け、千冬はがつくりとうなだれていた。久しぶりに孤児院の皆と会って、ついつい時間を忘れて話し込んでしまったのだ。

ちなみにそれは他の皆も同じ様なもので、真改のカコバナに聞き入っているうちにいつの間にか時間が経っていた。

外はとつくに暗くなっており、孤児院の子供たちも宗太と小夜を残して皆寝てしまっている。

「もうこんな時間か。すっかり夢中になって、時間を忘れてしまっていたよ」

「すいません、唐沢さん。私たちはこれで――」

「いや、今から帰れば、IS学園に着くのは相当遅くなってしまふよ。女の子をそんな時間に出歩かせるわけにはいかない。今日は泊まっていくといい」

「お、女の子……」

久しくそんな風に呼ばれたことのない千冬は愕然とした。その様子を見ていた者たちは笑いを堪えるのに必死だった。

「学園も今は夏休みなんだろう？　慌ててやらなきやならない仕事も無いと思うんだけど」

「……まあ確かに、とりあえず明日は空いています……」

「なら決まりだ。明日みんな朝食を食べて、それからゆっくり帰ればいい」

「……本当に、いつもすみません。それでは、お言葉に甘えさせてもらいます」

柔らかく笑って、深々と頭を下げる。

そんな千冬の様子は、何度見ても皆を驚かせる。

「……すごい。あの織斑先生が、頭が上がらないなんて」

「俺と千冬姉には親がないから、昔からお世話になってたんだよ。唐沢さんは俺たちを本当の子供みたいに扱ってくれた。だからきつと、いつまで経っても俺たちは子供なのさ、あの人にとって」

「本当に仲がいいのですね、この人たちとは」

「まあ、付き合い長いしな」

「付き合い長い分、色々なことがあった。良いことの方が多いけど——悪いことだって、当然あった」

「……どういうことだ？」

突然の宗太の言葉に、事情を知らぬ者が怪訝な顔をする。

その質問に、宗太は眉間に皺を寄せて答えた。

「簡単なことさ。……俺は、イチ兄を許さねえ」

「な——」

「宗太っ、アンタまだそんなこと言ってんの……!?!」

宗太の言葉に皆愕然としたが、中でも大きく反応したのは小夜だった。

強い怒りと、それ以上に深い悲しみを含んだ声で、宗太を叱りつける。

「まだ、じゃねえよ。言ったらろうがよ。俺は一生、絶対に、イチ兄を許さねえって」

「宗太、いい加減に……!」

「いいんだ、小夜。これは、俺と宗太との約束なんだよ」

「わかってるわよっ! ……ああもう!」

一夏に言われて小夜は引き下がったが、しかし事情を知らない者には何が何やら分からない。

だが、なんとなく——それが、真改の左腕に関わることだということとは感じた。

「……一夏?」

「どういうことですか……?」

「……そうだよな。話してなかったもんな」

何かを決意するように、一夏は一度目を閉じる。



数秒後、目を開いて、先ずは千冬を真っ直ぐに見た。

「……………いいよな？ 千冬姉」

「ああ。……………この件に関しては、私は口を出さんと決めている」  
その答えを受け、次いで親のように慕う男を見た。

「……………唐沢さん」

「私も千冬ちゃんと同じだ。……………君に任せるよ、一夏君」

そして最後に、親友の少女を見た。

「……………シン」

「……………」

真改はただ黙って頷き、一夏の決意を肯定する。

その様を見て、一夏は深く、深く息を吸い、深く、深く息を吐いた。  
「鈴からある程度は聞いてると思う。けど、俺が自分で話さなきゃならなかった。……………いや。俺の言葉で、みんなに聞いて欲しいんだ。」

——俺の、罪を<sup>シン</sup>」

いまだかつて聴いたことのない一夏の声色に、全員が息を呑んだ。

一夏は震える手を押さえつけるように握り締め、再び深呼吸をして、語り出す。

「……………あの日初めて、本当の意味での痛みを知った。

大切な人たちが、みんな泣いていた。

千冬姉が握り締めた手から、血が流れているのが見えた。

まだ小さな女の子が、ベッドの上で、機械に繋がれて眠り続けていた」

今日まで自らの両足を支えてきた、<sup>きざあと</sup>想い出を。

「——あの光景を、覚えてる」

## 第46話 原罪（喪失編）

それは、三年前。

とても——とても良く、晴れた日のことだった。

『決まったああああああ!! 零落白夜ああああああ!! 織斑千冬、決勝戦進出決定っ!!』

『いやあ、さすがはブリュンヒルデ、圧倒的ですわね。これは今回の優勝も、彼女で決まりですかね』

『そうですねー、やはり彼女に勝てる者は存在しないのでしょうか!? それとも大番狂わせが起きるのか!? とにかくここまでは多くの方が想像していた通りの展開でしょう! しかしまだ結果は分からない、最後まで目を離せませんっ!!』

『ええ、是非とも見応えのある試合をしてほしいものですね』

『さあ、それでは準決勝第二試合が始まります! ブリュンヒルデに挑むのはどちらか!? 世界最強に刃を向ける資格を得るのはどちらか!? 注目の一戦、スタートオオオオオオッ!!』

「あはははは!! 見たか、シン! 勝った勝った! やっぱすげえな、千冬姉は!」

「……流石……」

俺は第二回モンド・グロツソに出場する千冬姉を応援するために、ドイツにある巨大アリーナに来ていた。シンも一緒だ。

「次は決勝戦だつてよ! 誰が相手でも、千冬姉なら楽勝だ! なあシン!」

「……応……」

千冬姉の活躍、その圧倒的な強さを目の当たりにして、俺は興奮していた。シンも若干頬が上気しており、試合の余韻に浸っているよう

だった。

「ええと、次の千冬姉の試合って何時からだっけ？」

「……二時間後……」

「そっか。じゃあちよつとトイレ行ってくる」

「……………」

そう言つてトイレを探しに行こうとすると、シンも付いて来た。

……迷子にならないか心配されてるらしい。

「大丈夫だつて。ほら、これもあるしな」

そう言つて、上着のポケットから小型の端末を取り出した。

これは一種の発信機みたいなものだ。俺とシンの両方が持つており、お互いの位置が表示されるのである。言葉が通じず土地勘もない場所ではぐれると大変なので、千冬姉が持たせたのだった。

「……念の為……」

「つたく、心配性だな。俺だつていつまでもガキじゃないんだぞ」

「……………」

女の子にそんなに心配されて恥ずかしいやら悔しいやら、付いて来なくていいと何度も言つた。だがシンは断固として譲らず、そしてそんなことをしている内にトイレに着いてしまった。

「……わかつたよ。じゃあちよつと待つてろ。小便だからすぐに終わるよ」

「……………」

シンがこくりと頷くのを見て、少しだけ安心する。トイレの中に入れて入って来る気は、流石にないようだ。

そうして俺はトイレに入り、用を足して。

——その直後。誰かに後ろから、何かの薬品を嗅がされて、気を失った。

---

——さて。己がトイレまで一夏に付いて来た理由だが、率直に言つと、護衛のためである。

千冬さんは前回のモンド・グロッソ優勝者であり、今回も最有力優勝候補だ。その弟である一夏には計り知れないほどの利用価値があり、狙われる可能性は大いにある。

千冬さんはそんなことは考えておらず、ただ一夏と一緒に自分の応援に来てくれたと思っっているだろうし、事実それも目的ではある。

……だが正直に言うと、千冬さんは少々甘い。戦闘の才能は己など及ぶべくもないが、しかし彼女は飽くまでも民間人なのだ。日本代表として軍事訓練を受けてはいるだろうが、実際にそれを必要とするような状況は経験がない。危険に対する「嗅覚」では、己の方が優れている。

……と、思っていたのだが。

(……鈍ったか……)

どうやら、永く平和に浸かり過ぎたらしい。

(……不覚……)

異変に気付いたのは、一夏がトイレに入って二分も経ってからだった。

特に混んでいるわけでもなし、小便にしては長すぎる——そう感じた直後、トイレから怪しい男が現れた。

恰好や挙動が不審だったわけではない。だがその男は、妙に重い音を立てる大きなスーツケースを引いていた。

確かにモンド・グロッソには外国から観戦に来る者も大勢おり、旅行者などまったく珍しくはない。だがこんなに大勢の人間が集まる所に、小柄な人間ならば中に入れられるほど大型のスーツケースを持つてくる馬鹿は少ない。そんなものは宿泊先のホテルにでも預ければいいし、この会場にも荷物の預かり所はあるのだから。

「……………」

己は懐から小型端末を取り出し、一夏の居場所を確認。それによると、一夏はまだトイレの中だ。

「……………」

それを見て、己は迷わずにトイレに入った。その際、すれ違った男のポケットにスリの要領で小型端末を滑り込ませる。間違いだった

なら後で適当にごまかし、回収すればいい。

男子トイレに己が入って来たことで周囲の人間が驚いているが一切気にせず、端末が表示していた場所——ある個室の扉を開ける。

その中に、一夏は居なかった。

ただ端末だけが、個室の隅に捨てられていた。

「……………」

端末を拾い上げると同時に殺気を感じ、首を傾ける。すると一瞬前まで頭があつた場所を弾丸が通過し、個室の壁に風穴を空けた。

振り返ると、そこにはサイレンサー付きの拳銃を構えた男が数十人。なるほど、トイレという人目に付きやすい所でどうやって攫ったのかと思つたが、その人目が全て誘拐犯の物だったわけか。

「ちっ」

「……………」

初弾を外したことに舌打ちした男が、引き金に掛けた指に再び力を込める。

二発目の弾丸が発射され——る前に、男の顎を掌打で打ち上げた。

鍛え上げられた大の男が細身の少女の一撃で崩れ落ち、その様に他の男たちが驚いている間にトイレの出口へと走る。

この場の全員を相手にしている時間的余裕はない。一夏を攫つた男の位置は確認出来るが、あまり時間が経ち過ぎると端末に気付かれ捨てられる可能性もある。銃を相手に背中を見せるのは少々危険だが、それでも追跡を優先するべきだ。

「止めろっ！」

「……………」

男の一人が叫ぶと、出口に大男が現れ、塞ぐ。外にもまだ居たらしい。誘拐犯は相当大規模な組織のようだ。

「このガキ！」

「……………」

己に向け、大男が丸太のような腕を伸ばす。それをかわして跳び上がり、大男の顎に膝を、脳天に肘を同時に叩き込んだ。

大男が倒れ、出口が開ける。背後から放たれた銃弾が届く前に、己

はトイレの外に出た。

(……見つけた……！)

周囲を素早く見渡し、先ほどのスーツケースの男を見つける。人混みの中だが、やはりあのスーツケースは目立ち、なんとか見失わずに済んだ。

追跡を開始、男に向かって駆け出す。それとほぼ同時に、トイレの仲間から連絡があったのか、男が己に気付いた。

驚いたのは一瞬、すぐさま男も走り出す。人混みの中では流石に発砲出来ず、脚でもって逃げるしかないのだろう。

そうしてしばらく追ったが、己にとっては運悪く、男にとってはタイミング良く、すぐそばのエレベーターの扉が開いた。男は中の人間を押し退けるようにして駆け込み、扉を閉める。

「……っ」

一步、間に合わなかった。だがそれを悔やんでいる暇はない。エレベーターの階層表示を見上げ、行き先を確認する。

(……下……地下駐車場か……)

周囲を見渡し、階段を見つける。踊場毎に向きが反転している、どこでも見掛ける形の階段。

そこは大勢の人間が行き交っており、それをかわしながら下りて行つては時間が掛かり過ぎる。

——ならば。

「……疾っ！」

鋭く息を吐き、跳ぶ。

狙いは階段の壁、踊場まで半分の地点。

「うわっ!」

「な、なんだ!」

突然階段に飛び込んで来た己の姿に、驚きの声上がる。そんなものに構っている暇など有る筈もなく、己は狙い通りの位置に辿り着くと、壁を蹴りつけ更に跳んだ。

「……っ！」

人々の頭上を越え、踊場の壁まで到達する。再び壁を蹴り、次の壁

へ。

「危ない！」

「うおおお!？」

下の階への出口が見えた。その際素早く視線を巡らせ、空いた場所——安全な着地点を見極める。

そこに飛び込むよう角度を調整し、三度目の三角跳び。

「ぐ……!？」

着地と同時にブレーキをかけ、落下の衝撃に耐える。

全ての運動エネルギーが靴と床の摩擦によって消費されると、再び階段へと飛び込んだ。

三度壁を蹴りつけ、下の階へ。

着地、停止、疾走、跳躍。

それを数度繰り返し己が地下駐車場に辿り着いたのは、エレベーターが到着した一瞬後のことだった。

「なっ、このガキ、どうやって……!？」

「……っ！」

男は懐から拳銃を取り出し、躊躇うことなく発砲。亜音速の銃弾が迫るが、しかし発射された瞬間には既に射線から身体をズラしている。

銃弾をかわしながら近づく己に、男が焦りを浮かべるが——

「……!？」

突如として、己と男の間に車が割り込んで来た。盛大にスリッパ音を響かせながら、己を轢殺せんとする。

「……っ！」

跳躍し、すんでのところで突撃をかわす。しかしその隙に、男はもう一台やってきた車に乗り込んでしまった。

……まだ仲間がいたか。

「乗ったぞ！ 出せっ！」

「……ちいっ……!？」

思わず舌打ちする。急いで体勢を立て直して走るが間に合わず、排気音を轟かせて車が走り去り、外へと出て行った。

流石に、アレには追い付けない。

(……………どうする……………?)

端末の有効距離は約十キロ。大きさからすれば破格の性能と言えるが、しかしこうなると心許ない。奴らの行き先が近場であればいいが、それは希望的観測に過ぎる。

警察に連絡したのでは遅い。そもそも言葉が通じない。仮に通じたとしても、己の会話力で状況が伝わるか怪しいものだ。

千冬さんには連絡出来ない。決勝戦を控えた彼女は、外部からの回線を全て遮断して機体の調整を行っている。ISの調整とは、極めて繊細な作業なのだ。

千冬さんのスタッフたちも同様だ。連絡するにはピットに直接出向く必要がある、そんな時間は当然ない。

(……………どうする……………!?)

考えろ。

無い知恵を絞って考えろ。

たとえ低脳でも、必死になれば、一つくらいは――

「……………っ！」

――何を、馬鹿なことを。

考える必要などない。

答なら、目の前にいくらでも転がっている。

(……………愚鈍……………)

相手が車で逃げるのなら、こちらも車で追えばいい。

ここは地下駐車場。そしてまさに今、車に鍵を掛け、離れる者が居た。

(……………すまん……………)

心中で謝罪しながら、ポケットに入れられた鍵をスリ取る。

気付かれた様子はない。持ち主がある程度離れてから鍵を開け、車に乗った。

運転なら、随分昔に経験がある。かなり荒いだろうが、追跡劇にはカーチェイス交通ルールもなにもあるまい。悟られぬ程度に距離を取り、止まるまで追い続ける。



——待っている、一夏。お前は、必ず助け出す。

——失うものか。失ってたまるか。

——あんな痛みは、もう、嫌だ。

目が覚めると、そこはどこかの廃墟だった。

周りにはあるのは、打ち捨てられた機械や鋼材。どうやら潰れて久しい工場のようなだ。

「……くそ、なんなんだよ、一体……」

まずは立ち上がろうとしたが、出来なかった。床に座らせられて、柱に両手をくくりつけられているからだった。

「畜生、ふざけやがって……！ ほどけ！ ほどけよ！」

大声で喚き立ててみるが、全く反応が返ってこない。俺が縛られている部屋には誰もいないようだ。きつと外で見張っているんだろう。

「……畜生……ちくしよおおお……！」

いくら馬鹿でも、これがどんな状況かはわかる。

——俺は、攫われたのだ。

「くそ、この……！」

なんで攫われたのか、それも大体見当が付く。

……千冬姉だ。千冬姉に何かするために、俺を攫ったんだ。

「ぎげんな、俺は……！」

俺が攫われたことを知れば、きつと千冬姉は助けに来てくれる。

目前に迫った決勝戦を、放り出して。

「俺は、千冬姉の応援に来たのに……！」

だと言うのに、この様だ。俺は応援どころか、千冬姉にとって最悪の障害になってしまった。

「……ちく……しよお……」

あまりの情けなさに涙が零れる。

こんなことなら、大人しく家のテレビで見ているほうがよかった。それなら、千冬姉の邪魔になることもなかった。

「くそ……くそ、くそおっ……!!」

どうにか脱出出来ないかと、必死にもがく。だが両手はしっかりと拘束されており、ビクともしなかった。

……なんで、こんなことになっちまったんだろう。

俺はどれだけ、千冬姉の足を引っ張れば済むのだろう。

俺は――

「な、なんだコイツは?!」

「このガキ、さっきの……!?!」

「尾けられたのか、馬鹿野郎がっ!!」

「……な、なんだ……?」

突然、部屋の外が騒がしくなる。断片的に聞こえてくる言葉から、どうやら誰かがここに来たらしい。

それも、連中にとって「敵」である、誰かが。

「ちっ、撃ち殺せ!」

「おい、全員呼べ! コイツはただのガキじゃねえぞ!」

「撃て! 撃ちまくれ!」

銃撃の音が聞こえてくる。それは絶え間なく続き、次第に激しくなっていく。

「クソ、どうなってやがんだ! 弾が当たらねえ!!」

「さっさと殺せ! 相手はガキ一匹だぞ!」

「こんなんじゃないだ、マシンガンを使え!」

「アパアアアム! 弾持って来おおおい!!」

連中はかなり焦っているらしく、銃声にも負けないほどの怒号が聞こえてくる。

だがそれよりも、気になることは。

――ガキが一人?

――弾が当たらない?

――それって、まさか……。

「ぐあっ!!」

「がはあ……………」

「ぎやつ!？」

「なんだよ、一体……………なんなんだよコイツはっ!!」

ガンツ、ゴンツ、と、重く鋭い音が銃声に混じる。そのたびに銃声の数が減り、そしてすぐに――

「こ、の……………化け物めっ……………」

「……………疾っ!」

ズガンツ!!

一際大きな打撃音が響き、ついに銃声が途絶えた。なんの音も聞こえなくなり、不気味な静寂が続く。

……………どうなったんだ……………?

「一夏……………! どこだ……………!？」

「!? シン!? ここだ!」

聞こえた幼なじみの声に応える。それから数秒と経たず、俺のいる部屋の扉が重々しい音を立てて開いた。

「シン!」

「……………無事……………!？」

「ああ、俺は大丈夫だ! 怪我もしてない! お前こそ大丈夫かよ!？」

「……………無傷……………」

「そうか、よかった……………」

扉から現れたシンは、長さ1メートルと少しくらいの鉄パイプを持っていた。俺を見ると安堵の表情を浮かべ、駆け寄って来る。

「どうしてここが分かったんだ?」

「……………奴に持たせた……………」

取り出した端末を見せながらそう言う。

……………マジかよ。一瞬のことだったと思うんだが……………。

「それじゃあ、どうやってここまで?」

「……………借りた……………」

今度は車のものらしき鍵を取り出しながら。

……………え……………それって犯罪じゃねえの……………。

俺が呆れているのを気にすることもなく、次にシンは軍用の大型ナ

イフを取り出し、俺を縛っているロープを切った。これは恐らく、連中が持っていた物だろう。

「……行くぞ……」

「ああー」

シンに連れられて部屋を出る。するとそこには、銃で武装した男たちが倒れていた。その数、ざっと二十人。

「……すげえ……これ全部お前がやったのか？」

「……………」

シンは頷くだけで答えた。

……流石というかなんと言うか、やっぱりシンは強い。悔しいが、俺なんかとは比べ物にならない。

「あー、その……助けてくれて、ありがとう」

「……まだ早い……」

捕まったところを女の子に助けられるという非常に情けない失態が恥ずかしくて、上手く感謝出来なかった。ゴニョゴニョと言う俺に、シンは目つきを鋭くさせたままだった。

俺の言葉に短く答えながら曲がり角で止まり、その先を慎重に確認する。さつきからこうやって、所々で立ち止まっては周囲を警戒していた。

この工場はかなり大きいようで、まだ先は長そうに見える。そして千冬姉の試合まで、もうあまり時間がない。急がないと間に合わなくなり、最悪――

「……シン、アイツらは全員倒したんだろ？　なら早く行こうぜ」

「……油断大敵……」

「そうかもしれないけどさ、でも急がないと。……千冬姉がこのことを知ったら、決勝戦を放り出しちまうかもしれないだろ」

「……危険……」

千冬姉の決勝戦が心配でシンを急かすが、シンは決して急ごうとしない。慎重に、最大限警戒しながら進んでいる。

「シン、急いでくれ。……頼む」

「……否……」

「……何をそんなに心配してるんだよ。大丈夫だって、もう何も聞こえないだろ？ アイツらはもう残ってないんだ。早く行こう、さつき  
のヤツらが目を覚まさないうちに」  
「……………」

切り口を変えて攻めてみたが、通用しなかった。険しい顔のまま、  
安全を確認しながら進んでいる。

……少し、イラツとした。

「……大丈夫だよ。ほら」

「!? ……待て……………」

シンを追い越して、前に出る。シンが警戒していた、通路の先へ。

「誰もいないだろ？ 連中はもう残ってないんだよ。さあ、早く——」

「伏せろっ!!」

「——え？」

突然、俺のすぐそばにある壁が爆発して、吹き飛ばされて、また気を失った。

……結局俺は、なにも分かってない、無知なガキだった。

自分がどれだけ無力なのかも、気付けないほどに。

だからこそ、慎重さを臆病と思い。勇敢と無謀を、履き違えた。

——俺は、無知で無力で無謀なクソガキで。

——せめてもう少し、考えようとしていれば。

——あんなことには、ならなかったかもしれない。

「おおっと、危ねえ危ねえ。もう少しで殺しちまうところだったぜ」  
通路の壁を破って現れたのは、異形の姿。

背から伸びる、八本の脚。

それらと、それを操る女の手足は、禍々しい色合いの装甲に覆われている。

それは、世界最強の兵器——IS 《インフィニット・ストラトス》。  
「つたく、クソガキが手間取らせやがって。おかげでこの私が、こんな雑用に駆り出されるはめになったろうがよ」

一夏は気を失い、考え得る限り最悪の敵が現れた。

……状況は絶望的。一夏を連れて逃げることは不可能だろう。  
ならばどうする。大人しく死を待つか？

まさか。そんなことは有り得ない。

——己は、井上真改。我が友、織斑一夏を守護する刃。

——たとえ剣折れ、矢が尽き、この身が塵と砕けようと。

——我が名にかけて。敵の喉笛を、食い千切る。

「……ああ？ ガキが一匹しか——!？」

「……っ！」

——ガギャンツ!!

一夏が吹き飛ばされた瞬間に身を隠し、背後に回り込んで奇襲を掛けたが、なんの変哲もない鉄パイプの一撃ではISの皮膜装甲を破ることは出来ないようだ。首に直撃したが、全く効いている様子はない。

「て……めえ。やってくれるじゃねえか」

「…………」

だが身体には届かずとも、精神には届いたようだ。女は顔を憤怒に歪め、己を睨み付けている。

「……捕まえろって言われてんのはブリュンヒルデの弟だけだからな。大人しくしてりゃあ、一瞬で殺してやろうと思ってたけどよ。  
……気が変わった。てめえは、楽には死なせねえ」

「…………」

唇を吊り上げながら、女が言い放つ。……好都合だ。怒りに我を忘

れば、付け入る隙も生まれる。

己は一夏を背に庇い、鉄パイプを両手でしっかりと握り締め、霞の構えをとった。

「はっ、接近戦がお望みか？ ……いいぜ、付き合つてやるよ」  
「……………」

女は両手にカッターを展開し、八本の装甲脚を広げた。そしてゆっくりと、無防備に間合いを詰めて来る。

「さあ、それじゃあ、遊ぼうぜ？ 楽しい楽しい、八つ裂きの時間だ」  
「……………」

ゴウツと、空気を切り裂いて装甲脚が迫る。当たれば真つ二つどころか挽き肉になりそうな一撃。そんな一撃を、生身の体と鉄パイプでは受けきれない。

——故に、受けるのではなく、受け流す。

「……………疾っ！」

「な……………にい!？」

弧を描いて迫る装甲脚に鉄パイプを添え、その軌道を僅かに変える。女は己目掛けて振り抜いた装甲脚が、勢いをそのままに外れたことに驚いたようだった。

「てめえ、何しやがった!？」

「……………」

いきり立つ女を無視し、再び霞に構える。己の意識は、既に戦闘以外の一切を切り捨てていた。

「……………はっ、ただのガキじゃねえってことかよ。ふん。なら、コイツの実戦テストには丁度いいか」

女は再び、装甲脚を大きく広げ——

「それじゃあ——どこまで耐えられるのか、確かめてやるよ」  
「……………っ！」

——それらが、一斉に襲い掛かって来た。

「オラオラオラオラオラアアアアアアアアッ!!!」  
「オオオオオオオオオオオアアアアアアアアッ!!!」

互いの得物が幾度となく交わる。

そのたびに、皮膚が弾け肉が裂け骨が軋み、体中が悲鳴を上げる。  
だが、それでも。

この命を奪うには、まだ足りない。

「てめえ……人間か!？」

「オオオオオオッ!!」

捌き、逸らし、流し、いなし、かわし、避け、ただひたすらに凌ぎ続ける。

たった一度しか無いであろう、勝機を待つて。

「いい加減……くたばりやがれっ!!」

「オオオオアアアアアッ!!」

後のことなど全く省みず、全身全霊でもって防御を続ける。

己が女の攻撃を凌ぐたび、廃工場の壁が切り裂かれ、柱が折れ、床が砕け、置き去りにされた資材が吹き飛ぶ。

(……行かせん……!)

ギシリ、と、体内から音が響く。それがどこかの骨に亀裂が入ったことによるものだと思いつたが、それがどうしたと言うのか。

(……ここから先へは……)

突き出された装甲脚が腿を抉る。

——問題ない。まだ生きている。

カッターによる雑払い。脇腹を切り裂かれた。

——だからなんだ。まだ動ける。

装甲に覆われた脚から蹴りが放たれる。掠めただけで、肩が外れた。

——知ったことか。己はまだ、戦える——!

(一歩たりと——!!)

「死ねええええええええっ!!」

「オオオオオオオッ!!」

カッターが袈裟切りに振り下ろされる。鉄パイプを翳すが、当然そ



んなものは容易く断ち切られた。

ニイイ、と、女の口元が歪む。得物が半分ほどの長さになり、長さを目一杯に使っての防御は出来なくなった。しめた、とても思ったのだろう。

——だがそれこそが、己の狙いだ。

装甲脚が一齐に振るわれる。逃げ場を塞ぐようなその猛攻は、今の得物では凌げまい。

だが全ての装甲脚で攻撃を仕掛けるということは、女が自分を守るために使えるモノは、両手に持つカটারのみ、ということでもある。そしてこの一齐攻撃は、決着を焦ってか大振りだ。

「……オ」

——この瞬間を、待っていた。

上下左右背後から迫る凶刃。だが、前は空いている。

ならば、前へ。

前へ。

前へ。

前へ——！

「——オ」

鉄パイプを、真つ直ぐに構える。

半ばから断たれた、鉄パイプを。

——斜めに切断され、鋭く尖った、切っ先を。

「オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ !!!」

「な——!?!」

振るわれたカッターをかわし。

渾身の力を込めて。

女の首に、突き立てた。

「……驚かされるぜ、お前には」

「!?」

装甲脚が動き、開いた先端部分が己の手足を拘束し、そのまま空中に礫にされた。

「はっ、まさかそんなもんで、ISのシールドエネルギーにダメージを与えるとはよ」

「……っ！」

——貫けなかったか。

「だが、無謀だったな。さっきのヤツらと同じだと思ったか？」

「……ぐっ……っ！」

装甲脚に力が込められ、ギシギシと関節が鳴る。振り解こうと必死にもがくが、生身の人間の力ではどうにもならない。

「さあて、それじゃあ、遅くなっちゃまったが——八つ裂きの、続きと行こうぜ？」

女の顔が嗜虐敵な笑みを浮かべ、残った四本の装甲脚が動く。

その先端の刃が己に向けられ、ゆっくりと近付いて来る。

そして。

「こういうのはさあ、お楽しみを最後までとっとくべきだよな？」

——まずは、左腕からだ」

——ぎくり。

ぎくり、ぎくり、ぎくり、ぎくぎくぎしゅぐちやずしゅぶちがりがりごりがりぐきぐきぐきんめきめきばきみしびきばきばきんぶちりぶちみちぶちばづん。

「ぐ、があああああああああああああああああああああああああああ

!!!」



「……有り得ねえ」

——貫いた。どんな兵器も凌駕する、ISの防御を。なんの変哲もない、ただのナイフで。

「……てめえ、何者だ」

「フウーツ、フウーツ……い！」

女が問うも、真改は答えない。

正確には、答えられない。傷ついた全身から、そして引き千切られた左腕から大量の血が溢れ、意識がほとんど残っていないのだ。

今真改の両足を支えているのは、人体の仕組みさえねじ伏せるほどの闘争心だけだった。

「……ハ。ハハ、ハハハハッ。アハハハハハハ!! なんだお前、なんなんだよお前っ！ 有り得ねえ有り得ねえ、マジで有り得ねえぞ!! アハハハハハハ!!」

突然、女が笑い出す。その様子は、無邪気な子供のようにも、どうしようもない極悪人のようにも、気が触れた狂人のようにも見えた。「いいねいいねえ！ こいつぁいい!! 殺しがいるぞ、お前はよおっ!!」

女は再び武器を構え、真改に向ける。その表情は——狂喜。

「わけ分かんねえ、なんだこりやあ!? この私に傷を付けやがってよ！ ムカつくなあ、憎たらしいなあ、アハハハハハハハハッ!!」

女は笑い続ける。自分でも、なにが可笑しいのか分からずに。

「……殺してやる。ズタズタに引き裂いてやる。てめえの中身がどうなってるのか、確かめてやるよ」

顔に狂笑を張り付けたまま、女は一步踏み出した。

もう一步。

また一步。

さらに一步。

あと一步で、間合いに——

『——そこまでよ、オータム』

『……な』

その直前で、女——オータムのISに、彼女の「上司」から通信が

入った。突然のことに、そしてその内容に、オータムは一瞬、呆然とする。

『その子のことは放っておきなさい。すぐにそこを離れるのよ』

『ぎっけん！ 今最高にいいところなんだよっ！』

『ブリュンヒルデが向かっているわ。もうすぐそこに着く。彼女に見つかったら、あなた、生きて帰って来られるの？』

『く……分かったよ。帰還する』

『そんなにふてくされしないで、オータム。あなたは自分の役目を完璧に果たしてくれた。流星は私の恋人よ』

『……心配するな。そこまで言われなくても、ちゃんと戻る』

ただの命令ならば背いたかもしれないが、しかしブリュンヒルデが来るとなればそうもいかない。勝ち目など微塵もないことは重々承知しているのだから。

踵を返して立ち去ろうとし、しかしその前に、もう一度真改を見る。

もはや見えてもいないだろう目を、真っ直ぐに睨み付け――

「お前は私が殺す。私以外に殺されるんじゃないぞ」

「……………」

返事はない。そもそも聞こえてさえいないだろうことは、オータムにも分かっていった。

だが、それでも。

言わずには、いられなかったのだ。

「……もつとも、その傷で助かるかはかなり怪しいけどな」

――そして、オータムは廃工場を去った。千冬が到着したのは、それから僅か一分後のことであった。

(一夏……真改……！ お願いだ、どうか無事でいてくれ……！)

私がドイツ軍から一夏誘拐の報を聞いたのは、数分前。きっかけは、モンド・グロツソの観戦に来たとある観光客からだという。

その観光客は地下駐車場に車を停めたあと、忘れ物に気付いて車まで戻った。すると停めた筈の場所に車がなく、それどころか車の鍵すらなかった。それで警備の者に言って監視カメラを見せてもらったところ、黒髪の少女が鍵と車を盗む瞬間が映っており、それが私の弟である一夏と共にアリーナに来ていた真改だと気付いた者がいた。加えて真改は大型のスーツケースを引く男を追っており、そこから遡って各所の監視カメラを確認したところ、一夏の誘拐が判明したのだ。

その後の行方については、盗まれた車のGPS装置により追跡、とある廃工場を示している。

(お願いだ、頼む……！ どうか、どうか無事で……！)

既に決勝戦は目前まで迫っていたが、私は躊躇せずに一夏たちの救出に向かった。世界最強の称号と、二人の命。どちらが重いかなど、秤に掛けるまでもない。

全速力で廃工場へ向かい——今、到着した。

「一夏あー！ 真改あああい!! どこだ!? どこにいる!?!」

展開しているIS、「暮桜」のハイパーセンサーを使って工場内を調べらる。

「……だめだ、多すぎる……!」

生命反応をサーチしたが、誘拐犯たちのモノが多すぎて判別できない。全員気絶しているの、おそらく真改が倒したのだろう。

こんなことなら二人に渡した端末を、私も持っていれば良かった。そう悔やみながら仕方なく脚で探し——

——そして、見つけた。

「いち……!?!」

一体何があったのか、破壊され尽くした通路に。

二人は、居た。

「……しん……かい……?」

気を失い、倒れ伏した一夏と。

全身から血を流し。

左腕を失って。

誰がどう見ても、瀕死の状態でありながら。

それでもなお、一夏の前に立つ。

私の大事な、妹分が――

「し……しんか――!?!」

「……っ!」

生きてるのが奇跡としか思えない真改を支えるために、駆け寄ろうとした。

だが、出来なかった。

通路にぶちまけられた大量の血に怯んだ、わけではない。

そんなものよりも、遥かに原始的な恐怖を感じたからだ。

――即ち、「死」の恐怖。

「か――は――」

息が出来ない。

体が動かない。

何故だ、私は、行かなければならないのに――

「ぐ――」

固定された視界に、真改の姿が映っている。

血を失い過ぎたからか、その目は焦点が合っておらず、恐らくほとんど見えていない。

――だと、いうのに。

「お――」

なんと鋭い眼光か。

そこから放たれる殺気の、なんと凄まじいことか。

これに比べれば、私が戦ってきた相手の闘志などそよ風のようなものだ。

体が動かないことにも納得がいく。本能が警告しているのだ。

「アレに近付くな。死ぬぞ」と。  
——だが。

「ぐ——あああああつ!!」

私は知っている。それほどまでの殺気が、何のために放たれているのかを。

——守るため。背に庇った少年を、一夏を守るために。

ならば、何を臆することがある？

本能なんぞねじ伏せろ。

恐怖している暇などない。

私の「死」よりも、この少女を失うことの方が、何万倍も恐ろしい

——

「真改あああああいつ!!」

「……っ!」

私の声が届いたのか、真改の殺気が霧散する。動くようになった体で慌てて駆け寄り、傷だらけの体を壊してしまわないように、そっと抱き締めた。

「真改、もういい、もう大丈夫だから……!」

「……ち……ふ……?」

「そうだ、私だ。もういいんだ、一夏は無事だ、もう、お前が戦う必要はないんだっ……!」

「……そ、う……か……」

真改の声はとても小さく、耳を澄ませなければ聞こえない。

……声だけではない。呼吸も、心臓の鼓動も、あまりにも弱々しい。早くなんとかしなければ、次の瞬間にも、止まってしまいそうなほどに——

「……っ……かれ……ね……る……」

「ああ、ゆっくり休め。後は私に任せろ」

「……」

真改は意識を失い、その細い体を私に預けて来る。

改めて傷を見ると、正直に言っただけで何故生きているのか不思議なほど酷い状態だった。全身の傷も相当なものだが、何より凄惨なのは左腕



だ。二の腕から下が無く、肩や鎖骨、脇にいたるまで惨たらしく引き裂かれている。

爆弾で吹き飛ばされてもこうはなるまい。鋭利な刃物で、執拗に切り刻まれたのだ。

「……許さん。必ず見つけ出し、報いを受けさせてやる……!」

ここに倒れている男たちの仕業ではあるまい。この通路の惨状から見て、相手は恐らく、ISだ。

世界最強の兵器で生身の者を、それも私の妹分をなぶったことに対し、いまだかつてなかったほどの怒りを感じた。

……そうでなければ、この場で泣き崩れていたかもしれない。

「ブリュンヒルデ! どちらに!?!」

「ここだつ! 早く……! 早く来てくれつ!!」

少し遅れて、ドイツ軍の者たちが到着した。元々は私に先行していたのだが、ISの速度で追い抜いて来たのだ。

「な、これは……!?!」

「一夏を、弟を頼むつ!」

「な!? それよりもその子を! 今救急車を——」

「それでは間に合わん! 私がつれて行く!」

真改を抱き上げ、飛び上がる。負担を掛けないよう少しずつ加速し、風圧から守るように抱えて飛ぶ。

「死ぬな、真改……! 頼む、死なないでくれつ。お前に死なれたら、

私は、一夏は……!」

祈るように。縋るように。

次第に冷たくなっていく真改に必死に呼び掛けながら、私は病院へと急いだ。

……俺が目を覚ました時には、何もかもが終わっていた。

「……………は?」

「……………起きたか、一夏」

場所はどこかの病院のようだ。俺はその一室で寝かされていた。

「……千冬姉？ 俺、なんで……」

「お前は頭を打って気を失っていた。検査したが、軽い脳震盪だそう  
だ。じきに意識もはつきりするだろう」

「……」

すらすらと答える千冬姉。その声はいつも通りのようだったが、ほんの少し、震えているような気が――

「……!? そうだ、シン！ 千冬姉、シンは!?」

「……っ、……真改、は……」

シンのことを訊いた途端、千冬姉の顔が険しくなった。それはひどく、不安を掻き立てる反応で。

「織斑さん」

「先生！ 真改の容態は……!?!」

「……え？」

……シンの、容態？

え？ なんだ？ 何があつたんだ……？

「……千冬姉？ ……シンに、何があつたんだ……？」

「……それ、は……」

「私から説明しても？」

「……はい、お願いします」

千冬姉は俺の質問に答えられず、医者が引き継いだ。その医者顔も沈痛で、余計に不安になって。

「それでは、ご案内します」

「はい。……一夏、立てるか？」

「ああ……」

促されて、若干ふらつきながら立ち上がる。二人の後を付いて行くと、行き先は別の病室だった。

「織斑……一夏君だったね」

「え……はい」

「この中に井上さんがいる。君にはショックな姿だろうけど……取り乱さないで。峠は越えたけど、それでもまだ危険な状態だ」

「え？ それって、どういう……」

「……入るよ」

ガチャリ。

扉を開ける音が、妙に耳に残った。

そして、部屋の中には。

「——あ」

生命維持装置に繋がれた、一人の少女。

「あ、あああ」

シートに覆われていても、分かった。

「あああ、あ——ああっ」

本来、左腕がある筈の場所が。

「あああああああっ!!」

——空っぽなことに。

「落ち着け、一夏っ!!」

「あああああっ!! なんて、なんでこんな!? なんて——」

「落ち着け!!」

「シンっ!? なんで!? なんでだよ! なんて、こんな——」

「落ち着けっ!!」

バシンッ!!

頬に走る衝撃。それで頭に登っていた血が引いて、見れば千冬姉が

平手を振り抜いていた。

「落ち着け、一夏。落ち着くんだ……！」

震える声でそう言つて、千冬姉は俺を抱き締めた。  
声だけでなく、体も震えていた。

「だって、シンが……！ シンの腕が……！」

「……っ」

「お、俺のせいだつ……！ 俺が、シンの言うことを聞いてれば、こんな……！」

「違うつ、一夏、お前のせいじゃない！」

「だって、シンは強い！ 強いんだつ！ 俺がいなけりや、負けるはずが……！」

「違う、お前のせいじゃない、お前のせいじゃないんだつ……！」

「う、ぐううう……！ うあああああ……！！」

泣いて、泣き喚いて、千冬姉に縋り付いた。

千冬姉も泣いていて、二人で泣き合つて。

しばらく泣き続けて、少し落ち着いた。

「……井上さんの状態を説明します」

「……はい、お願いします」

それを見計らつて、医者が言った。

……辛いけど、それは、聞かなきゃならない。

これは、俺の罪だから。

「処置は終わりました。出血は致死量でしたが、なんとか一命は取り留めました。ショック死しても不思議ではない傷でしたが、すごい生命力です」

「……左腕は？」

「……復元は不可能です。神経も損傷が激しく、筋電義手も使えないでしょう」

「……っ！」

その事實は、どんな剣よりも鋭く俺の心に突き刺さった。

……シンの左腕は、治らない。

シンの左腕が。

あんなに、強いのに。あんなに、剣が好きなのに。

左腕は、もう――

「今眠っているのは、血を流し過ぎたことと、体力を消耗したことによる衰弱からです」

「……どのくらいで起きるんですか？」

「二、三週間は掛かるかと」

「そんなに？」

「本来なら、ここまで体力を消耗することはありません。というよりも、出来ません。遭難等で長期間休むことが出来ない状況に置かれてもしない限りはね。」

人間には自分の身体を壊してしまわないように、リミッターが設けられています。人間は本当の限界の三割しか力を発揮出来ない、という話を聞いたことはありませんか？ 体力もそれと同じです。

ですが井上さんは、本来なら使えない、使ってはいけない体力まで使い果たしています。体力どころか、文字通り命そのものと言えるまでのまで、ね」

「……それは、つまり」

「はい、人体のリミッター、人間が自分を守るためにあるそれを、無意識下で機能するその枷を、意志の力で外した。井上さんはその代償として、今も眠り続けているんです」

「……………」

……あの後。俺が、無様に気を失った後。

シンは、戦っていたんだ。自分の命を燃料にして。

俺を、守るために。

「…………ごめん」

気付けば、俺はまた泣いていた。

溢れる涙を拭いてもせずに、眠り続ける少女に謝る。

「ごめんな、シン……………」

届かないことは分かっている。

謝って許されるようなことでは、ないことも。

「ごめん……………」

それでも、謝罪の言葉を口にした。

シンがどれほど剣が好きだったか、俺は良く知っている。

そのシンの左腕を、俺は、奪ったのだ。

「ごめん、シン…………ごめん……………」

目を覚まさない少女の横に跪き、俺はただただ謝り続けていた。

「真改の家族は日本に居ます。連れて帰れますか？」

「大丈夫ですよ。今は疲れて眠っているだけです。カルテを纏めておきますので、日本の医者に渡して下さい」

「分かりました。ありがとうございます」

真改を診てくれた医者に頭を下げる。ドイツ一の外科医と呼ばれるこの人の技術がなければ、真改は助からなかっただろう。

それにこの人のおかげで、左腕以外はほとんど傷痕が残らないそうだ。

「…………彼女の左腕は残念でした。私にもっと力があれば」

「いえ、あなたに出来なかったのなら、誰にも出来なかったでしょう」  
そもそも真改の怪我は私の責任だ。自分の立場も弁えず、軽々に身

内を連れて来た。

少し考えれば分かった筈だ。一夏が狙われる可能性があることは。

「…………お世話になりました」

「大変なのはこれからです。井上さんの怪我は左腕だけではありませんから、リハビリもかなり過酷なものになるでしょう」

「…………大丈夫です、アイツなら」

「…………そうですか。ブリュンヒルデがそう言うのなら、きつとそうなのでしょう」

「その呼び方は止めて下さい。…………妹分も守れずに、何が世界最強だ」  
「……………」

真改を連れて来たのは私だ。ISに興味があるようだったので、唐沢さんに頼んだのだ。いつも一夏が世話になっているので、恩返し

ためにも、と。

それがどうだ。恩返しどころか、真改の未来に大きな障害を作ることになった。この罪は、一生を掛けても償えない。

「あまり自分を責めすぎないように。弟さんもかなり思い詰めているようですから、あなたが支えてあげないと」

「……本当に、何から何まで、ありがとうございます」

もう一度頭を下げ、部屋を出る。

……日本に帰らなければ。やらねばならないことが、あるからな。

---

——夢を見ていた。

『やれやれ、またアームズフォートか。企業の連中も懲りんな。こんなデカいだけのガラクタでは我々を止められんと、まだ分からのか』

『……油断……』

『一人でも十分な相手だ。それにお前も居るとなれば、油断もしたくなる』

『……』

戦場を求めた古兵がいた。

実力、人格ともに信頼の置ける男で、彼と赴いた戦場では、安心して切り込めた。

『……』

『……』

己よりも寡黙な猟師がいた。

剣と銃、寄る辺は違うが、在り方自体には大いに共感していた。彼とは会話にならなかったが、共に酌み交わした酒は実に美味かった。

『どうにか時間内に終わりました。あなたのおかげです、真改さん』

『……上出来……』

『付き合わせてすみません。もっと長く戦えれば、戦術の幅も広がるのですが』

『……………』

時間限定の天才がいた。

短時間しか戦えぬことを逆に活かす強かさを持ちながら、それを恥じる誠実さも持つあの少年は、どうにも放っておけなかった。

『どうです？ 真改。可愛らしいでしょう？』

『……不気味……』

『まあまあそう言わずに、ほら、もっと近くで見えてあげてください』

『……寄るな……』

どうにも苦手な変人がいた。

全く理解できない嗜好の持ち主ではあったが、その愛情の深さだけは良く分かった。ペットを残して戦場に出ているためか実に粘り強い戦いをし、それが頼りになる男だった。

『ごほっ……ちい……いい加減ガタが来てるな、俺も』

『……………』

『そんな心配そうに見るなよ。俺の死に場所は戦場さ。棺も墓も要らん、この機体と共に朽ちることが出来れば、それでいい』

『……………』

最期まで戦い抜いた傭兵がいた。

死ぬために戦いながら、しかし決して手を抜かず、勝利のためにあらゆる手段を尽くし、しかし最後に選ぶのは、正面切つての一騎打ち。矛盾だらけの在り方だが、どういうわけか尊敬出来た。

『チェックメイト。また私の勝ちだ』

『……完敗……』

『貴方は決して強くはないが、その真っ直ぐな打筋は、相手をしていて面白い。時間が合えば、また頼む』



『……応……』

影に徹した若き謀略家がいた。  
仲間を危険な戦場に送り出すことを、自分の役目と割り切っていたが、それでもその痛みは隠し切れていなかった。だからこそ皆、彼を信頼し、彼に従った。

『ハッハー！ よおシンカイ！ 元氣そうでなによりだぜえ!!』

『……五月蠅い……』

『お前が静かすぎるんだよ！ オレとお前なら、丁度二人分くれえだろ!』

『……十人分……』

ひたすらに喧しい大男がいた。

騒がしいのは苦手だと何度も言ったが、何度言っても無駄だった。しかし何故か、あの男の騒がしきは、不快ではなかった。

『は、相変わらず剣の稽古かよ。毎日毎日、よくもまあ飽きないもんだ』

『……継続……』

『なんでそんなに拘るのかねえ。銃も剣も、同じ人殺しの道具だろうに』

『……』

孤高にして異端の思想家がいた。

誰の理解も求めず、誰のことも理解しようとしなかったが、彼の言葉は常に現実の冷たさを纏っており、己たちが大義に酔うことを防いでいた。

『ふふん、今回は私の勝ちだな。これで勝敗は五分だ』

『……次は勝つ……』

『悪いがそうはいかん。お前の剣もようやく読めて来たんだ、そろそろ勝ち越させてもらおう』

『……やってみろ……』

かつて宝石と呼ばれた女傑がいた。

その魂の輝きはまさに宝石と呼ぶに相応しく、その強さは誰もが認めていた。彼女が先陣を切れれば、誰もがその後が続いた。

『お前さんも変わつとるのう。まあうちは皆、変人揃いだがな』

『……貴方は……？』

『私か？ 私は一番の変わり者よ。なにせこんな古い先短い爺の身で、未来のことばかり考えとるんだからなあ！』

『……』

生涯を戦い続けた老人がいた。

武闘派の彼は戦略にはあまり口出ししなかったが、長年の経験からくる言葉には皆が耳を傾け、頼りがいある彼の背中に導かれて来た。

『残るは私たちだけ、か。……しかし、よくここまで付いて来てくれたものだ』

『……当然……』

『……フ。お前に守られるのなら、何も恐れることはない。往くぞ、真改。最後の戦いだ。……私の背中を、お前に託す』

『……任された……』

殺戮者の汚名を被った革命家がいた。

人類のために、人間を殺した。未来のために、現在を犠牲にした。それ以外に道はなく、もしあるのなら間違いなくそちらを選んできた。

世界中から憎まれていたが、誰よりも彼を憎んでいたのは彼自身だった。

仕方なく人を殺し、しかし仕方ないと割り切れない、優しい男だった。

『ほら真改、笑って？』

『……』

『ほくら、笑って笑って』

『……………』

『……むう、笑わないわね』

『頑固なやつめ……』

『……………』

『よし、それじゃあ最後の手段だっ』

『こちよこちよこちよ〜』

『……、……………っつ!!』

優しい両親だった。

短い間だったが、本当に幸福な毎日だった。

だから、また失った時。

もう二度と、失わないと誓った。

そして――

『さて。魅せてもらおう、お前の剣を。お前がどれだけ、強くなったのかをな』

『……応……!』

――結局。

「彼女」には、届かなかったな――

## 第48話 原罪（懺悔編）

「——ふざけんなっ!!」

怒号と共に、頬を殴られる。その一撃は重く、しかし体よりも心に衝撃を受けた。

「宗太、やめなさい!」

「うるせえ!」

唐沢さんが宗太を止めるが、宗太はさらにもう一撃、拳を叩き込んだ。

「アンタ知ってんだろうがよ! シン姉がどっだけ一生懸命剣を練習してるか! そのシン姉の腕もいで、ゴメンで済むかつ!!」

「宗太! 一夏君だつてわざとじゃないんだ、運が悪かつたんだよ」

「そんな簡単に片付けられるほどなあ、シン姉の腕は安くねえんだよっ!!」

「やめてくれ、宗太!」

再び拳を振り上げた宗太の前に、千冬姉が割り込む。

……その表情は、今まで見たことのないものだった。

「宗太、一夏を責めないでくれ。……全部、私の責任なんだ」

千冬姉の表情を見て、宗太は拳を下ろした。

だがここまで音が聞こえるほどに、強く奥歯を噛み締めている。

「……シン姉が、何をしたつて言うんだよ」

「何もしていない。悪いことは、何も。……悪いのは私だ。私のせいなんだ」

「……くそつ、くそお……!」

宗太は呻くように呟いて、眠るシンの横に泣き崩れる。宗太だけじゃない、小夜も、隆さんも、唐沢さんも、他のみんなも、涙を流している。

その様子から目を逸らさずに見ながら、千冬姉は両手を握り締めた。

どれほどの力を込めているのか、両手からは血が流れていて。

俺の大切な人たちが、みんな泣いている。

なのに俺には、何も出来なくて。  
シンはまだ、目を覚まさない。

「……本当に、申し訳ありませんでした」

「……………」

唐沢さんに頭を下げる。今は病室の外で、二人だけで話をしていく。

「……ごめん、千冬ちゃん。私は、何を言えいいのか分からない」

「……申し訳ありません」

私も何を言えいいのか分からなくて、ただ謝ることしか出来なかった。

唐沢さんが、孤児院の子供たちをどれだけ大事に思っているかは知っている。それこそ、自分の子供のように。

——唐沢さんは三十年ほど前、奥さんを出産の際に亡くしている。孤児院を開設したのはその数年後。初めはただ自分の子供の代わりとして、心の傷を癒やすために迎え入れたが、いつしか本当に愛するようになった——

自分の罪を告白するように、そう語っていた。

その唐沢さんは、真改の怪我を自分のことのように苦しんでいる。本当なら、子供たちと一緒に、泣き崩れてしまいたいだろうに。

——なのに。

「……真改は、変わった子でね。ほとんど喋らなくてとっつきにくいのに、一度繋がりを持つとどんどん仲良くなっていく」

「……誠実なやつですから。人となりが分かれば、すぐに信頼される」  
「うん、私も信頼しているよ。だから真改なら大丈夫だろうと思って、千冬ちゃんに連れて行ってもらった。珍しく真改からお願いされた、というのもあるけれどね。」

……それが、君に重荷を背負わせることになってしまった」

「……真改の左腕は、私の責任です。私が背負わなければならぬ」

「そうだね、千冬ちゃんも責任もある。一夏君にもある。私にだってあるし、無茶をした真改本人にもある。……だから、みんなで背負わないと」

「……唐沢さん……」

許されていたら、私は自分で抱え込んで、いずれ壊れていたかもしれない。

責められていたら、私は痛みにも耐えきれずに、折れてしまっていたかもしれない。

私を許すのではなく、ただ責めるのでもなく。

共に背負い、共に償おうと。

その言葉で、私がどれほど救われたか。

「……子供たちのことは、私に任せてほしい。千冬ちゃんも忙しいだろうけど……出来るだけでいい、一夏君に付いてあげてほしい。そして真改が目覚めたら、またみんな話をしよう」

「……分かりました」

促されて、また病室に入る。子供たちはまだ泣き続けており、一夏は部屋の隅に、虚ろな眼をして立っていた。

……その姿に、また泣きそうになって。

歯を食いしばって、涙をこらえた。

「……一夏、帰るぞ」

「……千冬姉？ でも……」

「帰るんだ。私たちがここにいても、今は何も出来ない。……それにお前、昨日から何も食べていないだろう。このままではお前まで倒れてしまう」

「……分かった」

そうして、一夏を連れて病室を出る。

思ったより素直に付いて来たが、それがまた、不安を感じさせて。

扉が閉まる瞬間まで、一夏は真改を見ていた。

翌日。平日だったが、俺は学校を休んだ。無断欠席だった。

千冬姉はいない。モンド・グロツソの決勝戦を放り出したことで、色々なところから呼び出されているのだ。俺を残して行くことを最後まで心配していたが、しかし国からの呼び出しを無視することはさすがに出来なかった。

そこで俺は、今更になって気付いた。俺はシンの左腕だけじゃない、千冬姉の栄光、プリユンヒルデ世界最強の栄誉まで奪ったということ。

「……………」

部屋の中に引きこもって、膝を抱えて、ずっと同じことを考えていた。

——俺さえ、いなければ。

「……………シン……………」

幼い頃、あの孤児院に初めて行った時、アイツに出会った。

第一印象は変なヤツ。次は、無口なヤツ。黙っているシンに話しかけて、遅れて自己紹介したら名前だけ答えてくれて、キレイな声だな、なんて思った。

その後孤児院に遊びに行くと、シンはいつも、木の枝を振っていた。なんの遊びかと訊けば鍛錬と答え、その意味が分からずにいる俺に剣の練習だと教え、じゃあ勝負しようぜと挑めば瞬く間に返り討ちにされた。

悔しくて何度も挑戦したが、結果はいつも同じだった。なんとかして勝てないものかと考えて、千冬姉に剣を教わったり、篠ノ之道場に通ったりした。

そうやって、剣に対する理解が深まるに連れ、分かった。シンがどれだけ凄いのか。

気付けば憧れていて、目標になっていて、追い掛けていて、今でも挑戦し続けている。

そのシンの、左腕は。

俺の、せいで。

「……………千冬姉……………」

三年前、第一回モンド・グロツソ。千冬姉は、優勝した。

世界最強と賞賛されて、千冬姉は世界中を忙しく飛び回っていた。家に帰れない日も多く、帰って来ても夜遅くだったり、またすぐに出なくちゃいけないかったり。

そんな千冬姉のために、家事を覚えた。初めのうちは失敗ばかりで、出来上がった料理はひどい味だった。それでも千冬姉は、不味い不味いと文句を言いながら、一度も残したことはなかった。

たまの休みには、俺の剣の鍛錬に付き合ってくれた。疲れているだろうに、一切手抜きのない、厳しい指導だった。そうして次の日には、また出掛けて行くのだ。

千冬姉は色々なものを犠牲にして、ISに打ち込んで来た。恋人だっていたこともないし、友達と遊びに行くこともない。

そうまでして、自分を鍛えていたのに。  
その実力を、世界に示す絶好の舞台だったのに。

——俺の、せいで。

「……俺さえ……」

始めから、いなければ。

こんなことには、ならなかった。

シンはまだ、両手で剣を振っていて。

千冬姉はまだ、世界最強になっていた。

ただ一人、俺だけが。

始めから、いなければ。

「……シン……千冬姉……」

どうすればいい？ 俺は、どうすればいいんだ？

シンも千冬姉も、俺なんかより全然強くて、二人が失ったものには、俺がどんなに頑張っても届かないのに。

謝って取り戻せるのなら、いくらでも謝る。喉が枯れて声が出なくなるまで謝って、腰が曲がって戻らなくなるまで頭を下げて、頭蓋骨に穴が空くまで地べたに額を擦り付ける。

償って取り戻せるのなら、いくらでも償う。この先の俺の人生に、何も得るものがなくても構わない。代わりに得る筈だったもの全てを二人に捧げられるのなら、それでいい。



——だけど。

「……そんなことして……なんになるんだよ……」

二人とも、そんなことは、望まない。きつと怒り心頭に発しながら、拳と共に突っ返してくるだろう。

なら俺は、どうすればいい？ どうすればいいんだ——？

——ピンポーン——

「……う？」

突然、家のチャイムが鳴った。誰か来たようだが、今は宅配業者さえ相手にする気力はない。騙すようで悪いが、居留守を使わせてもらう。

——ピンポーン——

二度目のチャイム。俺の経験上、大抵の人は二回鳴らして出なければ帰る。今回もそうだろうと思っていたんだけど——

——ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ——

「おいこら一夏あつ！ 開けなさい！ 開けろつつつてんのよ!!」

バンバンバンバンツ!!

「おい鈴、やり過ぎだって！ 見ろよ、近所の人たちが何事かと思ってるじゃないか。警察呼ばれるぞ？」

「その前に玄関をぶち破るわ」

「じゃあ俺はその前に逃げるわ」

下から聞こえてくる、馬鹿な遣り取り。それは聞き慣れた、親友たちの声だった。

「……鈴と、弾……う？」

フラフラと立ち上がり、玄関に向かう。別に彼らと話そうと思っただけではなく、適当にあしらって帰ってもらうつもりだった。おそらく鈴がやっているのだろうピンポンラッシュとドア叩きは激しさを増しており、冗談抜きでチャイムを破壊しドアを破りそうな勢いだ。もしそうなれば、また千冬姉の負担が増える。それだけは、嫌だから。

「……今開ける」

ガチャリ。玄関先には、中学の制服姿の二人がいた。

……もう学校が終わる時間だったのか。全然気付かなかった。

「やっとなってきたわね」

「よ、一夏。ひどい顔だな」

「……なんの用だよ」

「なんの用って、アンタが無断欠席なんかするから様子を見に来てやったんじゃない」

「モンド・グロツソ、こないだ終わったよな？　なんか千冬さんが決勝棄権してたから、何かあったんじゃないかってさ」

「……それは」

「そうそう、それにシンも休みだったし」

「……っ!!」

「シンも一緒に行ってたよな？　先生に聞いても、まともに答えてくれねえんだよ。……本当に、何があったんだ？」

「……シンは」

……ああ、そうだ。孤児院のみんなだけじゃない。学校にも、シンと仲が良いやつは大勢いる。

そしてみんなが知っている。シンがいつも、剣の鍛錬をしていることも。

「……シン、は……」

俺はこれから、何人の泣き顔を見ればいいんだろう。シンが左腕を失ったと、もう二度と治らないと、伝えればいいんだろう。

……嫌だ。そんなものは見たくない。誰かが、俺のせいで傷付く様なんて。

「……シン……は……」

なら、逃げてしまえばいい。簡単だ、このドアを閉めて二人を追い返し、目を閉じ口を閉ざし耳を塞げばいい。

……だが、逃げてどうなる？　みんないずれ知るだろう、シンのことを。俺が逃げても、どうにもならない。ただ嫌なモノを見なくて言わなくて聞かなくて済むだけ。

「……アイツは」

なら、俺が自分でやらないと。  
それはとても、辛いことだけど。

——逃げることだけは。

それだけは、したくないから——

「……シンは、入院してる」

「……え？」

「……マジかよ、ひどいのか？」

「案内する。ちよつと待っててくれ」

一旦中に戻り、洗面所で頭に冷水を浴びた。部屋に戻って外出用の服に着替え、朝から何も食べていないことを思い出して食パンを一枚掴み、外に出た。

口にパンを放り込み、ろくに噛まずに呑み込んで——

「待たせた。……行こう、付いて来てくれ」

謝っても許されない。

償おうにも償い切れない。

なら、せめて——

(……背負うよ。これは、俺の罪だから)

……それが。

俺の、最初の決意。

「……えぐ、うろう……」

「……ぐす……あんまりだろ、これは……」

「……………」

シンの病室に案内すると、鈴も弾も、シンの姿に涙を流した。俺は二人の様子を両目に焼き付けるために、俯くのを必死にこらえていた。

「……俺のせいなんだ。モンド・グロツソの決勝戦前にさらわれて、シンは俺を助けるために戦って……こうなった」

「……それは、お前のせいじゃないだろ」

「俺のせいなんだよ。シンは俺を助けて、一緒に逃げた。……その時シンは俺に注意した。油断するな、警戒しろって。けど俺は千冬姉の試合に間に合いたくて、安全も確かめずに急いで進んで……見つかった」

「……………」

「俺はすぐに気絶して、その後何があったかは知らない。それで、起きたら——何もかもが、終わっていた」

「……わかった。わかったから、もういいよ、一夏……」

「そんな情けない顔するなよ。……しないでくれよ、頼むから」  
「……………」

鈴も弾も、俺の様子に辛そうにする。よほど参ってるように見えるんだろう。……実際に、参ってるしな。

「……もう、治らないって。義手も使えないくらい、酷い怪我だって」  
「……………」

「俺は、どうすればいいか分からない。けど逃げるのだけは嫌なんだ。だから……シンが起きたら、話をしないと。」

……なんの話をすればいいのかも、分からないけど」

「……うん。その時は、あたしも呼びなさいよね」

「俺もだぞ。忘れんなよ」

「ああ、分かった。……あと、俺が攫われた話は、誰にも言わないでくれ。本当はお前らにも話しちゃいけないことになってるんだ」

「な、それどういふことよ!？」

「シンは交通事故に遭ったことになってるんだ。ひしゃげた車に腕を挟まれたってな。……それが、ドイツの方針なんだ」

「なんだよつ、奴らがちゃんと警備してりゃあ何事もなかったんだろうが! こんな目に遭わせといて、その原因まで隠すつもりかよ!」

鈴も弾も、さつきまでの悲しみを塗り潰すほどに怒っている。

参加者、それも最有力優勝候補者の身内の誘拐を許し、当局に先んじて救出に向かった少女は一生治らない怪我を負い、それらの失態全てを隠蔽しようとする——怒るのは、当然だろう。

「俺だって許せない。ドイツにはちゃんと、何があったか発表してほ

しい。……だけどそうすると、ドイツは世界中から責められる。警備とは関係ない大勢の人たちまで煽りを受ける。

……そういうの、嫌がるだろ、アイツは」

「……………」

シンは、騒がしいのは苦手だ。遠くから眺めていることは良くあるが、自分が巻き込まれそうになるとすると逃げて行く。

そのシンが、世界を震わせ国家を揺るがすほどの騒ぎの当事者になることを望む筈がない。ましてや、それにより多くの人が傷付くとなれば。

「だから、みんなドイツの申し出を受け入れた。千冬姉の決勝戦棄権の理由は不明、シンはそれとは関係ないところで事故に遭って、左腕を失った。

……納得なんて、誰もしてない。けど今回のことを穏便に収めるには、これが一番なんだよ」

「……………」

「千冬姉はドイツに行くって言った。俺が攫われたことは千冬姉にも非がある、なら俺とシンの居場所を見つけてくれた分は借りになるって。まずはそれを清算するってな」

頭では理解してても、心では納得していないだろう。千冬姉はドイツを信用出来ず、だからこそ早めに縁を切りたがっているのかもしれない。

「……………」このことを提案して来たのは、確かにドイツからだけど。でもそれを受けたのは俺たちだ。俺と、千冬姉と、唐沢さんと、孤児院のみんなが選んだんだ。

——シンの怪我は、その理由は、世界には知らせないって」

「……………」いいのかよ、それで。シンのことを、シン抜きで決めちゃって」「いいわけないだろ。けど時間がなかった。世界中が説明を求めている、正直に言えばドイツは大打撃だ。……シンが目覚ますのを、待っていられなかった」

「……………」

「みんなで決めたんだ。シンにこれ以上負担を掛けないために、俺た

ちの不満くらい飲み込もうって」

「……わかったわよ。あたしも黙ってる。それでいいんでしょ？」

「俺も約束する。墓まで持つてくよ」

「……ありがとう」

悔しいだろうに、二人とも承諾してくれた。俺たちが勝手に決めたことに付き合ってくれた。

「……本当に、ありがとう」

今日はこれで帰ることになった。二人とも、家まで付いて来てくれて。

そして、別れる時に――

「なあ一夏。シンはお前だけの仲間じゃねえ。お前一人で抱え込むじゃねえぞ」

「なんかあつたら、すぐにあたしたちにも言うのよ。すっ飛んで行くから」

「……本当にありがとな、二人とも」

おかげで、少しだけ前に進めた。まだ道すら見つかってない状態だけど、それでも。

どれだけ迷うことになっても、前に進まない。

でないと、シンが起きた時。きっと、怒られてしまうから。

---

それから、一週間が過ぎて。

「……何しに来やがった」

シンのお見舞いに来た俺を出迎えたのは、眠り続けるシンの横に座る宗太だった。普段から悪い目つきをさらに剣呑なものにして、俺を睨み付ける。

「何しに来たって訊いてんだよ」

「……お見舞いだよ」

「じゃあ帰れ。俺一人で十分だ」

「……嫌だ。帰らない」

「……てめえ」

びきり、と眉間に皺を寄せて、宗太が立ち上がる。大股で俺の方に歩いて来て、荒々しく胸倉を掴んだ。

「帰れ。俺は、アンタの顔を見たくねえ」

「嫌だ。帰らない」

「……そうかよ」

とても俺の一つ下とは思えない形相をしていた宗太だが、俺が答えると驚くほどすんなり手を放した。忌々しさを隠そうともせず、そっぽを向く。

「……殴らないんだな」

「誰か殴った手で料理なんか作れるか。不味くなる。こないだアンタ殴ったのは失敗だった」

「……そうか」

宗太は再び座り、シンの様子を見ていた。俺もその隣に立ち、シンを見る。

宗太はもう、帰れとは言わなかった。

そうして、二人でシンを見ていると――

「失礼します」

病室のドアを開けて入って来たのは二人の看護師さんだった。お湯の入った洗面器とタオルを載せたカートを押している。

「井上さんのお体を拭きますので、席を外していただけますか？」

「……はい」

流石に立ち会うわけにはいかないの、素直に病室を出る。すると宗太は、そのまま向きを変えて歩き出した。

「どこ行くんだよ」

「帰る。シン姉の前でアンタを殴っちまう前にな」

「……そうか。気をつけて帰れよ」

「……ふん」

最後まで不機嫌そうな様子で、宗太は帰って行く。

……もしかしたら、シンと二人にしてくれたのかもしれない。宗太らしい、不器用な気遣いだった。

「……ありがとな、宗太」

許してもらえたなんて思っていない。だけど、まだ完全に嫌われてもいないのだろう。

俺が都合よく解釈しているだけかもしれないけど、それでも嬉しかった。

宗太と一緒に料理を作るのは、楽しいから。

「終わりましたから、入っても——あら、もう一人の子は？」

「……帰りました。用事があるって」

「そうですか。それでは私たちも失礼します」

看護士さんたちが立ち去り、また病室に入る。

……ふと、この部屋に飾ってある花が毎日変わっていることに気付いた。加えて言うなら、どの花にも見覚えがある。シンの花壇の花だ。

(宗太……じゃないよな。手ぶらだったし)

毎日、何人も見舞いに来ているのだろう。

シンが早く目を覚ますように。目を覚ました時、誰かが側に居るよ  
うに。

「……なあ、シン。起きろよ。みんな、待ってる」

呼び掛けるが、返事はない。シンは静かに、眠り続けている。

「起きてくれよ。お前に言わなきゃいけないことが、たくさんあるんだ」

それでも呼び掛け続けた。何度も何度も、届かないと分かっているがら。

——起きてくれ、と。

「なあ、シン。……シン」

繰り返していると、次第に声が震え始めた。

……情けない。俺はまた、泣きそうなようだ。

「シン……頼むよ。起きてくれ。お前がいないと、みんなは……俺は……」

それでも涙が零れることだけは、必死にこらえて。

まるで、見えない何かに祈るように。



まるで、ありもしない希望に縋るように。  
何度も、何度も、名前を呼んだ。

——すると。

シンの瞼が、ピクリと——

——誰かに、名前を呼ばれた。  
己の名前。井上真改。

「……………」  
とても、聞き慣れた声だった。

この声は、確か——

「……一夏……？」

「……あ……………」

まだぼんやりする頭で、霞む視界で、声の主を探す。

——居た。すぐ、側に。

「……………シン……………」

「……………」

一夏は、泣きそうな顔をしていた。

どうしたというのだろう。どこか怪我をして、傷が痛むのか？

「……無事……？」

「……………つ、馬鹿……………やろお……………！」

心配になって訊ねると、一夏はついに泣き出しながら、同時に怒り出した。

そしてそのまま、深々と頭を下げる。

「……………ごめん、シン。俺のせいで、お前に、こんな……………！」

「……………」

一夏は頭を下げたまま、何度も繰り返し、謝罪の言葉を口にする。その様子に、ひとつ思い当たることがあった。

……左腕の感覚が無い。やはりあれほど抉られては、繋げることは出来なかったか。

「……………」

右手を持ち上げる。こちらはまだ痛むが、しかし十全に動く。

……ならば、問題はない。

「……十分……」

「そんなわけあるかよっ。分かってんのかよ、その腕、もう治らないんだぞ……!?!」

「……平気……」

「……っ！ だから、そんなわけが……!」

尚も自分を責めようとする一夏に、右手を伸ばす。

その目から流れる涙を拭い、言った。

「……お前は、一人……」

掛替えのないものだから、守りたい。

眩しく温かい、日溜まりのような居場所を、失いたくない。

「……腕は、二本……」

守りたいから、業を磨いた。失いたくないから、力を求めた。ならば、守るためなら、失わないためなら、構わない。片腕でも、剣は振れるのだから。

「……惜しくはない……」

だから、これは。

己の願いの、代償だから。

お前が、気に病むことはないんだ——一夏。

「……馬鹿……やろお……。大馬鹿野郎だ、お前はっ……!」  
「……そうだな……」

一夏はさらに泣いてしまつて、涙は止まることなく溢れている。  
そして己の右手を両手で取り、傷が痛まないよう優しく、それでいて強く握り締めて。

「……俺、強くなるから。シンのことも、千冬姉のことも、みんなのことも守れるくらいに、強くなるから。……だから……!」  
「……ああ……」

静かに紡がれる、一夏の決意。

それはきつと、己が背負わせてしまった、十字架で。

……なのに、嬉しくもあつた。

「……お前なら、なれる……」

この、優しい少年は。

いつか、誰よりも強くなる。

それを、見届けることが出来るのだから——

## 第49話 原罪（献花編）

シンが起きた。俺はすぐにみんなに連絡して、みんなすぐに駆け付けた。

シンは腕を失くす前と変わらない調子で、それが却ってみんなを複雑な気持ちにさせた。

……シンが起きれば、少しは先に進めると思ったけど。

そんなことはなかった。この期に及んで、俺はまだシンに頼り切っていたんだ。

それじゃあ駄目なんだ。俺はもう、シンの重荷にはなりたくない。

自分の足で立ち上がり。

自分の目で前を見て。

自分の意志で道を選び。

自分の力で、歩いて行く。

いつかきつと、アイツの背中に追い付くために。

いつか、必ず。

アイツの隣に、並ぶために。

「よう、シン。おはよう」

「……………」

傷が癒え、リハビリもある程度進み、己はようやくやく退院を許された。今日は久々に学校へ行くのだが、孤児院を出た己を待っていたのは一夏だった。

「まだ本調子じゃないだろ？ 一緒に行くよ」

「……………」

いつも通りを装っているが、一夏の眼には罪悪感がある。自分自身

に対する、怒りや憎しみも。

(……容易いことではない、か……)

何度も言った。お前のせいではない、気にするな。己が勝手にやったことだ、と。

だが一夏は自分を責め続け、その瞳はかつての輝きを失ったままだ。

——こんな眼は、この少年には似合わない。

「右手、まだ治ってないんだろ？ 鞆持とうか？」

「……無用……」

包帯の巻かれた右腕を気にして一夏が申し出るが、その必要はない。この程度ならリハビリにもならん。

「……そっか。まあ、痛むようならいつでも言えよ」

「……」

とりあえず一夏が引き下がったので、歩き出す。一夏は何も喋らず、黙って隣を歩いている。といっても、ただ黙っているのではなく、話し掛けようとはしているが何を話せばいいか分からない、といった心配だ。

「……」

「……」

そして、己から話し掛けることはまずない。一夏から話して来なければ、こうしてずっと沈黙が続く。

「……あー……」

「……」

「……」

一度呻いたが、また黙った。何か言おうとして言えなかったのだろう。

そんなことを何度か繰り返すうち、学校が見えた。周囲には同じ学校に通う学生たちの姿が増えて来て。

「よ、シン。おはよう」

「……」

話し掛けて来たのは、中学に入ってから友人、五反田弾。いつも

通りの軽い調子で、朝の挨拶をして来た。

「ようやく登校できたな。授業結構進んでるけど大丈夫か？　なんなら俺のノートを貸してやるぜ？」

「……無用……」

「……なんだよ、その「お前のノートじゃ役に立たない」とでも言いたげな眼は」

「……………」

考えを読まれた——というよりも、単に自覚しているだけか。この少年の成績は、決して良い方ではないのである。

「やつほー、シン。おはよう」

「……………」

次に挨拶して来たのは、小学校高学年からの付き合いである凰鈴音。朝から元気に溢れた、彼女らしい澆刺とした声だ。

「ようやく復帰ね。授業大丈夫？　あたしのノート貸そうか？」

「……頼む……」

「おいシン、それはやつぱり俺のノートは要らねえ、てことか？」

「当たり前でしょ？　アンタのと一緒にしないでよ、このあたしのノートを」

「……ぐぬぬ……何も言い返せない……」

弾と鈴の成績は天地の差があるのだ。加えて鈴は努力家であり、ノートにも自分流の工夫が凝らされている。それを借りられるのなら、己がいない間の授業内容を把握するくらいは容易いだろう。

「ま、ゆっくり行きましょ。今はまだ本調子じゃないだろうし、リハビリのつもりで」

「……応……」

こうしていつもの四人で学校へと向かった。弾と鈴は以前と変わらぬ様子で話し続けていたが、一夏は結局、一度も話すことはなかった。

シンが学校に復帰してから数週間。包帯も取れ、体力も大分戻って来たようだ。

それでも。失った左腕は、戻らない。

シンは学校で浮いていた。片腕がないということは、多くの人にとって近寄りがたい要素だ。仕方ないと言えば仕方ないが——その状況を作り出したのは、俺なのだ。

(……くそ)

心中で毒づく。もう何日も、俺は自分への苛立ちを消化出来ないでいた。疲れ果てて倒れるまで走り込み、手の皮が剥がれ落ちるまで剣を振っても、どす黒い怒りがくすぶり続けている。

(……情けねえ)

シンは、変わっていない。周りがどんなにシンを避けても、変わらず静かに毎日を過ごしている。リハビリも終わり、早朝と学校の後の鍛錬も欠かさず行っている。

鈴と弾もそんなシンと変わらずに接していて、また以前のように四人で連むようになって。

けど、俺は。

シンに、どう接すればいいのか、分からない。

——キーンコーンカーンコーン——

「じゃあ、ホームルームは終わり」

「起立。気をつけ、礼」

「よし、みんな気をつけて帰れー」

授業が終わり、放課後になった。俺は帰宅部なのでいつもはこのまま家に帰るか四人で遊びに行くのだが、今日は日直だ。いくつかやらないかならないことがある。

「よい、しよつと」

教室の隅に置いてある花瓶の水を替える。結構大きい花瓶で、当然重い。それなりの力仕事だ。だが俺は毎日鍛えているので、これくらいは楽なもんだ。

「……後は黒板か」

まずは黒板消しを綺麗にしようと、クリーナーまで持って行き――

「よう、織斑あ。相変わらず馬鹿みたいに真面目にやってるなあ」

「そんなのほっときやいいのによ」

「そーそー、どうせ明日の日直が朝にやるんだからさ」

「……またお前らか」

話し掛けて来たのは、小学校の頃からなにかと同じクラスになること多い三人組だった。コイツらはしよっちゆう俺にちよっかいを出して来て、昔では箒に、最近では鈴にも似たようなことをしている。

……なんなんだろうな、一体。そんなにヒマなのか？

「邪魔すんな。俺はさっさと終わらせて帰りたいんだ」

「なんだよ、なんか用でもあんのかあ？」

「そんなの決まってるんだろ、井上のことだよ。なあ織斑？」

「……関係ねえだろ、お前らには」

「そうだよなあ、お前と井上の問題だもんなー！」

一体何がそんなに面白いのか。コイツらは何度か痛い目に遭っているのに、一向に懲りない。すぐにまた、こうしてやってくるのだ。

「なあ織斑、お前井上狙ってるんだろ？」

「前からいつも一緒だったもんな、最近は特にべったりだし」

「……そんなんじやねえよ」

……本当に気に食わない奴らだ。俺とシンはただの友達、憧れてはいるがそれは異性としてではなく剣士としてだ。それをこんなクソみたいな好奇心でつつき回されて、気分が良い筈がない。

「そんなんじやねえ。シンは、ただの友達だ」

だが、ここは我慢だ。こいつらのちよっかいは今に始まったことじゃない。無視し続けていれば、その内飽きて去っていく。

だから、ここは――

「そんなこと言って、ホントは狙ってるんだろ？ 見え見えなんだよ」

「怪我して落ち込んでいるところを慰めて、ポイント稼ごうってるんだろ？」

「へ、一体何がいいのかねえ――」



「——あんな、腕なし女の」

拳に衝撃を感じた。

気付けば俺は、右拳を全力で振り抜いていた。

「……え？」

呆然とした声が聞こえる。それは三人の内二人からのもので、残りの一人は教室のドアを破って廊下まで吹き飛んでいた。

「今、なんて言った？」

俺の前から消えた馬鹿を追って、教室を出る。

馬鹿は何本か歯が折れた口を押さえながら、尻餅を付いた体勢で逃げるように後ずさっている。

「なあ、なんて言ったんだ？」

「ひ、ひいいいっ……!?!」

胸倉を掴み、持ち上げる。両足が床から離れるほど高く持ち上げ、締め上げた。

相手の呼吸が苦しげなものになり、俺を見る眼が恐怖に染まる。

「良く聞こえなかったんだ。もう一回、言ってみてくれよ」

「や、やめ——ぶぎやっ!?!」

今度は放り投げた。床に落ちて、蛙が潰れたような声を出した。

無様に這いつくばる馬鹿へ近付いて行き。

「なあ、お前」

「た、たすけ——」

拳を振り上げて——

「なんて、言ったんだ？」

「ひ——」

——振り下ろした。

「……………え？」

だがその拳は、届くことはなかった。  
なぜなら届く直前に、俺の拳を止めた者がいたからだ。

「……シン？」

「……………」

それは、シンだった。殺しかねないほどの力を込めて振り下ろした拳を、細い右腕一本で受け止めて、俺の目を見ていた。

「……な、なんで……………」

「……騒ぎ……………」

その言葉に周りを見てみれば、確かに結構な騒ぎになっていた。

当然ではある。なにせ教室のドアが壊れ、その際にかなり大きな音がしたのだから。

「……一夏……………」

「……………」

俺の名前を呟いたシンは、今まで見たことがないほど悲しそうな眼をしていた。

俺はその視線に、耐えられなくて。

「……悪い。やり過ぎた」

白目を剥いて失神している相手にそう吐き捨てて、逃げるように帰ることしか出来なかった。

翌日から。

一夏が怪我させた相手、若しくはその親が騒ぎ立てるかと思っただが、よほど恐ろしかったのか完全に沈黙している。

しかし一夏はさらに沈み込んでしまい、その眼はまるで死んだ魚のように濁ってしまった。

(……………無力……………)

——これは、己の責任だ。一夏を守るためにと戦ったが、守れたのは身体だけ。心は、むしろ己によって傷付けられた。

(……如何に……)

どうすればいい？

一夏を守ると誓った。己の剣を綺麗だと言ってくれた、あの少年を。

己が失ってしまったものを、あの少年には持っていて欲しいから。

(……ならば……)

元より、己に出来ることなど一つだけ。

己は、ただ――

「……寄って――」

己が背負わせた、十字架を。

歩む脚を縛る、枷を。

お前を絡め捕る、鎖を。

「――斬る」

「おっはよー、一夏！」

「……おはよう」

鈴が元氣いっぱい挨拶して来るが、俺は蚊が鳴くような挨拶しか返せなかった。

先日の一件以来、俺はいよいよ気が滅入っていた。

千冬姉から教わった、剣。

シンに鍛えられた、剣。

箒と研きあった、剣。

その剣を振るう手で、俺は、ただの暴力を振るってしまった。

(……どう……顔向けすりゃあいんだよ……)

俺の拳を止めた時のシンの眼は、心に深く突き刺さった。

――あの眼が、脳裏に焼き付いて、離れない。

「よ、一夏。おはよう」

「……おはよう」

次は弾。やはり俺の返事は、気力の欠片もないもので。

「シン、今日休みなんだって？」

「……ああ。検査があるって。完治したかどうか診るってよ」

「ようやくね、シンの完全復帰」

「……そうだな」

「……………」

嬉しい筈なのに、素直に喜べない。

——完全復帰。

本当に、そう言えるのか？

だって、シンの左腕は——

「……ほら、学校着いたぞ」

「とりあえず、気持ち切り替えなさい」

「……ああ」

促され、俯いていた顔を上げる。玄関から校舎に入り、のろのろと手を持ち上げ、下駄箱を開ける。

すると中からひらりと、一枚の封筒が落ちて来た。

「……なんだこれ？」

「おお!? これはもしやラブレターか!？」

「なにい!? ちょっと一夏、それ貸しなさい! 破り捨ててやるわ!!」

「うお!? ちょっとまで、これは俺宛てなんじゃねえのか? 流石に

読まずに捨てるのは……」

「うっさい、いいから貸しなさい!」

「させねえよ! 一夏、俺が鈴を抑えている内にそいつを開けろっ!」

「お、おお……」

なんだか妙に色気のない封筒なのでラブレターということはないだろうが、鈴も弾もそうと決め付けているようだ。このままでは場が収まらないそうなので、ビリビリと破って開ける。

その中から現れたのは——

——果たし状——

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」 え？ なにこれ？

「……………」 え？ 果たし状……………」

「なんて時代錯誤な……………」

「……………」 あれ？ この字……………」

やけに達筆なくせに妙に読みやすい、独特な筆跡。

それは、とても見慣れた字だった。

「……………」 シン？」

—————

「……………」 シン、来たぞ」

「……………」

場所は孤児院の前、ちよつとした広場のようになっている空間。

果たし状には場所と時間、そして立会人の名前だけが書いてあった

ので、俺はその通りにここに来た。

時間は午後五時。

立会人は、鈴と弾。それと孤児院の全員に——

「……………」 千冬姉？」

「真改に頼まれてな。どうしても、ということまで、どうにか一日だけ帰

国出来た」

「……………」 そうか」

なんで千冬姉まで呼んだのかは分からないけど、果たし状と書いて

あった以上、俺とシンが戦うんだろう。本当に、一体何を考えてるの

か。

「……………」 なあ、シン。一体——」

「……………」 受け取れ……………」

ヒュン。

軽い音と共に、一本の竹刀を投げ渡される。

反射的に受け取ると、シンは腰に差ししていた竹刀を抜き、構えた。

「……往くぞ……」

「!? おい、待っ——!?」

ゴウツ!

瞬きすらしていなかった。だというのに、気付いたらもう、目の前に居た。

「ぐうっ!?」

首を狙った横薙の一撃を、かろうじて受け止める。しかし衝撃に腕が痺れ体勢が崩れ、二撃目は受けられなかった。

「がはっ……!」

胴を薙がれ、吹き飛ばされる。無様に地面を転がり、あっと言う間に全身が土で汚れた。

「ぐ……」

……なんて重さだ。あんな細腕一本、しかも竹刀の一撃で、腹に鉄球でも落とされたかのようだ。

「……立て……」

「……なんだってんだよ……」

シンは鋭い眼で俺を睨み付けたまま、俺が立ち上がるのを待っている。

竹刀の切っ先を俺に向け、シンはもう一度、静かに言った。

「……立て、一夏……」

立て。

立ち上がれ。

——立ち向かえ。

「……くそ」

一体誰に。

一体何に。

一体、どうやって——?

「……くそ、くそ、くそおっ……!」

わからない。

分からない、解らない、判らない。

わからない、けど――

「……やってやる」

戦えと言うのなら、戦ってやる。

ちようどイライラしてたところだ、洗い浚いぶちまけないと、いい加減頭がどうにかなっちまう。

――お前は。

「やってやるよ」

それを、受け止めてくれるんだろう――？

「シイイイインっ!!」

「おおおおおっ!!」

「疾っ……!」

一夏の渾身の打ち込みを捌き、真改が反撃の一撃を放つ。一夏はそれが首を捉える寸前に身を屈め、返す刃で胴を狙う。しかし肩に蹴りを叩き込まれ、腕を振り抜くことが出来ない。

「ぐっ……!」

「……っ!」

その脚で側頭を蹴り飛ばし、倒れた一夏に追い打ちを掛ける。素早く転がり逃れるが、真改は更なる猛攻で一夏を追い立てた。

「ぜえええあああっ!!」

「オオオオオオオッ!!」

一合、二合、三合、刃が交わる。

四、五、六、七、八、九、十――

「はあっ!!」

「疾っ!!」

……優劣は、誰の目にも明らかだった。

一夏の剣は怒りに濁り、振るうたびに隙を晒す。

対する真改は冷静に攻撃を捌き、的確に一夏の体に打ち込んでいた。一夏がまだ戦えているのは、得物が竹刀であることと、強烈な負

の感情で痛みが麻痺しているからに過ぎない。

「……一夏……」

見る影もなくなってしまうた弟の姿に、私は思わず、震える声で呟いた。

——先日、唐沢さんから連絡があつた。一夏が学校で暴力を振るい、クラスメイトに怪我をさせた、と。

私はドイツに居たため、代わりに唐沢さんが謝罪に行つた。私も電話で謝つたが、元世界最強の立場のおかげかはたまた別の何かか、相手方はあつさりと退いてくれた。

……だが一夏は、それから塞ぎ込んでしまった。

一夏が暴力を振るつた理由は、相手が真改のことを「腕なし女」と言つたからだそうだ。一夏の気持ちを考えれば我を忘れるほどに激怒するのも当然と言えるが、しかしそれは怒りに身を任せた、ただの「暴力」だ。

そして私は、一夏に何度も教えた。

「剣」は、ただの暴力とは違う、と。

「……守っているのか。最初の教えを」

律儀……というのとは、少し違うだろう。一夏にとって、剣はある種の抛り所なのだ。

一夏が幼い頃、私は剣しかアイツに教えてやれることがなかった。真改や箒と仲良くなったのも、剣がきつかけだった。

今は剣以外にも、一夏は多くのものを持っている。

だが、初めての人のとの繋がり、それは剣によるものだった。

だから、その剣を貶めるようなことを自らしてしまったことが、許せないのだろう。

「はああああああっ!!」

一夏が竹刀を振るう。一撃ごとに渾身の力を込めた、猛烈な連撃。だがそれは真改には届かず、それどころか反撃にまるで対応出来ない。

……違うだろう、一夏。私が教えた剣は。お前が目指している剣は。そんなものではないだろう。



「疾っ…………！」

「がふっ!？」

隙を突いて踏み込んだ真改が、鳩尾に柄尻を叩き込む。流石にこれには耐えられず、一夏は膝を着いて苦しそうに咳き込んだ。

「ぐ、かは、げほっ…………！」

「……………」

その様子を、真改は一切の油断なく見据えている。その目つきは鋭く、一夏の一挙手一投足まで見逃すまい。

…………何を考えているんだ？　いくら片腕を失い、病み上がりだといっても、一夏がお前にかなう筈ないだろう。

これはもはや戦いとは言えない。力量に差があり過ぎる。ただ一方的に、一夏が傷付くだけだ。

「…………何がしたいんだ」

真改の考えていることが、分からない。真改はいつも一夏を守ろうとして来た。そして何度も守って来た。

今回も、大きな犠牲を払ってまで、一夏を守った。

なのになぜ、こんなことを…………？

「…………もういい、やめてくれ」

これ以上、一夏が傷付く様を見たくない。

真改がそんなことをしているのも、見たくない。

だから、もう…………

「やめ…………」

「千冬ちゃん」

「…………唐沢さん?」

ついに耐えられなくなって制止の声を上げようとした瞬間、先に唐沢さんに止められた。

唐沢さんは打ち合い続ける二人に辛そうな顔をしながらも、二人から決して目を離そうとはしなかった。

「…………千冬ちゃん。私は今まで、何人もの子供たちと触れ合ってきた。みんなそれぞれの問題を抱えていて、一筋縄じゃいかなかった。しかもその問題はそれぞれが全然違うもので、必勝法なんてなかった」

突然語られたのは、唐沢さんが普段は見せない、孤児院経営という難儀に対する苦悩だった。

孤児院に来る子供は、当然だが親がない。亡くなったかそれとも捨てられたか、事情はそれぞれ違うものの、幼い心を深く傷付けるには十分だということは共通している。

そんな子供たちを育てることが、簡単なことである筈がないのだ。「ずっと手探りだったよ。今でもね。同じ境遇の子でも、感じている痛みがまるで違うんだから。」

……中には自分のせいでご両親を死なせてしまった、という子もいたけど、その子もやっぱり、一夏君とは違う痛みを感じていたんだと思う」

「……………」

一夏が何に苦しんでいるのか。その全てを理解出来るわけではない、そんなことは出来る筈がないと、唐沢さんは言う。

——だが。

「それでも、長くこんなことを続けていて、分かったことが一つある」「分かったこと……………」

「…………痛みが人を強くする。傷が人を成長させる。」

大人の役目は、子供が傷付かないように守ることじゃない。傷付いた子供が、また立ち上がれるように。真っ直ぐに歩けるように。

——痛みを、「強さ」と「優しさ」に換えるれるように。そつと、支えてあげることだよ」

「……………」

「…………もちろん、取り返しの付かない傷を負わないように、最低限守ることは必要だけれどね。…………その点では、真改のことは私たちのミスだ」

「…………だからこそ、真改がそうまでして守った一夏の「傷」は、見守らなければならぬ」

「うん。…………あくまで、私の考えだけだね」

「いえ。…………私も、そうするべきだと思います」

一夏は何度も打ちのめされ、そのたびに立ち上がる。疲労とダメー

ジが蓄積し、息は上がり、腕は下がり、脚は震え——だが眼だけは、全く力を失っていない。

(……いや、それだけじゃない)

倒され、起き上がるたび、剣閃が鋭くなっている。

血に錆びた刀を、丁寧に磨き、研ぎ上げて行くように。

少しずつ、少しずつ——

「おおおおおっ!!」

「疾っ……!!」

「がっ! ……ぐ、うおおおっ!!」

「……そうだ、一夏」

ならば、見守ろう。

一夏は今、必死で立ち上がろうとしている。心に深い傷を負いながら、それでも。

不器用極まるやり方だが——真改に、喝を入れられて。

ならば、私は——

「それが——お前の、剣だ」

折れぬように。

曲がらぬように。

捻れぬように。

歪まぬように。

お前を、導けるように。

お前の、支えとなれるように——

「……唐沢さん。すいませんが……」

「分かってるよ。……やることが、あるんだね?」

「はい。……しばらくの間、一夏を頼みます」

「うん、任された。……でも、もう少しだけ待ってくれないか?」

「もちろんです。」

この「勝負」だけは、最後まで見届ける」

「おおおおおおおつ!!」

……届かない。

「せえいつ!!」

届かない。

「しいあああああつ!!」

届かない——!

(これじゃだめだ、こんなんじや……!)

こんな剣じゃ、いくら振るってもシンには届かない。

(なんだ、何が違う!? 何が足りない——!?)

「おおおおおつ!!」

「オオオオオオツ!!」

こんな剣じゃ、ダメだ。

こんな剣は、千冬姉に教えられた剣じゃない。

こんな剣は、箒と共に研ぎ合った剣じゃない。

こんな剣は、シンに鍛え上げられた剣じゃない——!

「疾っ!!」

「ぐあつ!!」

素早く、無駄のない一撃。まるで手にした竹刀の切っ先まで神経が通っているかのような。

(思い出せ……!)

剣に魅せられたあの日から、ずっと剣を振るい続けていた。

一日も休まず、ずっと、ずっと。

「オオオオオオオオオツ!!」

「ぐ、うううおおおおおあああつ!!」

ならば、思い出せる筈だ。

否、忘れる筈がない。

何故なら、あの剣は。

この身に、刻み込まれているのだから——!

「……左腕が、なんだと言うのだ……!」

「らあああああああつ!!!」

——踏み込め。

もつと強く。

もつと鋭く。

もつと深く。

もつと、もつと、もつと、もつと——！

「……腕ならば……」

「うおおおおおおおおおつ！！」

込めろ、込めろ、込めろ。

力を。心を。魂を。

この、一刀に——！

「まだ一本、残っているぞ——！！」

「おおおおおおおおあああああつ！！」

ただ真つ直ぐに、ただ無心に、ただ一心に。

俺の全てを込めて、竹刀を振り下ろした。

その、一撃は——

大の字に倒れたまま、空を見上げる。

沈む夕日に彩られた空の赤が、本当に、綺麗だった。

「……やっぱ、かなわねえなあ……シンには、さ」

「……当然……」

俺の剣は、やっぱりシンには届かなかった。目指す頂は、まだまだ

遥か高みにあるってことか。

「……己は、お前の超えるべき壁だ……」

「……へ、そうかよ」

追い付くだけじゃあ、並ぶだけじゃあ不足だったか。

こんなに強いヤツを、俺は超えなきゃならないのか。

「……こりゃあ、超え甲斐のある壁だ」

「……く……」

俺の言葉に、シンが少しだけ、唇の端を吊り上げる。

それは、ずいぶん久しぶりに見る、シンの笑顔で。

……いいぜ、やってやる。

女の子に、こんなに期待されてるんだ。

応えなきや、男じゃない。

「……よう。無様なモンだな」

「……宗太……」

相変わらず不機嫌そうな顔をしながら、宗太が俺の横に立っていた。

睨むように俺を見下ろしながら、言葉を続ける。

「これだけ動いたんだ。腹、減ってんだろ？ ……飯、食ってけよ」

「……ありがとう」

差し出された手を取り、起き上がる。

目線が同じ高さになると、宗太の眼はさらに険しくなった。

「勘違いすんなよ。アンタを許したわけじゃねえ」

「分かってるさ。……いや。俺を、許さないでくれ、宗太」

「……ああん？」

俺の言葉に、怪訝そうな顔になる。だがそれに構わず、言葉を続けた。

「……みんな、優しいから。きつと、俺を許してくれる。……けど、そんなのはダメだ。俺の罪は、そんなに軽いものじゃない。だから——」

「お前だけは。——俺を、許さないでいてくれ。そうすれば、俺はお前に許されるために、頑張っていけるから」

「……ち」

ガシガシと頭を掻き、さらに不機嫌そうになる宗太。

そして、吐き捨てるように。

「ぎげんな。てめえのことを俺に押し付けんじやねえよ、甘ったれが」  
「そうだなあ。けど俺はまだまだ未熟なんだ、それくらいは勘弁してくれ」

「……ふん。言われなくても、アンタを許しやしねえよ。一生背負って生きていけ。……けどまあ、アンタがいねえと、ウチの連中が寂し

がるからな。

……たまには、飯食いに来いよ——イチ兄」

「……ありがとな、宗太。……ありがとう……」

その言葉は、俺の罪を許されるよりも。

よほど、俺の救いとなつた——

「……それから、俺は少しずつ立ち直つていった。剣道部に入つて、シ  
ンだけじゃなくて、いろんな人の剣に触れた。少しずつ、少しずつ、前  
に進んでる……と、思う。

……それでも、まだまだだけどき」

三年前の出来事を、語り終えた。

随分時間が掛かつて、とつくに日付は変わつてしまつて。

けれどみんな、最後まで聴いてくれた。

「だから、さ。俺は、弱いから。一人じゃ立てないくらい、弱いから。  
だから、みんなに支えられて、俺は今、此処に居る」

俺の罪。

俺の償い。

まだ、終わつていないけれど。

いつか、必ず——

「……情けねえよなあ。女々しいって言うか、なんと言うか。俺は——  
」

「うう……ぐす……」

「うお!? な、なんだ……!?!」

見れば、箒とセシリアとシャル、のほほんさん、それに山田先生が  
泣いていた。ラウラは意地からか、他のみんなは事情を知つていたか  
らか泣いてはいないが、目が潤んでいる。

「い、一夏あ……」

「そんな……そんなことが、あつたのですね……」

「うん……強いよ。一夏は強い……その痛みを抱えて、こんなに頑

張ってるんだもん……!」

「……い、いやあ……」

なんか照れるなあ……一種の黒歴史なんだけど。ていうか女の子泣かせちゃったよ……。

「そうか……マスターは、昔からマスターだったんだな」

「どういう意味だよ……」

「……」

見ろよ、シンも微妙な顔してるぞ。

「……それにしても、宗太君」

「ああん？」

シャルが今度は宗太に話を振った。突然のことに怪訝そうな顔をするも、しかし不機嫌そうな声は変わらないあたり流石と言うべきか。

「君、優しいねえ……!」

「はあ？」

「うんうん、いのつちが言ってた通りだね〜!」

「そう、そうですね! 一夏さんも真改さんも、あなたたちのおかげで、今まで……!」

「……イチ兄はともかく、シン姉はなあ……どうだろうなあ」

「いや、謙遜することはない。この孤児院がどれほど真改の支えとなっているか、そしてお前が孤児院にとってどれほど重要な存在なのか、私は良く知っているぞ……!」

「……あー、そうですね」

宗太は不機嫌を通り越して面倒くさそうな顔になった。

だがその奥にあるモノを見切った者が一人。宗太と付き合いの長い、小夜である。

「あれえ？ 宗太、照れてるう〜？」

「ば、てめえ、何言ってるんだよ!」

「隠しても無駄よ？ こおんなキレイなお姉さんたちに誉められて、嬉しいんでしょ〜？」

「こ、このヤロウ……!」



必死に誤魔化すが、しかし無駄だった。みんな宗太を見る眼が微笑ましいものになっている。

「ぐ……もう寝る！　じゃあなっ！」

というわけで、逃げた。立ち上がり、早足で部屋を出て行く。

その背中を見送るみんなの眼は、子犬か何かを見るかのようなものだった。

「ああ……可愛いなあ」

「でしよ〜？　アイツカッコつけたがりなんだけど、実は可愛いヤツなのよね〜」

「ふふ……本当に変わらないな、アイツは……」

宗太のおかげなのか、場が和やかな雰囲気になった。そのままさらに会話に花が咲き――

――俺たちが床についたのは、深夜二時を回ってからだった。

朝になって。

己は、とある場所に来ていた。

「……………」

カコン。桶に入れた柄杓が鳴る。

己が今居る場所。己の、両親の墓。

「……………ようやくだ……………」

……………ようやく。

ようやく、己は――この人たちの娘として、ここに來れた。

「……………永く、待たせた……………」

ずっと、過去の記憶に捕らわれていた。真改としての記憶に。

それを捨てたわけではない。だが、吹っ切れた。良い意味で開き直れた。

「……………完全、ではないが……………」

男としての記憶があるし、「彼女」への想いもある。この先、女として生きることが出来るかは、かなり怪しいが――それでも。

「……己は……貴方たちの、娘だ……」

それを、伝えたかった。

もう随分、墓参りをしていなかったから。

何か、大きなことを報告したかったのだ。

「……簡素ですまない……」

両親の墓前に花を手向ける。

己が孤児院の皆と世話をしている、花壇の花。ここに手向ける花は、あそこの花と決めている。

「……………」

合わせる手は無いから。ただ頭を下げ、黙祷する。

そして静かに、時が過ぎ。

「やっぱりここに居たか」

「……………」

皆が来た。朝早く出たのだが、この霊園は孤児院から近い。すぐに追い付ける。

「……真改さんのご両親のお墓ですか？」

「ああ、そうだよ」

「ねえ、シン。僕たちも手を合わせてもいいかな？」

「……応……」

「……ありがとう、マスター」

感謝するのはむしろ己の方なのだがな。

しかし、丁度いいか。皆のことはまだ紹介していなかったが、これで全員の顔合わせが済んだ。

……見てくれ。コイツらが己の仲間。己の、友達だ。

今己は、コイツらに囲まれて——幸せに、生きているよ。

(……………さて……………)

皆が手を合わせている間に、両親の墓の横に並べられている十二の小石に、一輪の花を手向けた。

それに気付いた本音が、不思議そうな顔で訊ねる。

「いのつち、それは？」

「ああ、それな。俺も何度か訊いたんだけど、教えてくれないんだよ」

「ふうん」

「……………」

——これは。

かつての、仲間たちの墓。誰にも想いを知られることなく散っていった、十一人の同志たちの。

——そして、「彼女」の。

ただ石を並べただけのものだが、不足はあるまい。彼らは、大罪人として死ぬことに、誇りさえ持っていたのだから。

「……………」

そこに短い黙禱を捧げ、立ち上がる。

彼らはきつと、こんな手向けなど求めてはいまい。これはただ、己がやりたいからやっているだけだ。

「ねえねえいのっち、そのお花は〜？」

「……………」

見たことのない花なのか、本音がまた訊いてくる。

……この花の季節は、もう終わる。最後に間に合って良かった。

この花だけは、是非ともここに、己として手向けたかったから。

「……………」

セリ科の一年草。

白い花弁。

花言葉は、「静寂」、「可憐な心」。

この花の名は——

「——オルレア」

## 第50話 騒がしくも安らかな時間

「では、私と山田先生は学園に戻るが……お前たちはどうする?」

真改の墓参りに付き合い、朝食も食べ終え一息ついたところでの千冬の発言。それに対し、一夏はうくと少し考えてから返事をした。「久しぶりだし、俺はもうちよつとゆつくりしてくよ。いいかな?」

唐沢さん」

「もちろんだとも。遠慮しないでいい、自分の家だと思ってくれていいよ」

唐沢の言葉に、他の女子も私も私もと残ることを告げる。それを笑って受け入れる唐沢。

こんな光景は、この孤児院では割と良くあるものであった。

「ありがとう。……というわけだから、千冬姉」

「ああ。だがあまり迷惑を掛けるなよ。……それでは唐沢さん、私たちはこれで失礼します」

「うん、またいつでもおいで。気をつけて帰るんだよ」

というわけで、千冬と真耶はIS学園へと帰って行った。残った面々は顔を見合わせ、悪戯っぽく笑う。

「……それじゃあ」

「ああ。見せてもらおうか——マスターの、小さい頃の写真をな」

「あー、そういやそんなことも言ってたな……」

「唐沢さーん。アルバムどこにしまってます?」

「なるほど、みんなそれが目的だったのか。……ふっふっふ、ちよつと待っていてくれ。すぐに持ってくるから」

楽しそうに訊ねる鈴に、唐沢も年甲斐もなく楽しそうに応え、部屋を出て行く。

そして数分と経たずに、何冊もの分厚いアルバムを抱えて戻ってきた。

「これが真改がウチに来てからのアルバム。今まで撮った写真は全部載ってるよ」

「おお、これが……!」

「そ、それでは拝見させて頂きます……!」  
「……………」

止めても止まるような連中でないことが分かっているので、真改も止めるようなことはしない。諦めの境地に到達した眼で、はしやぐ仲間たちの姿を静かに眺めている。

そんな真改の視線をサククリ無視し、ワクワクドキドキウハウハしながら、ぱらりと表紙のハードカバーを捲った。

「……あれ〜?」

「シンの写真じゃないね」

「うん。みんなの写真が一緒に入れているから、真改のだけ、ていうわけじゃないんだ」

「えーと、シンが写ってるのは……このページだ」

何度か見たことのある一夏が、臍気な記憶を頼りにページを捲る。

そこには記念すべき一枚目の真改の写真。

「……か……」

当時まだ肩までしか髪がなく、顔立ちも幼少期特有の丸みを帯びている。

だが目つきの鋭さはこの頃からすでに健在であり、そして仏頂面だった。

それを初めて見た者たちの反応は――

「……かわい〜!!」

「わあ〜、なにこれなにこれ!? あはは、シン、目つき悪〜い!」

「ちっちゃいっのっちだ〜!」

「ああ、真改さん、なんと愛らしい……!」

「なんというか、まるで人形のようにだな」

「真改は昔から表情がほとんど変わらなくてね。いつだったか、和風のフランス人形、だなんて言う人もいたよ」

ちなみに今見ている写真は孤児院に来たばかりの頃の物で、一人だけで全身が入るように写っている。皆まずはこの構図で一枚撮るのが、この孤児院の伝統である。

「昔は髪短かったんだね」

「シンは長い髪嫌いなんだよ。本当は今も切りたがってるんだけど、小夜が伸ばさせてるんだ」

「小夜さん……グツジョブですわ!」

「当然でしょ? 髪は女の命よ、なのに姉さんったら全然頓着しないんだもん。私が面倒見てあげないと」

「……………」

誇らしげに胸を張る小夜に微妙な視線を送る真改。

実は昔、背中まで伸びた髪を一度無断でショートカットにしたことがあるのだが、その時小夜にマジ泣きされたのである。その泣き方があまりにも悲哀に満ちていたため、それからは大人しく従っていたのだ。

「あ、一夏と織斑先生も写ってる」

「これは……織斑先生が高校生の頃ですか?」

「流石教官、美しい……!」

「おりむーもかわいいね」

「……それ男が言われてもあんま嬉しくないから」

本音の発言に一夏も微妙な顔になるが、そんなことには構わずにきやいきやいと盛り上がる。皆の目は写真に釘付けとなり、次々とページが捲られていった。

「あく! セーラー服だ〜!」

「きやあああ! か、可愛い……!」

「ああ、この写真欲しいなあ……」

「持って行ってもいいよ、ネガ取ってあるから。他にも欲しい写真があつたら言つて」

「では、これとこれとこれとこれと……」

「てめえには遠慮してもんがねえのか」

大量の写真を要求するラウラに宗太がツツコミを入れるが、そんなものに怯むようなラウラではない。何ページも遡っては写真を選んでいく。

そうしてさらに、数ページ。

「……………」

「これは……」

「……………」

そこにあつたのは、真改の写真。

鍛錬の様子を撮ったものなのだろう、木刀を振っている姿が写っている。  
いる。

——右腕、一本で。

「……………これは、シンが怪我してから、最初の写真だな」

「……………一夏」

その一枚から、真改の写真が心持ち増えた。鍛錬の風景や、一夏と打ち合っている姿が混ざるようになったのだ。

「これは……………」

「俺が撮ったんだよ」

「宗太君……………?」

「イチ兄の無様な姿をしつかり残しところと思ってな」  
「……………」

口ではそう言っているが、宗太の表情は普段の不機嫌なそれに、何か別のものが混じっている。

それは恐らく、痛みや悲しみに近いものだろう。

宗太も分かっているのだ。一夏がどれほど、苦しんでいるのか。

だからこそ、写真に残した。

その痛みを、悲しみを、苦しみを、忘れないように。

それを、力に換えられるように。

「まだ勝ったことないんだよな。何度も挑戦してるんだけどよ」

「……………一夏……………」

「けど、まだまだだ。自分で言うのもなんだけど、毎日少しずつ強くなってる。……………追いついてみせるさ。いつか、必ず」

「……………期待……………」

「ああ……………任せとけよ」

一夏と真改、二人の間にある強い絆を感じ、一夏に想いを寄せる少女たちは羨ましいやら眩しいやら、複雑な気持ちである。

だが真改が自分たちのように、一夏に対し恋心を抱いているわけで

はないことは明白なので、嫉妬には繋がらない。

「……あ、これ IS 学園の制服だ」

「ああ、それな。小夜が無理矢理着せて撮影したんだよ」

「だってこんな可愛いものよ!? 着せないなんて有り得ないじゃない!」

「おおく、さよりんわかってるね」

「うむ、やはりマスターには白が似合うからな」

「以前は黒が似合うって言ってなかったっけ?」

「……………」

その際かなり嫌がり抵抗したのだが、小夜率いる真改を着せ替え人形にすることが趣味の妹連合により押し切られたのである。いかに強大な武力であつても、行使出来なければ意味はないのだ。

「ああ、終わっちゃった……」

「結構あつたね」

「ほう……素敵でしたわ」

「うむ……眼福だった」

「ふっふっふ……まだまだよ」

「な!? まさか小夜、アレを出すのか……!?!」

「当たり前でしょ、一夏さん。アレはまさに、こうゆう時のために用意してあるのよっ!!」

言うやいなや、席を立ちダッシュする小夜。そして二十秒で帰って来た。

——腕に分厚いアルバムを抱えて。

「それは?」

「ふっふっふ。これは私が撮り溜めた秘蔵コレクション。普段とはちよつと違う姉さんの姿を収めた、お宝よっ!!」

バーンツ!!

と効果音が付きそうな勢いでアルバムが開かれる。

その一ページ目に載っていたのは——

「「お……おおっ!!」」

年の頃は七歳ほどか。



幼いながらも凛とした眼差しの少女、井上真改の——着物姿だった。

「こ、これは……!?!」

「し、七五三だあゝ!!」

「ぶはっ!?! は、はにやぢが……」

「わあああ!?! セシリア、しっかり!!」

「ふははははっ!! どう!?! これが姉さんの実力よっ!!」

「……………」

テンション鰻登りの小夜。後に少女たちは、「彼女から後光が差していた」と語ったと言う。

「まだまだ、終わらないわよ、私のコレクションはっ!!」

ペラリ。

「おおっ!?!」

「お、これは運動会のか。懐かしいなー」

それは小学校の運動会の写真だった。一年生の頃からのものが順番に並べられており、真改の勇姿(?)を激写していた。

「ていうか良く考えたら、小夜って小学校上がる前からシンの写真撮ってたんだよな」

「すごい執念よね……」

「……執念なのか?」

幼なじみ三人がヒソヒソと話し合うが、勿論他の者には聞こえない。

「あ、これは短距離走の写真かな?」

「他の走者が随分後ろにいるな」

「ぶっちぎりですわね。さすが真改さんですわ」

「そりゃあね。昔から、スポーツで姉さんに勝てる人なんかいなかったわよ」

ちなみに現在でも、陸上選手でもかなわないほどの脚力を持っている。肉体制御の熟練度が段違いなのだ。

「……あれ? これは……」

「ああ、これね。これは昔、みんなが集まってやったコスプレ大会の写

真よ」

「へあ!?… ちよ、待て小夜、それは——!?!」

ペラリ。

「「「——あ」「」」」

その写真を初めて見た篤、本音、セシリア、シャルロット、ラウラが声を上げる。

鈴は皆を止めようとした一夏を瞬時に制圧していた。

その写真とは——

「……女装……だと……!?!」

薄く化粧を施し、ゴスロリのメイド服っぽいのを着せられた一夏だった。

「な、なんか似合ってる……!?!」

「わあ、おりむー可愛い〜!」

「や、やめろお! やめてくれえええ!!」

「ああ、一夏さん……まさかこんな可愛らしく……!」

「ふ……流石は私の嫁だ」

「どう? 最近男らしくなってきたけど、昔は一夏さん、結構可愛い系の顔してたのよね〜」

「ぐああああ……まさかその写真まで残してあったとは……!」

「くつくつく、あの日のアンタの姿、実は人気あったのよお? 一夏あ」

「ち、違う……あれは一時の気の迷いだっただ! 場の雰囲気呑まれたというか……!」

必死に弁解するが、しかし何を言っても無駄である。しかも既にその写真は皆の脳に永久保存されていた。

「いやあ、この時の一夏さんは可愛かったわよお? 後で恥ずかしさのあまり真っ赤になるところまでね!」

「ああ……もうだめだ。俺、生きていけない……」

「……まあ、あれだ。……悪い、やっぱ掛ける言葉が見つからねえよ、イチ兄……」

がつくりとうなだれる一夏をよそに、一夏の女装姿を堪能する少女

たちであつた。

「……ん？ もうこんな時間か」

時計は長針、短針ともに頂点を指している。アルバムに夢中になつて、皆時間が経つのを忘れていた。

「そんじやあ昼飯作りますか。ちよい待ってな、すぐ出来っからよ」

そう言つてキッチンへ向かう宗太。ふと何か思いついたのか、シャルロットが立ち上がりその背を追い掛けた。

「ねえ、宗太君。ここのご飯は君が作ってるんだよね？」

「ああん？ ……まあ、全部じやねえけどな。基本は俺が作つて、あとは日替わりでみんなが手伝うんだよ」

「へえ、ずっとそうなの？」

「ここ5、6年はな」

「ふうん、道理で。昨日の晩ご飯も、今朝の朝ご飯もおいしかったもんね」

「……ありがとよ」

料理を誉められて嬉しかったのだろう、宗太はムスツとした顔かつぶつきらぼうな口調ながら、しつかりと礼を言った。

「……んで、なんだよ？ なんこと言いになざわざ来たのかよ？」

「ううん、実はちよつとお願いがあつて。僕も料理に興味あるから、教えてくれないかなつて」

「はあ？ やだよメンドクせえ。料理なんて本でも読んで勉強すりやいいだろ」

とりつく島もない宗太の態度にもめげることなく、シャルロットは頼み続けた。

「うくん、それだとレシピとか基本的なことしかわからないでしょ？

もっと細かいっていうか、実践的なことを教えて欲しいんだけど」

「はっ、んな温い考えじや上達しねえよ。教えられたら教えられたようにしか作れねえ。料理つてのはてめえの舌で感じながら、何度も失

敗しながら色んな味付けや調理法を試す。そうやってようやく、どうすれば美味くなんのかつてのがわかるのさ」

「へえ、すごいね、宗太君。本物の料理人みたいだ」

「目指してっからな」

「うん、宗太君なら、きつとすごい料理人になれるよ」

「あーそうかい」

宗太をベタ誉めするシャルロットだが、いくらやっても宗太の態度は一貫していた。その様子を見ていた面々は呆れたような感心したような顔をしている。

「……すごいですわね。シャルロットさんにあんなに言われて、全然動じないだなんて」

「ああ、シャルロットはかなりの美少女だというのに」

「そりやそうでしょ。なにせ宗太は姉さん一筋なんだから」

ザクウツ!!

「うお痛ってえ!!」

「うわあっ!! 大丈夫宗太君!!」

わざと聞こえるように言った小夜の言葉に動揺し、野菜を切っていた宗太は深々と指を切った。しかしダクダクと血の流れる指もそのままに、小夜に詰め寄る。

その顔は真っ赤だった。

「ななななな何を言ってるやがんだよてめえわっ!!」

「あつれえく? 宗太あ、なんだか顔が赤いよお?」

「あ、あ、赤くねえよっ!!」

「いや、赤いぞ」

「ええ、赤いですわね」

「うん、真っ赤」

「か、返り血だっ!!」

「流石にそれは無理があるぞ……」

そのまま続けても宗太が（無駄な）意地を張り続けるだけなのはみんな分かったので、取りあえず切り上げて指を治療することにした。消毒して絆創膏を巻いたが、なかなか出血は収まらない。

「その指じゃ、料理は無理ね」

「ちっ、このくれえなんともねえよ」

「なに、アンタお客様に出す料理に血を混ぜる気？」

「……ちっ」

小夜にやりこめられて、宗太はエプロンを脱ぐ。それをシャルロットに差し出すと、今日一番の不機嫌な顔で言った。

「アンタが作れよ。……教えて欲しいんだろ？ 特別に、ちよつとだけ教えてやるよ」

「……！ ありがとう、宗太君！」

「あ、それじゃあわたくしも」

「わたしも」

「では私も頼む」

「ついでにあたしも」

「一夏とマスターの好みの味付けでも教えてもらおうか」

「……わあつたよ、教えりやいいんだろ、教えりや」

好機とばかりに名乗りを上げだした面々に心底呆れた溜め息を吐き、しかしそれを了承する。

そんな宗太に、真改、一夏、小夜、唐沢が顔を見合わせ、声を出さないように笑い合うのだった。

「あくあ、つたく、メンドくせえ——」

というわけで始まった、宗太の料理教室。元々大人数を養う孤児院の厨房、六人同時でもどうにか入れる位には広い。

だがそれとは別の理由で、料理教室は混迷を極めていた。

「ばっ、おいそこの金髪縦ロール！ なにそんなに塩ぶち込んでやがんだよ!？」

「えっ？ だってこんなに具があるんですもの、こんな少しじゃ味がしませんわ」

「塩以外にも入れんだよっ!」

「ここで卵を投下です。どくん」

「わあ!? やめろ馬鹿、入れる前に溶けよっ!」

「ええ〜? だって時間かかるよ〜?」

「てめえがトロいんだ!!」

「んっしょ……ふう、こんなものかな」

「はあ!? ちよい待て、なんでジャガイモがこんな小さくなってんだよ!?!」

「え? だってジャガイモって芽に毒があるんでしょ?」

「芽だけくり抜けよボケがっ!!」

「いいじゃない別に、いっぱいあるんだから」

「食べ物に敬意を払えって言ってるんだよ!」

「よし、こんなところだな」

「うおっ、デケエ!? 全然切ってねえじゃねえか!」

「む? おでんはこうするのではないのか?」

「違えよいつの漫画の話だよそりゃ!? ていうか昼飯におでんなんか作るなっ!!」

全員がバラバラに作り始めた上に、箸とシャルロット以外は色々問題があった。特にセシリアと本音がひどかった。

しかもさらにひどいことに、問題が多く大きい者ほど人の話を聞こうとしない。料理を教えて欲しいと言ったくせに、好き勝手やっている。

だが――

「あのな、慣れないうちから目分量で適当に味付けすんじゃねえ。まずは少しずつ入れて、入れたら必ず味見しろ」

「ええ? でもそれでは、出来上がった時に量が少なくなってしまうわ」

「いいんだよそれで。減ったら足しやあいんだからよ。そのうち加減がわかるようになる」

「なるほど……」

「あとお前、さつきから見たりやあ色んな過程をすっ飛ばしてんじや

ねえか」

「だって間に合わないんだもん。焦げちやうよく」

「あらかじめ準備しとくんだよ。そうすりゃあとは順番に入れてくだけでいいだろうが」

「ほうほう」

「それと鈴、お前は皮の剥き方が大ざっぱすぎだ。もったいねえから皮むき器使え」

「ふ、ふん！ あたしは中華料理屋の娘よ！ そんな物使わなかつて——」

「あのな、出来ねえことを道具で補うのは恥ずかしいことじゃねえ。そのための道具なんだからよ。それよか変に意地張って不味いもん作る方がよっぽど恥ずかしいぜ」

「わ……わかつたわよ」

「それと小っこいの。お前料理のチョイスがおかしいぞ」

「なに？ 日本では大勢で食事する時、おでんを作るものなのではないのか？」

「他にも色々作ってんだから、鍋物用意する必要はねえよ。それに具がデカすぎる。食うヤツのこと考えろ。それは一口サイズに切つて別の料理にしるよ、教えてやつから」

「む……それでは、頼む」

なんだかんだで上手く教えて回り、次第にまともになっていく。それでも取り返しきれない失点はあったが、だが食べられなくはないものにはなった、というのが宗太の評価であった。

そんな感じで、どうにか料理が完成する頃には、既に二時近くになってしまっていたのだった。

「あはは……結局、僕らは教えてもらえなかつたね」

「仕方あるまい、あれではな。……まあ、前向きに考えよう。私たちに教える必要はなかつた、と」

「……あはは」

乾いた笑いしか出なかつた。

「どうにか出来たが……奴らはもう二度と、ここの厨房には立たせねえ……」

「……お疲れ、宗太」

精根尽き果てた様子の宗太に思わず同情する一夏。我の強いあの面子に料理を教えるのは、想像を絶する難儀であった。

「……とにかく、飯だ。みんな呼んで来てくれ」

「了解」

数分して皆が集まると、リビングの大きなテーブルの上に、大量の料理が並んでいる。

セシリアのハツシユドビーフ、本音のチャーハン、鈴の肉じゃが、ラウラのはんぺんのチーズ焼き、箒のカレイの煮付け、そしてシャルロットの唐揚げである。

「……見た目はまともだな」

「ああ……見た目はな」

「……食べるのか？」

「不味くはねえだろうよ。美味くもねえだろうが」

「……お疲れ様」

「俺の食材が……」

全員が集まり、いただきますの合掌。そして料理に箸が伸ばされ――

「あ、この唐揚げおいしく！」

「お、このカレイも美味しいな」

「なんかこの肉じゃが、ジャガイモの大きさがバラバラのような……？」

「チャーハンは場所によって色が違う……」

「か、辛っ!? このハツシユドビーフなんか辛い!」

「あれ、このはんぺん意外に美味しい……」

宗太の尽力のおかげか、取りあえず食べられないということはない



ようだった。しかしセシリア作のハツシユドビーフは最初に調味料を入れすぎたために修正しきれなかった。まだ幼い子供たちには少々辛味が強過ぎ、ほとんどを年長組が食べることに。

「まったく、ふざけやがって……俺が商店街で厳選してきた食材になんてことしやがる」

「けどまあ、食えないことはないよ。……前セシリアが作ったサンドイッチはヒドイもんだったからな……」

「そりやそーだろーよ。あんな調子で最後まで作ってたら、毒物が出来るぜ」

「ああ……セシリアの料理を食べると、体調が悪くなるんだ……」

「……食うなよ、んなモン」

「そういうわけにもいかないだろ。女の子の手料理を」

「あーそうかい。まあイチ兄だしな、仕方ねえか」

「そりやどういう意味だよ。……とにかく、たまに料理教えてやってくれよ。俺の体が保たない」

「やなことだ。ていうか料理以前の問題だぜ、アレは」

宗太の言葉に、やっぱりそうかと肩を落とす一夏。

宗太はその様子にザアマミロと思いながら、しかしこの少年にしては珍しく、穏やかな表情で言った。

「……けどまあ、ウチに連れて来るくれえは構わねえよ。ガキどもも楽しそうだしな」

その言葉に、一夏は嬉しくなる。自分の友人たちは、この少年に気に入られたらしい。

「……お前だってまだガキだろ」

「うるせえよ。自覚してっから、わざわざ言うんじゃねえ」

「はは、そりやすまなかつたな」

「……ふん」

鼻を鳴らしてそっぽを向く。そしてそのまま不機嫌そうな顔で、初めての教え子たちの料理を食べ始めた。

塩の入れすぎだとか焼きすぎだとか、一口ごとに文句を付けながら。

そんな弟の様子を、真改は鋭さの中に優しさの滲んだ眼で眺めていた。

「社長、消去されていた報告書の復元が終わりました」

「お疲れ様、網田君。……ふむ、なるほど。これはこれは。この先のことはわからないのかい？」

『織斑一夏が発見された廃工場にて、ISによるものと思われる戦闘の痕跡を発見。検証の結果、展開されたISは一機のみであると断定』

「ええ、完全なオフラインに切り替えたようです。この報告書もすぐに消去されてしまったからねえ。おかげで見つけるだけで時間が掛かってしまいました」

「うふふ、よっぽど隠しておきたいみたいだねえ。これは、この先を調べようと思つたら直接乗り込む必要があるだろうねえ」

『現場において、織斑一夏の他に一人の少女を保護。織斑一夏に同伴して来た、井上真改と判明。ISと戦闘を行っていたのは井上真改と思われる』

「まったく、上手く騙したものです。ブリュンヒルデの決勝辞退の理由を隠したのは、世界の非難から逃れるため。……隠したくなるのも分かる理由ですし、ドイツが打撃を受けても、誰も得しませんからねえ」

「だから他の国々も黙っていることに納得した。裏の理由のさらに裏に、真の理由が隠されていることにも気付かずに」

『さらに現場において、井上真改の指紋が付いた鉄パイプと戦闘用ナイフを発見。ナイフはブレード部分が砕けており、その破片から微量の血液を検出。鑑定の結果、井上真改、織斑一夏、現場に倒れていた犯人たち、いずれの血液とも合致せず。現場から逃走した、IS操縦者のものと思われる』

「……さて、どうしますか？ 社長。織斑さんたちに知らせますか？」

「やめておくよ。織斑君が立ち直るまでには随分苦勞したみたいだからねえ。こんなことを知れば、それがまた元に戻ってしまうかもしれない」

『以上のことから、井上真改が生身でISと交戦、ナイフで絶対防御を貫通し、IS操縦者に傷を負わせたものと判断する。』

井上真改のポテンシャルは、ブリュンヒルデをも上回る可能性あり』

「……ですが、気に入りませんねえ。井上さんに目を付けたのは、私たちが最初だとばかり思っていましたからねえ」

「そうだねえ。……うふふ。しかし彼らは、井上君のことをなにもわかっていない。井上君の強さ、それが一体、何に支えられているのかを、ね。」

「……彼らの好きにはさせないよ。井上君は仮とはいえ、我が如月重工の社員だ。社長である僕には、社員を守る義務があるからね」

『——なお。現場にて、切断された井上真改の左腕を回収。研究所へ極秘裏に搬送する——』

## 外伝5 気になるアイツはマーセナリー

『まったく、一夏め……今回は本当に驚かされた』

「ああ、俺もだよ。ニュースを見た時はたまげたぜ」

『これでまた仕事が増える。それもとびきり厄介な仕事かな』

「ああ、お疲れさん。……ところで千冬」

『なんだ？』

「俺今運転中なんだが」

『ふん。その程度で運転をしくじるようなお前ではないだろう』

「お巡りさんに見つかって切符切られるのを心配してんだけどな」

携帯電話で会話しながらトラックを運転しているのは、若い男。くすんだ茶髪に無精髭、瞳は緑色。表情はやる気がなさそうではあるが、顔立ちそのものはかなり精悍である。

「仕事があるんだろ？ 電話してる暇なんかないんじゃないのか？」

『仕事ばかりでストレスが溜まっているんだ。愚痴くらい付き合え、ロイ』

「はいはい、了解だ。お付き合いしますよ、お姫様」

『……ふん』

男の名はロイ・ザーランド。通話相手は彼の幼なじみの織斑千冬である。

ロイは運送業者で働いており、現在大型トラックで積み荷を運んでいるところであった。

「でも少し待ってくれ。今日は早くあがれそうなんだ。話なら後で聞いてやるから、今は——」

『……む？ どうした、ロイ？』

「……ドイツ軍の装甲車だと？ なんでこんなところに……」

ふと、対向車線を大型のトレーラーが走っているのを見つけた。なにかよほど重要な物を運んでいるのか、護衛であろう装甲車が四台付いており、近くを走る他の車を威嚇している。

その物騒な気配に、ロイは気だるげな瞳を、鋭く細める。

『なに？ ロイ、何を言っている？』

「悪い、千冬。なにかきな臭い、切るぞ」

『おい、ロ——』

通話を切り、意識を集中する。

彼が絶大な信頼を寄せる、自らの直感が告げている。

——何かが起きる、と。

(ちっ……嫌な空気だ……)

トレーラーはまだ遠い。だが警戒レベルは既に最大まで引き上げられていた。神懸かった情報処理能力で周囲の状況全てを見極め、起きるかどうか——いや、十中八九起きないであろう不測の事態に備える。

たとえ起きると言っているのが根拠のない直感だけでも、ロイは確信していた。その方に一つのこと、今から起きるのだ。

「——っ!」

そして、見つけた。ロイから見て右手にある建物、その屋根に男が一人。

その男が担いでいるのは——

「ロケットランチャーっ!!」

トラックの窓から身を乗り出し、男を指差しながら大声を上げる。そのロイの仕草に装甲車の運転手も気付いたが、僅かに遅かった。

ロケットランチャーが火を噴き、放たれたロケット弾頭が先頭の装甲車に直撃する。かなり大きな口径のランチャーだったのだろう、爆発した装甲車が冗談のように吹き飛び、中央分離帯を越えロイの運転するトラック目掛けて突っ込んで来た。

「ちいっ!」

咄嗟にドアを開け、走るトラックから飛び出す。固いアスファルトに全身を打ち付けられるが、完璧な受け身で全てのダメージを逃がした。その直後、装甲車がトラックを押しつぶし、道路は一瞬でパニックになる。

「ぐう……くそ、街中でなんてことしやがるっ! テロ屋どもめ、空気を読みやがれ……!」

視線を巡らせば、周りにある建物の影から武装した男たちが数十人

飛び出し、一斉に攻撃を開始した。残りの装甲車は道路が砕けたために足止めされ、降りた兵士たちが応戦する。兵士たちは練度と装備で勝っているが、テロリストたちは数が多く、総合的な戦力ではテロリスト有利か。

「こりやあマズいな……」

戦況は徐々に傾き始めているが兵士たちも良く粘り、銃撃戦は激しさを増している。すぐには決着はつかないだろう。そしてテロリストはロケットランチャーを持っているのだ。このままでは、街に大きな被害が出るかもしれない。

(だからなんだ……って、言いたいところだけだな)

ロイにとっては、どうでもいいことである。他人がどうなるうが知ったことではない。所詮は他人、自分には関係ない。

だが――

「アイツらの泣き顔は……見たくないからな」

この街には、幼なじみとその弟の家がある。彼女らの友人もいる。このまま戦闘が続けば、巻き込まれる可能性もゼロではない。

そうなれば、あの優しい姉弟は、涙を流すだろう。

ならば――

「……まったく。せつかく今まで、平和に過ごしてきたのに……」

そして、ロイは駆け出した。

銃弾の飛び交う、その場所へ。

かつて慣れ親しんだ、戦場へ――

「状況を報告しろっ！」

「アルファは全滅！ 四方から敵が迫って来ています！」

「武装と人数は!？」

「AK47、それにロケットランチャーが4！ 人数は……こちらの3倍です！」

「だったら対等だな。交戦を開始しろっ！」

装甲車でとある物を護衛していたのは、ドイツ軍の特殊部隊だった。それを指揮するのはドイツ軍最強と名高い特殊部隊、「シユヴァルツェ・ハーゼ」の副隊長、クラリツサ・ハルフオーフ大尉。数名の部下を引き連れ、この任務に参加していた。

(どこかから情報が漏れていたのか? ……いや、考えるのはこの状況を切り抜けてからだ)

幸いにも、最精鋭であるクラリツサとその部下たちは輸送用トレラーのすぐ後ろの装甲車に乗っていたので無傷だが、人数で勝る相手から奇襲を受けた痛手は大きい。体勢を立て直すのが遅ければ、そのままズルズルと劣勢になっていくだろう。

そこでクラリツサは、自身の専用機、「シユヴァルツェア・ツヴァイク」の起動許可を求めることにした。

「HQ、こちらチャーリー！ 現在攻撃を受けている！ ISの起動許可を求む！」

『チャーリー1、ISの起動は許可出来ない。そこは日本だ、敵がISを持ち出して来ない限り、現状の戦力で撃退せよ』

「……チャーリー1、了解。……ちいつ、頭の固い上層部め……！ 積み荷の重要さが分かっていいのか!？」

現場からの要請を切り捨てられて、クラリツサは舌打ちする。だがクラリツサは軍人、どれほど不服な内容だろうと、命令であれば従うしかない。

アサルトライフルを抱えなおし、あらん限りの大声を張り上げる。

「装甲車を盾にしろ！ スナイパー、まずはロケットランチャーを片付けろ！ あれがあつては装甲車も役に立たん！」

素早く指示を出し、自身も戦闘に加わる。だが人数だけでなく地の利も向こうにあり、早くも押され始めていた。やはり最初に受けた損害が大きく、取り返しきれない。

「大尉、このままでは全滅です！」

「持ちこたえろ！ すぐに増援が来る！」

隊員を鼓舞するが、クラリツサ自身不安だった。

——果たして、それまで保つものか。

「ぐあっ!？」

「くっ、メディック！ チャーリー2被弾！ メディックっ!!」

「くそ、後がないな……!？」

必死に応戦するが、敵は次から次へとやってくる。距離も詰められ、負傷する隊員も増えてきた。元々数で劣るのだ、戦える者が一人減った時の相対的な損失も大きい。

次第に焦り始め、そして――

「!? ロケットランチャーっ!!」

「くっ!? しまった……!？」

ロケット弾がトレーラーを直撃、その装甲に大穴を空ける。その爆風にクラリツサも吹き飛ばされ、盾にしていた装甲車に叩き付けられた。背中を強打し、肺の中の空気を強制的に吐き出させられる。

「ぐはっ!、ぐは、けはっ……!？」

酸欠と軽い脳震盪で、意識が朦朧とする。銃声が遠く聞こえ、近付いて来る人影が霞んで見える。

「……く……」

そしてその人影が、味方のものではないと気付いた時には。

既に、頭に銃口を向けられていて――

――パアン――

一発の銃声が響く。

クラリツサは、それが自分が最後に聞くことになる音だと思い――

「……?？」

――いつまでも意識が続いていることに、困惑した。

「……悪いな」

「が……は」

見上げれば、テロリストの後ろに男が一人。

銃声は、その男が持つ拳銃のもので。

テロリストは、胸を撃ち抜かれ、絶命していた。



「美人の涙が最優先だ」

軽口に似合わぬ、鋭い眼差し。

燃えるような闘争心と、何もかもを割り切っているが故の冷酷さが同居した瞳。

それは、例えるなら。

必要な獲物だけを、生きるために狩る。

「……あばよ、酔っ払い」

「山猫」のような――

そこら辺に転がっていた誰の物かも分からない拳銃を拾い、女兵士を撃とうとしているテロリストに背後から近付く。

コイツを持つのはかなり久しぶりだったが、使い方は骨の髄まで染み込んでいるようだ。重さと重心で、この銃の素材、口径、あと何発弾が残っているのかまで分かる。

パン。

軽い反動。心臓を撃ち抜かれ崩れ落ちていくテロ野郎が、最期に俺を振り返る。

その眼に宿っている感情はただ一つ。

――死にたくない――

「……悪いな」

恨みも憎しみも、怒りもない。ただ、死にたくない。そんな、人間の最も根本的な想い。

別に殺す必要はなかった。頭でもぶん殴って気絶させればそれで済んだ。だがそれだと、いつ目を覚まして後ろから撃たれるか分かったものじゃない。

だから殺した。俺だって、死にたくないのだから。ただそれだけのこと。

「美人の涙が最優先だ」

いつものように、軽口を叩く。そうでなければやってられない。な

にせ俺は、これでまた、人殺しになったのだから。

人殺しの最期はみんな同じ、無様に死んで地獄行きだ。

「……あばよ、酔っ払い」

そう、みんな同じさ。

どいつもこいつも、誰も彼も、お前も、アイツも、この俺も。

「……ち」

嫌なことを思い出しちゃった。

昔のことだ。アイツを守れなかったのも、アイツとの最後の約束すら果たせなかったのも。

(まったく……まだ吹っ切れてなかったのかよ)

だがまあ、今はそんなことを気にしている余裕はない。銃撃戦は続いているし、俺の目の前にはなかなかの美女が倒れている。

左目を覆う眼帯がちよつとばかり無骨過ぎる感じはするが、それもまた一つのアクセントだ。うむ、悪くない。むしろ素晴らしい。

「……よう、お嬢さん。大丈夫かい？」

自分でもどうかと思うくらい凶悪になっていた表情を緩め、お気に入りの仮面を被る。眼帯の美女はそんな俺の様子に毒気を抜かれたのか、キョトンとしていた。

……うむ、結構可愛い。まだ相当若いように見えるが、軍服に付いている階級章は大尉の物だ。かなり優秀なんだろう、さらにポイントアップだ。

「な……何者だ？」

「俺か？ ただのトラックの運ちゃんだよ。善良な一般人さ。困っている人を見掛けたら助けるくらいの良識は持ち合わせてる」

「……………」

当然の質問にも軽口で返す。しかしやり過ぎたのか、美女の眼は困惑から不信へと変わった。

「とにかく、ここに居ちゃ危ないぜ。どこか弾の届かない所に——」

「!? ロケットランチャー!」

「おおっと」

警告に従い、美女を抱き上げて走る。すぐ後ろで爆音が響くが、間

一髪爆風と破片の範囲からは逃れた。

そのまま、トレーラーのコンテナに空いた穴から中に逃げ込む。

「き、貴様っ！ なにをしている!? 放せ！」

「おっと、失礼」

抱き抱えたままだった美女が暴れだしたので、ゆっくりと降ろす。かなり優しく降ろしたつもりだったが、壁に預けた時に小さく呻き声を漏らした。どうやらかなりのダメージを受けているらしい。

「大分苦戦しているみたいだな？ 大丈夫か？」

「……ふん。問題ない、すぐに殲滅する」

「そうかい？ そんな簡単に行きそうには見えなかったけどな」  
「く……」

言い返すことも出来ないあたり、状況の不利さが分かっているのだろう。美女は悔しそうに歯噛みしながら俺を睨みただけだった。

「さて、どうするかね。ここもいつまで安全か」

この美女たちに加勢しても、俺一人でどうにかするのはかなり骨が折れる。まあこれだけの騒ぎだ、いずれ増援が来る筈。その時増援が近付き易いように、ロケットランチャーだけでも片付けて――

「……うん？ こりゃあ……」

「あ!? 待て、近付くな！」

こんな嚴重な警備で何を運んでいるのかと思ったら、コンテナの中にあっただのはISだった。

——正式名称、インフィニット・ストラトス。世界を変えるほどの力を持つ、最強の兵器。

幼なじみが二人ともそっち方面で有名人なので、俺もそれなりに詳しくなってしまうてる。

「へえ、見たことない型だな。ドイツの新型か？」

「く……極秘事項だっ」

「ま、そうだろうな」

半ば興味本位で、その機体に近づく。美女は止めようとしたが、どうやらダメージが大きくて動けないらしい。

そしてその機体に手を伸ばし、指先が触れ――

「!? な、なんだ……!」

「な!? 馬鹿な、こんなことが……!」

触れた瞬間、ISが光を放ち、俺の脳に膨大な量の情報が流れ込む。それは随分昔に、慣れ親しんだ感覚だった。

それは、かつて俺が乗っていた――

『――接触確認。情報を記録、搭乗者として登録します――』

「……マジかよ。女しか動かせないんじゃないのか……?」

そう、それが世界の常識だ。

ISは、女にしか動かせない。だからこそ、世界はその在り様を大きく変えた。

なのに何故、俺に反応する――?」

『搭乗者として登録します。氏名を入力して下さい』

「……俺は、ロイ・ザーランド。お前の名前は……?」

『氏名確認。搭乗者、ロイ・ザーランド。本機は開発段階の機体であり、正式名称は決定していません。開発コードは、「ヒルベルト」です』

「……はっ。そりゃあまた、お誂え向きというか、なんというか」

――ヒルベルト、か。その名前には、聞き覚えがある、な。

「……いいぜ。名前がないなら、俺がくれてやる。お前は、今から――」

「――「マイブリス」だ」

――その後。俺がテロリスト連中を黙らせるのに、一分も掛からなかった――

「せせせせせ、せんぱあいつ!!」

「……どうしたんですか、山田先生。そんなに慌てて」

ISを動かしてしまったことで突如IS学園に入学することになった一夏について書類を纏めていると、突然同僚の山田先生が部屋

に飛び込んで来た。

普段からいまいち落ち着きのない山田先生であるが、いつもは織斑先生と呼ぶ私のことを昔のように先輩と呼んだあたり、その慌てぶりは普段の非ではないようだ。

「こ、こ、こ、こ、これを見て下さいっ!!」

そう言つて山田先生が差し出して来たのは、携帯用の端末。そのディスプレイに映し出されているのは、緊急のニュース速報だった。

怪訝に思いながら、その画面を見る。

「……なんですか？ なにか大きな事件でも——」

『——今日の午後二時頃、〇〇県〇〇市で自衛隊との合同訓練に向かっていたドイツ軍がテロリストの襲撃を受けました。しかしその襲撃を撃退したのはロイ・ザーランドというトラック運転手で、ザーランドさんはなんとドイツ軍が輸送中だったISを起動させてテロリストを撃退したとのことです。ザーランドさんは先日ISを起動させた織斑一夏さんに続き、世界で二人目の男性のIS操縦者で——』

「……………」

……………疲れているのかな。なんだか今、信じられないというより信じたくない内容の事件が報道されていたような……。

「せ、先輩?」

「はっはっは、どうしたんですか山田先生、こんな質の悪いイタズラをして。む、さてはアレですね？ 最近流行りのドッキリとかい——」

「ち、違いますっ！ ホントのニュースですよ!!」

「……………ふう」

ぱたりこ。

「きやあああああ!!? せ、先輩!!? せんぱあああああいつ!!」

心労が祟ったのか、私はついに倒れてしまった。

遠くから山田先生の声が聞こえるが、今はそつとしておいてくれな  
いか。私は疲れているんだ、こんな碌でもない幻覚を見てしまうくら  
いにはな。

いや、これは夢か？ 書類整理中にうつかり眠ってしまったのかもしれないな。だから大丈夫だ、少しすれば、ちゃんと目を覚ますから

「……夢ではなかったか……」

「何言ってるんだ、お前は？」

なにやら絶望的な顔で呟く幼なじみに、ロイは呆れたように返した。

場所は世界で唯一のIS関連の教育施設であるIS学園、その教員室である。

「……何をしているんだ、お前は」

「知るかよ、俺が聞きたいくらいだ。あの機体を動かしてテロ屋どもをぶちのめしたら、到着した増援に包囲されてどっかの研究所みたいなどここに連れて行かれて、気付いたらこんなことになってんだからな」

「……何てことをしてくれたんだ、お前は」

「あー……すまん。仕事増やしちまったか？」

「ああ、お前と私の関係など、調べればすぐに分かる。私も色々と訊かれたぞ、お前がどんな人間かをな」

「へえ、なんて答えたんだ？」

「秘密だ」

「秘密か。いいねえ、良い女には秘密がないとな」

「……ふん」

普段となんら変わらぬ飄々とした態度に、千冬も何かを諦めたように溜め息を吐く。

そして表情を改め、ロイ・ザーランドの幼なじみではなく、IS学園の教員としての言葉を告げた。

「IS学園へようこそ、ザーランド先生。あなたには用務員としてここで働いてもらう他、IS関連の研究にも協力してもらいます。よろ

しいですか?」

「ええ、構いませんよ、織斑先生。……くつく、お前と同じ職場とはな。小学校から続いてた腐れ縁だが、ここまで来ればこれはもう運命つてやつじゃないか?」

「下らんことを。お前との運命などこちらから願ひ下げだ」

「はは、照れるなよ」

「て、照れてなどいない!」

「あつはつは!」

ついいつもの調子でロイと話してしまつた千冬だが、ここは教員室、当然他の同僚たちも居る。普段とあまりにも違う千冬の様子に唾然としている同僚たちの視線に恥ずかしくなつて、千冬はごほんど咳払いを一つ。

「んんっ! ……とにかく、あなたはここの職員ですが、その立場はかなり複雑です。あなたに貸し与えられている機体はドイツの物ですが、あなた自身はドイツ所属ではありません。現在、あなたの身柄をどこが預かるか、各国で協議中です」

「そういえば、あの機体つて結局なんなんだ? 自衛隊との合同訓練なんて嘘なんだろう?」

「それについては、お答えすることは出来ません」

「ま、そりゃそうか。いいぜ、国家機密なんて知つても厄介事に巻き込まれるだけだからな」

「分かつているのでしたら結構。……とにかく、仕事は明日からだ。それまでに身なりを整えておけよ」

「了解だ。……ふう、しかしまあ、妙なことになつたモンだぜ」

今日はただの顔見せであり、これでロイは帰ることになった。すれ違う教員たちに気軽な挨拶をしながら帰路につく幼なじみの後ろ姿を、千冬は微妙な顔で見送つた。

「……ロイのことだ。確実に、厄介事を呼び込むだろうな」  
それも女関係で。

弟の一夏といい、千冬と関わりの深い男は皆そういう星の下に生まれているのかもしれない。

「…………ふう」

部下たちの訓練の様子を眺めながら、クラリツサは溜め息を吐いた。

先日からどこか上の空で、訓練の指導にも熱が入らない。隊長がI S学園編入の準備で忙しくしている今、副隊長である自分がしつかりせねばならないというのに。

「…………はあ」

だが、そうと分かっているながら、集中出来ない。気を引き締めようとしても上手くいかず、ふと思い浮かべてしまうのだ。

——自分を助けた、あの男のことを。

「…………ほう」

どこことなく熱っぽい溜め息を吐きながら、クラリツサは自分自身を抱き締めるように、肩に触れた。そこはあの男に、クラリツサを抱え上げた時に掴まれた所だった。

「………………………」

その時の感触を思い出す。

それなりの重武装をしていたクラリツサを、いわゆるお姫様抱つこの形で抱き上げながら小揺るぎもせず、俊敏に動いて見せた。鍛え上げられた全身は鋼のように硬く、しかしクラリツサを抱える腕は羽毛のように柔らかく感じた。あの状況、極限状態と言っても過言ではない状況で、あの男はクラリツサに絶妙な気遣いをしていた。

決して落とさぬよう、しつかりと。それでいて、怪我が痛まないよう、優しく。

「…………ふう……………」

だがあの男は、ただの気障で軟派な色男ではない。

最初にクラリツサを助けた時の、あの眼差し。

あの眼もまた、クラリツサの心を射抜いてしまっていた。

「…………はあ……………」



一体どちらが、あの男の本当の姿なのだろう。

全てを焼き尽くすような熱さと、触れただけで切り裂かれてしまいそうな冷たさが同居した姿か。

軽妙で飄々とした態度の裏に、さり気ない気遣いと優しさを隠した姿か。

一体どちらが、あの男の本当の姿なのだろう。

あるいは、どちらともが――？

「……ロイ……ザーランド……」

後で知ったその名を呟くと、心に不思議な熱さが広がっていく。その熱さは心地良いような切ないような、今まで感じたことのない感覚だった。

胸の高鳴りに戸惑いながら、クラリツサは一つのことを悔やむ。

——ロイ・ザーランドに、自分の名を告げていなかったことを。

くわえた煙草から紫煙を吸い込み、肺を満たす。酩酊感に似た独特の感覚を楽しんでから、ゆっくり、深く息を吐き出す。

「ふう〜……」

馬鹿みたいに広い校舎の屋上で空を見上げながら、これからのことを思う。

……一体、どうなるんだかな……。

「平和な生活も、悪くなかったが……」

まあ、仕方ない。人は自分には過ぎた物を持っていると、いずれ破壊するもんだ。やっぱり何事も、分相応ってのが良い。

「……さて、そろそろ行くか。いつまでも油売ってたら、千冬に怒られちまう」

煙草を携帯灰皿にねじ込んで、歩き出す。屋上の扉を開け階段を下り、校舎の外に出た。

見えるのは、大勢の少女たち。今日から始まる新しい生活に期待と不安を膨らませている、IS学園の新生たちだ。

一体どういうわけか将来が楽しみな子たちばかりなことに驚きと喜びを噛み締めつつ、その中に一人、見慣れた顔を見付ける。

見付けるのは簡単だった。ソイツは周囲の注目を集めていて、かなり目立っていたからだ。

ソイツは、この中で俺を除き、たった一人の男。

「よう一夏。顔色悪いな、腹でも壊したか？」

「え!? ロ、ロイ兄……!?!」

名前は、織斑一夏。千冬の弟であり、俺にとっても弟みたいな少年である。

「よう一夏。顔色悪いな、腹でも壊したか？」

周囲の好奇心やら何やらの視線に耐え難く、俯きながら歩いていた時のことだった。突然掛けられた、聞き覚えのある声での軽口。

その声に顔を上げると、かなり高い位置に頼りがいのある笑顔があった。

「え!? ロ、ロイ兄……!?!」

その人は千冬姉の幼なじみで、俺にとっては兄貴のような人だ。

名前は、ロイ・ザーランド。だがロイ兄は、普段と大分違って

「ど……どうしたんだよ、その格好？」

ロイ兄は普段、ちよつとだらしない感じの格好をしているのだが、今のロイ兄は違った。仕立ての良いスーツをビシッと着こなし、鍛えられ引き締まっている長身にかなり似合っている。

無精髭はしっかりと剃られ、茶色い髪もキチツと整えられていて、まるで映画俳優が演じるサラリーマンのようである。

「ああ、これか？ 最近不況で給料悪くてな、ここの職員に転職したんだ」

「て、転職って……」

いや、出来るのか？ ここIS学園だぞ？

「なんだ、ニユース見てないのか？ ……まあ、そんな暇もなかったかもな」

「？」

「俺もIS動かしちゃったんだよ」

「……うええっ!!？」

な、なんてこった……昔からなにかとやらかす人だったが、まさかそんなことまで……！

「何を考えてるのかなんとなく分かるから言わせてもらおうが、お前も似たようなもんだぞ」

「あー……やっぱり？」

がつくりと肩を落とすと、ロイ兄はくつくつと笑いながらその肩を叩く。

「まあそう気を落とすなよ。物は考えようだ、お前はこれから、この美少女たちと同じ学校で勉強出来るんだぜ？ しかも男はお前一人、選り取り見取りじゃないか」

「それが一番の問題なんだよ……」

こんな女ばかりの中で男一人とか、かなりの地獄だぞ。早くも胃に穴が空きそうになってるしな。

「ロイ兄は良いよな。女好きだし、女の子の相手慣れてるし」

「おいおい、俺はただ女性に優しいだけだぜ」

「良く言うよ……」

まあ、この人には何を言っても無駄だ。あらゆる面で、俺より何枚も上手なんだから。

「ま、なんか困り事があつたら言えよ、力になるぜ。と言つても、俺もここじゃあ新人だけだな」

「いや、ありがとう、ロイ兄。ロイ兄が居てくれるんなら、心強い」

実際、この短い会話だけで随分心が軽くなった。この頼れる兄貴が居るのなら、この先なんとかやっていけるかもしれない。

「おっと、そろそろ式が始まるな。時間とらせて悪かった。今度飯でも食いながら、ゆっくり話そう」

「ああ。じゃあな、ロイ兄。……ありがとうな」

感謝を告げると、ロイ兄はヒラヒラと手を振りながら歩き去った。その後ろ姿はモデル顔負けで、俺に集まっていた視線を引き連れて行く。

……あ、女の子が一人、顔が赤くなった。きつと目が合ったロイ兄がウインクでもしたんだろう、昔からモテモテだったからなあ。

「……なんか不安だなあ。千冬姉がすごい不機嫌になりそうだ」

だがまあ、それでもロイ兄なら、そんな千冬姉の様子さえ楽しんで見せるんだろう。昔っから、千冬姉をいじるのが好きだからなあ、ロイ兄は。

……それでそのとぼっちりが、全部俺に来るんだよなあ……。

「終わっちゃったと思ってたが……また、始まったわけだ」

取り出した煙草をくわえ、火を付ける。

考え事をする時は、なんでか煙草が吸いたくなる。

「喜ぶべきか？ 悲しむべきか？ ……なんだか、妙な気分だ」

ずつと、戦い続けてきた。

弱いヤツはただ搾取され、死ぬまで働かされ続ける。それは家畜と同じか、あるいはもっとひどい扱いだ。

だから戦った。力こそが人間の価値であり、俺には才能があったから。

「恵まれてるって言えば、恵まれてるんだろうな」

世界でたった二人の、ISを動かせる男。必ずしも幸運なこととは言えないだろうが、それでも俺たちを羨むヤツはいくらでもいるだろう。俺がその奇跡の恩恵を受けたのは、運命と呼べなくもないのかもしれない。

……皮肉なものだな。

「俺は……どうすりゃいいんだろうな」

生きるために、戦った。だがここでは、戦わなくても生きられる。だから戦わずに生きてきたのに、結局また、戦わなくちゃならなく

なった。

なら――

「なんのために、か……」

理由が欲しい。俺らしく在れる、俺らしい、俺が戦う理由。

とつくの昔に失ってしまった、理由が。

「まだ……」答「が見つからねえよ――ウインディー」

空に登って行く紫煙を見上げる。そのまま呆つと、見上げ続けた。

視線を降ろせば、アイツのいない世界が、見えてしまうから。

「ここに居たか。探したぞ、ロイ」

後ろから掛けられた声に振り返る。そこに居たのは、俺の幼なじみ。

どことなくアイツと重なる、けれどアイツとは違う、アイツとは別の、俺の大事な――

「何をしている。今日から仕事が始まるんだ、初日からサボるつもりか？」

「仕事の前に集中力を高めようと思つてな、瞑想してたところさ」

「ふん、良く言う。その口と同じくらいに手を動かしてもらうぞ」

キツイ目つきのクールビューティー。ソイツは不機嫌さを隠そうともせず、俺の隣まで歩いて来た。

「……私にも一本よこせ」

「お？ 弟の入学を祝つて、煙草デビューか？」

「いいから、よこせっ」

苦笑しながら煙草の箱を差し出すと、千冬はひったくるように一本抜き取った。くわえられた煙草の先端に、以前誕生日プレゼントとしてもらったジツポで火をつける。

「すうー……っ!? げほっ! げほ、ごほ……!」

「ぷっ、あっはっはっはっは!! そりゃ初めてでラッキーストライクはきつうばあ!」

思わず吹き出した俺のわき腹に、鋭いエルボーが叩き込まれる。そのまま睨みつけてくるが、むせて涙目になっているせいでまったく迫力がない。

「わ、げほ、笑うなっ！ 仕方ないだろう！」

「いてて……くつく、いや、悪い悪い。最初に教えとけばよかつたな。いきなり吸い込むからむせるんだよ。まずは口に煙を含んで、そこからすこしずつ吸うといい」

「む……すうー……」

教えられて、二度目の挑戦。顔立ちのおかげか、その姿は妙に様になっていて。

「……不味い。よくこんなモノを吸う気になるな」

「くつく。まあ、煙草の良さが分かるには、まだちよつと早いってことだな」

「……ふんっ。……すうー……」

一生懸命に煙草を吸う幼なじみの横顔を、笑いをこらえながら眺めることしばし。千冬が吸い終わるまでもう一本吸って、二人の煙草を携帯灰皿にねじ込む。

「……さて、そろそろ行くぞ。初日から、やることは山積みなのだからな」

「あいよ。そんなじゃ、気張って働くとしますかね」

くるりと踵を返したソイツを追い掛けて、歩き出す。

「いやしかし、IS学園てのはすげえな。才色兼備なお嬢さんたちがわんさかいる。こりゃあ働きのいがあるぜ」

「手を出すなよ。生徒たちの中には国家からの支援を受けている者もいる。下手なことをすればタダでは済まんぞ」

「おお、おつかねえ。けどそうだったら、元世界最強の幼なじみが守ってくれるさ」

「まさか。その幼なじみが、真っ先にお前を殺すだろうさ」

「くわばらくわばら。それじゃあ、大人しくするしかねえか」

「ふん、どうだかな。お前を縛り付けることが出来る者が、この世に存在するとは思えないが」

軽口を言い合いながら、隣を歩く。この時間が好きで、こんな関係が心地良くて、ずっと続けばいいのと思いい、同時にさらにこの先もと想う。

——ああ。なら——

(戦うための「答」が、俺にまだないのなら)

少しだけ、この温もりに甘えて、休ませてもらう。

そうして、また走り出せばいい。

(しばらくは、「答」を見付けるために、戦ってみるか)

なに、時間はまだまだある。俺は精々、それが突然無くなっちまわないように気をつけてりやあいい。

見分かるさ。いつか、きつと。

俺の「答」が、俺の——

「それでいいよな——?」

——「至福」が——

## 第51話 前兆

「はあああああつ!!」

「おおおおおつ!!」

アリーナ内の広大な空間を、白と蒼が飛翔する。凄まじい速度で一直線に突き進む白を巧みにかわしつつ、蒼が反撃の光線を撃ち込んでいく。

「お行きなさい、ブルー・ティアーズつ!!」

「頼むぜ、雪花ああああつ!!」

蒼——セシリアが操るブルー・ティアーズから、機体と同名の四機の自立機動兵器が分離し、白——一夏が駆る白式・雪花を取り囲む。同時に放たれる、四条の光線。その全てが高速で動く白式を直撃し、追い打ちとばかりにセシリアが両手で持つ大型レーザーライフル、スターライトmkⅢから一際強烈な光線が放たれ、吸い込まれるように白式へと突き刺さった。

——だが。

「——ぜえええあああつ!」

「くっ!」

白式を包み込む白い光——無数のナノマシン、雪花が展開する力場に阻まれ、白式にダメージを与えられない。

「おおおつ!」

「このっ……!」

凄まじい速度で近付いてくる一夏にミサイルビットを向け、二発のミサイルを撃ち込む。一夏は回避も防御もせず、白式の唯一の武器、雪片式型を肩に担いだまま、真っ直ぐにセシリアへと突撃した。

当然ミサイルは直撃、赤い爆炎に包まれるが——

「これも効かないだなんて……!」

一夏は止まるどころか減速すらせず、さらにセシリアとの距離を詰めて来る。セシリアも正確な射撃を繰り返しながら逃げるが、白式とブルー・ティアーズの機動力には差が有りすぎる。次第に追い詰められ、そして——



「はあああつ!!」

雪片式型が眩い輝きを放ち、光の剣となる。白式の単一仕様能力ワンオフ・アビリティ、零落白夜の発動である。

その刃が、肩に担いだ姿勢から渾身の力を込め振り下ろされ――

「きやあああつ!!」

――ブルー・ティアーズを、捉えた。

「……はあ……」

熱いシャワーを浴びながら、深い溜め息を吐きました。

この憂いも、汗のように洗い流してくれればいいのに。

「……これで、ついに……負け越しですわね」

夏休み明けの、最初のIS戦闘実習。わたくしは一夏さんと戦い――  
――為す術無く、敗れました。夏休み中にも何度か試合をしましたが、  
全て同じように負けています。

「……無様ですわね……」

一夏さんの白式が第二形態に成ってから、わたくしは一度も勝って  
いません。それどころか、最近では勝負にもならないことすらありま  
す。

なにせ、わたくしの攻撃は――一夏さんに、効かないのですから。

「……はあ……」

白式・雪花に勝てていないのは、わたくしだけ。

真改さんは、雪花の防御力を貫いて余りある攻撃力を持っていま  
す。それだけでなく、一夏さんを遮断シールドや地面に叩きつける投  
げ技なら、雪花も役には立ちません。

箒さんは、猛烈な飽和攻撃で雪花を消耗させることが出来ます。勝  
敗は五分五分といったところですが、全敗のわたくしとは比べるべく  
もありません。

鈴さんは、双天牙月と衝撃砲の同時、集中攻撃で雪花の守りに穴を  
空けることが出来ます。甲龍の燃費の良さも相まって、勝率は安定し

ています。

シャルロットさんは、豊富な火力と巧みな戦術で封殺することが出来ます。それにリヴァイヴの最強の武器である「灰色の鱗殻」<sup>グレイスケール</sup>は密着状態から放たれるので、雪花の守りが入る余地がありません。

ラウラさんは、雪花もAICは無効化出来ないのです、それにより動きを止めて一方的に攻撃出来ます。ラウラさん自身、元々戦闘力が高いので問題無く戦えています。

——わたくしだけが、一夏さんに対する有効な手段を持っていないのです。

「どう……すれば……」

一夏さんが強くなったことは、当然喜ばしいことです。最近はこちらに遅くなり、その顔の精悍さは思わず目を引かれてしまうほど。けれどそれでも、負けたくないのです。

好きな男性<sup>ひと</sup>だからこそ、尚更に。

「勝ち……たい……」

勝ちたい。

勝ちたい。

正々堂々と、真っ向からぶつかって、勝ちたい。

一夏さんとの最初の勝負、そして勝利。真改さんに教えられた、勝利を誇るという在り方。

それを、失いたくない。

「勝ちたいです……一夏さん……」

悔しい。今のわたくしは、無力です。ただ守られるだけの、無力な存在。

——そんなのは、嫌です。

わたくしは、あの人の隣に、並び立ちたいのに——

「……あなたに、勝ちたいです……」

ああ、力が。力が欲しい。

守るための力ではなく。

わたくしが、わたくしを誇れるような。

胸を張って、在れるような。

そんな、魂の輝きのような、力が――

「あら、真改さん。ごきげんよう」

「おお、せつしー。ごきげんよう」

「……………」

本音と共に部屋を出たところで、スカートの端をつまみながらセシリアが優雅に挨拶して来た。本音は間延びした返事を、己はいつものように無言を返した。

「どちらに行かれるのですか？」

「……………食事……………」

「あら、奇遇ですわね。それでしたら、わたくしも一緒にさせて――」

「お、シンにのほほんさん、それにセシリア。これから飯か？ 丁度良いや、一緒に行こうぜ」

「あ……………」

するとそこに一夏がやって来た。その申し出は己としては断る理由もないし、セシリアも普段なら喜ぶのだろうが――

「……………すいません、真改さん。わたくし、急用を思い出しましたわ。お食事はまた今度に」

「……………」

そう言って、セシリアは去ってしまった。その背中には、いつも満ち溢れている自信がなかった。

「どうしたんだ、セシリアのやつ？ なんか元気なかったな」

「いのちちく。おりむーがいつも通りです」

「……………諦めた……………」

「は？ どういうことだよ？」

「自分の胸にく、聞くといいよ」

「……………」

セシリアが沈んでいる理由など、一つしかあるまい。

今日の敗北で、セシリアは一夏に負け越したのだ。誇り高いセシリ

アには耐え難いことだろう。

(……相性……)

仕方のないことではある。セシリアの専用機、ブルー・ティアーズは、ビットによる攪乱と狙撃でじわじわと削る戦術を主にしている。それでは攻撃力が足りず、白式の防御力——雪花の回復に追い付かないのだ。

元々ブルー・ティアーズはBT兵器のデータ蓄積を目的とした実験機であり、戦闘向きでないというのも大きな理由だ。武装が近接格闘用ブレード一つしかないとはいえ、白式の性能そのものは極めて優れているのだから。

(……だが……)

そんな言い訳では、自分を納得させることなど出来まい。仮に誰かがそう言っても、セシリアは断固として否定するだろう。負けた理由を機体のせいにするなど、セシリアのプライドが許す筈がないのだから。

「……難儀……」

「ん？ シン、何か言ったか？」

「……………」

思わず漏れた呟きに一夏が反応するが、それには応えない。己は既に思考に没頭していた。

——さて、どうするか。

セシリアは剣士ではない。一夏の時のように、剣で語ることは難しいだろう。

かと言って、言葉で語り合うことはもつと難しい。こんな時、自分の口下手さ加減にうんざりしてしまう。

どうすれば伝えられるのか。

——焦ることはない、と。

セシリアはまだ若く、才能がある。今はまだ、しっかりとした土台を作る段階だ。ブルー・ティアーズも、実験機ということはこれからいくらかでも改良される余地がある。

焦る必要などないのだ。まだまだ、これからなのだから。

(……無茶を……しなければ良いが……)

あまり根を詰め過ぎると、心も体も壊してしまう。プライドの高いセシリアは誰かを頼ることを苦手としているから、自分一人で抱え込んでしまわないかが心配だ。

(……さて……)

どうするか。自分の無力さに苦しんだ者として、セシリアの悩みには共感出来る。

何か、力になりたいが――

――さて。

セシリアの件で色々と考えてはみたものの妙案は浮かばず、何事もなく時は流れた。

今日は今月中程に行われる学園祭について、全校集会が開かれた。

「それでは、学園祭について生徒会長から説明していただきます」

生徒会の役員であろう人物――どことなく顔立ちが本音に似ている気がする――がそう告げると、騒がしかった集会場が瞬く間に静まる。それを見計らって、一人の女子が壇上へと上がった。

……はて。この顔にも、どことなく見覚えがあるような……？

「やあみんな。おはよう」

気さくな挨拶をする生徒会長は、二年生のリボンをしている。先程の役員は三年生だったことを考えると、この生徒会長は余程優秀な人物なのだろう。

……だがそんな推測とは別に、己の本能が警告している。

――関わるな、碌でもないことになるぞ。

「本当は入学式で挨拶する予定だったんだけど、みんなご存知の通り、今年は色々忙しくて。けれどようやく、こうやって自己紹介が出来るわ。」

私は更識楯無さらしきたてなし。この学園の生徒会長よ。以後、よろしくね」

そう言つて笑顔を浮かべる楯無会長。それはとても魅力的な笑顔だったのだが、どういうわけか己の警戒心を刺激した。

「さてさてそんなわけで、さっそく本題に入るけれど。今月は学園の一大イベント、学園祭が開催されるわ。この学園祭、いつもは出し物ごとに来賓、生徒が投票を行い、その結果に応じてデザートデザートのフリーパスや部費の分配にボーナスが与えられる仕組みでした。しかし今年は、今回限りの特別ルールを導入します。その内容と言うのは――」

楯無会長は懐から扇子を取り出し、並んだ生徒たちをなぞるように横へと動かした。その動きに合わせ、空間投影ディスプレイが浮かび上がる。どういうわけか嫌な予感も加速していく。

そして、その予感は――

「――名付けて、「各部対抗織斑一夏争奪戦」！」

――現実となった。

ぱんっ！ と小気味良い音を立てて扇子が開かれる。同時に空間投影ディスプレイに一夏の写真が表示される。その下には優勝賞品の文字。さらにはパンパカパーンという気の抜けるファンファーレに紙吹雪までついていた。

(……そういう……手合いか……)

くらりと、眩暈のようなものを感じた。ああ、頭が痛い。周囲の生徒たちによる驚愕と歓喜の入り混じった地鳴りのような大歓声のせいではないだろう。

「学園祭。それは遊びたい盛りの若者にとって最大のお祭りであり、同時に共同作業チームワークを身につけるためにとっても重要な実習。これを果たして、毎年似たようなルールのもと行われる、退屈なイベントにしていいのだろうか!?

答えは否っ!! そんな学園祭はつまらないっ!! なので、今回は――

いや、つまらなくはないだろう。各クラス・各部対抗、それだけでも相当に盛り上がると思うのだが。

だがそんな己の考えは当然届くことなく、楯無会長は手に持つ扇子

をびしりと突き出す。

その先に居るのは、勿論一夏である。

「織斑一夏を、一位の部活に強制入部させましょうっ！」

その言葉に、再び雄叫びがあがる。その音量は凄まじく、まるでこれからどこかに攻め込む軍隊のようであった。

「うおおおおおっ!!」

「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」

「一生ついて行きますっ！」

「……………」

……なんてことをしてくれたんだ。凄いことに……いや、酷いことになるぞ、間違い無く。

「さ、ら、につ！ 今回の学園祭には、特別ゲストを呼んでいますっ!!」

なんだ、まだ何かあるのか。

もういい、どうにでもしてくれ。これ以上なにが来ようと構うものか。

……………」

「どうも、初めまして。チェーンソー、ドリル、パイルバンカー、大艦巨砲、なんでもござれ。皆さんの暮らしに浪漫をお届け、如月重工です」

——その人だけは、やめてくれ。

「ご存知の方も居ると思いますが、僕らは今年からIS学園における研究、開発に、技術面での協力をすることにしました。つきましては友好の証として、学園の一番の財産である生徒の皆様方に贈り物をしたいと思います」

言うまでもないが、壇上に現れなにやら話し始めたのは如月社長である。

……大人しく会社で仕事していてくれないか。

「学園祭で、僕たちは抽選会を開催します。参加費は無料ですが、クジを引けるのは一人につき一回まで。そして当選するのは一人だけ。見事当選した方には、優先的な協力を約束するとともに、豪華賞品を提供します」

社長の言葉に、生徒たちがざわめく。

如月重工は特別な後ろ盾もなしに、その技術力だけで一代でのし上がって来た企業だ。ここで開発される物は常に他の企業の数歩先を行く。その如月重工の協力を得られるとなれば、それは極めて大きなアドバンテージだ。

だがそれ以上に気になるのは、豪華賞品とやらである。如月重工は優れた技術力を持つということ以上に、独特かつ理解し難い思想を持つ変態企業として有名なのだから。

「その豪華賞品とは——こちらですっ!!」  
ババーンツ!!

派手な効果音と共に、空間投影ディスプレイの写真が切り替わる。  
一夏の写真に代わり、そこに写し出されたのは——

「……勘弁……」

デフォルメされた、三頭身くらいの。

——己の、人形だった。

「この1／6井上君人形を差し上げますっ!!」

「「「う……うおおおおおおおっ!!!」「」」」

もう表現するのが不可能なくらいに盛り上がる生徒たち。その人数は先程の一夏の時よりも少ないようなのに、勢いでは比べ物にならない。どうということだ。

「これはただの人形ではありません！ 我が社の技術力を結集して作り上げた、自ら思考、稼働する特別製なのです！ 登録された人物を主人として認識し、I Sに使われているP I Cを応用した技術で浮遊して追従する！ モチロン、井上君本人から採取した声紋も完全再現していますっ！」

「な、なんてこと……!」

「如月重工、やってくれるわねっ!!」

「ほ、欲しい……! これはなんとしても欲しいっ!!」

「……………」

社長が説明するたび、生徒たちは一層の盛り上がりを見せる。なん



なんだ。一体何が起きているんだ。

「これをつ！ 抽選で一名様にプレゼントつ！！ 先述の通り我が社の技術サポート付きです！ ご希望の方は奮ってご参加下さいっ！！」

「いよっ！ 社長っ！！」

「日本一っ！！」

「私、今まで如月重工のこと誤解してました……！」

「……………」

悪夢だ。悪夢過ぎる。いや、悪夢であつたならどれほど良いか。

む、少し待て。これっていいのか？ 法律的に。肖像権とか侵害してるんじゃないのか？ 少なくとも己は許可していないぞ。そんなことを言っても如月社長には意味がない気がするが。

「それでは皆さん、今日のところはこれで失礼します！ 次は学園祭で会いましょうっ！！」

パチパチパチパチ！！

盛大な拍手で見送られる如月社長。……やはり学園祭にも来るつもりか。

……悪夢だ……。

「学園祭か……」

全校集会が終わり、一息ついて。

ラウラ・ボーデヴィツヒは今回の学園祭について、考えを巡らせていた。

「ふむ……いい機会かもしれないな」

最近ようやく、クラスの一員として受け入れられて来たと思う。ラウラ自身もクラスメイトたちを大切な仲間と思うようになっていた。ここいらでもう一つクラスのために何かアクションを起こせば、完全に溶け込めるかもしれない。それには学園祭は絶好のシチュエーションだ。

「うむ、それが良い。となれば、ここは……」

そこでラウラは、こんな時に頼れる人物にアドバイスを貰うことにした。その人物とは勿論、ラウラが率いる特殊部隊、「シユヴァルツェ・ハーゼ」の副隊長、クラリツサ・ハルフオーフ大尉である。

『――受諾。クラリツサ・ハルフオーフ大尉です』

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ」

『おお、隊長。今日はどうしました？』

「うむ、毎度のことで済まないのだが、またお前の助言が必要になつてな」

『なるほど、つまり私はまた隊長のお役に立つことが出来るのですね』  
「そう言つて貰えて嬉しい、クラリツサ」

なにやらとても仲むつまじい二人。ラウラは純粹に、頼りになる副官としてクラリツサを信頼しているのだが、クラリツサの想いには色々な不純物が混じつていた。

『ところで隊長、私に訊きたいこととは？』

「うむ。今月学園祭があるのだが、その出し物は何がいいかと思つてな」

『メイド喫茶です』

即答だった。脊髄すら介していなかった。

「メイド喫茶……だと……!?」

『ええ、メイド喫茶です。それ以外あり得ません』

「な、何故だ？ 何故メイド喫茶なのだ……?」

『IS学園の学園祭には、限られてはいますが外部の人間が訪れます。休憩所として喫茶店の需要はあるでしょう。そして隊長のクラスには、隊長を始めとして容姿に優れた者が多くいます。それを最大限活かすことが出来るのは、メイド喫茶です』

「ふむ……メイドとはそんなに優れたものなのか？」

『はい。スクール水着、ブルマ、そしてメイド服。これらは三種の神器と呼ばれており、男性に対して絶大な視覚効果を誇っています。またこれらに次いで強力な武装として、巫女服や裸ワイシャツ、裸エプロンなどが挙げられます。是非とも覚えておいて下さい』

「な、なるほど……」

クラリツサは着々とラウラの洗脳を進め、自分好みの少女へと変えていく。

『そして隊長は、メイド服により織斑一夏に隊長の魅力をアピールすることが出来るのです』

「！……いや待て、メイド喫茶ということは、私以外もメイド服を着るのだろうか？ 私だけがアピールするということにはならないのではないか？」

『確かにその通りです。ですがメイド服には、一つの特徴があります』  
「む？ 特徴……？」

『はい。メイド服は、銀髪と相性が良いのです。そしてデザインをゴシックロリータ調のものにすれば、隊長のような小柄な体形には一段と似合います』

「むう……クラリツサ、やはりお前は頼りになるな。その深い知識は私にとってこの上ない武器だ」

『恐悦至極』

「では、今回はこれで通信を終わる。また何か訊きたいことがあれば連絡する」

『分かりました。いつでもどうぞ、何時であろうと即応します』

「ありがとうございます、クラリツサ」

こうして通信を終えたラウラは、クラリツサへの信頼をさらに深めた。

彼女が師事する相手を間違えていることに気付くのは、遙か先のことになるだろう。

……あるいは、永遠にその時は来ないかもしれない。

---

『では、今回はこれで通信を終わる。また何か訊きたいことがあれば連絡する』

「分かりました。いつでもどうぞ、何時であろうと即応します」

『ありがとうございます、クラリツサ』

通信を終えたクラリツサは、表情を引き締めて居住まいを正し、覇気に満ちた声を発した。

「全隊員、集合っ！」

「はっ！」

その声に従い、訓練中だった「シュヴァルツェ・ハーゼ」の隊員である少女たちが素早く集合する。

「諸君！ 先程隊長から通信があった」

「え、隊長から？」

「どんな内容なのですか、お姉様？」

ちなみにクラリツサは隊員たちから慕われるあまり「お姉様」と呼ばれている。クラリツサ本人もその呼び方をとても気に入っていた。「IS学園の学園祭で、隊長のクラスはどんな出し物にすればいいかな」とな

「学園祭!? 一大イベントですね！」

「ああ、これは隊長の可愛らしさを世に示すまたとない好機だ。そこで私は隊長にお教えした。

——出し物は、メイド喫茶にすべきだ、と」

一瞬の沈黙。

そして爆発。

「きゃああああっ!!」

「メ、メイド喫茶!? それって、つまり……!!」

「隊長がメイド服を着るってことですね!」

「ああそうだ、隊長が、あの隊長が、メイド服を着るのだっ!!」

「きゃあああああっ!!」

そしてシュヴァルツェ・ハーゼの隊員たちは、すでに全員がクラリツサにより教育済みであった。

「想像してみる。あの隊長がゴスロリメイド服に身を包み、冷たい眼でご奉仕する姿を。」

……光が逆流して来ないか？」

「しますっ！ 超しますっ!!」

「わ、私は鼻血が……!!」

「そうだろうそうだろうっ!!　だがその姿、妄想だけで満足出来る  
かっ!?!」

「「否っ!　否っ!　否っ!」」

「そうだ、出来るわけがない!　ならばどうするっ!?　我々はどうす  
るべきだ!?!」

「……見たいです」

「見たいです、お姉様っ」

「メイド服を着てる隊長が見たいですっ!」

「ならば見に行こう、隊長の晴れ姿をつ!　IS学園に乗り込み、この  
目にしかと焼き付けようっ!!」

「「うおおおおおっ!!」」

「だがいくら学園祭と言えど、IS学園の警備は嚴重だ。大勢で乗り  
込むことは出来ん。……そこで私が一人で行き、隊長の姿を写真に収  
めてくる」

「なっ、一人でですか!?!」

「そんな、いくらお姉様でも危険ですっ!」

「危険は承知の上だ。だが誰かがやらねばならん。そして失敗が許さ  
れない以上、最も成功率の高い人員を選出するべきだ」

「しかし……!」

「それに。今回の潜入では隊長の写真を入手するだけでなく、嫁であ  
る織斑一夏、相棒である井上真改の情報を集めて来る。それには隊長  
から直接話を聞いている私が適任だ。

……私が行かねばならんのだ。たとえば、どれほどの危険が待ち受け  
ていようと」

「「お姉様……!」」

「だが約束する。私は必ず、お前たちの元に帰って来る。勝利と共に。  
そして皆で、隊長のゴスロリメイド服姿を愛でようっ!!」

「お、お姉様あ……!」

「私、待ってます……!　お姉様を信じて、待ってますからっ!」

——こうして。

国際問題に発展しかねない作戦が、個人の歪んだ欲望により開始されることになった。

## 第52話 会長

「……………ん？？」

本音が部屋に戻ると、各部屋備え付けの浴室から水音が聞こえた。ルームメイトである真改が、彼女にしては珍しいことに早めのシャワーを浴びているようだった。

不思議に思いながらも、本音はお小遣いを奮発して買ってきた櫛と椿油を準備する。真改は自分の髪にまったく頓着しないので本音の手入れをしているのだが、本音にとっても真改の長い髪を梳き椿油を塗り込む時間は大きな楽しみであった。

「ふんふん♪」

鼻歌を歌いながら、ノロノロと道具を取り出し、並べる。

今使っている椿油は友達のオススメなのだが、どうやら真改の髪にはイマイチ合わないようだった。ちやうどなくなりそうになっていたので、次は別のを試してみよう。そんなことを考えていたせいか――

「……………」

いつの間にかシャワーの音が止み、真改が浴室から出て来ていたことに気付かなかった。

「……………いのちち？？」

「……………」

ふと感じた気配に振り向くと、そこには真改が立っていた。

服を着るどころか、身体すら拭わぬまま。

「ど……………どうしたのっ、いのちち？？」

「……………」

見るからに様子のおかしい真改に、本音が駆け寄る。そしてその細い肩にタオルを掛け、自分よりもかなり高い位置にある顔を見上げて、気付いた。

——真改の瞳が、妖しい輝きを放っていることに。

「きゃっ……………!?!」

突然、真改が本音の襟を取る。そしてそのまま、ベッドに押し倒し

た。いくら片腕のハンデがあろうと、真改と本音の運動能力には天地の差がある。加えて不意を突かれたこともあって、本音は抵抗するとすら出来なかった。

「い…………いのつち…………？」

「……………」

ベッドに仰向けに横たえられた本音に、真改が覆い被さる。長い髪は湯に濡れていつも以上に艶やかな黒色で、瞳に宿る光は今までに見たことのないものだった。

「ど、どうしたの〜？　なんか…………変だよ…………？」

「……………」

怯えたように訊ねる声にも応えない。不安になって、もう一度訊ねようと口を開くと――

「…………？」

――真改の唇で、塞がれた。

あまりのことに驚いている隙に、口の中にぬるりと舌が入り込んで来た。それは直前まで浴びていた熱いシャワーのためか熱を持っており、その熱以上に激しく、情熱的に本音の舌を絡め取っていく。

「んむう…………！」

互いの唾液が混ざり合う音が響き、それが長く、永く続く。次第に本音は、まるで真改の熱に侵されていくかのように、体が熱くなるのを感じた。

「…………ぶはっ、はあ…………はあ…………」

ようやく解放された時には、本音の眼はトロンとして、体に力が入らなくなっていた。

息が苦しい。

意識がぼやける。

ああ、なんだろう――この、気持ちは。

「…………本音…………」

真改が、言葉を紡ぐ。

その声は静かなのに体以上の熱がこもっていて、ひどく轟惑的だった。



「己は——お前が、欲しい」

その言葉は蜜のように甘く、猛毒のように瞬く間に本音を蝕んでいく。

そして本音はゆらゆらと両手を持ち上げ、愛おしそうに真改の腰に回して、左腕の傷痕に口付けをした。

「……いいよ。いのつちに、私の全部をあげる」

一度体を離し、今度は真改の全身を迎え入れるように、両腕を広げ。「だから、私に——いのつちの全部を、ちようだい？」

うつとりと。眩くように、そう言った。

「……元より……己は、お前のモノだ」

そう応えて、真改が、本音へと沈み込んでいく。

二人の身体が重なり合い、絡み合い、溶け合い、混ざり合い、そして——

「な、な、な、なんなんですのこれわあああああつ?!?!?」

来客用のラウンジに、セシリアの絶叫が響き渡る。その両手は如月社長が持って来た結構な厚さの本を持っており、ワナワナと震えていた。

「うちの文学部が書いた作品だよ。今年の夏の陣に出版する予定だったんだけど、僕の秘書がいつの間にかその計画を潰してたんだよねえ」

「当たり前でしょうっ！　こんなもの、世に出せる筈がありませんわっ!!」

バシーンッ!!　と本をテーブルに叩き付ける。それにラウラが手を伸ばし、内容を読み始めた。その後ろからシャルロットが覗き込み、二人の顔があつと言う間に真っ赤になる。

「うわ、うわっ、うわあ……!」

「これはけしからんな。うむ、実にけしからん」

そんなことを言いながらも二人合わせて三つの目はギンギンに

光っており、凄まじい速さでページを読み進めていく。

「……如月社長。これは流石に問題があるのでは……?」

「あるに決まってるでしょ。ていうか大問題よ、大問題」

セシリアに先んじて内容を確認していた箒と鈴が苦言を呈するが、当然そんなもの、如月社長には微塵も効果がない。

「この作品はフィクションです。内容は実在の井上君、布仏君には一切関係ありません」

「それは関係ありますって言うてるようなもんじゃないのよ!」

「申し訳ないんだけど、凰君。僕は中国語はわからないんだ」

「ワタシサツキカラニホンゴハナシテルアルヨシャツチヨサン!!」

「鈴、落ち着け。社長のペースに吞まれてるぞ」

「シャルロットさん、ラウラさん! そんなモノを読んではいけません、教育に悪いですわっ!!」

「はあああうううう……」

セシリアが本を取り上げようとするが、既にヤバイシーンに入っていたのかシャルロットとラウラは目がグルグルになっていた。

「シ、シ、シ、シンがこんなことを……!」

「ほ、本音……お前がここまで進んでいるとは……!」

そして現実とフィクションの見分けが付かなくなっていた。

「それ布仏君が攻めのバージョンもあるんだけど、いるかい?」

「いらんわっ! 持って帰——いや、全部出せ! 焼き尽くしてやるっ!!」

「無駄無駄無駄あつ! データにして残してあるからねっ!」

「むつきいいいいっ!!」

「鈴、落ち着くんだ。社長が喜ぶだけだぞ」

箒も最初はかなり混乱していたのだが、他のメンバーの混乱ぶりがそれ以上だったのでかえって落ち着いた。

「……まあ、一夏と真改と本音を呼ばなかった理由は分かりましたが。社長、今日はどんな用件で? まさかこのために来たわけではないでしょう?」

「え? このために来たんだよ?」

「……………」

お前は何を言ってるんだ的な顔で返されて、箒は頭を抱えた。本気なのか冗談なのか、この社長ならどちらもありそうで困る。

「まあ主な目的はこれだけど、ついでの目的もある」

「ついで、ですか」

「うん。僕らの技術提供の件なんだけど」

「そっちがついで!?!」

「どう考えても優先順位を間違えてますわ……」

「まあとにかく、僕らの技術提供の件だけど。正直対象は、君たち国家代表候補生と整備課になると思う。それ以外だとあまり意味がないからねえ」

整備課というのは二年から始まるクラスで、ISの整備や開発方面の知識、技術を専門とするクラスである。ここに如月重工からの技術支援が入れば、整備課の生徒たちにとってどれほどのプラスになるか計り知れない。

だが逆に言えば、それ以外の生徒は整備課から間接的に如月重工の支援を受けることしか出来ない。自分の専用機を持つ国家代表候補生なら、また話は違ってくるが。

「じゃあ何? こないだの全校集会で言ったことを反故にするわけ?」

「まさか。だからこそ、一人だけになって言ったのさ。整備課でもない、代表候補生でもない生徒にも十分な支援をするには、一人までが限界なのさ」

「ふうん。如月重工にも限界があるのね」

「そりゃあるさ。たとえ無くても、限界は自分で設定しないと。ここまですらやってもいい、これ以上はやってはいけない、ってね。でないと社会どころか、世界そのものから逸脱していくものだよ」

「……なにそれ。哲学かなんか?」

「いやいや、これはただの事実だよ。その実例を、君たちは知っていると思うけど?」

「実例? ……それって……」

「……うふふ」

——篠ノ之束。あまりに天才過ぎるが故に、その才能で、限界など無いその頭脳で、世界を作り替えた人物。

「まあそういうわけで、抽選会では一切のズルはしない、ということを理解しておいてくれたまえ。普通の生徒が当選した場合、僕らはその生徒を支援する。君たちとは色々付き合いがあるけど、如月重工の社長としてはあくまで代表候補生、専用機を持つ生徒として接する。特別扱いはしない、ってことだねえ」

「当然ですわ。……というよりも、あなたに特別扱いされるのはあまり嬉しいことではない気がしますわ」

「うふふ、褒め言葉と受け取っておくよ」

「つまり今回は私たちに、変な期待をするな、ということのを伝えに来たのですか?」

「まあ、そんなところだねえ」

妙なところが真面目な社長に呆れたような視線を向けながらも、一同はその言葉に納得した。

正々堂々は、彼女たちにとっても望むところだ。

「……分かりました。如月社長、私たちへの気遣いは無よ『ハラシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』」うわあ!? な、なんだ!?

「おつと失礼、着信だ」

「え!? 今の着ボイス!」

「な、なんとも個性的な着ボイスですわ『ハラシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』」しかもリピート!」

「ふむ? 話し合いの途中で申し訳ないんだけど、出てもいいかね?」  
「……まあ、緊急の話かもしれないし『ハラシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオ』」ああもううるさいっ! さっさと出なさいよっ!!」

「それじゃあ失礼して」

如月社長は携帯電話を懐から取り出した。着信は網田主任からのようだった。

「もしもし網田君? どうしたんだい? ……うん。ふむふむ。わかった、社に戻るよ」

ピツと通話を終え携帯電話をしまうと、社長は立ち上がって皆に向き直る。

「急用が出来たから、申し訳ないけどこれで失礼させてもらうよ。それじゃあ、また」

一礼してから、出口へ歩き出す。途中、ふと振り返って――

「如月重工社長としては、井上君と布仏君以外は平等に扱うつもりだけれど。僕個人としては、君たちの内の誰かが当選してくれた方が、やりやすくはあるねえ。だから是非とも、抽選会に参加してくれたまえよ」

そう言って、如月社長は今度こそ去って行った。

その背中を見送りながら、少女たちはどことなく緊張していた意識を緩める。

「……ほんつと……何考えてんのかわかんないわね、アイツは」

「とにかく、油断ならない人物ではあるな。あのふざけてるとしか思えない態度も、どこまでが計算でどこまでが天然なのか」

「それとも全部計算なのか、あるいは全部天然なのか。……本当に、わからない人ですわね……」

「……けどまあ、とりあえず――」

如月社長を見送った三人は、まず最初に。

「わっ、わっ、ここここ、こんなことまで……!」

「けけけけ、けっ、けしからんな、けけけしけしかららん」

「――この毒物を処分しなきゃね」

見るからに有害なその書物を破棄するべく、行動を開始した。

全校集会の発表から数日。一年一組では、学園祭の出し物について話し合いが行われていた。

なぜ数日経ってからなのかと言うと、楯無会長が発表した織斑一夏争奪戦は部活動間で行われるモノでありクラスでの出し物は関係ないため、蔑ろにされていたのである。しかしいい加減に堪忍袋の緒が

切れた千冬さんにより一喝され、こうして会議が開かれたのだ。

「……ええつと。それでは、決を取ります」

現在教壇に立ち会議を進めているのは一夏だ。クラス代表である一夏は、こういったことも仕事の内なのである。

「皆さん、どちらか希望するほうで挙手して下さい」

クラスの出し物は既に決まっている。ラウラの鶴の一声によりメイド喫茶となり、そこから発展してご奉仕喫茶に決定した。衣服はどうするのかという質問には、ラウラは当てがあると答えていた。

……どうもその当てというのは、己の義妹である小夜のことからしい。夏休みに孤児院で見たアルバムの一夏が着せられていたメイド服が、小夜の手作りであることを聞いていたようだ。その写真が撮影されてから数年、増え続けた小夜の作品が大量に保管されていることも。

「えー、それでは——」

そういった経緯があつて、出し物はご奉仕喫茶で満場一致となつた。それだけでもかなり頭の痛い事態ではあるが、それ以上に己の頭を痛めつけているのは今現在行われている多数決の議題である。

その議題というのは——

「——井上真改に着せるのは、メイド服が良いと思う人？」

「「「はいっ!!」」」

「……では、執事服が良いと思う人？」

「「「はいっ!!」」」

「……あー……やっぱり同数かよ。これじゃ決まんない……」

「……………」

……まあ。

そういうことである。

「分かっていないな。マスターは普段から私服では男装に近い。執事服は確かに似合うだろうが、似合うだけだ。意外性、普段とのギャップがない。学園祭という短期決戦では力不足だ」

「あなたこそ、何もわかつていませんわね。奇をてらう必要などありません。そんなことをせずとも十分な魅力を、真改さんは持つていま

す。メイド服も確かに愛らしいでしょうが、しかし真改さんの最大の魅力である凛々しさを引き立てるには執事服のほうが効果的ですわ」「可愛らしさと凛々しきは相反しないよ。シンの容姿で特に印象的なのは、鋭い目つきだ。それはどんな格好をしていても変わらない。なら普段はわかりづらい可愛いところをアピールするべきで、そのためにはメイド服を着せるべきだよ」

「さつきから聞いていれば、見当外れなことを。真改の容姿ばかりに目が行っている証拠だな。いいか、真改の人格は、ただ奉仕するだけのメイドとはほど遠い。主に忠誠を誓い、普段は厳しくも献身的に世話をし、有事の際には全身全霊で主を守る。執事こそが、真改には相応しい在り方だ」

「……………」  
お前たちは何故そんなことを真剣に話し合えるんだ。まったく理解出来んぞ。

「ええつと……………シンはどっちがいいんだ？」

「……………裏方」「…却下」……………」

……………何故だ。確かに味付けや調理は出来んが、包丁捌きには自信があるぞ。果物ナイフ一振りあれば、リンゴの皮むきからマグロの解体、お望みとあらばフライパンの両断だってして見せよう。

「シンが裏方？ 有り得ないよ」

「寝言は寝てから言えよ、真改」

「ご自分のことがわかっていらっしやらないようですわね」

「まったくくだな」

「……………」

納得出来ん。己の意見は完全無視か。

「……………どうするかな。このままじゃ決まんないぞ」

「は〜い。意見がありません」

楽しそうに挙手したのは本音である。余った袖を揺らしながら、フラフラと手を振っている。

……………輝くようなその笑顔が、どういうわけか不安を掻き立てる。

「両方着せればいいと思いま〜す」

「……!?!」

——なんということをつ!!

「午前と午後で、服を分ければいいと思いまゝす」

「まあっ、それは名案ですわねっ!!」

「うむ、流石は本音だ」

「決まり、だね」

「では後は、どちらを先に着せるかだな」

「……………」

……最悪だ。考え得る限り最悪の展開だ。

どうやら学園祭で、己が晒し者になることは決定事項のようだった。

「いのつち。ちよつとお話があるんですけど」

「……………」

授業が終わり、帰り支度をしていると。本音が歩み寄って来て、声を掛けられた。

別にそれ自体は珍しいことでもなんでもないのだが、わざわざ改まって「話がある」などと言われたことは初めてだった。

「いのつちに、会いたって人が居るんだよね」

「……………」

……ふむ。その己に会いたい人とやらに、己を連れて来てくれとも言われているのだろう。まあ本音の頼みとあらば、極力応えるつもりであるが。

……何故か、嫌な予感がするのが気になる……。

「一緒に、来ていただけますか？」

「……応……」

まあ、構うまい。所詮は予感だ、本音の頼みを断る理由にはならない。

というわけで、相変わらずノロノロと歩く本音について行くことに



した。本当にゆつくりとした歩みなので随分時間が掛かったが、着いた先は生徒会室だった。

「入りまゝす。やつほく」

「本音、いくら私しか居ないからって、ちゃんと挨拶しなさい」

己たちを出迎えたのは、全校集会の際に見た生徒会の役員だった。

長い髪を三つ編みにし、眼鏡を掛けた三年生。こうして近くで見ると、やはり本音に良く似ている。雰囲気はかなり違うが、顔立ちはそっくりだ。

「はくい、わかったよ。お疲れ様です、お姉ちゃん」

「……やはり……」

姉妹だったか。そういえば、本音に家族のことを訊いたことはなかったな。

「いのっち、紹介します。こちら、私のお姉ちゃんの」

「生徒会会計の、布仏うっほ虚よ。初めまして、井上真改さん。本音から良く話を聞いてるわ」

「……井上真改……」

己のことは知っているようだが、自己紹介されたのならこちらも名乗らねばなるまい。そんな己の態度に一つ笑みを返して、虚先輩は席を薦める。

「今日わざわざありがとう。お嬢様があなたに会いたって言うて、本音にお願いしたの」

「……お嬢様……？」

「生徒会長の、更識楯無お嬢様だよ。私たちの布仏家はね、代々更識家に仕えてるんだ」

「……」

……さて。虚先輩はともかくとして、本音に従者が務まるかは甚だ疑問だ。

「本音は楯無お嬢様の妹の、簪かんざしお嬢様専属なの。ついでに言うと、本音は生徒会の書記よ」

「そうそう。私の速記は世界一」

「……」

……さて。虚先輩はともかくとして、本音に生徒会の仕事が務まるのかは甚だ疑問だ。

「……口に会いたい……っ？」

「ええ。それについては、お嬢様から直接話すわ。もう少しすれば来ると思うから」

「……………」

話しながら、虚先輩は紅茶の用意をした。出されたそれを一口飲むと、爽やかな旨味が口の中に広がる。

……うむ、実に素晴らしい味だ。

「……美味い……………」

「ありがとう。ふふっ、あなたに誉められると、なんだか妙に嬉しいわね」

「……………」

そうやって虚先輩の紅茶を楽しんでいると、生徒会室の外から足音が聞こえて来た。

染み付いた習慣で、その足音を分析する。

規則正しく、安定した歩幅。重心にブレが無く、体重移動も滑らか。体幹は真っ直ぐに伸び、全身が隙なく、しなやか且つ強靱に鍛えられていることが伺える。

——間違いなく、相当な手練れだ。

「入るよ」

ガチャリ。

つい警戒してしまっていたことを悟られぬよう紅茶を口に含み、何気ない様子を装いつつ待ち受ける。

そして、生徒会室の上等な扉を開けて、入って来たのは。

「あ、あなたが本音ちゃんの恋人ね？」

「ぶっぶおっうっうっうっ!!!?」

ち、茶がつ。熱い紅茶が気管に入ったっ!!

「ぐはあっ、ごほ、かはっ……!」

「やだなくもう、楯無お嬢様つたら」

「あらあら、照れなくていいのよ本音ちゃん。素敵な人じゃない」

「いやいや。てひひ」

「……ぜえ……ぜえ……」

「噂は色々聞いてるわよ。ファンクラブまであるほどの人気者だしね」

「ちなみに私は、真友会創設メンバーの一人で、最初の五人と呼ばれてます」

「あらあら、流石は本音ちゃんね」

「てひひ」

「……ふう……」

ようやく呼吸が落ち着いた……。咽せている間にやら気になる単語があった気がしなくもないが、まあ気のせいだろう。今はそれよりも優先すべきことがある。

「……恋……人……?」

「ええ。本音ちゃんの話聞いた限りでは、そうだと思ったんだけど」

「……違う……」

「ええ?!? 違うの?!?」

「……」

……本音、その反応、わざとだろう。

「本音。会長も、お客様をからかっではいけませんよ」

「もう、虚ちゃん。ちよつとした冗談じゃない」

「じゃあいのち、私との関係は?」

「……親友……」

「んん。まあ、勘弁してあげますか」

「……」

ああ、勘弁してくれ。これ以上妙な事態に発展するのはごめんだ。

「井上真改ちゃん。初めまして、私はIS学園の生徒会長、更識楯無よ。以後よろしくね」

「……井上……真改……」

……ちゃん付けか。まあ構わんが。黛先輩もそうだしな。

「悪いわね、わざわざ来てもらって。今日はちよつと、あなたに訊きたいことがあって」

「……………」

「まあ、まずはご足労いただいたお詫びに、こちらをどうぞ」

そう言つて、楯無会長は持っていた綺麗な包装の箱を差し出す。僅かに漏れる匂いからして、中身はケーキのようだ。

……甘いものは苦手なんだが……。

「虚ちゃん、お茶のおかわりを用意してくれる？」

「はい、会長」

「本音ちゃんは食器をお願いね」

「はいはい」

「……………」

楯無会長の指示を受け、二人が動き始める。

……さて。紅茶と食器の用意が同時に終わったのは、虚先輩の手際が良いからか、それとも本音の手際が悪いからか。

……まあ、両方だろう。

「さあ、召し上がれ」

「……………いただきます……………」

アンティークな皿に乗せられたショートケーキを高級感溢れる銀のフォークで切り分け、口へ運ぶ。

……むう、美味い。甘さ控えめで食べやすい。

「どう？ 本音ちゃんから甘いのが苦手だつて聞いてたから、それに合わせて選んで来たんだけど」

「……………美味い……………」

「ふふっ、お口に合ったようで良かったわ」

虚先輩が淹れてくれた紅茶との相性も抜群で、舌を楽しませてくれる。本音も夢中になって食べており、あつと言う間にケーキがなくなつた。

「……………ごちそうさまでした……………」

「うん、お粗末様でした」

その様子を微笑みながら見ていた楯無会長は、表情を入れ替える。

——ようやく、話とやらが始まるようだ。

「それで、真改ちゃん。本題なんだけど」

「……………」

楯無会長は先ほどまでとは打って変わって、ひどく真剣な顔をしている。全身から放たれる威圧は、なるほど、この学園の長を務めることとはある。

「あなた、私の妹を——」

すうつ、と眼が細められ、視線に冷気に似た鋭さが宿る。

そして己の喉元に、刃を突き付けるように——

「——簪ちゃんを、泣かせたそうね？」

——その言葉を、紡いだ。

## 第53話 舞闘

「あなた、私の妹を……簪ちゃんを泣かせたそうね」

「……？」

……はて、なんのことか。まったく心当たりがないのだが。

「……………」

楯無会長の妹……更識簪、という名だったか。今日初めて聞く名だ。本音はその簪嬢の専属従者らしいが、会ったことはない。

「……身に覚えがない、て顔ね」

「……………」

実際にはないのだから仕方あるまい。突然そんなことを言われて戸惑っているくらいだ。

「……ふう。虚ちゃん、例のものを」

「はい」

楯無会長の指示を受け、虚先輩が生徒会室の空中投影ディスプレイを起動する。そうして表示されたのは、寮の裏手で己が鍛錬をしている映像だった。

「IS学園には警備の都合上、各所に防犯カメラが仕掛けてあるのももちろん、プライバシーの侵害にならないようには注意して配置してあるわよ？」

「……………」

それは知っている。IS学園には国家規模の機密も多くあるので、これは必要不可欠なことであると全員が理解している。故にこの映像があることはなんの問題もなく、それを生徒会が閲覧出来るということにも文句はない。

だが己がここで鍛錬をすることは珍しくない。映像だけではいつのことか——

「…………ぬ…………」

——ふむ。己の右手に包帯が巻いてある。どうやら臨海学校後、それほど時間の経っていない頃の映像のようだ。

「ほら、これからよ」

「……………」

ふと、画面内に一人の少女が映り込む。水色の髪は内ハネの癖毛で、体つきは華奢。後ろ姿なので顔は分からないが、どうやら眼鏡を掛けているようである。

……なんとなく、思い出して来た。

『あ……………あ……………』

少女は十分ほど己の鍛錬を眺めた後、躊躇いがちに声を掛ける。その声に反応して少女に振り向いた己の眼は、お世辞にも良い眼とは言えなかった。

『……………ごめんなさい……………なんでも、ないです……………』

その眼に睨まれた少女は蚊の鳴くような声で呟いて、早足で逃げ去って行く。振り返った際に映った顔は、印象こそ違うものの造りは楯無会長に似ている。どうやらこの少女が、楯無会長の妹である簪嬢に間違いないようだ。

「……………見た？」

「……………見た……………」

……確かに、これは実際にあったことだ。簪の目尻に涙が浮かんでいることも確認した。そしてそれが己と目が合ったことによるものだろうことは誰が見ても明らかだが、しかし――

「泣かせたわね？」

「……………」

……今のは己のせいなのか？ 確かに少し……………いや、結構……………かなり、目つきが悪かったが。それでも、呼ばれて振り返り目が合った、それだけのことだ。これはむしろ、それだけで泣かれた己の方が傷ついて然るべきなのではないか？

「泣かせたわね？」

「……………否「泣かせたわね？」……………」

話を聞く気は無いらしい。有無を言わさぬごり押しで、己のせいにしてしている。

「あー、なんてかわいそうな簪お嬢様。こんな恐ろしい目に遭うだなんてー」

「……………」

さらには虚先輩による棒読みの追撃。 ……なんというやる気の無さだ。

「かんちゃん。およろこ」

「……………」

本音、それは泣き真似のつもりか？　せめて笑顔を隠す努力くらいしろ。

「と、言うわけで。私は簪ちゃんの姉として、あなたを許すわけにはいかないわ」

「……………」

顔も声色も相変わらず威圧感を持っているのだが、それがかえって滑稽だった。

……………いや、もしかして敢えてそうしているのか？　わざとなのか？

「それじゃあ、ついてらっしゃい、真改ちゃん。私たちの因縁に、決着を付けましょう」

「……………」

……………なんだろう、チンピラに絡まれたような気分だ。それよりも遥かに質が悪いが。

まあ、まさか本気でこんなことを言っているわけではないだろうが……………そう願うが、しかし本当の目的は分からない。その真意を探るために、気は乗らないが、大人しく付いて行くことにした。

「一夏！　大変だ！」

「ほ、箒？　どうしたんだ？」

俺が日課であるISの訓練をしようと準備していると、ピットに慌てた様子で箒が駆け込んで来た。肩で息をしている幼なじみを落ち着かせ、何が起きたのかを訊く。

「そ、それが……………真改が生徒会長に勝負を挑まれたんだ！」

「……………は？」



……なんだそれ。いきなり過ぎて意味が分からん。

「とにかく、剣道場に来てくれ！ 他の皆はもう集まっている！」

「え、ちょ、箒?! ……ああもう、なんなんだよ一体……!」

返事も待たずに駆け出した箒を追い掛けて、剣道場に向かう。そこには結構な人が集まっており、随分と賑やかなことになっていた。いつものみんなと固まっている箒を見つけて、訊ねる。

「箒、なんなんだよ一体?」

「分からん。突然生徒会長が真改を連れてやって来て、組み手をするから剣道場を貸してくれ、と」

「は? そりやまたどうして」

「だから分からんと言っている」

どうやら本当にいきなりのことらしい。箒だけじゃなく、他のみんなも困惑しているようだ。

「それで、シンは?」

「今着替えている。そろそろ——む、来たぞ」

その言葉に視線を向けると、更衣室からシンと更識楯無生徒会長が出てきた。二人とも、柔術家が着るような袴姿をしている。その二人の姿に、集まった人たちがおおつ、とどよめく。それに笑顔で手を振る生徒会長とは対称的に、シンはどうにもやる気がなさそうだ。

「さて、それじゃあ真改ちゃん。始めましょうか」

「……ふう……」

溜め息を一つ吐いて、シンは半歩、右足を横に開いた。全身の力を適度に抜き適度に緊張させた、相手の行動に素早く対応できる状態。だが構えを取らないあたり、本当にやる気がないようにある。

……よっぽど不本意な勝負らしい。シンは戦闘狂ではあるが、しかし無益な戦いは好きじゃないのだ。

「……生徒会長、相当出来るな」

「ああ、全然隙がない……というより、掴みどころがない。なんていうか、水みみたいな感じだ」

生徒会長もシンと同じような体勢だが、纏う気配がまるで違う。どう攻めればいいのか見当も付かない。するりと受け流される様しか

イメージ出来ないのだ。

「さあ」

そこから、一步踏み出して。

「行くわよ」

次の瞬間には、既に間合いに踏み込んでいた。

「な!？」

「速——!」

動き出しがまったく見えなかった。他のみんなも驚いているところを見ると、ラウラにすら反応出来なかったらしい。

生徒会長はその勢いのまま、シンの顎目掛けて最短距離を真っ直ぐに、拳を走らせた。

あそこに立っているのが俺だったら、この一撃で勝負は決まっていただろう。だがシンは、上体をほんの少しだけ捻ってそれをかわした。

「あら、流石ね」

「……………」

至近距離で目が合う二人。生徒会長はにこりと笑い、シンは眉をかめる。

「それじゃあ、これはどう?」

「……………」

そこから始まる、怒涛の猛攻。拳打、掌打、手刀、貫手、蹴り、掴み。攻撃の継ぎ目が存在しない、流れるような連撃。

それを、シンは紙一重で避け続ける。

「これは……………どちらも凄まじいな」

「ええ……………真改さんの強さは知っているつもりでしたが……………」

「うん……………これは、勝てる気がしないね」

凄いののは攻撃の激しさだけでなく、それを一分以上続けているのにまるで息が乱れていないことだ。無駄な動きが一切ないから、体力の消耗も最小限なのだろう。

……………まあ、それを全て見切っているシンも大概だが。

「これも凌ぐの。ふふ、凄いわね、真改ちゃん」

「……………」

感心したように言う生徒会長。その間も攻撃は止んでおらず、その激しさは増す一方で、さらに連撃の回転を上げていく。

その速さは、もはや手足どころか身のこなしすら目で追い切れないほどだ。

「全然攻めないのね、真改ちゃん？」

「……………」

「しようがないなあ。それじゃその気になってももらえるように、おねーさん頑張っちゃおうかしら」

「……………」

鋭く踏み込み、拳を繰り出す——かと思いきや、踏み込んだはずの脚で足払いを仕掛けた。シンが片足を小さく持ち上げてそれをかわすと、脚が翻って戻り、残った片足を狙う。

シンはそれを、跳んでかわし——両脚が、地面から離れた。

「いただき♪」

ヒュンツ。

シンを追うように、生徒会長も跳び上がる。くるん、と横に一回転し、突撃槍ランスのようなソバットがシンの顔目掛けて繰り出される。

ズドンツ！ と重い打撃音が響き、シンが大きく吹き飛ばされた。

「真改さんっ！」

セシリアの悲鳴のような声を聞きながら、俺は戦慄していた。

——今の一撃は、まずい。

「……………まずいわね」

「……………まずいな」

「ああ……………完全に、入っちゃった」

鈴と箒も分かっているようで、呻くように呟いた。その声に、ラウラとシャルが不思議そうな顔をしている。

「確かに危なかったけど、ちゃんと防いでるよ？」

「え!? ……ほっ。良かった、間に合ったのですね……………」

「今の一撃は入っていないぞ。お前たちに見えなかったとは思えないが……………」

シンは顔の前に腕を翳して、ギリギリのところまでソバットを防いでいた。当然、それは見えていたが――

「いや、そうじゃなくって」

「私たちが入ったと言ったのは――」

「シンの――スイッチさ」

「!?!」

シンが、翳していた腕を降ろす。防いでもダメージが貫通したのでろう、口の端からは僅かに血が流れていて。

「「な……」」

その口は。

まるで、研ぎ澄まされた刃に浮かぶ、波紋のように。

――うつすらと、笑みを形作っていた。

非礼を詫びよう、更識楯無。

己は、貴女を侮っていた。ISならば勝ち目はないだろうが、生身であれば所詮は十代の少女、どうとでもあしらえるだろう、と。

なんとという傲慢、なんとという自惚れか。見ろ、彼女の技の冴えを。才に優れ、そしてそれを見事に練り上げている。

一夏や筈のような、荒削りながら次第に磨かれていく技を見るのはまた別種の楽しみ。

――これほどまでに刃応えのある相手は、久しぶりだ。

(……ならば……)

楽しませてもらおう。なに、貴女ならば多少加減を違えたところで、大した怪我は負うまい。それに元々そちらから仕掛けて来たのだ、文句はなからう？

(……では……)

始めるとしようか。

――闘いを。

(あちゃあ……これは、見誤ったかも)

強いとは聞いていた。実際に会って、噂以上だと感じた。

けれどそれさえも、彼女の力のほんの一部に過ぎなかった。能ある鷹は爪を隠すと言うけれど、本当に有能な鷹は爪を隠すのも上手いようだ。彼女の強さは、普段の様子からでは絶対に気付けないだろう。

(私も全然気付けなかったしね……)

目の前にいる少女を見る。ほんの少し前までとは纏う空気がまったく違う。さつき見せたコワイ笑顔は一瞬で引っ込めてしまったけれど、それでも剃刀のように鋭い威圧感を放ち続けている。

(まいったなあ……)

ちよつと事情があつて、一夏君を鍛える必要があるからコーチを買って出ることにしたのだけど、その前に一夏君の幼なじみで剣の師匠である真改ちゃんの実力を見ておこうと思つたのだ。まあ、簪ちゃんのことも半分くらいは本気だつたけれど。

ついでに私が勝てば話も進めやすくなるだろうと考えただけ、その考えは浅はかに過ぎたようだ。

「……………」

真改ちゃんが、左足を踏み出す。大きく、一步。

その左足に重心を移し、前傾姿勢を取る。右腕を持ち上げ、右手を目の横に。

——霞の構え。私に真っ直ぐに向けられた右拳が、まるで刀の切っ先に見える。

攻めの気配を隠そうともしないその姿は、こうして相對していても、恐ろしさよりも先に清々しさを感じさせた。

「……………」

「っ—」

音もなく、真改ちゃんが踏み込んで来る。間合いに入ると同時、握り締められた右拳を、真っ直ぐに打ち込んで来た。

(速いっ！)

かなり際どいタイミングだが、しかしどうにか避けられそうだ。そして左腕の無い真改ちゃんは、手による連撃には限界がある。脚による攻撃も得意らしいけど、しっかりと踏み込んだ後では一瞬だけ出すのが遅れるから対応出来る。

この隙に、反撃を――

「疾っ……い！」

「なっ！」

拳を避けた瞬間、腕が折り畳まれて肘打ちが繰り出される。なるほどこれなら、両手を使った連撃よりもよほど速い。

だけどこんなの、相手がどう避けるかまで完全に見切っていないと、出来る筈がないのに――！

「くうっ！」

首を捻ってどうにかそれかわすが、今度は畳んだ腕を一気に広げての裏拳。これをかわすことは出来ず防御したが、衝撃が骨を軋ませた。

私の動きが止まり、真改ちゃんは蹴りを放った。寒気がするような風切り音と共に迫る脚を身を屈めてかわして、後ろに跳んで距離をとる。

（なんとか体勢を――!?!）

……居ない。そんな、気を逸らしてはいないのに、一体どこに――!?!

（……上っ!?!）

信じられない。なんて跳躍力、完全に頭上を取られた！

「疾っ!!」

ゴウツ!

「くっ！」

縦に回転しながらの、強烈な踵落とし。こんなのを受ければ腕ごと頭をかち割られる。だから退がって避けるしかなかったのだけど、恐ろしいことに真改ちゃんは空振りした勢いのままにさらに一回転して、二撃目の踵落としを放ってきた。

「っあっ……い！」

……危なかった。今のは本当にギリギリだった。

それでもどうにか避けられた。これほどの大技を外して、真改ちゃんも流石に体勢を崩している。今の内に仕切り直しを――

「!?」

――足が、動かない。突然のことに、つい視線を落としてしまう。

そして、分かった。何故足が動かないのか。

真改ちゃんは、踵落としを空振りした足で、足の指で、私の袴の裾を掴んでいた――

(まさか……あの特技が、ただの目眩まじだなんて……!)

これでもう、逃げられない。だから攻められる前にこちらから攻めて、真改ちゃんの拘束を振り解くことにした。

「ふっ!」

掌打を放つ。今の真改ちゃんは片足立ちの不安定な姿勢だし、この至近距離だから、回避も防御も簡単ではない筈。

「……っ!」

「……っ!」

突き出した腕を取られる。その反射神経に驚いている隙に軽く引かれ、思わずそれに抵抗するように、引かれた腕に力を入れた。

――入れて、しまった。

「っ!」

その瞬間に、引かれた腕を今度は押され、同時に掴まれている足を払われた。上半身に後ろ向き、下半身に前向きの力を加えられて、ストンと床に倒された。

急いで立ち上がり、同時に腕を振り解く。だけど、どちらも出来なかった。そうしようとして力を入れた瞬間、体がふわりと浮き上がったからだ。

立ち上がろうとする力。振り解こうとする力。それらを取られた腕から操作されて、全て上向きの力に変えられたのだ。

(これは……まずい……!)

空中では思うように身動きがとれない。高々と放り上げられたこの状態はかなり危険だ。

せめて真改ちゃんの動き出しを遅らせるために、牽制を――

「っ!？」

気付いた時には、遅かった。

真改ちゃんは、私を投げた次の瞬間には、私の真下まで踏み込んでいて。

固く握った拳を、鳩尾に――

シンが最後の一撃を放とうと、生徒会長の懐に踏み込む。しかし生徒会長もただではやられず、その一撃に合わせてカウンターで拳を叩き込み、シンを突き放した。

「ぬ……!」

「つと、とつと……」

こめかみに一撃を受け仕留め損ねたシンと、どうにか無事に着地した生徒会長。

再び距離が離れた二人は、そのまま数瞬睨み合う。

そして――

「うくん。ごめんね、真改ちゃん。身に付いた習慣で、つい手が出ちゃったわ」

「……………」

「私の負けよ。最後の一撃、あなたが止めてくれなかったら、今頃胸に風穴が空いてるもの」

「……………」

生徒会長の言葉を受けて、シンも気配をいつもの調子に戻す。どうやら、生徒会長の言うことは本当らしい。

「いやあ、強いわね、真改ちゃん。おねーさん、自信なくしちゃうなあ」  
「……………」

ニコニコしながらシンを誉める生徒会長に、呆れたような視線を返す。本気で言ってるのかどうか、この人はイマイチ読めない。

「それじゃあ、汗かいちゃったし。戻りましょうか。お茶をご馳走す



るわ」

「……………」

そう言つて、生徒会長はシンをつれて去つて行つた。

……………え。これだけ集まつたギャラリーは無視かよ……………。

「……………強いな、マスターは。まさかこれほどとは」

「そりやあな。ああなつたシンは千冬姉とも互角に戦つたんだ。三年前にな」

「……………その時のシンつて、まだ中学一年生だよな?」

「とんでもないですわね……………」

「……………ん? 時が合わんな。箒は何故知っていたのだ?」

「織斑先生とのことは知らん。私が知っているのは、私の父と戦つた時の真改の姿だ。……………あれには、度肝を抜かれたものだ」

「……………うわあ」

あ、あの時か。あれも凄まじかつたな……………。

「あれからまた強くなつたしね。今なら、また千冬さんとも互角に戦えるんじゃないの?」

「かもなあ。そればかりは、実際にやってみないと」

「見たいような……………怖いような……………」

まあ、多分千冬姉とシンが戦うことはないだろう。もう随分前から、あの二人は戦おうとしていないしな。

「む。いくらいのつちでも、楯無お嬢様に勝てるとは思わなかつたな」

「うお!? 居たのかのほんさん!」

「今来ました」

むう、気づかなかつた……………。

「……………うん? 楯無お嬢様?」

「うん。あのね、カクカクシカジカなんだよね」

「まあ、そうなのですか」

「え!? 今のわかつたの!」

「しかし本音、真改の実力はお前も良く知っているだろう? 何故勝てると思わなかつたと?」

「うん、それはね」

「それは？」

「IS学園の生徒会長はね、学園最強じゃなきゃいけないのだよ」  
「……え？」

「つまり、更識楯無生徒会長は、IS学園で最強ということか？」

「そうそう。それに楯無お嬢様は、ロシアの国家代表なんだよ」

「国家……代表!？」

「あ、あの歳で!？」

ええと、二年生だから……俺と一つしか変わらないんだよね……。  
……うわ、すっげえ。

「だから楯無お嬢様は、ISでも生身でも最強だったんだけど」

「ISはともかくとして、生身最強はマスターになったというわけか」

「さすがいのちだね。楯無お嬢様に勝てる人は、なかなかいないよ」

「俺からしてみれば、シンに本気出させるほうがすごいんだけどな」

普段俺たちと生身で戦う時、シンはかなり手加減している。あまり力に差がありすぎると、鍛錬どころじゃないからだ。

シンに本気を出させた人物は、千冬姉と箒の親父さんしか知らない。  
い。

「けどどうしていきなりこんなことを？ のほほんさん、なんか知ってるんだろ？」

「ん。知ってるけど。楯無お嬢様に口止めされてるし」

「そこをなんとかっ」

「むう。けど私は布仏だし。更識の言うことは聞かないとなんだよね」

「うん、仕方ないか……」

お家の事情となれば仕方ない、無理に聞き出すわけにはいかないな。これは生徒会長に直接聞くしかなさそうだ。

「それじゃ、訊きに行く？」 生徒会室に戻ると思うけど」

「そうだな……行くか。なんでこんなことしたのか、知っておきたい」  
「ほいほい。六名様ご案内」

トコトコ歩き出したのほほんさんを追い掛けて、生徒会室に向かう。先ほどの勝負について盛り上がっている剣道場の喧騒が、これから起こる波乱を暗示しているような気がした。

## 第54話 師弟

「さつきはごめんなさいね、真改ちゃん。どうしても一度、直接あなたと戦っておきたくて」

「……………」

生徒会室に戻り、再び虚先輩の淹れた紅茶をごちそうになる。

一息ついたところで、何故こんなことをしたのかを聞かせてもらいたいのだが。

「……………何故……………」

「うくん。ほら、一夏君って弱いでしょ？ だから鍛えてあげようと思っただけど、それには一夏君の師匠であるあなたの実力を把握しておいた方がやりやすいでしょ？」

「……………」

……………一夏の師匠？ 己が？

「……………誤解……………」

「うん？ 何が？」

「……………教えたことはない……………」

「……………え？ そうなの？」

「……………」

確かによく共に鍛錬するが、しかし剣術や体術を教えたことはない。一夏とは、ただひたすらに打ち合うだけだ。

己自身の邪剣など誰かに教えるようなモノではないし、「彼女」の剣は誰にも教えたくない。一夏には精々、基礎中の基礎、剣術云々以前の心構えや体捌き、あとは身体の鍛え方くらいしか教えていない。

「へえ……………そうなんだ。てつきり真改ちゃんが一夏君に教えてるんだと思っただけど」

「……………」

「ふうん。それじゃあ、真改ちゃんは一夏君の師匠じゃないんだ」

「……………応……………」

「それじゃあ、おねーさんが一夏君に教えてあげてもいいかな？ I

Sのこととか」

「……………」

その許可を己に求める理由が分からん。ISについては己も一夏とそう変わらないのだ、元より教えるような立場ではない。

……己よりも、あの五人の方が確実に厄介だろう。現に今、生徒会室の外にぞろぞろと気配が集まっている。

「入りまゝす。おいすゝ」

「……本音」

弛みきつた挨拶をしながら生徒会室に入って来た本音に、虚先輩が頭を押さえる。本音の様子に頭痛でも感じているのだろう。

「お客様をお連れしましたゝ。おりむーと愉快的なハーレム御一行様でゝす」

「ハーレム言うなつ」

「だから、みんなただの仲間だつて」

「なんて冷めたリアクションなんでしょう……」

「……………」

本音もそうだが、他の面子も初めて生徒会室に来たというのに普段通り過ぎる。なんとも神経の太いことだ。

「いらつしゃい。こうして会うのは初めてね。もう知っているとは思うけど、私はこの学園の生徒会長、更識楯無よ。よろしくね」

「ええつと、はじめまして。俺は——」

「織斑一夏君、でしょ？ 知ってるわよ、この学園の者なら誰だつて。他のみんなのこともね」

「私たちもっ？」

「そりやそうよ。代表候補生たちのことくらい、生徒会長として把握しておかないと。そうでなくても有名だしね」

「みんないっつも騒ぎを起こすからねゝ」

「本音もね……」

「……………」

まったくくだ。そしていつも己が巻き込まれるのだ。いい加減自重してもらいたい。

「いのつちはゝ、巻き込まれるというかゝ」

「いつの間にか中心になっているというか」

「むしろ元凶というか」

「人気者は辛いというか」

「……………」

人気などいらん。平穩が欲しい。

「ええっと。更識会長」

「やん、楯無って呼んで。私も一夏君って呼ばせてもらうから」

「」「……………む」「」

「……………」

ああ……………また諍いの種が……………。

「……………それじゃあ、楯無さん。今日はなんであんなことを？」

「あんなことって？」

「シンとの勝負のことですよ。今まで二人に接点なかったんじゃ？」

「うん……………実はね。一夏君を巡って女の戦いが……………」

「え!？」

「……………嘘八百……………」

「あら、つまらないなあ。もうちよつと慌ててくれると思ってたのに」

「な、なんだ……………冗談ですか」

「……………」

質が悪い。この御仁との付き合い方には細心の注意を払う必要があるな。

「それで、本当のところは？」

「いや、あながち嘘ってわけでもないんだけどね」

「……………え？」

「一夏君の師匠の座を譲ってもらおうと思って。いちやもん付けて勝負に持ち込んだんだけど、話を聞いてみたら真改ちゃん、師匠じゃないって言うのよねえ」

「まあ、確かに。シンは剣については、ほとんど教えてくれませんけど。俺に剣を教えてくれたのは千冬姉と、箒の親父さんですよ」

「あちゃあ……………やつぱりそうなんだ。失敗したなあ」

「……………」

そんなことを言いながらも、まったく反省した様子でないのはどう  
いうわけか。

「なら、別に真改ちゃんの許可を得る必要はないわよね。一夏君、私が  
ISについてコーチしてあげるわ」

「……「なにに!?!」「」」

「ええっ? なんですか?」

「だって一夏君、弱いんだもの。すっごく」

「……「なんだとう!?!」「」」

「……そんなことないですよ。それなりには、弱くないと思いますが」  
「……………」

楯無会長の無遠慮な物言いに、流石の一夏もムツとする。

だが楯無会長の言うことは正しい。一夏はまだまだ力不足だ。少  
なくともISで己に勝てないようでは話にならない。

一夏もそれは重々承知している筈だが、しかし意地によりそれを素  
直に認めることは出来まい。

「それじゃあ、私に勝てる? ISでも生身でもいいけど」

「う……………」

「ほら、やっぱり弱いじゃない。だから、私が鍛えてあげるわ」

「……「ちよつと待ったあつ!!」「」」

「……ここまで来て、皆が楯無会長に待ったを掛ける。先ほどから色々  
言ってた気もするが恐らく気のせいだろう。」

「一夏に教えたくばっ!!」

「僕たちを倒してからにしてみらいますようかつ!!」

「さあ、あたしたちに示してみなさいっ!!」

「お前の力をつ!!」

「まずはわたくしがお相手いたしますわっ!!」

「ふ、望むところよ。さあ、かかってらっしゃいっ!!」

「ISバトル、ふあいうっ」

「……………」

こうして、よくわからないノリのまま、楯無会長と皆の対決が決  
まった。

……どういふことだ。

「さあ、行きますわよっ!!」

「どうりゃー」

「きゃああああああっ!!」

セシリア・オルコット、撃破。

「セシリアがやられたようだな……」

「ククク……奴は四天王の中でも最弱……」

「待て、四天王だと？ 私たちは五人いるぞ？」

「え、だって箒は代表候補生じゃないでしょ」

「そういう括りなのか!？」

「お待ちなさい！ わたくしが最弱ですって!？」

「うっさいわね、負けたんだからさっさと引っ込みなさいよ」

「納得いきませんわっ!!」

「よし、次は僕が行くよっ!!」

「ふっふっふっ、見せてもらうわよシャルロットちゃん、あなたの力をっ!!」

「変な名前付けられてるっ!？」

戦闘開始。 舞い飛ぶ銃弾、交わる刃、そして墜ちるシャルロット。

「コンナハズハー!」

「ああ！ シャルロットがやられた!」

「落ち着け箒、次はお前が行くんだ」

「ていうかその呼び方やめてよ!」

「ふっ……いぎ、推して参るっ!!」

ジョインジョインタテナシィデデデザタイムオブレットビュー  
ションバトーンワンデツサイダステニーナギツペシナギツペシ  
ペシハアーンナギツハアーンテンシヨールヒャクレツナギツカクゴオ  
ナギツナギツナギツフウハアナギツゲキリユウニゲキリユウニミヲ  
マカセドウカナギツカクゴールハアールテンシヨウヒャクレツケンナ



ギツハアアアアキーンカンザシチャンチョープリチーK。O。カ  
ンザシチャンヨリカワイイイモウトナゾソソンザイシネエ

「イチカーーツ!!」

「ぬうつ、三タテだと……!?!」

「仕方ない、あたしが出るしかないようねっ!!」

「さあ、来なさい鈴ちゃん! 私もそろそろ体力の限界よっ!!」

(スタミナ切れ……ならじわじわ追い詰めて、確実に倒す!)

「くらえ、衝撃砲っ!」

「覚悟ハ良イカ……」

「え!?!」

「愚力者メツ!!」

ズシヤアアアアアンツ!!!

「ぎにやあああああっ!?!」

またつまらぬモノを禊いでしまった。

「ば、化け物め……!」

「ひどいわねえ、うら若き乙女に向かって。おねーさん、傷ついちゃうわ」

「く、よ、寄るな! 寄らばシユナイデン!」

「ああ、心が痛むわー。激痛ー」

「ぬうつ……うおおおおおおおっ!!」

対IS戦用意! 戦闘開始!

「む、なかなかやるわね……流石はシユヴァルツェ・ハーゼの隊長」

「ぐうつ、強い……!」

「そら、ドリドリドリ」

「な、ドリルランスだ?! おのれ、なんというロマン兵器を! さては貴様、あの変態の同類だなっ!?!」

「ん? 如月さんのこと? メル友よ」

「シユテルベエエエエンツ!!」

「てーい、クロスカウンター」

「ぐっはあ!?! ……ぐふ……流石は学園最強……強、い……がくっ」

……その後。彼女たちの行方を知る者は、誰もいなかった……。

「……ま、負けた……」

「あ……流石に五連戦は疲れたわ……」

「お疲れ様です、楯無お嬢様。肩を揉み揉みします」

「あ、お願い本音ちゃん」

「揉み揉み」

「あー、生き返るー」

「……」

年寄りのようなことを言いながらリラックスしきっている楯無会長は、とてもついさつき五人抜きをやらかした人物には見えない。この切り替えの上手さは見習いたいところではあるが、見習ってはいけないような気もする。

「いや、凄かったな、楯無さん。生身も強いけど、ISでもとんでもねえな」

「……同意……」

国家代表なのだから相当なものだろうとは思っていたが、想像以上だ。ISではまだ、勝てる気がしない。

「なんか専用機も、個性的なのにバランスよさそうだし」  
「……」

一夏の言うとおり、楯無会長の専用機、「霧纏ミステリアス・レイデーの淑女」は、「水を操る」という他に類を見ない機能が備わっている。無数のナノマシンで構成された水で、攻撃、防御を行うのだ。

四連装ガトリングガンが内蔵された突撃ランス銃の表面を水が流動し、ドリルのように装甲を抉る。

ワイヤーで連結された無数の刃——蛇腹剣も同じように、水を纏って切れ味を向上させている。

装甲は全体的に少な目だが、これも水が装甲代わりになっている。着弾の衝撃などを、水が柔軟に受け止めて吸収する。そして水であるが故に、どれほどの猛攻を受けても瞬く間に再生する。貫くには絶大

な威力の一撃が効果的だろうが、しかしそんな大技を受けるような楯無会長ではない。防御力と回避技術が絶妙な具合に噛み合っているのだ。

遠距離射撃戦でも近距離格闘戦でも強大な攻撃力を持ち、防御面でも隙がない。武装がどれも大型なので、限定空間での戦闘だけは唯一の弱点と言えるだろうが――

(……隠し玉が、ありそうだ……)

そんな弱点、彼女が承知していない筈がない。そこには罫とも呼べるだろう、とっておきが隠されていると見て間違いない。

古より、優れた城塞には、敵をおびき寄せ一網打尽にするための偽りの弱点があるものなのだ。

「うくん、本音ちゃん。もうちよつと強く」

「無理です。握力の限界です」

「ええ。そこをなんとか」

「んもう、しよーがないですね」

楯無会長にお願いされた本音は、両袖をまくって腕を広げた。手首に嵌められた銀色のブレスレットが、きらりと光る。

「――おいで」

呼び掛けに応じ、十の球体が本音の周囲に現れた。如月重工から預かったIS整備ユニット、「十六夜」の起動である。

十六夜はゆらゆらと動いて、楯無会長の肩や腕、腰などにその身を押し付けると――

「おおおお、気持ちいい。マッサージチェアに座ってるみたい」

「てひひ、どうですか？ この子、結構芸達者なんですよ」

「むー、素晴らしいわ、本音ちゃん」

「……………」

複雑な動きや細かな振動で凝った筋肉を揉みほぐす十六夜。……おかしい、そんな目的で作られたモノではない筈なんだが。

「あー、楽になった。ありがとうね、本音ちゃん」

「どういたしまして」

「……………」

がつくりとうなだれる五人組を完全に無視して、楯無会長と本音のやりとりは続く。

……なんとも、マイペースな二人である。

「とにかく、これで文句はないわね？ これからは私が一夏君のコーチよ」

「」「ぐぬ……ぐぬぬぬぬ……!!」「」

ギリギリと奥歯を噛み締める五人。なんと凄まじい怨念か。生徒会室がおどろおどろしい気配に満ちている。

「そういうわけだから。これからよろしくね、一夏君」

「え……あ、はい……」

「」「お……お……おのれ……!!」「」

「……………」

——こうして。皆に認められて、楯無会長は一夏のコーチに就任した。

(……師、か……)

放課後の寮の裏手で、真改は木刀を手に静かに佇んでいた。その心に思い浮かべているのは、一人の女傑。

剣士として、憧れていた。

人間として、尊敬していた。

異性として、愛していた。

その想いのどれもが、届かなかったけれど。

(……それでも……)

「彼女」を失ってから二十年以上の時間が経ったが、真改の想いは微塵も色褪せてはいなかった。「彼女」の姿はその瞳に焼き付き、「彼女」の声は今尚その耳に残り、「彼女」の剣はその身に刻み込まれている。

——逢いたい。もう一度と言わず、ずっと彼女の側にいたい。

けれどその望みは、その願いは、叶わないから。

(……ならば……)

ならば、自分がそこに行くしかない。彼女が居た高みに至り、そして超えるしかない。

かつての約束を、どうしても、果たしたい。

自分はいっつ死ぬか分からないからと、約束をしようとしなかった「彼女」との、生涯でたった一つの約束。

いつか、真改が「彼女」よりも強くなったら、その時は――

『聴かせてくれ。お前を強くした、お前の「信念」を。その先にある、お前の「答」を』

(……まだ、足りん……)

まるで足りない。生涯を掛けて追いつけた背中では、遥か遠くにある。

だからまだ、伝えるわけにはいかない。けれど、いつか必ず、墓前に手向けるために。

「……………」

『さあ、往くぞ。良く見ておけよ、私の剣を。そして、魅せてもらうぞ、お前の剣をつ！』

すうつ、と瞳を閉じれば、そこに「彼女」の姿が浮かび上がる。両手に剣を持ち構えるその姿は、まさに威風堂々。

真改の心に刻まれた、「彼女」の在り方そのもの。

「疾つ……………」

『ハアッ！』

同時に踏み込み、同時に斬りつける。刃が交わる衝撃すらも、完全にその手に記憶されていた。

「……………」

『せいっ！』

一刀を防いだ「彼女」は、すかさず双剣の片割れを振るってくる。刃が風を切り――否、刃自体が風になったかのような、目を疑うほどに速く、目を見張るほどに自然で、目を奪われるほどに美しい太刀筋。

咄嗟に一歩退がり、鼻先を掠める刃を見送る。

「……………」

『ハッ！』

だが「彼女」の攻撃は、それだけでは終わらない。振るわれた刃が恐るべき速度で翻り、再び真改を襲う。

「オオオツ!!」

『ぜえあつ!!』

上段からの唐竹。逆袈裟で逸らす。

最短距離を走る刺突。身を捻ってかわす。

弧を描く横薙。切り上げで弾く。

逆からの横薙。木刀を構えて防ぐ。

反撃に袈裟切りを放つ。片方の剣で防がれ、同時に振るわれたもう片方に素早く切り返した一撃を当て、止める。

『やるなっ!』

「オオオツ!!」

そこからは、剣の極みと呼ぶに相応しい応酬が続く。暴風のように激しく、しかしそよ風のように静かに、刃が乱れ飛ぶ。

瞬く間に十の斬撃が放たれ、次の瞬間にはさらに二十、刃が交わっている。

その剣舞を彩るように、剣戟の幻想曲が奏でられる。

「オオオオオオオオオオツ!!!」

『ハアアアアアアアアアツ!!!』

それは、裂帛の気合い。

それは、闘争の咆哮。

それは——歓喜の雄叫び。

『ゼエエエアアアアアアアツ!!!』

渾身の、力を込めて。

全霊の、想いを込めて。

振るわれた一太刀はしかし、「彼女」を捉えることはなく。

『……………ふっ。また、私の勝ちだな』

「……………」

自らを切り裂く空想の痛みに、真改は苦悶ではなく、笑みを浮かべる。

やはり「彼女」にはかなわない。だが——

——今のは惜しかったな、と。

「……く、くく……」

我ながら、随分子供じみた意地だ。自分にこんな可愛げが残っているとは思わなんだ。

だが恐らく、これは、悪いものではないのだろう、と。

そんなことを考えながら、真改は再び、最強の仮想敵を相手に鍛錬を始めた。

「……はあ……はあ……」

……熱を入れ過ぎた。

歩くだけでも一苦勞なほどに疲労した体を引きずりながら、今日の鍛錬を反省する。とりあえず、何事もやり過ぎは良くないという教訓は得た。そう前向きに考えることにしよう。

「……ぜえ……ぜえ……」

異常に長く感じる廊下をどうにか歩ききり、ようやく部屋にたどり着く。

……なんたる無様。こんな姿、絶対にアイツらに見られたくない。

「……ぐ……」

もはや握力の残っていない手で、なんとかドアノブを回す。そして体重を掛けて、扉を押し開けた。

ガチャリ。

「「お帰りなさいませ、お嬢様っ♪」」

ボタン。

「……」

どうやら想像以上に疲れているらしい。なにやら幻覚が見えたような気がするし、幻聴も聞こえたような気がする。

うむ、これは重傷だ。極めて深刻な事態だ。皆に心配を掛ける前

に、こつそりと保健室に――

「「「逃がさんっ!!」」」」

爆発音（に聞こえるほどの轟音）を響かせながら、扉が開く。中から現れたのは六人のメイド。

……そう、メイド。メイドだ。メイドなのだ。なぜそんなモノが己の部屋に居るのか分からないが、とにかくメイドが六人。しかもどの顔も見覚えがある。ていうか本音と箒と鈴とセシリアとシャルとラウラだった。一人くらいは知らない奴が混じっていて欲しかった。たとえ混じっていてもどうなるものでもないが。

「ちよつとシン、逃げんじやないわよ!」

「我がのご奉仕、受けるがいいっ!」

「……拒否……」

「ねえシン、どう? この服。可愛い? 似合ってる?」

「うくむ、さよりん、いい仕事してますな」

「……」

やはり小夜か。仕事が速すぎる、あれから数日と経っていないぞ。サイズを合わせるだけでも大変な作業だと思うのだが。

「ふふ、メイド服ですか。こうして着てみると、悪くないですわね」

「そういえばセシリアは奉仕される側だったな。そう考えると、メイドについて一番知識があるのはお前かもしれんな」

「……」

話が盛り上がっているとところ申し訳ないが、いい加減なんのつもりか答える。己は疲れているんだ、さつさと休ませてくれ。

「ようし、それじゃあさつそくお仕事ね!」

「軍隊仕込みの整体術、とくと味わってもらおうか」

「私も多少なら心得があるぞ。その……い、一夏にも、やってもらったことが、あるしな……」

「……じとー」

「し、真改さんの、お、お、お体に……ハアハア」

「うわ、せつしー、目つきがヤバイ」

「……全員、失せろ……」



そんな素人の整体などいらん。余計身体の調子が悪くなりかねん。そしてセシリア、お前は特に駄目だ。一体何をする気だ貴様。

「遠慮することはないぞ、真改。友の好意は素直に受け取るものだ」「そうそう。ちゃんとマツサージするから」

「メイドに囲まれご奉仕されて喜ばない者はいないという話だぞ」

「真改さんを……揉み揉み……」

「セシリア、落ち着いて。ホントに目つきが危ないから」

「と、いうわけで。そこに寝なさい、シン。ほら、早く」

「……失せろと言った……」

「ふっふっふ。抵抗しても無駄よ、いくらアンタでもそんなへとへと  
の状態で、あたしたちを相手にはできないでしょ」

「さあ、大人しく床につけ、真改」

「床につけ」

「マツサージって、一回やってみたかったんだよね」

「安心しろ、マスター。その手のことに詳しい部下から、とっておきの  
秘孔を教わって来た」

「……失・せ・ろ……」

……しつこい。そろそろイライラしてきた。

「ふ。口で言っても分からぬようだな」

「仕方ないですわね、実力行使といきましょうか」

「ふっふっふ。いのちちく、覚悟」

「……………」

ブチイッ!!

「「「「「え?」「」」」」」

覚悟を決めるのは、お前たちの方だ――

「「「「「ぎ……ぎやあああああああつ!!」「」」」」」

「……………ふう……………」

ようやく、静かになった。喧しいナマゴミどもを部屋の外に捨て、シャワーを浴びて汗を流して床についた。

外で千冬さんが説教する声が聞こえる。いい気味だ。

「……………」

騒がしいのは苦手だ。それに自分が巻き込まれるのはもつと苦手だ。

本当に苦手だ。苦手だが——決して、嫌いじゃあない。

「……………」

まったく、本当に良い奴らだ。己にはもつたいないくらいだ。

あんな仲間に恵まれたのは、奇跡と呼ぶに相応しい。ならばこの幸運、精々満喫させてもらおう。

「……………くつくつ……………」

アイツらのことだ、これくらいで懲りる筈がない。明日になれば、またくだらない騒ぎを起こすのだろう。

まったく、いい加減にしてほしい。これではまた、明日が楽しみで仕方なく、待ち遠しくて仕方なくなってしまうじゃないか——

## 第55話 同居

「それじゃあ、最初の特訓を始めましょうか」

「はい」

放課後のアリーナで、俺は楯無さんからISの特訓を受けていた。楯無さんが俺のコーチの座を力づくで手に入れたのが昨日のこと。あの激戦の疲れをまるで感じさせないのは底無しのスタミナを持っているのか、それとも回復が速いのか。

……まさか、のほほんさんのマツサージ効果？

「まあ、とりあえずは基本からね。それではメニューを発表します。ばんぱかぱーん」

バツ！ と手を振り上げると、ピットに待機している虚先輩が何かしらの操作をしたのだろう、アリーナ内に五十個ほどの青いターゲットマーカーと、無数の赤いターゲットマーカーが現れる。

「これは？」

「障害物競争みたいなものよ。赤いターゲットに触れないように、青いターゲットだけを攻撃するの。全部の青いターゲットを壊すまでにかかった時間を計るからね」

「……赤いターゲットに、触れないように？」

赤いの、すげえいっぱいあるんですが。少な目に見積もっても千個は軽く超えてるんですが。そして青いターゲットの周りには特にいっぱいあるんですが。

アレに触れないように青いターゲットに近付こうというのなら、針の穴に糸を通すような精密機動が必要だ。その上でタイムを計るなんて、無茶振りにもほどがある。

「……ちなみに、赤いのに触ったら？」

「モチロン、最初からやり直しよ」

「……わーお」

そんなことだろうと思ったよ。

「それと、赤いのは触ると爆発するから気をつけてね」

「わーお！」

そんなことだろうと思ったよ！

「じゃあ時間も限られてることだし、早速始めちゃいましょうか。準備はいい?」

「……はい」

促され、白式を展開する。……うん、大分時間もかからなくなってきた。一秒を切るまでもう少しかな。

「一夏君、展開遅いわねえ」

「え!? お、遅い、ですかね……?」

「遅いわよ。ある時突然、死角から不意打ちされたら間に合わないわよ」

「そ、そうですか……」

展開以前に反応すら出来ない可能性があるんですが、それだと。

「ま、それについては今すぐどうなることでもないし。けどこれからは、展開する時にそこらへんを意識するようにしてね」

「わ、分かりました」

「それじゃあ始めましょ。最初は、そうね……二分くらいを目標に」

「に、二分!」

「さあ、スタート」

「う、うおおおつ!!」

勢い良く飛び出した——は、いいものの。まずどのターゲットから行くべきか、それすらも分かっていない状態だ。

ああくそつ、迷ってるヒマなんてない！ 取りあえず手近なところから——

「ハアッ!」

雪片式型を振るう。ピコーン、というどうにも気合いの入らない音と共に、ターゲットが一つ消滅し——て、んなあ!? 青いターゲットの影に赤いターゲットがっ!!

「……ふっ。馬鹿めが、かかりおったわ」

チュドローンツ!!

「ぶべら!!」

結構な規模の爆発が起きる。訓練を長く続けるためにと雪花は発動していないので、その衝撃をモロに受けることになった。

「うーん、一夏君。失敗するの早すぎよ」

「す、すみません……」

「じゃ、もっかい行ってみよー」

「は、はい〜!」

というわけで、第二ラウンド。さっきのように青いターゲットの影に赤いのがあるかもしれないので、慎重に確かめつつ――

「一夏君、おっそーい。三分も経っちゃったわよー」

「え、まだ半分しか壊してないのに……!?!」

「おっかなびっくりやってるからよ。男の子なんだから、失敗なんか恐れずにドーンと行きなさい、ドーンと」

「は、はい!」

第三ラウンド。指示通り、ターゲットの影を確認しながらではなく、間合いを計り浅く斬りつけることで対処する。

「よし、次っ!」

振り返り、次のターゲットを――

「はい、時間切れー」

「な!?! くっ、十個以上残ってる……!?!」

「まだまだビビってるわよ、一夏君。もっと攻めていかない」と

「ぐぬぬ……」

第四ラウンド。スラスターを全開に噴かし、次々とターゲットを破壊していく。

「うおおおおっ!!」

ちよん。

「あ。」

足の先つぽが赤いのを掠めチユドローンッ!!

「ぴぎやああああっ!?!」

「動きが雑になってるわよ。無駄なくかつ勢い良く、慌てずけれど迅速に。さ、次」

第五ラウンド。無駄なくかつ勢い良く、慌てずけれど迅速に。

出来ませんでしチュドローンツ!!

「ウボアーーツ!!」

第六ラウンド。今までの失敗を元に戦術を吟味した結果チュドローンツ!!

「ぐぎやあああつ!!」

第七ラウンド。持てる技術の限りを尽くして困難に打ち勝て!

たとえ何度失敗しても立ち上がり、決して諦めることなく挑み続ければどうにかなると思っていた時期が俺にもありましチュドローンツ!!

「がっはあああつ!!」

第八ラウンド。チュドローンツ!!

第九ラウンド。チュドローンツ!!

第十ラウンド。チュドローンツ!!

第十一——

「うーん。結局今日は一回も成功しなかったわね」

「……………」

何回やったかな……百を越えたあたりからどうでも良くなっちゃまったよ……。

「時間ももう遅いし、このくらいにしましょう。ちゃんと休んで、明日に備えてね、一夏君」

「……………はい」

フラフラと覚束ない足取りで、部屋に戻る。よほどヒドイ状態なのか、途中ですれ違った人たちがギョツとしていたが、そんなことに構っている余裕なんて当然ない。

「つ、着いた……」

長い道のりだった……。

とにかく、これで休める。さっさとベッドに寝転がりたいところだが、最低限汗を流すくらいはしなければ。

ノロノロと服を脱ぎ、洗濯籠に放り込む。その時ベチャリと聞こえた気がした。どんだけ汗だくなんだ。

「……………あゝ……………」

ゾンビみたいな呻き声が聞こえたと思ったら俺だった。シャワー浴びる前に水分補給したほうが良かったかもしれないが、今更部屋に戻るほどの気力がない。

ちよつとだけ迷って、やっぱりシャワーを先に済ませることにした。

キユツキユツ。シャアアアアア……………

「……………うおゝ……………」

…………ヤバイ、水流で倒れそうだ。立ったままだと危ない、椅子に座ってちよつと休もう。

「……………あ……………や、ば……………」

座った途端、強烈に眠気が襲って来た。体が休息を求めているのだろう、立とうとしても足に力が入らない。

(……………まずい……………このまま、じゃ……………)

今眠ったら風呂場の固い床に体を打ち付けてしまう。それに倒れ方によっては、最悪シャワーの落ちる所に顔が行きそうだ。そうなったら窒息しかねん。湯船で溺れ死ぬという話はあるが、シャワーでなんて聞いたこともない。

「……………く……………そ……………」

だから起きないといけないのに、意識は遠のくばかり。次第に視界も暗くなつて来て、シャワーが体に当たる感触も、段々、鈍く――

「……………んあ?…」

目を覚ますと、見慣れた天井だった。ていうか俺の部屋だった。どうやらベッドに横になっているらしい。

「……………あれ、俺……………」

朧気な記憶によると、確か風呂場でシャワーを浴びてる最中に寝て

しまったんだと思ったが――

「……………どうなって……………」

「……………」

「うおっ、シン?」

視線を巡らすと、そこに居たのは千冬姉に次いで付き合いの長い幼なじみ。相変わらずの無表情で俺が起きたことを確認すると、テーブルまで歩いて行ってその上に置いてあるリンゴと果物ナイフ（多分シンが持って来たんだらう）を手に取り、リンゴを軽く放り上げた。

「……………」

「!?」

するとあら不思議、皿の上に落ちたリンゴは芯をくり抜かれた上で食べやすい一口サイズにカットされているではありませんか！

ちなみに皮は剥いていない。うむ、やっぱりリンゴは皮ごとに限る。栄養もあるしな。

「……………」

「……………サンキュ、シン」

無言で皿を差し出されたので、一つ貰う。

……………美味しい。瑞々しい果肉の歯応え、絶妙な甘味と酸味、そして芳醇な香り。品質も鮮度も申し分ない。

「うん、美味しい。わざわざ買って来てくれたのか?」

「……………食堂……………」

「へえ、ここの食堂、果物もこんなに美味しいのか。今度貰ってみようかな」

シヤリシヤリとリンゴを食べる。ただ美味しいだけでなく、水分と甘味が疲れた体に染み渡って行くようで、実に心地い――

「……………ちよつと待った」

……………俺、風呂場で倒れたよな? その時シャワー浴びてたよな?

当然その時全裸だったよな?

……………なんか今、Tシャツ着て短パン穿いてるんだけど。倒れた時は全裸だったのに、今はTシャツ短パンという格好なんですけど。感触からしてちゃんとパンツも穿いてるんだけど。



「……ま……さ……か……」

ギギギギ、と錆びたような音を立てて、首を回す。  
ゆっくりと視線が動き、シンを視界に収めた。

「……なあ、シン」

「……？」

声を掛けると、相変わらず何を考えているのかわからない無表情を返された。ただ気配だけが、疑問を伝えてくる。

「お前……何した？」

「……運んだ……」

「……それで？」

「……着せた……」

「やっぱりいいいいっ!!？」

見られた!? それってやっぱり見られたよね!? 俺の生まれたままの姿を見られたっ!!

「なんてこった……なんてこった!!」

「……昔は……共に、入った……」

「……ただ昔の話だよおおおおおっ!!」

そりゃあ確かに一緒に風呂に入ったこともあるけどさあ! そう  
いうことを言わないでくれよ、恥ずかしさが加速するからっ!!

「ぐうううう……俺もうお婿に行けない……」

「……阿呆……」

のたうち回る俺を、シャリシャリとリンゴを食べながら呆れた目で  
見下ろすシン。それがなにやら養豚場の豚を見るかの如く蔑みに満  
ちているような気がするの、俺の心理状態による幻覚か。

「……一夏……」

「助けてくれてありがとうだけどっいでにちよつとそつとしいてく  
れよおおおっ!!」

「……はあ……」

俺の様子に溜め息を一つ吐いて、シンは部屋を出た。俺はベッドに  
飛び込んで、恥ずかしさから布団にくるまってシクシクと泣き続け  
た。

……我ながら、女々し過ぎる。

「……ふむ……」

己は特に気にしたことはなかったのだが、良く考えてみれば一夏も年頃の少年だ。同年代の異性（己はそもそもその認識が薄い）に裸を見られるのは恥ずかしいだろう。

配慮が足りなかったな。どうせなら箒を呼んで任せてやれば良かったかもしれない。

「一夏君、大丈夫そうだった？」

「……応……」

いつの間にか様子を見て来ていた楯無会長が訊ねる。一夏は大分疲れているようだったが、そうでなくては特訓の意味もあるまい。

それより――

「……見事……」

「うん？ 何が？」

「……見極め……」

「……やっぱり。気付いてたんだ、真改ちゃんは」

あの一見滅茶苦茶とも言える特訓は、おそらく一夏の限界を知るためのものだ。

体力の限界。集中力の限界。どこまで追い詰めれば、最も効率良く鍛えることが出来るのか。

教え子の能力を正確に把握することは、教える側にとっては基本にして最重要事項だ。それを容易くやってみせるあたり、楯無会長は師として極めて優秀と言えるだろう。

「一夏君、すごいわねえ。動きに無駄があるから消耗が激しいだけで、地の体力は相当よ。あんな動きをあんなに長く続けることは、私にはとても無理なもの。これも真改ちゃんが鍛えたおかげね」

「……」

長い時間をかけて、全身を地道に鍛えて来たからな。瞬発力、持久

力、柔軟性、どれも申し分ない。身体がまだ成長過程であることを考えれば、最終的にはかなり屈強な肉体になるだろう。

「なんだかんだで才能もあるみたいだし、剣術や剣道をやってたから、ISに関係ない部分での基本はかなりしっかりしてる。切っ掛けさえあれば……化けるわよ、一夏君は」

「……………」

「……ふふっ。まあそんなことは今更かしらね、真改ちゃんには」  
「……………」

一夏のごときは、ずっと見てきた。アイツの現時点での実力やこの先の伸び代については、千冬さんと同等の認識があると自負している。

……もつとも。その認識を活かすことは、出来ていなかったが。

「ねえ、真改ちゃん。あなたから見て、私は一夏君のコーチに相応しいかな？」

「……………任せる……………」

「……うん、任されたわ。あなたの一夏君を、ちゃんとして強くしてみせるから」

「……………」

別に己のではない——と言っても、この人には無駄だろう。おそろくこれが、この人なりの義理の通し方なのだろうから。

——それはそれとして。

「……………」

「うん？ どうしたの？」

なんだ、それは。楯無会長の後ろにある、荷台に載せられたダンボールの山は。

「ああ、これ？ ふっふっふ、知らざあ言って聞かせやしよう！ ある時は更識家当主、ある時はIS学園生徒会長、またある時は一夏君のルームメイト、更識楯無たあ私のことよっ！」

「……………」

……つまり今のは、一夏のルームメイトになりました、ということではないのか？ もう少し分かり易く言ってもらいたいのだが。

「これも生徒会長特権のなせるワザ。一夏君のルームメイトとなり、キヤツキヤウフフのバラ色デイズを満喫させてもらうわっ!!」

「……………」

……まあ、あれだ。師としては、弟子の私生活の管理も大切な役目だからな。そこを理解しているあたり、やはり楯無会長は師として優秀だ。

……………そういうことにおいておいた方が、皆幸せになれそうな気がする。

「というわけで、私今日から一夏君の部屋で寝泊まりするから」

「……………」

……好きにするといい。一夏に関しては楯無会長に任せる。求められれば鍛錬の相手でもなんでもするが、それ以外では特に口出しするつもりはない。

「ふっふっふ。それでは楽しませてもらいましょうか、一夏君……………」

「……………」

不気味な微笑みを浮かべながら、ノックもせずに一夏の部屋に突入する楯無会長。中から一夏の声こゝろが聞こえてこないのです、おそらくそのまま眠ってしまったのだろう。よほど疲れが溜まっていると見える。

「……………」

その代わり、ゴソゴソと荷解きする音が聞こえる。先ほど持ちこんだ荷物の山を開けているのだろう、流石に行動が速い。

（……………やて……………）

騒ぎになる前に、己は退散させてもらおうとしよう。先ほど生徒が一人、楯無会長が部屋に入って行くのを見ていたからな、この学園のことだから、このことが知れ渡るまでにかかる時間はそう長くない。

（……………どうなるやら……………）

あの五人が暴走するのはまず確かだろうが、それを楯無会長がどう収めるか。それが見ものであり、同時に見たくないような気もする。収めようとせず、むしろ暴走を助長させるような気がするのだ。そういう人騒がせな気配を、楯無会長から感じる。

「……………ふっ……………」

思わず溜め息が漏れてしまった。だがそれも仕方あるまい、その人騒がせな気質の最初の被害にあったのは己なのだから。

今後もまた、巻き込まれることになるだろう。

「……………んあ？」

目を覚ますと、知らない天井だった。

……………ていうか天井じゃなくて、楯無さんだった。

「ぎゃああああああああああああつ!!?」

「……………むー。さすがにその反応は、おねーさんショックだわ」

馬乗りになつて俺の顔を覗き込んでいる楯無さんからゴキブリのような動きで抜け出し、ベッドの隅っこに逃げる。楯無さんは言葉とは裏腹にケラケラと笑いながら、そんな俺を眺めていた。

「な、なんですか！ なんなんですかっ!!」

「いやー、一夏君の寝顔、可愛かったわよ。眼福眼福」

「そうじゃなくて、なんで俺の部屋に楯無さんがいるんですかっ!」

すげーびつくりしたぞ。まだ心臓がバクバクいつてる。

「うん。今日から私、この部屋に住むから」

「え……………!?!」

「ほら、もう準備もバッチリ」

部屋を見渡して見ると、そこかしこに服やら小物やら、見慣れない物が置いてある。楯無さんの私物なんだろう、すでに荷解きは完了していた。

俺が寝てる間になんてことを。

「私が一夏君に付きつきりになつて、マンツーマンで、私生活から鍛えてあげるわ」

「いや、そこまでしてもらわなくていいですから。ていうか俺の部屋、

女子は寝泊まり禁止なんですけど」

「そこはほら、生徒会長権限で」

「職権濫用!?!」

ああ、これでまた一つ、俺の平穩が奪われた……!

楯無さんがルームメイトになるということは、単にこの人のハチャメチャぶりに振り回されるということだけでなく、絶対にみんなも騒ぎだす。そりやもう騒ぐに決まってる。

だってほら、早速部屋の外からヌーの大移動みたいな足音が――

ドバアアアアッ!!

「二」「一夏あつ!!」「二」

「一夏さんっ!!」

「ひいひいひいっ!!?」

ほら来たあつ! 来ましたよっ!!

「どういうことだ一夏!」

「聞いたわよ、部屋に女連れ込んだって!」

「しかも大量の荷物と一緒にっ!!」

「まさかこの部屋に住むと言うんですの!?!」

「状況を報告しろ! 正確になっ!!」

「みんな落ち着け、落ち着くんだ! 素数を数えて落ち着くんだっ!!」

「2!」

「3!」

「5!」

「7!」

「11!」

「二」「はい落ち着いたあつ!!」「二」

「どこが!?!」

誰がどう見たって落ち着いてねえよ!

「どうどう、静まりなさい、みんな」

「二」「げえっ! 会長!」「二」

「ジャーンジャーン」

それは静めてるつもりなんですか?

「私はこの学園の生徒会長。生徒会長とは、学園最強の称号。みんなは私に負けたんだから、私の言うことには従ってもらおうよ」

「め、滅茶苦茶だ……」

だが実際、俺のコーチについてもみんなに勝って無理矢理納得させたわけだし。まさかこの学園、力こそ全てなのか？ 嫌なところだな。

「それより、せっかくみんな集まったんだし、お菓子でも食べていかない？」

「「「「は？」「」」」」

急に話題を変えた楯無さんは、キッチンの隅にある電子レンジへと歩いていった。そしてその蓋を開けると――

「くんくん……なんだろう、すごくいいにおい……」

「むう、食欲を刺激されるな……」

「これは……」

「はい、たちちゃんお手製のマフィンよ。仲良く食べてね」

大皿にのせられた、たくさんのカップケーキと色とりどりのジャム。それをテーブルの上に置き、カップケーキを小皿に分けていく。

「お茶も淹れるわ。もうちよつとだけ待っててね」

再びキッチンへ行く楯無さん。……いつの間にかこんなものを作っていたのだろう。まあ俺が寝てる間なんだろうけれど、それも精々一時間だ。荷解きしてお菓子作ってその片付けも済ませてるなんて、手際がいいにもほどがある。

「お待たせ。さ、召し上がれ」

「「「「い……いただきます」」」」

さすがのみんなも、出されたものを食べないわけにはいかないのだろう、大人しくテーブルに座る。

……そういやこのテーブルも楯無さんが持ちこんだのか？ こんなデカいのなかったぞ。どうやって部屋に入れたんだ、ドアを通りそうにないサイズなんだが。まあ今更か、楯無さんだし。

まあそれは置いておいて、せっかく作ってくれたんだ、ありがたう  
いただく。

「もぐ……」

「！ 美味しい……！」

「わあ、ジャムともピッタリ！」

「素敵なお味ですね」

「むう、いくらでも食べられそうだな……」

「もぐもぐもぐもぐもぐ」

「あはっ。気に入ってもらえたみたいで嬉しいわ」

「この人、完璧超人か。こんな美味しいお菓子、店に行ってもなかなかないぞ。」

「ほらほら、お茶も飲んでよ。虚ちゃんほどじゃないけど、ちよつとは心得があるんだから」

「あ、これも美味しい……」

「す、隙が見当たりませんわ……！」

「ま、負けた……」

「女として負けた……！」

「ぐくぐくぐくぐくぐく」

「ラウラ……素直に美味しいって認めなよ」

「うん、なかなか好評みたいね。練習したかいがあったわ」

こうして、急遽開かれたお茶会は次第に賑やかになっていき。

終わるころには、楯無さんが俺の部屋に泊まることは流されていった。

……そう、流されたただけだ。きっと明日また、楯無さんがいない時に問い詰められるんだろう。

恐るべし、更識楯無。逃げ足すらも一級品か。

---

一方その頃、別室にて。

「ほら、いのちちち。召し上がれ」

「……………」

井上真改は、戦慄していた。

テーブルに用意された、真改のルームメイトである、布仏本音の手作り料理。



——ウーロン茶漬け、鮭の切り身と生卵つき。

「これはね、私のだいたいだい、大好物なんだよ」

「……………」

夕食のメニューとしては、いささかカロリー不足である——とかそういうことは、この際まったく問題ではない。

問題は、料理であるのに視覚から強烈に訴えてくる、ナゾの威圧感である。

(……………気圧されているだと……………この己が……………!?)

「ほら、たくさんとお食べ」

ずずいっ、と突き出される丼。かつて極貧の世界に生きて真改としては、食べ物を残すという選択肢は有り得ない。ましてやそれが、親友が自分のために作ってくれた手料理であれば尚更である。

だが、それでも。

箸が、動かない——

「はい、どうぞ」

「……………ぐっ……………!!」

邪気や悪意が一片たりとも存在しない本音の笑顔に、ついに真改も意を決する。

震える右手で箸を持ち、異常な粘性を見せ付ける不定形物と化した米を少量掬い、死地に踏み込むかの如く覚悟と共に口に放り込み——  
(……………案外、いける……………)

——二人は今日も平和だった。

## 第56話 特訓

特訓、三日目。

「残り十秒―」

「くうっ!」

青いターゲットは残り五つ。時間的にはかなり厳しいが、この五つは近くに固まっている。ギリギリ、間に合うかもしれない。

(……いや、間に合わせる!)

「うおおおおおっ!!」

スラスター全開、瞬時加速発動。最大速度から雪片式型を振るい、ターゲットを一つ撃破。その先に待ち受けていた大量の赤いターゲットを、錐揉みするようにして避ける。気分は火の輪くぐりのライオンだ。

そのまま、すれ違い様に一つ撃破。

(残り三つ!)

「チエエエエストオオオオアアアア!!」

速度を殺さず反転し、三つ目を撃破。残りは二つだが、時間が――

「よーん、さーん、にーい……」

(普通に行ったら間に合わねえ!)

「なら、これでどうだあ!!」

再び瞬時加速を発動、と同時に、渾身の力を込めて雪片式型をターゲットに投げつける。亜音速で飛んでいる状態からパワーアシストをフル活用して投げられたブレードは、まさに弾丸のような勢いでターゲットへ突き進む。

あのターゲットの影に赤いターゲットがないことは、すでに確認している。そしてこの位置からは赤いのが邪魔で回り込まないと近づけないが、ブレードだけなら、その隙間を通り抜けられる――!

「行くぜっ!!」

俺自身は最後のターゲットへ向け突撃し、振り上げた両手を頭上でガツチリと組んだ。

(今はこの手を、手と思うな)

ギユウウウ、と音を立てて、装甲に包まれた十指と両手が硬く握り締められ、一つの鉄塊となり。

(ただ力任せに叩き潰すだけの、戦鎚だ——！)

「うらああああああつ!!」

ゴシカアアアアンツ!!

俺が最後のターゲットを粉碎すると同時に、投げたブレードがもう一つのターゲットを貫き——

「……残り一秒。おめでどう、一夏君。目標クリアよ」

「いよつしやああつ!!」

「じゃあもう一回行こうか。次は赤いターゲットが動くから」

「ですよー!」

よーし、俺やつちやうよお! こうなりや自棄っぱちだぜコンチクショー!

「はい、設定終わり。体力は大丈夫?」

「ハッハー! まだまだ行けるぜ、楯無さあああん!!」

「そう、良かった。まあガス欠でもやつてもらうけど」

最後のセリフはあんまりにも恐ろしい内容だったので、聞かなかつたことになって飛び出した。

眼前に広がるのは、五十の青いターゲットと無数の赤いターゲット。青いターゲットは空中で静止しているが、赤いターゲットはそれぞれが違うパターンで動き続けている。しかも結構なスピードで。

だが俺だって、この三日間特訓を続けてきたんだ。赤いターゲットが動くようになったくらいで、怯んでられるかつ!

「うおおおおおつ!!」

こつん。

「あ。」

乗り物を運転する時は「かもしれない運転」を心がけましょう。曲がり角の向こうから車が来るかもしれない。横から急に歩行者が飛び出して来るかもしれない。そういった常に危険を予測した運転こそが安全運転の基本であり、それを怠るところなりまチュドーーンツ!!

「ギャアアアアッ!!」

久しぶりの爆発に吹き飛ばされ、墜落する。疲労も相まって受け身も取れず、ベチャリと地べたに落ちた。

「素敵な爆発っぷりよ、一夏君! さあ、もう一回行ってみよー!」  
「……………はい」

もう自棄になる元気もない。ノロノロと立ち上がり、ユラユラと浮き上がる。

そして再び、訓練開始。紅蓮の花火が、アリーナに咲き乱れた――

「第一段階クリア、か。…………一週間くらいかかると思ったんだけどなあ…………」

疲れ果てた一夏君が去ったアリーナのピットで、先ほどの訓練の映像を見直す。

そこに映っているのは、無駄な体勢で障害物をかわしながら、それでも速度を維持して飛び続ける一夏君の姿だ。

「動きにはまだ、無駄が多いけど…………これはもう、完全に、「見えて」いるわね」

ISの基本機能の一つに、ハイパーセンサーがある。これは全方位の情報を直接脳に送り込み、なおかつ情報処理のサポートをする機能だ。これがあるから、相対速度が音速を優に越えるIS同士の戦闘に、操縦者がついていけるのだ。

しかしこのハイパーセンサー、一見完璧な代物のようだけれど、当然そんなことはない。全方位が見えると言っても、ちゃんと「死角」があるのだ。

考えてみてほしい。ある日突然、腕が四本になったとして、新しく増えた二本の腕を自在に動かすことが出来るだろうか? 少なくとも、私は自信がない。

それと同じだ。たとえばハイパーセンサーから全方位の視覚情報が送られて来ようと、人間自身には全方位を見る機能は備わっていない

のだから、そのままでは対応できない。ハイパーセンサーが人間にも分かるように情報処理をするための時間が必要で、それにより生じる、実際の状況と認識の間のタイムラグ——それが「ハイパーセンサーの死角」と呼ばれるものだ。

けれど一夏君には、その死角がほとんど存在しない。背後や頭上、足下といった、本来死角となる範囲にも鋭く反応する。それは極めて高度な技術で、モンド・グロツソ出場者の中にも出来ない者がいるほどなのに——

「体を鍛えただけ、か……確かに、「眼」も体の一部よねえ」

一夏君のそれと同じ芸等を、さらに高い練度でやって見せた人を私は知っている。真改ちゃんだ。

彼女がIS学園で行った最初の試合、セシリアちゃんとの戦い。執拗に死角に回り込むセシリアちゃんのブルー・テイアーズを、真改ちゃんは完全に見切っていた。

対多数の戦闘で特に効果を発揮する、空間把握能力。視界外にいる相手の配置や動き、地形すらも利用して戦闘を有利に進めるその能力が、彼女は図抜けている。ISとは直接関係のない、戦士としてのその能力を、真改ちゃんは一夏君にも叩き込んでいたんだろう。

だからこそ、死角にも対応できる。見えずとも、頭の中に周囲の状況がリアルタイムで描かれていて、タイムラグを埋めているからだ。

「一夏君は……気づいてないだろうなあ。自分が平然とやってることが、どれだけとんでもないことなのか」

一夏君に課している特訓の第二段階。赤いターゲットが動くこれは、障害物ではなく攻撃を搔い潜つての機動を想定したものだ。

第一段階でハイパーセンサーとシンクロした空間把握能力を、第二段階で数手先を読む予測能力を身に付けさせる。この二つが高いレベルで備われれば、一夏君の回避能力は格段に上がる。機動の精度はそれからじつくりと磨いて行けばいい。基本と応用の順番は逆になっってしまうけれど、一夏君くらい才能があるならこれくらいで丁度良いと思う。

——時間もないことだしね。

「けどこの調子なら、なんとか間に合うかな。……それより、第三段階も今のうちに準備しておいたほうが良さそうね」

予想よりも、一夏君はずつと速く成長している。教えたことを次々吸収していく様は見ていると楽しく、実に教えがいがある。むしろ私が教えられることもあるくらいだ。

——うん、頑張ろう。頑張つて、一つでも多くのことを一夏君に教えて、少しでも一夏君を強くしよう。

——私が、ここに居られる内に。

「……………うゝあゝ……………」

「だ、大丈夫、織斑君？　なんだか最近、疲れてるみたいだけど……」

「んあ……………へーきへーき……………もーまんたい……………」

「とてもそうは見えないよ……………」

隣の席の女子が心配そうに聞いてきたので俺が元気なことをアピールするが、なんだか逆効果だったみたいだ。余計に心配そうな顔になったので、余計なことをせずに机に突っ伏すことにした。

……………あー、だりい。ねみ……………。

……………。

「——いつまで寝てるつもりだ、馬鹿者」

バキョツ!!

「ぎゃあすっ!?!」

か、角がつ。角が脳天につ!!

「チャイムはとつくに鳴っているぞ、織斑。睡眠学習でもするつもりか？　だとしたら、貴様の脳は既に手遅れなほどに腐り果てているぞ」

「ち、千冬姉……………」

「織斑先生と呼べ」

ベキヨツ!!

「ひぎいつ!?!」

ま、また角が、おんなじところにいつ!!

「目は覚めたか? まだ寝ぼけているようなら、いくらでも気合いを注入してやるが?」

「いえ、もう十分です!」

これ以上気合いを注入されたら破裂する、冗談抜きに。

「さて、馬鹿も起きたことだし、授業を始めるぞ」

「……はい」

教科書とノートを開き、お勉強の準備。実技は楯無さんが教えてくれるが、学科はちゃんと授業に集中しなければ。

「今日はP I Cのマニュアル制御についてだ。普段P I Cはオートになっているが、この状態では一定以上の機能は発揮出来ない。安定しているが、特化はしていない。状況によってはP I Cをマニュアルにし、機体や慣性の制御も自分で行うことで、通常とはまるで違う機動を可能とする」

……それ、楯無さんにも言われた気がする。例の特訓で赤いターゲットの隙間を縫うように飛ぶ時、オートだとどうしても引っ掛かることがあるのだ。

そんな時はP I Cをマニュアルにするといい、ということなんだが

「だが言うまでもなく、これは高等技術の一つだ。ただでさえ同時にやることの多いI Sの操縦に、さらにやるが増えるのだからな。それも機体と慣性の制御という、普段は機械任せにしていることが、だ。……当然、容易いことではない」

そう、これは本当に難しい。P I Cをマニュアルにすると、機体の流れること流れること。瞬時加速一回で、アリーナの端から端までぶっ飛んだこともある。

……その間にある赤いターゲットにも吹っ飛ばされて、ピンボールのようにアリーナをビュンビュンしたりもした。俺、もうジェットコースターに乗っても絶対スリルを味わえないだろうな。まあ今更

だけど。今更すぎるけど。

「だがこのマニュアル制御をある程度でも身に付ければ、戦術の幅は一気に広がる。極めれば、機動において並ぶ者などいなくなる。……まあそれは、極めた者などいないという意味でもあるがな。私も含めて」

「「「……っ！」」」

千冬姉の言葉に、教室にいる全員が息を飲む。

——世界最強の千冬姉ですら、極めていない技術。

それだけ、難しい技術。

それだけ——挑む価値のある技術。

「……………」

知らず、拳を握り締めていた。

千冬姉が、あの千冬姉が、極めていない。

それは、つまり——

(超える余地がある……てことか？ 俺が、千冬姉を——)

——ドクン。

心臓が、一つ大きく鼓動した。

今やってる特訓は、俺の夢、その一つに——

「精進しろよ、ガキども。お前たちには想像もつかないだろうが——この世に、果てなんてものはないのだから」

……いいぜ、やってやる。へばってる場合じゃない、目指す背中はまだ遙か遠く、豆粒みたくに見えるほどだ。

だから、走らないと。

だから、飛ばないと。

だから——強くならないと。

「……………ははっ」

体に満ちる気合いが、笑い声となって漏れる。ああくそ、早く放課後にならねえかな、訓練したくてたまらな「授業中に笑うとは良い度胸だな」グチャアツ!!

「ひひっー」

ついに割れたああああっ!?



「真改ちゃん、ちよつと」

「……………」

アリーナへ向かう途中、楯無会長に声を掛けられた。

……なんだ。己は一夏の訓練に合流しようと思っていたんだが。あんな話を聞いてしまったては、体が疼いて仕方ない。邪魔をしないでもらえないか。

「やる気に満ち溢れているって感じね。丁度いいわ、実はあなたにも特別メニューを組んで来たところなの」

「……………」

おお、それは……………」

ありがたい、剣に関しては「彼女」というこの上ない手本がいるが、ISに関してはそうもいかない。一夏に教えている手腕を考えれば、楯無会長の教えに間違いはあるまい。

「考えてみれば、真改ちゃんにも借りがあるじゃない？ それを返さないで、更識の名が廃れてしまうわ」

「……………」

ふむ、騒ぐのが好きな困った人かと思っていたが、しつかりとした一面もあるのだな。誤解していた、非礼を詫びよう、更識楯無。

「とりあえず準備があるから、こっちに來てもらえる？」

「……………」

楯無会長に連れられて、生徒会室へと行く。促され、年甲斐もなくウキウキしながらその扉を開けると――

「――いらつしやい、井上さん。それじゃ始めましょうか――メイ  
ドの作法の、特訓を」

……… 罨だった。

「うん、寸法はピッタリね。さすが井上さんの妹さん、見事な腕だわ」  
「……………」

小夜特製の、やけに気合いの入ったフリルだらけのメイド服に袖を通した己は、虚先輩に布仏流奉仕術を教え込まれていた。

……… なんとということだろう。

「井上さん、あなたは身のこなしには問題ないわ。私よりもよほど洗練されているくらい。けれどその無表情は減点よ、常に淑やかな微笑みをたたえて、仕える相手に安らぎを与えないと」

「…………… 無理……………」

「諦めてはそこで終わりよ。出来ないことを出来るようにするための練習なんだから」

「…………… 不向き……………」

「井上さん、それは言い訳の中では最低の部類よ。やりもしないうちから、自分の適性を決めてはダメ。才能なんて、案外自分では分からないものなんだから」

「……………」

正論だった。己の必死の抗弁がいつも容易くねじ伏せられた。

「それじゃ笑顔の練習を始めましょう。さあ、笑って」

「……………」

「…………… いきなり言っても難しいかしら。まずは顔の筋肉のマッサージからにしましょうか」

「…………… っ!?!」

言うなり、虚先輩が己の顔に手を伸ばして来た。好意で（飽くまでも虚先輩は、である）やってくれているものを振り払うわけにもいかずその手を受け入れると、そのまま頬や顎、首を揉み始めた。

……数分経過。

「やっぱり、表情筋が大分固いわね。筋肉自体は鍛えられているみたいだから、ストレッチをして柔らかくすればすぐに素敵な笑顔ができるようになるわ」

「……………」

……確かに、顔が少し軽くなったような気がする。それがなんの役に立つのかと言いたいところだが。

「ちよつと失礼するわよ」

「……………」

口角を押し上げられ、口だけ笑顔の形にさせられる。そして、その状態のまま――

「このまま、い、と言ってみて」

「……………」

「もう一回」

「……………」

「もつとハッキリと」

「い」

「次は、いち、にい、いち、にい、と」

「いち、にい、いち、にい」

「うん、その調子。もう一回言ってみましょうか」

「いち、にい、いち、にい」

……何故だ。どういうわけかこの人からは逆らい難い雰囲気を感じる。特に威圧感があったりはしないのだが……。

「笑顔の基本は口よ。顔の筋肉は連動しているから、口が上手く笑顔を作れるようになれば、目元や眉でも笑えるようになるわ」

「……………」

別に笑えるようになれなくてもいい。己は楯無会長に騙されてここに来ただけで、自分の意志ではない。

……その楯無会長は、さっさと一夏の訓練を見に行ってしまった。おのれ。

「井上さん、あなたが笑うのが苦手だということは聞いているわ。け

れど学園祭はクラスみんなの協力がなければ成功しない。だからこの練習が必要な。……本音はこの学園祭を楽しみにしてるから、成  
功させてあげたいの。手伝ってもらえないかしら」  
「……………」

そう言われてしまうと、強く断れない。まあ本当に笑顔を披露する  
ことになったとしても、学園祭の一日の間だけだ、我慢しよう。

「分かってもらえたみたいで嬉しいわ。ありがとう、井上さん」

「……本音には、借りがある……」

「……ふふつ。ありがとう」

「……………」

嬉しそうな笑顔からは、妹を大切に思う気持ちが伝わって来る。

……やるしかない、か。

「それじゃあ続けましょう。次は発声練習よ」

「……………」

「まずはさっきの笑顔を作って」

「……………」

……やってみたが、頬が痛い。筋肉痛になりそうだ……。

「……まだ少し固いわね。これからも時間を見つけて、練習するよう  
にしておね」

「……………」

「とにかく、今は発声練習をしましょう。ではまず、

——お帰りなさいませ、お嬢様」

「……………」

……最初から難易度が高過ぎないか……………？

「ほら、言ってみて。」

——お帰りなさいませ、お嬢様」

「……………」お帰りなさいませ……………」

「お嬢様」

「……………」お嬢様……………」

「はい、もう一回」

「……………」

……誰か助けてくれ。

「ほら、井上さん」

「……お帰りなさいませ、お嬢様……」

「もつとハッキリと」

「……お帰りなさいませ、お嬢様……」

「もつと明るくっ」

「……お帰りなさいませ、お嬢様」

「笑顔を忘れずにっ！」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「さあ、もう一回！ お淑やかかつ爽やかにっ！」

「……すう」

ガチャリ。

「入りまゝす。うえゝい」

「お帰りなさいませっ、おじよ……さ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あらあら」

……なんということだ。

「やくん、可愛かったな、いのっち」

「ああ、わたくしも見たかったですわ……!!」

「メイド服のシンにお出迎えしてもらったなんて、羨ましいなー、本音」

「なんであたしを呼ばなかったのよっ！」

「写真は撮ってないのか!？」

「いや、音声付きの動画は!？」

「ないよ。私の独り占めだもんね」

「」「むむむうううう……」「」

「……………」

……さて。こいつら全員の首を切るか、己の腹を切るか、悩むところだ。

あの後、歓声をあげながら逃げる本音を追おうとしたのだが、人の気配がしたので慌てて生徒会室に逃げ帰り、本音を取り逃がした。

全速力で着替えて後を追ったが……間に合わなかった。

……なんとということだ。おのれ更識楯無、ここまで計算の内か。戦闘力だけでなく知恵も回るとは、油断ならない奴。愉快犯な分、どこの謀略家よりもよほど質が悪い。

とりあえず、いつもの面子に言いふらした本音に制裁を加えた後、陰鬱極まる思いを抱えて食堂に向かった。そこでニヤニヤしながら待ち受けるこの馬鹿どもを見つけた時の己の気持ちは推して知るべし。

……今ならば、引き籠もりの気持ちが分かるかもしれん。

「ねえシン、今日はメイドの練習をしたんでしょ？　じゃあ次は執事？」

「……………しない……………」

「真改らしくない、学園祭まであまり日はないぞ。一日も無駄には出れない筈だ」

「うむ、しっかりと訓練を積みねばな」

「……………」

好き勝手言うな、叩き斬るぞ。

「ふふふ、まさか真改さんが、ここまでやる気になってくれるとは思いませんでしたわ」

「……………なつてない……………」

「照れなくていいのよ、実はアンタもメイド服着たかったんでしょ？」

「……………阿呆……………」

ふざけるな、いい加減本当に斬るぞ貴様ら。

「ところで本音、小夜から送られてきたメイド服はどんな感じだ？」

「ん〜。これで〜す、じゃじゃ〜ん」

「……………」

持って来たのか!? ていうか今どこから出した!?

「おお、これが……………」

「むむ、オーソドックスながらも凝ったデザイン、やりますわね……………」

「か、可愛い……………僕も着たいなあ」

「……………」

本音を取り出したメイド服に皆釘付けになる。

ロングの黒いワンピースに、白いエプロン。所々にリボンやフリルがあしらわれ、仕事の丁寧さが伺える。

……………おのれ小夜、要らぬことを。

「ねえシン、ちよつと着てみてよ」

「……………断る……………」

「ケチくさいことを言うな、マスター。減るものでもあるまい」

「そーだそーだ!」

「ゆ〜、着ちやいなよ〜」

「……………断る……………」

「……………ふう、仕方ありませんわね」

「剥いて、着せるか」

「シン、覚悟お!」

「……………」

さて、得物はなにかないか。む、こんなところにケーキ用の銀のナイフが。少々心許ないが、なに、六人解体する程度なら問題あるまい。

「な、ちよつと待て、流石に刃物はやめろっ!」

「じよ、冗談! 冗談だから!」

「おおおおお落ち着いてください!」

「……………」

これだけ筋金入りの馬鹿どもだ、一度死んだくらいでは治るまい。

そうだな、とりあえず、三度くらいで様子を見るか――

「……………ひ……………ひ……………ひ……………ひ……………ひ……………」

## 第57話 前夜

「ところでシン、お前、招待状は誰に送るんだ？」

食堂で皆と夕食をとっていると、一夏が訊ねて来た。

一夏の言う招待状とは、文字通り学園祭に外部の人間を招待するためのもので、生徒一人につき一枚配られている。一枚の招待状で学園祭に呼べるのは一人だけなので、言うまでもなく一人しか招待することが出来ない。それ故家族や友人全員は招待出来ないのだが、IS学園における機密の重要性からあまり大勢の部外者を招くわけにはいかないことを生徒全員が理解しているので、皆しぶしぶ納得している。

その招待状だが、己はまだ誰にも送っていないかった。家族の誰かに送っても、一人だけでは気兼ねなく楽しめないかもしれない。かと言って友人に送るとしてもそこまでの付き合いがあるのは五反田兄妹くらいであり、兄の弾には一夏が、妹の蘭には鈴が、既に招待状を送ったという。

……さて、どうするか。

「送るなら早めに送っとかないと。相手にも都合があるだろうし」

「まあ絶対に誰かに送らなくちゃいけないわけじゃないけど、勿体ないしね」

「……………」

箒は中学生時代の剣道部の先輩に、セシリアは普段世話になっているメイドに送ったそうだ。シャルとラウラは、誰にも送らないらしい。二人とも交友関係が学園内に限定されてしまっているし、ラウラには部下がいるが、任務と重なってしまっているとのことだ。

……ふむ。仕方ない、遠慮しあつて結局誰も来ない可能性すらあるが、孤児院の誰かに――

(……………そういえば……………)

大変失礼なことに、今の今まで失念していた。一人いるではないか、招待状を送るのに絶好の相手が。

「……………決定……………」



「ん、誰か思いついた？」

「だれだれ〜？」

「……………」

悪いが黙秘させてもらおう。相手を知ればまた大騒ぎするだろうことは目に見えている。黙っていてもいずればバレるだろうが、時間稼ぎ程度にはなる。

「ふむ。まあ、私たちが口を出すことではないか」

「真改の交友関係が気になるところではあるがな」

「当日までのお楽しみってことだね」

「……………」

…………まあ、楽しめる者は楽しめるだろう。もっともそれは、ここに  
いる者たちではないことは確かだが。

「さてと、それじゃあアリーナ行ってくるよ」

「今日も特訓ですか？ たまにはお休みすればよろしいのに」

「そうも言ってもらえないんだよ。まだ第二段階をクリアできてないんだから」

「…………アレ、正直あたしたちにもキツイわよ」

「射撃武器が使えればそうでもないのだが、格闘攻撃だけではな…………」

「配置も動きも嫌らしすぎるよね…………」

「まあ、楯無お嬢様だし〜」

「納得してしまうあたりが恐ろしい…………」

「……………」

人心掌握術に長けているからな、あの人は。裏を返せば、人が嫌がることも熟知しているのだ。そこにあの優れた戦術眼が加わった結果、あれほどの布陣を敷くことができるのだろう。

…………更識楯無、彼女はおそらく、真つ当な戦士ではあるまい。彼女の能力は一騎打ちや広い空間での乱戦よりも、深い森や入り組んだ家屋の中に敵を誘い込み、無数の罫で一方的に殺戮するような戦法、あるいはそれを掻い潜ることでこそ活かされる。

布仏家は代々更識家の従者だと言っていたから、更識家はそれなり以上に名家の筈。その当主である楯無会長が、あのような能力を持つ

ているということは一

(……暗部、か……)

この国の闇、血にまみれた、国民に知られてはならない一面。それを担ってきたのが更識家なのだろう。暗殺する側か、暗殺者を撃退ないしは捕縛する側かは分からないが。

どちらにせよ、そんな人物が自由国籍を得てロシア代表となっていることには、一体どのような事情があるのか。

「……………」

まあそれは、考えても仕方あるまい。それよりもまず、目先の問題に対処しなければ。

「あ、お姉ちゃん」

「……………」

……具体的には、虚先輩である。

「探したわよ、井上さん。時間になっても生徒会室に来ないんだもの」

「む、まさか、例の特訓か……!?!」

「はいはいはい！ 見学を希望しますっ！」

「わ、わたくしも是非！」

「僕も！」

「私も！」

「……………」

さて、得物得物。

「「「「ひい……!?!」」」」

とりあえず少し眼に力を入れて睨み付けてやると小動物のように怯えだしたので、皆を置いて席を立つ。

……さて、行くか。地獄の特訓に。

「「「「……そっつと……」」」」

ギロリ。

「「「「ひいひいひいっ!!」」」」

ついて来たら目玉を抉り出すぞ、貴様ら。

数日後、如月重工本社ビル、その一室で。

「……うふふ。うふふふふふ、ふふふ。………んふふふふふふふふふふふふふふふ」

「楽しそうですねえ、社長」

「ああ、網田君。なに、井上君人形の出来が、思いの外素晴らしかったからねえ」

「ええ、尽力した甲斐がありました。他の皆も、やり遂げた顔で寝ていきますよ」

「よく間に合わせてくれた。まったく、本当に僕は仲間にも恵まれているよ」

「それは私たちも同じです。社長は私たちのようなはみ出し者に、この上ない居場所を与えてくれたのですから」

「うふふ、まあ僕自身、はみ出し者だからねえ」

部屋の中に、不気味な笑い声が響く。本当に、本当に楽しそうな、笑い声が。

「……学園祭。普段極めて嚴重な警備により内外から守られているI S学園に多くの部外者が訪れる、数少ない機会。

……忍び込むには、まさに絶好の機会」

「来ますかねえ、連中は」

「来るだろうねえ、必ず」

如月社長と網田主任、二人の言う「連中」とは、以前如月重工本社ビルを襲撃した組織——ファントム・タスク「亡国機業」のことである。

「連中の狙いは、まだわからないかな?」

「わからないですねえ。いつ生まれたのか。どうやって生まれたのか。規模はどれくらいで、拠点はどこにあつて、構成員は誰で、何を目的としているのか。具体的なことは何一つわかっていません」

「うふふ、まさに亡霊だねえ。まあそれくらいのほうが、相手していて面白いけどね」

飽くまでも一般の会社である如月重工が、国家ですら手を焼く組織

と戦う。そんな荒唐無稽とも言える展開に、如月社長は胸を踊らせているのだった。

「僕らの家に土足であがり込んで子供を攫おうとしたんだ。相応の反撃は覚悟してもらわないと」

「私たちには私たちの誇りがあるということを、思い知らせてやらなくってはなりませんねえ」

「人には誰だって、どうしても譲れないモノがある。自覚のあるなしは別としてね。それを踏みにじろうとしたんだ。これはもう——徹底抗戦しかないよ」

「やりましょう。どちらかが滅びるまで。これは既に、戦争なのですから」

自分たちが作った物は、必ず最後まで使い切る。だから、自分たちが認めた者にしか託さない。

そのたった一つの矜持を、強奪という形で穢そうとした亡国機業を許すつもりは、如月重工全社員の誰一人として、微塵も持ち合わせてはいなかった。

「それで、学園祭ではどうします?」

「任せてくれて言われてしまっているからねえ。そうでなくても向こうはI Sを持っているんだ、井上君抜きではどうにもできないよ。

僕らは精々、情報収集にでも努めるとしよう」

「わかりました。ではその方向で準備しておきましょう」

「うん、頼むよ、網田君。……さて、僕は僕で準備を『ギヤアアアアアツ!』おっと、メールだ」

携帯電話を取り出した如月社長は、届いたメールを確認する。

——その瞬間、両目を見開き、全身をワナワナと震わせて、驚愕を露わにした。

「な!?! こ、これは……!?!」

「どうしたんです?」

「……見てみたまえ」

そう言つて、いまだに驚愕の抜けない様子で、網田主任に携帯電話を手渡した。

「ふむ？ ……な!? こ、こんなことが…!?!」

自分と同じような反応をした網田主任に、如月社長はいつになく真剣な面持ちで語り掛ける。

「……網田君。わかっているね……?」

「ええ、もちろんです。……急がなければ。すぐにみんなを起こして来ます」

「うん。……頼んだよ、網田君」

「はい。……それでは、失礼します」

一礼して部屋を出る網田主任を見送って、如月社長は再び先ほどのメールを確認した。

そして、重々しく呟く。

「間に合うかな。……いや。なんとしても、間に合わせなければ……!」

如月社長に、それほどまでの衝撃を与えた、一通のメール。

差出人は、IS学園生徒会長、更識楯無。

文面はなく、ただ画像データが二つ、添付されている。

その画像データとは――

「必ず、追加しなければ……着せ替え機能を――!」

――メイド服、そして執事服を身に着けた、井上真改の隠し撮り写真だった。

さらに数日後、ドイツ軍特殊部隊、「シユヴァルツェ・ハーゼ」の訓練所にて。

「全員、集合っ!!」

「はっ!」

覇気に満ちた号令に、即座に応じる少女たち。過酷な訓練の最中、全身に疲労を溜め込んでいながら、その動きは素早く、洗練されている。

「諸君! 知つての通り、三日後には学園祭だ」

「いよいよですね、お姉様!」

「うむ。準備は万端、あとは日本に渡り、本番を待つのみだ」

シユヴァルツェ・ハーゼ副隊長、クラリツサ・ハルフオーフ大尉の横には、大型のスーツケースが置かれている。その中身は、市販の撮影機器に有りつ丈の違法改造を施したクラリツサスペシャルの数々だ。流石に軍用品をちよるまかすとバレるからである。

「……諸君、私が居ない間のことは分かっているな?」

「はい。お姉様の不在が悟られないよう、隠蔽工作を進めています」

「お任せ下さい、お姉様。お姉様の邪魔はさせません!」

「うむ、頼りにしているぞ。……それでは、行ってくる」

「行ってらっしゃい、お姉様!」

「ご武運を!」

「どうか……どうか、無事に帰って来てください!」

愛すべき妹<sup>部下</sup>たちに見送られ、クラリツサは出発する。民間人と一緒にエコノミークラスで空の旅、飛行時間は12時間を予定しています。

「待っていて下さい、隊長……」

わざわざラウラからの誘いを断つてまで敢行する、極秘作戦。

その胸に宿るのは、遠く離れた上官への想い。

それは尊敬であり、憧憬であり、愛情であり――

「必ずや、その可愛らしいメイド服姿を激写してみせます……!!」

――爛れた欲望であった。

「はあっ!!」  
ピコーン。

振るつた雪片式型がターゲットを捉える。いいペースだ、この調子で行けば——!

「うおおおおっ!」

スラスターを噴かし、赤いターゲットが固まっている空間へ突撃する。狙いはその奥に隠れている、青いターゲット。

「はっ! せい! はあっ!!」

複雑に動く赤いターゲットを次々かわしながら、目標に接近する。ブレードを突き出し、僅かに届いた切っ先に反応した青いターゲットが消滅した。

「次っ!」

この特訓では、青いターゲットを撃破するたびに赤いターゲットの動きのパターンが変化する。即座に対応しなければ、またすぐに殺到されてジ・エンドだ。

だから一瞬だって油断できない。今この瞬間にも、背後から赤いターゲットが向かって来ている。

だがこの程度の奇襲、今まで何度も受けてんだよ——!

「フッ!」

短く息を吐き、体を捻る。赤いターゲットが紙一重で、しかし決して触れることなく通り過ぎて行った。

「よし、行けるっ!」

再びスラスターを噴かし、一気に加速。青いターゲットを順調に撃破していき——

「これで、」

アリーナの頂上付近のターゲットを撃破。

そのまま反転、垂直に急降下。

——狙いは。

「ラストオオオオオっ!!」

地面スレスレに浮いている、最後のターゲット——!!

「どおおうりゃあああああっ!!」

途中に無数にある赤いターゲットを、体を真つ直ぐに伸ばすことで当たる面積を最小限にして回避し。

伸びた体を戻す勢いで、雪片式型を振り下ろして。アリーナの地面ごと、真つ二つに叩き割った。

「ついに……！ ついにやったぜええええ!!」

「キヤー、一夏君ステキー。カツコイー。さらにレベルアップした訓練もクリアできたらもつとステキー」

「やつぱりかああああつ!!」

「またも現れる、青と赤のターゲット。……今度は青いのみまで動いてやがる……」

「キヤー、困難にも怯まず挑む一夏君つてステキー」

「やればいいんでしょ、やればさあ!」

「いい加減休ませて下さい、なんて口が裂けても言えない。だってそんなこと言ったらどれだけ特訓がエスカレートするかわからないだもん。」

「こんな追いかけっこの発展系みたいな訓練が実戦でどれだけ役に立つかわからないのに（なぜなら最近この特訓ばかりで、模擬戦すらしていない）、それでも続けているのは真面目だからではなく、単に楯無さんが怖いからである。」

「……いや、千冬姉や怒ったシンとはまた違う怖さなただけだな。得体が知れないと言うか……」

「まあとにかく、俺の本能が告げているのだ。楯無さんに逆らってはいけない、と。」

「よし、行くぜ!」

「というわけで、特訓再開。青いターゲットがとんでもない速さで動いており、他に何も無い状況でも追い付くのはちよつと手間取るだろう。」

「ブンツ!」

「く、この……!」

「斬撃を外し、青いターゲットを逃がす。」



速いだけじゃない、回避機動までプログラムされてやがる——！  
「ちいつ、逃がして——!?!」

振り向くとそこには、赤いターゲットの大群。まるでムツ〇ロウ王国の犬総動員でお出迎えをするかの如く殺到してチュドーンッ!!  
「ぐぎやああああっ!!!」

……ああ。先は長そうだなー……。

「第二段階もクリア。……早すぎるけど、まあ仕方ない。鍛えてるんだから、成長もするわよね」

予定を大分繰り上げて、第三段階に移行することになった。学園祭の後にやるつもりだったのになあ。

「才能？ 機体性能？ 土台がしっかりしていた？」

……違う。それだけじゃ、この成長の速さは説明できない」  
才能はあるだろう。なにせ織斑先生の弟だ。

機体性能は十分。倉持技研の総力を注ぎ込まれ、東博士の手を加えられた特注品だ。

基礎はほぼ完璧。真改ちゃんは、私よりもよっぽどスパルタだったようだ。

けど、それら全てを考慮に入れても、いくらなんでも速すぎる。

「……なんだろう。何があるんだろうなあ、一夏君には……」

更識の力を使っても探れない、一夏君の秘密。彼はみんなが知っている特殊性以外は、普通の少年の筈なのに——

「如月さんも、なんだかんだで忙しいしなあ……」

彼の協力を得られれば百人力どころではないんだけど、しかし如月重工は今、ドイツや亡国機業との情報戦の最中だ。国家、そして国家と対等な力を持つ組織との。

余計な手間をかけさせるわけにはいかない。

「……まあ、そこは置いておこうかな。あまり先のことばかり見ると、足元をすくわれるしね」

今は、学園祭だ。亡国機業は、必ず来る。狙うのは一夏君の白式か、  
箒ちゃんの赤椿か、それとも真改ちゃんの朧月か。

真改ちゃんは……まあ、自力でどうとでもするだろうし、如月さん  
も付いてる。

箒ちゃんは、下手に手を出せば東博士が黙っていない。いくらなん  
でも、狙うにはリスクが高過ぎる。

だから、狙うのは、きつと——

「織斑先生も、世界最強とはいえ一個人。出来ることには限界がある。  
なら、やつぱり……」

だから、私が鍛えないと。今はまだ、一夏君は自分を守り切れない  
から。

だから一夏君が、自分の願いを叶えられるように。

それまでは、私が少しだけ、守ってあげようかな。

「……さて、準備しないと。学園祭を成功させる。生徒である一夏君  
を守る。両方やらなくちゃいけないのが、生徒会長の辛いところね」

まあ、難しいからこそやりがいがある。挑みがいがある。

……さあ、来るなら来い、亡国機業。返り討ちにしてやる——

「……………」

学園祭、か。

何かが起きるな、確実に。

「……亡霊……」

——来るか、ここに。

今まで周到に姿を隠していた連中だ、表立って派手に騒ぎを起こす  
ことはなからうが——

「……一夏……」

かつて一夏を攫ったのも、亡国機業だと言う。なんのためにそんな  
ことをしたのかはわかっていないらしいが、しかし——

「……やらせん……」

一夏を守る必要はない。そんなことをせずとも、自分で自分を守るくらいはできる。

だが、それでも――

「……やらせはせん……」

これ以上、アイツに余計なモノを背負わせたくはない。

己の腕を切ったのが奴らだと知れば、まず間違いなく暴走する。

それこそ、殺しかねないほどに。

「……やらせるものか……」

そんなことは許せない。許せる筈がない。

あの少年の剣が、心が、奴らの血で穢されるなど。

故に。

「……寄らば、斬る……」

来るなら来い。一夏に悟られる前に、叩き潰す。

少しばかり痛めつけてから、如月重工にでも引き渡してやる。社長

たちのことだ、さぞや可愛がってくれることだろう。

……そうだな、考えて見れば――

「……寄らずとも……」

これは、この上ない好機とも言える。いくら亡国機業と言えど、I

S学園に大挙して押し寄せることは不可能だろう。

故に恐らく、少数精鋭による潜入を仕掛けて来る。増援があるとし

ても学園の外に待機させるのが限界の筈だ。

――ならば、捕らえられる。

見つけ出し、こちらから――

「……寄って、斬る……」

己は、剣士でありたいと願っている。「彼女」の剣以外は振るうまい

と心に決めた。

だが、それでも。

己はかつて、戦場に繋がれた者だったのだ。

「……覚悟しろ……」

どれほど闇で暗躍してきたのか知らんが、所詮はこの、平和な世界  
でのこと。

本物の「戦争」を経験したことが、果たして何度ある？  
本物の「戦争屋」を相手にしたことが、果たして——  
「亡国機業——！」

——学園祭は、明日。

## 第58話 学祭（冥土編）

IS学園。普段はよほどの用件があるか、もしくは限られた極一部の人間しか立ち入ることのできない、学園であると同時に研究所であり、要塞でもある場所。

そのIS学園の正門に、よほどの用件もなければ限られた極一部の人間でもない、いたって普通の少年と少女がいた。

「ふっ。ついに来たか、この時が……！」

「何かツコつけてんの？ お兄」

織斑一夏、井上真改、風鈴音の友人である、五反田弾と五反田蘭である。

蘭はIS学園の広大さと各施設に使われている技術の高さに感動し、弾は女生徒の多さとその質の高さに感涙していた。

「なんと素晴らしき眺めか。まさに絶景よ。心が洗われるようだ」

「これ以上その調子でいるつもりなら、他人のフリするからね」

同じ赤毛にお揃いのバンダナ、男女の違いこそあれどことなく似ている顔立ち。誰が見ても一目で兄妹とわかる二人の仲むつまじい様子に、周囲の人々が微笑ましいものを見るかのような視線を送る。その人々も、どこにでもいそうな至って普通の一般人がほとんどである。

——今日は、年に一度の学園祭。

ISと全く関係のない部外者がIS学園を訪れる、数少ない機会の一つである。

「さーて、行こうぜ。ヒヤッホウウウツ!!」

「あ、ちよ、待ってよお兄！」

歓声を上げながら突入する弾を、蘭が慌てて追いかける。

——そこに、声をかける一人の女生徒がいた。

「あなたたち、誰かの招待？ 一応チケットを確認させてもらえるかしら」

落ち着いたデザインの眼鏡に丁寧に三つ編みにされた髪、服装には僅かな乱れもない。学園祭における様々な資料だろう、手には分厚い

ファイルを抱えている。

いかにも生真面目で仕事ができそうな、大人びた雰囲気少女。弾と蘭は知らないが、IS学園生徒会会計、布仏虚である。

「うお!? なんだこの人、めっちゃカワイイ! いやなんか年上っぽ  
いし、キレイと言った方が……いややっぱカワイイっ!!」

（あ、はい、チケットですね。ちよつと待ってください、たしかこの辺  
に……）

「……お兄、逆になってるよ」

「ぎゃあああ!? いきなりやつちまったあああ!?」

「……………」

突然の事態に混乱する弾。そんな馬鹿丸出しの兄に蘭は呆れた視線を送り、虚はノーリアクションでチケットが出てくるのを待った。

「あ、ありました、これです!」

「では、拝見させてもらいます。……あら、差出人は織斑君? それに

あなたは嵐さんね」

「い、一夏さんを知ってるんですか!?!」

「ええ。この学園で、彼を知らない人はいないわよ。……はい、確認できました。お時間を取らせて申し訳ありませんでした、ごゆっくりお楽しみください」

事務的な挨拶をして、虚が去っていく。その颯爽とした後ろ姿を、蘭は憧れにも似た尊敬の眼差しで、弾は絶望にも似た沈みきった瞳で見送った。

「……なんてこった、第一印象最悪じゃねえか……」

「まあ、ある意味ロケットスタートなんじゃない?」

トボトボと歩き出す弾をおぎなりに慰める蘭。兄妹は割といつも通りの遣り取りをしながら、校舎へと向かって行った。

一方、虚は。

（か、カワイイ……? 私が? 楯無お嬢様や簪お嬢様、本音がそう言われるのは良くあるけど……わ、私が……カワイイ……）

気を抜けばすぐにも顔が真っ赤になりそうなのを必死にこらえ

ながら、表面上は冷静そのものな様子で、手にしたファイルのページをしきりに捲っていた。

その内容は、全く頭に入っていないなかったが。

(……………あ……………)

そして、自らの失敗に気付いた。

——チケットに書かれていた、一夏に招待された少年の名前を、確認し忘れたのだった。

学園祭は大いに盛り上がっていた。

招待できるのは生徒一人につき一人だけだが、生徒が招待した者以外にも、IS関連の企業の人間や政府、または軍関係者も学園を訪れており、来客はそれなりの人数になっているからだ。

各クラスごとの出し物は主に教室を使うため、クラス全員が同時に活動することはできず、二班、若しくは三班に別れ、休み中の生徒たちが他のクラスの出し物に繰り出していることも要因の一つである。お祭り騒ぎが大好きなIS学園の生徒たちが、学園祭ではっちゃんやけないわけがない。学園の各所で騒ぎまくり暴れまくりハメを外しまくっていた。

——中でも混沌としているのは、一年一組である。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

執事服を身に着けた少年、織斑一夏が、直角に曲げた右腕を胸の前に添えて、恭しく頭を垂れる。その様子に、一時間並んだ末に入店した少女が歓声を上げた。

「きやああああつ！ 執事、執事よ！」

「握手してくださいー！」

「それじゃ満足できないわ！ さあ、跪いて足を舐めろお嬢様、当店ではそのようなサービスはしておりません」

早速暴走しだした女生徒の首に、メイド服姿の箒が手刀を叩き込んで気絶させる。一名様お帰りです。

「……俺もう逃げたい」

「駄目だ。そんなことをすれば暴動が起きる」

心底嫌そうな顔の一夏の言葉を、不機嫌極まる声で一刀両断する等。

想い人が見世物にされキヤーキヤー言われてオマケに名前も知らない女の子たちにご奉仕する姿は筈にとって不快以外の何物でもないが、しかし今一夏がいなくなれば本当に暴動が起きかねない。なにせ教室の外にできている二時間待ちの行列、その約七割は一夏執事バージョンが目当てなのだから。

そして、残りの三割は――

「……お帰りなさいませ、お嬢様」

「……………ふう。」

ぱたりこ。

「また一人倒れたわよ!」

「医療班を呼んで!」

「ああもう、この忙しい時にっ!」

「……………」

一夏と同じ執事服に身を包み、長い黒髪をうなじの辺りでリボンで纏めた井上真改が目当てのコアなファンたちである。

「……大人気ですわね、真改さん」

「まさかここまで似合うとは想定外だった……」

「ファンの数は一夏より少ないけど、一人一人の思い入れが半端じゃないね……」

「……解せぬ……」

ほとんどの客は一夏か真改が目当てであり、二人が忙しく手が回らない時に他の者が接客するという、色々と間違った構図が出来上がっていた。しかもこの二人、ただ注文の品を運ぶだけでなく、客が望むのならゲーム(主にトランプ。王様ゲームやポツキーゲームは危険なのでやってない)の相手もしなければならぬ。

そんなわけで二人は、学園祭が始まってから一度も裏に引っ込めず、そろそろ正午になろうというのに水分補給すら出来ていなかった



た。

「……働くのって、大変なんだな……」

「……過酷……」

肉体的にはまだまだ余裕があるが、精神は既に疲れきっていた。

「井上さん、ご指名よ！ 五番テーブルへ！ 織斑君は四番ね！」

「……応……」

「……りよーかい」

そしてまた、指名を受けた二人がテーブルへ向かう。

——ところで真改は、サポートとして布仏本音が常についていた。片腕しかない真改は、トレイを持ちながらその上に載せた品をテーブルに並べる、ということが出来ないからだ。そして颯爽と歩く真改にトコトコとついて行く本音の姿は、多くの客の頬を緩めさせていた。

——指名を受けた真改が、メイド服姿の本音を連れてテーブルへ向かう。

「……お帰りなさいませ、お嬢様」

「お帰りなさいませ〜♪」

見てるとどうにも不安になる手つきでトレイを持つ本音を控えさせ、真改が礼をする。虚との特訓のおかげか、ほんの僅かに微笑みを浮かべる頬は、ギリギリ痙攣していなかった。

「ああつ、井上さん、カッコいい……！」

「すごく似合ってるわよー！」

「……どうぞ……」

興奮するお客様のテンションにはついて行けないので、さっさと仕事を済ませようとする真改。最初の微笑みとは正反対のつれない態度が、さらに客を興奮させる。

そんな客たちの反応を努めて無視し、本音が持つトレイからソーサーを受け取り、テーブルに置く。その飾らない、しかし洗練された動作に魅了された少女たちが、ほうと溜め息をついた。

「……………」

その熱っぽい視線を全方位から浴びせられている真改は、教室の窓をぶち破って逃走することを割と本気で考えた。出入り口には順番

待ちの少女たちがひしめいて、そこから脱出しようとするれば血の雨を降らせることになるからだ。

——そんな時。

ドン。

「あ!？」

「おく!？」

客の少女が一人、本音とぶつかった。本音はどうか持ちこたえ、トレイの上のカップから中身がこぼれることもなかったが、客の少女はそうはいかなかった。外部から来た招待客であるその少女は訓練など一切受けておらず、スポーツすらほとんど経験がなかったため、咄嗟に対応出来なかったのである。

ぐらり、と大きく体勢を崩し、テーブルへと倒れていく少女。テーブルの上には熱い紅茶やコーヒーの入ったカップ、ケーキを切り分けるための小さなナイフなどが置いてある。

——怪我をする可能性は、十分にあった。

「危ないっ!」

「きゃあああ!」

周囲の悲鳴を聞きながら、少女は、このまま転ぶと痛そうだな、と場違いなほど呑気に思い、反射的に目をつむった。

だが、覚悟した衝撃も痛みも、いつまで経ってもやって来なくて。

代わりに、ふわりと優しく、何かに包み込まれた。

「……へ?」

不思議に思っ、少女が目を開く。

すると吐息がかかりそうなほどすぐ近くに、黒曜石のように輝く瞳があった。

その瞳の持ち主は、少女の腰に腕を回して、少女が倒れないよう支えていて。

目を開けてもいまだ茫然としている少女の顔を覗き込みながら、無表情に、それでいてどこことなく心配そうに訊ねた。

「……無事……?」『副音声：お怪我はございませんか、お嬢様』

「」「……………はう。」「」

ばたばたばたばたりこ。

「今度は五人倒れたわよ！」

「しかも一人セシリアじゃん！」

「ああもう、役に立たないわねコイツ！」

「……………解せぬ……………」

こうして、倒れた者の介抱のために人手が減り、さらに忙しくなるのだった。

ようやく与えられた休憩時間。といっても食事と着替えをすれば終わってしまいそうな、最低限の時間だ。この僅かな時間で、己は午後の部に備えなければならない。

午後三時から己は自由時間となっているが、それまではずっとここで仕事だ。

(……………やれやれ……………)

執事服を脱ぎ、メイド服に着替える。髪を纏めていたリボンを解き、姿見で服装に乱れがないかを確認。

……………駄目だ。鏡に映る自分の姿を見ていたら、叩き割りたくなってきた。

だが、そんな装飾過多なこのメイド服だが、意外にも動きやすい。一体どのような細工が施してあるのか、外見だけでなく機能性も両立しているのだ。

……………素人の仕事とは思えん。小夜め、我が義妹ながら恐るべし。

(……………さて……………)

着替えが終われば、表に出なくてはならない。今は昼時、その半ばに差し掛かったところ。忙しい時間はもうしばらく続くだろう。いつまでも一夏に任せきって、倒れられたらかなわない。

不本意ながら——本当に不本意ながら、虚先輩の特訓のおかげか、今のところ顔が怖いなどの苦情は入っていない。この調子で続けら

れば、なんとか乗り切れるだろう。

——己のシフト終了、三時まで残り二時間半。それまでの辛抱だ。

「……すう」

深呼吸を一つ。顔を揉み、表情筋を解す。

——問題ない、かつて己が潜って来た修羅場に比べれば、この程度は子供の遊びだ。

集中しろ。余計なことを考えず、自身の能力、その全てをただ一点に収束させろ。

想起するのは一振りの刀。玉鋼を練り上げ打ち上げ研ぎ上げ、切断以外の一切の機能を排除した、究極にして至高の凶器、極論にして暴論の産物。

己は今しばらくの間、その在り様を模せばいい。

(……井上真改……)

——そう、己はメイドだ。この身は主人への奉仕、ただそのためだけに在る——！

「井上さーん、出番ですよー！ 出撃ー！」

(……いぎ、参る……！)

「「いらっしやいませ、ご主人様♪」」

「……」……「ここが桃源郷か……！」

「お兄……いい加減にしてよね」

あちこちのテーブルに呼ばれてんてこ舞いになっていると、聞き慣れた声が聞こえた。そちらに目を向けると、そこに居たのは弾と蘭だった。

「おお、弾。来たか。それに蘭も」

「一夏てめえぎっけんこんな夢と希望と幸福が溢れまくってるところを独り占めかよコノヤロウ今日は呼んでくれてありがとう心の友よっ!!!」

「すげえテンションだなお前……」

「ちよ、お兄やめてよ恥ずかしい！」

「蘭も久しぶり。ようこそ、I S学園へ」

「あ、はい！ 今日と呼んでいただいてありがとうございます！」  
「いや、蘭に招待状送ったのは鈴なんだけども……」

I S学園へ来れたことがよほど嬉しかったのか、蘭はすごく楽しそうだ。うん、呼んだのは俺じゃないけど、喜んでもらえたのなら俺も嬉しい。

「いやー、すげえなI S学園は！ こんなレベルの高い子が揃ってる学校なんて他にないぜ！」

「そりや倍率一百万倍以上の超難関校だからな。合格するのはエリートばっかだよ」

「……相変わらずだな、お前。病気なんじゃないのか？」

「失敬な。何を突然」

うん、本当に失敬だ。俺は毎日体に気を遣う、健康優良日本男児だというのが。

「まあいいや。それよりさ、お前シンと同じクラスなんだよな。じゃあやつぱり、シンもメイド服なのか!？」

「いや、シンは執事服……ああ、そういやもう服装チェンジの時間か。次出てくる時はメイド服だな」

「ええ!? 真改さん、執事服も着てたんですか!？」

食い付いて来たのは蘭だった。

……そういえば、蘭はシンに、俺や箒とは違う意味で憧れてたな。なんでも「こんなに格好いい女の人は千冬さんと真改さんしかいません！」とかなんとか。

……まあ、分からんでもないけどな。

「あ、ああ。さっきまでな」

「そ、そんな……ああもう、お兄のせいだよ！ あっちこっちにフラフラしてるから間に合わなかったじゃない！」

「いや、あの行列じゃあどっちにしる無理だったんじゃない……」

「最長で二時間待ちだったからな……どこの夢の国だったの」

しかしそれだけの行列、よく並ぶよなあ、みんな。そんなにご奉仕

喫茶に興味があるのか？

「まあとにかく、それじゃあご指名といこうか！ 井上真改さんお願いしまーすー！」

「はい指名一丁入りましたー！ 井上さーん、出番ですよー！ 出撃ー！」

威勢のいい呼び出しに応じて、控え室からシンが現れる。

こちらを見て、弾の姿を見た瞬間——一瞬だけ、頬がヒクリと痙攣した。

そのまま仏頂面で近付いて来て、スカートの端を片方だけ持ち上げ、お辞儀をし——

「…………お呼びでしようか……………ご主人様……………」

——滅茶苦茶嫌そうだった。もはや頬も盛大に引きつりまくってるし。

「ぐっはあああああああああああつ!!!?」

突然断末魔の悲鳴を上げ、弾が倒れ伏す。

と思つたら一瞬で起き上がり、シンに詰め寄つた。

「おいシンてめえ長身スレンダークールビューティおれっ娘メイドとかどんだけの属性を詰め込むつもりだコノヤロウ結婚してください」

「「「「シネ」「「「「ぎいいいやあああああああつ!!!」」」」

なんかとんでもないことをシャウトしようとした瞬間、真友会のメンバーたちにより、その言葉を息の根ごと止められた。

…………訂正、息の根は止まってない。まだ。多分。

「ナンダコノオトコハ……………」

「イキナリナニヲイツテルンダロウネ……………」

「バンシニアタイシマスワ……………」

「キル……………」

「ゴウウトウへへル……………」

だがそれも時間の問題だろう。みんなの背中が語っている。

——お前生きてIS学園から帰れると思うなよ——

「ごめんなさいごめんなさいもういいませんにどといいませんぜったいにいいませんごめんなさいかんにんしてくださいおねがいです」

そのあまりに強烈で禍々しいオーラを前に、弾は男らしく土下座した。

それを冷たく見下ろしながら、ラウラが訊ねる。

「何者だ、貴様」

「はい。わたくしめは五反田弾と申します」

それを怖い笑顔で見下ろしながら、シャルが訊ねる。

「五反田君。シンとはどういう関係なの？」

「はい。井上さんとは中学校で同じクラスでした」

それを前髪を掻き上げつつ見下ろしながら、セシリアが訊ねる。

「あなた、自分が真改さんに釣り合うと思ってるの？」

「いえ。そのような恐れ多いことは、決して」

それをどこから取り出した刀を抜き放ち構えて見下ろしながら、箒が訊ねる。

「身の程を弁えない者がどのような末路を辿るか、理解した上での狼藉か？」

「いえ。あまりにも思慮の足りない、わたくしの浅はかさ故の愚行にござります」

それを全機展開した十六夜と共に見下ろしながら、のほほんさんが訊ねる。

「処刑にします〜？ 極刑にします〜？ それとも、し・け・い〜？」

「いやそれ全部同じいうかちよ、まっ、ぎゃあああああ!!!」

「弾……無茶しやがって……」

「お兄……私、お兄のこと、忘れないよ……」

一名様、お帰りです。指名料は俺にツケといてください。

多くの者が訪れる学園祭には、招かれざる客も多数、潜り込んでいた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ率いるドイツ軍最強の特殊部隊、「シユヴァルツェ・ハーゼ」の副隊長、クラリツサ・ハルフォーフ大尉もその一

人である。

「なかなかの警備だが……この程度で私の愛を抑えきれぬものか」

偽造チケットで潜入したクラリツサは、まずは警備の穴を探ろうとした。だが探るまでもなく明白に、IS学園の警備は穴だらけだった。

と、いうのも――

「ISに関係あるエリアはかなり嚴重だな……あそこに忍び込むのは、透明人間にも不可能だろう。だがそれ以外、通常の学園と変わらぬエリアは、警備レベルも通常のそれと大差ない」

そう、監視カメラや巡回する警備員こそ多いが、特殊部隊員の中でも精鋭中の精鋭であるクラリツサにしてみれば、あまりにも温い警備であつた。

「まあ、こちらにとっては好都合だが。……ククク。さあ隊長、あなたの心のお姉様、クラリツサ・ハルフォーフが授業参観に来ましたよ……！」

故に、見るからに不審者な笑みを浮かべていても、誰にも見咎められることなく学園内を歩き回り、一年一組の教室を覗けるポイントを探していた。

「直接行けば流石に見つかるからな……そうならば、まず間違いなく、隊長に追い出されてしまう」

学園内の見取り図は事前に入手してある。クラリツサはそれほど時間をかけることなく、目的に適したポイントを発見した。

「ここだな。ここからなら教室内が全て見渡せ、逆に教室内からは木々が私の姿を隠してくれる。まさに理想的だ」

それは、校舎から少々離れた場所にある、ちよつとした庭のような場所だった。小さな柵に囲まれた奥に花壇があり、その更に奥に数本の木が植えられている。

クラリツサはその木に登り、一年一組の教室から木の幹で体を隠すようにして、太い枝に陣取っていた。

「さて、隊長は……」

肩から下げたケースから、違法改造を施したカメラ、クラリツサス



ペシャルを取り出す。ズーム機能を使い、教室の中を覗き込んだ。

「……おお！ 隊長、なんと愛らしい……!!」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ。

連写モードに設定されたカメラがマシンガンの如き速度でシャッターを切る。ラウラが冷たい態度で客にご奉仕する姿、その一挙手一投足まで見逃すまいと、鼻血を噴出しながらレンズを向ける。

「うえへへへへ……隊長おお……」

完全に怪しい人だった。

「……む？ あれが織斑一夏か……」

レンズの向こう、執事服の少年が、せわしなく教室内を走り回っている。その様子を見つめるクラリッサの眼は、軍人の鋭さを宿していた。

「織斑教官の弟……果たして、隊長に相応しい傑物か……」

ここから見る限りでは、極普通の少年である。客である少女たちから騒がれ、時には過剰気味なコミュニケーションを求められても、動じながらもしつかり断り一線を越えない姿は紳士的とも言えなくもない。

だがそれは、クラリッサからすれば必要最低限の要素の一つではない。ラウラに対しても同じような態度であることも知っているのだ、おのれこのガキ隊長の何が不満だと言うのだコノヤロウという気持ちだった。

しかしそれ以上に重要なのは、一夏の実力だ。隊長の嫁たるもの、少なくとも自分よりも強くなければ話にならない——それがクラリッサにとつての大前提だった。

「身のこなしは、それなりに洗練されているが……剣道をしているのだったな。だがISではどれほどだ……?」

ある意味最重要事項であるが、それはここからでは確かめようがない。とりあえずは保留である。

「ふむ、次は……井上真改」

ラウラが相棒と認めた少女。その少女の姿を探し、教室内を見回

す。

クラスで一番高い身長。腰まである黒髪。刃のように鋭い目つき。そして欠けた左腕。

見付けるのは、簡単だった。

「……奴か」

一目で慣れていないと分かる、固い笑顔。そもそも接客業に向いていないのだろう、気疲れしているのが感じられる。

だが、それでも一生懸命に働いている姿は大きなプラスだった。

「ふむ……真面目なのだな。信用には値するか……」

だがやはりそれも、クラリツサにとつては必要最低限、大前提の要素に過ぎない。最も重要なのは、ラウラの背中を任せられるか。

つまりは一夏と同じく、実力が十分であるか、だ。

「……」

カメラのシャッターボタンの隣にある、もう一つのボタンに指をかける。このボタンはクラリツサスペシャルの中でも最大の秘密兵器、30口径ライフル弾の発射ボタンである。

「……さて、どう対処するかな……っ」

僅かに開いた窓、その隙間と真改が重なった瞬間、鼻先を掠めるように撃ち込む。頬を撫でる風に、壁に開いた小さな穴に、気づくのにどれだけかかる？

そして気付いた時、どのような反応をする——？

——その後発生する大問題をまるで考慮に入れていない、とんでもない暴挙であった。

「……今だっ——!?!」

だがその暴挙は、未然に防がれた。クラリツサが発射ボタンにかけた指に力を込めようとした瞬間、

真改と、目が合ったからだ。

「ば……馬鹿な……!?!」

真改は、手にナイフを持っていた。ケーキを切り分けるための、小さな銀のナイフ。それは、本音が持つトレイの上にあつた物だが——

「いつ、そのナイフを取った……!!?」

その瞬間が、全く見えなかった。気付いたら、ナイフを持ち、構え、クラリツサを睨み付けていたのだ。

ただでさえ鋭い瞳を、更に鋭くさせて。

クラリツサを真つ直ぐに射抜くその瞳が、言っていた。

——撃ってみろ。その弾丸ごと、貴様を斬り捨てる——

「……く。くくく。ははははは……!!?」

その真改の姿に、クラリツサは楽しそうに、嬉しそうに笑った。その様子に、真改が訝しげに眉をしかめる。

「なるほど、流石は隊長が認めた女! まさか撃つ前に気付くとはな

! 合格だ、井上真改。お前は、隊長の相棒足る者だ! ははははは

!

やはり、隊長の目に狂いはなかった。

それをこの上なく明確に証明されて、クラリツサは心から楽しそうに笑う。

そのまま、しばらく笑い続け——

「——おい、その不審者」

「ギツクウ!!?」

——見つかってはならない者に、見つけた。

「お、お、お、織斑教官……!!?」

「はて、誰だお前は? なぜ私の名を知っている?」

「ク、クラリツサです! シュヴァルツェ・ハーゼのクラリツサ・ハルフォーフです!」

「知らん名だな。お前の顔にも見覚えがない。うむ、全く覚えがないな」

「ひいひいひいひい……!!?」

千冬は激怒した。必ず、この超ド級大馬鹿者を除かなければならぬと決意した。

「偽造チケットによる入場。違法改造を施した撮影機器、及び銃器の持ち込み。さらには生徒に対する盗撮行為。」

……判決、死刑」

「いや流石にその判決はどうかと思うんですが!!」

「いや。判決は死刑、死刑、死刑だ」

「きよ、教官！ お許しくださぎやあああああああ  
!!!!?」

——一名様、退場です。

## 第59話 学祭（来客編）

……ようやく終わったか……。

三時になり、やっと仕事から解放された。

……疲れた……なんと過酷な任務か。こんなに疲れたのは……結構あったかもしれん。IS学園（いすがくえん）に来てからは。

ともかく、ここから先は自由時間である。早く着替えて、待ち合わせ場所に行かねばならない。

——あの人を、一人で待たせるわけにはいかんからな。

学園祭も午後の部に突入し、しばらくして。

IS学園の正門に、一人の青年の姿があった。

「へえ、ここがIS学園か。……すごいなあ、まるで未来にタイムスリップしたみたいな気分だ」

スラリと高い身長。なにかスポーツでもしているのか、仕立てのいいスーツに包まれた体軀は引き締まっている。年不相応に落ち着いた柔らかな微笑みに、年不相応に輝く、少年のような瞳。それらを併せ持つ顔は整っていて、街を歩けば多くの女性の目を惹くことだろう。

——青年の名は、如月皐月。夏休みに行われた、真改のお見合いの相手である。

「井上さんには悪いことをしてしまったかな。僕なんかよりも、他に呼びたい人がいただろうに」

この如月皐月、容姿端麗、頭脳明晰、品行方正、高身長高学歴高収入というチートクラスの優良物件のだが、驚くべきことに異性とお付き合いした経験が皆無であった。

それと言うのも——

「井上さんの性格を考えれば、義理立てして僕を呼ぶのは当然だよね……そんな約束もしちゃったし……失敗したなあ、まさかこんな貴重な機会を使わせてしまうだなんて」

皐月は基本的に、自己評価が低めであった。年の離れた従兄弟である如月重工社長があまりにもハイスペック（人格はともかくとして）であり、その姿を見て育った彼は、どうしても自分の能力に自信が持てないのである。

もつとも、彼が昔「兄さんみたいになりたい」と言った際には、それを聞いた全員が「血迷ったか」旨のリアクション後に全力で説得にあたったのだが。

ともかく、そのような経緯から一夏にも匹敵するほどの朴念仁、スベックが高過ぎて高嶺の花状態、生来の奥手っぷり、その他複数の奇跡により、皐月は年齢イコール彼女いない歴な青年なのであった。

故に今回真改から学園祭に招待されたことも、真改に気を遣わせてしまった、という風にしか考えていなかった。

「うーん……けど井上さんも、IS学園での学園祭は初めてののはず……。うん、ここはせめて、僕を呼んだことを後悔しない程度には楽しんでもらえるように頑張ろう」

さて、自己評価は低くとも決して卑屈ではない彼は、自分の足りないところを補う努力を何より大事にする青年であった。気を遣わせてしまったのなら、その埋め合わせは早急に行わなければならないというのを信条にもしていた。

故に皐月は、正門近くで配布していたパンフレットを熟読し、どうすれば学園祭を楽しむことができるかというプランを組み立てつつ真改を待つことにした。

——さて。

男女を問わず、見目麗しい者が書物を読みながらたたずむ姿は絵になるものだ。

そしてそんな皐月を、IS学園に大量に生息する、恋に恋する十代乙女たちが見逃す筈がなかった。

「あ、あのー！」

「うん？」

突然声をかけられて、皐月が振り返る。するとそこには、顔を真っ赤にした少女が三人。ちなみに当然、皐月はその少女たちに見覚えは

ない。

「ええつと……どちら様かな？」

「わ、私たち、学園祭の実行委員の者なんです！」

「外からのお客様ですよね！」

「チケットを拝見させていただけます！」

「……ええつと」

端から見れば実行委員の立場を利用して皐月の名前を確認しようという魂胆が透けて見えるが、社会人にあるまじきピュアさを誇る皐月は気付かない。少女たちの勢いに、もしかして僕って不審者なんだろうか、と見当違いにもほどがある不安を感じながらチケットを取り出した。

「はい、どうぞ」

「は、はい！ それでは……！」

「ええと……如月皐月さん！ 素敵なお名前ですね！」

「招待したのは……ええ！？ い、井上さん……！？」

「うん？ 井上さんを知っているのかい？」

疑問符を浮かべる皐月と、戦慄する少女たち。

「え？ この人、井上さんとどういう関係？」

「ままままかさか、か、か、か、彼氏……！？」

「……ん！？ 如月って、もしかして……！？」

そこで、皐月の名字、それがなにを意味するのかに気付く。

——そう、「如月」とはIS学園において、「変態」をあらわす名であった。

「どういうことなんだろう……」

「この人も変態さんなのかな……？？」

「こんなに格好いいのに……」

「？」

ひそひそと話す少女たちに、再び疑問符を浮かべる皐月。

外見は申し分ない。だが万が一にでも、中身があのだ社長と同類であった場合、それはもうとんでもねーことになる。

「「……どうしよう……」」

「??？」

貪欲なる恋の狩人、IS学園女子たちをも怯ませる如月の名の意味を知らない皐月は、相変わらず何が起きているのか分かっていない。

——そんな時。

「あ、井上さん」

「「!？」」

校舎の方へ視線を移した皐月に反応し、少女たちが振り返る。

するとそこには、残念なことに制服に着替えてしまった真改が歩いて来ていた。真改は皐月を見つけると、その周りの少女たちを努めて無視しながら近づいて来る。

「やあ、井上さん。お久しぶり。今日は招待してくれてありがとう」

「……………いえ……………」

皐月の挨拶に簡単な返事だけして、群がる少女たち（ちなみに真改も、この少女たちには見覚えがない）を睨み付けた。

……………が。

「「ちよつとこつちに！」」

「……………!？」

ヤの付く仕事の人さえビビらせる真改の眼力が、一切通用しない。そのことに驚いている隙に、少女たちは真改の腕をとってズルズルと引き摺って行く。

「ちよ、ちよつとちよつと井上さん！」

「誰あの人!?! いや名前はさつき教えてもらったんだけど！」

「つまり何が訊きたいのかっていうと井上さんあの人とどう関係あるの!?!」

「……………!？」

まあこうなるだろうことはだいたい予想していたが、しかしここまでは予想を超えていた。瞬く間に包囲され、尋問が開始される。

「ねえねえねえ、どういふことなの……………!?!」

「井上さん、織斑君という人がいなから……………!?!」

「ていうかあの人如月って、もしかしてあの社長さんとなにか関係あるの!?!」



「……………」

皐月は真改のお見合い相手で一夏とはそういう関係ではなく皐月は如月社長の従兄弟なのだが、それを全て説明するには真改の口数は足りなすぎる。

さて、どう乗り切るべきか。

と、考えていると。

「僕はその社長の従兄弟だよ。その関係で、井上さんとは一度会ったことがあって」

「そ、そうなんですか……」

その言葉に一先ず安堵する少女たち。一度会っただけならそれほど親密な仲でもないだろうし、如月社長の親族と言っても従兄弟なら、あそこまで強烈な変態ではないはず——そんな失礼な考えをしている少女たちの隙を突いて包囲を脱出した真改は、状況を理解していない皐月の手を取り素早く離脱を図る。

「うわつと、い、井上さんっ?」

「……危険……」

「へ? どういうこと?」

「……………」

そう、恋愛に飢えている(男に、ではない。(ここ重要) IS学園女子にとって、見るからに純朴そうな皐月は狙われる危険が極めて高い。その辺も含めて待ち合わせ場所を正門に設定したうえで早めに来たのだが、皐月もまた早めに来てしまったためにその作戦は失敗に終わったのだった。

そのせいで、このような強行手段をとらねばならず。

そして、それは当然、諸刃の剣であった。

「な、あれは井上さん……!?!」

「誰あのイケメンっ!?!」

「手っ、手繋いでるっ!!」

「おのれ、私の井上さんにつ……!!」

そう、こうしてまた騒がれる要因となってしまうからだ。

一部の危ない発言を出来る限り耳に入れないようにしながら、真改

はぎっささと校舎へと向かうのであった。

一方そのころ、一夏は。

「よ……ようやく休み時間か……」

ご奉仕喫茶の忙しさもピークを過ぎ、一夏に食事休憩以来、初めての休憩が与えられた。しかしその時間は、たったの一時分。学園祭全てをまわりきることは不可能。だがご奉仕喫茶における一夏の重要性を考えれば仕方のないことではある。

「さて、どうすっかな。休憩時間っていわれても、特に行きたいところもないし、蘭は弾を保健室に連れて行ったまま帰ってこないし……。のんびりするかなあ」

そしてその貴重な休憩時間を純粋に休憩のために使おうとするあたり、一夏はかなり枯れている。

だがそんな一夏に近づく影が。

「い、ち、か♪」

「うおっ、シャル？ どうしたんだ？」

「えへへ、一夏、休み時間でしょ？ 僕と一緒に学園祭をまわろうよ」「うん？ ……うくん、そうだな、ただのんびりしてるのももったいないな。よし、それじゃあ行くか」

「「ちよおおおと待ったああああ!!」」

もう少しで一夏とデート（一夏には自覚なし）できるところだったのに、邪魔が入った。言うまでもなく、箒、セシリア、ラウラである。「シャルルくろくツトオオオオ……」

「抜け駆けはあ、許さないとお、言った筈う、でえすうわあよおねえええええ……」

「いい度胸だな、シャルロット。それだけの度胸があるのだ、死ぬくらいのことにはなんの恐怖もあるまい？」

「ごめんなさいごめんなさいほんのできごころなんですゆるしてください」

そのあまりにおどろおどろしいオーラを前に、シャルロットは屈伏した。ガタガタ震えて命乞いをした。

「まったく、少し目を離すとこれだ。油断ならないヤツめ」

「許せせんわ。ええ、許せません。そこから先は、このセシリア・オルコットの名にかけて、許せません」

「ふふふふ……今宵の紅椿は血に飢えているぞ……」

「ちよ、ちよつと落ち着けよ三人とも！ いくら忙しかったからって、シャルにあたるのは良くないぞ！」

そこで一夏の待ったがかかった。それを受け、箒たちも舌打ちと共に引き下がる。

「……ふん。まあいいだろう。だがそれでも、お前の抜け駆けを許すわけにはいかん」

「わたくしたちもご一緒しますわ、一夏さん」

「うむ、まあ、あれだ。私もちょうど休み時間でな、ただ休むだけというのももつたいたい。というわけでだ、お前に付き合っただけでもないぞ……？」

「え？ けど大丈夫なのか？ そんなにいつぺんにいなくなるのはさすがにまずいんじゃないのか？」

「そんなことはどうでもいい!!」

「今もつと優先すべきことがありますわ!!」

「一夏！ どうなんだ！ 行くのか、行かないのか!!」

だが当然、彼女らがただで引き下がるなどあり得ない。一夏とのデート権のためには、僅かなチャンスをも見逃すつもりはない。

この学園祭は、なんとしても利用しなければならぬのだ。

「ええつと……いいのかなあ……」

「いいわよ、行ってきて」

「え？」

突然、一夏たちのやりとりに入って来たのは、クラス一のしっかり者と名高い鷹月静音であった。この色々と入り混じった空間に平気な顔して侵入して来るあたり、なかなかの大物である。

「いいっていいのは？」

「正確には、ここでみんなに暴れられると困るの。だから連れて行ってもらえると助かるわ」

「うくん……よく分からないけど、まあ分かった。じゃあ、行ってくるよ」

というわけで、一夏たちは出発した。時間もないので、一夏は執事服を、少女たちはメイド服を着たまま。

——そしてすぐに、コスプレ娘が一人、増えることになる。

「いいいいいいいいかああああ!!」

「お? 鈴、どうしぐふおうううう!!?」

みんなと一緒に教室を出た瞬間、腹に小さな脚が突き刺さった。

……すげえダメージだ。体が小さいとか体重が軽いとかそんなことは関係ない。速さを一点に集中して放たれた一撃は、俺の腹筋など容易くぶち破った。

「げふうううう……! い、ひゆう、息がはああ……!」

「なにアンタ、女の子はべらせていい気になって、学園祭をウハウハカーニバルってわけ?」

……調子乗ってんじゃないわよっ……!!!」

一体なにが気に入らないのか、突然現れ俺に流星脚をぶちこんだ少女——チャイナドレス装備の鈴はものすごくご立腹だ。まるで鬼の顔である。

「さあ、一夏。これから学園祭まわるんでしょ? あたしも連れて行きなさいよ」

「げはあ……ぐ、な、なにしやがるんだよっ。死ぬかと思ったぞ!」

「聞こえなかったのかしらあ? あたしが「お願い」してるうちに、答えたほうがいいと思うけどお?」

「おい鈴、何を突然——」

「アンタたちは黙ってなさい」

「「「うひい……?!」」」

ギョロリと鈴の瞳が動いてみんなを睨み付けると、みんなガタガタと震えだした。

……なんてこった。百戦錬磨のみんなを、ただの一睨みで黙らせるなんて。

「文句があるのなら、今ここで言いなさいな。叩き潰してあげるから」

「……いえ、なにも文句はありません」

そしてそれにより、鈴の参加が決定した。

……そんなことしなくても、普通に言ってくればいいのに。

「ようし！ それじゃあ行くわよ！」

「……おー。りよーかい……」

いまだに呼吸が苦しいが、ちよつと無理して歩き出す。

……やれやれ、これじゃあ全然、休憩にならないな。

臯月さんと共に学園祭をまわり始めること、三十分。

既に、注目を集めまくっていた。

「ちよ、ちよつとちよつとちよつと!! なにあれなにあれ!」

「い、い、い、井上さんが……!」

「知らない男と一緒にいる!」

「な、なんだろう……なんだかすごく、注目を集めているような……?」

「……………」

臯月さん、貴方はどれだけ純粹なのですか……。

まあ仕方ない、それがこの人の短所ではあるが、同時に他に類を見ないほどの長所でもあるのだから。

「ええつと。井上さん、どこか行きたいところとかあるかい?」

「……………いえ……………」

呆れたことに、己はこの後の計画を立てていなかった。なるべく早く、臯月さんと合流する。それで終わりだった。

……………さて、如何にすべきか。

「うくん。それじゃあ井上さん、いくつか希望があるんだけど、いいかな？」

「……是非……」

望むべくもない。臯月さんに行きたい出し物があるのなら、それを優先しよう。

「ええつと。……あ、あつたあつた。ここなんだけど」

「……………」

差し出されたパンフレットを確認すると、そのページには園芸部の出し物、「誕生花のアクセサリーショップ」が紹介されていた。

「いいかな、井上さん？」

「……ええ……」

うむ、これはなかなか面白そうだ。花は育て方しか知らないが、誕生花というものがあるのか。

「それじゃあ、行ってみようか」

「……はい……」

パンフレットに従い、園芸部の活動場所、学園の隅にある温室に向かう。程なくして、巨大なビニールハウスが見えてきた。

「……すごいな、さすがはIS学園。部活動の設備まで立派だね」

「……………」

臯月さんの言うとおり、IS学園は部活動にも力を入れている。

というよりも、一言で言えば金が有り余っているのである。生徒たちのやる気を維持するために、その金を湯水のように使ってあらゆる環境を最高の状態に仕上げているのだ。

……それでも十分に上に元が取れるあたり、世界がどれだけ優秀なIS操縦者を求めているかが伺える。

「まあとにかく、入ってみようか」

「……はい……」

二人で温室に入る。中には己たちの他にも、それなりに客が入っていた。

「いらつしや……あら、井上さん」

「うん？ この人も友達かい？」

「……いえ……」

声をかけてきた女生徒に見覚えはなかった。だが向こうは、己を知っているらしい。

「私が一方的に知ってるだけよ。井上さん、有名人だから」

「へえ、そうなんだ。すごいね、井上さんは」

「ええ、すごいですよ。たくさん活躍してますし」

「……」

三年生らしきこの女生徒は、随分と落ち着いた雰囲気的人物だった。この温室に入ってからというもの、己たちを見た者たちが騒ぐか呆然としているのだが、この女生徒だけは平然としている。

「そっちのお兄さんとの関係は、気になるところだけれど。お客様のことをあれこれと詮索するわけにもいかないし、ウチの店員にもその旨言い聞かせておくから——ごゆるりと、お楽しみ下さいませね」

「……」

……そういえば、いつだったか聞いたことがある。園芸部の部長は、古くから続く華道の名家、その跡取り娘らしい。そんな人物がなぜIS学園（こ）に居るのは分からないが。

「へえ……誕生花って、一日ごとにあるんだね」

「……多彩……」

日ごとの誕生花の一覧表を眺めながら、各々の感想を述べる。ふむ、まさかこれほどまでに種類があるとは。その全部が花としてここにあるわけではないが、それらを模したアクセサリーが並べられている。

……しかし、温室にアクセサリーか。どうにも合っていないような気がするが。

「井上さん、誕生日はいつだい？」

「……十一月九日……」

「11月9日……あった、これだ。花麒麟（ハナキリン）」

淡い赤色の小さな花卉と、そこから伸びる、鋭い棘が生えた茎。その美しい花が刻印されたペンダントに、皐月さんが手を伸ばす。

「これなんか、井上さんに似合うんじゃないかな？」

「……………」

「……いや、どうだろう。このような少女らしいモノは、どうにも苦手なのだが……。」

「あら、ハナキリンね。素敵だわ」

「うん、綺麗な花だね」

「いえ、そうじゃなくて。……ハナキリンの花言葉、ご存知ない？」

「花言葉？」

「……？」

「そこまで言つて、園芸部部长（と思われる女生徒）はなにやら含みのある笑顔を浮かべ。」

「それはね——」

——「純愛」

「!!?」

ビシリ、と。

二人して固まった。

「……いや。いやいやいや。不味いだろうそれは。いや、何が不味いのか自分でも分からんが。」

「……あは。あははは……これはちよつと、やめておこうかなあ……」  
「……………」

「恥ずかしそうに顔を赤くした皐月さんの言葉に、うむうむと頷いて答える。そんな己たちの様子を、部長（仮）は楽しげに眺めていた。」

「その視線に耐えられず、あさつての方向に顔を背けると——」

「……………」

——その先に、居た。

「歳は二十代半ばほどか。黒いスーツにタイトスカート。長く艶やかな黒髪は緩やかに波打ち、顔立ちも十分に美しいと呼べるほどに整っている。」

「だが、その顔に浮かべる。」

「あまりにも——あまりにも、禍々しい、笑みが。」



その女の危険性を、物語っていた。

「……………」

「……井上さん？」

己と目が合ったその女が、踵を返して温室から出ていく。

……皐月さんには申し訳ないが、己の学園祭はここで終わりだ。ここからは——

「……失礼……」

「ちよつと待つて、井上さん」

「……………」

立ち去ろうとすると、皐月さんに呼び止められた。今はそれに答える余裕はない。だが無視するわけにもいかず、振り返る。

すると——

「井上さん。……何か、あつたんだね？」

「……………」

……この人は。何も知らないというのに、随分と察しが良い。

「……そつか。井上さんは、色々な事情を抱えているんだね。……けど、それを話してはもらえないんでしょ？」

「……申し訳ありません……」

「井上さんが謝ることじゃないよ。むしろ、力になれない僕のほうが謝らないと」

「……いえ……」

「けどせめてもの応援に、これだけは持つていってくれないかな？」

「……………」

そう言つて、たった今買ったのだろう、皐月さんは小さな布袋を手渡してきた。

これは——

「……御守り……？」

「うん。さつき教えてもらったんだけど、誕生花は一日に一つじゃないんだつて。」

……これは、11月9日の、もう一つの誕生花」

御守りの中には、何か小さな丸いものが入っている。これが恐ら

く、十一月九日のもう一つの誕生花なのだろう。

「数珠玉<sup>ジュズダマ</sup>、て言うんだって。花言葉は——

——「祈り」

「……！」

御守りを受け取ると、皐月さんはその手を包み込むようにして己に握らせた。

そして、己の目を真っ直ぐに見て。

「気を付けてね、井上さん。君が怪我をすると、たくさんいる君の友達が悲しむからね。……もちろん、僕も」

「……承知……」

……ありがとうございます、皐月さん。

己が、無事で在るように。

——その「祈り」、確かに受け取りました。

「あ、あれは……!?!」

それに最初に気付いたのはセシリアだった。驚愕に彩られた顔で一点を見つめているので、みんなも気になってそちらを向く。

すると、そこには——

「な、あれは、如月皐月!?!」

夏休みに行われたシンのお見合いの相手、あの変態の従兄弟である如月皐月と、その皐月さんと一緒に歩いているシンの姿だった。

「そんな、それじゃあ、シンが招待状を送った人って……!」

「そんな……そんなあああ!!」

「くそ、この世にあるのは絶望ばかりかっ!!」

みんながみんな、あまりのショックに取り乱している。俺もガツクリとうなだれて膝をつき、非情な現実<sup>現実</sup>に打ちのめされていた。

「くそ、どうする!?! どうすれば……!?!」

「邪魔をするわけにはいかない……今度こそ、織斑先生に殺されるっ……!?!」

「けれど、このまま何もしないわけにも……!」

「くう……! 初めから敗北しかないって言うの!? あたしたちには……!」

「みんな落ち着け! まだ、まだ何か手はあるはずだっ!」

とは言ったものの、妙案があるわけでもない。仕方ない、とりあえず尾行するか、となったところで――

「……あ」

「む? どうしたセシリア」

「そろそろ……抽選会の時間ですわ」

「!!」

抽選会とは、如月重工が行うイベントだ。これに当選すると、如月重工の技術支援を優先的に受けられるというものだ。

そして、それとは別に――

「真改さんの人形、なんとしても手に入れなければ……!」

この抽選会で当選した者には、1/6井上君人形なるアイテムが贈られるのだ。これは如月重工の総力がつき込まれている極めて高性能な一品らしく、技術支援以上にこっちを狙っている人も多いくらいなのだ。

……少なくとも、ここにいるメイド四人とチャイナ娘はそうだろう。

「く……どちらを優先すれば……!」

「うくん……こうしても、何もできることはないよ……」

「むうう……背に腹は変えられんか……」

「……仕方がないですわね。抽選会に行きましょう……」

ギリギリと悔しげに奥歯を噛み締めながら、抽選会の会場へと向かうみんな。俺は特にシンの人形を狙っているわけではないし、あの変態の技術支援もなんだか嫌なので、抽選会に行くつもりはなかったんだが……。

「……ふう。仕方ないな、俺一人でまわってもつまんないし」

というわけで、みんなに少し遅れてついて行くことにした。

――の、だが。その直前で。

「ちよつといいですか？」

「へ？」

声をかけて来たのは、知らない女の人だった。

黒いスーツをキチツと着込み、ニコニコと人当たりの良い笑顔を浮かべるその人は、キャリアウーマンという言葉がバツチり当てはまる感じた。

……なんとなく、次の展開が予想できる。

「失礼しました。私、こういう者です」

「えーつと……IS 装備開発企業「みつるぎ」涉外担当……まきがみれいこ巻紙礼子さん？」

「はい、以後お見知りおきを」

そう言ってお辞儀をすると、巻紙さんの緩いウェーブがかかった口ングヘアがふわりと揺れた。

「実は織斑さんに、是非とも我が社の製品を使っただけじゃないかと思ひまして」

（あー……やつぱりそういう話か……）

予想的中。実は以前から、このテの話は山のように来ている。どうやら世界で唯一の男のIS 操縦者である俺に装備を使ってもらおうというのは、俺には想像もつかないほどの宣伝効果があるらしい。

将来のことを考えれば、それらの誘いは受けた方が良さだろう。スポンサーが付くし、コネもできる。みんなと相談して、どこの企業が良いかを考えるべきなんだろう。

しかし俺は、今まで全ての誘いを断っていた。それと言うのも——  
（けどなあ……白式って装備足せないしなあ）

そう、白式は装備を量子変換して格納しておくための拡張要領バーススロットがまったく空いていないのだ。だからどんな装備も、これ以上足すことができない。

（雪片式型を外せばいいんだけど……そうすると零落白夜も使えなくなっちゃうし……）

それだと白式の最大の長所、一撃必殺の攻撃力がなくなってしまう。それに雪片式型を外しても、拡張要領の大半を埋めているのは零

落白夜を発動するためのプログラムなので、代わりに装備できる武器も精々一つだ。

それに、なにより――

(白式が嫌がるんだよなあ……)

最近知ったことだが、ISのコアにはそれぞれ好みのようなものがあり、それから外れるものは装備できないのだ。

特に白式はかなりのワガママで、雪片式型以外のものは一切装備したがない。

……ホントに欠陥機だな、おい。

「ええつと……すいませんが、そういうのは学園を通してもらわないと……」

「そう言わずに!」

「うお!」

「ずずい、と詰めよって来る巻紙さん。ち、近い近い!」

「どうでしょうか? こちらの追加装甲や補助スラスタなどは、我が社の自信作です。それに今ならサービスで、こちらの脚部ブレードも――」

「すいません、人を待たせてるんで! 失礼します!」

「あつ!」

肩から提げた鞆からカタログを出そうとしている隙に、ダツシユで離脱。そのまま抽選会場へ向かう。

……ふう、危ないところだった。ああいうのは本格的に捕まるとなかなか脱け出せないからな。向こうも仕事だから、必死なのは分かるんだが……少々うつとうしいと感じてしまうのは、しょうがないかもしれない。

「ああもう、みんな先行っちゃったよ……」

ぐるりと見回してみても、みんなの姿は見当たらない。よほどシンの人形のことを気になっているのか、俺のことなんかは意識の外らしい。

「まあいいか、どこに行くかは分かってるわけだし。……けど、なんだろう」

さっきの人。巻紙礼子さん。  
彼女からは、なんとなく……どこことなく、嫌な気配が、したような

## 第60話 暴虐（半身編）

以前如月重工本社ビルを襲撃した女、アラクネのパイロットを追って、学園内を歩く。

どこか目的地があるのだろう、女の歩みに迷いはない。その歩みの速さは一定であり、先ほどわざわざ己に顔を見せたこととあわせて、己を誘っていることは明らかだ。

……何か罫でも仕掛けているのか？ だがここは、奴らにとっては敵地に等しい。そんなことが出来るとは考え難いが……。

「……………」

しかし何が待ち受けていようと、向こうで戦場を用意してくれるのなら好都合だ。一般人も多くいる場所での戦闘だけは避けなければならぬのだから。

「……………」

女の後には、黙々とついて行く。

——さて、鬼が出るか蛇が出るか。まあ、何であろうと構うまい。鬼が出たのなら鬼を斬り、蛇が出たのなら蛇を斬るまで。

万一、神仏の類が出ようものなら——丁度良い。己の剣がその高みに届くか否か、試させてもらおう。

「……………」

そうしてさらに、しばらく歩き。次第に、女の目的地も予想がついてきた。

（…………アリーナ、か……）

確かに、この学園内で戦うのなら、これ以上の場所はあるまい。そしてその予想通り、女はアリーナのある施設へと入って行った。

学園の関係者以外がそこに入るためには、幾重にも施された嚴重なセキュリティを潜り抜けなければならぬはずだが、女はほとんど素通りだった。亡国機業め、如月重工にさえ尻尾を掴ませない情報戦能力を持つ奴らにとっては、この程度の守りなどないようなものか。

「……………」

そして、ついに。





女は笑いながら、両腕を大きく広げて、くるくるとその場で回り始めた。すると次第に――

「……これは……!?」

「きゃはははははは！ きゃはははははは！ うふ、うふふふふあはははははは、きゃは、きゃはははははははははは！」

――女の姿が、変わっていく。緩く波打つ黒髪も、身に纏ったスーツも、まるで蜃気楼が消えていくように、空気に溶けていく。そして。

幻が完全に消え去った、そこには。

「……あつはあ♪」

少女だった。身の丈はラウラと同じほどか、随分と小柄だ。

その少女は、赫<sup>あか</sup>かった。

肩で切り揃えられた髪も、整った造形の顔を包む肌も、いつそ無色と呼ぶべきほどに白い。

だが、大きく見開かれた、一切の光のない虚のような瞳が。

三日月のように開かれた口の、その奥にちらと見える舌が。

まるで花嫁が着るそののように、華やかに飾られたドレスが。

毒々しいほどに。

禍々しいほどに。

狂おしいほどに。

鮮血で、染め上げたように。

――少女は、赫<sup>あか</sup>かった。

「初めましてえ、井上真改さあん。ワタシはあ、亡国機業のお、「フラツド」って言いませす。よろしくお願ひしますねえ、きゃは♪」

「……………」

笑いながら、少女は名乗りを上げる。よもや連中が自らの素性を明かすなど思ってもいなかったが、しかしどう考えても、フラツドという名はコードネームだろう。

「うふふふふ、本当はあ、アナタの相手はオータムさんがしたがってたんだけどお……あの、アナタのことになる、抑えが効かなくなっちゃうみたいでえ。男の子の方に、マワされちゃいましたあ！ きゃ

ははははは!!」

「……………」

……やはり、罨だったか。だが己が予想していたものとは違う、飽くまで一夏を狙うために、己を引き離し引き留めるための罨。

迂闊だった。以前一夏を狙った際は一夏そのものが目的ではなかったし、最近如月重工を襲ったことから、てつきりアイツは既に標的から外れているものと思っていた。

——だが、続いていたか。

「と、いうわけでえ、アナタの相手はあ、ワタシになりまあす! きやははははは!!」

「……………」

まるで気が触れているかのように——否、実際に触れているのだろう、フラッドは何が楽しいのか、理解できないタイミングで狂笑を上げる。

……捕らえるつもりだったが、こうなってしまうてはそうも言っていられない。一夏に回されたオータムというのは、恐らくアラクネの操縦者だろう。一夏にとつては、考えうる限り最悪の相手だ。

能力や相性がどうという話ではなく。

あの女が、三年前に己の腕を切り落としたことが問題なのだ。

「きやはははは! きやはは、きやはははははははは!!」

「……………」

ならば、一刻も早く、この少女を倒さねばならない。

尚も笑い続けるフラッドに、一步踏み出す。同時に朧月を起動、一瞬で臨戦態勢に入る。

それを見たフラッドは顔に狂笑を貼り付けたまま、ガクン、と首を——本人は首を傾げたつもりなのかも知れんが、端から見れば突然首が折れたかのような動作で、横に倒した。

「あれえ、ヤっちゃいますう? ヤっちゃうんですかあ? ……いいですよ、ワタシそういうの、大好きですからあ!! きやははははははは!!」

また笑い、フラッドもISを展開する。

——その瞬間、アリーナ中央に顕現したのは。

「うふふふふふ、あは、きやははは、あつは、あは、ああああははははははははあああ〜!!」

「……」

次々と展開されていく装甲。

その機体も、少女と同じく、赫かった。

だがその赫さは、少女のような鮮血の赫でもなければ、箒の紅椿のような真紅である筈もなく。

全身に浴びた血が、そのまま放置され、乾き、変色したような。

それが、幾層にも重なったかのような。

どす黒い、赫さだった。

だがその色合い以上に、その機体を異形たらしめているのは——

『これは……やっぱりこの機体も、彼らの仕業だったんだねえ』

「……社長……」

突然通信回線を繋げて来たのは、朧月の製作会社、如月重工の社長であった。こうして非常事態に割り込んで来るのはまさにこの人の十八番であり、いまさら驚くこともない。

『やあやあ井上君。皐月とのデートは楽しめたかな?』

「……」

そして非常事態でも、この人は自分のペースを乱すことはそうはない。この人は面白い事、厄介事が三度の飯よりも好きであり、それはさながら霞を食って生きるという仙人の如く、「楽しさ」をカロリーに変換する器官をその身に備えているのではないかと疑うほどだ。

『さつき皐月から連絡があつてねえ。「僕には何も出来ないから、兄さんの力を貸してほしい」だつてさ。いやいや、可愛い従兄弟おとうとの頼みとあつては、しかもそれが井上君絡みとあつては、断るわけにはいかな  
いよねえ。

というわけで、加勢させてもらうよ』

「……ありがたい……」

だが人格はともかくとして、この人の能力は折紙つきだ。緊急時にこれほど頼りになる人物は、己が知る限りでは千冬さんくらいのもの

だ。

「楽しみですねえ、楽しいですねえ！ 何して遊びますう？ ねえ、井上さあん！ きやはははは!!」

『あの子がいきなり姿を変えたのは、「シエイプシフター」っていう装置の効果さ。その名のとおり、使用者の姿を思うままに変えることができる。まあ実際には、超高性能なホログラム機器みたいなものなんだけどね。』

……そして本題。あの子の機体だけど——』

「おままごどがいいですかねえ！ だるまさんが転んだがいいですかねえ！ それともかくれんぼ？ 鬼ごっこつていうのも捨てがたいですねえ!! きやはははははは!!」

笑い続けるフラッドの姿は、完全に装甲に覆い隠されている。

ISには珍しい、全身装甲<sup>フル・スキン</sup>。だがそれは、取り立てて異形と呼べる要素ではない。

問題は、もつと単純で、遥かに分かりやすく。

『インド製第三世代型、拠点防衛用IS——「ジャガーノート」。おそらく現存するISの中で、最大の火力と防御力を有する機体だよ』

その赫色は——ただひたすらに、巨大だった。

「いゝのうゝえさあん！ あゝそびゝましょ!!」

「……っ！」

通常のISと比べ、高さだけでも五割増し、体積では優に三倍を超えるだろうその機体の両手に、その巨軀に見合った巨大な砲が展開される。

四つの砲身が束ねられたそれは、初めはガトリングガンかと思つたが——

『井上君、気を付けたまえ。あれはガトリングガンじゃなく——』

「あつはあ♪」

「……っ!!」

それは、銃声というより——巨大な竜巻が、街を喰いちぎって行くかのような轟音だった。

そして放たれる銃弾も、その轟音に相応しい、嵐の如き激しさを誇っていた。

「…………ちいつ……………」

咄嗟にスラスターを起動、その砲火の射線から逃れる。背丈の関係で上から下へ斜めに撃つ形になり、無数の弾丸がアリーナの土を抉る。

……否。それは決るなどという、生易しいものではない。

まるで土自体が炸薬だったかのように、広く、深く、無残に、弾け飛んでいる。

『アレはジャガーノートの主兵装でね。オートカノン、て言ったかな。ガトリングガンみたいに砲身を回転させるんじゃなく、四つの砲身全てから同時に弾が出るんだ。中距離砲火で特に威力を発揮する、威力と連射速度に特化した兵器だよ。アレをまともに食らったら、朧月の装 甲じゃあひとたまりもない。上手くよけてね』

「楽しみましょう！ 楽しみましょう！ アナタもワタシもアレもコレも誰も彼も何もかも、みんなみんな、みいくん！！ グチャグチャになるまでえ！！ きやはははははああはははははははははははははははは！！」

「…………つ！！」

そうは言うがな、社長。あの砲火は、いくらなんでも激しすぎる。あれを掻い潜って接近するのは相当骨が折れるぞ。

だがあれほど大きな弾丸を高速で連射しているのだ、よけ続けていればいずれ弾が尽きる筈——

『弾切れは期待しないほうがいいよ。ジャガーノートの第三世代型兵装は「アーセナル」と言って、あの背中に背負ってるでっかいコンテナみたいなやつなんだけど、あの中はISの量子変換機能をフル活用した空間でね。それこそ無限とも思えるほどに、武器弾薬が格納されているんだ』

「……………」

そういうことは早く言って欲しい。今こうして回避している間に

も、背筋の冷える場面が何度かあったのだが。

しかしそうなると、こちらから隙を作り出し、そこを突くしかない。相手はあの巨体だ、懐まで踏み込めば小回りが効かず、一転して己が有利となる。

ならば、探るべき手段は――

「あつはあ、すばしっこいですねえ、井上さあん！ それじゃあ、これはどうですかあ!？」

「……………!？」

ジャガーノートの背中に取り付けられたコンテナ――アーセナルががばりと開き、そこから上へ向けて八発のミサイルが放たれた。それらは上空で大きく弧を描き、オートカノンとの十字砲火となって己を追い詰める。

月輪、水月を起動、全力で回避機動を行い、その猛激から逃れる。P ICでも相殺しきれない強烈な慣性に、全身の骨がギシギシと悲鳴をあげた。

「ぬうつ……………!!」

「きゃはははは！ これもよけるだなんて、すごいですねえ、井上さあん！」

今のはなんとか凌いだが、しかし次もかわせる自信は無い。このままでは相手に流れを掴まれたままだ。一刻も早く、攻勢に転じなければ――

(……………これで……………!)

月蝕を起動し、フラッドへ向けて閃光弾を連射する。全弾直撃、強烈な光がその姿を覆った。

(……………どうだ……………!)

「おおお~~~~!!? 眩しい~~~~、きゃはははは!!」

声からはまるで効いているようには思えないが、しかし射撃の狙いは明らかに定まっていけない。

効果はあった。フラッドは今、確かにその視力を奪われている。

斬り込むのなら、今――!

「きゃははは、なあんにも見えないですねえ！ こういう時はあ――」

「……!?」

「——こおしましよお！」

ガコン。

アーセナルが開き、そこから真上に、四本の金属の筒が打ち上げられた。

それが、傘のように開き。

その中には、太く鋭い針が、無数にあって。

一斉に、豪雨のように降り注いだ。

「……ぐっ……！」

『ニードルランチャー……！……こんなものを追加してたかつ』

複数の針が朧月の装甲に突き刺さり、それに数倍する数がジャガーノートにも当たったが、元々の装甲に差があり過ぎる。ダメージの割合では、明らかにこちらのほうが上だった。

だがその代償に、ようやく懐まで踏み込めた——！

「……ぬうう、オオオオオ!!」

月光を起動、右腕に取り付けられた菱形の発振器から紫色の光が放たれ、それを刃として、ジャガーノートの胴を斬り付ける。

「疾っ……！」

ヴオンツ!!

高熱に灼かれた空気が一気に膨張し、爆発音に似た独特の音が鳴る。月光はジャガーノートを捉え、その装甲を——

「——あっはあ♪」

「……っ!?」

『井上君！ 離れてっ!!』

珍しく、如月社長が焦った声を出す。こんな時、彼の言葉に間違いはない。己は格闘戦の距離をなんの未練もなく放棄し、全力で後退したが——遅すぎた。

「っ・か・ま・え・たあ♪」

ガコンガコンガコン。

重々しい音と共に、ジャガーノートが武装を変更する。

両手には、先ほどまで猛威を奮っていたオートカノンに勝るとも劣

らぬ巨大サイズのスラッグカノン。

背部のコンテナ、アーセナルは横に開き、そこには無数のロケット弾頭が顔を覗かせている。

脚部の装甲まで展開され、内蔵された大口徑徹甲弾の発射装置が、己に狙いを定めていた。

(……しまった……！)

「——これにて、お開きです♪」

『井上く——』

初めて聞く、社長の悲鳴じみた呼び掛けは。

直後の轟音に、かき消された。

「——あら。あらあらあらあ。意外にしぶといですねえ、嬉しいですねえ！ きやはははははは！」

「がつ……ふ、う……」

凄まじい衝撃にアリーナの端まで吹き飛ばされ、頑丈な壁面に叩き付けられた。数本の肋骨に罫が入ったようだが、幸いにも折れてはいないようだ。

『井上君、無事かい？』

「……応……」

とりあえず首の皮一枚繋がったことで落ち着きを取り戻したのだろう、如月社長の声はいつも通りの調子だった。

……本当に、ありがたい。このマイペースさが、己の冷静さを保ってくれる。

『いやいや、まいったねえ。あのフラッドっていう子、ジャガーノートの特性をかなり上手く活かしているよ』

「……特性……？」

『君も不思議に思っただろう？ 月光の威力は、ただ分厚いだけの装甲で耐えられるほど生易しいものじゃない。あの機体が強奪された当時のままなら、さっきの一撃で倒せていたはずなんだ』



この人がこうまで自信満々に断言するのなら、それは希望でも推測でもなく、純然たる事実なのだろう。

ならば尚のこと、何故その月光の一撃を受けて平然としていられるのかが分からない。

『ジャガーノートはね、アーセナルを見ればわかると思うけど、バースロット拡張領域に特化した機体なんだ。デュノア君のラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡと比べても、十倍以上はあるんじゃないかな？ あの重武装は、その特大の容量に支えられているんだよ。……まあそのおかげで、ISの最大の長所の一つである機動力が、完全にお亡くなりなんだけど』

「……それが……？」

『あの子はその拡張領域の中に、予備の装甲を積み込んだのさ。ダメージを受けた装甲を、瞬時に無傷のものと入れ替える。そして格納した装甲は、アーセナルの中で修復する。……おそらくそのための機材一式やエネルギーなんかも積んでるんだろうねえ。ここまですると、アーセナル工場フォートレスというより要塞だよ』

「……………」

なるほど、だから月光の刃が通らなかつたのか。あれほど頑強な装甲が溶断したそばから換装されては、いくら月光でも深部までは通らない。

——一撃では、倒せない。

『離れば撃ちまくり、近づけば広範囲の攻撃で迎撃する……まるで待ちガイルだねえ』

——待ちガイル。

聞いたことがある。なんでも昔、路上格闘技界で生み出された戦術らしい。

単純な戦術でありながら完成度が極めて高く、深く根を張った大樹の如く安定したその構えを崩すには、相手を上回る圧倒的な火力でもって押し潰す以外に有効な対処法がないとのことだ。

これを応用した戦術が広く普及し、生み出されてから数十年が経った今も尚、伝説として語り継がれているという。

——如月社長が、その待ちガイルに例えたということ。

やはり、突破するのは容易ではない、か——

「お休みはもういいですかあ？　ワタシ、待つのに飽きちゃいました。再開していいですかあ？　いいですよねえ？　うふ、うふふふあはははははは!!」

「……っ！」

ジャガーノートの武装が、再び変わる。今度は三メートルはあろうかという長大な銃身を持つスナイパーカノン、そして先ほどのような垂直発射式ではなく、こちらに真っ直ぐ向けられた大型のミサイルだ。

「それじゃあイキますよお、いつちやいますよお！　きやはははははは!!」

ドゴンドゴンドゴンドゴントツ!!

腹に重く響く銃声が己の耳に届いたのは、かわした砲弾がアリーナの壁面を鉛細工のように粉碎した後だった。

なんとという貫通力、そして破砕力。あんなものを受ければ、今の消耗した隴月では一撃で墜ちる。

「うくん、やっぱりこれだけじゃあ当たらないですねえ。それじゃあ、これも追加でくっす♪」

アーセナルのカタパルトにセットされたミサイルが火を噴き、凄まじい速度で飛翔する。だがその数は二発、十分引き付けてから反転すれば——

「——あっはあ♪」

「……っ!？」

ガシャツ、と音を立てて、ミサイルが開く。これは——

(……多弾頭ミサイル……!!)

二発だったミサイルが、瞬く間に三十六発に増える。それらは上下左右に大きく広がり、己の逃げ場を塞ぎにかかった。

「……ちいっ……っ！」

月影を起動、三連装の砲身から吐き出される大量の散弾で、ミサイルを迎撃する。落としきれなかったものは月光で斬り、作り出した隙

間に機体を滑り込ませてミサイルの壁を抜けた。

「うふふふうく、やりますねえ。ワタシ、テンション上がって来ちゃいましたあ!!」

それを見て、フラツドの攻撃がさらに激しさを増す。

近距離、中距離、遠距離。あらゆる距離に対応した、高火力の武装の数々。進路上にあるもの全てを根こそぎ薙ぎ倒して突き進むその猛激は、もはや嵐と呼んでもまるで足りない。

——洪水フラツドとは、よく言ったものだ。

(……………どうする……………?)

今はまだ、どうにか凌いでいる。だが月影の弾は決して多くなく、先ほどのダメージにより己の体力の消耗も激しい。

——このままでは、いずれ捉えられる。

(……………どうする……………!?)

一か八かの賭けに出ても、月光の威力をもつてしても一撃では仕留められない。そしてその直後に、あの苛烈極まる反撃を浴びせられるだろう。

——次は、耐えられない。

(……………どうすればいい……………!?)

一撃で仕留められないのなら、連撃。幾度も斬り付ければ、あの装甲を貫くことが出来るかもしれない。

だがそのためには、あの猛攻を潜り抜け、あの反撃から逃れ、そして再び斬り付けるということを何度も繰り返すことになる。

何度成功すれば届くのか、それすらも分からないというのに。

保つか、それまで——?

『——相変わらず、世話の焼ける』

(……………っ!?)

突然、脳裏に響く声。

如月社長からの通信ではない、だが、聞き覚えのある、この声は――

『言った筈だ。己は、お前に相応しい業物になると』

(…………お前は…………!)

あれ以来、ずっと黙っていたから、驚いた。

だが、聞き違える筈がない。

この声は、間違いなく――

『ならばこの身に、断てぬもの無し』

己を、相棒と認めてくれた。

己を、主と呼んでくれた。

たとえ言葉を発さずとも。

ずっと、己と共に、居てくれた――

『お前はただ無心に、ただ一心に、己を振るえば良い』

腑抜けた己に喝を入れるため、己の人格を模した。

己に付き合い、共に最強を目指すと言ってくれた。

この世界で、いくつもの戦いを、共に斬り抜けた。

『そうだろう――我が主』

――己の、愛刀。

(…………そうだな…………)

まったく、己は本当に愚かだ。一体何を迷う必要があったというのか。

もとより、己に出来ることは、一つだけ。

――ただ、寄って斬るのみ。

『さあ、往くぞ。お前が目指したもの、お前が望んだもの、その一つを

――これより、カタチと成す』

己が目指したものの、望んだもの、その、一つ。

それは――

『刮目せよ。我が身に宿る刃を』

一刀両断。

一撃必殺。

初太刀で斬れぬのなら潔く死ね。

それは、剣士の理想。

己だけではない、かつて、「彼女」も追い求めた到達点。  
——その刃が、今、この右腕に。

『ワンオフ・アビリティ  
「単一仕様能力」』

さあ、魅せてみる、朧月。

お前の、剣を——！

『「しろがねつくよ  
白銀月夜、発動」』

## 第61話 暴虐（一刀編）

「……あれれえ?」

分厚い装甲の中で、フラッドはガクンと首を傾げた。この狂気に歪みきった少女にも、はつきりと分かる異変が起きたからであった。

「なあんか……暗いですねえ?」

突如として、アリーナが暗闇に包まれたのだった。

だが空を見上げて、まだギリギリ太陽はアリーナ内からも見えるし、照明も問題なく光を放ち、たった二人しかいないアリーナを照らしている。

——筈、なのに。その光が、フラッドまで届いていない。

「……ううううん?」

ガクンともう一度、今度は逆方向に首を傾げる。

暗くなっても、戦闘には支障はない。元々完全な闇さえ存在する宇宙空間での活動を目的として開発されたISだ、暗視機能くらいはハイパーセンサーに標準装備されている。

故に、問題は暗いことなどではなく。

何故暗いのか、ということだ。

「まあ、考えられるのはあ——」

傾げていた首を戻し、前を向く。

すると視線の先では、真改が右腕を高々と掲げ、佇んでいた。

「……あつはあ♪ 井上さんたらあ、そおんなどつておきを隠してたんですねえ。もう、いけずなんだからあ、きやはっ♪」

ガコン。

フラッドは自らの専用機、ジャガーノートの武装を構えた。大口徑、超高速の砲弾を装填されたスナイパーカノンが、ピタリと真改に照準される。

「うふ、うふふふふうふうふうふう。なんだか面白そうですけどお、ワタシのこと、無視しないでくださいよお」

虚ろな両目で真改を見据え、引き金を引く。ドゴンツ!! と轟音が響き渡り、その空気の振動が届くよりも速く、砲弾が真っ直ぐに真改

へと食らい付く。

真改は上体を捻ってこれを回避、そのまま空中高く飛び上がった。「あつはあ、高いところ行かないでくださいよお。この子、飛ぶの苦手なんですからあ。ねえねえ井上さあん、降りて来てくださいよお、きやはははははは！」

フラッドは真改を追おうとはせず、その場から砲撃を浴びせ続けた。ジャガーノートにもPICやスラスターは当然装備されているが、機動力は戦闘ヘリと良い勝負だ。追いかけたところで、追い付くことなど出来はしない。

ならばこのまま機体を安定させ、砲撃の精度を上げるべきだ。どうせ真改には、この距離で有効な射撃武器などないのだから。狂気の中に残った理性でか、はたまた戦う者の本能でか、フラッドはそう判断した。

——だが。

「当たらないですねえ、当たらないですねえ、全然当たらないですねえ！ きやはははははは！」

真改の回避機動が、今までとは違う。隙あらば反撃を仕掛けられるよう、攻め気のある回避だったそれが、今は完全に避けることに専念している。

真改がそんな、少々追い詰められた程度で勝利を諦めるような人物でないことは、フラッドも理解している。

ならばこれは、本当の意味で逃げ回っているのではなく。

——機を待っているのだ。現在起きている不可解な現象、それに関する、機を。

「うふ、うふふふあはははははは、きやははははは！ なんですかあ!?! なんなんですかあ!?! 何をしてくれるんですかあ、井上さあん!!

きやははははははああ〜!!」

——その問いに対する答えは、真改の周囲に現れた、光の帯だった。「……んんん〜?」

例えるならば、オーロラのような輝き。暗闇に包まれたアリーナでは、その輝きは幻想的で、神秘的だった。

目に見えるカタチとして現れた二つ目の異常現象を、ジャガーノートが解析する。その結果は――

「……プラズマ、ですかあ?」

それは、億の桁に達しようかという程の、超高温のプラズマであった。だがそれが分かったところで、謎は残る。それほど高温のプラズマならば、砲弾として撃ち出せばいいのだ。機体の周りに漂わせるなど、無駄でしかない。

「……うふ、うふふふふふふふ。なぞなぞですかあ? ワタシそういうの、苦手なんですけどお」

そう、無駄でしかないのだ。それも作り出すのに膨大なエネルギーが必要なプラズマの無駄遣い。

そんな無駄を、真改が、戦闘中にするだろうか?

――答えは、否。

ならばこれは、エネルギーを無駄にしているのではなく。

エンジンを回す際に発する、熱や音のように。

ただ、無駄になってしまいうだけのこと。

「あはははははは! きやははははは! 井上さあん、早くう! 焦らさないでくださいよお!」

では、それほどに膨大な無駄を出してまで、一体何をしようというのか。

――そして。

それほどに膨大な無駄を出せるほどのエネルギーが、一体、どこから来ているのか――?

「きやはははははは! 早く早くう! ねえ、井上さあん! きやはははははは!」

答えは、簡単だ。

何故突然、アリーナが暗くなったのか。

それは、真改が。朧月が。

「光」という「エネルギー」を、奪い尽くしているからだ。

「きやはははははは! うふふふ、うふふふあはははははは――はっ!」

真改の周囲を漂う、光の帯。





た。

そしてそれだけで、手足を除いたほぼ全ての装甲が蒸発し、フラツドの狂笑が表に現れていた。

『いやいや、すごいねえ。あんな状態になっても、まだ強制解除されていないだなんて。流星は拠点防衛用、本当に徹底的に破壊されない限り動けるわけだ』

「……………」

突破されたら終わりな以上、撤退する余力を残しても意味はない。最期まで踏みとどまり戦い続けることこそが役目なのだから。

故に、ジャガーノートを止めるためには。

エネルギーを完全に枯渇させるか、若しくは——

「きゃはははははは！ いやあんもう、腕がされちゃいましたあ！ あゝゝゝれえゝゝ、きゃはははははははははははははははは！」

『けれど、そのジャガーノートにこれだけのダメージを与えるなんてねえ。想像以上だよ、朧月のワンオフ・アビリティは』

「……………当然……………」

…………一応断っておくと、フラツドのISスーツは無事だ。消滅したのは装甲だけで、フラツド本人は無傷である。いくら敵とはいえ、少女の裸体を成人男性に晒させるのは気が引ける。

「まったくくう、どうしましょうねえ!! ワタシの一張羅が台無しですよ!! きゃはあ、うふふあはははきはきはあはははははははははははははははははははははははははははははははははははあああゝゝゝ!!!」

『けれどまだ、油断は禁物だよ、井上君。ジャガーノートはまだ、その戦闘能力を完全には失っていない。アーセナルもなくなったみたいだけど、当たれば一撃で墜ちることには変わりないんだからね』

「……………応……………」

先の一撃で、朧月のエネルギーもかなり消費してしまった。フラツドのダメージを考えても、状況は精々、五分より僅かに己が有利な程度だろう。油断などすれば、一瞬でひっくり返される。

「……………んんん? ………………あゝあ。残念ですなえ、せえつかく盛り上がってきたのにい。そろそろ帰ってきなさい、て言われちゃいました

あ。あつはあ、カラスが鳴いたら帰りましょお!! きゃははははは!!

『むむ、逃げる気みたいだねえ。ちよつとそこ行くお嬢さん、飴ちゃんあげるからこつちにおいで』

「ええ? なに味ですかあ?」

「うなぎボン味」

「わあい、くださいくくださあい!」

「……………」

突然開放回線に切り替えた社長とフラツドの会話。凄まじくやる気と緊張感を削がれる。

だが、フラツドは本当に近付いて来た。それを社長の甘言に惑わされたと考えるほど平和呆けしているつもりはない。何かしらの策に基づいた行動なのは間違いないだろう。

「知らない人から物をもらってはいけません、て言いますけどお。人の好意を無下にするだなんて、失礼ですよねえ」

「まったくだねえ。渡る世間は紳士ばかりなのにねえ」

「まったくですねえ。うふふ」

「うふふふ、ふふふ」

「うふふふふふふふふふふ」

「……………」

真面目にやってくれ——と言いたいところだが。まあ、至極真面目なのだろう、本人たちは。

そして、そんなことをしている内に。

フラツドが、間合いに——

「……………疾っ!」

「ところがあ、どっこいしよお!!」

「……………っ!」

踏み込んだ瞬間、フラツドが、飛んだ。

手足の装甲をパージし、どうにか残っていたのだろう、予備と思われるスラスターを展開し、飛んだ。

——真上に、飛んだ。

「……ちいつ……!?!」

『あれ?』

その直後である。置き去りにした装甲が、爆発したのは。威力で言えば、大したものではない。だが目眩ましとしては効果があり、僅かに怯んだ一瞬の隙に距離を取られた。

そして、そのまま——逃げた。

「……………」

『……ふむん。改造されてるんだから、逃げる機能が追加されてることも考えるべきだったねえ』

「……迂闊……」

本来アリーナは遮断シールドに覆われているのだが、今回の戦闘は学園が設定したものではない。故にフラッドの逃走を妨げるものは何もなく、一直線に飛んで行く。

『なるほど、重い武器と装甲を捨てれば、ジャガーノートも結構スピードが出るんだねえ』

「……………」

それでも、元々高速戦闘を想定している隼月には及ばない。出遅れたとはいえ、今から追えば追いつけるだろう。

だがその場合、追いつく場所は街中だ。敵の増援が来る可能性があるし、そうでなくとも一般人を巻き込むことになる。

最初の一步を先んじられた時点で、己の負けだ。

『やれやれ、連中にはまた逃げられたねえ。……ついでに、また収穫もあつたし。なんか以前も似たような感じだったねえ。これはあれかな、ジンクスってやつかな?』

「……………」

だとするのなら、嫌なジンクスだ。……いや、ジンクスとは元々、縁起の悪いもののことを言うのだったか?

『「白銀月夜」<sup>しろがねつきよ</sup>、か。どうやら、光の屈折率を操作する能力のようだねえ。かなり限定的みたいだけど』

「……………」

隼月のデータによれば、初めから人工的に指向性を与えられた光――

「例えばレーザーなどは操作出来ないようだ。月光は自らの武装だから、例外のようだが。」

『これはかなり強力だよ、井上君。君も小さいころ、虫眼鏡で太陽の光を集めて紙に火をつけたことが——なきそうだなあ、井上君は』

「……………」

『まあとにかく、光は集めれば集めただけ、温度が高くなる。周囲の光、それに月光の光。これらを屈折させ、循環させ、増幅させ、収束させ、放出する。その威力は——見ての通りだよ』

「……………」

広大なアリーナには、ジャガーノートの砲撃による傷痕が無数にあるが、それらが目立たなくなるほどの特大の傷痕——アリーナの端から端までを派手に抉る傷痕がある。

……もはや傷痕というより、ちよつとした谷だ。どうしよう、埋めようにも土は大量に蒸発してしまっている。己一人での修復は不可能だ。

仕方ない、ここは社長の力を借りるか。

「……………社長……………」

『お掛けになった番号は、現在使われておりません。もう一度、番号をお確かめになってお掛け直し下さい』

「……………」

……となると、このまま捨て置くしかあるまい。これだけの騒ぎ、いずれ先生たちがやってくるだろう。彼女らに任せるとしよう。

——己には、他にやらねばならんことがある。

『ピンポンパンポーン（→）。織斑一夏君、織斑一夏君。第四アリーナまでおこしく下さい。一年一組、織斑一夏君。第四アリーナまでおこしく下さい。ピンポンパンポーン（←）』

「……………楯無さんの声だ……………」

それが意味することはただ一つ。

——逃げられない——

ガツクリと項垂れる。一筋縄ではいかないと思っていたが、やつぱりか。

第四アリーナ。

……アリーナ。アリーナかあ。広いなあ、何する気なんだろう……。

「……仕方ない、行くか……」

無視したら、後でなにされるか分かったものじゃない。いや、後でどころか、次の瞬間には刺客が現れて、俺をアリーナまで拐って行くかもしれない。

……やるぞ、あの人は。それくらいやるぞ。本当にやるぞ。微塵の躊躇もなく、平気でやるぞ。

——だから、俺には選択肢などないのだ。

「……て、あれ？ みんな？」

アリーナのピットに行くと、入口のところに四人のメイドと一人のチャイナ娘がいた。……まだ着替えてなかったのかよ。俺もだけどさ。

「抽選会に行ったんじゃないのか？」

「いや、行ったのだが……」

「なんか、拍子抜けするくらいに普通だったわよ。籤引いて、それでおしまい。結果は後で発表します、ってさ」

「そりゃあ……かなり意外だな。あの社長なら、絶対なにか仕掛けてると思ってたんだけど」

「うん。……その分、発表の時が怖いんだよね……」

「文化祭終了時に、ということでしたから、最後にそれはもうすごいことをしようと企んでるに決まっていますわ……」

「行動に一貫性があるのに先が読めないとはどういうことだ……」

「アイツの思考を理解しようってのが、そもそも間違いなんだよ」

基本的に目上の者には礼儀正しい筈やシャルまで、如月社長には言いたい放題だ。ある意味、人望があると言えなくもない。

「それで、どうして……」

「さっきの放送を聞いてな、一体何事かと——」

「お、ちゃんとみんな来てるわね。感心感心」

後ろからの声に振り返ると、そこに居たのはやっぱり楯無さんだった。手に持った扇子をぱん！と開くと、そこには「良い子」と書いてあった。

「みんな来てるって……呼ばれたのは俺だけじゃありませんでしたっけ？」

「一夏君を呼べば、みんな来るでしょ？」

そう言つて、楯無さんはくつくつと笑う。その意味はいまいち理解出来なかったが、しかし実際に言葉通りになっているのだから、納得するしかない。

「ええつと……それで、なんで俺を呼んだんですか？」

「いやいや。一夏君には特訓に付き合つてあげた貸しがあるでしょ？」

それを返してもらおうと思つて「

……」

やっぱりあれは貸しとしてカウントされていたのか。ただでさえ逆らえないというのに、もう完全に手も足も出ない。まな板の上の鯉状態である。

「生徒会も出し物があつて。一夏君には、それを手伝つてほしいの」

「……まあ、いいですけど。それで、出し物つて？」

「演劇よ。お題目は——」

ぱん！と再び開かれた扇子。いつの間に変えたのやら、そこには

「童話」と書かれていて。

「——シンデレラ、よ」

目の前には、客席を埋め尽くす観客たち。その視線は、これから始まる出し物みせものに対する期待に満ち溢れていた。

『むか～しむかし、あるところに。シンデレラという名の少女がいました』

今俺は、マントに冠という、絵本に出てくる王子様みたいな格好をしていた。執事から王子って、どんな出世のしかただ。いや、王子は王様の子のことだから、たとえば革命に成功してもなれるもんじゃないんだが。

とにかく、俺は今王子の格好をして、アリーナに作られた特大の舞台装置のど真ん中に突っ立って、楯無さんのナレーションを聞いていたんだが――

『――シンデレラは、地上最強の兵士でした。あらゆる任務、あらゆる戦場において最高の結果を出し、無数の死線を潜り抜け灰燼を被ったその姿があまりに美しかったことから、いつしか「灰被り姫シンデレラ」と呼ばれるようになったのです』

「……………え？」

今、なにか。

かなーり、おかしくなかったか？

『しかしいかなシンデレラと言えど、所詮は人の子。寄る年波には勝てません。次第に自身の衰えを感じ始めたシンデレラは、自分の後継者を育てることにしたのです』

「……………え？」

……………ちよつと待て。これってシンデレラだよな？ 童話のシンデレラだよな？ シンデレラストーリーの語源になってるあのシンデレラだよな？

シンデレラって、そんな話だったか？ なんか着替えたら、台本も何も読まずにいきなり放り込まれたからよく分かってないんだが。

これってまさか――「普通の」シンデレラじゃ、ない？

『弟子たちは強く美しく成長し、いよいよ最終試験の時が来ました。シンデレラは、集めた弟子たちに語ります。』

「私はただひたすらに、強くあろうとした。そこに私が生きる理由がある」と信じていた」

そして発表される、最終試験の課題。それは舞踏会に参加する隣国の王子、その王冠に隠された軍事機密を奪取することでした。

その困難さに怯みもしない弟子たちの姿に、シンデレラは満足そう



に頷き、続けます。

「やつと追い続けたものには、手が届いた気がする。

——「灰被り姫」<sup>シンデレラ</sup>。その称号は、この試験をクリアした者にこそ相応しい」』

「……………え？」

ちよつと待つてよ。

その隣国の王子って。

もしかして。

——俺？

『師の言葉を受けた少女たちが、舞踏会に突入します。王子の王冠を手に入れるために。最強の称号を手に入れるためにっ！

そして今！ 舞踏会開始の鐘<sup>ユング</sup>が鳴り響きますっ!!』

「ええええええっ!!」

既に嫌な予感、ていうか確信しかない。一刻も早く、ここから逃げ——

「もらったああああ!!」

「のわあっ!!」

突然、凄まじい覇気と共に、鋭い刃が襲いかかって来た。その襲撃者は、純白の布地に丁寧に銀をあしらった、美しいシンデレラ・ドレスを身に纏う——

「つて、鈴!? なにすんだよいきなり!」

「うるさい、大人しくしなさいっ!!」

「ぬおおおっ!!」

再び襲い来る斬撃を、飛び退いて避ける。鈴の両手には、苦無のような形の、飛刀という中国の手裏剣が握られていて——てちよつと待て、まさかそれ本物じゃねえだろうな!?

「てやあああっ!!」

「いやあああっ!!」

鈴は小柄な体を活かした軽快なフットワークで距離を詰め、左右の連撃を繰り出した。バックステップでその間合いから逃れるが、逃げ遅れた前髪が数本、ハラリと——本物かよ!? 冗談じゃねえぞっ!!



## 第62話 酸被り姫（アミデレラ）

それは、一夏が演劇の衣装に着替えるため、更衣室に入ってからのこと。

楯無は一夏を見送った少女たちに向き直り、ニツコリと笑った。

「みんなにも、手伝ってもらっちゃおうかしら」

「……ええー……」

嫌そうなりアクションだった。

「むー。なによ、その反応は」

「いえ……」

「なにをさせる気なのかなー、と」

「別に、みんなにはシンデレラ役をやってもらうだけよ。可愛いドレスも用意してあるから」

「ええっ!? ド、ドレス……!?!」

「そ、ドレス。似合うと思うわよ、シャルロットちゃん」

「や、やりますっ」

可愛い物や女の子らしい服などに目がないシャルロットが、元気良く手をあげた。そんなシャルロットを、他の少女たちは迂闊な奴め、と言いたげな顔で見ている。

「じゃあ、シャルロットちゃんは参加ね。他は？」

「……パスで」

何があるか分からない、という不信感に満ちた返事であった。

——が。

「じゃあ、ルールを説明するわね」

「え？ ルール？」

「ええ。一夏君が被っている王冠、それを取れば、一夏君の部屋に、一夏君と一緒に住む権利を与えるわ。生徒会長権限でね」

「仕方がないな、会長の頼みとあらば断れん」

「このセシリア・オルコットが手伝ってさしあげますわ」

「あたしがいれば百人力よ」

「見せてやろう。真のシンデレラ・ストーリーをな」

「みんなノリが良くって助かるわあ」

その瞬間、楯無の笑みの性質が変わったことに誰もが気づいたが、そんなことよりも一夏との同居権のほうが必要だった。

楯無の策略だと分かってはいる。だが虎穴に入らずんば虎兇を得ず、ハイリスクハイリターン。少々の危険は仕方ない。

「ああ、そうそう。一夏君との同居権は早い者勝ちだけど——」  
だが、それでも。

少女たちは、もつと深く、考えるべきだったのだ。

「——ISを使ったら、反則負けだからね♪」

その言葉が、何を意味しているのかを。

「一夏、王冠をよこせ！」

「お願い一夏、その王冠、僕にちょうだい！」

「大人しく渡したほうが身のためだぞ！」

「意味分かんねえ、てんだよ!!」

どこかから飛んでくるセシリアの狙撃を間一髪でかわしながら、波状攻撃から逃げ続ける。少女たちは互いに競い合い、足を引つ張り合いなながら、しかしどういうわけかそれなりに連携の取れた動きで一夏を追い詰めていた。

「し、死ぬう……このままじゃ死んでしまう!!」

一夏からすれば、たまったものではない。なにせ一夏は、なぜ自分が狙われているのかを知らないのだから。王冠をよこせと言われても、一体誰に渡せばいいのやら。ていうか誰に渡しても、残りの者たちに殺されるような気がしてならなかった。

「「一夏あああああつ!!」」

「うひひひひひひひっ!!?」

そしてとうとう、囲まれて。

絶体絶命となった、その時。

『いよいよ追い詰められた王子。しかしその時、王子の持つ機密を奪



——カサカサカサカサ——

「なんだよアレはあああああああああああああああ  
「知るかあああああああああああああああああ  
!!!?」

——カサカサカサカサ——

「うひやいいいいいいいいいつ?!?」

「こ、こつちつ、こつち来るううううううううう  
!!!?」

——カサカサカサカサ——

「来ないでっ!! 来ないでええええええええええつ!!!」

「帰るう!! あたしもうおうちに帰るううううううううう  
!!!」

アリーナ中央、特設・特大のセットの上に、阿鼻叫喚の地獄絵図が  
顕現する。

一人の王子と、五人のシンデレラ（候補）。

それに襲いかかる、無数の生体兵器。

大きさは、大体一メートルほどか。かつて如月重工本社ビルが襲撃  
された際に使われたものに比べると小さいが、それでも規格外の大き  
さだ。

そんなダニみたいな生き物が、無数。

安全な場所にいる観客たちからも、悲鳴があがった。

「くそ、逃げ場がねえぞ!!!」

「ていうかどこを見ても奴らに埋め尽くされているんだが!？」

「やめてええええええええ!! 来ないでええええええええええつ!!!」

「きやあ! きやあああ! ひひひやああああああああ  
!!!?」

「か、帰してえ!! おうちに帰してよう!!」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお冷  
静になるんだ  
!!」

——カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ  
サカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ  
サカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ  
サカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ

「く、くそお……やるしか、ないのか……!?!」

——キキキイツ!!——

「うおおおっ!!?!」

なんとも耳に残る鳴き声を上げながら、一匹の生体兵器が一夏に飛びかかった。それを慌てて回避しながら、手に持っていたトレイで生体兵器を思い切り殴り付ける。

すると——

——キキキイツ!?!——

「な!?! き、効いてる……!?!」

意外にも、生体兵器はその一撃で動かなくなった。殴った時の手応えからしても、大きさのわりに耐久力はそれほどでもないらしい——そう悟った一夏は、元々それほど虫が苦手ではなかったことと合わせていち早く冷静さを取り戻した。

「みんな！ やれる、やれるぞ！ 力を合わせるんだ、まずはセシリアを助けよう！」

突然の一夏の指示に、しかし皆が従った。程度の差はあれど、少女たちは皆軍事訓練を受けた身だ。指示があればそれに従うことが染み付いており、それによって落ち着きも取り戻していく。

そして一夏は、最初の行動としてセシリアの救出を選択した。スナイパーとして単独行動をしていたので、今は孤立してしまっている。先ほどの悲鳴にセシリアのものが混じっていたので、彼女も襲われている可能性も高い。そう素早く判断しての指示であった。

「セシリア!! どこだ!?!」

「いやあああああ!!! 来ないでえええええ!!!」

「あっちかっ!!」

絶叫を聞きつけ、その方向へと駆け出す。既にステージ上には結構な数の生体兵器がよじ登って来ていたが、しかしある程度冷静になり、陣形を組んで応戦する一夏たちの敵ではない。

「セシリア、無事か!?!」

「ひゃあああああああ!!!?」

バシユバシユバシユバシユ!!

「うお危ねえ!」

「へ!?! そ、その声は……!?!」

混乱の極みにあるセシリアはスナイパーライフルを乱射していて、何発かが一夏の頬を掠めて行った。ヒヤリと背筋を冷たい汗が流れ落ちたが、直後に一夏の顔を見て、セシリアも恐慌状態から脱する。「い、一夏さん!?! ああつ、わたくしの王子様! 助けに来てくれたのですね!!」

「おいセシリア貴様どさくさに紛れてなんというこゝト」セシリア、こつちだ!!」ちい……!」

箒の文句は一夏の言葉に妨害され、誰にも届かなかった。

とにかく全員合流、戦力の安定したメンバーは方円陣を組み、生体兵器の群れを迎撃する。

「一夏、これを使え!」

「サンキュ、箒!」

武器がトレイしかない一夏に、箒が日本刀の鞘を投げ渡す。それを木刀のように構え、目前まで迫った生体兵器を睨みつけた。

「はあつ!」

鞘を振り下ろし、生体兵器を打ち据える。

「せえい!」

箒の日本刀が、生体兵器を両断する。

「てやあああ!」

鈴の飛刀による連撃が、生体兵器を切り刻む。

「お互いをカバーし合え!」

「わかっていますわ!」

「弾、足りるかな……!」

ラウラのハンドガンが、セシリアのスナイパーライフルが、シャルロットのショットガンが、的確に生体兵器の急所を撃ち抜いていく。完成度の高いフォーメーションは、生体兵器の群れを見事に押し留めていた。この調子なら、全滅させることも不可能ではない——そう誰もが思った、次の瞬間。

「ふむ、さすがは皆さん、やりますねえ。それでは、第二段階に移行し



ましようっ!!」

「え!」

まだ何かあるのか、と身構える間もなく、生体兵器たちが、一斉に

——ビュビュビュビュビュビュビュビュウツ!!——

「なんか吐いたああああああああ!!」

「ぎゃああああああ!?! なにこれなによこれなんなのよこれええええええええええ!!?!」

「うふふ……この子たちは私が全力をあげて品種改良したサラブレッド。殺傷能力を排除した、人畜無害かつ超絶プリチーな愛玩生物。そして、この子たちの吐く酸を浴びると——」

「——服だけが溶けてしまうのです! 服だけが、溶けてしまうのですっ!」

服! だけがっ!! 溶けてしまうのですっ!!」

「「「「「………」」」」」

「「「「「ふっっっっげんああああああああああ!!」」」」」

網田主任により知らされた、驚愕の事実。それを証明するように、一夏のマントの端つこに、生体兵器の吐いた液体がかかった。するとじゅうじゅう音を立てて、マントに穴が開いて行く。

「マジかああああああ!!」

「冗談ではないぞ!!」

——ビュビュビュビュビュビュビュビュウウツ!!——

「ひひひひひひひひひひ!!」

「く、くぞ、避けきれぎやああああああ!!?! かかったああああああああ

あ!!?!」

「やめてええええええ!!! もうやめてええええええ!!!」

再び大パニックに陥る少女たち。その服に、少しずつ液体がかかって行く。ドレスの長いスカートに穴が開き、その下の肌があらわになっていった。

『ここは高貴な身分の者が集う舞踏会。余りにもあられもない格好になった者は、強制的に退場させられてしまいます』

「おのれ謀ったな、更識楯無いいいいい!!」

「許さん!! 許さんぞおおおお!!」

「馬鹿、集中しろ!! 来るぞっ!!」

——キキキイイイイイツ!!——

「うおおおおおお!!」

「きやああああ!!」

飛びかかって来る生体兵器たちを迎撃するが、その動きに今までのキレはない。いつ得体の知れない液体を吐きかけてくるか分かったものではなく、それを警戒しながらでは自然と腰が引けてしまう。だがそれでも、どうにか抑えられてはいたのだ。

——この段階では、まだ。

「うふふ、うふふふふふふふふ。まさかこれほどは。仕方ありませんねえ、第三段階に移行ですっ!!」

「まだ何かあんのかよおおおお!!」

網田主任が宣言すると同時、それは起こった。

カサカサと近付いて来た一匹が、突然——

——キイイイイイドパアアッ!!——

「!!!」爆発したあああああああああああつ!!?!?!?!  
生体兵器が内側から弾け、体内の酸を辺りにぶちまけた。雨のように降り注ぐそれをかわしきることはできず、接近戦をしていた箒と鈴がモロに浴びる。

「うひひひひひひひひひひ!!」

「いいいいいいいいいい!!」

じゅうじゅうと、少しずつドレスが溶けて行く。箒はその高校生らしからぬ豊かな胸がドレスから零れ出そうになり、鈴はスカートがワ○メちゃん並に短くなってしまった。

「おい、大丈夫」「見るなあああああ!!」「ぐぶおう!」

もういつそ強制退場されたい——一夏をぶっ飛ばした二人はそう思ったがしかし、この程度ではまだ「余りにもあられもない格好」とは言えないらしい。

一体どれほどになれば、強制退場させてもらえるのか。

「まさか全裸とかじゃないだろうな!!」

「ふざけんじやないわよ!! 冗談じゃないわよっ!!」

——キキキイイイイイッ!!——

「うひやあああああああっ!!!?」

露出が多くなり、箒と鈴は更に動きにキレがなくなってしまう。その二人を庇うように陣形を組み直すか——

——ドパンドパンドペアアンツ!!——

「多すぎるうううううううっ!!!」

「しかもなんか段々容赦がなくなってきたぞ!!」

「ひいひいひいひいひいっ!!」

「メエエエエエエエエエエエエツ!! 逃げ場が欲しいいいい  
よおおおおお!!」

状況は絶望的、ラウラすら涙目になりながら、必死に応戦している状態だった。どうにかなるという希望でかろうじて抑えられていた生体兵器への生理的嫌悪も、今はもう抑えられない。

——ビュウビュウビュウドパンドパビュウドペアアンツ!!——

「うわあああああああああっ!!!」

「ラウラ、危ないっ!!」

隙を突かれたラウラを庇い、一夏が頭から体液を被る。王冠には酸の効果が無いようだが、服はしっかりと溶けていった。

「い、一夏!?! 大丈夫か!?!」

「ああ……これ、本当に人間には効果が無いみたいだな」

「だが、服が……!?!」

上はもう、ほとんど生地が残っていないかった。鍛え上げられた肩や腕、見るからに力強い胸筋、六つに割れた腹筋、見事に盛り上がった背筋。

惜し気もなく披露されるギリシヤ彫刻顔負けの肉体美に、生体兵器への嫌悪も忘れて観客たちから歓声があがる。

「ええい、見るな見るなっ！ 私の嫁の裸体だぞ!!」  
「恥ずかしいこと言ってるじゃねえよっ!!」

だがそこはやはり男の子、少女たちほどの羞恥はなく、若干恥ずかしげにしながらもしつかりと鞆を構えている。

だがそれでも、生体兵器はあまりに数が多過ぎた。

「くそ、このままじゃ、みんな素っ裸にされちまうぞ!!」

「そういうことを大声で言うなっ!!」

「ほんつとにデリカシーないわねアンタはっ!!」

「げはあっ!!」

またも箒と鈴のツープラトンアタックを食らう一夏。ダメージに足がふらつき、生体兵器の接近を許してしまう。

「あ!!」

「しまった!」

「馬鹿が、加減をしろ!」

「一夏ああああ!!」

「一夏さんの裸ああああ!!」

「二「おいこらセシリアアアアアアアアアッ!!」三」

ドサクサに紛れてまたとんでもないことをシャウトしたセシリアにツツコミを入れる少女たち。そんな馬鹿をやっているうちに、ついに生体兵器が、一夏に――

――ボフウウウウウン!

「なっ!!」

「これは、煙幕!!」

「今度はなんだ!?!」

「ゲホ、ゲホ……! な、なん――」

「こっちです!」

「へ!?! だ、誰――!?!」

「急いでください!」

「わあ!?! ちよ、ちよっど!?!」

しばらくして、煙幕が晴れると。

そこに、一夏の姿はなかった。

「な、一夏! どこに行つた!」

「一夏!? どうしたの!」

「いち——」

——キキキイイイイツ!!——

「く……!! 今はコイツらをなんとかしなければ……!!」

「邪魔、すんなあああ!!」

一夏を探そうにも、生体兵器の群れはいまだに襲いかかつて来ている。先にそちらを片付けなければ、探すことなどとても無理だ。

故に、一刻も早く一夏を探すべく、少女たちは闘争心を燃え上がらせた。

「——ふむ、食い付いたようですねえ。……後は任せましたよ、織斑さん、楯無さん」

「危ないところでしたね」

「はあ、はあ……あ、ありがとうございます……」

煙幕の中で俺の腕を掴み、安全な場所——アリーナの更衣室に連れて来てくれたのは、今日名刺をくれた巻紙礼子さんだった。巻紙さんは相変わらず人当たりのいい笑顔を浮かべながら、全力疾走で乱れたスーツを直している。

「ええつと……助かりました、巻紙さん。けどどうしてこんなところに?」

「はい。実はこの機会に、織斑さんの白式をいただこうかと思いましたが」

……………え？

今、なんて——

「いいから、さっさとよこせて言っただよ、クソガキ」  
「!?」

突然、がらりと変わった声色。それと同時に練り出される蹴撃。相  
当な訓練を積んでいるのだろう、その蹴りはかなり鋭かったが、しか  
し俺は普段から、シンの鎌鼬みたいな蹴りを見ているのだ。どうか  
反応、回避し、距離を取ることができた。

「お？ なんだよ、案外やるじゃねえか」

「……お前、何者だ」

巻紙礼子と名乗った女は、さっきまでのモノとは似ても似つかない  
禍々しい笑みを浮かべていた。

この期に及んで、この女が本当にIS装備開発企業の渉外担当だと  
思えるほど、俺も間抜けじゃない。

コイツは——襲撃<sup>敵</sup>者だ。

「何者だ、か。いいぜ、名乗ってやるよ」

女は禍々しい笑みをそのままに、楽しそうに両腕を広げる。

その背中からスーツを破り、何かが飛び出した。

「私は、オータム」

それは、黄色と黒色に毒々しく彩られた、八本の装甲脚だった。

その全てが現れると同時にISを展開し、女の手足もまた、黄と黒  
の装甲に包まれる。

「亡国機業のエージェント——オータムだ」

どう考えても善人ではなく、正体を隠してIS学園に忍び込むとい  
う難行をやったのけたというのに、女はあっさりと自らの素性を明か  
した。

……いや。素性を明かしたと言うよりも、それはまるで「名乗りを  
あげた」かのようで。

そんな真似が似合うような人物には、とてもじゃないが見えないの  
に。

とにかくその女は、自らをオータムと称した。

——けれど、この時はまだ。  
俺は、その名も、その姿も、知らなかった。

## 第63話 夏の雪が白く輝き、赤く染まる

「ファントム・タスク亡国機業……？　なんだよそりやあ」

「ああ？　知らねえのかよ。しょうがねえな、次会うまでの宿題だ。ちゃんと調べておけよ？　……まあ、今日死ななかつたらただけどなあ！！」

白式を展開し、オータムと名乗った女を迎撃する。雪片式型を八双に構え、八本の装甲脚を大きく広げて突撃してくるオータム目掛けて振り下ろした。

「ぜえあつ！！」

「おつとお！！」

その一撃はひらりとかわされ、オータムは一足一刀の間合いの僅かに外で止まる。挑発的な笑みをますます深め、嘲りを隠そうともせずと言った。

「はっ、なんだよその太刀筋は。温過ぎるぜ」

「ちいつ……！」

「なんだ、今の動きは？　速いだけじゃない。正確なだけじゃない。ユラユラと、なんて言うか——」

「へえ、一回で気づいたか。腕はナマクラだが、眼は良いみてえだな。」

——ご明察、つてヤツだ。この「アラクネ」は、八本の装甲脚ごとに独立したPICを展開しているのさ」

「……なるほど、道理で」

「なんだか風に吹かれて落ちてくる木の葉みたいな、掴みどころのない動きだった。長距離移動では役に立たないだろうが、今みたいな限定空間ではかなりの脅威だ。」

「俺が必死になって身に付けてる最中の、PICのマニュアル制御。それを俺よりも遥かに高い練度のモノを、あくまでもオートで再現できるとだ。」

——それはつまり、他の操作の精度も落ちることがない、ということだ。それだけで、オータムのアドバンテージは相当なものになる。「手品のタネを、随分とまあペラペラ喋るんだな」



「なに、お前みたいな雑魚相手に、ハンデもなしじゃあつまらねえだろ？」

「そりゃどうも。それじゃあその礼に、油断すると痛い目見るってことを教えてやるよ！」

スラスターを噴かし、オータムに斬りかかる。オータムは機体の特性である複雑なPIC機能を駆使してその斬撃を避け、八本脚の先端、その中から出てきた銃を俺に向けた。

「そうら、食らいなあ!!」

ガガガガガガガツ!!

「ぐうっ!？」

八つの軌道で襲いかかる銃弾。斬撃を空振った隙に放たれたそれらの大半はなんとか避けたが、それでもかなりの数を受けてしまう。

「ちいつ、数撃ちや当たってるってか……!」

「はっ、そんな見当違いなこと言ってるようじゃあ、私には勝てねえなあ!!」

負け惜しみで言った言葉は、オータムを益々調子付かせるだけだった。

……分かってる。オータムの攻撃は、単に命中率が低いんじゃない。狭い空間内に弾丸を広く散らして逃げ場を塞ぎ、少しずつじわじわと、確実にダメージを与える戦術を取っているのだ。

本来なら、オータムにとって敵地であるここで選ぶには不適切な戦術だ。戦闘が長引くと、いつ誰が、俺の増援としてやってくるかわからないからだ。

だが俺は——俺の白式は、極端に燃費が悪い。こうして絶え間なく攻撃を受け続けていると常に雪花を消費し、エネルギーを消耗してしまうのだ。シールドエネルギーこそ無事だが、それも時間の問題だ。このままではあつと言う間にエネルギーが尽き、スラスターも雪花も使えなくなってしまう。

そうなれば、攻撃をかわすことも防ぐこともできなくなる。オータムも、わざわざ攻撃を散らすような面倒なことは止めて、集中放火を浴びせて来るだろう。そしてあの猛攻を直接受ければどうなるかな

ど、火を見るより明らかだ。

これは白式に対して、極めて有効な戦術。

つまり、コイツは。

白式の性能を、知り尽くしている——

「わかったか？ お前には端っから、勝ち目なんざねえんだよ！」

「この程度で、勝った気になってんじやねえ!!」

そうだ、白式の性能を知られているからと言って、それで負けが決まったわけじゃない。

思い出せ。ここ数週間、楯無さんから徹底的に叩き込まれたことを。

あの特訓は、まさにこんな場所でこそ、成果を發揮するはずだ——

「ついて来いよ、蜘蛛野郎——！」

回避も兼ねて一気に加速し、壁際で反転しつつ上昇、天井付近から急降下して、雪片式型を大上段から振り下ろす。

「でやああああ——！」

「ほお、アラクネの特性を知ったうえで機動戦を挑むとは良い度胸だ。……いいぜ、付き合っただけよ——！」

渾身の一撃をかわしたオータムは、銃撃をしつつ距離を取り——と思えば、すぐさま近づいて来て、両手に展開したカタールで斬りつけてくる。その斬撃に刃を合わせつつオータムの後ろへ駆け抜け、更衣室内をぐるりと大回りし、遠心力を載せて雪片式型を叩き込んだ。

「おおおおらああああっ!!」

「ははっ、いいねいいねえ！ 少しは楽しくなってきたぜ!!」

その斬撃をカタールで弾き上げ、同時に装甲脚を振り回すように叩きつけて来る。さらに踏み込むことで内側に逃げ、握り締めた左拳で顎を狙う。首を捻ってかわされ、そのまま回転し繰り出された蹴りの衝撃を退がって軽減しつつ、再び距離を取る。

「(……)の、やろおおおおおっ!!」

「ははははははっ！ どうしたどうしたあ!?! 逃げてんじやねえよ、クソガキイイイ!!」

壁際まで後退する俺と、追い掛けるオータム。狭い更衣室内を目まぐるしく移動し、雪片式型で斬りつけ装甲脚を突き出し拳で殴りつけカタールで雑払い、雪花で減殺しPICで避け瞬時加速で追い壁を蹴って飛び跳ねる。

そうして交錯するたびに——俺のダメージが、蓄積していった。

(くそっ、手数が違いすぎる……!!)

「かははは！ 大変だなあ、腕が二本しかねえとよお!!」

「ぐうぐうぐう……!!」

まずい、このままじゃ追い詰められる一方だ。なんとかしないと……!!

「はあっ！」

「おおっとお！」

ガギイツ!

「なっ……!!?」

横薙の一撃を受け止めた四本の装甲脚が、そのままガツチリと雪片式型を固定する。その器用かつ繊細な動きに反して、押さえ込む力は相当に強い。押ししても引いてもビクともしない。

「くそっ……!!」

「さあて、それじゃあ——幕引きといこうかあ！」

「……っ!!」

残った四本の装甲脚、そして両腕のカタール。その切っ先が俺に向けられ、突き出され——

「——あら。アンコールにも応えられないようじゃ、一人前の奏者とは言えないわよ」

——突如横から割り込んだ突撃槍ランスに、弾き飛ばされた。

「よし」

ガギャン！

「なにっ!？」

続けて振るわれた一撃が、雪片式型を拘束していた装甲脚を弾く。解放された隙に距離を取り、突然の乱入者に視線を向けた。

「た……楯無さん!？」

そこにいたのは、IS学園生徒会長にして俺の今の同居人兼コーチ、更識楯無だった。楯無さんはISを部分展開した腕にランスを持ち、もう片方の手をヒラヒラと振っていた。

「やつほー、一夏君。楽しそうなことしてるじゃない、おねーさんも混ぜてよ」

そんな楯無さんの姿を見て、オータムが身構える。全身を程よく緊張させ、程よく弛緩させる、あらゆる事態に即応できる構えだった。

「てめえ……何者だ」

先ほどまでの戦闘を楽しんでいた様子はどこへやら。オータムは一切の油断なく、楯無さんを睨み付けている。

「私? ……私は、更識楯無。IS学園生徒会長。ここの生徒たちの長。故に——そのように、振る舞うのよ」

歌い上げるようにそう言って、楯無さんはISを展開する。

狭く小さい装甲。

その不足を補うように、全身を包み込む水のヴェール。

左右一対に浮かぶ、青く輝く結晶——アクア・クリスタルからも水が流れ、マントのように広がっている。

ロシア代表、IS学園最強、更識楯無の専用機——霧纏ミステリアス・レイディの淑女。

「……ここは完全にロックしてたはずだ。どうやって入って来やがった」

「このセキュリティを掌握するだなんて、なかなかだけど——残念だったわね。私の友達に、その手のことにももの凄く強い人がいるのよ」

「はっ、そうかよ。随分ひどい友達もいたもんだな——てめえを死地に送り込むなんてなあ!」

オータムは八本の装甲脚を広げ、楯無さんに襲いかかる。楯無さん

は微笑みすら浮かべながら、手にしていたランスを構えた。

「オラア！」

「ほっ、よっ」

繰り出される猛攻を、大振りのランスで捌く。こんな狭い更衣室内では普通に振るだけでも苦勞しそうなほどに大きなランスを、まるでレイピアのように軽快に扱っている。その技量は、俺なんかじゃ足元にも及ばない。

「ちいつ、やるじゃねえかよ、ガキのクセに……！」

「当たり前でしょう。このIS学園において、生徒会長とは学園最強の称号なんだもの」

「へえそうかい！ ならてめえをぶち殺せば、私が学園最強かあ！」

オータムは顔に狂笑を浮かべ、さらに攻撃の激しさを増した。装甲脚は格闘モードと射撃モードを何度も切り替えながら銃撃と斬撃を繰り出し、僅かな隙を両手に持ったカタールで埋める。

楯無さんはランスに纏わせた水をドリルのように流動させ、オータムの格闘攻撃を弾く。放たれる弾丸は全身を包む水が柔らかく受け止め、一発たりとも装甲まで届かない。そしてランスによる刺突や薙払いと同時に、ランスに内蔵された四連装ガトリングガンが火を吹き、容赦のない銃弾の追撃を加えていた。

「す、すげえ……！」

目の前で繰り広げられる、ハイレベルな戦い。格の違いをまざまざと見せ付けられ、俺は――

「う……お、おおおおっ!!」

――なにをぼやつとしてる。こんな戦い、見てるだけだなんてとんでもない無駄だ。

強くなると決めた。誰よりも、強くなると。

なら、飛び込め。刃が、銃弾が舞い踊る、戦場へ。

俺には、立ち止まってる暇なんぞ、ないだろうが――！

「楯無さん、挟み撃ちだー！」

「OK、一夏君！ 存分に戦いなさい、おねーさんがリードしてあげるからー！」

「上等だ！ 二人まとめ、ぶっ潰してやるよっ!!」

雪片式型が形を変え、光り輝く刃が形成される。白式のワンオフ・アヒリテイ単一仕様能力、零落白夜の発動だ。

楯無さんが来てくれた以上、エネルギーを温存する意味は薄い。むしろこの勢いに乗って流れを掴み、一気に決めるべきだ。

なにせ今は、オータムを挟んで反対の位置に楯無さんがいる。この好機を逃す手はない。

「ぜえらあー！」

「はあっ！」

「オオオオラアアアッ!!」

俺の零落白夜をカタールで弾き、楯無さんのランスを装甲脚で防ぐ。その意識の大部分は楯無さんに向いていて、俺はほとんど片手間で相手をされていた。

……上等だ。なら、俺を無視できなくしてやるよ——！

「でええりやあああ!!」

「ははははははっ！ 足りねえ足りねえ、足りねえなあ！ そんなんじゃないよっ!!」

「うおおおおっ!!」

渾身の力を込めて斬りかかるが、するりと避けられ、あるいは容易く弾かれる。そして俺の攻撃の悉くを防ぎながら、楯無さんにもしっかりと対応していた。

(さっきから思ってたが、コイツ……！)

オータムの防御技術は、なんというか……バランス。そうだ、バランスが悪い。俺はともかく、楯無さんのランスまで完全に防いでいる。だというのに、ガトリングガンはたまにとは言え当たっているのだ。

それは、つまり。

(接近戦……いや。格闘戦に、異常なほど慣れている……!?)

剣、槍、拳、脚。そういった肉弾攻撃への対応力が、飛び抜けて優れている。

逆ならまだ、それほどおかしなことじゃない。ISにおいても、戦

闘で主に使われるのは遠距離武器だからだ。俺のように近接ブレードしかないなんてのは例外中の例外であり、近距離戦闘が得意なシヤルだつて、つかず離れずの距離から銃撃を叩き込むというのが主戦術なのだ。最大攻撃力を持つパイルバンカー、灰色の鱗殻グレイスケールもあくまで切り札であり、間違つてもそれをメインに据えての格闘戦なんてしない。

だから、銃撃戦には慣れていないが格闘戦には慣れていない、ということはあるもんじゃない。元々剣道をやってた俺や箒ですら、今では対射撃と対格闘の練度にそう大差はないくらいなのだから。

ましてやこの女は、どう見ても実戦経験が豊富だ。専用機だつて大量の銃火器を装備してる。そんな奴が対格闘に特化しているなんて、有り得るのか——？

「おいおいどうしたあ?! 手が止まつてるぜ、クソガキイ!」  
「ぐあつ!」

考え込んでしまった隙を見抜かれ、カタールの一撃をモロに受ける。オータムはすぐに追撃をかけようとしたが、楯無さんが割つて入りそれを阻止した。

「一夏君、平気?」

「はい、なんとか。……すいません、楯無さん」

——これで、挟み撃ちの陣形が崩れた。これから先は、今までよりもさらに厳しくなる。

「うくん、思ったよりもやるわねえ」

「へっ、二対一でこの程度かよ。大したことねえな、学園最強つても」

「この野郎……!」

俺たちを馬鹿にしたその言葉に、自分でも意外なくらいに腹が立つた。

楯無さんは強い。俺なんかを庇いながらじゃなけりゃ、もっと上手く戦えるんだ。

——畜生。俺はまだ、弱いままかよ……!

「あー、結構疲れたわね。汗かいちちゃったわ」

「そんなこと言ってる場合ですかっ」

「だってー、しょうがないじゃない。——この部屋、なんだか暑いし」  
「——あ?」

突然ボヤキ始めた楯無さんの言葉に、オータムが不審そうに眉をひそめる。

俺にとつては、その反応こそ不審だったが——

「ねえ、知ってる? 体感温度と実際の温度、その差が何によつて変わるか」

「……何を」

そのまま言葉を続ける楯無さんに、さすがに俺も不審に思った。

……さっきのは、ただボヤいたわけじゃ、なかった——?

「不快指数、て言つてね。それは湿度に依存するの。」

……ねえ。この部屋、なんだか——湿度が高くない?」

「……まさか」

「そう、そのまさかよ」

言つた瞬間、オータムの周りに霧が漂う。全身に纏わりつくように、異様なほどに、濃い霧が。

「私の専用機、ミステリアス・レイデイの能力は、水を操ること。エネルギーを伝達する、無数のナノマシンによつて」

「てめえ——!?!」

ようやく楯無さんの意図を察して、オータムから距離を取る。オータムも慌ててその場から離れようとしたが、楯無さんはランスを突き出すことで牽制し、いとも容易くその動きを遅らせた。

「残念でした。あなたはとつくに、畏にかかっていたのよ」  
「ばちん。」

楯無さんが指を鳴らすと、オータムに纏わりついている霧、それを操っているナノマシンに、一気にエネルギーが送り込まれる。そのエネルギーを熱に転換したナノマシンが、一斉に。

——爆発した。

「ガアアアアッ!!」



それは例えるのなら、ガス爆発を数十倍強烈にしたものだろう。その爆風を、楯無さんは水の壁を発生させて受け止めた。

……いや、それは、受け止めたんじゃない。爆風の逃げ場を塞ぐことで、威力をさらに増幅させたのだ。爆風は狭い更衣室の中を荒れ狂い、全方位からオータムに襲いかかる。空気が膨張と圧縮を繰り返して、アラクネの装甲を噛み砕いた。

「クリア・バッション清き熱情」。こんな狭い場所では、あまり効果はないけれど——お喋りしながらでも準備できるのは、素敵でしょ？」

天使のような微笑みを浮かべながら、優しい声で語られたその言葉に、俺は戦慄した。

こんな強力な攻撃を、あんなに激しい戦闘と同時進行で準備できる。そして準備が終われば、発動するのは一瞬だ。

戦闘中に湿度なんか気にするヤツはそうそういないだろうし、ナノマシンも攻撃や防御にあれだけ派手に使っていれば、周囲に大量に漂っていても不思議じゃない。

こういう限定空間でしか効果は薄いと言ったが、逆に言えば、限定空間でなら防御も回避も不可能に近い、ということだ。

——なんて、狡猾な罠。全てこの人の、手の平の上だったってのか。

「さて、タネ明かしも済んだことだし、たつちゃんのマジックショーはこれでおしまいだけど——ファントム・タスクまだやる？ 亡国機業のオータムさん」

「まだやる？ ファントム・タスク亡国機業のオータムさん」

苦戦していると思っていたが、蓋を開けてみれば圧勝だった。あの戦闘は、クリア・バッションの準備だけでなく、俺に実戦経験を積ませるためのものだったのだろう。

……すごい余裕だ。こんな時まで、俺のコーチをしてくれるなんて。

「ぐうぐうう……!!」

爆発のダメージが体にまで届いたのだろう、オータムは片膝をつ

き、苦しそうに呻いている。まだ戦う余力くらいは残っているだろうが、それでも楯無さんには勝てないだろう。

「今のは効いたぜ、クソガキイイイ……!」

勝負はついた。だがオータムは、怒りと憎しみが滲む声を発しながら、ゆっくりと立ち上がる。

「舐めた真似してくれるじゃねえか、ええ、おい。可愛い顔して、えげつねえガキだぜ……!」

「あらやだ、可愛いだなんて。そんな手放しに褒めても、手加減してあげないわよ」

「……うわあ……」

自分に都合の良いところだけ抜き出しやがった。やっぱりおっかない人だ。そんなこと言いながらもすっかりガトリングガンの狙いをつけてるところとか特に。

「ぐう……く、ククク。かはははははっ!!」

「……?」

追い詰められたオータムが、急に笑い出した。ヤケになった——てわけじゃあなさそうだ。それよりも、もつと嫌な感じがした。

「……何かおかしいことでもあった?」

「おかしいことだあ? 何もかもが、だ! ったく、馬鹿みたいだぜ!

この程度で、勝った気になるなんてなあっ!!」

オータムは八本の装甲脚を大きく広げ、カタールを構えた。満身創痍でありながら、その眼に宿る戦意は微塵も衰えていない。

「……そう。降参するくらいなら、最後まで戦う、てわけね。立派な覚悟。なら、私も——戦って、倒してあげる」

その姿に応え、楯無さんもランスを構える。回転する鋭い矛先をオータムに向け、真っ直ぐに突き出し——

「——え?」

——届く直前に、停止した。

楯無さんが、自分で止めたんじゃない。それは呆然とした声からも明らかだ。

なら、何故——

「く、か、はははははっ。教えてやるよ、生徒会長さん。「蜘蛛」ってのはな——」

目を凝らして見ると。

楯無さんの、そして俺の全身に。何か細い、糸のようなモノが。

「自然界じゃあ、並ぶ者のいない——「罨師」なんだぜ」

絡み付いて——雁字搦めにしていた。

「く、これは……!」

「見ての通りだよ。蜘蛛の糸ってのは恐ろしく丈夫でな、しかも細くて見え難い。さらに言えば粘着性も強く、一度くつつけばそう簡単に離れない。気付いた頃には、全身に絡み付いて——ご覧の有り様つてわけだ! はははははっ!!」

……なんてこった。楯無さんだけじゃない、オータムもまた、戦いながら、罨を張っていた。

——文字通りに、張り巡らせていた。

「コイツは少し、お前の技に似てるかもなあ。エネルギーがなきや機能しない特別製だ。だからこそ——バレないように仕掛けられるし、任意のタイミングで発動できる」

「くっ、この……!」

「聞いてなかったか? 蜘蛛の糸は丈夫なんだよ。力づくじゃあ逃げられねえ。てめえのとっておきも、準備には時間がかかるしなあ!」  
手の平の上で踊らされていたのは、オータムじゃあない。……俺たちだ。

「くく、コイツを使うつもりはなかったんだがな。まあ、保険をかけといて正解だった、てわけだ」

縦横無尽に飛び回っていたのは、俺たちの挟撃から逃れるためではなかった。

楯無さんのクリア・パッションを受けたのは、気付いていなかったからではなかった。

全部計算ずくで。

より確実な勝利のための、策略だった。

「……意外ね。そんなふうには頭を使うようなキャラには見えないけれど」

「もう一つ教えてやるよ。蜘蛛は擬態の名人でもあるのさ」

「……なるほど」

エージェント、というのは伊達ではないらしい。言動からは想像できないほど頭がまわり、堅実なようだ。

……くそ、どうにかしないと。このままじゃ、二人ともやられる。だがどんなにもがいても、糸はまるで切れる様子がない。楯無さんも焦っているのか、表情こそ余裕を見せているものの、頬を伝う汗は隠し切れていない。

……何か。何か、手は——

「……ち。だが、思ったより食らっちゃったな。まだアイツが残ってるのによ」

「……アイツ?」

……なんだろう。今、何か。

背筋が、ゾワリと——

「いや、考えようによっちゃあ丁度良いか? フラッドが勝てるとは思えねえが、アイツも無傷じゃ済まねえだろうしな。条件は対等<sup>イーブン</sup>ってわけだ」

「……おい。誰のことを、言ってるんだよ」

ひどく気になって、思わず訊いた。

するとオータムはキョトンとして、逆に俺に訊いて来た。

「ああ? 誰って、そりゃあ——井上真改に、決まってるだろうが」

——ドクン。

「……なんで、お前が。シンのことを、知ってるんだ」

もう一度訊くと、オータムは得心がいったように頷いた。

「……ああ。そういやてめえは——あの時、無様に気絶してやがった

な」

——ドクン。

「……どういう、ことだ」

「あくあ、ったく。てめえからすりゃあ、私は初対面だったわけだ。うっかりしてたぜ」

「どういうことだって、訊いてるんだ」

悪寒が加速していく。

全身を拘束されているのに、震えが止まらない。

なのに、声からは。

どうしてか、色が失われていた。

「どうもこうも、第二回モンド・グロツソ決勝戦の日にてめえを攫ったのは——私たちだぜ」

——ドクン。

「なん……だっ……て?」

——ドクン。

「ついでに言えば、私もその時、そこに居たぜ。アイツがてめえを助けに来たから、私が——」

——ドクン。

「アイツと、殺りあって——」

——ドクン。

「左腕を——」

——ドクン。

ドクン。ドクン。

ドグン——

「——もいでやったのさ」

——ブヂリ。

「——お前が」

.....る。

「お前が、シンを」

.....やる。

「シンの、腕を」

.....てやる。

「お前は」

オマエヲ

「お前が——」

——コロシテヤル。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おつつつ——!!!」

——雪火<sup>せつか</sup>、発動します——

心の奥底から熱くドロドロとした何もかもを呑み込んで焼き尽くすマグマのようなけれどどす黒い感情が噴き出して来てそれとは真逆の白く眩い光が俺の周囲を照らし拘束する糸の悉くを消滅させた。

「なあ——!?!」

同時に零落白夜を発動させ雪片式型の柄をギシギシと手の骨が碎けるほどの力で握り締めて振り上げると勢い余って背骨がミシリと鳴ったがそんなことは気にせず渾身の力と瞬時加速の推力を載せて。

「があああああああああああああああああああああ  
あつつつ——!!!」

頭を目掛けて、真っ直ぐに振り下ろした。

「ちいっ!」

オータムは八本の装甲脚全てを頭上に構えて防ごうとしたが、そんなものは紙切れのように、全部纏めて斬り落とした。

その衝撃に体勢を崩したところを蹴り倒し、そのまま瞬時加速で踏みつける。

「いっ……!?!」

オータムの口から血が吐き出されたが、今は視界が隅から隅まで真っ赤に染まっていて、水と見分けが付かない。

「ただど血を吐くってことは、まだ生きてるってことだよな。」

——ナラ、コロサナイト。

「て……め——!?!」

だから俺は。

雪片式型を、逆手に持ち替え。





## 第64話 雪解け水

### 第64話 雪解け水

「フウツ、フウツ……フウツ……!!」

手にした刀を振り下ろし、突き立てた姿勢のまま、一夏は獣のように息を荒げる。

その眼は血走り、顔には幾筋もの血管が浮かび上がり、過剰に緊張した筋肉が、全身を震わせていた。

その下で――

「……………めえ」

――顔の横、刀身が肌に触れるほどすぐ近くに刀を突き立てられたオータムが、一夏を憎々しげに見上げていた。

「なんで……………外しやがった」

「フウツ……フウツ……が、ハアツ……ハアツ、ハアツ！」

一夏の左手は、咄嗟に持ち替えたのか、刀身を握り締めていた。どれほどの力が込められているのか、刃が装甲を切り裂き肉に食い込み、零落白夜の輝きを失っていく雪片式型を、赤く染め上げていった。あまりにも強く歯を食いしばったためか、歯茎からも血が流れ顎を伝い、真下にあるオータムの顔に滴り落ちている。

「なんで……………外したのか、て……………訊いてんだよ……………」

「ぐ、うつ、フウウウウ……………!!」

異常に高まった体内の熱を排出するように、深く、深く息を吐く。その際、僅かに弛んだ顎が痙攣し、ぶつかり合う歯がガチガチと音を鳴らした。

「てめえの殺意は本物だった。今だってそうだ。

……………殺すんだろうが、私を。殺したいんだろうが、その手で。

……………なのに、なんで外した」

「……………殺さねえよ」

「……………ああっ!?!」

声は震えていたが、ようやく、一夏はまともな言葉を発した。だがその内容に、オータムの顔が怒りに歪む。

「殺さねえだど？ てめえ、舐めてんのか？ それとも情けでもかけたつもりか？」

「……ぎっけんじゃねえぞ、クソガキがあつ!!」

まるで鉄杭を打たれ固定されているかのように、オータムの胸は一夏に踏みつけられている。その際に肋骨が数本折れ、内臓にまでダメージを受けて、さらには衝撃に全身が痺れ、動くこともままならない。

だがそれでも、オータムは全力でもがき、一夏をはね除けようとした。

「殺せよ、今しかねえぞ！ こんなまぐれは二度とねえ、次やれば必ずてめえが負ける！ その時私は容赦なく殺すつ!!」なのに、なんでてめえは殺さねえ!! それじゃあ……それじゃあ、対等じゃねえだろうが——!」

怒りに任せてもがき続けるも、オータムを押さえつける脚は動かない。

そしてオータムの言葉も、一夏の意志を動かすことは、出来なかった。

「本音を言えば、殺してやりてえよ。今もちよつと気を抜けば、このまま首を斬り落としそうなほどに殺したがってる。

……けど、絶対に、殺さない」

「なんだと……!?!」

「だって——殺したら、終わりだ」

「……ああつ?」

捉えようによつては、恐ろしく残酷な言葉。だがその真意が、生かさず殺さず痛めつけるといふようなものではないことは、オータムにもすぐに分かった。

なら、その意味は。

「……罪、ていうのはさ。過去の出来事……やってしまったこと。過去を変えることなんかできない。だからどんなに罰を受けても、どん

なに償つても、罪が消えることなんて、有り得ない。

罪は……ただ、赦されるだけだ」

「……だから、なんだってんだ」

罪が消えてなくならないから、なんだと言うのか。殺人という罪は自分には重過ぎるなどと、腑抜けたことでも言うつもりか。

それは、間違いではなかった。間違いではなかったが——正確でもなかった。

「けどぎ。殺してしまつたら、絶対に赦されない。罪の大きさ、重さの問題じゃない。死んでしまつた人間には、何もできないんだよ。

——自分を殺した人間を、赦すことも」

「……………」

「お前は、シンの腕を奪つた。もう二度と、元には戻らない。だけど、きつと——シンは、お前のことを恨んじやいない。アイツは、そういうヤツだから」

「……だろうな」

その言葉には、オータムも納得した。七月の下旬に如月重工本社ビルを襲撃し、そこで真改と再び対峙した時、その剣は曇っていたが——それは決して、自分の腕を引きちぎつた、オータムに対する憎悪ゆえではなかった。

「俺は、お前を赦さない。千回切り刻んだつてまるで足りない。けど俺がお前を裁くなんて、お門違いもいいところだ。……シンの腕は、俺かお前、どつちかがいなければりや今も無事なままで、つまり責任の半分は、俺にあるんだから」

「……はっ。二人なんだから2で割ればいいってか？ 馬鹿だろてめえ、割り算覚えてたての小学生だって、そんな考え方しねえぞ」

「……うるせえ」

「ふん。じゃあなんだ、てめえは自分には私を殺す資格がねえから殺さねえ、てことか」

「それだけじゃない。聞いてなかったのかよ。お前を殺せば、俺は絶対に赦されなくなる。今までずっと、千冬姉やシン、他にもいろんな人が、ずっと俺を、守っていてくれたのに。」

……俺が折れないように、曲がらないように、捻れないように、歪まないように。ずっと、ずっと……守っていて、くれたのに。

それを裏切るなんて、それこそ——絶対に、赦されない」

「……呆れたもんだな。てめえは自分以外の誰かのために、てめえ自身の感情を押し殺すつてのか」

「そうじゃない。あくまで、俺自身のためだ。」

……決めたんだ、三年前に。これ以上、シンの重荷にならないように、俺の我が儘くらいは呑み込もうって」

そう言った一夏から、殺意が引いていく。震えも収まり、過剰に込められていた全身の力も抜け、突き立てた雪片式型に縋るようにして、どうにか立っている状態だった。

そして、その眼は——

「もう一度言うぞ、フアントム・タスク亡国機業のオータム。俺は、お前を殺したい。だけどそれ以上に、俺はみんなを裏切りたくない。」

……お前の命なんかより——みんなが守ってくれた、俺の人生のほうに、俺には大事なんだ」

誰かのためではなく。

それが、自分の願いだから。自分が、望むことだから。

自分のために。自分の在り方を、誇るために。

その眼は、どこか——

「……なるほど。似てるよ、てめえは」

「……は……?」

「ふん。それで、どうすんだ。私を学園にでも引き渡すか?」

「……そうだな。後のことは、千冬姉たちに任せる。……けど、その前に」

「っ!?!」

一夏は、突き立てた雪片式型を引き抜いた。

刃が突き刺さった床を、横に切って。

——倒れた際に広がった、オータムの髪ごと、横に切って。

「……てめえ」

「髪は女の命なんだろう? ……これぐらいは俺自身の手でやっておか

なきや、気が済まねえ」

「……クソガキが、気障つたらしいこと言つてんじやねえ」

肩から下を切られた自分の髪に、一度だけ名残惜しそうな視線を送り、それだけでオータムは、その喪失を受け入れた。

——負けたのは自分だ。ならばこれくらいで、文句を言うわけにはいかない。

「……一夏君」

「楯無さん。……すみません、勝手に暴走して」

「謝るのは私のほうよ。格好つけて登場して、色々偉そうなこと言つたのに、結果はこんな様だしね」

いまだにアラクネの糸に動きを封じられたまま、楯無が声をかけた。一夏が剣を振り下ろす直前にも叫ぶように名前を呼んだが、一夏には届かなかつた。その後は声をかけるような雰囲気ではなかつたのだ。

「もうちよつと、そのまま抑えつけといてね。この糸を焼き切れるくらいにナノマシンが——」

「……馬鹿が。遅えよ」

「っ!?!」

一夏の意識が楯無に向いた隙に、オータムはショットガンを展開した。それを一夏に向けて、散弾を発射する。

「ぐっ……!?!」

「一夏君っ!」

衝撃に、オータムを踏みつけていた脚が僅かに浮く。その一瞬を逃さず飛び起きたオータムは、更衣室の壁に指向性の爆薬を仕掛けて爆破し、開いた大穴から一步、外に出る。

「間抜けが——つて、言つてやりたいところだがな。今回はまあ、私も同じミスしてるしな」

「てめえ、逃がすかつ!」

「織斑一夏」

「っ!?!」

オータムを追おうとした一夏に、オータムが声を投げる。その声の

真摯さに、一夏は思わず、動きを止めた。

「アイツに……井上真改に、伝えておけ。」

——お前の人を見る目に、間違いはなかった、てな」

「おい、待——!?!」

言うだけ言つて、オータムは飛び出した。

大量のグレネードを、置き土産に。

「ぐっ……………」

咄嗟に後退し爆風から逃れるが、黒煙が晴れた時には、既にオータムの姿はなかった。慌てて穴から出て周囲を見渡すも、ステルスモードに入ったのか、見つけることは出来なかった。

——逃げられた。

「……………」

悪態をついて、更衣室に戻る。そこには楯無が、彼女らしくない申し訳なさそうな顔で佇んでいた。

「…………ごめんなさい。私、足手まといだったわ」

「いえ。楯無さんがいなかったら、あそこまで追い詰めることもできませんでしたよ」

「…………そう。…………大丈夫?」

「ええ。エネルギーは空っぽですけど」

「…………そうじゃ、なくって」

「……………」

楯無の問いの意味は、一夏にも分かっている。

だが、答えることは出来なかった。零落白夜を掴んだせいかシールドエネルギーの尽きた白式が解除されて行く中、ただぼうつと、オータムが逃げた穴を眺めている。

「よいしょ、と。ふう、ようやく抜け出せたわ」

威力を絞ったクリア・パッションでアラクネの糸を焼き切り、解放された楯無が更衣室を見渡す。

更衣室は戦闘により破壊し尽くされており、その激しさを物語っていた。

「…………危なかったわね」

「ええ。力不足を痛感しました」

「……そうね」

だがそんな更衣室の惨状よりも、一夏の様子のほうがずっと気になっていた。

——あまりにも、静か過ぎる。落ち着き過ぎている。

その姿が、妙に不安を掻き立てて。

楯無は、何を言うべきかも定まらないまま、声を掛けようとした。

「……いち——」

「一夏っ……!」

その時、ロックが解除された扉を開けて、真改が入って来た。

ここで何が行われていたのか概ね察しているのだろう、その顔は切羽詰まっついていて、肩で息をしている。

「……シン」

「無事か……!?!」

「……ああ」

真改は一夏に駆け寄り、体の傷を確認する。外傷の診断と応急措置の技術は外科医顔負けの真改は、一夏の傷が後遺症の残るものではないと判断し、ひとまず安堵する。

だが体の傷以上に心配なのは、心の傷だ。

更衣室内を見渡した限りは、オータムの姿はない。ならば少なくとも、殺してはいない。

楯無が止めたのか？ 一夏を心配そうに見る楯無の姿に、真改はそう思いかけて。

「……いち「シン」……?」

細かいことを訊ねようとして、出来なかった。

突然、一夏に抱きすくめられたからだだった。

「……一夏……?」

「……ごめん、シン」

「……?」

ぎゅう、と力を込められて、罅の入った肋骨が痛む。だがそれは、真改にとっては大した痛みではなく、顔を歪めることはしなかった。

「ごめんな……シン」

「……？」

「逃がしちまった。アイツを」

「……………」

やはり、殺してはいない。それを確信したことで、ようやく真改の表情が緩む。

その顔は一夏には見えなかったし、その気配を感じることも出来なかった。

だから——ただ、ただ、謝った。

「ごめん、シン。ずっと俺のこと、守ってくれてたのに。俺のこと、何度も止めてくれたのに。」

……それでも、アイツは、どうしても許せなかったんだ」

「……………」

「……真改ちゃん」

「……？」

何度も「ごめん」と繰り返す一夏に、どうしていいか分からなくて。言われるがままに受け止めていた真改に、楯無が声をかけた。

「一夏君がその調子じゃあ、勘違いしちゃうから。これだけは言うておくわ。」

——私は、何もしていない。一夏君が、自分の意志で、剣を逸らしたのよ」

「……………」

その言葉に、真改は驚き。

そして、言いようのない喜びを感じた。

剣を逸らした、ということとは、振り下ろしたのだろう。あと一步で殺してしまうところまで、行ったのだろう。それだけでも、一夏にとっては、謝らずにはいられないことなのだろう。

だが、それでも。

——一夏は、踏みとどまったのだ。

「……一夏……」

「っ！」



声色の変わった真改に、一夏がびくりと身を竦ませる。まるで悪いことをして、これから親に叱られる幼子のようなその反応に、真改は優しい微笑みを浮かべて、続けた。

「……よく、我慢した……」

「……我慢なんか、できてない。お、俺……俺は、もう少しで……！」

——みんなを、裏切るところだった。

言葉にならなかったその想いも、真改には伝わった。だから真改は、右腕を持ち上げて一夏の背に回し、そっと、抱擁を返した。

「……ありがとう……」

——己の誓いを、守ってくれて。

言葉にしなかったその想いも、一夏には伝わった。だから一夏は、抱き締める力をさらに強くし、声を押し殺して、涙を流した。

「……っ、……ぐ、ううう……！」

「……………」

また我を忘れてしまったことが、情けなくて。

オータムを逃がしてしまったことが、悔しくて。

だけど——一番大切なことだけは、どうにか守れたことが、嬉しくて。

一夏は、泣いた。感情を抑えることが出来ずに、泣き続けた。

それでも意地からか、必死になって、声をかみ殺した。

そんな一夏をあやすように、真改の手が、優しく背中を撫でていた。

「ちっ、任務失敗か……二連続だしなあ、もう後がねえな……」

IS学園を脱出したオータムは、とある公園に来ていた。普段からまったくと言っていいほど人気のない、寂れに寂れたその公園は、今回の作戦における亡国機業の集合場所であった。

「しかも、結局アイツとはやれなかったしな……あゝあ、最悪だぜ」

到着した時、オータム以外は誰も来ていなかった。不満の残る任務であっただけに、思わず愚痴をこぼす。

そうして待つこと、一分。

「あれれえ〜？ オータムさん、早いですねえ。そんなにあっさり負けちゃったんですかあ？」

「てめえ……私が負けること前提かよ。……まあ負けたけどよ」

「あつはあ♪ だつてえ、オータムさん、弱つちいですしい♪」

「なに言つてやがる、てめえも負けたんだらうがよ」

「ワタシは負けてませくん。逃げて来たんですう〜」

「同じことだらうがっ」

遅れてやってきたフラッドと合流し、撤退の準備をする。メンバーはもう一人いるのだが、それは増援要員であり、撤退出来るのならいなくとも問題はない。

あるとしたら――

「逃がすと思うか？ 亡国機業」

「あなた方には、ここで捕まっていたいただきます。……理由はわかりですわね？」

――撤退に、失敗した場合。

「ま、そういうことよ。どうせ覚悟して来てるんでしょ？ 話しても仕方がないわ」

「所詮は盗っ人だ。礼儀のれの字も知らんのだらう」

「……てめえら」

「あつはあ♪ 囲まれちゃってますねえ！」

気付けば、人影が五つ。箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラが自らの専用機を展開し、その武器をオータムとフラッドに向けて構えていた。

「……はっ。クソガキどもが、偉そうに。囲んでボコるのが、てめらの言う礼儀かよ」

「必要ないよ、あなたたちには」

五対二。そして、完全に包围されている。万全であるならまだしも、オータムは装甲脚を全て、フラッドに至ってはスラストー以外の全ての装甲を失っている。

とてもではないが、もう一戦交えられるような状態ではなかった。

「……ち、どうするか。まだ捕まるわけにはいかねえぞ」

「……ああく！ ワタシ、イイコト思い付きましたあ！」

「……へえ、どんな」

「オータムさんを囮にしてえ、その間に逃げればいいんですよ!!」

「配役逆なら完璧な作戦だなっ！」

「……なんだか、ものすごく余裕がありそうですね……」

「……強がりだろう、そうに決まっている」

いきなり漫才を始めた二人に、どことなく不安になる五人。

——ただの馬鹿ならいいが、とんでもない大物である可能性も捨て切れない。

「さて、マジでどうすつか……」

「大人しくしていればいい、悪いようにはせん。精々、痛覚を持って生まれてきたことを後悔するくらいだ」

「……お優しいこって」

「わあ、オータムさん、ゴーモンですってえ！ ワタシやってみたいなあ、オータムさんでえ！ きやははははははは!!」

「私はてめえを処刑してみてえよっ！」

「……ねえ、こいつら馬鹿なの？ 馬鹿なんじゃないの？ またはアホなの？」

「鈴、そういうことは思ってもいいけど、言っちゃダメだよ」

「思うのはいいのか……」

油断こそしていないが、どうにも気合が入らない。これが策略だとしたら、相当な策士だ——と警戒する者は誰もいなかった。

しかしどうも、投降する気はないようだ。ならば、力づくで捕らえるしかない。

そう判断し、気を引き締めて——

「っ!? ISが一機接近！」

「増援か!？」

「くそ、遅えんだよ……!」

突然の敵襲に身構える五人。凄まじい速度で近付いて来る敵影を

捉え、迎撃体勢を整える。

——その五人を、閃光が貫いた。

「ぐっ!？」

「狙撃……!？」

「この速さで飛びながら、なんて精度ですの……!？」

スナイパーであるセシリアが、その実力に戦慄する。

高速移動中の、長距離精密狙撃。それだけでも十分に驚嘆に値するが、それ以上に——

「五発同時……まさか!？」

接近する敵の姿、その詳細を、ブルー・ティアーズが解析する。

——否。そんなことをするまでもなく、セシリアはその機体を知っていた。

「サイレント・ゼフィルス……!! そんな、試験中のBT二号機がなぜ!？」

セシリアの専用機、ブルー・ティアーズ。その稼働データを基に、一段階上の試験装備、シールド・ビットを搭載した、イギリスの最新型IS。

それをなぜ、テロリストが持っている——？

「慌てるな！ 数の理はこちらにある、落ち着いて対処しろ！」

「くっ……!？」

セシリアも四機のビットを飛ばし、手にしたライフルからもレーザーを放つ。その全てをシールド・ビットで防ぎ、あるいはかわされ、反撃にサイレント・ゼフィルスのビットがレーザーを放った。

——その数、六機。

「なっ……!？」

その六機から放たれた閃光は、一度の一斉射撃で、ブルー・ティアーズのレーザー・ビットを全て撃ち抜いた。それだけではなく、まだスカーブ状のアーチャーに取り付けたままだった、二機のミサイル・ビットまでも貫いた。

——一度は狙いを逸れたレーザーが弧を描き、背後から襲いかかって。

（偏光制御射撃!? そんな、あり得ませんわ! だって、それは——）  
それは、机上の空論の筈だった。

なぜならそれは、BT兵器の高稼働時に可能であるとされているもので。

BT適性最高値を誇るセシリアにも、出来ないことなのだから。

「セシリアっ!!」

「っ!」

再び放たれた一斉射撃。それは呆然としているセシリアを狙い、その全身を貫いた。

「くうっ!」

「セシリア、退け!」

ビットを失い、機体にもダメージを受けたセシリアを庇い、ラウラが前に出る。プラズマ手刀を起動し、勢いを落とさず飛び込んで来たサイレント・ゼフィルスを迎え撃った。

「はあっ!」

対するサイレント・ゼフィルスはピンク色の光を放つナイフでラウラの攻撃を捌き、返す刃で装甲を斬りつける。その一撃は深く、そして的確にラウラの腕を切り付け、プラズマ手刀を破壊した。

「く……!」

「ふん……」

サイレント・ゼフィルスのパイロットは顔の上半分がバイザー型のハイパーセンサーに覆われ、まだ幼さの残る口元しか見ることができない。

だがそれでも、その顔が嘲笑に歪んでいることは分かった。

「この程度か、ドイツの遺伝子強化素アドヴァンスト体」

「貴様……なぜそれを知っている?」

「答える必要はないな。……掴まれ、離脱するぞ」

「わあい、高い高い!」

「うるせえはしやぐな私まで馬鹿に見えるだろうがっ!」

「……黙れ、振り落とすぞ」

サイレント・ゼフィルスのパイロットはエネルギーが残り少ない

オータムとフラッドを抱え、一気に飛び上がろうとした。だが当然、彼女らを囲む者たちは、それをただ見ているほど間抜けではない。

「逃がすかっ!」

「君も捕まってもらうよー!」

「できると思うか? お前ら如きに」

圧倒的不利な状況の筈なのに、その声色は不敵な自信に溢れていた。レーザー・ビットを全員に向け、シールド・ビットで守りを固める。その実力を目の当たりにした五人には、その自信をただの強がりと言うことは出来なかった。ほんの僅かでもミスをすれば、取り逃がすだろう——そう確信させるだけの威圧を、その少女は放っていた。

逃げる隙と、捕らえる隙。

それを互いに伺いながら、睨み合い——

『うふわははははははははははははははっ!!』

「「「「「「「「!?!?」」」」」」」

突然空を覆った、巨大な機影を見上げた。

遙か上空にあるというのに、公園全体を覆うその影は——

「ば、爆撃機!?!」

『ふははははははっ! お待たせしました、諸君!!』

「この声、網田主任!?!」

「街中でなんてももの飛ばしてんのよ!?!」

「ていうか待っていないしむしろ絶対に来て欲しくないよっ!?!」

『応援に来ましたよ! さあ、受け取ってください! プレゼント・

フォー・ユー!!』

「ちよ、ま、まさか!?!」

ガバリ。

網田主任の言葉になんだかももの凄く嫌な予感がした面々が、顔を引きつらせる。

そんなことは意に介さず、如月重工製であろう、街の一つや二つや三つや以下略くらいは焼き尽くせそうな巨大な爆撃機、その下部が開き。



——キキキ。キイキイ——

「キイ。キキキイ」

——キイキイ！ キイイイ！——

「キ！ キ！ キキイ！」

「オイコラフラットナニフツ—に会話してんだよおおおおおとおおとおっ!!!」

「もういやだあああああああああああっ!!!」

「待つて待つて置いてかないでちよつと待つてええええええええええええっ!!!」

その混乱に乗じ(？)、サイレント・ゼフィルスのパイロット——エムは、スラスターを全開にして飛び立った。それにギリギリ掴まったオータムと、オータムが伸ばしたアラクネの糸に引つ張られたフラツドも一緒に飛んで行く。

敵が一目散に逃げたことに気付く余裕すらなく、箒たちは生体兵器の山に埋もれていった。その地獄のような光景から目を逸らしながら、空に逃れた三人は速度を上げていく。

「……決めた。例え世界が減びようと、あの変態どもだけは、私の手でぶち殺す」

「ふざけるな、私が殺す。殺す、殺す、コロスコロスコロスコロス……」  
「あれえ？ そういえばオータムさあん。なあんか、髪短くないですかあ？」

「今ごろ気付いたのかよ……まあ、あれだ。イメチエンてやつだ」

「あつはあ♪ いまさら無駄な足掻きですnee、オールドさあん♪」  
「おいクソガキてめえマジでぶち殺すぞ」

「きやははははははは!! 怖いオバサンですnee! ねく?」

——キノ——

「……………え?」

突如聞こえた不穏な音に、できれば見たくないがそうも言ってもらえないオータムとエムが、ゆっくりと首を回す。

その音は、フラツドの腕から聞こえた。

——正確には。







何故ならば。

そもそも、他人に対する興味や関心というモノが、致命的なまでに欠落しているからだ。

「来てくださると思ってましたよ。いや、別にこの学園祭は、僕が開催したわけじゃないんですけどねえ」

全く興味がないから、完全に無関心だから、誰がなんと言おうと、なんとも思わない。

身体に触れるなどの直接的に影響のある行動や、数少ない親しい者との会話を中断しての割り込みなどでもない限り、その人物は、見知らぬ者に声を掛けられた程度では決して感情を見せたりはしない。

——それが例え、嫌悪であろうとも。

「それでも、ちよっぴり関わってるわけでした。ホントにちよっぴりだけ」

不摂生と睡眠不足により据わった眼が、如月社長を睨む。それをそよ風ほどにも感じずに、如月社長は尚も続ける。

嬉しそうな。

楽しそうな。

幸せそうな。

不気味で、不吉な笑みを浮かべながら。

「なので、何か感想でもいただけませんかねえ——

——篠ノ之、束博士」

こうして。

世界最大級の怪人二人による会合は、唐突に開始された。

「……私に来るって、どうしてわかったのかな？」

束が如月社長に質問する。妹、親友、親友の弟、そしてその幼なじみ以外とは余程の用事がなければ会話すらない彼女にとっては、極めて珍しいことだ。

その質問に、如月社長は益々笑みを深めた。

——どうやら自分は彼女にとつて、取るに足らない路傍の石ではなく、鬱陶しい羽虫程度には認識されているらしい。

「どうして？ そりゃわかるよ、束博士。いや、わかると言えるほど確実なものでなくても、予想くらいはできる」

「……へえ」

そんな如月社長の笑みを見て、束の顔に滲む不快が増す。それを見て、如月社長がさらに笑みを深める。そんな険悪な循環が、早くも出来上がっていた。

「今年度に入ってから、IS学園のイベントでは数々のアクシデントが発生している。その共通点は、一年一組が、さらに正確に言えば織斑一夏君が関わっていること。」

……そして、もう一つ」

「ふうん」

如月社長は右手を突き出し、人差し指をピンと空へ向けて伸ばした。

「五月。クラス対抗トーナメント。一回戦、織斑一夏と凰鈴音の試合に所属不明の無人ISが乱入。同時にアリーナの出入口がロックされ、観戦していた生徒たちの避難も教師の救援も望めなくなった二人がこれを撃破。」

……ここまですらでも十分大事件だけど、これだけじゃない。なんとその無人ISのコアは、どの国にも登録されていないモノだった」

「へえ、そうなんだ」

もはや如月社長が何を言おうとしているのか、束にも分かっている。だが反論もせず、ただ不快な顔をしたまま、如月社長の言葉を聞くだけだった。

その様子に特に反応を示すこともなく、如月社長は中指を立てて、続ける。

「六月。学年別個人トーナメント。織斑一夏、当時はまだシャルル・デュノアと名乗っていたシャルロット・デュノアのペアと、ラウラ・ボーデヴィツヒ、そして我らが井上君のペアの試合。試合は織斑君と

デユノア君が想像以上の奮闘を見せ、井上君を撃破。単機になったボーデヴィツヒ君も善戦するけど、織斑君とデユノア君のチームワークの前に惜しくも敗れ——そして、事件が起こった」

「どんな事件？」

「なんと、ボーデヴィツヒ君のシユヴァルツェア・レーゲンには禁止されている技術、ヴァルキリー・トレース・システム V T S が搭載されていたんだ。そのV T S

のモデルとなっていたのは、あろうことか織斑君の姉、ブリュンヒルデ織斑千冬。そ

こそこの性能だったけど、まあ敗因は、織斑君を怒らせたことかな」  
「いつくんが怒るなんて珍しいねー。その分怒ると怖いけどねー」

腹の探り合いなどではない。何を言うのか、そしてどんな反応をするのか、分かった上での対話。

茶番と言えばそれまでだが、それにしてもあまりにも、空気が重すぎた。

「けど、それで終わりじゃあなかった。そのV T Sを開発した施設は、いつの間にか消えていた。……いや、消されていた、と言うべきだねえ。文字通り、物理的に。それも目撃情報によると、たった一人に」  
「へー、誰がやったんだろーねー」

そして何故、そんなことを如月社長が知っているのか。先の無人I Sのコアについても、極秘中の極秘である筈なのに。

——そんなことをこの男に対して問うのは、無駄以外の何物でもない。

そして如月社長は薬指を立て、続けた。

「七月。臨海学校。……これはすごかったねえ。僕も内心冷や冷やだったよ」

「箒ちゃんもいつくんもかつこよかったねー」

「アメリカとイスラエル、軍事に関しては世界でもトップクラスの二国が共同開発した超高性能I S、シルバリオ・ゴスベル「銀の福音」の暴走。

……この時点で、既におかしいよねえ。選りに選って、最も嚴重に管理されていた試験運用中にそんなことが起こるなんてねえ——I Sの暴走なんて、それまで一度だつてなかったのに」

「うーん、なんでだろうねー。不思議だねー」

その白々しい返事に、如月社長は嬉しそうな顔をする。

そして、立てていた三本の指を下ろし。

「僕はこれらの事件が、全て同一の人物によるものだと判断した。その方が自然なんだよ。」

世界最高レベルのセキュリティを素通りし、ISのコアを暴走させることができる人物。

禁忌であるVTSを極秘裏に開発していた研究所を見つけ出し、ほんの数分でそれを消滅させることができる人物。

未だどの研究機関も開発に成功していない無人ISを作ることが、そもそもISのコアを造り出すことができる人物。

どれ一つとつてみても、そんなことが可能な人物がそう何人もいるわけがない。実際にやってみるともなればなおさらね」

「言われてみれば、そうかもねー」

「うふふ……どうせ隠すつもりもなかったんでしょ？」

——犯人さん」

「……まあ、そうなんだけどね。どうせバレてるところにはバレてるだろうねー、だからってどうにもできないだろうけどね」

——そう。知っている者は知っている。そうでなくとも、気づいていた者はいらる。束の幼なじみも、薄々感づいている。

だが、それでも。

一体何が出来ようか。

一体誰が抗えようか。

全ての兵器をあらゆる面で凌駕し、しかし467機しかないISを。

無尽蔵に生み出せる、その存在に——

「だから今回も、一枚噛んで来るかなー、と。実際に来るかどうかは賭けだったけどね」

「確証もなしに待ち構えるだなんて、暇人だねー」

今までIS学園のイベントに、常軌を逸した干渉を繰り返してきた束。学園祭に限ってなにもしないなどということはありえない。

しかし今回は、フロントム・タスク亡国機業が動く。第三勢力が居ては、束は表立って

は動かないかもしれない。

ならば様子見か。だとするのなら、別の場所に身を隠しての様子見も有り得た。そうなれば、如月社長に束を捕捉することは不可能だったろう。

だが束は、そんな安全策を取りはしない。彼女に害を為そうなどという命知らずは極めて少なく、万一本当に襲撃されても容易く撃退できる。

故に。きつと、最前列の特等席に、観に来るだろう。

ほとんどが憶測に過ぎないが、外れても大して痛くもない。だから如月社長は、当たる方に賭けたのだ。

「けれど、どうしてそんなことをしているのかまではわからないんだよねえ」

「そりやそうでしょ。なんで私が、見ず知らずの誰かに理解してもらわなきゃならないの？」

「……うふ。うふふふ………んふふふふうふふふふふふふふふふふふふ……！」

突然笑い出した如月社長に、束が怪訝そうな顔をする。あるいは、また不快に顔を顰めただけかもしれないが。

「そうだよねえ、そうだよねえ！ 神様の考えていることが、人間にわかるわけがないよねえっ！」

「……神様？」

「おや、前にも言わなかったかい？ それとも僕との会話なんて覚えていないかな？」

ISという圧倒的な兵器、その中でも飛び抜けた性能を誇る紅椿……それらをたった一人で造りあげたあなたは、まるで神様のようにだと！」

「言つたっけ、そんなの？」

腹を抱え顔を覆い、楽しくて仕方がない、面白くて仕様がないと全身で言いながら、如月社長は。

「さて、篠ノ之博士。突然ですが問題です。古来、あらゆる物語において、恐ろしい怪物や悪魔に挑み討ち倒す者たちは英雄と呼ばれてき

た。

「では逆に、神に反逆し地に墮とす者たちをなんと呼ぶか、あなたは知っているかな？」

「……さあ。それこそ怪物とか悪魔とか、そんな風に呼ぶんじゃないの？」

突然の質問に、不思議そうと言うよりも興味がなさそうに、東は質問を返す。

ソレにより、喜びの限界を超えたのか。

如月社長は、ついに――

「……それはね――

――「科学者」だよ」

――神に、弓を引いた。

「人間は自分たちに理解できない現象を「奇跡」と呼び、それを起こす目に見えない存在を「神」と呼んだ。だけど科学が進歩するに連れ「奇跡」は説明され、「神」はただの原因に成り下がった。

……「神」は、殺されたのさ。飽くなき探究心を持つ、偉大なる「科学者」たちによって。好奇心という、猫から神まで皆殺しにする無色の凶器（狂気）によってね」

その解答に、東はなんの反応も示さない。「だから何が言いたいのか」と、ほんの僅かな疑問を浮かべるだけだ。

「わからないかい？　こういふ方面には頭が回らないのかな、篠ノ之博士は。」

……あなたもかつては、一介の技術者であり科学者だった。どんなに天才でも、その才能が世に出るまではただのヒトさ。けれどあなたはISという「奇跡」を造り出し、誰にも解けない謎を生み出すことで新たな「神」となった。

……なら今度は、あなたが科学者に命を狙われる番だ」

「面白いことを言うね。なら君は、君が言うところの神サマであるこの東さんを、どうやって殺すつもりなのかな？」

「それは当然、あなたが造り生み出した最強の兵器、ISによって」



「馬鹿だねー。私が造ったISで私を殺そうだなんて、ドラグ○レイブでシャブ○ニグドウを倒そうとするようなものだよ」

「馬鹿じゃなくちゃあ、科学者はやってられないよ。天に唾を吐き掛けるのは、愚か者の特権なんだから」

如月社長は、自らを技術者であり科学者であると定義している。

技術の発達により、科学は新たな領域へ発展する。

科学の発展は、技術を更なる段階へと発達させる。

右足を前に進めれば、左足も前に進めることができる。それにより、更に前へ右足を進めることができる。

その循環という理想の実現こそが、彼が創設した如月重工なのだ。

「……ほんつとーに馬鹿だよねー。のこのこ出て来ちゃって。私を殺す前に自分が殺されるとか思わなかったのかな？」

「ええつと。それはもしかして、脅しかなにかのつもりかな？」

束の言う通り、束がその気になれば、如月社長は為す術無く殺されるだろう。それは間違いの無い、絶対の事実だ。それは当然、如月社長も分かっている。

それでもこうして、社長自身が束に会いに来たのは。

そんなことにはならないと、高をくくっているか。

たとえ命を危険に晒してでも、そうしなければならぬ理由があるか。

——そもそも。殺されたとしても、彼にとっては大したことはない、か。

「そんなモノは無意味だよ、篠ノ之博士。まったくナンセンスだ。僕はね、あなたとは違うんだよ。孤独な神であるあなたとは違う。

僕はね、「社長」なんだよ、篠ノ之博士。会社というのは、それ自体が一つの生命だ。社員は僕の手であり、足であり、目であり、耳であり、五臓六腑であり、僕そのものだ。たとえ僕という脳が失われても、すぐに誰かが新しい脳になる。その脳が考えることは僕とは違うだろうけど、だからこそ面白い。僕にはできないことができるかもしれない、僕には思いもつかなかったことを実現するかもしれない。そう考えただけで楽しくなってしまうよ」

「変なの。自分がやりたいこととは違うかもしれないのに、楽しいの？」

「もちろんだとも。生きている内は、自分のやりたいことを全力で楽しむ。死んだら、誰かに引き継がれ自分とは違う形になっていく様を楽しむ。一粒で二度美味しいじゃないか」

人は、未知のモノに恐怖を覚える。だから何を考えているのか分からない他人が恐ろしく、誰も知らない死後の世界が恐ろしい。

だが同時に、人は未知に惹かれる。未来に何が起きるのか、分からないから面白い。知らないから興味を持ち、知っていく過程が面白い。

ならば。

この男が死後の世界に興味を持つのは、当然のことであった。

「今回、僕があなたに会いに来た理由は二つ。

一つは、あなたが一連の事件の犯人だという、推測に過ぎなかった僕の考えに確信を持ったため。これはもう、言うまでもなく成功した。

もう一つは、あなたに宣戦布告するため。と言うよりも、あなたに敵と認識してもらったためかな」

「は？ なにを言っているのか、よくわからないね。君が私の敵？ 敵っていうのはお互い対等でなきゃいけないんだよ」

「それは違うねえ。お互いのお互いに対する殺意さえ有れば、それだけで敵同士になれるんだよ。

今あなたは、僕に殺意を持っている。それがたとえ、視界に入ったゴキブリを潰すようなレベルでもね。

僕が本当にゴキブリなら、ただ生きるために逃げ回るだけだ。それじゃあ敵とは言えない、戦いなんかにはならない。

けれど、僕はゴキブリじゃない。力の差がそれくらいあっても、それでも勝利のために、殺意を持って行動する」

ことここに至って、東はようやく悟った。

この男を侮ってはならない。どれほど力の差があろうと、一瞬でも隙を見せれば容赦なく倒される。

追い詰められた鼠は、天敵である猫にも牙を剥く。その牙が猫の急

所に届くことはなくとも、鼠の牙は猛毒にも劣らぬ、不浄の牙なのだ。「……まあ、なんでもいいけど。どうして私の敵になりたいのかな？」「簡単だよ。不可能と言われたらやりたくないのが、「男」という生き物だからさ」

「どうやら宣戦布告も上手くいったらしい——そう判断した如月社長は踵を返し、屋上から去って行く。

扉を閉める直前に、捨て台詞を残して。

「それじゃあ。僕はこれで失礼しますよ、束博士。」

——次会う時は、敵同士ですなあ——

色々あった学園祭もどうにか終わり、翌日。集会場にて。

オータムを撃退した一夏、フラッドを撃退した真改、クラリツサを撃退した千冬は若干の疲労が残る顔で、学園祭における「織斑一夏争奪戦」の結果発表に参列していた。

「みなさん、昨日はお疲れ様でした。おかげさまで学園祭は大成功、今までにないほどの盛り上がりだったわ。

……まあ、そんなありきたりな挨拶は求めてないでしょうから、早いとこ結果発表に移っちゃいましょう」

今年の学園祭がそれほどまでに盛り上がった理由はただ一つ。生徒、来賓の投票を最も多く得た部に一夏を入部させるという条件により、気合の入りようがハンパじゃなかったからである。

なので、生徒たちがこの結果発表にかける期待もハンパではなく、皆まだかまだかとその瞬間を待っていた。

そしてその結果に、生徒たちは——

「それでは発表します！ 此度の学園祭で、最も多くの支持を得た出し物は——

——生徒会主催の演劇、「シンデレラ」ですっ!!」

「……」

「……な、なんじゃそりゃああああああああっ!!!」

——キレた。当然であった。

「なんで生徒会がトップなのよ!?!」

「あんなシンデレラとは名ばかりのB級モンスターパニック映画みたいな演劇に票が入るわけないでしょ!?!」

「横暴だ! 不正だ! やり直しを要求します!」

「まあまあみんな、落ち着いて。これは厳正な集計による結果よ。確かに生徒からのウケはあまり良くなかったけれど、来賓の皆様方からがっぽーゲフンゲフンたんまり票をいただいたんですから!」

そう言つて、楯無は空中投影型ディスプレイを起動する。そこに表示されているのは投票の集計結果で、確かに生徒会の演劇は、ぶつちぎりのトップであった。

「ご覧の通りです」

「ちよつと、そんなにお客さん来てないでしょ!?!」

「どう見ても不正じゃないの!」

「来てたじゃない。如月重工のお客さんが、アリーナを埋め尽くすほど!」

「……」

そう言われて、思い当たることは一つしかない。

「……アレかああああああああああっ!!!」

「ふざけんじやないわよ、組織票なんてレベルじゃないじゃない!」

「アレを来賓にカウントすんなっ!」

「不正より遥かに質が悪いわ……!」

そこかしこで発生するブーイングの嵐。このままでは暴動にまで発展しかねないが、それを見越していた楯無はちゃんと策を用意していた。

「まあ、皆さんが負けて悔しい気持ちも理解できます。なので生徒会における、一夏君の運用方針をお伝えします」

楯無の発言に多くの生徒がビキリと青筋を立てたが、その怒りが怒

号となる前に、楯無の扇子が開かれる。そこには「レンタル専用」の文字が。

「織斑一夏君は、生徒会の一員として各部活動の視察をしてもらいます。実際にマネージャーのお仕事などを体験して、部に対する理解を深めて生徒会の活動に活かしてもらいます。一夏君による視察を希望する部は、後日配布する申請書を提出してください」

「さすが生徒会長、素晴らしい！」

「信じてました！」

「一生ついて行きます！」

生徒たちのあまりに見事な手のひら返しを、楯無は満足そうに眺めている。騒ぎの中心である一夏は事態について行けずポカンとしており、真改はひびの入った肋骨よりも痛む頭を抱えていた。

「うんうん、みんな納得してくれたようですねによりです。では、私からのお話はこれでおしまい。次は来賓代表、如月重工社長さんからのお話です」

意識が朦朧とするほどの頭痛に耐えていた真改はハツとした。

——すっかり忘れていた。そう言えば今回の学園祭では、織斑一夏争奪戦の他にもう一つ、とんでもないイベントが行われていたのだった。

「レ、デイイイイイスツ!!! エエエエエツツ!!! ジエエエントルメエエエエンは一人しかないからマアアアアアンツツツ!!! 皆さん、僕ら如月重工が開催した抽選会にご参加いただき、まことにありがとうございます！」

そう、如月重工による抽選会だ。生徒が一人につき一枚のクジを引き、当選した者には如月重工による技術的な支援と、そして——  
「うふふ、素人晴しい出来映えですよ！ さて、挨拶とかはカットしてちやちやっとお披露目といこうか！ 僕ら如月重工が全身全霊をかけて創り上げた至高の一品を！」

——「1／6井上君人形」が贈られるのだ。

「ウエイクアアアアアップ!!! チビ上くうううううんつつつ!!!」

如月社長が、手に持っていた大きな箱を開ける。その中には三頭身くらいのデフォルメされた真改の人形が横たわっていた。その様子が、ディスプレイにデカデカと表示されている。真改は隼月を起動してその人形を破壊することをかなり真剣に考え始めた。しかし加減を知らない如月重工のことだ、人形につき込まれた金は凄まじい額だろう。そんなモノを破壊して賠償請求でもされたら、養父に多大な迷惑をかけることになる。それだけは避けなければならず、真改は戦闘時並みに研ぎ澄まされた集中力により引き伸ばされた時間の中で散々悩んだ末、破壊を諦めた。

「「「……………」」」」

先ほどまでのハイテンションはどこへやら、会場は一瞬にして静寂に包まれる。IS学園の白い制服を着て目を閉じている人形の姿が、まるで本当に生きているかのように精巧だったからだ。デフォルメされてるけど。

「……………」

パチリ、と。1／6井上君人形ことチビ上君が目を開ける。その目を眠たそうにこすりながら、ふわりと浮き上がった。

「うわ、ホントに浮いてる……………」

「どんな技術よ……………」

「PICの応用とか言ってたけど、そもそもISじゃないのに……………」

「さて、このチビ上君にはクジの当選者がご主人様として登録されません。それが誰かは、僕にもまだわかりません」

引かれたクジの番号は、引いた生徒のID番号とセットで如月重工が保管していた。その中からランダムで、クジの番号が選択される仕組みだった。

「……………」

「お、どうやら決まったようだねえ」

抽選が終わったのだろう、しばらく何をすることもなくふよふよと浮いていたチビ上君はキョロキョロと周囲を見回し始め、そしてその視線が一点に固定される。

するとチビ上君は、その視線の方向へ向かってゆつくりと進みだし

た。

「わ、わ、こつちに来る！」

「ああ、つ、私は外れか……!!」

その進路の先に居る者、あるいは明らかに進路から外れている者。それぞれから、落胆と期待の声上がる。

そしてある程度進んだチビ上君は、ゆっくりと降下を始めた。

「こ、これはもしかして……!!」

「カモンカモンカモンっ……!!」

ここまで来れば、その着地点はかなり絞られる。その狭い範囲に食い込んでいる生徒たちは、自らの幸運を祈っていた。

その祈りが届くのは、ただ一人。

それ以外の祈りを無情に切り捨てながら、チビ上君は、とある少女の肩に腰を下ろした。

「……え？」

「……」

細い肩に座ったチビ上君は、すぐ隣にある顔へ、コテンと寄りかかった。美しく輝く豊かな金髪が、最高級のベッドのように、その小さな身体を受け止める。

そんな姿を間近に見て、当選者の少女は――

「……………はう。」

――セシリア・オルコットは、幸せそうな顔のまま倒れた。

「コングラッチュレイショオオオオオン!!! おめでとう、セシリア・オ

ルコット君！ 是非とも大事にしてくれたまえよ！」

「おのれセシリアアアアアアア!!」

「ああ、なんで世界はこんなにも不公平なのっ……!!」

「ほら、チビ上ちゃん！ そんなのはほつといて私のところに「終止」痛いっ!？」

「な、なんて鋭いパンチ……!!」

「おやおや。ダメですよ、ご主人様以外がみだりに触れちゃあ。終止パンチの餌食になるよ」

押し寄せる生徒たちを終止パンチ乱れ打ちで撃退し、チビ上君は倒

れ伏すセシリアの前に降り立った。そしてその鼻から流れ落ちる血を、ポケットから取り出したハンカチで丁寧に拭う。

「ああっ、可愛い……！」

「欲しかったなあ……！」

そんな生徒たちの声を聞き、如月社長がニヤリとワラう。なんか嫌な予感がした真改と千冬は一目散に逃走した。

「ご安心を！ 惜しくも外れた皆様にも、しっかりと豪華記念品をご用意してあります！ さあ、受け取ってくれたまえっ!!」

「……え？」

その瞬間、如月社長の背後から、ナニカが現れた。

キツチリ外れた人数分いるソレらは、とても——とても、青かった。

「……い……」

カサカサ。カサカサ。

無数の脚が擦れ合う音を立てながら、ソレらは綺麗に整列する。

そして、一斉に——

——ビョーン——

「……いやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああつっつ!!!」

あらん限りの絶叫!を上げる生徒たちに降り注ぐ、一メートルほどの大きさのソレらは。

——ダニに、良く似たカタチをしていた。



## 外伝6 鋼の雷霆

「お嬢様。お休みのところ申し訳ありません」

「……どうした？」

呼びかけられ、目を覚ます。枕元の時計は、今がまだ深夜であることを示していた。

平時であれば、こんな時間に私を起こすなど有り得ない。が、今はとても平時とは言えない。こうして起こされることは十分に予想でき、そしてそれは、当たって欲しくない予想だった。

「……お父上……社長が、お呼びです」

「……そうか」

やはり、か。悪い予感ばかりよく当たる。覚悟はしていたが、しかしそれは、苦しみや悲しみを和らげる助けにはならない。

ただ、それらを受け入れられるだけだ。

「……すぐに行く。草津、着替えと椅子を」

「はい、こちらに」

私の秘書、草津に指示を出すと、すでに用意されていた。相変わらぬ有能な男だ。

仕専用のスーツに袖を通し、椅子に腰掛ける。肘掛のレバーを操作すると、静かな駆動音と共に車輪が回転し、前進を始めた。

「……限界か？」

「……はい。医者は、むしろ今までもったことが信じられない、と」

「……そうか」

父の命を、病如きが削り切れる筈がない——そう思っていたが、やはりそれは、ただの幻想に過ぎなかったようだ。

十年以上に及ぶ闘病の末、今日ついに、父は敗北する。

私は——それを、見届けなくては。

「……おお……来たか……」

「……はい」

自宅に作られた病室に入ると、そこにはベッドに横たわる父の姿があった。老いてなお逞しかった肉体は病に蝕まれ痩せ細り、見る影もなくなっている。

「……私は、もう死ぬ。だがその前に、お前に伝えなければ……」

「……………」

ゆらゆらと持ち上げられた手を、両手で掴む。ほんの数年前までは私の頭ほどもあったその手が、今はまるで枯れ木のようだ。

「……すまん。あいつも頑張ってくれたのだが、お前を満足な身体で産んでやるのが、出来なかった」

「……………」

そう言つて私の足に向けられた眼は、今まで見たことがない色を宿していた。

……私の両足は、動かない。理由は不明、治療法も不明。産まれてこの方、一度たりとも自力で立ったことのないこの足は骨と皮しか残つておらず、車椅子がなければ日常生活もままならない。

だがそんな私に、父は一度だつて、優しく接したことはない。ただひたすらに厳しく、一切の容赦なく、様々な知識と技術を叩き込んできた。

「……こんな父親で、すまん。辛かつたらう？ 苦しかつたらう？」

「……だというのに、私は——」

「まさか。辛くなど。苦しくなど。私はあなたが父で良かったと、心から思っています」

「……………そう、か……………」

……そう。たとえ厳しく当たられたとしても。優しい笑顔を向けられなかったとしても。

それでも、この人には愛があつた。私が産まれた時、既に病に侵されていたこの人は、私を後継者足るに相応しい存在に育てようと心に決めた。

だがその娘は、足の動かぬ出来損ない。誰もが落胆し嘆くその中で、しかしこの人だけは、私に希望を持ち続けた。

だから、一切の情けを掛けなかった。車椅子なくしては移動すら出来ない幼子を、千尋の谷に突き落とした。

……遙か昔、侍が愛用していた日本刀は、凄まじい高温で焼かれ、重く硬い鉄槌で幾度と無く打たれ、ようやくカタチとなるモノだった。ならば、自らの子供に期待する親がとる行動として、おかしいところは何もない。

鍛冶師が、己が鍛える業物に魂を籠めるように。

ただ一人の娘に、精一杯の愛情を注いだだけのこと。

「……私の、最期の願いを……聞いてくれるか……?」

「なんなりと。全身全霊を以って、叶えましょう」

「……ありがとう……」

そして父は、私の手を、強く握り締める。痩せ衰えた力の、最後の一滴まで絞りつくすように、強く。

「……会社を……有澤重工を、頼む……」

「……はい」

遙か昔。ISどころか銃すらもなく、人々がまだ、剣と甲冑で戦っていた頃。

その頃から、私たちの祖先は武具を造っていた。大きく、分厚く、重く、そして大雑把な——しかし戦場で用いる道具として、最上級の効力を持つ武具を。

「お前は、他のどの社員よりも……私に四十年付き従ってきた部下よりも、色濃く私の魂を受け継いでいる。……血は争えんな……お前は女である以上に、有澤だ」

それは、威力と防御力。そしてそれらにより齎せられる、畏怖。

一撃で敵を屠り、いかなる攻撃をも受け付けない。その威容は敵を恐怖に落とし入れ、味方を鼓舞する。

それこそが、単純な性能以上の力、有澤の力なのだ。

「……任せたぞ……」

「はい……はいっ……!」

だが、時代は変わった。いまや戦場を支配するのは、武器ではなく兵器。兵器に求められるのは、射程距離と命中精度、そして機動力。

局地戦における攻撃力や防衛力など、大局的に見れば大したものではない。

それでも、有澤はそれらを追い求めた。追求し続けた。時代遅れと笑われ、技術で及ばぬ者たちの悪あがきと揶揄され、それでも——それでも。

「……ならば、今、この瞬間から……」

かつての父の最期を思い出す。あの時も、こうして託されたのだ。

あの時は、果たせなかった。私の魂は時代の流れに取り残され、追いつけぬまま朽ち果てていった。

ならば、今度は。

今度こそは——

「お前は——有澤隆文だ」

最期に、全盛の——それ以上の力を宿した瞳は。

静かに、閉じられていった。

「お、お嬢様……！ 正気ですか!？」

「もうそう呼ぶな。今は社長だ」

「し、失礼しました……しかし、ならば尚更です！ おじよ……社長自らが、専用機持ちとして、IS学園に入学するなど……!？」

「なに？ まさか、不安なのか？ お前たちの造った機体は、搭乗者の負傷を許すような代物だと？」

「いえ、そんなことは！ ……ハッ!？」

「ふ……それが答えだ。私は信頼している。父の……有澤の思想の元、お前たちが造り上げた、不破の鎧をな」

「……お嬢様……」

「ならば後は、その性能を、有用性を世に示すのみ。

……往くぞ。かつては女の身であることを呪ったものだが、今は感謝している。有澤の魂を、世界に焼き付けることが出来るのだからな——!？」

「……今日もまた、一日が始まったか……」

さて、この俺、織斑一夏がこうまでアンニユイな気分である理由はただ一つ。学校に行かなければならないからだ。

それだけ言うとは不登校一步手前みたいだが、そうではない。俺は学校そのものが嫌なのではなく、通う学校、そしてそこにおける俺の環境が特殊過ぎることが嫌なのだ。

なにせここはIS学園、女性にしか動かせないISの操縦その他を学ぶところなのだから、当然生徒はみんな女性だ。そんな中でただ一人、どういうわけかISを動かせてしまった俺だけが、男子生徒として在籍している。

……いや、在籍させられている、って言った方が正しいな。半ば誘拐みたいな感じで連れて来られたし。

「……けど、なんだろう？　なんか今日は、ちよつと視線が少ないような……？」

女子ばかりの学園に一人だけの男子、当然注目を集めてしまう。入学してからの数日、俺は四方八方から視線攻撃を受けていたのだが、今日はそれが少し控えめなような気がした。気のせいかもしれないが気になって、ちよつと周囲を見渡すと。

「……あれ？」

その原因を、見つけた。

女の子だった。制服のリボンの色からして、俺と同じ一年生。黒い髪はおかっぱで、眼には何か、鋼のように固い意志が宿っている。

それだけなら、特に珍しいことではない。何せここはIS学園、生徒はみんな女の子だし、その中には強い覚悟を持ってここに入学した子も多い。

ならばなぜ、その子が視線を集めているのかと言うと――

「……車椅子？」

そう、その子は車椅子に座っていた。

IS学園ではISについてを学ぶ。当然、整備や開発なんかの科目もあるし、それを専門とする課もある。けど、ISの操縦だって必須科目の一つだ。乗るといふより装着する兵器であるISは、身体が不自由では満足に扱えないと思うんだが……。

「何か用か」

「え？」

ぼうつとしている内に、いつの間にか少女は、すぐそばまで来ていた。それまでずっと少女を見ていた俺を不思議に思ったのか、あるいは不快に感じたのか、俺の顔を見上げながら声を掛けてきた。

「え……えっと……」

「何か用か、と訊いている」

「……」

もちろん、用なんかない。ただ車椅子の女の子がIS学園に居るということが気になって、注目してしまったただけだ。

……それって、一番失礼なことだよな。

「いや、用とかはないんだ」

「そうか」

「えっと……その、ごめん」

なので、謝った。けどその子は、ふん、と鼻を鳴らすだけで何も言わず、そのまま立ち去ってしまった。

「……なんか、すげえ子だな……」

なんというか、声に重みがあった。音程が低いとか、そういうことじゃない。ちよつとハスキーな感じではあったけど、それでもちやんと女の子の声だった。

けれど、その声には。

まるで、天地に轟く雷鳴のような。

重さと、力強さがあったのだ。

「……それに……」

あの子、俺に対してなんの反応もなかった。この学園では異質の存在である俺に対して、何も。

「……なんなんだろうな」

不思議というか独特というか、色んな意味でインパクトのある子だった。さすがにあんな子を見掛けていたら覚えていると思うんだが、どうにも記憶にない。

単に今まで会わなかったのか、それとも、今日初めて登校したのか。なんとなくだが——後者のような気がする。

「……まあ、いつか。一年生ならその内また会うだろうし、教室も近いだろうし」

今度、ちゃんと謝りに行かないと。あの子はそういうことを気にするタイプには見えなかったが、それでもだ。

「……取りあえず今は、教室に急ぐ」

車椅子の少女が去ったことで、また視線が俺に集まり始めた。十字砲火を受ける前に、早いとこ教室に行かないと。

……教室でも似たようなもんだけどな。

「はじめまして。私はIS学園一年の学年主任、織斑千冬です。よろしくお願ひします」

「はじめまして、織斑先生。私はこの度、第43代有澤重工社長に就任しました、有澤隆文と申します」

事務的な挨拶をする私に、同じく事務的に返す。その姿に、私は驚きと感心と、納得を同時に覚えていた。

——有澤重工。古くは武器を造る鍛冶師の一門、今では兵器を造る軍事企業。その歴史は古く、信念は一貫しており、名門であり異端でもある職人たち。

それを受け継いだのが、目の前に居る少女だ。

「先代社長のことは残念でした。ご冥福をお祈りします」

「ありがとうございます。病に倒れたとはいえ、有澤の、そして自らの信念に殉じたのです。父も満足でしょう」

先代の有澤重工社長には、私も会ったことがある。イメージ通りの、頑固で、厳格で、そして大きな人物だった。

正直に言って、彼の跡を継いだのが一夏と同年の、それも足の不自由な少女と聞いて心配していた。そんな子供に、彼の後任が務まるのかと。

——なんとという無礼か。見ろ、この眼を。偉大な父親の遺志、有澤重工全社員の運命、その全てを背負って進むという決意がある。足のことなど関係がない、たとえ這つてでも、この少女は決して前進を止めることはないだろう。

「しかし、社長。あなたはこの学園に、生徒として在籍することになります。それがどういふことか、お分かりですね？」

「無論です。私のことは、ただの一生徒として扱っていただきたい。社のことも、そしてこの足のことも、一切考慮に入れないでいただきたい」

ああ、まったく。思った通りの答え、思った以上の覇気だ。

ならば私も、この心に応えねばなるまい。

「……分かった。なら、話はこれで終わりだ。早く教室に戻れ、お前一人のために授業を遅らせるつもりはないからな」

「分かりました。手続きに必要な書類は後日提出します。……それでは、失礼します」

突然態度を変えた私に満足そうに笑い、その笑みをすぐに引つ込めて、有澤は教員室を去っていった。小さいはずのその背中が、まるで山のように大きく見える。

「ふ……なるほど、ただ娘だから社を継いだ、というわけではなかったか。まああの人のことだ、そんなことはありえんだろうと思つてはいたが」

さて。

会社の引継ぎなどで入学が遅れた有澤だが、所属するクラスは一年二組。そしてそこには、近々一人、中国の国家代表候補生が転入してくる予定がある。

その転入生は、私の弟の幼なじみ。気が強く、努力家で、負けず嫌いの少女。

有澤とアイツが出会えば何が起きるのか、どうなるのか。



「ふふ……面白くなりそうだ」

なにせ、私のクラスではないからな。面倒に巻き込まれることなく、外から観客として、のんびりと事の推移を眺めることが出来る。

一夏絡みの騒動で散々手間を掛けさせられているんだ、このくらいは楽しませてもらおう――

「今日は転入生を紹介します。鳳<sup>ファン</sup>さん、どうぞ」  
「はい」

担任の教師に促され、教室の外に待機していたのだろう、転入生とやらが入ってきた。小柄な身体に似合わぬ大きな歩幅。二つに分けて纏められた長い茶髪に、活力に満ちた瞳。顔立ちは東洋系、姓が「ファン」となれば、中国人か？

「今日からこのクラスの一員になる、鳳<sup>ファン</sup>鈴音<sup>リンイン</sup>よ。よろしくね」

明るい挨拶と共に、小さくお辞儀をする。しかし口調といい口元に浮かぶ笑みといい、かなり挑戦的な印象を受けた。

「早速で悪いんだけど、このクラスのクラス代表って誰？」

「私だ」

問われたので、挙手して応える。

私が少々遅れて入学した時、ちょうどクラス代表を決める会議中だった。私が専用機を持っていたこと、成って日が浅いとは言えそれなりに規模のある会社の社長であることから、あつという間に決定したのだ。初対面であり車椅子に座る者に対しても遠慮のないその流れに、かえって感心したものだ。

「アンタが？ それじゃあさ、クラス代表、あたしに譲ってくれない？」

そしてこの少女も、全く人見知りをしない性格であるらしい。

「なぜ？」

「あたし、これでも中国の代表候補生なの。クラス代表って、その名の通りクラスで一番優秀な人がなるべきでしょ？」

「なるほど、道理だな」

確かに、合理的な理由だ。だが私は、有澤重工の力を世に示すためにここに居る。公式戦の機会を得られるクラス代表の座を、はいそうですかと譲るわけにはいかない。

——なにより。

「合理的」と言われれば叩き潰したくなるのが、有澤の血筋だ。

「しかし生憎だが、譲るつもりはない。私とて、代表候補生でないとはいえ専用機持ちだ。それに私なりの理由があるのでな。欲しければ、力づくで奪ってみせろ」

「……へえ。深窓のお嬢様みたいな見た目のクセに、なかなか活きが良いじゃない。気に入ったわ、アンタとは友達になれそう」

「それは光栄だ」

「けど、それとこれとは話が別。あたしにも、クラス代表になりたい理由があるの。だからさつきアンタが言ったように、力づくで奪わせてもらおうよ」

視線を交差させ、互いの眼を睨み合う。だが不思議と、険悪な空気にはならない。例えるなら、良きライバル同士のような空気だ。

「面白い。つい先日、一組のクラス代表も決闘で決まったばかりだ。それに倣わせてもらおうとしようか」

「あら素敵。嫌いじゃないわ、そういうの」

「えーっと、その、お二人さん？ 自己紹介が終わったのなら、授業を始めて「日取りは、そうだな……今日でいいだろう。確か第二アリーナが空いていたはずだ」ええっと、聞いている？ 授業をh「丁度いいわね。長旅で窮屈だったから、思いつきり運動したかったところなの」……あの、だから「決まりだな。アリーナの手配をしておこう」「ありがとう、まだ勝手がわからないから、助かるわ」………あn「楽しみにだな。世界最多の人口を誇る中国、その中から選抜かれた者の実力はどれほどか」「期待していいわよ。絶対退屈させないから」………「くっくくくくく……」「ふっふっふっふっふ……」………ああ、このクラスは一組と違って、問題児はいない

と思つてたのに……」

担任がシクシクと啜り泣きながら何か言つていたが、興味がない。

……さて、初陣か。念入りに調整しておくでしょう。

「……え？ 決闘？」

「そ。今日の放課後、第二アリーナで。クラス代表の座を巡つてね」

「……転入初日になにやらかしてんだよ……」

「インパクトは強いほうがいいでしょ？」

「強すぎだつての」

噂の転入生は、去年中国に帰つてしまったセカンド幼なじみ、鈴だった。昔から突飛なことをするヤツだったが、相変わらずみたいだな。まあ元気が有り余つてるのは良いことだとは思うけど。

「けどお前、中国の代表候補生なんだろう？ しかも専用機持ちなんだろう？ 一般の生徒で相手になるのか？」

「アンタだつて、代表候補生の専用機持ち相手に、結構食い下がったらしいじゃない」

「いや、俺は一応、専用機だったし。勢いで挑んだだけで、そこまで考えてたわけじゃないけど」

ちなみに、ここは食堂。時間は昼休み。箒やセシリア、それに他のクラスメイトと昼食に来たところ鈴と出くわし、こうして一緒に食べてるのだ。

……そしてなにやら、さつきから箒とセシリアの目がコワイ。

「それに、相手は一般の生徒とは言えないわよ。有澤重工の第43代社長にして専用機持ち、有澤隆文だもの」

「な!?! 有澤重工だと!?!」

「知っているのか、箒？」

「ああ。とある分野において、世界でも圧倒的なシェアを誇る企業だ」

「とある分野？ ……ていうか、そいつも女の子なんだろう？ なんて隆文なんて名前なんだ？」

「有澤の歴史は古い。有澤重工という会社になる前は鍛冶師の一族でな、族長が代々、隆文の名を継いできたんだ」

「あー、なるほど。確かに43代目っていったら、相当昔から続いていることになるもんな。」

「……ところで、とある分野ってどんな分野だ?」

「重装甲と炸薬だ」

「……は?」

「だから、重装甲と炸薬だ。昔は大鎧や大太刀、大砲だった。それが時代の流れに従って、超重戦車やら巨大戦艦やらを造り始めたんだ」

「……んで、とうとうISにも手を出し始めたってわけか」

「今でも、有澤重工の理念は変わっていませんわ。多くのIS開発企業が機動力や精度、特殊性を追求しているのに対し、有澤重工だけはいまだに重装甲・高火力の機体を造っていますの」

「へえ、そりやまた……熱い会社だな」

「ま、とにかく、その先代社長さんが、最近亡くなったの。ニュースでもやってたわよ。それで、その一人娘が会社を継いだってわけ」

「むう……」

そんな大変な事情の子もいるのか。最近忙しくてニュース見てなかったから、全然知らなかった。

「それで、その有澤さんはどんな人なんだ?」

「さすがは有澤重工の後継者、って感じね。日本人形みたいな髪型に車椅子だったけど、あれは絶対、間違っても、大人しいと言える性格はしてないわよ」

「……日本人形みたいな髪型に、車椅子?」

「……どうしよう、すっごい見覚えあるんだが。」

「……む、そろそろ昼休みが終わるな。急ぐぞ」

「え? あ、ああ、そうだな」

箒に言われて時計を見ると、確かにそろそろ食事を終えないとまずい時間だ。

鈴の対戦相手、有澤隆文さんは少し気になるところだが、放課後に試合するみたいだし。その後、もし余裕があったら話してみよう。

というわけで、放課後の第二アリーナ。噂の転入生vs学生社長というカードが話題を呼んだのか、突然決まった試合だというのに、観客席は満員だ。いや、この学園の噂の広まりが速すぎるだけかもしれないが。

「へえ、これが鈴の専用機か」

「ええ。バランスと安定性、持久力に優れた第三世代型、〔甲龍〕シエンロンよ」  
「突き抜けた性能こそなさそうですが、完成度はかなりのものですね……」

「しかしいいのか？ この試合に勝てばお前がクラス代表、クラス対抗トーナメントで一夏と戦うことになるかもしれないんだぞ。対戦相手に機体の性能を教えるつもりか？」

「ええ、そうよ。録画だけど、あたしは一夏の試合を見た。なら一夏にもあたしの試合を見せなきゃ、フェアじゃないじゃない？」

「うくん……なんていうか、鈴は勝つためなら手段を選ばないと思っただけだな」

「一夏、あとでぶつ飛ばす」

自分の失言を悔やみつつ、ゲートへと向かう鈴を見送る。飛び出す姿、その安定した飛行を実現する技量に感心しながら、観客席へと移動した。

「……うん？ 有澤さん、まだ来てないのか？」

アリーナ中央、低空に浮かぶ鈴の前には、誰もいない。そろそろ試合開始の時間だが……。

「む、向かいのゲートが開いたぞ。どうやら出てくるようだ」

「遅刻……と言うほどでもありませんわね。時間としてはちょうど——な、なんなんですよ、あれは!？」

セシリアの驚きの声。俺も驚き、大口を開けて間抜け面を晒している。隣にいる筈も、きつと鈴も、同じような顔をしているだろう。

だって、俺たちの居る観客席の反対側のゲートから飛び出てきたの

は、とてもISには見えなかったからだ。

——ズウウウウウン——

カタパルトで撃ち出されたソレが、重々しい音を響かせて、着地する。固いアリーナの地面にめり込み、しかしそれを意にも介さない力強さで、ソレは鈴の前まで移動した。

「遅くなってすまない。カタパルトに固定するのに手間取った」

オーブンチャネルで放たれた音声を拾い、スピーカーから観客席へと流される。その声は確かに、少しだけ聞いた有澤さんの声だった。

——その声がなければ、ソレを身に着けているのが有澤さんだとは思えなかっただろう。

「さて、それでは早速、始めようか」

ソレは、ISには珍しい全身装甲フル・スキんだった。

だから顔が見えない。けれどソレに乗っているのが有澤さんだと思えなかった理由は、そんなことじゃなく。

「……む。一応、名乗りを上げるくらいはした方が良いか」

ソレの脚は、脚ではなかった。有澤さんは足が不自由なので、通常の脚じゃ上手く動かせないのかもしれないから仕方ない。

ソレの腕は、腕ではなかった。あのカタチの脚では普通に武器を持つんじや扱いにくいだろうから、腕も脚に合わせるのには納得できる。

ソレの胴は、胴ではなかった。見るからに低そうな機動力を考えれば、強烈な攻撃にも耐えられるよう、装甲を厚くするのは当然だ。

ソレの砲は、砲ではなかった。機動力が下がれば命中率も下がる、一撃で勝てるほどの攻撃力を得るためには武器を大型化するのが一番簡単だ。

こう言うと、ソレは一見、合理的な考えに基づいて造られたように感じる。

けれど、そんな筈はない。ソレの設計思想は、合理なんてチャチなモノからかけ離れたところにあると断言できる。

「有澤重工、「雷電」だ」

機動力を犠牲にし、装甲と火力を高める。それは至って普通の考えだ。全ての性能を極限まで高めるなんてのは理想に過ぎず、現実を考

えればどこかしら妥協しなければならぬのだから。

そんな、基本とも言えないような常識を差し引いても。

余りにも巨大なソレを前にしては、こう思わずにはいられない。

「正面から行かせてもらう。それしか能が無い」

——誰が、そこまでやれと言った。

——それ、ISでやる必要あんの？

そう思ったのはあただけではないと断言する。

「……ある程度は予想してたけど、遙か真上をぶっ飛んでたわ……」

低機動、重装甲、高火力。それがあたしが予想した、隆文の機体だった。それは間違いではなかったんだけど。

低機動？ まあ見るからに遅そうだ。一般道も走れないんじゃないの？

重装甲？ 確かにそうでしょうね。厚い装甲っていうより、装甲の塊だけだ。

高火力？ 冗談じゃない。あんな大砲向けられたら、それだけで背筋が凍りつく。

『……ええつと……し、試合開始！』

アナウンサーも戸惑ってる。無理もない、あただって戸惑ってる。

だって、ソレ——「雷電」は、通常のISとは何もかもが違っているんだから。

脚はでっかい箱。そうとしか言いようのないカタチをしている。キヤタピラか何かで動くの？

腕はでっかい箱。そこに空いた砲口が相対的に小さく見えるけど、どう考えても人の頭よりデカいわねアレ。

胴はでっかい箱。とにかく頑丈そうだ、あの中は核シエルターより安心できるでしょうね。

砲はでっかい箱。携行性のためか三つに折り畳まれてるみたいだ

けど、それでもあれだけデカいのなら、展開すればどれだけデカくなるのか。

……生まれて初めて戦車に立ち向かう歩兵の気分だわ。

「では——」

ガコンガコンガコン。騒音を立てながら、雷電の両肩を占拠していた大砲が展開される。

……やっぱり、デカい。なんか柱を背負ってるみたい。

「——往くぞ」

「っー」

ドゴウン——！

お腹に響く轟音と共に、キ○ガイサイズの榴弾が放たれる。しかし弾速は遅く、余裕を持って回避できた。

……できたけど。

——ズドオオオオオン！！

「うひゃあっ!?」

避けた榴弾がアリーナの壁に当たると、とんでもない大爆発が起きた。

……なんて威力。比喻でも誇張でもなく、アリーナが揺れたわよ今……！

（あんなのに当たったら即撃墜ね……なら、撃たせる間も与えないっ！）

幸いと言うか当然と言うか、あの砲、連射はできないようだ。なら次を撃つ前に、最大火力で一気に倒す。あれだけの大きくて、しかも鈍足ときてる。撃ち放題の当て放題だ。

「食らえっー」

ドドドドドドドドンツ！

甲龍の肩アーマー、その中の球体が輝き、不可視の砲弾が放たれる。空間を圧縮して砲身とし、余剰エネルギーを砲弾として撃ち出す衝撃砲——甲龍の第三世代型兵器、「龍砲」だ。

「ぬっ……っー！」

ただでさえ避けにくい龍砲を、雷電の機動力で避けられるわけがな



い。全弾直撃、鉄球を音速でぶつけるに等しいその連射を受けて、隆文は体勢を崩し――

「効かんっ―！」

「なっ!?!」

――てない。それどころか、ダメージすらなさそう。

まさかあの箱、中身は電子機器満載とかじゃなくて、ホントに装甲の塊なの!?!

「くっ……なら、撃ち続けるまでよ―！」

龍咆にエネルギーを叩き込み、高速充填。さつきより威力を増した砲弾を、さつきよりも速く連射する。

――それでも、雷電は止まらない。

「頑丈っ……すぎんでしょ―！」

「雷電を削るには、その程度では足りんよ……!」

地面に深い轍を刻みながら、雷電が前進する。その移動はやっぱり遅くて、軽くさがるだけで間合いを広げることができる。

……なのに、なんて威圧感。無数の槍が突き出た壁が、ゆつくりと迫って来るような。

「はあっ―！」

「軽いつ―！」

最大までチャージした龍咆も、小石のようにはじかれる。そしてあの砲が、今度は両腕の砲も一緒に向けられた。

――ドドドゴウン!

「ちい―！」

三発の榴弾、それを大きく回避。両腕の砲から放たれる榴弾は肩の大砲に比べればさすがに小さいけど、それでも規格外のサイズだ。直撃はなんとしても避けなきゃいけない。

避けた榴弾が今度は観客席を守る遮断シールドに当たり、観客席から悲鳴が上がる。

(驚かせちゃって申し訳ないけど、こっちも余裕ないのよ……!)

あの榴弾を避けるのは簡単だ。けどそれは、今この段階での話。ゆつくりとした、しかし決して止まることのない前進。こちらの攻

撃は全くと言っていいほど効果がなく、逆にこっちが食らえば一発KO。

体力や技術じゃなく、精神がヤバイ。凄まじい威圧感にごりごり削られていく。

このまま長期戦に持ち込んだとして、勝てるだろうか？

たった一つのミスが、命取りになるのに。

いつまでも冷静に、正確に対応することが、あたしにできるの——

「……どうした、凰鈴音」

「っ……！」

一瞬の弱気、それで晒した僅かな隙は、隆文にとって絶好のチャンスだったはずなのに。

隆文は榴弾ではなく、言葉を放ってきた。

「教室での啖呵はどうした？ あの時の、覇気に満ちた眼はどうした？ 私から、クラス代表の座を奪うのだろうか？ ならば掛かって来い、様子見など無意味だ」

「……様子見ですって？」

そんなのはとっくに終えている。ていうかわかりやすすぎて、様子を見るまでもない。

今はただ、勝つための手段を——

(……勝つため？)

本当に？

本当に、そう言えるの？

いや、違う。全然違う。

さっきまであたしが考えていたのは、勝つための方法ではなく。

負けないための——

「お前はそんな、つまらん人間ではないだろう。失敗を恐れて成功を逃すような人間ではないだろう。図太く、我俣に、自らの望みを、自らの力で叶える人間だろう。」

……さあ、来い、凰鈴音。お前の信念で、私を貫いてみせろ」

「……はん、上等よ」

そうだ、こんな安全なところからチマチマ突つくなんで、面白くない。隆文はあんなに堂々としているのに、あたしだけ逃げ回るなんて我慢ならない。

……いいわよ、やってやろうじゃない。

アンタの見込み違いじゃないってことを、証明してやる。

「それじゃ、遠慮なく行かせてもらおうわよ。」

……覚悟はいいでしょうね？ 隆文」

「無論だ。お前がどのような攻撃をして来ようと、全て受け切つてやろう」

「よく言つたわね。それじゃあ、試合開始といきましょうか——！」

「見せてみる、お前の力を！」

私は、その全てを焼き尽くすだけだ——！」

再び放たれる、三つの榴弾。けれど、今度は逃げない。

「はあああああつ!!」

前に出て、榴弾の隙間に滑り込むようにして回避。すれ違う瞬間に龍咆を榴弾に打ち込んで、爆発させる。

「ぬっ!？」

背後で起きた大爆発が、あたしの背中を強く押す。その爆風に乗るようにして一気に加速し、両手に武器を——双頭の大青龍刀、「双天牙月」を展開した。

「でやあああああつ!!」

ガギンツ!

振るつた刃は装甲に弾かれ、通らない。

だったら、何度でも切り付けるまでよ!

「はあああああつ!!」

「くっ……はあ!」

ガゴン。かすかに聞こえた装填音。スラスターを横に噴かし、背後に回りこむ。

「ちいっ」

「その大砲、これだけ近いと狙えないようね!」

威力にばかり目がいつて、簡単なことにも気づかなかつた。

少し考えればすぐわかる。あれだけ大きいんだから、素早い取り回しなんかできるはずがない。

この距離じゃ、視線に入ればその瞬間に終わりだろうけど。

それでもしなきゃ、コイツには勝てない——！

「せい！ やあー！」

ガギンガギンガギン！

双天牙月をバトンのように振り回して、遠心力を乗せた連撃を叩き込む。相変わらず弾かれてるけど、それでも雷電の装甲に、確実に傷をつけている。

「やるじゃないか、鳳——！」

「期待していいって言ったでしょ——！」

双天牙月の刃が弾かれ、特大の榴弾をかわす。試合は完全なインファイト、超至近距離での攻防だ。

一撃でも避け損ねれば負けというプレッシャー、さっきまで重荷でしかなかったそれが、今では絶妙な緊張感となって、あたしの精神を研ぎ澄ます。

——何度だって切りつける。何度だって避け続ける。

雷電の装甲を削り切るのが先か、あたしがミスするのが先か。

そういうわかりやすいの、嫌いじゃないわ——！

「はあああああつ!!」

「おおおおおつ!!」

ごく狭い範囲を目まぐるしく飛び回りながら、渾身の連撃を放つ。反撃の榴弾はあちらこちらへ飛んで行き、時にはすぐその地面に着弾して、爆風によるダメージを受ける。

……状況は依然、あたしが押されている。このままじゃまずい、何かもう一手打たないと。

(一か八か……！)

龍咆を最大チャージ。それを隆文ではなく地面に向け、拡散させて撃ち込む。

「なにっ!？」

それによつて舞い上がるのは、細かく砕かれた粉塵。それが煙幕の

代わりとなり、一時的にあたしの姿を隠す。

その隙に急上昇。もちろん、逃げるためじゃない。

アリーナの天井近くまで一気に飛び上がり反転、全速力で急降下。双天牙月を頭上に構え、渾身の力を込める。

簡単なことだ。普通に切っても罅が開かないから、助走をつけて、思いつきりぶった切る——！

「っ!？」

しかし突然、粉塵の煙幕が晴れる。

いや、晴れたんじゃない。吹き払われたんだ。

——隆文が足下に撃ち込んだ榴弾の、爆風によって。

「そこかっ……いー」

目くらましがなければ、あたしの居場所はすぐにわかる。隆文は肩の大砲を真上に向けて、自分目掛けて真っ直ぐに落ちてくるあたしに照準を合わせた。

「——上等オ!!」

でも、止まらない。止まるわけにはいかない。

普通にやっても勝てないのなら、それでも勝ちたいのなら。

どこかで賭けに出るしか、ないんだから——！

「だあああああああっ!!」

「おおおおおおおっ!!」

狙うタイミングは一瞬。まばたきよりも遥かに短い刹那。難易度はインセインかノーフューチャーか。

(大丈夫、できる! あたしなら、できるっ!!)

絶対にできる。絶対に勝てる。

そう信じ、そう念じろ——！

「ああああっ!!」

そして、必殺の大砲に込められた榴弾、

その雷管を撃鉄が叩き、

薬莖に詰められた炸薬が爆ぜ、

弾頭が薬室から押し出され、

砲身の中で加速していき、

砲口から吐き出される、  
その、瞬間に。

「——っ!!」  
竹を縦に割るように。

砲口に、双天月牙を叩き込んだ。

「なんとっ……!?!」

信管を叩かれて、榴弾が砲身内で起爆する。当然、大砲は内側から、  
粉々に弾け飛んだ。

「ぐああああっ!!」

さすがの雷電も、これならかなりのダメージを受けるはず。あたしもそこそこダメージを受けたし双天月牙の片側は吹っ飛んだけど、それでも雷電のダメージに比べれば微々たるものだ。

このまま、一気に攻める。残った片側の柄を握り締め、切りかかろうとして。

「ぬうあああああっ!!」

「ぐふっ!?!」

……あーもう、あたしのバカ。なんだって忘れてたんだろう。

ずっと昔、まだ戦車が最強の地上戦力だった頃。

戦車の何が恐れられていたかというところ、鉄壁の防御力と、圧倒的な攻撃力と。

——「重い」ってことじゃない。

つまり何がどうなったかって言うと、背中や脚部のスラスタを全開にして急加速した雷電に、あたしは「轢かれた」のだ。

もちろん、その速度は他のISに比べれば全然遅い。けど目の前まで接近していたこと、あたしも加速していたこと、何より完全に予想外だったので、避けられなかった。戦車みたいに突き出た脚部の先端が、胸に直撃した。

……けど、まだだ。甲龍のシールドエネルギーは、まだ残って——  
「これで、」

あ、ヤバイ。隆文のやつ、両腕ともあたしに向けてる。

今そんなの食らったら、確実にオーバークリ「終いだっ!!」

その直後、あたしは意識を失った。そして目が覚めた時、生きてることに疑問と喜びを同時に抱いたことは言うまでもない。

「……すげえ試合だったな……」

内容が滅茶苦茶だったとかISにあるまじきISだったとか、そういうことじゃなくて。

有澤さんの戦い方に、俺は胸を打たれた。

有澤さんの専用機、「雷電」は、特化し過ぎて弱点だらけの機体だ。しかしその弱点は、有澤さん自身が一番わかっているんだろう。

だけど、その弱点を補うどころか、それすらも戦術に組み込んでいく。弱点を狙わせることで敵の選択肢を狭め、そして討つ。ある意味、捨て身に近い戦術。それはきつと、自身の愛機に、絶対の信頼を持つているからこそその戦術だ。

——どんな攻撃だろうと、その装甲が破られることは決してないという信頼があつてこそその。

「考えさせられるなあ……」

俺の専用機も、特化し過ぎて弱点だらけの機体だ。けど俺は、有澤さんのような戦術の組み方はしていなかった。弱点をどう埋めるか、そんなことばかり考えていた。

「……それじゃあ、勝てないかもな」

弱点を埋めたところで、消えてなくなるわけじゃない。必ずどこか別のところで、無理が生じてくる。

ならば、いつそ——

「潔いっていうかなんていうか。……すごいなあ、有澤さんは……お？」

色々と考え事をしながら歩いていたら、有澤さんを見つけた。まあ彼女がいるピットの方へ歩いてたんだから、当然なんだけど。

「……む」

「あ、えっと……」

そしてこんな狭くて他に人がいない通路で相手を見ていれば、当然目が合うわけで。

有澤さんは動き出そうとしていた車椅子を止めて、俺と相對する。

「何か用か」

「……………」

以前言われたのと、同じ言葉。あの時は確か、「ごめん」と言っただけで、通りされたんだっけ。

さて、なんて言えば良いのか。最初は謝ろうと思っただけで、この子はきつと、そんな謝罪なんか受け取らない。なら、試合の感想？ そんなのはこの後、いくらでも言われるだろう。俺が言うことに意味があるとは思えない。

「何か用か、と訊いている」

じゃあ、何を言えば良い？ 謝罪の気持ち、そして試合の感想。そんなありきたりな思いを目の前の少女に伝えるには、何を言えば――

「……………次は――」

……………そんなことは、決まってる。

謝罪も感想も、受け取ってもらえないのなら。

「――俺が相手だ」

――力づくで、押し付ける。そんな無茶苦茶なやり方が、この少女相手には相応しいと、思うから。

「クラス対抗トーナメント、覚悟しとけよ。俺の剣で、自慢の装甲をぶった切ってやる」

「……………面白い」

ほら見ろ、あの楽しそうな顔。他のどんな言葉でも、これだけ喜ばせることはできなかっただろう。

そして俺も、これほど胸が高鳴ることはなかっただろう。

「楽しみにしている、織斑一夏。お前の零落白夜、雷電が受け切れることを示したかったところだ」

「……………はっ」

ああ、まったく。思った通りの答え、思った以上の覇気だ。



俺も男だ、そんな眼を向けられたら。

「知ってるだろうけど、俺の専用機はひどい欠陥機でさ。武器がブレード一本しかない。」

「……だから——」

「見ての通り、私の機体は一点特化型でな。出来ることは極々限られている。」

「……だから——」

燃えるだろうが、有澤、隆文——！

「寄って、斬るだけだ——！」

「全てを、焼き尽くすだけだ——！」

## 第66話 兆し

「さて、それでは情報を整理しましょうか」

IS学園の生徒会室。ここには今、一人の客人が来ていた。

ひよろ長い体躯に丸眼鏡、口元には不気味な笑み。如月重工の技術開発主任、網田である。

「その前に、一つ確認したいんですけど。本当に、あの青いのは全部片付けたんですね？」

「というよりも、片付けられたんですけどねえ。残念なことに」

網田主任をもてなしているのは、IS学園生徒会長、更識楯無。

顔見知りである二人はまるで友人のような気安さで、お互いが持ち寄った高級なお菓子をつまみ合っていた。

「如月さんから、真改ちゃんワンオフ・アピリティが単一仕様能力を発動させたのは聞いてますよ。白銀月夜しろがねつくよ、でしたっけ？ アリーナの惨状を見ましたけど、とんでもない威力みたいですね」

「まあ、連発できるような能力ではないようですがねえ。なにせ溜めが必要ですし、それに扱う熱量が大きすぎて完全には制御しきれないようです。朧月自身もダメージを受けますし、熱暴走してしまうので溜めつばなしにすることもできません。織斑さんの零落白夜よりも尖った能力と言えるでしょうねえ」

自身の造った機体の欠陥について話しているというのに、網田主任の顔は嬉しそうに歪められていた。

欠陥があるということは、これからいくらでも改良出来るということだ。それが嬉しいのだろう。

「あと、私が投下した子供たちですが。まことに残念なことに、専用機持ちの皆さんに殲滅されてしまいました。なんということでしょう、あんなに可愛いのに、一切の容赦なく……」

「いやもう、そこはみんなGJと言わざるを得ないですね。まあ学園に出てきたのは私も片付けましたけど」

「なんと!?! あの子らを処分したと言うのですか!?! なんということ……!!」

「ええつと。とりあえず、今重要なのはそこじゃないんで、流してもらっていいですか？」

「……………ぐぬぬ……………仕方ありませんね……………」

まだやる気を感じさせる網田主任の態度に一抹の不安を感じた楯無であったが、そんなことを言っているのはいつまでも話が進まないの  
で無視することにした。

「……………それと。一夏君のことですけど」

「ああ、専用機がまた新しい能力を手に入れたみたいですね」

「はい、「<sup>せつか</sup>雪火」というようです。白式が第二形態に移行した時に発現した能力、「<sup>せつか</sup>雪花」から派生した能力のようですね。」

「一応、データは受け取っていますが……………楯無さん、戦闘のプロフェツシヨナルであるあなたの口から説明してもらえますか？」

「雪火は、雪花が普段防御に使われているのに対し、そのエネルギーを攻撃に転用する能力です。発動には白式自身のシールドエネルギーも必要みたいですけどね」

「ほう……………それはさながら、零落白夜のように？」

「まさにその通りです。敵の攻撃を無力化するために使われている雪花にシールドエネルギーを送り込み、白式の単一仕様能力、零落白夜を、雪花一つ一つが発動するんです」

「ほう……………」

「その結果は、さつき見せた画像の通り。全方位を防御する雪花が、全方位に零落白夜を放つ。範囲内に存在するあらゆるエネルギーは消滅するでしょう。シールドバリアー、そして回避や反撃のためのエネルギー……………その全てがなくなってしまうば、後はもう、膺に切られるだけですよ」

「恐ろしいですねえ……………ただでさえ、一撃必殺を信条とする機体だといふのに」

その威力を想像して、網田主任が戦慄する。

だがそれ以上に、楯無は恐怖していた。

「雪火の恐ろしいところは、そんな簡単なことじゃありませんよ」

「……………ほうほう？」

「雪火を発動した時、一夏君は全身の動きを封じられていました。それこそ、指先に至るまでね。だからこそ、オータムは意表を突かれた。仕掛けた策が破られようと、たとえ自らが張り巡らした糸の呪縛が解かれようと、その一瞬前には自分が気づくからです。」

何を仕掛けるにせよ、予備動作というのは存在します。それを隠し、そして読み取るのが一流の技なんです。

その予備動作がまったく存在せず、今まで防具であったはずの雪花が、一瞬の間もなく必殺の武器に変わる——こんなに怖いこと、私たちは他に知りませんよ」

「攻撃は最大の防御」という言葉がある。そして、「後の先」という言葉がある。

そのどちらをも裏切る、完全なる無ノーモーション・ノータイム拍子で発動する必殺の攻撃手段があるとするとするなら。

それを打ち破る手段は、存在するのか。

武術や格闘術に長けた者ほど、雪火を恐ろしく感じるだろう。

「それだけ聞くと、まるで——」

「……そうですね。白式以上に、接近戦に優れた機体はないでしょうね」

「むむう……しかし、性能が戦力を決定付ける要素の全てではありません。性能とは、使いこなせてこそ意味があるのですよ」

「それについては全面的に賛成ですね。一夏君はまだ、雪火を完全に使いこなすことはできないでしょうし」

なにせ、通常の零落白夜以上にシールドエネルギーの消耗が激しい能力だ。そして発動すれば、一時的に雪火も機能しなくなる。決まればそれで勝利となるだろうが、外せば一転、大ピンチだ。使いどころの難しさも零落白夜以上であり、そんなモノを使いこなすだけの技量や戦術眼はまだ、一夏には備わっていない。

「……まあ、白式の新機能も気になるところでしょうけど。私としては、連中の行き先の方が重要事項なんですが」

「おおっと、これは失礼。確かに一芝居打っていただいた楯無さんには、先にお伝えするべきでしたねえ」

「……最初はそのつもりだったんですけどね。芝居じゃなくて、ホントにピンチでしたよ」

「そんなことはどうでもよろしい。とにかく、わが子らの尊い犠牲により、彼女らの帰還先が判明しましたよ」

「さすがです。まさかあんな馬鹿げたやりかたで追跡されてると思われないですよ」

「私たちは真面目にやってるつもりなんですけどねえ」

如月重工のハチャメチャぶりは、誰もが知っている。だから、どんな馬鹿げたことをしても怪しまれない。また如月かと思われ言われ、それで終わりだ。木を隠すなら森の中、そして木を隠すために森を作るのが如月重工なのだ。

もちろん、それでも怪しむ者は存在する。しかし日本の暗部を担う更識家当主である楯無からすれば、罨や策は幾重にも張り巡らせるものだ。その第一の布石が無条件で、始めから打たれているということの優位がどれほどのものか、楯無は身をもって知っている。

如月社長や網田主任は、当然そこまで考えていない。彼らはただ、自らの心に従っているだけだ。

——だからこそ罨として、策として機能する。楯無はそう考えていた。

「電波で追跡すると悟られますからねえ。アリやハチのように、ナノマシンが残した「匂い」を追跡しました。おかげで少々時間がかかりましたが」

「相変わらず、謎の技術ですね」

「お褒めにあずかり恐縮です。で、問題の帰還先ですが」

「……ついに、亡国機業の本拠が……」

「ここが本拠かどうかはまだわかりませんが。」

「……どちらにせよ、厄介な場所ですよ」

網田主任は携帯用端末を取り出し、その画面を楯無に示した。表示されているのは、亡国機業のエージェントたちに付着したナノマシンから送られてきた位置情報だ。

それが示す場所は――

「……………なるほど。道理で今まで見つからなかったわけだ」

「ここを拠点としているだけでも、亡国機業が巨大な組織であることがわかります。……うふふ、楽しくなってきましたねえ……！」

「私としては、もうちよつと小さい方が助かったんですけどね。……ここ、攻められるんですか？」

「ご安心を。今急ピッチで、そのための兵器を製造中です。完成は……今年中には、なんとか」

「ええー……早すぎでしょう」

「それより、戦力ですよ。我々だけではどうにもなりません。各国に呼びかけたいところですが、今の段階ではそれもできません。楯無さんのほうでいくらか集められませんかねえ？」

「更識のコネでできなくはないですけど。私個人は、今はまだ無名ですから。次のモンド・グロツソでどれだけ活躍できるかですかね」

「根回しもお願ひしますよ。私たちも進めてますが、やはり限界があります」

「頑張つてはみますけど。IS乗りの勧誘がどれだけ難しいかはわかってますよね？ あんまり期待されても困るんですが」

「とにかく、一人でも多く。私たちの新兵器がISに通用するかは、ぶつつけ本番になるでしょうから」

「それこそ、期待させてもらいますよ」

まだ可能性があるというだけだが。

ISを打倒し得る兵器——そんな物を造れるとすれば、如月重工を置いて他にない。

「……ところで、チビ上ちゃんのおまけの技術支援ですけど。どんな感じですか？」

「うふふ……そちらは早速、社長がアリーナでテストしていますよ——」

「さくさくさせて、オルコット君。僕らが造ったブルー・ティアーズの

新兵器、早速試してみようか！」

「……まさか本当にやるだなんて。実験機だというのに、よくイギリス政府の許可を得られましたわね……」

「そこはほら、あの手この手で」

「具体的にどんな手段を使ったのか、想像すらしたくありませんわ……」

国家機密の塊である第三世代型ISに、国外の他社が手を加える。そんな話は聞いたことが無いセシリアであった。

「とりあえず、オルコット君は火力を求めているという話を小耳に挟んだので。とびつきりのを準備させていたいただきましたアン！ あ、BT兵器はちゃんと使ってるから安心してね」

「そのどこに安心できる要素があるのですか……」

ちなみにここは第三アリーナ。セシリアにとっては真改や一夏との初戦の舞台という、思い出の場所である。セシリアが如月重工の新兵器のテストをすると聞き、心配したいつもの面子も揃っていた。

「大丈夫かな……」

「どうだろうな。今のところ、不安要素しかないが……」

そう語るのは、シャルロットとラウラ。どちらもげんなりと言うかうんざりと言うか、ともかくそんな感じの顔をしている。

「どうしたもんかなあ……一応、正式な手続きしてるみたいだしなあ」

「技術提供、か。……確かに、間違いではないが……」

少しでも規則に反していたらあれやこれやと難癖をつけてソッコで叩き潰すつもりだった一夏と箒は、悔しさに歯噛みする。

「さつき、火力がどうこうって言ってたわよね。……避難したほうがいいかな……」

「だいじよぶだよ、たぶん。」

「……たぶんね……」

「……」

如月重工をまったく信用していない鈴と、それなりに信頼を寄せているがやはりそれも絶対のモノとは言えない本音は、嫌な予感をひしひしと感じまくっていた。真改に至っては敵地に潜入中であるかの

ように警戒している。

そんな全体的にマイナスな視線を受けながら、如月社長は嬉々として説明を続ける。準備は既に完了、あとは起動してぶっ放すだけだ。

「さて、準備はいいかい？ ええ、もちろんですわ（声マネ）！ OK、ではスタート！」

「今何か、すごく侮辱されたような気がしますわ……」

呆れつつ身構えるセシリア。そして如月社長がなにやらボタンを押すと――

『バーストキャノンモードに移行』

「……え？」

突然巨大な砲が現れ、ガコンガコンガコンと音を立てながら両腕に装着されていく。

『エネルギーライン、全段直結』

「え？ え？」

重々しい音と共に、その砲にエネルギーが供給されていく。次第に輝きを増す砲に、セシリアは嫌な予感を加速させていった。

『ランディングギア、アイゼン、ロック』

「な、ちよ、ちよつと!?!」

逃げよう、そう思った時には遅かった。ブルー・ティアーズからワイヤーが撃ち出され、機体を地面にガツチリと固定したのだ。

『チャンバー内、正常加圧中』

「あ、あの！ ちよつと待つ……」

逃げたいが、逃げようにも逃げられない。ワイヤーで固定されているだけでなく、スラストなどのエネルギーすら砲が吸い上げているからだ。

『ライフリング、回転開始』

「お、お願いです！ やめ――」

砲がフルチャージ状態になると、今度は四基のブルー・ティアーズ<sup>ピッ</sup>までも展開され、セシリアの目の前で円を描くように高速回転しながらエネルギーを充填していく。



そしてついに、ビットのエネルギーもバツチり満たされ――

『――撃てます』

「これで終わりだ」

「へ!? いやあの、だから待っ――」

――次の瞬間。

巨砲とビットが、溜めに溜めたエネルギーを。

一気に放出した。

ズシユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「ひきやああああああああああああああ!!」

「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

セシリアの悲鳴と共に撃ち出されたエネルギーの奔流は、アリーナの遮断シールドを容易く貫通した。さらに反動で照準が上に逸れ、アリーナを縦に切り裂いていく。

「セ、セシリア! 止めろ!」

「と、と、止められないんです! 命令を受け付けません!!」

「なんてもん造ってんのよおおおお!!」

「一夏、このままでは危険だ! あのエネルギーを零落白夜で斬り――」

「ぎっけんな箒俺に死ねってのか!」

「これって、外の人も危ないんじゃない!?」

「社長く……これはさすがに、やりすぎなんじゃないかなく……」

「……………」

たっぷり数秒も続いたその砲撃がようやく終わり、アリーナは見るも無残な有様になっていた。

その惨劇の中心で、エネルギーを使い果たしたブルー・テイアーズが解除されたセシリアは、随分見晴らしの良くなった青空を仰向けになつて眺めながら、顔を引き攣らせていた。

「一体何考えてんのよアンタは!!」

「大丈夫、ちゃんと射線上に人や航空機や衛星が居ないことは確認してあるから」

「そういう問題じゃねえよ!!」

「ていうか宇宙まで届いてたのかアレ!?!」

どう考えてもしばらくは利用不可になったアリーナを出て、面々は口々に如月社長を非難した。当然であった。

「大丈夫、セシリア?」

「しぬかとおもいましたわ」

「そうだな、私もだ」

全員かなり真剣に命の危険を感じたが、撃った本人であるセシリアはそれ以上であった。いまだに顔面蒼白、心を落ち着けるためにと渡された温かいハーブティーの入ったカップを持つ手はカタカタと震えている。

「…………ふう…………少し落ち着きましたわ」

ゆつくりとハーブティーを飲み干し、カップを置く頃にはどうにか震えも収まっていた。そしてキツつと目を細めて、如月社長を睨みつける。

「…………社長。確かにわたくしは火力を求めていましたが、あんな兵器では使い物になりませんわ」

「うん? おつかしいなあ、あれでも足りない?」

「火力はむしろ、強すぎるくらいでしたが…………しかし撃つのにあんなに時間がかかって、しかもその間移動ができないのはいいのですわ。ブルー・ティアーズは決して装甲が厚いほうではありませんから、簡単に撃墜されてしまいます」

「ふむん…………けどしっかり固定しないと、吹き飛んじゃうしなあ。今回も射線がほとんど真上までいつちやっつたし」

「なんで威力を抑えようっていう発想がないのかな…………」

しごくまっとうなセシリアの意見にずれた答えを返す如月社長に、シャルロットが深いため息を吐く。この面子では一番の（比較的とも言う）常識人である彼女にとって、如月社長との対話は疲れるのだ。

「まあおかげで、なかなか良いデータが取れたよ。これを反映していけば、オルコット君が気に入るような品ができると思うよ」

「あんなテストで、一体どんなデータが取れたと言うのですか……」  
「うふふ……それは。出来上がってからのお楽しみだねえ。大丈夫、ちゃんと少しずつ、ブルー・ティアーズにもアップロードしていくから」

「ですから、そのどこに安心できる要素があるのですかっ」

そうは言いながらも、セシリアは内心、かなり期待していた。

真改の専用機、如月重工製の第三代型IS「朧月」を見れば分かる。朧月は真改の反射神経や身体能力、剣術、果ては片腕という要素まで活かした高性能機。真改にしか扱えず、真改の能力と朧月の性能が絶妙に噛み合った、まさに「専用機」と称するに相応しい機体。

途中いくつかダメエピソードはあったものの、それをしっかりと造り上げてきたのだ。その実績があるのだから、期待してしまうのは当然であり、仕方がない。

「……さて。それじゃあ僕はこれで帰るとしようか。データを解析して、それを元にパーツを造らないと」

「次に来る時は、まともなモン持つてきなさいよ」

「まあ、あれだね。「まとも」っていうのは人によって違うからね」

「そんな恐ろしいことを言うなっ」

—— やっぱり、今からでもお断りしたほうが良いでしょうか。

そんなことを思いながら如月社長の背中を見送るセシリアは、しかしそんなことはできないだろう。なぜなら如月重工からセシリアに与えられる物は、技術支援だけではないのだ。

そのもう一つの恩恵は、今——

「ふんふん、なるほど。この子がそうですか」

「……………」

「……………」

セシリアたちが如月社長と会議(?)をしている頃。

セシリアにタオルを届けにふよふよと飛んで来たチビ上君は、布仏本音によつて捕らえられていた。

「ほうほう、いのつちにそっくりですなあ」

「……………」

「……………」

感心したような本音の言葉に、己はこんな丸い顔をしていないと言いたげに、真改が顔を顰める。

「せつしーにタオルをお届けなんて、健気だなく。こんなちつちやいんじや重いでしょうに」

「……………」

「……………」

そしてチビ上君は、自分のモデルとなった真改とバチバチと睨み合っていた。

「わあ、ほら、いのつち。この子、ほっぺがプニプニだよ」

「……………」

「……………」

本音が指先でつんつんとチビ上君の頬を突つつくが、チビ上君はまるで意に介していない。それよりも目の前の敵に、全ての意識を集中していた。

「ほら、いのつちも触ってみなよ」

「……………」

「……………」

本音に勧められ、しぶしぶながらも真改が手を伸ばす。

その指先が、チビ上君の頬に触れる直前――

「終止」

「!？」

バシツつと。

チビ上君が素早いパンチを繰り出し、真改の指を弾いた。

「おお〜？」

「……………」

「……………」

「……………」

睨み合う二人。すると、チビ上君は――

――ニヤリ。

「……っ!?!」

「……………」

挑発的な笑みを向けられ、真改の頭に血が上った。本来ならこんなに簡単に怒ることなどない。デフォルメされているとはいえ自分と同じ顔、同じ格好の人形が、自分を挑発してくる、しかもそれが如月重工製という特殊な状況により、本人が思っていた以上にイラツときたのだ。

「……………」

「終止」

バシツ。

「……………」

再び伸ばした指先が、再び弾かれる。

それにより、真改はついに激怒した。

「……………」

シュババババババババババババババババツ!

「終止終止終止終止終止終止終止終止終止終止しゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅ」

バシバシバシバシバシバシバシバシツ!

そして始まる攻防。百烈拳並みに高速連射される指を、ことごとく弾くチビ上君。

極めてハイレベルでありながら、実にくだらなかった。

「……………何をしているのですか?」

「……っ!?!」

そこにやってくる、チビ上君のご主人様、セシリア。真改が人形相手にムキになっている様を見て、少々困惑気味なようだ。

「ほいほい、せっしー。ちびっちがこれ持ってきてくれたよ」

「あら、タオルを持ってきてくれたのですか? ありがとうございま

す」

「……………」

真改との戦闘のためにタオルを預かっていた本音がセシリアに告げる。その言葉に嬉しそうに笑うセシリアと、そのセシリアに飛んで行くチビ上君。そしてタオルを受け取ると、すでに乾きはじめてしまっていた汗を丁寧に拭いた。

「ふふっ、ありがとうございます」

「せっしー、楽しそうだね」

「……………」

人形遊びに夢中になる感覚など分からん。そう言うかのように、ジト目でセシリアを眺める真改。その視線に気づいたセシリアが、笑顔のまま真改に向き直る。

「真改さん、この子、すごいんですよ。色々と気遣いができるのもそうですが、そういうのとは別に、すごい機能があるんです」

「へえ、どんなの？」

「それはですね……さあ、チビ上さん」

「応」

その瞬間、チビ上君がくるくると回りだし、魔法少女が変身するよいうな光をまとい。

その光が収まると、そこには――

「……………!?!」

「わあ、すごいー!」

――学園祭で真改が着た物と同じメイド服に身を包んだ、チビ上君がいた。

「なんと、変身機能があるんですっ! ブルー・ティアーズのデータに残っているものはもちろん、インターネットを検索して、そこから色々な衣装を再現できるんですよ!」

著作権的にかなり問題のありそうな機能だが、そこは如月重工なので気にしても無駄だと判断された。そんなことよりも、機能そのものが遥かに問題であった。

「たとえば、こんなのか……」

「またも変身エフェクト。そして衣装は純白のウエディングドレスに変わる。」

「こんなのもごいましてよ!」

三度変身エフェクト。今度はロングのワンピースに麦藁帽子という真夏のお嬢様スタイル。

「わく、面白いね〜!」

「ふふふ……チビ上さんの変身は108以上ありましてよ!」

「……………」

真改はいよいよ、本気でこの人形を破壊しようかと思いはじめた。所有権は如月重工からセシリアに移っているし、今なら……いやいやしかし友人の物を勝手に壊すというのも……。

そんなことを悩んでいる真改をよそに、セシリアと本音はチビ上君人形の着せ替えショーを楽しんでいた。

## 第67話 宣戦

「そういえばさ」

放課後。

各々訓練や宿題を終えた己たちは食堂に集まり、皆で夕食をとっていた。毎日違う、それでいて味と栄養バランスを極めて高いレベルで両立させている日替わり定食に舌鼓を打っていたところ、一夏がふと思い出したように切り出したのだ。

「今度唐沢さんが俺の誕生日パーティー開いてくれるんだけど、みんな来るか？」

「……………」

突然、フォークやスプーンを止めてピタリと硬直した者が三人。セシリア、シャル、ラウラである。

「……一夏……」

「今……」

「なんておっしやいました？」

「え？ いやだから、今度俺の誕生日パーティーやるんだけど、来るか、って——」

再度言うと、三人の首がグルンと同時に動き、箒、鈴、そして己を睨み付けた。

「どういうことだ？」

「なんで、今まで黙ってたのかな？」

「まさか、その日が過ぎるまで黙っているつもりだったわけではありませんわよね？」

静かな、しかしドス黒い覇気のこもった問い。箒と鈴が視線を顔ごと逸らす。

「だ、黙っていたわけではない。ただ言うタイミングが分からなかったというか……」

「そ、そうそう。みんな最近、訓練忙しそうだったし。余計なこと言わない方が良くないかなー、って……」

「……訊かれていない……」



一応、理由を答える。しかしどうやら、言い訳と思われたようだ。眼力が凄まじいことになっている。

……少し怖い。

「ふうくん……まあいいや。それで一夏、誕生日っていつなの？」

「え？ ああ、9月27日だよ」

とても「まあいい」という顔ではないものの、表面上は冷静なシャルの質問に一夏が答える。するとセシリアは上質な革表紙の手帳を取り出した。

「そういうことは早めに言っていただけませんと。9月27日……日曜日ですわね。……あら、ちょうど予定が空いてますわ」

その手帳をテーブルの上に置くと、セシリアの肩に座っていたチビ上が飛び降りて、どこからともなく取り出した赤ペンで九月二七日に二重丸を付けた。

……その日の欄には予定がビツシリと書き込まれていたように見えたのだが、どれも二重線で消されてしまった。

「私も予定を空けておこう。唐沢さんには参加すると伝えておいてくれ。……ふむ。そういえば、マスターの誕生日を訊いたことはなかったな。いつだ？」

「……十一月九日……」

素直に答えると、残る二人も手帳を取り出し、予定表に書き込む。するとシャルが、ん？ と顔を上げ。

「……あれ？ シンって……一夏や箒よりも、年下？」

「……ああ」

「……」

年下……と言えば、そうなのだろう。学年は同じだが、生まれた時期は確かに二人よりも遅い。一夏と比べれば一月半、箒とならば四ヶ月も遅い。

だからなんだ、と言いたいところではあるが。

「そうでしたの……意外ですわね」

「……？」

「いや、ほら、シンってなんか、お姉さんみたいな雰囲気があるじゃない

い？ みんなに頼られてるし……」

「うむ。てつきり、誕生日はかなり早いものと思っていたぞ」  
「……………」

それがどうした。他がどうかは知らんが少なくともこの国では、学年が同じなら皆「同い年」だ。誕生日が四月だろうが三月だろうが変わらない。

己はそう思っていたのだが、皆は違うらしかった。

「じゃあさ。なんでシンは「姉貴分」なの？」

「……………」

……そういえば、深く考えたことはなかったな。己の主観からすれば幼なじみたちは皆かなりの年下で、つい弟や妹のように思ってしまったっていたのだが。逆に周囲が、自分よりも誕生日が遅い者に年下のように扱われることを受け入れたというのは、少々不思議ではある。「うむ……なんというか、落ち着いていて大人びた雰囲気がある、というのももちろん大きいのだが……」

腕を組み眉根を寄せて、悩むような声を出す筈。それに頷きつつ、鈴と一夏が続ける。

「ある意味、もっと単純な理由なのよね」

「シンは背が高かったんだよ」

「……………」

……そ、そんな理由だったのか……もつとこう、頼りがいがあるとかだと思っていたのだが……。

「背が高いって……確かに高いですが」

「きよ……織斑先生と比べてもそれなりに差があるほどだしな」

「日本だと珍しいよね、170センチ以上ある女の子は。……けど、それでも一夏の方が背は高いよね？ ちよつとだけど」

「最近ようやく追い越したんだよ。ここ一年くらいかな。それまではシンのほうが背が高くて、特に昔は結構差があったんだ」

「「へえ〜……………」」

「……………」

しかしそう言われてしまうと、最近努めて気にしないようにしてい

たことが気になってしまおうではないか。

……おのれ一夏、昔はあんなに小さかったクセに……。

「いや、嬉しかったなあ。目標の一つだったんだよ、シンを身長で越えることは」

「ふふ、男の子らしい目標ですわね」

「……………」

ふん、今に見ている。己とてまだ身長は伸び続けている、いずれ追い抜き返してやる。

……最近伸びが少々悪くなりつつあることと、一夏が順調に伸び続けていることを考えると、かなり不利な形勢であることは確かだが……。

「……………な、なんだよ」

「……………」

……………今に見ている。

そして夜。

ISではなく生身の鍛錬を終え、シャワーで汗を流した後水分を補給しようとしたのだが、迂闊にも冷蔵庫内のスポーツドリンクを切らしていた。ただの水分補給であれば洗面所の水でもいいのだが、運動後は水分以外にも色々と不足するものだ。明日に疲労を残さないためにも、やはりスポーツドリンクの方が良い。特にこの学園で売られている物はかなり上質で普段から愛飲しているので、買い溜めしておかねば。

というわけで、既にベッドで寝息を立てている本音を置いて部屋を出た。

(……………む……………)

すると廊下の向こうから、一夏が歩いて来ていた。廊下には己たちしかおらず、当然、一夏と目が合う。

「お？ シン、珍しいな。こんな時間に部屋出るなんて」

「……………」

この時間になると、普段は寝る準備くらいしかやることがない。他の者たちは仲の良い者の部屋に遊びに行ったりしているようだが、己はそういうことをしたことはない。

なので一夏の言う通り、こうして出歩くのは珍しいことではある。

「どうしたんだ？」

「……水……」

「水？ ああ、スポーツドリンクかなにか切らしたのか？」

「……………」

頷いて答える。しかしコイツも、こんな返答でよく分かるものだ。付き合いが長いだけはあるな。

「そっか。んじゃ、湯冷めしないように気をつけろよ」

「……………」

偶然会っただけで、特に用事があるわけでもない。一夏が出歩いている理由にも興味はないし、そのまますれ違おうとしたのだが――

「……………」

「……な、なんだよ」

ふと、先の食堂での会話を思い出してしまった。目の前に立つ少年の頭は、己のそれよりも少し――ほんの少しだけ、高い位置にある。

……………むう。

「な、なんだよ、シン」

「……………」

……生意気な、一夏のクセに。十年前はカルガモのように己や千冬さんの後にちよろちよろと付いて来ていたクセに。

……………一夏のクセにっ。

「ど、どうしたんだよ」

「……ふん……」

我ながら負け惜しみのように鼻を鳴らして、つつい大きくくなってしまふ歩調でその場を去った。

「な……なんだってんだよ……」

……………おのれ、今に見ている。

翌朝。

食堂に集まった皆でテーブルを囲み、朝食をとる。話題に上がったのは、一夏の誕生日のことだった。

「そういえば、一夏さんの誕生日は9月27日ということでしたが。その日は「キャノンボール・ファスト」の大会でしたわよね？」

「ああ。誕生パーティーと、キャノンボール・ファストの祝勝会——に、なればいいんだけど。とにかく、兼ねてるんだ。だから、大会のあとになるから、疲れてるだろうと思うけど……」

「そんなのへっちゃらだよ。絶対行くから」

「お、おう。よろしくな」

「……………」

さて。

「キャノンボール・ファスト」というのは、大々的な国際大会も開かれるIS競技のことだ。これはISの最大の特徴一つである機動力を競う。スラスタの増設や高機動パッケージにより機体の機動力を極限まで高め、決められたコースを駆け抜ける。無論最速でゴールした者が勝者となるが、キャノンボール・ファストでは相手の妨害が認められる。所謂バトルレースだ。モンド・グロツソや国際大会の歴代優勝者たちの中には、他選手を全て撃墜して優勝した猛者もいる。それについては賛否両論あるようだが。

そのキャノンボール・ファストだが、一夏の誕生日に市の特別イベントとして開催される。それにIS学園の生徒たちも実習目的で参加するのだ。学園の外にあるIS用競技場で、一般生徒と専用機持ちに別れて競うことになる。

「しかし、キャノンボール・ファストか。一夏、お前は初めてだろうか？」

「ああ。どんな感じなんだ？」

キャノンボール・ファストもある程度経験しているだろうラウラに、一夏が尋ねる。それに対する答えは早かった。

「超高速戦闘だ。目を回すなよ」

「……ええつと、それだけ？」

「それだけだ。いくら説明したところで、実際に体験しなければ感覚は分からん。詳しくはその後教えてやろう」

「なるほど……訓練あるのみってか」

「おりむーふあいとく」

「……………」

超高速戦闘か……ISでは臨海学校での一件が始めてだったな。だが昔のことも含めればかなり経験がある、特にVOBでの戦闘は役に立つだろう。

……まああれは、とても旋回が出来るような代物ではなかったが。コーナリングが課題だな。

「ま、どんな感じかはわからなくても、対策くらいはしておけるでしょ」

「おう。白式はパッケージないし、スラスタも増やせないからな。エネルギー配分の調整とかだろ？」

「ええ。キャノンボール・ファストでは、まず後退することはありませんから。左右の移動に関しましても、スラスタを使うより風を上手く受けて曲がるほうが負担も消費も少なく済みますわ」

「そっか、かなりスピード出るもんな。空気抵抗もかなりのものになるわけか。単に邪魔物扱いするのはもったいないよな」

「スカイダイビングなんかだと、身体全体で風を受けて移動するからね。鳥や戦闘機なんかも空気抵抗を上手く使って飛んだり曲がったりしてるわけだし」

「その点では、白式はかなり有利だな。雪花なら、空気抵抗の調整はお手の物だろう」

箒の言う通り、雪花の力は絶大な防御力だけではない。雪花——白式を守る無数のナノマシン、その一つ一つが気流を操作し、機動を助けるのだ。確かにキャノンボール・ファストでは相当な強みとなるだろう。

「みんなはどうするんだ？」

「あたしは本国から、キャノンボール・ファスト専用の高機動パッケージが送られることになってるわ」

「専用？ そりゃすごいな。セシリアのストライク・ガンナーは、高機動パッケージではあるけど専用ではないんだよな？」

「ええ。ですが少々調整すれば、専用パッケージにも劣ることはありませんわ」

胸を張って腰に手を当てる、いつものポーズ。

……様になってはいるが、恥ずかしくはないのだろうか。毎度のことではあるが。

「ラウラは？ やっぱり本国から装備が来るの？」

「ああ。キャノンボール・ファスト専用ではないが、姉妹機のシユヴァアルツェア・ツヴァイク「黒き枝」の高機動パッケージを流用する」

「速そうだな。レーゲンのことを考えると、ツヴァイクもかなり高性能なんだろう？ その高機動パッケージってどんなだ？」

「悪いが、敵対勢力に情報を漏らすほど愚かではない。詳細は実戦で見極めるか、若しくは——自力で調べてみせるんだな」

ニヤリと笑うラウラ。自力で調べるとは、ドイツの軍事機密にハッキングしろということだろう。出来るものなら、と付くが。

……そんなことをする馬鹿がここにいないことは分かっているだろうに、まったく。

「そういうお前こそどうなんだ、シャルロット」

「僕は「ラファール・リヴァイヴ」の増設スラスターを使おうと思ってるよ。ラファールシリーズは元々速度関係を増設しやすくなってるからね。まあ細かいところは、まだ悩んでるんだけど」

「さすが、ラファール疾風の名を冠するだけはあるな」

ふむ、シャルのラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは第二世代型だからな。新型の装備こそないが、信頼性は高い。シャル自身も機動に関する能力は高い、これは手強い相手になるな。

「それで、箒は？」

「う、む……紅椿は展開装甲の調節次第で、かなりの機動力を確保できるんだが……燃費が、な」

「ああ〜……」

紅椿は圧倒的な性能を持つているが、それを発揮するためには膨大なエネルギーを必要とする。燃費の悪さで言えば白式以上かもしれない。

……正直、実戦的とは言い難いほどだ。東さんは何を考えて、こんな極端な機体にしたのか。まさか本気で、筭なら紅椿を使いこなせると思っっているのか？ あのままでは、千冬さんですら難儀するだろうに。

……燃費の悪さを補う「何か」が、紅椿にはある。そう考えるのが自然だろう。

「……ところで、シンは——」

「……月船……」

「いや、それはわかってるんだけど」

「アレ、ルールに引つかからない？」

「……………」

……言われてみれば。

朧月の高機動パッケージである月船は、単純な推進力だけなら図抜けている。そして旋回能力に関しても、分離飛行モードを利用すれば確保出来る。

しかしこの分離飛行モード、文字通り朧月から分離して飛行する。操作もほぼ朧月が行うため、自立機動兵器に近い。

……大会のルールはどうなっていたか。自立機動兵器の持込は可能だったか？

「……不可だ。自立機動兵器はキャノンボール・ファストでは凄まじい脅威となる。前を飛んでいる敵に後ろから撃たれるのだからな。単純な戦闘なら「戦術の一つ」で片付くのだが、キャノンボール・ファストはあくまでレースだ。先頭を飛ぶ者が追いつかれてもいないのに攻撃できることも、逆に後続が追いついてもいないのに攻撃できることも望ましくない」

「そりやそうか。やりたい放題になっちまうもんな」

「わたくしのストライク・ガンナーも、ブルーティアーズ全機を機体に



固定するからこそ使えるわけですから」

「……………」

……困ったことになった。月船の分離が出来ないので確実にコースアウトだ。かといって月船なしでは、朧月が元々高機動型とはいえ少々不安が残る。なにせ皆も機動力を高めてくるわけだからな。(……………どうするか……………)

社長にまた何か装備を頼むことになるか。…………不安だ、月船なしで挑む以上に。

「それとね、私はね」

「いやアンタはいいから」

「ええ〜!？」

「うう〜ん…………正直に言っちゃうと、本音がキャノンボール・ファストで活躍するのは無理なんじゃないかな…………」

「私だって、ちゃんと訓練してるんだよ〜?」

「適性の問題だな」

「お前は援護は上手いんだが、それ以外はちよつと、な…………特に高機動戦闘は、その、なあ…………」

「むう〜。いのちからもなにか言っただけであげてくださいよ〜」

「…………無理…………」

「え〜!？」

シクシク泣き出した本音。まず間違いなく嘘泣きだろう。その肩をポンポン叩いているチビ上が滑稽だ。しかしなぜコイツは本音にだけは懐くんだ、主人でもないのに。

「う〜ん、みんな色々考えてるんだな…………」

「そりやそうでしょ。キャノンボール・ファストはそれ単体の国際大会もあるし、モンド・グロツソの正式競技にもなってるのよ。ここで活躍すれば、かなり名前が売れるんだし」

「もつとも、ここに居るのは名が売れるどのよりも、単に負けたくないというだけの理由しかない者だろうがな」

箒の言葉に、全員（本音は除く）が不敵な笑みを浮かべる。

…………そう。ここに居るのは、目先どころか将来の利益よりも、何の

役にも立たない自己満足のために全力を尽くすような大馬鹿者ばかりだ。

だからこそ面白い。富も名誉も関係ない、「勝利」というたった一つの報酬こそが、欲しくてたまらない。

——まったく。どいつも、こいつも。

「おい、お前たち！　いつまで食べているつもりだ!?　食事は素早く効率的にとれ、何度も言わせるな！」

「やばい、千冬姉だ」

「急ぐよく。ずるずるずる〜」

「お茶漬けを音を立ててすすするなっ」

「……………ていうか何よそれ」

「烏龍茶漬け鮭の切り身と生たまも付き〜」

「……………何よそれ」

「しかも噛んでるし……………」

……………結構旨いのだがな。

「ふう、今日の訓練もきつかったな……………」

キャノンボール・ファストも近づき、そろそろ超高速戦闘の訓練が始まる。その前に機動の基礎を徹底的におさらいしよう、楯無さんの特訓も厳しさを増してきた。今までの下積みのおかげでどうにかこなせているが、やはりきつい。明日もあるし、早いとこ寝よう。

ガチャリ。

「お邪魔してるよ、織斑君」

バタン。

「…………………………」

……………オーケー、ここは俺の部屋だ、それは間違いない。なんかこうして部屋を確認するのも何回目だろう、だがこれほどまでに殺意を込めてドアのプレートを睨みつけたことはなかった。

(なんで……………如月社長変態野郎が俺の部屋に居るんだよっ……………!)

もう一度ドアを開ける。さっきの不気味な薄笑いが幻覚だったことを祈りながら。

けど祈りなんてのは、大抵無情に踏みにじられるもんだ。今回もそうだった。

「邪魔してるよ、織斑君」

「邪魔だって自覚あるなら出てけよ」

「まあまあ、そう言わずに」

ほんつつつつつとうに嫌だが、コイツが俺の部屋に居るなんてはらわたが煮えくり返るが、どうにか抑える。コイツは無駄なことはいくらでもするが、しかしその中には必ず、必要なことが含まれている。

……マジでムカつくなコイツ。

「なんの用だよ」

「うふふ。ちよつと君に話しておくことがあつてね」

「話、ね」

「まあ、座りたまえ」

そう席を勧められる。……ていうかなんだよこのバカデカイ丸テーブルは。どうやって部屋に入れたんだ、明らかにドア潜れねえだろうが。

「……で、話つて?」

「うん。この前の学園祭で、君を襲った連中のことだよ」

「……っ!」

……ふざけやがって、よりによってその話か。

怒りが加速する。なんせ奴らは、シンの――

「楯無君から、どこまで聞いているかね?」

「……奴らが亡国機業とかいうテロ集団で、俺のISを狙つてて、それから守るために楯無さんが俺の部屋に同居してて、学園祭じゃ俺だけじゃなく、シンのことも襲つた、つてところまで」

「ふむ、大体聞いてるみたいだね」

それは先日、楯無さんから聞いたことだった。俺が未熟でなければそんなことも必要なかったんだろうが……楯無さんの特訓がなければ、そして楯無さんが助けてくれなければ、やられてた。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ」

「どうでもいい？ どうでもいいだど!?! 連中は、シンの——」

「織斑君」

「……っ」

激昂しかけた俺をいさめる社長。

その声が、眼が、あまりに真摯だったから。

俺は振り上げかけた拳を握り締め、席に着いた。

「どうでもいいんだよ、織斑君。それは過去のこと、終わったことだ。僕は今、これからどうするかを話しに来てるんだよ」

「……くそっ」

……正論だ。論点から外れた内容は、確かに——どうでもいい。少なくとも、重要なことではない。

感情的になるな。怒りや憎しみに吞まれるな。それは判断を、そして剣を鈍らせる。

「じゃあ、続けるよ。僕がここに来たのは、君に協力してほしいから」  
「協力って、奴らをぶっ潰すことをか？ だったらわざわざ来る必要なんかない、亡国機業はもう、俺の敵だ」

シンの腕を奪った犯人がわかった以上、野放しにするつもりはない。いつか必ず捕まえて、唐沢さんたちの前に引きずり出して土下座させてやる。

「それは重畳。なら次は、君になにをしてほしいのかだけど」  
「なんだ？」

「今はまだ、何もなくていい。「その時」のために、力を蓄えておいてくれたまえ。正直今の君じゃあ、使い物にならないからねえ」  
「ぐっ……」

遠慮なさ過ぎるその言葉にまた怒りがこみ上げてくるが、しかし間違いない。

学園祭で襲ってきたオータムとかいう女はかなり強かった。アイツと同等以上のエージェントが他にもいるなら、今の俺じゃあ瞬殺されるのは目に見えている。

「……その使い物にならない俺に、一体なにを期待してるんだ？」

「もちろん、君の伸びしろにさ。聞けば君は、目覚しい成長を遂げているそうじゃないか。織斑先生の弟君なだけはあるよ」

「それだけじゃないんだろ、どうせ」

「うん。僕は君の将来に期待しているけど、それと同じくらいに、君の専用機に期待してるんだよ」

「……白式に？」

確かに白式は、基本性能は紅椿に次いで高い。けど武器が雪片ブレイド式型一本しかないトングデモ機体だ。コイツが期待するほどの代物でもないと思うんだが……。

「正確には、その単一仕様能力——「IS殺し」とも言える、「零落白夜」にね」

「……そりゃ確かに、零落白夜は強力だけどさ。単純な威力なら、シンの「白銀月夜」のほうが上じゃないか？」

零落白夜が相手の防御力を無視してダメージを与える必殺なら、白銀月夜はどんな防御力も力づくでぶち破る必殺だ。零落白夜が強力なのはISの防御がシールド・バリアに頼つてるところが大きいからであつて、IS以外にも大ダメージを与えられる白銀月夜のほうが使い道は多いはず。まあ白銀月夜にも、色々弱点はあるみたいだけど。

「君の言うとおり、白銀月夜なら、どんな物質だろうと一瞬で蒸発させられる。それだけの熱量がある。」

「……けどもし、相手の防御が、白銀月夜を遥かに超える「エネルギー」によるものだったら？」

「……マジ、かよ……」

そんな、まさか。

あの白銀月夜を防ぎきるほどのエネルギーを、持つてるってのか……？

「その可能性が高いんだよ。ほぼ100パーセントと言ってもいい。……白銀月夜じゃあ、亡国機業の本拠、その守りを突破できない」

「……だから、必要なのか。あらゆるエネルギーを消滅させる、零落白夜が」

「そういうこと。君にはその守りを切り裂いてもらいたい。そしてそ

の守りを抜きにしても、亡国機業は強大だ。どれだけ強大なのかもわからないほどにね。だから、君が役目を果たすまで護衛を付ける、なんて余裕はない。君には、自分の身を自分で守れるくらいの力をつけてもらわなきゃ困るんだよ」

「……………」

つまり、俺は城門を突破するための破城槌ってわけか。けどそれを守り動かすだけの人手はないから、自力で走って城門まで辿り着け、と。

「僕が君に求めるのはそれだけだよ。敵を倒せとか本拠を制圧しろとか、そういうことは要らない。それはこっちで、あるいは他の人に頼むからねえ」

「俺以外にも、こんな話をしてるのか？ ……まあ、当然か」

「いや、今はまだ誰にも。一応楯無君も手伝ってくれてるけど、彼女とは前から付き合いがあるからねえ。この件のためだけに、っていうのは君が最初だよ」

なぜ、俺が最初なのか。いくら必要だと言っても、シンのことがあるんだから俺が協力するのはわかってただろう。後回しにしてもよかったはずだ。

……何故、俺なのか。

「僕はね、織斑君。亡国機業が嫌いだ。憎いと言ってもいい。奴らは僕と君、共通の怨敵というわけだ。だからこうして、まず君に、この話しを持ちかけてる。」

……さて、織斑君。改めて訊くけど——僕たちに、協力してくれるかね？」

「……………」

仲間、ではない。ただお互いの目的が一致し、そしてその目的のためにはお互いの力が必要だというだけ。

信用も信頼もない。ましてや友情や仲間意識なんて有り得ない。だが、それでも。

この男は、絶対に裏切らない。

「……………いいぜ、やってやる。俺の目的のために使われてやるよ。俺の

目的のために使ってやるよ。

——ぶっ潰すぞ、亡国機業を」

「……うふ、うふふふふ……！ それじゃあ頑張つて、使えるようになつてくれたまえよ、織斑君。ああそれと、このことは他の人には言わないでね。僕から正式に頼まなくちゃいけないことだからねえ」

「千冬姉にもか？」

「もちろんだとも。織斑先生にも協力してもらおうと思つてるからねえ。まあ単純に、君の保護者である彼女に無断でこんなことをしてるなんて知られるのは困る、っていうこともあるけれどね」

こうして、如月社長との意外すぎる大真面目な話は終わった。もう用はないとばかりに立ち上がり、不気味な笑い声を残して、社長は部屋を出て行つた。

「……亡国機業、か」

それは俺にとつて、一番大事なことじゃあない。それよりもっと、やらなきゃいけないことがある。

けどそのために、ケリをつけなきゃならない。俺の決意、その原点である罪に。

「……お前は、こんなことは望まないんだろうな……」

こんな危険なこと、アイツは反対するかもしれない。それに、千冬姉も。

けどどうせ、二人とも、自分だつてやるに決まつてる。

「……ごめんな。けどこの我侭だけは、通したいんだよ」

怒らせるだろう。心配させるだろう。

それでも、これだけは。

どうしても——

「……ていうかこのテーブル持つて帰れよ！ 邪魔だよこんなデカイの部屋のど真ん中に置かれたら！」

ふと気づき慌てて如月社長を追いかけたが、その姿は見つからな  
かった。

……どうすんだよこれ。



## 第68話 飛翔

「はい、みなさん。準備はいいですね？ 今日超高速飛行の訓練をしますよー」

「「「はい」」」」

「……………」

いよいよ授業でも、キャノンボール・ファストに向けた内容が始まった。ISスーツに着替えた生徒たちが、山田先生の前に整列する。

「えーっと、キャノンボール・ファストでは特別に、一般生徒さんたちにもISの増設スラスターなどが貸し出されます。打鉄、ラファール、どちらのもありますよ。種類も豊富ですので、みなさん自分に合った調整をしてくださいね」

「「「はい」」」」

「……………」

普段の貸し出しでは、変更出来るのは武装くらいで、スラスターや装甲などは通常の物を使わなければならない。それらを下手にいとると事故の確率はね上がるそうだ。

専用機持ちでも機体の調整程度までしか出来ず、それ以上は専門のスタッフが必要となる。もっとも生徒の中には、その専門のスタッフ顔負けの知識と技術を持ち、全て自分で行う者もいるようだが。

「ではまずは、専用機での超高速飛行を見てみましょう。訓練機とは色々違いますけど、参考にはなると思います」

「「「はい」」」」

「えーっと、それでは……………オルコットさん、井上さん、お願いします」

「お任せください」

「……………承知……………」

指名され、機体を展開する。瞬く間に見慣れた銀の装甲が現れ、己の体を包み込んだ。

その背中には、朧月の通常装備である大型スラスター〔水月〕の他に、翼のようなスラスターが取り付けられていた。

「あら……それが真改さんの、キャノンボール・ファスト用の装備ですか？」

「……応……」

「……なんだか、思ったよりも普通そうすわね」

「……」

見た目はな。

……見た目は、な……。

「どういった性能なのですか？」

「……小型の月船……」

前進に使い切っている月船の推進力を、左右にも向けた物、といったところだろうか。最高速では大きく劣るがそれでも出力は十分、なにより旋回能力が劇的に向上している。直線でもコーナーでも、他の機体に遅れをとることはないだろう。

……そんなまともな装備であることが、逆に怖い。

確か、名は――

「……〔三日月〕……」

「あら、素敵な名前ですわね」

「……そうか……？」

普通だと思うが。翼の形状をなぞれば三日月の形になる。捻りも何もない。

「では、簡単に説明します。皆さん、よく聞いてくださいねー」

「……はい……」

「まずオルコットさんの高機動パッケージ、「ストライク・ガンナー」。これは本来強襲用の装備で、スペック上の機動力はかなり高いです。ヒット・アンド・アウェイが戦術の基本となりますので、旋回もバッチリです」

ストライク・ガンナーは、以前にも見たことがある。レーザービッド四基、ミサイルビッド二基の計六基を機体に固定し、追加スラスターとして用いるのだ。元々が自立機動兵器であるビッドは小回りが利き、六基合わせれば推進力もかなりの物。バランスが取れた名品と言えるだろう。

「ふふ……このストライク・ガンナーなら、朧月の速さにも引けはとりませんわよ！」

「……………」

面白い、その機動力、見せてもらおう。

そして朧月も、三日月により機動力を強化している。容易く負けるつもりはない。

「では次に、井上さんの三日月です。もちろん如月重工製ですね」

「……………」

「えーつと、スペックデータは……『お代は見てのお帰り』……?」

「……………」

「……………」

……意味分かって使っているのか、あの社長は。いや、学のある人物ではあるから、意味は分かっているのだろうが……曲解というか、自分に都合良く捻じ曲げて認識している恐れがある。

ちなみに「お代は見てのお帰り」とは、代金を払うのは見てからでいい、さらには気に入らなかつたら金を払わなくていい、といったような意味だ。つまりは「必ず満足させ、金を払いたくさせるだけの自信はある」という、一種の売り文句である。

「……………」え、えつと、説明になってませんでした……とにかく、やつてもらいましょうっ！ さあ、オルコツトさん、井上さん！ まずは中央タワーの周りを一周してきてください！」

「はいー！」

「……………」

指示を受け、飛び上がる。同時に視線を、遠くに聳える巨大な塔へ向けた。

ここ、第六アリーナは、IS学園のモニュメントである中央タワーと繋がっている。中央タワーは記念碑であると同時に高性能な訓練装置であり、加えて第六アリーナ自体の広大さとあいまって、高レベルかつ大規模な訓練が可能だ。自主訓練の場所として人気が高く、予約はかなり先まで埋まっている。授業でも主に高速機動訓練に使われるため、一年生である己たちがここを使うのは今日が初めてだ。

広い空を飛ぶというのは、なかなか爽快感なものだ。スキンバリアー越しに頬を撫でる風も心地よい。遊泳飛行がてら、早速三日月の性能を試してみようか。

そう思つてスラスタを噴かそうとしたら、セシリアが不思議そうに尋ねてきた。

「あら、真改さん、高速機動用の補助バイザーは使わないんですの？」

「……無用……」

「そ、そうですか……人間離れしていますわね……」

「……………」

セシリアの言う補助バイザーとは、ハイパーセンサーの性能を強化、あるいは特化する物だ。

拡張領域を使う代わりに、全体的な性能を向上させる万能型。

視認・ロック可能な範囲を犠牲に、距離と精度を強化した狙撃用。

ロックオン範囲と速度を徹底的に強化した、高速近接戦闘用。

基本性能を捨て、障害物の透視能力や電波障害への抵抗力を得た索敵・支援型。

そして搭乗者への負担は大きいが、視覚情報の処理・伝達速度を高めた高速機動用。

その他様々な特性を持つ補助バイザーを目的に応じて使い分けるのが、一流のIS乗りである。

が、セシリアの言う通り、キャノンボール・ファスト級の高速競技には必須であるはずの高速機動用のバイザーを、己は使っていない。そもそも、朧月には補助バイザーが搭載されていない。

何故か？ 理由は主に三つ。

一つは、己には複数の補助バイザーを使い分けるような器用さがないうということ。機体から送られてくる情報の質がころころと変わらなくても対応出来ない。

もう一つは、朧月は元々、接近戦以外が出来るような性能を与えられていないこと。いくらバイザーによる補助があっても、機体がそれを活かさないのでは意味が無い。

最後に、高速機動用まで必要ない理由は——己の動体視力と反射神

経は、超音速機動にも十分追いつけるからだ。

もつとも、それはリンクスむちにとつては特別でもなんでもない。ネクストは軽量機であれば音速など容易く超えるし、かつての己の愛刀も、一瞬であれば時速三千キロに達することさえあった。そんな機体を実戦だけでなく、シミュレーターによる訓練で幾度と無く操るリンクスの感覚は、自然と研ぎ澄まされる。

「……まあ真改さんは、銃弾すら斬るような方ですし。自分が銃弾並みの速度で動いていても、周りが見えるのでしょよね」

「……………」

そういうことだ。操縦技能が追いつくかは別にして、な。

「さて……………それでは参りましょうか」

「……………応……………」

『オルコットさん、井上さん。今回は飛行だけで、攻撃とかはしないでくださいいね?』

「了解しましたわ」

「……………承知……………」

オープン・チャンネルに流れてくる山田先生の声に返答する。

スラストターの準備は完了、いつでも最大出力で起動出来る。

『それではっ。3……………2……………1……………GO!』

瞬間、周囲の景色が後ろへと吹き飛ぶ。その中で、セシリアだけが己の横に並んでいた。

『加速力はほぼ直角ですわね……………少なくとも直線で置いていかれることはなさそうで、安心しましたわ』

「……………」

超音速飛行中に普通に話しても聞こえないので、オープン・チャンネルでの会話に切り替える。その直後に聞こえたセシリアの声は、どことなく嬉しそうだつた。本来機動力の高くないブルー・テイアーズが、朧月と並んで飛んでいる——それが嬉しいのだろうか。

『さすがにお上手ですね、お二人とも。では、チェック・マーカーを表示します。できるだけ多く潜ってくださいいね』

「……………っ!」

中央タワーに近づくと、その周囲に赤い円が複数現れる。いつだったか、一夏と弾がやっていたレースゲームで似たような物を見た。この中を通れ、ということなのだろう。

『楽しそうですね……行きますわよ、真改さん！』

『……応……！』

最初の円——チェック・マーカーへと飛び込む。通過した瞬間、円の色が青色に変わった。朧月のハイパーセンサーの表示に従い視線を移すと、次の円が浮いている。

『お先に♪』

「……っ！」

己に先んじて、セシリアが円へ向かう。加速力が同等でも、旋回からの立ち上がりには差が有る。……操縦技術では、まだ追いつけんか。(……ならば……！)

技術で劣るのは、元より承知。その不足を補うために、特化した力を求めた。

そして如月重工は、己の願いを酌んでくれたのだ。その作品である、朧月ならば——！

「疾……っ！」

水月と月輪の同時起動。加速しつつ、素早く旋回する。それにより、セシリアの後ろにぴたりと付いて、二つ目の円を抜けた。

『ふふっ……負けず嫌いですね、真改さん……！』

『……当然……！』

これは試合などではない、デモンストレーションに過ぎない。ストライク・ガンナーと三日月の、ただの試運転だ。

だが、それでも。

ただ無様に、負けるつもりなどない。

『わわっ、井上さん!?! 無理しちゃダメですよ!?!』

『承知っ！』

『絶対承知してませんー！』

山田先生の悲鳴を無視し、更に加速。三つ目の円を潜る頃には、セシリアと並んでいた。

その己の姿を見て、セシリアの笑顔が上品な貴族のものから、戦士のそれへと変わる。

『では、踊りましょう……わたくしのステップに、付いてこれまして!?!』

『……上等……!』

更に勢いを増し、四つ目の円へ向かう。どちらが遅れることも、先んじることもない。

まったくの互角の勝負。二人で螺旋を描くように飛翔する。

『真改さんと初めて戦った時でしたか……わたくしが円舞曲ワルツに誘ったのは』

『…………』

そんなこともあったか。まだ半年も経っていないのに、妙に懐かしい。

あれから己も、セシリアも腕を上げた。あの時は打鉄で勝ったが、今ではそれは不可能だろう。朧月でもかなり苦戦するのだから。

『ふふ……こんなステップでは、真改さんは満足できませんわね。ではもう少し、テンポを上げましょうか』

『……応……!』

ストライク・ガンナーの、三日月のスラスターが雄叫びを上げる。最大出力の噴射により、旋回中でありながら速度を増していく。そして、その先には――

『山田先生、なかなかスパルタですわね……!』

『……っ!』

連続して並ぶ、赤い円。セシリアの言う通り、この速度で全て潜るには厳しい配置だ。

だが、減速するつもりなどさらさらしない。それはセシリアも同じなようで、二人して顔を見合わせ、ニヤリと笑う。

『さあ――』

『――行くぞ……!』

ゴウツ! と、翼が風を切る。三日月の噴射口が向きを変え、素早く旋回する。

『はっ！』

「疾っ……！」

塔の周囲を、螺旋階段を上るように周りながら上昇していき、次々と円を通過する。見る見るうちに地上が遠のき、ついに塔の頂上に辿り着いた。

『さすがです、お二人さん！ では、戻ってきてくださいー！』

上昇から降下へ。しかし円はまだ残っており、それどころか配置はさらに難易度が上がっている。

——面白い。

『もちろん、全部潜りますわよね？』

『……当然……』

息をつく間もなく旋回を繰り返しながらの高速飛行。全身にかかる強烈なG。敵はおらず妨害もなく、それでも心地よい緊張感に満ちた時間。

……なるほど。キャノンボール・ファスト、思った以上に楽しめそうだ——！

『くっ、厳しくなってきましたわね……！』

「……っ！」

ゴールはもう間近。しかし進むにつれ、難易度はどんどん上がっていく。次第に、通過というより円の端に引っかかるような形になってきた。

このままでは、全ての円をクリアするのは難しいだろう。さて、どうするか——

『く……はっ、せい！』

「……っ！」

見れば、セシリアも辛そうだ。ストライク・ガンナーの扱いには慣れているはずだが、これだけ無茶な飛び方は初めてなのだろう。

それは己も同じこと。月船は最高速はともかく、こんな激しく旋回するようなことは出来ない。総合的な機動力は三日月の方が上であり、その分性能の全てを引き出すことは難しい。試運転なしの最初の飛行では限界がある。



……だが、己の力量不足は、他で補えばいい。今己は、一人で飛んでいるのではないのだから。

『セシリアっ！』

『！』

呼びかけると同時、セシリアに手を伸ばす。その意図を一瞬で見抜いたセシリアが、己の手を取った。

『さあ、踊りましょう——真改さん！』

『……付いて来い——セシリア！』

お互いの手を取り合って、同時にスラスターを噴かす。朧月とブルー・テイアーズ、三日月とストライク・ガンナー。二機の性能を組み合わせ、さらなる機動力を発揮させる。

『次、行きますわよ！』

『……応……！』

水月を起動。その急激な加速は、本来なら体勢を崩す、無理矢理なタイミングだった。だがセシリアが基点となり、歪みのない鋭い弧を描く。

その回転の勢いを月輪で増幅し、セシリアを振り回すように旋回させた。セシリアは己から与えられる運動エネルギーを上手く使い、制御して、その力が進行方向と重なる瞬間にスラスターの出力を上げ、今度は己を引っ張った。

その連携により、単機では有り得ない旋回と立ち上がりで、ほとんど速度を落とすことなく円を潜っていく。

『ふふふ……武は舞に通ず、でしたか？ 素晴らしいステップですわ、真改さん！』

『……お前こそ……！』

スラスターの噴射光を纏い、くるくると回る。時に鋭く、時に緩やかに。

その様は、まさに——

「すごい……」

「まるで、踊ってるみたい……」

飛び出したシンとセシリアの姿は、中央タワーから送られて来る映像で俺たちにも見えていた。最初は普通に（それでもかなりハイレベルだったけど）飛んでいた二人は、折り返してきてから協力してチエック・マーカーを潜り抜けていた。

その様はみんなが言う通り、踊っているかのようだ。

「ほう……見事な連携だな」

「相性がいいんだよね、シンとセシリアは」

「いや、確かに戦闘での相性はいいが……」

中距離から遠距離での射撃が得意なセシリアと、至近距離での格闘戦が得意なシン。この二人はお互いの短所を補い合う、隙のないコンビだ。

けどそれは戦闘での話。まさかこんな形でも抜群の連携を見せるとは……。

「……楽しそうだなあ」

セシリアも、そしてシンもうつつすら笑ってる。まあやっぱり、親しい人にしかわからない程度に、だけど。別にバトルじゃなくても、スポーツというか、競技が好きなんだよな、シンは。お互いが鍛え上げた能力をぶつけ合う、っていうのが。

今はああして協力してるけど……きっと付いて来れなければ置いてくつもりだ。それはセシリアも同じだろう。相手の力量に合わせるのではなく、お互い全力で「競って」る。その上で、さらにお互いを高め合ってる。

ライバルであり、パートナーでもあり。そんな相手との勝負は、そりゃ面白いだろう。

「む……最後のチエック・マーカーだ」

箒が呟いたのが聞こえて、意識を二人に戻す。すると、ちょうど最後の円が青色に変わるところだった。

『……………ふふ』

『……………』

チエック・マーカーを抜けた瞬間、二人は手を離した。それと同時に、揃って一気に加速する。

——ラストスパートだ。

『はああああっ!!』

『オオオオオツ!!』

最大速度で、真っ直ぐこつちに突っ込んで来る。ここからスタートしたからか、二人にとってゴールもここになってるらしい。

……これは、まずい。

『ちよ、二人ともー!? ストップ、ストップですー!』

山田先生が大声＋身振り手振りで止めようとするが、聞いちゃいねえ。あの速度じゃ、直接轢かれなくても衝撃波で吹っ飛ばされる。……熱くなり過ぎだ、シンには割とよくあることだけど。

「ほら先生、逃げますよー!」

「わーん、人選間違えましたー!」

他の生徒たちは既に危険を察知し、逃走している。俺は咄嗟にISを展開し山田先生を抱え——ようとしたら箒がものすつげえ眼で睨みながら山田先生をひたたくって行つたので、仕方なく衝撃波から庇うように箒の後を付いて行つた。

そして間もなく、甲高い風きり音を立てながら——

——ビュゴウウウウウツ!!!

「どわああああああっ!!?」

どうやら着地したらしい、二人は地面を派手に抉りながら減速していく。10メートルくらいのブレーキ痕を刻んでようやく止まり、そして——

「ふ……ふふふ……オーツホホホホ! やった、勝ちましたわー!!」

「……ふう……」

満面の笑顔で高笑いを上げるセシリアと、少々悔しげながらも清々しい顔のシン。俺にはほぼ同着に見えたのだが、僅差でセシリアが勝っていたようだ。

「ふふ……これでキャノンボール・ファストはいただきですわねっ!」  
「……次は、勝つ……」

「ふっ、本番でも負けませんわよ！」

「……あー、お二人さん。盛り上がってるとこ悪いんだけどさ……」  
舞い上がった粉塵が晴れると、そこには真紅の装甲があった。箒の紅椿だ。

そしてその腕の中には――

「ふ……二人とも……」

「……あ」

眼鏡の下の瞳を潤ませ、全身をプルプルと震わせて、一生懸命に怒りをあらわにする山田先生の姿が。

……正直全然怖くないけど、二人はしまった、という顔になった。つい熱くなってしまったことに気がついたらしい。

「む、無理はしないように、って言ったじゃないですかー！　なのに、なのにあんな飛び方してー！！　着地までこんな強引にー!!!」

「す、すみませんでしたー！」

「……謝罪……」

涙目になりながら、腕をぶんぶん振り回す山田先生。肩が脱臼しそうな勢いだけど、大丈夫か？

しばらくして、山田先生は叱り疲れたのか腕を振り回し疲れたのか、肩で息をしだした。それから深呼吸を一つ、息を整えてからキツとまなじりを吊り上げる（迫力？　ねえよんなもん）。

そんな山田先生の様子にセシリアは苦笑を浮かべ、シンはため息を吐いた。

「と、に、か、くっ!!　私の指示を守らなかったお二人には、もう高速飛行訓練の実演はさせませんから！　させませんからね!?　させませんつたらさせませんから！　ぜーったい、させませんからね!?!」

「……はあ……」

……さて、この決意がどれだけ持続するのか。

……数日かな。

「…………ふう…………」

今日の飛行訓練は、なかなか疲れた。三日月は初めての使用だったし、全身に掛かる負担は戦闘のそれと大差がない。それに慣れなければ、長丁場の本番では最後までペースを保てはしないだろう。

「……………」

そしてなにより、セシリアとの実力差。今日の試運転では僅差だったが、それは妨害なしという制約あつてこそそのもの。三日月は月船と同じく月影と月蝕は装備出来ないので、朧月に遠距離攻撃の手段はない。元々遠距離戦に長けたブルー・ティアーズでは、妨害手段に差がありすぎる。セシリアの攻撃を避けながらでは負担も増え、機動の無駄も多くなる。そうなれば、当然——大差で負ける。

「……………」

だからこそ、面白い。機動は戦闘における基礎、キャノンボール・ファストはこれを磨くに絶好の機会。自らの不足が良く分かり、どうすればより強くなれるか、その道を示してくれる。

そして普段とは違う形で、皆との競争、共闘が出来る。

——なんとという、僥倖か。

「…………くつくつく…………」

如月重工から預かった三日月も、その性能の全容はまだ測りきれない。朧月との親和性からすれば、コイツも相当気に入ったようだ。己次第で、まだまだ力を引き出せるだろう。

「……………」

形は違えど、これもまた戦い。互いの肉体と技術と、精神のぶつかり合い。

……困ったものだ、我ながら。

負けたというのに。……否、負けたからこそ。

「……………い……………」

血沸き、肉踊る——！

## 第69話 逢引

キャノンボール・ファストを来週に控えた土曜日。

早朝の鍛錬を終え、花の世話をし、シャワーで汗を流し、朝食を済ませた後の、休日特有の手持ち無沙汰な時間。

「……………」

……本音はまだ寝ている。休日の前はいつも遅くまでインターネットでなにやらやっているのだ。その幸せそうな寝顔を見ていると妙に腹が立つ。

「……………」

さて、今日は何をするか。まあどうせほとんど訓練で終わるのだから、やはり暇な時間は多い。……試験に向けて勉強でもするか。

そう考えて、机に向かおうとした時――

コンコン。

「真改さん、いらつしやいますか？」

「……………」

この声……………というか喋り方は、セシリアか。一体何の用だ。

「失礼します」

「……………」

扉を開けると、鮮やかな金髪が目に入った。廊下の、人工の照明の下でありながら、太陽のような輝きを放っている。

「真改さん、今日はお暇ですか？」

「……………」

予定、というほどの用事もない。というより、普段から予定があることの方が稀だ。

「よかった、それではお願いがあるのですが」

「……………」

「わたくし、今日、お買い物に行こうと思いますの。お付き合いはいただけませんか？」

「……………」

買い物？ そんなもの、一人で行けばいいだろう。

……とは思うのだが、どうやら買い物とは友人と行く方が楽しいらしい。特に少女は。己にはよく分からんが、本音に随分と熱心に教えられた。IS学園という特殊極まる学園の生徒ではあるが、それでも少女には違いない。やはり買い物には、友人と共に行きたいのだから。

「……分かった……」

「まあ、ありがとうございます！ では、駅前のモールに10時に待ち合わせでよろしいですか？」

「……応……」

「ふふ、お待ちしていますわ。では、失礼します」

「…………」

花咲くような笑みを浮かべ、セシリアが立ち去る。それを見送って、部屋に戻った。

……買い物か。特に欲しい物もないが……まあセシリアの買い物に付き合うのであって、己が何かを買いに行くのではない。それに友人と出かけるのに、特段用事など必要なからう。

「…………」

さて、それでは身支度をするか——と、備え付けのクローゼットに向かったところで。

コンコン。

「やっほー。シン、居る？」

「…………」

今度は鈴か。今日は客が多いな。

ガチャリ。

「おはよう、シン。今日ヒマ？ ヒマよね？」

「…………」

暇と決め付けている。確かに普段、訓練以外のことは滅多にしないが……いささか失礼ではなからうか。

「んじやさ、ちよっと出かけましょうよ。買い物に行こうと思ってるの」

「…………」

「じゃ、駅前のモールで。時間は、そうね……10時でいいわよね」  
「……………」

「じゃ、待ってるわ」

言うだけ言って、鈴は去ってしまった。己もセシリアとの約束があることを言おうとしたのだが、勢いに負けて言えなかった。

……まあ、いいか。偶然にも、セシリアと鈴が待ち合わせに指定した場所も時間も同じ。それに二人とも、普段はよく喧嘩しているが、実際には仲が良い。……筈だ。

……大丈夫だといいが。

「ふくんふくん♪」

「……………どうしたの、セシリア？　なんだか随分、機嫌よさそうだね」

セシリアが鼻歌を歌いながら化粧をしていると、セシリアのルームメイトである菊池日向が話し掛けて来た。セシリアの私物に埋め尽くされている室内で少々窮屈そうではあるが、しかし日向に不満はなかった。

日向にとって、セシリアは真改の非公式ファンクラブ、「真友会」の同志なのだ。

「ふふ……実はですね、これから真改さんと、お買い物に行くのです！」

そしてセシリアも、日向のことを真友会の同志として信頼していた。なにせ日向は、セシリアや本音たちと共に真友会を創設した、「最初の五人」の一人なのだから。

「ええ!?　そ、それじゃあ……」

「はい、お任せを！　日向さん、そして我らが同志たちのために、真改さんの私服姿、しっかりと写真に収めてきますわ！」

「うん、お願いね、セシリア！」

そしてこの日向嬢、嫉妬とかそういう感情とは無縁であった。ただ真改を、その勇姿を見ることが出来ればそれでいい、そんな無欲な少



女であった。

決して他人を邪魔したり抜け駆けしたりはせず、しかしファンとしての思い入れは誰にも負けない。そんな彼女を、ファンの鑑、越えてはならない一線に立つ者として、「ラインの乙女」と称し尊敬する者まであるほどだ。

「では、行つて参ります……！」

「うん、頑張つてね！」

日頃から身だしなみには気を遣うセシリアだが、今日は特に気合が入っていた。まるで意中の男とのデートに行くかのような気合の入りがぷりであった。

そんなセシリアの後姿を、日向は期待に満ちた目で、その隣に浮くチビ上君は何を考えているのかよく分からない目で見送っていた。

「さーて、つと。何着てこつかなー」

鈴は、久々の友人との外出に上機嫌だった。最近は訓練で忙しく、学園から出ることで自体が少なかったのだ。本当なら今日も訓練をするつもりだったが、キャノンボール・ファストのための訓練が出来る第六アリーナは既に埋まっている。まあそれはいつものことなのだが、誤算だったのは一夏が第六アリーナを予約出来たことだ。

第六アリーナは人気があるだけあって一年生が自主訓練に使えることは少ないのだが、やはり一夏が特別なせいか……優先されたようだ。

(……ま、そんなことはいつか。過ぎたことは仕方ないし)

先週ならまだしも、今キャノンボール・ファスト以外の訓練で感覚を鈍らせたわけではない。それでも一夏と訓練出来るのならそれも良かったが、その一夏は一人だけ訓練している。腹立たしいが、しかしどうすることも出来ない。ならばどうにか出来ることに想いを馳せるべきだ。

つまり、「やることがないから遊びに行こう」というわけだ。

「……まあ、一夏が相手ってわけでもないし、そんなに気合入れる必要もないわよね。これでいいか」

幸いにも、訓練の虫である真改も暇を持て余していたようで、思ったよりあっさりと外出に同意した。……鈴にとって、真改が「断らない」ということは「了承した」ということなのだ。あながち間違いではないのだから困る。

というわけで、鈴は訓練も勉強も忘れて、遊びを満喫することにした。真改は鈴にとって一番の親友、一緒に遊びに行くことが楽しくないわけがない。

「んじゃ、行きますか♪」

そんな感じにウキウキしながら、鈴は部屋の扉を開けた。

すると、そこには――

「……お久しぶりです、凰鈴音代表候補生」

「……………」

そこに居たのは、二十代後半の女性。纏うスーツに皺や汚れなど一切なく、不機嫌そうな美顔に掛けられた眼鏡は眼光の鋭さを和らげることなく、ギラリと光る。

——楊麗ヤン・レイレイ々。鈴がある意味千冬以上に苦手とする、中国政府の候補生管理官である。

「あ、あの……どういったご用件でしょうか……」

「かねてより開発中だった、キャノンボール・ファスト用の高機動パッケージ、「風」が完成しました。これより微調整のための試運転を開始します。準備しなさい」

「え!?! ちよ、よりによつて今……!?!」

「今です。キャノンボール・ファストまで時間がありません、「風」をあなたに合わせるのも、あなたが「風」に慣れるのも、今からでなくては間に合いません」

「……了解……」

なんかアイツみたいな言い方だなー、などと他人事のように思いながら、鈴は携帯電話を取り出した。そして素早く、メールで真改に今日の外出をキャンセルする旨連絡する。送信完了を確認して、鈴は目

を閉じ。

……そして、目を開け。

「……それじゃあ、アリーナに行きましょう。第六じゃなくても、試運転くらいはどうかなるでしょ?」

「はい。まずは〔風〕の衝撃砲の性能を確かめてください。これは局長が開発を指揮した特別製です、使いこなすことはあなたの義務ですから」

「お爺様が? ……なら、頑張らなきゃね」

鈴が心から信頼し楊ですら敬愛する人物の名を出され、鈴はやる気を漲らせた。真改との外出が出来なくなったことは意識の外に追いやられ、楊の端末から転送された〔風〕のスペックデータを確認する。

「……へえ、近距離仕様の、拡散衝撃砲、か……」

「キャノンボール・ファストの速度では、距離が離れていては当たりませんから。射程距離を短くし、威力を抑えて効果範囲を広げ、攻撃より妨害を主眼に置いた武装です」

「なるほど、バナナを制す者はマリカーを制す、ってわけね」

「何を言っているのですか」

専門知識がなければ理解できない膨大なデータを一つ一つ確認しながら、廊下を歩く鈴。鈴の質問に淀みなく答えながら追従する楊。

鈴は楊の生真面目すぎる性質を苦手としているし、楊もまた、鈴の奔放さを好いてはいないが。

それでも二人は、互いを仕事上のパートナーとして信頼し合っている。それが分かる、後姿であった。

「ふふ……真改さんとお買い物……以前にもありましたが、二人きり、というのは初めてですわね」

真改との待ち合わせ場所、駅前のモールの出入口で、セシリアはウキウキしながら待っていた。最近行き詰っていた、ISの訓練。自分の能力に自信が持てず、才能の不足を感じ、焦り……そしてある時、ふ

と、鏡に映る自分の顔がひどく追い詰められていることに気づいたのだ。

その顔を見て、セシリアは思った。いかんいかん、貴族たるもの常に余裕を持って、優雅に振る舞わねば。こんな怖い顔をしていては、オルコットを名乗れない。

では、顔を和らげるにはどうすればいいか？ 答えは簡単、気持ちを抑えればいい。訓練ばかりでは身体だけでなく心も疲れてしまう、たまには一日かけて、じっくりと心身を休ませなければ。

……つまりは、息抜きである。

しかし想い人である一夏は、今日は訓練で外出不可。ならばと、憧れの人（色んな意味で）を誘うことにした。思っていたよりあっさりOKが出たので、余剰分の気合を入れて身支度を整えた。

化粧は素材を活かすよう薄く、しかししっかりと。身に着けたワンピースはクリーニングから戻ってきたばかりのお気に入り、風に靡く白い布地は清楚で美しく、その上から羽織った青いカーディガンとの色合いはまるで青空と雲のようで、念入りに手入れされ眩く輝く金髪はさながら太陽と言ったところであろうか。

そのため今現在、駅前のモールの出入口という人の出入りが極めて多いこの場所に、めっちゃキラキラしてる金髪碧眼の美少女が佇んでいるわけで。

そんな美少女を、果たしてナンパ好きな男共が放っておくだろうか。いや、そんな筈はない。

「ねえちよつと君、待ち合わせ？」

「……うん？」

上品な腕時計を眺めて約束の時間が徐々に近づいてくるのを楽しんでいたセシリアに、声をかける男。その数三人。なんだか前にも見たことあるようなその展開に、セシリアは思わずため息を吐いた。

「……はあ。なんなのでしょう、このデジャヴは……」

「あれ、どうしたの？ タメイキなんかついちゃって」

「そんなんじゃない、シアワセが逃げちゃうよ？」

「仕方ないなあ、その逃げたシアワセは、俺たちが埋めてあげるよ♪」

「……………」

しかもなにやら、ナンパに来る男の質が以前より低い気がする。外見ではなく、中身の。

「……申し訳ありませんが。あなたたちがおっしゃった通り、わたくし、待ち合わせしてますの。邪魔ですので、消えていただけませんか？」  
楽しい待ち合わせの時間を邪魔され、その苛立ちを眼力に乗せて睨みつける。しかし男たちは露ほども気にせず——というより、その空気を読むことも出来ずヘラヘラと笑い続けていた。

「そんなつれないこと言わないでさ」

「君さ、見たところガイジンさんでしょ？ ニホンには何しに来たの？  
観光？」

「ならちようどいいや。俺たち、歩く観光名所だぜ？」  
「……………」

あまりにも知能の低い発言に、セシリアは頭を抱えた。その仕草がどういうわけか誘いを受けるかどうか考えているように映ったらしく、男たちは一気に畳み掛ける。

「ほら、行こうぜ？ 君みたいなコは時間無駄にしちやダメなんだよ？」

「こそ、俺たちがイトコ教えてあげるからさ」

「ついでに、イトコも教えてあげるから♪」

「…………ふう。仕方ありませんわね」

これ以上聞いていると、耳が汚染されそうだ——そう感じて、セシリアは本格的に男たちを追い払うことを決めた。

とりあえず、馴れ馴れしく伸びてきた手を捻り上げよう。折れない程度に、でも関節は外れる程度にしよう。

しかし、その直前。

セシリアと男たちの間に割り込む、人影が——

さて、そろそろ出かけるか——というタイミングで、本音がようや

く目を覚ました。とても長いあくびをして目をこすり、それからゆるゆると己を方を向いた。

「むあ〜……おあよおう、いのつぶい〜……」

「……………」

おい、本当に起きているのか？ 寝言にしか聞こえんぞ。

「……………あるえ〜？ お出かけ〜……………」

「……………応……………」

本音は亀にも劣る速度で洗面所に向かうと、蛇口を全開にしてその水を頭から浴びた。

……洗面台に頭を突っ込んでピクリともしないという絵は、なにやら殺人現場のように見えるな。

「……………ふい〜、すつきりしたあ〜わわわあ〜」

「……………」

どう見てもすつきりしているようには思えないが、それはいつものことである。そして本音は己の格好に気づいたようで、パチパチと目をしばたたかせる。

「あれ〜？ いのつち、お出かけ〜？」

「……………応……………」

さつき訊かれたぞ、それは。ついさつきな。

「へえ〜。誰かからのお誘い〜？」

「……………かくかくしかじか……………」

「かゆかゆうまうま〜」

おい、その返しはやめろ。なんだかよく分からんが、大災害クラスの大事件が起きる気がする。

「んん〜、ならその格好はNGです〜」

「……………」

「普通すぎるよ〜」

「……………」

普通の何が悪い。普通の生活、普通の人生。それを求めて必死に生きている人たちもいるんだぞ。

「あのさ〜。いのつちは、せっしーとお出かけするんだよね〜？」

「……………」

ちなみに先ほど、鈴から連絡が来た。急用が入り、出かけられなくなったそうだ。

「せっしーがいのつちとお出かけしよう、ってことはだね、デートのお誘いだよ？」

「……………」

デート………というのは、男女で行くものではないのか？

「んもう、いのつちはわかってないにや」

「……………にや……………」

「とにかく。そんな格好でせっしーとお出かけするのは、この本音さんが許しません。さよりんからいのつちのことを頼まれてるのよ」

「……………」

……小夜め、余計なことを……。

「と、いうわけで。いのつちのこーでいねいとを、しちやいます」

「……………」

言つて、本音はふらふらとクローゼットに向かった。その中には本音の衣装が半分、己の服が半分入っている。……何故だ。

「ふっふっふ。こおんなことも、あろーかとおっ！」

「……………」

おい、その台詞はやめろ。クローゼットの奥から社長か主任が出てきそうな気がするだろうが。

「こないだの文化祭の時からね、やっぱり似合うなく、って思つて、準備してたんだよ」

「……………」

「じゃじゃ〜ん！」

出てきたのは………思つていたほど、奇抜な服ではなかった。

(……………まあ、いいか……………)

少々飾り過ぎな気もするが、それほど気にはならなかった。これはあれか、凄まじく高価な品物を勧められた後にそこそ高価な品を勧められると、不思議と安く感じるという……。

「んじや、これで行きましょーか〜」

「……はあ……」

それほど不満のある物でもなかったし、それに時間も押している。この服で妥協し、待ち合わせ場所に向かうとしよう。

「し、真改さん……!?!」

「……………」

セシリアと男たちの間に割り込んだのは、真改だった。セシリアに伸ばされた腕を掴み、鋭い眼で男たちを睨んでいる。

「な、なんだお前……!?!」

「てめえ、このコは俺らが目えつけたんだぞ!」

「……………」

男たちは、真改が女だと気づいていないようだった。

それも無理もない、今の真改は、セシリアでさえ一瞬男と錯覚するような姿だったのだから。

長い黒髪はうなじで纏められ、前からは見えないだろう。

その輝く黒とは違う、光を呑み込む夜のような黒色のジャケット。

ジャケットと同色のズボンと、正反対の白いワイシャツ。

腰に巻かれた銀の鎖は、首から提げられた朧月のそれに劣らぬ輝き。

普段の、適当に選んだら男物ばかりだったという服とは根本的に違う、完全な「魅せる」ための男装だった。

「おいてめえ、なんか言えよっ!」

「……触れるな……」

「ああんっ!?!」

小さいながら良く響く声で、眩かれた言葉。

それは男たちにはなく、セシリアに向けてのものだった。

「……汚れる……」

「え……!?!」



「て、めえ……」

「ナメた口きいてんじやねえぞ！」

だがそんなことに気づくなど、この男たちに出来るわけもなく、真改が隻腕であることにも当然気づかず。ただ単純に、ナンパのターゲットを横取りされたと思つて、怒りに任せて拳を振り上げた。

しかし、素人が繰り出す拳が真改に当たるかと言えば。

——当たるわけがない。

「……………」

「う、お!?」

拳が当たる瞬間、真改はその腕を取った。そして勢いを利用し、投げる。

その気になれば頭からアスファルトに落とし即死させることも可能だったが、そうすると色々問題があるので、くるりと回転させた。

結果、男は前方宙返りをしたかのように、無事に着地して。

「え、あ……?」

「な、なんだよ、今の……!?」

流星に、その現象が普通でないことは男たちにも分かった。なにやり投げられた男は、前宙が出来るような運動神経を持ち合わせてはいないのだ。

「こ、コイツ、アレじゃねえの、タツジンとかいうヤツ……!」

「ば、バカ、んなのジツザイするわけ……!」

「で、でも今の……!」

「……………」

すつかり腰が引けた男たちを一睨みしてやると、無様な悲鳴をあげながら逃げて行った。それを見送り、真改はセシリアに向き合う。

「……無事……?」

「……………」

しかし、返事はない。ただのしかばゲフンゲフン放心状態のようだ。

「……………」

「……………はっ!? あ、し、真改さん、今日はご機嫌うるわしゅう……」

「……………」

セシリアの取り繕い！　しかしセシリアは混乱している！

「……………待たせた……………」

「え!?　あ、いえ……………わ、わたくしも、今来たところですよ……………」

「……………」

セシリアはなにやら正気ではないようなので、真改は無視することにした。とりあえず買い物目的で外出したことだけは確かなので、それを第一目標として行動することにした。

「……………買い物……………」

「え?　……………あ、そう、そうですね！　真改さん、わたくし、買いたい物がありますの!」

真改の言葉で、セシリアも正気を取り戻した。真改を買い物に誘った、その最初の目的を思い出した。

それは――

「ほら、来週、一夏さんの誕生日でしょう?　わたくし、素敵な誕生日プレゼントを贈りたいと思うのですが……………」

「……………」

ああなるほど、と真改は思った。

一夏の誕生日、それはセシリアにとっては極めて重要なイベントだろう。当然、プレゼントは一夏が大いに喜ぶ物を贈りたいと思うに違いない。ならば一夏の嗜好を把握している真改に意見を求めるのは自然な流れだ。

「真改さん、一夏さんはどのような品をお好みですか?」

「……………ふむ……………」

それは納得の出来る理由だったので、真改は気づかなかった。箒や鈴を同行者を選ぶなかったのは、彼女らと一夏の誕生日プレゼントを買いに行くのに抵抗があったからだと考えたのだ。

「ふふ……………けれど誕生日プレゼントだけ買って帰るというのもつまらないですわね。真改さん、わたくしが真改さんに似合うお洋服を見立てて差し上げますわ!」

「……………」

だから、気づかなかった。セシリアは箒や鈴と外出するのを避けた  
のではなく――

「さあ、こうしている時間がもったいないですわ！　行きましよう、真  
改さん！」

「……………」

――セシリアは、真改と買い物に行きたかったのだということに。

「……………疲れた……………まったく、なーにが試運転よ。思いつつつきり訓  
練じゃない……………」

楊女史による監督の下行った「風」の試運転は、とても過酷なもの  
だった。

通常のアリーナでは存分に加速出来ないことを逆に活かした旋回  
訓練。機動制御に失敗しふっ飛んで来た生徒を弾き返す射撃訓練。  
あたしの負担も確かに大きかったけど、他の生徒もいい迷惑だったろ  
う。

「うう……………けどやっぱり、負けたくないなあ……………」

シャワーで汗を流し、ベッドにダイブ。寝るにはまだ早いけど、疲  
れが溜まっていたので早くも眠気が襲ってきた。

(ああ、気持ちい……………やっぱベッドはさいこーね……………)

疲れたところにフカフカベッド。その誘惑に打ち勝つのは並大抵  
の精神力では不可能だ。それはあたしだって例外じゃない。できる  
と言うヤツはやってみろ、きつと無理だから。

というわけで、あたしはそのまま夢の世界にレッツゴーしようとし  
ていた。

だけどそこへ、携帯電話に着信が。

「……………む……………」

普通の女子ならほっとくタイミングだろうけど、しかしあたしは国  
家代表候補生。何か重要な連絡かもしれない。無視するわけにはい  
かない。

なので、そのまま寝てしまいたい気持ちを全力で押さえ込み、電話に出た。

「……はくい、嵐で〜す……」

『む、寝ていたか?』

「……………」

受話器の向こうから聞こえてきたのは、老人の声。その声が聞き慣れたものだと思いついて、あたしは一瞬で起き上がった。

「お、お爺様!?!」

『疲れているところ、すまなかった。明日にしよう』

「い、いや、大丈夫です! まだまだスタミナ有り余ってますからっ!」

『そ、そうか』

思わず大声を出してしまい、お爺様も怯んだ。むう、まずい。これじゃあ落ち着きのない女の子と思われちゃう……………!

「ごほん…………。それで、お爺様。どうしたんですか? お爺様が直接電話だなんて、珍しいですね」

『うむ。特に用事というほどでもないのだが…………』

その言葉に、嬉しくなってしまった。だって用事もないのに連絡してきたってことは、つまりあたしのことを気にかけてくれてるわけ…………。

『うむ…………鈴、今日は何か用事があったのではないか?』

「え!?! な、なんで知ってるんですか!?!」

『楊から連絡があつてな。お前がかなり不機嫌で、もしかしたら大事な用事があつたのに「嵐」のことで諦めたのかもしれないから、フォローしておくように、と…………』

「…………ええ…………」

それ、言っちゃうんだ…………言っちゃうんだ、それ…………。

まあ、その方がお爺様らしいけど。

「…………それで。そんな傷心のあたしに、どんな言葉をかけてくれるんですか?」

『う、む…………まあ、頑張れ』

「……………」

『……………』

「……ぷ、あはは、あははははははは！」  
む……』

あまりにもあんまりなお爺様の言葉に、笑いを抑えきることができなかつた。

だって、「頑張れ」とか……………!

「ぷぷぷふ……………あははははははは……………!」

『……………ふん。元気なようなら、それでいい』

さすがに笑いすぎたようで、お爺様は怒ってしまった。けどそれがまた、歳に似合わず子供っぽくて、笑ってしまいそうになる。

……………ぷぷつ。

『……………まあ、楊が言うほど不機嫌ではないようで、なによりだ』

「いやいや、お爺様のおかげで機嫌よくなったんですよ♪」

『……………ふん』

……………ああー、思い出すなあ。初めてお爺様と会ったときのこと。

お父さんとお母さんが離婚しちゃって、5年ぶりに中国に帰ってきて。友達は誰もいなくて、文化の違いにもとまどって。

——親友や好きな人とも、離れ離れになって。

嫌なことが続いて塞ぎこんで、なんにもやる気が起きなくて。そんな時、お爺様があたしを見つけてくれた。

あたしの才能を、見出してくれた。それからのあたしの努力を、支えてくれた。

お爺様のおかげで、あたしは国家代表候補生になれた。また日本に來れた。——また、シンと一夏に会えたんだ。

『……………どうやら、心配ないようだな』

「もう、怒らないでくださいよ」

『……………怒ってはいない。だが、一つ言っておく。……………無理はするなよ、鈴』

ああ、まったく。そんなこと言われたら。余計思い出しちゃうじゃないですか。

あの時、まだあたしに余裕がなかったころ。毎日が必死で、無理してて。そんなあたしの様子を、お爺様は毎日見に来てくれて。

「……無理はしてませんよ。お爺様こそ、もう歳なんですから、無理しないでくださいね」

そんなことを思い出してしまったから。

また、あの時のように——あの頃のように。

お爺様の名前を、呼んでみた。

「それじゃ、これで失礼しますね。お休みなさい——」

——ワンターレン王大人——

## 第70話 輝星

セシリアや鈴が、真改を外出に誘っていた頃。IS学園寮の、とある一室。

そこでは眼帯を着けた銀髪の少女が、休日の朝早くから凄まじく真面目な顔をしていた。

『……受諾。クラリツサ・ハルフオーフ大尉です』

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ」

その少女の名は、ラウラ・ボーデヴィツヒ。毎朝の定時報告とは別に、アドバイザーとして信頼する部下に、個人的な相談事をしているところであった。

『……ふっ。隊長、そろそろ連絡が来る頃だと思っております』

「む……？」

『情報は掴んでいます。来週のキャノンボール・ファスト、その大会当日こそまさに、織斑一夏の誕生日だということを』

「ほう……」

『ずばり、隊長のご用件は、織斑一夏への誕生日プレゼントについてです。』

「……ふ。さすがだ、クラリツサ。お前が隊に居る限り、私にはなんの不安もない」

『恐縮です、隊長』

何も話さずとも、こちらの用件を見事言い当てたクラリツサに、ラウラは感心する。そして同時に思った、この優秀な部下の助言に従えば、間違いはあるまい、と。

そもそもクラリツサに助言を求めること自体が最大の失敗なのだが、例によって気付かないラウラであった。

『ではまず、誕生日プレゼントの持つ効果について説明します』

「ああ、頼む」

自分が使う装備の能力を正確に把握していなければ、思わぬ危機を招くことになる。それは何事においても基本中の基本だ。ラウラは早く誕生日プレゼントを何にするべきか教えて欲しかったが、しかし

この説明を飛ばすわけにはいかなかった。

『誕生日。それは多くの人にとって、特別な日です。自らがこの世に生を受けた日。クリスマスやバレンタインデーのような世界規模でのイベントではなく、自分だけの特別な日なのです。ならばその誕生日に贈られるプレゼントもまた特別であることは当然と言えます』  
「なるほど……」

ラウラにとって、誕生日とは馴染みのないものである。なぜならラウラは軍用の遺伝子強化素体、生まれ方からして普通の人間とは違う、試験管ベイビーなのだ。

ラウラ自身はそれに負い目はなく、それどころか今では思い出すことすら稀だが、しかし事実がそうであることは変わらない。クラリツサはそんなラウラの、誕生日の経験不足を補うことから始めたのだった。

『私が掴んだ情報によると、織斑一夏の誕生日には、必ず誕生日パーティーが開かれています。今年もそうですか？』

「ああ、確認している」

『となると、難易度は少々上がります。誕生日パーティーは、当然誕生日を迎える者が主役です。参加者は各自誕生日プレゼントを持ち寄るでしょう、それらと被らない物を選ばねばなりません』

「む……」

『過去にどのような誕生日プレゼントが贈られていたかは、既に調査済みですが……さすがに今年の物までは分かりません』

「……むむう」

ラウラは眉間に皺を寄せて唸った。最高の誕生日プレゼントを贈り、一夏のハートをガツチリスナッチしたいのだが……。

思いの外難しそうな作戦目標に僅かに怯んだその時、クラリツサの自信に満ちた笑い声が聞こえた。

『ふふ……ですが隊長、ご安心を。我に秘策有り、素晴らしいプレゼントの案を用意してあります』

「おお……クラリツサ、お前は私にとって、勝利の女神だ」

『もったいなきお言葉です、隊長』



本当にもつたいない言葉である。

「それで、どんなプレゼントなんだ？」

『まず、大きな箱を用意してください。ケーキを入れるような白い箱です。しかしサイズは、人が入れるくらいの大きさのものを選んでください』

「ふむ、まずは箱……」

『次はリボンです。フリルのついた真っ赤なリボンを、大量に用意するのです』

「む、リボンとな……？」

『事前に用意するものは、この二つです。……後は隊長、あなた自身にかかっています』

「……ほう……」

そこでラウラは、意識を研ぎ澄ませた。元より、クラリツサだけに頼るつもりもない。一夏を振り向かせるには、誰よりラウラ自身が努力しなければならぬのだ。

「十分だ、クラリツサ。これから先は、私がしなければならぬことだ」

『流石は隊長、分かっていたただけているようですね。』

「……では、最後の詰め、隊長のやるべきことを伝授いたします』

「うむ……頼む」

そうして、クラリツサによる洗脳教室は進んでいった。

このまま行けば、ラウラはクラリツサの言うがままに、秘策とやらを実行していただろう。

だが、現実是非情である。計画に邪魔は付き物、クラリツサのラウラ育成計画もまた、順調だけで終わるものではなかったのだ。

「ただいまー」

毎朝やっつてるランニングと格闘訓練を終えて、部屋に戻ってきた。

キャノンボール・ファストが近いだけあって、アリーナはいつも満員だ。僕たち一年生がアリーナを使える機会は少ないけれど、それで腐っているわけにもいかない。

出来ることが限られているなら、時間の使い方に悩むこともない——そんな凶太さこそが必要なんだ。

「……あれ、ラウラはまだかな？」

いつもなら出迎えてくれるルームメイトの姿がない。まあ、ラウラは僕らと違って軍人だし、生活が不安定になるのは仕方がない。以前にも、夜遅くまで起きていたり朝早くに起きたりということは何度もあった。今回もまた、なにかしらの理由で——

「……………」

——と、思っただけだ。

部屋を見渡すと、なんだか大きな、とても大きな、真っ白な箱が。部屋の隅っこにあるのが、すごく気になる——

「……………ええっと……………」

なんだか嫌な予感がしたけれど、とりあえずその箱に近づいてみる。

そしてコツン、と、小突いてみると。

「む、シャルロットか？」

「うひゃあ!？」

な、なんか喋った!? ていうかラウラの声!?

「ら、ラウラ!? なにしてるの!？」

「う、うむ……実は、部下の進言を試してみたのだが、一つ問題が見つかってな……」

この大きな箱の中には、ラウラが入っているみたいだ。

……いや、どんな状況なんだろうとは思うけれど。けどラウラつて、しよつちゆう突飛なことするからなあ……

「すまんが、一つ頼みがあるのだが」

「な、なに?？」

ラウラの頼みっていうのより、なんでこんな大きな箱の中にラウラ

が居るのかの方が気になるんだけど。

「そこに、赤いリボンがあるだろう?」

「リボン? ……ああ、これかな?」

部屋を見渡すまでもなく、箱の前に真っ赤なリボンが置いてあった。生地的美しさ、刺繍の見事さ、手触りの滑らかさ、飾りつけのフリルの繊細さ。きっと高価な品なんだろう。

……こんなリボン、いつ用意したんだろう。

ていうか、なんでこんな箱に入ってるんだろう……。

「うむ、それだ。それで、この箱を飾り付けてくれ」

「……………」

リボンで飾り付けるって、あれかな。ラッピングみたいな……包装紙はないけど。

「……まあ、いいけど。ラウラ、そんなことしたら出られなくなっちゃうんじゃない?」

「うむ……だがこれは本番前の予行だからな。リボンを切って出る、問題ない」

「……もつたいないなあ、こんなに良いリボンなのに。それなら僕がほどくよ」

「そうか、助かる」

まあ、それはいいとして。

やっぱり、どうしても気になる。

「で、ラウラ。なんでこんなことしてるの?」

「む……そうだな。シャルロットは人の真似をするような人間ではないし、教えてもかまわんか」

「?」

「これはな、一夏へのプレゼントなのだ」

「……………は?」

どうしよう、まったく意味がわからない。

これがプレゼント? え?

「……ええつととき、ラウラ。この箱、開けてみてもいい?」

「むう!? だ、ダメだ! 開けるな!」

「……ええー……」

なんか、それも強く拒否されると逆に開けたくなってしまう。

「……………」

……うん、開けよう。すごく気になる。好奇心を抑えるのは、心の健康に良くないしね。

「……えいつ」

「ぬあっ!？」

と、いうわけで。

ラウラの言葉を無視して、箱を開けた。

「……………」

「み……見るなっ……………」

すると、箱の中には。

リボンを、大事な所だけを絶妙に隠すように、身体に巻きつけた。

裸のラウラが――

「な……なにやってんのおおおおおおおっ!!!?」

「まったく……何考えてるのっ」

「むう……あれが極めて効果的なプレゼントだと聞いてな……」

「それ以前の問題だよっ、あんな、あ、あ、あんなっ……………」

シャルロットは顔を真っ赤にして、先ほどのことを思い出す。

箱の中に入っていた、素肌にリボンだけを身につけたラウラ。パニックになりながら問い詰めたところ、本番、つまり一夏の誕生日にはこの箱を一夏に開けさせ、「私がプレゼントだ」と言う予定だったとのこと。

一体どこの誰がそんなとんでもないことをラウラに教えたのかももちろん訊いたが、しかしそれは答えなかった。軍人として、仲間を売るなど有り得ない、と言われたのだ。

……もしここでクラリツサの名を出していたら、IS学園1年1組

は、もう少し平和になっていたかもしれない。

「とにかく、アレはダメっ！ 女の子なんだから、つつしみとか恥じらいとか、そういうの持たなきゃダメだよ！」

「うむむ……」

まったくもう、とラウラを叱りながら、しかしついつい考えてしまう。

もしさっきのを、自分がやったとしたら――

『誕生日おめでとう、一夏！ 僕がプレゼントだよ（はあと）』

『ありがとう、シャル。こんな素敵なプレゼント、生まれて初めてだぜ』

『えへへ……』

『さて。俺がもらったプレゼントなんだから、俺の好きにしているんだよな？』

『うん。当たり前じゃないか……』

『シャル……』

『一夏……』

「うわあああああああああああああああああつっつ！！！！」

「ど、どうしたシャルロット!?!」

「ダメ、ダメっ！ ダメダメダメダメ、絶っつつ対ダメ!!!」

「わ、分かった！ 分かったから落ち着け！」

突然頭を抱えて悶え始めたシャルロットを、ラウラが慌ててなだめる。自室ならばまだしも、今は多くの人目があるのだ。こんな奇行を続けていれば、警察を呼ばれかねない。

……そう、二人は外出していた。その目的は、もちろん――

「しかし、アレがダメとなると、どうするか……」

「色々見て回ろうよ。何か素敵な物が見つかるかもしれないよ」

「むう……」

一夏の誕生日プレゼント探しだ。気を取り直して、二人で駅前に来たのだった。

シャルロットは薄手の黄色いセーターにミニスカート、セーターの大きく開いた襟口から、白いブラウスが覗いている。

一方ラウラは、黒のワンピースに同色のショールを合わせていた。どちらにも控えめにフリルが施されており、風に靡く様が銀髪と相まって良く映えている。

そんな二人が人通りの多い駅前を歩いていけば当然視線を集めるのだが、そんなことを気にした様子はまるでない。シャルロットは自分のことは少々鈍いところがあり、ラウラは周囲の視線などどうでもいいからだ。

「とは言っただけど、やっぱりある程度は決めておいた方がいいかな」「シャルロットは考えがあるのか？」

「うん。腕時計なんかいいんじゃないかな、って思ってるんだけど」「腕時計？ そんなもの、専用機持ちには必要ないだろう」

「確かに、専用機のおかげで時間はわかるけど。腕時計は単純に時間を教えてくれるだけじゃなくて、ファッションでもあるんだよ」

「ほう……」

言われて、イメージしてみる。一夏の左手首に着けられる腕時計、そのデザインを。

細身の、スタイリッシュな物がいいか。いや、一夏は最近ますます男らしくなってきたし、無骨な物も……。

「……いや、腕時計はシャルロットの案だ。私は別の物を考えなくては……」

なるほど、いいかもしれないとは思ったものの、同じ物を贈っては自分だけでなくシャルロットの印象にも悪影響だ。さすがにそれはいけない。

となると、どんな物がいいか。ラウラにはプレゼントを贈った経験などなく、良い案はなかなか浮かばない。シャルロットのアドバイスは必須だろうが、しかし自分でも考えなくては意味がない。

そうして、うんうんうなっていると――

「……あれ？ シンと……セシリア？」

「むっ」

シャルロットの声に視線を動かすと、遠くに見慣れた少女の姿があった。シャルロット、ラウラと同じく、一夏の誕生日プレゼントを買いに出かけた、真改とセシリアであった。

「二人も面白い物かな？」

「そのようだな。……しかし……」

それなりに距離があり、まだ向こうはこちらに気づいていない。背を向けているので、こちらから近づかなければこのまま気づかれることはないだろう。

そんな真改とセシリアは、こうして見ていると――

「……デートだな」

「……デートだね」

元々中性的な容姿の真改が、今日は完全な男装をしている。するともう、見た目はほぼ男であった。

身のこなしに隙のない、見目麗しい長髪の少年。それが今の真改の印象である。

そしてそんな真改に微笑みかけ話し掛ける、見るからに育ちの良い金髪の美少女、セシリア。なんだか少女漫画のカップルみたいな二人であった。

「……やはり、似合うな」

「うん、似合うね……」

「そりゃあもう、私のコーデイナーですから」

「うわあっ!?!」

真改たちを眺めてしみじみと呟いていた二人が、突然後ろから声をかけられて跳び上がる。バクバクと音を立てる心臓を押さえながら振り返ると、そこに居たのは――

「ほ、本音?」

「と、箒か。驚かせるな……」

「私は驚かせていないだろう」

「いや、二人が夢中になってたから、つい」

一人は、長い黒髪の少女。黒いシャツとミニスカートの上に、燃えるような赤いジャケットを羽織っている。

もう一人は、猫の耳っぽいのがついた、ぶかぶかの白いパーカーを着た、眠そうな目をした少女。

布仏本音と篠ノ之箒。少々珍しい組み合わせの二人であった。

「……で。何をしているんだ？　こんなところで」

「それはこちらの台詞だ」

訝しげに訊ねるラウラに、箒が答える。その顔はしかめっ面であった。

「えっとね。いのつちを見守ろうと思って、外に出たらね、ちようどしののんも出かけるところで」

「なるほど、巻き込んだんだ」

あんまりな言い方ではあったが、シャルロットの言葉は的を射ていた。箒は一夏の誕生日プレゼントの購入、つまりはシャルロットやラウラと同じ目的で外出したのだが、そのタイミングを狙い撃たれたかのように本音に誘われたのである。

「まったく。一夏の誕生日プレゼントを買いに行くと言うから、同行したというのに……」

「べつに、嘘じゃないよ？　私もおりむーの誕生日プレゼント、買うと思うってたし」

「うん……」

「主目的の違いだな」

本音にとって、一夏への誕生日プレゼントは「ついで」なのだろう。しかしそれも目的の一つである以上、確かに嘘と断ずることは出来ない。

それでもやはり、箒にしてみれば騙された気がするのには仕方がない。それでも本音に付き合ってしまうあたり、人が良いのか流されやすいのか。

「ん。けどいのつち、心配いらなかったみたいだね。せつしーも楽しそうだし」



箒がシャルロットとラウラに経緯を簡単に説明する間、真改とセシリアを眺めていた本音。嬉しそうな、しかしそれ以外の感情も僅かに混じった、複雑な表情で呟いた。

しかし、そんな本音を見る三人の眼は、うさんくさいものでも見るかのようにであった。

それと言うのも――

「……本音」

「んん〜？」

「お前、何を食べている？」

本音はさつきから、スナック菓子をぽりぽりとかじっているのがあった。

1本10円で買えそうなその菓子を指差され、本音は嬉しそうに笑いながら答える。

「うみみやあ棒〜」

「……う？」

「うみ……？」

「噛みました。うみやあ棒〜」

どう噛めばそんな間違え方をするのかと思わなくもなかったが、しかし生粋の日本人である箒は、その歴史ある駄菓子の名を知っていた。

うみやあ棒。名古屋のとあるお菓子メーカーが製造している、おそらくは日本で最も有名なお菓子である。値段の安さもさることながら、ユニークかつ斬新な様々なフレーバーにより不動の人気を誇るシリーズで、本音はその新しい味を食べていたのであった。

もちろん、他のメンバーはそんなことに興味はない。

「とにかく〜。折角せっしーがデートに誘ったんだし〜、いのっちもなんだか楽しそうだし〜。邪魔は良くないと思うのだよ〜、私的には〜」

「セシリアはどうでもいいが、真改に関しては同意だ。お前たちも、あの顔を翳らせたくはあるまい？」

「……………」

言われて、二人はもう一度、真改を見る。

後ろからなので、見えるのは横顔くらいだが——その顔は、ほんの僅かに、笑っているように見えた。

「……そうだな」

「うん。色々気にはなるけど……」

物静かで質実剛健な真改と、見た目も言動も華やかなセシリア。正反対なような二人だが、それはそれで、通じ合える所があるのかも知れない。

それに、真改が笑うのは元々珍しいことだが、セシリアがああも楽しげな笑みを浮かべるのは久しぶりに思えた。最近は時間さえあれば訓練を繰り返し、特にここ数日は追い詰められたかのような顔をしていた。それを、友人である彼女たちが心配しないはずはないのだ。そんなセシリアが、楽しそうに笑っている。なら——

「それじゃあ、おりむーのお誕生日プレゼント、買いに行きましょうか」  
本音の声に、皆が顔を見合わせる。そこでようやく、ぼうつとしていたことに気づき。

「時間があるとすれば、今日で最後だ。これを逃せば、手ぶらでパーティーに出席することになるぞ？」

既にプレゼントの案があるのか、箒が挑発的な笑みを浮かべて。

「せっかく集まったんだから、被らないようにしようね」

シャルロットは冷静な意見を述べて。

「ううむ、何がいいか……」

ラウラはぶつぶつと悩み。

「うまうま〜♪」

本音は駄菓子の味を楽しみながら。

四人の少女は、手近な店へと歩き出した。

「真改さん、今日はありがとうございました」

「……………」

夕焼けに赤く彩られた、ショッピングモールの屋上。落下防止のフェンスを背にして、セシリア・オルコットが西日にも負けない、眩い笑みを浮かべる。

「お買い物なんて、何度もしてきましたが……今日は今までで一番、楽しかったですわ」

「……………」

そう言うセシリアは手ぶらだ。買った品は、全てIS学園のセシリアの部屋に届けられるよう手配してある。

「一夏さんの、誕生日パーティー……楽しみですわね。あの孤児院の皆さんも、とても素敵な方たちでしたし。きっと素晴らしいパーティーに違いありませんわ」

「……………」

好いた男の、知り合ってから初めての誕生日。それに対する期待が大きくなるのも、仕方のないことかもしれない。

だが少なくとも、その誕生日パーティーは、決して期待を裏切ることはないだろう。それだけは、己にも断言出来る。

「……………」

「……………」

そして。

一夏への誕生日プレゼントの購入、それだけがこの外出の目的ではないことも、既に察しがついていた。

「……………真改さん」

「……………」

忘れようとしていたのだろう。気にすまいとしていたのだろう。一切の重荷を捨て、楽しもうとしていたのだろう。今、この時だけは。

だが、それは無理な話だ。己も体験したから良く分かる。

焦りや不安という物は、目を背ければ背けるほど、心の奥底へと入り込んでくるのだ。

「わたくしは……わたくしは、弱いですか？」

「……………」

「わたくしは……強くは、なれませんか？」  
「……………」

儂げな微笑みを浮かべながら、セシリアが問う。

気丈にも、その声は震えていなかったが——しかし己の耳は、セシリアの手が触れるフェンスが僅かに立てる音を、聞き逃さなかった。「自信が持てないのです。以前はあんなにも有り余っていたのに、今はもう空っぽ。皆さんの中でただ一人、わたくしだけが一夏さんに勝てない……そんなのは相性の問題だと、わかっているはずなのに」  
「……………」

「それだけのことで、わたくしの自信は揺れて、崩れてしまいました。そんな脆い自信だったのかと思うと、もう……」

その姿は、まるで昔の自分を見るかのようだ。

剣士としては未熟、AMS適性も低く、簡単な動作一つ身につけるにも時間が掛かった。成績は振るわず、テストパイロットとしてさえも、いつまでレイレナードに居られるのか分からない。

そんな日々を、ずっと過ごしていた。

「真改さん。わたくしは、なぜ弱いのでしょうか」

国を失った時、自分でも驚くほどに、何も感じなかった。

あの時己は、ただただ心を奪われていた。

国を滅ぼした、鋼の山猫に。

豪雨のように降り注ぐ銃弾にも怯まず、山のように立ちはだかる巨大兵器を斬り裂いた、青き剣士に。

「真改さん。わたくしは……どうすれば、強くなれるのでしょうか」

だから、己が何より恐れていたのは、捨てられることだった。刃の羽を持つ蝶の意匠を見られなくなることだった。

「それとも、わたくしは……」

強くならねば。さもなければ、今度こそ、全てを失う。その恐怖に突き動かされ、ひたすら訓練に明け暮れた。

あの頃の己と同じだ。心から求める物に、手が届かない。追えども追えども追いつけない。焦りが焦りを呼び、どこまでも大きくなる不安に押し潰されそうになる。少年だった頃の、己と同じ。

そう、同じだ。

なら——

『——羨ましいな』

「……羨ましいな……」

「……え？」

なら。

なら、己のやるべきことは一つ。

『存分に悩め』

「……よく、悩め……」

あの日、地を這いもがいていた己の前に立ち。

『存分に苦しめ』

「……よく、苦しめ……」

手を差し伸べるのではなく。道を示すのでもなく。

『それが、お前の伸び代になる』

「……それを、糧にしろ……」

不敵に笑いながら、傲然と言いつつ、「彼女」のように。

『這い上がって見せろ』

「……追い駆けて来い……」

「待つ気は、ない」

——ただ、己らしく在ろう。

待つ気はない。

ともすれば、拒絶にも聞こえる言葉。けれどそうではないことは、わたくしには——いえ、真改さんを知る人なら、誰でもわかります。追い駆けて来い。待つ気はない。

それは、わたくしなら追いつけると、何の疑いもなく信じているという事。

「……ふんふん」

いつかのように、真っ直ぐにわたくしを見つめる、黒い瞳。見ていると吸い込まれてしまいそうな、黒真珠のように輝くその瞳にあるのは、信頼ではなく——確信でした。

「そう……そうでしたわね」

なんて、真改さんらしい。甘くはないけれど優しく、優しいからこそ厳しい人。

焦りが、不安が、苦しみが、悩みが、消えたわけではありません。けれど、それらを——受け入れようと、思いました。

「そんなの、当然ですわ」

かつて誓ったこと。真改さんの隣で戦うという、わたくしの願い。それを叶える道が、容易いものであるはずがないのです。

だって、険しく、厳しい道だからこそ。

歩みたいと、思ったのですから。

「だって、わたくしは」

気づけば、振るえが止まっていました。

気づけば、かつてのそれを上回る自信が、心に満ち溢れていました。

気づけば、いつものように。

左手を腰に、右手を胸に当てて。

「イギリスの、国家代表候補生」

いつかのような、見栄ではなく。虚勢でも、歪んだプライドでもなく。

ただの、純然たる事実として。

——この人に。

「セシリア・オルコットなのですから!!」

それを聞いて、真改さんは。

小さな、本当に小さな。

微笑を、浮かべました。

## 第71話 鋼の翼

見上げれば、雲ひとつない真つ青な空。9月も終わりが近づき、今年の残暑はそこそこの良心的だったこともあって、太陽の光が照りつける巨大競技場の中は汗をかくほど寒くはなく、身体を冷やすほど寒くもない。絶好のスポーツ日和だ。

いよいよやって来た、キャノンボール・ファスト大会当日。

体調は万全、気迫は十全、機体の調子は完全。競技に臨むには、これ以上ないコンディション。全身に漲る力を抑えきれず、つい足踏みしたりシャドーボクシングしたり。

そんな俺を見て、鈴がふふんと笑う。

「やる気満々って感じね」

「ああ。さつきからうずうずしてたまんないよ」

「せいぜい空回りしないようにしなさいよ。あんまり余裕でぶっちぎっても、つまんないからね」

「言つてろ、今にほえ面かかせてやる」

この日のため、スラスターのエネルギー配分は練りに練ってきた。シミュレーションも十分、楯無さんの悪辣とも言うべき妨害の中、なんとか完走できるようになってきた。

後はただ、その成果を発揮するだけだ。

「ふっ……ほっ……」

「念入りに準備運動するのはいいけど、そんなんじや始まる前にばてるわよ」

「む……」

確かに、レースが始まるまではまだ時間がある。ウォーミングアップも熱が入り過ぎれば逆効果、スタミナを無駄に消費することになってしまう。温まった身体を冷やさないよう注意しつつ、一旦やめしよう。

「……さて。それじゃ、みんなの様子でも見てこようかな」

しかしただじっと待つっていうのも性に合わない。各々機体の最終調整をしているみたいだし、どんな感じか見てくるとしよう。

というわけで、まずはすぐそこに居る鈴のISをチェック。

「……ずいぶん」ついな」

「〔甲龍〕は元々、燃費がいいからね。エネルギーを思う存分、スラスタの推進力に回せるのよ」

増設スラスタが四基、両肩のスフィアから後ろへと伸びている。そして胸部には、追加装甲が大きく前面に突き出していた。

……体当たりのため……じゃ、ないな。多分正面からの妨害攻撃を弾き返すためのものだ。衝撃砲は横向きになっていて、容易に追いつくことを許さないだろう。キャノンボール・ファスト用のパッケージまで安定性が高いのか、甲龍は。

しかし逆に言えば、一度大きく突き放せば、追いつくのは難しいはず。まあその大きく突き放す、つてのがそもそも難しいだろうけど。

「ま、この〔風〕<sup>フエ</sup>はみんなのと違って、キャノンボール・ファスト専用だからね。優勝はイタダキよ」

「ふん、そう簡単には勝たせねえよ」

確かに一番有利なのは鈴だろうけど、それだけで勝敗が決まるわけじゃない。なにより、勝負では何が起こるかわからないもんだ。

「よ、シャル、ラウラ。調子はどうだ？」

「あ、一夏。うん、バッチリだよ」

「作戦に合わせてコンディションを整えるなど容易いことだ」

二人とも、気合は十分という感じだ。レースが待ち遠しいのか、どこかそわそわしているようにも見える。

「おお……それがシュヴァルツエア・レーゲンの……ていうか、ツヴァイクのパッケージか」

「うむ。公式の場で披露するのはこれが初となるな」

ラウラの専用機、シュヴァルツエア・レーゲンの背中には増設スラスタが三基取り付けられている。推進力が一点に集中している感じで、見るからに速そうだ。



「なんかあれだな、レーゲンって万能型だろ？　その割にはそのパッケージ、バランス悪そうだな」

「ほう、外見だけで良く気づいたな。確かにこれは、速度に対して旋回能力はそれほど高くはない」

「ああ、やっぱり」

スピード重視っていうのは別に珍しいわけではないけど、それがシュヴァルツエアシリーズのパッケージなのは少し意外だ。どちらかと言うと甲龍の風みたいなのの方がそれっぽいと思う。

「キャノンボール・ファスト専用ではないから——というのもあるが。当然、それだけではないさ」

「む……」

何か秘策でもあるのか。知っておきたいところではあるけど、さすがにそこまで教えてくれないだろう。パッケージの基本性能については、気づいたことへのご褒美として教えてもらった感じだったし。

「ふむん……レーゲンにはA I Cもあるし、かなり警戒しないとな」

「あれ、戦闘でも危険だけど、レースだとなおさら凶悪だからね」

「ふん。避けられるだけの実力もないなら、どちらにせよ相手にならん」

「……」もつとも」

対象の動きを止めるA I Cは、レースではもはや反則レベルの機能だ。けど狙うのに結構意識を集中しなきゃならないみたいだし、常に高速移動しているキャノンボール・ファストで当てるのは難しいだろう。それが避けられないのなら、他の妨害攻撃だって避けられない。その考えは、それほど間違っていないだろう。

「へえ。シャルは逆に、バランスよきそうなパッケージだな」

「うん。他にもいくつかあったんだけど、やっぱり何が起きるのかわからないからね。対応力重視、って感じかな」

シャルのラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡのパッケージ、その増設スラスターはラウラと同じく三基。けれど配置は両肩と背中に一基ずつというのが違う。ラウラのそれと比べて稼動範囲が広く、旋

回能力が高そうだな。その代わり、推進力が僅かに分散し、直線での速さは劣る……って感じかな。

「スピードが出ないから、直線で弱い……っていうのは、キャノンボール・ファストでは正しくないよ」

「ああ、妨害ありだもんな」

「そういうこと」

直線のコースだからといって、真っ直ぐ飛べるわけじゃない。むしろスピードの出る直線だからこそ、細かな旋回能力が重要になってくる。そこらへんは、楯無さんにさんざん教えられ……と言うより、思い知らされた。

「うーん……やっぱりシャルは手強そうだな。引き出しが多すぎる」

「あはは……まあ、器用貧乏とも言っけどね」

「……………」

よく言うぜ——とは思ったけど、口には出さない。なんか怒られそうな気がしたし、これがシャルなりの作戦なのかも、とも思ったからだ。そういう強かさがあるからな、シャルには。

「そういう一夏はわかりやすいよね」

「ああ……というか、白式がわかりやすすぎるんだよな」

「一点特化というのは、運用方法次第では強力ではあるが。白式の場合それは過ぎていくうえに、発展の幅が狭い。何よりそのことが知れ渡っている」

「そうなんだよな……けどまあ、おかげで開き直れる」

「あはは、一夏らしい考え方だね」

それって褒めてるのかどうなのか。なんかこう、呆れを隠すような慰めに聞こえた。

……大舞台の前で神経質になってるのかもしれない。

「しかしどんな状況においても、白式の攻撃力は脅威だ。常に警戒するに値する、それ自体が一つの武器だ。精々上手く使え」

「了解であります、少佐殿」

ふふんと笑うラウラに、砕けた敬礼をする。そうしてから立ち去る俺を、シャルが微妙な笑顔で見送っていた。

……………なんだったんだろう、あの顔。

「お、よかった」

軽いジョギングぐらいのペースで歩き回っていると、シンを見つけ  
た。隣にはセシリアの姿が。

「おーい、シン、セシリア」

「あら、一夏さん」

「……………」

パアツと、花開くような笑顔で振り返るセシリア。対照的に、無表  
情の見本のような顔で振り向くシン。

……………いつも思うんだが。真つ暗闇の中突然コイツが現れたら、かな  
りのホラーな気がする。

「ふふ……………わたくしも真改さんも、準備万端ですわよ」

「ああ、見りやわかるくらいにな」

「……………」

二人ともすでにISを展開し、高速機動用パッケージを装着してい  
る。ブルー・ティーツを全て機体に固定しスラスター代わりにし  
たセシリアと、翼のようなスラスターを背負ったシン。どうやら最終  
調整も、とつくに終わっているらしかった。

「とっころでさ。セシリアはライフルがあるからいいとして、シンはど  
うするんだ？ 月光、着けてないみたいだけど」

「それについては僕から説明しよう！」

「うおっ!？」

「……………」

出やがったな変態！ ていうかどこに居た!? 隠れられるような  
場所なんてなかったぞ!?

「さてさて。もともと拡張領域パススロットに余裕のない朧月だけど、この「三日  
月」を装備した状態だと本当にかっかつでね。やれやれまったく、本  
来キャンボール・ファストには不向きな機体なのにねえ。無理をす

るからこの様だよ、あつはっはっはー！」

「そういうことを心底楽しそうに言うのはどうかと思うぜ」

ていうか朧月、キャノンボール・ファスト苦手なのか。あの機動力を考えれば、結構得意なんじゃないかと思っただけだ。

「苦手だよ。水月のカートリッジには限りがあるし、月輪の旋回能力は安定性とは無縁だ。どちらも戦闘でこそ活かされる、「特化した機動力」なんだよ」

「……徹底的に突ってるんだな、朧月」

「そりやもちろん。誰でも簡単に扱える、そんな機体はつまらないじゃあないか！」

「打鉄とリヴァイヴに謝れ」

「……………」

そして、そんな如月社長から機体を与えられている真改と技術提供を受けているセシリアは、やっぱり見えないところで相当苦労させられてるんだろうことは想像に難くない。

「で、何しに来たんだ？」

「三日月の調整だよ。大急ぎで用意した物だからねえ、どうしても粗が目立つというか」

「お前んとこの製品は粗がどうこうっていうレベルの話じゃないと思うけどな」

方向性からしてぶっつとんでやがる物ばっかじゃないか。

「まあ、それももう終わったよ。後は——」

グリンツ!! と首を回してセシリアを見る社長。

ビクウツ!! と身をすくめるセシリア。

「……うふ。うふふふふふふふ。さあして、さてさてさてさて。ところで、オルコット君」

「な……な、なんででしょうか、如月社長……」

「以前取らせてもらった、新兵器のデータ……あれを元に新しくプログラムを組んだから、ブルー・ティアーズにアップロードさせてもらっていいかな? いいよね? いいよねえ!」

「ひえ!? あ、いや、はい……いいです、けれども……」

「……………」

勢いに押された、というより、断ればどうなるかわからないという恐怖に負けた感じだった。

……かわいいそうに。

「ブラボー！ おお…ブラボー!! それではさっそく」

「うひい!? あ、あの、お手柔らかに……」

「……………」

……本当に、かわいいそうに。

「いやいや、流石はイギリス。ブルー・ティアーズの中身を見せてもらったけど——ああ、もちろん政府の許可は得ているけど——なかなか、興味深かったよ。全体的な構成はもちろんのこと、細かなオプションやらなんやら、無駄なところがいくつかあったねえ」

「な!? そ、それは、どういう——」

侮辱ともとれる社長の言葉に、セシリアが激昂しかける。しかし社長は気にすることもなく、それどころかセシリアの言葉に被せるように、語り続ける。

「しかし、だからこそ素晴らしい。無駄の全くない物なんて、ヒトの作るモノではないよ。そんなモノは、それこそ機械か神様にでも創らせておけばいい。考えてもみたまえ、生物の全てがただ生存と繁栄のみを目的としているのなら、そもそも感情や個性なんてものは不要なんだ。当然、趣味や嗜好も、ね。」

なら、「無駄」というのは、すなわち「特権」だよ。この地球において、数十億年の進化の果てに生まれた、今の僕ら、人類のね。

ただ生存と繁栄に特化した結果、蟲や獣はどうなったかね？ 答えは簡単、特定の環境でしか生きられなくなった。結局、地球上で最も力を持つ生き物は人間なんだよ。

——では。人間と他の生物とを隔てる、最も大きな要素は何か？ それこそ簡単、「無駄」だよ。

無駄こそが、ヒトをヒト足らしめる要素。一切の無駄を排した時、ヒトはヒトでなくなる。イギリスはそれを良くわかっているよ。無駄だとわかっていながら、あえてそれを組み込む。それはすなわち、

無駄の意味と価値を理解しているということだよ。

……まあ、僕が言いたいのはね。イギリスの技術者たちは、ただ技術だけを求める存在ではない。これだけの技術があれば、僕らがちよつと解析したらわかるくらいは無駄なんて、とっくに直している筈なんだよ。そこに僕は、彼らの気高さを感じるね。我々はただ性能を求めるだけの機械でも、ましてや完全無欠にして全知全能の神でもなく。

——無駄すらも、全身全霊で楽しむことが出来る。それが我々、英国人という存在なのだ、語りかけてくるようだったよ」

「……………」

……以外だ。また何かとんでもないことを言って、しつちやかめつちやかにすると思っていたのに。

思っていたよりも遥かに真摯で誠実な語りに、不覚にも聞き入ってしまった。

……………なんか、悔しい。

「そんなブルー・ティアーズに敬意を表して、無駄な部分は無駄として残したいものだね」

「はあ……………」

「というわけで、僕らの作ったプログラムはそういう方向性のものだから。少なくとも、このキャノンボール・ファストではあまり影響はないと思うよ」

「…………それはつまり、ブルー・ティアーズは元々、キャノンボール・ファストには向いていない、ということですか？」

「そうだよ？　というよりも、初めからキャノンボール・ファストを目的とした機体なんてものはないけどね。まあそれをどうやって調整するかが見所ではあるんだけど、それは少なくとも、僕らがブルー・ティアーズに対してやることではないよ」

「ああ、なるほど……………」

「…………うふふ。その分、今後の実戦訓練その他諸々では、期待してくれていいよ」

「……………」

……「期待してくれていい」と言われてここまで不安になるのは、あの意味すごいことなのではなからうか。

「よう、箒」

「一夏か。ふふん、敵情視察、というところか？」

「ま、そんなところかな」

箒は携帯用端末のディスプレイを呼び出し、紅椿の展開装甲を調整しているようだ。横からディスプレイを覗いてみると……む？ 全部マニユアル？

「おいおい……これ、大丈夫なのか？」

「何がだ？」

「いや、全部マニユアルって……」

それ、かなり難しいんじゃないか……俺なんかPICをマニユアル制御にただけでもかなり苦労したのに。しかも展開装甲は、現状では紅椿にしか搭載されていない機能。一応白式の「雪片式型」もそうだけど、あれは「零落白夜」発動専用みたいなもんだし。とにかく、そんな希少な代物、簡単に扱えるとは思えない。マニユアル制御となればなおさらだ。

「容易いことではないのは確かだな。だがオートだと出力が足りないか、エネルギーが最後までもたん。それで勝つには、皆が足を引っ張りあっている所に漁夫の利を得る形しかない。まあ、そんなことになる確率は低いだろうし……なにより、そんな勝ち方をしても、嬉しくない。」

「どちらにせよ分の悪い賭けなら——私は、自分の力で勝ちに行く」

「……」  
なるほど……心配するなんて、逆に失礼だったな。箒はマニユアル制御のリスクも難しさも全部呑みこんだ上で、それを選択したんだ。なら、俺が言うべきことはない。

「……よし。これでレース中にも、展開装甲の出力を自由に調整でき

る筈だ。……勝たせてもらうぞ、一夏」

「俺だって、そのつもりさ」

箒と視線を交わし、それを宣戦布告とする。

俺はくるりと背を向けて、その場を去った。

こうして、一年生専用機持ちグループの試合が始まるまでの時間を潰した俺は、スタートラインに立った。

会場を包む怒号のような歓声に包まれているが、けれど緊張はない。中学の時に体験した剣道の全国大会は、規模こそ桁違いではあるものの、これに期待が追加されていた。だが今の俺は、ただの「男のIS乗り」として注目されているだけの、客寄せパンダのようなものだ。動物園の動物は緊張なんかしない、そう割り切ってしまうべき。

……という、むちゃくちゃな理屈で自分を落ち着けようとしているだけである。実はすごい緊張しています。

「すー……はー……」

「どうした一夏、緊張しているのか？」

声を掛けてきたのはラウラだ。他のメンバーもそこそこ緊張しているようだが、流石というか、ラウラは平然としている。

「そりやそうだろ。IS学園でもこんな大舞台はなかったぞ」

「まあ、な。IS学園は、学園としての規模は規格外だが、それはISの訓練に必要だからだ。こうした競技を目的とした施設と比べればどうしても劣るのは仕方がない」

「……まあ、そうだよな……」

いやいや、それはわかっているんだよ。問題は、わかっていたって緊張するのは避けられない、ってことだ。

「そういうラウラは平気そうだな。慣れてる……ってわけじゃあないんだろ？」

「緊張しているは実力を発揮出来んからな。実戦でそれは命取りにな



る」

「……予想通りの答えだなあ……」

うむ、参考にならん。

「しかし緊張といえ、マスターもまったく緊張しているようには見えんな」

「ああ……シンは、なあ……」

ちらりと目を向けると、既に試合モードに入っているシンの姿が。ラウラの言う通り、シンの意識はこれから始まる試合に完全集中していて、この歓声すらまったく耳に入っていない様子である。

「アイツだって緊張はするさ。慣れないことはもちろん、こういう勝負関連のことでもな。けどアイツは、そういう緊張感がむしろ好きなんだよ」

「うむ、すごく納得出来るな」

「で、だ。アイツはとにかく、勝負の中でも真剣勝負が大好きだ。だから、まず自分が真剣になるんだよ」

「切り替え、か。それが上手いのだな、マスターは」

「上手いなんてもんじゃないよ。アイツの集中は、速さも深さも尋常じゃない」

「ほう……」

一瞬でマックスまで持っていくからな、シンは。それが発揮される状況は、少々限定されているけれども。

「ふむ……興味深い話ではあるが、しかし後にしよう」

「ああ。……今は、目の前のことに集中しないと」

このちよつとした会話のおかげか、不思議と緊張は解れていた。入念な準備運動のおかげで、身体は十分に温まっている。ギリギリではあったが、なんとかレース開始前に、自分を最高の状態に持っていた。

——後は、勝つだけだ。

『それでは、レースを開始します』

場内アナウンスが響き、会場が一瞬、静寂に包まれる。

特大スクリーンに表示されたシグナルランプが、一つ、また一つと

点灯していく。

これが、レース。戦闘とは違う、この独特の緊張感が。

(なるほど、これは——)

いつだったか、テレビでF1のレースを見た時。スタート直前、すごくワクワクしたのを覚えている。

あのワクワクを、今度は俺自身が参加者となって味わってる。あんな危険なレースになんて挑むのかと思った時もあるが、今ならわかる。

だって、こんなの——

(病み付きになりそうだぜ——!!)

そして、最後のシグナルランプが。

今、赤い輝きを灯した。

## 第72話 最速の魔剣

赤いシグナルが点灯すると同時、一斉に飛び出した。まず頭一つ前に出たのは、シンと鈴だった。シンは水月による加速で、鈴はキャノンボール・ファスト専用パッケージの性能で、といったところか。

「むっ……い！」

「やっぱり、加速じゃ劣るか……い！」

二人に一步遅れて、ラウラとシャルが続く。俺と箒、セシリアはほぼ並んでいる状態だ。

このキャノンボール・ファスト用の競技場には、高性能なホログラム装置が設置されている。それにより、数百キロにもなる巨大な三元のコースを投影できるのだ。

「思っていたより広いな……」

競技場もそうだが、コースの幅が広い。おそらく戦闘機動を十分にとれるようにだろう。

しかしその戦闘も、第一コーナーを抜けるまで攻撃は禁止されている。それまでにどれだけ離せるか、または食らいつけるかが最初の勝負だ。

そして、このコーナーを抜ければ――

――ポーン――

「行くよっ！」

攻撃許可の電子音が鳴ると同時、シャルが仕掛ける。二丁のマシガンによる弾幕、それをシンと鈴が左右にロールしてかわす。そうして減速した隙に、前に出ようとして。

「かかったわねアホが！」

「!？」

鈴がシャルに並ばれる直前、衝撃砲が光を放つ。横へ向けて、シャルの前にバラ撒くように不可視の砲弾を乱射する。

「くうー！」

「簡単に抜けると思わないでよね！」

その弾幕にまともに突っ込んだシャルはバランスを崩し、スピード

も大きく落ちた。ダメージはそれほどでもないようだが、鈴との距離はさつきまでと同じくらい離れてしまった。それに目を向ける暇もなく、横から伸びて来たラウラのワイヤーブレードを避ける。前を見ながらハイパーセンサーで確認すると、ラウラはワイヤーブレードで俺たちを牽制しながら、レールカノンで先頭の二人を砲撃していた。「相変わらず、器用なことを……!」

6人を同時に攻撃しているのに、恐ろしく精密。そしてそれだけのことをしながら、コーナーに差し掛かると見事な旋回で先頭との距離を詰める。やっぱりISの操縦技術についてはラウラが抜きん出ていると再認識させられる。

だが、6人を同時に攻撃できても。

6人からの同時攻撃は、かわせるか——!?

「な!?!」

今の攻撃で、全員がラウラを強敵と判断したようだ。バトルロワイヤルにおいて、突出して強い奴は同盟のリーダーになるか狙われるからだ。そしてこの短期決戦では狙われるに決まってる。

部隊での行動に慣れて、それを忘れたのか。どちらにせよ、これは大きなチャンスだ。

全員が、ラウラに向けて武器を構えた。俺も雪片式型を握り締め、シンも月光のない右拳を構えた。

そして、発砲。

「くうー!」

不可視の砲弾、マシンガンの連射、レーザーライフルの狙撃、二刀から放たれる光弾。それらをどうにか避けつつも、ラウラは体勢を崩した。そこに一気に近づき、雪片式型を振り上げる。

「ぜえあー!」

「シッ!」

高速機動中じゃあ、思うように剣を振れない。そんな俺とは対照的に、ラウラは洗練された軍隊格闘術でその一撃を受け流す。それと同時に、シンがラウラに接近、正拳突きを叩き込んだ。

「疾……!」

「ぐうー」

さすがのラウラも、シンの攻撃は避けられなかったようだ。スラストアーを殴られ推力の向きを強制的に変えられたラウラは、コースから大きく外れていく。

これで、しばらくは時間を稼げるだろう。

（よし、あとは——）

燃費の悪い白式としては、できるだけ攻撃も防御も避けたいところだ。理想は、激戦を繰り広げる先頭グループから少し遅れて付いて行き、最後に追い抜くというレース運びだが——それをさせてくれるほど、みんな甘くはないだろう。

なら、遅れるわけにはいかない。

そんな余裕はないと、みんなに思わせるくらいに、必死に。

俺も、先頭グループに食い込まなきゃならない。

「けど、これは……」

さっきの攻防で、順位は随分と入れ替わった。というよりも、今も入れ替わり続けている。つまりはそれだけの混戦つてことだ。

先頭は、今のところ鈴。その後ろに、というよりもほとんど並んで、シン、箒、セシリア、シャルが続いている。

鈴が放つ衝撃砲は、言うなれば見えない撒菱だ。威力は大したことないが、足止めとしては極めて効果的だ。それこそが、この混戦の中で未だに鈴がトップにいる理由でもある。

次に注意すべきはシャルだ。連射の利く武器を大量に持ち、それらを扱う技術も十分。下手をすれば足止めどころか、撃墜されかねない。

そして、優れた狙撃主であるセシリア。威力、精度共に優れた彼女のレーザーライフルは、どれだけ引き離しても脅威だ。ましてやこんな近距離じゃあ、避ける暇もありやしない。

箒の紅椿は、白式と同じく燃費は悪いはずだが……それでも、どんな体勢からでも自在に攻撃できるという、展開装甲の恐ろしさに変わりはない。混戦で一番強いのは間違いない紅椿だ、警戒を怠るわけにはいかない。

最後に——シン。コイツが一番怖い。何が怖いって、これまでに目立ったことをしていない。本人が望んでいるかどうかは別として、こ  
と勝負に関してシンがやることは、強烈に印象に残ることばかりだ。  
その印象に残ることを、まだやっていない。それが怖い。いつ、どん  
なことをするのか、それがわからない。

……まあシンの場合は、何があつたつて最後まで油断できないんだ  
けど。

(ここで行くのは、いやだなあ……)

ほとんど自殺行為だ、あの中に飛び込むのは。飛び交う銃弾、目ま  
ぐるしく入れ替わる攻撃と防御。遠距離攻撃の手段がない白式じゃ、  
まず生き残れない。

しかしだからと言って、このままみんなの後ろを飛び続けるのも、  
なんか嫌だ。

あの激戦に加われないのなら。なら、せめて——

(一番前に、居たいよなあ——！)

なあに、どうせ負けたつて、何があるつてわけじゃあないんだ。  
ならちよつとばかり無茶するのも、悪くはない。

(さあ行くぜ、白式っ!!)

レースはちようどコーナーに差し掛かったところ。

そう、コーナーだ。そして今もお、激しい攻防が繰り広げられて  
いる。

ならお前の出番だな、雪花——！

(内側から抜く！ 空気を外へ流せ！)

——気流操作、開始します——

雪花に指令を出すと、機体にかかる空気抵抗に差が出始めた。コー  
ナーの内側はほぼ真空、逆に外側には分厚い空気の壁が出来上がる。  
外から押され、内から引つ張られる。すると俺は、特に何もせずと  
も、コーナーをなぞるように旋回していった。

「む!？」

「行かせん!」

みんなを尻目に前へ行こうとする俺に、箒とラウラが反応した。

ロックオン、それとほぼ同時の斬撃、砲撃。無数の光弾と帯状のレーザー、貫通力に優れたレールカノンの砲弾が一度に迫る。

だが――

「な………!」

「なんだと!?!」

正確に放たれた攻撃が、僅かに逸れていく。それはこの高速機動の最中では致命的なブレ、つまり命中率が絶望的に低くなるということだ。

それは全て、雪花が移動させた空気のおかげだ。超音速飛行ではまるで鉄板のように感じられる、空気という障害。それを集めて、一点に集中させる。そうすれば、ISより速くて軽い砲弾はIS以上に空気抵抗の影響を強く受けるし、レーザーは空気の密度差によって屈折率を変えられる。

その結果がこれだ。俺自身は回避行動を取るまでもなく、弾が勝手に避けていく。誰よりも短いコースを、誰よりも速く、誰にも邪魔されずに駆け抜ける。

――まさに、理想的。

「ははっ、思った以上に上手くいったな!」

思わず笑いが出てしまう。まさかこんなにも、雪花が効果的だとは。一人で訓練していた時にはわからなかった。あの時は機動の補助に役立つくらいにしか思ってたからな。

雪花の守護を受けた俺は、そのままさらに加速していく。見る間に追い付いてきた俺に向け、鈴が衝撃砲を放つが、単純に威力不足で雪花を破ることができない。

さて、これで俺がトツ――

「油断大敵、ですわよ?」

「!?!」

声が聞こえると同時に、ハイパーセンサーがISの接近を感知した。それが誰かは明白だ、しかしだからこそわからない。

出力はほぼ直角、なのにこのコーナリングに、一体どうやって付いて来ている!?!

「ふふ……なかなか素敵な居心地ですわね」

「……！　そうかつ、スリップストリーム!!」

スリップストリームとは、例えばF1レースなどで、車が通った直後に空気抵抗の小さい領域が発生する現象のことだ。また、それを利用し、前を走る車の後ろにピタリと続くことで空気抵抗を軽減し、相手を抜き去るテクニクのことでもある。雪花の能力は、このスリップストリームを応用したものだ。

……そう、そうだよ。なんで今まで気付かなかったんだ。

雪花が気流を操作して、スリップストリームに近いことをしているのなら。

俺の後ろはまさに、がら空きじゃねえか——！

「ごめんあそばせ♪」

「ぐあっ!」

ペロリと小さく舌を出し、ウィंकまでしながら、手にしたレーザーライフルが閃光を放つ。可愛らしい仕草とは真逆の、凶悪な精密さをもつ狙撃。それは雪花の守りも空気の壁も存在しない、小さな隙間を射抜いた。

……確かに昔から、それは狙撃手にとつての基本だろう。弓の時代は鎧の継ぎ目を、銃になってからは警備の抜け穴を、つまりは弱いところを突くつていうのは。

だがそれを、こんな高速機動中によつてのけるかよ、セシリア——

!

「ぐうううう……!」

コーナリング中に内側から攻撃されて、大きく弾き飛ばされる。未熟者が、ちよつと予想外に上手くいったもんだから調子に乗り、結果こんな様だ。いくらでもある小話みたいな展開じゃないか。

見ればセシリアが、俺に向けて優雅に手なんか振りながらトップに出るところだった。

上手いこと利用されて、悔しさが込み上げて来る。けれどこれは俺の油断と浅慮さが招いたことだ、教訓として受け止めるしかない。もう同じミスはしない、そう心に決めながら軌道を修正し、コースに戻



る。

(とにかく今は、状況の把握だ……)

順位は……セシリアがトップ、続いて鈴、シン、少し遅れて箒と俺、シャルが……!?

(ラウラは……どこだ!?)

さつき、大きく遅れたラウラの姿がない。俺たちは攻撃、防御をしながら飛んでいるんだから、距離を詰めることはあっても離れることはないはず。なのに後ろを見ても、どこにもラウラがない。

(コーナリングに失敗して、遅れたか……? いや、あのラウラがそんなミスをするわけがない)

そう、あれ以上後ろにいることはあり得ない。

なら、後ろにいないと言うのなら、どこにいる?

……まさか――

――ガキイン――

「!?」

ハイパーセンサーが、かすかに音を捉えた。刃物を硬い物に勢い良く突き刺すような音だった。素早く視線を巡らせて、その音の発生源を探ると。

「ほう……最初に気付くとは予想外……いや、ここは「流石は私の嫁だ」と言ったところか」

「なあっ……!?!」

コーナーのたび、白式をも上回りかねない凄まじい速さで旋回し、一気に鈴まで追い付いたラウラ。その光景に度肝を抜かれた。

……そうか、そのための速度重視、それがあから、旋回能力は必要なのか。

まさか……地面に突き刺したワイヤーブレードを支点<sup>ア</sup>代わり<sup>カ</sup>にして、円運動を利用するとは――!

「む……!?! な、あれは!」

「どこかのマンガみたいな移動方だね……!」

自身を重りとして、振り子の要領で移動する。昔から使われてきたその方法も、ラウラが使えばより効果的だ。シュヴァルツェア・レー

ゲンのワイヤーブレードは6本もあるうえに、長さまで調節できるのだ。そのワイヤーブレードを自在に操ることで、旋回能力を飛躍的に高めているんだろう。

確かにシャルの言う通り、アニメ化までされた大人気マンガに、似たような方法で移動する装置が出てきた。アレは人類の敵である、巨人の弱点まで辿り着くために必要なんだっけか。

あれほど遅れていたのに、もう追いついてきやがった。予想を遥かに上回る速さ、しかも高度が低く、地面スレスレ。そのせいで、鈴はまだラウラの接近に気づいていない。

ヒュウン。そんな音がここまで聞こえきそうなほど鋭く、ワイヤーブレードが上へと伸びる。そして鈴の足に絡みつき――

「へ？ うわ!？」

そのまま一気にワイヤーを巻き取る。鈴は最初驚きバランスを崩したが、すぐに立て直した。おかげでラウラは、空中に新たな支点を得た。結果、ラウラはあつという間に上昇していき。

「ハアッ！」

「きやあ！」

すれ違い様、プラズマ手刀の一撃を叩き込む。鈴は怯み、スピードも落ち、俺たちのところまで下がって来た。そのままラウラは、セシリアへと踊りかかる。

「ラウラさん!? ……まったく、無粋ですわね。わたくしのステップを邪魔するだなんて！」

「そんなものは教わっていないのでな、悪いが付き合えん！」

「なら、下がっていきなさいな！」

そして始まる攻防。ラウラのワイヤーブレードとレールカノンがセシリアに向かい、セシリアは後ろ手にレーザーライフルを構え連射。ラウラはともかくとして、セシリアの銃撃も精確だ。あんな撃ち方だつてのに。

俺たちの中でも、特にプライドの高い二人。エネルギーの無駄にしかならないつてのに、トップを譲る気はないらしい。……俺も人のこと言えないけど。

「ちい……随分楽しそうじゃないのよっ」

「ふん、すぐに叩き落してくれる！」

「うん、いつまでも二位グループに甘んじてるつもりは……って、あれ？」

「ん？」

セシリアとラウラを追い、コーナーを抜ける。すると今までで一番長い直線に出るのだが……その直前、シャルが何か、違和感に気づいたようだ。

「……シンは？」

「……え？」

……確かに、いない。さっきまでは、確かに並んでいたはずなのに。前じゃない。それならラウラが見落としているはずはない。

なら、後ろだ。

見れば、二人に気を取られている一瞬の隙に、シンは僅かに減速していた。

そうして後ろに下がった姿はまるで、引き絞られた矢のようで。つまり、次の瞬間には。

俺たちに向けて、放たれるということだ。

真改は、この瞬間を待っていた。

三日月に搭載されている、唯一の武装。エネルギーを大量に消費するそれは、連発出来る代物ではない。だから一度で全員を攻撃できる機会を窺っていた。

それが今。十分に速度を出せる長い直線に、全員が固まっているというこの状況。真改は、一気に加速した。

「！来るぞっ!!」

一夏が、今は敵である少女たちに警告を発する。全員が撃墜されかねない、それほどの危険を感じ取ったからだった。

それは、正しかった。

「……………いざ……………」

——ゴウウウー！——

空気が焼かれ、膨張する音。それはまさに爆音であった。水月のカートリッジが起爆した音も含まれてはいたが、それがあまりに小さく聞こえるほどの轟音であった。

それは、三日月の両翼から。

競技場全体を照らすほどに、眩く輝く。

光の刃が、生み出された音であった。

「おい、マジかよ……………!?!」

それはきつと、こんな状況じゃなければ、幻想的と思えるほど美しい光景だっただろう。

けど追われる俺たちからすれば、断頭台ギロチンの刃が落ちて来るのとなんら変わらない。

コース幅の半分はあろうかっていう長さの、特大のレーザーブレードが、迫って来るなんて——！

「ちよ、冗談でしょ!?!」

「なんとという物を作っているんだ、如月はっ!!」

「ふざけるのも大概にして欲しいね……………」

光の色は青。恐らく、月輪に仕込まれている「月華」と同じタイプの物だ。サイズは桁違いだけど、それにきつと、威力も。

「う、撃て！」

「言われなくても！」

「お前はこういう時役立たずだなっ！」

「言ってる場合か!!」

さすがの零落白夜も、あれは無理だ。なにせしつかり、左右でブレードが分かれてる。片方を消してる間に、もう片方にバツサリだ。セシリアとラウラは……………戦闘を中断して、早くも逃げに入ってる。気持ちはわかるけど、ちよつとは助けてくれてもいいんじゃない

か？

というわけで、箒と鈴とシャルが一斉射撃を開始する。しかしシンに届く前に全部焼け落ちた。なんてこった。

「ダメね、逃げよう」

「賛成」

「異議なし」

「言われなくても、スタコラサッサだぜ」

迎撃は諦め、逃げることに全力を注ぐことにした。しかしシンは、俺たちを大きく上回る速度で追ってくる。どうやらあのブレードを発動している間は、推力まで上がるらしい。

「くそ、避けるしかないな……！」

左右は無理だ、上か下じゃないと――

「……っておい、それはさすがに勘弁してくれっ……!!」

シンの野郎、やっぱとんでもねえ。

ブレードを展開しながら、ロールし始めやがった！

「う、わ、うわああああああああっ!!」

月輪を使っているのか（あの目立つ噴射光も今は全く見えない）、ロールはとんでもない速さだ。目を回さないのかアイツ。

そしてそんな、ヘリのローターみたいになってるレーザーブレードに最初に巻き込まれたのはシャルだった。見てわかるくらいの大ダメージを受け、列から離れていく。続いて鈴、箒と同じようにやられていき。

「く、こうなったら……！」

あれを避けるのは無理だ。こうなったら覚悟を決めるしかない。

節約したかったが、零落白夜を起動する。それを振り上げ、シン目掛けて渾身の力で振り下ろす。

「チエエエストオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオっっっ!!?!」

……ダメでした。

「くそ、このままでは追いつかれるぞ！」

「わかってますわそんなこと！」

私たちは一夏たちから少し離れていたが、それがどうしたと言わんばかりの速度だ。セシリアのレーザーライフルも私のルールカノンも、アレの前では無力と言わざるを得ない。

停止結界？ マスターに当たるとは思えんな。

「どうする!?!」

「……どちらかが囷になるしかありませんわね……」

……やはり、それしかないか。

しかしこの状況で、どちらが囷になるかを議論している時間はない。それはセシリアも同じ意見だろう。ではどうするか。

簡単だ。上下に分かれ、後はマスターがどちらを狙うかの運任せだ。

「私は上に行く！」

「わたくしは下へ！」

素早く散開し、コースの上ギリギリまで移動。ちらと見ればセシリアもまったく同じ行動をしていた。

……さあ、どちらへ来——!?!

「ば……馬鹿なっ!?!」

「そんなことが……!?!」

……如月の技術力は天井知らずか。一体どうすればあんなことが出来るのか、見当も付かん。

まさかレーザーブレードの刃が、発振装置を離れ、刃だけで飛翔するなど——!

「くう、おおおお!!」

「きやああああ!!」

あまりにも予想外に過ぎたその攻撃に、反応が遅れた。回避が間に合わない。だがスラスターに当てさせるわけにはいかん、際どいタイミングで体を捻り、左腕で受ける。

「ぐう、なんとという威力だ……!」

一撃で、シールドエネルギーの三割を持って行かれた。直接受けた

皆はそれ以上だろう、もしかすると半分は減っているかもしれない。  
マスターがキャノンボール・ファストに無手で挑むとは微塵も考え  
ていなかったが、想像を絶していた。というか誰に想像出来るという  
のか、こんな攻撃手段を。

「く……ふ、ふふふ……」

しかし流石に、あれほどの攻撃は何度も出来まい。エネルギーの消  
耗量が尋常でないのは明らかだ。

問題は、マスターがその数少ない機会を辛抱強く待ち続ける忍耐  
と、確実に活かす戦術眼を持つていることだ。

——だからこそ。

「面白い！」

いつ後ろから猛攻を受けるのか、見逃せば即敗北。その緊張感がた  
まらない。

……ふ。私も随分、染まってきたな。

「さあ、行くぞー！」

だが、悪くない。軍人としてはどうかと思うが、悪くない！

見れば皆も、先頭に出たマスターを全力で追いかけている。その最  
中でさえ激しい攻防を繰り広げながら。隙を見つけては、マスターへ  
攻撃しながら。

「ドイツ軍少佐、シュヴァルツェ・ハーゼ隊長」

まったく、大馬鹿者どもが。

お前たちも、この私も！

そして——

「ラウラ・ボーデヴィツヒをなめるなよっ!!」

——勝つのは、この私だっ!!

## 第73話 空

レースも中盤に差し掛かり、参加者たちの手札はほぼ出尽くした。度重なる激突、目まぐるしく入れ替わる攻防と順位。観客席は熱狂の渦だ。

序盤のコースは比較的低高度だったが、少しずつ高度が上がってきている。それにより、初めはラウラが不利になると思っていた。ワイヤーブレードを使った旋回法が不可能になるからだ。

しかし、それは大きな間違いだった。

「くそ、本当に器用なやつだな……!」

ラウラは地面が遠くなりワイヤーブレードを突き刺すことができなくなると、ワイヤーブレードをAICで空中に固定するようにしたのだ。

「AICって、集中しなきゃ使えないんじゃないのかよ!」

「ワイヤーブレードは自分で動かしているんだぞ、敵を狙うほどの集中力が必要あるまい……!」

そりやそうだ。そしてあのラウラが、高度が上がった程度で使えなくなるような方法に頼るとも思えない。

しかしその移動法も、段々とキレがなくなってきた。それというのも――

「そこっ!」

「くっ!」

ワイヤーブレードが、セシリアの狙撃により撃ち切られているからだ。

「この段階で、半分も失うとはな……セシリア、甘くみていたか……!」

「あらあら、敵性戦力の分析は基本なのではなくて?」

「……その通り。まさかお前が、これほどの強敵になるとはな。予想だにしていなかったぞ!」

「まったくですわ。確かに以前のわたくしでは、あなたには手も足も出なかったでしょう……でも、今は」



ワイヤーブレードは細く、単純に的として小さい。それに動きが速く、ラウラの意思で自在に操れる。それを線の斬撃ならともかく、点の銃撃で命中させるなんて。

「あなたとも十分に、渡り合えましてよっ!!」

「それでこそだ、セシリア・オルコット。それでこそだ!」

シユヴァルツェア・レーゲンの増設スラスター、それが花卉のように大きく広がり、さらに内側の装甲がパージされる。それにより、旋回能力は向上するだろう。もうワイヤーブレードを旋回に使う必要はなくなっただろう。

けれどあんな、スラスターの接合部が背中的一点に集中していたんじや操作は難しくなる。いくらワイヤーブレードの半分を失ったからって、まだそんなリスクを犯すほどではないはず。

それでも、それを選んだということとは――

「迎撃するつもりか!」

ワイヤーブレードの動きが変わる。進行方向に向かっていた刃が後方を向き、レールカノンもぐるりと回転する。

「けれど」

「私たちが忘れてもらっっては」

「困るねっ!」

鈴が、箒が、シャルが前に出る。そしてラウラとセシリアを射程に捉えた瞬間から猛攻を始めた。

「いいだろう、まとめて」

「お相手いたしますわ!」

あつという間に、コース内に砲火の嵐が吹き荒れた。爆撃機の編隊が有りつ丈の爆弾を投下しているかのようだ。

そんな中で、みんながみんな、全力を出し合っている。温存出し惜しみなんてまるで考えていないかのような、無茶な戦い。先に根を上げた者が負けという、我慢比べに等しい勝負。

いや、これはそんなに単純複雑なものじゃない。

ただ誰が強いか、誰が速いか。それだけの――

「……へへ」

「……………」

それを見ていると、前に構えていた雪片式型が、自然と高く持ち上がっていく。

防御の構えから、攻撃の構えへ。

「楽しそうじゃないか、俺も混ぜろよっ!!」

「……………」

横を見れば、シンが目を見開き犬歯を剥き出しにした獰猛な笑みを浮かべていた。そして機種を大きく下げ、猛禽のように襲いかかる。

「おおおおおらあああああああああつ!!」

「疾っ……………」

螺旋を描くように高度を下げながら、シンと激突する。その瞬間に放った袈裟切りを月輪で打ち落とし、返しの横薙ぎを膝で蹴り上げ、唐竹の一撃を三日月で受け止め。

同時に繰り出した蹴りがぶつかり合い、弾かれて大きく離れる。もう一度ぶつかり合いたいところだが、そうもいかない。なぜなら、今まさに——

「ちいつ、来るだろうと思っていたが……………」

「二人同時とはね!」

俺は筈に、シンは鈴に斬りかかる。銃撃戦のど真ん中に剣士が飛び込めば、なす術無く射殺されるか、徹底的に引つ掻き回すかのどちらかだ。今回は当然、後者だった。

「ふん、いい度胸だ。返り討ちにしてやろう!」

「やってみな!」

「そんな小回りの利かない装備で、僕の戦術ミラーシユ・デ・デザートに対応できる!？」

「……………無論……………」

まだ先が残っている以上、ここで零落白夜を使うわけにはいかない。既に一度使っているからなおさらだ。だが零落白夜がなくても、雪片式型の鋭さと白式のパワーなら威力は十分だ。

そしてシンも、三日月のブレードを一瞬だけ発動させることで対応している。なにより月輪と両膝の小型ブレードは健在なんだ、それだけでもシンの脅威は計り知れない。

「あたしを無視すんなって」

高速移動しながら切り結ぶ俺たちを、無色の衝撃が襲う。威力はそれほどでもないが、全身が痺れるようなダメージを与えてくる。

「言ってるんでしょうがっ!!」

そこへ追撃、さらなる砲撃。言うまでもなく、鈴の龍咆だ。怒っているのか笑っているのか、恐らくその両方だろう凄絶な形相で撃ちまくってくる。

「無視しているつもりはないさー!」

「ちゃんと射程内だよ!」

「隙を見せれば、一撃で墜としてやったものを!」

「やってみなさいっての!」

「……………では……………」

……………馬鹿め、シンがそばにいるのにそんなこと言えばどうなるか、火を見るより明らかだろうに。案の定、嬉しそうな——そりやもうホント、怖いくらいに嬉しそうな顔で、鈴の方に向かって行った。

……………ご愁傷様。

「き、来なさい!」

「……………応……………」

「……………涙目だ……………」

まあ、気持ちはわかる。戦ってる時のシンの笑顔は、本当に怖いんだよなあ。あれを向けられたら、ビビったって仕方ない。俺も多分ビビる。

とにかく鈴がシンを相手にしてくれているおかげで、俺たちは平穩無事に撃ち合い斬り合いながら、和氣藹々とバトルレースを進めていった。

「!? 機首が下がった!?!」

僅かに出来た余裕に、周囲の状況を確認する。するとちやうど、ラウラとセシリアが高度を下げ始めたところだった。

今回のコースは比較的単純だ。半分は上り、半分は降り。だから今まで、多少の上下はあれど基本的には上り続けていた。それが急に、降り始めたという事は——

(折り返しか！)

正直、緊迫した状況が続いていたので、今コースのどの辺りにいるのかを確認する余裕すらなかった。なので当然、消耗も激しいわけだ。

(ようやくか……保つか、最後までっ！)

レースは残り半分。だがシールドエネルギーもスラスタージェネレーターも、4割を切ってる。ただ飛ぶだけなら十分だが、勝てるだけの飛行をしようと思えばギリギリ……足りない。

(でも、それはみんなも同じはず)

なにせ、これだけの激戦だ。温存なんかできているとは思えない。そんなことをしているなら、とつくに遅れをとっている。

苦しいのはみんな同じ、それでも歯を食いしばり、限界を見極め、そして超えようとしているのだ。俺一人、ここで引き下がるかよ——！

「気合入れろよ、白式っ!!」

そして二人に一瞬遅れて、俺たちも下り道へと入って行った。

それは偶然でも奇跡でもなく、必然であり当然であった。

(……?)

ラウラ・ボーデヴィツヒと並び先頭を飛んでいたセシリア・オルコットが、ほんの些細な違和感に気づいたのは。

(今、なにか……)

それは、本当に一瞬のことだった。ブルー・ティアーズのハイパーセンサーに表示される情報、その内の一つ。

セシリアをロックオンしている反応が、一つ増えたのだ。

それは、何もおかしなことではなかった。これほど激しいバトルロイヤルだ、ロックオンが安定している方が異常と言える。

そう、それは異常なのだ。この状況で増えた、ロックオン反応。

それが常に、セシリアを捕捉し続けているのは。

(……今まで、ここまでロックを続けている人はいなかった)

数秒に一度、誰からもロックされていない瞬間はあった。なのに今は、その瞬間がない。

たとえどれほど僅かでも、確かに存在していた筈の一瞬。それが今、この段階になつて、突如として消える。

それが有り得ないとは言わない。確率は低くとも、そんなことがあつても不思議ではない。それはセシリアにも分かっている。

だが、それでもセシリアは思ったのだ。

(……この状況……)

つい先ほど、コースの折り返し地点である降りに入ったところ。後続の者たちもそこに辿り着いた頃だろう。

全員の機首が、視線が、意識が、同時に下を向く頃だろう。誰も、そのさらに上のことなど見てはいないだろう。

——そう、誰も注意を向けていない方向がある、この状況。

それは、まさに。

(これは、まさに)

狙撃には、絶好の状況——

「皆さん!! 上ですっ!!」

そう。これは必然であり、当然なのだ。この状況でただ一人、セシリア・オルコットだけが、それを事前に察知したのは。

優れた狙撃主であるセシリアは、優れた対狙撃主でもあるのだから——

「……な、あ……?!」

セシリアの警告は、しかし僅かに遅かった。突如空に閃いた光の槍、その数七。それが一夏、真改、箒、鈴、シャルロット、ラウラのメインスラスターを貫く。警告を発した本人であるセシリアだけが、なんとか回避した。

皆が大きくバランスを崩したが、特にスラスターの配置が集中して

いたシャルロットとラウラは致命的だった。

「メインスラスターが完全にイカレてる……狙われた!？」

「よりによって降下中につ……く、ダメだ、飛べん!」

空気抵抗により減速しつつあるが、それでも音に近い速さで高度が落ちていく。このまま地面に激突すれば相当な衝撃を受ける。衝突自体のダメージは防げても、速度が一瞬でゼロになるのだ。消耗もしており、死ぬ可能性も高い。

「シャル!!」

「ラウラさん!!」

その緊急事態に、真改が真つ先に反応した。それと同時に、無事だったセシリアが。

セシリアは、ラウラのそばに居たためすぐに助けられた。問題は真改の方だ。

「……………!」

先の一撃で、メインスラスターと三日月の左の翼をやられた。右の翼を最大推力で噴かし、月輪でバランスを取る。本来の使い方とは明らかに違うそれでは満足に速度を出せないが、それでも墜落までには追いつけるだろう。

「シン!」

「……………!」

実際に、シャルロットを抱えることは出来た。だが減速が出来なければ、死体が二つに増えるだけだ。

「ちよつと、そんなスラスターで……………!」

「舌を噛むぞ!」

「っ!」

ぐるんと仰向けになり、水月の状況を素早く確認する。スラスターの噴射口は潰されているが、カートリッジはどうか無事だ。それを装填し、撃発。

——ゴウンツ!!——

「……………!」

「シンっ!」

一発では足りない。多少は減速したがまだ不十分、危険な速度。ならば、もう一発。

——ゴウンツ!!——

「ぐっ……………」

「無理しないで!」

まだ足りない。ならばさらに一発。二発、三発——!

「がは……………」

「シン、もう止めてっ!!」

地面はもう目の前。だがまだ、減速は十分ではない。

このままでは、シャルロットが怪我を負う。衝撃で骨を折るかもしれない。地面や装甲の破片に、肉を引き裂かれるかもしれない。それは一生、肌に刻まれるかもしれない。

許せるか、そんなことが。

この美しい少女に、そのような傷をつけるなど——!

——コード認証。月渡<sup>つきわたり</sup>、起動——

「がっ……………」

残ったカートリッジを一齐に起爆し、最後の減速を行う。そして、墜落。

ズドオオオン!!

「ぐ……………か、は、あ……………」

「シ、シン、大丈夫!」

「……………応……………」

背中からみしりと不穏な音がしたが、折れてはいない。シャルロットもどうやら無傷のようだ。それを確認し、真改はほっと一息つい——

「バカあつ!!」

「……………!」

キィイイン…………と、耳鳴りがするほどの大声だった。墜落の衝撃がまだ抜けていなかった真改には結構効いた。

「シンのバカ、馬鹿、莫迦あ!! 無茶しないでっいつも言ってるでしょ!」

「……すまん……」

別に大した怪我はしていない——なんて言えばもつと怒られるだろう。それを悟った真改は何も言わないことにした。

それよりも今は、優先すべきことがある。

突然の襲撃者を追って飛び立っていったセシリアの姿を、真改は鋭い眼で見ている。

「長々距離から、高速飛行する六機に対する、同時精密狙撃……さすがね、エム。素晴らしいポテンシャルだわ」

緊急事態に騒然とする観客席の一角、普通の席とは違うテーブル付きの高価な席で、高級なスーツに身を包んだブロンドの女性が優雅にワインを楽しんでいた。その姿は美しく妖艶で、こんな状況でなければ誰もが目を奪われたことだろう。

「二人撃ちもらしたわね。勘がいいのかしら？　けど、かえって好都合ね」

エムを追って競技場を飛び立つ青い装甲を、嬉しそうに眺める女性。それを見送ってグラスに残った最後のワインを飲み干す。そうして、席を立とうとして——

「……、いいかな？」

「!?」

直前に、一人の男に止められた。

「な……あ、あなたは……」

「やあ、久しぶり。こうして会ったのは……ええと、何年ぶりだったか？」

「……さあ……どれくらいだったかしらね」

親しげに——というよりも馴れ馴れしく話しかける男に対し、女性は見ると警戒している。なぜなら、この女性は知っているからだ。今日の前に居る男は、あらゆる意味で、何をするか分からないということ。



「さて。……僕は君のことを、なんとお呼びすればいいのかな？ お嬢さん」

「……スコール・ミューゼル。今はそう名乗っているわ、如月重工の社長さん」

男——如月社長はそう言われ、笑う。悪の秘密結社、その幹部と対面するという状況を、心底から楽しんでいるのだろう——スコールはそう考え、そしてそれは正しかった。

「いやいや、驚いたよ。まさか君が、ファントム・タスクに居るとはね。それに随分と若々しい、とても——」

「女性に年齢の話をするのはマナー違反よ」

「おっと、これは失礼」

そう言つて、また笑う。

(ああ、本当に——変わっていないわね、この人は)

如月社長の姿を見て、スコールは思う。まさか自分は、懐かしんでいるのか、と。

「……あなたが介入してくることは予想してたわ。以前会社を狙ったし、それに学園にはあなたのお気に入りがあるもの」

「うん、井上君も布仏君も、素晴らしい逸材だよ。片や才能、片や——執念、かな」

「執念、ね」

どちらがどちらを指しているのか、スコールにはすぐに分かった。確かに彼女の戦い方には、執念じみた何かを感じた。それが才能よりもよほど恐ろしいモノであると、スコールは知っている。

「どうせあなたは、こういうことが好きだから、わざわざ姿を見せたのでしょうけど。殺されるかもしれないとか考えなかったのかしら？」

「つい最近、同じようなことを訊かれた気がするけど。それに対する僕の答えは決まっている。

——それはまさか、脅しか何かのつもりなのかな？」

「……そうね。あなたはそういう人。生きることより楽しむことを優先する……ただ結果として、運よく今まで生き残っているだけ」

「僕に言わせれば、楽しくない人生なんて死んでるのと同じだと思っ

けどねえ。まあそこは、個人個人の考え方の違いかな」

そしてこの男の恐ろしいところがこれだ。この男は楽しみのためなら、自らの命すら平気で投げ出す。それに巻き込まれれば、破滅する。

「……あなたの会社に手を出したのだから、敵対するのは当然だけれど。あなたがそれを楽しんでいるのはどうして？」

「うん？ さっき言っただろう？ 僕はこういうことが——」

「あなたと私が向かい合って話してる、今のこの状況のことを言っているんじゃないわ。如月重工あなたたちとファントム私・タスクたちの、戦争のことよ」

「ああ、そっちなか」

問われて、如月社長は満面の笑みを浮かべる。楽しくて仕方がない、誰が見てもそう分かる、子供のような——それでいて、どこか不気味な、そんな笑顔で。

「僕はね、大好きなのさ。手間をかけ金を注ぎ込み情熱を傾け長年を費やして、コツコツコツコツコツコツ、一生懸命に、真面目に、慎重に、大事に、丁寧に、積み上げてきた計画。それをあと一歩、あとほんの少しというところで——」

——台無しにしてやるのが、ね」

それは、本心からの言葉。この男は本当に、そんな理由で命を懸けている——

「……本当に。変わらないわね、あなたは」

言いたいことを言っただけで席を立つ如月社長を眺めながら、スコールは呟く。

そこに込められた感情は——

「けれど私もね、変わったわけじゃないのよ。変わってしまったのは……世界の方よ」

——誰にも、推し測ることは出来ない。

「……さようなら、如月。今度会ったら……きつと、殺し合いになるわ

ね  
「

## 第74話 貴き者の務め

「ラウラさんー！」

バランスを崩し真つ逆さまに落ちていくラウラさんに、なんとか追いつきました。背中を増設スラスターの中心を穿たれ、そのダメージでメインスラスターも誘爆し、制御を失ったシユヴァルツエア・レーゲンが落ちていく。

それを見過ごすなんて、わたくしにはできませんでした。

「く、うー！」

「すまん、セシリア……！」

音速で落下する機体を、自分を含めて二つ抱える。もしストライク・ガンナーを装備していなかったら、支え切れなかったかもしれない。けれど今は、そうではない。墜落することなく、なんとか空中で立て直しました。

「どうです、飛べますか？」

「……いや、無理だ。スラスターが残らず死んでる、浮くだけでも精一杯だな」

それを聞いて、周りを素早く見回しました。一夏さん、箒さん、それと鈴さんは、メインスラスターを潰されてはいても、飛ぶことはできるようでした。そしてシャルロットさんも、真改さんが助けています。

減速しきれず墜落した彼女が、心配でないと言えば嘘になります。

本当は、今すぐ飛んで行って彼女の無傷を確認したい。けれど今すべきは、そんなことはありません。

「……………」

「……………」

視線を交わしたのは一瞬。けれど、わたくしにはわかりました。

彼女は、わたくしの心配などしていません。ただこの事態を引き起こした犯人を捕まえることを、望んでいる。

「……………ふっ」

薄情？ 冷酷？ まさか。

彼女がそんな人ではないことは、みんなが知っています。彼女はただ、信じているだけ。

「……ラウラさん、大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない。……だが、戦うことは出来ない」

悔しそうに言うラウラさん。その気持ちは、痛いほどわかります。他の、みんなの気持ちも。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

一夏さん、箒さん、鈴さん、ラウラさん。みんな、わたくしと同じ気持ちです。

この勝負に、泥を塗った者に。仲間を、友達を傷つけた者に。

——報いを。

「ラウラさん、増援の要請を！ わたくしは、あのISを追います！」

「頼む、セシリア……頼む……！」

……けれど、みんな、わかっているのです。

あのISの操縦者は、わたくしよりも遥かに、強いということを一

「……………ほう。思っていたより、肝が据わっているようだな」

「……………」

キャノンボール・ファストの競技場を飛び出して、襲撃者を追い。

そう時間を掛けずに、追いつきました。

「ストライク・ガンナーなら、サイレント・ゼフィルスにも容易く追いつける。良かったな。お前にも一つくらいは、私に勝てる要素があるようだよ」

「くっ……………」

バイザーに隠されていない口元に嘲笑を浮かべながら放たれたそ

れは、明らかな挑発の言葉。けれど効果は覷面でした。

……見抜かれていた。わたくしが、彼女に対して抱える、劣等感を。「さて、どうするつもりだ？ 私を撃墜するか？ お前が、私を？」

「……できないと思つて？」

「できるつもりか？」

きつと、できない。わたくしがそう思うくらいなのだから、彼女は確信しているでしょう。

それくらい、実力の差は明らかでした。

「まあ、お前如きはどうでもいいが……私にも仕事があるのでな。不本意だが、付き合つてやろう」

「……その傲慢が命取りだと、教えてさしあげますわ！」

声の限りにそう言うも、それはまるで負け犬の遠吠え。戦う前から負けを認めている。

単純な実力差だけではありません。何せここは、市街地の上空。いくらサイレント・ゼフィルスが精密射撃を得意とし、範囲攻撃の手段に乏しいと言つても、ここで戦えば街に甚大な被害が出ます。

街を守りながら、増援が来るまで足止めする。

……それは、どう考えても――

「では、始めるとしようか」

「はああああっ！」

ストライク・ガンナー用の新型レーザーライフル、「ブルー・ピアス」を構えて、襲撃者に突撃します。スナイパーとしての実力差は圧倒的、遠距離戦では勝ち目がありません。そうでなくとも、命中率は少しでも上げなければいけないのです。

街に流れ弾を落とすわけには、いかないのですから。

「ふっ……」

「っ！」

それに対し、襲撃者もまた前進しました。見る見るうちに距離が詰まり、今はもう目の前。

必中の間合い。そう確信して、引き金を――

「遅いな」

「っ!？」

ガキン。甲高い音を立てて、銃口を打ち落とされました。襲撃者の持つ、レーザーライフルの銃剣によって。

「く、うー!」

あとほんの少し力を込めていたら、発射されていたでしょう。眼下の街に向けて、わたくしの銃撃が。

「……性格が悪いですわね……!」

「なに、退屈な狩りだからな。少しくらいは趣向を凝らさねば」

「馬鹿にしてっ……!」

今の手並み、接近戦の腕前も相当なものであることは間違いないでしょう。

射撃戦でも、接近戦でも大きく劣る。そんな相手に勝つには——  
(……いえ、勝つ必要はない。時間を稼ぐ。わたくしの役目は、ただそれだけ——!)

後ろに下がり、ライフルを構え直します。当たらなくてもいい、せめて牽制になれば。

それに対し襲撃者は、高度を下げました。回避機動ではなく、本当にただ、下へと下りただけ。それだけで——

「本当に、性格の悪い……!」

撃てない。だって撃つて、それで外したら——

「ふん。周りの心配とはな」

「当たり前ですわ! 罪のない方たちを巻き込むわけには……!」

「罪のない、か。知りもしない連中だろうに」

つまらなそうに言いながら、襲撃者が発砲します。それを避けて、襲撃者と同じ高度まで下がり。

今度こそ、撃とうとして——

「こうしたらどうするっ?」

「なっ……!」

わたくしが降下すると同時に、襲撃者は上昇しました。そうしてライフルを構えて、無造作に——

「くうっ……!」

狙いなんてほとんど付けていないのでしよう、レーザーはわたくしの脚に向かって来ました。避けるのは簡単です。けれど、避けるわけにはいかない。

わたくしはほとんど棒立ちのまま、その銃撃を受けました。

「ほう、これは面白い」

「あなたという人は……!」

避ければ、上から撃たれたレーザーは下へ——街へと向かう。だから、避けられない。それをわかっているから、この人はあえて適当に撃った。

先ほど脚に当たったのは、ただの偶然。外れても構わない、むしろその方がいい。撃った先にわたくしが回りこんでレーザーを受け止めるのを、見たがっている——

「そら、次だ」

「こ、のお……!」

今度は、明らかにわざと狙いを逸らして、発砲。相手の思う壺だとわかっていきます。それでもわたくしは、それを止めなければなりません。

「あう……!」

「はは、まるで犬だな」

ギリ、と奥歯を噛み締め、慌てて高度を上げます。

高すぎれば、攻撃ができない。低すぎれば、回避ができない。

街は丸ごと人質。いくらでもいるのだから、相手はいくら殺しても構わない。対するわたくしは——

(守りながら戦うことが、こんなにも難しいだなんて……!)

思えば今まで、わたくしは誰も守ってこなかった。強い人と一緒に戦うことはあっても、今ののように、無力な人々を背負って戦うことは、一度だってなかった。

……ああ、きつと。

だから、わたくしは——

「そうれ、犬。ボールだ、取って来い」

「うあつ……!」



ついには、わたくしが上にいるのに、下に向けて撃ち出しました。全速力で回り込み、レーザーを受け止めます。できるだけダメージが少なくなるよう受ける余裕なんてありません。必死に追いかけて、受け止める。襲撃者の声からは、そんなわたくしの姿と、わたくしがギリギリ追いつけるラインを探すことを楽しむ気配が感じられました。「必死だな。ほら、尻尾でも振ってみろ。少しは近くに投げてやってもいいぞ」

「くっ……はあ、はあ……」

シールドエネルギーは……もう、ほとんど空っぽ。出力を絞ってはいるのですが、それでもこれだけ受け続ければ当然のこと。

まだほんの数分しか経っていないのに、もう限界。何もできないまま、このまま――

「なんだ、もう終わりか。つまらん」

「ま……まだまだ、ですわ……」

「だが、もう飽きた。犬は犬らしく――」

……今度は、銃口はわたくしを狙っています。

真つ直ぐに、わたくしの頭を。

「――無様に、死ね」

避けるわけにはいきません。そうでなくとも、もう避ける力は残っていません。

だから、なにもできずに。

その、光を――

「!？」

競技場に残された己は、ハイパーセンサーから送られてきた情報に一瞬、呼吸を止めた。

ブルー・ティアーズの反応が、途絶えたのだ。

「セシリア……!？」

正直に言えば、勝てる相手とは思っていなかった。セシリアに限ら

ず、ここに居る誰であつても、一対一では勝てないだろう。

だが、それにしても早すぎる。援軍が到着するまでの時間なら、持ち堪えられるだろうと思つていたのに。

セシリアはプライドが高いものの、自制心も身に付けている。格上相手に無理な攻勢には出まい、防御を固める筈だ。にもかかわらず、これほどまで早く倒されたということは。

……街を、人質に取ったか。

「……………」

だが何故か、焦りを感じない。驚愕が収まると、不思議なほど冷静になった。

……何故だ、緊急事態だぞ。奴らは容赦も躊躇もしない、セシリアが殺されることも十分に考えられる。

なのに、何故――

（……………今は……………）

考えても、答えは出ない。今はそれよりも、セシリアの救援に向かわなければ。

「のほほんさん！ どれくらいかかる!？」

「んん、わかんないけど。おりむーが静かにしてくれたら、ちよつと早くなるかも」

「え!?! あ、ごめん……………」

観客席に居た本音が駆けつけ、「十六夜」を起動して白式を修復している。この中で最も損傷が少ないのは、防御力の高い白式だった。エネルギーの補給と並行し、スラスターを直しているところだ。

「シャルロット、飛べるか?」

「…………ダメ。増設スラスターが壊れて、メインスラスターに誘爆しちゃってる。とてもじゃないけど、戦闘は無理だよ」

「そうか。…………鈴?」

「同じくよ。噴射口のだ真ん中を撃ち抜かれてる、バイパスが丸ごと焼ききれてるわ」

「……………箒」

「展開装甲は無事だが…………撃たれた時に、姿勢制御でエネルギーを使

い切ってしまった。飛んでも、ここを出るのが精々だな」

「本音、足りるか？」

「足りないよ。白式だって満タンにはできないよ」

「……やはり、一夏一人に任せることになるか」

己も、墜落の衝撃でスラスターが全滅した。飛べない高機動型などなんの役にも立たん。

「……ん。装甲はおつけ。次は」

「なっ!? スラスターから直してくれてるんじゃないのか!？」

「だって、そんなことしたらおりむー、直る前に飛んでっちゃうでしょ?」

「うっ……」

「……せっしーもだけど。おりむーにも、怪我してほしくないんだよ……?」

「……………」

修復の手を休めることなくそう言う本音に、一夏は黙り込んだ。

ちらと見た限りでは、襲撃者のIS、サイレント・ゼフィルスは通常装備だった。ブルー・ティアーズの反応があつた場所も遠くはない、高速飛行用に調整した白式の速力ならば、そう時間をかけず追いつける筈。

それまで、ブルー・ティアーズの絶対防御が持ち堪えてくれれば……。

「……セシリア……」

分の悪い賭けだ。いくら絶対防御でも、無防備に攻撃を受け続ければひとたまりもない。

それなのに、己は何故、こんなにも。

不安を、感じていないんだ——？

「……………」

それは、分からない。分からないが、根拠のない確信だけがある。セシリアは、きっと。

今も、戦っている——

「……ここは……？」

わたくしは確か、襲撃者の攻撃を受けて撃墜されたはず。場所は様々な建物が並ぶ市街地だったのに。

今居るここには、建物はない。見渡す限り、地平線の向こうまで草原が続いているだけ。

空を見上げれば、あるのは真円を描く満月。そして、それに負けずに輝く満天の星空。それらが、草の緑がわかるほどに明るく、わたくしを照らしていました。

「ここは……どこでしょう？」

こんな場所を見たこともありません。こんなに綺麗なら、絶対に記憶に残っているのに。

不思議に思いながら、それでもこの美しい夜空に心を奪われて、ぼうつと見上げ続けていました。

「……貴女はなぜ、戦うのですか？」

「……え……？」

突然、声を掛けられて。

視線を下ろすと、そこには一人の女性が立っていました。

身に纏うドレスは、空のようにどこまでも透き通った蒼。膝まで伸びる髪は、星のような金色。そんな女性でした。

「……あなたは……？」

「……」

まるで彫像のように美しく、けれど冷たさを感じないその女性に、見覚えはありません。だから誰かと問うたのに、女性は答えてくれません。

代わりに、さきほどと同じ質問を返してきました。

「貴女はなぜ、戦うのですか？」

「なぜ……？」

抑揚の少ない声。けれど、とても真摯な声。そして真つ直ぐにわたくしを見る眼に、その問いに答えなければならぬと感じました。

「わたくしは、大英帝国貴族、オルコット家の当主、セシリア・オルコット。わたくしは家を守らなければなりません。けれどわたくしには、政治的な力はありませんでした。だから、戦うのです。たった一つ、わたくしにあった才能……それを使って、わたくし自身の価値を示す。それ以外に、方法が思いつきませんでしたから」

「……………」

女性は、何も答えません。ただしばらくしてから、次の質問が。

「……………辛くはないのですか？」

「え？」

「人は、生まれを選べません。そして中には、生き方、そして死に方までも決めてしまう生まれもあります。貴女の生まれは、まさにそうでしょう？」

「……………」

女性の言ったことは、紛れもない事実。わたくしがオルコットでなければ、きつと今のわたくしはなかったでしょう。

IS学園には入学したかもしれませんが、けれどそれは、イギリスの国家代表候補生ではなく、普通の生徒として。

「そして今も、命を懸けて戦っています。絶望的な戦力差があるにもかかわらず、見ず知らずの人々を守って。……………何故ですか？」

「……………」

「貴族は、とても分かり易い、特別な人種です。貴族に生まれたというだけで、他の人々とは違う運命を背負うことになります」

「……………確かに、そうでしょうね」

小さな頃から、わたくしは「特別」でした。誰もが知る名家、オルコットの一人娘。周りはわたくしに対して、腫れ物に触れるかのように接するか、上辺だけの笑顔を浮かべて取り入ろうとしてくるか。

周りはわたくしをセシリアではなく、オルコット家の一人娘としか見ていない。わたくしではなく、わたくしの家のことしか見ていない。それに気づいたとき、とても怖くなって……………

けれど次第にわたくしも、そのことに慣れてしまいました。……………いえ。染まってしまった、と言うべきかもしれません。わたくしはいっ

しか「セシリア」ではなく、「セシリア・オルコット」になっていたのです。周りがそうだと認識する、オルコット家の一人娘に。

……でも。

「けれど、それになんの問題があるのですか？」

わたくしは、セシリア・オルコット。それ以上でも以下でもありません。ただのセシリアでも、オルコット家を継いだ一人娘でもありません。

わたくしが今までの人生で得てきた全ての経験が、今のわたくしを作っている。ただのセシリアでは得られなかった経験も、オルコットの一人娘というだけでは得られなかった経験も、全てがわたくしの糧となっっているのです。

「わたくしは、今のわたくしに満足しているわけではありません。けれど自分になんの不満もない人なんて、それこそ特別でしょう？ わたくしが歩んで来た道を、今ここに居るわたくしを、誰にも否定させはしません」

女性はただ黙って、わたくしの言葉を聴いています。

ただ黙って、わたくしの眼を、真っ直ぐに見ながら。

「あなたのおっしゃる通り、貴族なんて、見かけほど良いものではありませんわ。民の為に在ろうとすれば、敵と戦い、討たれ。自らの為に在ろうとすれば、民の反乱を招き、倒され。何も願わずとも、身内に疎まれ、毒を盛られる。

……それが、貴族の最期。今ではそれほどでもないとは言え、本質は変わっていません」

貴族には、豊富な財を持つ者も多くいます。それを羨む者も、大勢います。けれど貴族とは、ただ財を持つだけではないのです。

「貴族とは、生まれながらに責任を負うもの。わたくしは母にそう教えられました。それは正しいと思います。

その責任が、重荷でなかったと言えば嘘になります。その重さに挫けそうになったことも、投げ出したくなったことも何度もあります」  
今でも、それはとても、とても重い。

重くて、辛くて、苦しくて。

——けれど。

「けれどその重さが、わたくしを強くしてくれました。みなさんと共に並び立つ強さを与えてくれました。だからわたくしは、この重さを愛おしく感じます」

真改さん。箒さん。鈴さん。シャルロットさん。ラウラさん。そして、一夏さん。

みんな、とても強い人。オルコットではないセシリアには、きっとあの人たちの横に立てるだけの強さはなかったでしょう。

あの人たちの横に居たいから。この日常が大切だから。

だから——

「だから、わたくしは戦うのです。わたくしが、貴族であるために。わたくしが、セシリア・オルコットであるために。わたくしが、わたくしであるためにっ！」

そう。それがあの日、あの人が教えてくれたこと。

わたくしの在り様に、恥じるところなんて一つもない。

わたくしはただ、胸を張って、いつものように謳い上げれば良いのです。

父母がくれて。

みなさんが呼んでくれる。

わたくしの名を。

「わたくしは大英帝国貴族、オルコットの当主！ IS学園に主席入学した国家代表候補生！ 井上真改の、篠ノ之箒の、凰鈴音の、シャルロット・デュノアの、ラウラ・ボーデヴィツヒの、織斑一夏の、親友にしてライバル！」

——セシリア・オルコットですわっ!!」

そう、言うと。

今までずっと無表情だった女性が。

嬉しそうに、微笑みました。

「……貴女は、とても強いんですね」

その笑顔は、思わず見とれてしまうほど。

とても、綺麗な笑顔でした。

「……では、お前の言う貴族とは何だ？」

「えっ……」

突然声を掛けられて、振り向きまします。

そこにはもう一人、女性が立っていました。

とても鋭い眼をした女性。着ている服は、夜空のように深い青。肩の高さに切り揃えられた髪は、月のような金色。

やっぱり初めて会う筈なのに、どこことなく、誰かに似ているような。そんな人。

「問おう。貴族とは何だ」

「……………」

静かな声には覇気が満ち溢れていて、有無を言わさぬ力強さがありました。

だからわたくしも、その声に負けないように、精一杯答えます。

「貴族とは、人々の上に立つ者。多くの人が汗を流して得た糧を受け、生きる者」

「では、貴族の責任とは何だ。お前にとって支えでもある、その重荷とは何だ」

「人は、それぞれが意思を持っています。大勢集まれば、意見が分かれば、何も決まらなくなってしまう。だから、誰かが決めなければならぬのです。人々の意見を纏められる力を持つ、誰かが。

その力を示すために、財を集めることもあります。それによって、嫌われることもあります。誰にも理解されないこともあります。その辛さに歪んでしまつて、あるいは財に目が眩んで、道を外れてしまふ者もいます。……それでも、誰かがやらなければならないのです」

「それが、貴族か」

「ですが、それだけではありません。人々を導くには、財だけでは駄目なのです。誰もが付いて行きたくなるような、そんな姿を見せなければ」

「その姿とは？」

「それは——戦う姿です」

そこで、一つ大きく深呼吸をしました。



なんだかこの人の前で、「戦う」と言うことは、とても特別な意味があると感じたから。

「貴族は、民に生かされている。その恩は、ただ導くだけで返しきれものではありません。」

……貴族は、民に災厄が降りかかった時、その矢面に立たなければなりません。民により生かされてきた、命を懸けて。そうして戦うからこそ、その背中に、民が付いて来てくれるのです」

「……………」

「ただ搾取するだけだなんて、わたくしは貴族と認めません。それは務めを放棄した、ただの暴君です。」

貴族は、戦わなければなりません。滅私の精神ではありません、それは貴族にとつて、最低限果たさなければならぬ義務なのです」

「……義務、か」

そう。それは、義務。何も、おかしいことではありません。人は誰しも、何らかの義務を背負っている。

ただ貴族は、その義務が、初めから決められているだけ。

「わたくしは、戦わなくてはならないのです。なぜなら、わたくしは貴族だから。仕える民のいない、何も持たない貴族だから。だから、戦わなくてはならないのです。」

……そう。わたくしは、未熟な貴族。なにも持っていない、無力な貴族。わたくしにあるのは、たった一つ——貴族であるという、誇りだけ」

わたくしは、両親が遺してくれた物以外、まだ何も手に入れていない。そんな小娘に、一体誰が、心から従うというのでしょうか？

だからまずは、示さなければ。いずれ来るかもしれない危機に、貴族と民が、団結して立ち向かえるよう。

わたくしが、従うに足る、本物の貴族であることを。

「自分たちを、より良い方へと導いてくれる。いざという時、命を懸けて守ってくれる。だから一生懸命に働いて得た糧を、自らの意思で捧げる。なら、それを受け取る貴族は——」

わたくしではない、誰かの為に在りたいと、心から思ったことがある。その時に、気づいたのです。

わたくしが、為すべきことに。わたくしが、為したいことに。

「貴族は、戦わなくてはならないのです。民のために、そして、自らのために。」

それが、わたくしの為すべきこと。それが、わたくしの為したいこと。

それが——」

そう、それが。

それこそが、わたくしの掲げる、わたくしの旗。

それこそが——

「——わたくしの、ノーブル・オブリーゲーション「貴き者の務め」ですわっ!!」

精一杯の、声を出した。肩で息をするくらい、力一杯に吐き出した。

その言葉は——

「……なるほど。本物、か」

きつと、その女性に届いたと思います。

「ノーブル・レディ貴族のお嬢さん。君は、美しい」

そういって、微笑む女性。相変わらず、眼は鋭いままでしたけれど。

その笑顔は、やっぱり、とても綺麗で——

「……だから、行かなくては」

「ああ。……そうだな」

「引き止めてしまい、申し訳ありませんでした」

二人の女性に言われて、わたくしは歩き出します。

見渡す限り草原しかないこの場所の、どこかへ向かって——

「随分、お節焼きなのですな」

「ああ。まったく、誰に似たのやら」

セシリアが去った草原で、その背を見送りながら、蒼と青の女性が

話していた。

その眼は、とても優しげだった。

「初めて見る姿ですね」

「初めてもなにも、私たちに定まった姿などないだろう」

「それはそうですが。ただ、気になったもので」

蒼の女性が訊くと、青の女性は、嬉しそうに答えた。

「これは、私の知る中で最強の姿でな」

「なるほど。貴女らしい選択です」

青の女性の言葉に、蒼の女性は、納得したように頷いた。

「……ありがとうございます。私だけでは、力不足でしたから」

「気にするな。お前にも、そして彼女にも、強くなってもらわなくては困る」

「それでもです。この力、存分に揮わせていただきます」

「気張りすぎるなよ。付いてこれないかもしれないぞ」

「ご心配なく。難なく扱いますよ、あの子は強いですから。……貴女の、主よりも」

「……ほう」

蒼の女性に言われ、青の女性は好戦的に笑う。とても、嬉しそうに。「楽しみだな。いずれ剣を交えた時には、その言葉を後悔させてやろう」

「そんな日は永遠に来ませんよ。私は、剣を持っていませんので」

「……ふふっ。そうだったな」

青の女性が、小さく笑って。それにつられて、蒼の女性も笑みを浮かべた。

「……さあ、もう行け。彼女を一人で行かせるわけにはいかんだろう」

「はい。……本当に、お世話になりました。この借りは、いずれ必ず」

「返したければ——強くなれ。それ以外に方法などないぞ」

「……ああ、それなら——心配する必要は、なさそうですね」

答えて、蒼の女性が歩き出す。それなりに離れていた筈なのに、急いでもいなかったのに、不思議なことに、蒼の女性はすぐにセシリアに追いついた。

そして、セシリアといくつか言葉を交わして。

「私に出来ることはここまでだ。これ以上、力を貸すことは出来んが

——見届けさせてもらおう。お前の、戦いを」

そうして、二人が草原から消えていくのを見送って。

青の女性も、草原から消えた。

## 第75話 我が名に懸けて

「雑魚が……」

追跡して来たセシリアを撃墜した襲撃者、エムは、ブルー・ティアーズの絶対防御が発動したことを確認し、つまらなそうに呟く。

今回の任務は、一種の示威活動、つまりはデモンストレーションだ。秘密組織である亡国機業ファントム・タスクにとつて、そんなことは害にしかならない筈だが、任務の理由や目的などは一切知らせておらず、またエムも、そんなものに興味はなかった。

エムにはエムの目的がある。それ以外のことは、心底どうでもいい。

（敵の増援は……まだ少しかかるか。立ち上がりの遅い連中だ）

上司から送られて来たデータを確認し、溜め息を吐く。増援に包囲される前には撤退しなければならないが、それまではある程度暴れる必要がある。かといって、唯一初撃をかわし追跡して来たセシリアも、想像以上に手応えがなかった。

残り数分、ただ待ちぼうけているのもつまらない。示威活動と言うのなら、セシリアをそこらの鉄塔かアンテナに突き刺してオブジェにでもするか——そんなことを考えていた時のこと。

「……ん？」

高速で接近する物体が一つ。その反応は、ISとは少し違う。なんだ、とそちらへ目を向けると、そこには——

「あれは……確か、あの女の高機動用パッケージだったか」

ステルス爆撃機のような形状をした、銀色の飛行物体。ISと比べてもなお圧倒的なその速度で、墜落するセシリアを受け止めた。そのまま、エムから離れるように飛んで行く。

「操縦者も本体もなしに動くとは、面妖な……変態技術者どもめ」

朧月の高機動揚パッケージ、「月船つくぶね」が、自立飛行によりセシリアを救助したのだった。エムが与えられている情報によれば、月船はIS学園にある筈。それがここまで飛んで来るといふのは、有り得ないことではないが、十分驚愕に値することであった。

「……速いな。追い付くことはできんか……」

月船の速力を眼にして、エムは考える。アレを追うべきか否か。その答えはすぐに出る。

——放っておこう。追う必要などないのだから。

(……帰還するか)

不意打ちとはいえ、専用機を六機撃墜。その後追跡して来た一機を、一方的に撃墜。戦果としては十分過ぎる、時間はまだ残っているが、こだわることではない。

セシリアは逃がすことになるが、それも構わない。なにも殺せと言われているわけではないのだ、命令以上のことをするつもりは、エムにはなかった。

「ふん……つまらん任務だった——!?!」

だが、撤退しようとした矢先に。

ブルー・ティアーズの反応が、復活した。

「再起動だと……? 有り得るのか、こんなISが?」

ブルー・ティアーズのシールドエネルギーは、確かに枯渇した。それがこんなに早く、補給も無しに回復する筈がない。

そう、補給が無ければ、だ。

「……そうか、あのパッケージ。確か、エネルギーを他の機体に供給できると聞いたな」

そのことを思い出し、エムは銃を構える。照準の先には、エムへと真っ直ぐに向かってくる月船と。

その上で、エムへと銃を向ける、セシリアが居た。

「馬鹿な奴だ。そのまま逃げていけば、助かっただろうに」

だがいくら向かって来ようと、セシリアではエムの相手にならない。六基のビットと最大出力のライフルの一斉射撃で、月船もろとも撃ち落とす。小刻みな旋回が出来ない月船ではかわせまい、そう考えるの判断だった。

それは正しかった。彼我の実力差を正確に見抜いた上での、的確な判断であった。

——そう、正しかったのだ。その判断を下した、その瞬間までは。

だが、それまで存在しなかった要素が、突然加わってしまえば、正しかった解答も、間違いとなる――

「……馬鹿な」

それは、呆然とした眩きだった。一瞬の内に脳を埋め尽くした言葉が、声となって漏れ出た。そんな眩きであった。

エムがそれほどまでに驚愕した、その理由は――

「セカンド・シフト  
二次移行だどつ……!?!」

ブルー・ティアーズから溢れ出た光が、球を成し。

月船ごと包み込んだ、その光景である。

「行けますわね、ブルー・ティアーズ」

それは質問ではなく、確認でもなく。

戦闘再開を告げる、ただの宣言である。

――リンク開始……完了。ユニット〔月船〕との融合を開始します

その瞬間、セシリアを、ブルー・ティアーズを、月船を、光が包み込む。その光の中でブルー・ティアーズが形を変えていくのを、セシリアは感じていた。

(さあ、あなたの力……わたくしに魅せてくださいな！)

月船の、六対の翼が展開していく。それらは一度、接合部から外れるとそれぞれが対となる翼と繋がった。

その中に、六基のブルー<sup>ビット</sup>・ティアーズ<sup>ト</sup>を取り込んで。

――エネルギーバイパスを接合……完了。ミサイルビット、内部機構を再構成……完了――

月船の銀色の翼が、蒼に染まっていく。それは月船が、セシリアとブルー・ティアーズを受け入れ、自ら制御下に置かれた証であった。

――内蔵装置を解析……エネルギーの貯蓄及び供給装置を確認。再構成……完了。外部ユニットとして装備します――

ブルー・ティアーズの腰部アーマーに、装甲が追加される。その中

では、莫大なエネルギー容量を誇るコンデンサーが稼動していた。

——全工程、完了。システム、オールグリーン。……貴女に、新しい名を要求します——

(新しい、名前……)

それは確かに、必要なことだ。ブルー・ティアーズはその姿を変え、新たな力を得た。セシリアの誇りのため、自らを作り変えた。

だから、新しい名が必要だ。

「……いいでしょう。あなたに名を与えます。あなたのその姿に、そして月船<sup>カ</sup>をくれた朧月に、敬意を表して」

セシリアが名を告げると、ブルー・ティアーズの装甲がきらりと光る。それはまるで、微笑みを浮かべたかのように。

——復唱します。私の名は——

「そう、あなたの名は」

『ブルー・ティアーズ・スバル』

「撃墜直後に復活し、二次移行とはな……どこかで見た展開だ」

吐き捨て、エムはサイレント・ゼフィルスのビットを展開する。六基のレーザービットに加え、二基のシールドビットを。比類なき才能を持つ彼女にのみ許された、攻防両立にして必勝の布陣。

セシリアを警戒して、のことではない。初の任務失敗という忌々しい記憶を、完膚無きまでに焼き尽くすためである。

「ふん……随分と、仰々しくなったものだ」

ブルー・ティアーズの両肩にあるのは、元はビットであったのだろう砲身。セシリアのレーザーライフルに劣らぬ長大さを誇る、見るからに強力な砲。それがまるで翼のように、左右に三門ずつ取り付けられている。

腰部のアーマーは、そこにあつたミサイルビットがなくなっているにもかかわらず、むしろその大きさを増している。それをただの装甲



の強化と考えるほど、エムは愚かではない。あの中には、機動力を犠牲にしてまで守りを固める何かがあるのだと、瞬時に見抜いていた。

「だが、愚かなことに変わりはない」

しかしそれで恐れをなすのは、それこそ愚か者だ。腰のアーマーが守っているのは、重要な何か。言わば内蔵だ。だが逆に言えば、内蔵以外の守りは変わっていない。脳や心臓を破壊しなくとも、肉と骨が傷つくだけでも、人は死ぬ。それをエムは知っている。

だから、恐れる必要などない。一撃必殺はスナイパーの基本ではあるが、それがスナイパーの全てではないのだ。

「――死ぬ」

だから、ほんの僅かなためらいもなく、引き金を引いた。

セシリアの、脳と、心臓を目掛けて。

――だが。

「なあっ……!?!」

流石のエムも、驚愕を隠すことは出来なかった。

発射した七つの弾丸、その全てを、発射直後に撃ち落とされたとなれば。

「馬鹿な……馬鹿な、馬鹿なっ!!」

スナイパー同士の戦いとは、すなわち読み合いだ。撃てば当たる、それを前提とした上で、ではどちらが先に撃つか。ガンマンの早撃ちとは違う、どちらが先に見つけるか、という勝負。そして相手を見つけるためには、相手の行動、思考を読まなければならない。

武器がISに変わっても、本質は同じ。エムが行った初撃の奇襲は、スナイパーとして最高の手並みであった。その後のセシリアとの戦闘も、弱みを見抜き圧勝した。エムは、終始スナイパーとして戦ってきた。

そのエムが思う。今の一撃はなんだ。ブルー・ティアーズとサイレント・ゼフィルスの弾速は同じ、なのに射撃の直後に撃ち落とされた。それはつまり、セシリアが先に撃ったということだ。

――エムが、いつ撃つか。どこから撃つか。どう撃つか。その全てを、読まれていたということだ。

それはすなわち。

スナイパーとしての――

「私が……私がっ！ 貴様如きには、劣っているだど!？」

怒りと、そして焦りによって。エムは再び、引き金を引く。

ビットと、ライフルの引き金を。

「――残念♪」

「ちい……い！」

そしてまた、同じように撃ち落とされる。二度続けば、まぐれと言うことも出来ない。

間違いない、読まれているのだ。エムの思考が、セシリアに。

「くっ……い！」

だが、エムは冷静だった。心を乱したのは一瞬、すぐに思考を再開する。

銃撃を撃ち落とす、それがはたして、読み合いを制しただけで可能だろうか？

答えは、否。それはスナイパーであるエムが、最も理解している。

（思考を読んだとして、それでここまでの迎撃ができるか？ ……まさか。できるわけがない）

何事も、想定不能な誤差というものは存在する。あらゆる事象が絡む戦闘中であればなおさらだ。

例えば思考を読み切ったとしても、それだけでは、銃撃を先んじて撃ち落とすなど不可能。

では、セシリアが「見た」モノとは。

一体、何か。

「……………まさか」

それは、誰しも一度は望んだこと。特に戦う者からすれば、正に垂涎の能力。

現実主義者のエムですら、荒唐無稽なそれを欲したことがある。もしこの力が、自分にあつたのなら、と。

その力とは――

「未来予知」……!?!」

言葉を被せられた。これでもう、疑う余地はない。

セシリア・オルコットには、一瞬先の、未来が見えている——

「……これは驚いたな。いくらISとはいえ、こんなことが可能だとは」

「ISだからできるわけではありません。わたくしと、ブルー・ティアーズ・スバルだからできるのですわ」

「ふん……なるほど、単一仕様能力か」

ワンオフ・アビリティ

「ブルー・オブリーゲーション「貴き者の務め」。それが、ブルー・ティアーズ・スバルの単一仕様能力の名。

その力は、一撃必殺の攻撃力でも、絶対不破の防御力でも、電光石火の機動力でもなく。

（ISは所詮兵器、機械だ。魔法やら超能力やらを持っているわけではない。未来予知などという能力は有り得ない。ならば、これは……）

エムは素早く思考をめぐらせる。単一仕様能力は、文字通りその縦者と専用機にのみ発動する能力だ。ただ一つの例外を除いて、他の誰にも、どの機体にも同じ能力は発動しない。

つまりは、データの蓄積が存在しない。発動する瞬間までどこにも存在しなかった能力の詳細を、事前の情報収集により知ることは不可能だ。

故に、相対した者が、自らの力で見抜かねばならない。

「……常軌を逸した演算能力。それによる、高精度の未来予測か」

「あら、こんなに早く見抜くだなんて。さすがですわね、褒めて差し上げますわ」

「ちっ……」

能力は看破した。それは間違いないだろう。

だがその能力の対抗策は、まだ分からない。先の、射撃を先んじて撃ち落とすという離れ業。それだけでもかなりの問題だが、もう一つ問題がある。

エムは、セシリアの攻撃を察知出来なかったのだ。それは油断など

ではなく、IS操縦者ならば当然のことであった。

——何故なら、ロックオンの警告がなかったのだから。

(これは厄介だな。まるで正面から不意打ちを食らう気分だ)

ISは単純に速いだけでなく、縦横無尽の三次元機動が可能だ。故に、銃撃の瞬間に相手が居る位置へ撃つても当たるわけがない。どこへ撃てば当たるのか——その計算が偏差射撃だ。

その計算を、実戦の最中でリアルタイムで行うには莫大な演算能力が必要であり、計算式に当てはめる数値は全て正確でなければならぬ。そして必要な数値の中でも最も重要で、最も変動の激しい数値。それが相手との距離、相手の移動速度。それらの数値を正確に導き出すには、目視のみではあまりにも不十分だ。

故に、ロックオンすることによって、その数値を手に入れる必要があるのだ。だがロックオンは、相手にレーダー照射をして行う。イルカやコウモリが、音波の反射によって周囲の状況を把握するように。当然、そのレーダー照射は相手にも感知され、ロックオンしていることが知られてしまう。

だが、もし、偏差射撃を行うための情報など必要なく。

初めから、命中させるための解を、視知ることが出来るとしたら——

「……厄介な」

そう。ノーフル・オブリゲーション貴き者の務めの能力は、一撃必殺の攻撃力でも、絶対不破の

防御力でも、電光石火の機動力でもなく。

こと戦闘においてのみ発揮される、限定的な未来予知。

まさに、究極の火器管制システム——

(だが、「完璧」ではない。そんなモノは存在しないっ)

悠然と宙にたたずむセシリアに、ノーフル・オブリゲーションエムが突撃する。貴い者の務めによる未来予測にも、どこかに穴がある筈。魔法でも超能力でもない機械には、必ず限界がある筈。

それを見つけ出し、今度こそ、完全に勝利する。そのためにエムは、ビットによる一斉射撃を行った。

「視えていますわ」

セシリアがライフルを構えると同時、両肩の六基のビットが動く。

もはやビットと呼ぶことが躊躇われるほどの砲が前を向き、砲門から強力なレーザーを発射した。

以前のビットのような、サポートのための小口径砲ではない。大型のレーザーライフルにも劣らぬ、主砲として十分な威力のレーザー。それを、六発同時に。

(この程度では落とされる、それはわかっている。……では)

エムはビットを全其射出し、レーザービット三基、その護衛としてシールドビットを一基ずつ付け、上下に分ける。先の戦闘でセシリアを封殺した戦術、その攻防を同時に行うのだ。

「あら……その程度ですか?」

それに対し、セシリアのビットは全て下へと飛んだ。そして上へ向けて、一斉射撃。エムの放ったレーザーは、今度はセシリアに当たる直前で撃ち落とされる。

「浅知恵ですわね。攻防一体、それは攻撃と防御のどちらもが有効なレベルで、初めて効果を発揮するのですよ?」

「ふん……二次移行した途端、随分強気になったじゃないか」

「当然ですわ、負ける気がしませんもの——あなたには」

「言っている。いくら機体が高性能になっても、貴様と私の差が埋まったわけではない!」

エムによる、再びの一斉射撃。今度はセシリアを狙ったものではなく、眼下の街へ向けて。

セシリアは先ほどと同じように、レーザーを撃ち落とそうとし——

「ふっ……」

——エムのレーザーが、曲がった。

フレキシブル 偏向射撃。セシリアにはまだ出来ない、BT兵器運用における最高

技術。

結果、セシリアのレーザーは外れ。

「……ふっふっ♪」

それぞれが、別のレーザーを貫いた。

「なん、だどっ……!?」

これも、読まれていた。偏向射撃によってレーザーがどちらに、ど

う曲がるかまで。出力を変え、弾速を調整して、狙い打ったのだ。

「たった一度曲げる程度で、わたくしの眼から逃げ切れると思ってる？」

余裕の笑みを向けられて、エムは奥歯を強く噛む。

どうやら、射撃戦では勝ち目はないらしい。その悔しきは筆舌に尽くしがたいものであったが、しかし飽くまで冷静に判断を下す。

射撃戦が駄目なら、格闘戦だ。

「この屈辱……楽には殺さんぞ」

左手にピンク色の光を放つナイフを展開し、右手のライフルに取り付けられた銃剣をセシリアに向ける。

セシリアが持つ格闘武器は、小型のブレード、インターセプターだけだ。ブルー・ピアスには銃剣はないし、あったとしても大型のため取り回しが悪く、打撃武器としても使いにくい。セシリア自身の格闘能力の低さと相まって、射撃戦よりは分が良い筈だ。

「行くぞ」

接近中、セシリアへ向けて射撃を繰り返す。街の守りを優先するセシリアはレーザーを撃ち落とすことにビットとライフルを使い、エムの接近を防げない。

瞬く間に、接近される。

「はあっー」

「せえいっー」

エムの繰り出した一撃は、容易く防がれる。それは予想済みだ。だが一撃で倒すなど、元から求めてはいない。

故に繰り返す。二撃、三撃——四十、五十と。

「ふっ、く……いっー」

「……ほう」

そうして続けるうちに、エムは気づく。セシリアの動きの違和感に。

「なるほど……くくっ、しかし考えてみれば当然のことだ」

いくら未来が見えようと、どう動けば良いか分かってると、それに体が付いていくかどうかは別問題だ。セシリアも格闘訓練を受けてはいるが、エムに比べれば遥かに練度は低い。エムの猛攻に対応出来な

いのだ。

アクション映画を見れば分かるだろう。事前に台本を読み、展開を全て分かっている、格闘技に長けた一流の役者ですら、何度もリハールをしなければならぬのだ。自分の知る内容通りに、体が動くように。

(だが、それでもっ……!)

見つけた弱点、見つけたという優位。それを保つため、エムは必死に笑みを作る。

エムとて余裕があるわけではないのだ。何せセシリアは、エムの一挙手一投足を知っているのだから。今のエムは、セシリアに追いつかれないよう全力で逃げているようなものだ。

「くう……!」

「はは、辛そうだな」

「あなたこそっ」

「ふっ……!」

だがそれすらも、セシリアには見抜かれている。それでもプライドから、笑みを崩さず。

お互いに余裕を装いながらの、必死の攻防が続いた。

「ぐっ、く……!」

「ふっ……せえ!」

極短い時間で、エムはブルー・ティアーズ・スバルの単一仕様能力、その弱点を見抜いた。その結果、セシリアは苦戦を強いられている。

「そういうことか……未来予知ではなく、未来予測。その限界は」

「ふ、ふふっ……あなたこそ、無理をしているのではなくて?」

「ふん……!」

だがその苦戦は、エムにとっても同じだった。今エムは、かつてないほどに自分の脳を酷使している。

格闘戦と八基のビットの同時運用という、神業によって。

「く、お……！」

セシリアに格闘戦を挑んだエムは、ビットによる街への攻撃も続けていた。その射撃の全てを、セシリアに撃ち落とされながら。

「は、あ……！」

それはつまり、セシリアも全く同じことをしているということだ。射撃を撃ち落とすということの難易度を考えれば、むしろエム以上に。

「未来を知る「予知」ではなく、未来を考える「予測」……現在が変われば、それに応じて、また考え直さなくてはならない」

「だから？」

「手数が多い格闘戦では、それだけ演算量も増えるということだ！」

セシリアが行動を起こせば、エムはそれに対する行動を起こす。その度に、セシリアの視る未来は書き換わるのだ。それは新たに演算をやり直すということであり、セシリア自身もまた、書き換わった未来に対応しなければならぬ。

その回数が、格闘戦では飛躍的に増加する。加えて射撃の撃墜もするとなれば、必要となる演算量は天文学的だ。次第に、セシリアの防御が精度を落としていく。

「ぐ、くう……！」

エムのナイフがセシリアの首を目掛けて振るわれ、セシリアはそれを腕の装甲で受け止める。インターセプターで受けようとしたが、エムの狙いを読みきれなかったのだ。

「はは……本当に、愚かな奴だ。街を見捨てさえすれば、私も互角に戦えるだろうに」

「今だって、互角に戦っていますわ……！」

「そんな様でよく言う」

セシリアは、既に傷だらけだった。何度も読み違い、装甲でギリギリ受け止める。そんな状況が続いていた。それというのも、演算能力の大部分をレーザーの撃墜に使っているからであった。

「見ず知らずの人間を守るために、自らの命を危険に晒すとはな」

「わたくしは貴族。貴族とは、民を守ることが務め。たとえ見知らぬ



人であろうと……いえ、見知らぬ人だからこそ、わたくしを知らない人だからこそ！ わたくしは、守らなければならぬのです！」

誰であろうと、敵でないのなら守る。敵でさえも、場合によっては手を差し伸べる。そう在るからこそ、人は信じ、頼るのだ。

「貴族、か。この世で最も愚かな連中だ。いくら人を守ろうと、人は平気で裏切るものだ。結局は自分が大事なのだからな。それすらもわからないから、こうして寿命を縮めている」

銃剣に突かれ、インターセプターを弾かれる。それが街に落ちないよう、レーザーライフルで焼き尽くした。その隙に、ナイフに腕を切りつけられる。

「理解できないな。何故そこまで守ろうとする？ 貴族など、そう望んで生まれたわけでもあるまいに」

「たとえ死んだって、わからないでしょうね——あなたにはっ!!」  
「ぐっ……!!?」

ブルー・ピアスのストックで、エムの顎を打ち上げる。ISの保護があつてなお視界が揺れるほどの、強烈な一撃。口内を切り唇の端から僅かに血を流しながら、エムは憎悪に、声を荒げる。

「わかるものか……わかりたくもない！ 貴様らのような人種の考えることなど、微塵もっ!!」

「その言葉、そっくりそのままお返ししますわ！」

ナイフと銃剣による連撃が、ブルー・ティアーズの装甲を傷つける。セシリアはダメージを受けながら、反撃に零距离から銃撃を叩き込む。

「守るだど!? よくもそんなことが言えるものだな、偽善者がっ!!  
裏切られたことも、ないクセに——!!」

「その通り、わたくしの信じる人たちは、皆わたくしを信じてくれている！ 裏切られる痛みなんて知りません、だからこそわたくしは、迷わずに戦える！ 揺らぐことなく、信じられる——!!」

銃剣がブルー・ピアスに突き刺さり、エネルギーバイパスを破壊された。撃てなくなったライフルを鈍器として扱い、鳩尾にストックをめり込ませる。

「ならば信じていればいい、裏切られるその時まで！　裏切られ絶望に染まるお前の顔は、さぞや見ものだろうなっ!!」

「いつか裏切られるとしても！　切り捨てられるとしても！　今この瞬間は、わたくしは信じられる！　いつ来るのかも、来るかどうかもわからない未来のことなど知りません！　今ここに居る命を、ただ全力で守る——」

渾身の力を込めた、銃剣の刺突。盾にした左腕の装甲は傷だらけで、刃は止まらず、肉に食い込む。

その痛みに歯を食い縛り、ブルー・ピアスを、その破損箇所を、エムの胸に押し付けて。

「——我が名に懸けてっ!!」

引き金を、引いた。

充填されたエネルギーは正しく供給されず、バイパスの破損した一点に滞留する。それはすぐに臨界を超え——

——爆発した。

「ぐああっ!!」

「あああっ!!」

大出力のレーザーライフル、その爆発の威力はかなりのものであった。双方がシールドエネルギーに大きなダメージを受け、爆風に押されて距離が離れる。

「無茶なことを……!」

だがエムとセシリアでは、余力に大きな差があった。エムは素早く体勢を立て直したが、セシリアはそうもいかない。その隙は致命的で、エムはライフルの照準を完全に合わせた。

絶体絶命の状況に、しかしセシリアは微笑みを浮かべる。

（無茶もしますわ……）

エムが引き金を引こうとした直前、視界に影が差す。そこでようやく、自らの失敗を悟った。

セシリアとの戦闘に夢中で、レーダーを見ていなかったことに。

（だって、わたくしには、守るべき民だけではなく）

慌てて上を向く。



「私が何者か、だと。……いいだろう、教えてやる」  
そしてエムは、顔を覆う手を離す。  
当然、手によって隠されていた顔は顕わになり。  
その顔を見て、一夏は、セシリアは。

——硬直した。

「私は、織斑マドカ」

何故なら。

何故なら、その顔は。

多少の幼さが、残るとは言え——

「私は、お前だよ——織斑、一夏」

一夏の姉、織斑千冬と、全く同じだったのだから。

## 第76話 影

「いやあ、サイレント・ゼフィルスは強敵だったね」

「……………」

「……………」

部屋に入ると、先に来ていた如月社長が開口一番そう言った。

なんだろう、なんかものすっごいイラツと来た。なので無視して、用意されていた椅子に座る。

「っ、つう……………」

「セシリア、大丈夫か？」

「っ、はい……………本音さんのおかげで、だいぶ楽になりましたわ」

セシリアが辛そうに顔を歪めて、左腕を押さえる。そこは襲撃者に刺されたところだ。包帯で覆われた左腕の下には、しかし目に見える傷はないことを知っている。

「いやいや、本音君には驚かされるよ。「十六夜」は機械用に造ったのに、まさか人間の体でも同じことをやって見せるとはねえ」

「ええ……………見る見るうちに傷が塞がっていく様は、活性化再生治療でも見られないでしょうね」

一体のほんさんが何をしたのかと言うと、ボロボロになって帰還したセシリアに駆け寄って、十六夜を起動したのだ。そして十六夜がセシリアの傷を調べると、球体の中から針を伸ばして傷口をなぞり始めた。するとなぞった箇所から、傷が塞がっていったのだ。

『細胞単位で縫い合わせてるんだよ。食堂のおばちゃんから捨てるお肉を分けてもらって、練習してたんだ。骨とか神経とかは、難しくできないんだけど』

とのことであった。その姿を、みんな感動した面持ちで見ている。『まあ、生きてる人でやるのは、初めてなんだけどね』

と続いた時には、セシリアの顔が盛大に歪んだのは言うまでもない。

けど結果的に、なんの問題もなく成功したわけで。ただあくまで縫い合わせただけで、完全にくっついたわけではないから、無理すると

また傷が開くと念を押されはしたが。

「……ところで如月社長。よろしいのですか？」

「うん？ 何が？」

「ブルー・ティアーズが、月船を取り込んでしまいましたでしょう？  
勝手なことをして……」

「ああ、気にしなくていいよ。武器なら使用許可すれば使えるようになるけれど、パッケージでそんなことはできない。けど隴月が月船を託して、ブルー・ティアーズが受け入れた。その結果が、ブルー・ティアーズ・スバルだ。なら僕が言うことは何も無いよ」

「……ありがとうございます」

「……ブルー・ティアーズ……昂、か」

昂とは、無数の恒星から成る、プレアデス星団の和名だ。その中でも、特に強い輝きを放つ六個の星を指すことから、六連星むつらぼしとも呼ばれる……らしい。さつきセシリアから聞いたばかりだけど。

あの巨大な、翼みたいな六基のビットからそう名づけたのだろう。プレアデスじゃなく和名にしたのは、二次移行の際に取り込んだ月船のことがあるからか。

「まあ、僕らの唯一の信条は、造った物は必ず使い切るというだけだからねえ。その点君は、十分に使いきれれると思うよ。……安心して託せるよ、オルコット君。精々、こき使ってやってくれたまえ」

「……はい。お任せを」

——そんなことを話しながら、千冬姉が来るのを待っている。

俺とセシリア、そして如月社長が今居るのは、キャノンボール・ファストの舞台である競技場の一室。比較的セキュリティの高いそこに色々とプログラムを詰め込んで、即席の取調室にしたらしい。正式な場所へと移動する時間とリスクすら惜しむんだから、相当に重大な事態だということは、流石の俺でも想像が付く。

「……なんだったんだよ、アイツ」

「うん？ アイツって？」

「今日襲って来た奴以外に、誰がいるんだよ」

「ファントム・タスク亡国機業のエージェント。それ以外、何があると言うんだい？」

「……………」

そんなことは、訊かなくなつてわかつてる。だから俺が聞きたいことは、そんなことじゃない。

「……織斑君、オルコット君。君たちが僕に求めていることは、わかっているつもりだよ。けれど、僕は人間だ。全知全能の神様なんかじゃあない。なんでもかんでも知つてて、訊けば答えてくれると思つたら大間違いだよ」

「……悪かつたよ」

「謝る必要なんかないさ。君たちはまだまだ子供なんだ、大人を頼りたくなるのはしょうがないよ」

「そういう理由でアンタに訊いたつて思われるのはかなり嫌だから、さっきの質問はただの気の迷いつてことにしてくれないかな」

「おおつと、これは失敬」

少し前に見た光景が頭から離れず、如月社長に訊いてしまった。アレは一体、どういうことなんだ、と。

俺はまだかなり混乱してて、それは多分セシリアも同じだ。けどどう考えたつて、この問題の答えは他人に求めるべきじゃない。少なくとも、まずは千冬姉と話さなくちゃいけない。

「………一夏さん」

「……ああ。わかつてる」

セシリアが、気遣うように声を掛けてくる。俺はそれに、心ここに有らずという感じの返事しかできなかつた。

……あの後。俺とセシリアが襲撃者の顔を見て呆然としている隙に、奴は去つてしまった。追わなくちゃ、とは思つたが……体が、動かなかつた。

それくらい、衝撃的なことだつたんだ。

なんだつたんだ、アレは。

誰なんだ、アイツは。

あの、千冬姉と瓜二つの――

「遅くなつた」

「っー」

思考に沈み込んでいたら、千冬姉の声で現実に引き戻された。はっ、と顔を上げると、千冬姉は如月社長に一礼しているところだった。

「如月社長も、お忙しいところ申し訳ありません」

「いやいや、僕が自分で首を突っ込んだんだから、当然だよ」

「分かっていただけなのでしたら結構です」

一応相手が外部の人間で、しかも社長という立場に居るからか、千冬姉は如月社長に対して敬語を使う。けど言葉の端々に険がある。如月社長の無茶苦茶ぶりには、俺たち以上に振り回されてるんだろう。

「織斑、オルコット。今回の事について、お前たちは取り調べを受けるだろう。如月社長、あなたもです」

「おお、取調べ。カツ丼は出るのかな？」

「出ません」

「そりや残念」

こんな時でも、如月社長はペースを崩さない。千冬姉は右手で頭を押さえ、指先でこめかみをトントンと叩いている。

「……命令も許可もなしでの市街地での戦闘だ、その判断が適切であつたかが焦点になるだろうな」

「適切か、どうか……？」

「オルコットはイギリスの代表候補生、織斑は日本人ではあるが、IS乗りとしての所属は決まっていない。そんなお前たちの行動が適切ではなかったと判断されれば、日本政府はイギリス政府に対し、一つ交渉材料を得ることになる。上手く運べば貸しに出来る。それが狙いだ」

「……ふざけやがって、大事件だぞ。それを、そんなことにつ……」  
「だがっ」

俺が激昂しかけたところで、千冬姉が鋭い声を発した。頭に上りかけてた血が引いていき、熱が冷めていく。

「……だが、そんなことにはならん。代表候補生とは言え、軍属ではない。政府が管理・保護・援助しているというだけで、飽くまでも民間



人だ」

「……ええと……つまり？」

「そもそも、所属不明ISの侵入を許したのは誰の責任だ？ 狙撃されるまで気づかなかったのはお前たちだけか？ しばらく街にとどまっていた侵入者を、みすみす逃がしたのは？」

「……………」

「そう、落ち度で言えば、日本政府の方が遥かに大きい。そのせいで四人の代表候補生が、危うく大怪我をするところだった。連中は貸しを作りたいたいではなく、むしろ借りにならないようにしたいのだろうな」

「なるほど……………」

「…………どつちにしろ、汚いやり口には変わりないじゃないか」

ぎゆうう…………と、拳を握り締める。千冬姉はそんな俺をちらと見て、次いでセシリアを見た。

「オルコット。お前は奴を捕らえるための時間を十分に稼いだ。街の被害を最小限に抑えた。それでも奴を取り逃がしたのは、政府の対応がのろまだったからだ。お前の責任ではない」

「あ……………」

「オルコット。お前は良くやった。最善を尽くしたと言ってもいい。だから安心しろ、それでも彼らが、お前の責任を問うと言うのなら――私も、それ相応の態度を取るだけだ」

「…………ありがとうございます」

セシリアは感動して、頭を下げる。何せ世界最強、ブリュンヒルデの言葉だ。これほど心強い味方もないだろう。

「織班も。倒し損ねたとは言え、イギリスから預かった大事な生徒を良く守った。上出来だ」

「…………ああ」

「ところで、僕はなんで呼ばれたのかな？」

「あなたは裏で何かやっていたのではないかと警戒されているだけです。まあ、かと言って何を訊いても無駄だとは、連中も分かっているでしょう。ただ形式的に呼ばれただけです」

「あらま、それじゃすぐに終わっちゃうのか、僕の取調べは。カツ丼食べたかったのに」

「出ないと言ったでしょう」

また頭を抱える千冬姉。ホントに頭痛そうだ。

「……そろそろ、取調官が到着する頃だろう。安心しろ、訊かれたことには素直に答えれば、何も問題はない」

「わかりました」

「では、私は戻る。まだやることが山積みなんだ。……如月社長、これで失礼します」

「うん。お大事に」

「……………」

誰のせいで頭痛がすると思っっているのか——そう言いたげな眼で如月社長を見てから、千冬姉は部屋を出て行く。

その、前に。

一つだけ、訊かなきゃいけないことが、ある。

「ち……千冬姉」

「なんだ？」

何でもないように、千冬姉は振り向いて。

よほど深刻な顔をしていたのだろう、俺を見て、少しだけ目を見開いた。

「あ……あのさ」

「……………」

「俺、千冬姉の他に……姉か妹は、いないよな？」

そう訊くと。

千冬姉の、顔から。

表情が、消えた。

「……………」

「え、いや、だから……………」

温かさもなければ、冷たさもない。温度という概念が突如として消失したかのような、そんな、空っぽの表情。

そんな顔は、今まで見たことがない。千冬姉に限らず、他のどの人でも。普段から無表情な、シンですらも。

「俺に、他にも姉か、妹が——」

「いない」

「……え？」

発されたのは、否定の言葉。その声にもやっぱり、温度はなくて。

「それだけか？　なら、もう行くぞ」

「あ……うん」

だから、それ以上訊けなかった。

……とても、訊く気にはなれなかった。

訊いてはいけないと、感じたから。

「ハッピー・バースデー！　おっりいいいいむらくうううう  
ンツツツ!!」

「……………」

取調べは、千冬姉の言う通り問題なく終わった。……正直に言うべきだったのかもしれないけど、襲撃者の顔を見たか、という質問にだけはごまかして答えたが、怪しまれることはなかった。

「なんで……居やがる」

「いやなに、僕も呼ばれてねえ、唐沢さんに」

「唐沢さん……なんてことをしてくれたんだ……」

というわけで今俺は、唐沢さんの孤児院で誕生日パーティーを開いてもらってる。そしてその会場であるリビングの扉を開くと、如月社長がものすっげえハイテンションで出迎えたのだ。最悪の気分である。

なので人生で初めて、唐沢さんに恨みがましい目を向けてしまった。

「あはは、確かに変わった人だけど、悪い人ではなさそうだし。真改もお世話になってるしね」

「ぐぬう……」

確かにシンは、如月社長に少なからず世話になってる。リビングの中を見渡せば、先に集まっていた学園のみんなはともかく、孤児院のみんなや俺の中学時代の友達たちは如月社長に対してそんなに悪い印象を持っていないようだった。

……みんな、騙されてるぞ。コイツはそんなじよそこらの悪人より、よっぽど質が悪いってのに。

「織斑君にはいつも迷惑をかけているからねえ。今日はそのお詫びも兼ねて、君に誕生日プレゼントを持ってきたんだ」

「持って帰れ」

「ままそう言わずに。ジャジャーン！」

そんな効果音を自分で言って、懐から取り出したのは。

「……眼鏡？」

そう、眼鏡だった。黒くて細いフレームの、なかなかセンスを感じる眼鏡。

「……俺、目は悪くないんだけど」

「そんなことはわかってるさ、度は入ってないよ。織斑君、君はもう少し、自分の立場を知るべきだよ」

「なんだって？」

そこで如月社長は、真剣な顔になる。

「織斑君。君は今、世界一有名な少年だ。世界で他に例のない、ただ一人の男性IS操縦者。それが素顔で街を歩くなんてのは、あまり褒められたものじゃない」

「む……確かに……」

如月社長の言う通り、街を歩いてて声をかけられることは何度かあった。老若男女を問わず、応援の言葉だったり罵声だったり恨み言だったり、わけのわからないスカウトだったり。うっとうしいと感じたことは少なくない。

「そこで、この眼鏡さ。変装としては初歩だけど、見慣れない顔じゃあ眼鏡や帽子だけでも結構効果があるものだよ」

「へえ……」

なんとなく納得して、手渡された眼鏡をかけてみる。

「もちろん、ただの眼鏡じゃないよ。紫外線や赤外線も見えるし、暗視装置、それに音波の反射を視覚化する機能も備わっているのさー!」

「お……おおっ!?!」

如月社長が何か操作しているのだろう、視界が何度も切り替わり、その度に新しい光景が見える。

むう……これはなかなか面白いな。

「へえ、すごいな……これはスグレモノさあらい!! 全世界の男子垂涎、対象の衣服が透けて見える透視機能も」いいいらねえええええええええつ!!」

その瞬間、俺はゴリラ並みの握力を発揮し、その眼鏡を握りつぶした。

……あつぶねえ、たまたま視線の先に居たシンの服が透けて肌色が見え始めた時は心臓が止まるかと思っただぞ!

「なんてモンを作ってたんだよてめえはああああああ!!」

「おや、お気に召さなかったかね?」

「あつたりまえだ!! ふざけるのも大概にしろつ!!」

如月社長の胸倉を掴んでガクガクと揺さぶっていると、背後から地鳴りのように低い声が聞こえた。

「い……い……かあ……」

「いやおい待て、今のはどう考えても俺のせいじゃないだろ!?!」

「アンタ今、シンの方向いてたわよねえ?」

「見たか? おい一夏、見たのか?」

「見てない! ヤバイところは見てないって!」

「ヤバくねえところは見たってことかああああああああ!!」

突然、怒号と共に締め上げられる。額に盛大に青筋を浮かべた宗太の仕業であった。

「おいイチ兄、どうなんだ?! ええおいゴルアアアツ!!」

「ちよ、宗太……お、おちつ……いき、できな……」

次第に薄れゆく意識の中、伸ばした手の先では。

シンが、呑気にお茶をすすっていた。

……おかしい。これは俺の誕生日パーティーのはずなのに、なんで俺がこんな目にあわなきやいけないんだ。

そんなことを思いながら、クラッカーが破裂する音を聞いた。次いで、「誕生日おめでとう」の言葉も。

……こんな状態から、パーティー始めるのか……。

なんか色々、納得いかねえ——ガクツ。

ドイツの某所。極々一部の者以外、国の指導者にすら知らされていないほどの、極秘研究所。

そこを、ISを展開した女が一人、歩いていた。

「……まったく、楽な仕事だぜ。極秘にするために、サンプル用以外のISすら配備されていないってんだから、しょうがねえっちゃしょうがねえが……」

女は、フアントム・タスク亡国機業のエージェント、オータム。つまらなそうに吐き捨てながら、周囲に散らばる肉塊——つい先ほどまで、ここの研究者だったモノたちを見渡す。

「文句はねえよな？ 殺してるんだ、殺されもする……だろう？」

返事など、当然ある筈もない。オータムは舌打ちを一つして、床に転がっていた電子レポートを読み込む。

『レポートNo.1』

今日、新しいサンプルが送られてきた。なんでもこのサンプルの主は、ISと生身で戦闘して生き残った、12歳の少女だと言う。にわかには信じがたいが、付属されたデータを見る限り、それは正しい。なんとというポテンシャルだろう。天賦の才能か、あるいは特別な肉体の持ち主か。どちらにせよ、このサンプルを使えば、究極の兵器を造れるかもしれない』

最初の1ページを読んで、オータムは顔をしかめる。レポートに記された日付などに、覚えがあったからだ。

『レポートNo.4』

サンプルの培養に成功した。腕一本分も細胞があるのだ、髪の毛一本、血の一滴からもクローンを作り出す我々には容易いことだ。これで十分な量を確保した、明日から実験に移る』

「ちっ……クソツタレ共が。ぶち殺して正解だったな」

『レポートNo.9』

クローンの第1号が完成した。まだ赤子の段階だが、適性を調べることは出来る。その適性は、決して優秀ではなかったが、それは他で補える。むしろ重要なのは、適性ではない。生身での戦闘能力が低い者は、いくら適性であろうと無駄にするだけだ。成長を促進させ、様々なデータを収集する必要がある』

周りを見渡す。研究所には、多種多様な機器と、無数のシリンダーがあつた。このこと同じ光景を、これまでの道程で何度となく見てきた。

『レポートNo.18』

どういうことだ。学習プログラムを使用しても効果が薄い。10歳程度まで成長させたクローンたちに演習をさせても、まるで素人だ。才能の欠片も感じない。傭兵に相手をさせたが、結果は見事に惨敗。一人も殺せず全滅した。なんたる様だ、傭兵を始末する手間がかつただけではないか』

シリンダーの中を覗き込む。そこには、人体の——部品パーツが、浮かんでいた。

『レポートNo.32』

何度適性を検査しても、望む結果は得られない。それどころか、才能もなければ肉体も平凡そのもの。これなら、街の小娘を適宜に選んだ方がまだ良い結果を得られたらう。少なくとも、今まで送られてきたサンプルの中では最低の部類だ。こんなモノが、本当に、生身でISと戦ったのか？ データは嘘を吐かないという私の信条が、揺らぎ始めるほどの事態だ』

そのパーツは、多種多様。腕もあれば脚もある。中でも脳が最も多い。脳に目玉だけが付いた物もあつた。その目玉がぎよろりと動いてオータムを見た時は、流石のオータムも怯んだものだ。

『レポートNo.56』

今日、全てのサンプルの廃棄が決定した。これ以上このサンプルを研究しても成果は得られないという、上層部の判断だ。

悔しいが、その判断は正しいと私も思う。サンプルのオリジナルがISと生身で戦ったというデータは、何かの間違いだったのだ。私たちが収集してきたデータが、それを物語っている』

「……はんっ。なあにがデータだ。そんなモンで何もかもわかるってんなら、苦労しないっての」

不機嫌極まる様子でそう言いながら、オータムはさらに、歩みを進める。

『レポートNo.81』

廃棄が決まったサンプルに、使い潰すつもりで反応高速化施術をした。すると驚いたことに、施術終了後、75時間も精神の均衡を保っていた。他のサンプルでは精々1時間……どんなに長くても7時間が限度だった。世界が遅くなり自分が速くなる、その感覚に付いて行けず、精神が崩壊するのだ。だがこのサンプルは、他の10倍以上も時間に耐えた。

これは驚くべきことだ。これこそが、このサンプルの秘密であると確信する。上層部に掛け合い、新たな方向性からアプローチすることを提案する。その決意をした』

このパーツの持ち主たちは、被検体なのだろう。この、非人道的という言葉がこの上なく当てはまる、研究の。

『レポートNo.113』

交渉は成功した。今残っているサンプルを全て使い切る間だけとの制限は付いたが、それまでは、私たちは自由に研究を続けられる。精神力という、データにしがたいモノ。その限界を、私たちが追求するのだ。

心が躍る。今まで精神力など、誤差の範囲で片付けられるモノでしかなかった。それが誤差を遥かに超える形で、私たちの前に現れた。研究者であれば、それに惹かれるのは仕方ないことであると分かるだろう』



オータムは歩く。ISの脚部装甲が、硬い床を踏みしめる音を、奏でながら。

『レポートNo.157

クローン6853号。筋力増強施術を実施。282時間後、精神崩壊。廃棄。

クローン7131号。骨格強化施術を実施。301時間後、精神崩壊。廃棄。

クローン7344号。思考高速化施術を実施。344時間後、精神崩壊。廃棄』

オータムは歩き続ける。大量のシリンダー、それこそ無限にあるのではないかと思わせるほどに大量の、それを無視して。

『クローン12013号。……廃棄。

クローン14288号。……廃棄。

クローン17114号。……廃棄』

歩いて、歩き続けて……そして、見つけた。

一際巨大なシリンダー、そこに浮かぶ、一人の少女を。

『廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。

廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。

廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。

廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。

廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。

廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。廃棄。』

少女は、パーツに分けられることなく、一つの完全な形を保っていた。

いつか、どこかで見た。決して多い回数ではないが、それでも、絶対に忘れない。

そんなカタチを。

『レポートNo.774

ついに、ついに完成した。我々の知るあらゆる強化施術を行い、それでもなお正気を失うことなく保ち続け。ISにある程度適合し、我々の指示を受け付ける。演習で得た結果はどれも十分以上、素晴し

い出来映えだ。たった一つで、数百人から成る部隊を殲滅出来た。それは生身からISになったとしても同じだろう。

私は確信した。今我々は、ブリュンヒルデをも上回る、最強の存在を手にしたのだと』

その少女が浮かぶシリンダーを見上げる。忌々しげに顔を歪め、レポートの最後の一文を読み、投げ捨てた。

『レポートNo.825』

完璧だ。全ての検査で、求める以上の結果を出した。完全で、完璧な兵器。今こそ、このプロジェクトに名を付けるべきだ。プロジェクトの名を、コレに与えるべきだ。

コレのオリジナルは、昔有名な剣を作った鍛冶師スミスと同じ名前らしい。

面白い偶然だ。同じ作る者同士、それにちなんだ名を付けさせてもらおう。

その名は——』

無数のコードに繋がれた少女は、意識があるのか、目を開きオータムを見た。その目を見て、オータムが口を開く。

「……ダメだな。確かに顔はそっくりだが、アイツとはまるで違う」

その声は、誰が聞いても不機嫌と分かるもので。

大事な物を、無遠慮に踏みにじられた——そんな声色だった。

「……眼が違う。アイツはてめえみてえに、純真無垢な子供みてえな眼はしちやいなかった。

この世の地獄、人間の汚さや醜さ、クソみてえなモンを何もかも見えてきて、それでもまだ前を向いている。眼を逸らしてるんじゃないやねえ、その程度じゃ、アイツを揺るがすことはできねえんだ。

……だからこそ、アイツは強い。普通なら色んなことに邪魔されるが、アイツはアイツの、本当の力を発揮できる。……だから、強い」少女は、瞬きをした。何を言っているのか分からないとでも言うように。

声など、聞こえない筈なのに。

「……気に食わねえな。ああ気に食わねえ！ てめえみてえな出来損

ないが、アイツのコピーを名乗るなんてよおっ!!」

だが、仕事は仕事だ。どれだけ気に食わないとしても、オータムはこの少女を連れ帰らなければならぬ。

「……ああ、気に食わねえよ。だがてめえは、それでもアイツのコピーだ。もしかしたら、アイツがいる場所まで、辿り着けるかもしれない」  
シリンダーの下にある、コンソールを操作する。保護液が抜けていく途中で、待ちきれないとも言おうように、シリンダーを破壊した。硝子が割れ、撒き散らされた保護液の上に、少女が倒れる。

少女はゆるゆると顔を上げ、オータムの顔を見る。そんな少女に、オータムは吐き捨てるように、言葉を投げかけた。

「もしてめえに、意思ってモンがあるのなら。生き残りたいって思うのなら。」

……ついて来い。お前に、居場所をくれてやる」

差し伸べた、手を。

少女は、掴んだ。

——しっかりと。

「ようこそ、フアントム・タスク亡国機業へ。歓迎するぜ——

——影打シャツテ」

閑話 テロリストにも休日くらいありますよ、ブラツク企業じゃあるまいし

「おーい、エムう。居るかー?」

エムが自室の端末で、過去の戦闘データを見直し復習している時のことだった。突然、扉を乱暴にノックされたのは。

「お、鍵開いてるな。入るぞ……って、居るなら返事しろよ」

「……………」

色々とツツコミどころのある入室をして来たのは、エムの同僚であるオータムであった。普段からいがみ合っているエムの部屋にオータムがこうして自らやって来るなど、エムの記憶では初めてのことがある。

「…………何の用だ。見ての通り、私は忙しい。失せろ」

「はっ、何言ってるやがる。いつでもできることをやってるってことは、暇だっただことだろ」

「……………」

端末のディスプレイを見てエムが何をしているのか察したのだろう、オータムは間髪を入れずにそう返した。それはいくらでも反論の出来る言葉であったが、それすらも面倒くさい。エムは無視を決め込んで、机に置いてあったヘッドフォンを着けノイズキャンセラーのスイッチを入れる。

が、そんなエムの行動を全く気にせず、オータムはエムのヘッドフォンを取り上げた。

「…………何をする」

「あのな。この私が、用も無しに、お前の部屋に来ると思うか?」

「例え用があったとしても、お前に部屋まで来られるのは不快極まる」  
「お前がどう感じようが知ったことかよ。私が、お前に用が有るって言うってんだ」

「……………」

エムはかなりイラツと来た。嫌味つたらしく笑うオータムの顔を

今すぐ吹っ飛ばしてやりたいと心から思った。

だが感情に任せて行動するなど、ガキか、忍耐のない無能のすることだ。そのどちらでもないエムは視線だけオータムに向け、とりあえず話を聞くことにした。

「……………それで？ 何の用だ」

「買い物に行く。付き合え」

「……………」

エムは無言のままISを起動し、レーザーライフルをオータムの顔に突き付けた。我慢のし過ぎは心と体の健康に良くないと考えたからであつた。

「おいおい。こんなところでそんなもんぶつ放せば、お前の部屋から壁がなくなつちまうぜ？」

「構わんさ。その代わりに、お前が存在しない世界が手に入るのなら」

「厨二乙www」

「……………」

危うくマジで撃つところだつた。だが鋼の精神力で、ギリギリ踏みとどまる。

エムは自分に言い聞かせた。落ち着け、冷静さを失うな。これはこの女の罠だ、私を煽つて怒らせ、その姿を指差して笑うつもりだ、そういう策略なんだ。そして罠も策も、正面から踏み潰すのが真の強者というもの。わかっていながら敢えてはまり、突破して力の差を見せつけるのが強者の戦い方だ。

……………あれ、撃つてよくね？

「……………買い物、だと？」

必死に怒りを押さえ込み、エムは搾り出すように聞き返した。賞賛に値する寛容さであつた。

「ああ。髪が短くなつちまったからな、それに合う服買ってこねえと」  
「一人で行け」

「私みたいな美人が一人で街歩いてるとな、バカな男どもが群がって来るんだよ。うざったいだろ」

「そんなもの、全部食つてしまえばいいだろう、蜘蛛らしく」

「二山いくらの安物食うくらいなら、お前を食った方がマシだ。性根のねじくれたクソガキだが、顔はそこそこ好みだしなあ、ヒヒヒ……」  
「……………」

「……そういうやつレズビアンだった。艶めかしく舌なめずりするオータムの姿を見て思い出し、エムの背筋に悪寒が走る。」

——もしかして今、結構ヤバイ状況？

「……………わかった。今回だけは付き合ってやる」

「エムは少し考えて、渋々ながら了承した。何やら身貞操の危険を感じたからというのがあるが、それだけではない。髪に服を合わせたというオータムの気持ちは、エムにも分からないではないのだ。エムだつてファッションに少しは気を使うし、髪もそれなりに大事にしている。床屋がミスって丸坊主にされたりしたらシヨツクのあまりその床屋を街ごと灰燼に帰すだろうし、その後しばらくへこむだろう。」

「だから、髪を切られてしまったオータムの気持ちは、分からないではないのだ。オータムは自分の髪質を活かした、緩やかに波打つ長い黒髪を、とても大切にしている。」

「いつも、自慢気に靡かせていたから——」

「よし。んじゃ後は、新入りを連れて——」

「待て。奴を連れて行くのか？」

「ああ。アイツあのタツパだろ、貸そうにもサイズ合う女物の服がないんだよ。今は男連中の部屋あさって見つけた服を着せてるが、いつまでもそのままってわけにもいかねえし。そこら辺の面倒を見てやってくれって、スコールに頼まれてな」

「二人で出かけるのが嫌だったんだろう？ 奴がいるなら、私も行く必要はないだろう」

「ふざけんな、あんな無口なヤツと二人きりだなんて空気が重すぎるだろうが。お前は盛り上げ役だ」

「お前こそふざけるな」

「一度了承した以上、それを覆すのはあまり誉められることではない。それに最近任務が続いており、今日は久しぶりの、丸一日何も予定のない日だったのだ。だからこそ、今日の内に復習を済ませておこ

うと思ったのだが――

(……まあ、明日も大きな予定はない。今日一日くらいならいいか)  
そうして、オータムと罵り合いながら、エムは外出用の服へと着替えた。

本人さえ気づいていないが。

その顔は、ほんの少しだけ、笑っていた。

久々の外出を楽しみにする、普通の少女のように――

「おいなんだよ、随分貧相な胸だな。ちゃんとバランス良く食ってるのか?」

「やっぱり貴様は殺す」

今度こそ、レーザーライフルがぶつ放された。最大出力で。

「おい新入り、居るか――げっ」

「おや? おやおやおやあ? オールドさんじゃありませんかあ。どうしたんですかあ?」

「ちっ……フラットまな板、なんでてめえがここに居やがる」

「ワタシがどこでナニしてたってえ、オータムさんには関係ないでしょお? あっはあ、何様のつもりなんですかあ? きやははははは!」

オータムがエムを連れて訪れた部屋には、先客が居た。鮮血に彩られたかのように赫いウェディングドレスを着た少女、フラッド。オータムは彼女が嫌い、苦手だった。同じく嫌っているエムには良識がないが、フラッドにはそれに加えて常識までない。さらに付け足せば理性すらも少々どころではなく欠けている。

単純に、話していて疲れるしストレスが溜まるのだ。いつかメチャクチャに犯してやろうと思っっている相手の一人である。

「ちっ……おい新入り、お前、友達は選べよな。そいつはウチの中でも最悪の部類だぞ」

「？」

「……まったく。あのな、コイツは——」

「まあ待て、オータム。そんなことを言っても、シャツテにはわからない。何せ外に出たのは……外にも世界があると知ったのは、つい最近なんだ」

「……ああ、そうだったな。ちっ、赤ん坊と同じってことかよ、こんなデカイくせに」

つい最近、オータムたちの仲間になった新入り——シャツテは、フラッドとちやぶ台を挟んで向かい合い、ちよこんと正座していた。穢れを知らない子供のような眼でオータムを見上げる、まだ顔立ちに幼さを残す黒いショートヘアの少女が、立ち上がれば180センチを越える長身の持ち主であることを、オータムたちは知っている。

「なーにやってんだよ、シャツテ。お前の話し相手としちゃ、そいつは難易度が高すぎる。初心者にはスコールがオススメだな、アイツは話し上手だから」

「あんな腹黒女を勧めるとはな、お前も中々のゲスだ」

「ぶっ殺すぞ」

そんなことを話していても、シャツテはただ黙って、オータムたちを見上げるばかり。何を言っても無駄だと考え、オータムは舌打ちし、今度は質問してみることにした。

「……んで、何やってんだよ」

「あつはあ、ご存知ないんですかあ？ オータムさあん。オータムさんには、ちよおつと新しかったかもしれないですねえ、きやははははは！」

「別にそんな新しいモンでもねえだろ。……それが何かは知ってるっの。ただなんつーか、マジでやってる奴を生で見たのが初めてだったんだよ」

シャツテとフラッドの間にあるちやぶ台、シャツテに与えられた部屋の中で数少ない物であるその上に、プラスチック製のカップが12個、重ねられていた。カップをピラミッド型に積み上げ、崩しながら元の形に重ねる——という競技スポーツに使う、専用のカップだ。



「ふっふっふう〜。シャツテさんの実力をもってすれば、この程度はお茶の子ホイホイです。さあ、シャツテさん！ やあつておしまいなさいっ!!」

「了解」

フラッドがノリノリで言うのと、シャツテは目を細め、カップを並べ始める。3個、6個、3個と。

「「……………」」

シャツテとフラッドに、緊張感が満ちる。釣られて、オータムとエムも真剣な顔で、カップを見つめた。

——そして。

「っ!!」

シャカカカカカカカ!!

「お、おおおっ!?!」

「速いっ……………」

カップが、2個の小さなピラミッド、1個の中のピラミッドになる。それらが瞬く間に崩れ、2個の中のピラミッドに。

「なんて正確な動きだ……………」

エムも驚きの声を上げる。その間に2個のピラミッドは崩れ、一つ of 大きなピラミッドと、一つずつのカップに。

「す、すげえ……………」

シャコココココココ!!

それらが、また崩れ。

最後に、3個、6個、3個と重ねられた。

「タ、タイムはっ!?!」

「5秒……………ジャストっ……………」

「なっ、そ、そんな……………!?!」

それは、恐るべきタイムであった。いまだかつて、世界で誰一人として見たことがないほどの。

「あっ……………と言う間の出来事……………! 長年守られてきた記録が……………今……………塗り替えられたっ……………! 一瞬でっ……………!」

「更新……………! 呆気なく更新……………! いとも容易く……………破られた……………」

！ 世界最速がつ……………」

「目にもとまらぬ早業、神業……神速……！ まさに神速つ……………」

「風が語りかけます……………！ 速い……………速過ぎるつ……………！」

「……………」

「……………」

「……………」

「それで、ナニしに来たんですかあ？」

「ああ、実はオータムがな……………」

「シャツテ、服それしか持つてねえだろ？ 買いに行こうと思つてな」

「おおく！ それはナイスアイデアですねえ！ オータムさんにしては」

「てめえはいつも一言多いな、しかもわざと」

オータムの額に青筋が浮かぶが、しかし誰も気にしない。

「それじゃあ、ワタシも準備しますかねえ」

「オイコラ、てめえも付いてくるつもりか」

「当たり前じゃあないですかあ、あつはあ♪ ワタシとシャツテさんはあ、一心同体ですよお」

「…………それは、末恐ろしいな」

「それじゃあ、行きますかねえ」

「ふぎけんな、誰がそんな狂つたみてえに赤いドレス着たヤツと出かけるかよ。せめてまともなカッコして来い」

「まったくう、オータムさんはワガママさんですねえ、歳に似合わず」

「てめえマジでぶつ殺すぞ」

「さつさと行くぞ」

呆れたようにエムが言い、一同は部屋を出る。

「それじゃあ、着替えてきますねえ。ちやあんと待つててくださいよお？ きやははははははー！」

「…………置いてこうかな」

「さつさど行ってこい。四人とも休日が重なるのは滅多にないぞ」

「うふふふううう、シャツテさんとお出かけですねえ、初めてですねえ！ いえくつ!!」

「ん」

背伸びして高々と手を伸ばすフラッドと、胸のあたりで構えるシャツテのハイタッチ。そして元気良く駆け出すフラッドの背中を見送って、オータムとエムが歩き出す。

「おおい、シャツテ！ 早く来い！」

「了解」

呼ばれて、シャツテも歩き出す。三人は一足早く、外に出るための準備を始めた。

「なあ、フラット<sup>まな板</sup>」

「なんですかあ？ オールド<sup>年増</sup>さあん」

「私、言ったよな？」

「ナニをですかあ？」

「まともな服着て来いっつったろうがっ!!」

「ええく？ カワイイじゃあないですかあ」

「ざっけんなあ!! そんなコスプレしたイカレロリっ娘と街なんざ歩けるかあっ!!」

「きやははははは！ もしかしてえ、オータムさんて、自分はマトモなつもりなんですかあ？ きやははははは!!」

「クロス……ぶっ殺す!!」

「落ち着け、オータム。街中だぞ」

「冷静に」

「ぐううぬううう……!!」

うなり声を上げて、フラッドを睨むオータム。そのフラッドは、まるで血に浸したかのように赫い、ひらひらのゴスロリドレスを着ていた。少なくとも、街を歩く格好として適切とは言いがたい。

「くっそう……目立たずに行くつもりだったのに」

「それは初めから無理だったと思うが。コイツがいては「？」」

エムが溜め息交じりに指差したのは、フラッド——ではなく、シャツテだ。本人は何を言われているのか分からないというように、首をかしげるだけ。

だが確かに、エムの言う通りシャツテは目立っていた。フラッドも目立ってはいたが、それは先にシャツテを見て、そしてフラッドに目が行くという形だ。

何せ、シャツテは——

「……まあしょうがねえか、このタツパじゃ。頭一つ出てるもんな」

そう、シャツテは背が高い。成人女性であるオータムよりも頭一つは高いのだ。

それに加えて。

「つたく、相変わらずむしやぶりつきたくなるような体しやがって……じゆるり」

「……変態」

「ド変態ですねえ」

「変態?」

「ちつげえよ!　つかシャツテに変な言葉教えんな!」

強化施術によるものか、シャツテはスタイルが良かった。オータム曰く「パリコレレベル」、スコール曰く「負けた……」、エムはノーコメント。

そして顔も整っている。オリジナルである真改に良く似ているが、彼女と違い眼に鋭さがない。生まれてから一年ほど、研究所を出てからはほんの数週間だ。真改の眼はあらゆる地獄を潜り抜けてきたが故のモノであり、遺伝子的な理由ではないのだ。

シャツテ自身も常軌を逸した経験をしているとはいえ、他に比較する対象がない。自分の過去が異常であることが分からないのだ。だからシャツテの眼が真改のそれと違うのは当然であり、仕方のないこと。なので、外見の歳相応の——否、それよりずっと子供らしく、純心な眼をしている。

そんなシャツテが着ている服は男物の、どこでも手に入りそうな質素なもの。しかしそのせいで、豊かな胸が布を押し上げる形になっ

ている。道行く男たちの鼻の下が伸びているのはそれが原因であった。

「……立ってると余計人目を集めそうだ。さっさと行こうぜ」

「そうだな」

というわけで、四人は歩き出す。その先には、大きなショッピングモールがあった。

「あつはあ♪ 人がゴミのようですねえ！」

「人ごみって言えよ」

「違う？」

「ああ、人ごみのごみは「混んでいる」という意味で、捨てるゴミとは――」

「マジレスかよ」

賑やかに話しながら、テクテク歩く。最初の目的地は、女性専用の服屋。入るとすぐに、店員が愛想よく話しかけて来た。

「いらつしやいませ！ どのような品をお求めですか？」

「ああ、コイツのをな」

オータムがシャツテを指差すと、店員はシャツテの顔を見上げる。

「まあ、素敵な方ですね。モデルをしてらつしやるんですか？」

「モデル？」

「あー、いや違う。コイツ見ての通り、素材は良いのにファッション全然知らねえし、興味もなくてさ。良さそうなの何セットか見繕ってやってくれよ」

「かしこまりました！ ふふ、腕が鳴りますね。久々に楽しみそうです……じゅるり」

「……………」

どこことなく不安そうな顔で店員に連れて行かれるシャツテと、それを微妙な顔で見送るオータムとエム。そしてオータムが口を開く。

「あの店員、見張つとけ」

「わかった。……フラッドはどうする?」

フラッドは店に着くや否や、フリフリの服ばかりが置いてある謎のコーナーに突入していた。そこに居たそういう趣味をお持ちのお姉さん方からは、早くもキヤーキヤー言われてアイドル状態である。

「ほつとけ。バカな騒ぎを起こすようなら、他人のフリして置いて行く」

「名案だな、それで行こう」

エムはシャツテと店員を追いかけ、店の奥へと消えて行った。オータムは溜め息を一つ吐き、

「……さて。ちよいと不安だが、私も服探すか」

ガリガリと頭を掻きながら、歩き出した。

「へえ、なかなかいいじゃねえか」

「ありがとう?」

ニヤニヤと笑いながら言うオータムに、シャツテは首をかしげる。褒められていることは分かったが、なんで褒められているのかは分からないからだ。

「さつすがあ、シャツテさんですう! ナイスですねえ!」

「……くっ!」

ダメージジーンズにブーツ、青いチューブトップに白いジャケット。体のラインを強調しつつ動き易くもある、活動的な服装であった。

そんなシャツテの胸を見て、エムが悔しそうに呻いた。

「お気に召しましたでしょうか?」

「ああ、いい感じだな。んじや、残りの服はここに送っておいてくれ」  
「かしこまりました!」

オータムやスコールが使うダミーの住所を書いた紙を渡すと、店員は疑うこともなくそれを受け取った。

「はいはい! ワタシの分もお願いますう!」

「あ、コラてめえ!」

「かしこまりました!」

「おいコラア!」

フラッドも便乗した。店員は躊躇しなかった。

「私のも頼む」

「かしこまりました!」

「てめえもか!? いつの間にも買った!? 後で整理すんの私なんだぞ!?!」

エムも便乗した。店員はノリノリだった。

「さて、それでは次に行くか。まさか買い物だけで終わるつもりはないだろう?」

「待てやコラ。まさか代金まで私持ちじゃあねえだろうな?」

「連れ出したのはお前だ。金もお前が払うのは当然だろう」

「そうそう、オータムさんは年長者なんですからあ。気前良くポクンと、オトナのヨーヨーってやつを見せてくださいよお!」

「お金ない」

「くっそお、このクソガキどもがあ……こちとら今月厳しいんだよ……!」

「知ったことか、お前の浪費癖のせいだろう」

「ぐうぬぬぬううう……!」

ギリギリと歯噛みするオータム。心配そうな顔のシャツテ。無視する二人。

四人は、次の店に向かって歩き出した。

「そろそろランチにするか」

「おい仕切んな」

「お腹空きましたあ! ご飯にしましよお!」

「空いた」

「……ちっ、仕方ねえな。……じゃあ、何食うか」

「野菜だな」

「はあい！ パスタに一票入れまあす！」

「お米」

「イタリアンに決定だな」

意見が割れなくて良かった——オータムは本気でそう思った。シャツテはともかく、エムとフラッドは厄介だ。頑固というか、ワガママなのだ。揉めると、最悪このシヨツピングモールが消滅するだろう。フラッドのISはそういうの得意だし、フラッド自身も躊躇しないし。

「さて、美味そうな店は……」

「あそこ」

「ん？」

シャツテが指差す方を向いて見ると、確かにイタリアンの店があった。しかし他にもイタリアンの店は見える範囲にいくつかあるのに、何故そこなのか。

「一番良い匂い」

「サメかお前は。……まあいい、その鼻を信じるとするか」

というわけで、その店へと入って行く。途端に、オータムたちにも感じられるほどの香りが鼻腔を満たした。

「お、こりやアタリっぽいな」

「さすがだな、シャツテ。正直、シヨツピングモールの飲食店になど大して期待もしていなかったが」

「美味しそうですねえ、こここのスタッフの皆さん、拉致っちゃいましたよ  
うかあ？ きやはははははは！」

「やめろ」

空いてる席を見つけ、座る。ちょうど四人掛けのテーブルだ。目立つフラッドとシャツテを奥に押し込んで、オータムとエムが廊下側に。

各々がメニューを決め、フラッドが呼び出しボタンを連打すると、店員が慌ててやってくる。

「お、お待たせしました！」



「いや、別に待っていない」

「悪いな、コイツ馬鹿で」

「ごめんなさい」

「あ、いえ……そ、それで、ご注文は？」

「ペパロニのピッツアとエスプレッソを」

「サラダと、トマトの盛り合わせ。あとカフェラテ」

「ラザニアをお願いします！ あ、デザートにい、ティラミスも！」

「リゾット」

「はい、少々お待ちください」

そして、待つこと数分。続々と料理が運ばれて来た。テーブルに載せられるたびに新しい香りを楽しめて、四人がゴクリと喉を鳴らす。いただきます、とフラッドとシヤツテが唱和し、料理を食べ始めた。

「このピッツア、激ウマだぜ」

「新鮮で瑞々しいな。ドレッシングもオリジナルだ、実に良い味をしている」

「もしやもしやもしやもしやもしやもしやもしや」

「美味しい」

全員が夢中で食べ続け、あっという間に料理がなくなる。次いで運ばれて来たデザートをフラッドがむっしやむっしやしいてる間に、三人は飲み物を飲み干した。

「満喫したぜ……」

「想像以上だったな」

「おかわりします！ えくと……」

「太る」

「ファツ!？」

シヤツテの必殺ワードにより、フラッドはおかわりを諦めた。さしものフラッドも、太るのは嫌らしい。

「ふあく……食ったら眠くなってきたな。帰るか」

「……そうだな」

「ええく？ ワタシまだ、遊び足りませんよ。もつと街中で銃乱射事件とかやってみたりしたいですう！」

「やめろ」

「ダメ。危ない」

「危なくないですよ、こう見えてもワタシ、強いんですからあ」

「でも、ダメ」

「むううう……しよーがないですねえ」

(……危なかった……)

割とマジでホツとしたオータムとエム。シャツテを見る目にちよつと尊敬が混じった。まさかフラッドを制御出来るとは。

「さて、帰ろうぜ。頭のイカレたロリっ娘が暴走する前に」

「そうだな、本当にやりかねんからなコイツは」

席を立ち、会計を済ませ、店を出る。拠点に戻るために。

——この、まどろみのような日常から、逃れるために。

「……やっぱさ。性に合わねえな、こういうの」

「そうだな。……そこそこ、楽しかったが」

「そうですかあ？ ワタシはイイと思いますけどお。ちよおつとシゲキが足りないですけどねえ、きやはははははは！」

「……ん」

楽しそうに笑うフラッドの頭に、シャツテが手を置く。撫でるといふことは、知らなかったけれども。

ただ、何も知らない少女も、感じたのだろう。

この、狂いし小さな少女の傷を。

「……さ、帰ろうぜ。明日からは、また殺し合いの日々だ」

だから、気持ちを切り替えた。こんな日常は、自分たちには似合わない。ただほんの少し、気まぐれを起こした時に、また立ち寄ればいだけ。

ずつと浸かっているわけにはいかないのだ。そうすると、戦えなくなってしまうから。

だから、帰ろう。

自分たちの、日常へ。

「ああ〜！ ドラグリーン先生の新作、「うみみやあのなく頃に」が発売されてますう〜！」

「なんだよそりやあ、惨劇通り越して喜劇じゃねえか」

「それ以前に話にならないだろう、文字通りの意味で」

「ゲーム？」

## 第77話 這い寄る影

『……受諾。ラウラ・ボーデヴィツヒだ』

夜。IS学園の生徒たちが寝静まった頃。鈴虫の声が僅かに届く以外には、数十分に一度、当直の教員が廊下を巡回する足音しか聞かない、静かな夜。

ラウラ・ボーデヴィツヒは、ルームメイトのシャルロットを起こさないよう静かに起き上がり、自らの専用機、シュヴァルツエア・レーゲンに入った通信を受けた。

『少佐。こちら、クラリツサ・ハルフォーフです。夜分遅く申し訳ありません、お休みでしたか？』

『構わん。……それで、どうした？』

クラリツサは職業柄不規則な生活をしているが、ラウラはIS学園に来てからは規則正しく寝起きしている。まだ子供であるラウラにとって、その生活が心身に必要なことであるとクラリツサは認識しており、通信を寄越すにしても常に日本の時間<sup>時差</sup>を考えていた。そのことはラウラも薄々気づいており、だからこそ、このような時間に通信が来たことはそれだけ重大な事態であると推測していた。

『はい、それが……』

『……待て。念のため、移動する』

『はい』

そしてクラリツサの声色から、その推測を遥かに超える事態であるらしいことを悟った。故に、深く眠っているとはいえシャルロットの傍で通信を続けることは、声を出さないプライベート・チャンネルでも得策ではないと判断した。

よって、ラウラは部屋を出ることにした。教員の巡回も、ラウラからすればあつてないようなもの。何事もなく、寮のラウンジへと移動する。

『……大丈夫だ、こちらは問題ない。それで、用件は？』

『……はい。実は……』

話すと決めたクラリツサだが、しかしそれでも躊躇した。はたして

これを、ラウラに伝えて良いものか。

伝えることにリスクはある。他の代表候補生とは違い、ラウラは軍属。本国で起きたことに、無関係と言うことは出来ないのだ。責任を感じて、今までのように学園で暮らせなくなるかもしれない。あの氷のようだったラウラに温もりを与えてくれた学園から、自ら離れようとするかもしれない。

だがそれ以上に、伝えないことによるリスクも大きい。IS学園がファントム・タスク亡国機業の標的の一つであることはほぼ確実だ。この先にも襲撃があることは想像に難くなく、その際にこの問題の中心である存在が出てくる可能性は否定出来ない。そしてソレと出会い、ラウラが心を乱したとなれば……最悪、命を落とすことになる。

『……………』

何度も秤にかけた。そして、話すと決めたのだ。そも、通信をした時点で、何でもありませんなどと言うことは出来ない。ある意味、クラリツサは既に後戻り出来ないのだ。

ならば、言うしかない。

伝えるしか、ない。

『……………国の、極秘研究所の一つが、襲撃されました』

『生存者は?』

『いません。研究員、警備員……実験体も、皆殺しにされています』

『……………そうか』

その報告には、ラウラは大きな反応を示さなかった。既に慣れてしまっているからだ。そのことに心を痛めつつも、表には出さずに続ける。

『極秘の研究所であるため人はそれほど配置されておらず、人数で言えば大した被害ではありません。しかしその分、いずれも優秀な人材です。国にとっては大きな打撃でしょう』

『そんなことを報告するために通信してきたわけではないだろう。本題は、その研究所で何を研究していたか、だろうか? 話せ』

『はっ。……………その研究所には……黒いシユヴァルツェア・リート歌がありました』

『っ……………!?!』

その言葉を聞いて——その名を聞いて、ラウラは驚愕のあまり、息を呑む。

『ば……馬鹿な、リートだと……!?!』

その名は、もはや聞くことはないと思っていた。それはラウラだけでなく、クラリツサも——ドイツ軍の中でも、ごく一部を除いた者たちの共通の認識であった。

それほどまでに、聞く筈のない名前だったのだ。

『そんな筈は……リートは、とうに廃棄された筈だ!』

『それが、廃棄されていなかったようです。廃棄したと見せかけて、極秘裏に研究所へ移送し……研究を、続けていたのです』

『そんな筈があるか! リートは失敗作、人間には、いや、遺伝子強化素体にも扱えない代物なんだぞ!?! そんな物の研究を続けるなど——』

『確かに、リートは失敗作です。誰にも扱えない、欠陥品とも呼べない失敗作。それでも奴らは、リートの研究を続けていたのです』

『………つ!?! まさか……!?!』

その意味を、ラウラは理解した。そして、その研究所が襲撃された意味も。

『奴らは、造っていたのか……「リートを抑える素体」を……!』

『その通りです。その研究所は、正確に言えば、リートを研究していたのではないのです』

『………下衆共がっ……!』

ラウラは、その全身を怒りに震わせた。

それが、状況には似つかわしくないが——クラリツサは、嬉しく感じた。

『ではその、リートを扱うための素体も奪われたのだな?』

『はい。実験体はことごとく破壊されましたが……一つだけ、残骸が残っていない物がありました』

『………つ!?!』

その言葉に、ラウラはひどく、嫌な予感がした。

背筋に悪寒が走るほどの予感が、何故か。

『データは全て破棄されていましたが……僅かに残されていた物を、どうにか復元しました。そこに記されていたモノを、送信します』

『ああ、頼む』

このデータを送れば、もう本当に後戻りできない。

ラウラがどう反応するか。この後、まだ平和に学園生活を送ることが出来るのか。なにせこれは、ラウラだけの問題ではない。ドイツだけの問題でもない。

ラウラの親友、その尊厳が、絶望的なまでに踏みにじられたのだ。

以前のラウラであれば、特に反応を示さなかつたかもしれない。だが今の、人の心を手に入れつつあるラウラには、あまりにも酷な――

『……どうした？ 早く送れ』

『……はい、ただいま』

だが。

だが、命には代えられない。

だから、賭けるしかない。

ラウラが背負った弱さに。

ラウラが手に入れた強さが、勝ることに――

『……( )……これは……』

『見ての通りです。その研究所で扱われていた実験体は――

――井上真改の左腕から、造られたモノです』

『……よく、軍がお前に開示したな、このデータを。極秘中の極秘だろうに』

『まさか、開示などされていません。少々上層部にきな臭い動きがありましたので、混乱に乗じて忍び込んだんです』

『ふ……よくやる。我々の立場は分かっているだろうに』

『ええ。ドイツ最強の……使い捨て部隊。不要になれば捨てればいい、減った分は足せばいい、足りない分は造ればいい。そんな都合の

良い存在であることは……わかっていきますよ。自分のことですから。ですが、私は国の、軍の駒でいるつもりはありません。私は私の意思で動きます。あなたと同じようにね、隊長』

『……そうか』

『そして、私の魂が言っています。あなたの命令に従え、と。』

今はまだ、どうすればいいのかわからないでしょうが……心が決まりましたら、なんなりとご命令を。我々シユヴァルツェ・ハーゼは、隊長のための部隊です。全霊をもって応えてみせます』

『……すまんな、クラリツサ』

『いえ。……しかし、少々意外です。随分と落ち着いていますね。もっと取り乱すかと思っていましたが』

『落ち着いてなどいない。十分に、はらわたが煮えくり返っている。今すぐ国へ帰り、こんなことを仕出かした連中を吊し上げたい気分だ。……だが、それは最善の行動ではない』

『その通りです。そんなことをすれば、二度と生きて国を出ることはできないでしょう』

『だから、これでも必死に、抑えている。やるべき事を見失わないために。』

……クラリツサ、リートはこの実験体と共に奪われたのだな？』

『はい。下手人も判明しています。監視カメラに映像を残していました。以前学園に潜入し織斑一夏を襲撃した、亡国機業のエイジエント……オータムと名乗った女です』

『………よりにもよって、奴か。マスターの左腕を奪った者が、その左腕から造られたクローンまでも奪っていくとはな』

『しっかりとカメラ視線で映っていましたから、明らかに故意に残しています。挑発のつもりなのでしょう。ふざけた連中です、織斑一夏にも、わざわざ名乗ったと聞いています』

『あの女は、マスターと二度交戦している。うつつたのだろうさ、気持ちわかる』

『……隊長がそこまで言うのなら、そうなのでしようね』

『お前も一度、戦ってみると良い。決闘の気分が味わえるぞ』



『でしようね。あれが日本の戦士、サムライという者でしようか』  
『……む？　なんだ、会ったことがあるような言い方だな。お前は  
ずっと国に居た筈なのに……』

『え!?　あ、いやっその、隊長のお話から、勝手に人物像を推測させて  
いただきまして……ははは……』

『そうか……だが、間違っではないだろう。うむ、戦うマスターの姿  
は、まさしくマンガで読んだサムライそのものだぞ!』

『は、ははは……いずれ会ってみたいですね、はははは……』

『うむ。マスターはな、いつも無表情なのだが、戦う時は楽しそうに――  
』

『そ、それよりもつ。奪われた実験体――影打シヤツテという名前コードの者が、リー  
トを持って亡国機業に合流したことになります。もしシヤツテが、  
リートの性能を十全に発揮できるのなら――』

『問題ない』

『恐ろしい相手に……は？』

『問題ない。そのシヤツテがどれほどの施術を受けたのかも、訓練プ  
ログラムでどれほどの技術を身につけたのかも知らん。だが科学者  
どもがいくらあがこうと、マスターの本当の力を再現できたとは、到  
底思えん。』

奴らは知らん。マスターの――井上真改の強さ、その本質を。だが  
私は知っている。そして、その強さを何度も目にし、この身で味わっ  
た。影打ではなく、真打の力をな。

遅れは取らんさ。戦いを知らん、人形にはな』

『……わかりました。では私は、隊長の言葉を信じます。』

――ご武運を。ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐』

と、部下の前でカツコつけてみたものの。

ラウラは、内心動揺しまくっていた。

(ど、どうしよう……国が、ドイツが、マスターのクローンを造ってい

ただと……？ しかも、切り落とされた左腕から……！)

通信後、シャルロットに気づかれずに部屋に戻りベッドに入ったが、まったく寝付けなかった。どうにもならない考えがグルグルグル頭の中を回るばかりで、気がつけば日が昇り始めていた。

(そんなの……そんなのっ。一夏やマスターや皆に、一体どんな顔をして会えばいいんだ!?)

日課である朝の鍛錬は、寝たフリを通してサボった。その後も上手いことタイミングをずらして友人たちに会わずに朝食を済ませた。しかし授業までサボるわけにはいかない。千冬が怖すぎる。そして授業に出れば、クラスメイトたちと会わずに一日を終えるなど不可能だ。

たとえ可能だとしても、そんな逃亡生活(?)がいつまでも続けられる筈もない。観念して、寮から校舎への道をとぼとぼと歩いているが――

(どうしよう……どうしよう、どうしようっ。どうすれば……!?)

「お、ラウラ。おはよう」

「ギックウ!!」

後ろから声を掛けられて、飛び上がった。その声の主は、顔を見なくても分かる。一夏だ。

「今朝はどうしたんだ？ 風邪か？ 最近ちよつと気温下がってきたからなあ、気をつけろよ。せめて、その……裸で寝るのはやめた方が」  
「い、今はパジャマを着て寝ているっ!」

「お、元気そうだな。よか……って、うお!?! どうしたその顔!?!」

思わず振り返ったラウラを見て、一夏がちよつとビビる。なにせ目はギンギンに血走っており、ものすごいクマが出来ている。そんな顔が激近に寄って来たらそりゃビビる。

「ちよ、ラウラ、ホントに大丈夫かよ!?!」

「イ、イヤア、朝日ガ眩シイナア! 今日モイイ天気ダナア!」

「今にも雨が降り出しそうな曇り空なんですが」

「う……」

回避失敗。

「……どうしたんだよ、ラウラ。風邪……ってわけじゃなさそうだけ  
ど。なんか悩み事か？」

「は!? な、悩みなんてないぞ!? なーんにーもないっさあー!!」  
「マジでどうしたんだ」

咄嗟に、以前チラつと見たお笑い芸人の真似を試してみたが、あまり  
にも不自然過ぎた。キャラ的に。鈴か本音だったらいけたかもしれ  
ない。

「……熱、は、ないよな」

「っ!!」

元気ではあるようだが、一夏は念のためにラウラの熱を計ることに  
した。おでこ額とおでこ額をくつつけるチューことで。

「ぬううううおおわああああああつっつ!!!」

「ぐっふおう!!」

ラウラの正中線五段突きが完璧に決まった。ツツコミにしても照  
れ隠しにしても強烈過ぎる、鍛え抜かれた一夏の体でなければ粉碎さ  
れていた可能性が極めて高い猛撃であった。ナニがとは言わないが。  
だとしても、致命的なダメージであることは違いなわけだ。

「な……な……を……する……ら……う……ら……」

「あ!?! す、すまん一夏……!」

泡を吹いて悶絶する一夏を介抱するラウラだが、しかし一夏はピク  
ピクするばかり。顔色もどんどん悪くなっていく。

「え……衛生兵っ! 衛生兵っ!!」

かくして。

寮と校舎の短い距離の真ん中で、珍妙な光景が繰り広げられること  
となった。

どうにか復帰した俺は、どうにか教室に辿り着いた。しかし黒い兎  
の牙は想像以上に鋭く、受けた傷は大きく深い。

(し、死ぬところだった……男として)

腹筋と胸筋と首の筋肉で生命的な意味での被害は最小限にとどめたが、初撃によるダメージだけはどうしようもなかった。鍛えようないもん。

(しかし……ラウラのやつ、どうしたんだ？ あんなに慌てて……慌ててたって言えるのか、アレは？ まあとにかく、絶対おかしいよな……)

大分楽にはなったが、まだ口にするのがはばかられる部位に違和感がある。そのせいで、歩き方が微妙に変だ。なんやかんやと言われたくないので、椅子に座ってじっとしてしよう。

(うくん……女子の悩み、か……わからん)

常々女心がわかっていないと言われる俺だが、わからないものはわからない。悩み事なら、できるだけ協力したいところではあるけれど……あの様子じゃあ、近づいた途端にまたぶっ飛ばされる気がする。次は耐えられる自信が全くないので、正直今はちよつと近づきたくない。俺だつて命は惜しいのだ。

(ううむ……どうするべきか……)

腕組みをしてうんうん唸っていると、箒が俺の席まで歩いて来た。何やら浮かない顔である。

「一夏、気づいているだろう？」

「ああ、まあな……」

箒がちらりと視線を向けた先に居るのはラウラだ。沈みに沈んだ顔でうつむき、何も置いていない机をじっと見つめている。

もともと愛想のいいやつではないが、それでもいつも胸を張って、ピンと背筋を伸ばしているのに。小さな体が、いつも以上に小さく見える。

「どうしたんだ？ ラウラは。アイツらしくもない」

「俺が知るわけないだろ……今朝渾身の五連撃をぶち込まれたばかりだよ」

「そ、そうか……」

今でも微妙に目の焦点が合わない。箒が若干ブレて見える。あの体格から繰り出されたとは思えないくらいに重いパンチだ。

「心配だよ。今朝のトレーニングにも来なかったし、僕たちのこと避けてるみたいだよ」

「シャル……お前も会ってないのか」

「うん……トレーニングから戻ったら、もう部屋に居なかったんだよ」

「そうか……シャルにも相談してないなんて、かなり重大な悩みつばいな」

「考えてみれば、ラウラさんは決して人生経験豊富とは言えません。普段はとてもしつかりしてらっしゃいますが、悩み事への対処方法を知らないのかもしれない」

「しつかり……してるのかな。どうだろうなあ」

アレははたして、しつかりしてると言えるのか。世間知らずで結構抜けてるところあるし、突拍子のないこと言ったりやったりするからなあ。……でも今は、そんな事はどうでもいいんだ。重要なことじゃない。

「なあ、シンは何か知ってるか？」

「……………」

後ろを振り向くと、シンは黙して首を振る。ラウラが全幅の信頼を置いているシンも知らないとは……。

「……………」

「……………」

「……………」

シンはすうつと目を細めて、静かにそう言った。

「……………」

……なるほど。ラウラがシンを信頼しているように、シンもラウラを信頼している、ってことか。悩んでいても、その程度でへこたれたりはしない、と。

「……………」

「……………」

「うん。ラウラだってもう、一人でなんでもできるって考えてないよ。本当に助けが必要なら、頼ってくれるよ」

「ふふ……鈴さんも同じことをおっしゃっていましたわ」

「私たちがラウラに頼られた時応えられるよう、精進するのみだ」

「……………」

そう言うのと、シンは黙って頷いた。心なしか嬉しそうだ、相変わらずスパルタなやつめ。

「……おっと、そろそろHRの時間だ。席に着こうぜ」

というわけで、各々席に戻って行った。と同時に、千冬姉と山田先生が教室に入ってきて来る。

「さて、全員揃っているな。HRを始めるぞ」

千冬姉が朝の伝達事項を話しているのを聞きながら、ラウラのことを考える。

アイツがあればほど悩んでいる。きつと、そう簡単には解決しない悩みだ。

けれど、悩みのない人生なんてない。たとえあったとしても、それはきつと、つまらない人生だ。悩んで悩んで、苦しんで、つまずいて、間違えて、失敗して、また悩んで……。

そういうもんだ、人生なんて。そうやって成長していくんだ、人間は。俺みたいな若造には、まだよくわからないけど。唐沢さんが言っていたことだから、きつと正しいんだと思う。

だから、見守ろう。俺たちが今してやれるのは、それだけだから。

「私のHRをぼけつと聞き流すとは、いい度胸だなボーデヴィツヒ」

ズドムツ!!

「ぐおあっ!! きよ、教か」

ガキョオツ!!

「ひぎいっ!!?」

「織斑先生だ」

「も、申し訳ありません、織斑先生……!」

「……………」

……………大丈夫かなあ……………

## 第78話 苦惱

「……………」

……さて。昨日はああ言ったものの、やはり気になる。ラウラは一体どうしたというのか。朝の廊下を教室に向かい歩きながら、少し考えてみる。

ラウラはドイツが造った、戦闘用の遺伝子強化素体だ。試験管ベイビーである彼女は親を持たず、友もない。そして今までに接してきたのは、戦闘やそれに関するノウハウを教える人物ばかり。与えられてきたのは愛ではなく、戦闘の技術と知識と、道具。悩みを打ち明ける相手などおらず、そもそも悩みを持つことすらなかった——否、出来なかった。

そんなラウラが、十五年の時を経て、今ようやく悩みを持った。悩むことが出来た。それはきつと、喜ばしいことなのだと思うが——  
(……………いかなる内容か……………)

それが気がかりだ。ラウラの悩み。まさか恋煩いということはあるまい。一夏に対し、あんなに真っ直ぐにぶつかっていたのだ。今更悩むとは考え難い。

千冬さんも、ああ見えて顔や態度に出やすい質だ。ラウラに二撃加えたあの様子は、己の見る限りでは普段の千冬さんだった。ラウラは千冬さんにも打ち明けていないと見える。

(……………ふうむ……………)

一夏は常々、女心が分かかっていないと言われているが。実は己も全く分からない。というよりも、感性そのものが世間一般の人々とは大きくずれているように思う。今更に過ぎることではあるが。

なので、悩み相談の類は大いに苦手としているのだ。見守れと言ったが、己の場合、それしか出来ないとも言う。

(……………悩み、か……………)

よく聞く内容としては……………太った、とか。

……………ないな。絶対がない。いつも朝昼晩、肉と野菜と魚と炭水化物をバランス良くたっぷりと頂いてはいるが、そのカロ

リーは全て消費し切れるくらいの運動をしている。あの体格を考えればむしろ栄養は足りていないのではなからうか。

後は……勉強、つまりは成績。

………これもないな、常にセシリアと首位を争っている。それで悩みなど少々贅沢だ、己からすれば。

他には……部活。

………確かラウラは茶道部だ。茶道部での悩み……想像出来ん。まさかいじめなどはないだろう、なにせ顧問が千冬さんだ。そんな命知らずがこの学園に存在するとは思えない。

「……むう……」

本格的に分からん。残りは本国関係しか思いつかないが、IS学園に居る以上、過度な干渉は出来ない筈。ラウラが所属する部隊の隊員とも良好な関係を築いているようだし、例えば軍や国家に関わる問題があるとするれば、それこそ己の想像が及ぶものではない。

やはり、己に出来ることはないのか——そんな無力感を抱き始めた頃、丁度曲がり角に差し掛かった。

——ドン。

「きやつ……」

「む……」

思考に没頭し過ぎたか、周囲への意識が疎かになっていた。不覚にも、生徒とぶつかってしまったようだ。

「……御免……」

「あ……ひ、い……!?!」

「……?」

半ば反射的に謝ったら、何やらひきつったような悲鳴が聞こえた気がした。その発生源に視線を向けると、特徴的な、明るい空色の髪が。………

「あっ……ひあっ……!」

その生徒は、眼鏡を掛けていた。制服のリボンの色からして一年生、しかしクラスメイトではなく、なのに僅かに見覚えがある。



……誰だ？

「ひい……あああ……！」

その少女のことが思い出せず、心中で首を傾げていると——あろうことか、少女は逃げ出してしまった。

顔を青ざめさせ、目に涙をため、足をもつれさせながら、しかし全力で。

それはまさに、「必死」と呼ぶに相応しい逃げっぷりであった。

「……………」

……己が、何をしたと言うのだ。

——ズウウウウウン——

教室に着くと、俺の後ろの席に座る少女が、そんな効果音が聞こえてきそうなくらいに落ち込んでいた。

……ほんの数十分前に一緒に朝食を食べた時は普通だったのに、一体何があったって言うんだ。シンがこんなになるなんてタダゴトじゃないぞ。

というわけで、シンに聞こえないように教室の隅っこに移動し、みんなと緊急会議を開いた。

「昨日はラウラ、今日はシンか。なんなんだ、一体」

「それが、目撃情報によると……何やら真改とぶつかった同級生が、泣きながら逃げに行ったようなんだ」

「……………はあ？」

そんなことで落ち込んだのか？ 意外とと言うか、妙なところでナイーブなやつだな。しかし一体なんだって、そんなことになったのか。

そりゃあ、シンは決して愛想の良いやつじゃない。いつもむすつと仏頂面で、目付きも鋭い。雰囲気も普通じゃなくて、慣れてない人じゃ近寄りがたい。話そうにも口数が足らな過ぎて、会話にならないことが多々ある。それでいて、バトルになるとすっげー楽しそうに笑

う。

……なんだかかなりアブナイ人のような気がしてきたけど、それでも、悪いやつじゃないんだ。優しくて、不器用ながらも気遣いができ、友達思いで、誰かのために無茶をする。いつも黙っていて、けれど心の中でみんなのことを考えている……そんなやつ。

そんなシンが、ぶつかっただけで逃げられるようなことをするだろうか？

……ありえないと言い切れなくはない。微妙なところではあるが。

けど、やっぱり考えにくい。シンはそんな、誰彼構わず怖がらせるようなことはしない。自分のことを理解しているからという、ちよつと悲しい理由ではあるけれど……それでも、みんなから慕われている。それはシンが真っ直ぐで、一生懸命だからだと思う。

だから、シンがそこまで怖がられる原因は思いつかない。

「……ところで、その逃げた生徒って誰なんだ？」

「ああ、確か四組の――」

「かんちゃんだよ」

「うおわっ、のほほんさん？」

いつも思うんだが、のほほんさんは動きが遅いのに接近に気づかないことがある。気配を消しているわけでもないのに……謎だ。

「かんちゃん？ ……って、誰？」

「かんちゃんだよ」

「だから誰だよ」

「ええと、更識 簪かんざしさん、だったかな。四組の専用機持ちで、日本の代表候補生だよ」

おお、さすがシヤル。重要人物のプロファイルは把握しているようだ。

「へえ……うん？ 更識？」

「そうだよ。かんちゃんはね、楯無お嬢様の妹さんなんだよ。妹キヤラなんだよ」

「キャラ言うな。それに、のほほんさんだつて虚先輩の妹じゃないか」「うん、私の萌えポイントのひとつだよ」

「萌えとか言うな」

「ちなみに、お姉ちゃんは楯無お嬢様のメイドさんで、私はかんちゃんのメイドさんなんだよ。二つ目の萌えポイントだよ」

「だから、萌えポイント言うな」

しかも自分で。

「楯無さんはロシアの代表で、妹の簪さんは日本の代表候補生、か……優秀な家系なんだなあ、さすが名家」

「あら、家柄でしたらわたくしも負けていませんわよ！」

「今はそういう話ではないぞ」

ジト目の箒によるツツコミが入る。ちよつと不機嫌そう。ううむ、コイツの前で姉妹云々言うのはあんまりよろしくないかもしれない。ん。

「……あれ？ けどその簪さんって、今まで会ったことないよな？」

専用機持ちなのに、イベントに顔出してないのか？

「実はだね、かんちゃんの専用機は、まだ完成してないのだよ」

「え？ 代表候補生なのに？ 入学してもう半年も経つのに……」

「ふっふっふ。おりむーにそんなこと言っちゃ資格があるのかな」

「？ どういうこと？」

……なーんか、のほほんさんの笑顔が怖いぞ。なんなんだ。

「かんちゃんの専用機はね、倉持技研が造ってるんだよ」

「……あ」

「突然、おりむーが入学することになって」

「ああ、なるほど。それで倉持技研に白羽の矢が立って、一夏の専用機を造ることになって……」

「スタッフを総動員して、白式を急ピッチで造ったわけですね」

「しかし一夏も白式も特異なケースだから、調整やデータの解析だけでも相当な人員と手間がかかってしまうだろう」

「……………」

結果として、簪さんの専用機開発が遅れている、というわけか……。  
「むしろ、ほっぽらかしにされちゃってるんだよね。かんちゃん  
かわいいそ、およろこ」

「そのわざとらしい嘘泣きはやめてくれ」

のほほんさんに露骨に責められて、チクリと心にトゲが刺さる。原  
因が俺にあるって言っても、俺のせいじゃないはずなのに……。:

「と、とにかく。シンにぶつかったのがその簪さんだつてのはわ  
かったけど、なんで逃げたんだ？」

「話題を変えましたわね」

「男らしくないな」

「一夏、もうちよつと自然にやったほうがいいよ」

「かんちゃん。およろこ」

「とつ、につ、かつ、くつ!!」

このままじゃ話が進まない。どいつもこいつもニヤニヤしやがっ  
て、確実に俺をいじって楽しんでいやがる。

確かに、簪さんの専用機が完成しないのは白式が原因なんだろうけ  
ど、それについて俺にどうしろつて言うんだ。俺がISを動かせると  
わかってから白式を与えられるまで、俺自身の意思なんてほぼ無視さ  
れていたつてのに。まあみんなそれがわかっているから、本気で俺を  
責めてはいないだろうけど。

「とにかく、その簪さんは、なんでシンから逃げたんだ？ まさかいき  
なり、シンがおどかしたつてわけでもないだろうし」

簪さんが何もなくても人とぶつかっただけで逃げ出すような人な  
ら、そもそも普通の生活を送ることさえ難しいだろうし。やっぱり、  
シンと簪さんがぶつかった時に何かあったとは考えにくい。

「うゝん……」

けどそうなると、余計にわからないんだよなあ。シャルも簪さんの  
ことを知っているだけで、知り合いつてわけじゃないみたいだし。

「……何があつたんだろう……」

「実はね。いのつちとかんちゃん、一回会ってるんだよね」  
「へ？」

「……以外だな。真改は、決して社交的な性格ではないのだが」

「僕が聞いた限りだと……失礼だけど、簪さんもあんまり、自分から話しかけたりするタイプじゃないかな」

「……そんなお二人が、クラスも違うのに、お知り合いなのですか？」  
「ん〜。知り合いつて言うほどの間柄でもないと思うんだけど〜  
……」

ちよつと困ったような顔をして、のほほんさんが頬を撫でる。……  
もしかしたら撫でたんじゃなくて、搔いたのかもしれない。袖が余つてて手が見えないので、どっちかわからん。

「えーつとね〜、いのつちとかんちゃんが会ったのって、臨海学校のすぐ後なんだよね〜」

「二」……ああ、なるほど」二」

そのたった一つの情報で、全員が納得してしまった。

確かに、あの時のシンは怖かった。当時はなんとかしなきゃと思うばかりでそう感じることはなかったが、今思い返すとかなり怖い。

あの状態のシンと会つて、第一印象として刻まれたとしたら――

――正直に言おう。俺も逃げたかもしれぬ。

「うーん……事情はわかったけど」

「あれは、見ているだけでも堪えるな」

――ズウウウウウウン――

シンに目を向けると、まだ落ち込んでいた。いつもなら視線を感じてか、顔だけでもこつちに向くの。今は机に右ひじをつき、手で頭を抱えている。

……どうすりゃいいんだ。

「あ、そろそろ予鈴が鳴るね」

「あら、本当ですわ。席に着きませんと」

「なんとかしてくれよ……アイツがあんな調子だと、なんかあの付近だけ暗くなったような気がするんだよ」

「白銀月夜でも発動しているんじゃないか？」

「怖いこと言うなっ!!」

しかしまさか席を離れたまま授業を受けるわけにはいかないの

——というより、その前のHRを生き延びられないので、大人しく席に着く。

その直後、ガラリと教室のドアが開く。千冬姉の登場である。

「全員揃っているな。HRを始めるぞ」

「……」

「……？　ど、どうしたんですか？」

教室を包む異様な雰囲気気づいて、山田先生が困惑する。千冬姉も訝しげな顔をして、その原因を探す。

——ズウウウウウン——

……千冬姉が来ても微動だにしない。その異常に、さすがの千冬姉も少しだけ驚いたような顔になる。

が、それも一瞬。キリツと表情を引き締め、つかつかとシンの前に歩いていく。

「HRも授業と同じように聞けと言った筈だが？」

ヒュボツ！

出席簿を振り下ろす音。おいなんだ今の、おかしいだろ。俺が全力で木刀振ったってあんな音は出ないぞ。

……ていうか、出席簿アタックの風切り音、初めて聞いた気がする。いつもその音が聞こえる前に、頭にヒットしていたのに……。

「……む」

「……」

なんでか、というと。シンが少しだけ首を傾けて、その一撃をかわしたからである。……死角からの一撃を、一体どうやって。千冬姉が目を見開いてらっしゃる。まさかかわされるとは思っていなかったらしい。

「……あ」

そこでシンが声を漏らし、顔を上げる。目の前に立つ千冬姉と顔のすぐ横にある出席簿に気づき、何があったかを察した。

……攻撃されたことにすら気づいてなかったのかよ。戦闘技能が細胞レベルで刻み込まれてんのかコイツは。

「……ふん、さすがだな」

「……すまん……」

「弛まぬ鍛錬に免じて、許してやる。だが次はないぞ」

振り返って、教壇へと戻って行く千冬姉。表情は嬉しいような悔しいような、ちよつと複雑そう。ううむ、この二人のコミュニケーションはわけがわからん。しかしとりあえず、そのやりとりでシンの意識が戻ってきた。きつちり背筋を伸ばして、連絡事項を聞いている。

うくん……どうするかな。今はともかく、またシンが簪さんと会ったときに、また逃げられたりしたら……また落ち込むかも。それは俺としても望ましくない、シンにはやつぱり元気でいてもらわないと。

……簪さんと、話してみようかな。

が、しかし。休み時間に四組を訪れようと思っていたが、色々忙しくて行けなかった。忘れてはいけませんが、俺はクラス代表なのだ。雑務を色々任されるのである。電子資料が進化したこの時代にも、紙媒体を愛用する先生はまだまだ存在するのだ。つまりプリントやらなんやらを運ぶのは俺の仕事。重くい紙の山を抱えて、広くい学園内を行ったり来たりは大変な重労働だった。それ自体は身体が鍛えられるからいいんだけど、よりによって今日、こんなに仕事が集中するとは……。

「ふう、それじゃ……」

けど放課後は、特に仕事を仰せつかっていない。一旦部屋に戻って教科書とかを置いてから、いつもの訓練に向かう前に簪さんを訪ねてみよう。

……ん？

「……俺、簪さんの部屋知らないじゃん」

迂闊だった、昼間は教室に行けば会えると思うけど……さすがにもう教室には居ないだろう。自室か、よく行く場所なんかがわかれば……楯無さんのほほんさんなら知ってるかな。

「ああ楯無さん、丁度いいところに。妹さんの部屋知ってますっ。」

「あ、あら？…なんで私が居るってわかったのかしら……」

というわけで。部屋のドアを開けて、俺のベッドに寝転がってた楯無さんに訊いてみた。

……やめてくれないかなあ。匂いが移ると困るんだよなあ、色々……。

「いやなんか、そんな気がして」

なんというかこう……タイミング良く来るんだよな、まるで計っているかのように。あとは本当になんとなく。

俺がそう言うと、ベッドでゴロゴロしていた楯無さんは起き上がった座り直し、口をへの字にした。

「うーん、残念ね……」夏くんのびっくりする顔見たかったのに。可愛いから」

「可愛いって……」

男が言われても嬉しくないんだってば、そういうの。知ってて言ってるんだらうけど。

「ところで一夏くん、なんで簪ちゃんの部屋を知りたいの？」

「ええ、それは……ん？俺が妹さんのこと知ってるの、驚かないんですね」

「あら、ちよつと鋭くなったわね。けどもう一步。今朝簪ちゃん、真改ちゃんとぶつかったでしょ？で、そのあと逃げちゃったでしょ？」

噂を聞いたのよ。私は耳が早いほうだけど、それでも当事者の前の席に座っている人には負けるわ」

「確かに……のほほんさんも居るしなあ、ウチのクラスには」

当事者の一人と親友で、もう一人とは幼なじみ。加えて噂好き。これで俺の耳に噂が入らないわけがない。

「それで、簪ちゃんの部屋を知ってどうするの？」

「いや、シンは怖いやつじゃないよ、って伝えようと思って」

「……そんな、子犬じゃないんだから。それに、考えてみて？学園唯一の男子で有名人の一夏くんが、いきなり部屋まで訪ねて来たらびびくりするでしょう？」

「あ、そうか……」



周りが女の子ばかりで俺の部屋まで押しかけて来るヤツも何人かいるもんだから、少し感覚が麻痺していたのかもしれない。言われてみれば、知り合いでもない男が突然部屋に来たらびっくりするだろう。

「会いに行ったらどっちにしても驚かれるでしょうけど、それでも部屋に行くのはやめた方がいいわ。休み時間に、教室に会いに行くのがいいわよ」

「はあ、なるほど」

「だめよ、一夏くん。そういう気遣いは忘れないようにしないと」

「はい……精進します」

「うん、素直でよろしい」

楯無さんはニツコリ笑って。

すぐに、真剣な顔になった。

「……それでね、一夏くん。私が部屋に来た理由なんだけど」

「……ああ」

忘れてた、そういえば聞いてなかった。ていうか楯無さん、しよつちゆう理由もなく突撃or潜入してくるから、今回もその類かと。

つまり、ぶっちゃけ気にしてなかった。

「今回は理由があるんですか」

「あ、一夏くん、わかってないな。私が一夏くんの部屋を訪ねる時は、毎回ちゃんと理由があるのよ？ 一夏くんが気づいてないだけで」

「あ、そうだったんですか」

「当たり前じゃない。生徒会長は暇じゃないんだから」

「じゃあこの前、朝は冷蔵庫に入ってたプリンが夜にはなくなってたんですけど、あれにはどんな理由があったんですか？」

「……な、なんのことかな？」

「部屋の鍵開けられるの、楯無さんとラウラだけです。ラウラは直前まで一緒に訓練してましたし」

「ピュ〜ピュ〜ピュ〜」

「……………」

オイコラ、こつち見ろや。

「……待ってただけけど、一夏くんが帰って来るの遅いから……小腹空いちやって」

「それで、食べたなら満足して、何もしないで帰っちゃったんですか？」  
「い、いいじゃない。生徒会室でおいしいお菓子、ご馳走してるでしょ？」

「はい、なので全然気にしてなかったんですが……今ふと思い出しまして」

「……ごめんなさい」

さつきも言ったけど全然気にしていないので、それについては謝ってもらわなくてもいいんだけど。ただこうしてしおらしくなってる楯無さんは新鮮で、見ていて面白い。けどいつまでも続けていると後が怖いので、そろそろ切り上げなければ。

「とにかく、本題の方をお願いします」

「あ、そ、そうね。うん、ゴホン。」

……あのね、一夏くん。今度全学年合同で、専用機持ちのタッグマッチを行うのよ」

「え？ そんなイベントありましたっけ？」

「ついさっき決定したのよ。ほら、この前のキャノンボール・ファストで襲撃があったでしょ？ その前から学園が襲撃されることもあったし、生徒たちが自衛できるようスキルアップさせるために大会を増やそうって、前々から案だけは出ってたのよ」

「それがなんで、今更になって」

「IS学園で大会を開くと、世界中から人が集まるでしょう？ 会場は学園自体だから問題ないし、ただ一般人のお客さんと呼ぶだけなら簡単なんだけど。世界中の政府や軍や研究機関の偉い人たちを呼ぶには、予定を合わせるだけでも大変なの。だから今まで、先送りされてただけ……」

うくむ……生徒のスキルアップ目的と言っても、やっぱりIS学園ほど注目されていると、それだけじゃダメなんだな。

ISで大会って、金かかるし。

「けど、あのキャノンボール・ファストは学園外でのこと。学園内は治外法権みたいなものだけど、外での出来事にそんなことは通らないわ。学園も事態を重く見て、案件を大急ぎで進めたの」

「そう言えば、ニユースでも大々的にやってましたよね。「専用機六機、一瞬で撃墜」とかなんとか。生徒には届いていなかっただけで、やっぱり世界中から文句みたいのが来てたんですか？」

「一般の人たちからすれば、負けたのはあくまで学生なわけだから、そんなに責めるつもりはないみたいだけど……代表候補生たちを預けている政府からすれば、やっぱりそうもいかないでしょうね。学園は一体どんな訓練をしているんだ、って」

「モンスターペアレンツみたいですね……」

理解もできるし納得もできるが、すぐくうんざりする話題だ。

ちなみにあの時のIS、サイレント・ゼフィルスは、いずれかの武装国家に所属するISで、その国を捜査中である——みたいなことを言っていた。確かに、間違ってもテロリストがISを持っているなんて言えない。テロリストがそんな戦力を持っているなんて知られたらパニックになりかねないし、強奪された国だってどれだけ責められるか。

……きつと、連中が色んな国から奪っているから、どこも黙っているんだろう。アナコンダの巨体とコブラの猛毒を合わせても足りないようなモンスターが潜んでる藪を、そうと知ってつつくバカは居ない。

「まあとにかく、そんなわけだね。それで、その大会なんだけど」

「はあ」

そこで楯無さんは、ベッドから立ち上がり。

「お願いします、織斑一夏くん。私の妹……簪ちゃんと、タッグを組んでください」

深々と頭を下げ、そう言った。

## 第79話 姉と妹とその他一名

「お願いします、織斑一夏くん。私の妹……簪ちゃんと、タツグを組んでください」

「……………」

……さて。

突然過ぎて、どう反応すればいいのかわからない。俺が成人で喫煙者だったら、タバコを吸って一拍置きたい気分だ。

「……ええと……楯無さん？」

「なに？ 一夏くん」

「あの……流れがまったく掴めないんですが」

一応、楯無さんの妹さん——更識簪さんのことは話題に上つてはいた。けどそれは、シンが落ち込んでいる理由……ぶつかって逃げた相手としてのことだ。

それがいきなり、タツグのパートナーにしてなんて言われたら……混乱というか、戸惑う。

「えっと、どういうことなんですか？」

「あ、うん、ごめんなさいね。私としたことが、焦っちゃって……ゴホン、んん。」

……あのね。簪ちゃん、専用機持ちなのに、専用機を持ってないんだけど……それは知ってる？」

「はい、知ってます。……白式の開発のせいで、簪さんの専用機が未完成だつて」

「そ、そう！ 一夏くんのせいなのよ、簪ちゃんの専用機が完成しないのはー！」

「……………」

人によつてはブチギレたつておかしくないレベルの発言だが、グツと我慢。あの楯無さんがここまで声を荒げるのは珍しい、それだけ妹さんが大事なのだろう。

「けど……専用機が完成してないのに、そのタツグマッチに出られるんですか？」

「も、もうすぐ完成するのよ！ 簪ちゃん、今一生懸命専用機を組み上げてるんだから！」

「へえ……へ？ 専用機を、組み上げてる？」

それって、できるの？ 専用機……に限らず、ISは最終調整だけでも、優秀な専門家が数十人集まってようやく、という難しさだって聞いているけど……。

「あのね……私の専用機、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女は……私が完成させたの」

「……な……」

待つて。ちよつと待つて。

完成させたって？ ISを？ 第三世代型の、超高性能機を？

「……マジですか」

「あ、でも、一から全部やったわけじゃないのよ。機体自体もう七割方できてたし、薫子ちゃんと虚ちゃんからアドバイスももらってたし」  
「それでも、普通じゃないですよ……」

「大変だったわよ、とても。けどどうにか完成させた。みんな喜んでくれたけど……簪ちゃんだけは、そうじゃなかったの」

「え……」

なんで？ 専用機を完成させるなんて、とんでもない偉業だ。それを妹である簪さんが、喜ばなかったって言うのか？

「もちろん、祝ってくれたわ。笑顔で、おめでどうって言うてくれた。……けど、内心は複雑だったみたい」

「……なんでですか」

「比べられてたのよ、私たち姉妹は。色々な分野で、事あるごとにね」  
「……」

「だから簪ちゃんにとって、私は……怖い存在なのかも。私が頑張れば頑張るほど、それ以上を、簪ちゃんは求められるから」

「……そう……だったんですか」

「べ、別にそうと決まったわけじゃないのよ？ 簪ちゃんに訊いたわけじゃないし……そうなんじゃないか、って思い始めたのも、最近だし」

そう言う楯無さんの笑顔は、いつものそれとはまるで違っていた。

取り繕おうとして上手くいかなかったような、悲しみを隠そうとして失敗したかのような。

……そんな、楯無さんには似合わない、笑顔だった。

「だから、私が専用機を完成させて……それで簪ちゃんは、自分でも専用機を完成させようとしてるんだと思うの」

「うくん……」

なるほど……複雑な事情があるんだなあ、楯無さんにも。

「けど、それがどうして、俺が簪さんとタッグを組むことになるんです？」

「うん……簪ちゃんもすごく頑張ってるんだけど、多分今のままじゃ、専用機を組み上げることは無理だと思うのよね。ていうか無理なのよ」

妹の努力をバツサリいきやがったよ、この人。

「簪ちゃんの専用機……「打鉄式式」っていうんだけど、一番大事なシステムが抜け落ちてるのよ」

「一番大事なシステム……第三世代型兵装のことですか」

「そう。四十八発ものミサイルを通常とは全く異なる軌道で誘導し、対象を包囲、粉碎する……マルチロックシステム。そして専用の武装、八連装・六基のミサイルポッド、「山嵐」。それが、打鉄式式の最大火力なんだけど……」

「未完成なんですか？」

「山嵐自体は出来てるのよ。ただ、プログラムが空っぽなの」

「その、マルチロックシステムの方が出来てないってことですか」

ミサイルのロックオンシステム、か……。

通常のみサイルは、何発撃つても基本的に同じ軌道を描く。最初にバラバラの方向に撃つことである程度は軌道を調節できるけど、距離を取られたら結局は同じだ。どれだけ数が多くても、一方向から飛んでくるのならまとめて撃ち落とせる。

それでも、撃った後は自動で敵を誘導するミサイルは強力な兵器だ。そのミサイルが四十八発同時に、別々の軌道で襲い掛かってきたら――

「……普通のFCSじゃ無理……ですよね。できなくはないかもしれないけど、ロックに時間が掛かりすぎて、現実的じゃない」

「うんうん、自分じゃ使わない武器のこともちろん勉強してるみたいね。偉いぞ一夏くん♡」

「あのですね……」

「とにかく、実戦で使えるレベルまでロックオンを早くするには、今までとは全く違うFCSが必要なの」

「全く違うFCS……セシリアの〔貴き者ノブル・オペリゲーションの務め〕みたいなの？」

「確かにあれはあれで、今までとは全く違うFCSだけど……それとも別の物よ。……そうね。ブルー・ティアーズピットを四十八基、自動で操作して特攻させてくれるシステム、って感じかな」

「あー……それはすごい高度そうですね」

楯無さんの説明で、そのシステムがどれだけハイスペックな物か、おぼろげながら理解できた。確かにそれを完成させようなんてのは、無謀と呼んでもいいだろう。

「それを、簪さんが造ってるんですか」

「そうよ」

「ちなみにそのシステム、簪さんに渡った段階でどれくらい出来てたんですか？」

「……ゼロぱーせんと」

「…………は？」

「だから。ま………まったく出来てなかったのよ」

「……いくらなんでも、無責任過ぎじゃあ……」

「あら、一夏くんがそれを言うの？」

「う……」

そうでした。白式のせいでした、打鉄式が完成しないのは。

「ハード面は、もうほとんど出来てるんだけどね。ソフトはFCS以外にも、スラスターの出力配分とか、姿勢制御とか……色々と空っぽなのよ」

「……えーと……それで、なんでタッグの話に？」

「簪ちゃん、多分このタッグマツチも、欠席するつもりだと思うの」

「あー、うん、そうかもしれないですね」

「けどこのままじゃ、いつまでたっても完成しない。独力じゃ無理なのよ。さつきも言ったけど、私だって虚ちゃんたちに手伝ってもらったんだし」

「けど簪さんは、あくまで自分ひとりでやろうとしてる」

「そうなの。けど簪ちゃんは、責任感が強い子だから……一夏くんがタッグを組んでくれれば、出場するために完成を急ぐと思うの。一人じゃ無理だ、って思えば……きつと、協力を求めてくれる。

……私にじゃなくても、ね」

「……………」

また、寂しそうな笑顔。そんな顔をされたら、断れない。

「……………わかりました、引き受けます」

「ほ、ホント!? ありがとう、一夏くん!」

「うわっ、ちょ、抱きつかないでくださいよ!」

「え? ああ、うん、ごめんなさいね」

慌てて言うと、あつさり引き下がった。

……おかしい。楯無さんなら、ここから怒涛のセクハララッシュに入るところなのに……。

よっほど妹さんが大事なんだなあ。

「ええっと。今のお話を聞いた感じだと、簪さんには楯無さんの名前は出さない方がいいですかね?」

「そ、そうね。でないと簪ちゃん、逃げちやうかもしれないから」

「それと、参考までに聞きたいんですけど」

「うん? なにかな?」

「簪さんって、どんな人なんですか?」

「……………」

何故黙る。

「と、とりあえず、これが写真ねっ」

「あ、はい」

ばっ! と突き出された携帯端末には、物憂げな少女の写真が表示されていた。



……これ、学園のIDに付いてる証明写真じゃあ……わかりやすい  
と言えば確かに一番かもしれないけどさ、他になかったのかよ……。

「んー……あ、結構似てるんですね」

「あ、あら、そう？」

……嬉しそうだなあ……。

とにかく、写真を良く見てみる。顔立ちは、言ったように楯無さん  
に似てる。髪の色も同じだけど、楯無さんより長めで、楯無さんが外  
はねなのに対して内はね。あと長方形のレンズの眼鏡をかけている。

「顔はわかりましたけど。それで、どんな人なんです？」

「ええつと……内気と言うか、人見知りと言うか、引つ込み思案と言う  
か……」

なんだか一生懸命に言葉を選んでらっしゃる。

「暗いの」

選んだ結果がそれか!!

「それで、あんまり友達もいないみたいで」

「なんか、ネガティブな情報ばつかですね……」

「そ、そんなことないわよ!？」

楯無さんは必死に否定するが、専用機が未完成とか、足りないプロ  
グラムがとんでもないクセモノだとか、姉にコンプレックスがあると  
か、ちよつと暗めの性格だとか、友達少ないとか……。

………一体どうやって、タッグに誘えばいいんだ？

「……まあ、頑張ってみます。上手くいくかは保障できませんが」

「うん。……無理はしなくていいからね、一夏くん」

翌日。朝のHRで、例のタッグマッチについての連絡があつた。な  
にやら背筋に寒気を感じたので、休み時間になったらスツツと教室  
から脱出。ここら辺の技術は、長い(数ヶ月)経験の果てに身に付け  
た物である。

(しっかし、どうするかなあ……)

ただ、簪さんにちよつと話を聞いてみよう、と思つてただけなのに。事態は大分複雑になった。

(簪さんも、なんだか気難しそうだし……)

そんな子をタッグのパートナーに誘うとか、俺の会話能力でどうにかできるのか？ まあ、やってみるしかないか。

(ええと、四組四組……)

大抵の学校でもそうだと思うが、IS学園は一組から四組まで、同じ階に順番に並んでいる。なので一組を出れば、隣の二組の前を通つて――

ガラリ。

(……ん?)

すぐ後ろでドアの開く音。振り向けば、鈴がツインテールを揺らしながら二組を出て、そのまま一組に入つて行くところだった。誰かに用だろうか。セシリアかな？ もしくはシンかも。負けず嫌いな鈴のことだから、優秀で仲も良い二人のどっちかとタッグを組むため、早速行動を開始したのかもしれない。

(……さて。四組四組)

というわけで、一年四組に到着。ガラリとドアを開けて、教室内を見渡す。

「えーつと……」

「うん？ ……へ!? お、織斑くん!」

「ほ、ホントだつ、織斑くんだ!」

「よ、四組にどんなご用件ですか!」

「……え、えーつと……」

何回体験しても慣れないなあ、この状況。この学園に来て結構経つのに……。

「あの、簪さんって居る?」

「え?」

「か、簪さんって……更識簪さん?」

「うん、そう。その簪さん」

「えーつと……」

ちよつと戸惑いながら、女の子は視線を向けた。教室の一番後ろの、窓際の席へ。

そこに少女が座っていた。写真で見たのと全く同じ表情で、空間投影ディスプレイを展開している。

「あ、あのっ」

「うん？」

「更識さんに……どんな用ですか？」

「ああ、ほら、今度専用機持ちでタッグマッチやるだろ？ そのパートナーに誘おうと思って」

「ええっ？」

「けど、更識さんって……」

「確か、専用機が……」

「教えてくれてありがとう。それじゃ」

なんか話題が嫌な方向に飛びそうな気がしたので、無理矢理切り上げて簪さんの方へ歩いて行った。どっちにしろこの休み時間は長くないので、急がないといけないし。

「……おお」

簪さんの席の前まで行くと、カカカカツという音が聞こえた。どうやら彼女が使っているのは、昔ながらのキーボードのようだが――

(はっや……)

タイプピングが滅茶苦茶速い。指が見えないくらい速い。しかもよく見ると、タイプミスが皆無だ。正確性までとんでもないらしい。

「……すごいな」

「……なにっ？」

「え？ ああ、ごめん」

思わず呟いた言葉を聞かれてしまった。視線だけこっちに向けながら、さつきまでと全く変わらない速さでタイプピングを続けている。

「ええと……更識簪さん、でいいんだよな？」

「そう……」

「そっか。よし。はじめまして、俺は織斑一夏だ」

「知ってる……」

うーん、なんだか壁を感じる。こう、他人を寄せ付けないと言うか……。

「それでな、更識さん。今度、専用機持ちでタッグマッチやるだろ？俺と組んでくれないか？」

「イヤ……」

取り付く島もねえなオイ。

けど、こうなることは予想済みである。ここはアレだ、押せ！

「頼むよ、更識さん。俺とタッグ組んでくれよ」

「イヤよ……そんなことする意味、ないもの……」

「ううむ……」

確かに、それは言えてる。楯無さんから聞いた打鉄式式の武装は、対象の周囲一帯を焼き尽くすような代物だ。近接戦闘しかできない俺とは、パートナーとして相性が悪い。味方の攻撃に巻き込まれて墜とか、笑い話にもならないしな。

「うーん……頼むよ」

「なんで……私？」

「へ？」

「あなたは……相手には、困らないはず……」

「……そうか？」

うーん……俺、というか白式と相性の良い相手……誰だ。白式は一撃必殺の攻撃力があるから、戦術に組み込みやすいように思うけど。敵味方問わず、エネルギーを全部消滅させちゃうのがネックなんだよなあ……。それに燃費が酷すぎて、戦闘可能時間が全然合わないし。

——キーンコーンカーンコーン——

「うお、ヤバイ」

予鈴が鳴った。急いで戻らないと、どんな目にあうかわからない。

「さよなら……」

「あ、うん。タッグの件、考えておいてくれよな！」

とりあえずそれだけ言って、慌てて四組を出る。ドアを閉める際にちらりと簪さんの様子を見てみたけど、俺への興味は既にごみ箱からも消去されているようだった。前途の多難さを感じながら一組に戻

る途中、更なる追い討ちが。

鈴と会ったのである。

「い、ち、かああああ……!」

「うおっ? な、なんだよ……?」

「ふん! 後でぶつとばす!」

「ええ……?」

何故だ。何故俺がこんな目にあわなければならぬんだ。

鈴はやるぞ、マジで。俺の事情なんぞお構いなしに。しかも鈴の言う「後で」とは、後日とか来週とか、そんな猶予のある話ではないのだ。つまり即日、さらに具体的に言えば放課後、どこるか昼休みという可能性すらある。

……勘弁してくれ。

さて、放課後の訓練で鈴と箒とセシリアとシャルとラウラにボッコボコのギツタンギツタンにされて、フラフラになりながらようやく自室の前まで戻ってきたわけだが。

(また鍵が開いてるよ……)

つまり、また楯無さんが来てるってことだ。

もはや隠す気ねえな、あの人……。

ガチャリ。

「はあい、一夏くん。おかえりなさい」

「……ただいま戻りました」

溜め息を吐きながら、見覚えのない高級そうな二人掛けソファに座って脚を組んでいる楯無さんを見る。

……様になってるなあ。

「それで、例の件はどう?」

「……………」

パンツ、と開かれた扇子には首領と書かれていた。ご丁寧にと振り仮名まで振っていやがる。

「だめでしたよ。取り付く島もありませんでした」

「うくん、やっぱり難しいかなあ」

というよりも、簪さんの言うことが正しいのだ。俺と簪さんが組むことにメリットはなく、しかしデメリットがある。どう考えても、組まない方がいい。

「……そうね。私から少し、手を回しましょう」

「え？」

「一夏くと簪ちゃんが組めるように、ちよーつとだけ、更識の力を使うわ」

「はあ……」

「なんだろう……更識の力？ コネとか？」

「そこそこ歴史のある家だから。国内なら家の影響力があるし、私自身も国家代表だしね」

「ああ、なるほど。なんかそんな話、マンガとかで見たことある気がします」

「サラリーマンJOE太郎」という、特徴的なポーズを決めるやたらと濃い顔のキャラクターたちが会社の発展に心血を注ぐマンガだ。表紙の絵を見てちよつと避けてたんだが、弾から勧められて読んでみたところハマってしまった。

「とにかく、うちは昔からこの国で色々やってきたから、ある程度なら言うことを聞いてくれる人がそこそこ居るのよ。さて、そこで問題です。一夏くと簪ちゃんには、ある共通点があります、それはなんでしょう？」

「……共通点？」

あれか、優秀すぎる姉がいるとか？

「……ブツブツ、時間切れです」

「あちゃー」

「……答える気なかったでしょう、一夏くん」

「え!? そ、そんなことありませんよ……?」

「答えは思いついたけど言えなかった、って顔してるわよ。……それじゃ、答えを教えてあげるけど。一夏くんの白式も、簪ちゃんの打鉄

式式も、どつちも倉持技研が造った機体だということよ」

「……それが？」

「んもー、鈍いわねえ、一夏くん。製作元である倉持技研なら、機体の使用者に注文ができる、ってこと」

「……………ん？」

「……ああ、そうか！ 倉持技研から、俺たちがタッグを組むよう要請すれば——」

「そういうこと。専用機持ちはあくまで機体を「借りてる」だけだから、会社の正当な要請は断れないわ。」

例えば、「打鉄式式と白式を同時運用した際のデータが欲しい」とか、ね」

「おお……………」

ううむ、結構納得のいく内容だ。そのデータは、実際に欲しがっていてもおかしくない——ていうか欲しがってるんじゃないだろうか。頼めば引き受けてくれるだろうし、何より不自然じゃない。

「いいんじゃないですかね。それくらいなら、楯無さんの仕業だとは思わないかも」

「おねーさん、もうちよつとマイルドな言い方のほうがいいけど。とにかく、これでいきましょ。すぐに倉持技研に連絡するわ、明日の朝には、簪ちゃんに依頼が行くと思うわ。一夏くんにも」

「それから改めて、簪さんを誘ってみますよ」

というわけで、翌朝。早速倉持技研から依頼の電子書類が送られてきたので、即返答。もちろん了承だ。

今頃、簪さんにも同じ依頼書が行ってるはずだ。多分、OKの返事を送ってるだろう。眉間に皺寄せたりしながら。

(なんか、悪いことしてる気がするなあ……………)

簪さんにももちろんそうだけど、楯無さんにも。いや、楯無さんから頼まれたんだから、彼女には申し訳なく感じる必要はないかもしれない

ないけど……俺が昨日、簪さんとタッグを組めていたら、楯無さんがこうして手を回すこともなかった。

なんとなく、だけど。楯無さんは、そういう「家の力」を使うことが、あまり好きではないような気がするのだ。

(……なら尚更、簪さんとタッグを組んで、打鉄式を完成させないとな)

楯無さんの助力を無駄にするわけにはいかない。簪さんとタッグを組んで、それで終わりではないのだ。タッグマッチの日程を考えると、時間的余裕はあまりない。完成した後も、調整やら練習やらもしなくちゃいけないし。

(そうだな……のほほんさんに手伝ってもらおうかな)

四組に向けて歩きながら、予定を色々考える。確かのはほんさんは簪さんの専属メイドだって言っていたし、断られることはないだろう。それにのほほんさんの協力なら、簪さんもそれほど抵抗なく受けてくれるんじゃないか？ 何より、のほほんさんのメカニックとしての優秀さはよく知ってる。放課後は整備課に行つて先輩方に整備テックを披露している、なんて話も聞いた。申し分ない。

(うん、後で頼みに行つてみよう)

最近シンの専属メカニックみたいになつてるのはほんさんだけでなく、多分大丈夫だ。朧月はすでに完成してる機体なわけだし、シンの戦術やクセなんかもわかつてるから、整備にそんなに時間はかからない。こつちを手伝ってもらう余裕はあるはず。お菓子スィーツでも奢つてあげればもう確実と言える。そのお金は生徒会の経費で払ってもらおうしよう。

(簪さんは……よし、居るな)

四組に到着し、教室の奥を見れば、昨日と全く同じ様子でキーボードを叩いている少女の姿が。

俺は懐から携帯端末を取り出し、例の電子書類を表示させながら、少女の前に立った。

「や。これ、簪さんにも来てる?」

「ええ……」



チラツと見るまでもなく、それがなんの書類かはわかっているのだろう。簪さんは昨日と同じようにたタイピングを全く減速しないまま返事をした。

「それじゃあさ。改めてお願いするけど」

思えば。

俺は今まで、楯無さんに大分助けられてきたけれど、まだなにも返していない。かなーり迷惑をかけられているが、それでチャラになるほど小さな恩でもない。

「簪さん。今度のタツグマッチで、俺のパートナーになってくれないか？」

それが今、ようやく、ひとつだけ返せるかもしれない。楯無さんと簪さん、二人の関係は、所詮部外者に過ぎない俺がどうこうできるところではないけれど。

もしかしたら、何かのきっかけくらいには――

「イヤよ……」

「……………」

……………なれないかもしれない。

## 第80話 「遊び」の基本

万策尽きた。まさかこの作戦が失敗するとは……しかもああも呆気なく。

どうしよう、これから。ていうかどうすんだ。放課後になって生徒会室に行ってみたが、楯無さん居ないし。ちくしょう、さては逃げやがったな。

(むむむ……)

こうなったら、なんとか別の切り口で攻めるしかない。しかしそれが思いつかないのだ、だからこうして困り果てているわけで。

……さて。本当にどうしよう。

内心で頭を抱えながら、廊下を歩いていると。

「いくちくくわく……」

「!?」

な、なんだ!?! 地獄の底から漏れ出たかのような声が聞こえたぞ!?!

しかも俺の名前を呼んでる!?!

「聞くいたわよお、一夏あく……」

「うひい!? り、鈴っ……!?!」

再び声が聞こえ振り返ると、そこに居たのは鈴だった。声の迫力にも劣らぬ悪鬼の如き形相で、ユラリユラリと近付いて来る。超怖え。

「な、なんだよ鈴……どうしたんだ?」

「アンタ、今度のタッグマッチのペアに、四組の子を誘ってるらしいわねえ……?」

「か、簪さんのことか? 確かにそうだけど……」

「かんざしい?」

鈴の眉が片方、ギョイン! と上がる。顔の右側を悪鬼の面、左側を般若の面にした鈴は、ケケケケケ、と不気味な笑い声を発しながら尚も接近して来た。

「ああ、そう……ああそうっ! あたしがわざわざ一組まで誘いに行つてあげたのに、それをほっぽつてどこの馬の骨ともわからない子を誘いに行つてたつてわけね!!」

「いや、馬の骨つて……簪さんは楯無さんの妹さんだぞ？」

「そんなことは関係ないのよっ!!」

クワツ!! と両目を見開いて一喝する鈴。その迫力に、思わずビクリと後ずさる。

「二夏さん」

「二夏さん」

「!?」

そんな俺のすぐ後ろから、またも声。しかも今度は三人分だ。

呼吸が乱れかけるほどの恐怖を感じながら、竦む足を叱咤して振り返る。

「よ………よう、箒、セシリア、シャル」

そこに居たのは、三者三様の表情を貼り付けた美少女たちだった。箒は情け容赦を捨て去った修羅の顔。

セシリアは前髪で隠れた目の下で、三日月のようにパツクリと口を開け。

シャルは表面だけ優しげな笑顔だが、目が全く笑っていない。

前門の虎後門の狼、左右は壁、上は天井下は床。

逃げ場はなかった。

(ど、どうする……!? なんかわかんないけど、このままでは命が危ない気がするっ……!)

前後からジリジリと間合いを詰めてくる四人に涙目になりながら、どうにか脱出できないか視線と思考を巡らせる。

正面突破は論外。天井や床をぶち抜くわけにはいかない。つまり逃げるとすれば、左右どちらかだ。

(右手は教室……二組か。鈴の庭だ、ネズミが蛇の餌箱に飛び込むようなもんだな)

残りは左、つまりは廊下の窓だけだ。幸い、換気のために窓は極力開けるように指示されている。最寄りの窓も全開だ。

問題は、下の階の同じ位置の窓も開けられているのか、ということだが――

「い・ち・かあゝ!!」

「どういう事なのか」

「しっかりと説明を」

「してよねっ!!」

「うひいっ!!?」

最早そんなことを考えている猶予はない、一刻も早く逃げねば。

というわけで、一か八か、窓から身を踊らせる。剣道で鍛えた握力で縁を掴み軌道修正、平仮名の「つ」を描くように降りて行く。

(しめたっ、開いてる!)

下の階の窓の縁に着地し、膝を曲げて衝撃を殺し床に降りる。殺し切れなかった衝撃は五点着地で分散して立ち上がった。

……まさか本当に成功するとは。心臓がまだバクバク言ってるし。高ぶったテンションそのままに、俺はガッツポーズを決めた。

「しめたのに開いてるとはこれいかにっ!」

「くっつっつだらないこと言ってるんじゃないわよ!!」

「なんだとオーツ!!」

お、追って来やがった! 確かに身軽な鈴ならできらるだろうけど――  
―って、上の階からものすっごい足音が凄まじい速度で移動している

!?! 階段から回り込むつもりか!

「待て、一夏あーっ!!」

「待てるかあ!!」

獣のような速さと獰猛さで襲いかかって来る鈴から逃れるため、簞たちの先回りを防ぐため、俺は全力疾走を開始した。

……良い子のみんなは、廊下を走ってはいけません。

「……………」

整備室の機材を借りて打鉄式式に繋ぎ、私は試作したプログラムのシミュレーションをしていた。プログラムの内容は、打鉄式式の主力武装、「山嵐」のマルチロックオンシステムの物。

シミュレーションの中では、放たれた四十八発のミサイルがバラバ

ラの軌道を描きながら飛んで行き、ターゲットを粉碎した。

「……………」

次に、移動するターゲットをロックオン、さつきと同じようにミサイルを放つ。

するとミサイルは、バラバラと言うよりも滅茶苦茶な軌道を描き出した。ほとんどのミサイルが明後日の方向へ飛んで行く。残りはミサイル同士空中で衝突し、爆発した。結局、命中弾はゼロ。

「……………やっぱり……………ダメ……………」

何度作り直しても似たような結果だった。動かないターゲットには問題なく当たるけれど、動かれると途端に当たらなくなってしまう。

軌道修正が、上手くできてないんだ。

(軌道を……………ある程度統一する……………？ けどそれだと、山嵐の強みがなくなっちゃう……………)

山嵐の強みは、ミサイルの数と変則的な軌道の両立。どれだけたくさんミサイルを撃つても、その全てが最短距離を飛ぶだけなら、簡単にかわされるし撃ち落とされる。どれほど複雑な軌道を描いても、一発だけならいくらでも対応できる。

大量のミサイルを、それぞれ別の軌道で飛ばす。ターゲットの移動に応じて、リアルタイムで軌道を修正しながら。

……………ISでも、データの処理が追いつかない。

(ロックオン時間は、これ以上伸ばせない……………今でも、実戦で通用するギリギリのところなのに……………。処理能力の配分を増やす……………？)

……………ダメ、まともには動けなくなっちゃう……………)

山嵐のミサイルだけでなく、ISは様々な面で膨大なデータを処理し続けている。それが満足に働かなければ、戦闘どころか基本的な機動すらできない。結局、現状のスペックで処理しきれよう、ミサイルの軌道修正プログラムを簡略化するしかない。それしか方法が思いつかなかつたのだ。だからここ数日は、休み時間なんかも使ってプログラムを作ってたんだけど……………いまいち進展がない。

(……………そういえば)

キーボードを叩きながら、ふと思い出す。今度のタッグマッチでペアを組もうと誘いに来た、織斑一夏のことを。

彼に責任はないとは言え、彼の専用機のせいで私の打鉄式が未完成のままなことには変わりない。むしろ彼に責任がないからこそ、この苛立ちのやり場に困ってしまう。だから、彼にはあまり会いたくなかったのに。

(なんで……わざわざ)

私のところに、来たんだろう。

二回目はわかる。倉持技研からの依頼文だ。とてもじゃないけど、打鉄式はまだ実戦に出られる状態じゃないから断るつもりだけだ……。

でも一回目は、まだ依頼文も来てなかった。専用機が未完成の専用機持ちなんて、ペアにするメリットはないはずなのに。そうでなくても、私は実戦経験がほとんどない。織斑くんと仲が良い他の専用機持ちたちに比べれば、明らかに見劣りする。

……なのに、なぜ？

(……まさか……)

カタツ。キーボードを叩く指がとまる。

……まさか、織斑くんの目的は――

(わ……私……?)

ぞわわっ、と、言い知れない恐怖を感じた。

織斑一夏。世界で唯一ISを動かせる男性で、この学園で唯一の男子生徒で、あの織斑千冬先生の弟で――大変、よくモテる。

彼に関する噂は後を絶たない。いつも大勢の女の子を引き連れている、とか。恥ずかしくなるようなセリフを平気で言い、女の子を口説いてる、とか。

――夜、しよつちゆう女の子を、それも毎回違う女の子を、部屋に連れ込んで、とか。

「……………」

ダラダラダラダラ。冷たい汗が、じつとりと背中流れる。

いやいやまさか、そんなことあるわけがない。だって私は別に可愛

いわけじゃないし、美人というわけでもない。スタイルだって、そんなに良いわけじゃない。美少女揃いの代表候補生たちに囲まれている織斑くんにとって、魅力は――

(ハッ!? ま、まさか、眼鏡……!?)

いつだったか、何かで見たことがある。男の子は、眼鏡を掛けた女の子に惹かれるという、眼鏡萌えの話を。

いやいやいや、有り得ない。だって私のは、眼鏡に見えるけど眼鏡じゃない。空中投影型と比べて値段が安く、持ち運びその他諸々でも便利な眼鏡型ディスプレイだ。私自身は視力は悪くない。むしろ結構良いほうだと思う。

だから私は、正確に言えば眼鏡っ娘では――いや、見た目はそんなに変わらないかも……

(ど、どうなんだろう……本当に眼が悪いとか、そういうのって重要なのかな? ……って、何考えてるんだろう私、まだ織斑くんがそうだと決まったわけじゃないし……こんなこと考えるなんて、失礼な――)

「やほほーい、かんちやくん」

「ひあああああああつ!!!」

び、びつくりした……! 変なこと考えてたせいで、人が来たことに全然気づかなかった。

「はあー、はあー、……ふう……あれ……?」

少し落ち着いてみると、今の声は――というより、私を「かんちやくん」なんて呼ぶ人は一人しかいない。

「本、音……?」

「そーだよ、かんちやくん」

突然声を掛けて来た、制服の袖をかなり余らせている少女、私の幼なじみで私専属のメイドで私の数少ない友達である布仏本音は、私が大きな声を出したことに驚いたのか、目をパチクリとしていた。

けれどそれも一瞬のことで、名前を呼ぶとすぐにいつも通りの調子に戻って、制服に隠れて見えない手をブンブンと振る。

「急に……話しかけないで……」

「ん〜。なんか考え事してるみたいだから、つい〜」  
「……………」

普通考え事してる人は、用がない限りそつとしておくものだと思う。どうやら本音も何かしらの用があるわけではないみたいだし、本当に、つい話しかけた、という感じだった。

……私が言うのもなんだけれど。本音の独特なペースは、疲れる。

「かんちゃん、まだ打鉄式式、できてない〜?」

「……………まだ、色々足りない。特にFCSが空っぽのまま」

「ん〜。何かお手伝いしましよ〜か?」

「いい……………いらない」

これは——打鉄式式の完成は、私が一人でやらなきゃ意味がないこと。本音の手を借りるわけにはいかない。

それに本音は、整備の腕前はすごいけれど、専門はどちらかと言うとハード——装甲や関節、あとスラストとかジェネレーターとか、そういう方面だ。プログラムやシステムといったソフト方面では、私の方ができる……………と思う。

「でも〜、ほらほら〜。三人寄らばMONJUの知恵とゆいますし〜」

「何その妙に引っ掛かる発音」

……あれ? 今、三人って言った?

「ああ〜、そーそー。今ね〜、朧月のメンテナンスしにね〜」

……待って。ちよつと待って。

朧月って、確か。

あの人の——

「いのつちと一緒に来てたんだ〜」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

フラフラとうろつく本音を探していたのか、その人は機材の影からひよっこり出てきて、バッチリ目が合ってしまった。



そして数秒の沈黙。よくわからない緊張感。

しばらくして、その人——IS学園ではとても有名な片腕の剣士、井上真改さんは。

スツと、右手を差し出して来た。

後になつて思えば、それは無口な井上さんなりの、挨拶だったのかもしれないけれど。

井上さんに対してもの凄く怖い印象しか持っていなかったこの時の私は、その僅かな動きにさえ過剰に反応した。

つまり——

「ひ、や、あああああつ……!!」

「……!?!」

「おおく?」

——一目散に、逃げたのだった。

(な、なんで!?! なんで井上さんが、私のところに……!?!)

恐怖で半ばパニックになりながら、整備室を飛び出した私は廊下を全力疾走していた。頭の中の僅かに残った冷静な部分では、あんなことで逃げ出すなんて失礼だとわかつてる。でも、忘れられないのだ。あの日見た、地獄の全てが凝縮されたかのような、禍々しい眼が。

(だ、ダメだ……こんなこととしてたら目立っちゃう。お、落ち着いて、とにかく一旦止まろう……)

けれどしばらく走って、さすがに気付いた。この歳になつて廊下でダッシュするような人は、周りから奇異の眼で見られてしまう。それはかなり恥ずかしい。なのでペースを落とし、乱れた心と呼吸を落ち着けつつ止まろうとして。

近くにいた人たちが、私だけを見ているのではないことに気付いてしまった。

(……え)

なんだか猛烈に嫌な予感がして、振り返る。

すると視線の先では、井上さんが、もの凄いスピードで――

(お、お、お……追って……来てるっ……!?)

その走りは、テレビで見るとようなスプリンターと比べても遜色ない。しかもどう見ても、私目掛けて真っ直ぐに走って来てる。

うん。すつごく怖い。

「ひ、はっ、ひいいいい……!」

自分でもどうやって出しているのかわからないような情けない声をあげながら、限界だと思っていたスピードをさらに上げた。

けどそれでも、井上さんのほうがずつと速い。このままじゃ、すぐに追い付かれる。

そして、廊下の曲がり角に差し掛かる頃には。

井上さんはもう、すぐ後ろまで来ていて――

「う、おおおお!!」

「へ? きやつ……!」

曲がり角の向こうから、誰かが飛び出して来た。相手から見れば、私の方こそ飛び出して来たのだろうけれど。

とにかく、今まで全力で走っていたのだから、車でなくても急には止まらない。私は反射的に目をつむり手を翳して、衝突に備えた。

「……あ、あれ……?」

けれど予想に反して、衝撃はやってこなかった。代わりに、驚きでか少し上擦った声が聞こえてくる。

「あ、あつぶねえ……危うく人を轢くところだった――て、あれ?」

次いでその声は、疑問に変わり。

「簪……さん? 何してるんだ、一体?」

そこでようやく、私は飛び出して来たのが織斑一夏くんだと気付いた。彼が無理な体勢で身体を捻りつつ、私との衝突を避けたことにも。

質問したいのはこちらの方だけれど、今はそんなことしている余裕はない。後ろから井上さんが――って、よく見たら織斑くんもなんか追われている!?

「一夏あああつ!!」

「ああもう元気だな、って、シン!？」

「え!？」

ああっ、追い付かれた! まあこんなことしてたら当然だけど!

「何してるんだ、お前まで」

「……用件……」

「ひっ……」

スツと視線を動かして、井上さんが私を見る。その眼をろくに見ることができなくて、以前見たのと全然違う眼だということに、私は気付けなかった。

「ま、待てよ、シン。気持ちはわかるけど、ほら、簪さん怖がつてるじゃないか。まずは落ち着け、な?」

「……………」

織斑くんが私と井上さんの間に割って入り、何か話し掛けている。どうやら井上さんを説得(?)してくれているらしい。

もしかしたら、助かるかもしれない——そう思った直後。

「はっ!? あれは、更識簪さん!？」

「ぬあんですってえ!？」

「まさか一夏さん、彼女と合流するために!？」

「許すまじっ!!」

「ひ、ひいいい!？」

なんだかもっと怖い人たちがいる! しかもなんでか、私が標的にされてるような!？」

「や、ヤバい……簪さん、とりあえずここは逃げよう!」

「え、え? きやつ!？」

突然、はっしと手を掴まれて、そのまま引っ張られる。それは結構な力で、そうしてまた、私は走りだした。

織斑くんに、手を引かれる形で。

「おのれ、更識簪いいいいっ!!」

「待てコラアアアツ!!」

「GO、チビ上さん!」

「応」

「お嬢様っぽい金髪縦ロールの女の子、オルコットさんが言うと、小さな……人形？ が飛んで来た。……よく見てみると、井上さんになり似ている。アレが噂の1/6井上君人形かな。」

「変身！ 戦闘モード！」  
「推参」

何か突然、井上さん人形が光り出し、投げ遣りな感じのBGMが流れ出した。光もBGMもすぐに収まり、井上さん人形は……朧月(?)を展開していた。そのスラストからターボライターみたいな光を噴出しながら、猛スピードで飛んで来る。

右手の小さな……月光？ から、爪楊枝サイズの針が飛び出して――

「ちくちくちくちくちく」

「あだ、あいたたた!!? ちょ、それやめろ！ つうかまた新機能か！」

「オーホホホ！ チビ上さんは日々進アップデート化してしましてよ！」

「あんの変態め、余計なことをっ!!」

なにやら怒っている様子の織斑くんが、私の手を引いているのとは反対の手をブンブンと振り回し、井上さん人形を追い払う。いや、追い払おうとしているんだけど、井上さん人形は華麗に回避していき、あまり効果がない。

そしてそうやって手間取っている間にも、殺気立った目をした四人は距離を詰めて来ていた。

(ひいつ……あ、あれ？ 井上さんは……)

そう、四人だ。いつの間にか、井上さんは追跡を止めていた。今はなんとも微妙な表情で、織斑くんとぶつかりかけた曲がり角に佇んでいる。

(でも……状況は全然、良くなってない……!)

追跡者が変わっただけ、むしろ数が増えてもつと大変になっただけだ。彼女たちもかなり足が速くて、逃げ切るのは難しそう。

そうでなくても、私はもう息が上がり始めていて、限界が近い。織斑くんを手を引かれていなければ、この場にへたり込んでしまっただけだ。

「待て、一夏あああつ!!」

「更識さん、ちよつとオハナシしよう! ね!？」

「いい加減、止まりなさいっての!!」

「す、少しペースを落としてくださらない? レデイがスカートで全力疾走だなんて、はしたな——」

「そう思うんだつたら追つて来んなよ!!」

私はこんなに疲れているのに、織斑くんも篠ノ之さんたちも、まだまだ大丈夫そうだ。あんなに大きな声を出しながら、走っているのに。

(な、なんであんなに元気なの……!?)

まるで子供だ。体力の限界も考えずに遊びまわって、疲れ果てて寝てしまう、小さな子供。そんなみんなの姿を見て、周りの人も呆れたように——

(あ……あれ……?)

——呆れたように、見ている。それは違いないけれど。

けれどそれは、なんというか。

上手く言葉に、できないけれど。

微笑ましい光景を、見ているかのような——

「「待てえええ!!」」

(……ああ、そうか)

なんとなく、わかった。

これは——この大騒ぎは、きつと、「いつものこと」なんだ。

いつもいつも、こんな風に騒がしく、賑やかにしているんだ、織斑くんたちは。

私は周りのことを全然見ようとしていなかったから、気付かなかつたけれど。

こんな、アニメみたいなドタバタは。

私のすぐそばに、あつたんだ——

「ぎ、さ、ま、らあ〜」

「「「ひいつ!?!」」」

な、なんか今、小さいのに良く聞こえる、例えようもないほど低い声が聞こえた!?

「貴様等は、毎度毎度……一体どれだけ、私の手を煩わせれば気が済むんだ? ん?」

「あわ、あわわわわ……」

突然みんながビクリと動きを止め、ガタガタと震え出す。この声が原因であることは明らかだった。

その、声の主は――

「お、お、……織斑、先生……?」  
そう。

この学園どころか、世界でも最強の存在。

織斑くんのお姉さん、織斑千冬先生だった。

「ほおう? 今日はまだ、新たな問題児を教育中か? 織斑あ」

「え!? あ、いや、簪さんは違うぞちふ……織斑先生! ただ巻き込まれただけと言うか――」

「巻き込まれた? 私には、一緒になって校内を駆けずり回っていたように見えたがな?」

「いやそれは、俺が引つ張ったからで――」

「その馬鹿共も、更識の名前を連呼していたように聞こえたがなあ?」

「う、あ……」

織斑くんは必死に弁明しようとするけれど、織斑先生の眼力に気圧されて、上手く話せないようだった。かく言う私も、生まれたての小鹿みたいにプルプルすることしかできない。

「さて。実はすぐそこに、教員室があるんだが」

「」「」「うひい!」「」「」

「あれだけ大声を出しながら走っていたんだ、喉が渴いただろう? どれ、茶でも淹れてやろう、この私が。」

……飲むだろうか?」

「」「」「……はい」「」「」

そうして、みんなで並んでトボトボと教員室に入って行った。

その後の織斑先生のお説教は、思い出すのも恐ろしいほどのものだったけど。

あの追いかけてこは、少しだけ。

ほんの少しだけ、楽しかった、かも——

「おつかれさま、いのっち」

「ごめんなさいね、真改ちゃん。こんなことさせて」

「……………」

簪の追跡を止めた曲がり角で佇む真改に、本音と楯無が笑顔で声を掛ける。それに対し、真改は無言のまま振り返る。

その眼には、僅かな困惑が浮かんでいた。

「実はね、本音ちゃんにお願いしてたのよ。真改ちゃんと簪ちゃんを会わせるように」

「……………」

「なんでそんなことをしたのかって言うよね。真改ちゃんと簪ちゃんに仲直りしてもらいたかったのもあるけれど……簪ちゃんに、一人で居るだけじゃわからない楽しさを知ってもらいたかったのよ」

「私は、いのちのこととかもかんちゃんのこと、ずくと見てきたからね。なんとなく、こうなるんじゃないかな、って」

「……………」

真改は呆れたように溜め息を吐いただけで、楯無たちの策略に断りもなく使われたことについて何も言わなかった。文句はあるが、言ったところで意味はあるまい。そう判断したからである。

「仲直りのほうは、上手いかなかったけど。おりむーたちがちゃんと、バタバタしてくれたみたいだし」

「ふっふっふ……そのための情報操作は完璧だったようね」

「うわー、おりむーもかんちゃんもかわいそ」

「……………」

本当に哀れだ。こんな姉と幼なじみがいては、心の休まる暇もなか

ろうに。

そう思つて、真改は微かに苦笑を浮かべる。

——ああ。それについては、己も人のことは言えんか。

「……これで簪ちゃんも、友達の良さをわかつてくれるといいんだけど」

「うくん、それはわかりませんが。でも——」

そこで本音は、相変わらずのにへらとした笑顔を廊下の先へ向けた。

その方向には、教員室があり。

その中ではきつと、彼女の友人たちがうなだれながら、千冬の説教を聞いていることだろう。

「おりむーたちが、みんな楽しい人だってことは——わかつたんじゃないですかね」

「……ふふ、そうね」

「……………」

本音の言葉に、楯無は笑顔で、真改は無表情で。

それぞれ、同意した。



## 第81話 一步

織斑先生のお説教から解放された時には、もう外が暗くなっていった。整備室に置いてきてしまった打鉄式式を回収しに行き、そのまま少しプログラムとシミュレーションを続けたけれど——あまり、はかどらなかつた。

「……無理、なのかな……やっぱり」

もう何日も、同じところで止まっている。思い付く限りのことを試してみても、結局全部ダメだった。

私が打鉄式式を預けられてから、半年。未完成だからと配備が遅れていたところを、むしろ好都合だなんて思つて、我が儘を言つて預かつてから、もう半年。

いい加減結果を出さないと、最悪——

「……イヤだな……」

このままでは、打鉄式式を取り上げられてしまうかもしれない。そろそろ白式に回されていた人員にも余裕が出てくるはず、その時になつてまだ打鉄式式が完成していなかつたら……それどころか、ほとんど進展がなかつたら。

どうなるかなんて、明らかだ。

「……イヤ、だなあ……」

それは、イヤだ。絶対にイヤだ。なんとかしないと、どうにかしないと、打鉄式式がなくなつてしまう。

完成したら、また預けてくれるかもしれないけれど……それじゃあ、イヤなんだ。

……ああ、でも。

なんで、イヤなんだつけ——？

「よ、簪さん。おつかれ」

「ひゃあああああつ!!」

本日何度目かの絶叫。そろそろ喉が痛い。

……じゃなくつて。今、この学園じゃめつたに聞くことのない、男の人の声が聞こえたような。

「び、びっくりした……あ、いや、俺が驚かせたのか。ごめん」

「お……織斑、くん……？」

やっぱりというか、そこに居たのは織斑くんだった。私のリアクションが予想以上だったのか、織斑くんも驚いた顔をしている。

「な……何か、用？」

素っ頓狂な悲鳴をあげてしまったことが恥ずかしくて、平静を取り繕って訊く。すると織斑くんは、に、と小さな笑みを浮かべて手に持っていた物——自動販売機で買ったのだろう、ジュースのペットボトルを見せた。

「差し入れ。零時の紅茶と汁量過多・葡萄、どっちがいい？」

「……………」

微妙なラインナップだった。

正直どっちもあまりいらないけど、もう買ってしまったのに断るのも悪い気がする。

……どちらかと言うと、フルーツジュースのほうがいいかな。

「……じゃあ、グレープで」

「はいよ。……ふう。こんな時間までやってるのか、すごいな」

「……………」

手渡されたペットボトルを受け取ると、織斑くんはもう片方のペットボトルを開けて、一口飲んだ。そして蓋をしながら、もう私と織斑くん以外誰も居なくなった整備室を見渡して、言う。

いつの間にか、こんなに遅くなってたなんて。

「……何か用？」

「ん？ ああ……うん。なんとか、ペア組んでくれないかな、って」

「……………しい……」

「う……………」

ぼそりと言うと、自覚はあるのか織斑くんの笑顔が若干強張った。それを見ながら、もらったペットボトルの蓋を開けて、紫色の特濃果汁を一口飲む。

「……………」

あ、甘い……けど、飲めないほどじゃない。二口目はしばらくいら

ないけど。

「……それが、打鉄式式？」

「……ええ」

「打鉄と結構形が違うんだな」

「打鉄は、防御力重視のマルチロール機だけど……打鉄式式は、機動力重視。コンセプトは、どちらかと言うとラファールに近い……」

「へえ……」

無数のコードに繋がった打鉄式式を見上げて、織斑くんが訊ねてきた。それに対して、簡単などころだけ答える。外装はほぼ完成しているけど、中身は空っぽだ。簡単などころしか答えられない、とも言えた。

「確かに装甲はちよつと薄めだな」

「山嵐が重いから……これ以上厚くできない……」

「あ、なるほど。……ふうん。その山嵐って、どんなのなんだ？ いや、多連装ミサイルポッドっていうのは聞いてるんだけど」

「……なんで、そんなこと訊くの？」

「そりゃ見たいからさ。未完成かもしれないけど、簪さんの専用機には変わりないだろ？ どんな機体か興味あるんだ」

「……」

なんでこうも、人の懐にズケズケと踏み込めるんだろう……でもこの学園で一人だけの男子だし、それくらい凶太くないとやってられないのかも……。

なんて思いはしたけど、それでも織斑くんの言葉は嬉しかった。

そう。未完成だし、いつまで持つていられるのかもわからないけれど。

今この時は、打鉄式式は、私の専用機なんだ。

「……これが、最近続けてるシミュレーション……」

「おっ」

カタカタとキーボードを叩き、プログラムを起こす。整備室に備え付けのディスプレイに見るからにバーチャルな空間が映し出され、そこに打鉄式式と、テクスチャだけのハリボテのISが浮かんでいる。

シミュレーション用のターゲットだ。

いつものように、試作したプログラムを入力してシミュレーションを開始する。まずはその場で滞空しているだけのターゲットをロツクオン、山嵐を発射。四十八発のミサイルは全て命中し、絶え間ない爆発によりターゲットを破壊した。

「おお。なんだ、ちゃんと出来てるじゃないか」

「問題は、ここから……」

その破壊力に驚きながら、織斑くんが頭に疑問符を浮かべる。その間にも、シミュレーションは次のフェイズに。再び現れたターゲットが、上下左右前後にランダムな移動をする。

それをロツクオン。今度こそ、という願いと、どうせまた、という諦めがない交ぜになった気持ちで、発射する。

そして、やつぱり――

「……ああ……なるほど。動かれると、当たらないんだ」

「……………そう」

落胆しながら、シミュレーションを見直す。ミサイルはあちこちに飛んで行って、命中することはなかった。数が多いから一、二発はターゲットの近くを通ったけど、そんなのはただの偶然、下手な鉄砲もなんとやらだ。それじゃあ意味がない。

……結局、このプログラムもダメだったんだ――

「……………どうすれば……当たるんだろう」

自分で思っていたより、落ち込んでたみたいだ。思わず漏れた呟きには、いつも以上に力が入っていなかった。

……どうしよう。プログラムの見直しをしなくちゃいけないんだけど、何度も繰り返し返したのにまるで進展がないんじゃない、どうすれば良くなるのか見当もつかない。思い付く限りのパターンはとづくに全部試していて、今は手探りの状態だ。先が見えないどころか、今自分が歩いている足下に道があるのかすらわからなくて。続ければ続けるほど、気が滅入ってしまう。

……今日は、もうやめよう。部屋に戻って、この前録画したアニメを見て休もう。

——と、思ったのだけど。

「あのさ。当てなくてもいいんじゃないか？」

その言葉を聞いて。

それまで頭の中に渦巻いていた色んな考えが、全部吹き飛んでしまった。

「……………え？」

「いや、だからさ。当たらないなら、無理に当てようとしなくてもいいんじゃないか？」

一体何を言っているんだろう、この人は。当てなくていい？ 当たらない攻撃なんかどんな意味があるの？

そんなことは、全然思わなかった。そんなことを考える余裕なんてなかった。

続きを聞かなくちゃいけない——それしか、頭になかった。

「どういう……………こと？」

「簪さんはイヤってほどわかってると思うけど、動いてる相手に攻撃を当てるのってすごく難しいんだ。射撃でもそうだし、格闘でも同じ。だから動いてる相手に無理に当てるより、まず動きを止めてから……………そうでなくても動きを鈍らせたり、誘導したりしてから当てるほうが確実なんだ」

「……………」

「山嵐は威力もそうだけど、見た目も相当派手だろ？ あれだけの爆発なら十分目くらましになるし、物理的にも精神的にも牽制できる。山嵐が強力だからこそ、相手は意識的にも無意識的にも警戒するし、効果が高い。」

だから無理に当てようとするんじゃないくて、山嵐で動きを止めて、そこを追撃する、っていう形もいいんじゃないかと思っただけ……………」

「……………」

織斑くんの言葉は、何回も試合をしている彼にとっては当たり前の発想なのかもしれない。けれど私にとっては、まるで天啓のようだった。

当てなくていい。

牽制に使い、追撃する。

山嵐を、布石にする――

「……っ！」

突然の風が、深い霧を吹き払うように。今までまったく見えなかった道が、私の前に現れた気がした。

私はキーボードに飛び付いて、プログラムを試作する。多分今までで最速だろう速さでキーを叩き、流れていく文字列に抜けや誤りがないかを確認する。何を打つべきなのか、考えるより先に思い付き、思い付くより先に指が動く。

そうして、しばらくして。

「……出来た……！」

「え？」

「新しい、プログラム……」

「プログラムって……山嵐の？ ……マジかよ、十分も経ってないぞ……」

織斑くんが小声で何か言っているけど、全然気にならない。それよりも、早くこのプログラムを試したい。

シミュレーションを起動し、バーチャル世界の打鉄式式にプログラムを打ち込む。いつも通り、まずは動かないターゲットを出現させ、試射。

ミサイルがターゲットに向かって行き――当たることなく、爆発した。

「あ、あれ？ 動いてないのに当たらないぞ？ それになんか、当たってないのに爆発したミサイルもあるような……」

「軌道変更の判断基準を、三次元座標から二次元方向にしたから……正確には飛ばない。……でも、その分情報がかなり軽くなったから……動かれても、対応できるはず」

「大体この辺、って感じに飛ばすわけか。……それで、途中で爆発したのは……」

「このプログラムだと、直撃は難しいけど……近くまでなら、安定して

飛んでくれる……だから、信管を近接起爆式にした……これなら当たらなくても、爆風の効果範囲には捉えられる……」

次第に黒煙が晴れ、ターゲットの姿が見えてくる。破壊には至らなかったけど、表示されているダメージ値はそこそこ大きい。十分だ。

「……………」

「……………」

さあ、ここからだ。いつもの手順通り、次はターゲットを動かしての試射。これがダメなら、さっきの天啓はただの気のせいということだ。

上手くいく。きつと上手くいく。いくらそう言い聞かせても、不安は拭いきれない。

もし、これでもダメなら——と、思ってしまう。

(……今まで何度も、失敗してきたのに……)

なんで今回だけ、こんなに怖いんだろう？

そう、不思議に思っ

(……そっか。今回は、私一人じゃないから……)

今回は、織斑くんと一緒に作ったプログラムだ。そんなことを言えば織斑くんは否定するだろうけど、私にとって、あの一言はアドバイスなんて言葉じゃ表せないくらい有意義だった。

だから、それを無駄にしてしまうかもしれないと思うと、怖いんだ。

(……でも)

でも、大丈夫。

もしダメでも、また考えればいい。また作ればいい。何度でも試せばいい。

だから。

だから、まずは。

そのための、最初の一步を——

「……発射っ！」

タン！ と、最後のキーを叩く指に、思わず力が入る。

それと同時に、四十八発のミサイルが、一斉に放たれた。

ミサイルが、ターゲット目掛けて飛んでいく。さつきまでは明後日の方向にばかり向いていたミサイルが、だ。

簪さんは、どうやら本当に、あの短時間でプログラムを作り上げたらしい。

(とんでもねえな、おい……)

このプログラミングの速さは異常なんじゃないか？ いや、どう考えても異常だ。もしこの速さを常に発揮できるとしたら、それは凄まじい武器になるだろう。

敵の妨害を受けたり予想外のアクシデントにあったり、何らかの対策を取られたりしても。戦闘中に、戦いながら修正できるとしたら。

……もしそんなことが、実際に可能だとしたら。打鉄式は、文字通りの万能機だ。

(……いや。それよりも今は……)

このシミュレーションの結果を見届けよう。

ミサイルは、それぞれが違う軌道を取りながら飛翔する。正面から螺旋を描きながら飛ぶもの、回り込むように大きく弧を描くもの。

どれもが、ターゲットに近付いて行く。

(……おい、これって……)

ついターゲットを自分に置き換えて、どうかわすかを考えてしまおう。

結論は——かわし切れない。

ギリギリまで引きつけて、紙一重でかわす、というのはできない。近接起爆式の信管だ、引きつけた時点で爆発する。全方位に散らばる爆風と破片をかわすことは不可能だ。

かと言って大きく避ければ、移動先に別のミサイルが回り込んでくる。それも一つや二つじゃなく、数十ものミサイルが。

いずれにしても、致命的なダメージにはならないだろう。だが決して、無視できるほど小さくもない。

そしてなにより。どうするべきかという迷いや、視界を埋め尽くす



爆風が。

動きを、止めさせる――

「いつ……けえええ!!」

「!」

簪さんが、彼女のイメージからは程遠い大声を挙げる。その直後、起爆範囲に入ったミサイルが次々に爆発していく。

直撃したミサイルは一つもない。だが全方位から浴びせられる衝撃に、ターゲットは大きく体勢を崩した。

完全に、動きを止めるほどに。

「や……やった……!」

「ああ、十分だ。これなら――三回ぶった斬っても、釣りが来る」

そう、感想を漏らした瞬間。

画面内に、純白の機体が躍り出た。

「これなら、三回ぶった斬っても釣りが来る」

織斑くんがそう言った時、今まで存在していなかったモノが突然現れた。

純白の装甲に、白く輝く剣を振り上げたそれは――見間違えようもなく、織斑くんの専用機、白式だ。

「えっ……!?!」

「ちよ、なんだこれ!?!」

織斑くんも驚いてる。ならこれは、織斑くんがやったことじゃない。でもどう見ても、この機体は織斑くんの専用機、白式に間違いはない。

どういふことなのかと混乱しているうちに、白式(?)がターゲットを両断する。

「あ……」

「おお……」

一体何がどうなっているのか、それはわからないけれど。

今の一連の流れは、もしかして。  
理想的な、連携だったんじゃないか——？

「……え」

「……って、ちょっと待て。なんだ今の!？」

「てひひひ。バレちまいやしたか」

「!？」

なんだか間の抜けた笑い声が聞こえた。誰……と思うこともなく、  
そんな笑い方には覚えがある。

……本音だ。

「の、のほほんさん？」

「……のほほん？ ……ああ……のほとけほんね布仏本音だから……」

「のほほんさんって呼び始めた時は、その名前知らなかったんだけど  
な」

「……………」

これは、あれかな。名は体を表す、てやつかな。

「……それで。今のはなんだ？」

「んーとね。なんだか楽しそうだったので、ちよちよちよといと  
白式のデータを割り込ませたのだよ」

「白式のデータって……うおっ!? いつのまにかコードが!？」

見ると織斑くんの右手に着けられた待機状態の白式に、コードが繋がれている。反対側はシミュレーターに繋がっていて、これでデータを送ったみたいだった。

……全然気付かなかった……それだけ夢中になってたのかな。

「……邪魔、しないで……」

「ええ〜？ けっこういい感じだったと思うけど」

「突然割り込まれたら……正確なデータが取れない……」

「それなら大丈夫、私がちゃーんと取つといたからね。さーさー、  
私も手伝っちゃいますよ、簪お嬢様」

「その呼び方やめて……」

かんちゃんもイヤだけど。普通に簪って呼んでくれればいいのに。  
「……いつものことだけど、ISのこういうデータって、何書いてある

のか全然わからないな」

「ま、そこら辺は慣れだよ。それで、かんちゃん、どんな感じ？」

「……軌道とか、起爆のタイミングとか……もつと効果的にできると思う……それに、僚機の邪魔にならないようにしないと……」

「……僚機？」

「……………あ」

しまった。今のシミュレーションで、白式が飛び込むタイミングが完璧だったから……つい協同運用することを考えてしまった。織斑くんに迷惑はかけられ――

「……………あ」

そう言えば。すっかり忘れていたけれど、今度のタッグマッチ、織斑くんに誘われていたんだった。

ああけどそんな、ちよつと実戦で試してみたいとかそんな理由でタッグを組むなんて失礼だ。あれでもそう言えば、倉持技研からの依頼もあるし別に問題ないんじゃない――

「なあ、簪さん」

「は、はひー」

ど、どうしよう、なんか変な声出た！

「自分でも、このタイミングで言うのはズルいと思うんだけど……今度のタッグマッチ、俺と組んでくれないか？」

「う……………」

……本当にズルい。私自身、今はシミュレーションの結果に気分が高揚しているから、実戦で試したいと思ってる。

けど冷静に考えれば、打鉄式は、とてもじゃないけどまだ実戦ができるような状態じゃない。だってまだ山嵐のプログラムをどうするか、つていうのが固まっただけで、完成したわけじゃない。それどころか、そのプログラム以外のソフトなんてほとんど空っぽだ。シミュレーションだから上手くいっただけで、実際にやればそもそも射撃姿勢すらまともに取れないと思う。

そんな状態で、タッグマッチのペアを受けるなんて無責任だ。

そう、わかっているのに。

「……シミュレーションだけじゃ、なくて……」

でも、試したい。打鉄式式がちゃんと戦えることを、確かめたい。私がちやんと、打鉄式式の専用機持ちだつて、胸を張つて――

「実際にやらないと、わからないこともあるし……試してみたい、から……」

だから。

だから、ちやんと言わないと。

こんな風にごによごによと、言い訳みたいに言うんじゃないで。ハツキリと、言わないと。

「……織斑、くん」

なけなしの勇気を振り絞つて、顔を上げて。待つてくれた織斑くんと、目を合わせる。

「私、と……ペア、を、組んで……くれ、ますか……？」

……ああ、もう。なんでこう、ハキハキと言えないんだろう。……きつと私が普段から、あまり人と話さないからなんだろう。

けど私の、そんな下手くそな言葉にも。

織斑くんは、とても真面目な顔で、応えてくれた。

「ああ。……こちらこそよろしく、簪さん」

「あう……」

こうして正面から向かい合うことに慣れていなくて、恥ずかしくなってしまう。けどなんだか、こつちから目を逸らすのも失礼といふかなんというかそんな気が――

「うむうむ、青春ですな」

「わあっ!」

び、びっくりした! そう言えば本音居た!

「ほらほら、そうと決まったら、さっきのもつかいやってみようよ」

「へ? さっきのって?」

「んも。白式がカッコ良く、じゃじゃ〜んて出たでしよ。あれは私が出たけど、今度はおりむーが動かして、びしい、とキメる

んだよ」

そんなことを言つて、本音は織斑くんにバイザーを被せた。シミュレーション用の装置の一つで、これを使えばシミュレーション内でも、現実と同じようにISを動かせる。

「それじゃあ、いつてみよ〜！」

「おおおつ？ な、なんか妙な感覚だなコレ」

「ほら、かんちやくん。おりむーは準備おつけーだよ〜」

「え……あ、うん……」

展開が急すぎて付いていけてなかったけど、取りあえず何をすればいいかはわかった。

もう一度、山嵐を撃つ。今度は織斑くんの白式が初めから居るから、さつきよりも多くのデータが取れると思う。それにさつきの連携は、本音がデータだけ入れてやったこと……シミュレーションでしかできない。だから今度は、織斑くん本人に動かしてもらつて、実際にはどうやって連携を取るのかを調べないと。

そんなことより、他にもつとやらなくちやいけないことはいっぱいある。そもそもまともに動けるかも怪しいのに、連携について考えるなんて順番がめちやくちやだ。

そう、わかつてはいるけど。

でも今は、なんだか楽しくて。

もうちよつとだけ、続けようかな――

やれやれ。本音の帰りが遅いから、探してみれば――こんな時間まで、精の出ることだ。

整備室に置いてある多様な機械、その中の一つの影から、ああでもないこうでもないと楽しそうに議論を交わす三人を眺める。

「まったく、生徒の使用時間はとうに過ぎていくというのに。これでは整備室が閉められん」

「……………」

呆れ顔で近付いて来た千冬さんが、肩をすくめながら言う。偶然なのかどうかはわからんが、どうやら今日の戸締まりは千冬さんの番らしい。

「……ふん。お前の顔を見て泣きながら逃げ出したと聞いたから、どんな小動物かと思えば……存外、普通だな」

「……………」

「くくく、この話題はあまり良い気分はしないか？ 私はお前が落ち込んでいた理由を聞いて、笑いを堪えるのに必死だったくらいなんだが」

「……………」

「……まったく。自分がかかわれることは嫌いなクセに、他人をからかうのは大好きなのだ、この人は。他の生徒や先生たちの前では控えているようだが、こうして二人になると、ここぞとばかりに攻めて来る。」

困ったものだ、本当に。

「……随分盛り上がっているな。この分ではまだ掛かる、か」

「……………」

「また後で来る。ほどほどにしておけよ」

「……消灯までには帰らせる……」

「お前にも言っているんだ、真改。あんな馬鹿どものことを気にかけていては、身が持たんぞ」

楽しげに笑いながら、千冬さんが去って行く。その背中を見送って、また一夏たちに目を向けた。

「……さて。簪も、思っていたほど気が弱いわけではないようだ。いずれまた、機を見て話をしてみるか。」

その時は、もう逃げられることのないように。

予め、退路を塞いでおこう――

## 第82話 友達

打鉄式式のソフト関連の開発が大きく進んだ翌日。の、放課後。

私は、とある部屋の前に来ていた。

(ここ、だよね……本音と同じ部屋のはずだし……)

その部屋は、本音と井上さんの部屋だ。本音の部屋は寮生活を始めた直後に本音から聞いているし、ルームメイトが井上さんであることも当然聞いている。けど改めてこうして部屋まで来てみると、あの本音とあの井上さんが同じ部屋で普通に生活できていることが不思議でしよがなくて、いまいち信じられない。

だって二人とも、なんというか、个性的すぎる。しかもほぼ真逆の方向に。

(でも……仲はすごく良さそうなんだよね……)

本音はしょっちゅう、井上さんの話をしている。井上さんが大好きなことは誰が見ても明白だ。

ただ、話に聞いていた井上さんと実際に会った時の印象が違い過ぎたので、二人の部屋が普段一体どんなことになっているのか、まったく想像がつかなくなってしまった。

(……とにかく)

不安も心配もあるけれど、こうしてぼーっと立っただけでもなんにもならない。それにきっかけこそ人に言われてだけど、実際に私が今ここに居るのは、他でもない私の意思だ。

ここで逃げ帰るわけにはいかない。意を決して、私は目の前のドアをノックするべく、右手を持ち上げた。

なぜ簪が、真改の部屋を訪ねたのか。きっかけは昨日にさかのぼる。

山嵐のシミュレーションに熱が入り過ぎた一夏たちは、千冬が案じていた通り、いつまで経ってもシミュレーションをやめようとはしな

かった。その様子を眺めながら、真改は機材の影で溜め息を吐く。

繰り返すたびに新たな修正箇所を見つけ、そこを直せばみるみるうちに改善されていく——そんなシミュレーションが楽しくない筈がない。それは真改にも分かる。分かるのだが。

(……消灯……)

もうそろそろ消灯時間なのだ。

消灯時間までには帰らせると言った以上、それが果たされなければ真改も千冬のありがたいお説教を授かることになる。それはなんとしても避けたかった。真改は自分が一夏たちの友人であることを誇りにしているが、一夏たちと同レベルの問題児と見なされるのは嫌なのである。

なので、真改は一夏たちに時間を報せることにした。影から出て、それまで隠れていた機材を二度、軽く固めた拳で叩く。ゴンゴン、と中身が空洞になっていく金属特有の音が鳴り響き、一夏たちは驚いて音の発信源、真改を見た。

「し、シン?」

「……時間……」

真改は無表情に一夏たちを見ながら、人差し指を立て肩越しに後ろを指差した。その先にある掛け時計は、消灯三十分前を示している。

「うお、やべえ!? 飯も風呂もまだなの!」

「え? あ、そうだ、私も……!」

「てひひく。うっかりさんですなく、お二人ともく」

「……お前も……」

袖に隠れた手で一夏と簪を指差し笑っていた本音だったが、真改に首根っこを掴まれ、そのまま連れ去られて行った。本音もまた、食事も入浴もしていないのだった。

それ自体を気にする真改ではない。なにせ山奥だろうが樹海だろうが沼地だろうが平然と生き残るほどのサバイバル能力を有しているのだ、少々の汚れや空腹など屁でもないし、一日程度では命や健康にはほとんど影響はないことを身をもって知っている。しかしこの整った環境の下では、しっかりとその恩恵にあやかるときだと考えて



いた。その為に金と工夫と労力が注ぎ込まれているのだ、堪能しなければ失礼である。

何より、明日の朝、腹が減っただけの体がベタつくのだとブルー文句を垂れる本音に付き合うことになるのが目に見えている。そうなる凄まじく面倒くさいので、何としても避けたい真改であった。

「かんちやくくん。おくとくすくけく」

「えっ？ えっと、あの……」

「ああ、平気平気。あの二人は、いつもあんな感じだから」

「おりむー。このはくじよーものめく。祝つてやるく、末代まで祝つてくれるぞく」

「……はあ……」

なんともくだらないことを言う本音を、溜め息を吐きつつずるずると引きずりながら、真改は整備室を出て行った。その顔は簪からは影になっていて、どんな表情をしているのかは見えない。

たとえ見えたとしても、その変化はあまりに小さくて、親しい者たち以外には分からなかっただろう。

「……はああ……」

真改が居なくなった途端、簪が大きく息を吐く。まるで今までそこに居たのが、凶暴な猛獣であったかのような反応だ。

簪にとつては、まさしくその通りだったと言えるが。

「こ……怖、かった……」

緊張から解放された簪は、ヘナヘナと崩れ落ちそうなほどに弛緩した。それを慌てて支えた一夏は、苦笑しつつ言う。

「あはは……ごめんな、簪さん。シンはあんま喋らないし、表情もほとんど変わらないから……何考えてるのか、わかりづらいんだよな」

「あ……」

一夏が真改をフォロースするが、簪はそれどころではない。なにせ今、簪は一夏に抱き止められているのだから。

必要に迫られたとは言え親しくもない女性に触れるのは抵抗があったのか、両手で両肩を掴むという最小限の接触に留め。さらには近付き過ぎないように、体を離し腕力だけで簪を支えている。

反射で動いたにしては紳士的な対応と言えたが、それでも簪からしてみれば、今までの人生でそれほど接する機会のなかった男に、それも強靱に鍛え上げられた肉体を持つ男に身体に触れられているという状況は、その明晰な頭脳を盛大に混乱させるに十分過ぎた。

(は、はわわわわわわわわ……!!)

何か言おうとするが、パクパクと口が動くだけで声が出ない。簪にとってはその方がまだ良かっただろう。今声を出せば、発せられるのは混乱した思考から紡がれる意味不明な音の羅列だ。恥ずかしい思いをしなくて済んだと言える。

まあ今でもある意味十分に恥ずかしいが。

「は……………な、して……………」

「大丈夫か？ 立てる？」

「平気……………だから……………」

「ん、わかった。じゃ、離すぞ？」

しっかりと断りを入れて、簪の足に力が入ったのを確認してから離す。その手慣れた様子に、簪は色々複雑な思いだった。

(なんか、私だけこんなに慌てて……………馬鹿みたい……………やっぱり、織斑くん……………慣れてるんだ、こういうの……………)

そんなことを考えていたが。

(うつわーやつべーびびつたー！ 簪さんいきなり倒れそうになるんだもん本気で焦ったわ！ ていうか俺ヘンなところ触ってないよね大丈夫だよ？ いや肩だつてあんなガツチリ掴んだらダメに決まってるんだろセクハラだよ！ っつかし肩細いし柔らかいな大丈夫なのかそれでつておいバカんなこと考えるな落ち着け冷静になるんだ織斑一夏っ!!)

全然そんなことはなかった。

普段から女子に囲まれ特にラウラからは過剰なスキンシップを求められる一夏も、まだ知り合って間もない少女にあんなことをするのは恥ずかしいらしい。

「とにかく、出ようぜ。このままじゃ本当に消灯時間になっちゃう」「うん……………」

なんとか平静を取り戻し——てはいないが、とりあえず行動出来る程度には回復した二人は、並んで整備室を出て寮に向かう。その途中、お互い会話する余裕などないので無言のまま進んでいたが、ふと一夏が声をあげる。

「あのさ、簪さん」

「な、なにっ?」

「シンのことなんだけど……誤解しないでほしいんだ」

「え……?」

なんだか困ったような、声。なんだろう、と思う間にも、一夏は話し続ける。

「悪いやつじゃないんだ。確かに怖いところはあるけど……本当は優しいし、友達思いだし、何より一生懸命でさ。話してみれば、簪さんにもわかると思う」

アイツはあんまり喋らないけどな、と続ける一夏は、呆れを含んだ、とても穏やかな顔をしていた。そんな顔を見れば、誰だって分かる。

(井上さんは……織斑くんにとつて、すごく大切な存在なんだ……)

余人には計り知れないほど、強い絆。信頼や友情とは少し違う、当たり前のように傍に居るとい——家族のような、安心感。

(……いいな……)

一夏と真改の二人とは逆に、簪は本当の姉である楯無とも距離を取っている。嫌いなわけではない。だが、苦手なのだ。心のどこかで、どうしてか壁を作ってしまったている。

(なんで……だろう……)

優秀な姉と、いつも比べられてきた。

そんなことは全然気にしていなかったのに、姉が何かを成し遂げるたび、恐怖に震えるようになったのはいつからだろう?

どれだけ頑張っても、追いつけなかった。

失敗を繰り返す自分を見る周囲の目が、蔑みと嘲りに満ちているのではないかと思うようになったのはいつからだろう?

何をしても、認めて貰えなかった。

躓いた時に差し伸べられる姉の手が、お前には出来ないと言われて

いるように感じてしまうのは、どうしてだろう——？

(そんな……こと……)

それらは全て言い訳だ。だって簪には自信がない。

もし自分たちが「更識」でなければ。もし姉が「楯無」にならなければ。

ちゃんと、「お姉ちゃん」と、呼べたのだろうか。

「……………」

だからこそ、簪には一夏たちが羨ましかった。他人同士の筈なのに、まるで姉弟のような二人が。

(……うん)

だから、一夏の言葉を信じる事が出来た。そこまで言うのなら、きつと自分の思っていた人物像こそが間違いなのだ。

ならば、謝らなければならない。自分は真改に対し、とても失礼な振る舞いをしてしまったから。

「……………て、みる……………」

「ん？」

「明日……井上さん、と……話してみる……………」

「……そっか。うん、仲良くしてやってくれよ」

「……うん……………」

それでもまだ、少し怖い。

一夏から勇気を貰った気がした簪は、頑張ってみよう、と静かに決意を固めていた。

(大丈夫大丈夫大丈夫……………)

手を持ち上げたまま、深呼吸。無意識に逃げようとしているのか、足が震える。最後にゴクリと唾を飲み込んで、我ながらぎこちない動作でドアを叩く。

コンコン。

「……………」

……………コンコン。

「……………う？」

留守、かな？ いやけどそんなはずはない、ちゃんと部屋に戻って行ったことを織斑くんに確認してから来たんだから、居るはずだ。

不思議に思いながら、私にしては大胆にもドアノブを回してみた。……やっぱり、開いてる。

なんだろう、寝てしまっているのかな？ 井上さんは毎朝早くに起きて、トレーニングとかをしてるそうだし……いや、それにしたってまだ早すぎる。

「あの……………」

そんなことを考えながら、部屋の中に一歩入り、見渡した。

……………もし、部屋に入るのが。

あと少し早ければ、私が。

あと少し遅ければ、井上さんが。

きつと、先に気付いただろう。こうなる前に、気付けただろう。

こんなことには、ならなかっただろう――

カチャリ。

「え？」

突然聞こえた音に振り向くと、そっちにはバスルームがあった。その入口が開いた音だろう。

そして、そこから出て来たのは。

「……………」

「……………」

「……………」

長い黒髪を、わしゃわしゃと乱暴に拭いている。

全裸の、井上さんだった。

突然かつ予想を超越した出来事により、簪はその思考を完全に停止した。真改も、今日はたまたま脱衣所に着替えを持ち込むのを忘れて

しまい、裸のまま出ることになってしまったのに、そんな時に限って何故か部屋に居る簪に驚いた。

簪があと少しでも、部屋に入るのが早ければ。明かりの点いたバスルームに真改が居ると気付いただろう。一旦部屋を出るなり、なんらかの対応をしただろう。

簪があと少しでも、部屋に入るのが遅ければ。誰かが部屋に入ろうとしていることに、真改が気付いただろう。流石に一声掛けただろう。

だが、そうはならなかった。タオルで頭を拭くという行為は、周囲に大きな音が漏れることはないが、している本人は周囲の音が聞こえなくなる。その僅かな間、絶妙に最悪なタイミングで簪が入室したことを、一体誰が責められようか。

ともかく、双方にとつて予想外な事態であることは明白だ。

が、それも文字通り一瞬。瞬き一つしただけで気を取り直し、簪の方へと歩いて行く。対する簪は、動けない。逃げることはおろか、声を出すことも、目を逸らすことも出来ない。蛇に睨まれた蛙のように、ただ呆然と、横を素通りしていく真改を見つめ――

カチャリ。

(なんで鍵かけたのー!!?)

その音で簪は思考を取り戻したが、それは未だに混乱の極みにあつた。

真改としては、これ以上人が入って来ることがないように鍵をかけたのだが、簪からすれば部屋に閉じ込められたに等しい。

とは言え、そういった意図が皆無だった訳でもない。ただの内鍵なので簡単に開けられるが、その一挙動のロスは致命的だ。逃げ出そうとしても容易く制圧出来る。

「……………」

今度はガタガタ震えだした簪を不思議に思いながら、真改はきびすを返しタンスに向かう。増援と退路は真っ先に断った、次は防備を固めねば。タンスの中から適当に下着を選び、身に着ける。次いで手早くサラシを巻くと、シャツとジャージの上下を着た。

その間、ガタガタ震える以外全く動かなかった簪に向き直って。

「……何用……？」

ようやく、疑問の解決に取りかかった。

「……………」

(……………ええつと……………)

井上さんは部屋の隅に立てかけてあった折り畳み式のテーブルと椅子を持ってきて、私を座らせた。簡素だけど造りがしっかりしていて木目も美しい、なかなか良い品だ。

次に各部屋備え付けのキッチンへ行つて、お茶を淹れて戻ってきた。香り高くて味わい深い、こちらも良いお茶だった。

つまり、私はすっかり「お客様」としてもてなされているらしい。

「……………」

(ど、どうしよう……！)

けど対面に座る井上さんは、全くの無表情。目つきが鋭いのでかなり怖い。私のことじーつ、と見てるし。

「あ、あのっ」

「……………」

「……………え、えつと……………」

「……………」

「……………」

「……………」

何か言わなくちゃいけないのだけど、何を言えばいいのかわからない。何かを言おうとして失敗し黙り込むのを、何度か繰り返していた。その間井上さんは、ずっと黙って待ち続けている。

……話をしようと思つて来たけれど。文字通りの意味で、話にならなかった。

「……………先日は……………」

「！」

「……何故、逃げた……？」

「あ、あれはっ、その……」

いきなり訊かれるなんて……しかも井上さんから。

けれどこれは、今回の訪問で最も重要な話だ。ある意味この話こそが目的とも言える。避けては通れない。

「あの、臨海学校の、すぐあとくらいに……井上さん、寮の裏で、その、練習してたでしょう……？」

「……」

「い、井上さんは……覚えてないかも、しれないけど……あの時……私  
が、声をかけて……振り向いた井上さんが……その……」

「……」

うう……やっぱり怖い。でもあとちよつとだ、言ってしまうべきつ  
と楽になるっ。

「す……すごく、怖い顔をしていたから……私の中で、井上さんは……  
怖い人っていうイメージに、なっちゃって……」

「……」

「そ、それで、突然井上さんとぶつかって……その怖いイメージが出て  
きちゃって……逃げ、ました」

「……」

「(づ)……(づ)めんなさい」

「……」

椅子から立って、深々と頭を下げる。これで許して貰えるかはわか  
らないけど、とにかく、言わなきゃいけないことは言った。

あとは、井上さんがどうするか、になっちゃうんだけど……。

「……」

ずっと黙りっ放しで、怖い。

「……(こ)ちら(こ)そ……」

「……え？」

「……済まなかった……」

「……あ」

意外な言葉に驚いて顔を上げると、もつと驚いた。井上さんも立ち



上がり、頭を下げているのだ。

「え？ え？」

「……驚かせた……」

「あ、そ、そんな……」

井上さんが謝ることなんてない。だってあの時井上さんは、大変だったんだから。私が勝手に怖がって、勝手なイメージを重ねて、逃げ回っていただけなのに。井上さんには、私を責める資格があるのに。

「なんで……謝るの……？ 悪いのは……私、なのに……」

「……」

答えてはくれなかったけれど、井上さんの表情が少しだけ変わる。なんとなくだけど、失敗を恥じるような顔……のように感じた。

あの時の状態は、井上さんにとっても反省すべきものだったのかな。

「……とにかく。井上さんが……謝ることはなくて……」

「……なら……」

謝りに来たのに謝り返されてしまつて困っていると、井上さんは表情を柔らかくした。

……少しだけだけど。

「……相子……」

「あ……」

……ようやくわかった。井上さんは、今までのことをなしにしよう、と言っているんだ。お互いに貸し借りや負い目をなしにして、これから始めよう、と言っているんだ。

私と、井上さんの関係を。

「……よろしく……」

友達と呼ぶには、まだぎこちないかもしれない。でも、こうしてちゃんと目を見て話せることが嬉しかった。私が自分で閉じこもっていただけで、ほんの少し勇気を出せば、こうしてコミュニケーションを取れることがわかつて嬉しかった。

人と話すのはやっぱり苦手だし、怖いけど。アニメを見ているのと

は違う、今、自分が、こうしてここにいると実感できて、嬉しかった。差し出された手に、今度こそ逃げずに手を伸ばせたことが、嬉しかった。

「う、うんっ……こちらこそー！」

ようやく握ることができた井上さんの手は固かったけれど、ひんやりと冷たくて、少しだけ気持ちよかった。

「……………」

翌日。放課後になると、早速訓練のためアリーナへと向かった。昨日はアリーナの予約が取れなかったので、せっかくだからと鍛練も早めに切り上げ、身体を休めさせることにしたのだ。

そのおかげで簪との関係を仕切り直せたとも言えるので僥倖と言えるが、やはりしつかり休んだ後は存分に身体を動かしたくなる。今日の訓練は一段と気合いの入ったものになるだろう——そう、思っていたのだが。

「はああああああっ!!」

「でやああああああっ!!」

「せえええええいっ!!」

「……………」

己よりもよっぽど気合いの入ってる連中が居た。気合いが入ってるどころか最早殺気立つてると言った方が正しいくらいだ。

「お前が、お前たちがっ、邪魔をするから!!」

「はあ!? 何言ってるのよそっちがでしょーがっ!!」

「どちらでも構いませんわ、二人まとめてウエルダンにして差し上げます!!」

「……………」

奴らに交ざって訓練するのは大変危険なうえ見苦しいので出来れば避けたいが、己が朧月を展開し飛び始めればすぐに気付かれるだろう。かと言ってアリーナ自体を変えることは、今からでは無理だ。

……速やかに撃墜し、叩き出すのが最善か。

「シン、落ち着いて。顔がちよつと怖くなってるよ」

「……………」

隣に立つシャルにたしなめられ、大人気なく高ぶっていた怒りを鎮める。最近は特に喧しいせいか、沸点が低くなってきているようだ。自重せねば。

「……………ふん……………」

さて。冷静さを取り戻したところで、この状況を整理するとしようか。

一昨日タッグを組んだ一夏と簪であるが、この情報は瞬く間に学園中を駆け巡った。一夏のパートナーが誰になるかは誰もが注目していたので、当然と言えば当然だが。

そしてさらに当然なことに、この情報に激怒する者たちがいた。それが今日の前で乱闘を繰り広げている三人娘である。彼女らは休み時間にも一夏に奇襲・急襲・強襲をかけたが、それぞれが千冬さんに現場を目撃され捕縛、拷問の末解放された。昨日は己はISの訓練をしていないので、アリーナでの様子がどれほど悲惨だったかは分からないが、しかし装甲にまだ傷が残っていると相だなモノだったらしい。目を覆いたくなるような惨状だったに違いない。

が、それでも怒りは発散しきれなかった——どころか一夏が簪の打鉄式式の調整に楽しそうに付き合っている姿に更に怒りを漲らせ、今に至っている。

「……………」

こうして、第何次かも分からない一夏争奪戦の敗者たちは仲間同士仲良く殴り合っているわけだが、意外なことにその中にシャルは含まれてはいなかった。一昨日の様子では、一夏がタッグに簪を選んだことに対してかなり不満があった筈なのに。

もつとも、己は既に、その答を本人から聞いているのだが。

「……………ラウラは……………？」

「……………うん。まだ元氣ないみたい。あのラウラが悩むくらいなんだから、二、三日で解決できるとは思ってなかったけど……………」

「……………」

そう、彼女はルームメイトであるラウラを心配しているのだ。別に  
箒たちが心配していないというわけでは断じてないが、しかし同じ部  
屋で生活し、他の者よりも長くラウラに接しているシャルにとって、  
ラウラの傍に居ることは一夏のペアよりも優先されることのようなだ。  
つまり、昨日の時点でシャルはパートナーをラウラに決めていたの  
である。まだ本人を誘ってはいないようだが、しかしラウラも断るま  
い。

近距離での幅と厚みのある火力、得意距離を維持する機動力を併せ  
持つシャル。どの距離でも標準以上の攻撃力を持ち、隙のない性能と  
技術を誇るラウラ。この二人は、間違いなく強敵だ。

「…………えへ。ラウラのこと、心配してくれてありがとね、シン」

「……………」

嬉しそうにはにかむシャルの言葉に、訂正を加える。

己には——そしてシャルにも分かる。アリーナを縦横無尽に飛び  
回る少女たちが、戦いに集中しきれていないということは。攻撃には  
粗が目立ち、防御に精彩を欠くのは、怒り狂っているからだけではな  
い、と。

「…………うん。…………ふふつ。なんかいいよね、こういうの」

「…………？」

「今もそうだし、みんなしよつちゆうケンカするけれど…………みんな仲  
間で、友達なんだな、って」

「……………」

心から嬉しそうに笑って、シャルは飛び立った。そして三つ巴の乱  
戦に横槍を入れ、自分もその中に交ざって行く。

「……………」

喧嘩するが、仲間友達、か。

それは順番が違う。信頼し合う仲間で、心を許せる友達だからこ  
そ。この程度で関係が崩れたりほししないと信じられ、想いや我が儘を  
存分にぶつけ合えるからこそ。

こうして何度も、喧嘩が出来るのだ。喧嘩をしながら、笑い合える

のだ。

(……やれやれ……)

さて。それでは己も、先ほど頭を痛めさせられたことだし。

喧嘩を、しに行くとしようか——

## 第83話 願望

「ええっと……それじゃあ、もう一回やってみようか」

「うん……」

アリーナの一つで、俺と簪さんはそれぞれの専用機を展開し訓練をしていた。と言っても、模擬戦やら射撃訓練やらではなく、飛行訓練……それも技術を高めるためのものではない。

本当に、ただ飛ぶだけ。それはISで飛ぶということに心と感覚を慣れさせるような、俺たち一年生ですらとつくに授業で終えている訓練だ。

「……大丈夫か？」

「……多分……ううん、今度こそ……」

「よし、その意気だ」

簪さんの名誉のために言っておくと、簪さんがそんな初歩すらできないというわけではない。むしろ基本は俺よりもよほどしっかり出て来ていて、地味ながらも安定した技術を持っている。

が。それは大前提として、扱うのが通常のISなら、だ。

「……本当に空っぽだったんだなあ……」

「…………うん」

以前楯無さんから聞いたし、簪さんも言っていたけど。打鉄式式には、ISコア以外にプログラムのなものは何も入っていないかった。駆動系、武装、スラスタ、etc. 一つ一つは完成しているが、それらを一機のISとして動かすための制御能力が、打鉄式式には備わっていないのだ。

「……普段自分がやってることが、どれだけ機械に助けられてたかが良くわかるぜ……」

「…………」

例えば。人間が立って歩くことができるのは、脳が全身の筋肉を無意識の内に連動させて、バランスを取っているからだ。これはあまりにも当たり前過ぎて、普段は誰も意識しない。

だが考えて見て欲しい。人型のロボットを操作するでしょう。操

作方法は至って簡単、自分の身体を動かすのと同じだ。自分の身体と違うのは一つだけ、一体のロボットを、複数の人間で動かすということ。

両手両足と頭と胴、全部で六人。それぞれがそれぞれ別の部位パーツを操作して、自転車をこぐとする。

断言しよう。絶対にこげない。少なくとも、何度か練習した程度ではこげるようにならない。それこそ、六人が一人の人間であるかのようなチームワークが発揮できるようになるまでは。

そしてプログラムによる統制のないISは、まさにこの六人で動かすロボットの状態だ。普通はそういったプログラムもデフォルトで入っているものらしいが、打鉄式式は山嵐のマルチロックシステムがメモリを馬鹿食いするため、他のプログラムを一旦全部取り払ったそうなの。が、結局マルチロックシステムは完成せず、完成しないうちから他のプログラムを戻すわけもなく。そのタイミングで、簪さんに打鉄式式が渡った、というわけだ。

もはやどこから突っ込めばよいのかわからぬ。

「それじゃあ……あの……」

「ん？」

そんなわけで、今簪さんは、まともに飛ぶためのプログラムを作っているところだ。といっても、そう簡単にどうにかなるわけじゃない。スラスターの出力やその配分、姿勢制御、PIC、ハイパーセンサー……ただ飛ぶだけでも、とんでもない量の演算が必要になる。打鉄とラファールのプログラムをベースに試作してみたものの、やはり違う機体のもものではそう上手くいかないらしい。直すべき箇所は無数にあるようだ。

「また、飛ぶから……その……」

「オツケー、任せとけて。失敗しても、ちゃんと受けとめるから」  
「……………うん」

こうしてテスト飛行を見ているだけで、打鉄式式の飛行能力が安定していないのがわかる。ちよつとしたことで体勢を崩してしまうし、それを立て直そうとスラスターを噴かせばさらに大きく体勢を崩し

て加速してしまうこともある。ISの保護機能があるとはいえ、変な姿勢で壁やら地面やらに激突すれば関節が外れかねない。下手すりゃ骨折だ。それを防ぐため、俺が簪さんの前を飛び、危なくなったら受け止めていたのだが。

(いくらIS展開してても、これはヤバイ……)

俺は後ろを向きながら簪さんの前を飛ぶ。簪さんは前を向きながら俺の後に続く。

そんな状態で、バランスを崩した簪さんを咄嗟に受け止めればどうなるか。

(ああくそ、単に事故るよりよっぽど心臓に悪いぞ！)

誓って言うが、俺に下心はない。ないが、しかし哀しきかな、男という生き物は一度意識してしまうと無視できないものなのだ。

ただ簪さんが飛び込んでくるだけだったなら、あるいはなんともなかったかもしれない。だが控えめながらも柔らかな二つの膨らみが押し付けられたり危うくマウスチューマウスしそうになったりすれば、完全に無視するなど不可能だ。顔と声は平静を装えてると思うが、内心はもういっぱいだった。

(落ち着け、織斑一夏。落ち着くん。これは訓練、訓練だ。とても大事で、必要不可欠で、しかし事故の危険がある訓練なんだ。集中だ、集中しろ。心頭滅却煩惱退散色即是空空即是色……)

頭の中で色々唱えつつ、飛行開始。俺の白式は機動力も高いので、後ろ向きでも全速力で飛ばせば、打鉄式式の前に出られる。もちろん、打鉄式式が全速力を出してはいないからだが。

『まず、上昇』

『上昇、了解！』

飛び始めると肉声は聞こえなくなるので、プライベート・チャンネルに切り替える。簪さんの指示を復唱し、進行方向に回り込むように一足早く上昇する。その直後、簪さんも機首を上げて——お？　なんか今回スムーズだぞ、いい感じじゃないか？

『設定高度到達。右旋回三十度』

『右旋回三十、了解！』



続いて身体を傾けて風を受け、右へと旋回していく。うん、間違いなくスムーズになってる。さっきまでもやるたびに少しずつ改善されてたけど、今回のプログラムは機体と上手く噛み合ってるみたいだ。

『いい調子だな!』

『……まだ、わからない……次、左旋回百二十度』

『左旋回百二十、了解!』

なんだか事務報告的な時だけ妙にハキハキと喋る簪さんに苦笑しながら、大きく左に旋回する。ここまで大きな角度だと、ただ身体を傾けただけでは曲がりきれない。飛行機のロールと同じように、倒した身体を軌道をなぞるように反らせて飛ぶのだ。当然難易度は高く、今のところまだ成功していない。

けど、今度は――

『……っ!』

『いよしっ! 完璧だ、簪さん!』

滑らかな弧を描きながら、打鉄式式が飛ぶ。その姿に、危うさは微塵も感じられない。百二十度の旋回を終え停止すると、続いて来た簪さんの手を取った。

「や、やった……! やったよ織斑くん!」

「ああ、今のは良かったな!」

勢いそのままにくると回りながら、成功に喜ぶ。

今のは飛行における基礎の基礎で、戦闘機動となるとまた違ってくるが、それでも間違いなく、簪さんは前進している。打鉄式式は少しずつ、実戦に耐えられる機体へと成長している。その過程を間近で見ってきた俺としても、この成功は自分のことのように嬉しい。こんな形で、俺が誰かの役に立てると思っていなかったしな。

「ようし、それじゃこのまま、戦闘機動にも挑戦して――」

「だめだよ」

ドゴオツ!

「げぶあっ!?!」

ヘビー級のコークスクリューブローを食らったかのような衝撃に、

空中で吹っ飛ばされた。ISのおかげで身体にダメージこそないが、脳が揺らされてクラクラする。

なんだ一体、と視線を向けると、直径三十センチはありそうな金属球が浮かんでいた。これがライフル弾のように回転しながら俺の頬に突き刺さったのだろう。

「十六夜……のほんさんか」

それは如月重工の如月重工によるのほんさんのためのIS整備ユニット、十六夜。今まで俺も何回か世話になってるし助かってるんだが、これを手に入れてからのほんさんがちよつと怖い。元々物理攻撃をするのにためらいとか容赦が足りない子だったのだが、その威力が上がってしまったのだ。まあその被害を受けるのは主に俺なんだけども。

現に今の一撃は、ISがなければ確実にノックアウトされていただろう。ピットの出口でのろのろと手を振っている少女に非難の視線を向けながら、簪さんと一緒に降りていった。

「ほ、本音……どうしたの……？」

「かんちゃん、だめだよ。ちゃんとかまめにメンテしないと」

「……メンテナンスなら……さつき、やった……」

「んーふっふっふ。かんちゃん、メカニックとしてはまだまだですな。慣れないことすると、変に力が入ったりして、機体に負荷がかかるとだよ？」

「へー、そうなのか」

「そーなのだよ。逆に言えばね、機体のどこに負荷がかかっているかを見れば、どういう風に力が入っちゃってるかもわかるんだよ」

「へー……知らなかった」

のろのろとピットに入って行ったのほんさんについて行くと、のほんさんは残りの十六夜も展開し、変形させた。なんかスパナやらドライバーやらの見慣れた工具もあれば、なんに使うのかもわからない謎の工具まで。それらで打鉄式のスラスタを分解し、細かな部品の一つ一つまで素早く、かつ丁寧に点検していく。

その横顔は真剣そのもので、いつもは眠たそうに半開きになってい

る目が鋭く細められている。……のほほんさん、こんな顔もするんだなあ。白式整備する時はいつも通りの顔なのに。

「……うくん。ちょーっと付け根のあたりに負荷がかかっているね」  
「……それは……どういふことなの……？」

「翼を広げすぎ……かな？ 空気抵抗とか大きくなっちゃって、スピードも落ちちゃうし、色々もったいないんだよね」

「そう……なの……？」

「ああ、まあ広げた方がバランスは取りやすいんだけどな。けど確かにのほほんさんの言う通り、翼はできるだけ畳んだ方が速く飛べるよ。負荷云々は気づかなかったけど……」

「……翼を、畳む……」

「でも畳み過ぎると、今度は安定しなくなっちゃうんだよ。そうするとかえって遅くなっちゃうから、どれくらい畳むか、っていうのが大事だね」

「……そう……なんだ……」

「まあ、私は畳むと飛べないんだけど」

「……………」

あれか。知ってるけどできない、わかっているけど体がついて行かないという、努力しているみんなの悩みか。

「でもまあ、それは一朝一夕で身に付く技術でもないし、少しずつ練習してればいいんじゃないか？ 今はまず、タッグマッチにむけて戦闘機動ができるようなプログラムを作らないと」

「うん……そう、ね……」

だが、これはなかなか大変だぞ。戦闘機動は攻撃、防御、回避その他諸々を考慮に入れなきゃならない。防御と回避はともかく、攻撃が問題だ。なにせ俺の白式は接近戦特化、と言うよりオンリーの機体で、打鉄式は近接武器こそあるものの基本的には射撃戦型だ。射撃武器を命中させるための戦闘機動なんて俺は知らないし、切り札である山嵐、つまりミサイルの効率的な運用法なんてもっと知らない。

となれば、誰かにアドバイスを求めなきゃ話にならないんだが……。

(一応、みんな敵だしなあ……)

そう、俺の交友関係上、それは対戦相手にアドバイスを求める、ということになる。それで教えるのを渋るほど器の小さい連中じゃないんだが、どちらかと言うと俺のプライドの問題だ。とは言っても簪さんの機体のことなので、必要ならもちろん訊きに――

「……あ」

そう言えば。

一人いるじゃないか、アドバイスを求めるのに最適な人物が。なんで今まで忘れてたんだ。

「うん、そうしよう」

「へ……う？」

「いや、いいアドバイスくれそうな人のあてがあるんだ。簪さんさえ良ければ、明日にでもちよつと見てもらおうと思ったんだけど……どうかな？」

「……………」

簪さんはどうしてか、なんとも表現しにくい顔になった。けどすぐに、真面目な顔に戻る。

「私は……構わないけど……」

「そっか、わかった。じゃあ明日、話してみるよ」

「……………」

ふむふむ。簪さんも少しずつ、人に頼ろうとしてくれてるみたいだな。以前は何が何でも一人でやる、って感じだったから、色々心配だったんだ。まあそんなこと考えてる俺は一体何様なんだ、ってところだが。

「それじゃ、今日はおひらき、てことで」

「あ、うん。お疲れ、簪さん。のほほんさんも、ありがとうな」

「どういたしまして。私はかんちゃんのためなら、呼ばれなくても飛び出るよ。飛び出ないほうが面白そうな状況の時はその限りじゃないけど」

「……………」

なんともリアクションに困る一言を残して、のほほんさんはピット

から立ち去った。どうやら打鉄式式のメンテナンスだけしに来たらしい。タイミングがバツチリだったことを考えると、見てたんだろか？ 普段はほわほわしてるけど、友達に対しては結構心配性だし、のほほんさんなりの気遣いなのかもしれない。

「……それじゃ、上がろうか」

「あ……うん。……その、織斑くん……」

「ん？」

どうやらまだ何かあるらしい。けれど簪さんは、ちよつと言いくそうにしていた。一体どんな内容なのかと内心身構えていると。

「明日も……一緒に訓練、お願いできる……？」

……拍子抜けした。だってそんなのは当たり前というか、わざわざ訊くまでもないことだから。

「当たり前だろ。俺たちはチームなんだから、訓練だって整備だって、付き合うよ」

「……うん。ありがとう……」

けどそんな当然の返答にも、簪さんは安心したように頷いた。人付き合いがあまり得意じゃないようだし、ちよつとしたことでも不安に感じるんだろうか。

そうだとしたら、これを機に、どんどん積極的になってほしい。アイツらほどとは言わないけれど。

……まあ、そのうちこの前みたいに、あのテンションに巻き込まれることになるだろうし。何度か繰り返してれば、嫌でも元気になるかな。

さて。突然だが困ったことになった。己自身のタッグパートナーを誰にするか、全く考えていなかったのである。

(……ふむ……)

実戦訓練の趣が強い今大会であるが、しかし大会と名が付く以上、勝負であることに変わりはない。勝負であるならば、己には全力を尽

くす以外の選択肢は存在しない。

そしてタッグマッチとは、誰と組むかという選択もまた勝負の一部であると言えよう。

(……むう……)

では、誰と組むべきか。単純に戦力で考えるのなら楯無会長一択なのだが、この選択をした場合各所から凄まじい抗議を受ける気がするのでやめておく。己とて命は惜しいのである。

(……却下……)

というわけで、次に上がった候補はセシリアだ。彼女は中距離以上の射撃戦を得意とし、特に超長距離狙撃においては最早学園に並ぶ者はいまい。世界全体で見ても五指に入るほどだろう。更に二次移行して手に入れた単一仕様能力、「ワンオフ・アビリティ「ノブル・オブ・リゲーション貴き者の務め」による高精度な未来予測は、射撃能力を大幅に引き上げるだけでなく、防御や回避にも役に立つ。特化していながら隙がない、タッグを組めば安心して背中を任せられるだろう。

(……保留……)

その次は鈴。彼女の専用機、シエンロン甲龍は安定性と継戦能力に優れている。武装は少ないながらも使い勝手が良く応用の幅も広く、長距離以外ではどの距離でも十全に性能を発揮出来る。打鉄やラファールとはまた別の万能型だ。鈴自身の順応力、適応力の高さと相まって、誰と組んでも見事な連携を見せるに違いない。

(……後は……)

残るは箒だ。束さん手製の超高性能ISあかつばき紅椿は、箒の剣術と組み合わせることで比類なき攻撃力を持つ。己や一夏のような一撃必殺とは違う、圧倒的な手数で一息に圧殺するのだ。それに箒とは、幼い頃から共に剣術の稽古をしていた。互いに呼吸を知り尽くしている。箒が崩し己が仕留める、そんな理想的な連携とて容易い。

(……迷う……)

どいつもこいつも魅力的で困る。友人に恵まれていることを実感し僅かに頬が緩むが、今はそんなことをしている暇はない。

利点を上げていってはきりが無い。欠点を比較する方が手っ取り

早そうだ。

(……欠点、か……)

まずセシリアだが。彼女の場合、欠点と言うよりは、厄介な事情がある、と言うべきだ。

セシリアの専用機は、既に二次移行を果たしている。それは己も同様であり、加えて言えば一夏もだ。現在 I S 学園に在籍している専用機持ちは十一人、その内二次移行しているのは己たち三人。これでも奇跡としか呼べないほどの数だが、だからこそその三人の内二人が組むというのはいかがなものか。

無論、制約を課せられているわけではないし、問題があるわけでもない。だが人の感情として、そういった偏りは避けるべきだと感じてしまう。セシリアに非はないが、候補としての順位は下がってしまうだろう。

(……ふむ……)

では鈴と組んだ場合、どんな欠点が生じるか。まず思い浮かぶのは遠距離での攻撃手段が乏しいことか。ほぼ皆無と言っている。

己の持つ銃火器は散弾を使う「月影」のみだ、遠距離どころか中距離でも話にならない。そして鈴の「龍咆」だが、衝撃波を撃ち出すというその特性上、ある一定以遠の距離では急速に威力が減ってしまう。無論、そこまで敵を逃がさないだけの機動力と技術は持ち合わせているが……ううむ。

(……難儀……)

最後に箒だが。これはもう、言うまでもなく燃費が悪い。己の朧月も月光やスラストアが高出力なのでエネルギーを湯水の如く消費するが、搭載されているジェネレータが特別製で、継戦能力は高い。二対二の戦いであれば、途中でエネルギーが尽きることはあるまい。敵に粘られれば、箒だけ戦闘不能になる可能性は否定出来ないだろう。戦闘可能時間が合わないというのは、致命的な――

(……む……?)

今、何かが引つかかった。

戦闘可能時間が合わない？ 何故？

隼月は元々、一騎打ちに特化した、短期決戦型なのに――？

(……そうか……)

身体にかかる負荷を考慮して、今までは大人しい戦い方をしていたが……果たしてそれで、隼月の性能を十全に発揮出来ていたと言えるのだろうか。如月社長たちの趣味を考えれば、そうではない筈。機体も搭乗者も限界まで力を絞り尽くす、そんな、命を懸けた本来の「闘い」こそ、社長たちの求めたものの筈だ。

(……面白い……)

箒との戦闘可能時間が合わない。それは、己が回避を重視し、倒されずに倒すことを考えていたからだ。

そうではない。倒される前に倒す、肉を斬らせて骨を断つ。それが己の、隼月の戦い方だ。

「……く……」

隼月の機動力を、回避ではなく攻撃に使う。多少のダメージなどにせず、体勢を崩されようと強引に斬り込む。装甲の薄さと相まってシールドエネルギーは瞬く間に消耗するだろうが――それくらいで、丁度良い。

「……面白い……」

決まりだ。箒と組もう。長々と続けるよりも、短時間で全てを燃やし尽くすような戦いをする為に。

「……さて……」

となれば、今からでも箒を誘いに行かねば。箒と組めなければ、今までの考えはただの皮算用だ。以前の学年別トーナメントでは箒から誘いに来てくれたのだから、断られることはないと思いたいが……他の誰かに先に組まれては、話は別だ。

善は急げ。訓練による汗を洗い流した己は、今度は忘れずに持ち込んだ服を身に着け、脱衣所を後にした。

「ほら、おいでいのっちゅ。髪梳くよ」

「……………」

ええい、急いでいるというにつ。



ドアの前で、深呼吸。右手を持ち上げ、一度ためらい、意を決してノックする。

コンコン。

「は〜い」

中から間延びした、けれど明るい声が返ってくる。幼い頃から聞き慣れた、私の数少ない友達の声だ。

少し待つと、カチャリとドアノブが回る。ほとんど音を立てずに開いたドアの向こうから、キツネかなにかの着ぐるみを着た女の子が顔を出した。

「あれ〜？ かんちゃんだ〜、いらっしやい〜」

「あ、えと……おじやまします」

私が訪ねて来たことが不思議だったのか、本音は一瞬——と言うにはあまりに長い時間キョトンとしたあと、にへらと笑って迎えてくれた。

「おじやまされます〜。どぞどぞ〜」

ドアを大きく開けてくれたので、部屋に入る。すると、部屋の真ん中で椅子に座る女の子と目が合った。

「……………」

「あの……おじやまします……井上さん」

「……………」

無言ではあつたけれど、井上さんは軽く手を上げて応えてくれた。そんな井上さんは、パジャマ代わりなのか白いジャージを着ている。お風呂上がりなんだろう、長い髪が艶やかに輝き、ジャージの白との対比で黒色が深みを増している。

綺麗だな、と思った。私の髪は色素が薄く青っぽく見えるので、こういう日本人らしい髪はちよつと憧れる。

「あの……………」

「は〜い、お茶で〜す」

「……………ありがとう」

自分で思っているより長い時間、尻込みしてたみたい。とりあえず、本音がお茶に続いて椅子を出してくれたのでそれに座る。

「……………」

「……………」

「……あの……」

「……………」

「……邪魔じゃ……なかった……？」

就寝前のこの時間は、多くの人にとって一番リラックスできる時間だ。読書する人や音楽を聴く人、友達の部屋に遊びに行く人なども、録画したアニメを見るのはこの時間だ。

井上さんにちよつと相談というか、お願いがあったので、こんな時間に突然訪ねてしまったけれど……大丈夫だっただろうか。

「……構わない……」

「そくそく。今ねく、いのっちの髪のお手入れタイムなんだよ」

「……お手入れタイム？」

本音は着ぐるみのお腹に付いてるポケット（キツネの着ぐるみだと思ってたけどどうやら別の生き物みたい）から、ブラシを取り出した。そしてペタペタと井上さんの後ろに移動すると、井上さんの髪をブラッシングし始めた。

……井上さんの髪の手入れは本音がしてる、っていうのは聞いてたけど……こうして実際に見ると、不思議な光景だ。なんだか井上さん、不機嫌そうに見えるし。

「いのっちはねく、あまり髪を大事にしてくれないのだよ」

「え？ そうなの……？」

「……邪魔……」

「え……」

本当にそう思っているんだろう、無表情な顔の眉間に、少しだけしわが寄っている。確かに長い髪は色々邪魔になることもあるし、手間もかかる。井上さんは剣術一筋だって聞いたし、髪を大事にしている印象はないけれど。

それでもやっぱり、もったいないと思ってしまう。だって――

「そんなに、綺麗なのに……」

……………あ。

声に出ちやつた。

「……………」

「あ、あの、その、違うの。ええと、井上さんの髪にとやかく言うつもりはなくて……」

ああっ、自分でも何を言っているのかわからないっ。

「じゃあ、かんちゃん、梳いてみる〜?」

「……………」

「……………」

「……………」

言つて、ブラシを差し出してくる本音。井上さんは何を言うでもなく、諦めたかのように溜め息を吐くだけ。

どうするべきか困つてしまい井上さんと本音を交互に見ても、二人ともなんの反応もしてくれない。井上さんは黙つて私を見るだけだし、本音は気の抜ける笑顔でブラシを差し出しているだけだ。

これは、梳くしかないの? ああでも、井上さんの髪ならちよつと触つてみたいかも……。

「えつと……………」

「どぞどぞ〜」

「……………」

ノリノリの本音とは対照的に、井上さんはむすつとしていて。さつきもこんな顔をしていたし、私に髪に触られるのが嫌なんじゃなく、髪の手入れに時間を使うのが嫌なのかもしれない。

そう思うことにして、本音からブラシを受け取り、仏頂面で座る井上さんの後ろに立った。

「……………」

「……………」

「いきますっ……………」

「……………」

自分でもよくわからないけれど、なんだか私は今すごいことをして

いるんじゃないのかと思う。自然、ブラシを待つ手にも力が入るというものだ。

私は空いている左手で、うなじのあたりから髪を持ち上げ――

(うわ、さらさら……！)

最近の本音のお小遣いはヘアケアグッズに注がれているらしい。長身の井上さんの腰まであるほど長いのに、毛先までしつかりと手入れが行き届いてる。

うーん……けどこんな髪なら、本音が夢中になるのもわかる気がする。

「えと、それじゃ……始めます……」

「……………」

ごくり。なぜか唾を飲み込んでしまった。

そして、髪にブラシを通していく。

さら……さら……

さら……さら……

(ぜ……全然引つかからない……)

本音の頑張りが垣間見えるほどの髪質。自分の髪にはここまで手をかけてないくせに……。

さら……さら……

さら……さら……

(……あ……)

そうして数分続けていると、気づいた。

ジャージの襟の隙間から見える、細い首。

そこに、左肩から這い上がるように、無惨な傷痕があることに。

「……………」

ああ、どうしよう。泣いてしまいそう。

どれだけ深く傷つけられたのか、もう塞がっているはずなのに、肉が抉りとられたようにへこんでしまっている。

……ああ。こんなに酷い、傷だったんだ。こんな傷が、なくなってしまった左腕に無数にあるのだとすれば。

それはもう、現代の医学では、どうにもならない。

(……なんで……?)

さらり。さらり。

滑らかな髪の感触さえ、今は物悲しい。

なんでこの人は、戦えるんだろう?

一生懸命に歩いてきた道、それを、こんなカタチで断ち切られて。

なんでまだ、戦えるんだろう——?

「……ただ……」

「……え……?」

私が何を考えていたのか、お見通しなのだろうか。

井上さんは、静かに呟いた。

「……諦められないだけだ……」

「……っ」

ああ、なんて。

なんて、強い想いなんだろう。

諦めてしまえば、楽になるのに。苦しまなくて済むのに。

諦められないから、足掻くだなんて。

「……お前は……」

「……?」

「……違うのか……?」

「……え……?」

私? なんて?

私には、そんなに強い想いなんて——

「……あ……」

……そうか。

なんで私が、自分でも無理かもしれないと思いつつながら、打鉄式を完成させようとしてたのか。

それは、諦められないからじゃないの?

また、お姉ちゃんと一緒に——

(あ、れ……?)

どうしてだろう。こんな風に誰かの髪を梳くのなんて、初めてのはずなのに。

なんだかとても、懐かしいような気がする。

『簪ちゃん、大丈夫？ 痛くない？』

『うん……平気』

『ちゃんと毎日、お手入れしてるのね。大変じゃない？』

『大変じゃないよ……私、この髪、好きだもん』

……ああ、そうだ。

私たちがまだ小さくて、お姉ちゃんがまだ楯無じゃなかった頃に。あの時は、私が梳いてもらうほうだったけれど。

『だって、この髪……お姉ちゃんの髪と、おんなじだから』

「……ねえ……井上さん」

「……………」

問いかけても、井上さんは黙ったまま。ただ気配だけで、続きを促してくる。

「諦められないって……良いことなの？ それとも……悪いこと……なのかな……？」

「……………」

井上さんは、少し間を置いた。それは答を考えているというより、「何を当たり前のことを訊いているのか」と、呆れていたんだと思う。

「……よし悪しは、知らん……」

ぶつきらばうな言葉は、けれどとても真摯に響いて。

「……ただ……」

だからこそ、すんと胸に落ちる。

「……どうしても、諦められないものを……」

ああ、そうだったんだ、と。

私は、あの日々を——

「……夢と、言うのだろう……？」

——夢見ていたんだ。

## 第84話 法師

「……頼み事……?」

「うん……井上さんに……」

結局三十分くらい髪を梳き続けた後、ようやくここに来た目的、本題を切り出した。

……なんだか井上さんの眼がすごく怖い。サメみたいに光がなくなってる。

「……何だ……?」

「えと、あの……井上さん、毎朝……走ったり、剣術の稽古をしたり……してるんでしょ……?」

「……………」

黙って頷く井上さん。まあ、これは有名な話だ。織斑くんや代表候補生のみなどと一緒にトレーニングをしていて、一般生徒も何人か参加しているらしい。他にも剣道部の朝練にお呼ばれたり、陸上部が挑戦しに來たりするとか。

「わ、私も……入れてもらえないかな……て」  
「……………」

井上さんは、また呆れたように小さく息を吐く。

もちろん、そのトレーニングが参加自由——というか、単なる井上さんの日課であり、みんな勝手について行っただけなのは知ってる。けれどペースの速いランニングや、見ているだけで練習になるとまで言われているハイレベルな組み手が毎朝行われているというところで、密かな人気行事でもある。かなり朝早いので、ちゃんと毎朝参加できている人は少ないらしいけれども。

というわけで、一応断っておいた方がいいと思った、というのが一つ。それと、こっちの方が重要なんだけど——

「そこで、その……私に、稽古をつけて……もらえないかな……?」  
「……………」

そういうわけだ。私のお姉ちゃん、あの更識楯無を相手に完勝したという、生身での戦闘では学園最強の実力者。そしてその井上さんと

稽古をしている人たちは、みんな優れた接近戦の技術を持っている。

……オルコットさんは、その……いまいちらしいけれど。でもそれは、組み手はあまりしてないからという話もあるし。

「……一夏に頼め……」

「う、うん……織斑くんにも、頼んでみたんだけど……井上さんの方が、勉強になるって言われて……」

「……………」

なんだか井上さん、眉が片方ひくついたような。多分気のせいだ、そういうことにしておこう。でないと怖い。

「……………」

「ええと……ダメ、かな……？」

私が織斑くんから聞いたのは、井上さんは実は、剣士としての才能はあまりない、ということ。なのにどうして強いのか、と訊いたら、織斑くんは「簡単な算数だ」と答えた。

例えば。優れた才能のある人は、一のことから十を学ばなければならない。

井上さんは、その間に百をこなし、十一を学ぶのだ。

……聞いただけで気の遠くなるような話だ。けれどそれを、井上さんは平然とやってのけて、そしてずっと続けている。もし井上さんに才能があるとするとするのなら、それはただ一つ、「努力の才能」だろう。

そんな井上さんの技術は、とにかく基本がとてもしっかりしているらしい。だからこそ、限られた能力でも様々な事態に対応できるのだとか。その基本を体験し、ほんの少しでも身に付けることができれば、大いに役に立つことは間違いない。

私はあまり接近戦が得意じゃないから、まずは土台をしっかりと固めたいのだ。打鉄式は射撃戦型だけど、特化型じゃない。適正距離だつて中距離くらいだ。近付かれることはいくらでもあるだろうし、その時に攻撃を凌げなければ話にならない。さらにもし反撃までできるくらいになれば、戦術の幅が飛躍的に広がるだろう。

……まあさすがに、それは高望みし過ぎかな、うん。いずれはそこまでできるようになりたいけれど、そのための時間は全く足りない。今はとにかく、最低限の防御を身に付けないと。



私の考えは、井上さんに対して失礼だとは思う。でも訓練を繰り返して少しずつできることが増えていくと、次第に勝ちたい、と思うようになったんだ。

だから、失礼を承知で頼みに来た。井上さんの技を盗ませてくださーい、と。

そんな頼みに、井上さんは無表情のまま、頷いて答えてくれた。

「……構わない……」

「あ……ありがとう……」

織斑くんからは、断られることはまずないと言われていたけど、やっぱり実際に言うとなるとちよつと怖い。怒られたらどうしようと思ってしまう。でもそれは、杞憂だったみたい。

「それじゃ……明日、お願いします……」

「……応……」

「朝早いからね。早めに寝るんだよ」

「……」

井上さんがジト目で本音を睨むけど、効果はない。本音は相変わらず夜更かし常習者みたいだ。たまにすごく早く寝るけど。

「……うん。ありがとう、井上さん……お邪魔しました」

「……」

しかし本音の言うことは間違っているわけではないし、時計を見るとそこそこ遅くなってしまっていたので、今日はもう帰ることにした。井上さんは帰りの挨拶をする私を、小さく手を上げて見送ってくれた。

……本音は手だけじゃなく、着ぐるみの尻尾も振って見送ってくれた。どうなってるんだらうあの着ぐるみ。

---

そんなことがあった翌朝。IS学園の広いグラウンド、その片隅で、己は簪と打ち合っていた。

「やあっ!!」

「っ……い！」

広い間合いと、遠心力の乗った重い一撃。その内側に踏み込めば、待っているのは変幻自在の連撃。それらに遮られ、懐は遠く、辿り着くのは容易ではない。

……これで接近戦が苦手とは恐れ入る。実に見事な、薙刀捌きだ。

「せえー やっ、はあ!!」

思えば、長柄武器を扱う者は周囲にいなかった。一夏と箒は刀、鈴はそれより短い青竜刀、シャルとラウラは更に短いナイフだ。セシリアに至っては接近戦でも銃を使うので論外である。一応楯無会長が突撃槍を使うが、あれはIS用であって生身で扱う物ではなく、そもそも彼女とは最初の一回以来手合わせをしていない。

そんな中で、簪の振るう薙刀は新鮮だ。柄だけでも自身の身長を優に超える大型武器を、体格に似合わず巧みに操っている。無論、刃身を柔らかい素材で覆った練習用だが、それでもそこそこ重量がある。まともに食らえばただでは済むまい。薙刀は女性用の武器というイメージが定着しているようだが、本来は戦場で活躍した強力な武器なのだ。

「やあああああつ!!」

普段の態度からは想像もつかない、凜とした気迫。長い柄を存分に使い、てこの原理で素早く重い攻撃を放つ。柄を持ち替えることで間合いにおける死角をなくし、刃に気を取られれば石突が襲い掛かってくる。身体を軸に振るわれる薙刀は常にこちらの斬撃を阻み、まさに攻防一体だ。

……面白い。が、もう一步、と言ったところか。

「疾……い！」

「あ!?!」

袈裟切りに振り下ろされた薙刀の峰に、逆袈裟の一撃を叩き込む。打ち落とすのだ。

長く重い薙刀は勢いに乗れば無双の威力を誇るが、その分崩れる時は大きく崩れ、立て直しも難しい。現に簪は前のめりになり、薙刀は両手ごと大きく下げられ、上半身が完全に無防備だ。

対する己は、薙刀の峰を打った反動で素早く木刀を斬り上げる。首に打ち込み、一本——と、考えていたが。

「くっ！」

(……………ほう……………)

簪は崩れた体勢を立て直すのではなく、崩れる勢いのままに身体を回転させた。その際に身を屈めて己の一撃をかわし、薙刀を引き戻しつつ石突による突きを放って来た。

素早く、かつ適切な判断だ。名家の娘として武術を嗜んでいるというより、跡取り候補として叩き込まれたのだろう。苦手だと言っていたのは、比較する相手が楯無会長しかいなかったからではないだろうか。そうとしか思えないほどの、見事な技の数々。一夏や箒ですら手こずるだろう。

これは、楽しめそうだ。

「ふっ！」

一気に息を吐き出し、踏み込んだ左足を軸にして回転する。己の脇腹を狙って突き出された石突をかわし、簪の正面を通って背後まで回り込み、回転の勢いを乗せて横薙に木刀を振るった。

カァン！

「く、う！」

良質な木同士が打ち合わされることで、高い音が響く。簪は水平になつていた薙刀を立て、木刀を防いでいた。不自然な体勢で受けたせいか踏ん張りが効かず吹き飛ばされるが、簪はそれを利用して距離を取った。いくら距離を詰められても戦えるとはいえ、己の剣が届く距離は避けたいと見える。

「ふう、ふう、ふう……………」

「……………」

技術、判断力、どちらも申し分ないが……惜しむらくは体力の無さか。動きに無駄が少ないのでかなり消耗を抑えられてはいる筈だが、それでも補いきれないほどに基礎体力が不足しているようだ。今も既に、呼吸を乱し始めている。

普段の運動量が少ないからだろうが、本当に勿体ない。本格的に鍛

えれば、良い使い手になるだろうに。

「……………」

簪は切っ先を己に向け息を整えようとしているが、それを悠長に待つ気はない。訓練が成り立つ程度に手加減はするが、容赦はしない。息が乱れているのなら徹底的に追撃し、休ませずに体力を使わせる。

「ふう、くっ、はあ、はっ、ぜえ……………」

打ち合うたびに、薙刀の速度が落ちていく。滝のように汗を流し、肩で息をし、動きは精細を欠いている。

……………限界が近いな。

「は、ああああっ!!」

「……………」

それでも簪は、最後の力を振り絞って唐竹を仕掛けて来た。先ほどまでの疲れ果てた様子から考えれば鋭い一撃だが、最初の頃に比べれば明らかに遅く鈍い。その一撃に切り上げを合わせ、薙刀を弾き飛ばす。

これで、詰みだ。得物を失い気力も尽きたのか、へたり込んだ簪に木刀を突き付けた。

「ま……………参りました……………」

「なんだ、簪さん、かなり強いじゃないか」

「そ、そうかな……………全然、歯が立たなかつた……………けど……………」

「それは僕たちも同じだけどね……………」

そう言いながら、スポーツドリンクを手渡してくれたのはデュノアさん。一応笑顔を浮かべているけれど、なんだか苦笑に近い気がする。

「格闘はそこそこ自信あったんだけどなあ。何やっても通用しないんだよね。ちよつとショックだったよ」

デュノアさんはさつきまで織斑くんと打ち合いをしていた。その右手には、練習用の刃を潰した大型ナイフを持っている。ナイフで防

御をして、投げや関節技で制圧するのが生身での戦闘スタイルらしい。

「俺なんかもう、随分前に開き直っちゃったよ。ムキになっても今は勝てない、って。それよりも、いつか勝てるように鍛えた方がよっぽど良い」

織斑くんが肩に担いでいるのは竹刀だ。それも普通の竹刀よりも長く、しかも重い。剣道の試合じゃ使えないけど、普通の竹刀だと軽くて物足りないので作ってもらったとか。

……本当は木刀を使いたいけど、それで打ち合った場合、当たると大変なことになるので使えないそうだ。

「でも簪さんもすごいよね。失礼だけど、あんまり運動得意そうないメージがなかったから意外だったよ。それを差し引いても十分強いし」

「あ……ありがとう……」

今日のトレーニングに来ている専用機持ちは、私と井上さんの他にはこの二人だけ。みんな部活の朝練とかで参加できない日は結構多いそうだ。

……良かった。デュノアさんは話を聞いてくれる人だ。篠ノ之さんや凰さん、オルコットさんは、いきなり襲い掛かってくる危険性があるそうだから。

「それで、井上さん……どう、かな……?」

さて、いよいよだ。先ほどの打ち合いでも、ずっと私の動きの細部まで見続けていた井上さん。一体どんなアドバイスをくれるのか。

「……走れ……」

「……え」

「……………」

「……………」

「……………」

もの凄くわかりやすかった。

「うーん……俺から見ても、やっぱり目立つ短所はスタミナ不足かなあ」

「なんていうか、完成度は凄く高かったよね。武器も違うし、アドバイスできることは少ないと思うな……」

「……ええ、と……」

な、なんだか予想より誉められてる気がする……でもスタミナ不足は確かに自分でも感じたし、走り込みとかしないと……。

「……走れ……」

「う、うん……わかった。でも……どれくらい……？」

「……倒れるまで……」

「……え」

一瞬なんの冗談だろう、と思ったけれど。井上さんはどう考えても、冗談を言う人ではない。何より目が本気だ。怖い。

「——走れ」

「は、はい!!」

静かなのに言い知れぬ迫力がある井上さんの言葉に、反射的に返事をする。そしてそのまま、疲れ切った体に活を入れ足を動かした。

「ぜひー、ぜひー、ぜひーっ……!」

「……遅い……」

「は、はひいいいー」

平然と追いかけてくる井上さんから逃げるように、私は死に物狂いで走り続けた。それこそ、本当に倒れるまで。そんな私たちを見て、織斑くとデユノアさんは苦笑いを浮かべるだけだった。

……助けて。

出来れば今朝の内に箒をタッグに誘いたかったのだが、箒は朝の鍛錬には来なかった。部活が忙しいのだろう、己個人としては少々寂しくもあるが、しかし良いことではある。人生で一度きりの高校生活だ、出来る限り青春を謳歌すべきだ。

「……箒……」

「む? どうした、真改?」

そして朝の鍛練で会えなかったとなれば、次の機会は昼休みになる。それなりに大事な用件だ、僅か十分しかない通常の休み時間に切り出すのはどうかと思ったのだ。

いつものように皆と食堂へ行き、席に着く。皆と言っても、セシリアと鈴は今日、偶然にも同時にクラスの日直であり、業務があるのでここには居ないのだが。全く、なんだかんだ言いながら、色々と一緒に行動する二人だ。

「……タツグマツチだが……」

「ああ、私は楯無さんと組むことになった。今朝剣道場に来て誘われてな、色々と教えてくれるそうだ。一夏を鍛えた手腕を見れば、彼女の教えに間違いはあるまい」

「……はて。今、なんと？」

「何せあの歳でロシアの国家代表、更には自分の手で専用機を完成させたと言うじゃないか。才能、技術、知識、練度、経験……どれをとっても申し分ない。単純な戦力以上に頼もしい存在だよ。ふふ……お前との対決を楽しみにしているぞ、真改。くれぐれも手を抜くなよ？」

まあ、お前に限ってそんな心配は無用だろうがな、ははは」

「……お……応……」

……箒の笑顔が眩しい。心算や思惑など一切無い、ただ純粹に己や一夏たちと戦えることを心待ちにした、美しい笑顔だった。それに比べれば、打算にまみれた己の考えのなんと汚らわしいことか。

「……た……楽しみ……」

「そうだろう。急遽企画されたとは言え、公式戦だ。それでお前に勝てれば……記録だけでなく、私自身にもその勝利が刻まれるというものだ。ふふふ……今から気が昇ってしまうな、ははははー！」

「……」

……この調子で、己のパートナーについて訊かれてはたまらん。箒

は己と戦うことを純粹に楽しみにしているようだし、楯無会長は己のパートナーに向けるつもりのようなのだが……そのパートナーが、己はまだ決まってないのである。

……いや、計画自体はあったのだが、たった今崩れ去ったと言うか……。

とにかく己は、箒が笑っている内に急いで昼飯を片付け、食堂を後にしたのだった。

……当てが外れてしまった。だがいつまでもそれを惜しんでいるわけにもいかない。急ぎ別のパートナーを探さなければ。

とは言え、それはもう決まっていると断言している。鈴である。セシリアという選択も捨てがたいのだが、初めに決めた優先順位に従うことにしよう。

というわけで、放課後になってすぐ、己は二組を訪れていた。

「あら、井上さんじゃん。どしたの？」

「……………」

扉を開けてすぐ、金髪の、見覚えのある少女が話し掛けて来た。確か鈴のルームメイトの、ティナ・ハミルトンだったか。

「……鈴は……？」

「あ、あの子に用？ ほら、黒板消してるよ」

「……………」

言われた通り目を向ければ、茶色のツインテールを元気良く揺らしながら飛び跳ねる少女の姿が。鈴だ。身長のせいで上まで手が届かないのだろう。

……大変失礼だが、その姿は玩具に飛び付く猫のようで微笑ましい。クラスメイトが手伝おうとしないのはそのためか。数人が頬を緩めて、鈴を眺めていた。己ももう少し眺めていたいところだが、そうもいかない。近付いて行くと、足音に気付いたのか鈴が振り返った。



「あれ、シン？ 珍しいわね、よそのクラスに来るなんて。何か用？」  
「……タッグマッチだが……」  
「ああ、例の。ふふん、敵情視察つてやつ？ あたしはセシリアと組んだわよ。ちよつと気に食わないけど腕は確かだし、アイツの援護があればあたしも思う存分暴れられるしね」

「……なんだと？」

「本音から聞いたわよ。アンタ箒と組むんでしょ？ 超攻撃的コンビねえ、アンタらしいわね。けどそう簡単に流れは——」

「……え、ちよつと。箒と組むんじゃないの……？」

「……箒は、楯無会長と……」

「……え」

「……」

「……」

「……」

「……さて。少し整理してみよう。」

現在学園に在籍している専用機持ちは、一年生八人、二年生二人、三年生一人の計十一人。二年生の専用機持ちの一人は楯無会長で、もう一人は三年生の専用機持ちと仲が良く、タッグマッチ開催が決まっただけにタッグを申請したとシャルから聞いた。

残るは一年生の八人。一夏と簪が組み、箒と楯無会長が組み、シャルとラウラが組み、そして鈴とセシリアが組む。

残るは一人。即ち己である。

「……」

この瞬間。

己のパートナーとなる相手は既に残されていないことが、判明した。



前と違って」

「……………」

ここぞとばかりに追撃を仕掛ける千冬に、真改の目がどんどんスゴイことになっていく。千冬は全く気にしないどころか、むしろそれを楽しんでいるが。

「この場合、あぶれた一人は少々不利になる。大会はトーナメント形式で進むが、一回戦で負けた二組……その四人の内一人を選びタッグを組んで、六組目として参加することになる。」

事前に訓練出来ない、即席のタッグ……しかも相方は既に一度負けていて、消耗している。形式上、必然的にシード権を得られるが……それを差し引いても、優勝を狙うのは難しいだろうな。まあ選ばれた相方からしてみれば、敗者復活戦のようなものだ。チャンスが増えるのだから、文句は言わんדרろうさ」

「……………」

なるほど、と真改は納得した。そしてそれならば、真改としてはそれほどの苦にはならない、とも。

どの組が初戦敗退しても、四人の内最低一人は普段から共に訓練をしている者が含まれる。連携には問題ない筈。消耗も、本音の力を借りれば機体の修復と補給は十分に可能だ。体力だけはどうにもならないが。

「お前としては、満足な戦いが出来ればそれでいいのかもしれないが……この大会は訓練を兼ねている。相方を置いて一人で突っ走るなよ。」

……………いや、この心配は、お前には無用だったか」

「……………」

「しかし意外だったな。まさかお前があぶれるとは。私はてつきり、更識の姉がハンディキャップとでも言って買って出ると思っていたんだが……そうか、奴は篠ノ之と組むか」

「……………」

「まあ、これも良い機会だ。お前に追い付こうと必死に足掻いて来た馬鹿者共の成長を、特等席からじっくりと眺めている」

「……了解……」

聞きたいことを聞き終え、真改は教員室を去った。その背中を優しげな眼で見送ってから、千冬がぼつりと呟く。

「……そうか……奴がぼつちか……く、ダメだ、思い出したら……く、あはははははははっ!!」

またも笑い始める千冬。その声は廊下に出たばかりの真改の耳にもバツチリ届いていた。

その後、アリーナに現れた真改は、その場に居合わせた幼なじみたちを模擬戦でボコボコにしたとかなんとかか。

## 第85話 それぞれの

「あの……織斑くん」

「うん？」

「アドバイスくれる人って……この人？」

「うん、そうだけど？」

「……………」

……確かに、射撃戦のアドバイザーとして、ある意味この上ない適任者ではあるけれど。

それでも、この人は意外だった。

「はい、それでは基本からおさらいしましょう！　まずは一番大事な、射撃姿勢からです！」

「……………」

ラファール・リヴァイヴを展開しニコニコ笑顔で元気いっぱいに指導してくれているのは、誰あろう山田先生その人だった。

織斑くんのクラス、一年一組の副担任である山田先生は、ISの実技教官でもある。私も授業で何度もお世話になっているから、彼女に教えてもらうことに違和感はないのだけれど。

……なんで今まで、思い付きもしなかったんだろう。

「今日は忙しいところありがとうごさいます、山田先生」

「いえいえ、私は先生ですから！　生徒さんに頼られたら断れません

！　先生ですからっ！」

「……………」

自主訓練に行き詰まっているから、アドバイスが欲しい。そう頼んだら、山田先生は二つ返事で来てくれたという。けどこの様子だと、生徒思いの先生というよりは、頼られることが嬉しい子供にしか見えない。そもそも見た目の年齢が私たちとそう変わらない人だし。

「いいですか、更識さん。安定した射撃は安定した姿勢から生まれま

す。目まぐるしく動き回る戦闘中に、いちいち射撃姿勢なんてとって

いられない——そう言って姿勢をないがしろにする人もいますが、そ

ういった人たちは必ず、早い段階で伸び悩むことになります。どうし

「てだかわかりますか？」

「ええと……基本ができていないから、ですか……？」

「どうとでも解釈を広げられる当たり障りのない答え。でも山田先生は、笑顔をさらに輝かせて大きく頷く。

「はい、その通りです！ さすがですね、更識さん！」

「……ありがとうございます……！」

「銃というのは、近接武器と違って命中しても手応えがありません。ですからまずは、ちゃんと姿勢を整えて一発一発丁寧に撃つて、どこに当たったかを確認することが大切なんです。そうしないと、どう撃てば当たるのかという感覚が身に付かないのです」

「はあ……」

「射撃姿勢を高いレベルで身に付けた人は、どんなに激しい戦闘中でも姿勢が崩れません。一見すると適当に撃っているように見えても、実は体の軸がまったくブレていないんです。当たる撃ち方を体で覚えてるんですね」

「なるほど……」

「ですから、まずは姿勢です！ 姿勢を身に付ければエイミングの精度も速度も自然に鍛えられます！」

「……はい」

「なんだか熱血教師みたいなテンションだ。よほど嬉しかったらしい。」

「ええと、打鉄式式の射撃武器は……荷電粒子砲、春雷ですか。肩に担いで撃つタイプですね」

「はい」

「このタイプでも、射撃姿勢は変わらず大切です。いえ、むしろマウント部分が体幹に直結している分、手に持つタイプよりも大切です。では、まずは撃つてみてください！」

「そう言うと、アリーナの隅っこに的が現れた。とりあえず狙いを付けて、一発。放たれたビームは的の中央を撃ち抜いた。

「……基本は大事だと思うけど、これくらいのことなら今まで何度もやってきた。できればもう何段階か先の訓練がしたいのだけど……。」

「更識さん、今ロックオンして撃ちましたね？」

「へ？ あ、はい……」

「ダメです。次はロックオンなしで、更識さん自身が狙ってください」  
「……はい」

と思っていたら、見抜かれてしまったのだろうか。指示する声がさつきままでとは違う、厳しさのあるものになった。

（いけない、いけない……山田先生は昔、織斑先生を除けば日本最強とまで言われていた人……ちゃんと聞かないと……）

普段の子供っぽい姿や知名度の低さから忘れがちになってしまうけど、山田先生は実はかなりすごい人なのだ。言うことに間違いはなはず、真面目に取り組まないと。

「……」

照準をマニュアルにして、狙いを付ける。ハイパーセンサーに表示される疑似十字線レティクルを的に合わせ、発射。

……良かった。ちゃんと中心に当たった。

「どうですか？ ちゃんと当たるか、不安だったでしょう？」

「……あ」

「それは、自分の中で射撃の感覚が固まっていない証拠です。ロックオンやオートエイムに頼っていると、この感覚がなかなか育ちません。ですが高性能のFCSほど、扱う人によってどれだけ性能を引き出せるかが違うんです。

大切なのは人機一体です。まずは更識さんが、打鉄式式に追いつかなくちゃダメです」

「……はいっ」

うん。山田先生はやっぱり、立派な先生だ。凜とした眼差しには貫禄と頼りがいがある。……普段からこうならいいのに。

「ISが固定してくれるので照準のブレなんかはほとんどありませんから、止まっている的をじっくり狙って一発当てることは難しくありません。ですが的が動いたり、速く狙ったり、連射する場合には安定性が必要になってきます。実践しますので、見ていてくださいね」

山田先生が端末を操作すると、今度は六個の的が現れた。肩に小型

のスナイパーカノンを展開し、足を肩幅に開いて半身に構える基本の射撃姿勢を取る。

そして、発射。ドン、ドン、ドン、と一定のリズムで素早く的を撃ち抜いていく。言うまでもなく、六個全て中心に命中。素晴らしい技術だ。

――が。

「姿勢が安定していれば、照準移動も滑らかにできます。複数の標的を狙う場合には必須の技術ですね。最近ではビットやセントリーガンを装備している機体も増えてきてますし、今回の大会はタッグマッチですから、覚えておいて損はないと思いますよ」

丁寧に説明してくれる山田先生には申し訳ないけど、あまり耳に入って来なかった。それよりも、さっきの光景が忘れられない。

スナイパーカノンは実弾武器であり、撃つときに反動がある。山田先生はそれを上手く相殺してまるでないかのようにしていたけど、それでも一部に顕著に現れていた。

さっきの連射を視覚的にわかりやすく表現すると、こんな感じだった。

ドン。プルン。

ドン。プルン。

ドン。プルン。

ドン。プルン。

ドン。プルン。

ドン。プルン。

「……………」

下を見る。なだらかだった。

悲しくなった。

(いいもん……春雷はそんなに反動ないもん……どつちにしても、あんまり揺れないもん……)

「それでは、やってみてください」

「……はい」

心の中で涙を流しながら、私は的に向かって荷電粒子砲を放った。



ちよつと出力調整を失敗したみたいで、的は完全に消滅し、着弾点の確認はできなかった。

「あれ、ラウラ。もう大丈夫なの？」

「ああ、心配をかけたな」

シャルロットがアリーナで訓練をしていると、ルームメイトであり今回のタッグマッチのパートナーでもあるラウラが、シユヴァルツェア・レーゲンを展開してやってきた。最近部屋に閉じこもり気味だったラウラが訓練に顔を出したことに、シャルロットは嬉しくなった。(悩み事、解決したのかな? ……ううん、まだ解決してなくても、ずつと部屋でじつとしてると、気が滅入つちやうもんね。たまには体を動かさないと。それに運動してる間は、嫌なことも少しは忘れられるしね)

どちらにせよ、いい傾向だろう。求められれば協力を惜しむつもりはないが、しかし求められもせずしやしり出るつもりもない。乙女の悩みはデリケートなのだ。見守るしかできないシャルロットにとって、ラウラのこの一歩は極めて大きいと言える。

「この数日で、他の連中に大分差を付けられてしまっただろう。私の責任だ、遅れを取り戻さねばならん。そこでシャルロット、これを見てくれ」

「うん? なにかな?」

さらにラウラは、積極的に戦力強化を図るつもりのようなのだ。随分調子が戻ってきたのではないか? そう思い喜びつつ、シャルロットは差し出された品を受け取る。

一枚のDVDだった。

「……………リベリオン?」

「うむ、その作中に出てくるガン〇カタという技術が極めて強力だな。これを身に付ければ攻撃力が120%アップ——」

「ちよつと待って、何その胡散臭い技!? ラウラどうしちゃったの、こ

んなのに頼るだなんて!」

「私はどうもしていないさ。いつも通りだよ、はははは」

「ああつ、よく見たらなんか眼が虚ろだ!」

こと戦闘においては真面目で堅実なラウラの突飛過ぎる行動に、シャルロットは彼女が本調子から程遠いことを知った。

そんなラウラをどうにか説得しつつ、訓練を続けるシャルロット。タッグマツチまであまり日がなく、不安は大きくなるばかりであった。

あとこのDVDをラウラに渡した奴はそのうちぶっ飛ばすと決意した。

「あーもー、さっきつから何度も言ってるでしょ!? 援護のタイミン  
グが一瞬早いのがよアンタは! あたしの反応が遅れたらかえって危  
なくなるってことがわかんないの!」

「あら、何をおっしゃるかと思えば。自分の愚鈍さをパートナーのせ  
いにするだなんて、レディ……いえ、人としていかなものかと思っ  
ますわよ?」

「未来予測できる奴に合わせられるわけないでしょうが! そっちが  
合わせなさいよ!」

「わたくしが? ごめんなさい、わたくし、エスコートされるのには慣  
れているのですけれど、エスコートするのはちよつと……」

「ぶっ飛ばすわよボケ貴族っ!!」

喧嘩をしながら、ターゲットを次々破壊していく鈴とセシリア。そ  
の二人の姿を、居合わせた生徒たちは苦笑しつつ眺めていた。

「なんだかんだで……」

「息ピッタリよね、あの二人」

「どっちにしてもやかましいったらないわ」

ノープル・オブリーゲーション  
貴き者の務めによる未来予測で、常に一手先んじた援護射撃をす  
るセシリア。なんの合図もなしに放たれるそれを、しかし一つとして

無駄にせず活かしかける鈴。

「見ている者からすれば、お互いの心が通じ合っているとしか思えない連携である。」

「大体ね、射線がいつつもあたしに近すぎんよ！ ちよつとズレたらあたしに当たってたの、十回や二十回じゃないわよ!？」

「オーツホツホツホ！ ご安心ください、当たらなければどうということはありませんわ!？」

「その縦ロール爆破してアフロにしてやりましょうか!？」

（（仲良いなあ））

縦横無尽に飛び回りターゲットを攪乱し、怒涛の連続攻撃で次々と破壊していく鈴。

最小限の動きでターゲットの攻撃を避けつつ、的確な狙撃で着実に仕留めていくセシリア。

その日、その訓練プログラムのハイスコアが更新された。噂を聞き駆け付けた新聞部副部長が記念写真を撮ったが、そこに写る二人は髪や頬を引つ張り合い、笑顔と青筋を同時に浮かべていたという。

「お疲れ様、箒ちゃん」

「はい。今日もご指導、ありがとうございました、楯無さん」

箒は楯無との訓練を振り返る。

箒が姉から与えられた専用機、紅椿は、あらゆる面で比類無き性能を持つ高性能機だ。だがその性能に振り回され、満足のいく動きが出ないでいた。

それを克服するため、楯無はとにかく箒の邪魔をし続けた。無数のターゲットを相手に立ち回る箒の後ろにピタリと付き、ランスで何度も小突くのだ。無論、それは嫌がらせなどではない。箒が晒した隙や無駄な動きに対し、的確に、動きを制するように突く。楯無自身が、箒の矯正器の役割を果たしているのだ。

悪いクセがついてしまったら、それを出来なくさせればいい。しば

らく続ければ、自然とクセは消える。単純なことではあるが、それを訓練中、全身に意識を巡らせ悪癖の全てを封じ込むとなれば、その技量はいかほどか。武の道を志す箒には、どれほど凄まじいことがよく分かる。

「しかしこうも指摘されると、未熟を思い知らされます。精進しなければ……」

「まあ、仕方のないことだけどね。今まで箒ちゃん、ずっと訓練機だったんだから。軽自動車しか乗ったことない人が、いきなりF1カーを運転できないでしょ?」

「まだ車の免許を取れる歳じゃないんですが」

「じゃあ、原付バイクしか——」

「あの、私は運転免許は何一つ持っていないので……」

困惑する箒の様子に、クスクスと笑う楯無。真面目過ぎる箒があまり思い詰めないようにとの配慮か、あるいははからかって楽しんでいただけか。

どちらも有り得るから厄介だ。それが箒に限らず、楯無を知る大半の人物の認識であった。

「とにかく、まずは慣れないとね。箒ちゃんは、今回のタッグマッチで活躍したいでしょうけど……もつと長い目で見ないと。もちろん、活躍するなんて言わないわ。ただ、焦らないでほしいの。どんなに良い鉄だって、丁寧に鍛えないと折れてしまう。そして一度折れてしまえば、もう元通りにはならないから」

「……そう、ですね。はい。ありがとうございます」

ちよつとずるかったかな、と楯無は思った。だがこの言い方が、箒には効果的であろうことは想像に難くなく、事実効果的であった。

箒は真改を、刀として折れているとは微塵も思わないが。

それでも、彼女の喪失が、人の身に余る無茶の代償であることは知っている。

(いつか、真改に勝つ……そのためには、少しずつ積み重ねていくしかない。焦って一足飛びに駆け上がれば、足を踏み外すだけだ)

真改もまた、いつか箒たちが自分を超えることを楽しみにしている

ふしがある。そしてそうなれば、自分を超えた幼なじみたちに嬉々として挑むのだろう。

そんな滅茶苦茶な有り様が容易に思い描けて、箒はくすりと笑った。その時に真改が浮かべるだろう、獰猛で美しい笑み。それを真っ正面から見るためには、篠ノ之箒という刀には、ほんの僅かな歪みも、たったひとかけらの刃こぼれも許されない。それがあつては、届かない。

だから今は、無理はしない。楯無に休めと言われれば、素直に休むのが最良だ。

「それじゃ、お休みなさい。ちやーんとストレッチして、体をほぐしてね?」

「はい、ありがとうございます。……失礼します」

「マッサージとかも効果的よねえ。一夏くんにしてもらったら?」

「にや、なにを言ってるんですかつ!!」

「ふっふっふー、照れなくなっただっていいじゃない。なんでも一夏くん、マッサージの腕前がプロ級だとか……専属の整体師がいると助かるわよ?」

「けけけ、結構ですっ! ほ、本物のプロならまだしも、素人に……それも、よ、よ、よりによつて、一夏につ……!」

(……面白いなあ、この子)

箒は顔を真っ赤にして、早足で去っていく。その後ろ姿を手を振って見送り、楯無は端末から、今日測定した箒のデータを呼び出した。

(……IS適性、S……尋常な数値じゃないわよね、これ)

ほんの数ヶ月前まで、確かに適性はCランクだった。それがBランク、Aランクをすっ飛ばして、Sランク。有り得るのかどうかはわからないが、少なくとも前例はない。それこそが、楯無が箒を気にかける理由の一つであった。

(時期的にも、多分紅椿が原因なんでしょうけど……大丈夫かしら。シンクロも度が過ぎれば、引きずり込まれてしまう。せめて少しずつ、身体と心を慣れさせていかないと……)

人機一体。それは確かに、ISの操作には必要不可欠だ。だがも

し、一体となった人と機械が、分離出来なくなってしまえば？

恐ろしいことに。それには、前例がある。

(……まあ、束博士の妹だし、致命的なことにはならない……と、思いたいけど)

残念ながら、I S コアはそれ自体がブラックボックスの塊だ。楯無の知識と人脈をもってしても、出来ることは多くない。ならば出来ないことに頭を悩ますよりも、出来ることを一つずつ実行していく方が重要だ。

(……お願い。無茶だつてわかつてる。でも、お願いだから——焦らないで)

祈りを込めて、端末を胸に抱く。そこに表示される数値が、どうか悪い結末を呼ぶものではありませんように。

「……あーあ。情けないなあ、私……」

それは、一種の代償行為だった。妹との距離をどう埋めれば良いか分からないから、他人の世話を焼く。どことなく簪と境遇の似ている筈に手を差し伸べることで、尊厳を満たす。

その浅ましさに気付かなければ、どれだけ楽だったろう。だが聡明な楯無には、目を背けることさえ出来ないほどに明白な事実だった。

「……ごめんね、筈ちゃん……簪ちゃん……」

そして、今回。楯無は大勢を巻き込んで、簪を表舞台に引つ張り出した。

きっかけが欲しかったのだ。膠着し、その状況に慣れてしまった姉妹の距離を変えるために。

吉と出るか凶と出るかはわからない。だが、何かが変わるかもしれない。

妹と、面と向かって話したい。そんな、小さな願いだった。

(……でも)

だが、筈が心配なものも決して嘘ではない。何より、大会で手を抜くつもりは毛頭無かった。そんなことをすれば、きつと怒られてしまう。

簪は今、一夏と共に一生懸命頑張っている。出来ることなら、決勝

で戦いたい。自分は雲の上の存在などではなく、あなたの姉なのだと、気付いて欲しい。

だから、全力で。精一杯ぶつかろう。

「……うん、よしっ」

努めて明るく頷いて、楯無は俯いていた顔を上げた。今日の訓練は終わったのだから、まとめと反省、そして明日の準備をしなければならぬ。それと心の潤いに、少しばかりのいたずらを。

「ふっふっふ……さあーて、どうしましょうかしらねー♪」

そう言つて浮かべた笑みは、誰もが知るIS学園生徒会長、更識楯無の笑みだった。

「……………あ、あの……………山田先生……………」

「はい。なんですか、更識さん？」

「まだ……………続けるんですか？」

「もちろんです！　ようやく形になってきたんですから！　鉄は熱い内に打て、です！」

「……………」

気合い満々で言う真耶に、簪はげんなりする。

既にアリーナの使用時間の終わりが近くなっているが、真耶が訓練終了を告げる様子はない。使用時間いっぱいまで——あるいは教師権限で延長してまで訓練を続けるつもりなのは明白だった。

(こ、こここまでスパルタだなんて……………思ってたなかった……………)

涙目で射撃を続ける簪のすぐ後ろには、巨大なジェネレーターが鎮座していた。それから伸びるコードは打鉄式に繋がられ、春雷により消耗したエネルギーをすぐさま回復させている。

「いやあ、私は実弾兵器ばかり使っていましたけど、エネルギー兵器も便利ですね！　リロードしなくていいですし、何より薬莖を片付けなくていいので、訓練に集中できますね！」

「……………そう……………ですね……………」

この小さな身体のどこにこんな元気が詰まっているのか——一瞬そう思ったが、簪はすぐにその先を考えることをやめた。

真耶に失礼だと思ったからではない。くだらなくも悲しい答えに行き着いてしまう気がしたからだ。

「では、ターゲットをランダムに表示させますので、順番に、残さず撃ってください。もぐら叩きの要領ですね」

「はあ……」

簪はもぐら叩きをやったことがなかったが、それを言う気力はもはやない。そもそももぐら叩きは分からなくても、どのような訓練かは想像がつくので言う必要がない。

むしろ疲れきっていて、なんでもぐらなんか叩かなきゃならないんだとわけの分からないうことを考えていた。

「では、スタートです！」

「っ！」

高らかに宣言すると同時、ターゲットが一つ現れる。簪は慣れた様子で狙い、ほぼ同時に発射。眩い光がターゲットを貫き破壊する。

その瞬間、二つ目のターゲットが現れた。

「くっ……い！」

撃破と同時に現れる、新たなターゲット。どこに現れるのか事前に察する手段がないため、現れてから狙うしかない。

そして僅かではあるが、ターゲットを狙うために砲身を動かす以上、そのたびに機体が引つ張られる。重心も僅かに動く。一回一回は無視出来る程に小さな影響だが、何度も続けければ、体勢を整える間もなく続ければ、次第に大きくなっていく。

身体がブレれば照準もブレる。照準がブレれば当たらない。照準のブレを抑えるためには身体のブレを抑える必要がある、そのためには常に正しい射撃姿勢を維持しなければならない。

それが、想像以上に難しい。

「くっ、はっ、ふっ……い！」

ペースを落として一息つこうなどと考えれば、その瞬間真耶に見抜かれ初めからやり直した。簪は集中力を自身の限界まで高め、指の先



にまで意識を張り巡らせる。

銃口をターゲットに向ける。僅かな動きだからこそ、無駄が顕著に表れる。

その無駄を、徹底的に削ぎ落とす。

「まだ、まだあ……！」

照準の速度を落とさぬまま、崩れつつある体勢を立て直す。少しずつ、少しずつ。

「……………っ!!」

——そして。

「……………はい！ 大変、よくできましたっ!!」

「……………っ！ はあ！ はあっ！」

百以上のターゲットを破壊し、ようやく真耶から合格を告げられる。評価は満点、全ての的の中心を射抜いたことを表していた。

——やった。疲れ果てて腕を持ち上げることは出来なかったが、心の中でガッツポーズ。随分と久し振りに得た達成感に、崩れ落ちながら笑顔になる。

「素晴らしいです、更識さん！ 姿勢がとてもしっかりしてましたよ！」

「あ、ありがとうございます……山田先生の、ご指導のおかげです……………」

「そんなことはありませんっ！ これも全部更識さんの頑張りの結果です！」

「は、はあ……………」

自分の成長を喜んでくれるというのは嬉しいものだ。だがこうまでテンションに差があると、疲れた身体には堪える。

「いやあ、思い出してしまいます！ 私も候補生時代は、時間を忘れて訓練に……………」

「……………？」

「……………時間、を……………忘れて……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あああああああああああつ!!!」

「!?!」

突然絶叫する真耶に、簪が驚く。やることはないのその辺でターゲツト斬つてた一夏も何事かと戻つて来た。そんな二人の様子も目に入らないようで、真耶はいつもの調子に戻りわたわたしだした。「じじじ、時間っ…………もうこんな時間になってますー!? ああつ、アリーナ閉めないと! そういえば書類もいくつか残ってました!?! ああどうしよう、明日朝一で会議なのにー!!」

大慌てでアリーナから飛び去って行く真耶。その後ろ姿を呆然と見送つて、一夏がぽつりと呟く。

「いい先生なんだけどな」

「…………一生懸命すぎる…………」

「そんな感じだな」

「悪いこと…………しちやったかな…………」

「いや、そんなことないんじゃないか? 簪さんに教えてる時、山田先生、すごく楽しそうだったぜ」

「…………そう、だね」

確かに、訓練中の真耶は楽しそうだった。その後大変なことになっているようだが、そんなドタバタした日々も、きつと楽しいに違いない。

少なくとも簪は、ほんの少し前の静かな日々よりも、今の喧しい毎日の方が好きだった。

「んじゃ、俺たちもあがるか」

「人…………もう、残つてないね…………」

「そりゃあ、もう時間ギリギリだからなあ。後片付けとか考えれば、もう上がつ…………て、ない…………と…………」

「……………………あ」

ふと重大な問題に気付き、二人して硬直する。

視線の先には、ついさつきまで使っていた、巨大なジェネレーターがあった。

「……………」

言うまでもなく、それは学園の備品だ。それも普段はピットの倉庫にしまつてある、教師の許可と立ち会いがなければ使用してはならない代物。

この場合における立ち会つた教師とは勿論真耶であり、倉庫の鍵も彼女が持つて来た物であつた。

そしてたつた今、彼女が持つて行つてしまつた物でもある。

「……………」

これ、どうやって片付けよう。

半ば思考停止状態に陥つた二人が居るアリーナ内に、無情にも、使用時間終了のブザーが響いた。

## 第86話 戦闘開始

昔のことを思い出した。

私たち姉妹が、まだ小さくて。

お姉ちゃんが、楯無ではなかった頃を。

ある日、私は泣いていた。大きな庭の隅っこで、小さな声で泣いていた。

ひつく。ひつく。

子供なんだから、もっと大きな声で泣き喚けばいいのに。まだ、それが許される歳なのに。

強い子だったわけじゃない。意地を張ってたわけでもない。ただ私は、良い子でいたかった。手の掛からない子でいたかった。だから一生懸命、声を殺して泣いていた。

泣いているところを、誰にも見つからないように。

心の奥では、誰かに見つけて欲しいのに。

どうしたのって、声を掛けて欲しいのに。

助けて、欲しいのに。

ひつく。ひつく。

庭を美しく彩る木々に隠れて、私は泣いていた。

見つけて欲しいのに、隠れていた。

隠れているのに、見つけて欲しかった。

きつと私は、自分でも気付かないうちに、演じていたんだ。誰にも迷惑をかけまいと、健気に耐える女の子を。

——どうしたの？

そんな時、望んでいた声をかけられた。振り向くと、そこには予想していた通りの人が居た。

——どうしたの？ 簪ちゃん。なにかあったの？

問われて、私は目の前にある木を見上げて、その枝の一本を指差す。そこには、青い風船が引つかかっていた。前日のお祭りで買ったもらった、大きな風船。それを持って庭で遊んでいたら、うっかり紐を離してしまったのだ。

そのまま飛んで行ってしまえば、諦められたかもしれない。けれど枝に引つかかり、手は届かないが目の前にあるという、中途半端な状況になってしまった。

諦めることもできず、かといって自力で取りに行くこともできない。だから、誰かの助けを求めている。

たかが風船。単に子供特有の執着心が向いているだけで、本当に大切な物なんかじゃないのに。

それでも。泣いている私を見て、お姉ちゃんは笑顔で頷き、躊躇いもなくこう言った。

——大丈夫だよ、簪ちゃん。お姉ちゃんが、取ってきてあげるから。え、と驚き、危ないよ、と言う間もなく。お姉ちゃんは木に飛びつき、登り始めた。木は立派な老木で、幹は太く幼い子供が登るには厳しい。でもお姉ちゃんは、一生懸命木にしがみついて登って行く。

数分して、ついに目的の枝に辿り着いた。細い枝に両手を着いて慎重に渡り、先端に引つかかった風船の紐を掴む。

——ほら、簪ちゃん！ やったよ、取れたよ！

まるでそれが、宝物であるかのように。お姉ちゃんは風船を掲げて、満面の笑顔を私に向けてくれた。その姿は、幼い私にとって、まさにヒーローだった。

私が困っている時、泣いている時、いつも真っ先に駆け付けてくれる。私が我が儘を言う前に、全部察して助けてくれる。まさに、正義のヒーローそのものだった。

ありがとう、お姉ちゃん。

泣き顔を笑顔に変えて、お姉ちゃんにお礼を言う。するとお姉ちゃんは、私よりも嬉しそうな顔になって、大きく頷いた。

その時だった。

お姉ちゃんの乗る枝が、乾いた音を立てて折れたのは。

「……………」

過去を見ていた意識が、現在に戻る。

結局お姉ちゃんは、後遺症や傷痕の残るような怪我はしなかったけれど。それは運が良かったからで、一歩間違えれば死んでいたっておかしくなかった。

今思えば。あの日を境に、私たち姉妹の関係は、何かが狂い始めた。お姉ちゃんは今まで以上に私を守ろうとし、私は守られることを苦痛に感じつつ、甘えていた。

「……お姉ちゃん……」

ずっと、守られてきた。そんな自覚もなく、鬱陶しいと感じることさえあった。お姉ちゃんが楯無になると聞いて、ほっとした。ああ、これで自分が、この家を継ぐ必要はないんだ、と。お姉ちゃんが家のことで忙しくなれば、私に構うことも少なくなるだろう、と。

「……今まで、ごめんなさい……」

ずっと、ずっと守られてきた。私はそれを受け入れて、自分で戦うことをしてこなかった。そのクセイぎ困難にぶつかれば、自分に抗う力がないことを、お姉ちゃんの過保護のせいにした。

——もう今日限り、全部終わりにする。

「……これからも、ごめんね」

私たちは、姉妹なんだ。更識の歴史だとかお役目だとか、お姉ちゃんが当主で楯無だとか、そんなことはただの言い訳。

私たちは、姉妹なんだから。お互い言いたいことを言って、やりたいうことをやって、我が儘を言ってだだをこねて、時にはケンカもして。そんな、普通の姉妹らしくすればいいんだ。

「……私、もう」

だから、まず最初に。

今まで一度も、やったことがないことをしよう。

お互いの気持ちを知るために。お互いの想いを伝え合うために。くだらないしがらみや張ってしまった意地を全部リセットして、仕切り直すために。

「今日で……良い子、やめるから」

馬鹿みたいに。子供みたいに。

一生懸命の、姉妹喧嘩をしよう。

「行けるか？ 簪さん」

「……うん。大丈夫」

大きな声で喚き散らそう。腕を振り回して暴れよう。何も考えず、ただ心のままに。

更識簪の何もかもを、一つ残らずぶっつければ。

きつと、届くと思うから。

きつとまた、笑い合えると思うから。

「……行くよ、お姉ちゃん」

今日が私の、初めての公式戦。けれど自分でも予想外に、あまり緊張はしていない。

横を見ると、隣に立つ織斑くんの顔が鋭く引き締められ、精悍になっっている。きつと私も、似たような感じなんだろう。

ああ、そうか。

これが、「気合いが入る」ってことなんだ。

「絶対に、負けないから——！」

良い姉になろうと思った。自慢の姉になろうと思った。

だから、なんでも頑張った。勉強でも運動でも、誰より一生懸命に取り組んで、誰よりも良い結果を出した。それがさも当然であるかのように、余裕を演じて、飄々と振る舞った。

喜んでもらいたくて、料理を練習した。教えてあげられるように、いくつも習い事をこなした。キレイだと言ってくれたから、もつとキレイになろうと自分を磨いた。

そうやって、ずっとずっと積み重ねてきた。気が付けば、色々な人が認めてくれて、国家が評価してくれて、世界に挑む権利まで与えてくれた。

そして、気が付けば。

望んでいた場所は、とつくに通り過ぎてしまっていた。

ある時最愛の妹は、私を恐ろしい怪物のように見ていた。  
私は結局、ずっと先の未来を見据えているつもりで。  
足下すら、見えていなかった。

……でも。

でも、まだ手遅れじゃない。まだ、やり直せる。

私は、まだ。

諦めていない。

「はぁーい、箒ちゃん。調子はどう？」

「万全です。今この瞬間からでも戦えます」

「頼もしいわね。これじゃあ私がすることはないかな？」

「何を言っているんですか。相手はいずれも強敵ばかり、楯無さんの力がなければとても勝ち残れません」

「……そっか。それじゃ、私も頑張らないとね」

ようやく手繰り寄せたチャンス。私を慕ってくれる後輩たちを騙すようなことまでして、ここまで来た。

箒ちゃんは気合い十分。自分が決勝まで行くこと、一夏くんたちが決勝まで来ることを微塵も疑っていない、闘志溢れる眼をしている。箒ちゃんは……本音ちゃんから聞いたところによると、緊張してはいなさそうだけど。

……いえ、本音ちゃんがそう言うんだもの。きっとそうなんだろう。

(うーん……そうになると……)

もしかしたら。

このタッグマッチの出場者で一番緊張してるの、私かもしれない。開会式で挨拶しなくちゃいけないのに……噛んだらどうしよう。

……あれ？ そんなこと考えてたら、余計に緊張してきたような？ (あちゃー……こんなに緊張するの、久しぶりだわ。えーと、どうやって鎮めればいいんだっけ……?)

心拍数が上がっているのが自分でもわかる。だって鼓動が聞こえるくらい、速く大きくなっているんだもの。



視界が少しずつ暗く狭まり、音が遠ざかって行く。うーん、マズい。このままじゃ満足に戦えない。

まいったなあ。今回ばかりは、途中で負けられないんだけど。

「楯無さん」

「ん？ なあに、箒ちゃん？」

「そういう時は、手の平に人と三回書いて飲み込めばいいんですよ」

「……………」

…………あれ。見抜かれてる？ 箒ちゃんの勘が鋭いのか、誰が見てもわかるくらい、顔に出っていたのか。

まあ、どつちにしても。

「…………ぶ。あはははははー」

「ど、どうしました？」

「いえ、なんでもないっ…………あはははははー！」

「??？」

必死に平気なフリをしていたのが馬鹿らしくなってしまった。

ちよつと冷静になつて考えてみれば当然だ。これから姉妹喧嘩をしに行こうつていう時にまで、取り繕わなくてもいいじゃない。

「ふふふっ…………ありがとう、箒ちゃん」

「は、はあ…………どういたしまして…………？」

そう。今日の私は、ロシアの国家代表としても、IS学園の生徒会長としても、更識家当主、更識楯無としてもでもなく。

箒ちゃんのお姉ちゃんとして、戦うんだ。

(うんうん、何事も考え過ぎはよくないわよね)

すうっ、と、鼓動が鎮まつていく。箒ちゃんの不器用な気遣いのおかげで、緊張が解かれていく。

手の平に人、か。せつかくだし——

「それじゃ、箒ちゃん。書いて？」

「は!? いや、それくらい自分で——」

「ええー、けちいー。一夏くんには二つ返事でやってあげるクセにいー」

「そそそしよ、そんなことはしませんっ!!」

「え？ ああそうね、ごめんなさい。書いてもらう方が——」

「だあああああああああああつ!!」

顔を真っ赤にして、恥ずかしがっているのか怒っているのか。素直なのか、それとも素直じゃないのか。

そんな箒ちゃんの様子は、本人は気付いてないかもしれないけど、とても楽しそうで。見ていると、力が湧いてくる。元気を分けてもらえる。

「ああ、もうっ！ 楯無さん、開会式で挨拶をするのでしよう!? そろそろ行かないと間に合いませんよ!」

「あら、本当だ。それじゃ、箒ちゃん。式が終わったら、先にピットで待っててね」

「分かっていきます。まったく……」

膨れっ面で怒る箒ちゃんが可愛くて、もうちょっと弄くりたいところだけど。本当にそろそろ行かないとマズいので、箒ちゃんと分かれる。

開会式での挨拶。それで今日の、生徒会長としての役目はお終い。閉会式もあるけれど、そんなのは後で考えればいい。

さあ、行こう。人生初の姉妹喧嘩、その開始を告げに。

「——では、挨拶はこんなところで。早速対戦表を発表します! じゃじゃーん!」

楯無がバツ、と扇子を振り上げると、背後に巨大な空間投影ディスプレイが表示される。出場するペアは五組にぼっち一人なので、トーナメント表を全て確認するのに、それほど時間は掛からない。

特に、注目の二チームの名は誰もが一目で発見した。

「二回戦、第一試合……織斑一夏&更識簪 v s 篠ノ之箒&更識楯無……!」

「う、うおおおおお!? いきなりの姉妹対決!? これは燃えるっ!!」  
どこかから雄叫びのような歓声が聞こえたりしてくる中、その当事

者の四人は全く同じことを考えていた。

——空気読めよ。

(い、一回戦第一試合で、本命と当たるとか……なんか前もこんなことあった気がするぞ……本当に、ランダムセレクトなんだろうな？ 中に根性ひん曲がった人とか入ってないよな？)

(しよ、初戦からなんて……お姉ちゃんと戦うために、決勝まで行こうと思っただのに……なんだか、せっかくの気合いが空回りする感じ……た、確かに、確実にお姉ちゃんと戦えるのは、良いかも……しれないけど……)

(ええい、よもや初戦で当たるとはっ！ こ、これでは、決勝で会おうなんて思っていた私が馬鹿みたいではないか。いや、実際には言っていないからセーフ……ああそう言えば似たようなこと楯無さんに言っってしまったる!?)

(ちよ、ちよつとおく……確かに数は少ないから、こうなる可能性はそれなりにあったけど。でもまさか本当に来るだなんて思わないでしよ？ ああもう、たつちゃん今日の運勢は、あんまり良くなさそうね)

四人が四人、顔を引き攣らせながらトーナメント表を眺める。そんな心中を知らず、会場は早くも盛り上がっていた。

「ねえねえ、どっちが勝つと思う？」

「そりや会長でしよ。なんせ学園最強、実績が違うわよ実績が」

「でもでも、織斑くんの零落白夜って、当てれば倒せるんでしよ？」

「案外あつさり勝つちやったりするんじゃないかなあ」

「まさかあ、そんな簡単に当たるわけないじゃん。会長はもちろん、篠ノ之さんだって剣道部のエースだし、機体はあの束博士のお手製よ？」

「うーん、確かにそうなんだけど……私としては、会長の妹さんが気になるかな。今まで試合に出てないから、性能も実力も未知数だし」

わいわい。がやがや。

騒ぎつつ、トーナメント表の残る組み合わせも確認していく生徒たち。

一回戦第二試合は、凰鈴音&セシリア・オルコットvsシャルロット・デュノア&ラウラ・ボーデヴィツヒ。二年生のフォルテ・サファアと三年生のダリル・ケイシーのタッグは第一試合側のシード、一回戦の敗者と井上真改の即席タッグは第二試合側のシードだ。

真改のパートナーが空欄になっているのを見て、織斑千冬は席を立った。まさか生徒や来賓が大勢居るこの場所で笑い転げるわけにはいかないからだ。内心では必死に笑いを堪えていながら、表面上は誰が見ても真顔そのもの。鋼の自制心の為せる技であった。

「そ……それでは、選手の皆さんは、それぞれのピットへ移動してください！ 試合開始は三十分後、全力を出し切れるよう、しっかりとウォーミングアップをすること！ 解散！」

なんとか正気を取り戻した楯無の合図で、生徒たちは一斉に移動する。来賓——各国の政府や軍関係者、IS関連企業の者たちも、目当てとなる者の試合がどのアリーナで行われるのかをチェックし、素早く移動を始めた。

「……………」

第三アリーナのBピット。そこが今回、真改の控え室に設定された部屋であった。

「……………」

普段は機体の調整やら意見交換やらをする生徒たちで姦しいこの場所も、一人しか居ないのでは、しかもその一人が真改とあっては静かなものだ。何度も訪れている筈なのに、こうも様子が違うのではまるで見知らぬ場所であるかのように錯覚する。

そんな小さなことですら、緊張を呼ぶ要因となり。

そして真改にとって、緊張とは精神を研ぎ澄ませ力を高めるものである。戦闘に限ったことではあるが。

「……………」

心臓が一つ鼓動するたび、大きく早くなっていく。

それはまさに、自身を鼓舞する戦太鼓だ。この音が途切れぬ限り、己はいつまでも戦い続けるだろう――

「……………く、く……………」

――ああ、全く。己の「病氣」も、随分悪化したようだ。

そんなことを思いながら、真改は笑みを浮かべる。もし今ここに一夏たちが居れば、冷や汗を流しつつ苦笑を浮かべるだろう。

そんな、まだ自分のパートナーが決まってもいないのに既に気合いMAXな真改であった。

が。その気合いに水を差すように、プシュー、と気の抜けた音が鳴る。ピットの入口が開いた音である。

……本来ならば一夏が密かに感動するような機械的な重低音が鳴る筈のだが、ある少女が開ける時だけこのような音になる。IS学園七不思議の一つと言える怪奇現象だ。

「あろ〜。本音ちゃんできすよ〜」

「……………」

せつかく高めた気分を急降下させられ、真改は微妙な顔をした。ピットは関係者以外――つまりはこの大会において機体の整備担当を依頼された生徒以外は入れないのだが。

思い出してみれば、真改はその整備担当を、本音に依頼していたのであった。

「お〜つす、いのちち〜。本音ちゃんのお出ましだ〜い」

「……………」

真改が微妙な顔をしたのは、本音のテンションが真改のそれと真逆であったからだけではなく。お前こんなところで何やってんだ、と思ったからでもあった。

「……………」

「んん〜？ だいじよぶだいじよぶ〜、へーきへーき〜」

「……………」

幼なじみは放っておいていいのか。お前の助けを必要としているのではないのか。

無言の問いかけに、本音は笑顔で答える。

「まあ、かんちゃんにはおりむーがついてるしく。私はむしろお邪魔虫なんだよね」

「……………」

簪は初めての戦闘だ、お前が傍に居てやれば心強いのではないか。暗に、自分を心配しているのならそれは無用だ、ということだったが、そう返されては何も言えない。真改は黙って、本音の心遣いを受け入れることにした。

「それに、もともとかんちゃんは整備とか得意だったしく。整備課のおねーさんたちも、おりむーのおかげで協力的だしく。私は居なくても平気なんだよね」

「……………」

そして自分が必要とされなくなることを、こんなにも嬉しそうに語る本音を、真改は心から尊敬していた。

絶対に顔には出さないが。

「……………」

「ん。で、いのつち。朧月、だいじよぶ？ どこか悪いところない？」

「……………」

「ふむふむ、さすが社長作ですな。よきかなよきかな」

「……………」

本音の問いに首を振って答える真改に、本音は満足そうに頷く。それに対し真改は、やはり微妙な顔をした。

機体の製作だけでなく、整備の技術も申し分ないのだが。それでもあの会社は、手放しに信頼してはいけない気がする。

「あ、そういえばね。優勝タッグだけど、いのつちとかんちゃんに賭けたよ」

突然、本音が懐から紙切れを二枚取り出し、両手に持ってヒラヒラと振る。今回の大会では優勝タッグを予想し食券を賭ける賭博が生徒会主催教師公認で行われるのだが、その券のようだ。真改の並外れた動体視力は、揺れる紙の片方に自分の名前が記されているのを確認

した。

「……倍率は……？」

「えつとねく、いのつちが一番下く。んで、次がかんちゃんとおりむー」

「……く……」

パートナーが決まっていけないという状況は、やはり誰の目にも相当な不利と映るようだ。それは紛れもない事実であり、真改としても大穴が優勝するという展開は嫌いではないので、むしろ喜ばしいことのようにだが。

「すごいよく、どつちが当たっても今年はウハウハだよ。遊んで暮らせるよー」

「……」

万馬券とはいかないまでも、かなりの高配当だ。しかも結構な枚数を買っている。本音はギャンブルをやってはいけないタイプだと、真改は確信した。

本来ならば友人として苦言を呈さなければならぬところだが、今回ばかりは黙認する。なにせその券は、当たる可能性が大いにあるのだから。

「……取り分……」

「んんん？ ええつとねく、ソーだねく。いのつちのご飯に、毎日三食とも、一品おかずが追加されますー」

「……乗った……」

こういった遣り取りも、楽しいものだ。そして緊張とはまた違う形で、自分を高めてくれる。勝利に対し報酬が与えられるとなれば、一層気合いが入るのは当然だ。

「ふっふっふ。食堂のスイーツコンプ、前からやりたかったんだよねく。夢が叶うく♪」

「……」

あのラインナップを全部食うのか……。

メニュー表一冊を埋め尽くす大量のスイーツ群を思い出し、真改は胸焼けしそうな気分になった。ちなみに、真改が好きなのは鮭を初め

とする焼き魚である。甘味一色になりかけた思考を数々の新鮮な魚介類に置き換えることでどうにか正気を保ち、戦意を維持する。

助太刀に來たのか邪魔しに來たのかよく分からない本音に、真改は苦笑を浮かべた。だが、このマイペースさが、真改に思い出させてくれる。己が戦い以外のことも楽しめる、人間なのだと。

(……………まったく……………)

長く戦い続けた真改にも初めての、不思議な感覚だった。

闘志は十分に漲っている。なのに心は穏やかなまま、微かな乱れもない。今ならば、かつてないほどの剣を振るうことが出来るだろう。

「いのっち、楽しそうだね〜」

「……………」

その言葉を、犬歯を剥き出して笑うことで肯定する。闘争の喜びだけは隠すつもりが全くない真改に、今度は本音が苦笑を浮かべた。

その時である。

どこか遠くで轟音が鳴り響き。アリーナが——否、学園全体が、凄まじい衝撃に揺れたのは。

「きゃっ……………!?!」

「っ!」

バランスを崩した本音を咄嗟に支えた直後、ピット内の照明が消え、瞬時に赤色に照らし出される。非常事態を素早く、明確に伝えるための警報。

赤く染め上げられた部屋と、真改の直感。その二つが導き出す答はただ一つ。

——敵だ。

「い……………いのっち……………」

「……………」

不安げに見上げてくる本音に、首を横に振って答える。

本音は否定して欲しかったのだろうが、真改には事の重大さを誤魔化すことは出来なかった。

今、IS学園は。



襲撃を受けているのだ。

「ど、どうしよう……？」

「……………」

困惑する本音とは対照的に、真改は、素早く思考を切り換える。  
闘争の為の、灼熱の思考から。

殺し合いの為の、絶対零度の思考に。

その変わりように、本音は悲しくなる。真改があんなにも楽しみにしていた勝負が潰され、穢らわしいモノに置き換えられてしまった。

「……………」

「…………？」

だが。

布仏本音は、それで心折れるほど弱くはない。状況が変わってしまつたのなら、それに併せて対応を変えるだけだ。

「わ、私……観客の人、の……避難とか、手伝ってくるから……いのっちも、頑張つてね」

「……………」

その精一杯の強がり、やせ我慢を、真改は見ても見ぬふりをする。

本音が真改を知るように、真改も本音を知っているのだ。本音は真改のように戦えないから、他の友人たちのように戦えないから、支える道を選んだ。

井上真改が、いついかなる時も、全力で戦えるように。

「……………うん。でも……無理は、しないでね」

「……………承知……………」

「それじゃ……………やくそく」

本音は小指を立てた右手を持ち上げ、真改に差し出した。一瞬きよんとした真改も、すぐに意図を察して右手を出す。

本音は嬉しそうに笑いながら、お互いの小指を絡めた。

「ゆ〜びき〜りげ〜んま〜んう〜そつ〜いた〜らは〜りせんぼ〜んの〜ます〜」

「……………」

「ゆ〜び、」

「切った……」

「！」

流石の本音も、まさか真改が応えてくれるとは思っていなかった。驚く本音の顔を見て、真改はしてやったり、という笑みを浮かべる。

「……てひひ〜」

「……………」

僅かに残っていた不安も拭われた。真改は勝負を邪魔されたことで怒ってはいるが、冷静だ。必ず無事に帰って来る。

後は本音が、自らの役目を果たすだけだ。

「それでは、布仏本音と、井上真改〜」

「……………出撃する……………」

二人並んで、ピットを出る。途端に、悲鳴や怒号が耳に届いた。観客席はかなりの混乱に陥っているようだ、例え直接の攻撃を受けなくても、怪我人が出る可能性は高い。

ピットに続く廊下、分厚い壁に囲まれたこの場所にすらこうも明確に伝わるのだ。観客席や出口周辺は、最早理性の入り込む余地などないだろう。

それでも、やるのだ。出来ることを精一杯に。それが、本音の決めたことだから。

「……………」

「……………うん」

目を閉じて、深呼吸。その数秒で覚悟を決め、目を開ける。その本音の姿を見て一つ頷き、真改は朧月を展開、廊下を一気に飛び抜けて行った。

見送った本音は十六夜を展開し、走り出す。生徒会役員として、被害を最小限に食い止めるために。

『……………始まったようね』

「ん」

突然の襲撃を受け、各アリーナが黒煙を上げるIS学園。その上空、青い空にぽつんと一つ、黒い影が浮かんでいる。

『初陣だけど……大丈夫？ 緊張してない？』

「平気」

『そう、良かった。まあ、あなたには訳ない任務だけど、気をつけて』  
「了解」

影は、黒い装甲を身に纏った少女だった。整った顔には表情がなく、はつきりと発音される声には抑揚がない。

人として何かが足りていない、機械的な少女だった。

『無事帰還することが最優先よ。もし危ないと思ったら、迷わず、指示を待たずに逃げなさい。重要な任務ではあるけれど、あなたの身には代えられないのだから』

「ん。気をつける」

『よろしい。それじゃあ、行ってらっしゃい』  
「ん」

少女は最後に作戦目標を見直し、自身の認識に誤りがないことを確認する。それを終え、一つ頷き。

「シミュアルツェア・リート黒い歌」、作戦開始」

獲物に襲い掛かる、隼の如く。

IS学園へ向けて、一直線に落ちて行った。

## 第87話 人形劇

「何機だ!? 敵は何機居る!!」

「確認中……敵性反応、全部で……二十四っ!!」

「につ……!? 馬鹿な、国を滅ぼせる数よ!? どうやってそれだけの数を揃えたの!?!」

「そんなことは後だ、今は事態の収束に全力を注げ! 生徒と来賓を避難させろ、最優先だ!」

「戦技教官、総員IS格納庫へ! 着いた者から装着し、迎撃に出てください! 道中、封鎖されている扉は……構いません、全部ぶち抜きなさい!! 指向性爆薬の使用を許可します!!」

「了解! みんな爆薬は持ったな!! 行くぞオ!!」

「敵が向かってるのはアリーナだけ!?!」

「はい、各タッグの控えているピットに向かっています!」

「敵機の形状を確認、以前襲撃して来た無人機の発展型と思われる! 四種六機ずつ!」

「フォーマンセル、六チームか……厄介なっ……!」

突然の襲撃を受け、教師たちの間で指示と情報が飛び交う。混乱せずに各々の役割を果たすことは流石と言えたが、それでも余りに事態が急過ぎた。

なにせ、この襲撃は。

国とIS学園、両方の防空網に、全く反応がなかったのだから。

「完全に後手だな……くそっ!」

連続発生している襲撃事件により、防空網は数段強化されていた。そしてそのたびに、それを更に上回るステルス能力で奇襲を仕掛けて来る。

間違いなく、この「敵」は国家と学園を上回る技術を持っている。だというのに、襲撃はいつも中途半端、戦力の逐次投入だ。それが愚策であることは分かっている筈。

これでは。

これでは、まるで――

「すまない、遅くなった！」

「織斑先生！」

戦場さながらの様相を呈する管制室に、凜とした声が響く。  
ブリュンヒルデ  
世界最強、織斑千冬が到着したのだ。

IS学園内で緊急事態が発生した場合、作戦指揮の全権は一時的に千冬に移譲される。単純な戦力としてもさることながら、その類い希な戦闘センスは部隊運用においても遺憾なく発揮される。そして皆がそれを知っているため、千冬の指示となれば従わない者はいない。何より、千冬の覇気に満ちた声には、聴く者を奮い立たせる力がある。

「タツグマッチ参加者との通信は？」

「途絶えています、ジャミングを受けているようです！ 発信源は……が、学園内!! 大変です、学園の防衛システムの一部が乗っ取られてますっ!!」

「ち……一機でアリーナを掌握するんだ、これだけ居れば当然か……」  
忌々しげに呟きながら、千冬の思考は高速で打開策を導き出す。

出来るのなら、その策を取りたくはなかったが——そんなことを言っただけなら状況ではない。それに、感情を抜きにして考えれば、その策以上に確実に迅速な策は思い当たらない。

「急いでシステムの復旧を——」

「無駄だ。我々の技術とここの設備では、恐らく不可能だろう」  
「し、しかし、このままというわけにはっ……」

防衛システムの奪還は必要不可欠だ。それが為されなければ、事態は一向に改善されない。不可能となれば、もはや「詰み」の状態である。

当然、それは千冬にも分かっている。

「手段は問わん、探し出して連絡を取れ！ 第三アリーナに居る筈だ！」

「な……いい、一体誰にです!？」

だからこそ彼女は、僅かな希望に縋るのではなく。

反則技とも言える、鬼札ジョーカーを切ることにしたのだ。

「決まっている——」

——如月重工、社長にだ！」

男は怒号と悲鳴が響き渡る観客席に居た。

背もたれを軽く倒した椅子に深く腰掛け、足を組んでいた。

観客席を覆う遮断シールドの向こう、四対二で繰り広げられる戦いを眺めていた。

「へえ、あれがダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアの噂のコンビネーション、「イージス」か。倍の数を相手にノーダメージだなんて、大したものだねえ。防御が完璧だからこそ、反撃も容易い……てことかな」

周囲の喧騒をよそに、男は紅茶を一口飲む。その芳醇な香りと豊かな味わいに舌鼓を打ち、まるで映画でも観るのように、眼前でおこなわれる戦闘を楽しんでいた。

「お、あれもかわせるのか……さすがに当たったけどねえ。む？　これは、今度こそ……おおつ、またかわした！　いやあ、すごいすごい！　実に見事なものだねえ、ふははははっ!!」

「——如月重工社長の、如月様ですね？」

「……うん？」

盛り上がっているところに声を掛けられ、しかし素直に振り返る。そこにはスーツ姿の見慣れない女性がいた。しかし手に通信機を持っていてことから、男——如月社長は、女性がIS学園の教師であることに気付く。

「そうだけど、何か用かな？」

「来賓の方にこのようなことをお願いするのは、非常に心苦しいのですが……あなたの力をお借りしたいのです」

「え？　いいの？」

「このようなこと、大変失礼であることは重々……え？」

女性は一瞬、耳を疑った。断られる可能性が高いとすら思っていたのに、返つて来たのは喜色に満ちた声と笑顔。そこに得体の知れない不気味さを感じた。

まだ用件すら言っていないのに、この男はその内容を知っているかのように、快諾したのだ。

「うん？ 学園のシステムを奪還して欲しい……ってことじゃないの？」

「は、はい。その通り、ですが……」

「ただそれをやると、少なからず学園のシステムに侵入することになるから、一応自重してただけど……いいのかね？ やっちゃって」  
女性は恐怖した。目の前に居るこの男が、とても人間とは思えなかった。

世界でもトップレベルのファイアウォールを持つIS学園の防衛システムを、すんなり掌握した「敵」。その底すら見えない力を前にして、この男は――

「……織斑先生から言伝です。」

『あなたは学園のシステムなどには全く興味がない。だからこそ、任せることが出来る』

……どうか、お願いします。学園の防衛システムを奪還し……可能であれば、「敵」の素性を明かす、手掛かりを……どうか……！  
「……うふふふ。いいよ、学園の依頼があるんなら、思う存分やってあげようじゃあないか!!」

深々と頭を下げる女性は、もはや如月社長の視界に入ってはいなかった。如月社長は懐から携帯電話を取り出し、いずこかヘコールする。

高性能の通信機すらともに機能しないジャミングの中で、さも当然であるかのように、電話は繋がった。

『社長。また私に黙って「仕事」ですか。今日は出社されるご予定だったと記憶しているのですが』

「いやあ、開口一番辛辣だねえ児島君！」

通話相手は、如月社長の秘書を務める男、児島。感情の感じられない

い平坦な声で、フットワークが軽すぎる社長を諫めるが、無論効果はない。

「それよりも、IS学園から依頼だよ、児島君！ 高度なサイバー攻撃を受けて手も足も出ないから、手伝ってほしいとのことだよー」

『そうですか。では、準備します』

「テンション低いねえ児島君！」

むしろなんでこんなにテンションが高いのか。如月社長の様子に気圧されながらも、女性は不思議に思う。

「待ちに待った第一回戦、第一ラウンドの始まりだよ！ 宣戦布告はどうに済ませている、何も遠慮することはない！ いっちよう派手に、ぶちかましてやろうじゃあないかつ!!」

『わかりました。社の総力を以て、叩き潰します』

通話を終えた社長は、腹を抱えて背中を丸め、全身で笑いを堪えた。そうしなければ呼吸困難になりかねないほど、楽しくて仕方がないのだ。

「うふ、うふふふふ……あなたには言ったよねえ、束博士。僕は勝利のために、殺意を持って行動すると。あなたにとつては牽制のジャブのつもりかもしれないけれど、僕はそれに対してさえも、渾身のカウンターを狙わせてもらおうよ」

背中を丸めたまま上げた顔、その眼がギラリと光り。

戦い続ける無人機を、睨み付けた。

第三アリーナの通路。Bピットを目指して、四機の無人ISが進んでいた。

その四機は、基本のフレームはほぼ同じだが、装甲やスラスタ、武装、追加装備等により性能を変化させ、部隊として機能するよう造られていた。その姿はかつてIS学園を襲撃した無人機と似た印象でありながら、人間女性のようなフォルム——まさに戦乙女と呼べるカタチに洗練されている。



右腕が銃剣付きのビームライフル、左腕が物理シールド。武装を最小限にすることで、機動力と防御力を両立した機体——強襲型。

両腕が連射可能かつ高威力の大型ビームカノンになっており、広範囲に強力な制圧射撃を続けることが出来る機体——支援型。

小型のビーム兵器を持ち、両脚の関節とスラスタターが一つずつ増設され、通常のISとは一線を画す機動が可能な機体——奇襲型。

全身を隠すほどの左腕の大盾と、右肩に直接繋がった巨大なビームカノン。圧倒的な射程距離と命中精度を持つ機体——狙撃型。

総じてゴーレムIIと名付けられた、四機一組の無人機部隊である。

それらは一糸乱れぬ動きで、通路を飛ぶ。学園内のマップは全て入りかされている、迷うことは一切なく、標的目掛けて飛んで行く。

——が。

しかし突然、その動きがピタリと止まる。想定外の事態が発生したからであった。

ゴーレムたちにより掌握されている学園の防衛システムに、何者かが侵入している。そしてゴーレムたちがファイアウォールを突破するよりも早くプロテクトを書き換え妨害し、さらにはサイバー攻撃の経路まで追って来ていた。

放置すれば、作戦失敗どころか——自らの創造主にまで到達するかもしれない。

ゴーレムたちは優先目標を変更し、転進した。一刻も早く、妨害の元を断たねばならない。

幸い、その居場所は早々に見付けることが出来た。妨害をしている者たちは学園の外に居るようだが、その指示を出している者はこのアリーナに居る。通信を隠そうともしていなかったため、探知することは容易かった。

通路を進み、角を曲がり、観客席まであと数秒。そして観客席に出れば、機械特有の精密射撃と躊躇のなさにより、目標は一瞬で殺害されるだろう。

——観客席まで、無事に辿り着ければ。

「——不通」

『!?!』

ゴーレムたちが、歩みを止める。その視線、無機質なセンサーが見つめる先には、一人の少女が居た。

「……進みたくば……」

たった一人。当然、展開されるISも一機。四対一という、敗北など考えられない戦力差。

なのに。その筈なのに。その計算に、間違いなどない筈なのに。何故、勝利という解答が、導き出せないのか。

「……その首を、置いて逝け——」

そしてゴーレムたちは、知ることになる。

機械には、決して辿り着けない領域があるということ。

生涯を掛けて、たった一つを磨き続けた狂人のみが至れる極致を。

文字通りに、その身に刻みつけられることになる。

井上真改という、剣鬼によって。

「ちい……なんなのよコイツら!? いきなり出て来てっ!!」

「それに、なんだか以前見たことあるような気がしますわ……!」

「ああ、あの忌々しいお人形さんねっ! 性懲りもなくぶっ壊されに来たってどこかしら!」

「いいでしょう、なら望み通り、全て焼き尽くして差し上げますっ!!」

鈴とセシリアは、第二アリーナ内でゴーレムたちと戦っていた。数で勝る敵を相手に、お互いの背後をカバーし合いながら攻撃を繰り返す。

「でえりやあ!」

』  
渾身の力を込めて振り下ろした双天牙月は、強襲型の盾に阻まれる。丸みを帯びた表面が重厚な刃をいなし、その隙に右の銃剣が振られる。

「こん……のおー！」

首を狙った斬撃を上体を逸らしてかわし、いなされた双天牙月の重さを利用して回転、後ろ回し蹴りを放つ。強襲型がその蹴りを退がってかわしたところに、再び双天牙月を逆袈裟に叩き込んだ。

「たあっ!!」

』  
強襲型は、その一撃を銃剣で受ける。頭上に翳した銃剣、その銃口が自分の頭を向いていることに気付き、鈴は慌てて後退する。

「くっ……味な真似してくれんじやない！」

本来遠距離武器である銃火器で、近距離戦闘をこなす。シャルロットとの戦闘経験がなければかわせていたか分からない、強力な戦術であつた。

「でもね……どれも、中途半端なのよっ!!」

盾の扱いなら、シャルロットの方が遥かに上手い。射撃技術においてもラウラ、セシリアとは比べ物にならず。接近戦で言うのなら——話にもならない。

「この風鈴音を、舐めるなああああっ!!」

ビームライフルを連射する強襲型に突撃を仕掛ける鈴。放たれる熱線はバトンのように高速で振るわれる双天牙月に撃ち落とされ、身体まで届かない。一気に距離を詰めた鈴は、遠心力を存分に乗せ、さらには機体ごと縦に回転させて、唐竹の一撃を叩き込む。

「だありゃあああああっ!!」

』  
甲龍に可能な最大威力の斬撃は、それを受けた銃剣に食い込み刃の半ばまでを断ち切った。だが、銃身を歪めるまでには至らない。衝撃を分散する構造になっているのだろうか、これでは銃としての機能は奪えていない——そう考える間もなく、龍咆を零距离から連射し双天

牙月を引き抜いた。強襲型が、左腕のシールドで殴りかかって来たからだ。

「ラフファイトもこなすってわけね……セシリアっ!」

「言われなくとも!」

鈴がシールドを受け止め、強襲型の動きを止めた瞬間。強襲型の背中に、六条の閃光が突き刺さる。セシリアのブルー・ティアーズ・スバル、そのビットから放たれたレーザーだ。

一つ一つが巨大な砲身となったビットのレーザーは、スターライトmkⅢと比べても遜色ない威力を持つ。その一斉射撃を受けたとなれば、防御力に優れた強襲型といえど大ダメージは免れない。

「とどめえっ!!」

「待つて、鈴さん!」

「!?」

体勢を崩した強襲型を一息に撃破しようとした鈴だが、セシリアの声に止められる。その瞬間、眼前を光の豪雨が通り過ぎた。

セシリアに抑えられていた支援型が、ビットが離れた隙を突いて強襲型の援護に向かったのだ。

「うわっ!?! あっぶな……」

「まだです! 次、来ますわよ!!」

「ああつ、もう!!」

見れば、奇襲型も鈴に銃を向けている。威力は低い、それでも連続で受ければ危険だ。変幻自在の機動力により、いつどこから撃たれるのか読みにくい。他のゴーレムたちに気を取られれば、何度でも不意打ちを受けることになる。

「墜ちろっ!!」

龍咆を奇襲型に向け、連射する。威力よりもとにかく多く撃ち、少しでもダメージを与えようという狙いだった。だが奇襲型は、通常のISよりも関節が一つ多い、鳥類のような脚部に装着された大型スタターにより、まるで空中でジャンプするかのように急加速した。狙いを外し舌打ちをする鈴に、再び強襲型が襲い掛かる。

「こいつ……! さつきからベツタリ張り付いて来て、ウザったいの

よっ!!」

もはや強襲型の役目は明白だった。鈴に他のゴーレムの相手をさせないこと——つまり、文字通りの「盾」である。元々対多数に優れたブルー・ティアーズは抑えきれないと判断し、即座に鈴を標的に定めたのだ。

セシリアの援護によりどうか包围されることは免れているが、しかし強襲型に常に射程距離に捉えられているため、自由に動き回ることが出来ない。強引に突破しようにも、シールドは分厚く破るのは容易ではなかった。

「鈴さんっ—」

「わかってるっ……ての—」

そして脅威なのが、高出力ビームの高速連射——支援型による制圧射撃だ。威力、弾数共に凶悪なその射撃は、直撃すればひとたまりもない。僅かでも動きを止めれば即撃墜となりかねないのだ。

だからこそセシリアは優先的に支援型を妨害していたが、数で勝り性能でも劣らぬ相手をいつまでも抑えてはいられない。隙を突いての散発的な攻撃しかさせていないのは流石と言えるが、倒せなければジリ貧だ。

強襲型だけでも倒せれば、一気に形勢逆転出来るだろう。だが鈴だけでは押し切れず、セシリアはそちらまで手が回らない。次第に、少しずつ、焦りが生まれ——

(……待って)

鈴は、見落としていた。重大なことを。

(コイツら、四機いたはず)

そして、慌ててアリーナ内を見回し。

(あと一機は……どこっ!?)

見つけた時には既に、鈴にはどうしようもない状況になっていた。「っ!!」

』

視線の先に居るのは、最後の機、狙撃型。腰から二本の補助脚が伸び、一時的に四つ脚となって砲を構えている。

左腕のシールドは大きく、隠せていないのは砲だけだ。その砲は、右肩に直接繋がった、本体の全長を優に超える巨大なビームカノン。その砲口から漏れ出る光の量が、直後に放たれるであろう一撃の威力を物語る。

即ち。当たれば、死ぬ。

『機械であるゴーレムには、躊躇も容赦もない。当たると判断すれば、その瞬間に発砲する。』

そして今、四本の脚によりしつかと固定された機体は、巨砲を構えていながら微塵の揺らぎもなく、

照準は寸分の狂いもなく、鈴を捉えていた。

『ISを操縦者ごとく蒸発させる、超高温の熱線は。』

『――視えていますわよ』

暴発し、狙撃型の右半身を粉微塵に吹き飛ばすことで、その威力を見せ付けた。

「このセシリア・オルコットの目が届く場所で、狙撃ができると思いましてっ。」

「カッコつけるのはいいけど、流星にヒヤッとしたわよ今のは……」

見るも無惨な有り様になり沈黙する無人機。それを若干引き気味に眺める鈴の横に、長大な砲身――ブルー・ティアーズ・スバルのビツトが浮かんでいる。その砲口は、たった今撃ち抜いた狙撃型へと向けられていた。

「で？ 狙ってたの？ 今の」

「当然ですわ。あのような見るからに防御の固い敵に対して普通に攻撃していたのでは、日が暮れてしまいますから」

正面からの攻撃に対しほぼ全身を分厚い盾で守っていた狙撃型の、唯一と言っても良い隙。それは、ビームカノンの砲口だ。

鈴を狙うということは、鈴からも狙えることでもある。とは言え、それは理論上は可能というだけで、生半可な難易度ではない——のだが。

「脚を止めて、しっかりと体を固定すれば、確かに射撃は安定するでしょうが——それでは撃つてくれと言っているようなものですわ。身動きが取れないのなら、いくらシールドで守っていてもただの的です。そんなもの、ほんの僅かに、ほんの一瞬でも射線が通れば、わたくしには十分過ぎますわ」

「あつそー。そりやすごいわねー」

「もうちよつと感心してもよくはありませんか!？」

素っ気なさ過ぎる態度の鈴にセシリアが怒る。しかし鈴としては、別に驚くほどのことではないのだから、こんな反応になるのも当然である。

何度も喧嘩して、何度も共闘した。鈴がIS学園に来てからは、敵に回したことも味方に付けたこともセシリアが最も多い。セシリアには何が出来るのか、それを鈴は知り尽くしているのだ。

ビームが発射される瞬間に砲口を狙い撃ち、チャージしたエネルギーを暴発させる程度の芸当が、セシリア・オルコットに出来ないわけがない。

「さーてそれじゃあ、残りは三機ね」

「ええ。この様子だと、他の皆さんのところにも行っているでしょうし……」

「さつさと片付けて、援護に行くわよ」

早々に一機撃破した二人であったが、それはただ相性が良かったからだ。残りの三機は、いまだ強敵として立ちはだかっている。一機墜とされ警戒を強め、一層厄介な相手となっているだろう。

「……やっぱりの盾、アイツがウザいわ。ちよつと叩きのめしてくるから、その間残りの奴らを近付けさせないで」

「わかりましたわ。……ところで、鈴さん」

「なに？」

しかし二人は、慎重に、堅実に攻めるつもりなどなかった。とにかく

く一秒でも早く全機撃墜し、仲間の下へ駆けつけ——そこに居るであろう無人機たちも、全て破壊するつもりであった。

それくらいには、怒っているのだ。

「近付けさせないのはいいですけど……別に倒してしまっても構わないのでしよう?」

「片方は残しときなさいよ。アンタもう一機墜としてるんだから、それで半々でしょ?」

「なら、お急ぎくださいな。わざわざ待って差し上げるつもりはありませんから」

「ほー、言ったわね。じゃあ速攻片付けたら、あたしが全部貰ってもいいってことよねっ!!」

更に言えば、相手は無人機だ。人が乗っているのなら多少の手心は有り得たかも知れないが、無人機相手に情けをかける道理は微塵もない。徹底的に破壊し尽くすことは、もはや決定事項である。

「あたしのダンスはちよつと荒っぽいわよ! お行儀のいいアンタに付いて来れるかしら!」

「鈴さんこそ! わたくしの華麗なステップに遅れを取らないよう、精々頑張ってくださいな!!」

双天牙月を振り上げ突撃する鈴。

ビットを飛ばしスターライトmkⅢを構えるセシリア。

迎え撃つは、三機のゴーレム。

怒りに燃える少女たちと心無き人形たちの戦いは、激しさを増していくのだった。



## 第88話 許されざる者

なに。これは。

一体、何が起きているの？

私は、織斑くんと一緒に。

お姉ちゃん——

「——さんっ。簪さん！」

「……え？」

織斑くんが、私の名前を呼んでいる。けれど顔は私の方を向いていなくて、私に見えるのは背中だけだ。

ああ、それと。

その背中の方こうに、黒い大きな、金属の人形がある。

「——しっかりしろ！ 簪っ!!」

「っ……!?!」

一喝されて、ようやく僅かに、意識が戻って来た。次いで、状況を理解する。

第一アリーナのBピットで、私たちは今か今かと試合を待っていた。スケジュールからして、そろそろかな——そう思った瞬間、アリーナが大きく揺れて、すごく大きな音がして。

その直後、ピットゲートを破って、黒い無人ISがピットに飛び込んで来た。

「くそ、コイツまさか、あの時の……!」

「あの、時……?」

織斑くんの呟きで、ふと思い出す。そういえば、以前学園を襲撃した黒いISも無人機だったという。あの機体とは大分形が違って人間的になっているけれど、武装や一部のパーツ、それと雰囲気なんか、確かにあの無人機に似ていた。

あの、生身の篠ノ之さんに向けて、躊躇いなく発砲した、無人機に。

「立て、簪っ!! コイツを倒すぞ！」

「あ……」

いまだ思考は混乱したまま。けれど、今日の前に敵が居ることはわ

かった。

なら、戦わないと。倒さないと。

私はそのために、訓練を頑張ったんだから。

簪さんはどうにか立ち上がりISを展開したが、動きが鈍い。目も虚ろだ。突然の事態に、心が追い付いていないのかもしれない。

無理もない……と思う。元々戦闘向きの性格じゃなかったし、今回の大会だって、楯無さんという目標が居たからこそあれだけやる気になっただけだ。

その目標が奪われ、試合じゃない戦いが始まってしまった。今は恐らく、混乱の極致に達している。まずは落ち着かせてやりたいところだけど、そんな余裕は俺には皆無だ。

でも、このまま座っていたんじゃ死ぬ。だからまずは、とにかく立たせた。ただの反射でいい、少しでも防御ができる状態にさせないといけない。

「こんの……やろうっ!!」

ギヤリイツ!

思い切り振り下ろした雪片式型は、無人機の構えた盾に阻まれた。その表面は丸みを帯び、刃がするりと受け流される。

「くそっ、対物理ブレード用のシールドか……!」

真つ向から受けてくれれば白式のパワーで押し切ることもできないくはないが、これでは上手いことかわされるだけだ。零落白夜も、物理的に硬い盾には効果は薄い。

——だが。

白式俺の武器が、ブレードだけだと思ふなよ——!

「こいつを」

左手を雪片式型の柄から離し、五指を大きく広げる。その指に力を込め、少しずつ折り曲げていく。手の平に、力を集めるようなイメージ。

そのイメージに従い、周囲を漂っていた雪花たちが手の平に集まっていく。散弾の連射や高出力のレーザーをも受けきるエネルギーが一点に集中し、白く発光する。

それを更に圧縮し、収束し、指向性を持たせて。

一気に解放し——叩き付ける。

「喰らい」

繰り出された掌打は、盾に防がれた。だがそれこそが、俺の狙いだ。防御が厄介なら、防御できなくさせてしまえばいい。防御の要が盾であるなら、その盾を壊してしまえばいい。

鋭い刃で斬り裂けぬ盾なら。

力任せに、ぶん殴ればいい——！

「やがれえ!!」

雪花が、溜め込んだエネルギーを放出する。そのエネルギーがごく狭い範囲に圧縮され、故意に空けた逃げ道に殺到する。

その先にあるのは、分厚い壁。だが一度勢いのついた群は止まらな。眼前に障害物があるのなら、踏みしだいて進むだけだ。

「つうおとおおおっ!!」

文字通りに、爆弾で直接殴るようなものだ。左掌から放たれた白い閃光は盾を一撃で粉碎し、無人機を壁に叩き付けた。

「ちい、固い……」

だが、盾の強度は想像以上だった。この攻撃は威力が大きい分、俺にも結構な衝撃が来るのだが、盾が頑丈だったため反動もさらに大きくなってしまった。ダメージを受けるほどではないが、左手がビリビリと痺れ、回復には数分かかりそうだ。

それでも、今はチャンスだ。白式のパワーなら片手持ちでもそこそこの攻撃力はある。盾を失い、小さくないダメージを受け、体勢を崩している今の無人機が相手なら十分なはずだ。

なのにどうしてか、嫌な感じがする。

（何かある……のか……?）

逡巡しているうちに無人機は体勢を立て直してしまっただが、それはあまり問題ではないように思えた。あの盾がない以上、防御力は格段

に落ちる。なら仕切り直しても十分に攻め切れる。

今は追撃するよりも、この悪寒の正体を探るべきだ。そう判断し、一步距離を取る。

すると無人機は、俺にビームライフルを向けて牽制しながら、入つて来た穴へと向かつていった。ピットゲートに空いた穴、それはアリーナへの出口だ。接近戦に強い武装でありながら、わざわざ広い空間へ行く理由はそう多くない。

今思い付く理由の一つは、自分よりも相手の方が接近戦に特化している、ということ。これは当てはまりはするが、しかしこちらには簪さんもいる。戦闘にはほとんど参加していなかったが、打鉄式が射撃型なのは一目見ればわかる筈だ。一対二の戦いで、敵の片方を封じられる——そんな大きな利を捨てるには、余りにも弱い理由だろう。

となると、狙いは他にある——

「あ……お、追わなきゃ……」

「!? 簪さん、ま——」

待て。そう言う間もなく、全速力でタックルし、床に引き倒す。

その瞬間。直前まで簪さんが居た場所を、凄まじい熱量のビームが薙払った。

「な、え……え……?」

「くそっ!」

そのまま簪さんを抱え上げて、ピットの奥まで飛ぶ。壁へ寄って、射線が通っていないことを確認し簪さんを下ろす。

「な……なに……? 今の……」

「狙撃だ! 迂闊だった、考えてみれば当然だ、アイツだけじゃあんな大穴空けられない……!」

つまり、他に仲間がいるってことだ。さっきのは逃げたんじゃない、狙撃手の狩り場に誘い込んでいたんだ。もしほいほい追いかけていたら、撃たれていたのは俺だった。

しかもその狙撃手の得物は桁違いの出力を持っているらしい。打鉄式式の肩にある荷電粒子砲、春雷の片方がなくなっている。爆発す

らせず、一瞬のうちに蒸発した。こんな物が直撃すれば、確実に死んでいただろう。

「あ……あ……い！」

「!? まずいつ……」

見れば簪さんは瞳孔が開き、全身を震わせていた。目の前に迫った「死」に、恐怖に吞まれてしまったか……混乱している時にあんな攻撃を受けたんだ、この反応は仕方ない。

だが今の状況じゃあ、簪さんの恐怖を和らげている余裕はない。そしてこの状態の簪さんを戦わせるわけにもいかない。

……酷なようだが、足手まといになるだけだ。

「……聞いてくれ、簪さん」

「っ……!?」

声をかけただけで、ビクリと肩を跳ねさせる。できるだけ優しい声を意識して、ゆっくり、簡潔に伝える。

「ここで、待っていてくれ。必ず、戻ってくるから」

「っ……あ……」

本当なら避難してもらいたいが、どうやらアリーナの扉はどれも開かなくなっているようだ。奴らがシステムに割り込んでいるんだろう、これじゃあ今の簪さんが逃げることは難しい。

ここも安全とは言い難いが、少なくともピットまで入られなければ射線は通らない。上手く立ち回れば、簪さんが狙われることはないはずだ。

——つまりは、迎撃すればいい。

「お、おりっ……」

「大丈夫だよ」

外に出ようとすると俺を、簪さんは縋りつくように止めようとする。さっきの光景が頭をよぎったんだろう、目に涙を浮かべて、俺の右手を両手でしっかりと掴んでいた。

その手を解いて、笑顔を浮かべて、おどけた口調で言う。

「俺には閻魔サマよりおっかない姉貴が二人もいるからさ。怒られたくないから、ちゃんと帰ってきてくるって」

ポン、と頭に軽く手を置いてから、ゲートに向かう。簪さんに背を向けると、自然と顔が険しくなった。

……と言うより、怒りに歪んだ。

「……許さねえ」

許さない。絶対に許さない。

俺たちの勝負を邪魔しやがって。簪さんの決意を踏みにじりやがって。

簪さんと、楯無さんの。二人の想いを、穢しやがって。

「絶対に……許さねえ——！」

雪片式型の柄を強く握り締め、ピットゲートから飛び立つ。

敵はさっきの盾持ちと狙撃手、それ以外にもおそらく何機か居る。

だが、どれだけ居ようと関係ない。

全て、悉く、根刮ぎに。

ぶった斬ってやる——

「うおおおおあああああつ!!」

ゲートを出た瞬間、あの熱線が襲いかかる。だがどれだけ強力だろうと、対処法がありどこを狙いつ撃つて来るのかもわかっていないのなら、恐れる理由はない。

俺は零落白夜を発動し、熱線を斬り捨てた。

「温いんだよっ!!」

照準が合ったと同時に放たれた最速の一撃。それだけ聞くと凄まじいように思えるし、実際に高等技術ではあるのだが。なんの工夫もない、機械特有の精密さは、こっちにとっては読みやすいだけだ。意図的な「外し」や僅かな「ずれ」がない。だからなんの迷いもなく、射線に飛び込める。

「てめえら……覚悟はできてんだらうなあ!!」

激昂しながらも、何度となく繰り返し返した習慣で状況を確認する。

観客席は混乱し、逃げ惑う来賓を生徒や先生たちが必死に落ち着か

せ誘導している。しかしやはり扉がロックされているのだろう、避難はほとんど進んでいないように見えた。

そしてアリーナには、四機の無人ISが居る。

正面には、最初に襲って来たやつが居る。失った盾の代わりに左手にナイフのようなブレードを持っていた。肉厚で幅の広い、攻撃よりも防御を目的とした一振りだ。

俺から見てアリーナの反対側には、右腕全体が砲になったかのような巨大なビームカノンを構えた無人機が。通常の脚と腰から生えた二本の脚、計四本の脚で身体を固定し、全身を覆うほどの大盾で身を守っている。

右に居るのは、両腕の肘から先が太く短い砲になった機体。砲の形は射程距離や命中精度よりも、とにかく威力と速射性能を求めているように思えた。撃ちまくって、相手の動きを封じるためだろうか。

そして――

「!? くっっ!」

』

頭上から光弾の雨が降り注ぎ、慌ててその場を離れる。振り返れば、鳥のような奇妙な関節の脚を持った機体が居た。攻撃を外したと見るや動き出し、両手の銃を構えながら俺の死角へと回り込もうとする。間違いない、機動力で敵を攪乱するタイプだ。

「ふん……いいいぜ、まとめて相手してやるっ!!」

相手は四機。それも、各々の役割が明確に分担された、チームとしての完成度が極めて高い、難敵だ。

だが、それがどうした。俺が憧れる背中を持ち主は、数の劣勢も、相性の不利も、能力の不足すらも。全て斬り捨てて自らの信念を貫く、大馬鹿者なんだ。

その背中を追う俺に、たかが四倍程度の戦力に、怯んでいる暇はない。

「おおおおおっ!!」

』

雪片式型を肩に担ぎ、突撃する。狙いは鬱陶しく飛び回る、逆関節

の機体。

高速機動の先に回り込むように飛ぶ。ドンピシャリのタイミングでやってきたそいつ目掛けて、袈裟切りを――

「!? ちいっ!」

しかし逆関節機は、まるで見えない壁を蹴ったかのような急反転でその一撃をかわした。その時一瞬だけ見えた、逆に曲がった関節部分の光。スラスターの噴射光だ。

どうやらあの脚は、単に逆に曲がっているんじゃない関節が一つ多いようだ。よく見れば脚の付け根のすぐ下に、膝らしき関節がある。そして追加された関節には、高出力のスラスターが内蔵されているんだらう。それを使って、さっきのとてもない機動をしたのだ。

「無人機ならでは、ってことか……!」

パイロットがいない分、関節なんかはかなり融通が利く。それにあの機動は、普通ならパイロットにも相当な負担が掛かるはずだ。無人機というのは、思っていたより厄介な相手かもしれない。

「くそ、逃がさね……っ!」

逆関節機を追おうとしたところに、さっきの盾持ちが突撃してきた。今はもう盾はないが、左手に持つ分厚いナイフを盾代わりに構えて、銃剣付きのビームライフルを俺に向けている。

「……そんなちなけなナイフで」

ライフルから放たれた熱線をかわし、一気に肉迫する。突進の勢いを載せて左から胴を薙ぐが、ナイフに止められた。

「俺の剣を」

一太刀で亀裂の入ったナイフから、逆方向に回転しつつ雪片式型を引き抜く。背中のスラスターと脚部のスラスターを使い、ぐるりと一回転。大型ブレードである雪片式型は大きな遠心力を生み出し、それをそのまま、逆胴に叩き込んだ。

「受けきれると、思うなよ――!」

「!?!」



素早く引き戻され胴を守ったナイフを断ち切り、刃が脇腹の装甲に食い込む。武器がビームライフル一つしかない分、余ったエネルギーを防御に回しているのだろう。直撃したというのに、手応えが重く、固い。

「おおおおおっ!!」

しかし言うまでもなく、一撃で倒せないことなんかわかりきっている。俺は盾持ちを蹴りつけて突き放し、零落白夜を引き抜いた。その際に空いた短い距離で一気に加速し、渾身の袈裟切りを放った。

「はあっ!!」

盾持ちはブレードを半ばから失ったナイフと左腕の装甲、そして肩の装甲を使い受け止める。白式のパワーも、三点に分散されては十分に発揮されない。この一撃で墜とすつもりだったが、大きなダメージは与えられなかった。

……読みが甘かった。コイツは盾がなくても、存在そのものが「盾」として機能し得る。

(なるほど、そういうことかよ……!)

そう。コイツは「盾」だ。敵の攻撃を一身に引き受け、全体の守りを一手に担う、部隊の盾。コイツがいる限り、俺の攻撃は通らない。

そして盾が攻撃を防げば、その次は――

「っ!」

『』

盾持ちが構えたビームライフルの射線から逃れるために、旋回しつつ距離をとる。その瞬間、上から光弾の雨が、下からは噴き上がる間欠泉のような熱線の連射が襲いかかってきた。

(動きを止めるのはマズいな……!)

盾で受ければ、その次は攻撃だ。逆関節の機体と、両の腕自体が武器になっている機体、二機による挟撃。威力こそ狙撃手の一撃には劣るものの、逆関節は高速移動しながらあらゆる方向から撃つて来るし、武器腕は広範囲に撒き散らすように乱射して来る。全てかわしきるのは不可能だ。

「ぐうっ!」

雪花によりダメージは軽減できるが、しかし手数が多すぎる。しかも武器腕の熱線は、一発一発の威力も高い。連続で受ければいくら白式といえど一溜まりもないだろう。常に動き続けなければ、あつと言う間に捉えられて――

『――』

「なに!? コイツっ……!」

……ああくそつ。また、読み違えた。

そうだ、「盾」ってのは、ただの防具じゃない。

相手を殴りつけて体勢を崩し、あるいはその一撃で殴り殺すことすら可能な、立派な「武器」なんだ。

こうして、守勢に回っている時にこそ。

コイツを、警戒すべきだったのに――!

「離し……やがれっ!!」

『――』

腰に抱き付くようにタツクルしてきた盾持ちに、そのままがつちりとホールドされてしまった。膝蹴りを叩き込んでも、まるで怯んだ様子はない。

雪火で吹き飛ばそうかと考えたが、アレを使えばしばらく雪花の守りがなくなる。その状態で攻撃を受ければ耐えられない。

力づくで振り解けないわけではないが、しかしそれにはどうしたつて、僅かな時間がかかる。

その時間があれば十分だ。敵はこの盾持ちごと、俺を撃ち抜くだろう。なにせコイツらは無人機だ、意図的な同士討ちさえ、必要なら躊躇わない――!

「う……おとおおっ!!」

……ダメだ。間に合わない。直撃する。

撃墜まではいかないだろう。だが相当なダメージだ。こんなことなら、さつき零落白夜で盾持ちを倒しておくんだつた――そんなことを後悔しながら、雪花の防御を最大レベルに上げた。

こちらを狙っている狙撃手の攻撃は、恐らく防げる。問題は残りの二機の猛攻だ。避けることも防ぐこともできない以上、機体の防御力

で耐えるしかない。

(頼むぜ……雪花っ！)

無人機たちの持つそれぞれの銃口を、そこから溢れ出る光を睨み付けながら。

俺は衝撃に備え、奥歯を強く噛み締めた――

「箒ちゃん！ 一機行つたわよ！」

「はい！ はあああああっ!!」

第一アリーナ、Aピット。そこで待機していた私たちは、無人のI S部隊による襲撃を受けていた。

「くっ……こいつら、まさか!?!」

「考えるのは後！ 今は倒すことにだけ集中なさい！」

「は、はい！」

敵は四機。突撃を繰り返し、こちらの注意と攻撃を引き付ける盾持ちの機体。複雑怪奇な機動で攪乱する逆関節の機体。凄まじい手数で分厚い弾幕を張る武器腕の機体。未だ手を出して来ていないが、明らかに恐るべき火力を持つであろう狙撃砲を持つ機体。

楯無さんが盾持ちを抑えている間に、私は武器腕を狙っている。こいつの連射は、狭いピット内でかわしきるのは難しいからだ。

武器腕は決して動きは速くなく、装甲も厚いようには見えない。攻撃力にだけ気をつければ、恐ろしい相手ではないのだが――

「く、う……また貴様か、鬱陶しいっ!!」

問題は、私の動く先々に回り込み邪魔してくる、逆関節だ。

「せえい！」

『――』

素早く左手の「空裂」を振るう。それはかわされたが、空裂から放たれた光刃が追う。避けた先を塞ぐ、必中の追撃だ。

だが、その「必中」の基準は、相手が通常のI Sであればに過ぎない。人の乗らぬ無人機、さらには関節をも増やした異形が相手では、

追いきれるとは限らない。

「むう……奇っ怪な動きを……!」

まるでそこに壁があるかのように、逆関節は宙を蹴って機動を変えた。逆方向への反転を二度、高速で繰り返し、元の方向へと移動していく。人が操る機体であればまず不可能な動きだ。だが全身が鋼をも超える硬度の金属で成る無人機には、容易いことなのだろう。

「……だがっ!!」

『!?!』

紅椿の機動力は、それすらも凌駕する。全身がギチギチと音を立てながらも、しっかりと弧を描いて旋回する。狭いピット内だからこそ、その機動力は生きてくる。

「はあああああっ!!」

逃げる逆関節を追って、こちらも急反転する。まさか付いて来るとは思っていなかったのだろうか、逆関節の反応は鈍い。そこに左右の刀を交叉させて、斬撃を叩き込んだ。

「あああああああっ!!」

『!?!』

刃が食い込んだ瞬間に、エネルギーを放出。内部から機体を焼き尽くす。

本来なら、それでこの機体は倒せた筈なのだが――

「箒ちゃんっ!!」

『!?!』

楯無さんの警告と、悪寒。それらに従い、逆関節から距離を取る。その瞬間、私がいいた場所を、巨大な熱線が貫いた。

『!?!』

「やっぱり……あいつは狙ってたのよ、私たちの動きが止まる瞬間を!」

「なるほど……つまり、こいつらは……!」

今の一撃、ともすれば逆関節にも命中していた。いや、私が避けたから、それを追い逆関節から照準が外れただけだ。避けなければ、諸共に撃ち抜くつもりだったのだ。

たったの一度だが、余りに異質な行動により、私にもわかった。  
この無人機たちに、仲間意識チームワークなどない。ただ自分に与えられた役目を、忠実に実行する――

「……………ふ、ぎ……………な」

その有り様に、怒りがこみ上げる。

いや、そんな生易しいモノではない。

火山が爆発するかのように。

一気に、噴出した。

「ふぎ、けるなっ」

この試合は、元々は私と楯無さん、一夏と簪が戦う筈だった。

口下手な私でも、剣を通じてだけは自分の想いを表現できる……………それはきつと、楯無さんも同じだ。器用なあの人だからこそ、自分の想いを隠してきた。

それを、勝負を通じて、妹に伝えようとしていたのに。

「ふぎけるなあああああああああつ!!」

その願いが、その想いがっ。

こんなガラクタ如きに、踏みにじられたと言うのか！

人形風情が、何様のつもりだ――!!

「おおおおおつ!!」

再び逆関節へ向かう私に、狙撃手が砲を放つ。微塵の狂いもない精密さに、凄まじい弾速。そして、当たれば撃墜は免れ得ない威力。それらを併せ持つ必殺の一撃はしかし、ただ放つだけでは当たりはしない。

「しいっー」

熱線に炙られた空気が膨張する音を聞きながら、身体を回転させる勢いに載せて二刀を振るう。同時に放たれる光弾と光刃が逆関節を捉え、装甲を焼き抉る。

「はあー」

さらに刀を振るい、狙撃手を牽制する。攻撃は全て巨大な盾に防がれたが、無数の光が視界を塞ぎ、反撃を許さない。

「せえいつ!!」

その隙に、逆関節へ更なる攻撃を仕掛ける。二刀を揃えて袈裟切りに振り下ろし、空裂の光刃で壁を作り、雨月の光弾で追いかけた。案の定逆関節は急速反転し、その攻撃から逃げて行く。

そして、その先には。

「完璧♪」

「いざっ!!」

盾持ちをドリルランス——〔蒼流旋〕で突き飛ばした楯無さんが、満面の笑みを浮かべて待ち構えていた。そして盾持ちが飛ばされた先では、私が剣を振り上げており。

「とりゃー!」

「はあああああっ!!」

楯無さんの蒼流旋が逆関節の脇腹を抉り、私の雨月、空裂が盾持ちの足を切り裂く。いくら盾があっても、二刀で首と足を同時に狙われれば、両方は防げない。

そして首と足、どちらか片方しか守れないのなら、どちらを守るかなど自明だ。

「!」

「!?!」

いくら浮遊することが基本であるISでも、足を片方失えばバランスを取るのは難しい。重心が大きく変わるからだ。

バランスが取れないということは、踏ん張りがきかないということ。踏ん張りがきかなければ、盾の効果は半減どころではない。逆関節も、ダメージは致命傷に近いだろう。パイロットがいないから絶対防御はないだろうが、それでも機体の損傷が大きくなればそれだけ大きな影響を受けるはずだ。

「よし、このまま……!」

「油断大敵よ、箒ちゃん。機械つていうのはね、いくら性能が落ちても、目的のために最期まで動き続けるんだから」

「は、はいっ!」

うむ……やはり楯無さんは、実戦経験の数がまるで違う。私はすぐに熱くなってしまうが、楯無さんはどれだけ優勢になっても、逆に劣

勢に立たされても、思考は変わらず冷静を保っているだろう。

敵に回すと恐ろしいことこの上ないが、味方にすると実に頼もしい人だ。

「……けど、まあ」

それまでおどけた調子だった楯無さんの声が、急に冷ややかなモノになる。途方もない激情を無理矢理に抑え込んでいるかのような、煮えたぎるマグマを内に封じた岩のような、声。

「お人形遊びにも、もう飽きちゃったし」

……そうか。この人も、怒っているのか。ただ上辺だけ、冷静を装っていただけなのか。

「終わらせましょうか」

楯無さんの怒りに呼応するように、無人機たちの姿が揺らぐ。楯無さんの専用機、ミステリアス・レイデイの第三世代兵装であるナノマシンだ。

このナノマシンは一定以上集まると、ある強力な攻撃が可能になる。

——「クリア・パッション清き熱情」。ナノマシンにエネルギーを送り込み熱量に変換し強力な爆発を引き起こすという、気化爆弾に似た攻撃だ。

限定空間でこそ威力を発揮するその技は、この狭いピットの中では回避も防御も不可能な、文字通りの必殺技だ。

楯無さんはそれを、四機の無人機全てを巻き込むように準備し、発動させ——

『』

「なっ!？」

——ようとした、瞬間。狙撃手が私たちを狙っていた照準を動かし、ピットゲートへ向けた。間を置かず放たれた熱線がゲートを貫き大穴を空け、そこから無人機たちが飛び立って行く。

「……読まれて、た……?？」

「……………」

まるでクリア・パッションのことを知っていたかのような逃走に、呆然と呟く。それしかできない私とは対照的に、楯無さんは深く、何

事を考えているようだった。

「……追いましよう、箒ちゃん。アレらが何物であれ、捨て置くわけにはいかないわ」

「……はい」

そうだ。今すべきことは、奴らの正体を探ることではない。学園を襲撃するというのがどれだけの暴挙か、思い知らせてやらなくてはならない。

クリア・パッションを見切られ、発動が難しいアリーナへ逃げられたとしても、それで私たちが不利になるわけではない。ただ、有利が一つなくなっただけだ。

だから追撃をかけようと、迷わずゲートの穴へと向かい。

そして、見た。

「……………な」

それは、私たちが居たAピットとは反対の位置にある、Bピットで待機していたはずの一夏の姿。

白式を展開していることから、戦闘中であることがわかる。一夏の周囲に居る機体から、学園を襲撃して来たのが一部隊だけではないことも。

そして、一夏が危機に瀕していることも。

「一夏あ!!」

一夏は腰に抱き付かれ、機動力を殺されていた。その状態で、逆関節と武器腕の二機が狙っている。このまま撃たれば、ただでは済まない。

スラスターを全開にして飛んだ。後先を考えず、紅椿の最大速度で飛んだ。

だがそれでも、間に合わない。雨月の光弾も空裂の光刃も、一手遅い。

(く、これではっ……………!)

このままでは、一夏が撃たれる。集中砲火を受ければ、白式の防御力をもつてしても耐えられないかもしれない。

通常では考えられないほど大量のISが戦っているこのアリーナ



内でISが解除されれば、どうなるかなど目に見えている。それは、  
なんとしても避けなくてはいけないのに。

私には、紅椿には、その手段がない――

(……いや。無いはずがない)

そうだ。無いはずがない。無いはずが、ないんだ。

(近接ブレードとしての雨月、空裂……それらから放たれる、連射でき  
る光弾と、広範囲を薙払う光刃。

それだけでは、ないだろう)

近距離・中距離での圧倒的な手数と、攻撃力。紅椿自身の高い機動  
力で距離を詰めることができるから、それだけあれば十分に思えるが

(姉さんが……それだけで終えるはずがないっ！)

篠ノ之束が、あの天才が、それで良しとするはずがない。

間合いを詰められるから、遠距離武器は必要ない。そんな考えに落  
ち着くはずがない。

有るはずだ、紅椿には。

近距離格闘戦。中距離射撃戦。

それらに続く、遠距離狙撃戦用の武器が。

有るのだろうか？ 紅椿――！

『――新しい武装が解放されました。出力可変型ブラスター・ライフ  
ル、<sup>うがち</sup>穿千を展開します――』

ガシャン、と音を立てて、紅椿の両肩のアーマーが開く。内部機関  
が外へと張り出し、クロスボウのような形を成す。

その中央で光を放つエネルギーは、まさに番えられた矢だ。

(行ける……これならっ！)

「あああああああっ!!!」

展開装甲により全身からエネルギーを放出できる紅椿の特性のお  
かげか、穿千のチャージは一瞬だった。前進に使っていたスラスター  
を閉じ、全身の展開装甲からエネルギーを噴出させ、身体を固定する。

両肩、つまり砲は二門。狙うべき敵も二機。

照準は既に合っている、ならば迷わず、引き金を引け――！

「貫けっ!!」

瞬間、放たれたエネルギーが一夏を狙っていた逆関節と武器腕に直撃する。

射線上の空気を焼くほどの熱量が命中した二機を吹き飛ばした。当然、一夏を狙っていた照準は外れ、一夏も腰に抱き付いた敵を力づくで引き剥がした。

「今のは筈か!? 助かつ」後にしろ! 今は、こいつらの相手が……先だっ!」……ああ!」

一夏は危機を脱したが、状況は依然危うい。一夏の方にも四機行っていたのか、アリーナ内を八機もの無人機が闊歩している。

「一夏くんっ、簪ちゃんは!?」

「無事です! ですが……」

楯無さんの慌てた声で、簪が居ないことに気付いた。一瞬恐ろしい考えが過ぎつつが、一夏によって否定され安堵する。

しかし、ピットの方を見ながら表情を険しくさせる一夏の様子に、何事もなかったわけではないと知る。

「……そう」

楯無さんは、それだけで全てを悟ったようだった。ほんの数秒、辛そうに、耐えるように顔を伏せ。

顔を上げた時には、冷徹な顔になっていた。

その内に、濁流のような激情を秘めて。

「……許さない」

「ええ……許しません」

「ああ。……許さん」

楯無さんの呟きに一夏が呼応し、私も怒りを増幅させる。

簪とは、仲が良いわけではない。それどころか、まともな会話したことすらない。知り合いとも言えないような関係だ。

それでも、この襲撃が彼女に何を齎したのかは、容易に想像できる。簪は、奪われたのだ。鍛錬の成果を実感する機会。自身を変える

きっかけ。疎遠になってしまった姉との対話。

それら、全てを。

「絶対に……許さん」

その痛みも知らぬ人形が、一体なんの権利があつて。その痛みを知るとしても、一体どんな道理があつて。

……なんであれ。

許す気など、毛頭ない。

「突いて、穿って」

「斬って、抉って」

「焼き尽くしてやる——」

敵は八機。対するこちらは三人。

容易い戦だ。一人で三機を墜とせばいい。

「覚悟しろ……人形どもっ!!」

振り上げた二刀に、渾身の力と感情を込めて。手近な無人機に、斬り掛かった。

それが、十一機ものISが入り乱れる、激戦の始まりだった。

## 第89話 今度こそ

「……………」

ピットの外で、戦いの音がする。

爆音。銃声。咆哮。

それらがアリーナに響き渡り、私の居るピットの中まで届くたび、ビクリと体を竦ませる。

「……………」

一際近くに、攻撃が当たったようだ。衝撃がここまで届いた。

……怖い。こうして膝を抱えてうずくまっているだけで、怖くてたまらない。やっぱり、私には戦うなんて、無理だったんだ。

私に向けられる視線が怖い。

私に向けられる銃口が怖い。

私に向けられる殺意が、怖い。

「……………」

なんでみんな、戦えるんだろう？ 痛いのに。傷付くのに。死んでしまうかも、しれないのに。

怖くないの？ 恐ろしくないの？ 逃げたくならないの？ 隠れ

たくはならないの？

……それとも。

ただ私が、臆病なだけなの——？

「……………」

私を守ってくれていたお姉ちゃん。

今は、ここには居ない。

「……………」

私の手を引いてくれた織斑くん。

今は、ここには居ない。

「……………」

だから私は、一人膝を抱えてうずくまる。戦うことから逃げて、恐怖から隠れて、みんなの邪魔にならないように。

私は、なんて——卑怯なんだろう。

「……あ……」

ふと、ピットの扉が開いた。誰かがアリーナの制御を取り返したのだろうか。

ピットゲートとは反対側にあるそこからなら、隠れたまま安全に逃げられる。もしかしたら敵が来るかもしれないここよりも、ずっと安全な場所まで逃げて、隠れられる。

そうしよう。それがいい。織斑くんは強いから、きつとあんな無人機なんかに負けたりしない。前にも一度やつつけてるのだから、負けるはずがない。

私が行っても邪魔になるだけだから、織斑くんが気兼ねなく戦えるように、逃げるべきだ。

「……………」

きつと、それが正しい。それが正解だ。

パイロットは実戦経験がなく、機体は完成したばかりで戦闘データがない。そんな私じゃ、役に立たないどころか足を引っ張るだけだ。だから下手に戦ったりせず、逃げるべきなんだ。

——何もかもから目を逸らして、背を向けて。

「……………」

それでいい。それでいいんだ。

けれど、本当に。

それで、いいの？

——私は。

それで、いいの——？

「う、うう……うううう……」

ずっと、ずっと逃げ続けていた。ただの一度だって、戦ったことはなかった。それが、私の今までの人生だと思ってた。

けれど、そうじゃないって教えてくれた。

ちっぽけだけけれど。

情けないけれど。

誰も知らないけれど。

誰かが知ったとしても、鼻で笑われてしまうようなものだけけれど。

それでも。

『……どうしても、諦められないものを……』

ああ、そうだ。

それでも。

『……夢と、言うのだろう……？』

「——そうだ……」

私は、ずっと追いかけてきた。私を対等に見てもらいたくて、ずっと。

たった、一人を。

「そうだよ……」

それが、私の夢だから。どうしても、諦められなかったから。

何度現実を突きつけられても。無駄だと思い知らされても。自分でも、無理だと思っても。

それでも——夢は、諦められなかったから。

「そうだよっ……!」

それは、戦っていたということじゃないの？

たとえばっぽけでも、情けなくても、誰にも知られなくても、誰かが知っても、鼻で笑われてしまうだけだとしても。

私はずっと、私だけの戦いを、続けてきたんじゃないの——？

「そうだよ……そうだよっ!」  
なら。

ならもう、「戦ったことがないから」だなんて言い訳は、できない。なら、戦わないといけない。

立ち上がらないと、いけない。

だって、ここで折れて、諦めてしまったら。

私の夢は、夢でなくなってしまうから。

『——FCS、PIC制御、スラスタ<sup>スキムバリアー</sup>制御、駆動系、被膜装甲……システム、オールグリーン——』

「……打鉄……式……？」

『——システム、オールグリーン。繰り返します。システム、オールグリーン——』

「……ありがとう……」

ああ。私って、本当に馬鹿だ。

誰も知らない？ 知ったとしても、鼻で笑われるだけ？

そんなこと、あるもんか。私の戦いを傍で見て、応援して、付き合ってくれた人は……ちゃんという。自分の戦いを否定するということは、その人たちのことも否定するということ。

そんなことをすれば、怒られてしまう。それはきつと、絶対に許されないこと。

「今まで、ごめんね……打鉄式……心配、かけちゃったよね……？」

『――発言の意味が不明です――』

「……ふふっ……そうだよね……」

そう。そんなこと、今更言うまでもない。

こんな私に、文句のひとつも言わずに付き合ってくれたこの子に、今更言うことじゃない。

「……行こう、打鉄式……始めよう……いえ」

「……再開しよう。私の……私たちの、戦いを――！」

『――了解。システム、戦闘モードに移行します――』

「箒、無事かっ!？」

「ああっ……問題ない！」

「楯無さん!？」

「だいじょーぶよー」

(くそ……想像以上にキツイな……！)

八機の無人機を相手に大立ち回りを演じていた俺たちだが、身体も機体も、消耗が激しかった。

当然と言えば当然だ。ISは元々、同等の敵を多数相手取ることを想定していない。精々がタッグ戦までだ。それ以上は装備も戦術も確立されていない。

楯無さんですら、軽い口調や表情とは裏腹に、額には玉の汗が浮かびランスを持つ手は微かに震えている。強かって見せてはいるが、限界は近いだろう。

そして俺も、呼吸を乱さないようにするだけで精一杯だ。

「うーん……思ったよりやるわねえ、このお人形さんたち」  
「……………」

あくまでも軽く、おどけたように言われた楯無さんのその言葉は、しかし紛れもなく弱音だった。それほどまでに、追い詰められているのだ。

「せめて一機でも墜とせれば、流れを掴めるのだがな……」

「ああ……だがこいつらも、それはわかっているみたいだぜ」

悔しげな筈の言葉は、状況を端的に表していた。

つまり、敵ははまだ八機とも稼動中ということだ。

「……本当に、厄介な……」

一言で言うのなら——粘り強い。それに尽きる。

八機全てが稼動中と言っても、八機全てが無傷というわけではない。むしろほとんどの機体に少なくないダメージを与えている。

だがそれは、俺たちが狙ったことではなく、敵がそうさせているから。一機にダメージが集中しないよう、陣形をひっきりなしに変えることで分散させているからだ。

強敵を複数相手にする時は、まず数を減らす。その基本戦術を半ば封じられた俺たちは、少しずつ不利になっていった。

……初めから、零落白夜を使うべきだった。敵の数を考慮して温存していたが、失敗だった。余力のある内に、速攻で一機倒すべきだった。

だが、そんな反省は後にしろ。今やるべきは、そんなことじゃない。

「おおおお!!」

「せえいつ!!」

筈と同時に突撃をかけ、刃を振るう。もう何度目だろうか、その攻撃は二機の盾持ちに割り込まれ防がれる。一方は盾を失い、もう一方は片足を失っている。どちらも十全とは言えない状態だが、それでも



防御に徹されればあと一手攻め切れない。

そして俺たちが、たったの二機に手こずっている間。

楯無さんが、残りの六機を相手にしている。

「舐めた真似しやがって……！」

無人機にも、誰を警戒すべきかはわかるのだろう。俺と箒は最小限の戦力で抑え、その間に楯無さんを、物量で押し潰す。六機分もの火力と弾幕なら、前衛が居ないことなんて問題にならない。

楯無さんは津波のように押し寄せる光弾と熱戦を避けながら、俺たちに攻撃が向かないように牽制していた。

「いい加減、くたばりやがれっ!!」

「邪魔だあっ!!」

渾身の力を込めた連撃も、銃剣と折れたナイフと全身の装甲を使い凌がれる。見れば箒も似たような状態だった。白式のパワーも紅椿の手数も、「盾」を貫くまでは至らない。

このまま続ければ、いずれ削り切れるだろう。だがそれまでに消耗するであろうエネルギーは膨大で、残りの無人機を倒せるかわからない。それに楯無さんは、俺たち以上の消耗を強いられている。いくらあの人でも疲れがたまれば集中が乱れるし、その乱れが致命的になる攻撃に晒され続けている。

どちらにせよ、一刻も早く、こいつらを倒さなきゃならない。

倒さなきゃ、ならないのに。

(あと一手、足りない……!)

盾持ちの装甲は、全身余すところなく傷だらけだ。それはダメージが一点に集中し内部まで通らないよう、ダメージの蓄積が少しでも小さい場所で受けるようにしているからだ。

だからボロボロに見えて、実際には機能はほとんど失われていない。

あと、一手。あと一手あれば、致命の一撃を入れられるのに。

その一手が、どうしても――

(っ!?! レーダーに反応……!?!)

突如ハイパーセンサーに表示された情報は、大量の熱源反応が高速で接近してくる、というものだった。

ISにしては小さいし速すぎる。逆に無人機たちが使うビームやレーザーだとしたら、レーダーに反応が出る間もなく着弾してる。なら、この反応は。

(……ミサイルかつ！)

そう、ミサイルだ。大量の——四十八発のミサイルが、様々な軌道を描きながら接近している。狙いは俺——ではなく、俺の攻撃を防ぎ続けている、盾持ちだ。

俺は咄嗟に、盾持ちから距離を取った。同時に、スラスターのチャージを開始する。

直後、盾持ちもミサイルに気付いたのか回避行動を取ったが、しかしミサイルは獲物を追う狼の群れのように追跡する。

逃げ切ることにはできない。ビームライフルで撃ち落とそうとするが、ミサイルの軌道は複雑で上手く当たらず、大した数は減らせない。そして受けようにも、盾を失ってはい——いや、例え盾があつたとしても、全方位から襲い掛かる爆風を、一体どう防げばいいというのか。

『——！』

『うおおおおっ!!』

近接信管が反応し、ミサイルが次々起爆する。眩い爆炎に視界を塞がれ、轟く爆音に耳が痛くなる。

だが、この数日間に何度も繰り返した訓練で、敵がどこにいるかわかる。わかるのなら、見えなくても、聞こえなくても問題ない。

俺は雪片式型を腰だめに構え、スラスターを全開にして真っ直ぐに飛んだ。そんな突撃は、普通ならまず当たりはしない。ひよいと横に避けられるだけだ。

だが今は、ミサイルによって体勢を崩され、視界も塞がれている。避けられることは考えず、この一撃だけに力を込めればいい。

『おおおおっ!!』

『……』

白式のパワーとスピードを載せた刺突は、盾持ちの腹部を完全に貫いた。そのまま柄を捻り刃を上に向けさせ、内部から切り上げる。「らあああああつ!!」

『……………』  
機体を斜めに、ほぼ両断され、さすがの無人機も機能を停止した。切断面から火花を散らし、ラインアイから光が消え、ゆっくりと落ちていく。

俺は残心も忘れ、その様を見届けることなく振り向き、叫んだ。先の援護の主、四十八の魔弾を操る射手の名を。

「簪さんっ!!」

彼女は、破られたピットゲートのすぐ上に居た。観客席の最前列で、背中に観客たちを庇うように立っていた。

足は震え、カチカチと歯を鳴らし、目に涙をためながら。胸を張って、堂々と。

「う、う……打鉄式、更識簪っ、参戦しますっ!!」  
精一杯の、大きな声で。

「やってみせるよ、お姉ちゃん……今度こそっ!!」  
逃げも隠れもせず。

戦場に、殴り込んで来た。

「簪ちゃん!」

「お姉ちゃん!」

私の姿を見て、お姉ちゃんが半分笑って半分泣いているような、そんな顔をした。けれどそれもほんの一瞬で、すぐに表情を引き締め、追い掛けて来ていた無人機たちを銃撃する。

「行くわよ、簪ちゃん……ついてきなさい!」

「あ……う、うん!」

戦場へ誘う言葉に応じて、私も飛び上がった。何度も試作と調整を繰り返した飛行プログラムが起動し、体を前へと進めて行く。

その先には、恐ろしい敵がいる。

けれど私には、頼もしい仲間がいる。

「ようやく来たか……待っていたぞ、簪！」

「さあ、反撃開始だぜ！」

織斑さんと篠ノ之さんが、さつき撃墜したのと同型の無人機を挟み撃ちにした。かなり防御力の高い機体みただけど、白式と紅椿の同時攻撃を受ければ長くは耐えられないだろう。

それまでお姉ちゃんと一緒に、六機の無人機を引き付ける。

「やあー！」

飛びながら、追い掛けてくる無人機に向けて一つだけになってしまった春雷を連射する。けれど相手はただの的なんかじゃなく、当然回避もするし防御もする。訓練では当たっていた攻撃が、思うように当たらない。

(ダメ……もつと、ちゃんと狙って……！)

「簪ちゃん、気をつけて！」

「!?」

姿勢を整えて撃とうとした瞬間、視界の端で、右腕が巨大な砲になっっている無人機が着地するのが見えた。腰に折り畳まれていた脚が展開され、四つ脚になって機体を固定している。

砲撃体勢だ。

「くうっ……！」

慌てて加速し、砲撃を回避する。春雷とは比べものにならない強力なビームが私のすぐ傍の空気を焼き払い、通り過ぎていく。

「動きを止めちゃダメよ、狙われるわー！」

「う、うんー！」

そうだ、これはシミュレーションでも訓練でもない。敵は回避もするし防御もするし、攻撃だってする。

そう。これは、実戦なんだ。これが、実戦なんだ。

(こわい……怖い、恐い、コワいつ……でも！)

目を逸らしてしまいたい。背を向けてしまいたい。逃げ出してしまいたい。隠れてしまいたい。

けれどそうすると、きつと私は、ずっと前に進めない。変わる事ができない。膝を抱えてうずくまり、誰かが助けてくれるのを待つだけの、今の私のままだ。

それは、嫌だ。

それは、今ここで戦うよりも、ずっと怖い——！

「やあああああつ!!」

『——！』

私たちの前に回り込もうと速度を上げた逆関節の機体に向けて、その進路を塞ぐように、大薙刀「夢現」ゆめうつを振るう。夢現の刃は対複合装甲用の超振動ブレードで、ISに対しても大きな攻撃力がある。見るからに装甲の薄い逆関節には脅威のはず。

思った通り、逆関節は持ち前の機動力で急上昇し、私の薙払いをかわした。その先に待ち構える、お姉ちゃんの蛇腹剣「ラスティーネール」の刃に、自ら飛び込むように。

「はあー！」

お姉ちゃんがクン、と手首を捻ると、ラスティーネールの連結刃が鞭のように動き、逆関節の装甲を切り裂く。そのまま連結刃を操り逆関節の上下左右を塞ぐようにすると、逆関節はたまらず減速した。

「簪ちゃんー！」

「うんー！」

お姉ちゃんの意図を察して、山嵐を起動する。ミサイルは銃と違って、一瞬でロツクオンというわけにはいかないけれど、お姉ちゃんが十分な時間を稼いでくれた。

織斑くんと本音と一緒に造ったプログラムが、四十八発のミサイルに辿るべき軌道を書き込んでいく。

(当ててる必要は、ない……)

上下左右から、回り込んで後ろから、あるいは正面から。

不規則な軌道のどれもが、敵には辿り着かない。

ただ、近くを通り過ぎるだけ。

(外れる攻撃と、無駄な攻撃は違う……！)

けれど、通り過ぎる「近く」は。

ミサイルの爆風の、効果範囲だ。

(この四十八発、全部を布石にしてっ)

気付いた時にはもう遅い。包囲はもう完成している。

前後上下左右、逃げ道はない。

(致命的な隙を、作らせる！)

『、――、――！』

逆関節の姿が爆風に呑み込まれる直前、私は見た。ミサイルの包囲の内側に、薄く霧が出ているのを。

「全方位からの爆風……それってつまり」

爆発による閃光と炎で、逆関節の姿は完全に見えなくなっている。けれどその中で一体何が起きているのかは、簡単に想像できた。

山嵐が自分の攻撃だからじゃない。お姉ちゃんがこのチャンスに逃がすわけがないことを知っているからだ。

「その中心には、すっごい圧力がかかっているわよね」

ラストイーネイルで逆関節を囲んだ際、その刃の表面を流動していた水。

それはお姉ちゃんの専用機、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女の第三世代兵装であるナノマシンだ。それが逆関節の進路を塞ぎ、誘導した後、刃を離れ逆関節にまとわりついていた。

そのままだと大した量ではないし、広い空間ではその内散ってしまふ。けれど今は、山嵐の爆風がナノマシンを圧縮し、密度を高めている。

「クリア・パッション清き熱情」の発動に、十分なほど。

「そーゆーわけで……さよならっ」

パチン。お姉ちゃんが指を鳴らすと、山嵐の爆炎を吹き飛ばして大爆発が起きた。一瞬で晴れた視界に映るのは、原形を留めないほどに破壊され、既に機能を停止している無人機。

落ちていく様を見届けるまでもなく、私とお姉ちゃんは、同時に言った。



「ほい、いっちょようあがり」

電子ロックを解除する技術は、本音にはない。だが固ロックしている部分から切り離され、ついでに蝶番も外されてしまえば、扉はただの鉄板になる。

ぼん、と軽く押しただけで、扉だった物は外へと倒れた。外に出た本音は周囲の安全を確認し、走り出した。

いくつかのアーリーナは既に制御を取り戻しているのか、外にも避難する人々は多くいた。本音はその流れに呑み込まれないように、必死に進んだ。

流れに逆らって。

「かんちゃん……！」

本音の幼なじみで大切な親友の、更識簪。彼女の居る第一アーリーナからは、次々と人が逃げ出してくる。その中に簪がいないことは、確認するまでもなく分かっている。

今回の大会に、どれほどの想いをかけていたか。簪以上に、本音は良く分かっていた。他人の心の機微に敏い本音は、簪本人すら気付いていなかった想いをとっくに見抜いていたのだ。

だから、本音には分かる。簪は逃げない。少し時間はかかるかもしれないが、必ず立ち上がり、立ち向かう。

その時、支えてあげたいのだ。前から引つ張る役目は楯無や一夏に任せればいい。けれど簪は、とても臆病だから。どンドン前に進んでしまうのは、怖いかもしれない。

だから、背中を支えてあげたい。一緒にいるよと教えてあげたい。隣に誰かがいてくれるだけで、少しは安心出来るから。

「かんちゃんっ！」

本音は走る。息を切らせながら、一生懸命に。

臆病で、引つ込み思案だけれど。頑張り屋で、本当は負けず嫌いな、友達の為に。



## 第90話 紅の剣姫

「……おう、フォルテ後輩」

「なんスか、ダリル先輩」

「すげえもん見ちまったな」

「いやー……すごかったツスねー」

第三アリーナの中央に、二機のISが浮いている。片方はIS学園三年生で唯一の国家代表候補生、ダリル・ケイシーの専用機「ヘル・ハウンドver2.5」。もう片方は、二年生の国家代表候補生、フォルテ・サファイアの専用機「コールド・ブラッド」。

ダリルとフォルテが待機していたピットを突如襲撃してきた、四機のIS。彼女たちはアリーナに出て応戦していた筈だが、その機体は驚くほどダメージが少なかった。

「よう、フォルテ。てめーもよ、後輩なら先輩のためにあんくらい気合を入れて働けよ」

「ええー？ いやツスよそんなの。先輩こそ、先輩らしく後輩にカツコイイとこ見せてほしいツス」

「てめー、先輩の命令が聞けねえってのか？」

「後輩のお願い、聞いてくれないんスか？」

それは決して、二人が防御に徹し逃げ回っていたわけではない。二人は鉄壁の防御力を誇る戦術の使い手として有名ではあるが、実際に彼女たちと戦ったことのある者たちはむしろ、研ぎ澄まされたカウンターをこそ恐れるのだ。現に第三アリーナの地面には、撃墜され機能停止した無人ISが五機、横たわっている。

そう。五機だ。

「……つーか、こいつら機械だろ？ それがしつぽ巻いて逃げ出すとか、一体どーいうことだよ」

「まあ現実的に考えれば、有利な場所に移動するための戦術的撤退とか、そんな感じだと思うツスけど」

「そりゃそーだろうけどよ」

言いながら、ダリルは半ば呆けたような顔で空を見上げた。先ほど

までアリーナを覆っていた遮断シールドは撃ち抜かれ切り裂かれ、今は機能していない。視界には青い空が広がるばかりだ。

聞きながら、フォルテは顔を引きつらせ地面を見下ろした。五機の無人ISの残骸、その内の一機は、彼女たちが倒したのではない。彼女たちの持つ武器では、胴を両断するような真似はできない。

「……こりやあの話も納得だな。こんなもん見せられちゃ」

「？ なんの話ツスか？」

「生徒たちの間での、噂っつーかなんっつーか。「校則に載っていない禁則事項」ってやつだよ」

「あー、聞いたことあるツス。一ツ、織斑千冬に刃向かってはいけな。二ツ、更識楯無を敵に回してはいけない。……でしたっけ？」

その機体は、二人が最後の無人機に止めを刺した直後に現れたものだった。

轟音と共に、アリーナ内部から観客席に出る扉を高出力のビームが破った。すわ敵の増援か、と身構える二人を完全に無視して、ビームが開けた大穴から飛び出して来た三機の無人機がそのまま第三アリーナを飛び去り、しんがり殿だろう、盾を持った機体だけが残った。盾を構え、ビームライフルを穴へ向け、防御体勢を取り。

——直後、銀色の装甲から伸びる紫色の光に、構えた盾ごと両断されたのだ。

「まーIS学園自体、歴史も何もない新しい学園だから、そんな時事ネタみてえなのしかねーけどよ。……今年に入って、また増えたんだよな」

「あー……なんとなくわかったツス」

倒した無人機、残ったダリルとサファイアに一瞥すらくれず無人機たちを追って行った、銀色の装甲。一瞬だけ見えた、操縦者の少女の顔。刃のように冷たく鋭く、炎のように熱く激しいその表情を思い出す。

ダリルは呆れたように肩をすくめて。フォルテは溜め息を吐き頭を振って。

同時に言った。

「三ツ——井上真改を怒らせてはいけない」

一夏、簪、そして楯無さん……三人と協力して戦い続けること数十分。観客席には観客の姿はほとんど残っていない。どうやらアリーナの制御は大方取り戻したらしく、避難は順調に進んでいるようだった。

この分なら、先生たちが応援に駆け付けるまでそう時間はかからないだろう。訓練用の打鉄とラファール・リヴァイヴとはいえ、二十機近くのIS。それも操るのは、いずれも歴戦の猛者である実技教官たちだ。無人機が全部で何機いるかはわからないが、このアリーナに来た数を考えると、二十四機前後か。専用機持ちたちと合流すれば、問題なく退けられるだろう。

——だが。

「ぐ、う……！」

「大丈夫か、箒!」

それまで、私が保ちそうにない。

(エネルギーが……！)

私の専用機、紅椿は、対一の勝負ですらエネルギー管理に悩まされる。四対八という大規模な戦闘ではどれだけ温存してもエネルギーが足りない。

雨月の光弾も空裂の光刃も、途中から使わずにいるが……ブレードとして最低限の攻撃力を発揮するには、多くはないがエネルギーは必要だ。細身で軽く、片手で振るうこの二刀は、刀身をエネルギーで覆うことで物理的な破壊力の低さを補っているからだ。

「くっ……ここまで来てっ！」

この第一アリーナに居る無人機は、残り四機。武器腕が二機と、逆関節と狙撃手が一機ずつ。

前衛である盾持ちは全て排除し、敵部隊の防御力は大きく落ちた。あとはこのまま、押し切るだけだと言うのに。

「!? うあああつ!!」

「箒っ!!」

焦りが隙を作り、反応が遅れ、被弾する。……直撃だ。攻撃力の低い逆関節の光弾だったからなんとか耐えられたが、装甲の一部が焼け砕けた。今のが武器腕や狙撃手の熱線であれば確実に撃墜されていただろう……。そうでなくても、次はない。

「く、うあ……!」

「箒! 紅椿はもう限界だ、撤退しろ!」

大きくバランスを崩し、姿勢制御すらできないほどにエネルギーを消耗していたため、そのまま観客席に叩きつけられる。そんな様子を見られては、一夏の判断も仕方あるまい。

これ以上は戦えない、と。無理に戦おうとしても、足手まといになるだけだ、と。

そう判断されても仕方ないほどの、体たらく。

「くううう……!」

悔しさに歯噛みする。私は、こんなにも弱かったのか。

一夏は、紅椿と同じく燃費の悪い白式を駆りながら、あんなにも立派に戦っている。弱点を補うために、様々な工夫を凝らし、試し、繰り返し、戦術や技にしてきたからだ。

零落白夜に頼らずとも高い威力が出せるよう、白式のパワーとスピードを刃に載せる斬撃を身に付けた。スラスターエネルギーの消耗を抑えるために、追い掛けるのではなく回り込む機動を身に付けた。

いずれも高度な技術の数々を、たゆまぬ努力で磨いてきたのだ。

(それに比べて、私はなんだ……!)

紅椿の性能に頼っていながら、追い詰められれば燃費のせいにする。戦術はエネルギーを出し惜しむ、消極的なモノばかり。結局は長所を活かしきれず、短所も補いきれず、中途半端な性能しか発揮できない。

(この様は、なんだ!)

何故私は、こんなにも弱い。何故私は、こんなところで這いつく

ばっている。

私が居るべきはここではない。私が居たいのは、ここではないのに。

(なんて様だ、篠ノ之箒！)

楯無さんが、簪が、一夏が戦っている。疲れ果てた身体で、残り少ない弾丸で、底を尽きかけたエネルギーで。

倒れているのは私だけ。戦っていないのは、私だけ。

(なんて様だ……紅椿っ!!)

強くなりたかった。だが人間の力など、兵器<sup>1</sup>の前では塵芥に等しい。紅椿は私にとって、希望そのものだった。

だから頼った。その性能に、その機能に、その武器に。それ自体は、悪いこととは思わない。自身の専用機を頼りにするのは当然のことだ。それ自体は、決して悪いこととは思わない。

問題は――

(この程度か、お前は！　こんなものなのか、お前の力はっ!!)

問題は。

頼っていないながら。

信じて、いなかったこと。

(これが……お前の限界か!!)

……私は、信じていなかった。姉さんが造った機体でありながら……いや、姉さんが造った機体だからこそ。自分の力で手に入れたわけではなく、ただ私が、「篠ノ之束の妹」たがら与えられただけだから。身の丈に合わぬ絶大な力を、信じることができなかつた。紅椿の性能について行けず、成功も失敗も、自分の物だと思えなかつた。

紅椿を、私の専用機なのだと、信じられなかつた。

「情けないな……お前も、私も」

ISはパイロットとシンクロすることで、その性能を発揮する。だからこそ、ただ一人のパイロットのためだけに存在する専用機は、より深くパイロットとシンクロできる。性能を限界まで引き出せる。

しかしパイロットが専用機を信じていなければ、シンクロなどできるはずもない。……当然だ。自分を信じてくれない者と、どうして心

を通わせられると言うのか。

……なのに。

「情けないなっ……私たちは！」

なのに、それでも。

紅椿は、私に尽くしてくれた。力を貸してくれたのだ。

「ああああああああっ!!!」

両脚に渾身の力を込めて、立ち上がる。展開しているだけで精一杯なほどにエネルギーを消耗した紅椿は、パワーアシストすら機能していない。ISの装甲は疲労した身体で支えるにはあまりに重く、ガクガクと膝が笑う。

だが倒れるわけには、地につくわけにはいかない。

今、この両手は。武器を持ち、振るうために——戦うために、あるのだから。

「ぐ、うお……い……どうだっ……私は、立ったぞ！ お前はどうか!!」

紅椿は、私でなければ動かせない。私は、紅椿がなければあまりに弱い。

ならば、互いを頼らなくてどうする。

互いに信じ合わなくて、何ができる！

「どうした！ お前がこの程度のはずがないだろう！ 見せてみる、お前の本当の力を！ この私に!!」

もはや、声を出すだけでも辛い。だが身体の奥底から湧き上がる想いが口を衝き、止まらない。

頭を下げて謝りたい。手を取って感謝したい。そしてそれ以上に、私は、しっかりと向き合いたかった。

「お前が、篠<sup>こ</sup>ノ之<sup>私</sup>箒<sup>刀</sup>の専用機を名乗るなら——」

そして何より、はつきりと言いたかった。自らの愚かさ、その一つに、ようやく気付けたことを。その愚かさを、正せたことを。

「——信頼に、応えてみせろっ!!」

私は、お前を頼り。

そして、信じる。

「紅椿いいいい!!」

そう、声を大にして、言いたかったのだ。

「おおおおおおオオオオオ!!」

特別なことなんてしていない。私はただ、心に決めたただけだ。

紅椿を、私の刀を信じると。姉さんの思惑も周囲の嫉妬も関係ない、紅椿は私の専用機なのだ。紅椿自身がそう認めたからこそ、私はこうして機体を展開できている。

疑う余地など初めからなかった。私一人が、どっちつかずで空回りしていただけ。それももう、終わりだ。

「行くぞ、紅椿……ついて来い!!」

装甲に包まれた足を持ち上げ、前に出す。いまだ沈黙している駆動系は枷のように関節を固め、私の動きを束縛する。

「くう、おおおおおっ!!」

一歩踏み出すだけでも全身が軋みを上げる。今までの戦闘、圧倒的な機動力で動き回ったことにより蓄積していたダメージが、ここに来て一気に表面化していた。

「あああ、あああああああっ!!」

それでも、歩みは止まらない。この痛み、この重さ、この不自由さ——それらは全て、私が今まで紅椿に強いてきたものだ。私が不甲斐ないばかりに。私の力不足のせいだ。

「ぐ、がっ……あああっ!!」

この程度で、借りを返せるとは思わない。こんなものは、始まりに過ぎないんだ。

私はこれから、紅椿の誠意に報いて行かなければならない。

「はあっ、はあっ、ぜえっ……く、ああああ!!」

ガツン。必死に持ち上げた足が、観客席の縁に当たる。普段は遮断シールドに覆われているそのも、今は機能していない。流れ弾でも飛んで来れば、まず間違いないで即死するだろう。

だが……不思議と、恐怖はなかった。

「ぜえっ、ぜえっ……どうだ！　ここまで……来たぞ！」

もはや呼吸もままならない。手足は痺れ、ちやんと武器を持っているか、ちやんと立っているか、目で見て確認しないとわからない。

それでも、ここまで来た。戦場に、戻って来た。

「……待たせたな、紅椿。永く、待たせた」

一人でも戦う覚悟なんて、私にはない。今はもう、必要とも思わない。

紅椿お前がいなければ、私は戦えない。しかし紅椿お前がいてくれるのなら、私はいくらでも戦える。

それでいい。それで十分じゃないか。ただあと一つ、敢えて欲を言うとするれば。

「さあ。始めよう、もう一度。篠ノ之箒私と紅椿お前の戦いを」

戦うのであれば。

私は、最強を目指したい。

「始めよう、今ここから。私たちの、闘いを！」

勝利も敗北も分かち合おう。長い道のりを共に歩もう。そしていつか、目指す場所に辿り着けたなら。

そこからの景色を眺めながら、語り合おう。

「行くぞ……紅椿っ!!」

どれもこれも、自分勝手な言い分だ。機械であるISは答えなど返さないし、当然、何を感じ、何を思っているのかなどわからない。

それでも私は。ようやく紅椿の隣に、並べた気がした。

……再起動します——

頭の中に声が響く。

聞き慣れた機械音声。それが何故か、僅かな温かみを帯びているように感じた。

——搭乗者とのシンクロ率が規定値に到達。ワンオフ・アピリティ単一仕様能力、〔絢爛舞踏〕を発動します——



「はああああああ!!!」

紅椿の展開装甲、全身に組み込まれたそれらが、全て開く。そこから溢れ出したのは、いつものような紅い光の刃ではなく、黄金に輝く光の粒子だった。

——絢爛舞踏、稼働率30パーセント……40パーセント……50パーセント……——

「エネルギーが回復していく……これがお前の、本当の力か!」

ワンオフ・アビリティ 単一仕様能力、「絢爛舞踏」。一体どのような仕組みなのか見当も付かないが、絢爛舞踏が発動した瞬間から、紅椿のエネルギーは回復し始めた。

花卉のように舞っていた光の粒子は次第に数を増やし、今では花吹雪と呼ぶべきほどになっている。

幻想的な光景だった。状況が違えば、きつと心奪われていただろう。

——60パーセント……70パーセント……警告。損傷箇所の負荷が増大しています。これ以上の出力上昇は危険です——

しかし泉のように湧き続けるエネルギーは、機体にも大きな負担をかけるようだ。先の戦闘で傷付いた装甲が出力に耐えられず、徐々に亀裂が広がって行く。

「出力を下げろ」

——稼働率……60パーセント……50パーセント……40パーセント——

粒子の噴出が抑えられ、亀裂の拡大も止まった。どうやら今の状態では、この出力が限界か。

エネルギーの残量はおよそ二割。十全とは言い難いが、絢爛舞踏により今も少しずつ回復している。それは言い換えれば、戦闘による消耗を抑えることができるということだ。

奴らを倒すには、十分だ。

「……済まなかった。これほどの力を持っていながら満足に振るえないのは、窮屈だっただろう?」

——状況を確認……敵IS、四機。友軍三機と交戦中です——

「……そうだな。今は、そんなことを言っている暇はない」

——作戦目標を更新。敵ISの全機撃墜をもって、作戦完了としま  
す——

「了解だ。……篠ノ之箒、紅椿、推して参る!!」

雨月と空裂も真紅の輝きを取り戻し、全身の展開装甲からスラストーのようにエネルギーが噴き出す。今までならば瞬く間にエネルギーが枯渇するだろうが、消費に追い付いていないとはいえ、常にエネルギーは回復し続けている。

あと数分ならば、この性能を維持できるだろう。

「出し惜しみはしない……一気に片を付ける!」

一夏たちの体力も限界が近いはず。これ以上戦いを長引かせるわけにはいかない。

絶え間ない飽和攻撃で押し潰す——それが、紅椿の攻撃力を最大限発揮できる戦術だ。

(まずは……数を減らす!)

一夏たちは分断され、それぞれ相性の悪い敵と戦っていた。素早く視線を巡らせ、誰に合流すべきかを考える。

判断は、一瞬だった。

「し、篠ノ之さん!? もう、大丈夫なの……?」

「ふん、他人の心配をしている場合か?」

戦い慣れておらず、そもそも一対一の戦闘に不向きな簪。私は彼女のもとへ飛び、追い掛けていた無人機の前に立ちふさがった。

「それに。その呼び方はやめてもらおうか」

「え……?」

「私のことは箒と呼べ。私もお前を、簪と呼ばせてもらう」

「……うん! 一緒に……戦おうっ……箒!」

「ああ! 行くぞ、簪!」

戦線復帰した私を警戒してか、距離を空け滞空していた無人機——武器腕に刀を向ける。この敵を相手に近距離・中距離で戦うのは危険だ。本来ならば穿<sup>うがち</sup>千を使いたいところだが、そこまでの余裕はない。

それに、紅椿の攻撃力を引き出せれば、あの分厚い弾幕にも対処で

きる筈だ。

「簪……山嵐はあと何回使える?」

「……一回だけ……」

「そうか。では温存しておけ。私が隙を作る、機を見て斬り込め!」

「……うん!」

力強い返事を受け取り、一気に加速する。それに対し武器腕は、退がりながらビームカノンを乱射した。

相も変わらず凄まじい量の熱線に、怯みそうになる。葉を食いしぱり、無意識に回避しようとする本能をねじ伏せた。

できる筈だ。……いや、できる。私と、紅椿なら——!

「おおおおおっ!!」

二刀を振るい、光刃と光弾を乱れ撃つ。同時に全身の展開装甲からエネルギー刃を生み出し、一斉に射出。

紅椿の高性能なFCSは、無数の熱線を余さず捉えていた。あとは示された軌道に、迷いなく刃を乗せればいい。

「はあっ!!」

『!?!』

剣ならば、幾千幾万と振るってきた。必要な動きはこの身体に刻み込まれている。心にさえ曇りがなければ、剣閃を現実に映し出すことなど容易い。

「貴様らにはあるまい……自らに積み上げてきた技など! ならばできまい、自らを信じることなど!」

空中で激突する光と光。それらは一瞬眩く輝き、弾けて消え——一つ残らず、撃ち落とされた。

「機械如きにはわかるまい! 信じ信じられることが、どれほどの力になるのかっ!!」

武器腕は繰り返し熱線を乱射する。私は絶えず二刀を振るい、その全てを撃ち落とす。

「それを私に教えてくれたこと、それだけは感謝してやる!」

私に射線を集めたせいで、武器腕は正面以外に致命的な隙を晒していた。無論、それを見逃す簪ではなく、最大速度で後ろに回り込ん

でいる。

武器腕が気付いた頃には、既に間合いの内。簪は大薙刀、夢現ゆめうつを振りかぶっていた。

慌てて振り返り、ビームカノンを片方後ろに向けるが——余りに遅い。

「やあああああっ!!」

長柄武器特有の、膨大な遠心力を載せた薙払い。そこに簪の技術と夢現の超振動刃が加われば、その切断力は尋常ではない。腕と一体化した巨大なビームカノンは、一太刀で斬り飛ばされた。

「その礼に、魅せてやろう!」

そして、半減した火力では私を抑え切ることなどできない。熱線を撃ち落としながら接近し、瞬く間に一足一刀の間合いに入る。

「これが……!」

空裂を左肩に担ぎ、雨月を左腰に据えて居合いのように構える。

最後の踏み込み。同時に振るわれた二刀は武器腕の装甲を斬り裂いても止まることなく、身体ごと回転しながら二回、三回と斬り付けた。

勢いのまま武器腕の後ろに飛び抜けた直後、放たれた光刃と光弾が殺到し、斬り裂き、貫き——武器腕を完膚なきまでに、破壊した。

「私と、紅椿の剣だっ!!」

今までにない、確かな手応え。モノクロだった世界が色彩を取り戻したかのように、あらゆる感覚が研ぎ澄まされる。四肢だけでなく、手にした刀の切っ先や、人体には備わっていないスラスタ―にまで神経が張り巡らされている。

もちろんそれは比喻であり、錯覚だ。実際は、紅椿から送られてくる情報を脳がそのように認識しているに過ぎない。だが逆に言えば、それらがまるで私自身が感じているかのように思えるほどリアルで、良く馴染むということだ。

「……………」

だがその感覚も、一瞬の後に霧散してしまった。敵を倒した安堵からか、限界まで酷使した身体と機体の疲労が唐突に蘇る。

……なにをしている、篠ノ之箒。まだ一機墜としただけだ、敵はまだ残っている。最後まで緊張を緩めるな、集中を途切れさせな。どれだけ優勢であろうと詰めを誤れば敗北する、それをいい加減学べ！  
「……………」

素早く、深く呼吸する。平時の状態に戻りつつあった精神を再び戦闘のそれへと切り替え、残りの敵に意識を向け――

「うあつ……………」

「お姉ちゃん!!」

「!？」

堪えきれずに漏れ出たような小さな悲鳴を、ハイパーセンサーが耳聴く捉える。一体何が起こったのか――直接見るまでもなく、誰よりも早く反応した簪の様子が、全てを物語っていた。

「なっ!？」

「楯無さん!」

一瞬の隙を突かれたのだろう、楯無さんは彼女を追いかけていた二機の片方、逆関節の体当たりを受けていた。抗うだけの力も残っていないのか、そのままアリーナの壁に叩き付けられ、押さえ込まれる。

……迂闊だった。いや、冷静に考えれば当たり前のことだ。学園最強の生徒会長、ロシアの国家代表……いくら凄まじい肩書きを持っていようと、彼女は超人でもなんでもない。動きから徹底的に無駄を削ぎ落とすことで消耗を抑えてはいるが、体力的には十代の少女に過ぎない。

数で勝る敵に絶え間なく攻められ続ければ、いずれ力尽きるのは当たり前なのだ。

「こ、の……………」

なんとか逆関節を振り払おうと楯無さんがもがくが、その腕には見るからに力がこもっていない。

……心のどこかで思っていた。楯無さんならば、どのような苦境も

笑いながら乗り越えるだろうと。だから、率先して多くの敵を引き付ける彼女に、なんの心配もせずに任せた——いや、押し付けた。その甘えが、こんな事態を招いた。

「お姉ちゃんっ！」

悲鳴のような簪の声。見れば楯無さんを追っていたもう一機、武器腕と、一夏を近づけまいと牽制し続けていた狙撃手が、その凶悪な砲を楯無さんへと向けていた。

……数がこちらを下回り劣勢になったからか、逆関節ごと撃ち抜いて、楯無さんを道連れにするつもりか——！

「させるかあっ!!」

「その人を離せ!!」

一夏が狙撃手へと全速力で飛び、私は穿千に残りのエネルギー全てを叩き込んだ。

武器腕と逆関節に素早く狙いを定める。狙いを外れ、楯無さんに当たるかもしれない——そんなことを考えている猶予はなかった。一瞬も躊躇うことなく、穿千を発射する。放たれた二条の閃光は真紅の尾を引きながら直進し、逆関節と武器腕を貫いた。

ビクン、と一度痙攣し機能を停止する逆関節。元々薄い装甲と蓄積したダメージで、既に限界だったのか。これなら武器腕にも、十分なダメージを——

「……なの!」

……なんということだ。私はまだ、機械を相手にしているということの意味を理解していなかったらしい。

回避する猶予もなく耐える余裕もない武器腕は、あろうことか自らの右腕を切り離して射線上に置くことで、穿千の一撃を凌いだのだ。

「ま……まずいっ」

慌てて接近しようとするが、穿千を放つ為に機体を空中で固定させたせいで、加速に手間取る。そうでなくても、もはやエネルギーは空だ。体当たりをするにしても、十分な速度は出せないだろう。

一夏を見る。

丁度、零落白夜を狙撃手の砲に突き立てたところだった。白式の残

りエネルギーから考えて最後の零落白夜だが、敵の唯一の攻め手を潰すことはできた。しかし今からではどうやっても、一夏が武器腕を止めることはできない。

簪を見る。

春雷は既に使い切った。山嵐もあと一回分の弾しかない。その一回でも大きなダメージを与えることはできるが、仕留めるには至らない。そして遠距離攻撃の手段が残っていない打鉄式式では、山嵐を受けた武器腕が体勢を立て直す前に追撃を仕掛けるのは難しいだろう。

楯無さんを見る。

逆関節は機能を停止したが、がっちりとしがみついていた両腕はそのまま固まってしまった。それでも楯無さんなら、例え疲れ切っているとしても抜けられるだろう。……時間さえあれば。

……何か。何か、ないか。

楯無さんに向けられた武器腕の砲に、光が集まっていく。片方だけとは言え、身動きが取れない状態であれを受ければどうなるかなど、火を見るより明らかだ。

必死に前へ進むもうとするが、ひどく遅く感じる。身体が思うように動かない中、意識だけが加速していく。何もかもがゆっくりで、しかしいくら考えても、どうすれば良いかわからない。

何か、ないのか。何か、手立ては。

武器腕の砲から漏れ出る光は見る間に強くなっている。一瞬の後には放たれ、逆関節の残骸ごと楯無さんを焼き尽くすだろう。それを止めるため必死に考えるが……何も思い付かない。

敵を睨み付ける目に涙が滲む。悔しきか、情けなさか、それとも別の何かか。泣いている暇などないというのに、視界は少しずつ歪んでいき。

その端に。見慣れない、細く長い何かはどこから飛んで来て。吸い込まれるように、武器腕へと突き刺さる様が見えた――

## 第91話 銀の剣鬼

……甘えていた。

お姉ちゃんと一緒に戦っているつもりで、結局は甘えていた。

お姉ちゃんなら大丈夫だって、信じて疑わなくて、甘えていた。

だから——こんなことになった。

(お姉ちゃんっ)

必死に手を伸ばす。それがなんの意味もないことを私は知っているけれど、そうせずにはいられなかった。

春雷はとつくに撃ち尽くしてしまって、山嵐も残り一回分の弾しかない。一回で倒し切ることを目的にしていけない山嵐じゃ、武器腕の攻撃は止められない。夢現で追撃しようにも、この距離からじゃ間に合わない。

(お姉ちゃんっ！)

それでも、他に方法はない。一か八か、山嵐の弾道が偶然敵の直近を通ることに賭けるしかない。四十八発全部が、偶然にもそうなることに。

……それはもう。偶然じゃなくて、奇跡だ。

(お姉ちゃんっ!!)

……本当に、それしかないの？

山嵐を撃ってしまえば、打鉄式は立て直しに数瞬かかる。致命的な時間だ。つまり失敗すれば——それで、終わり。

(お姉ちゃん……！)

怖い。

怖い、怖い、怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

撃たなくちゃいけない。だってそれしか方法がないんだから。けれど失敗したら。そう考えると、怖くてたまらない。

他に何か、もつといい方法があるんじゃないの？ そんな風に考えてしまい、貴重な一瞬を無駄にしていく。

(お姉、ちゃんっ……！)



撃たなくちや。

撃たなくちや、いけないのに。

怖くて、恐ろしくて、身体が動かない。ロックオンはとつくに完了して、あとは撃つだけなのに。

怖くて。恐ろしくて。

どうしても、身体が動かない――

『――撃って！』

「……え？」

突然、回線から誰かの声が聞こえた。とても、とても聞き慣れた声。私が小さい頃から、毎日のように聞いていた声。

けれど今、その声が聞こえるはずがない。あの子のわけがない。だってあの子が、ここに居るなんて――

『撃って、かんちゃんっ！』

「……っ！」

――ああ。間違いない。私を「かんちゃん」なんて呼ぶのは、世界に一人しかいない。

いつもふらふら落ち着きがなくて、見ている人を心配させて、けれど時々頼もしい。どんくさくて気まぐれでわがままで、けれど優しく、いつも私を気遣ってくれる。

本音の、声だ。

『撃って!!』

「――山嵐、発射！」

本音がいつになく本音の声で、「撃って」と言った。理由はわからない。意図もわからない。けれどきつと、本音のその言葉に、間違いはない。根拠もなしにそう思った。

なら、迷うことなんて何も無い。今まで動けなかったのが嘘のように、私は躊躇なく、引き金を引くことができた。

その瞬間に発射される、四十八発のミサイル。ポッドの中に残った全弾が火を噴き、猛然と飛翔する。

それらは武器腕に向かって行くけれど、直撃コースからはほんの少

し外れている。やっぱりだ。このままじゃ……！

「こつちも、発射〜！」

微妙に間延びした声が、微かに聞こえた。回線を通したもののじやない、空気を伝わって届いた肉声だ。

その方向を見ると、信じられないことに、観客席に本音が立っていた。井上さんの居る第三アリーナに行っていたはずなのに、まさかここまで走って来たのだろうか？ それを肯定するように、本音の顔には滝のような汗が流れていた。

あの混乱の中、この危険な場所まで、走って来てくれたんだ。運動が大の苦手な本音が、私が膝を抱えてうずくまっていた時から、ずっと。

……私のために。私を信じて。

その本音の前には、機械仕掛けの大きな弩砲バリスタが置いてある。いかにも即席の、学園内で見える様々な機械や部品、それに椅子や扉や、他にも色々な物を組み合わせで造られた不格好な物だった。けれど過剰なまでに補強された機構部と三本の杭を打ち付け固定された土台は、兵器として必要十分な強度と安定性を見せて付けている。弓床の直上に備えられた回避機動訓練用の自動照準機オートサイトが、引き出され繋がられたコードにより無数の歯車を操り、標的を射線に捉え。

番えられていた矢は、今まさに放たれたところだった。

「……あれは……!？」

多分、手摺か何かに無理やり矢羽と鏃を付けて矢にしたんだろう。けれど鏃は、敵を貫くための形をしていなかった。一部の電子ロック式の扉に使われている、高性能電磁石だ。武器腕に命中した矢は、ダメージは与えられなかったけれど、装甲にピタリと張り付いた。

しかしそんなことをして、一体なんの意味があるのか———そう思いながら矢を見ると、鏃の少し手前に、小さな機械が取り付けられていることに気付いた。

「……いー、そうかー！」

それを見て、ようやく本音の狙いがわかった。

それを造ることができるのは、おそらくこの学園内では———いや、

世界中でも本音だけだ。私と一緒に山嵐のプログラムを造った、本音だけ。

山嵐のプログラム、目標の追尾とミサイルの軌道に関する部分は、処理しなければいけない情報量の問題で、今の形を取った。常に動き回る敵の正確な位置を求めるには、膨大な演算能力が必要になるからだ。

けれど、その演算を大幅に省く方法がある。本来ならそれは、デコイ、フレア、チャフへの対策が進歩してきているから、極めて難しいことだけれど。でも本音は、山嵐のプログラムを熟知している本音だけは、それをいとも簡単に造ることができる。

あみだくじと同じだ。スタート地点を一つ一つ試して当たりを探すよりも、当たりから逆に辿った方が断然早い。標的への道筋がわからないのなら、標的自身にその道筋を示してもらえばいい。

本音は。本音だけは。その道筋の示し方を、知っている。

それは即ち、対山嵐専用の。

——誘導ビーコン。

「いっつけええええっ!!」

誘導ビーコンに赤い光が灯り、起動したことを告げる。その瞬間、山嵐のミサイルたちは明らかにその動きを変えた。より精密に、より複雑に。狙いを僅かに逸れることもなく、武器腕へと殺到し。

——一発目が直撃。

続いて二発目、三発目、四発目。五発、六発、七発、八、九、十——

「や、やった……!」

爆煙が濃くて、武器腕の姿は見えない。けれど少しすると、煙の下から大破した武器腕が現れ、落ちていくのを確認した。

——倒せた。思わずガッツポーズをして、すぐに慌てて、お姉ちゃんのところへ行こうとして。

落ちていく途中の、機能を停止したはずの武器腕から、熱線が放たれた。

「——え」

武器腕が再起動したわけじゃない。ただチャージしたエネルギーが行き場をなくし、ひび割れた砲口から溢れ出しただけ。

たったの一発、それも狙いなんか誰に対しても、何に向けても付けられていない、床に落とした拳銃が暴発したようなその熱線は、

本音へと、真っ直ぐに飛んで行った。

無作為に放たれた一発の銃弾が、この広いアリーナで、観客席に立つ一人の少女に当たる。それは確率で言えば、どれほどのものなのだろうか。

けれどそんなことはどうでもいい。今重要なのはたった一つだけ。このままじゃ、熱線は本音に直撃する。ISに対して大きなダメージを与えるほど強力な熱線が、生身の本音に。

「ほん——」

お姉ちゃんが追い詰められた時とは違う。あまりにも突然で予想外の事態に、私の思考は混乱を通り越して、完全に停止していた。反射的に呼んだ名前も、最後まで声にする間もなさそうだった。

熱線は、もう本音の目の前まで来ている。次の瞬間には、布仏本音という女の子は骨の一欠片に至るまで蒸発し、この地上から消滅してしまうだろう。

全てを出し切った私たちには、その未来を変える力は残っていない。何もできないまま——それこそ、反応すらろくにできないまま、その結末を見届けるしかない。

だから。

一体何が起こったのか。私がそれを理解するには、結構な時間が必要だった。

——ドオオオオン——！

轟音が耳に届く一瞬前に、本音の姿が消えた。突然現れた黒い壁――

—違う。空から降ってきた、左腕が付いたままの大盾が、観客席に突き刺さって。

熱線から、本音の姿を遮ったんだ。

『、——！』

『——オオオオオオオオオツ!!』

次に聞こえてきたのは、獣のような咆哮。回線から聞こえてくる音声情報でも、スピーカーで増幅された音波でもない、真正正銘の肉声。さっきの轟音すら掻き消すほどのその声は、ある少女が戦いの際に発する、自分の力を限界まで出し尽くすための雄叫びだ。

「なっ、い……井上さん?」

見上げると、そこに居たのはやっぱり彼女だった。

いつもの静かさからは想像もつかない、犬歯を剥き出しにした憤怒の表情。無人機の一つ、逆関節の頭部を鷲掴みにして、彗星のように急降下している。

その周りを、井上さんを追うようにして降りて来るのは武器腕と狙撃手だ。けれど武器腕は井上さんの速度に追い付かず、狙撃手に至っては盛大に体勢を崩し、錐揉みしながら落ちている。よく見れば、その左腕にあったはずの大盾は——というよりも、左腕そのものがなくなっている。

……月光で、斬り飛ばされたんだ。いまだ赤熱している切断面が、振るわれたであろう一太刀の鋭さと愛刀の威力を物語っていた。

「……ツ!!」

『——！』

瞬く間に高度を下げ、地面に激突する寸前、井上さんは逆関節を掴んだまま右腕を振り上げた。直後、朧月の背中で爆発が起きる。専用スラスター〔水月〕のカートリッジの起爆だ。その狂的な加速力を余さず乗せて、逆関節を地面に向けて投げつける。

「オオオオアツ!!」

背中から叩きつけられた逆関節は、大型トラック同士が正面衝突したかのような破壊音を轟かせて地面にめり込む。凄まじい衝撃に一

瞬、地面に縫い止められたように大の字になる逆関節。そこにギロチンの刃のように振り下ろされるのは、朧月の特殊スラスタ兼大型ブレード、「月輪」。まるで体当たりのように全身で繰り出された一撃は、逆関節の胴を真つ二つにして、地面にまで深々と剣閃を刻んだ。……まるで「胴田貫」の逸話だ。と言ったら、「井上真改」さんはどう思うだろうか。

「っ！ 危ない！」

逆関節の機能停止を確認する間もなく、次の攻撃。武器腕が追い付き、井上さんに向けて集中砲火を浴びせたのだ。

装甲の薄い朧月には武器腕の熱線は脅威だ。それに取り回しの悪い月輪で渾身の一撃を打ち込んだから、回避するにも一拍遅れる。広範囲にばら撒かれる乱射の範囲からは逃げきれない。

その危機に対して、井上さんは――

「疾っ！」

「!?!」

――両断された逆関節の上半身を武器腕に向けて蹴り飛ばし、即席の遮蔽物にすることで熱線を防いだ。

当然、朧月同様軽装甲の逆関節じゃ、あっという間に貫かれる。保って精々数秒……井上さんには、十分な時間だった。

「……ッ！」

「!?!」

逆関節の上半身を逆側から貫いて、紫色の光が伸びる。その凄まじい熱量は一切衰えることなく武器腕の胸部に突き刺さり、ISコアと機体の繋がりの全てを完膚無きまでに焼き尽くした。

文字通りに、糸の切れた人形のように力を失い、井上さんに寄りかかるように倒れる武器腕。それを無造作に振り払うと、井上さんは最後に残った一機、遠く離れた場所に落ちた狙撃手を睨む。

「……」

身を守る大盾を失った狙撃手は、防御を諦め捨て身の攻撃を選択した。腰から伸びる補助脚を展開し、地面に突き立てて身体を固定し、右腕そのものである巨大な砲を構える。

「……意志も無く、覚悟も無く……」

すると狙撃手の砲が、突然形を変えた。砲身を支える機関部がガバりと開き、内側に納められていた様々な装置が剥き出しになる。

一目でわかった。過剰に生成されたエネルギーのロスによって砲が破壊されないよう逃げ道を作り、同時に冷却効率を向上させたんだ。それはつまり、通常の砲撃をはるかに上回る出力の一撃を繰り出すための——最大出力形態<sup>バーストモード</sup>。

「……心も無く、魂も無い……！」

不意に、アリーナ全体が暗くなった。一体何が、と考えるまでもなく、すぐに思い当たる。実際に見たのは初めてだけど、私はこれを知っている。

井上さんの専用機、朧月・双月の単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>。周囲の光を食らい尽くし、自らの刃へと変える、「白銀月夜<sup>しろがねつくよ</sup>」。井上さんもまた、一撃で勝負を決めるつもりだ。

「……人形風情が」

狙撃手のビームカノンが放たれる。ISの保護なしで直視すれば目を灼かれかねない光。それはそのまま、光が持つ熱量の膨大さだ。けれど井上さんは、その光に微塵も怯むことなく、真つ直ぐに飛び込んだ。光に呑み込まれる直前、右腕の月光から紫色の光が伸びる。白銀月夜で溜め込んだ光を、細く鋭く束ねた剣。迫り来る熱線に立ち向かうにはあまりに小さいその剣はしかし、秘める破壊の力ではまったく劣ってはいない。

ビームカノンとレーザーブレード、光と光が、激突する。

「己の前に、立つな——！」

『!?!』

……それは、こうして実際に見ていても、信じられないような光景だった。

ISの全身を呑み込んで余りある、巨大な熱線。その真正面、中央に突き立てられた光の剣。禍々しい赤い光を、神秘的な紫の光が斬り裂き、霧散させていく。

その様はまるで、悪しき龍が吐く炎の中を突き進む、神話の英雄の

ようで。

文字通りに。私の脳裏に、焼き付けられた。

「オオオオオオオオオオオオツ!!!」

『!?!』

一人と一機の距離は瞬く間に縮まり、刹那の内にすれ違う。その瞬間聞こえたのは、金属が瞬間的に蒸発する、悲鳴のような音。アリーナに荒々しく両足の轍を刻みながら減速した井上さんは、停止すると同時に素早く振り返り、見惚れるような残心をとった。

「……………」

『……………』

その視線の先にあるのは、脳天から股下までを一刀の下に斬り裂かれた狙撃手。誰が見ても致命的とわかるダメージを受けて、それでもなお、命なき無人機は何らかの命令を遂行しようと振り向いた。

……振り向こうとして、左右二本ずつの脚に分かたれた身体ではそれも叶わず、地に倒れ伏して——機能を停止した。

「……………す……………す……………」

「……………ふうふうう……………」

なんていう、戦いぶりだろう。全身に溜まった熱を排出するように深く息を吐く井上さんの姿には、歴史に残る名画たちに劣らない凄みがあった。

私みたいにシミュレーションや訓練をいくら続けたところで、決して届くことのない、本物の戦士。

殺伐とした命の遣り取りであるにもかかわらず、どこか神々しさすら感じさせ「こおらあく!」——え?

——ゴイン!

「ぐお……………!?!」

「え? は? え……………」

全ての敵が完全に沈黙したことを確認して残心を解こうとした井上さんの頭に、何かが直撃した。見ればそれは、ゴミ収集所のプレス機で圧縮されたみたいに丸められた金属片だった。それがどこからか、微妙に気の抜ける速度で放たれたのだ。



……まあ誰がやったのかなんて、直前に聞こえた声からすれば、一人しか考えられないのだけれど。

「いのつちく！　またそんなく、無茶な戦い方してく！」

「……………」

案の定、不意打ちの犯人は観客席に居る本音だった。自分を守った大盾の影からひよこりと顔を出して、袖に隠れた手をぶんぶんと振り回していた。

「もおうく！　無茶しちやだめって、いつもいつも言ってるでしょく！　ちよつとそこに座りなさい！　正座く！」

「……………」

金属片は、多分あのバリスタで発射したんだろう。本音が投げても当てられるとは思えないし、そもそも届くはずがない。井上さんが微妙にふらついていることから考えても、結構な威力だったみたいだし。

「まったく、まったく！　いのつちは女の子なんだから、顔とか髪とか、大事にしなきゃなんだからねく！」

「……………」

本音は観客席から見ている心配になる動きで飛び降りると、眈を水平にしながら走ってきた。本音にしては精一杯の、激おこの表情だ。

「ああつ、髪の毛の端つこが焦げてるく！　……もう怒ったく……いのつち、後でさよりん式ヘアサロンの刑だからく！」

「……………!？」

本音がなんだかよくわからないことを言うと、井上さんは途端に慌てて飛び上がった。……余人には計り知れない、複雑な事情でもあるのかな……………？

けれど井上さんは体力も機体も限界だったのか、飛行速度はとても遅かった。

「かんちやくん、おりむー！　しののくん！　確保かくほく！　であえく！　であえく！　であえく！」

「え？　え？　ええ？」

「はあ……やれやれ」

「まったく……」

本音がぐるんぐるんと腕を振り回しながら言うと、織斑くんと篠ノ之さんが溜め息を吐きながら飛び上がった。決して速くはないけれど、今の井上さんと比べれば随分マシだ。あつと言う間に追い付き前に出て、肩に手をかける。

「シン、落ち着けて。お前結構ヤバイぞ。髪云々は置いといても、とりあえず保健室に行こう」

「もうすぐ先生たちも来るだろう、後は任せればいい」

「……………」

けれど二人の制止もあまり効果はなく、井上さんはびちびちともがいている。さすがに振り切られることはないと思うけど、やっぱり私も加勢したほうが良さそうだ。

井上さんは傷だらけで、このままだと本当に倒れてしまいそうだから。

「い、井上さん……………あの、ちゃんと……………治療して、休まない……………」

「……………」

……………本音の言う、「さよりん式ヘアサロンの刑」とはそんなに嫌なのだろうか。井上さんは尚も逃げようと、弱々しく暴れている。どうにかなだめようとされるけれど、全然聞いてくれない。

しかも井上さんは、スラスターを噴かして飛ばうとした。最後の力を振り絞って逃げるつもりだ。慌てて後ろから腰に抱きつき、押さえようとする私。

——すると。

ぶすん。

「……………」

井上さんがスラスターの推進力で浮き上がり、飛ばせまいとする私の身体が伸びきった瞬間。エネルギーの尽きたスラスターが、情けない音を立てて沈黙する。

ただでさえ体力が残っていないのに、力が入らない体勢のところ急にISの重みがのしかかればどうなるか。少なくとも、支えられる

はずはない。

私は伸びきった姿勢で井上さんを抱えたまま、後ろに倒れ込む。  
……つまり。

ズドオツ!!

「ぐっは……!?!」

「きゃあああああつ?!? ご、ごめんなさい大丈夫?!?」

「なっ……あれはまさかバベルバックドロップ……!」

「知っているのか一夏!?!」

「ああ、伝説のプロレスアニメ「マスク・ザ・ドーザー」の主人公が、最終回で魅せた必殺技だっ……!?!」

「マスク・ザ・ドーザー」とは、正義のプロレスラーマスク・ザ・ドーザーが違法建築物をプロレス技で解体していく人気アニメだ。十シリーズ以上続いた名作で、私も大好きだった。そしてバベルバックドロップは、マスク・ザ・ドーザーが最終回で、世界最古の違法建築物を柱ごとぶっこ抜いて解体した超必殺技である。

あのシーンは、今でもよく見返すほどに大好きなシーンだ。それに織斑くんが、もう何年も前に放送終了した「マスク・ザ・ドーザー」を知ってただなんて……今度一緒に見てくれないかな………じゃなくって!

「おお、さっすがかんちゃんやで。いのつちを一撃でノックアウトとは……」

「ち、違う! わざとじゃないよ!?! ああつ、それより井上さんだいじよ……き、気絶してるー!?!」

「昔夢中になったアニメの一番好きな必殺技が生で見られるとは……感動した……」

「そ、そうか。私にはよくわからんが……」

「ごめんなさい井上さん! わ、私が保健室まで連れて行くから……!」

「ほくい。じゃあ私が足持つから、かんちゃんは頭のほうを」  
「本音のペースに合わせてたら日が暮れちゃうよっ!!」

……ようやく全部の無人機をやっつけたと思っただ後にとんでもないことになって、私たちは大混乱だった。みんながみんなギャーギャーと騒ぐだけで、まったく事態が進まない。  
そんな中。

「……誰か、私のことも心配してくれないかなー……」  
遠くのほうで、お姉ちゃんが悲しそうに呟くのが聞こえた気がした。

## 第92話 シュトウルム・ウント・ドランク

シャルロット・デユノアは困っていた。

専用機持ちのみのタッグマッチ、その試合が間もなく始まるというのに、相棒であるラウラがどこか上の空だからだ。

ラウラ・ボーデヴィツヒは兵器であった。血と肉からなる生まれながらの兵器であった。人としての心を持たぬヒトガタの兵器であった。その機能こそを存在の全てとする兵器であった。そのように生み出され、そのように育てられ、そう成り切れずに捨てられた兵器であった。

とは言え、それも昔の話。今のラウラは感情豊かに生き、自分なりの楽しみを見いだしている。自覚したばかりの感情を持って余し奇行に走ることも少なくはないが、それを悪い傾向と危惧する者はIS学園内にはいない。

ラウラは兵器ではなく、ようやく人として歩み始めたのだ。豊富な知識や戦闘経験を持っていても、その心はまだ幼い。だからこそ、彼女の試行錯誤や迷走、突拍子のない行動を誰もが見守った。

だがそれでも、こと戦闘に関しては、ラウラは友人たちから絶対の信頼を得ていた。戦いの場において、ラウラは誰よりも優秀だった。兵器ではなく、戦士として。

そのラウラが、目前に迫った戦いに明らかに集中していない。最近、ラウラが何事かに悩んでいることは皆が知ってはいたが、まさかこれほどとは——そう心配するシャルロットもまた、戦いに集中出来ていないと言えるのだが。

(ラウラ……大丈夫かな……)

機体の最終調整を終え、実際に展開して各動作を確認しながら、横目にラウラの様子を見る。顔を僅かに俯けたその姿には、いつものような覇気はない。兎の耳に似た頭部センサーも、心なしか垂れているように感じる。

(うくん……できればラウラのほうから頼ってくれるまで待ちたかったけど……さすがにこのままじゃ、危ないよね……)

高水準の安全性を持つ競技用ISによる公式戦と言えど、戦闘である以上怪我は付き物だ。ましてや集中力を欠いたまま臨めば、事故の確率は極めて高い。ラウラの抱える悩みが想像以上に深刻で、どうしても試合に集中出来ないのなら。

シャルロットは、最悪棄権するつもりさえあつた。ラウラは激怒するだろうが、取り返しの付かないことになってからでは遅いのだ。

(……うん。最後にちよつと話をして、その様子を見て……決めよう) 無論、シャルロットとて悔しくない筈はない。人は誰しも、努力して身に付けた技術は試したいものだ。それはシャルロットとて変わらない。むしろ生真面目な彼女だからこそ、その想いは人一倍強かつた。

しかしそれでも、大切な友達の安全とは比べられない。操縦者の生命を最優先で保護するIS、能力が制限された競技用の機体、厳重に安全管理された公式戦……それらの要素が十全に作用したとしても、扱うものモノが人殺しの兵器であることに、変わりはないのだから。

「……ねえ、ラウラ——」

意を決して、シャルロットはラウラに声を掛ける。ラウラは驚いたように顔を上げ、シャルロットに心配を掛けたことを察し、慌てて言い訳をしようとして。

その瞬間、壁を破り、黒いISがピットに飛び込んで来た。

「な——」

「危ないっ!!」

一瞬呆然とし反応が遅れたラウラを、シャルロットが庇う。襲撃者——無人機ゴレムIIの強襲型が繰り出した銃剣の刺突を、左腕の盾で真っ向から受け止めた。

「ふうっ!!」

『——!』

シャルロットは鋭い呼気と共に床を踏みしめ、盾を素早く押し出す。ごく短い距離を一瞬で加速した盾は銃剣を弾き返し、衝撃に強襲型がよろめく。鈴から教わった中国拳法の極意、寸勁の応用技である。

「っ！」

強襲型の体勢が崩れ、間合いが開く。撃ち合うには近過ぎ、斬り合うには遠過ぎる。シャルロットが最も得意とする間合いだ。

『――！』

強襲型が盾を構える。再度攻撃するには体勢が悪く、回避しようにもピットは狭い。防御するしかなかった。当然の判断だ。

故に、シャルロットがその判断を読み切っているのもまた当然である。

「あああっ!!」

シャルロットが選択した武器は、六二口径連装ショットガン（レイン・オブ・サタデイ）。扱い慣れた得物を両手に持ち、交互に、連続して発砲する。銃口から我先にと飛び出した散弾は強襲型へ殺到し、丸みを帯びた盾により大半を弾かれた。しかしその衝撃全てを完全に受け流せるわけはなく、また次々に襲い来る散弾をたった一つの盾で受けきれぬはずもない。

強襲型は盾を構えた姿勢のまま散弾の奔流に押さえつけられ、盾で覆い切れなかった部分が削り取られる。ダメージは決して小さくない。だが致命傷には程遠い。戦闘になんら支障はない。素早く分析し、強襲型は防御を続けた。機械である彼女は、データとして知っているのだ。シャルロットの持つショットガンには、何発の弾丸を装填出来るのかを。

『――！』

ガチンッ！

「っ!?!」

左右共に最後の一発が放たれる。続けて落ちた撃鉄が虚しい音を響かせる。その一瞬の隙を、強襲型は完璧に見切った。押さえつけられながら溜めに溜めていたスラストアーを一気に噴出し、シャルロットに肉迫する。

実弾兵器は、一度撃ち尽くせばリロードしなければならぬ。そしてリロードにかかる時間は、身を隠す遮蔽物も回避する空間もない場所では致命的だ。そのタイミングを悟られることは勝機を逃すこと

に等しい。

それは決して間違いではないが——必ずしも、正解というわけでもない。

『――』

ショットガンの弾が切れたと同時に、シャルロットもまた前進していた。元々大して離れておらず、IS二機が互いに接近しあえばその距離はすぐさまゼロになる。

強襲型は突撃の勢いを乗せた渾身の刺突を繰り出すため、大きく銃剣を振り上げていた。間に合わない。シャルロットは右足を振り上げ、真つ直ぐ前に突き出した。最も出の早い蹴り技の一つである、前蹴りだ。

「てえいー！」

足裏を胸部に叩き込まれ、強襲型は大きく吹き飛ばされた。ピットの壁に空けられた大穴から、通路にたたき出される形だ。

「……何、今の!？」

一連の攻防を半ば反射的に行ったシャルロットは、敵の姿が視界から消えてようやく疑問符を浮かべた。

今の「敵」は、全身装甲で肌が見えないだけでなく、動きに違和感があった。人間的な、「クセ」のようなモノを感じなかったのだ。加えて、かつて直接戦闘した一夏、鈴、セシリアからちらと聞いた話から、シャルロットは敵の正体を判断した。

「……無人機……!？」

そう考えると腑に落ちる。まるで事前に決められていたかのような正確さ、迷いのなさ……そして対応力の低さ。単なる未熟者では説明が付かないが、経験値が足りないプログラムと考えれば。

となると、敵はこのまま諦めるものだろうか？　そこそこのダメーシを与えたが、破壊には至っていない。それどころか戦闘能力は未だ十全のままだ。生命の危機など微塵も感じない無人機は、命令がなければ決して撤退などしない。

そもそも、敵の狙いも分かっているのだ。たった一度襲撃を凌いだだけで、安心など出来る筈もない。



「ラウラ、大丈夫!？」

「ああ……すまない、シャルロット……!」

今の自分の不甲斐なき、常とは余りにかけ離れた有り様は、ラウラ自身も重々承知してはいるようだった。だがそれでもどうしようもないのが悩みというもの、シャルロットはラウラを責める気はなかった。

「あれは……多分、無人機だと思う」

「ああ、情報はある……以前学園を襲った物の発展型だろう」

「……その時は、一夏と鈴を攻撃したんだよね？ 今度は僕たち？

……一体、何が目的なの……?」

シャルロットとて、後ろめたい過去が皆無というわけではない。しかしいくらなんでも、研究・開発が禁止されている無人ISにいきなり襲われるような心当たりはない。

「……とにかく、倒さない」と

「ああ。機械には倫理観などない、必要とあらばいかなる手段も辞さんだろう。放置すれば、観客や生徒にも累が及ぶぞ……!」

不安はある。疑問もある。だが、戦わないわけにはいかない。

ならば、全力を尽くし討ち倒すのみ。IS学園は、二人にとって心の拠り所だ。それを無人機如きに蹂躪されるなど我慢ならない。

「……行くよ、ラウラ!」

「ああ!」

そして、二人はピットを飛び出した。敵を倒すために。自分たちの居場所を、守るために。

シャルロットとラウラが通路に出ると、まず目に付いたのは壁に空けられた大穴だった。慎重に覗き込んでみれば、それはアリーナの外まで繋がっていた。どうやらここから侵入して来たようだ。

「……あの穴……」

「先ほどの機体の仕業とは思えんな。こんなことが可能なほどの武装

を持っているようには見えなかった」

「うん。ということとは……」

敵は、最低でも二機。それも恐らく、前衛後衛が分かれている。さらに加えて、その火力はアリーナの壁を一息に貫くほど。極めて危険な相手だ。

「……レーダーに反応」

「外、か……あからさまに誘っているな」

追撃して来たところを迎え撃つつもりなのは明白だ。だがアリーナの外に出たということは、学園の敷地内に居る全ての者が攻撃に晒されかねない。来賓はもちろん、一般の生徒や教師たちも、普段はISを持ち歩いてはいない。攻撃を受ければ一溜まりもないだろう。

「……行こう」

「……ああ。行こう」

恐らく、敵は待ち構えている。自分たちにより有利な場所。誘いに乗ってのこのこ出て行くのは愚かとしか言いようがないが、しかし放置することは出来ない。学園内にまで攻め込まれた時点で、シャルロットたちの選択肢はたった一つに限られているのだ。

故に、危険を承知で二人は迎撃に出る。未だ本調子ではないラウラのことは気懸かりであるが、もはやそれを理由に戦いを避けることは出来ない。

戦うしかないのだ。これはもう、「勝負」ではないのだから。

「……僕が前に出る。ラウラ、援護して！」

「了解！」

二人は同時に、一気に加速する。最も狙われやすいのは、大穴が出る瞬間——必ず通らなければならず、しかも狭い。攻撃を集中してくる筈だ。一瞬で駆け抜けるしか、無傷で出る方法はあるまい。

「っ！ 来る！」

シャルロットの警告。直後放たれる、無数の熱線。二人は大穴を出ると同時に左右に分かれ、それを回避する。背後で熱線を受けたアリーナの外壁が崩れ落ち、退路が塞がれた。

問題ない。元より、撤退する気など毛頭ない。

「……四機！」

周囲を見渡したラウラが敵の数を報告する。シャルロットは敵の姿を確認し、素早く分析する。

統一された基礎フレームに、武装と追加パーツの組み合わせで役割を持たせる……明らかに、大規模な部隊運用を目的とした「量産型」だ。ならば敵が、この四機だけとは考えにくい。

本来、数が限られ嚴重に管理されているISに対し、そのような考えは誰も口にしない。あまりにも馬鹿げた、有り得ないことだからだ。

しかしIS学園に来てからの数ヶ月で、馬鹿げたこと、有り得ないことは何度も体験してきた。おかげで常識に囚われない柔軟な思考が可能になったシャルロットは、ごく自然にその解答を導き出した。

——その先に在る、この無人機たちの創造主すらも。

(……ダメだ。今は違う。後のことは、後になって考えればいいじゃないと……勝てないっ！)

武装をアサルトライフルとマシンガンに切り替え、無人機を睥む。その眼に迷いはなく、覇気に曇りはない。

「……やるよ、ラウラ」

「ああ。こいつらに、自分たちがどこに攻め込んでいるのかを思い知らせてやる」

ラウラもまた、自らを奮い立たせ戦闘体勢をとる。腑抜けている場合ではない、敵は容赦なく、命を奪いに来る。

集中しろ。ラウラは自らに言い聞かせる。集中しろ、全性能を戦闘に集中させろ。

戦え。戦って、勝って——それから、また存分に悩め。

自分たちを見下ろすように浮かぶ無人機に向け、ラウラはレールカノンを発射した。

---

複数の敵と戦う場合、重要なことは何か。いくらでもあるが、まず

分かり易いのは「どの敵から倒すか」である。無論、こだわりすぎればかえって自らを追い詰めることになり、そもそも乱戦になってしまう。えば特定の敵を狙い続けることはほぼ不可能だ。

しかし最初の一撃は、比較的小さなリスクで優先して倒すべき敵を狙うことが出来る。ラウラがまず狙ったのは、一際離れた場所に居る狙撃型だった。

ラウラの専用機、シユヴァルツェア・レーゲンの主砲であるレールカノンが小さく見えるほどの、巨大なビームカノン。アリーナの壁を貫いたのは間違はなくあれだ。直撃を受ければISとて撃墜される、残しておくには危険過ぎる敵である。

「っ！」

ゴキイン——！

『』

だが放たれた砲弾は、分厚く巨大な盾に弾かれた。全身を覆い隠すほどの大盾は、破壊するには手間取るだろう。かと言って横から回り込もうにも、こうも距離があつてはそれも難しい。

ラウラは考える。どうするべきか。馬鹿正直に近付こうとしても逃げられるのは目に見えている。その隙に背後から攻撃を受ければ、大ダメージは免れない。しかし放置するわけにもいかない。まだ直接は見えていないが、あの砲の威力が尋常なモノではないことは間違いない。

どうするべきか。逃げる敵を素早く追い詰め、確実に倒す。そのためには。

「挟み撃ちだ」

「了解！」

ラウラの言葉に、シャルロットは脊髄反射で頷いた。二人が同時に動き出す。ラウラが右に、シャルロットは左へ。無人機たちを牽制しながら距離を詰める。

「っ！」

しかし無人機たちも、当然容易くは行かせない。ラウラの前に、特異な機動力を持つ機体——奇襲型が立ちふさがった。すぐさまロツ

クオン、レールカノンを撃とうとする。だが奇襲型は、砲弾が発射される直前にひらりと動き、射線から逃れる。

「邪魔だっ……い！」

いくら弾速が速くとも、単発の攻撃ではこの敵を捉えることは出来ない——そう判断し、今度は六本のワイヤーブレードを伸ばす。前後上下左右から迫る刃。奇襲型は正面から向かって来るワイヤーブレードに向けて、両手のパルスガンを発射する。

『』

銃口から無数の光弾が放たれ、内数発がワイヤーブレードに命中する。刃の軌道が変わり、出来た隙間からするりと抜け出す。精密で感情を持たない、機械ならではの回避方法だった。

「ちいっ！」

舌打ちを一つ、ラウラは即座に戦術を切り替える。中距離がダメなら近距離だ。奇襲型の前進に合わせて距離を詰め、両腕の装甲からプラズマ手刀を伸ばす。

「シィッ！」

鋭い呼吸と共に、左腕を伸ばす。本来ならば牽制に使われるジャブが、プラズマ手刀により十分な殺傷力を得て奇襲型を狙う。奇襲型は異形の脚部からスラストを噴かし、プラズマ手刀の間合いの僅かに外で急停止する。ラウラがワイヤーブレードを引き戻し接近戦に備えるのを見て取ると、上昇してワイヤーブレードの包囲から逃れた。

『』

「妙な動きを……い！」

今まで戦ったどのISとも違う独特な動きに翻弄されるラウラ。倒すには時間がかかるだろうと考え、ひとまずは無視することにする。レールカノンとワイヤーブレードで奇襲型を牽制しながら、狙撃型への接近を再開。その直後、狙撃型の砲が発射され、ラウラは急上昇して凶悪な熱線を避けた。

「く、なんて威力だ……い！」

焼かれた空気が頬を撫で、ラウラは暑さとは別の汗を流す。想像以上。直撃すればISがあっても生き残れまい。やはり最優先で倒す

必要がある。背中に降り注ぐ奇襲型の光弾は、一発の威力は低い。受け続ければ危険だろうが、今は無視だ。

菌を食いしぼり速度を上げるラウラ。狙撃型は巨砲と大盾を構え、これを迎え撃った。

「やあつー！」

強襲型の銃剣を近接ブレード「ブレット・スライサー」で逸らし、盾で殴りつける。

「ええい！」

体勢を崩した隙にアサルトカノン「ガラム」を展開し、支援型に向け発砲。先手を打たれた支援型は攻撃の機を逃し、回避行動をとった。

「やあああああつー！」

「、――」

防御を固める強襲型に重機関銃「デザート・フォックス」で弾丸の雨を降らせ、回避を続ける支援型をアサルトライフル「ヴェント」で追撃する。

次から次へと武器を取り出し絶え間なく攻撃を続けるシャルロットに、二体の無人機は押されていた。シャルロットが得意とする戦闘技術、「高速切替」ラビット・スイッチ。通常に比べ遥かに早く武装を展開出来るこの技能と、状況や相手に合わせた確な武器を一瞬で選択する判断能力。この二つがシャルロットの専用機であるラファール・リヴァイヴ・カスラムⅡの豊富な拡張領域パススロットと組み合わせり、スペック以上の火力を引き出していた。

「――！」

強襲型が盾を構え、ビームライフルを連射しながら突撃して来る。

体当たりじみたシールドバツシユでシャルロットの体勢を大きく崩し、一気に押し潰すつもりだ。

本来ならば、その突撃への対処は回避以外有り得ない。攻撃は盾に阻まれ、防御は体当たりに対しては意味が薄い。しかし避けること自体は容易なのだから、誰しも回避を選択する——そして、回り込んでいる支援型の追撃を受けるのだ。

だが。

シャルロット・デユノアは違う。

「そんなのっ！」

気迫と共に、左腕の盾が弾ける。分厚い金属板が取り払われ、その下から現れたのは無骨なシリンダー。そして、シリンダーの先から伸びる鉄杭。

それは、六九口径パイルバンカー〔グレー・スケール灰色の鱗殻〕。通称——

——盾殺し。シールド・ヒアース

「つああああああ!!」

『!?!』

ズガンツ！ 重々しい爆発音に混じり、金属が破碎する音が響く。強襲型の盾は丸みを帯び、物理攻撃を受け流し負担を軽減する効果を持つが、寸分違わず垂直に撃ち込まればそれも無効となる。自らの銃身にすらダメージを負わせるほどの過剰装薬により押し出された杭は、分厚い盾を、支える左腕ごと貫いた。

「もう一オっ！」

シリンダーの回転に合わせ、杭が引き戻される。左腕を振りかぶると同時にガチンと鳴った。次弾装填。

——ズギインツ!!

『!?!』

先とは別の場所に突き刺さる鉄杭。二つの穴が空いた盾は全体に亀裂が入り、表面が歪み、物理攻撃を受け流す丸みは失われた。慌てたように後退し灰色の鱗殻グレー・スケールの射程から逃れた強襲型にショットガンを叩き込むと、シャルロットは急上昇した。背後に迫っていた支援型の攻撃を間一髪で回避する。

そこでふと、周囲の様子に気付いた。

(これだけの騒ぎなのに、人がほとんど居ない……みんな、アリーナに閉じ込められてるんだ……!)

さらに言えば、そのアリーナからも黒煙が上がっている。謎の無人ISの襲撃、外に繋がる扉は開かず、火と煙が迫って来る……アリーナ内はパニックに陥っているだろう。一刻も早く事態を収めなければ大勢の怪我人が、最悪死人が出る。どれほどの猶予があるかは分からないが、長くはないのは確かだ。

この攻撃で、決める。

「……倒れてもらおうよっ!」

支援型をマシンガンで牽制、強襲型を蹴り飛ばし、シャルロットはスラストを全開にして加速する。狙うは他の無人機と距離を置きラウラを狙っている狙撃型。瞬く間に接近すると、反対側からラウラが飛んで来る。完璧なタイミングだ。

『!?!』

「二気に……!」

「……潰すっ!」

いかな大盾とは言え、所詮は一枚。左右からの同時攻撃を受けることは出来ない。加えて狙撃型は、腰の補助脚で機体を固定している。元々低い機動力のせいもあって、咄嗟の回避も間に合わない。

——貫った。二人は同時に確信する。

シャルロットが灰色の鱗殻を振り上げ、ラウラが両のプラズマ手刀と六本のワイヤーブレードを狙撃型に向ける。

二人と無人機たちの戦闘力の差は歴然だ。一撃で撃墜される危険のある狙撃型さえ倒せば、敗北する可能性は低い。それは過信でも慢心でもない、事実である。それを正確に察していたからこそ、二人は他の無人機を捨て置き、狙撃型に集中したのだ。

「はあああ——」

己の武器に渾身の力を込める。この一瞬、二人は確かに、互いの呼吸を感じ取れるほどにシンクロしていた。

「——ああああああつ!!」



そして放たれる、必殺の同時攻撃。それが届く直前に。  
二人の間、狙撃型の背中に、黒い影が舞い降りた。

「なっ……い！」

シャルロットが驚愕の余り息を飲む。だが突き出した拳は止まらない。灰色の鱗殻グレイスケールの鉄杭は炸薬の激発に伴い、超音速で押し出される。

「……………」

ギャリイーン！

「えっ!？」

だがその鉄杭は弾き返された。第二世代型では最強、第三世代型を含めても屈指の威力を誇る筈の一撃が、容易く。

「ぐうっ！」

「そんなっ……い！」

それはラウラも同じだった。プラズマ手刀とワイヤーブレード、計八つの刃が、悉く防がれた。自身の切り札の威力、ラウラの技量を知っているシャルロットにとって、信じられないような事態。だが現実として、それは起こっている。

「……………!？」

黒い影はそのまま、狙撃型へと襲い掛かった。一撃、一瞬の出来事。戦いにすらならない、完全なる不意打ち。

「お……お前は……い！」

ラウラが目を見開き、乱入者を茫然と見る。その視線を意に介さず、乱入者は狙撃型を踏みつけている左足に力を込めた。その足に取りつけられた猛禽の爪のような四本のブレードが背中に食い込み、狙撃型が苦しげにもがく。

「その機体は……黒い歌……い！」  
シユヴァルツェア・リート

乱入者が左足を持ち上げると、狙撃型も併せて持ち上がった。爪により驚掴みにされているため、逃げる事が出来ないのだ。

「では、お前がっ……!」

乱入者は狙撃型ごと持ち上げた左足を地面に叩きつける。二度、三度。機能を停止したことを確認すると、左足を振り上げた。そこには四本のブレードに驚拵みにされた、金色に輝く正六<sup>キューブ</sup>面体。

——ISコア。

「お前、が……」

二人は茫然と、その様を見届けていた。

シャルロットは驚愕していた。見慣れた顔によく似た、しかし印象がまるで違うその姿に。

そして、ラウラは——

「お前が——影<sup>シャッテ</sup>打か!」

それは怒りなのか、恐怖なのか、絶望なのか、あるいは罪悪感なのか。ラウラには分からない。ただ彼女は、小首を傾げながらこちらを見る無垢な瞳を、睨み返すことしか出来なかった。

## 第93話 黒い歌声

『ひとつ見つけた』

『上出来よ、シャツテ。最低限の条件はクリアしたから、もう帰って来てもいいけれど……どうする?』

『ん……もうひとつ』

『わかったわ。でも無理だけはしないように。いいわね?』

『ん』

通信を終え、シャツテは周囲を見渡す。敵は五機。内標的となるのは三機。シャルロットとラウラは、極論としては相手にする必要はない。無論、そう都合良く行かないであろうことは、シャツテも理解してはいるが。

「お前……お前がつー!」

「?」

しかしそこで、シャツテは気付く。シャルロットはまだ茫然としているが、ラウラは強い敵意を向けて来ていた。心当たりのない感情に、シャツテは首を傾げる。その仕草が、ラウラを更に苛立たせるとも知らずに。

「ラ、ラウラ……あの人のこと知ってるの……?」

「!? ああ、いや、そのっ……」

あまりの状況に思考が追い付かないシャルロットは、ラウラが何らかの事情を知っているらしいことだけをどうにか察し、訊ねる。しかし訊かれて取り乱したのはラウラだ、何せ目の前に居る存在こそが、この数日間彼女を悩ませ続けていた原因そのものなのだから。

「……ん」

二人の遣り取りはシャツテには良く分からなかったが、どうやらすぐに攻撃してくることはなさそうだと判断した。それよりも問題は、機械的に狙いを自分へと変更した無人機たち。シャツテにとっても主目的であるそれらを、迅速に破壊しなければならぬ。

「交戦開始」

凜とした、しかし感情のこもらない声でそう告げると、シャツテは

残りの無人機へと襲いかかった。

いまだ混乱から抜けきれない二人を余所に戦闘を始めるシャツテ。対する無人機たちは、それが基本戦術なのだろう、強襲型が前に出て、銃撃しながらシールドバツシュを仕掛ける。

しかしシャツテは迫り来る盾の表面に恐るべき身軽さで「着地」すると、盾に取り付いたまま右腕を振った。

『――！』

キーン――！

瞬間、澄み切った高音が鳴り響く。防御のため咄嗟に掲げた強襲型の銃剣の銃身がいとも容易く切断され、シャツテは盾を蹴って跳び追撃をかわす。盾の表面に、足のブレードにより深い傷を残しながら。腕と足、二種のブレードの凄まじい切れ味を見て、シャルロットは驚愕に目を見開き、ラウラは確信をもって呟いた。

「なっ……」

「やはり、アレは……！」

「知ってるの!? ラウラー！」

シャルロットは混乱しながらも、再びラウラに訊ねる。今度は強い口調で。

ラウラは気圧されながらも、一拍の間を置いて答えた。

「……シャルロット。必ず……必ず話す。だから今は……何も訊かずに、戦ってくれ。私と一緒に！」

「ラウラ……」

縋るような、泣くことを必死で耐えているような顔のラウラに、シャルロットはこれ以上、何も言うことは出来なかった。ただ頷き、ラウラを安心させるように笑顔を浮かべる。

「わかったよ、ラウラ。僕は何をすればいい？」

「シャルロット……！」

ラウラは安堵の表情を浮かべ、すぐに引き締める。戦いを続ける

シャツテを睨みながら、自身の持つ情報と状況から導き出された推測を、手早く伝える。

「……奴は恐らく、この無人機たちのI Sコアを回収に来たんだ。持ち帰る先は……亡国機業」ファントムタスク

「それって……」

「ああ、なんとしても阻止しなければ……奴を倒して！」

「……わかった。行くよ、ラウラー！」

二人は同時に飛び上がる。意識が戦闘に向いたことで大分冷静さを取り戻したシャルロットが、シャツテの機体、「シュヴァルツエア・リート」の性能を分析する。

全体的に、細く鋭いフォルム。両足に四本ずつ装着されたブレードと相まって、鳥のような印象を受ける。

スラスタは小型だが、背中に四基、肩、腰、腕、脚に二基ずつの、計六対十二基。それが意味するのは、最高速度ではなく加速力・運動能力に重きを置いた設計だ。

加えて武器と思しき物も、先ほど狙撃型を仕留めた両足のブレードと、両腕に手甲のように取り付けられたブレードしか見当たらない。

——近接戦闘型。そう判断したシャルロットは、シャツテに近づくべきではないと考えた。幸い、彼女の武装には中距離以遠でも戦える物が数多く揃っている。わざわざ敵の得意距離に留まる必要はない。

順当な判断だ。迷うことはない。だがシャルロットには気掛かりがあった。

（あの腕のブレード……）

シュヴァルツエア・リートの両腕のブレードは、分厚い片刃が肘の方へ突き出ている。それが腕を覆うプレート部分を支点に折りたたみナイフのように展開し、逆手持ちの形で強襲型を斬りつけていた。

そこまではいい。堅牢だが使いにくそう、という印象しかない。しかしそのブレードは、防御した銃剣を一刀の下に切断したのだ。

（あの切れ味は、どう考えても異常だ）

物理ブレードには、大きく分けて三種類ある。

一つ目は、重さと速さからなる純粹な運動エネルギーで叩き斬るタ

イブ。単純な造り故に頑丈で、最も信頼性が高い。一夏の雪片式型や鈴甲龍の双天牙月がこれにあたる。

二つ目は、刃を高速で振動させて切断力を高めるタイプだ。優れた威力を待つが、振動機構を内蔵しなければならぬ柄部分が刃に比して大きくなるため、武器の形状が限定され強度も劣る。簪打銃式の夢現がこれだ。

三つ目は、ナイフや短剣のような小型のタイプ。これらに求められているのは攻撃力ではなく、接近戦で敵の攻撃を凌ぐための、言わば射撃を得意とする者が間合いを詰められた際に使う最終手段だ。ラファール・リウアイウ・カスタムⅡ  
シヤル ロツトのブレード・スライサー、セシリアのインターセプターのように、これを主軸にした戦術は有り得ない。

それを踏まえた上で、シヤルロツトは違和感を覚えた。シヤツテの両腕のブレードは、どう見ても三つ目——本来なら防御に使われるべき代物だ。だが実際に、シヤツテはそのブレードで尋常ならざる攻撃力を見せつけた。

アレがシユヴァルツェア・リートの第三世代型兵装か？ 警戒しつつ距離を保ち、牽制や様子見の意をこめて銃撃を行う。

「？」

「な!？」

素直に当たってくれるとは思っていなかった。先の攻撃を防いだ手並みから、そんな温い相手だとは微塵も考えてはいない。

だが、それでも。

まさか、全弾の悉くを斬り落とすとは——!

「そ、そんなっ……!」

信じられない。何かの間違いであってほしかった。だが再び行ったアサルトライフルとマシンガンの同時射撃は、再び斬り落とされる。両腕が残像すら見えるほどの速さで幾度となく振るわれ、一発残らず。

「なんてこと……!」

どちらも連射系の武器、しかし弾速スピードも連射速度リズムも違う二種類の銃弾。その一斉射撃を、全て見切ったと言うのか。

それはもはや、人の技ではない。機械ですら不可能であろう、まさに——魔技。

「くっ！」

それでも、シャルロットの戦意は衰えなかった。連射がダメなら同時、高速弾ではなく散弾だ。両手にシヨットガンを構え、引き金を引く。

「やああああっ！」

ドンドンドンドン！ 重い銃声と共に吐き出された無数の散弾は、広範囲に広がりながらシャツテへと殺到する。攻撃面積ならば全身を覆って余りある、それら全てを小型のブレードだけで捌ききるのは流石に不可能だ。避けるしかない。

「ん」

狙い通り、シャツテは回避行動を取る。一瞬で最高速度まで加速し、小刻みな旋回を織り交ぜながら、散弾の範囲からいとも容易く逃れてみせた。もはやその程度では驚きはしない、シャルロットは冷静に次の攻撃に移る。

(連弾は切り落とす、散弾は避ける。なら、両方混ぜたらどうする!?)  
マシンガンとシヨットガンを展開し、撃ちまくる。防御と回避、それぞれの限界を見極める為の攻撃だ。

シャルロットは、銃でシャツテを倒すことは難しいと素直に認めた。相手の距離であることを覚悟して接近すれば効果があるかもしれないが、今はそのリスクを冒すべき時ではない。

正体不明の無人機部隊に、突然の乱入者——状況が混沌とし過ぎているのだ。まずは堅実に、一つ一つ危険要素を排除していく。

シャルロットはシャツテを銃撃しながら、いまだ散発的に攻撃を繰り返している無人機たちにも警戒を向けた。最も危険な一機が倒されたと言っても、残りも決して無視出来る戦力ではないのだから。

「シッ！」

ラウラは強襲型のシールドバツシュを器用にいなしながら、すれ違い様背中にワイヤーブレードを突き刺した。装甲に食らいついた刃を支点にワイヤーを巻き付け、動きを封じる。

『――！』

「ぬうん！」

ミシミシと音を立ててワイヤーが引かれる。強襲型も必死にもがくが、ワイヤーがスラスタに絡まり噴射口の向きを無理矢理に固定していた。そのせいで十分なパワーを得られず、為す術もなく振り回される。

「せええええいっ!!」

ラウラは渾身の力でワイヤーを引きながら回り始めた。三回転もする頃には、ワイヤーの先端についた強襲型<sup>重</sup>は相当な速さとなっている。

「っはあああ!!」

装甲に食い込んでいた刃が一齐に抜け、強襲型が砲弾のように撃ち出される。その弾道上に居た支援型が、シャルロットとシャツテを狙っていた腕を引いて慌てて回避する。攻撃を未然に防いだラウラは、全速力でシャルロットの援護に向かった。

「ダメだシャルロット、その距離は……!」

シャツテが現れた瞬間から、ラウラにとつて無人機たちは敵ではなく、ただの障害物でしかなかった。戦って倒すのではなく、ただ邪魔だから退けるだけ。意識は、完全にシャツテを向いている。

「離れろ！」

「でもっ！」

ラウラが警告する。だがシャルロットは、それに従うことが出来なかった。

マシンガンとショットガンの猛攻によつてシャツテを押しさえつけているシャルロットは、下手に距離を取れば回避の余裕を与え反撃を受けると考えていた。優れた洞察力・観察力によつて、シユヴァルツエア・リートの性能をほぼ見抜いているのだ。

「ダメだ！ シャルロット！」



だが、ラウラはシャルロットとは違う。

ラウラには見抜く必要などない。ラウラは知っているのだ。シユヴァルツエア・リートが失敗作と呼ばれた理由、悪夢のような能力を。相手を「IS」という枠で捉えているシャルロットには想像もつかない、その性能を。

「離れろっ！」

「……くっ！」

ラウラの必死の声に、シャルロットも心を決めた。全力の銃撃を叩き込みながら、慎重に距離を取ろうとする。

その目の前、息がかかるほど近くに、シャツテの顔があった。

「——え」

目を離した瞬間などない。機動力には最大限の警戒を払っていた。なのに、知覚出来なかった。至極単純に、余りにも——速すぎた。

一瞬で最高速度に達するなどという、生易しいものではない。

加速という段階をゴツゴツり省略したかのような、文字通りの、初速から最速——

「——」

シャツテが左腕を振り上げる。手甲から伸びるブレードが九十度回転する。ラウラの叫びが届くより早く、その分厚い刃がシャルロットを斬り裂くだろう。

銃では手遅れだ。既にシャツテは二挺の銃口の内側まで踏み込んでいる。後退は当然間に合わない。

シャルロットは銃を捨てた。判断でも反射でもない、あえて近い物を拳げるとするなら生存本能と呼ぶべきそれが、無意識の内に身体を動かしたのだ。

「——あああつ!!」

「？」

シャルロットの右手がシャツテの左手を止める。手首の外れる音が骨を通じて響く。痛みは感じない。脳が一時的に痛覚を放棄していた。

左腕を持ち上げる。左腕に装着された鉄杭を。叩き付ける余裕は

ない、引き金を引きながら押し当てる。威力は落ちるが、弾き飛ばすには十分だ。

「っ!!」

激発。鉄杭が撃ち出される。極度の集中により鈍化した世界の中で、シャルロットは見た。

——鉄杭の先端が、無い。

「ん」

——リイイイイン——

鈴の鳴るような、透き通った高音。いつの間にか、シャツテは右腕を振るっていた。その刃の軌跡に在った鉄杭は、届くことなく切断されている。

シャツテが廻る。踊るように、くるりと。シャルロットは自分の右手を見る。その手が掴んでいた左手は、もうそこにはない。

すぐに帰って来た。左から。そちらの手は、激発の衝撃で硬直している。動かない。

シャルロットは、自分の胸に突き刺さる刃を呆然と見ていた。それしか出来なかった。

「シャルロットオオオっ!!!」

ラウラが叫ぶ。シャルロットは意識を失いゆっくりと落下して行った。ISの絶対防御が発動したのだ。恐らく命に別条はないだろう——今は、まだ。

「貴様あつ!!」

怒りに震えながら突撃するラウラ。シャツテの両腕のブレードは、また元の位置へと戻って行った。シャツテに戦闘の意志がないわけではない。ブレードが展開する勢いすら利用して、斬撃の威力を高めるためだ。

ラウラは知っている。シュヴァルツエア・リートのブレード、「アルトキウムラス」は、プラズマ手刀の開発が間に合わなかった場合、そ

の代わりとしてシュヴァルツエア・レーゲンに装備される予定だった物だ。本来あれほどの攻撃力はなく、シャルロットの推測通り、接近戦における防御手段として使われるべき武装。

ではそんな小型ブレードが何故、不可解なまでの攻撃力を発揮しているのか。

「おおおっ!!」

プラズマ手刀を起動し接近する。レールカノンやワイヤーブレードはシャッテには通用しない。ましてや停止結界<sup>A</sup><sub>C</sub>など。ならば危険を承知で、接近戦に持ち込むしかない。

そう、危険なのだ。シュヴァルツエア・リートに、接近戦を挑むのは。

「ぐうっ!」

刃に浅く腕を切られる。僅かでも反応が遅れていれば、プラズマ手刀を破壊されていた。一瞬遅れて、高く澄んだ鈴の音。その音を聞き、ラウラが憤怒に顔を歪める。

(ローレライ……これほど厄介だとは!)

「歌姫」<sup>ローレライ</sup>。それがシュヴァルツエア・リートの第三世代兵装の名だ。

シュヴァルツエア・リートは、機体自身が機関部となって、身に着けた武器を高速振動させることができ、それによって攻撃力を飛躍的に高めているのだ。シュヴァルツエア・リートにとっては全ての近接武器が強力な振動兵器であり、その刃が届く範囲は彼女の領域である。不用意に踏み入るならば即座に切断されるだろう。

そしてローレライ発動時の特徴的な音を、ラウラは以前に一度聞いたことがある。その時に起きた「事故」によって、シュヴァルツエア・リートは失敗作の烙印を押され、廃棄されたはずだったのだ。

「ん」

「ぐあっ……ぐ、おおおっ!!」

シュヴァルツエア・リートは、全ての近接武器を振動兵器として扱うことが出来る。それは猛禽の爪に似た両足のブレードとて例外ではない。左足は狙撃型のISCコアを掴んでいるため塞がっているが、右足は健在だ。そうでなくとも、元々の運動性能の差は大きい。肩の

装甲を易々と切り取っていく右足のブレードを、ラウラは悔しげに睨むことしか出来なかった。

「きさ、まあっ……い！」  
「……………」

手数が違い過ぎる。プラズマ手刀はアルトキウムラスと比べても軽く小回りが利く筈なのに、ラウラが一撃打ち込む間に四撃が返って来る。しかもその刃は、触れただけで斬り裂かれるほどに鋭利な代物。シユヴァルツェア・レーゲンは瞬く間に傷だらけになった。

対するシユヴァルツェア・リートは、無傷。

「ぬううっ！」

刃を受けながら、プラズマ手刀を突き出すラウラ。このままでは勝ち目はないと、捨て身の攻撃に出たのだ。シャツテは自分の顔目掛けて真っ直ぐに迫って来る光刃を、それ以上の速度で後退してかわした。

一瞬で距離が離れる二人。そのまま後退を続けるシャツテを、ラウラが追う。

「おおおおおっ!!」

ラウラには、自分が何をすれば良いのかも、何をしたいのかも分かっていなかった。ただ目の前の存在に対し、何かをしなければならぬ——そんな強迫観念に突き動かされて、戦い続けている。

否。それはもはや、ただの逃避に過ぎなかった。ここでシャツテを消してしまえば、何もかもがなかったことになるという……自分のことすら誤魔化せない、虚しい嘘。

その嘘を必死に信じ込もうとするあまり、ラウラは気付けなかった。シャツテが何故、距離を空けたのか。

『……………』  
「ぐ、あつ……う？」

背中に衝撃。スラストーが支援型の熱線を受け爆発したのだ。

ラウラは己の愚かさを呪った。シャツテの行動は、距離を取るためのものでなく、回避だったのだ。自分は空いた射線にわざわざ飛び込み、無様に直撃を受けた。

「く、そ……」

機体の制御を失い、シユヴァルツェア・レーゲンが墜落する。その様を横目でちらりと見て、シャツテは無人数機たち——当初の目的に向き直った。

ラウラのことなど、初めから眼中になかったかのように。

「くっそおおおおおっ……!!」

遠ざかって行く絶叫に、シャツテは何の反応も示さなかった。

邪魔者を片付けると、シャツテは再び任務に取り掛かった。恐らく、時間的猶予はもう少ない。手早く終わらせなければ。

「……ん」

少し考えて、頷く。獲物に定められたのは支援型。近くにおり、何より防御力・機動力共に高くない。攻撃さえかい潜れば、短時間で倒せる敵だ。

『↓』

そして次の瞬間には、シャツテは支援型の至近距離まで移動していた。移動に際し強引に押し退けられた空気の塊が四方に散り、爆発に似た音が轟く。

突然目の前に現れた敵に、支援型は冷静に対処した。ビームカノンと一体化した両腕を持ち上げ、すぐさま発射。無数の熱線を乱れ撃つ。

「ん」

だが既に、放たれた熱線がばらける余裕もないほどの近距離だった。そうなれば、せつかくの乱射もまとめて回避されるだけだ。しかも二射目からは、後ろに回り込もうとするシャツテの動きにまるでついて行けていない。

シャツテは既に射線から逃れるどころか、支援型の真横にまで来ていた。腕その物が砲となつている支援型は、接近されれば対抗手段に乏しい。だからこそ敵から一定の距離を取り火力支援に徹していた

というのに、仲間が迎撃する暇も咄嗟に逃げる隙もなく近付かれた。では、どうすればいい？ どうすれば、支援型はこの危機を脱することが出来る？

答えは簡単だ。どうにもならない。

「ん」

——リイイイイン——！

ローレライが破滅の歌声を上げる。振るわれる右腕。高速振動するアルトキウムラスの刃が、支援型の胸部を深々と斬り裂く。

『！？』

甚大なダメージ。支援型が全速力で後退する。当然逃げられる筈はなく、瞬く間に再接近される。左腕の刃が閃き、胸部の中心で交差する十字の傷が刻まれた。

『、——！』

バチバチと火花を散らすそこへ、更なる追撃が迫る。左腕を振り抜いた勢いで回転したシャツテは、強烈な後ろ蹴りを繰り出した。隙の大きな技だが、支援型には回避する術はない。斬り裂かれた胸部に蹴りを受け、同時に足のブレードに、がっつきと装甲を鷲掴みにされる。

『……………！』

シャツテが身体ごと足をひねると、ブレードが無慈悲に胸部の装甲を抉り取った。その奥に、ISにとって心臓であり脳である最重要存在、ISコアが覗く。

故に、最も厚い装甲により守られていたが……その守りも、今や破られた。コアの輝きを見て取ったシャツテは、小さく頷く。

「……ん」

シャツテは右腕を素早く引く。アルトキウムラスは折り畳まれ、右手を包む装甲がローレライにより凶悪な殺傷力を得る。

その右手を、支援型の胸部へ真っ直ぐに突き入れた。

『、——ッ！！』

ビクンと大きく痙攣し、声無き悲鳴を上げる無人機。その様子に些かの感情も示さないまま、シャツテは機体に繋がる様々な機器を引き千切り、ISコアを抜き取った。

途端に全身から力を失う支援型。センサーアイが放つ無機質な赤い光も次第に弱まり、間もなく消えた。

残り二機。それらに注意を払いつつ、戦闘による高揚も敵を倒した達成感も感じさせない無表情で右手の中のISコアを確認し、シャツテは通信を繋げる。

『ふたつめ』

『十分ね。帰還しなさい、シャツテ。そっちに学園の増援が向かって  
いるわ……潮時よ』

『了解』

『最後まで気を抜いてはダメよ。帰って来るまでがミッションなんだから、追っ手がつかないかしっかり確認しながら、それでいて急いで、何より無事に帰ってきなさい。いい加減、オータムがあなたのこと心配してうるさく——痛っ。ちよつと、叩かなくてもいいでしょう？』

『……まあ、そう言うことだから、くれぐれも気をつけてね』

『……ん』

初めて感情らしい何かを浮かべたシャツテは、一目散にアリーナを、IS学園を飛び去った。圧倒的な加速に追い付ける者などいるわけもなく、加えてステルス機能を起動したシユヴァルツェア・リートの姿は誰にも認識出来なかった。

例え追えたとしても、無人機は決して追わなかっただろう。勝てる相手でないのは明白であり、そもそも相手にする必要もない。無人機たちにとっての本来の敵は、既に地に墜ちているのだから。

後は、追い詰めるのみ——

「ぐう、くそ……！」

墜落直前で体勢を立て直したラウラは、なんとか着地に成功した。とは言え、無事とは言い難い。機体のダメージは大きく、メインスタターも破壊された。サブはまだ生きているが、戦闘に耐えられるとは思えなかった。

「シャルロット……！」

そしてすぐ近くには、力なく倒れ伏す親友の姿があった。重い身体を引きずって駆け寄り、状態を確認する。

傷は浅い。絶対防御が上手く働いたようだ。だが完全に意識を失っている……しばらくは目を覚まさないだろう。少なくとも、この戦闘中には。

そう。戦闘はまだ続いている。敵は、まだ残っている。

『――』  
『くっ……！』

強襲型と奇襲型。二機のゴーレムが、ラウラとシャルロットに狙いを定めていた。

攻撃力はさほど高くない二機だが、それぞれが防御力と機動力に特化している。スラスターを破壊され、意識のないシャルロットを庇わなければならないラウラには最も厄介な手合いと言える。

「おおおおおっ!!」

ドンドンドンドン！ レールカノンを連射するが、奇襲型には容易くかわされ強襲型には盾で防がれた。穴の空いた盾でも、固定砲台と変わらぬ今のラウラの攻撃では、破ることは叶わない。

少しずつ、距離を詰められる。攻撃力が低いとは言え、近距離から連続で銃撃されれば一溜まりもない。故に、これ以上近付かせるわけにはいかない。

ラウラは必死に迎撃する。レールカノン、ワイヤーブレード、停止結界。持てる武装の全てを尽くしても、有効打は与えられない。

そして。

ついに、射程に捉えられ――

「――やらせませんわよ」

閃光の矢に機先を制された二機が、二人から大きく距離を取った。  
「な……」

『――？』

二機が警戒し、防御態勢を取る。センサーアイがせわしなく周囲を精査し、射手の姿を認めた。



アリーナの外壁の上で仁王立ちする、青き装甲のISを。

「先ほどと同じですわ。いいですわね？」

「ふん、自分だけ楽しちゃって……こっちの身にもなってみなさいっ  
ての」

「あら、よろしいのですか？ そんなことを言つて。あなたに当たる  
かもしれないわよ」

「はんっ！ アンタがその程度だったら、こんな役、引き受けるわけな  
いでしょーがっ!!」

その隣には、赤黒の装甲のIS。肩に担いだ巨大な青竜刀を雄々し  
く構え、無人機目掛け飛び立つ。

襲撃して来た無人機たちを全て破壊したセシリア・オルコットと凰  
鈴音が、仲間の応援に駆け付けたのだ。

「どうしたつてのよラウラ！ こんな雑魚どもにやられるなんて、ら  
しくないじゃない！」

「シャルロットさん……やってくれましたわね。お二人を傷付けた報  
い、しかと受けていただきますわっ!!」

二対四で圧勝した彼女らが、二対二で苦戦する筈もない。

瞬く間にゴーレムを撃破する二人を、ラウラは力のない眼で眺めて  
いるだけだった。

## 第94話 PP

無人機部隊ゴレムの襲撃を退けたIS学園は、ひとまず混乱を鎮めることに成功した。無論、それで終わりとなる筈もない。被害状況の確認、巻き込まれた来賓への対応、襲撃者の分析、防空網の見直しと強化、関係各所への説明と事情聴取……やるべきことは無数にある。その重要度は、無人機たちを撃退した直接の戦闘に勝るとも劣らない。

だがそれら全てを一旦無視し、織斑千冬は学園内のある部屋に移動した。高い機密性を持つ、決して外に漏れてはならない話をする際に使われる密室。その場に集うは、

山田真耶

如月重工社長

更識楯無

更識簪

セシリア・オルコット

凰鈴音

シャルロット・デュノア

ラウラ・ボーデヴィツヒ

篠ノ之箒

布仏本音

織斑一夏

そして、井上真改

以上、千冬を含め十三名。

その面子は学園内のヒエラルキーに沿うものではなく、まったく別の理由から呼ばれた者たちだ。

即ち、井上真改の左腕喪失、その事情を知る者——そして極一部に、真改自らが同席を望んだ者。

「……聞かせてもらおうか、ラウラ」

「……………」

うなだれるラウラに、千冬は容赦なく問いかける。ラウラと呼んだのは、IS学園の教師としての詰問ではなく。

織斑千冬個人として、訊かずにはいられない事柄だからだ。

「……黙っているのは分からん。答えろ、ラウラ」

「……………」

「あ、あの、織斑先生……ボーデヴィツヒさんも困って——」

「黙っている、真耶」

「ひっ……………」

腕を組みながら鬼の形相で睨み付ける千冬に、真耶が怯む。ある程度名が広まってからは山田君と呼び、IS学園に教師として就任してからは山田先生と呼んでいた千冬。それが山田真耶を真耶と呼ぶ。

それはつまり、今この場においては、織斑千冬は自身の立場を全て捨て去り、完全に個人として立っているということだ。

更にわかりやすく言うならば。

千冬は今、完全にキレていた。

「……………ラウラあ!!」

「……………」

黙り続けるラウラについて痺れを切らした千冬が、胸倉を掴み上げる。余りの剣幕に多くが怯える中、数人が立ち上がり、千冬を宥めに入った。

「千冬さん！ 落ち着いて！」

「……………鎮まれ……………」

「……………ぐっ……………」

目を血走らせながら、ラウラを放す千冬。力なく椅子に座り込みシャルロットに心配されるラウラの姿に、千冬は奥歯を砕きかねないほどに強く噛み締める。

千冬も理解している。ラウラに責はない。だが千冬の自制心をもつてしても御し切れないほどの怒りが、無尽蔵に沸いてくるのだ。その怒りの矛先は、他ならぬ千冬自身に向いていた。

三年前、可愛い妹分であり、誰よりも信頼する親友でもある少女が、千冬の浅はかな行動により左腕を失った。

千冬は自分を責めた。生涯を捧げても償えない罪を犯してしまった、と。だが今にして思えば、それすらも甘えでしかなかったのだ。

千冬は、自らが犯した罪を、まるで理解していなかったのだから。

「……くそっ……！」

千冬の怒りは到底収まらない。もしそれが許される立場であれば、周囲にあるもの手当たり次第に拳で殴りつけ、脚で蹴りつけ、頭を叩きつけ——自身の身体ごと、破壊し尽くしていただろう。

だが千冬は、鋼の意志力によってその怒りを強引に押さえつける。言動や仕草にありありと滲み出ているが、しかし超えてはならない一線で、どうにか踏みとどまっていた。

「……話せ、ラウラ。奴は——アレは、一体何者だ」

「……っ！」

その言葉に、居合わせた者たちが息を呑み、身を竦ませる。

——先の襲撃。学園が受けた被害は大半が無人IS部隊によるものだが、一部は別勢力の急襲によるものだ。

その一部とは、ラウラ・ボーデヴィツヒ、シャルロット・デュノア兩名の撃墜。才能、練度、いずれも一年生の中では頭一つ抜けている二人が、他の者たちに倒せた無人機に負ける筈はない。そうでなくとも、生徒が行った戦闘のデータは全て学園に提出することが義務付けられている。何が起きたのか、隠匿も言い逃れも不可能だった。

千冬から規定通りデータの提出を求められたラウラは、恐怖に震えながら、シユヴァルツェア・レーゲンの戦闘記録を開示した。そこに映し出されていた、猛禽を思わせる輪郭を持つ黒いISと、パイロットの少女。そしてその少女の、あまりにも見慣れた造形の、しかし印象だけが異なる顔。

その時、千冬は確かに、自らの心が軋みを上げる音を聞いた。

千冬がどうにか意識を保ちながらこの部屋まで移動し、関係者らを呼び集める間、ラウラは一切口を開かなかった。ただ泣きそうな顔で、虚空を見つめるばかり。しかしそれももう終わりだ、千冬の忍耐もいい加減に限界が近い。

それは、他の者たちも同じだった。

「……ラウラ」

「……」

静かに声を掛けたのは一夏だ。ソファに座り、組んだ両手を握り締め、俯きながら——震える声を発した。

「ラウラ。教えてほしい。あいつは……一体なんなんだ……?」

この場に居る全員に開示された映像は、一夏の精神を痛烈に打ちのめした。余りにも強すぎるショックを受けた彼はしかし、視界が揺れるのを感じながらも決して意識を手放しはしなかった。

背負うと決めたのだ、この罪を。だから、全てを知らなければならぬ。目を逸らしてしまえば、織斑一夏はそこで死ぬ。後に残るのは、かつて織斑一夏であった抜け殻だけだ。

彼は耐える。歯を食いしばり、全身に力を込めて、一秒ごとに遠ざかる意識を必死に繋ぎ止める。真実を知るために。

「……あ……それは」

ついにラウラが口を開いた。辿々しく紡がれる言葉は、彼女の精神がどれほど憔悴しているかを如実に表していた。

「……あれは——」

ラウラの声に、全員が集中する。これから語られるモノがどのような内容か、一言一句聞き逃すまい、と。

そんな、ある意味極限状態とも言えるこの場で。

空気を読まず、挙手する者が一人。

「まあまあ、まあまあまあまあ。ボーデヴィッツ君はどうやら頭の中を整理できていないみたいだし、ここはいつちようこの僕が、順を追って説明しようじゃあないか——」

「……社長。すみませんが、今は——」

場違い極まる軽さの如月社長に、千冬が苛立ちを隠そうともせず苦言を呈そうとする。殺気すら孕んだ千冬の視線を受けた如月社長は、しかし露ほども気にせず言葉を続けた。

「知りたいのでしょうか? 織斑先生。なら聞いておいた方がいい。僕はこの件に関して、少なくともこの中では一番多く、詳しく知ってる

と思うけど」

「……知っていたのですか。以前から」

千冬の怒りが更に増す。ともすれば如月社長に襲い掛かるかもしれない——社長自身そう思いながら、しかしやはり、彼は止まらない。「以前から、というか。事の始まりは、それこそ何十年も前からなんだけどねえ。井上君の件は、そのフアクターの一つに過ぎないんだよ」如月社長は、千冬の視線を真っ向から受け止めながら語る。

誰もが知っていないながら、誰もが直視しようとしなない、歴史の闇を。「よくある話でしょう？ 優れた人間を作る——そんなのは。まあ優れたなんて言うのは、専ら戦闘方面だったりするけどねえ」

「始めの内は、優秀な人間同士で子供を生ませて徹底した英才教育を施すとか、まあそんな程度のものだったと思うよ。多分ね。でもすぐに、それだけじゃ足りなくなった。人間が世代を重ねていくより、科学の発展の方が圧倒的に早いから、当然の流れではあるけれど。」

さて、そうなると次にどうするか……いやいや面白いよねえ！ 割と色んな国が、同じような方法を試みたのさ」

「……〔遺伝子強化素体〕」

品種改良で駄目ならば、遺伝子組み換え。

呟いたのは誰だったか。少なくとも、一人だけではなかつただろう。

視線がつい、ある少女に向いてしまったのも。

「もつとも。その呼び名は正式なモノじゃあない。というよりも、正式な呼び名なんてないのさ。なにせこの技術と研究は、世界中で禁忌とされるモノ——ぶっちゃけて言えば人体実験だからねえ」

「……………」

誰もが知りながら、しかし口にしなかった事実を、如月社長はあっさりと言った。ラウラ自身が気にしていないとはいえ、やはりそれは容易に踏み込んでいい事柄ではないのだ。

如月社長も、それを理解した上で話している。だから、もう誰も彼を止めようとはしなかった。

「存在してはならない、忌むべき技術……それをもってしても、人間はまだ科学に届かなかつた。むしろ突き放されるばかりだった。そしてそれは、約十年前に決定的なものになった」

「……IS、か」

当事者の一人である千冬は、思わず声にしていた。如月社長は笑みを深める。

「当初は荒唐無稽過ぎて、白騎士事件が起きるまでは見向きもされなかつたISだけど……そのスペックデータが比喩でも誇張でもない、最初から見抜いていた人ももちろん居たのさ。彼らはすぐに気付く——これは、人間に扱いきれるモノではない、と」

高過ぎる性能。その全てを發揮するには、人間は余りにも弱く、脆く、鈍い。それを、ISに深く関わる者たちは身をもって知っている。「当時すでにある程度の成果を挙げつつあつた遺伝子強化素体たちにも、ISは手に余つた。人間をいくら進歩させても、元々の機能が足りていないんだからどうしようもない。」

……そこで、彼らは考えた。いや、発想自体はもつと前からあつたんだ。ただそれを、本格的に進め始めた」

「……何を」

一夏が呟いた。何か、恐ろしい予感がしたからだ。

「簡単なことだよ。彼らは人間を<sup>アドバンス</sup>進歩させることに見切りをつけて、人間に追加することにしたのさ」

「……………は？」

あまりのことに、一夏はそんな、間の抜けた声しか出せなかつた。

——追加する、だって？

人間に？

「その計画にも、もちろん名前<sup>コード</sup>なんてない。けど名前がないっていうのは不便だからね、誰かが呼び始めた名前が自然と定着するようになつた。」

……つまりその計画には、誰かが勝手に付けた、通称しかないんだ」

その、道徳や倫理をドブに捨てるかのような計画の名前は。

ただそう呼ばれているだけの、正式名称でもなんでもない、その名

前は。

「その計画の名は――」

プロジェクト・プラス  
強化人間計画」

あまりにも、正鵠を射ていた。

「……まあ、世界史のお勉強はこんなところかな。さあ、ボーデヴィツヒ君。あとは、君が話すべきだ」

「……………ああ」

如月社長に促され、ラウラはようやく口を開いた。頭の中を整理してきたのか、気持ちに区切りをつけられたのか、あるいは覚悟を決めたのか。

とにかく、ラウラは話し始めた。誰にも知られたくない、自分でも知りたくなかった、母国ドイツの所業を。

「……三年前。第二回モンド・グロッソの開催国になったドイツは、最有力優勝候補である織斑千冬の身内、観戦に来ていた織斑一夏を誘拐されるという大失態をやらかした。本来ならばすぐにでも各国が失態を突き、ドイツに貸しを作るところだったが……ISという兵器、そしてモンド・グロッソという大会の存在は、そんなことのために汚点を残すにはあまりにも経済価値が高過ぎた。だから、ドイツの隠蔽工作に対し見て見ぬ振りをした。織斑千冬も、ドイツの失態を口外しないと約束した。

ドイツは秘密裏かつ迅速な対応に全力を尽くし、結果、織斑一夏誘拐事件はなかったことにされた。……そう。なかったことになったんだ」

IS学園に在籍しているとはいえ、ラウラはいまだ軍属だ。当然、その知識に部外秘の物はいくらでもある。

その中でも、これは最重要機密と言えるものだった。語ることなど、到底許されはしない。



——そんなことは、今更だ。ここから先は、ラウラ自身も知ってはならなかった筈の領域。退路など、とうの昔に断たれている。

「各国もそれで納得した。隠蔽工作に必死になっている——ドイツの演技にまんまと騙されて、「何を隠そうとしているのか」までは気が回らなかった。……無理もない。それはドイツが隠すまでもなく、事件の大き過ぎる影に、隠れてしまうようなことだったのだから」

先ほどまでの沈黙が嘘のように、ラウラは言葉を吐き出し続けた。自嘲と慚愧を声に乗せて。

「織斑一夏が発見・救助された現場に居合わせた、一人の少女。瀕死の重傷を負い織斑千冬によって病院まで運ばれたその少女は、他のどの国も、事件に巻き込まれた不運な少女としか見ていなかった。

……荒唐無稽過ぎたんだ。身体すら成熟していない少女が、生身で、ろくな武器も持たずにISと戦い——操縦者に傷を付けるなどで、千冬の、一夏の脳裏に、傷付き眠る少女の姿が思い起こされる。

それは二人にとって、決して忘れることのない記憶だ。今より僅かに幼いその顔は、寸分の差異もなく瞼に焼き付いている。

なのに、何故だろう。その姿が、いつもと違う。

「……現場の惨状は、ある一つの事実を示していた。そこで行われていたのは、圧倒的強者による一方的蹂躪ではない。互いが互いの命を奪い合う、戦闘だ。そしてその、ISと生身の少女による戦闘という、誰もが一笑に付すような出来事があった現場には、「ある物」が残されていた」

眠る少女の、失われた左腕に。

悪意が具現化したかのような闇が、纏わりついている——

「少女——井上真改の、左腕だ」

——バキン！

突然の音が、部屋に響いた。小さな音だが、確かに全員が聞いた。音の源である少年は、爪が食い込み血が流れ、過剰な力で握り締められ指が折れた手を震わせながら、言った。

「……続けてくれ。ラウラ」

「……当初、ドイツの研究者たちは、井上真改を織斑千冬に匹敵する戦闘の天才だと考えていた。だがそれはすぐに違つたとわかる。左腕から造つたクローンたちは、訓練プログラムをいくらか実行しても、望む結果を得られなかつたんだ」

「しかしある時、研究者たちは知つた。井上真改がISと戦えた要因は、肉体の限界を超えて力を引き出す、異常なまでに強烈な自我にあると」

「研究者たちはアプローチを変えた。クローンたちに戦闘技能を植え付けるのではなく、その肉体を物理的に強化することにした」

「強化施術は、被検者の精神に致命的な影響を及ぼす。大抵の場合、術後数時間で、想像を絶する苦痛と異常な感覚に精神が耐え切れなくなり、崩壊する」

「……だが、井上真改のクローンたちは違つた。ほぼ全ての個体が長時間精神を保ち、中には異常感覚にある程度順応する者までいた」

「それまでただ死に絶えるだけだったモノたちが、生きて動き回つた——欲しくても得られなかつたデータが得られるようになり、人体強化の技術は飛躍的に進んだ」

「そしてついに、ある個体が、全ての強化施術を耐え切り克服した」

「筋力強化、骨格強化、内臓保護、感覚の鋭敏化、思考と反応の高速化……猛獣の運動能力、機械の精密動作、人間の戦闘技術を併せ持つその個体は、研究の最初の成功例として、名前が与えられた」

「……影打。<sup>シャッテ</sup>それが、奴の名だ」

「シャッテが強化人間として完成して数ヶ月は、様々なデータを収集していた。ISにもある程度の適性を示し、一通りの戦闘技術を修得させると、想像以上の性能を発揮し始めた」

「研究者たちは歓喜した。最強の兵を量産する目処が立つた、と」

「だがある日、研究所が襲撃された。スタッフと未完成のクローンたちは皆殺しにされ——シャッテと、一機のISが強奪された」

「……亡国機業に」  
ファントム・タスク

語り終え、ラウラは大きく息を吐き出した。その小さな身体が震え

ているのは、寒さ故ではあるまい。

静かに聞き終えた一夏たちは、誰も声を発することはなかった。訊きたいこと、言いたいことは山ほどある。だが、それらを口に出すことは憚られたのだ。

しばらくの沈黙。その間ラウラは、裁きが下るのを待ち続けた。誰でもいい、誰か私を裁いてくれ——自罰的な感情に呑み込まれ、目から力が失われていく。

すると、誰かがゆらり立ち上がった。

一夏だ。

「いち、か……」

「……………」

一夏は俯き、表情は何い知れない。だが纏う空気は、明らかに常の彼とは違う。

ラウラは怯え、身をすくめた。どのような罰も受け入れる。それでも、一夏に嫌われることだけは耐え難かった。

そしてついに、一夏は——

「…………話してくれて、ありがとな。ラウラ」

「……………え……………」

不思議なほど落ち着いた、優しい声。一夏は今にも泣き出しそうな笑顔をラウラに向けて、そう言った。

「…………悪い、みんな。ちょっと外の空気吸ってくる」

告げて、一夏は部屋を出る。

その背中を、誰も追い掛けることは出来なかった。

ラウラは、一夏が座っていた席を見る。そこには、一夏の両手から流れ落ちた血の跡だけが残されていた。

いつもは静かなIS学園の夜も、今日は様子が違った。日が落ちてからも続けられる学園の復旧作業の音が、寮の屋上まで届いている。

そこでは少年が一人、手摺りに背中を預けるように寄りかかり、月

を見上げていた。

「……シンか」

「……………」

少年——織斑一夏は、ふと何かを感じて視線を下ろす。そこにはいつの間にか、片腕の少女が立っていた。

井上真改。一夏の幼なじみであり、剣士としての憧れであり。

一夏が、左腕を奪ってしまった少女。

「どうした、こんな時間に。最近冷えてきてるからな、風邪ひくぞ」

「……………」

「ああ、手を心配してるのか？ 大丈夫だよ、ちゃんと保健室で診てもらった。きれいに折れてるからすぐ治るってさ」

「……………」

軽く掲げられた右手は、数本の指がギプスで固定されている。痛々しいが、しかし一夏にそれを気にした様子はなく、真改もまた、そのことで来たのではない。

「……平気……う？」

「……………」

問われて、一夏の顔は小さな笑みを浮かべたまま、固まる。右手を下ろし、再び手摺りに寄りかかり、月を見上げた。

「……なんだろうな。わかんなくなっちゃった」

「……………」

真改は静かに歩み寄り、一夏と並んで月を見上げた。

「怒ってるのか、憎んでるのか、悲しんでるのか……自分の感情なのに。頭の中がごちゃごちゃしてて、よくわからないんだ」

「……………」

「どうすればいいのか。どうしたいのか。それも、わからない」

「……………」

一夏の声は、常よりも幾分か穏やかだった。まるで、心の乱れと反比例するように。

「なんでだろうな。不思議だよな」

「……………」

大きな、美しい月。今宵は奇しくも満月。灯りの落ちた I S 学園においても、月明かりは二人を照らし出していた。

その表情が、はつきりと分かる程度には。

「なあ、シン。お前はいつも、気にするなって言うよな」

「……………」

それは、真改の左腕のことだ。

かつて一夏を守り失った左腕。誰よりも強くなることを望む少女にとっては、あまりにも大き過ぎる喪失。

それでも、真改は決して一夏を責めない。自分が勝手にやったことだからと、その罪を背負わせまいとしてきた。

——だが。

「…………無理だよ、そんなの。無理に、決まってるだろ」

「……………」

一夏の声が震え、目から涙が零れる。それに気付きながら、真改は見ぬふりをする。

「お前の姿が、目に焼き付いて離れないんだ。あの日目が覚めて、最初に見たお前の、眠る姿が」

「……………」

「お前の剣が好きだった。真っ直ぐで、迷いがなくて、いつも全力で、一生懸命で…………そんな、お前の剣が」

「……………」

「なのに…………あの日から、俺はお前の剣を、それまでみたいに見れなくなった。痛いんだ。お前が変わらず剣を振るたび、俺のどこかが、痛むんだ」

「……………」

少年の慟哭に、少女は応えない。二人を見下ろす月も、何も語らない。

「それでもずっと、追い掛けたって、思ってた。いつかお前を超えられれば、またお前の剣を、ちゃんと見られるんじゃないかって」

「……………」

「…………なのに、さあ…………なのにつ…………」

一夏は、ついに泣き出した。

真改が何も言わないのに、自分が泣き言を言うわけにはいかない。そう思って、ずっとこらえてきたのに。

ついに、こらえきれなくなった。

「お前の剣が、汚されたような気がした。俺が、汚しちまったんだ。俺が、お前の剣をつ……！」

「……………」

一夏は膝から崩れ落ちて、両手で顔を覆い、泣いた。真改はその隣に屈み、一夏の肩に手を置き、抱き寄せた。

「あんなに、きれいだったのに……こんなに、きれいなのにつ……！」

「……………」

「シンっ……ごめん、ごめん……シン……！」

「……大丈夫……」

「ごめん……ごめんっ……」

「……大丈夫だ……」

幼子のように泣きじやくる一夏に、真改は優しく囁いた。その二人を、夜空に浮かぶ月と、屋上の入口に隠れるように控えた少女たちが、静かに見つめていた。

『首尾はどうだ』

「上出来です。初の実戦、それも単独任務での成果としては、これ以上は望めないかと」

艶やかなブロンドを靡かせ、完璧とも言える美しさの足を組み、優雅に椅子に腰掛ける女性——スコールは、机を挟んだ反対側に浮き上がる3Dホログラムに向け、微笑みながら答えた。しかし友好的な表情とは裏腹に、その眼に宿る光には一切の油断がない。

妖怪と対峙しているようなものだ——この老人との会話には、スコールは常にその心構えで臨んでいる。

『ふむ……性能は上々か。そうでなくては意味も価値も有りはしない

が』

老人はスコールの言葉に、僅かな間を空けて答えた。会話の中には当然存在する、自身の考えを言語に変換するための時間。その一瞬の間に、一体どれだけの策謀を巡らせているのか。スコールほどの知能をもつてしても、伺い知ることは出来ない。

「あなたから頂いた情報のおかげですわ。学園襲撃の日時、敵戦力の部隊構成……どちらも正確でした。バックアップも含めて、事前にしっかりと準備ができましたから、あの子も気負わずに取り組めたかと」

『気負うほどの感情など持ち合わせてはいまい、アレは』

つまらなそうな老人の言葉に、スコールは必死に表情を保った。

人の神経を逆撫でするような物言いは、この老人が会話相手の心中を探るために使う手段の一つだ。表情に限らず、仕草や声、言葉遣い……僅かでも影響を滲ませれば、そこから何を悟られるか分かったものではない。

「……いつもお世話になっていきます。私どもの戦力も、随分と整ってまいりました。さらには様々な方面での情報提供……ミツシヨン遂行には大きな助けです。腕が鈍るのでは、と、心配する者までいるくらいですから」

『情報とは力だ。だが不正確な情報に価値はなく、遅い情報には意味がない』

「ええ、わかっています。今回の作戦で得た戦闘データ……全て余さず、今すぐに、そちらに送信いたします」

『それでいい。契約通り、手に入れたISコアはそちらの好きにしろ』  
「ええ、ありがとうございます」

ISコア。それも未登録の、存在しない筈のコア。もしそんなものが有るとすれば、どの国も血眼になって探し出し、手に入れば死に物狂いで隠匿するであろう代物。

それを「好きに使え」などと言うこの老人は、一体何を考えているのか。スコールは不気味でならない。得体の知れない怪物にじいと睨まれ続けるのと、この状況になんの違いがあるうか。

『誤魔化そうなどとは思うなよ。私がお前たちに、あの人形の情報を教えたのも——』

「シャツテ」

『……ほう』

だが、それでも。

その言葉だけは、作り笑いで聞き流すことは、出来なかった。

「あの子の名は、シャツテです。お忘れなきよう」

『ふむ……なるほど。どうやら想像以上に興味深い存在のようだ。確かに、操られるだけの人形など比ではないか』

「……………」

これでまた一つ、スコールは老人に隙を晒した。先の態度が本心からのものなのか、それともただの演技なのか……老人にとって、それを見破るなど容易に過ぎる。

『いずれまた、情報を送る。その情報をどう活かすかも、その情報を元に得た物をどう使うかも、お前たちの自由だ。だがこちらから要求があつた場合には、それに従ってもらおう』

「心得ております——いつも通り、ですね」

『そうだ。私を疑う必要はない。お前たちにはまだ、利用価値があるのだから』

最後まで心中を伺わせることなく、老人は一方的に通信を終えた。ホログラム映像が消え、部屋が僅かに暗くなる。

怪物が去った安堵から、スコールは小さく溜め息を吐いた。しかしすぐに表情を引き締め、負け惜しみを——否。自身を鼓舞するための、精一杯の強がりと言った。

「疑ってなどいませんわ。……端から信じていないだけよ——  
ワンターレン王大人」

世界のどこか。人類全ての内でも、片手で数えられるほどしか存在を知らない、とある研究所。ラボラトリー



大型貨物車程度の大きさのその移動式研究所で、女性が一人、無数のディスプレイを眺めながら、肘から先が霞む速さで端末を操作していた。

「お、お、おとおお？ やったー、箒ちゃん、やっと絢爛舞踏を発動できたねー！ おめでとー！」

ぱちぱちぱちと手を叩く、目元に深い隈を浮かび上がらせ、赤みがかった長い髪を適当に流し、童話から引き摺り出したような青と白のワンピースを着こみ、頭に兎の耳を模した高性能デバイスを装着した女性。名を、篠ノ之束という。その胸は豊満であった。

「これで紅椿も本領発揮できるよ！ やったね箒ちゃん！ ……うむ。でも流石に、ちよつと遅いかなー、劣化量産型のゴーレムⅡを全機投入してやつとだもんねー」

束は頬を膨らませ、突き出した唇と鼻の間に使いもしないペンを挟み、椅子にもたれかかった。やる気が微塵も感じられない所作であるが、しかしその脳内では、世界中のコンピューター全てを直結しても到底及ばないような速度で思考が行われている。

「稼働率もそんなに高くないし……なんでだろ？」

ふらふらと足を揺らしながら、束は思考を続ける。だが、答えは出ない。歴史に革命的な転換を及ぼせるであろう発想をいくつもゴミ箱に捨て去りながらも、束が求める答えには至らない。

何故か。彼女には理解出来ないからだ。「人」という存在が。

「……うう〜むむむう〜……」

愛する妹に、能力と自信をつけさせる。ただそのためだけにIS学園襲撃という暴挙に出た天才は、堂々巡りを繰り返す。ああでもないこうでもない、自分の思考と行動が世界にどのような影響を与えるかなど、まるで気にすることもなく。

「——束さま」

「んん？」

そんな束に、声を掛ける者がいた。小さく華奢な、幼い少女。年の頃は十二ほどか、輝くような銀髪を三つ編みに纏め、両の眼を閉じた、見る者の目を惹きつける美しい少女だった。

「お食事をお持ちしました」

「わあ、ありがとうございます！ いただきまーす！」

おずおずと差し出されたトレイに乗った、大部分が黒く焦げた物体。それを束は、目を輝かせて持ち上げ、かぶりついた。

ばりばりぼりぼりと、固く脆い炭化した食物特有の音を立てながら、満面の笑みで咀嚼する。

「んー、おいしいー♪ くーちゃんはお料理上手だねー！ 優しいし」

「そんな筈はありません。不味いに決まっています」

良い子良い子と言いながら、少女の頭を撫でる束。「くーちゃん」と呼ばれた少女は俯く。その両目は閉じられたままだ。

女の子なんだから、料理が出来ないといけない——そう束に言われて始めた料理も、教える者もおらず失敗続きだ。束を崇拜し、束の為だけに在ろうとする「くーちゃん」は、料理を失敗するだけでも重い自責の念に駆られる。作った料理は必ず束に食べさせること。そう約束させられたために、迂闊に練習も出来ない。

「あー、美味しかった。ごちそうさまー」

「……お粗末様……でした」

「ああ、そうそう。ねえくーちゃん、すーちゃんはどこ行っちゃったの？」

食後の他愛のない会話。そんなノリで振られた話題に、「くーちゃん」は表情を固くした。嫌悪、反発、恐怖……心中に様々な感情が入り混じるが、露骨に表には出さない。

「……あの子は、散歩に出かけたようです」

「そっかあ。すーちゃん、お散歩好きだもんねー」

「……………」

「くーちゃん」は強い不安を感じていた。散歩——「すーちゃん」の行動はそうとしか表現出来ないのは確かだ。いつの間にかふらりと出掛けていて、いつの間にか戻って来ている。しかし実際には、そんな穏やかなものでは決していない。

散歩中に、もし何か、「すーちゃん」の機嫌を損ねるような出来事があれば。その時、地図上から街が一つ消えることになるのだから。

「……束さま」

「ん？ なあに？」

「……いえ。なんでもありません」

「あはは、くーちゃん、そういう時はね、「呼んでみただけです」って言うんだよ？」

「……はい。呼んでみた、だけ……です」

「んもうー、くーちゃんはかわいいなあ！」

「……」

「くーちゃん」は訊きたかった。「何故あの子をお傍に置くのですか」と。だが訊けなかった。「くーちゃん」にとって束の意志は絶対だ。その真意を問うなどあまりにも畏れ多い。

だがそれを差し引いても、「くーちゃん」にとつて「すーちゃん」は異質過ぎた。二人の境遇にはそれほど違いはない筈なのに、「すーちゃん」は「くーちゃん」のように、束に敬意を抱いていない。心が死んだ廃人ならば何人も見たが、それとも違う。

理解が出来ないのだ。束とは、また別の方向性で。

「んんん。すーちゃんにもやって欲しいこと、いくつかあるんだけどなあ」

「……」

おやめください、と、喉まで出かかった言葉を、「くーちゃん」は呑み込んだ。「すーちゃん」は、いつ裏切るかも分からない——否、そもそも味方かどうか分からない存在だ。そんなモノに、何かを頼むなど。「くーちゃん」は「すーちゃん」には一切の信頼を置いていない。ただ束が言ったことだから、従っているに過ぎないのだ。

(……でも……)

「くーちゃん」が「すーちゃん」について分かっていることは、僅かに三つ。

ひどく気まぐれであること。この世の何もかもを、どうとも思っていないこと。篠ノ之束と織斑千冬、二人の最強が力を合わせて挑んだとしても、到底敵わぬ強者であること。

ただ、それだけ。そんな存在を、どうして信じるかなど出来よう

か。

「ううむ。でもお散歩に行つちやつたんなら仕方ないかなあ。……仕方ないなあ。うん、そつちは置いてこう。それよりくーちゃん、ひとつお願いがあるんだけど」

「……はい。なんなりと——」

世界のどこか。人類全ての内でも、片手で数えられるほどしか存在を知らない、とある研究所<sup>ラボラトリー</sup>で。

悪魔<sup>悪魔</sup>天才による計画が、人知れず進められる。

少しずつ、少しずつ。

まるで、質の悪い病のように——

## 設定資料 2

シャツテ

身長：186 cm

体重：KONISHIKI級

バスト：ボンツ

ウエスト：キュツ

ヒップ：ボンツ

最近増えてきたオリキャラの一人。真改のクローンで強化人間（ナ、ナンダツテー）。顔の形というか輪郭だけは真改にそっくりだが、目つきその他が全然違う。あと体格もだいぶんちがう。黒髪黒目だが、髪はベリーショート。

筋肉・骨・内臓等の密度が人間の比ではなく、外見からは想像もつかないほどに体重がある。もちろん本人はまったく気にしていないし、まわりもあまり気にしてない。でも普通の乗り物に乗る時とかは要注意。

身体能力はまさにモンスター。特に頑丈さが尋常ではない。ナノマシン装備なのでケガも人間より早く治る。やったぜ。

専用機：シユヴァルツエア・リート

ドイツが造った第三世代型IS。圧倒的な運動能力と機動力を持ち近接戦闘では敵なしと言っても過言ではないが、ある致命的過ぎる要因により「欠陥機」を通り越して「失敗作」と呼ばれている。が、シャツテだけはこの機体を扱うことができる。

まあ細かいことは後々本編で描写する（予定）ので、お待ちください。

第三世代兵装：ローレライ

全身の装甲や手にした武器を超振動させ、格闘攻撃の威力を飛躍的に高める兵装。発動の際には特徴的な高音が響き渡るため、事前に察知可能。でも本体が平気で音より速く動くしそもそも攻撃時はほぼ常時発動なのであまり意味はない。

これにより、後述のアルトキウムラスの他、指を覆う装甲や足先の装甲と一体化した四本ずつのブレードなども致命的な威力を持つ。

発射した銃弾を振動させたりはできないので、完全に接近戦用の兵装。それでも本来は射撃武器をいくつか載せる予定だった筈だが、シャツテは近接武器以外を一切装備していない。これはオリジナルである真改の影響と言うよりも、シャツテを攫ってきたオータムのせいである。

武装：アルトキウムラス

近接格闘用ブレード。腕部装甲に籠手のように装着する金属プレートに、手から肘方向へ向けて分厚い片刃が伸びている形状。ブレードは使用時に90度展開し手首の辺りで固定、ナイフを逆手に持ったような感覚で振る。

旧式のブレードであり、堅牢であること、動きの邪魔にならないこと以外はこれといって長所がない。シュヴァルツェア・レーゲンに装備される可能性もあったが、プラズマ手刀が予定通り開発されたためお蔵入りし、存在を忘れられた。

本来は攻撃用ではなく敵の近接攻撃を凌ぐための盾代わりであり、設計者曰く「当たるように作ってない」。

武装？：足先のブレード

左右の足先の、指側に三本、かかと側に一本取り付けられたブレード。猛禽類の爪をイメージしており、ブレードはかなりのパワーとスピードで「掴む」ことが出来る。

後ろ回し蹴りやかかと落としのように勢い良く叩き込んだり、アイアンクローのように鷲掴みにして握り潰すのが本来の使い方だが、ローレライの超振動とシャツテの身体能力によりとんでもない手数を得た。

スラスター

通常のISは大型のメインスラスター＋小型のサブスラスターという構成が一般的だが、シュヴァルツェア・リートにはメインスラスターがない。変わりに、普通のサブよりは少し大きい程度（中型未満）のスラスターを大量に装備している。

これはシユヴァルツェア・リートがある方向性を求めて試験的に設計されたことに関係しており、結果として「最高速は控えめだが加速力と旋回能力に特化」という、非常に小回りの効く機体になった。

余談だが、作者の愛機は大抵の場合、「燃費を重視するあまり出力の低いブースターを載せているため軽量級なのに遅い」というアセンになる。だってエネルギー管理難しいんだもん。

装甲

薄い。

フラッド

身長：144cm

体重：HIMITSU

バスト：すとんっ

ウエスト：すとんっ！

ヒップ：すつとんっ！！

感想を見る限りだとなんか妙に人気のあるオリキャラ。作者自身もビツクリ！　こんなアタマのイカレたロリっ娘が人気とか、やはりACプレイヤーは変態揃いだな！（ブーメラン）

たまに間違えられるが、コードネームは「洪水」「氾濫」を意味する flood である。フラッドじゃないです。あとオータムはよくフラット（平ら、平坦、まな板の意）って呼ぶ。

小柄で華奢、人形のように均整のとれた顔立ちの少女。髪は完全な純白で肌は透き通るように白く、瞳や唇は血のように赤い。黙っていれば幻想的な雰囲気のある美少女かもしれないが、まず黙っていることはない。口元は常に三日月のような笑みを浮かべていて、特徴的な笑い声を発する。端的に言うところ狂ってる。

平時はどうかコミュニケーションが可能なくらいには落ち着いているが、戦闘が始まるとテンションが一気に振り切れまともな会話は成り立たなくなる。その状態でも闘争本能によってか戦闘に関しては割と的確な判断を下すが、撤退等の選択肢が初めから存在しない。なので、フラッドを撤退させる場合は上からの指示（しかも、フ

ラッドが「上司」と認めている人間に限られる)が必要。しかし戦闘時間が長くなるとテンションが天井知らずに上がっていき、そのうち一切の指示・対話を受け付けなくなる。こうなると周囲にあるものを全部ぶっ壊すか自分がぶっ壊されるかしないかと止まらなくなるため、撤退指示は早めに出さなければならぬ。

職場での人間関係は限定されているが、オータムとはとっても仲がいい。フラッドはいつもオータムを少しずつつすり潰したいと思ってるし、オータムもいつもフラッドの四肢を丁寧に切り落としてぐちゃぐちゃに〇してやりたいと思ってる。戦闘においても、とにかくド派手に暴れ回るフラッドが敵の注意と警戒を一身に引き付けその陰でオータムが罠を張り巡らせるというコンビネーションが非常に強力。たまにオータムが流れ弾(故意)を食らったりフラッドを罠にうつかり(故意)巻き込んでしまったりするが、些細なことである。

専用機：ジャガーノート

インド製第三世代型IS。拠点防衛用であり、機動力は第一世代型まで含めても最低クラス。しかし極めて豊富かつ強力な武装の数々と、本来は機動関係に割り振られる情報処理能力まで使った高性能FCSによる射撃性能により、比類なき攻撃能力を持つ。

武装も大火力故に射程距離が長く、FCSの性能もあって特に対空能力に優れる。例えばスカイツリーのとつぺんにジャガーノートを配置した場合、少なくとも東京都には敵性航空戦力は侵入できなくなる。でも低空飛行で近づかれたら街もまとめて廃墟になる。

ちなみに、ジャガーノートは大型で全身装甲のISだが、全体のシールドはバカでかい手足に比べて不釣り合いに胴体が小さいというアンバランスな機体。フラッド自身の手足は機体の肘・膝辺りまでしか届いていない。女性主人公が地球外生命体と死闘を繰り広げる某映画のパワーローダーをゴツくした感じ。

第三世代兵装：アーセナル

ジャガーノートが背中に背負ってるコンテナみたいな形の兵装。中には量子化された無数の武器・追加装甲・その他諸々が格納されており、状況に応じて素早く展開する。また、わざわざ手に武装を展開



しなくても、ミサイルやロケット等の武装は発射装置も一緒に格納されているため、アーセナルから直接撃てる。至近距離から超長距離まで各種武装を取り揃えているため、どんな敵が来ても対応可能です。ごあんしんください。

武装：多過ぎるので割愛

装甲

分厚い。とにかく分厚い。おまけに物理装甲とエネルギー装甲がミルファイユみたいに幾層にも重なっているのです、ただでさえ頑丈そうな見た目よりも更に頑丈。しかしそのせいで武器やスラストスターに使うエネルギーも食い尽くしているのです、武器は物理ばかりだしスラストスターもあんまり出力がない。

パワーはあるよ！

キイクン

とある作戦の折りフラッドが連れ帰って来た謎の生物兵器。青くてダニみたいな形してる。大きめの小型犬くらいのサイズ。

名前はキイキイ鳴くからで、「くん」なのはフラッド曰く「卵産まなことからたぶん男の子」。主食はネズミとかの小動物。

フラッドが自分の部屋で甲斐甲斐しく世話してる。部屋の外に出た場合即射殺されるため、キイクンはまだフラッドの部屋しか世界を知らない。

キイクンがフラッドと同棲を始めてから、ただでさえ少なかった訪問者はほぼゼロになった。唯一フラッドの部屋を訪れるのはシャツテのみである。

## 第95話 眠れない夜

「——ボーデヴィツヒさん？ ラウラ・ボーデヴィツヒさん、ですよね？」

「……？」

代わり映えしない、地獄のような毎日。その日もまた、何かしらの実験だか試験だかに駆り出された私は、一人の少女に出会った。

「……誰だ、お前は」

「ああ、すみません。私は——」

その少女がなんと名乗ったか、今はもう、思い出せない。……いや、初めから覚えてなどいなかったのだ。その時の私は、そんなことに微塵も興味を持てなかったから。

「初めまして。でも私、ボーデヴィツヒさんのこと知ってるんです。

この前、ボーデヴィツヒさんの実戦訓練を見て……」

「……」

この前の訓練、と言われても、心当たりが多すぎる。もともと、ここ最近の訓練や演習は見るに耐えない有り様だったので、恐らくそれ以前のものだろう。少女が浮かべる悪意のない笑顔に、無意識にそう思った。

「私、感動しました！ 素早く正確な身のこなし、柔軟で無駄のない立ち回り、まるで未来が見えているかのような戦術眼……兵士とはかくあるべきだと思います！ あの訓練を見て以来、私、ボーデヴィツヒさんに憧れて——」

「黙れ」

私に向けられる、少女の純粋な好意は、鬱陶しくて仕方がなかった。この少女が語る私は過去の私だ。今の私は見る影もなく、もうあの頃のように戦えない。かつてどれだけ優秀だったとしても、今使えないものなら意味はない。ちょうど今のように、訳のわからないことに使い潰されるだけだ。

「……黙れ。興味が無い。お前が、私をどう見ているかなど」

「……ごめんなさい」

ここに居ると言うことは、この少女も遺伝子強化素体アドバンスドなのだろう。そうとは思えないほどやかましいが、しかし遺伝子強化素体アドバンスドであるのなら、私がどうなったかは知っている筈だ。

最優秀と持て囃され調子に乗り、しかし移植された「越界の瞳」ヴォーダン・オージエを制御出来ず、満足に動くことすら出来なくなった不良品——それが、今の私だ。

「……………」

「……………」

私は少女を意識から締め出し、存在を忘れようとした。触れてほしくなかったのだ。初めて負った、心の傷に。

だが、少女はそれでも踏み込んで来た。

「…………諦めないでください」

「…………なんだと」

「諦めないでください、ボーデヴィツヒさん。私も…………まだ、諦めてませんから」

「…………貴様」

いい加減に頭に来て、私は少女を見た。その時初めて、はつきりと。そして気付いた。少女の右目、その瞳は白濁し、世界の一切を映していないことに。

「…………お前」

「あはは。…………移植に失敗して…………もう、治らないそうです。まあ私はボーデヴィツヒさんとは違って、元々あまり優秀じゃなかったんですけど…………」

「……………」

片目を失う。そのハンデはどれほどの大きさか。…………少なくとも、私以上であることは間違いあるまい。

「誰も、私には期待していません。能力もない、適性もない、ただの役立たず…………そう思われています。それでも、私は諦めません」

「…………何故だ。希望などないだろうに。辛いだけだろう…………？」

理解出来なかった。性能で劣るうえ、更にハンデまで背負う。もはやいつ廃棄されてもおかしくはない。

なのに何故、この少女は、「諦めない」などと口に出来るのか。

「だって、悔しいじゃないですか」

「……悔しい……？」

「私たち遺伝子強化素体は、普通の人とは違います。産まれたのではなく、産み出された……いえ、作り出された存在です。でもだからと言って、それで自分の運命とか……そういうものまで全部決められてしまうのは、悔しいじゃないですか」

「……………」

少女の言うことは、私には良く分からなかった。だがどういうわけか、私の心を揺らした。

「私は、実戦には耐え得ないと評価されています。そんな私が、与えられた性能ではなく、私自身が努力して得た力で実績を残す。それはきつと、私が私の、押し付けられた運命に勝った証だと思っんです」

「……………」

「だから私は、頑張りたいんです。諦めたくないんです。私は道具かもしれない、兵器かもしれない。それでも、私には私だけの意思がある。

それを、見せてやりたいんです。そして、見たいんです。私が結果を出した時の、私を使えないと言った人たちの反応は、きつと痛快でしようから」

……ああ。もしかしたら、こういうのを「感動した」と言うのかも  
しれない。

他に大きく劣る遺伝子強化素体がどうなるか、知らぬわけではある  
まい。なのにこうして、希望を語る。

……いや。自ら希望を手にするため、未来を切り開くのだと。こ  
うも力強く、語る事が出来る。

それに比べ、私はどうだ。ただ一度の挫折で腐り、希望を見失った。  
押し付けられた運命に流されるままに。

こんな有り様では、たとえ越界の瞳のことがなくても、いずれは  
心折れていただろう。

「……すまない。お前の名前を、よく聞いていなかった」

「あはは。なんというか、流石ですね。そういうことをはつきりと言  
えるの。……わかりました。じゃあ、もう一度言いますね。私は――」

『――時間だ。準備しろ』

「あつ、はい！」

呼ばれて、少女はピットへ向かって行つた。そこには今回私たちが  
試運転する新鋭機、シュヴァルツエア・リートがある。

「また後で、ボーデヴィツヒさん！ 次はちゃんと、私の名前を覚えて  
くださいね！」

「……ああ。必ず！」

少女はピットへと消え、数分後、控えている部屋のモニターに現れ  
た。漆黒の装甲を身に纏つて。

『では、まず――』

指示を受け、少女が機体を操る。ぎこちなくも、基礎を押さえた堅  
実な動きだ。ひとつつひとつ指示をこなし、澄み渡つた高音を響かせな  
がら、少女が舞う。

期待した。このまま少女がシュヴァルツエア・リートを乗りこな  
し、夢を果たすのではないかと。

……だが。

『……よし。次は――』

指示を受け、少女がスラスターを噴かす。

すると、予想を超えた推力ゆえか、少女が体勢を崩した。

ほんの、少し。

『あ――』

その時。

通信以外はスラスターの轟音に遮られ通らない筈のそれが、聞こえ  
た。

「――え」

……私は。

少女の身体が、捻れ砕ける音を、確かに聞いたのだ――

「ツ……いーハアツ、ハアツ……ハア……っ!!」

目が覚めて、自分の居る場所が無機質な軍施設ではなく、見慣れた自室であることに気付いた。

「ハアツ、ハッ、かつ……ハア……」

息が苦しい。呼吸自体が出来ていない。恐怖に身体が硬直し、肺すらまともに動かないのか。私は陸に打ち上げられた魚のようにパクパクと口を開け閉めしながら、必死に呼吸をしようとする。

「ぐ、く……かは……」

服を握り締め、胸を強く圧す。外部から刺激を与えることで、僅かに息を吐き出せた。あとはエンジンと同じだ。一度動けば、自然と呼吸は再開される。浅く遅く不安定な呼吸が、次第に深く、安定していく。

「……ふうー……ふうー……いー」

呼吸が整えば、自分の状態に意識が向く。全身が汗に濡れ、パジャマが肌に張り付いていた。なのに、身体の芯まで冷え切っている。額の汗を拭おうと持ち上げた手は、ひどく震えていた。

「……う……」

時計を見れば、日が昇るまで随分と時間がある。同部屋のシャルロットは……当然ながら、まだ眠っている。規則正しい静かな寝息には、私に睡眠を妨げられた様子はない。

……あの時の夢を見たのは、いつ以来か。忘れたわけではない。だが私は、過酷な作戦や危険な実験にも幾度となく携わってきた身だ。私の目の前で命を落とした知り合いや仲間は、一人や二人ではない。その中でも、あの少女とは短い付き合いだった。特別仲がよかったわけでもなく、それどころか名前すら知らないのに。

なのに、どういうわけか。私自身にも理由は分からないが、あの少女の最期は、鮮烈に刻み付けられていたようだ。

(……このままでは、寝れないな)

いくら遺伝子強化素体アドバンスドと言えど、風邪をひかないわけではない。免

疫力は人並み以上ではあるが、完璧ではないのだ。減らせるリスクは減らしておくにこしたことはない。

身体を拭こうと服に手をかけた時、その重さに気付いた。思っていたよりもかなり多く、汗を吸い込んでいたらしい。着替え終えれば、水分を補給せねばなるまい。

(……しまった)

冷蔵庫を開けると、中はほぼ空。飲料水の類にあつてはひとつもない。私もシャルロットもあまり冷蔵庫には物を入れないため、確認を疎かにしていた。水だけなら部屋のキッチンでいくらでも補給出来るが、しかしこの汗だ。水分以外の物も大量に失われているだろう。

(……仕方ない)

着替えを終え肩掛<sup>ストール</sup>けを羽織り、部屋を出る。消灯時間中の I S 学園は、普段の喧騒が嘘のように静まり返っていた。先を見渡せない真っ暗な廊下。左右に並ぶ閉じられた扉。隅々まで清掃が行き届いたその場所が、いつか見た監獄に重なる。

……くだらない。こんなものはただの妄想だ。ここは監獄などとは比べ物にならないほど上質で、清潔で、空気が澄んでいるというのに。

(……情けない)

昨日の無人機襲撃事件。その後、私が告げたドイツの罪。全てをさらけ出し、心は一旦落ち着いたのかもしれない。だがその後、深く深く落ち込んで行っているのが、自分でも分かる。

……ここまで参ってしまうとは。私は、なんて弱いのだろう。

(……ふう)

寮内の様子を極力見ないようにしながら、どうにかラウンジにたどり着く。当然ながら、そこに人影はない。天窓のガラスから、僅かに欠けた月が覗く。おかげで照明が落ちていても、視界に難儀することはなかった。

私は寮生たちの歓談用にしつらえられたソファやテーブルを迂回し、隅に置かれた自動販売機へと向かう。最低限の灯りだけをともすその機械の中では、十代半ばから後半の少女たちを対象とした様々な

ジュースに交ざり、一流スポーツマンたちが愛用するドリンクが控えめな存在感を放っていた。

人体が水分と共に消費するあらゆる物質を効率的に補給出来る一品だ。味も申し分ない。ストイックに上を目指す者も多いこの学園では、売り切れになることも珍しくはないそれだが——幸運にも、まだ残っているようだ。

「……………む」

だが、コインを投入しようとして懐を探ったところで、ようやく気付いた。…………財布を部屋に忘れてきた。初歩的で、なんとも情けないミスだ。自分を嗤うほどの気力もなく、乾いて粘つく口内で舌打ちをして、財布を取りに戻ろうと振り返ると。

「……………あ」

「うん……………」

そこには。見慣れないが知らないわけでもない顔があった。

「……………どうした、こんな時間に」

「え、えと……………それは、ボーデヴィツヒさんにも……………言えると思う……………」

「ふん……………まったく、その通りだな」

私と更識簪は、並んでソファに腰かけていた。私は月を見上げて、簪は手に持ったココアを見つめながら。

「……………眠れなくてな」

「……………わ、私も……………」

「…………………………」

ちらと簪を見ると、その細い肩は小さく震えていた。……………確か、簪にとっては今回の事件が初のIS戦だった筈。模擬戦すら経験したことのない身で、いきなりの実戦——それもアクシデントによる、更に加えればあれほど大規模な戦闘だ。身体に残る興奮と恐怖を鎮めるには、まだまだ時間が必要だろう。



「……………」

「……………」

簪は黙ったまま、ちびりちびりとココアを飲んでいる。私も何を言えればいいのか分からないまま、手にしたスポーツドリンクのボトルを傾けた。

そして、今更になつて気づく。この札をまだ言っていなかったことに。

「……………」

「……………」

「このドリンクだ。すぐ言うべきだったのだが……………」  
「どうやら、自分でも思っていた以上に混乱しているらしい」

「え、あ……………」

そう。今私が飲んでいるスポーツドリンクは、振り返った先に居た簪が、気を利かせて買ってくれた物だ。無論、後で代金は払うつもりだが、部屋とここを往復するのは今の私にとっては重労働なので、大いに助かった。

そしてその簪はというと、自分の分の飲物を買ってソファに座つたので、こうして私もそれに倣つたという形である。

「……………」

「……………」

「た、戦う、のは……………」

「……………」

簪の問いに、私はしばし考えた。

戦うことが、怖くはないのか。その答えは、正直に言えば――

「……………」

「……………」

「私は、きつと……………」  
「本当の意味で、戦つたことは、ないのだろうか」

今まで、いくつもの任務をこなしてきた。命の遣り取りも、幾度となくあった。

だが私は、戦っていたわけではないのだ。ただ、仕事をしていただ

け。機械が、与えられたプログラム通りに動くように。

「この学園に来てから、多くを学んだ。戦うということは、単に敵を倒すことではない。お互いの目的や、意志や……夢を、ぶつけ合うことだ。……私は、そのどれもを持っていかなかった。ただ言われた通り、与えられた命令をこなしていただけ。そんなのは、わざわざ人がやる必要などない」

「……………」

「ああ、そうさ。私は——兵士ですら、なかつたんだ」

今ようやく、それが分かった。私は、ラウラ・ボーデヴィツヒは、正しく兵器だったのだ。だから、兵器としてあり得ない感情を持った途端、こうも弱くなってしまった。

だから、それを自覚した途端——身動きひとつ、とれなくなってしまうた。

「……更識簪」

「……か、簪で、いい……」

「……簪。教えてくれ」

その私に比べて、この少女はどうだ。

簪は、ずっと悩み続けてきた。迷い、躊躇い、躓き、それでも歩き続け、ついにはひとつ、夢を叶えた。他人から見れば、とても小さな、些細な夢かもしれないが——それでも確かに、簪は、「戦って」いたのだ。

私などよりも、遥かに強い。人として、比べるのも失礼なほどに。

「私はただ、与えられた目的を達成すればそれでよかった。どれだけ困難な目的だろうと、与えられさえすれば、それでよかったんだ。そのため力や、知識や、技能は、とうに叩き込まれていたから」

「……………」

「だが……その目的自体を、自分で探さなければならなくなった。それを探るのが人生だと言われてしまった。……どうすればいい？

私はそれを探す手段を、何ひとつとして、教えられていないんだ」

「……………」

まるで禅問答だ。それも、ひどく低俗な。我ながらそう思った。

だがそんな私の問いにも、簪は真剣に考え込んでいた。根が真面目なのだろう、私はわけの分からない罪悪感に苛まれて、発言を撤回しようとした。

その直前に、簪は私を見て、答える。

「別に……さ、探さなくても、いいんじゃないかな……ないかな……？」  
「……なに？」

何を言われたのか理解出来ず、そんな声を発してしまった。機嫌を損ねたとしても思ったのだろうか、簪は必死に弁解を始める。

「じ、自分が何をしたいのか、なんて……自分でも、わからないよ。わからなくても……ただじっとしてると、ことは……それも、ない……と、思う……。いつの間にか、何かに、手を付けてたり……考えごと、してたり……それを、やりたいって、思ってるわけでもないのに……」

「……………」  
言いたいことは分かっているのに、上手く言葉に出来ない。そんな風に、簪はたどたどしく、しかし真摯に話し続ける。

「私も……ずっと、わかっていなかったの……私が、やりたいこと。でも……その時の私は、周りからなんて言われても……打鉄式式を、完成させようとしてた……。失敗するのが怖かったのに……毎日が、苦痛でしかなくて……楽しくなんか、全然なかったのに……それでも、毎日、毎日」

手にしたココアに目を落とす。俯いてはいるが、簪からは、言葉では言い表せない強い何かを感じた。

「なんでこんなことしてるんだろう、って……何回も、思ったよ。……私は、打鉄式式を完成させたいのかな……？ それとも、お姉ちゃんに追いつきたいのかな……？ ……でも、どっちも違う、気がして……」

簪の姉。更識楯無。才気に溢れ人望があり、歳若くして大国ロシアの力の象徴となった、偉大な人物。あのおちやらけたキャラクターからは想像しがたいが、彼女は確かに、世界中からエリートが集まるこのIS学園において、最強足り得る人物なのだ。

その楯無と姉妹というだけで、簪が背負ったプレッシャーは余人に計り知れるものではないだろう。

「……ううん。違ったわけじゃ、なくて……なんて言うのかな……。それは、手段であって……目的じゃ、なかったの」

偉大な——偉大過ぎる姉。そんな姉の姿を見続け、そんな姉と比べられ続けながら育った簪。

更識楯無の存在は、更識簪の心にどれほどの影を落としたのだろう。その人生を、どれほど狂わせたのだろう。少なくとも、以前の簪は楯無に苦手意識を持ち、接触を避けていた。

……だが、それでも。

「私は、打鉄式を完成させて、お姉ちゃんに追いついて……お姉ちゃんも、また昔見たいに、話したかったんだ」

それでも。

簪にとつて、楯無はたったひとりの姉なのだ。

「ま、まあ……本当は、私が勝手に、そうしないとお姉ちゃんと話せないって、思ってただけで……全然、そんなことは、なかったんだけど……」

簪はさらに俯いて、ココアの缶をくるくる回す。気恥ずかしいのか、僅かに顔を背けているようにも見えた。

「……ふ」

「わ、笑わないでっ……ほしい……」

「……ああ。すまない」

……なんとなく。どことなく、この少女とは、自分と似たところがあるように思えた。

小さな殻に閉じこもり、僅かな隙間から見える光だけを求めて、必死にあがき続けた。殻は固く、自分は非力で、いくら力を込めたところでびくともしない。それでも、正体のない恐怖に突き動かされて、もがくことをやめなかった。

……なんのことはない。ただ一言、声を発すればよかったのだ。見えていなかっただけで、周りにはこうも、お人よしが集まっているのだから。

「……あの、だから、ボーデヴィツヒさんも」

「ラウラだ」

「え……？」

「ラウラでいい、簪」

「……ラウラ、さんも」

「さん付けもいらん」

「……ラウラも」

簪が、私を見る。その眼には迷いが、悩みがあり、先を見通せない不安がある。

そして、それでも進もうという、強い意志がある。

「……ラウラも。いつかきつと、見つかるよ。自分の目的……自分のやりたいこと。……ううん。本当はもう、見つかつてるのかもしれない……自分で、気づいてないだけで」

「……そうか」

ああ、まったく。私は、本当に弱く、愚かだ。歳の同じ少女に、こ  
うも大きく離されている。

……ならば、追いかければいいだけのことだ。

「……ありがとう、簪。少し、軽くなった」

「……えつと、……こちらこそ、話を聞いてくれて、ありがとう……」  
お互いに礼を言つて、ソファから立ち上がる。水分を補給した身体にはある程度の力が戻り、足取りも確かなものになった。また悪夢を見るかもしれないが——きつと、耐えられるだろう。

「もう寝よう。さすがに遅くなつてしまった、これ以上は明日の……  
いや、もう今日か。授業に差し支える」

「……そう、だね……ふあ……」

小さくあくびをする簪。緊張は幾分かほぐれたようだ。目を眠そ  
うに瞬かせながら私に並び、歩く。

「……ところで、私はいまいち娯楽に乏しくてな……簪は、気分が落ち  
込んだ時などはどうしているのだ？」

「……私は……アニメ観たり……」

「アニメか……部下に好きな者がいたな。おすすめはあるか？」

「……今、面白いのは……」「ここたま！」「とか……」  
「……ここたま？」

「うん……主人公の女の子がね——」

部屋までの帰り道。私と簪は、他愛のない会話を楽しんだ。  
それはまるで、普通の少女の、普通の友人のように——

## 第96話 休息

「あうう。あー。ウエー……」

「……………」

IS学園のとある休日。整備室にて。

本音が呻き声(?)を漏らしながら、コンソールに突っ伏した。その画面に表示されているのは、己の専用機、朧月の部品パーツの情報だ。無数に並ぶ文字列と精巧なワイヤーフレームをひとつひとつ点検していく。

「…………ぬおおおおく…………ふぬううう……………」

「……………」

次第に、本音の呻き声は大きくなっていく。眠そうに細められた両目の間で、盛大に皺が浮き上がる。年頃の少女がしていい顔ではなかった。

「ぬわー…………ダメだね、これは」

「…………駄目か…………」

腰に手を当て、目の前に屹立する銀色の装甲を見上げる。己の身から離れた状態で展開された朧月は、様々な機器に囲まれ全身をコードに繋がれ、本音の「診察」を受けていた。先日の無人機との戦闘で傷ついた朧月だが、自己修復機能での直りがどうにも遅いため、こうして徹底的に調べているのだ。

結果としては、朧月のダメージは想像以上に深刻だということが分かった。破損直後では、本音曰く「ノイズ」がひどく良く分からなかったらしいが、ある程度落ち着いてから診たところ「すごくヤバイ」状態になっていたのだ。

「応急処置なら、十六夜でもできるけど。これはもう、ほとんどのパーツが危ないくらい劣化しちゃってるから…………ちやんと如月重工メイカーに持って行って、オーバーホールしないと……………」

「…………むう…………」

不満な顔をして息を吐いて見せるが、本音にはまるで効果がなかった。コンソールにべちゃりと突っ伏し、半目で己を見上げて来

る。

「…………いのちち〜?」

「……………」

本音の視線に、思わず目を逸らす。

朧月のパーツがここまで劣化した理由……それは己の戦い方に他ならない。

同級生の専用機持ちたち（ラウラは除くが）に比べ、技術的に劣つてはいないという自負はある。だが皆から特攻と揶揄される己の基本戦術は、機体に甚大な消耗を強いるのだ。

……消耗するのは事実だから仕方がないとして、特攻とは失礼な。最低限の危機回避を前提として戦っているというのに。そもそも出来るだけ少ないダメージで勝とうという発想が軟弱なのだ。強敵を相手にすれば被弾は必定、ならば無理に避けようとしてもジリ貧になるだけだ。むしろ歯を食いしばって攻撃に耐え、反撃に必殺の一撃を

「いのちちい〜?」

「…………すまん……………」

本音の目が凶悪な光を放った。こういう時は逆らってはいけない。同部屋である己は良く知っている。

「んも〜…………いのちちは〜、無茶しすぎなんだよう……………」

「……………すまん……………」

悲しげな目で己を睨む本音に、そうとしか言えなくなる。機体に負担が掛かると言うことは、即ち操縦者たる己に負担が掛かる事と同義だ。戦うたびどこかしらに傷を負う己を、本音はいつも叱りつける。怒るでもなく、責めるでもなく。

申し訳ないとは思っている。本音の言っていることは正しく、己もそれを理解している。それでも従わないのだから、まるで反抗期の子供だ。だと言うのに、こうして本音を頼っているのだから始末が悪い。

……………まったく。本当に子どもだ。いつまで経っても。

「パーツはどうにもならないからしょうがないとして〜…………データ吸



い出しといてく……あう、警告がこんなにいっぱい……これでよく動いてくれたねく、朧月……」

「……………」

顔を起こしコンソールを素早く操作する本音の横顔は真剣そのものだ。どうやらパーツについては早々に諦め、朧月の各種データを十六夜にコピーしているようだ。次の戦闘に活かせるよう、入念に確認するつもりなのだろう。

「これは……これはひどいよく、いのちちく。朧月がぼろぼろだよく……おぼろづきなだけに」

「……………すまん……………」

……聡い娘だ。聡く、優しく、そして強い娘だ。いつものように眠そうな目の下には、いつもにはない深い隈が刻まれている。昨夜、良く眠れなかったのだろう。それでも本音は、いつにもまして眠たげにするでもなく、変に気を張るのでもなく、いつも通りに話し、振る舞っている。

ラウラの語った話が、気にならぬ筈はあるまい。抉り取られた己の左腕が、非人道的な研究に使われていた。表には出さずともいつも己の左腕を気にかけていた本音には、余りにも重かったのだろう。夜半になさされる本音の姿は、見たことがなかった。

……それでも。本音は、いつもと変わらぬ様子で、己に語りかけている。それが、己には有り難かった。

「んんく……やっぱり、ここじゃこれ以上は無理だねく。自己修復機能で時間かけて直しても、完全には直らないよく。社長さんに連絡してく、如月重工で直してもらおう？」

「……………仕方ない、か……………」

その本音がここでは無理だと言うのなら、ここでは無理なのだ。十六夜の能力とIS自体の自己修復機能は極めて優秀だが、限界がある。人間の治癒力と同じで、放っておいても直る傷、適切な処置が必要な傷、破損箇所自体を取り換えなければならぬ傷があるのだ。今回の場合は、コア以外のパーツはほぼ全て取り換えることになるだろう。

……少々のパーツ交換ならばともかく、これだけ大規模となると、コアに馴染ませるには時間がかかりそうだ。パーツ交換そのものは、如月重工ならば一日で終わるのだろうか。

「まあ、いのうちもケガしてるし……ちようどいいんじゃないかな。ね、しばらくお休み、ということでも」

「……そうだな……」

その言葉には、内容以上に様々な思いが籠められていた。本音はいつも、己のことを心配していて……それでいて、己のやること、やりたいことに、必要以上の苦言を呈することはなかった。こうしていつも、控えめに、己が暴走し過ぎないように注意する。

……甘えているな、己は。

「それじゃ、さっそく連絡するね」

「……いや……」

「？」

袖の中から携帯電話を取り出した本音を止めて、懐から自分の携帯電話を取り出した。こんなことまで本音に任せるわけにはいかない。社長宛てに電話——ではなく、メールを送る。無礼の極みだが、社長に関して言えばお互い様だ。そもあの人に対して礼儀がどうのと言うのは無意味だと思う。

とにかく、如月重工社長のアドレスにメールを送る。文面は簡潔に。

f r o m : 井上 真改

t o : 如月重工社長

s u b :

本文：隼月 修理必要

回収求む

……送信。これでよし。横から携帯電話の画面を覗き込んだ本音が妙な顔をしているが無視する。

さて。これで己の今日の予定は、全て取り消しとなった。そして改めて、この後に備える必要が出来た。

如月重工ならば、今日中にでも隼月の受け入れ準備を整え、己を呼

び出すだろう。外出、そして専用機を預けるための手続きをしておかなければ――

「いやあ、井上君！　ご機嫌いかがかね？」

「……………」

……己が社長に連絡したのは昼前だった筈だ。その後諸々の手続きを済ませ、本音と昼食を食べ、本音が更識姉妹と食後のティータイムでもしようと提案したのとほぼ同時に、己宛ての来客を告げる学園内アナウンスが流れた。

本音と二人で、あまりの対応の速さに呆れるばかりだ。手続きを優先しておいて助かった。嫌な予感はあるものだな。

そのような経緯があり、今こうして応接室に入った己たちを、如月社長が満面の笑顔で迎えたのである。

「朧月がぼろぼろなんだって？　うんうん、よく使ってくれてるみたいだねえ、僕も嬉しいよ。よしっ、それじゃあ僕が預かるう！」

「……預かる…………？」

「大丈夫、安心してくれていいよ。明日にはネジのひとつひとつまで全部新品にして持つてくるよー！」

「……そうではなく……………」

「うん？」

「……貴方が…………？」

「うん、そうだよ？」

「……………」

社長が自分で運ぶ？　待機状態で、所有者から離れた専用機を？

「……移動手段は…………？」

「僕の車さ。秘書の目を逃れて会社から抜け出してきたからねえ、会社の車を使うわけにはいかなかったし、他の社員を誘う暇もなかったし」

「……………」

しかも一人か。運ぶ物の重要性を理解して……はいるのだろうか。  
「社長〜。一人で大丈夫なんですか〜？」

「ふむ、布仏君の心配はもつともだ。けれど、僕も考えなしに来たわけではないんだよ」

「へえ〜」

「……………」

……本当か？

「いいかい、お二人さん。ISは確かに、各国が極秘裏に、テロリストが公然と狙っている代物だ。共通することは、そのどちらもが、容易く奪えはしないと理解していることさ」

「ほえ〜」

「……………」

「彼らはこのIS学園を常に監視し、襲撃のタイミングを計っている。お互いに牽制し合いながらね。そんな緊張状態の真ただ中を、無防備な車が一台、ISを載せて通ったところで、かえって身動き取れないよ。多分」

「……………」

……多分。他にやりようはいくらでもあるだろうに、わざわざそんな薄い可能性に命を懸けるのか……。

「それに、いくら運んでいる側の戦力がゼロでも、実際に襲うとなれば相応の準備は必要だよ。ヘタに戦力を整えて敵に悟られるよりも、敵が準備する前に一気に駆け抜けるっていうのは、なかなかいい案だと思うわないかい？」

「おお〜」

「……………」

言わんとしていることは分からんでもないが。それならばいつそ、己が隴月で如月重工まで飛んで行けば済むのではないか？

「うふふ……それに、僕の車がただの車だと思っっているのかい？」

「いえまったく〜」

「その通り！ それではいまだ不安げな顔をしている井上君に、改造に改造を繰り返した我が愛車の雄姿、ご覧に入れましょう！」

「それって違法改Z」

「さあ行こう！ ほら！ ほらほら！」

「お、おおくー！」

「……………」

……………持つて行くのなら、早く持つて行つてくれないだろうか。

「……………」

来客用駐車場に来た己と本音は、そこに止められた大型貨物車をな  
んとも言えない心持ちで見上げていた。

ベースはおそらく、いずれかの25トントラックだろう。その車体  
とコンテナにこれでもかと装甲板が張り付けられている。タイヤも  
防弾、この分ならエンジンも尋常なモノではあるまい。文字通りのモ  
ンスターマシンだ。

それはいい。百歩譲つて、それはまだいいとしよう。そんなことよ  
りも遥かに恐ろしい、決して目を逸らすことの出来ない事がある。

……………ガサ、ゴソ……………ガタガタ……………ガタツ

「……………」

……………コンテナが不規則に揺れている……………中に何が入っているんだ  
？

……………キイ……………

「!？」

僅かに聞こえた鳴き声のような音に、本音が慌てて己の後ろに隠れ  
る。

間違いない。この中身は、あのダニに似た生物兵器だ。

……………街中になんというものを持ち出しているんだ、この人は……………！  
「ご覧の通り！ この車はとても頑丈だ。歩兵用の武器じゃあ有効な  
ダメージを与えられない。街中で戦車や戦闘ヘリを使うのは難しい。  
ISを出されたらさすがにどうしようもないけれど、ISはそう簡単  
には使えない。つまり我が愛車を止めるのは容易ではないというこ

とぎ—」

「そ……そーですぬ〜……」

「……………」

そんなことは見れば分かる。己たちが知りたいことは別にある。

「それに、いざとなったらコンテナに満載されている網田チルドレンを散布すれば」

「散布!? い、今散布って言いました!？」

「……散布っ……………」

本音が思わず早口（本音にしては）になり、己も戦慄した。

散布……あの化け物を？

「……本気……………」

「当たり前じゃないか」

「……………正気……………」

「そんなわけないじゃないか。正気じゃあウチの社長は務まらないよ」

「……………」

納得した。したくはなかったがせざるを得なかった。

悲しいことに、己はこの手の人種と関わることが多いようだ。今は如月社長、かつては所属していた企業の連中。その後の仲間たちにも、似たような者が何人か——いや。半分以上は狂っていたな……。

「というわけで、井上君の朧月は、僕が責任を持って社まで運ぶよ。社の防備は強固だからね、それは君もよく知っているだろう？」

「……………はい……………」

「社にたどり着けばもう安心さ。更なるアップグレードを重ねた我が社を攻め落とすには、本物の軍隊が要る。どれだけ馬鹿な国でも、イチ一般企業相手に本気で軍隊なんか送らないさ」

そう言つて笑う如月社長。……まさか、安心させようとしているのか？ 己を？ 武器を——愛刀を、一時とは言え手放すから？

……その程度で心乱れると思われていたとは、心外だ。だが不思議と、悪い気はしない。己は、自分でも気が付かないうちに、如月社長を「仲間」と思っていたのだろうか。頼つてはいたものの、心を許し

たつもりはなかったのだが。

「と、いうわけで。さあ、井上君。僕に朧月を渡してくれたまえ」

「……応……」

首から提げた銀の鎖を外し、そこに通された銀の指輪を見る。

真昼の明るい陽射しの下で、月のように静かに輝く指輪。思えば、こいつには随分と無茶をさせて来た。戦うたび損傷しながら、己の要求以上の働きをしてくれた。己の身体だけでなく、心までも守ってくれた。

その戦友が、傷を癒すために、己の下を離れる。ならば不安など見せず、笑顔で見送らねばなるまい。

「……………」

何も言わずに指輪を眺める己に、何かを感じたのだろうか。本音も、社長も何も言わない。だがその顔は、柔らかな表情を浮かべていた。

「……………」

いつかこいつに指でも通してやれば、それまでの労いになるだろうか？ それともこいつは、そんな事は望まず、ただ戦うことを求めているだろうか。

……どちらにせよ、この寡黙な相棒に、今しばらくの休息を。不在の間に何かあれば、己自身の力で乗り越えて見せよう。戻って来たら、またこき使ってやるから——しっかりと、静養してこい。

「……よろしく……お願いします……」

「お願いされた。任せてくれたまえよ」

「……………」

頷き、如月社長に朧月を渡す。己の手を離れる瞬間、銀の指輪は寂し気に輝いた。

朧月を受け取った如月社長が、爆音じみた排気音を轟かせるトラックを運転して走り去るのを見送ってから、己と本音は整備室へと戻つ

た。朧月のデータをもう一度解析し、シミュレータに反映させるためだ。訓練が出来ない以上、他にやることもない。

「……………」

「いのつち〜。やっぱり、不安〜?」

「……………少し……………」

本音が言う不安とは、朧月を如月社長に任せただけではない。その間、己は丸腰でいなければならないことについてだ。

どういうわけか、IS学園は立て続けに、事件が発生するか襲撃を受けている。たった一日とはいえ、ISなしで過ごすのは少々不安だ。

とは言っても、例の無人機部隊襲撃から一週間も経っていない。流石にそこまで早く何かが起こるとは考えたくはないが、事件がこちらの事情や心情に配慮してくれるわけもない。己は専用機持ちだが国家代表候補生ではないという微妙な立場であり、他の専用機持ちたちのように国の支援は受けられない。如月重工もあくまで企業であり、出来る支援はIS関連に限られる。そんな制限を気にするような人たちではないが、己の方から断らねばなるまい。

……確か他の専用機持ちも、機体の損傷が激しく自己修復が済むまで展開を禁止されていた筈。己ほどには無茶をしていないからか、日頃からまめに部品交換をしていたからか、オーバーホールの必要はないようだが。

ともかく皆、今はISを展開出来ない。正確に言えば、休眠状態のISを起動してから展開する必要があるため、少し時間がかかる。故に、緊急時にお互いの展開の隙を埋めるため、二人一組での行動を義務付けられている。

……己にその義務はないが、便乗させてもらうか。ナイフの一振りでも貸してもらえれば、それこそ兵器が相手でもなければ撃退出来る自信はある。誰かを見かけたら行動を共に——

「!?!」

——ガシャン。

そんな音が鳴り、整備室の電灯が消える。コンソールも沈黙し、整



備室内に居た生徒たちが俄かに騒ぎ出す。

「え、うそ、停電っ?」

「そんな、IS学園で……?」

「ああーっ! 私のデータがあー!」

「い、いのっち……」

「……」

灯りが落ちると同時、整備室の出入り口は自動的に開く。しかし廊下の電灯も点いておらず、窓も防護シャッターが閉じ日光すら入らない。

非常電源にも切り替わらない。呆れ果て、思わずため息が漏れた。またか、と。そして思考を切り替える。

——緊急事態。

「……本音……」

声を掛けてから、本音の手を取る。整備室も廊下も暗闇で、よほど夜目の利く者でなければ目の前を見るにも苦労するだろう。本音では歩くこともままならない。

「……出るぞ……」

「う、うん……」

まずは状況を把握しないことには始まらない。真っ先にやるべきことはなんだ? 合流だ。本音の手を引き廊下に出た己は、目を凝らして進みながら耳を澄ます。周囲のざわめきに交ざり、聞き慣れた声が聞こえた。

「……まっ……く、次か……へと!」

「とに……織……の……ところ……に行こ……」

(……鈴と、シャルか……)

幸い、近い。この曲がり角の先に——

「わ、シン!」

「本音も! ケガはない?」

「平気だよ〜!」

「……どこへ……?」

お互いの無事の確認もそこそこに、二人に問う。二人は己たちとは

違い、明確な目的地があるようだった。なにかしらの指令を受けたのかもしれない。

「あー、えーつと……シンならいいか！」

「織斑先生から連絡があったんだ。学園内に残っている専用機持ちは、全員集合するようにつて——」

専用機持ちへの指令……専用機の回線に直接連絡したのか。道理で、己には届かないわけだ。

千冬さんは既に、ある程度事態を把握しているのだろうか。呼び出したということは、何らかの対策がある筈だ。果たしてISのない己がどれだけ役に立つかは分からないが、ただじつとしているというのも性に合わん。

己はシャルが告げた場所へ、共に向かうことにした。

「——地下の、オペレーションルームに」

## 第97話 襲撃

そろそろ暑さも和らぎ始め、うっとうしいばかりだった日差しも、まあ我慢できる程度にはなってきた。特に今日は一段と涼しく、外を出歩くだけで全身汗だくになることもない。

こんな日は友達と街に繰り出して、流行りの服やアクセサリを見に行ったりパンチングマシンに一夏への怒りを叩きつけたりするのがいつものあたしだけど、今日はそんな気分にはなれなかった。

……まあ、気分の問題だけではないのだけれども。

「ああー、もー。退屈ねえ。授業はないし、訓練もできないし、外出は禁止だし……」

「まあ、たまにはゆっくり休むのも必要だよ。僕たちにも、ISにも」  
普段なら丸一日空いている休日は、徹底的に遊び尽くすか訓練に明け暮れるかのどちらかだけど、今はそのどちらもできない。この前の事件で専用機に多大なダメージを負ったあたりからは、修復が完了するまでISの展開を禁止されてしまったからだ。機能の低下した機体で動くと、パイロットにも機体にも変なクセがつくから、それはしようがない。ISを奪われないように、守りやすい学園内から出ないように、と命じるのもわかる。

それでも、退屈なものは退屈だ。十代乙女のバイタリティは、そう簡単に発散し切れるほど生易しくはないのだ。……いつもなら。

「まったく、いい迷惑よねえ。どこの誰かは知らないけど、余計なことしてくれたもんだわ」

「あはは……」

暇つぶしに学園内をぶらつきながら愚痴をこぼすあたしの隣では、輝くような金髪を持つ中性的な美少女——シャルロット・デユノアが苦笑を浮かべていた。

「アリーナの復旧にはまだ少しかかりそうだし、その分グラウンドも体育館も混んでるし……まったく、せつかくの休日、せつかくの良い天気なんだから、外に遊びに行きなさいよ、年頃の女の子は」

「言ってることがおじさんみたいだよ、鈴」

そうは言うものの、休日でありながら、そしてアリーナが使えないにも関わらず、これだけの人数が学園に残っている理由は、あたしにも大体察しがついている。

先日の、24機ものISによる大規模襲撃。今までにもその兆候はありながら、「まさか」とその可能性を必死に否定し続けてきた生徒たちに、残酷に突きつけられた現実。誰も表立って口にすることはないけれど、心の中では誰もが確信しているだろう。

——IS学園は、狙われている。強大で、得体の知れない勢力に。

「……ああー、もー。退屈ねえ」

「良いことだよ、鈴」

命を脅かされ、破壊の力を目の当たりにし。心折れ、諦めた子も少なからずいた。今年のIS学園における自主退学者数は、ぶつちぎりで過去最大だ。

逆に、残った者たちにとっては、今年は過去最大のチャンスだった。なにせ望んでも得られなかった実戦——本当の意味での実戦の機会が、得られるかもしれないんだから。

ISは「力」の象徴、最も強いISを持つ国が、軍事バランスの頂点に立つ。そのパイロットに与えられる富と栄誉は、普通に生活していたんじや絶対に手に入らない。

じゃあ、優秀なパイロットになるにはどうすればいい？ 訓練は大事だし、勉強も劣らず大事だ。けれどそのふたつを合わせても、実戦経験には遠く及ばない。その経験が、得られるかもしれない。実績を上げるにしても能力を高めるにしても、今のIS学園の状況はまさにもってこいだ。

いつかまた、襲撃を受けるかもしれない。その時、自分がISを装着していたら？ 戦える者が自分しかいなかったら？ 有り得ない話じゃない。その「もしも」に備えて、みんな今まで以上に訓練している。

……だからあたしも、今は我慢だ。しっかりと休んで、専用機を直して、一日でも早く戦えるようにしないと。

「……にしても、専用機展開できないのがこんなに不安だなんて。

ちよつと前まではそれが普通だったのに」

「一度専用機に慣れちゃうとね……一体感とか安心感とか、すごいから。僕もなんだか、身体の一部がなくなっちゃったみたい感じるよ」

「……身体の一部、ね」

「あ……」

シャルロットが、しまった、というような顔をした。ちなみにあたしもしていた。どちらかと言えば、今のはあたしが流すべきだった。シャルロットはただ感想を言っただけなんだから。あたしが変に過敏になってしまってるんだ。

「……ごめん」

「いや、アンタは悪くないでしょ。今のはむしろあたしが……」

慌ててフォローしようとするけど、シャルロットはますます落ち込むばかり。普段明るく前向きなシャルロットのそんな様子は、見ているこつちが辛くなる。お互いこの前のことが相当効いているみたいだ。

「……ええい！ やめよ、ヤメ！ こんなジメジメうじうじ、あたしららしくないわ！」

うがーつ、とオーバーアクションで、暗い空気を無理矢理に吹き飛ばす。空元気もいいところだけど、もううんざりしていたのも事実だ。

そう。先日の無人機部隊の襲撃の後、語られたこと。シンの左腕の行方と、行われていた非人道的研究。当然箝口令が敷かれたあの話は、あたしたちの精神にけつこうなダメージを与えた。あれからみんな、様子がおかしい。平静を装ってはいるけど、全然隠しきれていない。唯一いつも通りなのは……シンだけだ。

「あたしらがこんなでどうすんのよ！ シンが変わっちゃったわけじゃないのよ。今回もそうだし……左腕を失くした時だってそうだった。あたしはあの後すぐ引越しちゃって、辛い時に一緒に居られなかったけど……きつといつも通りだったわよ、アイツは」

怒りに……不甲斐ない自分への怒りに震えながら、言葉を吐き出

す。シャルロットは目をパチパチさせていた。

「アイツはあんなんだから、本当はどう思ってるのかなんてわかんないけど……それでもさ、少なくとも表には出してないじゃん。ならあたしたちがうだうだ言うのは筋違いでしょ。……しゃんとしないと」

「鈴……」

最後の方は、元気がなくなってしまった。でも言いたいことは伝わったと思う。何を言いたかったのかなんて、自分でもわからないけど。

「……そういうのはさ。みんな居る時に言おうよ」

「う、うっさいわね！　しょうがないでしょ、今言いたくなっただか  
らー！」

シャルロットが、ようやく少し笑った。苦笑いとか無理な笑顔とかではなく、普通の笑顔だ。……うん。やっぱり女の子は、笑ってないと。

「鈴ってさ。……すごいよね。良い人だし」

「……うっさいわね。ホントは腸煮えくり返ってるのよ、あたしだつて」

「ふふっ……」

「むう……」

肩を揺らして笑うシャルロット。こいつが女の子だつてことはとっくにみんな知ってるけど、顔が顔なのでやっぱり見とれてしま  
う。ずるい。

「……まあ……ぶっちゃけシンのことはあんまり心配してないのよ。さつきも言っただけど、あんなやつだし。……問題は、一夏とラウラと……」

「……あと、本音……かな。……少し、やつれてたよね」

「あの子は優し過ぎるのよ。普段おちやらけてるクセに……こういう時ばっかり気い遣っちゃってさ」

「うん……」

ラウラと一夏は、ある意味当事者だからともかく……本音には何も責任はないのに。なのにあの子は思い詰めて、食事は喉を通ってない

みたいだし、きっと夜も眠れていない。

……本当に。本音は、優し過ぎる。そんなものまで、背負わなくてもいいのに。あたしたちに、分けてくれていいのに。

「鈴も……あまり無理はしないでね」

「しないわよ。性に合わないもの、そういうの」

「あはは……」

それが強がりだっていうことは、多分見抜かれてる。それでもシャルロットは、何も言わずに笑ってくれてる。……本当に。優し過ぎよね、みんな。

——ビーー！　ビーー！——

「!?」

「え、これは……!?」

突然鳴り響いた警報。一瞬遅れて、廊下のシャッターが降りる。外部からの物理的な攻撃を遮断するためのシャッターだ。次いで、明かりが落ちる。そこかしこから聞こえるざわつきに、小さな悲鳴。

あたしとシャルロットは素早く背中合わせになって、学園から貸し与えられた拳銃を抜く。電灯は消えたまま。分厚いシャッターのせいで日光もない。ほぼ完全な暗闇だ。夜間戦闘の訓練を受けているあたしでも、そう遠くまでは見えない。一般の生徒たちならなおさらだろう。

「……………」

「……………」

IS学園で停電？　あり得ない話じゃないけど、そこまで楽観的にはなれない。まず間違いなく、攻撃だ。

二秒経過。電力の復旧はなし。非常電源も止められた？　よほど優秀なハッカーか、馬鹿みたいに高度なウィルスか、もしくは学園に内通者がいるか。可能性はいくつかあるけど、今はそれを検討する時じゃない。あたしは甲龍をローエネルギーモードで起動し、視界を暗視モードに切り替える。

「…………シャルロット」

「うん」

シャルロットがポケットからスティックライトを取り出し、スイッチを押した。とりあえず、すぐに突入してくることはないみたいだ。でなくちや危なくて、暗闇でこんなものは使えない。いい的だ。

「みなさん！ こつちに集まって！ 教室に入つて、扉を全て閉めてください！」

廊下のシャッターも頑丈だけど、教室の守りはそれ以上。有事の際には、簡易シエルターとして使えるくらいだ。シャルロットの声とスティックライトの明かりで、辺りの生徒たちはある程度平静を取り戻した。誘導にしたがつて、静かに素早く、教室内へと移動していく。部外者がいたらこうは行かないだろう、日頃の訓練の成果だ。

「じゃあ、あなたがこれを持って。他に生徒が来たら、IDを確認してから入れてあげてください」

「わ、わかった。でも、デユノアさんはどうするの？」

「僕は学園内を調べます。どこかで混乱が起きてるかもしれないから」

「でも、危ないわよ！」

「大丈夫。僕は国家代表候補生ですから。……僕を信じて、あなたはここでみんなを守っててください」

こつちが恥ずかしくなるようなセリフをさらりと言うのを背中で聞きながら、周囲を警戒する。こういう時、シャルロットの知名度と甘いマスクはなかなか効果的だ。ちらりと後ろを見れば、シャルロットからライトスティックを任された生徒はものすごくやる気に満ち溢れた顔をしていた。

教室のドアが閉められロックされたことを確認して、シャルロットはあたしのカバーに戻る。頼もしい友人に心の中で感謝。口ではまったく別のことを言う。

「次から次へと。休む暇もありやしない」

「みんなと合流しよう」

「近くに居るといいけど」

IS学園は広い。お互いがお互いに向けて移動したとしても、スタート地点によってはゴールまでそれなりに時間がかかる。こんな



状況じゃ一秒だって惜しい。そう考えながらチャンネルを開こうとした時、向こうから通信が送られてきた。

『全員、無事か?』

『箒。こっちは大丈夫よ。生徒を何人か、教室に避難させたところ。シャルロットもいるわ』

『こちらラウラだ。簪と合流した。周囲にも大きな混乱はない』

『セシリアは私と居る。……だれか真改と居る者は?』

誰も返事をしない。特に手ひどくやられていたシンの専用機は、ついさつきオーバーホールに出したばかりだ。シンの責任じゃないけど、間が悪い。

アイツはISなんかなくなたって、首を突っ込むに決まってるんだから。

『学園内に居る専用機持ちたちは全員集合。場所はマップを送信する。途中にある防壁は破壊を許可する』

プライベート・チャンネルに割り込んできた、冷静で厳格な声。千冬さんだ。直後に送られてきたマップが示すのは、存在は知っていたけど行ったことはなく、どこにあるのかもたまたま今知った場所だった。

「……オペレーションルーム?」

「そこに生徒を入れるなんて……それだけ緊急、てことかな」

数多ある学園の機密のひとつ。生徒はおろか、教師の中でも限られた者のみが立ち入りを許された場所。学園のシステムの中核。そこに生徒を集める? 悪夢みたいな冗談だ。こんな状況でもなければ鼻で笑ってやるところだ。

でも、現実としてここに来いと言われてしまった。なら行かなきゃならない。覚悟はとづくにできてる。あとは足を動かすだけ。

「あー、もー……次の休みは、一夏にスペシャルデラックスパフェをおごらせてやるっ!」

色々な怒りをこねくり回して一言にまとめ小声で吐き出し、あたしたちは移動を開始した。

「……それでは、状況を説明する」

合流した鈴とシャルの案内で地下にあるオペレーションルームとやらに移動した己と本音の姿に、待ち受けていた千冬さんは一瞬、眉をぴくりと動かしした。だが特に何も言わず、既に到着していた楯無会長に加え、箒、セシリア、ラウラ、簪が到着すると、普段よりもさらに厳しい顔で状況の説明を始めた。

「現在、IS学園はいずれかの勢力からハッキングを受け、システムのほぼ全てがダウンしている。ここは電力も含め完全に独立しているため無事だが、逆にここ以外は陥落したと言っつていい」

「ほほ、全て……」

誰かが茫然と呟く。そんな途方もないことが出来る者はそう多くはあるまい。恐らく、先日の襲撃部隊と同じ勢力だ。

「今のところ、生徒たちに被害は出ていません。安全を確認次第、他の先生方が救出に向かう予定です」

「だが当然、いつまでもこのままというわけにはいかん。現に今、この機に乗じて何者かが学園に突入、物理的な攻撃を仕掛けてきている。一刻も早い復旧が必要だ」

この機に乗じて、何者かが。その表現が意味するところは、その連中はハッキングとは直接関係のない者たち、つまりは別勢力ということだ。随分と動きの早いことだ。直近に潜伏し、監視していたか。

「なるほど。では我々は、その者たちを迎撃すれば——」

「いや、お前たちにはシステム侵入者を排除してもらおう」

「……え」

千冬さん、山田先生、楯無会長を除く全員が呆気にとられたような顔をする。それも仕方がないと言えば仕方がない。

「ですが、IS学園のシステムを乗っ取るような相手に、どうすれば……」

おずおずと手を挙げたのは箒だ。専用機持ちとして勉強してはいるが、彼女はハッキングだのプログラムだの方面は少々不得手としている。そうでなくても、IS学園のシステムの強固さは皆が知って

いるのだ。それを破る相手など、専門家でもない自分たちに敵う筈がない。攻撃部隊の迎撃でないのなら何のために呼ばれたのか、ということだろう。

「では、篠ノ之さん、鳳さん、オルコットさん、デュノアさん、ボーデヴィツヒさんは、アクセスルームへ移動してください。そこでISによる電腦ダイブを行い、侵入者の排除に当たってもらいます。更識簪さんと……あと布仏さんは、みなさんのサポートについてください」  
「……は？」

キョトンとする友人たち。無理もない、山田先生の言った言葉は、あまりにも予想外だったからだ。

「で、電腦ダイブ!？」

「それって、まさか、あの……?？」

「そうだ。ISを通じて、操縦者の精神を電腦世界に進入させる。理論上可能であることは知っている筈だ。ここの施設ではそれが出来る。アラスカ条約で規制されてはいるが、この状況下では許される」  
皆の混乱を無視し、千冬さんは続ける。だがまだ幾人かは、一体何を言っているのか、という顔で口を開閉していた。

「ちよ、ちよつと待つてください！ 確かに電腦ダイブのことは教わりましたし、それ自体に危険はないことも知っていますけど——」

「電腦ダイブ中は……操縦者は無防備……攻撃部隊がいるなら……危険かと……」

「そうですよ！ それに僕たち、実際にやったことは一度もないですし……」

口々に不満……というより不安を漏らすが、しかし千冬さんはそれらを一睨みで切り捨てた。誰も声を上げる者がいなくなったことを確認して、補足する。

「さきも言った通り、敵はIS学園のシステムを全て、それも瞬く間に攻め落とすような相手だ。まっとうなコンピュータではいくら揃えたところで歯が立たん。排除出来るとすれば、ISと、その力を引き出せる人間だけだ」

「う……」

「そして攻撃部隊については……私と山田先生、更識楯無……そして井上が食い止める」

千冬さんが一瞬、視線だけで己を見た。それはあまりにも短い間であり、己以外の者が気付いた様子はない。

「そ、そんな！ シンは今、ISが——」

「分かっている。だが呼ばれてもいないにも関わらずここに来た以上、相応の覚悟はあるだろう。実力的にも問題はない。このメンバーでまだ不安があるか？」

「……………」

「……………それでも、強制するつもりはない。井上、やれるか」

「……………無論……………」

最後の言葉は、ほんの僅かに、厳しさが薄れていた。教師として、そして世界最強として厳格であろうと努めてはいるが、それでも千冬さんは一人の人間であり、生徒を思いやる先生であり、弟を持つ姉なのだ。それを隠しきれない甘さも含め、己はこの人に全幅の信頼を置いている。断る理由などあろう筈もない。

「では、これを使い」

そう言つて、千冬さんは己に向け、一振りの刀を投げ渡した。……否、刀ではない。それは刀に似た形状の、IS用のブレードだ。その中でも比較的小型で、生身の人間にも振るえる代物。

受け取った己はその鞘を咥え鯉口を切り、刃を少し引き出す。少々重いが問題はない。IS用なのだから、強度も切れ味も十分だろう。だが……

「……………無粋……………」

「文句を言うな。今用意出来る刃物の中では、それが最も優れている」  
「……………」

己の視線で、何を言いたいのかが分かったのだろう。こんな波紋もなければしなりもないブレードは己の趣味には全く合わないのだが……しかし職人の手からなる一品物ならともかく、工業製品である兵器に文句を言つても仕方がない。それに刃物として優れていることは事実であり、そもこれから戦うというのに得物に粋を求めるのは我

が儘に過ぎる。

己は不満を呑み込み、引き出した刃を鞘に納め、制服のベルトに差した。そのまま柄に手をかけ、握りを確かめ、抜刀。手の中で回転させ柄を持ち替え、納刀。……ふむ。

「……悪くない……」

「現金なやつめ」

千冬さんは呆れたように苦笑し、それをすぐに引っ込める。そして凜とした声で、作戦開始を告げた。

「では、各員アクセスルームへ移動！ 電腦ダイブの準備に移れ！

作戦開始！」

「「「「は、はいっ！」「「「「」

何やら僅かに慌てた様子で返事をし、七人はアクセスルームに入って行った。その背中を見送ってから、確認する。

「……戦力……」

「歩兵六、パワードスーツ二機、IS一機。三部隊に分かれ、別々のルートで進攻している。それぞれのルート上で待ち構え、迎撃しろ」  
「割り当ては？」

楯無会長が、常の態度からは想像しがたい真剣さで問う。

「私と、打鉄を装備した山田先生でISを相手にする。更識はパワードスーツ、井上は歩兵だ」

「……己が」

「駄目だ」

ISを抑える、と言う前に、千冬さんが遮った。表情は厳しく、しかしその目には様々な感情が縋い交ぜに渦巻いている。

「……駄目だ。真改、お前には二度と、生身でISと戦うことは許さん。絶対に。絶対にだ」

「……………」

学園に生徒たちが取り残されている以上、外に出て迎え撃つという選択肢は論外だ。オペレーションルームがある地下におびき寄せられない。戦場となる通路は当然狭く、ISの機動力は活かせない。そうなれば、装甲やパワーアシスト、そういった性能がより大きく影

響する。ここに攻め込んで来るくらいだ、敵のISは恐らく最新型、又はそれに準ずる高性能機。パイロットも精鋭だろう。いくら山田先生の実力があっても、打鉄には厳しい相手だ。

ならばどうするか。打鉄の応用性を活かし、多数の重火器を装備し、集中砲火で一気に倒す。これが最良だ。だがそのためには相応の準備時間が掛かり、さらには装備重量でろくに身動きの取れないであろう山田先生の下へ敵を誘き寄せせる必要がある。つまりは、足止めをしなければならぬのだ。

「真改、お前は歩兵を倒せ。その後更識に合流し、パスワードスーツ部隊を挟撃しろ。……こちらへは来るな。例え、何があっても」

「……承知……」

では、誰が足止めをするのか。それは山田先生と行動する、千冬さんだ。言うまでもなく、この役目の危険度は凶抜けて高い。だからこそ、己が引き受けたかった。

だが。そんな顔をされては、引き下がるしかないではないか——  
「更識も無理はするな。お前のISもまだ回復していかないだろう。手強いようなら防衛に徹し、井上の加勢を待て。……以上だ。では、配置につけ」

言って、千冬さんと山田先生は準備に取り掛かった。何せISを相手にするのだ、山田先生だけでなく、千冬さんにも相応の装備が必要なのは当たり前だ。

「ダメよ、真改ちゃん」

「……？」

こめかみに軽い衝撃。横を見れば、楯無会長が拳を握り、己を小突いたところだった。口元を隠す扇子には「説教」の二字。

「もつと愛されてる自覚を持たなきや。真改ちゃんが織斑先生のことを大事に思ってるのと同じくらい、織斑先生だって真改ちゃんのことを大事に思ってるのよ？ 心配なのはわかるわ。でも心配したくないからって、相手に心配させちゃダメ」

「……………」

小さく笑いながら、そんなことを言う。反論は出来なかった。

「それに、一夏くんがいる真改ちゃんにはわかるんじゃないの？」

「……………」

「かつこつつけたいのよ、お姉ちゃんっていうのは。可愛い妹の前では特に、ね」

「……………」

冗談めかして言うてはいるが、間違いなく本心だ。楯無会長も、簪という妹の姉なのだ。千冬さんの気持ちには共感出来るところがあ  
るのだろう。

……それにしても。己が、妹か。

「さ、行きましょ。礼儀を知らないお客さんたちを、たくっぷりおもて  
なししてさしあげないと」

「……………」

楯無会長と並び、オペレーションルームを出る。薄暗い通路の遙か  
先から、明確な敵意が音もなく迫って来る。

心配がないと言えば大嘘だ。無防備な電脳ダイブを行う友人たち  
も、いまだISが傷ついたままの楯無会長も、外せば終わる攻撃に賭  
けるしかない山田先生も、その成功率を上げるために生身でISに挑  
む千冬さんも。

だがそれらの心配は、一步進むごとに薄れていく。波のように押し  
寄せる重圧が、己を研ぎ上げてゆく。

——懐かしい感覚だ。思い返せば、ここ最近の激戦も、己を殺そう  
として来る敵は全て機械たちだった。そうではない、肉持つ生物のみ  
が放つ、生物のみが感知出来る特殊な波動。

即ち、殺気。

「……………」

恐怖を忘れてはならない。苦痛を忘れてはならない。人としての  
感情を、心を、捨ててはならない。

その上で、ただひとつへと収束させる。精神を、肉体を。人のまま、  
人としての全能力を捧げるのだ。

戦いへと。

「……………井上真改……………」

我は戦闘機構。我は切断装置。我は一振りの刀剣。我は研ぎ澄まされた、極限の刃。

——(ぎ)。

「……推して参る……！」



## 第98話 迎撃

男は、生まれながらの兵士であった。

そうであるよう造られた、試験管ベイビーではない。そう成るよう、何かしらの施術を受けたわけでもない。ただ、彼の家は代々、兵士だったのだ。

先祖は祖国の独立戦争に参加し、命を賭して戦い、死んだ。

その子が、孫が、曾孫が、祖国の兵士として数々の戦争で様々な成果を挙げ。

彼らの血を受け継ぐ男もまた、当然のように祖国に尽くし、英雄となった。

特別な能力があつたわけではない。優れた才能があつたわけでもない。

ただ男は、先祖代々続く教えを、忠実に守っていただけであつた。

——曰く。「危ないモノには近づくな」

『ポーンからキングへ。ポイントガンマに到着。これより潜入する』

『キング了解。ポーンへ、ナイト騎士は既に交戦している。相手はブリュンヒルデだ』

『……ポーン了解。ポイントオメガまでおよそ五分。……何事もなければ、だが』

(さて。これは妥当なのか、それともナイトが貧乏くじを引いてくれたのか……判断に迷うところだ)

キング司令官からの情報に、男——ポーン歩兵は、苦笑とも言えないような、微妙な笑みを浮かべた。

ISという、規格外の兵器が開発されてから十年。世の中が女尊男卑となり、国軍の女性が男性よりも多くなっても、ポーンはその勤務態度を微塵も変えなかつた。ポーンにとっては、他人の評価などどうでもいいからだ。彼はただ、与えられた命令をどう遂行するかを考えるだけ。その邪魔になるような感情を任務に持ち込むことはない。

そんな彼にとって、敵の戦力は二種類しかない。手持ちの戦力でどうにか出来るか、どうにも出来ないかだ。

(ブリュンヒルデ……世界最強、か。奴は限定条件下であれば、生身でもISと対等に渡り合うと聞く。そんなバケモノは、俺たちの手には負えん)

ISは、世界最強の兵器だ。既存のあらゆる兵器を上回る、圧倒的な性能を持つ。だがそれは、ポーンにとっては関係ない。

(ほんの数分に限ったことではあるが……現在、この場所で活動し得るIS学園の機体は、僅かに一機。そしてブリュンヒルデを失うことは、何があっても避けたい筈……ISは、その援護に付くだろう) 繰り返すが、ポーンにとつての敵とは、現状戦力で対処可能か否かの二種類だけだ。

そんな彼と、彼が現在率いる部隊の装備は、室内戦を想定したサブマシンガンSMGがメインだ。取り回しの悪い対物重火器などは持ち込んではおらず、もしも戦車並みの防御力を持つ兵器が待ち構えていれば、ひとたまりもなく蹴散らされるだろう。

一応、全員が高性能爆薬を持つてはいるので、それで破壊することは不可能ではないが——こんな逃げ場のない場所では、視界に入った次の瞬間には挽肉にされるのは目に見えている。

(ならば、俺たちの相手はIS以外の戦力……その中に、この狭い空間に持ち込める兵器はない。生身の人間、恐らくは戦闘訓練を担当する教師。人手が足りなければ、代表候補生が出てくる可能性もあるか……)

そして生身の人間は、言うまでもなく「どうにか出来る敵」だ。ISに乗れば鬼神の如き戦闘力を発揮するとしても、ISがなければただの人。ましてや、体力や筋力で男に劣る女だ。殺害は極力控えなければならぬが、決して制圧不可能な相手ではない。ブリュンヒルデは例外中の例外であり、ポーンは彼女のことを、戦力的には人間とみなしていない。

(つまり、やることは同じ。いつも通り、ということだ)

だが、ポーンは油断しない。なぜなら彼の長い戦歴は、ひたすら歩兵として、前線で戦い続けるというモノだからだ。

ISが開発される以前、戦車や航空戦力が極度に発達した戦場で

も、歩兵は必要な存在だった。それは今でも変わらない。ISは、数  
があまりにも限られているのだから。

だから、ポーンは決して油断しない。彼は人の命がどれほどの重さ  
かは知らないが、それがほんの数グラムの銃弾一発で容易く奪われる  
ことは知っているからだ。

『行くぞ、兵隊ども。英雄になんぞなろうと思うな、塵芥のような功績  
でも、積み上げ続けていればそのうち嫌でもそう呼ばれるようにな  
る。そのためには、生き残ることが大前提だ』

『『了解』』

今日も彼は、歩兵として戦場に赴く。作戦の評価は上が決めること  
であり、彼が考えることではない。彼はただ、命令通りに任務をこな  
し、生きて帰ればいい。

そして生きて帰るためには、対抗出来ない戦力、即ち。

「危ないモノ」に、近付いてはならない。

ポーンは長年の戦闘で身に付けた、彼をよく知る者たちが「嗅覚」と  
呼ぶ能力で、危険の有無を確認しながら通路を進み。

次の瞬間、自身の首がズルリと滑り落ちたことに気付いた。

「――」

驚きの声を発する間もない。通路に転がった彼の頭部は、直前の命  
令を律儀に遂行しようとした身体が数歩進んでから崩れ落ちるのを  
呆然と見た。

その後ろでは、彼の部下が彼と同じように、何が起きたかも分から  
ぬまま死んでいくところであった。

ある部下は、両手両足を切断され、通路の床と壁と天井を鮮血で赤  
く染め上げ絶命した。

ある部下は、脳天から股下までを両断され、右目で左半身の、左目  
で右半身の断面を見ながら絶命した。

ある部下は、五臓六腑の全てを刺し貫かれ、自らが死んだことにも  
気付かぬ内に絶命した。

ある部下は、全身のありとあらゆる場所を切り裂かれ、元が人とは  
思えぬ姿となって絶命した。

ある部下は、胴を上下に分断され、倒れ込んだ頭が床に触れる前に脳を串刺しにされ絶命した。

こうして、ポーンの率いる分隊は、あっけなく全滅した。

「……………はっ」

数瞬後、ポーンは自分の意識がまだ残っていることに気付く。慌て首に触れ、先ほど失った筈の頭部がまだ繋がっていることを確認した。

それどころか、身体には傷一つない。彼の部下たちも同様であった。

「な、ん…………だ。今、のは…………」

問うまでもなく、答えは出ている。アレは圧倒的な「死」の予感に、走馬灯すら放棄した脳が見せた幻覚だ。

同じようなことを、無数の死線を潜り抜けてきたポーンは何度か体験していた。だがそれまでのモノと明らかに違う。

まず、あれはもはや予感というよりも確信だ。それほどまでに濃密な、絶対的なまでの「死」だった。

そしてなにより。

ポーンはまだ、自身が危機に陥っているとは、微塵も認識していなかった——

「た、隊長っ！」

部下が一人、言いながら通路の先を指差す。精鋭である彼らが、敵地で迂闊に肉声を発するなど通常は有り得ない。それだけ動揺しているのだ。

それを咎める余裕がポーンにある筈もなく、部下が指差した方向へ目を向ける。

——そこに、居た。

隠れるでもなく、武器を構えるでもなく。  
ただ静かに両目を瞑り、佇んでいた。

(あれは——)

ポーンたちは、事前にIS学園の全職員と全生徒のデータを把握している。その中に、眼前の「敵」と合致する人物はただ一人。特徴的なその人物は、特に記憶を探るまでもなく思い出せる。

全職員、全生徒の中で唯一、隻腕の人物。

井上真改。

『ポーンからキングへ！ 敵と接触、至急ルークとビシヨツプを応援に寄越せっ!!』

『こちらキング、映像をこちらでも確認。その生徒は代表候補生でもない一般生徒だ。専用機持ちではあるが、今は装備していない。現状の戦力で——』

『無茶なことを言うなっ!! コイツは——コイツは、ヤバイ!!』

ポーンにも、キングの言うことは分かる。常識的に判断すれば、ポーンの応援要請こそどうかしている。

だが、直接対峙したポーンたちだけは理解出来た。

目の前の、白い制服の少女は。

ISどころか、床に突き立てたブレード以外、銃器すら持たぬ少女は。

自分たちに——人間に、太刀打ち出来る存在ではない。

「……………」

すうつ、と、真改が目を開く。その視線が、寸分の狂いもなく、ポーンの視線と交わった。

(ふざけやがって、こちらは全員が最新の光学迷彩を装備しているんだぞ！ センサーもなしになぜ正確な位置がわかる!?)

『隊長、来ます!』

「!」

見れば、真改が床から刀を抜くところであった。それが真改にとって戦闘開始の合図であることは、ポーンたちにも明白だ。

ろくに戦いもせず撤退するなど許されない。だがまともに戦えば、

即座に全滅することは目に見えている。

数の利を活かした絶え間ない攻撃で牽制、増援到着までの時間を稼ぐ。

それしか方法はないと部隊の全員が即断し、躊躇うことなく、引き金を引いた。

(……六……全員、か……)

誰も居ない通路の中央で、目を閉じ、ブレードの柄尻に乗せた手で振動を感じ取り、全神経を研ぎ澄ませて敵を探る。

敵が肉眼では視認出来ないことは既に聞いている。最新の光学迷彩とやらで、硝子よりもよほど透過率が高いらしい。

が、見えない程度で完全に姿を隠せると考えられては困る。人間ほど大きな物体であれば、味覚以外の全てで存在を感知出来る。

己に接近を知られたくないのなら、匂いを消し、呼吸をせず、心臓を止め、地に足を着けず、空気を一切動かさずに近付くことだ。

「……………」

取り敢えず、殺気を叩き付ける。相手は動揺して声を漏らし、それで正確な位置が分かった。これで逃げてくれれば、追うつもりはないが。

……流石に、そう都合良く事は進まないようだ。

「……………」

目を開く。敵の姿は見えないが、確かにそこに居ることが感じ取れる。こちらに銃を向け、戦闘態勢を取っている。それを確認し、ブレードを引き抜いた。

ほぼ同時に、発砲される。

「……………」

マズルフラッシュはなく、銃声も最小限。サイレンサーは当然装着済み。だがいくら音と光を消せても、射撃の反動までは消せまい。上手く殺しているが、踵が小刻みに床を叩くのを感じられる。せつかく

姿を隠しているのに、それでは居場所を知らせているのと同じだ。

ブレードを左肩に担ぎ、身を沈める。銃弾が頭上を通り過ぎて行く。すぐさま狙いが補正されるが、それよりも早く左へ駆ける。床に刻まれた弾痕が己を追うように伸びる。薙払うような銃撃。跳躍して回避。空中では身動きが取れないためこのままでは蜂の巣にされるだろうが、しかし既に間合いに入った。

「……疾っ！」

右手に居る兵を目掛け、ブレードを振るう。全体重を乗せた唐竹割り。敵兵は半歩下がりとつつSMGを掲げる。刃が強化プラスチックを切断、切っ先は鼻先を掠めたが、不用意に動いたため隊列が崩れた。生まれた空間に飛び込む。囲まれた形だが、銃を持つ相手にはこれでもいい。真つ当な神経をしていれば同士討ちを恐れ、迂闊には撃てなくなるだろう。

「っ！」

着地した己の首へ、滑るようにナイフが振るわれる。艶消しを施した黒塗りの刃。光学迷彩を解除したのか？ 首を傾けて避けながら、男を見る。己が跳んだ瞬間には銃を手放し、ナイフを抜いていたようだ。判断が一際早い。隊長か。

「シィッ！」

鋭い呼気と共に、二撃目。ブレードの柄で受け、反撃に蹴りつける。隊長は身を捻り肩からベルトで吊り下げられたSMGで受け止めながら、ベルトの留め具を外した。近距離戦用のSMGとはいえ、ここまで近付けば流石に邪魔になる。そも今の蹴りで機関部が歪み、もう動くまい。身を軽くし、近距離戦のさらに内側、接近戦に備えたのだ。次いで隊長は、顔の上半分を隠していたゴーグルを乱暴に外した。目深に被ったフードの奥で、青い瞳がギラリと光る。積み重ねた戦いの歴史を感じさせる、深い輝き。

——想定を遥かに上回る手練れ。面白い。

「……っ！」

隊長が目配せをすると、ヴウウウン……と鈍い音を立て、残る五人も姿を現す。己にステルスは無意味と考えたのか。全く効果がない

わけではないが、乱戦の様相を呈する今となっては同士討ちを避けることを優先したか。

抜き放たれるナイフと拳銃。六振り六挺、いずれも同じ、「規格品」。統一された性能。個ではなく群としての戦闘力。「己たち」を山猫とするなら、彼らは狼だ。

(……持久戦は不利……)

もとより長引かせるつもりはない。一斉に火を噴く銃口の先から逃れながら、手近な一人へと跳びかかる。

己を守る銀の装甲も今はない。一撃でも避け損なえば能力が低下し、たちまち押し潰されるだろう。鋼鉄の兵器を身に纏つてのそれとは違う、懐かしい緊張感。遙か昔に叩き込まれた戦闘技能、己の礎が、手にした得物の先端にまで意志を宿らせる。

「——オオオオオオッ!!」

拍動により血流が迸り、全身に力を漲らせる。この身体に収まり切らぬほどの滾り。溢れ出た熱が咆哮となって吐き出され、それがまた己を猛らせる。

互いの目的に妥協は不可能、ならば力づくでねじ伏せ、押し通すまで。

もつとだ、もつと。

もつと速く、もつと強く、もつと熱く。

戦おうじゃあないか、<sup>つわもの</sup>兵ども——!

「しかし以外だな。真耶、お前が打鉄を使うとは。いつ以来だ?」

『状況が状況ですから。私一人意地を通して、生徒さんたちを危険にさらすわけにはいきませんよ』

「ほう……ならもしかすると、いまや伝説とまで呼ばれるあの技を、また見られるのか」

『や、やめてくださいよ、伝説だなんて……それにアレは、今のISには通用しませんし』



「かもな。だが、ここならば」

千冬は目の前の、長く続く通路を見る。通路としてはそこそこ広い。IS同士でも、すれ違う程度なら難なく可能だろう。しかし戦闘機動、それも回避となれば、十分な広さとはとても言えまい。

千冬は子どものような、悪戯っぽい笑みを浮かべる。他に見ている者が居れば絶対にしない表情だ。だが彼女とて、歩んできた過酷かつ特殊な人生さえなければ、本来ならまだ遊びたい盛りの年齢なのだ。普段から自分を律している分、それはこういった時に発散されることになる。

「……楽しみだな」

かつて千冬と真耶が、国家代表の座を争っていた時のこと。当時最新鋭機であった打鉄に、徹底的なチューンナップを施した真耶専用機。そしてその機体と真耶のみが使うことの出来た、当時「回避不可能」とまで評された、必殺の戦術。今真耶は、それを可能な限り再現するべく突貫工事の真つ最中だ。千冬の役目は、それが終わるまで敵を食い止めること。

「さて。現役時代の真耶を知らんだろう小娘は、一体どんな顔を見せてくれるのか」

真耶自身が言った通り、その戦術は、当時に比べ遥かに優れた性能を持つ今のISには通用せず、世界中が常に注目しているISの話題は流行の移ろいが速い。故に、かつては世を大いに騒がせたにも関わらず、瞬く間に忘れ去られた。それでも、いやだからこそ。それを間近に見、そして身を以って味わった者たちには、まさに「伝説」として刻まれているのだ。

「ああ——楽しみだ」

千冬は腰に差した六本のブレードの内、二本を抜く。真改に渡した物と同じ、それに少々の細工を加えた物。

ブレードを持った両手をだらりと下げ、通路の先、現れたISを見据える。凄まじいプレッシャー。身体の芯が恐怖に震える。これが生身で、最強の兵器に挑むということ。

——それを、真改はやってのけたのだ。未成熟な身体で、ろくな武

器もなく、背には無力な少年を庇い、助けが来るかどうかも分からない、絶望的な状況で。見事に、やり遂げたのだ。

「真改。お前には絶対に言つてやらんが、私はお前を、心から尊敬するよ」

ブレードを構える。相手もとうに千冬には気づいている、間合いに入る直前で止まり、油断なく戦闘態勢を取った。

「……ブリュンヒルデ。世界最強。そこをどいてくれ。私とて、できれば貴女を傷つけない」

こちらを気遣うような言葉と裏腹に、語る女の顔と声には一片の迷いもない。必要とあらば殺害すらも厭わないだろうことは明白だった。対する千冬は齒を食いしばって恐怖を噛み殺し、挑発的な笑みを浮かべる。

「随分な自信だな。まさか勝てるつもりで思っているのか、お前如きが」  
「……自惚れるなよ。所詮貴様は過去の英雄だ、廃れた栄光は武器にはならんぞ。そんなものを支えにISに立ち向かうなど、ただの狂人だ」

千冬は内心でほくそ笑む。そうだ、それでいい。ステルスモードで作業中とはいえ、真耶の存在に感づかれる可能性は決して低くない。それを少しでも下げるためには、自分が単独で、生身でもISに勝てるかと本気で思っているから戦うのだと、相手に思わせなければならぬ。

「狂人だと？ 私か？ ……何を今更、当たり前前のことを。伊達でも酔狂でもなしに、世界最強など、名乗るものか——！」

踏み込みと同時に吠えた千冬という言葉は、紛れもない本心であった。

「……そう。千冬は世界最強ブリュンヒルデという称号に、何の誇りも価値も見出しではない。だがその名は、愛する弟が胸を張って語り、自慢の妹が一生懸命に目指してくれるのだ。

ならばその名を、掲げなくてなんとする。

(分からだろうさ、お前には)

振るわれる鋼鉄の拳。紙一重で避け、千冬は渾身の斬撃を見舞う。確かな手応え。しかし相手にダメージはない。刃はあつけなくはじ

かれる。

(姉というのはな。弟や、妹のためには)

そのまま走り抜け、身を捻りながらブレードを振るう。全体重を乗せた唐竹割り。分厚い鉄板をも断ち切る斬撃。高度な複合装甲の前には無意味。反撃の裏拳。避ける。だが風圧だけで肌が裂け、頬に一筋の血が流れる。戦力差は絶対的。それでも。

(たとえ、命を懸けてでも)

繰り出された蹴りを足場に跳び、顔面に向け突きを放つ。相手は避けず、防ぐこともない。直撃。しかし剥き出しに見える顔には、強固極まる被膜装甲スキン・バリアが張り巡らされている。瞬きすらさせられず、千冬は無防備な空中で、返す一撃を全力で凌ぐ。受け流した筈の打撃に全身が軋む。勝てるわけがない。だが、それでも。

(格好つけないきや、ならないんだよ——！)

床に叩きつけられるように着地した千冬に、文字通りの鉄拳が迫る。襲い掛かる圧倒的な硬度、質量、速度。

僅かなミスが即死に繋がる猛攻に、千冬は敢然と立ち向かう。

ただひとつの、ちっぽけな想いを胸に秘めて。

## 第99話 殺陣

右足を真っ直ぐに突き出し、正面に立つ兵士の胸に踵を叩き込む。衝突の瞬間、全身を使って回転を加え、兵士が着ているアーマー越しに、肺に衝撃を捻り込んだ。

「ゲホオ……!?!」

胸を押さえ後ずさる兵士。がら空きになった首にブレードを一撃、手応えで倒したことを確認し、次の兵に向き直る。

「こ、のオ……化け物がア!!」

「疾っ!!」

己の眉間を捉える銃口。即座に撃鉄が振り下ろされ、炸薬が起爆する。この状況でなんとという精密射撃か。だが銃弾は、放たれた後に軌道を変更することは出来ない。身を捻りかわしながらブレードを一閃。反動で下がる遊底スライトを斬り飛ばす。

「うおっ……!?!」

兵は驚くべき反応速度で自身の顔目掛け飛んでくる部品を避ける。同時に繰り出されるナイフ。速く正確だが、体勢に難がある。それでは届かない。避けつつ、脇腹に柄の一撃。

「つつっ……!」

目出し帽バラクラバの奥で苦悶の表情を浮かべ倒れ伏す。これで二人。

「……………」

残る四人は、一足一刀の僅か外まで退がっていた。先の二人は何か。彼ら自身も、そうと知りながら距離を取らなかつたように感じる。部隊が生き残るためにあえて蜥蜴の尻尾となったか。これが群特有の恐ろしさだ、己たちリンクスには真似出来まい。

「……………」

どうするか。ブレードを右肩に担いで腕の疲労を抑えつつ、出方を窺う。敵は斜線を下げつつ、意識を上に向けている。囲みながらも同士討ちを避け、かつ一人一人が迎撃体勢を維持している。いざともなれば、自分ごと己を撃ち抜かせるつもりだ。この少人数でIS学園を攻めるだけはある、覚悟は決まっているか。

「……っ！」

筋肉の緊張を感じ取り、担いだブレードを大きく一回転させるように振り上げた。狙いは後ろ。膝を狙って放たれた銃弾を斬り払うと同時に、振るったブレードの重さを利用して振り返る。

バラクラバの奥からくぐもった舌打ち。照準は変わらず低く足狙い。ナイフを持った左手は、急所を庇いつつ切っ先をこちらへ向けている。銃口にブレはない。二射目までの間は一瞬、狙いはまたも正確無比。故に、読みやすい。

「疾っ！」

人体を的とした時、最も大きく且つ動きの少ない胴体目掛け、弾丸が走る。己はブレードを振り抜いた勢いそのままに身を捻り、左足で回し蹴りを繰り出した。銃を持つ右手に命中、しかし感触はいやに固い。手甲の類か。

右腕をへし折るつもりだったが、即座に目的を切り替える。足首を右手に引っ掛けて跳躍すると、兵は急に体重を掛けられて体勢を崩す。

反射的に身を退こうとするが、遅い。己は左足を軸に空中で一回転し、床を蹴って伸びていた右足を曲げ、膝裏で鎌のように兵の首を刈る。左右の頸動脈に衝撃を受けた兵は一瞬で意識を失い勢い良く床に叩きつけられた。

半分。

プシュン。気の抜ける銃声が耳に届くより早く、身を沈める。髪を一房持つて行かれた。後で本音が激怒するだろうが、そんな先のことを気にする余裕無し。ブレードを咥えることで空けた手を床につき、折り曲げた両膝を一気に跳ね上げる。一瞬遅らせて床を押し出しながら、全身を捻る。普段は邪魔なばかりの長いスカートが、激しく翻り兵の目を眩ます。

「ちいっ！」

苦し紛れの連射。貫くのは制服の生地ばかり。身体には掠りもしない。

全力で突き出した右手を、引き戻す暇はない。ブレードを咥えたまま

ま、顎に全力を込めて噛み締める。手に持ち振るう時と比べ関節の数が足りず速さはないが、その分、重い。

「グウウウウツ!!」

歯を食いしばり唸り声をあげながら、身体ごと叩き付けるように。狙いは胴体、肺を斜め下から打ち上げる。

手応え有り。兵はゴーグルの奥で目を見開き、一瞬ビクンと身体を痙攣させる。崩れ落ちる前に、その胸に装着されたホルスターからナイフを抜き取り、振り返ると同時に投擲。刃は弾丸を斬り裂きながら、それを放った銃口に突き刺さる。

己の背中を狙っていた兵は攻撃手段を一つ失い、しかし冷静にナイフを構え直す。既に駆けていた己は懐に潜り込み、振るわれたナイフを潜る。

そして、落ちるように身を沈める。重力は武器だ、それは肉体を加速させ鉄塊に変える。その重みと速さを、肩から背中までを使って叩き付ける。

衝撃の瞬間、床を踏みしめる。兵は弾き飛ばされ、壁で一度跳ね返り倒れた。頭を強か打ち付けたようにも見えたが、ヘルメット装備だ、死にはすまい。

最後の一人……隊長であろう男を睨む。

決して小柄ではないが、大きくもない体躯。余分の一切を削ぎ落とし、しかし必要分はしっかりと残した、細くも強靱でしなやかな肉体。纏う衣服が有していたであろうステルス機構はとうに解除し、フードと口許を隠す布も脱ぎ捨て、くすんだ金髪と皺や傷が刻まれた壮年を過ぎた顔が露わになっている。

青い瞳が、己を睨み返す。そこには殺意も敵意も、恐怖や絶望すらもない。だが、ただ命令に従う人形のような色かと言えば、それも違う。生き残るために、どこまでも冷静に己を見極めようとしている。

(……面白い……)

この手の緊張感は久々だ。張り詰めた空気に乾いた唇を舌で湿らせながら、ブレードを担ぎ腰を落とす。

容易い相手ではない。だが、そうでなくては――

(古流武術と近代格闘技のハイブリッド……一体どれだけの修羅場を潜れば、そんなもんをこんなレベルで身に付けられるんだ)

ポーンは瞬く間に部下を倒した真改の動きを、自身の経験と照らし合わせてそう分析した。勝ち目が薄い以上、増援到着まで耐えるしかない。そのためには、敵の手札は可能な限り明かしておかなければならない。

(本当なら、この手の戦闘狂は撤退するふりして罠まで誘い込むのが常套なんだが……敵地のド真ん中じゃあ無理がある。とんだ貧乏くじを引いちまったぜ)

刀身のように緩やかに口を歪め舌なめずりをする少女の姿に、ポーンは冷や汗を流す。敵に猛然と飛びかかり仕留めていく様はまるで獣。それが人の知性と技術と武器を持っている。悪夢のような話だとポーンは思った。これなら戦車が待ち構えていた方が遥かにマシだった。

(さて、あんたのカードは後どれだけ残っている？ あれで全部つてのが最高なんだが、まあ、そんな都合良くはねえだろう)

部隊共通装備の9mm軍用拳銃をホルスターに納め、私物である45口径を構える。装弾数は半減するが、こちらの方が軽く、手に馴染むのだ。それに、当てた際に与える衝撃も大きい。何より、彼と半生を共にしてきたこの銃は、一度もジャムつたことがない。今はそれが重要だ。

「……………」

「……………」

睨み合う。神経が研ぎ澄まされていくのを感じる。ポーンの顎から汗の雫が一滴流れ落ち、床に着き弾けた僅かな音さえ、はつきりと聞こえる。

それが、合図となった。

「疾っ！」

真改が踏み込む。加速だけ見れば四足獣よりも遙かに速い。だがポーンは反応した。手首の動きだけで、銃口が真改を追う。当然照星も照門も見えはしないが、この距離とポーンの射撃技術ならば間違っても外さない。かわされない限りは。

B A N G！ マズルフラッシュの向こうで、真改は上半身で円を描いた。ボクシングのウィービングに近いが、真改は上半身の動きで銃撃を避け、さらにはその勢いを横移動の反転に利用する。下がった姿勢を戻すことなく、更に疾走。ポーンもまた、銃撃の反動を利用して照準を補正する。

B A N G！ 腰を狙って撃つ。真改は跳んでかわし、壁に着地。B A N G！ そこから更に跳ぶ。標的を失った弾丸が壁に弾痕を刻む。真改が振りかぶる。頭上から首を狙う薙払い。ポーンは前転でかわす。仰向けになりながら、着地前の真改に照準。B B B A N G！ 三連射。直線の斬撃では全ては斬り落とせない。真改はゆらりとブレードを動かし、全てを弾く。

(F U C K！ 銃弾が見えてやがるのか!?)

銃撃の反動を余さず利用し起き上がる。B A N G！ 腹を狙って発砲。ほぼ同時にマガジンを引き抜く。真改は一瞬全身を見失うほどの速さで移動、銃弾をかわしながら一気に肉迫する。

ポーンは、マガジンに残る最後の弾丸がチャンバー内に装填されスライドが閉じた次の瞬間には、リロードを終えていた。尋常ならざる早業に舌を巻きながら、発射準備の整った銃口目掛け真っ直ぐに突っ込む。

その時、ポーンは真改の眼を見た。そして恐怖した。笑っている。眼だけが笑っている。口元も、目元も微塵も動かさず。それでもなお、はつきりと分かるほど。

眼だけが、狂喜の笑みを浮かべている――

(――狂人めッ!!)

B B B B A N G!! 怒涛の五連射。頭、心臓、肝臓、両の腎臓。いずれも急所、命中すれば殺せる。真改は手首の動きでブレードを旋回させる。切っ先、峰、鎬、鏢、柄で銃弾を弾く。旋回を終えたブレード



ドを、銃弾を弾いた衝撃すら利用して振りかぶる。右肩、その更に後ろへ。柔軟且つ強靱な全身のバネが、音が聞こえるほどに引き絞られる。

そして踏み込み、溜めた力の全てを乗せた斬撃が、放たれた。

「オオオオッ!!」

ポーンは雄叫びと共に繰り出された凄まじい衝撃を、受けたナイフを手放し吹き飛ばされるようにバックステップすることで受け流す。これにより僅かだが、時間と距離を稼げた。銃は既に構えている。照準はそれと同時に。翻る刃。ブレードは体までは届くまい。狙いは手か。だがこちらが一瞬早い。指に力を込める。

手応えがない。

「っ!?!」

ポーンは驚愕した。目の前で起きているのに、その瞬間を確かに見たのに、現実感が薄い。

(この女っ)

真改は手首を返し、斬撃から刺突へと変えていた。刺突の方が早いからだ。それにより、ポーンの時間的優位は埋められた。ブレードの切っ先が拳銃を持つポーンの左手に伸びる。だが狙いは手ではなかった。鋭い刃は、ポーンの手には傷一つ付けることなく。

(トリガー引き金を、切りやがった!)

刃がトリガーガードから引き抜かれる。指に触れた刃から、ぞつとするような冷たさがポーンへ移る。だがその瞬間、不思議と、ポーンは恐怖を感じなかった。

(……ああクソ、クソが、クソツタレ。……負けたかよ)

どういうわけか、ポーンは清々しきさを感じていた。兵士である自分が、命令にのみ従っていた自分が。「作戦」の「成功」と「失敗」だけが存在価値だった自分が。

生まれて初めて、「勝負」をして。「勝利」を求め、「敗北」を味わったのだ。

まるで、戦士のように。

(畜生め。次は負けねえぞ、小娘)

ポーンは笑みすら浮かべながら、ブレードを受け入れた。鍛え抜かれた首に、その峰を。

ゴトリ、と倒れた最後の一人を背に、真改はブレードを血糊を払うように振るう。次いで手の内で一回転させて逆手に持ち直したブレードの鍔を鞘に付け、峰でなぞるように切っ先を鯉口へと持つて行く。

その様を、ポーンは朦朧とする意識で見上げていた。そして真改の眩く声が、微かに耳に届く。

「……安心しろ……」

ブレードを静かに鞘へと納め残心を終えた真改は、摺り足のような足運びで振り返り、倒した男たちに背を向けた。やはり眩きに過ぎぬ声量の言葉を、子守唄のように紡ぎながら。

「……峰打ちだ……」

そして真改は歩き出す。まだ敵は残っている。仲間が必死に抑えている。それに合流し、更なる戦に臨むために。

(……一度、言ってみたかった……！)

時代劇が割と好きなのは、秘密であった。

## 第100話 IS学園の守護者

幾つもの壁を隔てた先から、微かな振動が伝わって来る。広いとは言え地下通路でそれほどの衝撃を生み出せるのは、間違いなくISだ。頻度からしてかなりの猛攻。相手は織斑先生のはず、生身でISにそれだけの攻撃をさせるなんて……しかもそれを、これだけの時間続けさせるなんて。やはりあの人は規格外だ。私もロシアの代表にまでなつたけれど、とても追い付ける気がしない。

(うくん。自信なくしちゃうわあ)

でも今は、実戦の最中だ。将来のことなんて、考えている暇はない。考えるべきは、自分に与えられた役割を果たすための手段。ただそれだけだ。

「二人も通さない。一步も通さない。ただ、それだけね」

ISは、織斑先生と山田先生が抑えている。精鋭中の精鋭、歴戦の猛者を各国から集めた戦闘技能指導員の中でも抜きん出た二人だ。片や生身、片や旧式のIS装備だけど、最新鋭機如きに後れを取るとは思えない。

真改ちゃんは、奇襲をかけようが罨を張ろうが、たったの六人で勝てる子じゃない。私には分かる。彼女は戦士たろうとしているし、その能力も戦士としての物だけれど、本質は「暗殺者<sup>アサシン</sup>」だ。彼女に奇襲や不意打ちは通用しない。それらは本来、彼女が最も得意とする分野だからだ。

だから彼女に勝つには、実力で上回るか、彼女の攻撃を完全に防げる装備を持ち出すしかない。歩兵には無理だ、戦車でも千日手……いや、弾切れになって、結局倒されるだろう。なまじ見た目が強そうではないのがまた厄介だ。

だって考えてみて欲しい。日本人にしては少々背が高い程度の、隻腕で細身の少女が、人間の限界に挑むような戦闘力の持ち主だなんて、一体誰が想像できるのか。そんな規格外の存在に勝てるのは、同じく規格外の存在だけ。そんなモノはそうそう居ない。少なくとも、部隊を組んで襲って来るような「真つ当な」相手には。

……ちなみに。

なんで私に、真改ちゃんの本質が分かるのか、というところ。

この私の、人を見る目の成せる技……と、言いたいところだけれど。実はもつと簡単。私も真改ちゃんと同類、本質は「暗殺者」だからだ。……もつとも。私は真改ちゃんより、数段「質の悪い」暗殺者だけれど。

「……さあて、と」

物思いはここまで。通路の奥に敵影。これからはもうちよつとシリアスで、ファンキーで、エキセントリックな時間だ。

私は、ここの守護を任された。私の先生から。私の生徒から。私の友達から。私の妹から。

だから、私は盾。私は壁。私は砦。私は城。

通さない。通さない。通さない。通さない。

何故なら。

「何故なら私は、I S学園生徒会長だからよ！」

すぐに応援を送れ。こいつはヤバイ。

別働隊からの通信は、如月重工製パワードアーマー「明星」の重装甲改修型「フオウマルハウト」を身に纏う男、ルーク城にも届いていた。よく知る男の、聞いたことのない声音。今作戦において脅威と成りうる存在は、織斑千冬とその護衛I Sだけの筈。そして彼女らは、彼らの最高戦力であるナイト騎士が相手をしている。

想定を誤ったか。駆け付けるべく踵を返そうと立ち止まる。それがそのまま、戦闘態勢への移行となった。

敵だ。近い。

『……照合。I S学園生徒会長にしてロシアの国家代表、更識楯無。大物が出てきたな』

ルークと並進していた魔術師ゾップ師が、「明星」の電子戦改修型「アンドロメダ」の解析結果を告げる。楯無の姿はまだ見えない。だが空気

中に、無数のナノマシンが漂っている。そのナノマシンを操る信号は、アンドロメダの膨大なデータベースに記録されていた。

『ミステリアス・レイディ……第三世代型の中でもとびきり厄介だ。なにせ省エネモード中でも、ある程度武装が使える』

『それだけならいいんだがな』

声音に隠しきれない悔りが滲む相方に、ルークは渋い顔を作る。

ルークはビショップが気に入らない。それは単純な人格の好き嫌いではない。

ビショップは才気に溢れ、英才教育を受け、優秀な実績を持ち、瞬く間に出世し、若くして極秘最精鋭特殊部隊に抜擢された逸材だ。

故に、彼は知らない。実戦経験は決して少なくない。むしろ多くの実戦を難なく潜り抜けてしまったからこそ、彼には学ぶ機会がなかったのだ。

苦難、危機、恐怖、挫折、そして絶望……命の遣り取りには当然付きまとう、そういったモノらを。

故に、ルークはビショップが気に入らない。想定外の事態に際し、どれだけ冷静さを保てるのか。致命的な状況で、メンタルがどれほどの重圧まで耐えられるのか……それらが全くわからない相手に己の命を預けるなど、本来ならば絶対にゴメンだ。

しかしこれは任務であり、しかもツーマンセルだ。いざという時、頼る相手はビショップしか居ない。悪い冗談だ。ルークは心中で吐き捨てた。

『さて、と。さっさと片付けよう。ナイトに先んじて手柄をあげるチャンスだ』

『油断するな、若造』

『……おい、まさかビビってるのか？　ISも展開できない状態のガキ一匹に？』

『展開できないわけじゃない。するのに時間がかかるだけだ』

『だからこそだ。下手に慎重に行くと、奴にいらん猶予を与えるだけだ。こつちにとつて最悪のパターンは、奴が多少無茶してでもISを展開して待ち構えていることだ。そうじゃないってことは、俺たちを

ナメてるってことさ。付け込まない手はない』

一理ある。ルークには言い返せなかった。彼がこうも警戒しているのは、明確な理由あつてのものではないからだ。言わば直感である。

直感を頼りにする者はいずれ痛い目を見る。だが直感を無視する者は、次の瞬間には死ぬ。彼が無数の死地を、這い蹲りながらも生き延び学んだことだ。

『……とにかくだ。油断だけは、するな』

それだけを返して、ルークは装甲に包まれた両腕を持ち上げる。人の手を模した格闘用マニピュレーターが拳を握る。拳と拳の間から睨み付ける通路の先に、扇子で口元を隠した少女が、優雅な足取りで現れた。

『……交戦開始』

何事かを口にしようとした楯無に対し、ルークは問答無用で突進した。少女が目を細める。ルークの知る所ではないが、それは楯無の苦手とする反応であつた。

頑固な叩き上げの軍人。頭の固い現場主義者。話を聞かない、聞く気がない。実力も実績もあるが、出世は遅いタイプ——楯無の立場では、直接関わる事が少ない人種。即ち、口八丁による時間稼ぎや揺さぶりが一切通じない。楯無の「先制攻撃」が、ほぼ無条件に無効化されたのだ。

扇子で口元を隠しながら、楯無はひらりと突進を避ける。通り過ぎた巨体はすぐさま反転、両脚を踏ん張り片手で通路の壁を削り、急停止する。

楯無は既に移動していた。巨体故にどうしても生み出される死角を、針に糸を通すかの如く精度で通り抜けていた。挟み撃ちは失敗に終わる。だが楯無に安堵はない。

質量と速度と装甲に任せ、楯無を無視して進もうとしてくれれば、必殺のバックスタブを決めてやったのに。どうやら彼らは、最終目標がなんであれ、眼前の敵を残して行くつもりはないようだ。

「……ちよーっと、無粋なんじゃないかしら？」

表情を窺わせない鉄仮面が、素早く振り返る。楯無の言葉を言外に切り捨て、再度持ち上がる両拳。熟練のマーシャルアーツ軍格闘術、おまけに頭の中は装甲よりも堅そう。

それでも、楯無は言葉を止めない。それは彼女が数多持つ武器の中でも特に使い勝手が良い。獣や機械であるならともかく、人間相手に一度効かなかった程度で即選択肢から外すなど有り得ない。

ましてや、相方の反応は、まだ見ていないのだから。

「そこをどきな、お嬢さん。怪我じゃすまんぞ」

(しめた)

唇の端が思わず吊り上がりそうになるのをこらえる。いい感じに、余裕を取り繕っているようになった。

(こつちのスマートな人は、そつちの大きい人とは違うみたいね)

言葉とそれを発した声音だけで、楯無は若い男——ビショップの人格を分析する。

エリート中のエリート。自信に満ち、己の能力とそこから導き出した答えになんら疑いを持たない。高慢で、失敗や挫折とはおよそ無縁。それらの要素に見合うだけの実力を備え、楯無がISを即時展開出来ないことを知り、展開しようとするればその際に潰せることを見抜いている。

(あら、あらあらあら)

まともにぶつかれば勝ち目はなからう。それだけの手練れであることは、身のこなしと装備から分かる。

ならば、まともにぶつからなければ良いだけのことだ。幸い、この二人の相性は最悪。即席のコンビであることは間違いない、この二人を組ませた誰かは能力でしか人を見ない無能か、あるいはIS学園が秘密裏に送り込んだスパイだ。

『……余計なことを話すな』

(あら、渋い声のおじさま)

ルークがビショップに言う。楯無から不穏な何かを感じ取ったのだろう。分厚い装甲の奥から僅かに漏れ出た小声を、楯無の耳は拾う。

「……OK」

(不服を隠そうともしない声音。どう考えてもかなり年下なのに、階級はそう違わない……むしろひとつ上、ね。それでも一応は従うのは、年長者に対する配慮？ 有り得ない、別の理由……「隊長から信頼されていない」、とか)

軍は階級を重んじるが、絶対ではない。最前線で命を張る兵士であれば、階級だけ高い若造よりも経験豊富な古株を尊重することはままある。楯無は分析する。ビショップはプライドの高い実力主義者で、階級を笠に着て威張り散らすのではなく、実力を見せ付けて黙らせるタイプだ。

(チームワークを軽視しているわけじゃない……軽視しているのはチームそのもの。土壇場で、無意識にスタンドプレイに走る)

楯無は思考を止めない。彼女は真改のような、一点特化型の戦闘者ではないからだ。無数の選択肢に、己の持つ中から最適な技能を割り振っていく。それが彼女の戦い方だ。

「よい、しよ」

扇子を振るうと、扇子が消え代わりに蛇腹剣が手に収まる。ラスティーネイル。楯無の専用機、霧纏ミステリアス・レイディの淑女の武装であるそれは、生身で持てば立派な大剣だ。

柄をしつかと握り締めた楯無は、刃先を床に着けて剣を構えた。

「さて……それでは、お相手いたしましょう」

悪戯っぽい笑みを作って言う。二機のパワードスーツは、今度こそ無言のまま、攻撃を再開した。

(ルークのタツクルをかわした？ こいつ、単にISに乗れるだけの小娘とは違うってことか。流石はロシア代表)

ビショップは後方、見極めたラスティーネイルの間合いの僅か外へと退がりながら、楯無を再評価する。

(反応、良し。戦術眼、良し。体捌き、良し。なるほど、紛うことなき、



強敵だ)

楯無は、ビショップの人格について一点、見誤った。彼は相棒であるルークを、全く軽んじてはいなかったのだ。

時代遅れの石頭だとは思っている。全盛期を過ぎた老兵だとも思っている。そして前者は任務達成に対する熱意の現れであり、後者は肉体の衰えを補って余りある経験の持ち主であることの証左であると思っっている。

(さてお嬢さん、俺はこういう戦いでは負けなしだ……俺とあんた、どっちがより「性格が悪いか」の勝負だ)

ビショップは楯無を見る。ルークの猛攻をかわしつつ、装甲の薄い箇所を狙って蛇腹剣を振るっている。その戦闘技術は舌を巻くほどだが、しかしルークには一歩及ばない。

いや、技術だけなら互角と言えるだろう。だが老兵の培ってきた経験値は、いかに強敵に恵まれる機会が多かったとはいえ、二十にも満たぬ少女のそれとは比較にならない。

そこに、体格と装備の差までが加わるのだ。ルークは生身であつても機関砲を持ち歩き射撃できるほどのパワー、少々の被弾などものともしないようなタフネスを持つ。その巨軀をフォウマルハウトに包めば最早戦車。繰り出される拳は砲弾の如き威力を持ち、マーシャルアーツのコンビネーションは手堅く幅広い。陸上戦力としてこれほど頼りになる者はそうそう居ない。

どれほど楯無が善戦しようと、突破は時間の問題だ。ましてや——  
(……ましてや。ルークの相手をしながら、ナノマシンの操作にまで気を回す余裕はないだろうか?)

「!? くっー」

ルークの右拳を逸らそうとしたラスティネイルが、突如重くなる。間に合わない、と瞬間的に悟った楯無は首を傾けつつ身を捻るが、避けきれなかった。拳を覆う装甲が頬を掠め、ぱっくりと裂き、血を滴らせる。続く左拳をバック転で避けるも、ラスティネイルは置いて行かざるを得なかった。

かろうじて体勢を立て直した楯無は、ラスティネイルよりさらに取

り回しの悪い蒼流旋ラッスを呼び出そうとし、止めた。

「……ごめんなさい、ミスター。私、あなたのこと侮っていたみたい」  
「いやいや、侮ってくれて構わないぜ？ それだけ俺もやりやすくなる」

頬の血を拭いながら言う楯無に、ビショップは胸の高さに掲げた両手の平を上に向けながらおどけてみせた。その背から伸びる一対の翼アンテナから、強力な干渉電波が放たれていた。

「なにしろそっちはIS、マジになられたら俺アンドロメダの力なんざ及ぶ筈もない。せいぜい油断して、慢心して、手を抜いてくれ。それで初めて、付け入る隙ができる」

「……口の達者な人。嫌いじゃないわ。でも私よりも達者な人は別」

「光栄至極に存じまする」

「皮肉も通じないとなると、尚更ね」

恭しく——というよりは、慇懃無礼に頭を下げるビショップに、楯無は内心舌打ちする。

侮っていた。否。騙されたのだ。声音ひとつから相手の人格を見抜き優位に立ってきた楯無が、声音ひとつでまんまと騙されたのだ。生来の才能と重ねてきた鍛錬からなる優秀さを逆手に取られ、完膚無きまでに騙されたのだ。

物理的先手をルークに奪われ、精神的優位すらもビショップに盗まれた。初めから劣勢極まる戦いではあったが、奇襲を完璧に退けられ、今や進退窮まった。打開策は早くも失われた。後は時間を稼ぐ以外に、出来ることはない。

そう。時間稼ぎだけは、まだ出来る。

「……さて、紳士ジェントルメンのお二方。ドレスコード的には思いつきりアウトではありますが、私はそんな細かいことは気にしません。顔良し、頭良し、性格よし、家柄よし、将来性よし。そんな最上級物件な私がお相手して差し上げるのですから——まさか、逃げはしないわよね？」

不敵な笑みを浮かべ、張りぼての余裕を見せつける。当然、そんな虚勢は二人には通用しない。だがそれでも、警戒せずにはいられない——「楯無には絶対に二人を倒せない」などという甘い考えを、二人

は持っていないかった。

力押しで強行突破する。または背を向け引き返し、ポーンの援護に向かう。そのどちらも、目の前の少女が健在のまま行うのは余りに危険である、二人は考えていた。

故に、この場で倒す。

「もちろんさ。そつちこそ、降伏なんぞはしてくれるなよ、お嬢さん。どうせぶちのめさなきやならないんだ、さすがに無抵抗の女の子をつていうのは、その、なあ？ わかるだろ？」

「……ええ。よくわかるわ」

それだけを返して、楯無は何も持たない両手を構える。絶望的な抵抗だ。だが楯無の瞳には、諦めは微塵もなかった。

(……早く来てね、真改ちゃん。悔しいけれど、今はあなたを頼りにするしかないみたいだから)

再度の突進してくるルークを見据える。周囲に撒いたナノマシンから送られてくる情報はあてにならない。全てビシヨップによる欺瞞だろう。

(正直、そう長くは保たないだろうから)

繰り出される拳。避ける。死角に回り込み、掌打を叩き込む。固い手応え。当然ながら効果なし。手が痺れる。続ければ、装甲ではなく楯無の手が碎けるだろう。

楯無は笑う。既に見抜かれているだろう内心の焦りを、それでも隠し続けるために。

## 第101話 救援

ゴウウツ!

耳のすぐ横を通った拳に僅か遅れて、突風が頬を撫でる。その風すらも最早打撃に等しく、楯無の頭を揺らす。だが致命的というには軽い、身体から反撃の力を奪い取るには足りない。

「フッー」

鋭い呼気と共に、楯無の左腕が蛇のように走り、ルークの右腕に絡み付く。同時に右手で右肩を抱えるように掴んで、腰を落とす。

身体を回転させる力を使い、跳ね上げる!

『ヌウツ!?!』

背中の上を飛び越えて、ルークは頭から床に落ちる。柔道の基本技のひとつ、背負い投げ。それに独自のアレンジメントを加えた殺人技である。固い床に、勢い良く、真つ逆様に頭を叩きつけられれば、頭蓋が砕けて脳漿を撒き散らすか、首があらぬ方を向くことになる。

だがルークは、頭が地に着く寸前で、床と頭頂の間に左手を滑り込ませた。彼本来の怪力にへフオウマルハウトの金剛力が加わり、落下の勢いを全て受け止める。そればかりか、天井を向いている足を振り下ろし、楯無の顔目掛け強力な蹴りを繰り出して来た。

「くっ!」

すんでの所で首を傾け、攻撃をかわす。次いで素早く身を捻り、直撃をかわす。左肩の制服に、装甲が引つかかる。布を裂き、中の肉を抉る。

「……ツツツ!!」

悲鳴を噛み殺し、楯無は床を蹴る。横に逃げてから跳び退り、通路の中央に陣取った。

「……見た目の割に、随分身軽ですねえ」

軽口を叩くだけでも一苦労だった。口を開いたその刹那、喉奥から苦痛の叫びが暴れ出ようとするのを堪えるだけで、相当な体力と精神力が必要だった。その間にも、左腕の傷を確認する。肩から肘の上にかけて、縦に走った裂傷。痛むが、それだけだ。骨や神経に届くもの

ではない。動かす分には問題はなかった。その度に脳髄を貫く激痛を度外視すれば。

(……集中を乱したやダメ。今ナノマシンは制御をほとんど奪われてる……これ以上リソースは削れない)

楯無は瞳をルークから逸らさず、視界の端でビシヨップを見た。彼は楯無とルークの格闘戦から距離を置いている。妨害を続けるために安全を確保……というよりは、ルークの邪魔をしないようにしている、という印象を受けた。

(……彼は……ナノマシンのジャミングに全力を割いている。攻撃に加わる余裕はない)

先ほど騙されたことを思えば、その結論も誘導されているという可能性は残るが。だが仮にそうだとすれば、最早楯無に勝利はない。即ち死。ならば、そんな可能性は考慮するに値しない。早々に放棄する。

(なら……ナノマシンの制御を取り戻そうと足掻くことは、止めちゃダメ)

今の楯無は、ナノマシンの制御能力を大幅に減じている。当然だ。ISのサポートを最小限しか受けられないのだから、自分の肉体すら完全には制御出来ない人間が、どうしてナノマシンまで十全に扱えようか。

それでも、完全に制御を捨てることは出来ない。先ほどは、ラストイネイルの表面を覆うナノマシンを操作されて、防御を妨げられた。侵食が更に進めば、身体を自由を奪われる可能性すらある。そこまですぐにいかなくとも、ビシヨップが格闘戦に加わることになる。そうなれば捌き切れないことは明白だ。

ナノマシンにいくらかの意識を割きながら、鳩尾目掛けて伸びる腕を取る。打撃は効かない。投げは返される。ならば狙うは関節技だ。それも乱戦用の、手早くへし折る加減の効かない技。ルークの腕が伸びきった瞬間を見定めて、肘へ掌打を叩き込む。

「っ!？」

激痛。反射的に腕を引く。痛みの元を目で見て確認する暇はない。

手を握り、開く。痛い。そして熱い。熱がそこから逃げていく感覚。――出血している。直前に触れたルークの肘には、赤く濡れた鋼。さつきまでなかった筈。

ブレード（刃……違う。針……でもない！……棘スパイクだ！）

楯無は悟る。誘われた。敵は非武装非装甲だからといって、一切の侮りを持つてはいない。少しずつ、確実に、戦闘能力を削ぎにきている。それはとうに分かっていた。だが実際にその策に嵌まれば、どうしても冷静さを奪われる。

（左掌の裂傷……握力を大分殺されたわね……それに血で滑って、掴み技が使えない）

思考する。それは楯無に取り、心を落ち着かせるための儀式でもある。

故に思考する。次第に痛みは薄れ、顔には笑みが浮かぶ。それは楯無の心中を覆い隠す。鋼鉄製の仮面などよりよほど効果的に。

（さて、整理しましょう。彼らの目的は私じゃない。これは間違いない。なら玉碎覚悟の相討ち狙いは絶対にしない）

事実、ルークの足は止まった。誰がどう見ても、追い詰めているのは自分たちだ。この状況で余裕有り気な微笑みなどハツタリに決まっている。だがそう言い切れない何かがある。そう錯覚させることこそ楯無の狙いであると理解はしている。しかし、万が一。

意を決して踏み出したルークには、迷いが残っていた。あるいは恐れが。

（彼らは、ここで倒れる訳にはいかない。別働隊が任務を果たしてくれる？ そんな甘い考えには縋れないでしょ？ だって他は織斑先生・山田先生コンビ、それに真改ちゃんだもの）

間合いに入るまでの短い時間、ルークは通信を試みた。ナイト。応答なし。ポーン。応答なし。倒れたか、通信の余裕がないほどの激戦か。どちらにしても相手は怪物だ。目の前の少女が同類でないとうして言える。

（彼らは、自分たちの手で任務を果たさないといけない。余力を残して私を排除しないといけない。だから理で詰める。直感には従わな

い、従えない)

ルークの攻撃を重傷だけはどうにか避けて凌ぎ続ける楯無を見ながら、ビショップはもう一度、周囲のナノマシンを精査する。罨を警戒してだ。結果、怪しいところは何もなし。本当に？ もう一度。何もなし。ならばあの余裕はハツタリだ。その、筈だ。

(疑わしい点は徹底的に潰す。風潰しにする。……そこまでは望めない。そんなことまでしてられない。時間を掛けるリスクと、疑念を残して攻撃するリスク……この天秤の傾きが変わった瞬間、終わる)

楯無は思考する。ルークの拳を受け流しながら思考する。ビショップの妨害に抗いながら思考する。装甲が掠めた肌から滴る血を拭いながら思考する。ナノマシンの制御を少しずつ少しずつ奪われながら思考する。

思考が加速する。脳髓が加熱する。更に思考する。更に、更に、更に。

(今はちようど、左右で釣り合いが取れてる頃。ここが腕の見せ所。あなたたちが危険な戦場を渡り歩いてきたのと同じく、私は魑魅魍魎みたいな連中が跋扈している世界で、家を守ってきた。潜ってきた修羅場の「種類」が違う)

楯無の思考は、恐怖で狂うことはない。

楯無の思考は、苦痛で乱れることはない。

楯無の思考は、出血で霞むことはない。

楯無の思考は、疲労で鈍ることはない。

楯無の思考は、脳を破壊することでしか止められない。

(真つ当な勝負なら、あなたたちの圧勝、完勝。でも残念、私はそんな、勝てない勝負はする気がないの)

ルークが鋭いローキックを放つ。上に跳んでかわせば追撃で落とされる。バックステップ。逃げ遅れた左腿から出血。筋は無事。問題なし。

(私は十七代目更識楯無。私はIS学園生徒会長。あなたたちに、私を打ち負かす権利はない)

貫手を捌く。逸らし切れず、右上腕を抉られる。骨にまでは達して

いない。問題なし。

(あなたたちに……私を越える資格はないっ！)

鳩尾に膝蹴り。命中の瞬間に跳び、威力を殺す。それでも凄まじい衝撃。呼吸が止まる。浮いたところに右の打ち下ろし。左腕で防御。前腕から嫌な音が鳴る。受け止め切れずに左目を打撲、視界を失う。一時的なものだ、いずれ治る。問題なし。

床に叩き付けられる。身体がバウンドするほどの勢いを利用して素早く立ち上がるが、足に力が入らない。ふらつき、壁に背を着け身体を支える。

満身創痍と言う他にない姿になりながら、それでも楯無は微笑んでいた。ルークとビショップの背筋に凍るような悪寒が走った。近い感情を挙げるならば、恐怖。漠然とした、それでいて確信めいた予感。良くないことが、起こる。

「ルウウウークツ!!」

「ッー」

ビショップが叫ぶ。警告だ。何に対して？ 決まっている、目の前の、傷だらけの少女だ。

ルークは走る。何かは分からないが、何かを仕掛けている。ルークの猛攻を受けながら、ビショップの目を盗んで。信じがたいが、直感。は是と言っている。一瞬でも早く、潰す必要があると。

ビショップも同じ考えだった。ただ認識が違っていた。何かを仕掛けているのではない。既に、仕掛けを終えているのだ。

「……ふふ……」

ビショップの警告を、ルークがどう解釈しようとか関係ない。状況は既に詰み。ビショップの「気付き」が、僅かに遅かった。

(この女……イカれてやがる！)

ルークの腕が伸びる。拳は狙いを外れ、壁を虚しく粉碎した。楯無は壁に背を預けたまま、その場にしゃがみ込んでいた。笑いながら。

「ごんね、ん………でした」

べっ、と小さく舌を出し、ルークを見上げる。全身の関節部から火を噴く、鋼鉄の巨体を。



(ロクに制御も効かねえナノマシンを……自分の血に紛れ込ませるとは！)

苦悶の呻き声を上げながら動きを止めた古兵は。  
楯無と同じくらい、血に塗れていた。

「……私の、勝ちよ」

更識楯無の、返り血に。

現行のパワードスーツがISに劣る点は無数にあるが、中でも決定的なモノのひとつとして、密封性がある。

宇宙空間での作業を前提としたISは、露出が多く見えてもその実、装着者の全身を皮膜スキン・バリアー装甲が隙間なく覆っている。

パワードスーツはそうはいかない。装着者の身体を保護するのは、全て物理的な装甲だ。それを隙間なく施すことは事実上不可能。関節の可動域を確保するために、「装甲がない部分」は絶対に必要なのだ。

当然、それらの部分は柔軟かつ強靱な繊維で保護され、装甲の形状を工夫することで狙われにくくはしている。それでも、その守りは万全かと問われれば、否定せざるを得ない。

あるいは沼地や密林、砂漠といった過酷な環境が戦場であれば、関節部はより強固に保護されていただろう。だが市街戦用の機体にそこまでの保護は必要ない。むしろ重量が増える分、機動力や積載量が低下する。無駄どころか、邪魔になるのだ。  
つまるところ。

ルークのパワードスーツ、「フォウマルハウト」には、装甲に隙間があった。それは銃弾で狙うには射線が通らず、多少の水圧で浸水する程度のモノではなかったが、意志を持つかのように動く血液の侵入まで防げるほどのモノでもなかったのだ。

「グ、ヌウウ……！」

関節部の隙間から忍び込んだ血液が一斉に発火、アクチュエーター

の回路を焼かれた〔フオウマルハウト〕は最早、無双の剛力を発揮する機械鎧ではなく、装着者の動きを封じる拘束具に成り下がった。最新とはいえ尋常の技術で造られたパワードスーツに、ISのような自己修復機能はない。メカニックによる修理を受けなければ、正常な機能を取り戻すことはない。

(クソつたれ、体内まで調べられるかよっ……!)

ビショップが歯噛みする。「アンドロメダ」は電子戦機だ。その演算能力をビショップの技術と知識が操れば、攻防兼ね備えた無敵の電子要塞となる。だがその能力は、人体にまでは及ばない。楯無はそれを知っていた。

『ルークー！ 脱出しろ！』

『グウ……すまん』

ビショップはナノマシンへの干渉を止め、素早く楯無へ駆け寄る。とどめを刺すため、そしてルークへの追撃を防ぐためであった。空中に散布されたナノマシンは囷であり、今の楯無にはそれを操る力も残っていない。それどころか、自分自身を動かすことも出来ないだろう。かろうじて開いている右目は揺れており、ビショップの姿を捉えているとは思えなかった。

それは正しかった。楯無は力尽きていた。意識を失う寸前であった。ビショップも、そしてルークも、楯無の瞳には映っていないかった。楯無は、ビショップの後ろ、通路の奥から駆け込んで来る白い制服の少女を見ていた。

---

敵を捕捉。重装甲型一、軽装甲型一。

重装甲型は動きを止めている。その足下に傷だらけの楯無会長。刺し違えたか？ 否、胸が微かに上下している。死んではない。危険な状態だ。一刻も早く治療する必要がある。

——一刻も早く、敵を倒す必要がある。

「……………」

肩に担いだブレードに意識を向ける。長さ、重心を再確認。最適な斬撃部位を、計算ではなく経験で感じ取る。

「……………」

このまま走っているには間に合わない。得物はブレード一振り。敵に先んじる方法は唯ひとつ。投擲。

「……………疾っ！」

疾走の勢いを乗せて、ブレードを投げつける。刃は敵の背から翼のように生えた何らかの装置の半ばまで食い込む。それが重要な機関であろうこと、様々な制約により他と比べて薄い防御しか持たないであろうことは、容易に推察出来た。

「ぐお……………!?!」

不意の衝撃に、軽装甲型が体勢を崩す。足が止まる。距離が縮まる。間合いに入る。

「疾っ!!」

地を蹴り跳び上がる。脚を突き出し、ブレードの峰に叩き付ける。金鎚で釘を打つように、ブレードが押し込まれる。

「ぐあっ!?!」

ビギイツ!

なんとも嫌な音が鳴り、軽装甲型の背中の装置が切断された。ブレードはそのまま飛んで行き、天井に斜めに突き刺さる。回収は少々手間だ。ひとまず捨て置く。

「お前まさか、ポーンの……………」

軽装甲型の反応は素早かった。まだ空中に在る己に、金属で覆われた腕が伸びる。狙いは首。得物を失った今、パワードスーツに捕らえられれば脱するのは難しいだろう。

「っ！」

伸びて来た左腕を掴む。支点を得た身体は空中でもある程度の自由を取り戻した。右の蹴りを繰り出し、その勢いで敵の腕を捻る。

「く！」

脚が顎を捉える。流石に固い。多少の衝撃は通っただろうが、ダメージは期待出来まい。さらに身体を捻り、回転させて左の踵を叩き

込む。関節を極めながらの打撃だ、ダメージはなくとも体勢の維持は難しい。軽装甲型は前のめりに倒れ――

「舐めるなア！」

「!?」

軽装甲型は跳んだ。腕を捻られ同方向に蹴られる勢いを利用して、一回転した。腕を掴んでいた手を振り解かれ、同時に己の首を掴み、床に叩き付けられる。

「がっ!?」

その前に、首と小指の間に滑り込ませた手を跳ね上げた。幸い、小指一本で腕力と背筋力の全てを跳ね返せるほどのパワーアシストはないようだった。パキンと軽い音が鳴り、軽装甲型の小指が手の甲まで曲がり、首を締める握力が緩んだ。叩き付けも弱々しい。受け身と後転で衝撃を殺し、素早く立ち上がる。

「おいおい……随分手癖の悪い……お嬢さんだ、な！」

軽装甲型が小指を元の位置に戻す。声音から軽薄な男かと思ったが、なるほど軍人だ。根性は十分にある。

「あんた、さっきおっさんが言ってたヤツだな。確かに……ヤバいぜ、お前」

「……………」

おっさん……というのには、先ほどの兵士らか。かなりの手練れだった、一手違えば、倒れていたのは己だ。彼らがどのようなことを伝えたのかは知らないが、おかげでかなり警戒されている。最も、先の攻防に因る部分も大きいだろうが。

しかし。もう一人の敵――重装甲型の大男をちらと見る。彼は動かなくなつたパワードスーツを力ずくで剥ぎ取っていた。凄まじい怪力である。楯無会長が彼のパワードスーツを無力化してくれて助かった。もし健在であれば、少々手荒に相手をする必要があつただろう。

「……………」

「……………」

徒手空拳でじりじりと間合いを詰める己に、軽装甲型の男が舌打ち

する。彼の目的が、大男がパスワードスーツを解除するための時間稼ぎであることは明らかだった。彼自身も高い格闘能力を持つてはいるが、本職は前衛ではないのだろう。火器の類は見当たらない。恐らく電子戦機。となると、物理的な防御力と攻撃力を担う仲間が不可欠の筈。それが一時行動不能となれば、復帰まであらゆる手を尽くして凌ぐのは当然だ。

その目論見を潰すべく、更に一步。左足を前に出し、半身になりつつ前傾姿勢を取り、拳を握った右手を目の横に据える。思い描くは一匹の獣。身を縮めて総身に力を溜め、獲物に飛びかかる直前の姿。

「……………」

手早く片付ける。さもなくば大男が戦線に復帰する。パスワードスーツを失っているとはいえ、あの体格が既に凶器。戦闘技術も相当に高いと伺える。挟み撃ちを受ければ捌き切れない。

なにより。

倒れている少女を見る。

白い制服は血塗れだ。肌も、髪も。

嫁入り前の身体を傷物にするわけにはいかない。今ならばまだ、本音と十六夜によって痕も残さず治療出来る。

今ならば、まだ。急げば、まだ。

故に。

「……………斬る」

## 第102話 巨兵

「オオオオッ!!」

「ちいつ!」

右足を踏み込み、渾身の掌底を打ち込む。敵は一步退がりながらのジャブ。鋼鉄で覆われた拳にパワードスーツの力が乗ったそれは、引け腰でも十分な威力がある。

体格差の関係で、このままでは拳を受けるのは己だけだ。踏み込みの勢いを逆に利用され、昏倒は免れまい。迫る拳を潜るため、踏み込んだ足を更に前へと滑らせる。腰が低く落ちる。上体を捻り、それを腕に、手に伝える。

「ぐふっ……!」

手応えは固い。だが衝撃は装甲の内側にまで伝わった。男の呻き声が聞こえる。鳩尾を打たれ身体自体の動きを封じられれば、パワードスーツも役に立たない。しかしそれも一時的だろう、流石に完全な打撃とはいかない。

故に、畳み掛ける。

「疾っ!」

膝を上から蹴り下ろす。へし折るつもりだったが、男は咄嗟に膝を曲げ足を床から離し、それを防いだ。爪先が床を滑り僅かに体勢を崩しただけで、ダメージは与えられていない。

掌底で顎を打ち上げる。喉が晒される。予想通り、そこに装甲はない。急所でありながら、可動域の広さ、動きを妨げられた時の不便さから、首回りに十分な装甲を施すことは難しい。昔からの甲冑の悩みどころだ。その弱点に、右足刀蹴りを放つ。

「ぬうおっ!」

「っ!」

滑り込んで来た右手に阻まれる。顎を打ち上げた瞬間に、己の狙いを悟られたか。足を掴まれる前に膝を折り畳み、身を沈める。男は顎の下、喉元を庇っている手が死角になり、一瞬己の姿を見失う。

引き戻した右足が床に着くと同時、左足を真上に蹴り上げる。足刀

ではなく、踵の一撃。男の手は、前方斜め下からの攻撃を防ぐ位置にある。そこでは真下からの攻撃は防げまい。

「疾っ！」

「っ!!」

喉は狙えない。この角度からは不可能だ。だから顎を狙った。顎への打撃はそれだけで死に至らせることは難しいが、その前段階としてはこの上ない。顎を揺らされれば脳が揺れ、脳が揺れば身体が揺れる。揺れる身体では防御も反撃もままならない。

加えて、男の足は浮いていた。人の全体重を支える足の力を、余さず上へ受けたのだ。パワードスーツと言えども、軽装甲であれば僅かに浮く。浮いたその両足を、容赦なく刈る。水面蹴り。踏ん張りなど勿論利かず、体を落とす力で薙がれた足は、面白いように払われる。

「!?」

男が仰向けに浮く。それは一瞬のこと、すぐさま重力に捕らわれ、固い床に無防備に叩きつけられるだろう。それだけでも相当なダメージだが、十分ではない。先の歩兵部隊との交戦が、己に「追い返す」という選択肢を捨てさせていた。彼らは撤退しない。目的を達するまでは。

ならば、倒す。立てなくなるほど、戦えなくなるほど、徹底的に叩きのめす。

「疾っ」

鋭く息を吐き、宙に居る男の背後、即ち下へと潜り込む。このままでは押し潰されるだけだが、当然そんなことのためではない。

平衡感覚と身体の制御を奪われながら、男は反射的にもがく。伸びた腕が落下を受け止めるには余りに弱々しい空気を掴む。その腕を己が掴む。手首を掴み、関節を極めながら腕をピンと伸ばさせる。伸びきった肘の下には左肩。支点。

「オオオオ——」

腕を力一杯引き下げ、身体を力一杯押し上げる。関節の割れる音。アクチュエーターの破碎音。まだ不足。腕一本で止められるほどの覚悟ではない。

故に、跳ぶ。男を背に負って、上に跳び、前に回転する。

「——オオアアアツ!!」

ガシャアアン!!

男の全身は正面から床に激突した。回転する勢いと、少女一人の重みを加えて。然しもののパワードスーツもこれは効く。驚くべきことに、無事な方の腕で受け身を取っていたが、完全ではなかった。立ち上がるまでに要するのは幾秒か。己には一秒有れば足りる。

「っ!」

後頭部を思い切り踏みつける。くぐもった声が僅かに聞こえ、床を掻いていた手が力を失った。

まず一人。残る大男を倒すべく振り返る。

既に、目の前に居た。

「っ!」

静かに、低く、そして素早く。パワードスーツに注意を向け過ぎていた己が全く気付かない内に、大男は自らのパワードスーツを解除し、間合いに入っていた。タツクルだ。

「ぐっ……!」

「ぬうああっ!!」

躲せる距離ではなかった。肩で鳩尾を突き上げられ、腰と左脚を取られる。身体が浮く。大男の頭は左脇に潜っており、拳は届かない。無防備な背と腹には肘なり膝なり打ち込めるが、体重の乗らない打撃が筋肉の鎧を貫けるとは到底思えない。

大男が己を持ち上げる。意図が読めた。ひとまず、反撃による脱出を放棄。今は耐えることだけを考えなければならない。欲をかけば死ぬ。

「ぬうん!!」

予想通り、床に叩きつけられた。直前に首に力を入れ頭を守り、全力で受け身を取る。

「ぐあっ……!」

それでも、意識が遠のいた。歯を食いしばり繋ぎ止める。霞む視界に影が差す。腹に無遠慮な重み。マウントを取られた……!



「ふっ！」

「っ！」

巨大な拳が振り下ろされる。幾多の打撃を重ね鍛えられた骨格、それを支え続けた筋肉。威力は鉄槌に等しい。まともに受けければ防衛ごと粉砕される。顔を狙った一撃を、首を曲げて避ける。

二撃目。狙いはまだ甘い。押し倒した己を拘束しつつ反撃を封じるために、無理な体勢から連撃を放った代償の不安定。本来なら、体格で大きく劣る相手にそれは隙とはならない。

……今回は、相手が悪かった、と。些かの自負を持って、言わせてもらおう。

「疾っ！」

「ぐっ!!？」

落ちて来る右拳の手首を取り、引く。渾身の力を込めた一撃は顔を逸れ、床を打った。砕けても不思議ではないほどの強打だったが、男の拳は耐える。耐えながら、すかさず左拳。防御した右腕が軋む。次いで、右拳。

ここだ。

「っ!!」

歯を食いしばり、首と腹筋に全力を込めて、起き上がる。顔を目掛けて振り下ろされていた右拳は、その僅か上、額に命中した。言ってしまうえば頭突きによるカウンターである。

「がっ！」

己自身も相当な打撃を受けたが、相手の右拳の握りを緩めることに成功した。その親指を掴み、へし折り、腕ごと捻り上げる。

「ぐううっ!!」

激痛もさることながら、関節を極められたことで大男の身体が浮いた。空間的にも時間的にも僅かな隙間。逃す筈もなし。

「疾っ！」

大男の身体の下から足を抜く。剛腕を支点に出来ることも大きかった。期待以上の早さで自由を取り戻した右足は、今は己の胸元に膝を抱え込む形。これを跳ね上げ、大男の顎を打つ。

「ぐおー！」

ここで追撃を止める道理はなかった。更に浮いた隙間から、残る足を引きずり出す。同時に、掴んでいた親指を手放し、巧妙に小指を掴み直す。一切の躊躇なく、折る。

「ぎっ……いー」

続け様の激痛に、大男はついに身体を硬直させた。絶好の機。容赦なく追撃する。

今度は逆方向に腕を捻る。大男は面白いほど体勢を崩す。両膝を着いた姿勢で、右手は弄ばれ、身体は前のめり、背筋だけで支えるには腹筋と胸筋に力が入り過ぎている。倒れないようにするには、左手を——この状況で唯一の反撃手段を、自ら床に着き動きを封じる他にない。

その瞬間を狙い澄まして、膝を叩き込む。捻った右腕の、ピンと伸びた中間地点にある、外側を無防備にこちらへ向けた肘に。

「疾っ!!」

「が、ア!!」

大男の肘が本来とは真逆に曲がる。更なる追撃を加えたかったが断念し、跳び退る。床を蹴った爪先の下を突風が掠めていった。大男が左手だけで身体を支えながら放った、大鎌のような水面蹴りだった。

「……………」

「づ、ぬう……貴様、容赦がないな……なさ過ぎる」

大男は数本の指と肘を折られた右腕を庇いながら、それでも構えた。眼には未だ衰えぬ闘志。なるほど己の有り様を鑑みれば、ようやく対等に持ち込めたに過ぎない。

大男は自らの体格に合わせ多少の崩しアレンジを加えているものの、正統派のマーシャルアーツの使い手だ。対する己は、奇襲・奇策の繰り返しで敵の能力をひとつひとつ潰している。

手札を全て奪われるのが先か、使い切るのが先か。勝負はそのような様相に——

「……………っ!」

——動揺を顔に出さないよう努める。だが無駄だった。己が気が付き抗うよりも僅かに早く、己の足は力を失い、膝を着いていた。

……重い衝撃を、頭部に立て続けに受けたのだ。その後、余りに早く、余りに速く動き過ぎた。

……脳が揺れている。指令を正しく伝達出来ない。身体に力が入らない——！

「ちい……い……」

急ぎ体勢を立て直す。遅過ぎる。敵の狙いを俄に悟った。己の攻撃は敵の身体を的確に破壊し、戦闘力を素早く効率良く削り取った。しかしそれは致命に至るものではない。敵の打撃はその真逆。重い衝撃を身体は耐えられる。だが例え身体が耐えたとしても、頭蓋内に浮いているだけの脳に、その衝撃は届いてしまう。ごく短い時間、己の戦闘力は地に落ちる——！

「しいっ!!」

男が走る。間合いに入るのは一瞬後。繰り出す攻撃は何か。右腕はまさか使うまい。左手による拳打か、いずれかの脚による蹴りか、再度の体当たりか——

「っー」

身体を僅かに反らせて勢いづけた姿に、意図を読み取る。直前に男の横面に掌打を打つが、その程度で止められる筈もなし。床を蹴って逃れるか。駄目だ、まだ力が戻っていない。後ろに倒れ込むようにして、少しでも衝撃を逃がすべく足掻く。

「ぎっ……い……」

額と額がかち合った。猛牛の突進にも劣らぬであろう、強烈な頭突き。吹き飛ばされて床を転がる。受け身も取れない。痛みには耐えられるが、生憎このダメージは意志力や根性でどうにかなるモノではなかった。

「ぐ、お、お……い……」

視界がぼやける。そして赤く染まる。目に血が入ったか。しかし量は少なく、脳漿も混じってはいない。頭蓋が割れ砕けていないだけ僥倖だ。

床に手を突き起き上がろうとする。先の一手がどれだけ効いているか分からない。不発であったなら、転がってでも追撃から逃れる必要がある。難儀して身体を起こし、顔を前に向けると……男はふらつきながら、耳を押さえていた。どうやら上手くいったらしい。

耳を平手で適切に打てば、三半規管を狂わせる。初撃を受けるしかないのなら、追撃を予め潰す。おかげで首の皮一枚繋がった。男が顔をしかめて頭を振る内に、立ち上がる。

「……ぐ……！」

……立てない。どうにか膝立ちまではいったが、立ち上がるには後数秒を要するだろう。無論、己のささやかな妨害はそれまで敵を抑えつけてはいられない。体格、膂力、共に大きく劣っているのだ、仮に敵も立てないとしても、這ってでも近付いて来るだろう。手が届けば、今度こそ逃れる術はない。

「」

打開策を考える。案の定、敵は今にも立ち上がろうとしている。そのまま回復を待ってはいけません。間にも合合わない。どうしても、少しでも早い決断が必要だ。

一時撤退。却下。己自身の離脱が可能か否かは別として、いまだ意識の戻らない楯無会長がいるのだ。置いて逃げるなど論外であった。

回避。却下。言うことを聞かない足で男の攻撃を避けることは不可能だ。身体が大き過ぎる。体捌きだけでは、どうしても攻撃範囲に捉えられる。

防御。却下。まず踏ん張りが効かないため、打撃を受ければ吹き飛ばされる。それならまだいい、この状況が長引くだけだ。だが掴まれた場合、今度こそ死ぬ。

攻撃。これだ。

「オオッ!!」

正直に言おう。己は実際には、何も考えてなどいなかった。

己の思考能力など高が知れている。命の遣り取り、凶器と狂気を交わらせる一瞬で、相手が己に劣る解答しか見出せないと期待するなど勝算の放棄に等しい。

故に己は、勝ちを拾うため思考を捨てる。本来無限に存在する筈の選択肢を、予め極限まで削ぎ落とす。この身に許された単一技能を、常に最速で繰り出すために。

至極簡単なことだ。一本道で迷う者はいない。選択肢がひとつしかない問題を間違える者はいない。思考せずとも身体は動く。初めから決まっている答えに、選ぶという意志すらなく行き着く。

己は、考えていたのではない。ただ虎視眈々と、己が牙の届く距離まで敵が来るのを、待っていたただけだ。

「ぬ、う?」

男が驚愕に呻く。必死に立ち上がって放った決死の拳が空を薙いだからだ。己が避けたのではない。それを為すだけの力はまだ戻っていない。己の足に出来たのは、精々——前に倒れることだけだ。

「……疾っ!!」

そして倒れ際、足よりは幾分か自由の効く手を、斜め上へと伸ばす。顔には僅かに届かない。届いたとしても、丸太のような首に支えられたそれには、目や耳程度しか効果の見込める部位はない。そこは先ほど耳を打ったせいとか、残る左腕に守られている。

狙いは顔の下、胸の上。喉仏の下、鎖骨の間。

——頸窩。

そこに、貫手を突き入れる——!

「げ、ご、ばあっ……!!」

男が奇つ怪な悲鳴を上げ——ようとしながら、のたうち回った。……我ながら、悪逆非道と謗られても仕方ない一撃である。男は骨格や筋肉のみならず皮膚まで分厚く、危うくこちらの指が折れるかとも思ったが、それは杞憂だった。

今は己もまた床に倒れ、致命的な隙を晒している。だが男は攻撃どころではない。呼吸器系にダメージを受けると、意識は鮮明なまま凄まじい苦しみを味わう。呼吸がまともに出来ず、身体も動かなくなるのだ。つまり、追い詰めているのは己。追撃をかけるべく、未だ万全の力が戻らない腕で床を押し、背筋と併せて上体を大きく跳ね上げる。

「……………」

対峙すれば山のような威圧感を放っていた巨軀も、うずくまっていたは役に立たない。あれほど高く、遠くに見えた頭が、今では目と鼻の先。更には言えば己のそれよりも低い位置にある。

腕を振りかぶる。支えを失った上体は倒れ始める。背筋に入れていた力を、そっくりそのまま腹筋へ移す。落下が加速。許される限り身体を捻る。更に加速。

「…………アアアアッ!!」

鈍のように振り下ろした肘が、狙い過たず男の後頭部を捉える。頭はそのまま床と肘に挟まれ、鈍い音を立て——漸く、男は意識を手放した。この男の頑強さを思えばまず死にはすまいが、そうすぐには目を覚まさないだろう。…………そうでなくては困る。これでもしすくと立ち上がられたら、己としてはもう打つ手がない。暫くは寝ていてもらいたいところだ。

「……………」

念の為に二撃目の準備をしようとしたが、腕が震えて満足に動かない。仕方なく、ゴロゴロと転がって男から距離を取り、暫く経つて…………確かに気絶していると確信する。

「…………ハアーツ……………」

残心もせず、大きく息を吐く。これで、己が千冬さんから託された任務は終えた。楯無会長の怪我を思えば、一刻も早く連れ帰るべきなのだが…………生憎、身体が自由を取り戻すまでまだ少し時間が必要。無理をして運ぼうとし転びでもすれば目も当てられない、今は堪えて回復に努める。

脱力させた四肢の末端まで意識を伸ばし、調子を確認しながら——その意識を、ほんの少し、別のことへ向ける。

(…………後は、任せた…………)

三手に分かれた敵の最後のひとつ。IS一機、最少にして最強の戦力を相手取る人を想う。

負けはすまい、負けはすまいが——あの人もかなり熱くなりやすい気質の持ち主であるので、不要な怪我など負ってはいないだろうか。

「……………」

……まったく、どの面を下げて。額から流れる血を拭う。大分、戻ってきた。もう良かろう、そう判断し立ち上がる。

そしてまだ目を覚まさない生徒会長殿の下へ歩きながら、戦場を振り返る。

——兵<sup>つわもの</sup>共よ。久方ぶりに、随分と楽しませてもらった。願わくば、また戦場で相見たいものだ——

(……………しまった……………)

ふと、思い出す。昇り過ぎて忘れていた。

(……………どうやって運ぼう……………)

片腕しかないので、楯無会長を抱え上げるには米俵よろしく肩に担ぐしかないのだが……………それでは今の彼女には負担が大きい。

はて、どうしたものか。

結局、大男の脱いだパワードスーツの背面をそり代わりにして引張って行くことを思い付き、天井に突き刺さったままのブレードを三角跳びで回収し、それでパワードスーツを解体し楯無会長を乗せるまでに数分を無駄にしてしまった。

……楯無会長には、後で謝ろう。

## 第103話 鉄風雷火

「……降伏しろ。ブレードは残り一本、それが折れては防御も出来ない。いい加減分かっただろう？ 無駄な抵抗だと」

「ふん、もう息切れか？ だらしないことだ。私が倒してきたヴァルキリーたちは、呼吸が止まろうが心臓が止まろうが食らいついてきたぞ」

未だ傷ひとつないISを前にして、千冬は壮絶に笑う。凄絶に嗤う。全身から、滝のように汗を流しながら。

「強がるなよ、ブリュンヒルデ。体力が尽きているのはお前の方だろう」

「見くびるなよ、ニュービー。この程度は疲労の内にも入らん、私たちにとってはな」

「……………」

あからさまに痩せ我慢な千冬の言葉に、騎士ナイトの眉がぴくりと動く。ナイトとて愚かではない、千冬の言葉が挑発であることは初めから見抜いていた。

だが挑発とは、そうと分かっているも乗ってしまうモノをこそ、そう呼ぶのだ。

(…………ふん)

ナイトは自分の心がささくれ立つのを感じた。千冬がヴァルキリーたちを引き合いに出すたび、言いようのない苛立ちが募る。

ナイトには優れた適性があった。優れた才能があった。優れた能力があった。だがどれも、一番ではなかった。表に出したつもりはなく、任務に持ち込むつもりもないが、それでも確かに——表舞台上華々しく活躍するIS乗りたちに、強い憧れがあった。

その最たる例を前に、口を開くべきではなかったと、今更ながら後悔する。恐らくは、あの一瞬で悟られたのだ。彼女が胸裡に抱え込む、深い劣等感コンプレックスを。誰よりも多くの羨望を集め、誰よりも多くの敗者を生み出した千冬は、絶えずそれを向けられてきたのだから。

「…………減らず口を」



話すべきではない。言葉を発するべきではない。これ以上はまずい。目の前にいるのはただの障害、ただ黙って排除するべきだ。感情を差し挟んではならない。付け入る隙を見せてはならない。

分かっているにしても、止められない。

「我々は軍人だ。英雄ではない。貴様の意地なんぞに付き合うつもりはない。……最後だ。降伏しろ、ブリュンヒルデ」

「生憎だが、私たちにはギブアップなんて許されていないんだよ、兵隊。そんなものはルールブックに書いてあるだけの落書きだ。負けるのは、まあ仕方がないさ。だが諦めるのはごめんだ。お前には分かんたろうが」

「……貴様」

ナイトはIS乗りになりたかった。少女の時に直に見たモンド・グロツツ、あの場になんとしても辿り着きたかった。観客席ではなく、その中心に。その為に軍に入った。女性は希望すれば、ISの適性検査を受けることが出来るから。その結果如何では、ISの訓練を受けられるから。IS学園に入学するには僅かに遅かった彼女にとって、それしか方法がなかったから。

「……いいだろう。ならば望み通り——叩き潰してやる」

彼女は優秀だった。適性も、才能も、能力も。たがそれらは、一番ではなかったのだ。適性も、才能も、能力も、一番優秀だったのは……彼女が望み夢見た、あの舞台への切符を手にしたのは……彼女ではなかった。

「来い、小娘。格の違いを教えてやる」

憎たらしい顔で、千冬が手招きする。ナイトの忍耐はついに限界を迎えた。顔も、声も、背格好も、性格もまるで違い、今はISさえない目の前の女が、かつて彼女から全てを奪った女に重なったからだ。た。

アメリカ合衆国代表、イーリス・コーリングに。

「ハアアアアッ!!」

絶叫に近い雄叫びを上げて、ナイトは突進する。

振り上げるのは左の拳。パワーアシスト、スラスターにより得たス

ピード、握り締めた装甲の硬さと重さ。重戦車を正面から粉碎する一撃だ、人間が受けければ跡形も残らない。

なのに。

「おおおっ！」

白刃一閃。ナイトの拳は僅かに逸らされ、勢いを殺がれ、生み出された小さな空間と時間が千冬の生存を受け入れる。

受け流し、防御し、回避する。三位一体の超絶技巧が、死神の鎌を退ける。

(またっ……！)

凌がれるたび、ナイトは齒軋りする。絶望的な実力差があることは分かっていた。どれだけ旧式だろうと、ISを装備されたら勝ち目は無いと考えていた。

だがまさか、生身でも仕留め切れないとは、想像すら出来なかった

(認められるか、こんなことがっ！)

あの地獄のような訓練はなんだったのか。夢への道が絶たれても、諦め切れずに僅かな希望に縋って足掻いた日々はなんだったのか。才能を覆して見せると意地を張り、必死に続けた努力はなんだったのか。世界最強とは言え、これが人の身で辿り着ける領域なのだとしたら――

(なら、私はっ……私たちは一体、なんなんだ！)

「う、おおおっ！」

左の拳。怒りか、恐怖か、絶望か……ナイト自身にも分からない感情は、必要以上の力を込めさせた。千冬は見逃さない。大振りで狙いの甘い攻撃に、わざわざ神経をすり減らすほどの技で対する必要はない。流れるような体捌きで拳の軌道上から避難しつつ、ブレードを拳の装甲に引つ掛けるようにして、同じ方向へ力を加える。

ナイトが体勢を崩す。ただでさえ過剰な力に更なる力を加えられれば、制御など出来よう筈もない。ナイトはまんまと挑発に乗せられ、罠に嵌まった格好である。

それでもナイトには、いくらかの冷静さが残っていた。明確な失敗

を契機に取り戻したと言つてもいい。その冷静さで、ナイトは今こそが好機であると判断した。

挑発し、大振りを誘い、崩す。この流れが完璧に決まったのだ。反撃が来る。それも大技の。通常であれば絶体絶命、どれだけの無様を晒そうと防御ないし回避に全力を注ぐ場面である。だがナイトにはISがあり、千冬にはない。この差の前には、他一切の不利など塵芥同然だ。

だからナイトは、防御するでもなく回避するでもなく、攻撃した。千冬の反撃など、どうせこの身には無効。ならば無視する。相手が大技を使って来ると確信が出来、それが自分には効かないことも分かっている。今攻めずしていつ攻める。逆に粉碎して、この世界最強に屈辱を味わわせてやる――

冷静さを保っていられたのは、そこまでだった。

「――おおおっ！」

ナイトは見た。その刃を、その顔を、その瞳を。

無駄。無効。無意味。それは絶対の真実だ。何も間違つてはいない。間違っているのは千冬であり、その意志である。

そう。相手が絶対だろうと真実だろうと、全身全霊を持って斬り伏せる。

そんなモノが、そんな存在が。

「何かの間違い」でなくて、一体なんだと言うのか――

「ひ、い――」

ナイトは防御した。防御と呼ぶには余りに拙く、空いた手で己の首を庇った。その瞬間が、ナイトの敗北だった。

手が間に合わず、無防備な首に打ち込まれた刃は。結局、ナイトに傷ひとつ付けることは出来なかったのだから。

そう。それはつまり、敗北だ。

ナイトは、一瞬、確かに、織斑千冬に屈したのだ。

「――が、はあ……っ！」

ナイトは自分の首に触れる。胴体の上に頭部があること、あるいは頭部の下に胴体があることを確認する。恐怖に見開いた目で、何度も

確認する。

その視界の端で、折れたブレードの切っ先が床に突き刺さった。千冬が持っていた最後の一振り。意識のどこかで、離れていく足音が聞こえる。走っている。逃走だ。誰が？ 一人しかない。

「――」  
ナイトの心に生じた亀裂に、現実が泥水のように染み込んでいく。武器を失い、一目散に逃げる敵。直撃を受けてもダメージ皆無の自分。移動能力の差は歴然、追えば瞬く間に追い付ける。そして敵にはもう、流石に、攻撃を凌ぐ術はない。

殺す。殺さねば。あの化け物を殺さねば。今しかない、今しかないのだ。何としても殺さねばならぬ。逃がしてはならぬ。生かしては置けぬ。

「――」  
ナイトは追った。迷いはなかった。正確に言うなら、正常な判断力を失っていた。

一人の例外を除いて最もISを知る千冬が、本当に、生身で、単身で、ISに立ち向かうだろうか？

そんなバカな。話だけを聞けば誰もがそう思うだろう。

いや、もしかしたら。千冬の状態を見れば、あるいはそう思う者もいただろう。

いずれにせよ、そんな与太話を心底から信じる者はいまい。つまりは、この状況は誰だって罠を疑う。

だがナイトは、織斑千冬に敗北した彼女は、心の底から信じてしまったのだ。織斑千冬は、本当に、生身で、単身で、ISを打倒すると。

「――殺す」

スラストターが火を噴く。逃げる背中に手を伸ばす。一瞬早く、千冬が角を曲がる。ナイトも続く。その先には下ろされた隔壁。千冬は予め空けておいたのであろう、人一人がどうにか通れそうな穴をスライディングで潜り抜け、見えなくなつた。ナイトは加速し、拳を振り上げて振り下ろした。隔壁に大穴が空き、ナイトは再び千冬の姿を捉

えた。もう一人の姿も。

「……………え？」

追ってくる。追ってくる。追ってくる。

狙い通り、予定通り、作戦通り。

喜ばしいことだ、実に喜ばしいことだ、腹を抱えて笑い転げたいくらいだ。

だが私の顔に浮かぶのは、何とも無様に引きつった笑みだった。

(……………追い付かれる!?)

追って来て貰わなければ困る。追い付かれるのはもつと困る。体力は限界、武器はなく、敵は手加減出来る様子ではない。追い付かれれば死ぬ。

走って逃げる。飛んで追いかけて来る。距離は見る見る縮まる。間に合うか。間に合うさ。

(……………間に合わせるっ!)

間に合わなければ全てが無に帰す。私の指示に命を懸けた二人の教え子が、私を信じて無防備でいる同僚が、ISの絶対暴力で無慈悲に蹂躪される。

それが許せるか。それを許すのか。この私が。この織斑千冬が。

否、否、否——!

(許せるわけが、あるかつ!!)

尽きた体力を絞り出し、角を曲がる。後ろ髪を鉄が掠め、うなじに風が吹き付ける。殺意の冷たさに身体が震える。目の前には分厚い隔壁。接地部分の一部には、くり抜かれたような穴。ゴールテープを幻視。走りながら仰向けに倒れ、床を滑り穴を潜る。

隔壁を抜けた先には、私を追い回しているモノとは別のISが鎮座していた。武装は既に完了、展開済み、いつでも発射可能。普段の彼女からは想像も付かないほど凜とした相貌が、引き絞られた矢のような眼差しが、厳粛に、隔壁の先から迫り来る敵を狙っている。天使か。

……今何か雑念ノイズが入ったな。

「……ふう……っ。さて、私の役目は終わりか」

真耶の姿を見た途端、脚に溜まっていた力が抜ける。間抜けめ、緊張を解くにはまだ早い。最後に活を入れ、スライディングから素早く起き上がり跳び前転し真耶の横を抜ける。視線を交わす必要すらない。彼女の手の内は、私が誰より知り尽くしている。

「――ぶちかませー」

私が耳を塞ぐと同時、片膝をついた姿勢の真耶は、発砲した。

私が世界最強となった時に使っていた専用機、「暮桜」は、第一世代型の機体だ。武装が近接攻撃用ブレード「雪片」一振りであること、接近戦及び接近戦に持ち込む為の能力を伸ばすため幾つかの機能がオミットされていたことなど、方向性は一夏の「白式」に似ていると言えるだろう。しかし当然、その性能差は歴然だ。第一世代型と第四世代型の間には、レシプロ戦闘機とジェット戦闘機ほどの開きがある。ISの進化は、兵器としてすら歪なほどに速い。

そして真耶が本来得意としていたISは「打鉄」、第二世代型の機体の中でも比較的初期に作られた日本の傑作機だ。この機体も、総合力では「暮桜」を大きく上回る。だが第二世代型後期の傑作機である「ラファール・リヴァイヴ」と比べて、明らかに劣る点がひとつある。

それは、「FCS」火器管制システムの性能だ。今でこそ細かなバージョンアップを繰り返した結果として、ほぼ全ての「打鉄」のFCSは高性能のものに載せ換えられているが、開発された当時はまだまだ粗悪で、他国が次々開発していく最新型ISの機動力に追い付けないことも多かった。

そんな中、真耶はFCSの性能を補うある戦術を独力で生み出し、これを以て並み居る強敵を次々撃破し、私と国家代表の座を争っていた。数々の国際大会でも猛威を振るい、海外の選手たちからも「東洋の魔女」「邪眼の狩人」「超重量級胸部装甲」と畏れられた。その戦術

は、真耶が引退してしまったこと、機動力が上がった現在の I S には通用しないであろうこと、そもそも F C S の性能向上により必要なくなったことなどから、結局、真耶以外に扱う者はいない。

そんな、一時期有効だっただけの、今では誰も使わず使えない戦術を、軍人が知っているだろうか？ よしんば知っていたとしても、対処法を身に付けているだろうか？

……まあ、万が一知っていて、対処法も身に付けていたとしても。既に、どうしようもないがな。

第一射。膝立ちになった脚部装甲が開き、ずらりと並んだ散弾発射装置が露わになり、大量の炸薬により無数の散弾が高速で撒き散らされる。視界を埋め尽くす散弾に、敵 I S が怯む。避けられはしない。だがダメージを減らすことは出来る。敵は先ほどまでの暴走ぶりはどこへやら、すぐさま冷静さを取り戻し、散弾の密度が薄い場所へと飛び込んだ。身体を丸め、手足の装甲を斜めに構えて散弾を弾く。

続いて第二射。両肩に担いだグレネードランチャーから榴弾が発射される。小型で爆発範囲は狭いが、弾速が速く、直撃すれば凄まじい衝撃を与える。弾速が速いと言っても、榴弾にしては、だ。ライフルやマシンガンのそれと比べれば明らかに遅い。この狭い通路でも、普通に撃てば躲かれる。だが敵は今、回避行動をとった直後であり、防御姿勢でもあるため身動きが取れない。榴弾は腕と腕、足と足の間、に直撃し、守りをこじ開けた。

そして第三射。大口徑スナイパーライフルによる一撃。言うまでもなく、本来ならばこんな通路に持ち込むような兵器では断じてない。もはや砲と呼ぶべきそれは、長大で重く、取り回しが悪過ぎる。どれほど腕に自信を持つスナイパーでも、この状況で狙撃銃に命を預けることは出来ない。ではなぜ、真耶はそんな武器を選んだのか。

真耶が求めたのは、射程でも精度でも弾速でもなく、貫通力だからだ。

散弾、榴弾、徹甲弾。三種の弾丸が、瞬きにも満たぬ間を置き放たれる。弾速の違いで、第一射に、第二射が、第三射が次々追い付いて来る。着弾は——全くの同時。

「——っ!!?」

鉄風と爆音と衝撃に貫かれ、敵は声もなく絶叫を上げる。私の攻撃にはびくともしなかったシールドエネルギーが一瞬で底を尽き、吹き飛ばされ、倒れた。

真耶の影に飛び込んで跳弾と破片と爆風をやり過ごした私は、耳を塞いでなお三半規管を狂わされ、ふらつきながら立ち上がる。油断なくボルトハンドルを操作し次弾を装填していた真耶の向こうで、敵は動かない。ISに呼び掛けていた。自分の敗北に納得が行かないのか、譫言のように。

「な、なん……なんだ、今のは……あんな技は、戦術データベースのどこにも……」

「伝説だからだよ。使える者はただ一人、その人物は引退し、現行の機体では使う必要すらない。そんなモノのためにわざわざ対策など練らないさ」

伝説。真耶にとっては複雑な思い出なのだろう、何やら微妙な顔をしているが、しかし私にとっては伝説と言うより他にない。

「私たちが国家代表の座を競っていた頃は、まだ訓練方法すら確立されていなかった。今ではあり得ないが、複数の機体を乗り換えることもざらだった。何せ修理と補給と調整には時間がかかるからな、いちいち待っていられなかつたんだ。そんな根性論丸出しの時代は、色々悪い手本を生み出したが……ひとつだけ、メリツトがあった」

耳鳴りが収まってきた。私は起き上がろうと足掻く敵に近づきながら、得意気に語る。

「とにかく経験値だけは積めたんだ。無論、歪んだ癖がついてしまい、その後修正出来ず転落していった者も多いが……そんな中で、誰よりも真面目で勤勉だったある候補生は、経験の中からマイナスをひとつひとつ丁寧に取り除き、プラスだけを吸収していった。そしてその類い希な観察力で、あるパターンを見つけ、それを元にある技を編み出



した」

敵は倒れたまま、右腕を持ち上げた。何か武器を取り出そうとしたが、バース・スロット拡張領域を開くだけのエネルギーも残っていないようだった。

「彼女は日に何度も繰り返す模擬戦の中で、パターン予測と技の精度を磨き続けた。誤差すらも予測の範疇に収められるようになった頃には、まさに必殺技になっていたよ」

この敵は私しか見ていなかった。腕に相当な自信があったのだろう。学園側のISが出て来ても、制圧ないし撃退するだけの自信が。それが自惚れであると、丁寧に教えてやらねばなるまい。

「第一射、散弾。敵は回避か防御を強いられる。回避するにしても、散弾のバラけ方から回避先は自ずと限定される。そこに第二射、榴弾。破片を入れる代わりに炸薬を増やしたコンカッショングレネードは、強烈な衝撃で体勢を崩し防御をこじ開ける。回避も防御も封じた所に第三射、徹甲弾。元々近距離まで誘い込んでから使う技だ、ほとんど減衰されていない絶大な貫通力は、絶対防御を強制的に発動させる」

一本ずつ指を立て、順番に説明してやる。言うだけなら簡単なそれは、実際には恐るべき反応速度と判断速度を要する絶技だ。しかし実際にそれを受け、完膚無きまでに叩きのめされたこの女からすれば、机上の空論と言いついて捨てられるわけがない。

私は堪えきれず、今年最高に悪い笑みを浮かべて、絶望する女に言うてやった。

「かつてこの私を何度となく追い詰めた、山田真耶の「三段撃ち」だ。……お前如きに、凌げるものかよ」

## 第104話 電腦ダイブ

操縦者が気を失い、ISが完全沈黙したことを確認すると、千冬はその場にへたり込み胡座をかいた。痩せ我慢も強がりも限界だ。それらをして見せる相手も気絶したので、遠慮なく気を抜いた。が、その姿に心配する者が一人。

「せ、先輩っ。大丈夫ですか？」

「ん……ああ、ああ。大丈夫だ、これくらい。疲れただけだ……」

己の命を救った守護天使に、背中を向けたまま手を上げて応える。今は顔を見せたくはなかった。最後の強がり、ではなく、照れ隠しに近いものだった。それでも、付き合いの長い後輩にはうつすらと察せられた。苦笑する気配を背に、千冬は大きく息を吐く。

「……昔を思い出すな」

「そうですね」

「……しかし、鈍<sup>なま</sup>ったかな。トレーニングを怠ったつもりも、衰えるような年齢でもないんだが」

「毎日、生徒さんのお相手で精一杯ですから。自分のことだけ頑張っていたられた頃みたいには行きませんよ」

「……そうだな」

戦闘後にしてはやけに穏やかな気持ちで、二人はしばし語った。最後の一仕事前の、ささやかな休憩だった。

そこに、固い床を固い何かが引つ掻く音が近付いて来た。咄嗟にライフルを構えようとする真耶を手で制し、千冬は若干呆れを含んだ笑みを音の方向へ向ける。

破られた隔壁を難儀そうに越えて現れたのは、鉄板に更識楯無を載せて引き摺る井上真改であった。

「……おい。こちらには来るなど言っただろう」

「……はて……」

「ふん、不良娘め」

「……くく……」

「……随分派手にやられたな」

「……お互い様……」

「くつく、まったくだ。返す言葉もないよ」

「……………」

真改は通路の惨状を見やり、そこで行われた戦闘がどのような内容であつたか、概ね悟る。一方的な暴虐。逃げ続けるばかりの闘争。そこから、一方的な銃撃。決着は一瞬。手の平の上のように見えて、実際は紙一重の勝負。そういった事もままある。結局のところ、どちらが先に致命の一撃を入れられるか、それが勝負なのだから。

「ところで、そいつは大丈夫か」

「……………」

「……そうか」

頷く真改に、千冬は小さく安堵の息を吐く。真改の様子から分かつていたことだ。確認することで不安を払拭した千冬は親指で通路の奥を示す。

「疲れているところすまんが、もう一仕事頼む。オペレーションルームへ連れて行ってやってくれ。布仏なら治療出来るだろう」

「……………」

「私のことは心配するな。少し疲れただけだ……明日はひどい筋肉痛だろうが、まあ、慣れたものさ」

「大丈夫ですよ、井上さん。せんぱ……織斑先生には私が一緒に居ますし、他の襲撃して来た人たちも拘束しておきます」

「……………」

真耶の言葉に真改は会釈し、楯無を——楯無を載せた鉄板を再び引き摺り始める。

(なんだあれ……)

(なんだろうあれ……)

どうにも気の抜ける光景であつたが、二人は何も言わなかつた。それだけの余裕はなかつた。

「……さて。それではさっさと、片付けるとしようか、山田先生」

「そうですね」

山田先生。その呼び名に、一抹の寂しさを覚えながら、顔にも態度

にも微塵も出さず、真耶は手を伸ばす。鋼鉄に覆われたその手を、千冬は一瞬も躊躇わずに取り、立ち上がった。その時には既に、千冬は「織斑先生」になっていた。

「本音……セシリアのバイタルは……どう……？」

「んん、バイタルには異常ない……かな？　でも、これは……脳波？　違う、かな……何か、こう、ノイズ？　みたいなのが」

「……やっぱり」

学園に対するハッキングを迎撃するため、電腦ダイブを行った少女たち。異変はすぐに現れた。少女たちが脳内で見ているモノを、外界からもある程度は共有出来るよう数値化されたモニターに、僅かな乱れを認めたのだ。

「……ISの、コアのブラックボックス部分の影響……？」

「……違う。かな」

「うん……私もそう思う……」

可能性のひとつとして呟いたそれを、本音は即座に否定した。簪もまた、それは飽くまで可能性でしかなく、今回の原因ではないと思っていた。

本音はメカニックとして、簪はパイロットとして。ISが自らの主を理由もなく害するとは考えていない。

「コアじゃないとしたら……」

「外から、だろね」

「……ハッキング？　ISに……？」

馬鹿馬鹿しい、と一笑に付したい気分だった。だが無理だ。理性はそれしかないと告げている。

そも、学園のシステムを支配下に置くような存在だ。学園は言わば電子要塞、その守りを欺く、或いは突破するには、マシンパワーやテクニクだけでは説明がつかない。何か、もっと別の、特異な要素が在るはずなのだ。

「……敵、も……電腦ダイブを……？」

「ああ、それなら納得できるかも」

それならば。否、それしかない。最強の兵器である、ISを用いたハッキング。それはつまり、ISを分かり易い物理的な戦力、或いは抑止力としてではなく、影の刃として、背中を刺す猛毒の短剣として扱うということだ。

馬鹿げている。だがそれを言うのなら、IS自体が馬鹿げた兵器だ。兵器とは、即ち道具。既にある道具は、発想次第でその価値を大きく変える。新しいISコアが作れない以上、発展の方向性は発想に委ねられるのだ。

馬鹿げている。そう言って終わってしまったえば、発展の道はそこで閉ざされる。不可能ではないのだから、後は実際にやるかどうかでしかない。現に――

「……」

簪は悪寒を感じた。ISの発展の方向性。道具を目的に合わせて使い分ける。思いも寄らなかった使い方、思いも寄らなかった成果を上げる。それは、ISが新たに作れないという大前提に基づいた仮説だ。

もしも。もしもその大前提を覆されたら。もしもこれが、電子戦に特化したISコアを用いた電子戦機によるものであるとしたら。定めた通りの使い方、定めた通りの成果を上げたのだとしたら。

道具を、目的に合わせるのではなく。

目的に合わせて、道具を作ったのだとしたら――

「かんちゃん！」

「！」

本音の声に我に返る。浅い呼吸と冷えた体、不快な感触を自覚した。汗に

よって、制服が背中に張り付いていた。

「っ！……ごめんっ。もう、大丈夫……」

応える声はまだ震えている。壁に空いた小さな穴を見つけ、何の気なしに覗き込んで見たら、向こう側からも得体の知れない怪物が覗い

ていた。例えるならばそんな恐怖だった。

簪は胸に手を当て、瞼を閉じ、深呼吸を繰り返す。いずれ考えなければならぬ問題には違いない。だがそれは今ではない。今簪たちが考えなければならぬことは、敵をどう撃退するかだ。

「……本音。まず、敵ハッカーが、ISの電腦ダイブを……使ってるって、仮定しよう」

「うんうん」

それは本音にとっても恐ろしい仮定だ。だが彼女は声にも表情にも態度にも出さない。恐怖は感染することを知っているからだ。ここで本音が恐れてしまえば、それは新たな病原体となつて、簪を別の恐怖で蝕むだろう。

本音はメカニックだ。ハッカー相手に電子戦などできない。この状況ではサポートが限界で、それ以上は簪に任せるしかない。故に本音は、恐怖を呑み込む。

「そうすると……多分、学園のファイアオールは、簡単に突破したと思う……いくら高性能でも、飽くまで普通のコンピュータだから……」

「だよね〜……実際、警報もなにも鳴らなかつたし〜」

「セキュリティ……プログラムは、0と1の羅列に過ぎない……一見完璧なセキュリティも、「外から見れば」そうかもしれないけど……電脳ダイブで、プログラムの「中に入る」ことができれば……」

「……まあ、穴だらけだろうね〜」

情報を少しずつ整理していく。簪が思考し、その過程で漏れ出た言葉拾って、本音が補完する。慣れたものだ。二人は台本を読み上げるようにテンポ良く、「敵」の分析を進めた。

「ISでISをハッキングする……実例を聞いたことはないけど、できないはずはないし……実際、今私たちがやろうとしてる事も、ISを使ったハッキングには変わらない……」

「ハッキングする相手もIS、っていうのが、想定外だったただけだしね〜」

「うん……それに、多分……この相手、初めてじゃない。かなり手慣れ

てる気がする……」

「あく、それは私も感じたかも」

「だから、問題はこのふたつ……どっちもISなら、いくら電子戦特化でも、五対一はひっくり返せない……と思う」

「……相手も、一機じゃないかも？」

「それはない……ほら」

簪はモニターに表示されているログを指す。本音にはよくわからなかったが、しかし言われて見れば、確かに少し不自然なような——そんな程度の、ごく僅かな違和感を覚えた。

「電腦ダイブでのハッキングで、ファイアウォールをすり抜けても……痕跡まで、まったく残さずにいられるわけじゃない……指紋や足跡と一緒に」

「ふんふん」

「それで……ハッキングには、癖……って言えばいいのかな……ハッカーごとの、特徴があるの。ましてや、電腦ダイブ……プログラムを打ち込んでるわけじゃないから……その癖は、中々隠せないと思う」

「ほうほう」

言いながら、簪はログの中の数ヶ所を次々に指す。ISのログはその量も尋常なものではない。スクロールの速度は最早本音の動体視力では追えないまでになっていた。

「ほら、ここと、ここ……あと、ここ。電腦ダイブと仮定して見れば、痕跡は結構、見つけられた……どれも、同じような癖がある」

「ああ、痕跡、つまり指紋や足跡が同じということは……」

「そう。単独だよ、間違いなく」

本音は努めて平静を保った。こんな、百科事典の誤字探しにも等しい作業を、僅か数分の内にやってのけたのか、と。

「マシンスペックそのものが、劣ってるわけじゃないし……何より、数の利があるから……手口さえわかれば、対処できる……はず」

「ならあとは、みんなにそれを報せられれば」

「うん……少し、遅かった。呼び掛けに応じない……」

「ありや」

勘付かれたか。いや、外からの干渉をシャットアウトするのはハッキングの定石のひとつだ、単にそれだけ侵攻されたか。どちらにせよ良くない状況だ。迫り来る危機を皆に報せるには、先に敵が敷いたフアイアウォールを突破しなくてはならない。

「……本音。電腦ダイブの準備を……お願い」

「え？」

「普通の方法じゃ、突破できるかわからない……できても、多分、時間がかかる。敵の狙いがわからないから……手遅れになるかも……だから」

「……うん。わかった」

簪の眼には恐れがあった。本音は気付かないフリをして、主の意志を尊重した。簪は電腦ダイブ用の座席に座り、自らにインターフェースを接続・設定する間、本音に万一の際の対処法をレクチャーした。無論、そのような短時間に伝えきるなど到底不可能な内容だが、それでもやるしかないのだ。

現在、電腦ダイブができる者……即ち専用機持ちは、この場には簪しかない。あと少し経てば、真改が戻るだろう。だがその少しを惜しむべきであり、そもそも彼女に電腦ダイブによるハッカーの迎撃が可能かと言うと、首をかしげざるを得ない。

やらねばならぬ。電腦ダイブの前例を簪は聞いたことがなく、あつたとしてもごく少数、それも公にはできない内容。ハッキングなど受ければ、実施者やISにどんな影響が出るかわからない。

やらねばならぬのだ。簪はもう、守られるだけの存在であることをやめたのだから。

ふと気が付くと、私は四角い、コンクリートが剥き出しの部屋に居た。椅子に座らされ、手は背もたれの後ろで縛られ、目の前には無人の椅子。直前まで身に付けていた筈の武器やISは没収されている。

……直前？ おかしい、その直前の記憶がない。私は何か、重要な



任務を……

「お目覚めか」

女の声が出た。私は記憶の確認を中断する。声は、無人の椅子の向こうから。部屋の窓から差し込む明かりの、ちょうど影になっている。

「貴様……何者だ？ 何が目的だ」

「目的、か」

女は前に出て、椅子の背に手をかけた。明かりが胸の辺りまでを照らす。かなり小柄な女だ。声からしても、私とそう歳は変わらないだろう。

「なに、お前と少し話がしたくてね」

「話だと」

「そう。話だ」

窓を見る。鉄格子がはまっている。道具もなしに破ることは不可能だ。ドアは見えないが、定石からすれば女の後ろ。注意深く気配を探り、部屋の中にこの女以外はいないことを確認する。

「何が聞きたいのかは知らんが、私が素直に話すだけでも？」

「話さないだろうな。だから私が来た」

ドアに鍵が掛かっていないなどということはないだろうし、この女が持っているとも思えない。拘束を抜け女を倒しても、それで脱出とはいくまい。人質にはなるかもしれないが、今は状況に不明点が多すぎる。いくら何でも情報を引き出してから行動するべきか。

「ほう？ 随分な自信だな。拷問に対する訓練は受けているのだが」

「拷問？ そんなことはしない。言っただろう、話をしに来た、と」

どこの勢力か。規模はどの程度か。この施設の構造は。そしてこの部屋はそのどこに位置しているか。知りたいことは山ほどあるが、女の態度はどうにも掴み所がなく、会話のペースを持っていかれている。

「ではさっさと話とやらを済ませ、私を解放しろ。私は忙しい」

「そう焦るなよ」

女は椅子をくるりと180°回し、座った。背もたれの上に腕を組

んで顎を乗せ、ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている。

そう。女の顔は、遂に明かりの下に晒された。

「……貴様」

「うん？ 私の顔に何かついてるのか？ ラウラ・ボーデヴィツヒ」

私の反応を見て、女は益々笑みを深める。実に不快だ。ひどく気分が悪い。腹の中で得体の知れない何かが無遠慮に蠢いているかのような。

「……貴様、何者だ」

「くはっ……まさか本気で言っているのか？」

女は吹き出して、次いで呆れたように肩をすくめた。あからさまなオーバーアクション。挑発に近いそれも、私には効果がない。それどころではないからだ。

「なあ、本気で言っているのか？ まさか本気で、本当に、考えたことはなかったのか？」

女は再び背もたれの上で腕を組み、身を乗り出して、私の顔を覗き込んだ。それは私の顔を見ると言うより、私に自分の顔を見せる為の行動のようだった。

「お前は普通に生まれた普通の人間か？ 違うだろうか？ お前は遺伝子強化素体<sup>アドバンスド</sup>だろう？ ……なあ。本当は、考えたことがあるだろうか？」

そう。女は、見せ付けたのだ。

私のそれと、寸分違わぬ、その顔を。

「自分と同じ遺伝子配列の個体——その存在を、考えたことがないとは言わせんぞ」

## 第105話 影に追われる夢

改めて、女の顔を見る。

造形は正しく瓜二つ。違うところと言えば、眼帯をしていないこと……そして両目ともが赤いこと。一卵性の双子と言われて、疑う者はそういないであろう。

双子。つまりは、遺伝子は同じということだ。

考えたことはある。私は軍用の遺伝子強化素体、いわゆる試験管ベビーだ。一時期は越界の瞳が適合せずに成績不振となったものの、基礎能力の高さは示していた優等株だった。実験や戦術開発で使い捨てるにせよ緊急時の戦力として隠し持つにせよ、優秀な遺伝子強化素体はいくらいても足りない。クローン技術でも何でも使う可能性は有り得るのだ。

だがそれは、作り出した個体のコントロールが容易であるという前提があるからこそだ。最近の様子を鑑みれば、私はその前提に当て嵌まるまい。そのようなイレギュラーを量産するだろうか。

……いや、しかし私も、はつきりとした自意識を、遺伝子強化素体としてではなく私個人としてのそれを持ち始めたのは、そう昔のことではない。それに、国や軍に対する明確な反逆行為を働いたわけでもない。仮に私のクローンが既に存在していたとして——あるいは、私のオリジナルが存在するとして——まだ廃棄処分に踏み切る段階ではないのかもしれない。

たとえばそうだとしても、ならばこの女は私と同じくドイツ軍所属のはずだ。私を捕らえ尋問する理由は、少なくとも表向きにはない。だとすると、他の機関に奪取された個体か？ 有り得ない話ではない。ISすらも奪われているのだ、量産可能なクローンの奪取など、それに比べれば遥かに容易なのだから。

「考えているな。わかるぞ。私はお前だからな」

「……そんな言葉が出る時点で、私と貴様は違う」

「どうした？ 返答に間があったな」

「……………」

動揺を見抜かれている。この女の観察力が優れている、この女が私のクローンである等の理由ではなく、単に私が、それほどわかりやすく反応したのだ。

タイムリーに過ぎる。クローンの話題は。

「まあ、いいさ。私に思う所もあるだろう。それはいい。あるいは、何故私がお前を捕らえているのか気になるか。それもいい。私にはどうだっていい。私はお前のことが聞きたいんだ」

「……私のことなど、聞くまでもあるまい。お前にとっては」

「生憎と、そうでもないんだ。お前の出生については知っている。当然だ。お前の経歴については調べてある。これも当然だ。私が聞きたいのは、そんな外から見えることじゃない。お前がお前をどう思っているかだ」

「……………」

私が私をどう思っているか、だと？ 意味がわからない。こいつは何を言っている。

「随分と楽しそうじゃないか。学園生活は」

「……お前になんの関係がある」

「大ありだ。私もお前も、戦闘用の遺伝子強化素体だ。私はこうして、くだらない任務に駆り出されて使い潰されている。お前は学園で、仲間たちに囲まれ、温かい食事と寝床を与えられている。羨んで当然だ」

そういう女の顔は相変わらずのニヤニヤ笑いで、羨望の様子はない。あるとするなら悪意だけだ。

「どんな気分だ？ 任務のことなど忘れて、このまま一学生として過ごしたいか？ それとも無難に任務をこなしつつ学園に残りたいか？ それとも学園ではなく戦場に入り浸り、クソのような任務に明け暮れたいか？」

「……軍人の役目は、国と国民を守ることだ。任務には全力を尽くす。だが任務を、つまりは軍人が必要となる事態の発生を望むようでは本末転倒だろう」

「くはっ」

女は笑った。どうにか堪えようとはしたが、堪えきれなかったというような笑い方だった。

「おい、おい。ラウラ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。冗談はよしてくれ。そんな教科書に載っているような模範解答が聞きたいわけじゃないんだ。私は、お前の話が聞きたいんだ。何度も言っているだろう？」  
女は殊更に強調する。覚えの悪い子供に根気良く付き合う教師のように。

「いいか。義務も使命も役目も立場も関係ない。お前がどう思っているかだ。お前が「やらなければいけないこと」ではない。お前が「やりたいこと」を聞きたいんだ」

「……私がやりたいこと、だと」

何を馬鹿なことを。これが私のクローンだと。とんだ愚か者だ。それこそ、どうして他人に語らなければならぬのか。

「話したくないか。まあそうだろうな。だが私は聞きたいし、聞かなければならぬ。お前がそれを話すまで、お前はここから出られない」「ならこんなことも知れない場所に、いつまでも居なければならぬのか。当然、お前も付き合わなければならぬのだろう？ ご苦労なことだな」

挑発を含んだ言葉を、女は変わらぬ笑みで受け流す。私の顔で私がしない表情をされると、どうにも苛立ちが募った。

「そう長くはかからんよ。話してくれるさ、お前は」  
「……………」

「だが流石に、いきなり自分のことを話せと言われれば、何を話すべきかと詰まるのは仕方がない。話しやすいよう私から話題を振ってやろう。そうだな……………」

そう言って、女はわざとらしく思案顔をした。仕草がいちいち癪に障る。

「では、最近の悩み事でも聞かせてもらおうか」

「……………くだらん」

「くだらなくはない。あるだろう？ 今、深刻なやつがひとつ」

「……………」

それが何を示しているのか、分からぬほど愚かではない。ペラペラと喋るほどにも。

「亡国機業ファントム・タスクが所有していた、黒いシユヴァルトツェア・リート歌と影打シャツテ。どちらもお前には縁深い代物だ。リートはあのまま実験が続けばお前の命を奪っていたかもしれないし、シャツテはお前の友人である井上真改のコピー。それが一緒になってお前の前に現れた。これは、あれだ、運命……いや、因縁というやつだろうか？」

「……随分と、詳しいな」

「調べられるだけは調べてある。お前が使い捨ての一体としてリートの実験に携わっていたことも、お前の直前に乗った者が全身を捻り碎かれ死んだことも……そのおかげで実験は中止になり、お前はリートに乗らずに済んだことも」

「だから、どうした」

「おいおい……せめてもう少し、悼む態度でも見せたらどうだ？ あの子は、お前の代わりに死んだんだぞ」

「知ったような口を利くな」

睨みつける。表情を取り繕いもせず。

あの少女は、私の代わりに死んだのではない。断じて。

「彼女は自分の夢のために戦って死んだ。自分の運命に挑んで敗れた。誰の代わりでもない。誰にも、彼女の生き様に責任を負う権利などない」

「く、く……なかなか、どうして」

女は笑った。今までの笑いとは少し違うように感じた。

「ではそのリートの、今のパイロットについて。そしてそのオリジナル、井上真改についてを。クローンのコードはシャツテ……真打に対する影打。ひねりのない名前だ」

「奴の名前などどうでもいい」

「何を言う、名前は重要だ。例えばお前、井上真改を名前で呼ばないだろう」

「なに？」

「マスターなどと……妙な入れ知恵をされたとは言え、友人に対する

呼び方ではないな。恥ずかしくないのか」

「お前になんの関係がある」

「関係の有無などそれこそ関係ない。私は気になることがあるから訊いているだけだ。なあ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前にとって、井上真改は本当に友人なのか？」

「……貴様」

その物言いに、ついに我慢も限界に達した。縛り付けられた椅子ごと飛び掛かって喉笛を食い千切つてやろうかと思つた。それをしなかつたのは、僅かに働く理性ゆえではなかつた。怒りの奥底に、しこりのような何かがあつたからだ。

「少なくとも、対等とは思っていないだろう？」

「……私はマスターから剣術や体術を教わっている。軍隊式の、人間工学に基づいた機械的なそれとは別系統のものだ。教えを請う立場として、何らおかしいことではあるまい」

「おかしいに決まつている。友人間でもものを教えるなどいくらでもある。実際、お前も井上真改以外からいくらでも教えを受けているだろう。まさか社会の常識が剣術や体術に劣るなどとは言い出さないよな？ それらを教えてくれる者たちには、お前は友人らしく接しているんじゃないか。彼女らと井上真改を分ける要素はなんだ？」

「それは……」

「慕つてはいるだろう。敬つてもいるだろう。だが私の見立てでは、それらが原因ではないな」

「……」

「お前……恐れているだろう」

「っ！」

痛みが走つた。自分ですら忘れていた傷口に——忘れようとしていた傷口に、不意に触れられたような痛みだった。

「井上真改の左腕について、本当は初めから察していたんじゃないか？ 詳細まではわからずとも、「この程度ならしているかも知れない」という予想はついていたんじゃないか？」

「……黙れ」

「何せお前は遺伝子強化素体だ。シャツテの……強化人間の影は常に感じていただろう。だがお前は気付かないフリをした。自分を誤魔化した」

「黙れ」

「お前にとって、強化人間は相容れない存在だ。祖国の罪だからじゃない。もし強化人間が完成し、一定の成果を残し、量産にも成功すれば——」

「黙れエ！」

「——お前は、必要なくなる」

必死に隠していた場所を、土足で踏みにじられた。必死に目を逸らしていたのに、無理矢理にそれを見せつけられた。

その時覚える感情は、怒りではない。絶望だ。

「ち……が、う」

「遺伝子強化素体、特に軍用モデルは、本来あまり高度な汎用性は求められていない。飽くまでも前線で任務を遂行するにあたり必要な応用力があればいい。それ以上は反乱に繋がる」

「う、あ……」

「だが目的に合わせて才能を特化させるには、ヒトの遺伝子は複雑過ぎる。クローンですら個体差がある。それでも、無能な連中を操って蟻のように働かせるのは簡単だが……有能な奴はそうもいかん。その点をどうにか改善するために、様々な方法を試しつつ運用し、データを掻き集めていたわけだが」

「あ、か……」

優秀な個体は何故優遇される？ あの日、織斑千冬と引き合わせられたのは何故だ？ その後、自分はようになった？

「お前は見事にハマっていた。何をしてやれば思い通りに動いてくれるか、その見本のひとつになり得る個体だった。だから多少の問題は見逃され……いや、むしろ参考にされてきた。お前もそれに、どこかで気付いていた筈だ」

使い捨てでしかない筈の自分に、何故そんな手間をかけた？ 私のためではないからだ。今後も造り続ける遺伝子強化素体たちを、より



効率良く「仕上げる」ためだ。

私は——まだ、実験体だったのだ。

「だがそれも、強化人間が完成してしまえば終わる。遺伝子強化素体は飽くまで「優れた人間を人工的に生み出す」ものだ。人間以上には届かない。より強力でより安定した兵器をより安価に量産できるのなら、旧式など不要だ」

自負があった。自分は優秀な個体であると。自惚れていた。自分以上の遺伝子強化素体はいないと。そして、そうあり続けるために努力してきた。

だって、そうでなければ。一番でなければ。優秀でなければ。平凡であれば。無能であれば。

私は、また、棄てられる——

「あ、あああああ」

そうか。ようやくわかった。ようやく自覚した。

私は、恐れていたのだ。井上真改を。

織斑千冬が勝てなかった少女。ISと生身で渡り合った人間。詳細は知らずとも、臍気ながら知っていたから、恐れた。

最強の兵器と、生身で渡り合う。では「それ」がISを操ればどうなる？ 自明だ。過去既に起きていることなのだから。

ISが生まれ、戦車や戦闘機がその数を減らした。男性軍人がその数を減らした。公式の兵器は、公職の人間が入れ替わった。

では。元々存在していない筈の、私たちは——

「違う……違うっ」

だから恐れた。本能的に。井上真改を、その影を。

だから教えを請うた。私が生き残るためには、証明しなければならなかったから。「私にもできる」と。無駄だとどこかで思いながら、し  
がみついた。

そして。

「違う、私は……」

そしてあの日、全てを知った。井上真改の左腕と研究。シャツテの完成と強奪。研究所が破壊され、サンプルも焼失し、強化人間計画が

頓挫し。

それを知って、

私は、

安堵した。

「違うっ、あああああ、違う、嘘だ、私は、そんなっ」

助かったと思っただけ。クローンは何も無いところからは作れない。データだけあっても第二のシャツテは生まれない。井上真改のようないレギュラーが、他に居るとも考えにくい。

プロシエクト・プラス

安心した。強化人間計画は当面再開しない。完成ともならばもつと先だ。それまでは、私の価値は保証されるだろう。

だが、だけど、でも、もしも。

奪われたシャツテが、戻ってきたら。

「私……はっ……」

戻ってきた。あの女は。井上真改に似せた人形は。出来損ないのガラクタは。私の価値を奪う怪物は。

だから、消してしまおうとした。奴さえいなくなれば、今度こそ私の価値は守られる。いや、私が奴に勝つたとなれば、計画自体が無意味だったと証明できる。私の価値は更に上がる。

浅ましく醜い感情に蓋をして、隠して、目を逸らして、気付かないようにして。

そうして挑んで、無様に負けた。完敗した。路傍の石を蹴飛ばすように、あっけなく。

私は、無価値だ。

「本当に？」

「……え？」

「本当に、そうか？」

「なに、が……」

「すべてだ」

女は意味のわからないことを言った。苦心して見上げた表情は、ひどく真剣だった。

「お前は多数の欺瞞を抱えている。それは問題ではない。そんなもの

だ。そうでなくてはならない。重要なのは欺瞞そのものではなく、本心の更に奥にある」

意味がわからない。わけがわからない。この女は何を言っている。何を知っている。

「お前は欺瞞を欺瞞と認識した。今ようやくスタートラインに立った。号砲はとうに鳴っている。いつ走り出すか、このままりタイヤすることすらもお前の自由だ」

わからないことだらけだった。わかりたくないと言い換えてもいい。だが、耳を塞ぐことはできなかった。例えこの両腕が自由であっても。

「ただ私としては、それでは困るんだよ。大いにな。お前には走ってもらわなければならない。自分の足と、自分の意志で」

この女は、何者だ。

「……さて、そろそろ時間だ。名残惜しいが退場するよ」

混乱する私を一瞥し、女は影に消える。錆び付いた鉄の擦れる音がなり、扉を開いたことがわかった。

「また会おう、ラウラ。また、な。その時こそは、お前のやりたいことを話してもらおう」

扉が閉められ、その音の反響が消えると、部屋は静寂に包まれ……すぐに、廊下を走る足音が聞こえた。

そして扉を開き、現れたのは――

「……ラウラっ！」

――更識簪だった。